
仮面ライダーキバ/BLAZING.BLOOD

一条ツカサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD

【Nコード】

N8840H

【作者名】

一条ツカサ

【あらすじ】

本能か それとも必然か 仮面ライダーとなる宿命を背負った男、再び。紅の牙は運命の鎖を解き放ち、その役目を終えたはずだった。新たな敵、異世界“紅世”から渡り来た存在、再び動き出すファンガイア、そして現れる灼熱の瞳を宿す少女。紅き世界での邂逅は 救済への賛美歌か、破滅のレクイエムか。WAK E・UP！紅蓮の鎖を解き放て！（仮面ライダーキバ×灼眼のシャナのコラボです）

前奏曲（前書き）

- ・これは仮面ライダーキバと灼眼のシャナのクロスオーバーです。基本的にはシャナのストーリーを追います。
- ・キバはEDから数年後の話ですが、仮面ライダーキバは紅渡ではありません。
- しかし、紅渡とほぼ同じ経験をしたと思って下さい。
- ・紅渡以外のキャラクター、つまり名護さんや恵、大牙やアームズモンスター達は変わりません。

それでもよろしい方は、次のページからどうぞ

前奏曲

優美な三日月の光が降り注ぐ夜。

漆黒の帳を照らす街明かりに一点、揺らめく不気味な陽炎。

その空間に囚われたものは、人間も動物も機械も、全てが活動する権限を奪われていた。

「わーい、義馳走だ御馳走だ！」

万物が停止した空間にあつて、唯一蠢くのは人形の如き容姿を持つ異形 “ 燐子 ”

己が存在理由を実行すべく、燐子達は人間にその牙を向ける。

非日常からの侵略に気付くこともなく、人々は音も無き炎上を待つばかりだった。

「へっへっへ、じゃあいただきます」

「おーおー、随分と派手な晩餐会じゃねえか」

陽炎の中に響く高い声。

現実を隔てる境界線を越えて、一人の男がその姿を現す。

若い男だった。

歳の頃は二十代半ば。赤いマフラーと黒っぽいジャケット。

柔らかかそうなセミロングの茶髪。その下にある表情は整っているが、今は掴みどころの無いシニカルな笑みを浮かべている。

「んなもん食ったら腹壊すぜ？ お前らに腹なんて上等なもんがあるかどうかはしらね けどよ」

「……貴様、何者だ」

突然の乱入者に、燐子達の視線は全て男に注がれる。

警戒心を一身に浴びながら、男は笑顔を崩し、代わりに獣のように獰猛な眼光を放つ。

「答える必要はないな。」

断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！

燐子達は気付いた時にはもう遅かった。

男の影は二日月をバックに歪み、その姿を変えていく。

破壊の魔帝たる『真紅の吸血鬼』へと。

「……うや！ おい……、きる！」

何だようるさいなあ……。こっちはまだ眠いんだよ……。軽くうめいて、布団を被り直す。

「おい奏夜ソウヤ！ さっさと起きろー！」

ゴンッ！

「~~~~っ！ 痛ってえ！」

頭上から落ちてくる衝撃に飛び起きる。

顔面に落下してきたのは黒光りするフライパン。

空中には見慣れた金色のコウモリ。

「何すんだよキバット！」

「アホ！ もう真面目な人間は活動を開始してる時間なんだよ！ さっさと起きろ！」

「それが昨日の夜中、身体張って人々の安眠を守ったヤツへの態度か！ 俺は頑張ったんだよ！ 疲れてるんだよ！ 寝かせてくれよ！」

「今日は平日だろうが。さっさと着替えて学校行きやがれ。子供の規範になるのがお前の仕事だろ」

「子供の成長より、俺の健康だ」

「……教師のセリフとは思えないな」

お前がなんでクビにならないのかが不思議でならんわ。キバットはそう言い捨て、クローゼットからハンガーにかけられたワイシャツを口にくわえ、ベッドの上に落とす。

「ほれ、早く着替える。朝飯は、静香がわざわざ早めに来て作ってくれたぞ。

静香、今年から大学生で忙しいのにな。お前はその厚意を無駄にし

ちやうのか？」

「……わかったよ」

そこまで言われたら、もう反論の余地はない。
頭を軽く搔いて、身体を起こす。

朝6時30分。紅奏夜、活動開始。

ここで、彼のプロフィールを明かしておこう。

名前、紅奏夜。

年齢24。誕生日9月9日。

現在は一昔前の古い屋敷に一人暮らし。もとい、一人と一匹暮らし。

職業は御崎高校一年二組担任教師。専門教科は現国。

兼業 いや、本業でバイオリン修理もしているが、そちらはあまり知られていない話だ。

他に特筆すべき点は多々あるが、ここではそれは割愛させてもらう。

その日、奏夜はいつものようにキバットに叩き起こされ、電話で嶋に昨晚の報告を済ませて家を出た。

多少の気掛かりはあれど、今は四年前に比べれば、あまりにも平和な世の中だ。

「そっか。あれから、もう四年なんだな」

春の空を見上げると、自分の中で四年前の様々な出来事が浮かんで消えていく。

本当に、自分がこんな風に暮らす日がくるなんて考えられなかった。名護さんや恵さんにも、「本当に変わった」とよく言われる。

でも俺は、本当に変わったのだろうか。

そう自問自答する日々。

それが四年後　　つまりは現在の彼の日常だった。

第一話・運命ノウエイクアップ（前書き）

「炎の語源は、火の穂に由来すると言われている。

また、強い愛情や、深い怨恨を表す時にも使われるんだ。

「愛と憎しみは表裏一体なんだな」 キバットバット三世

第一話・運命ノウェイクアップ

「あ……、奏夜先生」

その日に受け持った授業を滞りなく終え、幸いにも学校に残って片付けるべき仕事も無かった奏夜は、近くのCDショップに立ち寄っていた。

音楽はいい。

自分の専門はバイオリンであるが、音楽にはジャンルの壁を越えて、作り手が込めた、それぞれ違う思いがある。

こうして様々な音楽を聞くことが、この四年間で奏夜の新たな趣味となっていた。

いつものように何枚か気になるCDを買い、店から出ようとした矢先に、後ろから声を掛けられたのだ。

振り向けば、自分が働く高校の制服を来た少年が一人。

見覚えがある。

一学期が始まってまだ一ヶ月あまり。

しかも奏夜が受け持つ学年は一年生であり、まだ覚えていない顔も多いが、さすがに自分のクラスの人間は覚えている。

「よう、坂井。奇遇だな」

気さくに返す奏夜に対し、返された当人、坂井悠二は「はあ、どうも……」と曖昧に言葉を発す。

学校外で先生に会うというのは、意外に緊張するのだ。まして、知り合ってまだ日が浅いなら、尚更である。

「先生、ここで何やってるんです？」

「何って、CDショップに来てるんだ。みんな目的は一つだろ」

そう言って、買ったばかりのCDが入ったビニール袋を見せる奏夜。

「奏夜先生、音楽好きだったんですか」

「おいおい、音楽は万国共通の文化だ。聞かないヤツなんてほとんどいないぞ」

「あはは。確かにそうですね」

からからと笑う奏夜の姿に、悠二もつられて表情を緩ませる。

紅奏夜。

彼をよく知る人間ならば、万人が口を揃えて言う彼のイメージ。

『自由』。

基本的に生徒は放任主義。

学校行事にもほとんど手は出さず、生徒の希望に任せ、いかなる案にも、それがクラス全員の総意なら実行に移す。

登校時間は常にバラバラ。遅刻も珍しくない。

授業に置いてても、はちゃめちやな授業内容をすることも多々ある。

彼が御崎高校に赴任してから約二年。

クビにならないのはひとえに、彼の自由奔放スタイルに生徒ウケがいいこと、教員として最低限のルールを守っていることにある。

良く言えば自由。悪く言えば人格破綻者。

そんな混沌とした人間が彼、紅奏夜なのだ。

事実今も、彼は一人の生徒の信任を得た。

「ま、寄り道もほどほどにしとけよ」

「最近は世の中は物騒、ですか？ それこそ万国共通ですよ」

「いや、なんかお前、幸薄そうな顔してるし」

「ひびっ！」

「はっはっは、冗談だったの。んじゃ、気いつけて帰れよ」

ひらひらと手を振って、奏夜はCDショップを後にする。

奏夜の一言。

それが図らずも、数分後に起こる坂井悠二の運命を、皮肉なまでに予言していたことを、まだ、どちらも知らない。

CDショップを出た奏夜が次に向かったのは、市内の外れにある小さなカフェだった。

『カフェ・マル・ダムール』。

正確な年号はわからないが、奏夜が知る限り、少なくとも30年近

くは営業している。
このマスターが出すコーヒーは絶品であり、その筋の人間を何人も唸らせるレベル。
隠れた名店なのだ。

紅奏夜が、この常連客になったのは約四年前。
それから幾度となく足を運ぶ いや、運ばざるを得なくなったカフエ。

この日も奏夜は、付き合いの浅からぬ友人と会う約束をしていた。

しかし、

「っ！」

奏夜が異変に気が付いたのは、マル・ダムールの白い外装が見えてきた時だった。

時代を感じさせる古い作り。

しかし今、それらは全て、深く赤いドーム状の陽炎に覆われていた。

(くそっ！ ここにまで！)

まさか、中にいる人はもう
最悪のイメージを振り払い、陽炎のドームへと入り、加減など考えない力で、カフエの扉を開けた。

「あ……」

口から、驚愕と安堵の溜め息が洩れる。

店の中も、陽炎の色と同じ赤に包まれ、静寂が周囲を支配していた。コーヒーを淹れるマスターも、天井で回る換気扇も、ここで飼われているマスコット犬ブルマンも、全てが動きを止めている。

その中で、動く姿はただ二つだけだった。

「ここはコーヒーを飲む場所……この世で一番神聖な場所だ。この場所を汚すからには、相応の覚悟をしてもらわなくてはならんな」

鋭い眼光を放ちながら、唸るように低い声が店内に響く。

奏夜の目に飛び込んできた光景。

それは、狼のように鋭い風貌の男が、奇妙な人形の首元を掴み上げているというもの。

掴み上げられている人形は、苦し気に顔を歪めており、それは寸分違わず生き物のそれだったが、身体の節々にあるパーツの継ぎ目が、それを否定している。

「が……ぐっ、な、なんで『封絶』の中で動ける……っ？ お前、何なんだよお……！」

「それはこっちのセリフだ。……いや、構わんか。貴様が何者であれ、この場所を荒らした罪は重い」

「け、けけけ……バカめ、ぼくのご主人様が黙っちゃいないぞ……」

「ふん、面白い。ご主人様が仇を討ってくれるよう、せいぜいあの世で祈るんだな」

「ごぎり。」

気味の悪い音と共に、男は人形の首を折った。人形は悲鳴を上げる間もなく、霞みとなって消えていく。

「次狼」

「……奏夜か」

ようやく奏夜の存在に気付いたらしく、次狼と呼ばれた男は、人形

の残骸に一瞥をくれ、奏夜に視線を移す。

「『闇の盟約』の規制を緩和しておいたのが役に立ったな。俺がいなければ、ここにいる全員がこいつに喰われていた」

「……ありがとう」

「別に感謝はいらん、成り行きだ。……それに、音也との約束はまだ生きているからな」

素っ気なく次狼は言い放つ。

「それよりも、さっきの人形がお前の言っていた『燐子』とやらか？ それに、この空間は」

「ああ。『封絶』ってヤツらしい」

「ふん、なるほどな。確かに外界との接触は完全に絶たれている。それで？ これはどうやって解除できる」

「俺が見た時は、『燐子』が消えて少し経ってから、勝手に解除されたけど」

「そうか。ならば、待つしかないな」

次狼はカウンターに腰掛け、飲みかけのコーヒーを手に取った。

「……チツ、忌々しい空間だ」

時が止まったカップの中のコーヒーは、凍ったように固形化していた。

「はい。奏夜くん、お待ちどうさま」

「ありがとう、マスター」

『カフェ・マル・ダムール』のマスター、木戸明に礼を言い、出されたコーヒーを啜る。

現在テーブルに座るのは、奏夜に次狼。

そして、二人の目の前に座る五十代くらいの男性　　嶋護だ。

「すまないな、奏夜くん、次狼くん。私はまた何も出来なかった」

「気にするな、アレはさすがに仕方のないことだ」

「そうですね。あの『封絶』ってのは、俺達から見ても異質ですか」

封絶にとらわれた事を悔いる嶋だったが、二人がそれを気にした様子はない。

「それよりも、今何が起きているのかを考えるべきです」

「ふむ。『燐子』、か。ファンガイアの種類ではないのか？」

ファンガイア

それは太古よりこの世界に栄える闇の一族。

人間と同じ姿を持ちながら、人間が持つ生命力の源たる力　　ライ
フエナジーを糧とする。

人間を餌以上の存在と思うことなく、ただ人間の命を貪る怪物。

だが、その見識はもう昔のものだ。

四年前、奏夜は嶋護率いるファンガイア討伐組織『素晴らしき青空の会』と共に、ファンガイア一族から人々を守っていた。死闘と様々なすれ違いの末に、人間とファンガイア、二つの種族の長きに渡る戦いは『両者の共存』という形で幕を閉じた。

この四年間に、ファンガイアを統べる存在『キング』は、ライフエナジーに代わる新たな食糧エネルギーを開発。それらをファンガイア達に支給することで、人間を襲うファンガイアは格段に減少し、今では人間となんら変わらず、静かに暮らしている。

しかし中には、まだ古くからの『人間は餌』という考えを捨てきれないファンガイアも少なからずいる。

今回の一件を、嶋はそう推理したのだが、

「違いますね」

奏夜がそれを否定する。

「その根拠は？」

「まずこの『封絶』です。ファンガイアにも魔術を使うヤツはいませんが、こんな高度な技術は見たことはありません。先代キングなら、まだわかりませんが」

最後に呟かれた名前。

それに次狼が顔をしかめたが、奏夜は構わず続ける。

「もう一つ。これは次狼からの判断なんです、ファンガイアとライフェナジーの食い方が違うみたいなんです」

「食い方が違う？」

「食う量が違う、と言った方がいいかもしれんな。ファンガイアが食うのは、人間が生きるために必要な生命力としてのライフェナジーだけだ。」

しかし、人間には元来、その人間が『存在』するために必要である根源的なライフェナジーがある」

「根源的な、ライフェナジー……」

「仮にこれを『存在の力』としよう。」

あの燐子という化け物、生命力としてのライフエネルギーだけでなく、『存在の力』としてのライフエネルギーまで食っているんだ」

「その『存在の力』とやらを食われると、どうなる？」

「……………」

その人間は、いなかったことになるな。

重い衝撃が、その場にいた全員にのし掛かる。
話した次狼本人にも、だ。

「いなかったことになるって、どういう意味だよ。次狼」

「そのままの意味だ。その人間が存在したという記録、その人間を知る人々の記憶。」

それら全てが消滅し、食われた人間が存在していたと証明できるものは、何一つとして……消え、る」

食われた人間を例えたつもりか、次狼は空になったカップをテーブルに置く。

「今のところ情報は『燐子』と『封絶』という単語のみ。それさえも、敵から聞き出したに過ぎない、か。

……事態は、思っている以上に深刻のようだな」

嶋の判断に、二人も同意する。

「一度、太牙に連絡を取ってみよう。キングである彼なら、何か知っているかもしれん。

奏夜くん、キミは引き続き、『燐子』を探してくれ。我々ではどうやら『封絶』には入れないらしいからな。

基本的には討伐優先だが、出来る限り情報を聞き出してくれるとありがたい」

「わかりました」

「次狼くん。キミの立場はわかっている。協力とまでは言わないが、もし何かわかったことがあれば連絡してもらいたい」

「……ふん、仕方がないか。これも約束の内だろうからな」

棘のある言い方だったが、次狼は一応は了承し、マスターにコーヒー代（一万円）を支払い、店内から姿を消した。

奏夜も残ったコーヒーを飲みほして、席から立ち上がる。

「奏夜くん」

カフェから出ようとした奏夜を、嶋が呼び止める。

「すまないな。出来ればキミを巻き込みたくはないんだ。

キミは四年前からずっと、戦い続けてくれている。そのことには、感謝しても仕切れないくらいだ。

だからなるべく、我々の手で始末をつけたかったんだが……」

「あはは、何を藪から棒に。

名護さんに兄さん、健吾さんも海外で活動してるし、恵さんも引退した身じゃないですか。

俺しか動けないなら、俺がやるしかないでしょう」

それに、と奏夜はからりと笑う。

「俺は俺のやりたいように生きてるだけですから」

「本当に変わったねえ。奏夜くん」

「……ああ、父親にそっくりだ」

亡き仲間の影を奏夜に重ね、嶋と木戸は昔を懐かしむように、微笑を浮かべた。

「おお、上手く出来てるなあ」

キバットが感嘆の声を上げる。

屋敷に帰った奏夜は、休む間もなく自分の本業　バイオリン造りに勤しんでいた。奏夜の右手には、数週間前から造っていたバイオリンが握られている。

「大分親父に近づいたんじゃないか？」

「さあ……自分じゃなんとも。でも父さんがいたらきつとこう言う
ね。『息子が親を越えるにはまだまだ十年足らん』」

「あはは、かもな」

本当にそう言う奏夜の父　　紅音也の顔が、二人の頭に浮かぶ。

「でも真面目な話。まだ父さんを越えられたとは思えないな」

奏夜の目の先には、父が作り上げた最高傑作のバイオリン　『ブ
ラッディローズ』があった。

「あれから四年　　本当に大きな壁だよ、父さんは」

「だな。でもアレには音也だけじゃない。真夜の魂も注ぎ込まれて
んだぜ？　一朝一夕で越えられたら二人も立つ瀬がないってもん
だ。」

「まだまだ人生は長いんだ。気長にいこうぜ。オレ様も見たいからな。
『お前のバイオリン』」

「ああ、今に凄いヤツを作ってやるさ。」

俺は稀代の天才、紅音也の息子だからな！」

自信たっぷりと言う奏夜の様子は、とても輝かしかった。
完成したバイオリンを机に置き、夕食の支度をするべく、奏夜とキ
バットは一階に降りていく。

その時だった。

~~~~~

突然聞こえ出した高らかな音色。  
奏夜とキバットが振り向くと、部屋の一角に飾られているブラッデ  
イローズが、独りでにその弦を震わせていた。

「まあ取り敢えずは目の前のこと、か」

時刻はもう夕暮れ時。  
人気の途絶えた公園で、奇怪な生き物が、仕事帰りらしい女性を襲  
っていた。

奇怪な生き物は一見するとサソリのような外観をしているが、その体表はステンドグラスのように妖しく煌めいており、不気味さをより一層助長していた。

「貴様のライフエナジー……我が糧とさせてもらおう」

空中に透明な牙が浮かび上がり、女性目掛けて射出される。  
女性は死を覚悟したのか、目を瞑った。

「待つて待て待て待てえ〜い！」

突如飛来したそれ　キバットバット三世が、間一髪で光る牙を弾き飛ばした。

その隙に現れた奏夜は、化け物にタックルを決め、女性を救い出す。

「振り返らずに逃げて下さい」

女性は頷いて、一目散に逃げていく。

それを確認して、奏夜は化け物　ファンガイアに向き直る。

「何故人間を襲う。人間を襲うことに、もう意味はないはずだ」

「貴様、我々ファンガイアを知っているらしいな。  
しかし、随分と間抜けな質問をする」

ファンガイアはくつくつと笑い、奏夜に爪を突きつける。

「今のファンガイアは生ぬるい！

人間に肩入れするキングの作った人工エネルギーにすぎり、誇りを失った腑抜け達だ！

人間は餌！ 人間のライフエナジーを喰らうことこそ我らの誇り！  
それを実行することに、何の理由が必要になる！」

29

「……なるほど。お前の言い分はよくわかったよ。  
キバット！」

「おう！ よっしゃあ、久々にキバツていくぜえ！」

陽気な掛け声と共に、キバットは奏夜の右手に。

そのまま奏夜は、キバットの尖った歯で、自らの左手を噛ませる。

「ガブツ！」

キバットの牙を介して、膨大なる力　アクティブフォースが奏夜の身体に流れ込み、彼の顔に目の前のファンガイアと同じ　ステンドグラスの紋様が浮かび上がる。

腰には鎖が巻かれ、赤色の止まり木『キバットベルト』に変化する。

奏夜はキバットを正面に掲げ、叫んだ。

「変身！」

ベルトにキバットが逆さまに止まると、奏夜の身体全体を、光の鎖が包み込む。

やがて鎖が弾け飛ぶと、そこにはもう奏夜の姿は無かった。

血を想起させる真紅のボディに、銀色の甲冑。そこを血管の如く駆け巡るエネルギー供給機関、ブラッドベッセル。身体のことかしこに巻かれた封印の鎖『カテナ』。

そして、コウモリをモチーフにした黄色い大きな仮面　キバ・ペルソナ。

『仮面ライダーキバ』。

それが今の奏夜の姿だ。

「その姿……！　　そうか、貴様が『キバを受け継ぐ者』か！」

化け物　スコープオンファンガイアは驚愕するも、すぐにその顔は狂喜に変わる。

キバはそれに臆することなく、スコープオンファンガイアを指差す。

「お前の道が選べる二つ。

一つ。悔い改め、人間とファンガイアの共存を乱さぬと誓うこと。

二つ。断罪の牙にかかり、転生の輪廻に流れること。

さあ、選べ」

「ふん。知れたこと！」

全ての発端である貴様を消し、墮落したキングの前に首を差し出してやる！」

「そうか。

なら、俺も容赦はしない！」



キバは両手を大きく広げるように構え、スコープオンファンガイアに向かつていく。

キバはパンチと蹴りを主体とする格闘術。

スコープオンファンガイアもまた格闘戦だが、こちらは両手に付いたハサミも、その攻撃力を上げるのに一役買っていた。

「ハアツ！」

拳のラリーの一瞬を突き、キバの重みが乗った拳が、スコープオンファンガイアの身体を打ち抜く。

「くっ！ おのれえ！」

よろめいたスコープオンファンガイアは直ぐに体制を立て直し、両のハサミから、半月状の衝撃波を発射する。

「ヤバっ！」

瞬時に危機を察知し、キバは横っ飛びにそれをかわし、走る。衝撃波の当たった地面はざっくりと抉れ、いかにキバと言えども、当たればただでは済まないだろう。

「どうしたキバ！　こんなものか！」

スコーピオンファンガイアはインターバルを挟むことなく、衝撃波を乱射してくる。

キバの脚力ならどうにかかわせるスピードだが、現段階では近づくとさえ敵わない。

避けた衝撃波は、周囲の景色を次々と変えていく。

このままでは押しきられる。

そう判断したキバは、今までがむしゃらだった走る方向を、スコーピオンファンガイアに定め、全力で地面を蹴る。

「バカめ！　自らのへなりに来たか！」

決定的チャンスを見逃さずに、スコーピオンファンガイアは衝撃波を、自分目掛けて突進するキバに放つ。キバのスピード上、もう回避は出来ない。

しかしキバに、左右に回避する気はもう無かった。

「ハアッ！」

「なにっ!?!」

スコーピオンファンガイアの驚く声を聞きつつ、キバは衝撃波ごと、スコーピオンファンガイアを飛び越え、その背後に回り込む。

形勢は逆転した。

「喰らえっ!」

逆転の好機に、キバは拳のラッシュを浴びせ、止めに渾身のキックを叩き込んだ。

「がつ、ぐ……!」

これにはスコーピオンファンガイアも耐えきれず、数メートル先まで蹴り飛ばされる。衝撃で、しばらくは起き上がれまい。

「よし! チャンスだぜ!」

そう叫ぶキバットが止まるベルト、そのサイドケースから、キバは赤い水晶のような笛を取り出し、キバットの口にくわえさせる。

『WAKE・UP!』

ベルトから外れたキバットは、勢いよくその笛『ウェイクアップフェッスル』を吹き鳴らす。

「ハア~~~~ッ！」

キバが両手をクロスさせると、何処からともなく赤い霧が立ち込め、空を黒く染め上げる。  
まだ夜になるには早すぎる時間。にも関わらず、キバの力は常闇を呼び寄せ、キバフォームに最も適したフィールド、『三日月の夜』を作り上げた。

「ハッ！」

キバが思い切り右足を振り上げ、周囲を飛び回るキバットが、キバの右足に装着されている甲冑『ヘルズゲート』の鎖を解き放つ。  
中から現れたのは、悪魔の翼を思わせる赤い翼。  
残った左足で飛び上がり、真紅の翼でキバは飛翔する。

「ハアーーッ！」

三日月をバツクに、キバは天から放つ必殺キツク『ダークネスムーンブレイク』をスコープオンファンガイアにキメた。

その威力は、倒れたスコープオンファンガイアに致命傷を与え、その背後にはコウモリを模したキバの紋章が、さながらクレーターの如く刻まれる。

「グツ……おのれえ、キバアアアア　！」

天を突く絶叫を残して、スコープオンファンガイアの身体はガラスのように砕け散り、跡からは球状のライフエナジーが放出される。

ギャオオオオ！

空に響く咆哮。

持ち主の消えたライフエナジーを、キバの居城にして、彼の使役せしグレートワイバーンと呼ばれるドラゴンモンスター、『キャッツルドラン』がパクリと飲み込んだ。

そのまま飛び去っていくキャツスルドランを見送って、キバは「ふう」と一息つく。

「お疲れさん。いや、いい汗かいたぜえ。……ん？　どうした  
奏夜、浮かない顔だな」

「……ああ。今までの生き方を変えられないファンガイアが、まだたくさんいるんだなって思ってたさ」

そう言っただけは自分の手を、たった今、『同族』であるはずのファンガイアを殺めた手を見る。

「俺と兄さんがやったことで、救われたファンガイアもたくさんいるだろうけど、逆に苦しむファンガイアもいるんだよな。この四年間、ずっと人間を襲ったファンガイアだけを倒してきたけど、それって正しいことだったのかって……今更ながら考えちゃってさ」

「奏夜。反対意見皆無の掟なんて、絶対に有り得ないんだよ。ファンガイアの『人間は餌』って考え方は、何百年も前から続いた考えだ。変えられない奴らがいるし、そいつらを責めることは出来ない。」

「けどそいつらを倒さなきゃ、人が死ぬ。俺様達が選んだのは、そういう罪を背負わなきゃならない道なんだ」

「キバツト……」

「今更迷うなよ奏夜。みんなで選んだ『人間とファンガイアが共存する道』だ。俺様達も、お前と一緒に罪を背負ってやるさ」

「……そうだな。ありがとうキバツト」

「気にすんな。俺様とお前の仲だろ？」

自分が生まれた時からの親友に感謝し、キバは変身を解いて、その場を去ろうとする。

突然、炎が視界を満たした。

「なっ！」

「うお！　　またこれかよ！」

突如、公園全体を包み込んだ『封絶』は炎の先に見える世界との因果を切り離す。

「ちくしょう！」

またあの燐子って奴らが　ん？」

キバットが違和感に気付く。

「奏夜、前に俺様達が見た『封絶』と、炎の色が違くないか？」

「えっ？」

キバットの言葉に、もう一度辺りに揺らめく陽炎を見る。

確かに言われてみれば、微妙に色が違う。

自分達が見た色よりも、更に煌々と燃え上がっている。

その色に名を付けるなら『紅蓮』か。

しかし、その差異に何の意味が

「『封絶』も使わずに顕現するなんて、随分とお粗末な『徒』ね」



凜とした、威圧感のある声。

キバが振り向くと、そこには一人の少女が立っていた。

漆黒のマントのようなコート。

右手に握っているのは、少女の身の丈もある大太刀。

剣呑さを帯びた瞳と、棚引く見事な長髪は、『封絶』と同じ灼熱の赤を宿している。

この世のものとは思えぬ神秘的な雰囲気を漂わせた少女に、キバは驚愕しながらも、その姿に見入っていた。

「まったく、今日は変なやつに会ってばかりね。妙なものを入れた『ミステス』に会ったかと思えば、次は『封絶』を使わない『徒』」

本当にわけわかんない街、と少女は少し愚痴るように言う。

「気を抜くな。先ほどの『徒』から感じた力、かなりのものだぞ」

「うん。わかってる」

少女のものではない、やや渋みのある重い男の声に頷き、少女は射抜くような眼光でキバを見る。

「見たところ、お前はここを根城にしてる『王』じゃないわね。私達の邪魔をせず、何かしらの事情があるなら、見逃す余地をあげてもいいけど？」

少女の言う単語のほとんどは理解不能なものだ。しかし、キバはその中から一つ、聞き逃せない言葉を拾う。

(私達の邪魔……？)

『燐子』が出現する度に現れる『封絶』。  
そして今度は、この少女が現れた時に出現した。

キバの中にある仮説が生まれる。

まさかこの娘が

「……………」

キバは無言で、戦いの構えを取る。

その仕草を見て、少女の顔にも好戦的な笑みが浮かぶ。

「そう。ならこっちも、遠慮なくやらせてもらおうね」

少女が太刀を両手で握り締めると、刀身が紅蓮の炎を覆う。その光景を静観するキバだったが、次の瞬間、少女は足を一気に踏み込み、キバとの距離を瞬時に詰めていた。

「っ!?!」

信じられない速度で振り抜かれた刃が、反応の遅れたキバの身体を捕らえた。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD!

「私はフレイムヘイズ。存在の乱獲者を滅す使命を持った者よ」

「この少女が、鍵を握っているということか」

「平井ゆかりが素行不良？」

「お前には関係ない」

「捨てるんじゃない。生かすんだ」

「お前が、『紅世の王』だな」

【第二話・ビート／炎髪灼眼の討ち手】

WAKE・UP！  
紅蓮の鎖を解き放て！

## 第一話・運命ノウエイクアップ（後書き）

どうも、作者の一条ツカサです。

「キバのライフエナジーと、存在の力って定義似てね？」のワンアイデアから作られた小説、いかがでしょうか？

どこまでいけるかはわかりませんが、力の続く限り頑張っ  
て書きま  
すので、応援宜しくお願いしますm（　　）m

## 第二話・ビート／炎髪灼眼の討ち手・Aパート（前書き）

「『存在』の定義は古代ギリシヤの哲学者、アリストテレスやプラトンの時代から、様々な観点で研究されてきた。

近代では、『物が在る』ということはもはや証明出来ないと言つ意見も出ている。

しかし、これだけは言える。『存在』は『無』より遙かに価値があり、『無』は存在の否定においてしか使われなかったことだ」

キバットバット三世

## 第二話・ビート/炎髪灼眼の討ち手・Aパート

少女の戦意が刃に煌めく。

「っ!」

間一髪それをかわすも、二撃、三撃と剣閃がキバを襲う。

(おいおい、早過ぎんだろ……っ!)

キバに変身している状態を踏まえても、瞠目せざるを得ない身体能力だった。

こんな小柄な体躯で、元来かなりの重量がある太刀を振り回せる時点で、この少女が普通でないことは自明の理。

しかも、よく見れば両手持ちと片手持ちを使い分けている。ますます有り得ない光景だ。

「っだあ!」

太刀が横薙ぎに走る。

防戦一方だ。

間合いの差の時点で、素手と太刀では雲泥の差である。

（かといって、次狼たちを呼ぼうにも、フェッスルを取り出して吹かせるとなると……）

間に合いそうにない。

その間に身体が二つのパーツに別れる。

（面倒くせえ、なっ！）

剣撃が来たタイミングを見計らい、キバは少女に背を向ける。何をするのかと、少女は攻撃の間合いに、数瞬思考を挟む。

それがいけなかった。

キバはそのまま両足に力を籠め、バック転で空中に飛び上がり、少女の太刀を回避したのだ。

着地したキバが立つのは、少女の背後。

（しまっ……！）

少女が身構えるが少し遅い。



刀のガードこそ間に合ったものの、相殺仕切れなかった重い蹴りの衝撃が、刀を通じて伝わる。しばらく手は使用不可だろう。

それも数秒間だろうが、

(それで十分だ)

キバは戻した足を再び後ろに引く。

このまま太刀を蹴り上げれば、お互いに素手。

格闘戦なら、こちらに分がある上、フエッスルを使う余裕もできる。

キバの目論見は、的確なものだっただろう。しかし、キバはこの少女を甘く見ていた。

キバが太刀を蹴り上げるよりも早く、少女は太刀を手放したのだ。

(何っ!?)

計算外な行動に、今度はキバの判断が遅れた。

空振りに終わったキックは、逆転どころか致命的なウィークポイントになる。

「っはぁー!」

少女は、未だに痺れる手の代わりに、キバの振り上げられた足に右足をかけ、残った左足で、鮮やかなムーンサルトをキバの頭部にヒットさせた。

「がっ……!!」

当たったのは丁度顎の部分。

キバの仮面で威力が緩和されても、脳までも揺らすダメージは、先ほどの少女の比ではない。

ガードさえも不可能な状態だ。それを少女が見逃すはずがない。

「っだぁ！」

痺れの抜けた両手で、地面に落ちた太刀を握り締め、踏み込みからの鋭い斬撃をくり出した。

神速の閃きが、キバの胴体を切り裂いた、



キバットが警戒を促す中、少女は立ち上がり、太刀を構え直す。

「アラストール、本当にこいつのこと知らないの？」

「ああ、少なくとも我が知識にはない姿だ。これ程の力を持っていながら、『紅世』に名が広まっていないのは、奇妙だな」

ペンダントから聞こえる声に、少女は同意する。

この赤い戦士は強い。

目立った『自在法』も使用せず、格闘術だけで自分と互角に渡り合っている。

(まさか、私と同じで炎を使わずに戦うつもり?)

少女の懸念をよそに、キバもまた、少女の尋常ではない実力を前に、身を引き締めていた。

チエックメイトフォーと肩を並べる戦闘能力とは恐れ入る。

(一体何者なんだ...?)

疑問は山積みだが、今は気にしてはられない。

意を決して、キバは再びベルトのサイドケースから『ウェイクアツプフェッスル』を取り出す。

「キバツていくぜえ〜！ WAKE・UP！」

本日二度目のウェイクアップコール。

キバットの吹き鳴らすフェッスルが夜を呼び、キバの右足のヘルズゲートを解放する。

「夜……！？」

「馬鹿な……、世の理をねじ曲げたというのか？」

どれだけの力を使えば、この世の法則を破壊出来るというのだ。

少女はますます、今相對する存在の底知れない力を痛感する。

片やキバは三日月を背景に飛び、キックの体勢を取った。

（何か、来る）

直感で少女は、驚愕を押し殺し、太刀に力を籠める。

太刀に纏われた炎は更に激しさを増し、夜の帳を明々と照らし出す。

そして、少女が浮遊するキバ目掛けて、大地を蹴ったのと、キバが自分に刃を向ける少女目掛けて、キックを決めようとしたのが、ほぼ同時だった。

「はあっ！」

「ハアア ツ！」

一瞬の交錯。

少女の紅蓮の刃と、キバの『ダークネスムーンブレイク』が正面から激突した。

「うあっ！」

「ぐっ！」

魔皇力と紅蓮の炎が錯綜し、その反動はキバと少女、双方を吹き飛ばす。

両者ともにダメージはあるが、まだ軽いものだ。空中でのリカバリングから、直ぐに体制を整え、目の前の相手に向

かい合う。

(まさか……『ダークネスムーンプレイク』を弾き返すとはな)

実力はほとんど拮抗しているらしい。

このままで戦っていても、ジリ貧か。

キバはベルトに収納されている青色のフェッスルに手をかけた。

「お前……本当になんなの？」

そこへ、少女の疑問が割って入る。

「『さつき倒した』燐子の主じゃないのは、力の雰囲気からわかるけど、ならお前の目的は何？ 封絶も使わずに存在の力を食うなんて、私達に見つけてくれと言ってるような」

(えっ?)

少女の話の中に、聞き逃せない単語を聞き取る。

「お、おい！ ちょっと待て！」

キバットが慌てた様子でベルトから外れる。

「今、燐子を倒したって言ったな。

あんた、あの燐子って連中の仲間じゃないのか？」

「……何言ってるの？ あんな『徒』の下僕と一緒にしないで」

奇妙な食い違いをキバとキバットは感じ取った。

少女もそれは同じらしく、首を傾げる。

「不愉快だから、訳の分からない嘘をつかないでくれる？ フレイムヘイズを知らない『紅世の徒』なんて、物知らずで済まされる問題じゃないわ」

「だ〜か〜ら〜！ 何なんだよその『紅世の徒』とか、『フレイムヘイズ』とかってのは！」

焦れたキバットの叫びに、少女が顔をしかめると、また何処からともなく、あの男の声が聞こえてくる。



「どうも様子が違う。此奴ら『徒』ではないのも知れぬな」

「でも、『封絶』の中で動いてるじゃない。燐子だとしても、ここまで性能のいい燐子を作り出せる『徒』なんていないと思うけど」

「ふむ。貴公ら、自らを『紅世の徒』でないと言うのなら、何者だ」

男の声はどうやら、如何なる仕組みなのか、ペンダントから聞こえてくるようだ。

答えようかどうか迷ったが、結局仮面の下で、自らの名を口にする。

「……キバ」

「キバ？」

謎の声が、その固有名詞に反応する。

「まさか、ファンガイアの王か？」

「いや、俺様達は代行者だ」

キバを知っているのだろうか？  
だが知っているなら、初めにそう言っているはずだ。  
そう深く関わっているわけではないらしい。

「アラストール。ファンガイアって……」

「うむ。『紅世の徒』と同じく、存在の力を食らう一族。  
そしてキバとは、ファンガイアの王のみがその身に纏うことを許さ  
れる、魔装具の名だ」

「じゃあお前も、さっき人を食ってたってこと？」

「食っちゃいねえよ。お嬢ちゃん達を感じ取ったのは多分、俺様達  
が倒したファンガイアのライフエナジーだ」

キバットが補足する。

「俺様達は、『人を食わない』という掟を破り、尚もそれを止めよ  
うとしないファンガイアだけを倒してる。あんまりいいセリフじゃ  
ねえが、人間を守る大義のためだよ」

「何？ ファンガイアはもう人を食らってはいないのか」

ペンダントから、驚きの声上がる。

「ああ。まだ掟を破るファンガイアはちよくちよくいるが、もう大規模に人間を襲う連中はいねえ」

「そうか……。久しくファンガイアの情勢には疎かったが、まさかそのような変革があったとはな」

「それじゃそろそろ、あんたらは何なのか教えてくれねえか？」

キバットの問いかけに、少女はそうあることが当たり前のように、何の感慨もなく、自らの名乗りを上げる。

「私はフレイムヘイズ。存在の乱獲者を滅す使命を持った者よ。

そして“天壤の劫火”アラストールの契約者、『炎髪灼眼の討ち手』

」

(炎髪灼眼の、討ち手?)

更に聞いただそうとするキバだったが、少女は刀を収め、ペンダントに向けて話しかける。

「全く無駄足だったわね。周りにもあまり被害は出てないし、直さなくても大丈夫かな」

「うむ。この程度なら、存在の歪みは起こるまい」

「うん。じゃあ、封絶解くね」

少女が指を掲げると、陽炎の壁は消え、地面に描かれた陣も消え失せた。

そのまま少女は、くるりと背を向ける。

「あ！　おいコラ待て！」

呼び止めるキバットの声に対し、少女は鋭い眼光を向け、

「とにかく、私達の迷惑になるような事はしないで頂戴。フレイムヘイズでもないヤツが関わるなんて、鬱陶しいから」

と、極端と言えば極端過ぎるセリフを残して、少女は夕暮れの空に飛び、姿を消した。

呆然と立ち尽くすキバだったが、しばらくして、変身を解き、奏夜の姿へ戻る。

「何なんだアイツら！ 人に聞くだけ聞いておいて、挙げ句の果てに邪魔すんだと？ こちとらずくと、ここを拠点に戦い続けてたつてのに！」

「まあまあ、落ち着けよキバット」

怒りのあまり滅茶苦茶な方向に飛び回るキバットを宥め、奏夜は言う。

「情報が増えただけでも一歩前進だ。そうだろ？」

「むう。『フレイムヘイズ』に『紅世の徒』か。あのお嬢ちゃんの話聞く限り、その『徒』だか『王』ってやつが、燐子を操ってる黒幕なのかね」

「何にせよ、もう一度情報を整理してみる必要があるな。それにあの赤髪のカキも、探りをいれなきゃならん」

燃えるような夕暮れの空。その下で繰り広げられた戦い。この戦いこそ、運命を解放せし牙と、灼熱の瞳を持つ少女の出会い。

そして新たなる運命の旋律の始まりだった。

「ねえねえ次狼。なんでキャツスルドランに戻ろうなんて言い出したの？」

洋風な広間。

巨大なガラスからの木漏れ日と、シャンデリアの明かりが薄暗さを

かき消している。

キバの居住たるキャッスルドランの体内。  
その一室である『ドランプリズン』のテーブルを挟み、ポーカーに興じる三人組がいた。

「まだ俺達は『闇の盟約』に縛られている。戻るもなにも無いと思うが？」

次狼はカードを見る手を止め、目の前に座った少年　ラモンを見る。

少し古いデザインのセーラー服に身を包み、十代前半くらいに見えるこの少年。

しかし実際は、百を優に越える次狼の友人だ。

「でも四年前の戦いの後、お兄ちゃんからかなりの自由は貰ったじゃないか。

そりゃ、音也との約束はまだ生きてるよ？

でも人を食べちゃダメって制約も、人工のライフエナジーで事足りるし。

お兄ちゃんの手助けをするのだって、もうほとんど必要ないよ。

お兄ちゃんは強くなったし、歯向かうファンガイアだってかなり減ったじゃん」

「おれたち、自由」

ラモンに片言の発音で同意する、二人よりも一回り大柄な男は力<sup>リキ</sup>。次狼と同じタキシードに身を包み、オールバックの髪が特徴的だ。

次狼、ラモン、力<sup>リキ</sup>。

三人は四年前の戦いでキバに協力し、共にファンガイアと戦っていた人外が存在　アームズモンスターだ。

しかしその役目は既に終わり、今では牢獄同然だったキャツスルドランからも、普通に出入りできるまでの自由を獲得している。

にも関わらず、三人は未だここにいた。

正確には、次狼が二人に召集をかけ、呼び戻したのだが。

「……少々厄介なことになりそうなんだな。このまま行けば、奏夜だけでは荷が重くなるかもしれん」

「『紅世』の連中のこと？　でもあいつらなら、フレイムヘイズ達に任せるべきだよ」

「もち屋、もち屋」

説明を加える次狼に、尚も二人は食い下がる。

「大体、次狼最初からぜんぶ知ってたじゃん。紅世の徒や、フレ



イムヘイズのこと。  
だったらお兄ちゃんに『燐子や紅世の徒は、フレイムヘイズに任せ  
ておけばいい』って言えばよかったのに」

「ふん。俺が黙っていようがまいが、奏夜は『紅世』の連中にた  
どり着いていたし、俺が止めようが止めるまいが、あいつは動いて  
いただろうさ。」

ま。奏夜が『紅世』に関わらないなら、それに越したことはな  
かったがな」

「おっ、次狼つてば優しい」

「茶化すな。」

……とにかく、『闇の盟約』が緩和されても、未だに俺達の主は奏  
夜だ。

なら、協力してやるしかないだろう」

「ふん。……ま、いいけどな。今さら自由貰ったところで、やる  
ことないってのが現状だし。キャッスルドランの生活に不自由があ  
るわけでもないしね」

「退屈、しのぎ」

そんな軽い調子でラモンと力は協力の意を示し、ポーカーを続行する。

「それで、当のお兄ちゃん達は？」

「キャツスルドランの書庫にいる。紅世について調べるそうだ」

「そう、お兄ちゃんもキバットも大変だね。

……あ、コール」

ラモンが見せる手札には、フルハウスが揃っていた。次狼と力、二人分の唸り声が、ドランプリズンに響く。

場所は変わって、キャツスルドラン書庫。

ここには歴代のキャツスルドラン城主が集めた様々な書物が保管されている。

もちろん、ファンガイアが集めた書物であるからして、中には表の世界には出回らない貴重なものも多い。

そんな場所で、奏夜とキバットは、うず高く積まれた本の傍ら、机に突っ伏していた。

「なあ奏夜……やっぱりここには無いんじゃないか？ 『燐子』の単語を知った時も、ここは調べただろ……？」

「結論を急ぐな……。次狼達が口を割らない今、手掛かりはここしかないんだ……」

疲労困憊しているのか、二人の会話には力がない。

「あのバカ狼達、本当に何か知ってるのか？」

「ああ、多分な。何で俺に話さないのかは知らんが」

「だったら、城主権限で聞き出しちまえばいいだろ。そうでなくても、力あたりなら、うっかり口を滑らせそうだが」

「昔こそすれ、俺のあいづらに対する権限って、かなり弱まっているから……。力に関しては、もう聞き出そうとしたよ。けどダメだった」

あいつ、いつちよまえに知恵つけやがったよ。と呟く奏夜。  
因みに、力のつけた『知恵』とは以前『地獄のババ抜き』の騒動で  
身につけた、無表情な怪人態に変身し、黙秘し続けること。

カ本人曰く、「おれのポーカーフェイス」なんだそうだ。

「とにかく、俺達で探すしかないんだよ」

「じゃあせめて、あの『探偵コンビ』に依頼するとかしろよ……。  
あいつらなら一発じゃんか」

「……俺があいつらを頼りたくないの、知ってんだろ」

今頃、風とエコの町を駆け巡っているであろう『半分こ怪人』を一  
瞬思い浮かべ、奏夜は手元の本を再びめくった。

「奏夜〜                      お兄ちゃ〜ん」

書庫の入り口から、幼い女の子のような声が聞こえてきた。  
奏夜とキバットがそちらに視線をやると、キバットより一回り小さ  
い白いコウモリが、パタパタと羽音を鳴らして飛んできた。

「ようキバーラ。どうかしたか？」

キバットが疲れながらも、陽気に話しかける。

このコウモリの名はキバーラ。

キバットと同じ『キバット族』の末裔であり、キバットの実の妹だ。

「奏夜とお兄ちゃんが探してそうな本、私ちょっと心当たりあるんだけど」

「えっ？」

二人の声が重なった。

「気になるならついてきて。私一人じゃ持ってこられないのよ」

そう言うキバーラに案内され、辿り着いたのは、

「ここって、先代キングの書斎か？」

先代キングとは色々あったため、確かにここはあまり力を入れて調

べなかつたが。

「ホラ、こつちこつち」

キバーラは、キングが使っていたと思わしき、高級な装飾の成された机に止まり、引き出しの一つを開けた。そこは二重底になっており、中敷きの下には、黒い手帳のようなものが入っていた。

奏夜がそれを手に取り、パラパラとめくる。

「これ、ファンガイア以外に存在した種族の資料だな」

ファンガイアは公にこそ知られていないが、事実上、生態系の頂点に立つ存在である。

だが何も、最初からそうだったわけではない。

ファンガイアと人間を含む13種族のモンスター達と戦い、時に滅ぼし、時に配下に置き、勝ち取った地位なのだ。

まあ滅ぼしたとは言っても、次狼のウルフェン族、ラモンのマーマン族、力のフランケン族のように、少数ながらも生き延びている種族はいるのだが。

「ファンガイア以外の種族を調べてるんでしょ？ だつたらソレに何か乗ってるんじゃないかしら」

「おお、すごいなキバーラ！ さすがは俺様の妹だ！ こんなによく見つけたもんだな」

「この書齋、私の宝物の隠し場所だったの。その時偶然見つけたのよ」

見れば机の上には『キバーラの』と書かれた小箱が。完全にこの部屋は、子供の遊び場と化しているらしい。

「……取り敢えず見てみるか」

先代キングにほんの少し同情して、ページを見ていく。

ウルフェン、マーマン、フランケン、キバット、ドラク、レジエン  
ドルガ、ギガント、マーメイド、ゴブリン、ゴースト、ホビット、  
ファンガイア、人間。

そして

「あった。『紅世の徒』とフレイムヘイズ」

「んじゃ、資料からわかった話を纏めるか」

キバットが口に加えたマジックで、ホワイトボードに書き込みを入れていく。

「この世界には、この世とは違う『紅世』って別世界があり、そこからやってきた存在が、隣子達のボスである『紅世の徒』。

こいつらはそれぞれの目的から、人間が持つ根源的なライフエナジーである『存在の力』を奪い、この世のバランスを乱し、歪みを作り出す。その歪みが『紅世』にまで及ぶことを恐れた『紅世の王』は、この世の人間と契約し、自らの力を与え、『紅世の徒』を滅する存在『フレイムヘイズ』を作り出した」と、こんなところか」

キバットがボードに書いた図式を見直し、奏夜は考えを巡らす。

「つまりあの赤ガキは、あのペンダント越しに話してた『アラストール』って『紅世の王』の契約者っつーわけだな」

「人間を守ってるんじゃなくて、世界のバランスを保ってるのね」



「ああ。だから先代キングも、無理に滅ぼそうとしたりはしなかったみたいだな」

「自分たちの餌である人間を襲うのを邪魔しないなら、戦う意味はないって考えてたんでしょうね」

利益にならない戦いはしない。

実に懸命だ。

とはいえ、フレイムヘイズ側としても、ファンガイアは人間の存在まで食うわけじゃないから、半分黙認状態だったろうけれど。

「でも、妙だな」

奏夜は首を傾げる。

「この紅世の徒って奴ら、ずっと昔から人を食ってたんだろ？ ならもっと早く、俺達が気付いてもよかったと思うんだが」

ファンガイア、ウルフェン、マーマン、フランケン等、異形の存在

は封絶の影響を受けない。

この本によると、人間でない時点で、それらは『世界から外れた存在』と見なされるかららしいが、それならば、もっと早く『紅世』の存在を認知出来たはずだ。

しかしそこへ、キバーラが補足を入れる。

「単なる偶然、かも知れないわよ。今まではこの御崎市に紅世の徒が現れなかっただけかも知れないし。それにホラ、ここみて」

キバーラがあるページを示す。

「『トーチ』っていう食われた人間の残り滓を配置して、『その人間が食われたという違和感を緩和する』って書いてある。知り合いが食われてもしない限り、違和感には気が付かないわよ」

「……………なるほど。よく出来てやがる」

溜め息混じりに、奏夜は資料を閉じる。

「ま、なんにせよ、敵の正体は分かったんだ。これから動きやすくなるんじゃないか？」

「さて、それはどうかな」

キバットが嬉々とする一方で、奏夜はうかない顔だ。

「逆に言えば、他の手掛かりはもうあの赤ガキしかいなくなっちまった。

それに、今この町を襲ってる『紅世の王』の目的もまだわからないまましな」

集めた存在の力を何に使うのか。  
それもかなり重要度のある情報だ。

「……っていつか」

悶々と唸る奏夜とキバットに、キバーラが軽い調子で提案する。

「先代キングがこれだけ知ってるんだから、クイーンにでも聞けば何かわかるんじゃない？」

「……………」

長い沈黙。

そして二人は同時に呟く。

「その手があつたか！」

「……………はあ」

自分の主と自分の兄の、おとぼけな一面を知ったキバーラだった。

翌日。

夜に嶋とマル・ダムールで会う約束をし、奏夜は普段通り、学校へと来ていた。

奏夜としては、自分はこんなことをしているのか、という面持ちだったが、キバットに焚き付けられ、結局はこうして学び舎に足

を運んでいる。

奏夜の赴任する御崎高校は平凡を絵に描いたような公立高校である。そんな中で、奏夜のような破格教師は少し、いやかなり浮いている。奏夜本人としては「刺激が足りんよ刺激が」と評価を下しているが、非日常的な世界に生きている奏夜を満足させられるだけの刺激を、ごくごく一般の教育機関に求めるのはあまりに酷だ。

だが、意外や意外。

その刺激は、突然奏夜の元へ飛び込んできた。

「平井ゆかりが素行不良？」

三時間目が終わり、昼休みがようやく視野に入り出した頃、奏夜の元へ何人かの同僚が相談に来た。

何故か半泣きで。

「えっと、ウチのクラスの平井ゆかりが、ですか？」

「その平井ゆかりです！」

三人同時のシャウト。

奏夜としては、鬱陶しいことこの上ない。

「取り敢えず、あらましを話して頂けませんかね？」

早急に話を終わらせよう。

そう決意する奏夜の耳元で、三人の教師のさえずりは響く。

聞き終えて、奏夜は頭を掻きながら「つまり、こういことっすかと口を開く。

「とある一年二組にノートも取らず、自分たちの話を聞こうとしなかった平井ゆかりという生徒がおりました。当然先生は注意しました。

しかしその生徒は目を吊り上げながら立ち上がり、授業の問題点的確に上げ、止めと言わんばかりに『私に教えるつもりがあるならちゃんと勉強してから出直しなさい』と辛辣なセリフをのたまい、先生達を無惨なまでに叩き潰してしまいましたとさ　ってわけですか」

三人　つまり平井ゆかりを指導しようとした教師がごくごくと呟く。  
奏夜はそんな同僚は慰め、理不尽なスタイルを取り、教育の場を荒らす生徒に怒りを燃やす　なんてことはまるっきりこれっぽっちもなく、

「いいことじゃないですか」

一片の温かみも無く、同僚に言い放った。

「自分たちの授業の問題点を指摘してもらったんでしょう？　ならこれを機会に、更なる高みへと羽ばたこうという前向きな姿勢を示しましょうよ」

予想もしなかったカウンターに、教師陣はたじろぐ。

「し、しかしですな紅先生。学び舎という場において、目上の人間にあそこまで不遜な態度を取るの……」

「別に間違ったこと言ってるわけじゃねーでしょうが。第一、お三方も平井の指摘を否定出来ないから、言い負かされちゃったんでしょ」

奏夜のあんまりな、しかし否定仕切れない意見に、教師陣はぐつと押し黙る。

それを気にした様子もなく、奏夜は「大体ですね」と続ける。

「昨今の生徒達には気概がありません。子供は大人に反抗するくらいで丁度いいんです。それもその生徒の個性なわけですし、数多あるパーソナリティーの一つとしてカウントすべきですよ」

この話はもう終わり、と言わんばかりに、奏夜はデスクに視線を戻した。

「と、とにかく！ 担任として、一度適切な指導をお願いしますよー！」

そう言い捨てて去っていく同僚に、べーっと舌を出し、奏夜は手元の作業に戻る。

(しかし、平井ゆかりね……)

印象は薄いけど、大人しく、優しい子だったはずだ。

今朝方は例のごとく遅刻して、HR不参加なため、奏夜はまだ平井の姿を見ていない。

反骨精神に関しては、奏夜側からすれば大いに歓迎すべきことだし、同僚の相談もどうだっていいけど、もし何か事情があるなら、それは



放っておけないだろう。

時間制を見ると、狙いすましたかのように、次は一年二組での授業だ。

(少し、様子は見ておくか)

こういっておせっかいな辺りが、紅奏夜と紅音也の相違点である。

「うーい、お前ら席つけー」

気だるそうな声から教室に現れた奏夜に従い、生徒達が席へついていく。

「池。号令」

「あ、はい。きりーっ」

クラス委員、池速人の号令から、授業はスタートする。

「んじゃ、教科書開け。今日は」

奏夜は極めて普段通りに、やる気があるのかないのか微妙なテンションで黒板に文字を書いていく。

奏夜は預り知らぬことだが、実はこの場において、生徒一同から多大な期待を抱かれていたりする。

これまでの三時間。平井ゆかりの餌食となった三人の教師。

もはや救いは無いかに見えたこの状況で、紅奏夜はやってきた。

このフリーダム教師なら、あるいは平井ゆかりに打ち砕かれないかも知れない。

そんな期待を知ってか知らずか（いや、知らないのだろうが）、授業開始五分にして、奏夜が動く。

「んじゃ、ここの登場人物が何故こう思ったか　平井、説明してみろ」

来た。

クラス全員の気持ちが一つになる。張り詰めた弦のような緊張が走った。  
奏夜としては、これに深い意味はなく、取り敢えず平井がどんな対応をするかの様子見だった。

数秒経過。

(……シカトか)

ならば、様子見その2。

次の奏夜の行動は迅速だった。

振り向きもしないまま、ポケットのマイチョークを取り出し、指先で一回転。

そのまま教室真ん中辺り　正確に言えば、坂井悠二の隣目掛けてぶん投げた。

周囲の生徒に一切危害を加えることなく、赤いチョークは真っ直ぐ平井へ

パシッ!

よく通る音が、教室内に響く。  
クラスの間が、奏夜がチヨークを投げたと認識するのに三秒。  
そのチヨークを平井ゆかりが二本の指で受け止めたと認識するのに、  
更に三秒を要した。

「……こんなもの投げて、何の真似？」

沈黙の果てに、そう言いながら、ようやく平井が席から立ち上がる。  
その時奏夜は、改めて平井ゆかりの姿を見る。

奏夜は驚愕した。

チヨークを受け止めたことに、ではない。

「お前……？」

そこには昨日、キバとなった自分と戦い、『炎髪灼眼の討ち手』を  
名乗った少女がいた。

## 第二話・ビート/炎髪灼眼の討ち手・Aパート(後書き)

今回は長くなりそうなので、二つに分けました；

キバーラに関しては、僕が個人的に好きなキャラなので、今回登場させて頂きました(デイケイドのキバーラじゃありませんよ)。これからもちよくちよく出てくる手筈です(＾O＾)

そしてキバットの言っていた『探偵コンビ』については……正直、第一話のカッコよさに痺れた作者が、つい登場させたくなっただけですf^\_^；

デイケイドがあんな終わり方だったので、かえって期待大ですね。

では、後半もお楽しみに。

## 第二話・ビート/炎髪灼眼の討ち手・Bパート

「……………」

「……………あの、先生」

「ああ、気にするな気にするな。そのままコンベニおにぎりを頼張るがいい」

いえ、気にします。

悠二の切なる心情を、奏夜は鮮やかに無視する。  
現在教室には、奏夜、平井ゆかり（少なくとも周囲にはそう見えるらしい）、坂井悠二の三人のみ。

他の生徒は、この四時間の疲れを癒すためか、授業が終わった途端に、教室から姿を消していった。

（一体どうなってやがる……………）

担当した四時間目の授業。

いきなり素行が悪くなったと噂された平井ゆかり。

その姿が昨日のフレームヘイズだと知った時の驚愕は計り知れなかった。

よく動揺を抑え込み、授業を続けられたと思う。

クラスの反応を見る限り、『この少女が平井ゆかりである』ということに、何の違和感も感じていないようだった。

(なんかの魔術……いや、資料にあった『自在法』ってやつか?)

いずれにせよ、元々非日常の中に身を置く身である奏夜の驚きは、冷静に回る思考の中へ、既に沈んでいる。  
だからこそ、こうして昼休みの時間を削り、探りを入れようとしているのだ。

(幸いにも、こいつは俺がキバだったことに気付いてないみたいだからな)

声から判断しようにも、昨日奏夜はほとんど喋らず、会話はキバツトに任せきりだったのだから、無理もない話だが。

「おい平井。お前、急に随分と雰囲気変わったな。何かあったのか?」

軽い質問。

しかし、少女は反応することなく、甘味物を幸せそうに頬張ってい

る。

今までの態度を総合して、返事を期待していなかったからか、奏夜は構わず続ける。

あくまで、『奏夜の知る』平井ゆかりに話すものとして、揺さぶりをかける。

「俺はな。基本的に生徒の自主性を重んじている。

だから、煌めく青春をスポーツに打ち込もうが、勉学に打ち込もうが、教育の場に自らの意見を叩き付けようが、盗んだバイクで暗い夜道の中を走り出そうが、そんなことはどうでもいい」

「先生、途中から教師の発言じゃありません」

「シャラップ坂井。　だがな、平井。もし周りにお前のことを心配する人間がいるのなら　せめて変わった理由くらいは話せ。お前にとつちや何でもことでも、周りにとつちや心配になる時もある」

「お前には関係ない」

容赦ねえ。

奏夜の敏腕刑事の如き揺さぶりに対する少女の返答は、あまりに素っ気ないものだった。

しかも何事も無かったかのように、メロンパンにかじり付いている。



「……やれやれ。ま、話したくなったら言え。坂井も、邪魔して悪かったな」

「あ、いえ。僕は大丈夫ですけど」

椅子から立ち上がり、奏夜は扉に手をかける。  
だが、そこで奏夜は少し気になったことを思い出し、「あ、そうそう」と、悠二の方を振り向く。

「そっぴや坂井。さっきからどーも気になってたんだが」

「？ 何ですか？」

「お前今日、いやに存在感が希薄な気がするんだが……俺の気のせいか？」

奏夜の何気ない言葉に、悠二は内震える。  
彼のそれは、今の自分にとって、あまりにも正鵠を射すぎていたからだ。

が、どうにか平静を装い「教え子に向かって、それはないですよ」と苦笑混じりに返す。  
奏夜が立ち去った後、シャナから『紅世』についての説明を受ける傍ら、悠二は問う。

「……なあ。さっき先生が言ったのって」

「偶然よ」

仁辺もなく、シャナはきっぱりと否定した。

「いちいち反応しない。『存在感が希薄』なんて人間を評価する上で、そう珍しい表現じゃないでしょ」

「それは、そうかも知れないけど」

いや、本当にそうだろうか？

言い知れぬ違和感に悠二は襲われる。

「極稀に『存在の力』を感じとれる人間はいるが、そのほとんどがフレームヘイズや紅世の徒に近づいた人間のみだ。だがあの男からは、いずれの気配も感じ取られなかった。警戒する必要は無かるう」

アラストールの補足。しかしそれさえも、この疑念を消し去るには至らなかった。

悠二がこの疑念を消化するのはもう少し先。

紅奏夜の立つ世界を知った時だ。

「っ！」

それは、突然やってきた。

六限目、三年生での授業が終わり、嬉々として授業終了の号令を出した奏夜を、覚えのある感覚が襲う。

(封絶か！)

あの平井ゆかり フレームヘイズの少女が張ったものではないことは、気配でわかった(幾度か肌で封絶を感じ、ある程度の区別はつけられるようになっている)。

とすればこれは、今この町に巢食う『王』のものか。

奏夜は教室を飛び出し、早急かつ慎重に気配を辿る。

なにぶん、ライフエナジーと『存在の力』は似通ってこそいるが、微妙に勝手が違うのだ。

その差異に苦戦させられながらも、奏夜は一分ほどかけて、封絶の発生源を突き止める。

( ちっ、予想はしちゃいたが )

舌打ち三寸、奏夜は自らが担任を務める一年二組へと足を進ませる。授業終了直後だからか、帰りの会などで、廊下に出ている生徒はほとんどのいなかった。

「キバット！……は、やっぱり直ぐには来られないか」

がらんとした階段を駆け上がりながら、頼れる相棒の不在を嘆く。

ブラッディローズは燐子には反応しない。

既に確認済みだ。

かといって、自分よりライフエナジーに精通するキバットが、存在の力の出現に気が付かないことは無いだろうが、それでもファンガイア出現時と比べれば、対応は遅れる。

「小手先の魔術で勝てる相手ならいいんだが……」

しかし、そんな一抹の不安は容易く打ち碎かれる。教室から感じられる平井と対峙する『存在の力』。それがあまりにも巨大だったからだ。

「くそつ、キバットが間に合わなきゃ、『エンペラーバット』にならなきゃいけねえかもな……」

荒々しい雰囲気（多分平井）の方と、もう一つ見知らぬ巨大な力の塊（こちらが『紅世の王』か）が威風堂々と睨み合う混沌としたフィールド。

そして、唐突に一方が消えた。

「あれ？」

間の抜けた声を挙げ、つい足のスピードを緩める奏夜。

感じたところ、残ったのは平井の存在の力で、消えたのは『紅世の王』の方だ。

もう相手を倒してしまったのだろうか。

(いや、さっきのあれは倒されたっていうより、急にふっと消えたような印象だな)

『紅世の王』に逃げられた、というのが妥当な見解か。

怪訝そうに顔をしかめながらも、奏夜は事態把握のため、教室へと向かう。

案の定、教室の周囲は廊下を含め、寂寥の赤がその全てを包み込んでいた。

封絶の中に入りながらも、一応の警戒心からか、入り口の窓からこっそりと中の様子を伺う。

教室内は、惨劇と呼ぶに相応しい状態だった。

机や椅子、窓ガラスはもちろんのこと、床や壁が凄惨なまでに破壊

されている。

その近隣には戦いの余波に巻き込まれたであろう、自分が受け持つ生徒達が、封絶で時の止まったまま人形の如く倒れている。

(……はっはっは、人がゴ)

一瞬、有名アニメ作品の某大佐の名セリフが浮かんだが、この状況でそれを言うには、人でなしが過ぎるため、脳内で削除する。

封絶内の怪我や破壊はフレイムヘイズが直してくれるらしいが……。果たしてこれだけの破壊が為された場所を、ノーリスクで再生できるもののだろうか。

「ま……まさか吉田さんをトーチにして、昨日みたいに教室を直すのか！」

そのフレイムヘイズ……というか平井ゆかりは、教室の中央で誰かと言いつ合っている。

(……坂井?)

少女に憤然と抗議しているのは、血にまみれたクラスメイト 吉田一美を抱える坂井悠二だった。

何故だろう？

封絶内では、人外の者しか動けないはずだ。

もし悠二が人間でないのなら、自分が気付くはず。

奏夜の疑念をよそに、少女と悠二の会話は続く。

「そうよ。ここには昨日みたいに連中の喰い残しのトーチがない。だから、その死にかけを使うの。トーチになる前の人間なら、死にかけ一人分で全部直せるわ。ついでに他の人間の傷も治すし、さいつ残り滓もトーチにして配置する。なんの問題もないでしょ」

いや、大問題だ。

(チツ、やっぱり何のコストも無しってわけじゃないのか)

一人の犠牲で、大勢の命を救う。

それは効率的なだけで、決して正しいわけではない。

ただの感情論？ 知るかそんなもの。

それが自分の思う正しさ、それだけだ。

気の合うことに、悠二も奏夜と同じ気持ちらしかった。



「おおありだよ！　吉田さんが僕みたいに死ぬって事だろ！」

「当たり前じゃない。薪がなければ火は燃えないでしょ。元になる力が無いと、物は直せない、人も治せない」

「……………くっ……………」

だが少女は、自分の正しさで悠二の正しさを打ち砕いた。それは、奏夜側も同じ……………、

(……………?)

僕みたいに死ぬ？

悠二が会話の端に含んだ言葉。

奏夜が考えるまでもなく、その意味は判明する。

「それじゃあ、おまえ自身でも使う？」

誰彼も犠牲にしたくない。

首を縦にも横にも振らない悠二の態度を見て、少女は小馬鹿にするような笑みを浮かべ、別の打開案を提示する。

「なんだって？」

「おまえの残り灯をいくら削れば、物も人も直せるわ。もちろん、その分おまえの“存在の力”……『燃え尽きるまでの残り時間』は目減りするけど」

燃え尽きるまでの時間。

記憶した知識と、キーワードが繋がる。

(なるほど……坂井はトーチか)

少なくとも衝撃を受ける。

キバーラが、よほどのことがない限り気が付かないと言っていたが、確かにわからないものだ。

時系列的には、昨日自分と別れた後か。

そして少女が何を言いたいかもわかった。

悠二に与えられた、あまりに少ない仮初の命。

誰も犠牲にしたいくないなら、自分の責任でどうにかしろ。そう通告

しているのだ。

悠二は、その言葉の重さを受け止め、思索した。

ほんの一瞬だけ。

「わかった。それでいい」

即時の決断に、少女も、奏夜も驚く。

「駄々こねてた割には、やけに簡単に決めるのね」

「簡単なもんか」

淡々と、しかし力強く呟く悠二。

奏夜は首を傾げ、少女は何故か怒りを込めた。

「……っ、じゃあ！　なんで残された存在と時間を、みすみす捨てたりするのよー！」

「こじつなつたのは僕の責任なんだ。それに」

捨てるんじゃない。生かすんだ。

「……………はあ」

感心したとも、呆れたともとれない溜め息をつき、奏夜は一旦、封絶の範囲外へ出る。

人がいないのを確認し、心の中にあるスイッチを切り替える。

奏夜の顔にキバへ変身する時と同じ　ステンドグラスの紋様が浮かび上がった。

「我がライフエナジーよ。枯れし彼の地を、その身で満たせ」

ドーム状の封絶へ、臍気に輝く奏夜の手を伝い、赤色の光が注ぎ込まれていく。

奏夜に流れるクイーンの血に由来する常人を遥かに越える膨大なライフエナジー。自らの内に眠る、有り余るエネルギーが封絶内に流れ込んでいるのだ。

（存在の力とライフエナジーの定義が同じなら、代わりにはなるだろ）

元来、このライフエナジーを与える魔術は、死んだファンガイアの骸に自らの力を染み込ませ、生ける屍リビングデッドとして操るためのもの。しかしそれは、屍に限った話ではない。

ライフエナジーを分け与えるという意味なら、何に与えようが構わないのだ。

これで、悠二が支払う力も少しは減るだろう。

『奏夜……っ、一人じゃ無理だ……！ ……コウモリもどき。もう一度力を貸せえ……！』

『父さん、ダメだ！』

「……坂井。若い身の上で、命を削るもんじゃない」

苦い思い出。

それを悠二に投影させただけかも知れない。

はたまた、昨日悠二についていてやれなかった罪悪感かも知れない。

全員が助かるか否か。

それも当然ある。

だがそれよりもまず、奏夜は悠二を、非情な選択を選び取る覚悟を見せた少年を、助けたくなくなったのだ。

「お前の命を生かす時は、まだここじゃないよ」

そう言った時には、奏夜の姿はそこから消えていた。

「っ！」

怒りを滲ませた表情を驚愕に変え、シャナは教室内を世話しなく見渡し始めた。

「お、おい……、どうしたんだ？」

その変化についていけない悠二が、シャナに尋ねる。

「存在の力が、満たされた……？」

何故？

有り得ない。トーチすらいなかったこの空間に、それもここまで急激に、存在の力が出現するなんて。だが、シヤナ自身が感じる力の奔流が、それを否定している。

「えっと、何がどうなってるんだ？」

未だに事態を把握仕切れていない悠二に、シヤナは再び不機嫌そうな表情を作る。

「お前から削らなきゃいけない存在の力が減った……。そういつ」とよ

さすがに教室全てを賄えるほどではないが、それでも悠二が払わなければならない量はかなり減るだろう。

「えっと、よくわからないけど……とにかくみんな助かるんだよね？ みんな、死ななくて済むんだよね？」

「…………ええ」

ぶっきらぼうにそう答えると、悠一は心底安心したように、胸を撫で下ろす。

(…………一言くらい、自分勝手なことを言えばよかったのに)

シヤナは口には出さず、代わりに目を更につり上げる。

このミスセスが『自分の存在する時間が減らずにすんだ』ことを喜べば、『偽善者』という理由で、素直に嫌うことが出来た。けれど、このミスセスは『他人が犠牲にならなくて済んだ』ことに喜んだ。

それが心からのものだということは、不愉快にもよくわかった。

もし存在の力が満たされなくとも、結果は変わらない。

そうなったならなつたで、このミスセスは、教室と生徒を直すに相当する力を、全て我が身から払うだけだっただろう。

自ら選び取った、選択として。

それがわかってしまうことが、堪らなく激情を掻き立てられる。

シヤナ自身もわからないぐちゃぐちゃした感情が渦を巻くなか、修復は行われた。



あるいはここで、シヤナが少しでも、冷静であつたのなら、立ち去る奏夜の気配に気付いていたのだろうが……。

これから続く怒涛のような運命の螺旋を考えれば、それは後悔しても、しなくても、同じことだった。

『なるほど、また新たな敵が現れたということか』

「はい」

『太牙は多忙だろうから仕方がないとして、健吾の方はどうだ？』

「それが、まだ掟破りのファンガイアに手を焼いてるみたいです」

『そうか、わかった。私もこちらの案件を片付け次第、直ぐ日本に戻ろう。嶋さんにもそう伝えてくれ』

「お願いします。俺も出来る限り、頑張ってみます」

『だが奏夜くん。そう言う割に、声にあまり力強さが無いぞ』

「……ちょっと、教え子に不幸がありました」

『何があったか詳しくは聞かない。が、もっと自信を持ちなさい。何度落ち込んでも、立ち直れるのがキミのいいところだ』

「……あはは、ありがとうございます」

『では、そろそろ切らせて貰うよ。私が帰るまで、恵と由利を頼む』

「任せて下さい。名護さん」

がちやり。

マスターに借りた電話の受話器を置き、再びテーブルにつく。

「名護くんはなんと言っていた？」

「案件が終わり次第、こちらに戻ると言っていました」

「やれやれ、本ツ当に名護くんは仕事の人ね」

授業終了後の『カフェ・マル・ダムール』。  
奏夜に相席しているのは嶋と、もう一人。

髪を一纏めにし、はきはきとした印象を受ける女性。

彼女は名護恵。旧姓麻生。

かつて、奏夜と共に戦ったファンガイアハンターであるが、今は一戦から退き、青空の会のバックアップ。つまりは技術者として活動中。

モデル体型と若々しい容姿からは想像も出来ないが、一児の母でもある。

「仕方があるまい。未だに名護くんは現役の『イクサ』資格者だからな」

「にしたって、もうちょっと帰って来てくれてもいいのに。ねー、由利」

恵は、自分が抱き抱えるまだ三、四歳くらいの小さな女の子。自分の娘、由利を見る。 自

「うっん、ゆりさみしくないよ。おとうさんはいつもおじいごとがんばってるんだもん」

「……本当にいい娘さんですね、由利ちゃんは」

「うふふ」。わかってるわね奏夜くん。でもそれは当然よ、私たちの自慢の娘だからね！」

可愛い娘に頬擦りしながら、恵は笑顔で答える。

……四年前の恵、そしてその夫である名護啓介を知る奏夜としては、どんな突然変異が起これば、こんな出来た娘が生まれるのかと思わなくもなかったが、もちろん口には出さない。

「さて。ではそろそろ始めようか」

嶋が軽く咳払いをし、テーブルに奏夜が持ってきた先代キングの資料を広げる。

「一通り目を通させて貰ったよ」

「本当に、こんな奴等がいるの？ 奏夜くん」

「はい。信じられないのも無理はありませんが、全て事実です」

「……ま、よくよく考えれば、ファンガイアも似たようなもんよね

……」

「私たち青空の会も、独自に調査を進めてきたが、これだけの情報は得られなかった。」

太牙も、この『紅世』の連中に関しては詳しく知らなかったようだ。しな。ただ」

「ただ？」

「真夜　キミのお母さんから、断片的な話を聞いたことがあると言っていた」

「そうですか……」

昨日キバーラが言っていた通り、新しい情報を手に入れるためには、母に会わなければならないようだ。

「わかりました。俺、明日にでも会ってきます」

「ああ、そちらの方はキミに任せよう。そして、もう一つ」

嶋が取り出したのは、一枚の紙切れ。

そこには、あのフレームヘイズの少女が描かれている（作画・キバツト画伯）。

「キミが送ってくれたこの絵を元に調査した結果　この少女は確かにキミの生徒『平井ゆかり』であることが判明した」

「……プロフィールやら戸籍も？」

「ああ、全て調べた」

奇妙だが、不思議にはもう慣れた。

つまりは『世間一般に、自分を平井ゆかりだと思わせている』だけでなく、『平井ゆかりの存在自体を自分に摩り替えている』というわけか。

「何だか、凄い連中に狙われたもんね。この街も。この女の子も、戦う相手が同じなだけで、味方とは限らないわけだし」

「しかし、こちらにも情報が出揃ってきた。これに奏夜くんの子バの力があれば、敵わない相手ではないと、私は見ている。あわよくば、名護くんが帰ってくる前に、片がつくかも知れんな」

「さて、それはどうですかね」

奏夜の発言に、二人の視線が彼に集まる。

「どういうこと？ キバの力でも敵わないっていうの？」

「そうじゃありません。ただ、仮に今回の首謀者を倒したとして、それで全て終わるとは限りません」

「どういうことかな？」

「四年前のファンガイアの一件。あの時期、ファンガイアは世界中に点在していた筈です。」

そんな中で、この御崎市には、イクサを保有する素晴らしき青空の会。チエツクメイトフォー。二人、26年前を含めれば三人のキバが集まりました。

そして、此度の『紅世』からの訪問者。

これらの騒動は果たして“偶然”なんでしょうか？」

奏夜の提示した見逃せない仮説に、嶋と恵は顔を強張らせる。

「ここまで大きな戦いが連なる　まるで『闘争の渦』のようだとは思いませんか？」

「まさか、いままでの事件は……起こるべくして起こったって言う

の？」

「仮説ですよ、あくまでもね。ただ俺は、これが何かの前触れのよ  
うな気がしてなりません」

「では奏夜くん、つまりキミは、こう言いたいのかね」

この戦いを皮切りに、新たな戦いが始まると。

奏夜が頷き、テーブルに重い沈黙が落ちる。  
果たして、何が起ころうとしているのか。  
先の見えない不安感が、恐怖と混乱を煽る。

「むー」

気の抜けるような声。  
三人が我に帰ると、恵の腕の中で、由利が不機嫌そうに頬を膨らま  
せていた。



「おかあさんも、嶋おじちゃんも、奏夜おにいちゃんも、むずかしいお話ばかりでつままないよう」

あまりに場違いで、しかし子供にとっては至極妥当な不満。三人は呆けたように目を見開いて、

「ぶっ」

可笑しさに吹き出した。

重々しさが一瞬で消し飛んでいく。

「ごめんね由利。退屈させちゃったね」

「ふむ。ではせっかくだから、ここにいるみんなで夕食にしようか。マスター、厨房を貸してくれ」

「りょーかい。僕も手伝うよ」

嶋とマスターが厨房に消え、奏夜は立て掛けてあったバイオリンを手取る。

「じゃあ由利ちゃんには、ご飯が出来るまで、俺のバイオリンを聞かせてあげよう」

「ほんと!？」

「ああ、本当だ。俺の演奏は10億ドルだが、由利ちゃんならいつでもタダだ」

「わーい!　　そうやおにいちゃんの『ばいおりん』大好き!」

瞳を爛々と輝かせる由利。

その様子を見て、奏夜と恵は互いに笑う。

奏夜の奏でるバイオリンの音色が、店内を満たしていく。

恵、由利。厨房にいる嶋とマスターも、それに耳を傾ける中、奏夜は決意を新たにす。

(そつだ。何度戦いがあるつと関係ない)

俺は何があろうとも、みんなの心の音楽を守るんだ。

その後、賑やかな夕食を終えた奏夜は、ヤボ用でキャッスルドランへ来ていた。

現在、奏夜がいるのは王の間。

赤いバラに包まれた玉座の周りには、様々な模様を型取ったステンドグラスがあった。

蝙蝠、蛇、獅子、揚羽蝶。

そして、

「……………」

奏夜はその一つ、貝殻を描いたステンドグラスを、虚ろな眼で見ている。

「お〜い、探したぜ奏夜」

そこへキバットが羽音を響かせながら飛んできてくる。

「ここで何やってんだ？ 教室の修復に使った分のライフエナジーは、キャッスルドランに貯めてある人工のエナジーで補給したし、もうそろそろ帰ろうぜ」

「ん」

空返事を返す奏夜。

怪訝そうに顔をしかめたキバットだが、奏夜の目線の先　貝殻の描かれたステンドグラスを見て、

「……………ああ、なるほどな」

と納得する。

「……………吹っ切れてないわけじゃないんだが、ここに来ると、どうもな」

「いいんじゃないの？　むしろアレは忘れちゃダメなことだろ」

やれやれと頭を振り、キバットが奏夜の肩に止まった。

「仕方ねーな。もう少し待っててやるよ」

「悪いな」

苦笑いをキバットに返し、奏夜は再びステンドグラスに視線を戻そ  
うとする。

バチッ。

「……奏夜」

「わかつてる」

目も合わせぬまま、互いの意思を疎通する二人。  
そして奏夜の足元で、紋章や奇怪な文字が展開する。

封絶だ。

「わざわざこんなことしなくても、キャッスルドランの擬態は誰に  
も認知されないのにな」

裏を返せば、あのフレイムヘイズの少女も気付けない絶対空間。もちろん、紅世の王も例外ではないが、何故ここがバレたかは問題ではない。

重要なのは、王の不在に、玉座を荒らす狼藉者が現れたということだ。

奏夜が背後に一瞥をくると、霞のような陽炎から、ゆらりと、ドレスを着た美女　　燐子が現れる。

「私のご主人様の為、お前の存在を、喰わせてもらおうよ……」

「ふん。生憎と俺は、今滅茶苦茶モチベーションが上がってるんだ。まして侵入者とあっちゃ、容赦はしないぜ。　　キバット！」

「おう、出番だな！　　キバッチャうぜえ！」

肩に止まるキバットが、奏夜の掌中へ収まる。

「ガブツ！」

キバットが手に噛み付き、奏夜の顔にはステンドグラスの紋章。

腰にはキバットベルトが巻かれる。

「変身！」

ベルトにキバットが装着され、駆け巡るアクティブフォー스가、夜の身体を『キバ』へと変える。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

「それが、『キバ』ね……。うふふ、素晴らしい力だわ。あなたが消えるだけで、どれだけの『歪み』が起こるのかしら？」

「残念だが、消える予定はないな。こっちはお前らとお前らのご主人様のせいで、物凄く迷惑してるんだ。人の『心の音楽』を奪った罪は重いぞ」

どちらからともなく、キバと燐子は同時に駆け出し、互いの拳が錯綜する。

キバは遮蔽物の無い中、存分に力を奮う。燐子はゆらりゆらりと攻撃を受け流しながら、隙を見つけてはキバに打撃を加えていた。

「ほらほら、どうしたの？」

「くそっ、のらりくらりしやがって!」

攻撃を全て受け流され、キバは仮面の下で舌打ちする。  
冷静さを欠く奏夜をよそに、美女は何処からともなく、レイピア型の刀剣を出現させた。

「ハッ!」

軌道の読めない攪乱から、燐子は刀剣をキバに向けて刺突する。

「がっ!」

胸部の鎧に火花が散り、キバは木造の床を転がる。

「まったく、何やってんだ!」

「悪い、少し油断してた。ふん、剣には剣か!」

キバットの叱責に、奏夜はサイドケースから、青色のフェッスルを取り出す。



『ガール・セイバー!』

キバットが吹き鳴らす音が、キャッスルドラン内に反響した。

「かくめ〜い」

「何!? クソッ、三もジョーカーも序盤で使い切っ……………」

大富豪に興じる三人の耳に、主からの呼び出しが掛かる。

「あ、久々だね」

「この音、次狼」

「……………つたく、城内にいるなら口で呼べばいいものを」

次狼が手札を置いて立ち上がる。

「ラモン、力。手札見るなよ」

そう念押しして、次狼は床を爪で引っ掻く。

「ハアアア……！」

バチバチと青白い火花が起こり、次狼の背後に、彼の正体　ウル  
フェン族最強の戦士、ガルルの姿が浮かび上がる。

「アオオオオオン！」

二人が見守る中、次狼は禍々しい雰囲気彫像に変わり、ドランプ  
リズンから飛び出していく。

「さすがに城内だと早いな」

キバが彫像を掴み取ると、彫像は瞬く間に魔獣剣『ガルルセイバー』  
へと変化。

更に左腕と胸部に鎖、『カテナ』が巻き付く。  
左腕は狼を模した、目も覚めるようなブルーの装甲『ガルルシールド』に覆われる。

胸部もまた同じく、フォームチェンジに耐えられ得る形状、『ウルフェンラング』へと強化された。

キバットの瞳も同様に青く染まり、最後にガルルの幻影が仮面に移り込み、キバ・ペルソナもブルーに変わる。

『キバ・ガルルフォーム』。

運動能力に優れた魔獣形態だ。

「か、変わった……？」

「ヴウ……ヴァアアアア！」

天蓋を貫く魔狼の咆哮。

『おい、奏夜。契約している身で言えたことじゃないが、呼ぶ時はもう少し空気を読め。俺も暇じゃない』

「はっ、年がら年中娯楽かコーヒー飲むかのお前がそれを言っなよ。少しは運動しねーと、メタボ犬になる、ぜっ！」

ガルルセイバーから聞こえる次狼の声と、軽口を叩き合い、キバは駆け出す。強化された加速力は、スタンディングスタートからでも驚異的な数値を誇る。

「ヴルアッ！」

タテガミの刀身が、一瞬で燐子のレイピアを叩き折り、持ち主を切り裂く。

「ぐあっ……！」

怯んだその隙にも、キバは攻撃の手を全く緩めない。

獣の如きワイルドな剣術。キバが動く度に、次々と傷が作られている。

燐子は今でこそ避けきれているが、追い詰められるのも時間の問題。

しかし突如、キバの動きが止まった。

「？」

いや、キバが止まったのではない。  
いつの間にやら、ガルルセイバーに金の鎖が巻き付き、攻撃の嵐を封じているのだ。

その金の鎖の出所は、燐子の両手。いくら力を込めるも、鎖は一向に切れない。

『何かの宝具だな』

「うふふ、ご名答」

そのまま鎖を引っ張る燐子。

有利な攻撃範囲にまで誘導するつもりか。だが手放せば、相手に武器が渡るし、かといって持ち主を斬ろうにも、その間を迎撃される。

「無駄よ。ご主人様の『バブルルート』の前では、その剣もただのなまくらにしかならないわ」

「…………ふん。そいつは」

『どっかなっ。』

奏夜と次狼がそう言うと、キバはあらかぎりの力で、ガルルセイバーを自分の前で構える。  
燐子がそれを見た時にはもう遅かった。

アオオオオン！

剣の鏢　狼の頭部の装飾から発せられる、青い円環状の衝撃波が燐子を襲ったのだ。

「ぐ、ぎゃっ！」

全くノーマークだった攻撃に、燐子是对応仕切れぬまま、部屋の壁際に打ち付けられる。  
ヒビが壁に入り、燐子の手からバブルルーツが滑り落ち、床で乾いた音を立てた。

「今だ！　キバ！」

叫ぶキバットに、呪縛から解放されたガルルセイバーの刀身を噛ませる。

『ガルル・バイト！』

キバットの魔皇力がガルルセイバーに流れ込み、刀身の切れ味が最大限に強化される。

キバの力は屋内でも変わらない。

部屋全体を伝う赤い霧が、この空間を現実から切り離し、夜を呼び寄せる。

『ダークネスムーンブレイク』と同じ現象だが、違うのは三日月ではなく、ガルルフォームの力をフルパワーまで引き上げる満月が浮かんでいることだ。

キバの仮面が一瞬輝き、口元のクラッシュャーが割れ、キバはガルルセイバーの柄をくわえる。

身体全体を使って、円を描くような構えを取り、キバは未だに動けぬ燐子を睨んだ。

「ヴルアア　！」

そのままフルムーンを背景に飛び上がり、キバは身体を軸に回転しながら、相手を斬り付ける必殺技　『ガルルハウリングスラッシュ』を燐子に叩き込んだ。

「うあああ　！」

青きオーラを乗せた刃は、華奢な女性の身体を真つ二つに切り裂き、一瞬だけガルルの紋章が浮かぶ。その文様の中 正確には、女性の残骸から、何かが這い出して来た。

「なんだありゃ？」

「ぬいぐるみみたいだな」

『恐らくアレが本体だ』

何処にでもありそうな、女の子をデフォルメしたぬいぐるみは、奇妙な火花を発しながらボロボロの状態で、床を這っている。

『どつする？ このままにしておいてもいずれ消えるが』

「こんな人形に、兄さんの玉座を汚されるのは不愉快だな」

ガルルセイバーを再び構え、ぬいぐるみに突きつける。

「う、ぐ……」



「人の大切な音楽を奪った罪　それを抱きながら逝け。お前みたいに、センスの欠片もない燐子を生み出すご主人様とやらも、後から速達で送りつけてやる」

「うふふ、王族とは思えぬ無骨な物言いだね」

奇妙に韻を浮かせた声。

キバが声のした方を見ると、周りを囲むステンドグラスの正面に、長身の男が敢然と浮遊していた。純白のスーツに、悠然とした笑みは、何処か紳士的な印象を与えるが、ゆらゆらと漂う真っ白な長衣が、得体の知れない不気味さを漂わせている。

「初めまして。『キバ』…… KING・OF・VAMPIREの称号を受け継ぐ者。

深い夜の帳　キミとの出会いに相応しい」

その男と対峙し、キバは直感する。

「お前が、『紅世の王』だな」

「そう、“フリアグネ”、それが私の名だ」

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD！

「君は私の知るキバではないね」

「母さん、何を知ってるんだ？」

「その王の狙いは、『都喰らい』」

「お前、何を戸惑ってる」

「こんなの、戦えば全部吹き飛ばす」

【第三話・パッション／揺らぐ炎】

WAKE・UP！

紅蓮の鎖を解き放て！

## 第二話・ビート/炎髪灼眼の討ち手・Bパート（後書き）

キバを見直してふと思ったこと。

次狼さんに使ったダークキバの魔術は軽くチートだ（笑）

てなわけで、今回は奏夜が魔術を使っています。

ファンガイアの魔術ってイマイチよくわかりませんが、取り敢えずは『自在法』と似たようなものという見識です。

何故奏夜がそれを使えるかは……四年間で修行したってことで……；  
（渡も最終回で使いましたからね）

では、また次回で（＾Ｏ＾）

予告（みたいなもの）（前書き）

「こんなのをいつかやれたらいいな」と思うストーリーの予告。  
本当にやるかどうかは未定（苦笑）

元ネタは、本編の感想を下さった方の御意見から。

予告（みたいなもの）

本能か

それとも必然か

「あなたはもう一度戦わなければならない。過去を、あるべき形にするために」

「この戦いが、お前の音楽のフィナーレを飾るだろう」

過去の思いを、未来へと繋いだ男。

「これは“大戦”。フレイムヘイズと“紅世の徒”との、人智想像を超えた闘争であります」

彼が送った最後の日々。

その狭間に存在した物語。

「あなたは十六世紀初頭に飛ばされる」

「種族と身分を超えた恋、か。未来も今も、案外変わらないわね」

「キバの力を使えるのは一度きりだ」

「貴様の思考は理解出来ぬ」

「……何処と無く、あなたに言われるのは不愉快でありますな」

「至極同意」

今明かされる、仮面ライダーキバ/BLAZING・BLOODの  
前日譚。

「私はマティルダ。  
マティルダ・サントメール。  
さ、あなたも名乗ってもらおうよ」

「紅音也、えらい人だ！」

「変身！」

『レ・ディ・ー』

「ガブリー！」

「お前の心の音楽に、俺の音楽をもって応えよう  
えのない戦友よとも」

我が、かけが

歴史から消されたキバの系譜が今、紐解かれる







### 第三話・パッションノ揺らぐ炎・Aパート（前書き）

「青春とは、古代中国の五行思想における『春』に『青』が当てられたことに由来し、またその『青』は、未熟さや青臭さを意味する。ちなみに、青春につきものの『友情』もまた、友の心が青臭いと書くんだ。」

ん？ これは違うヤツのセリフだったか」

キバットバット三世

### 第三話・パッションノ揺らぐ炎・Aパート

キヤッスルドラン王の間。

キバはガルルセイバーを構え、フリアグネは何処か余裕な佇まいを崩さず、膠着状態が続いている。

『フリアグネ』……、聞いたことがある真名だな。フレームヘイズ殺しの狩人』

「おやおや、随分と博識な剣だね。

だが、殺しの方で、そう呼ばれるのは好きじゃないな。本来は、この世に散る“紅世の徒”の宝を集める、それゆえの“狩人”の真名なのだけけれど」

「次狼……やっぱりてめえら、今回のこと全部知ってやがったな…

…」

『さて、何のことだ？』

白々しい態度にキバは仮面の下で青筋を立て、ガルルセイバーを床へ放り投げた。

ガルルフォームが解除され、キバは基本形態のキバフォームに戻り、放られたガルルセイバーも、床につくより早く、次狼の姿に戻った。

その奇異な様子にフリアグネが感嘆する中、騒ぎを聞き付けたのか、ラモンと力が現れ、キバの隣に並ぶ。

「ちょっと、お兄ちゃんも次狼も、屋内で騒ぎ過ぎ。共同生活ってこと忘れないでよね」

「騒音は、公害」

「お前ら何で最近、目に見えて世俗的なんだよ」

仮にもモンスターだろう、とキバが軽く呆れた。

「うふふ、成る程。実に面白い従者を飼っているじゃないか。

武器化能力を持ち、更には根絶された筈の希少種、『ウルフェン』『マーマン』『フランケン』の生き残りとはね。しかし、ファンガイアに滅ぼされた筈のモンスターが、ファンガイアの王たるキバに仕えるとは……絶滅を免れるための苦肉の策というところかな」

「フン、勘違いをするな。俺達がキバに仕えているのは、こいつが俺達を率いるに足る器を持っていること。そして何より、ある男との約束のためだ。貴様の使う、信念もプライドもない燐子と違う」

「随分と失礼なことを言うね、狼くん。そうは思わないかい？ マリアンヌ」

いつの間にか、キバが打ち負かし、傷だらけにした筈の人形が、フリアグネの手にあった。

「申し、訳あ、り、ません、ご主人、様」

「ああ、謝らないでくれ、マリアンヌ。

このドラゴンの結界に耐えられる燐子が君しかいなかったとはいえ、無茶をさせてしまった」

フリアグネはさっきまでのクールさとは打って変わった口調のまま、マリアンヌと呼ばれた燐子に息を吹き掛ける。

白く輝いた炎がマリアンヌを包むと、ボロボロで綿まで見えていた姿は、あっという間に再生された。

これが、存在の力による再生か。

「さあこれで元通り！　ごめんよ、日に何度も戦いに出向かせて」

満面の笑顔と猫なで声で、フリアグネは修復を終えた人形に頬擦りする。

「……………うわー」

「げっ」

「……………いつ、本当に“王”？」

「ドン、引き」

上からキバ、キバット、ラモン、力。

散々な言い回しをする中、次狼だけは冷静に言い放つ。

「惑わされるな。こいつはあらゆるフレイムヘイズを退け、葬ってきた強力な“王”だ」

「ふふ、随分と警戒されてしまったね。もう少し友好的な歓迎はないものかな」

「人の城に、勝手に上がりこむようなヤツに、振る舞う親切心なんざ、この世の中に存在するかよ」

「ふむ。しかし自分の城と言っけれど、それは正しいのかな？」

フリアグネは先ほどまでの甘い声を引っ込めて言う。

首を傾げるキバを、フリアグネは指差した。

「ここ数日、君は私の隣子を倒していたようだけど……、その状況と本人を見て確信したよ。君は私の知るキバではないね」

予想外の受け答えに、キバは身を強ばらせた。

「ファンガイアの王が、その証として纏っていた鎧　確か『闇のキバ』と呼ばれていたね。

私も一度だけ、御目にかかったことがあるのだけれど　あの強大な力に比べれば、君から感じる力は随分と懦弱だ。　つまり君が纏うキバは、噂に聞く『黄金のキバ』という紛い物。そして君は、真のキングから王座を預かる存在。違うかな？」

「……紛い物かどうか、お前の身で試してみるか？」

キバは剣呑な眼差しを向ける。

その様子に、フリアグネは大袈裟に溜め息をつく。

「曲がりなりにも王族と繋がりを持つ者が、随分と不躰な態度だね。……さしもの私でも、ここで君と戦う気はないさ。

四対二な上、この竜の中は君の庭。勝てたとしても、無事で済まないことは確かだしね。

そんな真似をして、手負いの状態を、あの炎髪のおちびちゃんに狙われてもつまらない」

私は不利な戦いも、利益皆無の戦いもしない主義だね。そう微笑むフリアグネの態度に、キバットが唸る。



「そうか、お前さんがそのぬいぐるみをここに寄越したのは、俺達の力を見るためか。慎重なこつたな」

「いやいや、そこまで意味がないとは予想してはいたさ。

あわよくば、この城に貯蔵されている存在の力を頂ければとも思っていたけれど、それはついでだしね。

それに 君達には、私と相対する力があっても、私を見つけ出す力は無いだろう？

君達の専門は、所詮ファンガイアであって、我々“紅世”の存在じゃない」

痛い所をつかれ、キバは押し黙る。

その姿をフリアグネは満足げに見据えた。

「だから、ここにお邪魔したのは本人に念のためさ。

私の、いや私達の悲願に、君達が介入してきては厄介だ」

「悲願？」

心底馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに、キバはせせら笑う。

「ほざきやがね。誰かの心の音楽を喰ってまで果たすべき願いなんぞ、この世にありはしない」

「どうやら君は、随分と人間に御執心だね。  
君達ファンガイアも、私達“紅世の徒”と同じく、人間を糧とする  
存在だろっ？」

「……っ、一緒にするんじゃない！」

込み上げた怒りのままに、浮遊するフリアグネ目掛けての飛び蹴り  
を繰り返す。

しかし、そのキックが当たるよりも早く、フリアグネの身体は長衣  
に包まれ、霞のように消え失せた。

床に着地するキバの耳に、エコーのかかった声が届く。

「うふふ、せっかちさんだね。

逸らずとも、君との相手はいずれしてあげよう。

もっとも、それまでに君が存在していられたらの話だけだね……」

それを最後に、フリアグネの気配はキャッスルドランから消え、周  
囲を覆う封絶もいつの間やら見えなくなっていた。

奏夜は無言でキバの変身を解除したが、やがて深く肩を落とした。

「……はあ、俺もまだまだ甘いな」

一瞬、怒りにかまけてしまった自分を反省し、後ろに控えるアームズモンスター三人へ視線を移す。

「次狼、ラモン、カ、あまり意味はないかも知れないが、キャッツルドランの位置を動かしておけ。

以後はキャッツルドランに必ず一人は待機していること。

残り二人は街を散策。隣子達を始末しつつ、情報を拾ってくれ」

「それは、キングとしての命令か？」

「キングの代行者としての、だ」

奏夜の言葉に、三人はしばらく黙したが、やがて恭しく膝を折った。

『キングの仰せのままに』

その様子に頷き、奏夜は呟く。

「さて、と。面倒くさくなってきやがったな」

「……や、奏夜！ 起きなさい！」

うるさいなあ……俺はまだ寝たいんだよ……。

……ってあれ？

前にも似たようなことなかったか？

うつすらと奏夜が目を開けると、そこには見知った女の子。

「……静香？　なにしてるんだよ。今日は平日だから、大学も」

あるだろ、と続けようとして、黒光りするフライパンが、奏夜の頭に振り下ろされる。

デジャヴを感じながらも、奏夜の意識は覚醒した。

「痛つてえ！」

「まだ目が覚めない？　私が大学に行く日は、奏夜も出勤でしょ！」

少女　野村静香は頬を膨らませて、奏夜を睨む。

「い、いや、俺は今日……」

「言い訳は後！　早く着替えて！　そこに朝御飯も作ってあるから、私が出た後にちゃんと食べなさい、わかったわね！」

言い捨てて、静香はばたばたと寝室から出ていった。

朝から呆然とする奏夜に、近くを飛ぶキバットがニヤニヤした笑みを向けてくる。

「何年経つても、お前は静香に頭が上がらねえなあ」

「……お前の差し金かよ、キバット」

「最近お前、俺様が起こすのにも慣れてきちまったみたいだからな。ここらで一発、刺激を与えとかねーと」

「……ああ、十分刺激になりましたよ」

野村静香は、奏夜の家バイオリンを習いに来ている近所の大学生だ。

そのつながりで四年前は、生活能力が著しく欠如していた奏夜の面倒をよく見てくれていた（今の奏夜に生活能力があるかと問われれば、微妙な話だが）。

現在でも来る頻度こそ減ったものの、未だに縁の切れぬ仲であり、四年前の名残からか、奏夜もいまいち静香には大きな態度に出れな

い傾向があるのだ。

「知る人ぞ知る、奏夜の数少ない弱点である」

「勝手なモノローグを入れんじゃねえ」

きつちりとキバットに突っ込みを入れ、奏夜は着替え始める。

「キバット、お前は念のため、学校に張り込んでいてくれ。何かあれば、フェッスルで次狼達も呼べるしな」

「わかった。昨日言った、平井ゆかりと坂井悠二って二人を見張るんだな。」

で、お前はどうすんだよ？」

「静香には悪いけど、今日の授業は休むことになるな。もう学校にも伝えてある」

「……ああ、なるほど」

即座にその意味を察し、キバットは言う。

「真夜に会いにいくんだな」

「し」名答」

御崎市郊外。

住宅地から離れると、繁雑に並び立つ森林や、川のせせらぎも聞こえてくる。

「もっと、住みやすい場所もあるだろうにな」

ここまでの足であるオートバイ『マシンキバー』を近くに止め、奏夜が向かった先は、森林地帯の奥深くにある洞穴。傍目では見逃してしまいそうな規模の場所だが、人を寄せ付けぬ異様な空気が漂う。

奏夜がそこへ一歩足を踏み入れると、

「いらっしやい、奏夜。来る頃だと思っていたわ」

か細い女性の声が洞穴を反響しながら聞こえてきた。

奏夜が洞穴の奥を見つめると、黒いローブに身を包んだ女性。

右目には痛々しい眼帯つけ、何処と無く儂げな雰囲気漂わせているが、その姿はむしろ神秘的でさえある。

ファンガイアの元クイーン、真夜。

奏夜の母親だ。

「……久しぶり、母さん」

奏夜は真夜の隣に腰かける。

「少し背が伸びたかしら？」

「そうかな、自分じゃよくわからないけど」

「ええ、それに雰囲気も。段々音也に似てきたわ」

「……それって、誉め言葉なのかどうか、微妙だと思っ」

「ふふ、そうね」

父、紅音也の顔を思い浮かべた二人は柔らかい笑みを浮かべる。

「それで、母さん。本題なんだけどさ」

「わかってるわ。今御崎市に来ている“紅世の王”についてでしょっ」



「え？　母さん、何で知って……」

真夜は先代キングにより、ファンガイアの力を抜き取られ、人間に限り無く近い存在となっている。

紅世の徒の力を感じとれはしないはずだ。

しかし、その疑問は直ぐに氷解した。

「俺様が真夜に教えたのさ」

二人の前に、一匹のコウモリが降り立った。

キバットと瓜二つだが、こちらは身体が赤く、目付きも若干鋭い。

キバットの父親　キバットバット二世だ。

「久しいな、奏夜。我が息子と娘は息災か？」

「ああ、キバットとキバーラなら元気だぞ。

と言うか二世、兄さんに着いてったのかと思ってたけど」

「あいつにはサガークがついている。何より、あいつからの頼みで日本に残っているんだ。真夜を守ってくれとな」

「ああ、そういうこと」

二世の事情に納得する一方で、何故真夜がフリアグネの存在を認知していたのかもわかった。

キバット以上に、ライフエナジーや魔皇力に通ずる二世ならば、確かにフリアグネや燐子のことも看破できるだろう。

「知ってるなら話は早い。

母さん、何を知ってるんだ？」

「……キバットを通じての情報だから、私の推測も入るけれど、それでもいいかしら？」

「構わない。今は少しでも多く、状況を把握したいんだ」

奏夜の返答に、真夜は一呼吸置き、口を開いた。

「その王の狙いは、『都喰らい』」

「当時……と言っても、500年近く前の話なのだけれどね。神聖ローマ帝国が栄えていた頃の話よ」

「……のっけから途方もない話なんだけど」

まあ、ファンガイアは元来長命であるし、ストラディバリの弟子だったこともある母だから、それくらいのスケールは当然と言えば当然だが。

「棺の織り手」と呼ばれる“紅世の王”が、喰らったトーチにある仕掛けをして、とんでもない世界の歪みを生んだの」

「トーチに仕掛け？」

「トーチが、喰われた人間の存在を代替し、その人間が消えた分の歪みを和らげる存在だということは知っているな」

奏夜が頷き、二世が続ける。

「棺の織り手”は“鍵の糸”なる仕掛けをトーチに編み込んでいた。簡単に言えば、“棺の織り手”の指示で、トーチを即座に分解し、消失させる自在法だな。そして、奴は都市の人口の一割を喰らったと同時に、仕掛けを発動させた」

結果、偽装されていた繋がりを突然失ったその街には、人はおろか物質さえも飲み込む膨大な歪みが発生した。

それに連鎖し、分解された都市に存在する全ての人や物質からは、莫大な存在の力が生成される。

「それが『都喰らい』か……。  
その棺の織り手ってヤツは、討滅されたんだよな？」

「ええ。あの頃私は欧州にいたから、成り行きでその戦いに巻き込まれてね。だから大体の事情は知ってるわ。　　今、御崎市にフレイムヘイズがいるでしょう？」

「うん、“炎髪灼眼の討ち手” だろ」

「その一世代前の“炎髪灼眼の討ち手” が、“棺の織り手” を討滅したのよ。

まあ、正確には“天壤の劫火” が討滅したと言えなくもないけれど」

「母さんは、“炎髪灼眼の討ち手” と知り合いなのか」

「現代の“炎髪灼眼の討ち手” には会ったことはないわ。“天壤の劫火” との面識はあるけどね。

そもそもフレイムヘイズの知り合いは少ないのよ。あとは“万条の仕手” くらい」

昔を懐かしむように、目を伏せる真夜。

自分の知らない母の旅路を知るのは新鮮だったが、話の主旨を思いだした奏夜は、二世に問いかける。

「えつとつまり……、“棺の織り手”が仕掛けた“鍵の糸”って自在法と同じものが、この街のトーチには編み込まれているってわけか」

「うむ。俺様の見立てでの話だな」

真夜と二世の予測に、奏夜は戦慄する。

都喰らい。

まだ確証があるわけではないが、もしそれが真実なら

絶対に、止めなければ。

奏夜は両拳を固く握り締める。

「……わかった。ありがとう母さん、二世。助かったよ」

「気にしないで。私が役に立てることなんて、これくらいしかないんだもの」

「また何かわかれば、俺様が伝えに行こう」

奏夜は二人の厚意に感謝し、腰を上げた。

「じゃあ俺、そろそろ行くよ」

「ふふ、先生は大変ね。ちゃんと頑張りなさい」

「うん。……あ、そつだ母さん。もう一つだけ」

洞穴から出かけた奏夜は、思い出したように言う。

「封絶の中でも動けるトーチって、いる？」

「封絶の中でも動けるトーチ……いえ、基本的にトーチも封絶の効果からは逃れられないはずよ。」

「……そんなトーチがいたの？」

「あー、うん」

自分の生徒、坂井悠二とは言わない。

真夜は記憶を掘り起こすように、唇に手を当てる。

「確かに、“戒禁”の力次第で動けるトーチはある。でもそれなら確実にミステスね……あつ！」

何か思い付いたらしく、真夜は奏夜はに聞く。

「奏夜。そのトーチが作られたのはいつ？」

「えっと、一昨日の夕方かな」

奏夜の答えを聞いた真夜と二世は、互いに顔を見合わせる。

「二世、あなたから聞いた“壊刃”が『約束の二人』の片割れを仕留めたのも……」

「ああ。転移したとすれば、時期は一致するな」

話が纏まり、真夜は完全に置いてきぼりだった奏夜に向き直る。

「奏夜。都喰らいのこともそうだけど、そのトーチ、いえ、ミスデスを渡してはダメよ」

「ミスデス？」

ミスデス      紅世の宝具をその身に内包したトーチの総称。

ならば、悠二が封絶内で動けるのも、それが原因なのか。

「その通り。しかも数多ある宝具の中でもまた異質  
” 秘室中の秘室” “ 紅世の徒

真夜はいつものフラットな口調で、しかし些かの緊張を混ぜて、その名を紡ぐ。

「『零時迷子』」

「都喰らいねえ……随分と大事になってきたな」

「ああ。そっちはどうだった？ キバット」

「なんも。襲撃は無かったし、あの二人も、お前に報告するような行動は取らなかったぜ」

「そうか。向こうもフリアグネについて、わかってないことも多いみたいだな」

「だな。ところで奏夜、俺様はいつまでここにいればいいんだ？」

奏夜とキバットが小声で会話する場所は、市内某所のスーパー。



真夜の隠れ家から往復する頃には（時間帯的に帰り道が混むのだ）、もう空はうつすら赤みがかかっていた。キバットと合流したあと、奏夜はそのまま夕食の買い出しに来ていた。

ちなみにキバットは、奏夜の持参した買い物袋に、様々な食材と一緒に放り込まれている。

「無論、買い物が終わるまで、更に言えば家に帰るまで」

「じゃあせめてこの食品を、スーパー備え付けのカゴに移してくれよ。ぎゅつぎゅつづめだ」

「やだよ面倒くさい。お前は黙ってぬいぐるみのふりしてる。

成人男性がぬいぐるみを買う物に持ってきけるといふ設定の時点で、かなり恥ずかしいんだぞ」

身も蓋も無い、しかし間違ってもいない奏夜の反論に、キバットは閉口した。

買い物を進め、レジ近くのパン製品のコーナーにさしかかった。

「おっ」

「あ」

そこにいた人物　坂井悠二と、必然的に目が合う。  
傍らには、何故かパンの袋を取り、それを真剣な顔で吟味する平井  
ゆかりの姿もあった。

「よう坂井。最近は学校外でよく会うな」

「先生。今日はお休みじゃなかったんですか？」

「あーいや、別に病気ってわけじゃねえからな。一身上の都合って  
ヤツだよ。」

お前らこそ、二人してどうした。デートって雰囲気でもないが」

真夜との会話から、フレイムヘイズたる少女が何故、悠二を連  
れ回しているのかはわかっていたが、それでも奏夜は、からかいを  
混ぜて問いただす。

「ただ平井さんの買い物に付き合わされてるだけですよ、さして深  
い意味は無いです」

デートという単語に関して、悠二は照れるでもなく、苦笑いを持っ  
て返す。

（確かに、あの小娘の性格からして、カモフラージュでもデートと  
かはしないだろうな）

それよりもまず、多分こいつは『デート』という単語すら知らない気がする、と奏夜はさりげに失礼な分析をする。まあそれも、あながち間違っではないのだが。

「んで、その平井さんはなんでパンコーナーから微動だにしないんだ。デコキヤラシールのサーチでもしてるのか？」

「まだ生産されてるんですか？ あのオマケシール。平井さんなら、メロンパンを選んでるんですけど」

「メロンパン？」

また随分と世俗的な……。

キバとも渡り合う力を奮うあの姿と、網目のついた甘い菓子パンがまるで結び付かない。

長時間の吟味に焦れたのか、坂井が袋の一つを指差した。

「これは？ 本物のメロン果汁入りとか書いてるぞ」

「駄目よ」

「なんでさ。ちょっと高めだし、美味いかもしれないだろ」

「全然わかってないわね……」

その時、少女の瞳に鋭い光が走った……気がした。

「メロンパンは網目の焼型が付いてるからメロンなの！　メロン味なんてナンセンスである以上に邪道だわ！」

威風堂々と、しかしメロンパンかなりのこだわりが伺い知れる宣言だった。

さすがの奏夜も、坂井と一緒に

「……はぁ」と同意するしかなかった。

どっちら今しばらく、この少女のキャラはつかめなさそうである。

買い物を終えて、向かう方向が同じこともあってか、三人は人々でこった返す道を並んで歩いていた。

「俺がない間、何かあったか？」

「……えっと」

悠二は少女をちらりと見てから、

「いえ何も。“いつも通り”でした」

含みを持った口調から、奏夜は悠二の心情を的確に読み取る。

(また教師と何かやらかしたな)

学校側との衝突は止む気配を見せるどころか、激化の一途を辿っているらしい。

そしてその渦中にいる少女は、悠二の隣で買った菓子を食べている。

「やれやれ、今日も大変だったみたいだな。お前達」

「あ、でも、今日はそんなに悪い話でも無かったんですよ」

「? どういう意味だ?」

悠二の話によると、それは四限目の体育。

本来の基準を外れた無茶苦茶な授業を行う教師を、彼女が文字通り

蹴り飛ばしたのだという。  
クラスでの彼女の立場も、多少なり良い方向に改善されたそうだ。

「ほう、そりゃ良いことしたな。平井」

「別に。私の邪魔になったから片付けた。ただそれだけよ」

彼女はようやく反応を見せたが、言葉には剣呑さがある。

(……ふむ)

心中で奏夜は唸る。

(この態度が原因で、いつか余計な敵を作りそうだよなあ、こいつ)

人間ならまだいいが、それが味方のフレイムヘイズだったりするなら、それは問題だろう。

破格教師だなんだと言われようが、奏夜は間違いなく教育者なのである。

「……………」

奏夜は無言のまま、買い物袋から（キバットは食品の上で寝息を立てていた）、衝動買いし、後で由利にでもあげようかと思っていた  
“それ”を取り出し、

「平井」

と声をかける。

特に警戒もせず、少女は奏夜に視線を向けた。

パンツッ！

「ひゃあっ！」

警戒心ゼロの状態での暴音には、さすがのフレームヘイズも驚いたらしく、肩を震わせて飛び上がる。  
髪に絡まったカラフルな紐を払うと、目の前にはにやにや笑いながら、クラッカーを片手に構える奏夜の姿が。

「な、何すんのよ！」

「かはは。お前も吃驚するんだな」

まさに滑稽と言わんばかりに、奏夜は抱腹絶倒している。

悠二は悠二で、奏夜の悪戯に（正確には、奏夜に振りかかるであろう彼女の制裁に）冷や汗を流していた。

「ま、悪戯の方はともかくとして、人が褒めてるんだ。そこでつっけんどんになると、いらん敵を作るぜ。人は厚意を無下にされると、腹を立てるもんだからな」

「そんなこと、私の知ったことじゃない。敵だったら、片付けるだけよ」

「敵だったらな。でもお前のやり方だと、味方になってくれる人まで敵になる」

「……味方なんて、そんなの」

「いらないうってか？　ま、お前の性格ならそうだろうけどな」

だがそれは、性格のせいで処理してはいけない話だ。

「けど平井、人間は一人じゃ生きていけないんだぜ？」

自分がかつて、それを身を持って知った。

この世の全てを拒絶して、誰かに関わることに臆病だった自分。

もし自分があのままだとして、名護、恵、健吾、太牙、今まで



出会ってきた全ての人に出会えなかったらと思うと……。

本当にぞつとする。

昔の自分を彼女に重ね合わせたわけではないが、それでも奏夜は放つて置けなかった。

存在が置き換えられていても、彼女が自分の教え子であることは事実なのである。

「一人でいられる強さも確かに大切だ。だが、それじゃあどうしたって限界がある。人間は本来、集団で生きるもの。この真理からは、何人たりとも逃れることは出来ない。それが例え」

人間で無かったとしても。

意味ありげに表情を消す奏夜。

少女は眼に警戒の色を宿らせ、悠二は顔を強張らせる。

「……なーんて、な」

しかし二人の緊張状態は、冗談めかしく舌を出す奏夜の態度により

砕かれた。

「偉そうなこと言っちゃったけど、要するに、ロンリーウルフ姿勢を貫いてても、あまり良いことねーって意味だよ」

奏夜は気さくな笑みを浮かべ、彼女の髪をやや滅茶苦茶気味に撫でる。

「わ、わ」

突然のことに慌て、反射的にその手を振り払おうとするが、それよりも早く、奏夜は手を引っ込めた。

「お前はもつと、誰かと触れ合うべきだよ。そうすれば、お前の『心の音楽』は更に輝く」

「心の、音楽？」

「そう。人はみんな、心の音楽を奏でている。

これらは人の数だけあり、一つ一つ違う旋律を生み出している。そして、旋律は時として重なり、また新たな音楽を作り出していく。それが、人と触れ合うということだよ。ただ、お前の場合」

ここで奏夜は、悠二を指差した。

「変わるきっかけは、もう得てるかも知れないがな」

少女はよくわからなさうに、隣を歩く悠二を見る。

「だから先生、僕と平井さんはそんなに仲が良いわけじゃなくて…

…」

「否定する割には、ここのところ随分とべったりだった気がするけどなあ？」

「……今日池達にも似たようなこと言われましたけど、完全に誤解です」

「青春とは、誤解と和解の繰り返しだよ、少年」

軽く頭を抱える悠二に、意地の悪い冷やかかしをし、奏夜は大通りの別れ道で立ち止まる。

「んじゃ、平井も坂井も、また明日学校でな」

そう言い残し、奏夜は悠二達とは反対の道に消えていった。

「全く……なんなのよあいつ」

荒々しく撫でられたせいで滅茶苦茶になった髪を整えながら、シヤナは不機嫌そうにぼやく。

シヤナはフレイムヘイズの性質上、人間との付き合いは基本的に短い。

だがその短い付き合いの中でも、様々な人間を見てきた。

大抵が理解出来ない（理解する意味がない）行動ばかりする者ばかりだったが、その中でもあの男、紅奏夜は、

「あいつ、お前と同じくらい変」

自分の隣に立つ奇妙なミスセスと同じくらいに、あの男は異質だった。

「……僕はあそこまで自由に生きてるつもりはないんだけど」

悠二は取り敢えず自己弁護を試みる。

彼は決して奏夜が嫌いなのではない。

むしろあの快活な振舞いには好感を覚えていた。

だが『紅奏夜と似ている』と言われるのには、さすがに抵抗がある。彼に似ているというのは、もはや皮肉や悪口ではなく、『凄い』の領域なのだ。

あそこまで極まった人間に似ていると思うほど、悠二は自分を過大評価していない。

「奏夜先生は僕なんかとは違って、なんていうか、特別な人なんだよ」

「特別？」

「うん。他の人とは違う次元で生きてるっていうのかな。物事の考え方が、根本的に違うんだ」

「……よくわからない」

「うーん、悪い人じゃ絶対にないんだけど……。でも奏夜先生は、あの性格を自覚してるみたいだから、シヤナの言う通り、変わり者ってことなんだと思うよ」

「じゃあやっぱり、お前と同じじゃない」

「結局そこに立ち戻るんだ……」

この数分間の弁論はいったい何だったのか。

悠二が苦笑したところで、シャナはこの話題を打ち切る。そこでふと、二人の会話に入るでもなく、ひたすら沈黙する“紅世の魔神”に気が付く。

「…………アラストール？」

「……………」

「人間はみんなそれぞれ音楽を奏でているんだ。知らず知らずの内に、心の中でな。」

堅物魔神。俺はお前が気に食わない、が、お前とお前の契約者が互いに奏でる音楽は気に入った。俺様がお前達に手を貸す理由は、それで十分だ」

過去の、しかし鮮明に刻まれた思い出。

その中の一欠片を、アラストールは回顧していた。

「ねえアラストール、どうかしたの？」

少し心配そうに話しかける自らの契約者の声で、アラストールは記憶の海から引き戻された。

「……いや、気にするな。取るに足らんことだ」

直ぐ様思考を振り払い、彼はそう答えた。

「心の音楽、ね。お前も言うようになったじゃねーか」

人だかりの少ない道に入ったところで、ようやく買い物袋から解放されたキバットが、奏夜の頭に止まりながら言う。

「こういつ時に、お前が導かれる側じゃなくて、導く側になったってことを実感するぜ」

「おいおい、今日はどうしたんだキバット。おだてても何も出ないぜ」

軽口を叩き合いながら、二人は帰路を歩く。

そして二人は、更に人の少ない裏道へ。

「ん？」

奏夜が立ち止まる。

彼の目線の先には、暗がりには道を塞ぐ人影があった。

「……キバを、受け継ぐ、者、だな」

淡々と、恐らくは男性と思わしき言葉を生み出す口元。  
それ以外の表情は、黒いフードに隠れていた。

「誰だ、お前」

その質問には答えず、黒フードの男は、奏夜との距離を一気に縮め、鋭い拳を叩き込む。  
それを受け止め、奏夜は黒フードを睨む。

「いきなり何しやがんだ」

「キバの、力、見せてみる」



黒フードは一旦奏夜から離れ、その身を一瞬震わせたかと思うと、龍を想起させる異形の姿　ドラゴンファンガイアへと変身した。

「やっぱりファンガイアか。まったく、最近は客が多いな！」

買い物袋を下に置き、奏夜は「キバット！」と叫ぶ。

「待ってましたあ！　キバツちやうぜー！」

奏夜が差し出す左手を勢いよく噛むキバット。

「ガブツ！」

奏夜の顔にスタンドグラスの模様が浮かび、そのままキバットは、奏夜の腰に巻かれたキバットベルトに止まる。

「変身！」

光の鎖が弾け飛び、奏夜の姿はキバへと変わる。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

キバの鎧の召喚を終え、キバはドラゴンファンガイアへと拳を突き出す。

「ハアッ！」

負けじとドラゴンファンガイアも、手に生えた鋭い爪で迎え撃つ。拳をフェイントに、キバは甲冑の重みが追加された右足の蹴りを、ドラゴンファンガイアに叩き込む。

「甘、いな」

「何ッ!？」

ドラゴンファンガイアは伸びた尻尾で、キバの足を絡めとり、動きを封じたのだ。

抜け出そうともがくキバに、ドラゴンファンガイアはすかさず口を開き、キバの右腕に噛みついた。

「ぐあっ!」

「な! 噛み付きは反則だぞ!」

この場合、キバットが言えた義理ではないのだが、そこに突っ込む余裕はキバには無かった。噛む顎の力がかなり強い。キバの鎧に火花が散り始めている。

「こんのっ……放しやがれっ！」

キバは右腕を振り上げ、その勢いのまま、ドラゴンファンガイアを地面に叩き付けた。

「グッ！」

顎の力が弱まるのを見逃さずに右腕を解放。繋げてキバは、倒れたドラゴンファンガイアを蹴り飛ばす。

その巨体が空中を滑る。

最中、ドラゴンファンガイアは、再び異形の口をキバに向ける。

「カッ！」

煌々と燃える火球が発射され、寸分変わらずそれはキバへと襲いかかる。

「危ねっ！」

身体を思い切り反らし、どうにか回避。

肩が少し焦げたが、それくらいで済んで御の字だろう。

その隙に、ドラゴンファンガイアはキックの衝撃から立ち上がり、キバに刃のような目線を向ける。

「なる、ほど、これ、が、キバ、の、力が。予想、以上、だな」

「ふん、舌つ足らずな野郎だな。なあお前、何故俺と戦う？」

キングである兄に挑むなら解る。

未だに、彼からキングの座を奪おうと画策するファンガイアは多い。

だが、何故自分なのだ。

戦ったところで何のメリットもないはずなのに。

「貴様の、力を、確かめ、たかった、だけだ。現代の、キバの、な」

「現代？」

その単語に引つ掛かりを覚えるも、更なる質問をすることは敵わなかった。

「！」

ドラゴンファンガイアが何かに気付いたように、あらぬ方向を見て歯噛みした。

「ちっ、邪魔、が入ったか。まあ、いい。また、会おう。キバの継承者よ」

「あつ、待……熱ッ！」

逃亡を図るドラゴンファンガイアを追うキバに、四連弾の火球が放たれた。

狙い澄ましたものではなかったらしく、地面を破壊しただけに終わったが、逃げるには十分だったらしい。

キバが思わず伏せた目を開けると、そこにドラゴンファンガイアの姿はもう無かった。

「何だっただ、あのファンガイア」

「キバの力を確かめに来たって言うてたな。一体全体どういうことだ？」

キバとキバットが首を傾げると、裏道のあるこちらに、自在式が刻まれるのがほぼ同時だった。

だが、驚くのも一瞬で、二人は冷静に状況を理解する。

「封絶か」

色が紅蓮、ということは

「キバ！」

背後からした呼び声。

聞き覚えがある。

(邪魔が入ったってのは、こいつらのことか)

面倒くさそうにキバが振り向くと、そこには炎髪灼眼に刀を構える

フレームヘイズの少女に、全速力で彼女を追い掛けたのか、完全に息を切らす少年の姿があった。

### 第三話・パッション／揺らぐ炎・Bパート

「邪魔はしないようにって、忠告はしたはずよ」

紅蓮の瞳が、キバを射抜く。

（別に邪魔してるつもりはねーんだがな）

向こうには向こうのやり方や理念があるわけだから、意見の衝突は必然なのだろうが。

「お前が何を考えて動いているのかは知らないし、興味もない。けどこれは“紅世”の問題で、私達フレイムヘイズの使命よ。ファンガイアに手を出される謂れはないわ」

「かーッ！ ムカつく言い回しだな姉ちゃんよお！」

我慢仕切れなくなったキバットがベルトから外れる。

「喋る、コウモリ？」

少女の後ろに隠れる悠二が目をしばたいた。



「シャナ、あれは……」

「説明してる余裕はない」

仁辺もなく説明を拒否され、悠二はやや不服そうに口を閉じる。

(ふーん。シャナ、ね)

悠二が口にした一人称を、キバは聞き取る。

それがあの長つたらしい称号や、平井ゆかりではない、彼女の名前らしい。

キバが妙な納得をする一方で、キバットはまだ額の青筋を消さない。

「何でいきなり地上げみたいなの立ち退き勧告されなきゃならねえんだ！ こっちはなあ、お前達にくるずくと前からモガッ！」

いい加減うるさくなってきたキバは、キバットの口を塞ぎ、そのまま再びベルトに止まらせた。

(な、なにすんだよ奏夜！)

(怒らせるような真似してどうする。フリಾಗネを追うには、こい

つら専門家の力がどうしても必要なんだ。お前もわかってるだろ)

向こうに聞こえぬくらいの小声で、キバットと会話する。

(……でもよお、あの姉ちゃん、素直に『協力して下さい』なんて言われても協力しそうにないぜ)

(ふむ、それじゃあ同意だな)

この場合、敵か味方かということを示すよりも、自分がいかに有益な存在かを理解してもらわなければならない。

そのためには

(……キバット、俺が指示するまで、余計なことするなよ)

そう釘を刺して、キバはキバットに、ベルトのケースから取り出した青色のフエッスルを吹かせた。

『ガールル・セイバー!』

昨日と同じように、飛来した狼の彫像がキバの手に収まり、魔獣剣・

ガルルセイバーに変化。  
キバにガルルの力が憑依し、その姿を青く染め上げ、キバ・ガルルフォームへの変身を完了させる。

「姿が変わった？」

「ふむ、自在法の類　またはファンガイアの魔術か」

無言のまま剣を構えるキバに対して、少女　シャナは険しい表情で大太刀を握り直し、悠二を見る。

「巻き込まれたくないなら下がって。斬りたいなら別に止めないけど」

「わ、わかった」

悠二がシャナから一步下がったのを見て、シャナはキバに灼熱の瞳を向ける。

その緊張が臨界点に達した瞬間、

「はっ！」

「グルア！」

二人は弾かれたように走り出し、互いの剣を交える。

ガキイン！

火花が散り、金属が擦れる独特な音が鳴り響く。

かくも鋭きその音が幾重にも連なる様は、キバとシャナの剣が乱舞し、何度も何度もぶつかり合っていることを示していた。

剣閃が煌めく中、シャナは冷静にキバの力を推し測る。

(こいつ、前戦った時には徒手空拳で戦ってたのに……)

剣と剣との勝負で、自分と互角以上に渡り合っている。

荒削りなように見えて、その野獣のような猛攻には全く隙が無い。

戦いが平行線を辿るのも無理からぬこと。

加えて言うなら、あの狼を模した剣も相当な業物だ。

彼女の持つ大太刀『贄殿遮那』とのぶつかり合いで破損しない頑強さを持っている時点で、それは恐るべき精度を誇っている。

条件は互角、あとは二人のどちらが上手く攻撃を加えられるか。

「ガアッ！」

キバがガルルセイバーへ更に力を込める。

彼のガルルシールドに覆われた左腕は、ガルルセイバーを使うに足る筋力を備えている。

いかに人知を越えた存在であるシャナであっても、歴然とした筋力の差は存在するのだ。

「くっ！」

じりじりと、少しずつ贅殿遮那から伝わる力がシャナを押し始める。

このまま行けば、体勢が崩れた瞬間に斬りつけられて終わりだ。

「くっのー！」

シャナが僅かに、大太刀の起動を傾ける。

「なめるなあっ！」

「っー！」

刀のつばぜり合いを終えた、否、わざと終わらせたシャナは、力の行き場を無くしたガルルガルルセイバーの刀身を伝うように、贅殿

遮那の刃を滑らせる。

狙うはキバの手元。

しかし、端で戦いを見守る悠二を妙な感覚が襲う。

(あの剣、動いてる?)

ほぼ一瞬だったが、確かに見えた。キバの意思とは関係なく、自らが自立した動きをしている。

狼の頭の形をした装飾が、シャナの方に向けられ、その瞳が青く輝いた時、悠二は直感的に叫んでいた。

「シャナ、左に避ける!」

『!?!』

突然の悠二の声に、その場にいた全員が驚愕する。キバとキバツトもだ。

半ば反射的に刀を引き、悠二の言う通りに回避するシャナ。

アオオオン!

そのすぐ左を、ガルルセイバーから発せられた青い円環状のハウリングが突き抜けて行き、その先にあったコンテナを破壊する。もしあのまま刀を走らせていたら、確実にあの衝撃波の餌食になっていた。

戦慄するシャナに対し、彼女から距離を取るキバもまた、驚きを隠せなかった。

(読まれていた？ いや、ガルルの力をこいつらの前で使ったことではない。しかもこの攻撃を読んだのは)

フレイムヘイズではない。

つい最近まで、非日常の世界のことなど、何一つ知らなかった高校生、坂井悠二だ。

( これも『零時迷子』の力ってヤツか。軽くカルチャーショックを受けるね。“紅世”の文化ってヤツは)

心中でそうぼやいて、キバは新たに、緑色のフェッスル バッシヤーフェッスルを取り出す。

「おっ！ 次はアイツだな！」

意気揚々と、キバットは高調な音色のフエッスルを吹き鳴らす。

『バツシャーマグナム!』

「あっ!」

「および、かかった」

声を上げるラモンに、力が同意する。

御崎市のとある河川敷。そこに一件の焼き芋屋が止まっていた。春とはいえ、まだまだ冷える日もある。

焼き芋の需要はまだあると踏んで、ラモンと力は奏夜からの命令の傍ら、焼き芋屋のバイトに勤しんでいた。そんな中でのラモンに対するコールだ。

「次狼じゃ相性が悪い相手なのかな?」  
「お願いね」

まあいつか。力、屋台



「いって、らっしゃい！」

何故か宣伝用のメガホンで見送りをする力。

騒音に耳を塞ぎながらも、一応彼の激励を受け、ラモンはその場でくるりとターンした。

すると、グリーンオーラのオーラがラモンの正体　半魚人『マーマン族』の戦士・バツシャーを型取る。

ガルルと同じように、彫像となった彼は、河川敷から主の元へと飛び去っていった。

飛来した彫像をキバがキャッチすると、それは魔海銃『バツシャーマグナム』に変型。

キャッチした右手を起点に、キバの右腕がヒレのついた魚類のようなスケイルアームに、胸部が鮮やかなグリーンノ装甲、スケイルラングにそれぞれ変化する。

キバットの眼とキバの仮面もまた、緑色に染まり、最後にキバへとバツシャーの幻影が憑依した。

バツシャーの力を取り込んだ『キバ・バツシャーフォーム』。

感覚面の能力に優れる形態である。

「また色が変わった」

「なんか、魚みたいだな」

「今度は銃器か。遠方よりの攻撃は、太刀での対応が難しくなる。用心しろ」

アラストールの言葉に頷き、シャナは再び鋭い眼光を宿す。

武器が変わろうと関係ない。  
ただ勝つのみだ。

(へえ、あの子がフレイムヘイズなんだ。見たとこ、僕とほとんど変わらない歳に見えるね)

(よく言うぜ、実年齢131歳が)

ラモンの食えない発言に、キバは半ば呆れ調だ。

(で? あの子を大人しくさせればいいのか?)

(ま、ほどほどにな)

(うん、了解了解)

バツシャーマグナムから聞こえる気合い十分なラモンの声を後ろ風に、キバはマグナムの銃口をシャナに向け、

「フン！」

二、三発、続けざまにトリガーを引く。

銃身に取り付けられた安定翼・トルネードフィンが回転し、銃口からは大気中の水分から生成された水の弾丸・アクアバレットが射出される。

「はっ！」

瞬時に反応し、その弾丸を斬り落とすシャナ。弾丸に圧縮されていた水が弾け、地を濡らす。

「水の弾丸、しかも早い」

斬った水を滴らせる刀を見て、シヤナは呟く。  
その間にも、キバはただバツシャーマグナムのトリガーを引き続ける。

バアン！　　バアン！

銃声が連なり、弾数無限のアクアバレットがシヤナ目掛けて飛んでいく。

片や、動きに一点の淀みもなく、弾丸を大太刀で防いでいく。

『やるね、あのお姉ちゃん。さすがはフレイムヘイズってところか』

何処か余裕を含んだ様子で、ラモンはシヤナを評価する。

確かに、弾幕がある限り、シヤナは防戦を強いられるため、今のところはキバが有利だ。

（で、どうするの？　このままあのお姉ちゃんがバテるまで、弾丸を撃ちまくればいいのかな）

（それはちつと面倒だ。一気に決めるぞ）

連射を一旦止め、キバの仮面が輝く。

すると、何もなかったはずの地面が急に水で満たされた。

バッシュャーフォームの能力。

アクアバレットと同じように、大気中の水分を凝縮して作り出したバッシュャーフォームのテリトリー、『アクアフィールド』だ。

キバがバッシュャーマグナムを掲げると、トルネードフィンが高速回転。周囲の水を巻き上げていく。その姿はまるで、海面に発生した竜巻だ。

「こ、今度は竜巻？」

「ファンガイアの王は伊達じゃないってことね」

フレイムヘイズから見ても、常識を越えた光景を目の当たりにする中、キバはその水流の中に身を隠す。

「成る程、死角からの攻撃が狙いか」

アラストールの言葉通り、周囲を渦巻く竜巻の中に、影が揺らめいているのがわかる。バッシュャーフォームのホームグラウンドである以上、その動きは早い。

(でも、捉えきれぬ)

驕りも何もなく、自身の力を理解した上で導き出した結論。神経を研ぎ澄ませ、相手の戦意の残滓を探る。

水音に感覚を阻害される中、シヤナは眼を閉じる。

バシヤン！

「そこっ！」

微かに聞こえた水の弾かれる音。刃が走る先には、バツシャーマグナムを構えるキバの姿。

(とった！)

シヤナの大太刀が、キバを一刀両断する。

『残念、ハズレ!』

「後ろだ! シヤナ!」

「っ!?!」

ラモンの軽い口調と、悠二の戦慄を孕んだ警告がほぼ同時に聞こえた。

贄殿遮那が斬り裂いた『渦巻く水流に映り込んだキバ』が揺らめき消えた。

そしてシヤナの背後には、バツシャーマグナムを構える本物のキバが。

シヤナが慌てて反応するがもう遅い。

二発放たれた弾丸のうち、一発はシヤナの手から贄殿遮那を撃ち落とし、二発目は、シヤナの小柄な体躯に真正面からヒットした。

「く、あっ!」

アクアバレットの勢いはシャナを軽々と吹っ飛ばし、その先の壁に叩きつける。

「くっ！」

ダメージに軋んだ身体を瞬時に立ち上がらせるシャナに、ひやりとした鋭気と、グリーン銃口の銃口が向けられる。

キバが、シャナの取り落とした贄殿遮那とバツシャーマグナムを、突き付けていた。

「チェックメイト」

キバットの声が、虚空に反響した。

張り詰めた空気。

シャナはこんな状況下においても、焰のような戦意を絶やさずにキ



バを睨み、悠二もいつの間にもやら、キバとシャナの近くにまで走ってきている。

贄殿遮那かバツシャーマグナム。

どちらを動かしたとしても、悠二は自分の身を盾にしても、シャナへの攻撃を庇うだろう。

(そのシチュエーションも面白そうだが、それはまた今度だな)

と、サディスティックな考えを浮かべながら、キバはバツシャーマグナムを下ろし、贄殿遮那をシャナの首筋から引くと、そのまま床に放り投げる。

「……？」

怪訝そうな視線をキバに送るシャナと悠二。

「何の真似だ」

二人の心情を代弁するように、アラストールが言う。

(キバット)

(ほい来た！)

キバが小声で合図すると、キバットがベルトから外れた。

「これでわかってもらえたかい？　俺様達が十分戦力になることがさ」

羽音をはためかせ、キバットが言った。

「……今の戦いは、自らの力を示していたということか」

「ああ。こうでもしなきゃ、協力することのメリットが分かって貰えないだろう？」

「協力だと？」

アラストールが唸り、更に悠二が聞き返す。

「えっと、それってあんた達も、フリアグネを倒そうとしてるってことか？」

「ああ、その通りだ兄ちゃん。あと灼眼の姉ちゃんよ。今回のことは俺達ファンガイアに関係がないって言うてたが、実際のところそ

うでもないんだぜ。

あいつ　フリアグネの狙いは知ってるか？」

「……都喰らい」

シヤナの返答にキバットは頷く。

「その通り。それがもし実現して、この街が消えちまうとなれば、ファンガイアにとっても都合が悪いんだよ」

「どういう意味？」

「ここはな。ファンガイアの中核都市なのさ」

これにはさすがにシヤナとアラストールも驚く。  
『ファンガイア』の単語を知らない悠二は、首を傾げるだけだったが。

「ここは四年前、ファンガイアと人間の戦う舞台となった場所なんだ。そして、ファンガイアと人間の共存が始まったのもこの御崎市。故に、ここにはファンガイアに関わる様々な重要施設がある。もしここが消えたとなれば、ファンガイア達は恐慌状態。あわよくば、人間との共存も撤廃されかねない。だからこそ、俺様達はここを守らなくちゃならないんだ」

「成る程、それがお前達ファンガイアが戦う理由か。ならば、お前

達が我らに協力を求めるのは、相手が“紅世の王”だからだな」

「そういうことさ。俺様達の専門はあくまでファンガイア。いくら知識があっても、経験が無いんじゃ、いくらキバツたって意味がないんだ」

説明を終え、再度キバツトは促す。

「戦いで俺様達が邪魔だと思うなら、切り捨てて貰ってもいい。ただ、フリーグネを倒すまで協力して欲しいだけなんだよ。だから頼む」

力を貸して貰いたい。『炎髪灼眼の討ち手』。

翌日。御崎高校音楽室。

涼やかな音色が、閑静な空間に伝わっていく。

「で、大丈夫なのかよ」

「んー、なにが？」

キバットの質問に、バイオリンを奏でる奏夜が気の抜けた返事を返す。

「何がって……フレームヘイズの姉ちゃんだよ。本当に協力してくれんのかよ」

「んー、五分五分つてとこ。協力内容は『互いの情報を教え合っ』と『共同戦闘』だからな。ま、なるようになるさ」

「考えナシだな」

「なんとでも」

あの後、シャナと悠二には、キバーラをつけさせたため、二人が動く時にはキバーラが知らせてくれる手筈になっている。あとはシャナと悠二か、フリアグネのアクション次第。

奏夜が呑気にバイオリンを弾いていられるのも、そのためである。

『ポロン』

最後に弦を一本弾いて、奏夜は演奏を終える。

「むう。オケ部の奴ら、バイオリンのチューニングサボったな。全く……、やらなきゃいけないことはちゃんとやれっつての」

「……お前、自分の教師としての生活振り返ってみる。そんなこと言えなくなるから」

嘆息したキバツトが、ふとトビラの前を見る。

「おっと、誰か来たな。じゃあ奏夜、何かあったら呼べよ」

そう言い残して、キバツトは開け放たれた窓から飛び去っていく。ややあつて、スライド式のドアが開けられた。

いたのは、一人の女生徒。

「よう、吉田。おはようさん」

「お、おはようございます」

ややオドオドとした挨拶。

吉田一美。

奏夜の受け持つ一年二組の生徒だ。性格は大人しく、内気で引込み思案。

奏夜の彼女に対する見識はそんなものだが、先の挨拶からしても、それは実に的確なものだろう。

以前、封絶が張られた教室での戦いで負傷していたが、それはシヤナによつてちゃんと治されているようで、気になっていた奏夜は内心ほつとする。

「昨日、先生がいない時に出てた課題です。早い内に……渡しておこうと思つて」

「おっ、ご苦労さん」

礼を言つて、吉田から課題プリントの束を受け取る。

「そう言えば先生。さっき聞こえたバイオリンって……先生が弾いてたんですか？」

吉田が机に置かれたバイオリンを指差しながら言つ。

「……あー」

どう答えようか。  
学校の人間には全く話していないことだから、今さら話すのも少々  
憚られる。

だが、よくよく考えてみれば、隠して何か不利益があるものでもな  
かった。

「まあ、な」

「えっと……さっきの曲、凄く綺麗な音色でした」

決して大きな声とは言えないが、吉田はストレートな称賛を奏夜に  
送る。

「あはは、そりゃ光栄だ。でも俺の本業は弾くことじゃなくて、作  
る方なんだよ。弾くことも大好きだけどな」

「作るって……」

「バイオリン作り。ちなみに修理も請け負ってる」

箍が外れたのか、次々と自分のプライベートを明かしていく奏夜。  
片や、吉田は本気でびっくりしたようだった。



「……初めて、知りました」

「初めて話したからな。ちなみに学校の人間でお前以外に話してなかったりする」

「ええ！？　な、なんでですか？」

「何でって……、お前が知った第一号になったからだけど？」

別に隠していたつもりもなかったし。

「そこまでオーバーリアクションとるほどでもないだろうよ。ただか教師の副業くらいで」

「す、すみません……」

「いや、謝ることもないんですが」

動揺のあまり敬語。

消え入るような声で意味のない謝罪をする吉田の姿は、何もしていなくとも、奏夜の内に言い知れぬ罪悪感を生み出している。

お前は小動物か。と心でツツコミを入れて、奏夜は思い出したように聞く。

「そう言えば吉田。お前昨日の体育の時間、貧血でぶっ倒れたらしいが、大丈夫だったか？」

「あ、はい。そんなに酷いものじゃありませんでしたから。それに、ゆかりちゃんと坂井君も助けてくれて……」

「ふーん？ まあ大した事ないなら別にいいんだがな」

何故か奏夜は、怪訝そうに首を捻る。

吉田の言葉、最後の『坂井君』のあたりに力が込められていたことに気が付いたのだ。

その時、ふと頭に浮かんだ想像を、奏夜は吉田へ率直に問う。

「好きなのか？」

「えっ？」

「好きなのか？      坂井が」

「……………っ！」

硬直。赤面。動揺と見事な百面相を披露する吉田。  
実に分かりやすい。

さっきとは比べものにならないくらいにオタオタする吉田に対し、  
奏夜は可笑しそうに口元へ手を当てる。

「え、あつ、えつと」

「そうかそうか。坂井も罪なヤツだな」

「せ、先生。そ、それは、そのことは、その……」

「言わんよ。俺は他人の恋愛をいじくりまわすことだけはしないよ  
うにしてるんでね」

赤面しっぱなしの吉田に向けて、奏夜は言う。

(しかし坂井にね……)

また難儀な。悠二の立場を考えると、意外にハードルの高い話だ。

『日常』を生きている彼女がどうしたところで 『非日常』の壁  
がその感情を阻害する。

奏夜は頬を搔いて、音楽室から出た。

後から吉田もそれに続く。一緒に行くわけではなく、教室と職員室  
が同じ方向というだけだ。

「俺は恋愛に口出せるような人間じゃねえけどさ」

「……………」

やや後ろを歩く吉田が首を傾げた。

教室に行く道と職員室に行く道を隔てる階段で、奏夜は立ち止まる。

「誰かを好きになったなら、悔いだけは残すなよ」

普段とは違う、真剣な眼差しに、吉田は僅かに気圧される。

「悔いが残らないように、ただその相手を『好き』でいる。その結果がハッピーエンドだという保証はない　だが、ハッピーエンドを迎えた人間は、すべからず相手を『好き』であり続けた奴らだ」

言って、奏夜は表情を崩し、吉田に柔らかな笑みを向ける。

「ま、頑張ってみるよ。吉田」

吉田は呆けたように立ち尽くしていたが、

「……はい！」

吉田は、自然と浮かんだ笑顔を奏夜に向けて、力強く頷いた。

「そう、その意気だ」

奏夜は晴れ晴れとした気分で吉田と別れ、階段を下りて職員室へと向かう。

そんな中、ポケットでケータイの着信音が鳴る。

開いてみれば、着信メール一件。

以下内容。

【『都喰らい』の件、検索完了。このメールを確認し次第、連絡し  
てくれたまえ】

本文を確認し、奏夜はケータイを閉じる。

(さて、俺も頑張りますか)

そんな奏夜と吉田のやり取りとほぼ同時刻。  
空き教室のベランダにて。

「ちょっと、聞いてんの？」

シヤナが不機嫌そうに、何故か能天を撫で付けている悠二へ声をかける。

「ん？ ああ、うん」

「頭の栓がどつか緩んでんじゃない？」

「ぶっ叩いた奴が言う台詞じゃ……いえ、なんでもありません」

射殺さんばかりの眼光に、反論は火に油と悟る。  
昨日の完敗を記したキバとの戦いへの悔しさや陰りは、シヤナの中で一先ずは整理がついたらしい。

（いや、整理がついたというよりも……）

「それ以上に怒るべきことがあったもんねえ」

悠二が結論を出すより早く、冷やかすような声を二人（正確には三人）は聞き取る。

昨日連絡要員として、キバから遣わされた白いコウモリ　キバ  
ラだ。

「朝起きたら、隣に下着姿の女の子、なーんてシチュエーション、マンガ以外で初めて見たわ」

「……」

封印しようとしていた事実をあっぴろげに触れ回るキバーラに、シヤナは無言で贅殿遮那を取り出そうとする。

「キヤー、こわ〜い」

「気持ちはわかるが落ち着け」

アラストールに静止され、シヤナはしばらくキバーラを睨んでいたが、半ば諦めたように眼光を弱める。

シヤナが平静を取り戻したのを見計らい、悠二は話を進める。

「……で、なんだっけ？」

「はあ………こんなの言うことを信用するの、アラストール？」

「当面はな。それにキバも同じ予想を立てていた以上、もう無視は  
できん」

「そのキバだって信用出来たものじゃないと思うんだけど」

「あら、心外ね」

キバーラは頬を膨らませる。

「都市一つの存亡がかかっている時に、嘘をつくようなことしないわ  
よ。あたしにしろ、キバにしろね」

言外に、キバーラがキバを信頼していることが聞き取れた。

ファンガイアに関して、既に悠二は、シャナとアラストールの  
レクチャーを受けている。

古来より“徒”とは違う形で、人の存在を奪ってきた魔の一族。

そして、現在は人間と共存を成しているそれらを束ね、統制してい  
るのが『キバ』（もっとも、キバーラからによると、あのキバは代  
行人らしいが）。

悠二は何処と無く聞いてみる。

「なあキバーラ。キバって、一体どういうヤツなんだ？」



「ん〜、悠二くんが言ってるのは、キバの正体？ それとも人物像？」

「どっちもかな。答えられないなら、それでもいいんだけど」

「ふーん」

キバーラは、怪訝そうに顔をしかめ、悠二の質問に答える。

「悪いけど、それはキバが自分から明かさない限り、あたしの口からは言えないわね。盟約とか、色々あるのよ。ただ、シヤナちゃん達が誰かを傷つけないのなら、キバは味方にいる。それだけは信用して頂戴」

「あ奴がファンガイアと人間の共存の立役者だというのは聞いたが、何か人間に思い入れがあるのか？」

「ちょっとした事情で、人間と接することが多かったからね。『ファンガイアと人間が笑って暮らせるための、架け橋になりたい』って言ってたわ」

「へえ……」

最初見た時には、シヤナをも打ち倒す恐怖の対象でしかなかったキバ。

だが今のキバーラの話聞く限り、なんだか凄い人なんだな、と悠

二は理解する。

(キバもこの街にいるだよな……、案外僕の身近にいたりして)

悠二はかなり真実に近いところをかすったが、悠二自身も半ば冗談めいた考えだったためか、その予想は即座に廃棄された。

「それで、シャナちゃんはこれからどう動くつもりなのかしら。フリアグネ側の目的がわかってても、向こうの居場所がわからないから動きようがないかも知れないけど」

「一応は、こいつって餌を連れてうるうるするつもり」

キバーラの問いに、シャナは悠二を指差して言う。

「こつやって睨み合ってる内に、トーチはどんどん消えてくから、その内、連中も焦れて出てくるでしょ」

「いや、それじゃ駄目だ」

意外な反論が、悠二の口から飛び出す。

「なんですって？」

「どづいう意味よ、悠二くん？」

シヤナとキバーラが聞き返す。

悠二は頭に浮かんだ自分たちのやるべきことを、淡々と言葉に変えていく。

「こっちが待つってのはつまり、相手に何か準備させたり、次に行動を起こすのを受け止めて動くってことだろ。それじゃ、罠の中に自分から飛び込むようなもんだ」

「じゃあ、どづしようっての？」

「向こうが動かないから、こっちは行動出来ずにいるのよ。どづやっても後手になるわ」

「呼び寄せる方法はあるよ。連中が『都喰らい』を企んでいてもいなくても、多分噛み付いてくる」

「どづいうことだ」

「連中の企みの要は分かってるんだ。だから、その邪魔をしてやればいい」

「……貴様、まさか」

シヤナとアラストールは、悠二の提案を理解しなかった。

キバーラは未だに疑問符を浮かべていたが。

「もう、手段を選んでる余裕はなくなってると思う。待ってれば、こつちが不利になるだけだ。まだ無事な連中から、きっちり守っていかない」と

「ふうん…」

シヤナが何処か楽しげに笑う。

「ぶったたいてスイッチでも入ったのかな」

「かもしれん。突飛ではあるが、確かに効果的だ」

「え、え！？ 何なに！？ 説明してよ三人とも！」

その後、一人仲間外れなキバーラに、悠二が説明をし、その話は纏まった。

ここから、反撃の狼煙は上がったのである。

『やあ、随分と連絡が遅かったね、奏夜』

あの後授業が重なり、奏夜がメールの送り主に連絡が取れたのは、昼休みになってからだっただ。

出来ることなら頼りたくない人物だったのだが、自分の知りた事実を調べることが出来るのは、電話向こうにいる人間のみだ。

『実に興味深い内容だった。“フレイムヘイズ”に“紅の徒”……、久しぶりにゾクゾクさせてもらったよ。僕の力を持ってしても、全てを閲覧するのは膨大な時間が掛かる。僕が途中で検索を中断したのはこれが初めてだ』

「与太話に花咲かす気はねーよ。早く本題に入ってくれ」

『ああ、キミの依頼は“棺の織手”が、都喰らいで集めた存在の力を、何に使おうとしたのか、だったね』

向こうには見えないと知りつつも、奏夜は頷く。

『都喰らい』をする動機。

これがフリಾಗネの動向を探れるかも知れないと、奏夜は考えていた。

ただ存在を貪るだけならば、普通に人を喰らうのが一番手っ取り早いはず。

わざわざフレイムヘイズに見つかりやすい、というリスクを犯して

まで、『都喰らい』をする意味はない。何か 都市一つ分の存在の力を使わなければならない理由がある。

『行動の理由』、手掛かりになるには十分だ。

それらを推測するため、奏夜は依頼を出した。

『都喰らい』の前例である棺の織手、その『行動の理由』を調べてくれと。

『端的に言つと、彼の契約者の望みを果たすためだね』

「契約者？ 棺の織手が、フレイムヘイズと契約した“王”だったってことか？」

『ああ、そもそも“棺の織手”とは、彼がフレイムヘイズだった時に得た称号だね。

本来の真名を“冥奥の環”。世に轟くフレイムヘイズの英雄だったそうだ』

「そんなヤツが、なんだって『都喰らい』なんかを……」

『彼が“徒”に堕ちたのは、彼の契約者が死んでしまったことに原因があるようだね。“冥奥の環”と、彼の契約者である“棺の織手”は、互いを愛していた』

最後の言葉を聞いた時、傍目から見れば、奏夜はいつも通りだ

っただらう。

だが内面に至っては、大きく動揺していた。

ケータイを握る手へ、無意識に力が籠る。

そんな奏夜の様子など気にも止めず、説明は続いていく。

『彼は“棺の織手”の望みであった、自分と契約者の子を作り出すとした。しかし、初めから存在していないものを作り出すともなれば、膨大な存在の力が必要となる』

「そのための『都喰らい』、か」

『11名答』

素っ気ない言葉が返ってくる。

『まったく僕には理解出来ないよ。いくら強く望んだ願いだとしても、全てのフレームヘイズを敵に回すなんて、あまりに非合理的だ』

非合理的。

確かにそうだらう。

しかし奏夜には少しだけ、そうする理由が分かる気がした。

「……フリーアグネが『都喰らい』をするのも、誰かに存在を与えるため、なのかね」

「さあ？　そう断ずることは出来ないけどね。ただ『都喰らい』で得る膨大なエネルギーの使い道は、おのずと限られてくる。些細な願いなら、普通に人を喰えばいいからね。新たな『存在』を生み出す気なのは、ほぼ間違いないだろう」

「成る程　ありがとな、中々有力な情報だ」

「構わないさ。僕としては実に有意義な調査だったからね。また何かあれば教えてあげるよ。興味深い検索対象を提供してくれた礼だ」

「ああ。それじゃあな、フィリップ。翔太郎にもよろしく」

通話を終え、奏夜は憂いを帯びた溜め息をついた。

「“愛”ね」

まったく、面倒だ。

いつだって、これは人を、ファンガイアを、あまつさえフレームヘイズを惑わせる。



非合理的と言われようとも、それらはどうしようもない。誰にも止めることは出来ず、自分でさえも止められない。

この世で最も脆く、しかし強い感情。

「……」

もしフリアグネの目的が、棺の織手と同じだとしたら

自分は、戦えるのだろうか。

「……クソツ、調べなきゃよかった」

悪態をついて、奏夜は校舎へと歩き出す（万が一、誰かに聞かれるのを防ぐためだ）。

戦うしかない。

自分の信念と誰かの信念がぶつかる時、そこにあるのは戦いだけ。どちらが正しいか、論ずる暇すらない。

それはわかっている。

キバとしての戦いの中、何度もあったこと。だが、我慢出来るのと、

気にならなくなるのは別の話だ。

相手の『正しさ』を力で砕く。それだけは、永遠に慣れることはない。

「いけないな。どうにも弱気になってやがる」

“愛”なんて単語を聞いたせいか。

気付かぬ内に、トラウマを抉られているようだ。

『許せない……絶対に!』

『人間など価値の無い存在だ。何も悲しむことはない』

『やめて!』

「……ちっ」

気分が後ろ向きだからか、嫌な記憶ばかり蘇る。

不愉快極まりない。

「こういう時に限って、キバットもキバーラもタツロットも次狼たちもいないんだよな……」

取り敢えず、昼飯でも食べよう。

病は気から、食べるという字は人が良くなると書く。

そう決め、階段を上がっていく奏夜。

途中、階段の踊り場に差し掛かると、上の階  自分の受け持つ一年二組の教室から、鋭い声が聞こえてきた。

「うるさいうるさいうるさい。予定通りの行動よ」

「そりゃそうだけど……っわ!?  何すんだよ!」

「なにユルんでんのよ。これから絶対に一戦やらかすんだから、し

やきつとしないよ!」

「だからって蹴っ飛ばすか、普通!?!」

「蹴っ飛ばすの! 普通は!」

エコーがかかっているため聞き取りづらいが、坂井とシャナの声だ。勢いある足音が凄いスピードで近づき、あっという間にシャナは階段を挟み、奏夜の目線の上へ。

シャナは奏夜を一瞥し、階段を駆け降りてくる。

奏夜はその様子を見て、何か言い知れぬ違和感を覚えた。

「音楽が乱れてるぞ、平井」

すれ違いざまに、奏夜はシャナに言う。

「お前、何を戸惑ってる?」

シャナはびくりと肩を震わせた。

瞳には、前に戦った時と違う、不安定な光がちらついていた。

「……っ、づるぞいっ！」

激情を吐き出すように叫び、シャナは階段の下へ走り去っていく。その際紡がれたシャナの小さな声を、奏夜の耳がとらえた。

「こんなの、戦えば全部吹き飛ばす！」

シャナの足音が消えた後すぐに、入れ違いで悠二が現れる。その悠二も、奏夜に軽く会釈しただけで、シャナの後を追いかけていく。

「奏夜〜！」

ぼつん、と取り残された奏夜に、聞き慣れた声が話し掛けてきた。

キバーラである。

「もう、随分探したのよ！ 午前中の授業が終わった途端にどっか行っちゃって！ シャナちゃんと悠二くんが動いたから、報告しようと思ったのに！」

「ああ、あの二人ならもう見たよ。で、どういう作戦なんだ？」

「うん。フリアグネの計画が『都喰らい』でもそうでなくても、トーチが必要なのは間違いないから、そのトーチをわざと消していくことで、フリアグネをおびき寄せるつもりなんだって」

「ふん、なるほど。良い手かも知れないな。坂井もよく考えたもんだ」

「あら、なんで坂井くんが考えたってわかるの？」

「いや、何となく。」

で、キバーラ。もう一つ聞きたいんだけど。お前の言うシヤナちゃん、何かあったのか？」

語調を少し真面目なものにして、自分の肩に止まるキバーラに問う。

「鋭いわね奏夜」

キバーラが意味ありげに笑う。

「ちょっとシヤナちゃん、ヤキモチ妬いちゃったみたいなのよ」

「ヤキモチい？」

なんだそのいきなりなラブコメ展開は。

「窓からこつそり見てただけど、クラスの女の子が悠二くんに話し掛けて、悠二くんが嬉しそうにしてたのが気に入らなかつた……みたいなんだけどね。」

「シヤナちゃん自身、それがヤキモチだって気付いてないみたいだつたわ」

「……つかぬことを聞くが、坂井に話し掛けてた女の子って誰？」

「吉田一美さん、だったかしら」

……図らずも、奏夜自身が原因を作っていた。  
今朝方の音楽室にて、内気な吉田が坂井に話し掛けるのを後押ししたのは、紛れもなく自分だった。

（うーん、タイミングが悪かったか）

自分としては、十割の善意でやったことだったのだが。  
奇妙な三角関係が出来つつある。  
しかも、フリアグネての戦いの間際で。

（他人に感情を向けなかったヤツが、急に他人を気にしだしたら……）

ロクなことにならない。そのことを奏夜は、我が身をもって知っていた。

不安を募らせる奏夜、片やキバーラは、何だか楽しそうだ。

「いいわねいいわね」 甘酸っぱい学園生活の中で芽生える三角関係！ 一人の男の子を巡るラブバトル！」

「キバーラ、ノリが中学生だぞ……。前から聞きたかったんだが、お前何歳なんブツ！」

言い終わるか言い終わらない内に、キバーラは奏夜の顔面にタックルを決める。

「奏夜、覚えておきなさい。女性に年齢を訊くのはこの世で最も失礼な行為なのよ」

キバーラは何故か威圧感のある笑みを浮かべながら、低い声音で奏夜を諭す。

有無を言わさぬ気迫に奏夜も「は、はい。スンマセン……」と答える他なかった。



「わかればよろしい。さ、早く二人を追わないと」

「あ、ああ、そうだな」

残りの授業が気にはなったが、今はこちらの方が重要だ。いざとなれば、嶋の後ろ楯もある。キバーラと一旦別れ、二人を追い掛ける奏夜。

(しかし……、本当に大丈夫なのか。平井のやつ)

心に生まれた一つの不安要素を、奏夜は捨てきれずにいた。

(もしあいつの感情が坂井に向かっていているのだとすれば)

非常にマズい。

「あいつの未完成な心じゃ、まだその感情は操れない」

奏夜の懸念は当然、勝敗を大きく左右することになる。

次回、仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD!

「そうか！ このミステスには、どうやら利用価値がありそうだ  
！」

「わからない。……ただ、苦しい」

「人は前を向くもの。答えが欲しいなら、進むしかない」

「シヤナを生かす、それだけだ！」

「あれが、“天壤の劫火”……」

【第四話・無限／天壤無窮の空】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！

### 第三話・パッションノ揺らぐ炎・Bパート（後書き）

今回は詰め込み過ぎてなんかグダグダ……；

上手い纏め方を知りたい。

・バツシャーフォームが強く感じるかも知れませんが……本編の不遇さから、ちよつとサービスしてます（オイ）。何でバツシャーだけファイバー技を出してくれなかったんだろ？

・キバーラが書きやすいという意外な事実。うゝん、劇場版ディケイドで出る変身態出そうかなあ……。

・半分こ探偵ゲスト出演。混乱させてすみません（<―>）面白くて仕方ないんです、仮面ライダーW。

あと一話か二話で、シヤナ第一巻分の話は終わる手筈ですので、お楽しみに（^o^）

#### 第四話・無限／天壤無窮の空・Aパート（前書き）

「蒸気機関車の父、ジョージ・ステイブソンは、『我々の目的は成功ではなく、失敗にたゆまずして進むことだ』と残している。失敗を恐れずに前へ進むことは、意外と難しいんだぜ？」

キバットバット三世

#### 第四話・無限／天壤無窮の空・Aパート

『お前、何を戸惑ってる？』

あの奇妙な男は、そう問いかけた。

あまりにも、今の自分にとって時を得た質問。まるで全てを見透かされたかのようにだった。

考えたくなかったことを、的確な言葉を持って突き付けられることに耐えられず、ただシャナは逃げた。

気味が悪かった。

自分の中に、自分でどうにもならないことがある。それが例えようもなく不愉快で、早くこの不確かな感情を飲み下してしまいたかった。

だが、そうしたくないという気持ちも、同じくらいあった。

自分を掻き乱すこの感情が、何なのか自覚してした時、何が起きるのか。

自分にとって何を意味するのか。

完全な形で、それを理解してしまうのが、怖かった。

自分を掻き乱すこの感情に、自分の存在を根底から覆されてしま  
そうだった。

(……戦いが、欲しい)

シヤナは願った。

戦う間なら、何も考えなくてもいいから。  
余計なものを、全て吹き払ってくれるから。

それが滑稽な勘違いだと知るのに、時間はかからなかった。

「あちこちで封絶が張られてやがるな。キバット、どう思っつ？」

「多分ああやって、トーチを消してるんだろつな。消えかけのトーチ使ってるみたいだから、世界の歪みも少して済んでるみてえだ」

「フリアグネをおびきだすだけじゃなく、世界の歪みが起これば、仲間のフレイムヘイズも集まる。一石二鳥か。中々やるな、平井も坂井も」

奏夜がマシンキバーのアクセルを踏み込み、その傍らをキバットが追い掛けていく。  
現在二人は、次々と張られていく封絶を頼りに、シャナと悠二の足跡を辿っている。

「動くかね、フリアグネは。もしあいつの狙いが『都喰らい』じゃなく、トーチもただのフェイクって可能性もあるんだしよ」

「そりやないだろうな。なにせ情報源は父ちゃんなんだぜ？父ちゃんは『闇のキバ』を操るほど、力の扱い方や知識に長けてるんだ」

間違いないさ。

キバットは殊更自身に満ちた顔を作る。

「ま、お前の二世への尊敬度はさておいて、信用に足る情報ソースだったのには同意するけどよ」

シニカルっぽく言い放ったところで、封絶の生成が突如止まった。それと同時に、覚えのある強大な存在の力を、二人は察知する。

「出やがったぜ、フリアグネの野郎だ！」

「この距離ならもう直ぐだな。いくぜキバット！」

「おっしゃあ、キバツて、GO！」

マシンキバーに乗りながら、奏夜は器用に片手を掲げる。

「ガブツ！」

左手に噛み付くキバットから奏夜の身体全身へ、アクティブフォースが流れ込んでいく。

「変身！」

腰に巻かれたベルトにキバットが止まり、奏夜の身体を覆った鎖が弾け飛び、キバへの変身が完了する。

と同時に、ここからそう遠くない場所で、二つの存在の力同士が激突した。



「向こうじゃもうドンパチやってるみたいだな。奏夜、このままぶつちぎるつぜー！」

「っしやあー！」

覇気勇々としたコンディションに比例させるかのように、キバはマシキバーのスピードを更に上げる。

避けられぬ戦いを制するために。

『っー！』

燐子を蹴散らしていくシャナ、戦いを見守る悠二、不適な笑みを浮かべたフリアグネ。

三人が全く同時に、こちらへと近づいてくるそれに気が付いた。

市外の一角。人通りの少ない路地裏。

エンジンの爆音を唸らせながら、猛スピードで迫ってくる真紅のバイク。

乗り手であるキバは、ウイリー走行で、進行方向にある金網を飛び越えて戦場に乱入してくる。群がる燐子の何体かを撥ね飛ばすのも忘れない。

予想の斜め上をいく登場の仕方に、三人はしばらく呆けたように動かなかった。

原因たるキバは特に悪びれた様子もなく、口を開かぬままマシンキバーから降り、そのままシャナの隣へと立つ。

「随分と遅い登場ね」

「悪い悪い、追っかけるのに手間取ったんだよ」

平静を取り戻したシャナの棘を含んだ出迎えに、同じく悪びれないキバットが軽く答えた。

「キバ……うふふ。なるほどね」

宙を優雅に浮遊するフリアグネは、乱入者であるキバに視線を向ける。

「私を追うために、フレームヘイズと手を組んでいたか。やれやれ、他人のことを言えた義理じゃないが、君達も大概手段を選ばないね」

「けつ、手段を選んで誰かを救えなかったら世話ねえぜ」

「ははは、それは正論だね。が」

キバットが敵意剥き出しで返すと同時に、フリアグネは両手を広げた。

「手段を選ばなかったとしても、何かを成し遂げられるとは限らないよ」

薄白い炎が、路地裏に所狭しと並べられ、中からさつき撥ね飛ばしたものと同タイプの人形　燐子が現れる。

同タイプ、というのは、それらの人形の分類が、カジュアルだったりメイドだったりメガネだったり、製作者の意図的な趣味が滲み出ているものだったからである。

「ふん、いい趣味してるぜ」

「うふふ、誉め言葉として受けとるよ」

キバットの皮肉を軽く受け流し、フリアグネが指を鳴らした。それを合図に、人形達がシャナとキバへ襲い掛かってくる。

「雑魚に構うな。狙いは“狩人”のみだ、邪魔な燐子だけ斬り捨てて走れ」

「うん、わかってる。アンタもそれでいいわね？」

キバに同意を求めると、キバは一瞬、一步退いた場所で戦いを見守る悠二を見る。

守らなくてもいいのか？

キバの意図を正確に読み取り、悠二はシヤナに言ったのと同じように、自分の意思を示す。

「僕のことはいいから。キバ、もしあんたが僕を利用できるといふなら、そうするのがいい」

「……」

悠二の固い意思に、キバも力強く頷き、シヤナと背中合わせに、周りを包囲する燐子へと拳を構える。

「援護に期待はするな、己の取り分は己で始末しろ」

「そりゃこつちのセリフだ魔神。そつちの仕事が無くなっても知らないぜ」

アラストールとキバットのやり取りを最後に、シヤナとキバは大太刀と拳を携えて、

『はっ！』

襲い掛かる燐子の大群を迎え撃った。

シヤナの大太刀が燐子を胴と足、二つのパーツに分け、キバの拳が燐子の身体を見事に貫通する。

何処にでもある路地裏で繰り広げられる人知を越えた戦い。

「せいっ！」

「ハッ！」

シヤナの剣技が、キバの拳が振るわれる度に、燐子が消失していく。そう、一体一体は全く問題がない。

しかし数が多い。

あのフリアグネの余裕な態度から推察するに、まだまだ燐子には余

裕がありそうだ。

何体来ようが倒せる自信はあるが（ましてシヤナもいるのだ）、それではいかんせん燃費が悪い戦いになる。

（それなら、パワーで一気にぶっ潰す）

群がる隣子から距離を取り、ベルトから紫の拳を型取ったフェッスルを引き抜く。

「殴ってダメなら叩くまで！」

キバットがくわえたフェッスルが、空気を震わす重低音を奏でる。

「ドツガハンマー！」

「あ、呼び出した」

「今回は力か」

キャッスルドラゴン内、ドランプリズン。

奏夜の指示から、再びキャツスルドランで待機を命じられた次狼、ラモン、力が主からのコールを聞き取る。

「あの“紅世の王”と戦ってるのかな」

「さあな。だがなんであれ俺達のやることは」

「おん、なじ」

力は立ち上がると、今までいじっていたチェスの駒を、手で粉々に握り潰した。

「ぬああアア！」

前髪をかき上げると、力の周囲に紫電が弾け、彼の正体たるフランケン族の戦士、ドツガの姿が移り込む。

彫像へと姿を変えた力は、キャツスルドランのドランポットから射出され、キバの元へと飛び去っていく。

彫像が形態変化した魔鉄槌『ドツガハンマー』をキバの両手が掴み取る。

即座に両腕を介して封印の鎖、カテナがキバの胸部にまで巻き付いていく。ガルル、バツシャーのそれよりも更に嚴重かつ、桁違いの量の鎖だった。

ドツガのポテンシャルに適応出来るよう、両腕と胸部がそれぞれが紫の装甲、ライトニングシールドとアイアンラングに覆われる。

キバットの目がパープルに染まり、ドツガの幻影が憑依したキバの仮面も同色に染まった。

『キバ・ドツガフォーム』。

単純な力だけならば、キバの基本4フォームを遥かに凌駕するパワー強化形態だ。

「フンッ！」

気合い一発。

片手に持つドツガハンマーを引き摺りながら、何処か気だるそうな足取りで、燐子達に向かっていく。



当然、その緩慢な動きは的になる。

燐子の人形たちが、四方八方から作り物の腕を、キバに叩き込んだ。

バキッ。

不快な音。音源は燐子の腕。

なんと、キバの装甲を殴った燐子の腕が逆にひしゃげたのだ。

その光景を見ていたのは、戦いに専念するシャナとアラストールを除く、フリアグネと悠二の二人だったが、フリアグネは感嘆の口笛を吹き、悠二は啞然としていた。

ドツガフォームは、ガルルフフォームやバツシャーとは異なり、機動力が致命的なまでに欠落している。それを補うべく、ドツガフォームの装甲は、戦車でも傷一つ付かないという驚異的な防御力を誇る。

かわさず、受け流さず、ただ捨て身で防御する。これがドツガフォームの戦闘スタイルだ。

だが、ドツガフォームの真骨頂は防御力にあらず、攻撃力にある。

徒手空拳は無意味と見たのか、人形の一人が右手を掲げる。

いつの間にかその右手には、ドツガハンマーの三倍はあろうかという巨大な鉄槌が握られていた。

人形はそれを振りかぶり、キバにスイングする。  
人外の存在たる燐子、ハンマーも何かの宝具と考えれば、その威力は戦車の弾丸以上のパワーがあるだろう。  
だがまたしても、キバはかわさなかった。

ガンッ！

(嘘っ！？)

悠二はもはや完全に絶句し、その光景に見入っていた。  
キバは片手で軽々と、真正面からハンマーを受け止めていた。

「ゲウ……ガアッ！」

とん、と軽く張り手をしただけ　に悠二は見えた。  
しかしそれだけで、ハンマーは押し返され、燐子は彼方まで吹っ飛ばされ、封絶の壁に叩き付けられた。

封絶が無ければ、更なる飛距離を叩き出していたことだろう。

『じつら、どつするっ。』

ドツガハンマーから聞こえる力の声が、残りの燐子達を指しているのだと気付き、キバはドツガにしか聞こえないくらいの小声で答える。

（存分にぶつ潰しゃあいい。ちよいと手助けしてくれ）

『わかった』

間髪入れずに、キバは片手に握ったドツガハンマーを両手持ちに切り替え、自分を軸の中心点に、全方位にスイングする。

「ウガア！」

紫電の鉄槌。

遠心力が付加されたその一撃だけで、優に十体もの燐子が紙屑のように消し飛んでいった。

「フンッ！」

これくらいは何でもないこと、そう誇示するかのように、自らの仕

事を片付ける。

「やるじゃない」

やや不服そうに、同じく燐子を片付けたシャナが、キバと並び立つ。二人の目線は再び、真の標的であるフリアグネへ。

「っふふ、中々だ。炎も自在法も無しにここまでやれるとは大したものだね、すばらしいよ」

下僕の呆気ない敗走にも崩れないフリアグネの余裕。キバと後ろに控える悠二はそれに引っ掛かりを覚えたが、疑念を吟味する暇は無かった。

「だが、その刃と鎚も、私に届かなければ意味が無い」

純白の長衣を揺らめかせると、再び四・五体の人形が現れる。

（人形の配置はほぼ一列）

（このままフリアグネまで押し切れるか）

図らずもシャナとキバの思考が一致する。

「おいお嬢ちゃん、俺様達は援護に回っちゃる。隙を見てあいつを叩き斬れ」

「ふーん？ えらく殊勝ね」

「つかこの形態だと援護しか出来ねーんだよ」

(……ゴメンナサイ)

(いや、お前はお前で誇れる分野があるから気にすんな)

キバットとシャナが話す傍ら、さりげなく落ち込んだ力をキバが慰める。

前述の通り、ドツガフォームは機動力に乏しい。高い防御力の代わりに、装甲にかかる重量はケタ外れ。

よって、宙に浮くフリアグネに、直接ドツガハンマーを叩き込めるほどのジャンプは不可能なのである。

「まあ、いいわ。私に当てたら承知しないわ、よッ！」

軸足に力を込め、シャナはフリアグネ目掛けて跳躍した。

キバはそれを見計らい、手近にあった瓦礫の欠片を拾い上げる。

軽く手元でそれを弄んでいると、瓦礫の輪郭を紫色のスパークが覆った。  
手首のスナップでそれを放り投げ、キバはドツガハンマーを振り被る。

所謂、野球のノックと同じ。

ドツガの力で強化された瓦礫は、ドツガハンマーの衝撃に碎けること無く、帯電したまま燐子へと投擲され、目標を粉碎する。

キバによって開けた視界の中に、シャナが飛び込んだ。

「はあっ！」

大太刀の切っ先を右後方に振り、フリアグネを一刀両断しようと思える。

「っふふ……！」

フリアグネは一枚の金貨を親指で弾く。

重力法則に従いながら、残像が連なっていく、一本のチェーンへと姿を変えた。

（あれは！）

以前、マリアンヌとかいう隣子が使用していた宝具『バブルルート』だ。

あのチエーンでガルルセイバーを封殺したことは記憶に新しい。

「!？」

案の定、ガルルセイバーと同じく、バブルルートを斬ろうとしたシヤナの贄殿遮那の刀身は、金色の鎖に絡めとられる。

「ちっ！」

「うふふ、どうだい、私の『バブルルート』は。その剣がどれほどの業物でも、こいつを斬ることは出来ないよ」

舌打ち三寸。

シヤナは鎖を斬るのを諦めて距離を詰め、持ち主たるフリアグネ目掛けて刃を走らせる。

キバが援護のために、瓦礫をスイングしかけた時だった。

「シヤナ、下がれ！」

後ろの悠二が叫んだ。

「な!?!」

「!?!」

フリアグネの驚きと共に、いつの間にか彼の手元にあったハンドベルが鳴らされる。

突如、周りからシャナににじり寄っていた人形が凝縮され、大爆発した。

「ぐ、あう!?!」

「くっ!」

シャナは地に叩き付けられ、キバも爆風と炎の余波を受ける。

即座に立ち上がり、キバは悠二を見る。

(またか)

ガルルセイバーの攻撃に気付いたのと同じ、あのハンドベルの特性にも気が付いた。

あのままシャナが突っ込んでいたら、勝負は決していた。



だが、事態はまるで好転していなかった。

「は、は、はははー!」

驚愕から立ち直ったフリアグネは、興奮を混ぜた笑い声を上げる。

「その中にあるのは、相当に珍しい宝具らしい……」

「っ!」

不気味な雰囲気にあてられ、悠二は思わず一步下がる。  
彼を庇うように、キバが前に躍り出た。

「余裕かましてらんねえぞこりゃ……、一気に決めようぜ!」

キバットの合図と共に、キバはドツガハンマーの柄をキバットに噛ませようとする。

『ドツガ・バイ……』

「甘いね」

フリアグネの音が、それを遮る。

「私が、君に何の対策も考慮していなかったと思っっているのかい？」

バブルルートのコインを持つ手で、フリアグネは器用に、長衣の袖口から取り出した黄色い『笛』を吹き鳴らす。

「ウ、グアアツ……！？」

キバが突然、地に膝を付いた。

「キバ！？」

悠二が慌てて駆け寄る。

だが、キバは悠二の声に耳を傾ける余裕は無かった。

（身体中が、痛えッ……）

キバの身体にぶれが生じ、キバフォームとドツガフォームの間を  
行き来しているように見えた。

『ば、かな……！　これは……』

「シール、フェッスルだと！？　　ありゃあ『闇のキバ』しか持っ  
てねえハズ……」

シールフェッスル。

『闇のキバ』が使用する多種族を封印するためのフェッスル。  
かつて先代キングの操る『闇のキバ』はこのフェッスルで、次狼、  
ラモン、力の三人を封じたことがあった。

キバ、キバット、力が激痛にうめく。

フリアグネは得意気に、吹き終えたフェッスルをひけらかした。

「そう、コウモリくんの言う通り、こいつはレプリカさ。『闇のキ  
バ』の持つオリジナルには及ぶべくもないが……」

苦しむキバを見ながら、フリアグネは言う。

「多種族の力を借り、その存在の力を溶け合わせている以上は、当  
然キバ本人にも影響が現れる。しばらくは動けないよ。

……やれやれ、こいつには、ただの芸術品としての価値しかないと

思っていたのだがね。まさか実際に使う日が来るとは思わなかったよ。

つぶふ、これだから因果の糸は面白い」

再びフリアグネはハンドベル　　燐子を弾けさせ、爆弾にする宝具

『ダンスパーティー』を鳴らす。

キバのすぐ側で、燐子が爆発する。

「つづく！」

地面を転がるキバを、更なる痛みが襲う。

隣にいた悠二も、爆風に引き摺られたようだが、気にしていられるだけの気力がない。

だんだんとシールフェッスルの影響は消えてきてはいるが、まだ戦えるほどとは言い難い。

(くそっ！　　キバット、一旦ドツガフォームを解除出来ないのか！？)

(無理だ！　　魔皇力が乱れ過ぎてて、下手すりゃキバの鎧がぶっ壊れちまう！)

キバットのNGと同じくして、キバは新しい爆発を聞き取る。

爆発した場所は

「しまった！」

「狙いは、兄ちゃんか！」

キバットとアラストールが声を上げた。

『!!!』

突っ伏すキバとシャナはその意味を理解する。  
その時既に、フリアグネは悠二の目の前で、歪んだ愉悦と好奇心に  
瞳を輝かせていた。

「……中に、なにが、あるのかな？」

『つく!』

うめき声を上げながらも、未だに動けぬキバ。  
片やシャナは、ダメージを押し殺し、炎髪を爆風に靡かせて、フリ  
アグネに迫る。

(殺った！)

傍目から見るキバは確信した。

だが、フリアグネは、大太刀の軌道へ、あるものを配置する。

首を鷲掴みにし、無造作に悠二を突き出したのだ。

びたり。

そんな擬音が聞こえそうなくらい静かに、シャナは大太刀を止めていた。

悠二の手前で、目標を失った刃は静止し続ける。

まるで

彼の身を案じるかのように。

フレームヘイズであるはずの、彼女が。

「っ!?!」

それに一番驚いたのは、シヤナ自身だった。  
キバは仮面の下でギリッ、と歯噛みする。

学校でした予感的中してしまった!

よりによって、この大事な局面で!

「は……はは、はははははは!」

フリಾಗネは堰を切ったように、狂笑する。

「何だ今のは? ミステスを斬らせて中身を頂こうとしただけなのに、まさか……」

まさかフレイムヘイズが刃を止めるとは！

「そうか！ このミステスには、どうやら利用価値がありそうだが！」

悠二を連れて飛び上がりながら、フリアグネは叫ぶ。

「ははは！ アラストールのフレイムヘイズ！ そしてキバ！ この“ミステス”が惜しければ、街の一番高い場所まで来るがいい……最高の舞台を用意して待っているよ！！！」

刹那。キバは立ち尽くすシャナと連れ去られる悠二、二人の表情を見た。

激しい後悔。

それが二人に共通した感情だった。

少年と出会い、変わってしまった自分への後悔。



少女と出会い、彼女を変えてしまった自分への後悔。

(……ったく、つまらねえことでウジウジ悩みやがって)

そんなもの、本当はどうでもいい悩みだったのによ。

激痛渦巻く意識の中、キバは、フリアグネが置き土産に鳴らした『ダンスパーティー』の音色を聞き取っていた。

全てを炎で埋め尽くす大爆発に、シャナとキバの影は吞まれていく。

#### 第四話・無限／天壤無窮の空・Bパート

爆発で崩れたビル（だったもの）により、路地裏は瓦礫の山と化していた。

爆弾となった燐子に使われていた存在の炎が、か細く燃えている。

封絶が解かれていないのが救いか。

と、瓦礫の一つが不自然に動めく。

「っだあ！」

周囲の瓦礫を吹っ飛ばし、キバが現れる。

多少煤けてはいるが、ドツガフォームの恩恵で、ダメージは少ない。

しかし、

「あ、危なかった！ マジ危なかった！」

今回は本当に危なかったのである。

シールフェツスルの影響により、ドツガフォームの制御が不随になつていた中で、あの爆発を喰らつたのであれば、どうなつていたかわからない。

ギリギリでキバットの制御が落ち着いたから良かったものの、危機的状況だつたのは間違いないだろう。

「ひゃあ、ヤバかつたなあ……！　フリアグネの野郎、まさかシールフェツスルのレプリカなんざ持ってやがるとは」

『“かりつど”……伊達じゃない……』

ドツガハンマーから聞こえる力の声が、僅かに疲弊しているのに気が付いた。

「力、大丈夫か？」

『だいじょうぶ。ちょっと、つかれた、だけ……』

「全然大丈夫に聞こえねーよ。一旦キャツスルドランに戻つてろ」

『……“おとこば”に、あまえる』

手に持つドツガハンマーが彫像に戻り、キャツスルドランへ飛び去っていく。

ドツガフォームからキバフォームへと戻つたキバは、ベルトから外れたキバットに話し掛ける。

「で、どうするよ？ シールフェッスルがある限り、バカ狼達は呼べないぜ」

「ああ、基本的にキバフォームでなんとかするしかないな」

「けど、あの爆発はかなりの威力だから、少しリスクの高くなりそうだぜ」

キバフォームでは、確実にダメージを負ってしまう、ということだ。

当たらなければいい話ではあるが、恐らくフリアグネはまだ燐子を控えさせている。

大群で囲まれるとなると、一人での対応は難しい。

「あ、そっぴゃ、灼眼の姉ちゃんは無事かね」

キバットが思い出し、周囲をキョロキョロと見渡す。

「多分無事だろ。爆発を直接喰らったわけじゃなさそうだし。……  
まあ、無事かどうか気にすべき点は、そこじゃないんだがな」

「えっ？」

「いや、何でもねえよ。んじゃ取り敢えず、平井を探そうか」

キバットの浮かべた疑問符を解消すること無く、キバは瓦礫の山を掻き分けて、シヤナを探す。

「生き埋めになってたら、掘り出すの面倒くさいな」と、教師にあるまじき暴言を吐いたりもしたが、程なくしてシヤナは見つかった。服はあちこちボロボロだが、命に別状は無いだろう。

(……けど)

肉体面の心配はいらない。

問題は精神面だ。

瓦礫に膝を抱えて踞るその姿は、あまりに痛々しく、今にも立ち消えてしまいそうなくらい儚かった。

甲冑が擦れる音を響かせながらキバが近づいてきても、何の反応も無い。

目の前にいるのは、見た目通り、年端もいかなかったあの少女。

「無事だったか」

口を開こうとしないシャナに代わり、アラストールが口火を切る。

「どうにかな。で、これからどうすんでえ？ 連れの兄ちゃん拐われちまったけど」

「行くしかあるまい。あ奴 坂井悠二の中に眠る宝具は、“徒”に渡れば、実に厄介なことになる」

「『零時迷子』だな」

「……本当に貴公達の情報網は計り知れぬな」

苦笑のような声を残して、アラストールは続ける。

「“狩人”は去り際、坂井悠二の存在の力を使い、封絶を施していた。

万が一を考え、零時より少し前あたりを突入の目処としたい。人質として使ったくらいだ。我々が行くまで、坂井悠二の無事は保障されよう」

「ああ、俺様達なら構わないぜ」

キバとキバットが首肯する。

「すまない。」

……この子にも少々、自分を落ち着かせる時間を与えたいのだ」

こうして三人が話している間にも、シャナは黙りつ放しだった。

キバは小さく溜め息をついて、手近にあった瓦礫を椅子代わりにする。

この場合だと、シャナと真正面から向かい合う形だ。

「何故だ」

キバが口を開くと、シャナが僅かに反応する。

出会って以来、キバは言葉らしい言葉を発していなかったし、会話はキバットに任せきりだった。

違和感があって当然である。

だが、すぐにシヤナは興味を外す。

それ以上に混沌とした感情が、自分の中に渦巻いていたからだ。

キバの仮面の下から聞こえるその声が、何処かで聞いたような声であるとも気付かないくらいに。

答えないシヤナに、キバがもう一度言う。

「何故、刀を止めた」

シヤナの肩がビクリと震えるのがキバには見えた。

「フレイムヘイズは人を守っているわけじゃないんだろう？  
世界のバランスを保つ存在の筈だ。 世

そのフレイムヘイズが何故、刀を止める。

坂井悠二は、お前にとっては“なんでもないモノ”だろうか？」

キバの言い草に、シヤナの中で激しい怒りが込み上げ、一瞬で消える。



キバの言うことは正しい。

自分だってそんなの、言われるまでもなく理解している。

なのに、どうして私は刀を止めたんだろう？

いや。

(私は、わかってる)

刀を止めた理由を、わかっている。

ただ、認めたくないんだ。

「消えて欲しくなかったのか？」 坂井悠二に「

シヤナの心情を読み取ったかのように。キバは言う。

「無くしたく、なかったのか」

「……わからない」

シヤナがようやくやく返答する。

キバはそれを聞き、やや投げやりな口調で言う。

「戦うのが怖いなら、戦うことで、坂井悠二を失うのが怖いなら、それもいい。

戦わないのは 別に悪いことじゃない」

足手まといになるなら来るな。

言外に、そう言いたいのがわかった。

シヤナは、自分の存在意義をかけて、キバに言い返した。

「戦う」

伏せていた顔を上げて、精一杯気丈に振る舞う。

「私は、アラストールのフレイムヘイズ。  
私が、そうあるように望んだ、だからある存在。  
それが、全て。それが、私」

「それが全て、か」

しかしキバは、シャナの宣言を「馬鹿馬鹿しい」と一蹴する。

「心は、そんなに簡単なものじゃない。

一つの目的や存在で全てを満たすなんてことは、絶対に有り得ない。

……そんな状態で戦っても、お前はまた同じことを繰り返すだけだ」

キバは、シャナが心に纏う仮面を正確に読み取り、それを剥がして  
いく。

「自分の気持ちを偽るな。気丈に振る舞うフリをするな。

口に出してみる、少しは楽になる」

最後の言葉は、とても優しい口調で紡がれた。

シャナの中で、再び感情の奔流が暴れ出す。

きりきりとした痛み、戦いの時とは違う痛みが、自分の中の何かを傷つけていく。

やがてシヤナは、虚ろな表情で、酷く掠れた声で、呟く。

「……わからない」

さっきと同じ答え。

だがキバには、それが全く違う感情から生み出された答えだということがわかった。

275

「全然……わからない。なんで…私は、こんなはずじゃ、ないのに。ねえ……“これ”って何なの？

何で私のことなのに、わからないの？

それさえも……わからない。

……ただ」

「ただ？」

「苦しい」

それは、いままでシャナが発したどんな言葉よりも感情の起伏に満ち、同時に、いままでのどんな言葉よりも、悲壮に溢れていた。

「……そうか」

キバが答え、それきり二人は長い間、互いに沈黙したままだった。

シャナは俯き加減のまま、キバは瓦礫に腰かけたまま、キバットとアラストールさえ喋らないまま、時は流れていく。

「……世の中に、正しい選択は無い」

突然のキバの言葉に、シャナは再び顔を上げる。

「誰が見るかによって、その選択は正解も間違いにも成り得るからな。

だが人は、例え他人から何を言われようが、自分の選んだ答えを貫き通さなきゃならない。

それは選んだ者への責任だ」

「……お前は」

シヤナが絞り出すように言う。

「私は、間違えたと思う？」

「お前はどっと思っただ？」

少し意地悪な口調で、キバは問い返す。

「“ミスセス”、坂井悠二を助けたことは、『炎髪灼眼の討ち手』  
にとって間違いか、正解か」

「……」

答えは見つからなかった。

いつもなら、間違いで切って捨てられるはず。

でも、今は。

「人は前を向くもの。答えが欲しいなら、進むしかない」

答えを躊躇うシャナに対し、キバはひよいと瓦礫から降りる。

「本当はな、他人の眼なんかどうでもいいんだよ。

大切なのは、その選択をしたことを、自分がどう思い、どう変えていくかだ。

選択は正誤が存在しないがゆえに、いくらでも変えられる。

坂井悠二を助けたことを正解にするか、間違いにするかは

お前次第だ、『炎髪灼眼の討ち手』。

ついとシャナをキバは指差す。

「私、次第」

復唱するシャナにキバは頷き、仮面の下で眼を閉じる。

遠くから聞こえてくる、悠二の心の音楽。

シャナと同じように、迷いが聞き取れるかと思いきや、それとは違  
う、一貫した強い意思が聞き取れた。

これは、シャナを呼んでいるように思える。

『僕は、大丈夫だから』と。

『だから、君は全力で戦えばいい』と。

ただ、強い覚悟。

(面白い音楽だな、坂井)

僅かに笑い、キバはシャナに向き直る。

「……さて、そろそろ行くぞ」



シヤナは顔を強張らせる。

また同じことをしないだろうか。

戦うことへの緊張から来る表情だ。

「そう緊張するな。

答えを、探しに行くんだろっ?」

キバの覚悟を促す声。

シヤナはほんの少し、緊張が和らいだ気がした。

「……………うん、行く」

弱々しく、しかし誤魔化しもない声音で、シヤナは頷いた。

選択の責任を、取るために。

フリアグネを倒すために。

悠二の元へ、行くために。

（来た！！）

御崎市のとある廃ビルの屋上。

フリアグネと傍らに並ぶマネキン型の燐子の真正面。

夜景に煌めく月を背に、二つの影が戦場に着地する。

眼も覚めるような真紅。

炎髪と血霞の鎧。

ファンガイアの王、キバ。

片や、アラストールのフレイムヘイズ。

「シャナー!!」

悠二は、一声だけ。

「銃に当たるな!!」

叫びが、マネキンの蹴りで途切れる。

見ると、フリアグネの右手にはまた新たな宝具。

リボルバータイプの拳銃のようだ。

「む、『フレイムヘイズ殺し』の宝具か」

アラストールが状況を理解する中、

「……………」

悠二の声を聞いたシャナが笑ったのを、キバは見た。

悠二の決意と覚悟の音楽。

それはシャナの心を奮わせ、嬉しさという形で満たしていく。

「はは、いいのかい？ 大事な…刃を止めるほどに大事なミスレス  
なんだろう？」

フリアグネの揺さぶりにも、もはや動じなかった。

悠二の音楽を、決意と覚悟を感じたからこそ、助けにいかない。

（ただ、戦う！！）

灼眼に力が戻る。

大太刀を構える姿に、憂いや陰りは無かった。

「そうだ。それでいい」

呟いて、キバもまた拳を構える。

「行くわよ!」

「ああ!」

その言葉を皮切りに、戦いの火蓋は落とされた。

「……やはり道具は道具か。  
なら、死ね」

フレイムヘイズ殺しの宝具『トリガーハッピー』の弾丸を横っ飛びでかわし、フリアグネに向かって、キバとシヤナは地を踏み出す。

その軌道を、燐子達が阻む。

『邪魔!』

二人の刀と拳が、燐子を一撃で粉碎する。

その隙に距離を取ったフリアグネが、ハンドベルを振った。

「弾ける！」

二人に迫っていた燐子が凝縮し、爆発した。

シヤナはそれを前に跳躍して回避する。

と同時に、爆風がシヤナの背中を押した。

（爆風を利用して加速だと！？）

燐子の影に跳躍して隠れ、難を逃れるが、ふと気が付く。

（キバは何処だ？）

刹那、フリアグネは何処かで存在の力が増長するのを感じた。

出所は、夜空。

『WAKE・UP!』

「つく!?」

天空から、キバのキックが迫っていた。

キバは爆風を隠れ蓑にし、キバットのフェッスルで右足の翼、ヘルズゲートを解放していたのである。

全くノーマークだったタイミングでの『ダークネスムーンプレイク』が、三日月をバツクにフリアグネへと叩き込まれた。

「ちい、嘗めるな!」

傍らにいる燐子を下げさせ、フリアグネはダークネスムーンプレイクを真っ向から受け止める。

フリアグネ自身の存在の力と、キバの魔皇力がぶつかった。

「ご主人様!」

ウエディングドレスを纏うマネキン “燐子” であるマリアンヌが叫ぶ。

キックの重圧から、フリアグネの足元にキバの紋章が浮かび上がるものの、決定打には至らない。

(さすがは“王”、宝具を使うトリッキーな戦法ばかりじゃないか)

キックの体勢を止め、キバはフリアグネから距離を取る。

フリアグネは追撃に備えるが、

(……………?)

キバは動かなかった。

動く代わりに、キバはマリアンヌを指差す。

「……………その隣子が、お前の大切な存在か？」

予想外の質問に、フリアグネのみならず、マリアンヌも驚きの色を隠せないようだった。

「『都喰らい』で得た存在の力　使い道は、その隣子を一つの存



在にすることか」

淡々と、だが妙に真摯な音程で紡ぎ出されていく言葉に、フリーアゲネは、いつもの余裕を含んだ笑みを消して答える。

「ああ、そうだ」

「そうか」

短く言つて、キバは再び拳を振るつ。

フリーアゲネがそれを受け止め、会話は更に続く。

「俺に、お前の願いを否定する資格はない。

だが俺にも、お前がその隣子を大切にするように、大切にしたい人達が、守りたい人達が大勢いる。

お前の願いがその人達を傷つけるなら 俺はお前を倒す」

「……それは、王の代行者としての責務だからかい？」

「責務も何も関係ない。

大切だから 守りたいから守る」

戦う理由など、それで十分だ。

フリアグネはしばらくキバを見て、僅かに残念そうな表情を浮かべる。

「キミとは、もう少しばかり話がしてみたかね」

「無理だろ。俺達の行動理由は、合致しているように見えて、笑えるくらいに背反なんだ」

互いにこれが最後と言わんばかりに、閉口する。

キバがもう一度、ウェイクアップフェッスルを取り出しかけた時、二体の燐子が、キバに飛び掛かっていた。

『やばっ！』

キバとキバットが叫ぶのと、フリアグネがハンドベルを鳴らしたのが同時だった。

耳をつんざく爆音と共に、キバは舞台から転げ落ちる。

「くっ、痛ってーな、畜生……」

直撃は避けたが、ダメージは大きい。

立ち上がれはするが、やはりアレを完全に防ぐにはドツガフォーム  
しかなさそうだ。

そこでふと、こちらに向かってくる人影に気が付く。

(坂井!?)

何処か急いでいるように見える。

また、『零時迷子』の力で何かに気が付いたのか？

だが、その直ぐ近く、シャナと戦う燐子の一つが爆発しかけていた。

あのままでは、悠二が巻き添えをくってしまう。

だが、こちらから悠二を守るには、距離が有りすぎる。

「チッ、来いブロン！」

『ブロンブースター！』

黄色いフェッスルを取り出し、キバットが軽快な音色を吹き鳴らす。

と同時に、燐子が凝縮し、爆発した。

「う、わっ！」

悠二が迫り来る爆風と爆炎に目を瞑った。

だが、いつまで経っても衝撃は来ない。

爆発音はしたはずなのに、衝撃のベクトルが何かに妨げられたかのようだった。

「……………」

恐る恐る目を開けると、悠二の眼前には、金色の巨大な彫像が鎮座していた。

この彫像が、自分の盾になってくれたらしい。

キバが呼び寄せたゴーレムと呼ばれる人造モンスター『ブロン』だ。

本来の用途とは違う使い方ではあるが、アームズモンスター達によるフォームチェンジを封じられている今、悠二を守るモンスターはこのブロンくらいだったのだ。

呆ける悠二に、キバが駆け寄る。

「あ、ありがとう……」

「礼はいい。それより、何か俺とあいつに知らせたいことがあるんじゃないのか」

単刀直入に聞くキバに、悠二は初めて聞くキバの声に気を払うこともなく、焦りを混ぜた口調のまま答える。

「あのハンドベルを壊さないと！ 『都喰らい』はもう始まっている！」

「！ ぞういことだ！？」

悠二によると、あのハンドベル『ダンスパーティー』が鳴らす音色には二つの種類があるらしい。

一つは燐子の爆破に使う音色。

もう一つは自分の鼓動 つまり、トーチの鼓動を加速させる音色。

燐子を爆破させる能力はあくまでフェイク。

フリアグネの意図は、『トーチの鼓動を加速させ、御崎市にあるトーチ全てを一齐爆破させること』。

二世の話が克明に蘇る。

棺の織り手は、潜んだ都の人口の一角を喰らい、トーチを一齐に分解し、そこから出来た歪みを利用して、街全体を莫大かつ高純度な“存在の力”に変えた。

「チツ……、そういうことか。完全に裏をかかれたな。  
だが、ハンドベルの音色がキーになるなら」

「そうだよ。シャナの封絶があれば、音色を遮断出来るはずなんだ！  
事実、フリアグネは封絶を使ってない。いや、音を遮断してしまう  
から、使えなかったんだ！」

なるほど。

確かに筋は通る。

「坂井悠二、お前はそのことをあいつ 『炎髪灼眼の討ち手』 に  
伝えてもらいたい。」

「燐子は俺が極力抑えといてやるが、行けるか？」

「うん、大丈夫！」

悠二の真摯な返答に、キバはふと問いかける。

「一つ聞かせてくれ。」

「お前は何故、そこまで頑張るんだ？」

「お前はいずれ消える。」

お前の行動は、これからの世界には関係のないものだろう？」

「それがなんだ！」

キバの言葉を、真っ向からはね除ける。

「僕が動かなきゃ、シヤナが死ぬかもしれない！」

僕が動けば、シヤナを助けられるかもしれない！」

僕が本当に生きているかどうか、僕がいずれ消えることも関係ないんだ！」

動ける今があればいい！」

今、僕がやらなきゃいけないことは」

シヤナを生かす、それだけだ！」

ついこの前、CDショップで会った時とは比べものにならない、強く素晴らしい音楽が、キバの心を揺らす。



(ああそうか、そうだったよな)

キバとして戦ってきた中で、幾度も教えられたこと。

身を持って、体験したこと。

人は いくらでも変われるのだ。

「 ああ、気に入ったぞ。お前の答え！」

キバは仮面の下で口端を吊り上げる。

「邪魔なヤツは俺が倒す。  
お前の覚悟、見せてみる」

「ああ！」

キバと悠二は頷き合って、ほぼ同時に駆け出す。

もちろん、燐子達が襲いかかってくるものの、それらは纏めてキバが引き受けた。

悠二は思惑通り、その脇を走り抜けていく。

悠二とシャナの間、もう燐子はいなかった。

(燐子の数も残り少なくなってきたな……。この分なら、都喰らいが始まる前に、フリアグネ当人を叩けるかも知れない)

そうでなくとも、悠二がシャナに今のことを伝えられれば、こっちの勝ちだ。

あの『フレイムヘイズ殺し』の銃があったとしても、こちらは二対一。

大丈夫、もう負けはない。

群がる燐子の一体を砕きながら、キバがそう確信した時だった。

「駄目だ、マリアンヌー!!」

フリಾಗグネの悲痛な叫びが轟く。

見れば、悠二の進行方向。つまりシャナに向かって、爆発の渦中から、マリアンヌが特攻をかけていた。

(何故だ?)

キバは燐子達を相手にしながら疑念を募らせる。

確かに燐子は残り少ない。

『都喰らい』が追い付かず、このままフリಾಗグネが討滅される可能性も出てきているが……。

(もしフリಾಗグネのためならば、特攻はあまり意味がない。爆破しようにも、それより早くシャナがヤツを叩き斬る。足止めは最低でも数分は持たせなければ無意味。確実に相手を封じられなくては)

浮かんでは消えていく思考の中で、キバは一つの答えに辿り着いた。

ある。

今まで見た情報から、シャナを足止め出来る方法が一つだけ。

フリアグネが狼狽えたのもわかる。

もし、この方法を使えば。

(くそっ、認めてやるよ！)

お前らの『愛』は本物だ！

大切な人のために、命をも賭けられる覚悟があるんだからな！

「坂井悠二、そこから下がれ！ 『炎髪灼眼の討ち手』、その隣子を斬るな！」

キバがありつたけの声で叫ぶ。

『っー』

シャナ、悠二がそれに気が付くがもう遅い。

シャナの大太刀は、マネキンのマリアンヌの身体を二つに裂いていた。

「ご主人様のために……“それ”が欲しかったのよ!!」

分かれたマネキンの体の中から伸びた金色の鎖が大太刀に巻き付き、そのままシャナの身体を絡め取った。

「う!?!?」

マネキンの中から、最初に見た時と同じ、粗末な人形の“燐子”マリアンヌが現れる。

その手には、武器殺しの宝具『バブルルート』の鎖が握られている。

「しまった、本体か！」

アラストールの叫びも虚しく、鎖はほどけない。

(間に合うか!?)

キバがシャナ達の元へ足を踏み出す。

しかし、

「なにっ!?!」

残った二体のマネキンが、キバを羽交い締めに使っていた。

このまま巻き添えにする気が。

力を込めるが、逃れられない。

先の爆発で、予想以上にダメージを負っていたようだ。

なら、せめて。

「ブロン！」

キバが命じると、静止していたブロンの目が輝き、空を滑るように飛び立つ。

「坂井悠二、そいつの影に隠れる！」

「っ！ でもそれじゃ、シヤナもあんたも！」

「俺達に爆発を防ぐ手段は無い！」

坂井悠二！

“お前がやるべきこと”は何だ！

その言葉を聞き、悠二は躊躇いを拳を握り締めることで耐え、飛来するブロンとの距離を詰める。

時間的にギリギリ。

間に合うかは運次第。

「さあ、今ですご主人様！」

マリアンヌが促す。

だが、フリアグネは恐怖で跳ね上がる鼓動を聞きながら、ハンドベルを鳴らすことを躊躇している。

この一振りで消える。

大切な、人が。

「フリアグネ”様！”

マリアンヌの一際大きな叫びが、フリアグネを動かした。

それは燐子という仮初めの存在でありながら、自分達となんら変わ  
りない。

マリアンヌがフリアグネに捧げる、心の音楽だった。



「マリアンヌ！」

ハンドベルが、鳴った。

マリアンヌ、そしてキバに纏わる燐子が凝縮。

シャナ、キバを至近からの爆発で吹き飛ばした。

破裂の余韻を残す夜気の中、キバは瓦礫の中でうめいた。

「う、ぐ……」

力を振り絞り、瓦礫から這い出るが、被害は甚大だ。

身体中あちこちにガタがきている。

「キバット、無事か……？」

「あ、ああ……なんとか、な」

相棒の安否を確かめ、キバは現状を把握する。

燦々たる有り様だった。

金網も昇降口も、全て消し飛んだ屋上の景色が広がる。

「……うつつ、うつつ……私のマリアンヌ……私の、マリアンヌ！」

(……フリアグネ?)

キバは、悲痛な嗚咽と叫びを聞き取る。

見れば、ここから瓦礫の山一つを挟んだ位置。

フリアグネが涙を流しながら、ぼろぼろになって膝をつくシャナに、リボルバーの銃口を向けていた。

「できるとも、するとも、マリアンヌ！　ここで得られる力、全てを使ってでも、君を蘇らせてみせる……そして」

右手に銃『トリガーハッピー』。左手にハンドベル『ダンスパーティー』。

フレイムヘイズ殺しと、『都喰らい』の二つの悲願を握り締め、フリアグネは叫ぶ。

「この世で一個の存在にしてみせる！

……そして、いつまでも二人で生きよう、二人で……」

身を擲ったマリアンヌへの答え。

フリアグネの心の音楽は、悲しみに裏打ちされた決意に満ちていた。

「……だから、まず、死ね」

トリガーにかけられた指に、力が籠る。

「フレイムヘイズ……この、討滅の道具が……！」

シヤナが歯噛みしたのがわかった。

大太刀は手元に無く、目の前には必殺武器。

何も、出来ないのだ。

(ちく、しょう……動け、動きやがれ!！)

キバが気力を奮い立たせる。

だがそれでも、間に合わない。

その時。

「封絶だ!！」

瓦礫に埋もれたブロンの影から、躍り出た悠二の叫びが上がった。

「っな!？」

フリアグネの驚愕。

「……………!!」

シヤナは一瞬で、悠二が言いたいことを全て理解した。

「止め……………!!」

「封、絶……………!!」

紅蓮色の炎が視界を埋め、因果から空間を遮断する。

これで、『ダンスパーティー』の音は、もう外には届かない。

「私の計画を、見破ったというのか……………?」

その傍ら、シヤナが最後の力で立ち上がる。

「っ……………!!」

フリアグネは即座に、トリガーハッピーの銃口を向け直す。

「さ、せるかあ！！」

シヤナに触発されるかのように立ち上がったキバは、両手を大きく広げるような構えを取る。

すると、キバの足元に、赤いキバの紋章が浮かび上がった。

「っはあ！！」

キバの意思で、紋章は瓦礫の大地を伝い、瞬時にフリアグネの背後に張り付き、拘束。

「ぐ、あああ！！ くっ、魔術か！」

赤いスパークと共に、キバの紋章はフリアグネを磔にし、自由を奪う。

「キバット！」

「おつよ！！」

今なら、シールフェッスルは使えない。

『ガルルセイバー！』

青いフェッスルの音色が響き、ガルルの彫像を呼び寄せる。

だが、それを手にしたのはキバではなかった。

「行け次狼！」

『わかつている！』

次狼の声を発しながら、彫像はガルルセイバーに変型。

封絶内、丸腰であるシャナの手に収まった。

「貸してやる、使え！」

「……………！！！」

キバの声に頷き、シヤナは未だ磔にされているフリアグネに、ガルルセイバーを構える。

「そう、私はフレームヘイズよ」

シヤナは自身を誇り、ガルルセイバーを振り抜いた。

左手。

ハンドベルが、フリアグネの指ごと両断され、宙を舞った。

「……………あ」

その光景の意味を、フリアグネは深い虚無感と共に理解する。

ハンドベルが無い。

『都喰らい』は果たせない。



大切な人は　もう戻らない。

「っああああああ!!」

聞くに絶えない、様々な感情が渦巻く絶叫。

キバの紋章が消え、自由になったフリアグネはトリガーを引き絞り、乾いた銃声が轟く。

312

シャナが撃たれた時、キバは見た。

シャナと悠二、お互いがお互いを見て、笑い合っていたのを。

全てを理解し、笑い合っていたのを。

(……全く)

世話のかかる教え子だ。

シニカルに笑い、キバの意識は身体中を襲う激痛を感じながら、闇に沈んだ。

「おい奏夜、起きろよ！　なんかヤベーぞ、早く逃げねーと！」

ベルトから外れたキバットが、倒れたままピクリとも動かないキバを揺する。

シャナが撃たれ、ビルから真南川に落下した時。

“それ”は起きた。

シャナの落ちた水面から、赤い火の粉からなる波紋ができたのだ。

生み出された赤い波紋が広がり、急速なスピードで御崎市全体を覆っていったのである。

「何が……！？」

この現象は悠二やキバットのみならず、フリアグネさえも理解不能らしい。

キバットが危機感を覚えるのも、当然だった。

そこでキバットはふと、ビルの瓦礫の隙間から、赤い影がこちらの様子を伺っているのを見た。

「あつ、シューちゃん！」

キバットにシューちゃんと呼ばれた生き物は、有り体に言うなら赤いドラゴンだった。

正式名シュードラン。

キャツスルドランと同じ、ドラン族の幼生体であり、その未発達な力から、キバの使役モンスターのの中で唯一、フェッスルを使い呼び出すことが出来ないモンスターだ。

「ナイスタイミングだぜシューちゃん、早く来てくれ！　　奏夜を運び出すから！」

キバットの頼みに頼き、シュードランはキバの近くまで寄ってきて、その身体を口にくわえて、自身の背中に乗せて羽ばたく。

ビルの屋上から脱出し、ほっと一息つくキバットの耳に、馴染みのある咆哮が届く。

ギヤオオオオ!

「おお、キャツスルドラン！」

迎えに来てくれたキャツスルドランの背中へとシュードランは着地する。

「よう、し」苦勞さん

「うわ、お兄ちゃんボロボロだね」

「ぐっ、たり」

その背中の展望台には、次狼、ラモン、力の姿があった。

最も、次狼は一度シャナと一緒に川へ落ちたらしく、タキシードがずぶ濡れになり、力は未だにシールフェッスルの傷が生々しく残り、無傷なのはラモンだけ、という有り様だったが。

「お前ら、なんで」

キバットの問いかけを、次狼は手で制した。

「いいから黙って見てろ。」

……これから面白いものが見られるぞ」

ニヤリと笑う次狼。

ふとキバットは、キャッスルドランからやや離れた場所に位置するビルに視線を戻した。

そして見た。

“それ”を。

「な、なんだありや……!？」

「ほら、お兄ちゃん起きて」

「うえいく、あつぷ」

ラモンと力が身体を揺すり、キバの意識は覚醒した。

「あ、あれ？　ラモン、力。なんでお前ら……」

上半身を起こそうとするが、直ぐ様針のような痛みが走り、身体を  
擦る。

どうやらキャッスルドランの屋上らしい。

倒れている間に運ばれたのか。

「僕らのライフエナジーを分けてあげたから、傷は直ぐ治ると思う

「よ」

「あ、ああ。ありがとう……」

未だに現状が理解出来ないまま、キバは自分を乗せていたシュードランから降りる。

「お目覚めのようだな、我が王よ」

次狼が薄笑いを浮かべながらキバを見る。

「次狼……あつ、そうだ！ あいつらは無事なのか！？ 平井は、坂井は！？」

「そういきり立つな。……今に分かるさ」

不適な態度を取る次狼に、首を傾げるキバ。

とそこへ、キバット、そしてキバーラが飛んでくる。

「おい奏夜、寝てる場合じゃねえぞ！」

「奏夜奏夜！ 見て見て、さっきまで奏夜のいたあのビル！」

二人に促され、キバは廃ビルへと視線を移した。

この距離からなら、屋上にいるはずのフリアグネ、そして坂井が小さく見えるだけ……。

のはずだった。

「……………は？」

思わず我が目を疑った。

改めてキャッスルドラムから見える夜景を見渡す。

いや、それはもはや夜景と呼べるのかも疑問視される。

空が紅蓮色に燃えていた。



御崎市の全域を巻き込み、煌々と燃え上がる美しい炎。

これが封絶だと気付くのに、時間はかからなかった。

だが、それは些細な異常だった。

この天壤無窮の空でさえも、

キバの目の前に鎮座する、巨大な影には敵わない。

「まさか“天壤の劫火”の顕現を拝める日が来ようとはな……」

次狼の感嘆を聞き、キバは眼前に広がる“異常”を臍気に受け入れる。

形容することさえ、鳥澁がましい。

灼熱に包まれた漆黒の塊。

炎で型どられた紅蓮の翼。

キバがかるうじて言えるのはその程度。

後は、圧倒的な存在感だけ。

「なん、てものを……」

なんてものを、あの小さな少女はその身に宿していたのだろう。

そう。これこそが、シャナが契約する紅世の魔神アラストール。

またの名を、

「あれが、“天壤の劫火”……」

キバは呆然と、その名を呟いた。

「……“狩人”フリアグネ……己が持てる宝具を弄んだがゆえに、  
墓穴を掘った愚かな王よ……」

低い、遠雷のように重い声が轟く。

遠くからその声を聞くキバ達も、威厳あるその声に威圧感を受けた。

「その宝具……我が身を目覚めさせることで、契約者の器を破壊するものだったとは……恐れ、かわしていたことも、今となっては笑うべきか……いや……」

僅かに苦笑らしい轟きを残し、ゆらりと炎に包まれた巨大な腕を、フリアグネに向けた。

「……貴様には、我が身の顕現が、何を意味するのか分かるか……？ 我が身が目覚めて尚、ここに顕現し続けていられる理由が分かるか……？ その宝具による小細工は、他のフレイムヘイズには通じて、この子には効かぬ……」

アラストールは、自らの契約者を誇り、唸る。

「効かないって……どうということだ？」

傍らに立つ次狼に、キバは問う。

あの銃『トリガーハッピー』の仕組みはわかった。

契約者の中に眠る王の休眠を破り、その王の存在を受け入れ切れなくなった器　フレイムヘイズの破壊を可能とする宝具。

契約者が死に、休眠を破って顕現した王もまた、消費する存在の力故に、“紅世”へと帰還することが通例だと　先代キングの日記

にも書かれていた筈だ。

キバの質問に対し、次狼はつまらなそうに告げる。

「簡単な話だ。

あの炎髪のがきが“天壤の劫火”を容れるに足る器を持っていた  
それだけのことだろう」

「なっ……」

あんな圧倒的な存在を包括できる『器』。

そんなものが、この世に存在し得るのだろうか。

あの少女は、それほどまでに“強大”な存在のだろうか。

『炎髪灼眼の討ち手』。

人智を越える“王”をもその身に宿す、『偉大なる者』。

畏敬と畏怖を入り混ぜながら、キバ達はこの戦いの結末を見届ける。

身動きすら許されないフリアグネを、“魔神”は見据える。

「受けよ……報いの、炎を」

アラストールからすれば、吐息の一撫で。

ただそれだけの動作で、屋上全域が纏めて吹き飛ばされた。

裁きの焔が、“狩人”を焼き付くした。

マリ、アンヌ。

弦を一本弾いただけのような、儂い音色。

心の音楽を聞き取るキバだけが、彼の零れ落ちるような断末魔を聞いた。

いつの間にか封絶は解かれていた。

キバはシュードランに乗り、焼き払われたデパートの屋上に来ていた。

その一角に、仰向けに横たわる悠二と、その手を取るシャナがいた。

アラストールの炎の巻き添えを喰うことになった悠二だが、どうにか無事だったらしい。

恐らくは、掌の中にあるフリアグネがつけていた指輪のおこぼれなのだろうが、キバにはよくわからなかった。

しかし、それも意味のない話だ。

それに関わらず、もう悠二の存在の力は消えかけている。

時間切れ、だ。

「シヤナ」

「なに」

「ずっと考えてたことの答えが……やっと出たよ……消えてしまう  
いつか、なんて、どうでもよかったんだ……今いる僕がなにをする  
か、だったんだ」

キバは敢えて近付かず、一歩離れた場所から、二人の交わす会話を  
聞いていた。

「……自分が何者でも、どうなるうと、ただやる、それだけだった  
んだ……」

シヤナはくすりと笑う。

「バカな悩み」

「そうだな……やったことも、あんまり格好よくなかったし」

「うん、格好悪かった。でも……」



笑ってくれたね、最後に。

穏やかな顔で、シャナは告げる。

「ありがとう」

キバはなんとなく、この時点でシャナの考えていることに気が付いていた。

気が付いて、笑った。

「シャナ」

「なに」

「お願いが……あるんだ、けど」

「なに」

「シャナって、名前。ずっと、使って……くれないかな」

シャナは返事をせず、ただ笑って頷いた。

それだけで全てを察し、満足そうに悠二は目を閉じた。

最後の時 零時を迎える。

「……っあははははははー!」

「っく、はははははー!」

「……………え?」

シャナとキバ、二人分の笑い声で、悠二が目を開く。

呆然と、自分の身体を見る。

消えかけて、いない。

トーチの灯も、元の明るさ。

「驚いた？　なぜ私たちが襲撃を待ってたと思う？」

「ふ、ふ、万が一のときを考えての措置だったが、こつも場面と時間が重なると、安堵よりも笑いが出るというものだ……ふ、ふ、ふ」

「ほら、元通りだ。坂井悠二」

キバに軽く背中を叩かれた悠二は、わけがわからないという風に慌てる。

「な、なな、何がどうなって……？」

「おまえ、一つ忘れていたでしょう？　大事なこと」

「？」

「貴様の“ミステス”としての中身のことだ」

「それ」

キバがトーチの灯を指差す。

「その名は『零時迷子』」

「零時……迷子？」

「かつて、一人の“王”が生み出した宝具だ。これを宿したトーチは毎夜零時を迎える度に、その日の内に消耗した“存在の力”を取り戻すことが出来る」

「うむ。封絶の中で動けるのも、鼓動を感じるのも当然……時の事象全てに干渉する“紅世の徒”秘宝中の秘宝だからな」

真夜がキバに、警鐘を促していたのも、このためだった。

もし紅世の徒がこれを得れば、“存在の力”の消耗を気にせず、力を振るえるという代物だからだ。

「つまり、おまえにはまだまだ、私たちに見届けてもらえるだけの未来があるってことなのよ、“悠二”」

初めて、シヤナは悠二の名を呼ぶ。

悠二がそれに気付き、シヤナは悪戯っぽく笑う。

「……あ、それじゃあ……」

「つむ、しばらく貴様という危険物を、この街で見張ることにする」

「そういうこと。なによ、文句があるっての?」

悠二は首を振る。

「ない」

「よろしい」

返事に満足したシャナが差し出した手を、悠二はしっかりと取り、立ち上がった。

(……フツ、一件落着か)

キバはそれを見届け、仮面の下で笑いながら、近くに待たせていたシュードランの背中に乗った。

「あつ、キバ！」

羽ばたきかけるシュードランに乗るキバに向かって、悠二が叫んだ。

「ありがとう！」

キバが驚いたように、シャナと悠二を見る。

「剣、助かった」

「うむ、世話をかけたな。ファンガイアの王よ」

シヤナとアラストールも礼の言葉を述べる。

「……………」

キバは無言のまま、手を軽く挙げてそれに答える。

(嬉しいなら嬉しいって言えばいいのによ)

(うるせえ)

キバットの小声を突っぱね、シヤナと悠二が見守る中、キバを乗せたシュードランはビルの影に消え、見えなくなった。

翌日のカフェ・マル・ダムール。

「なるほど。では“紅世の王”とやらはもう倒れたといふことか」

「そついつことになりますね。

……うう、やっぱり身体のあちこちが軋むなあ」

身体のあちこちを揉み解しながら、奏夜は嶋への報告を続ける。

ライフエナジーで回復力の底上げはしたものの、さすがにあの傷は一日で治るほど浅いものではなかった。

しかも、授業は容赦なくやってくる。

結局奏夜は身体を襲う痛みに耐えながら、授業をする羽目になった。

公務員も甘くないということだ。

ただ、命張って街を守った結果がこの激痛、というのは、いささか理不尽と思わないでもなかった。

「だが、キミの話では、これから新たな戦いが始まるということだ  
つたが」

「だから、あくまでも予想ですつてば。

起こるかも知れないし、起こらないかもしれない。



俺としちゃ、後者の方がありがたいんですがね」

「ふむ。そう言えば、フレイムヘイズの少女についてはどうする気なんだ？　やはり、キバの正体を明かして、これからも共に戦うのか」

「さあ、一緒に戦うかどうかについては何とも。向こうの事情もありますし」

今日も昨日となんら変わらず、シャナと悠二は学校に来ていた。

その際、吉田がシャナに対して「負けないから」発言をしたり。

吉田に少し心動かされた悠二に対し、シャナが不機嫌（という名のヤキモチ）になったり。

様々なラブコメ展開があったりしたのだが、それはまた別の話だ。

「ただ、正体は隠して置こうかと思ってますよ。その方が面白そうですしね」

「……真面目な話をしてるんだが」

「真面目な話ですよ。」

それに、もしあいつらが敵に回った時、俺の正体がバレてない方が都合がいいでしょう」

敵に回るなんてことは万に一つもないとは思っけれど。

それは今回の戦いでよくわかった。

「まあ取り敢えず、気を抜き過ぎず、張り詰め過ぎずってことで」

「ああ、わかった。今回は役に立てなかったが、引き続き『素晴らしき青空の会』もキミに尽力しよう」

今後の方針を纏め終えて、奏夜と嶋は頷き合う。

「さて、と。一先ずは厄介な仕事も片付いたことだし、これから食事でもどうかね。」

恵くんと由利ちゃんも誘ってあるんだが」

嶋の申し出に、奏夜はぼつの悪そうに「あー、すみません」と頬を掻く。

「これから野暮用があるんですよ」

「野暮用？」

「ええ」

奏夜は片手に下げたバイオリンケースを見せる。

「ちよつとそこまで、演奏をしにね」

ひしゃげたドアを蹴り破ると、未だに瓦礫で埋まった屋上の景色。

嶋と別れ、フリアグネと戦ったビルの屋上に、奏夜は再び足を運んでいた。

「……なんで俺はここに来ちゃうかなあ」

誰に言うでもなく呟き、奏夜はケースを開け、中身を取り出す。

父の遺作にして、最高傑作　ブラッディローズ。

弓を弦に当て、奏夜の演奏が始まった。

美しい調べを奏でながら、奏夜は思う。

（やり方が違うだけで、俺とあいつは同じだったのかも知れない）

フリアグネや棺の織手と同じく、奏夜もかつて願った。

過程は違えど、その願いで得たかったものはただ一つ。

『大切な人の存在』。

一人は大切な存在との子を授かりたかった。

一人は大切な人に、確かな存在の力を与えたかった。

そして、一人は大切な人を取り戻したかった。

時間を歪めてでも。

(…………だからこそ)

奏夜はフリアグネの願いを止めようとしても、否定はしなかった。

ほんの少しだけわかっていたからだ。

大切な人と思う“どうしようもない気持ち”が。

フリアグネがマリアンヌを想い、マリアンヌがフリアグネを想う“愛情”が。

いずれは、あのフレームヘイズの少女も知るだろう。

彼女が“ミステス”の少年に向ける感情が何なのか。

それが果たして、奏夜やフリアグネのような結末を迎えるのかどうかはわからない。

(俺に出来るのは、ただあいつらを選択の岐路に導くこと)

それが今の奏夜の仕事であり責務。

かつて誰かを愛した自分が、違う誰かの幸せを願うことは、なんら不自然なことではない。

できるなら、あの“紅世の王”と“燐子”にも、幸せになってもらいたかったけれど。

その幸せを踏みにじった自分がそれを言うのは、凶々しいだけだ。

『 ポロン 』

弦を一本弾き、演奏を終えた奏夜は、夕暮れの空を見上げる。

捧げた調べは鎮魂歌。

もしかしたら、分かり合えたかも知れない二人に向けた、せめても  
の贖罪。

「狩人” フリアグネ、“ 燐子” マリアンヌ」

ただ、せめて。

「輪廻転生の果てに、貴殿方の幸せがありますよう」

次回、仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD!

「少し聞いてみるか、坂井？ 十億ドルの演奏を」

「誰かに守られっぱなしなのは、自分の身を自分で守れないのは、いやだから」

「はぐれ燐子だ」

「まさか悠二!?!」

「その命、神に返しなさい!」

【第五話・調律ノ帰還のパーフェクトハンター】

WAKE・UP! 紅蓮の鎖を解き放て!



#### 第四話・無限/天壤無窮の空・Bパート(後書き)

ようやくシャナ一巻終了!!      な、長かった(汗)

#### 以下反省

・ご存知キバ屈指の不遇モンスター、シューちゃん&ブロン登場。  
……本編と扱い変わんねーじゃん!(一人ツッコミ)  
シューちゃんは奏夜運ぶことしかしてないし、ブロンは盾にしか  
なっていない……。  
詰め込み過ぎつてもあるんでしょうが、やっぱり均等な出番は難  
しいです；

・闇キバの魔術で拘束    シャナのガルルセイバー使用は前々からこ  
の戦いでやってみようと思っていた連携です。シャナなら、アーム  
ズモンスターも使用できるかなと思ったので(原作でルークもガル  
ルセイバー奪って使いましたし)

・奏夜も言っていました、別の出会い方をしてれば、奏夜とフリ  
アグネ、マリアン又は分かり合えた気がするのです。  
だからフリアグネとマリアン又と戦ったことに関しては、奏夜にと  
って後味の悪いものになっています。

……まあ、作者が単純にフリアグネとマリアン又が好きっていうの  
もありますけどf^\_^ ;

・三話で出たドラゴンファンガイアは、これからの展開でキーパー  
ソンとなりますが、今回は御披露目話ということで。

では、二巻の話もお楽しみに。

予告の通り、五話には最高なあの人も出ますので

外伝・ミラージュ／異界の龍騎士と舞踏姫・上（前書き）

「鏡とは、可視光線を反射する部分を持つ物体のことである。古来、鏡に映像が見えることは神秘的なものとされ、世界の『こちら側』と『あちら側』を分けるレンズのようなものと考えられていた。

『違う世界』にはもう一人の俺ってのもいるかもな」

キバットバット三世

## 外伝・ミラージュ／異界の龍騎士と舞踏姫・上

・今回の話は番外編です。

・テスト週間（……の割にこのサイトには来ていましたが）により執筆が遅れているため、前々から書き上げてあったこちらを先に投稿致します。五話を楽しみにして下さっていた方、すみません（< | >）

五話もなるだけ早くUP致します；

・さて、今回の話は、本編で出番がかなり後になる過保護な『あの』と、キバ作品以外の『とある仮面ライダー』との話です。

・しかし、タイトルにある『異界の龍騎士』は仮面ライダー龍騎ではありません。

「えっ？」と思った方、確かに龍騎は龍騎なんですけれど……龍騎ではないのです。

・時系列はシャナ8〜9巻の直前。

・上中下編でお送りする予定ですが、本編の合間に書いていくので、UPは不定期になると思います。

……前置きが長くなってしまってますみません；

では次ページからどうぞ（^o^）

「世界の移り変わりとは、本当に激しいものでありますな」

そこかしこに筍よろしく聳え立つ摩天楼を見上げ、その女性は呟く。  
アメリカ合衆国北東部、ニューヨーク。  
世界経済の中心を担うこの都市に、一人のフレイムヘイズがいた。

彼女、『万条の仕手』ヴィルヘルミナ・カラメルである。

黒の丈長ワンピースに、白のヘッドドレスとエプロンという所謂メイドの装い。  
背中には何処で売っているのかと問いただしたくなるくらいに、巨大なリュックサックを背負っている。

「あのような高層建築、以前ここに来た時は二棟あるかないかだったというのに」

「技術革新」

彼女の契約する“紅世の王”にして長年のパートナー“夢幻の冠帯”ティアマトーが、その意志を表出させるヘッドドレスを僅かに揺らし、それに答える。

「しかし、こんな人間達の主要都市に逃げ込むとは……。 “霞の迷彩”は更に勢いづいているようでありますな」

「傲岸不遜」

彼女達がこの街に来た目的は、いつもと変わらず“紅世の徒”の探索、討滅だった。

“紅世の徒”である“霞の迷彩”レムオル。二人が長らく追い掛けている“徒”である。車の行き交う大通りを、人混みに紛れつつ、ヴィルヘルミナは歩く。

その出で立ちから、道行く人に奇異の眼差しを向けられるが、そんなことはお構い無しに、レムオルの気配を探る。

(今回も変わらず、気配は無し、でありますな)

(同意)

意志を疎通させ、ティアマトーは答える。

(相も変わらず、得体の知れないヤツであります)

(奇怪)

“霞の迷彩”レムオルは、真名の通り、フレイムヘイズの監視を掻い潜るのを得意とする“らしい”徒だ。

らしい、というのは、レムオルが“紅世”より渡り来て以来誰も、彼がどうやってフレイムヘイズの目を盗んでいるのか知られていないからである。

何らかの方法でフレイムヘイズを避け、人間を喰えるだけ喰って次の街に。というスタイルを取り続けているのだ。歴然のフレイムヘイズたるヴィルヘルミナとティアマトーにも、未だその正体は掴めていない。

事実そうやって、二人はレムオルを取り逃がしてきてしまったのだ。

(せめてその“自在法”の糸口だけでも掴めればいいのでありますが……)

(情報皆無)

そう言いながらも、気配探知には抜かりがない。

レムオルは見つかりにくい“徒”ではあるが、姿まで未知の存在というわけではなく、ヴィルヘルミナも数回は接触出来ている（その都度、上手く逃げられていたのだが）。

ワンパターンな戦術ではあるが、今回もそれに期待する他無かった。宛どなくさ迷うヴィルヘルミナは、やがて寂れた路地裏に入り込んでいた。

存外、こういう場所はガラの悪い連中の溜まり場になっていたりするのだが、そんな様子もなく、いたとしてもヴィルヘルミナに敵うべくもない。

女性と言えど、彼女はフレイムヘイズだ。

（……………！）

急にヴィルヘルミナがその足を止める。

（……………ティアマトー）

（確認）

ティアマトーが返事をしたのとほぼ同時に、ヴィルヘルミナはリュックを捨て、その身を左に踊らせる。



次の瞬間、さつきまでヴィルヘルミナがいた場所に、巨大な手裏剣が突き刺さった。

辛くもそれを避けたヴィルヘルミナは、後ろを振り向き、襲撃者の姿を確認する。

「グルルル……！」

朱色の身体に尖ったツメを有した異形が三体、そこにはあった。東洋文化を知る者が見れば、オニと形容することだろう。

二人は襲撃者を観察し、怪訝そうな表情を作る。

「“燐子”にも関わらず、“封絶”を張らないつもりでありますか」「不可解」

二人の疑念も最もで“霞の迷彩”は燐子を使う“徒”ではない上に、何より封絶を使わないというのが、決定的な違和感を醸し出した。た。

人間を効率良く喰いたいなら、封絶は必要不可欠なはずだからだ。ヴィルヘルミナがさつきこう考えている内にも、三体の異形は鋭いツメを振り被り、彼女に襲いかかる。

「余事無用」

「で、ありますな」

頷き、ヴィルヘルミナはエプロンのフリルや継ぎ目からリボンを伸ばし、異形の一体を絡めとる。  
絡め取られた一体は何も出来ぬまま、凄まじい牽引力で投げ飛ばされ、近くのコンテナに叩き付けられた。

「この程度ならば、“ペルソナ”は必要が無いのであります」

「雑兵」

敵の戦力を把握したヴィルヘルミナは、残る二体に向き直る。

二体の異形は、戦況不利と見て、やや後ずさる。  
すると、近くに捨てられていた故障テレビから、また同型の異形が三体現れた。

思わずヴィルヘルミナが目を見張る。

「……鏡の中から？」

「余事無用」

再びパートナーに諭され、ヴィルヘルミナは雑念を振り払う。片や合計五体となった異形は、ヴィルヘルミナを取り囲む。

双方は互いに睨みをかせ、やがて焦れた異形が一齐に攻撃を開始しようとした

時だった。

「待て！」

路地裏に反響する声。

見ると、路地の入り口に、赤いジャケットを来た青年が立っていた。歳は十代後半と言ったところだが、少年らしい幼さが残る顔立ちである。

（　　ッ！　しまった！　）

（封絶！）

青年の姿を視認して、ヴィルヘルミナとティアマトーは自分達の不甲斐なさを恥じた。  
彼女達にしては、珍しいミスだっただろう。

そう。ここには封絶が無いのだ。

いつもなら、燐子や“徒”が先に張っているが故の見落とし。  
封絶内の修繕のためにしろ、ここは路地裏。  
巻き込まれるものは少ない、と見ての判断だったが、それが裏目に  
出てしまった。

「アンタ、早くそこから逃げろ！」

青年はヴィルヘルミナの心情など露知らず、彼女を逃がそうとする。  
二人からすれば、迷惑以外の何者でもない。

（早く封絶を！）

（承認）

あくまでも青年を巻き込まぬために、ヴィルヘルミナは封絶を展開しよつとする。

しかし次の瞬間、青年は思いもよらぬ行動に出ていた。

「おい！ 早く逃げろって……あー、もう！ またレンにどやされるじゃないか！」

いつまでも逃げ出さないヴィルヘルミナに焦れた青年は、懐から黒いケースを取り出した。龍を型取った金の紋章が描かれたそれは、何かのカードデッキらしい。

ヴィルヘルミナが見る中、彼はそのカードデッキを正面に掲げる。

すると、カードデッキから溢れたスパークが、青年の腰部分に集束。特徴的な稼働音と共に、銀色のベルト Vバックルが展開された。

「KAMEN・RIDER！」

青年が声を張り上げて、カードデッキをVバックルに装填する。装填されたバックルが回転する同時に、赤い二重のサークルを含むエネルギーの球体が、青年の身体を包んだ。

「なっ……」

ヴィルヘルミナの驚愕をよそに、赤いサークルが青年の周りを一周し、球体が弾け飛ぶと、そこに青年の姿は無かった。

赤を基調とするボディに、銀色の装甲。

腕にはドラゴンを模した手甲 龍召機甲・ドラグバイザー。

顔は鉄仮面に覆われ、表面に入ったスリットが、真紅の複眼を覗かせている。

「来いよ、纏めて相手してやる！」

戦士 仮面ライダードラゴンナイトは、果敢に怪物達を眼前に見据える。

「仮面の、騎士？」

「……平静」

ヴィルヘルミナを諫めるティアマトも、さすがに普段の寡黙さに揺らぎが見られた。

「ゲルル……グオオオーツ！」

ニユート・モンスター達は、ドラゴンナイトの出現に驚く素振りを  
見せたものの、すぐにヴィルヘルミナを標的から外し、ドラゴンナ  
イトに向かっていく。

「はっ！　せいっ！」

徒手空拳でドラゴンナイトは、ニユート・モンスターを迎え撃つ。  
ドラゴンナイトはニユート・モンスターの攻撃をバック転で回避。

両手をつき、そこを基点にして、

「だりゃあっ！」

回転蹴りで周囲のモンスターを薙ぎ払った。

モンスターが四方に蹴飛ばされた隙に、ドラゴンナイトはVバック  
ルに装填されたデッキから、一枚のカードを取り出す。

装着されているドラグバイザーの後部を押し込み、奥にあるスロッ  
トにカードをベントインする。

【SWORD・VENT】

ドラグバイザーの眼が輝き、何処からともなく、機械的な声が響く。

と、路地裏に面した向かいのビル。

その鏡に赤い影が揺らめき、平面の世界から飛び出してきた。

「また、鏡の中から……」

ヴィルヘルミナが呟く傍ら、現れたその姿はまさに赤き龍。  
無双龍・ドラグレッダーだ。

ガアアアア！！

威圧的に咆哮し、ドラグレッダーはドラゴンナイトの手に自らの尾を模した剣、ドラグセイバーを落とす。

「はあっ……！」

キャッチしたドラグセイバーを、力の限り振り抜く動作に、ニユート・モンスターは切り裂かれていく。

悲鳴らしき声を上げたニユート・モンスターが、そのまま二体消滅



する。

「やや、荒削りな戦い方ではありますが」

「屈強」

二人の評価通り、ドラゴンナイトは強い。

ニユート・モンスターの攻撃を確実に防御する傍ら、効果的に自らの攻撃をヒットさせている。

「よし、止めだー!」

ドラゴンナイトはまたデッキからカードを引き抜く。

先ほどのカードとは違う、龍の紋章が描かれたカードだ。

### 【FINAL・VENT】

先ほどの要領でそれをベントインすると、ドラグレッダーがドラゴンナイトの周囲を、渦を巻くように動く。

「はあああ……ッ!」

自分を鼓舞するように息を吐きながら、ドラゴンナイトはドラグレッダーと共に、天高く飛び上がる。身体を一回転させ、右足をニユート・モンスターに向ける。

モンスター達が身構えるが、もうそれは手遅れだった。

「だあああ　　ッ！！」

ドラグレッダーが吐き出した炎弾をその身に纏い、ドラゴンナイトの必殺キック『ドラゴンライダーキック』が、三体のニユート・モンスターを粉々に吹き飛ばした。

着地したドラゴンナイトの勝利を祝福するように、ドラグレッダーは再び咆哮しながら、鏡の中に消えていった。

その姿を見送った後、ドラゴンナイトはヴィルヘルミナに視線を向けた途端、

「はあ〜」

と頭に手を当てて溜め息をついた。

「レンからむやみやたらに正体明かすなって言われてんの……」

ドラゴンナイトは附せた仮面をヴィルヘルミナに向ける。

「えっと、今見たこと……っというか、僕のことは忘れた方がいいよ。僕の側にいたら、あんたもベントされちゃうかもしれないし」

「ベント？」

聞き慣れない言葉に、ヴィルヘルミナは首を傾げる。

「……もしや、あなたは、“知っている”のでありますか？」

「知っているって、何をさ？」

ヴィルヘルミナの“知っている”というのは、紅世について知っているのか、という意味だったのだが、ドラゴンナイトには伝わらなかったらしい。

「……失礼。“紅世”のことを、先ほどの“燐子”のことを、あなたは知っているのですか？」

「グゼにリンネ？ 何だそれ？」

今度はドラゴンナイトが首を傾げたが、そこでふと、彼は奇妙なことに気が付く。

「って、ちょっと待った!! あんた、さっきのモンスターが見えてたのか!？」

「は？」

互いに、わけがわからなくなってきた。  
ドラゴンナイトが確認するように聞く。

「えっと、一つ聞いていいかな？」

「……どうぞ」

「あんた、『仮面ライダー』じゃないんだよな？」

「……いいえ。あなたの言う仮面ライダーというのが何かは分かりかねるですが、そのような呼称で呼ばれたことはないのではありません。私は……」

言つべきかどうか迷ったが、ヴィルヘルミナは自分の名を名乗る。

「私は『万条の仕手』ヴィルヘルミナ・カラムル。“夢幻の冠帯”  
ティアマトーのフレイムヘイズであります」

「フレイムヘイズ？ ……あっ！！ ……もしかして、あのレムオ  
ルとかいうヤツの仲間か！？」

「！？ ……ま、待つであります！！」

ドラゴンナイトの口から、霞の迷彩の名が出たことに驚き、ヴィル  
ヘルミナは静止の声を上げる。

「違うのであります。私の目的は、その“霞の迷彩”レムオルを討  
滅することであります。もしヤツのことを知っているのなら、是非  
協力をお願いしたいのであります」

「……………ん〜」

一応警戒は解いたらしいが、ドラゴンナイトは腕を組み、考え込む。

「 ……悪いんだけど、僕だけじゃ決めらんないや。仲間のところに  
来てもらってもいいかな？そこで僕達のことも話すから」

「了解であります」

ヴィルヘルミナの承諾したのを見て、ドラゴンナイトも頷くと、赤

いサークルが再び展開され、元の青年の姿に戻る。

「あ。そっぴやこつちの自己紹介がまだだったな。僕はキット。キット・テイラー。よろしく！」

気さくな笑顔を浮かべたキットはヴィルヘルミナと互いに握手をし、路地裏から出た。

異界の龍騎士と、戦技無双の舞踏姫は出会う。

鏡に映る運命の名の元に。

外伝・ミラージユノ異界の龍騎士と舞踏姫・上（後書き）

・如何だったでしょうか？

今回は米国版の仮面ライダー龍騎、『仮面ライダードラゴンナイト』とのコラボです。

・突発的な短編コラボですいません；

・最近吹き替え版を見て、あまりのカッコよさについて書きたくなり、作り上げた作品です（五話そっちのけでやることか）。

・あなたがちキバと無関係でも無いんですよ。吹き替えで王蛇の声がかバットなので。

・さて、この短編は上中下編でお送りする予定です。

前書き通りの不定期更新ですが、温かい見守って下さると幸いです。これからヴィルヘルミナも活躍していきますので（＾Ｏ＾）

・次回はちゃんと五話更新になりますので、本編もよろしくお願ひしますm（――）m

仮面ライダードラゴンナイトがわからない人のため、大まかなストーリーを下に載せました。ネタバレされても構わない人のみ、下へどうぞ。

鏡の向こうの世界『ベントラ』。

そこを守護する十三人の仮面ライダーは、謎の侵略者、ゼイビアクスによって全滅してしまう。

唯一の生き残りである仮面ライダーウイングナイト・レンは、地球を次の侵略に定めたゼイビアクスの野望を阻止するべく、孤軍奮闘する。



その頃、18歳の少年キット・テイラーは、行方不明の父の家で、不思議なカードデッキを見つけて以来、赤いドラゴンに命を狙われるようになってしまう。

そんな中、モンスターに襲われたキットはレンに助けられ、カードデッキを渡すよう迫られる。

ブランク体に変身し、鏡の世界に迷い込んだキット。

ドラグレッダーと契約した彼は、仮面ライダードラゴンナイトとして、仮面ライダーの戦いに巻き込まれて行くのだった。

## 第五話・調律／帰還のパーフェクトハンター（前書き）

ハンターとは、狩猟家。もしくは探求者という意味である。

昔話を紐解くと、度々熊と人間が一騎討ちをしている場面があるが、熊は賢く、自分が狩られることがわかっているため、待ち伏せをする場合が多い。

よって熊に一人で挑むのは自殺行為に等しいんだ。

死んだフリとかしちやダメだぞ！

キバットバット三世

## 第五話・調律／帰還のパーフェクトハンター

「青い空、白い雲、小鳥の囀り！」

ああ、素晴らしき日常！

早朝5時30分。河川敷で盛大にシャウトする紅奏夜。  
久々にキバットの叩き起こしを喰らわず早起した奏夜は、早朝の散歩に出掛け、この河川敷へとやってきていた。

理屈を抜きにして、早起きとは快樂を伴う行為である。

正確には、普段とは違う行動を取っているがゆえの新鮮さなのだろうが、今の奏夜がそんなことを気にしないくらいにハイなのは、先ほどの変人丸出しのセリフで一目瞭然だ。

「はっはっはー！... ではここらで.....」

土手に置いてあるケースを開き、バイオリンを取り出す。

「ここ近所の皆さん、今日は十億ドルの演奏をモーニングコールでお届けしますよー！...」

ハイテンションを通り越してただの近所迷惑になりつつあるが、止める人間も、止められる人間もない。

そして唯我独尊状態の奏夜が、バイオリンの弓を弦に当てかけた時、

「先生、近所迷惑になりますよー」

止められるかどうかはさておき、何やら絶賛暴走中の奏夜を止めようと、坂井悠二は土手沿いの道から声を挙げた。

「……………で、ゼエ、お前は何で、ハア、こんな早朝に、ここにいったよ……………」

「はっ、はぁ……………あ、朝の運動ですよ……………」

数分後、息を切らした奏夜と悠二が土手に寝転がっていた。

結局、奏夜は悠二に注意されてもバイオリンを手放さず、割とマジなバトルが展開される運びとなった。

キバになっていない状態での奏夜の身体能力は、一般的な成人男性

から見れば、上の中というところ。  
しかも暴走状態であったがゆえに、手加減の枷がやや外れ気味だったので、そんな奏夜を悠二が止められたのは、“零時迷子”の超感覚があるとはいえ、奇跡に近かった。

ちなみに数分前のバトルでの音声を拾ってみると、

「ええい離せ坂井！ 今日には滅茶苦茶調子が良いんだ、お前は歴史に名を刻むかも知れん名演奏を潰す気か！」

「なら家でやって下さい！ 騒音は立派な公害ですし、歴史に名を刻むより早く、警察署のブラックリストに名を刻むことになります！」

こんな調子。

悠二がいかにか常識的で 奏夜がいかにかアブノーマルかが伺い知れる会話である。

「それにしても先生、バイオリンなんて弾けたんですね」

「ああ。とは言っても、俺の専門は弾くことじゃなくて、作ることだけだな」

「作るって……要するに職人さんってことですか？」

「それ以外にどんな意味があるってんだよ。一応俺の本業はバイオ

リン職人で……って坂井。何だその滅茶苦茶意外ですみたいな顔は」

「いや、事実意外なんですけど……」

「そんなに意外か？ 公務員の傍らの兼業って」

吉田の時も思ったが、別に驚くようなことではないと思う。  
今時、手に職スタイルは珍しくないと思うのだが。

「いえ、バイオリン職人っていう職業もそうなんですけど、何だかいつもの先生のイメージに、音楽が結びつかなくて」

「引つ掛かる物言いだなオイ」

奏夜は顔をしかめるが、普段の彼の傍若無人な態度を見ていれば、  
紅奏夜「バイオリン職人などという図式は浮かびようがない。  
職人業に求められる『繊細さ』という言葉と、奏夜の人格はあまり  
にミスマッチなのだ。」

要するに、原因は『日頃の行い』である。

だが、当人はその事実にもまるで気付かない。

「俺のイメージに合わない、ね……。成る程。じゃあ、少し聞いて

みるか、坂井？ 十億ドルの演奏を。」

不敵な笑みを浮かべ、バイオリンを再び構える。

「だから先生、音が……」

「安心しろ。なるべく静かな曲調のヤツを弾いてやる。お前は黙って、俺のイメージ払拭を懸けた演奏を聞くんがいい」

やや強引に奏夜は立ち上がり、演奏を始める。

と同時に、奏夜の雰囲気ガラリと変わった。

(えっ……?)

悠二は思わず目を剥く。

そこに、普段学校で見る奏夜の姿は無かった。目を閉じ、右手の弓と左手の弦を、淀みない動作で操っていく。優美に生み出されていく涼やかな音色。

まるで、音が支配するこの空間だけが切り取られたかのようなようだった。

心に染み渡る音楽と、それを生み出す紅奏夜。  
これら全てが、一つの芸術。

「……………」

もはや形容できない領域にある奏夜の演奏を、悠二は奏夜と同じように、目を閉じながら鑑賞する。

やがて音を長く引き、奏夜は演奏を終えた。

「さて、「」感想は？」

「……………えっと」

にかりと笑う奏夜に対し、悠二は言い淀む。  
もはやどう形容していいかわからないくらいに、奏夜の演奏は一線を画していたのだ。

「　　凄かったです。僕、バイオリンとかには詳しくないんですけど、技術とかそういうもの以前に、音楽が心に響いてきたみたいでした」



「ありがとう。俺にとっちゃ最高の称賛だ」

満足して、再び楽器を閉まった奏夜に悠二は尋ねる。

「でも先生。それだけ弾けるのに、どうして教師になろうと思ったんですか？」

音楽専攻なら分からなくもないが、奏夜の専門教科は現国だ。ますます接点はない。

奏夜は「んー」と考えるような仕草をして、

「別に名を残したいとは思ってないからな。名声なんて、自分がやったことのおマケに過ぎないし。」

バイオリン作りだって、ただ越えたい目標があるから始めただけさ。

俺はさ、ただ音楽が好きなんだよ」

そう言う奏夜の目には、いつもの気だるそうな様子は無く、夢を追いかける少年のような、輝かしさがあった。

(……やっぱり底が知れないよなあ、奏夜先生って)

名を残すことに興味はない。

それらはただの付属品。

ただ自由に、自分のやりたいようにやる。

それが紅奏夜という人間なのだ。

自分とは真逆だ、と思う。

自由に生きるどころか、ただ目の前の問題を片付けるだけで精一杯で、あの少女に頼るしかない自分とは。

377

「それに兼業扱いとはいえ、教師って仕事にも俺は満足してるんだ。お前みたいなのを相手に、楽しくやらせてもらってるよ」

「……それはよく分かります」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

奏夜は怪訝そうな顔をしたが、取り敢えず気になったことを聞いた。

「そっぴや坂井。お前朝の運動とか言つてたが、いつもこんな早起きなのかよ。運動部でもあるまいに」

「いえ、運動を始めたのはつい最近です。ちょっと、体力つけななきゃな—って思つて思つてがあつて」

「ふーん、何だよその体力つけたいと思つてふうなこつて」

大体の予測はついていたが、奏夜はそれでも聞く。

「……誰かに守られっぱなしなのは、自分の身を自分で守れないのは、いやだから」

はつきりとした口調で、悠二はそう言った。

奏夜のように、万事を思い通りにするほどでなくてもいい。

(ただ、シヤナに迷惑をかけないくらいには)

せめて、自分の身を自分で守れるくらいには、強くなりたいのだ。

(……ふむ)

悠二の望むことを察したのか、奏夜は心中で唸る。

つまりは、平井の足手まといになりたくないというわけか。

その選択自体は悪くない。

ただ奏夜は、悠二は別にシャナの足手まといとなっているわけではないと思っていた。

フリアグネの時も彼は十分役に立っていたし、結果的には自分も助けられた一人である。

要するに、悠二が少し背伸びをしているように見えたのだ。

(まったく……、率直過ぎる向上心だ)

それが悠二の良いところでもあるのだが。

「自分の身を守るねえ……通り魔にでも襲われたのか？」

「そんなところです」

実際はもっと夕子の悪い話だろう。

何せ、自分が一度喰われているのだから。

「ま、いいんじゃないの？ 最近は物騒な世の中だしな。最近だと廃ビルが爆発したりもしたしさ」

「……ですね」

その犯人は僕の身近にいますとは、さすがに言わない。

「そうでなくても、自分の身を守るようにして、損はないだろうさ。誰かを頼るってのも、同じくらい大切だけどな」

キバであることを明かしていないため、奏夜は月並みな一般論を唱え、土手から立ち上がる。

「んじゃ、俺もそろそろ行くわ。鍛えるのもいいが、張り切り過ぎて授業でバテんなよ」

「わかってます。じゃあまた後、学校で」

悠二も立ち上がり、二人は反対方向に歩き去った。

奏夜と別れて十分後。

坂井家庭園にて。

「はッ！」

そこには、刀に見立てた木の枝を振り回すシャナと、それを懸命にかわす悠二の姿があった。

「……ッ！」

反射神経を総動員して、縦斬りの軌道をどうにか回避する。しかしシャナはそれを予想し、勢いをつけた足払いをかけた。

「わ、わわ!？」

バランスを崩した悠二は後ろによるめき、地面に落下する。

そこに再び、シャナの斬撃だ。

「っ……わ……」

思わず目を瞑り、

(しまった、目を……！)

自分の失敗に気が付く。

パシンッ！

「イツギっ！？」

シャナの容赦なく振り降ろされた木の枝がクリティカルヒット。情けない声と共に、悠二はぐらぐら揺れる頭を押さえて悶える。

そんな悠二に、上から声がかかる。

「良かったのは二撃までね。一番攻め込まれ易い体勢が崩れた時こ

そ、しっかりと目を開いてなきゃダメ」

「うん。そう……だよな」

シヤナの評価を素直に受け入れ、悠二は立ち上がる。

「次はちゃんと見るよ」

「よろしい」

シヤナはにこやかに笑い、今日の鍛練終了を伝える。

「おつかれさ〜ん」

縁側に座っていたキバットが、悠二にタオルを渡す。

「ありがとキバット」

「シヤナちゃんもお疲れ様〜」

「ん」

同じく縁側にいたキバーラのねぎらいに、シヤナも軽く答える。



あれ以来、“紅世の徒”絡みの事件は起きていないが、何もキバサイドとの交友が途絶えたわけではなかった。

その証拠が、キバットとキバーラだ。

この二人（二匹）はどこで聞き付けたのか、最近始まったシヤナと悠二の鍛練風景を、しばしば見にくるのである（ちなみに奏夜も了承済みなため、何の問題もない）。

おかげで、シヤナと悠二にとって、キバットとキバーラはもはや馴染みの顔なのだ。

「しかし、悠二も毎日頑張るねえ」

縁側に座る悠二の隣にキバットは座る。

「うん。少しずつでもいいから、足手纏いから抜け出したいからさ」

「うんうん。その向上心は大事だぜ。……まったく、あいつにも見習わせてやりたいな」

キバットのいう『あいつ』がキバのことだというのは、さすがにわかった。

「キバって、戦う訓練とかしてなかったの？」

「あゝ。あいつの戦い方は、技術じゃなくて本能みたいなもんだからな」

「本能って……自分の意思で戦ってないってこと？」

「キバに成り立ての頃の話だけだな。今じゃ自分の経験で戦ってる部分が多いぜ」

「力があっても、それを上手く操れなかったってコトよ。実際最初は負けてばかりだったしね」

キバーラが言葉を次いだ。

「だから悠二くんも、いつか強くなれるわよ。ね、シャナちゃん？」

「……ちゃんと努力すれば、ね」

突然話をふられ、シャナは悠二から顔を反らして答える。  
その様子に、悠二は少し笑って頷いた。

「うん、頑張るよ」

その時の笑顔を見て、真つ赤になったシャナに、戸惑う悠二を見て、キバットはぼつりと呟いた。

「やれやれ、焦り過ぎなきやいいんだけどな」

図らずもそれは、奏夜がした心配と同じだった。

懸念とは、的中するものである。

悪いものなら、なおのこと。

「!?!」

事は、放課後に起こった。

滞りなく授業を終えたシャナと悠二は、あれ以来執拗に二人の仲を調べたがるクラスメイト（主に佐藤、田中、緒方という悠二の友達

だったが）を撒くために一旦別れ、後に合流するという下校方法をとっていた。

そんな折、屋根を飛び移るシャナが、異変を感じ取った。

「アラストール、何かいる！」

「気配はごく小さい……“燐子”か」

アラストールもシャナに同意する。

「“狩人”は討滅したのに」

「はぐれ燐子だ。自身で“存在の力”を取り込めぬとはいえ、主を亡くしても数日なら保つ」

「何で今頃になって活性化を……」

ふと、シャナの脳裏に“ミステス”の少年の顔が浮かぶ。

「まさか悠二！？」

悠二は今、フリアグネが残した火除けの指輪“アズユール”を持つ

ている。

主の力にあてられて、“燐子”が活性化してもおかしくはない。

「いかん。急ぐぞシャナ！」

「うん！」

アラストールが言い終わらない内に、シャナは地を蹴っていた。

スイングされた腕が、悠二の身体をかすった。

「ぐ……！！！」

衝撃で悠二は、アスファルトの上を転がる。

目の前にある、巨大なぬいぐるみのネコの形をした“燐子”は、デフォルメされた身体に似合わぬツメと牙を覗かせている。

「ご主人様の…宝具…。 “ミステス” を捕らえて、誉めてもらっ…  
…」

悠二は齒噛みしたい気持ちでいっぱいだった。

(くそっ…ここは封絶の中じゃないんだ。シャナが来るまで時間稼ぎをしないと……)

そう思っているにも、不意討ちまがいのダメージを負った身体は動かない。

“ 燐子 ” の唸り声が、着実に近づいてくる。

一番攻め込まれ易い体勢が崩れた時こそ、しっかりと目を開いてなきやダメ。

動悸を押さえながら、シャナの言葉を反芻する。

(体勢が崩れた時……しっかりと)

スピードが上乘せされた三本のツメが、悠二の身体をとらえた。

(目を瞑らずに…)

視界が真っ暗になった。

ガンッ！

「がっ……」

目を閉じたと認識する間も無かった。

そのまま悠二は背中から扉に激突し、壁に打ち付けられた。  
肺から空気が根こそぎ吐き出され、意識が朦朧としてきている。

満身創痍の悠二の様子などお構い無しに、“燐子”はトドメを刺す  
ため、再び右腕を振り被る。

(消えるのか……僕)

虚ろな意識の中で、悠二は無力感を噛み締める。  
浮かぶのは、あのフレイムヘイズの少女。

（あの子に、何も、出来ないまま……）

心を支配する深い後悔。

それら全てを塗り潰すかのように“燐子”の巨腕が、痛烈な一撃を悠二に叩き込んだ。

白い影が、悠二の視界を覆った。

「……………えっ？」



否、その影が、燐子の攻撃を弾いたのだ。

激痛を訴え続ける身体を起こし、壁に全身を預ける形で、悠二はようやく、その影の正体が、白と金、蒼のカラーリングが施されたバイクだということに気が付いた。

バイクの乗り手は、燐子を威嚇するように、エンジンを軽く鳴らして、機体から降りる。

乗り手は二十半ばに見える青年だった。

やや猫っ気のある髪に、その下にある表情は引き締まり、黒いスーツを着こなす様には、年齢よりも大人びて貫禄がある。

「……成る程。これが“燐子”か」

「……」

鋭い声の中に含まれた単語を、悠二は見逃さなかった。

誰なんだ、この人は。フレームヘイズなのか？

弱々しく壁に身体を預ける悠二に、青年は険しい顔のまま振り向く。

「少年、そこでじっとしていなさい。努力はするが、キミを巻き込まないという保証はない」

威圧的な言い方には、出会ったばかりの頃のシャナを彷彿させるものがある。

だが同時に、遠回しな気遣いのような様子も伺えた。

「帰ってきたと思えばこれか……。世の中儘ならないものだな」

言って、青年はメカニカルなデザインのベルト　イクサベルトを腰に装着。

懐から、手甲のような機械　トランスジェネレーター『イクサナツクル』を取り出し、左手に押し付けた。

『レ・ディ・ー』

無機質な電子音と共に、イクサナツクルを右横に構える。

「変身！」

『ファイ・ス・ト・オ・ン』

掛け声と共に、青年はベルトにイクサナツクルをジョイント。エネルギー体に圧縮された鎧の映像が足元から出現し、青年の身体と重なった。

(白い……騎士?)

悠二的を射た表現の通り、そこには太陽光も手伝ってか、白銀に輝く騎士がいた。

白を基調とし、ダイヤモンドに匹敵する硬度を誇る超合金『イクサプラチナ』が使用された鎧、『イクサアーマー』。

その中央に位置する、次世代型電力エンジンにより、人智を越えたパワーを生み出す動力ユニット『ソルミラー』。

表情は、魔を絶つ十字架を模したパワー抑制装置たる防護装甲『クロスシールド』に覆われている。

Intercept・X・Attacker (未知なる驚異に対する迎撃戦士)。

『仮面ライダーイクサ』。

素晴らしき青空の会が誇る、対ファンガイア用のライダーシステムだ。

「その命、神に返しなさい！」

己の力に、絶対の自信を持つがゆえの宣言。  
底知れぬ力強さをみながらせたイクサの出現と共に、戦いの火蓋は切られた。

「邪魔は、させない……」

突然の乱入者に驚きはしたものの、“燐子”は自らの障害になるイクサを排除しにかかる。

「フンッ!！」

振り被られた巨腕をイクサは難なくかわし、何処からともなく、イクサ専用武器たる退魔剣・イクサカリバーを手取る。刀身部分を押し込み、イクサカリバーをソードモードからガンモードに移行。

「跪きなさい」

柄についたトリガーを引き絞り、鐳の部分から弾丸が発射される。

「グッ、ギイ！」

正確な狙いの元、足を撃ち抜き、イクサは敵の機動力を削ぐ。

「“燐子”…人の存在を喰らう者。許すわけにはいかない」

静かな呟きと共に、イクサの仮面、クロスシールドが展開した。

「うわっ！」

側にいた悠二は、イクサから放出された熱量に仰け反った。

視覚化された太陽のごとき熱気を発するその姿は『イクサ・バーストモード』。  
システムへの負担から、三十分以上の使用が制限されるまでに強力なイクサのフルパワー状態だ。

淀み無い動作で、イクサはイクサカリバーをソードモードに戻す。

「ッハア！」

赤い刀身、ブラッディエッジが揺らめく度に、“燐子”の身体が切り裂かれていく。

「ぎっ、あああ！…！」

悲鳴を上げる“燐子”に、一切手を抜かないイクサの攻撃が怒濤のように浴びせられていく。

「断罪の光を受けなさい」

よろめく“燐子”に反撃不可と判断したイクサは、ベルトのケースからキバが使っていたものとは別型のフェッスル カリバーフェッスルを取り出す。

ベルトのフエッスルリーダーにそれを差し込み、イクサナツクルを押し込む。

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー、ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

無機質な音声が流れ、ソルミラー内のエネルギーが臨界点に達した証、太陽の紋章がイクサの胸部に浮かび上がる。

供給されるスパークがイクサの身体を駆け巡り、バツクにはキバと対を成す、光子力によって作られた太陽が煌々と燃えていた。

「ハアアーンッ！！」

光子力エネルギーを上乗せしたイクサカリバーから放つ、一撃必殺の斬撃『イクサ・ジャツジメント』が、燐子を袈裟に斬り捨てた。

断末魔を上げる暇さえもなく、“燐子”は二つのパーツに別れ、消滅した。

(す、凄い……)

悠二が感嘆する中、イクサはベルトからイクサナックルを外し、元の青年の姿に戻る。

「怪我はないか。少年」

燐子の残骸たる火の粉に一瞥をくれ、壁に寄りかかる悠二の安否を確かめた。

「骨折箇所は無いな。打ち身程度だろうが、一応は病院に行った方がいい」

脇腹などに触れ、一通りの怪我具合を確かめる姿からは、手馴れている様子が伺えた。

「よければ、最寄りの病院まで送っていい」

「あ、いえ。多分……大丈夫、です」

「そうか？ まあ、本人が言うのなら構わないが」

青年は悠二から離れ、乗ってきたバイク『イクサリオン』に跨がる。



「今見たこと　あの化け物や、私のことは忘れなさい。それがキミのためだ」

青年は最後にそう言い捨て、バイクのアクセル音を唸らせ、颯爽と去っていった。

悠二は壁を支えに、ふらつく身体を無理矢理立ち上がらせる。

助かった。という事実からは、何も生まれなかった。それとはまるで違う、暗く重い気持ちのがのし掛かってくる。

助かった？　そんなもの、運が良かったただけだ。自分が何をした？　何も出来ていない。

曲がりなりにも、努力してきたにも関わらず、だ。

「悠二！」

俯き加減だった顔を上げると、シャナが全速力で屋根を飛び移り、こちらに走ってきていた。

「悠二、大丈夫！？　怪我はない！？」

彼女にしては珍しく、焦燥が口から零れている。

「……………うん。ちょっと、身体打ったくらい」

弱々しく答え、悠二はまた顔を伏せた。

「……………悠二？」

少し怪訝そうに、シャナは悠二の顔を覗き込む。  
そんなシャナを見て、悠二は思う。

シャナ。

『炎髪灼眼の討ち手』。

“天壤の劫火”アラストールのフレイムヘイズ。

どんな時でも、ただ強くある少女。

(僕は何も、してない)

あの白い騎士が現れなければ。

シヤナが来る前に、あの燐子を倒していなかったら。

……また、この子の足を引っ張っていた。

(僕みたいに、ちっぽけな存在が)

白き狩人の来訪は、今のもつれを告げた。

そして現れるもう一人の訪問者により、歪みはさらに加速する。

次回、仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD!

「名護さん、これを渡しておきます」

「ふーん。あんたファンガイアなんだ」

「物好きな王様だなオイ。ツヒヤ、ハハーツ！」

「なに気の抜けたこと言ってるのよ!」

「僕なんかいなくても、別に困らないだろ」

「お前はなーんにもわかつちやいない」

【第六話・暗転／弔詞の詠み手】

WAKE・UP! 紅蓮の鎖を解き放て!

## 第五話・調律／帰還のパーフェクトハンター（後書き）

外伝を挟んでの更新。

しかしまたしてもバタバタした展開です；

・名護さん登場。しかしあの名護さん節が上手く再現出来ない……。四年も経てば余裕も出るかもしれませんが、やっぱり名護さんはイクサ取り上げられた辺りのノリで書きたい（笑）

今回は封絶がなくて良かったですが、名護さんの封絶対策グッズは次回にて明かされます。

・奏夜が变身しないというこの回。ちなみに燐子が現れたことを奏夜は知っていましたが、シャナが燐子を倒しに向かったこともわかっていましたので、手伝いに行きませんでした（どっちにしる、着くのはシャナの方が早いでしょうから）。

さて、次回はまたクセのあるキャラが来ますね。

マージョリーはともかく、マルコシアスのハイテンションさを再現できるのか…？

が、頑張りますf^\_^；

第六話・暗転／弔詞の詠み手・Aパート（前書き）

「オオカミは、西洋じゃ家畜を襲う害獣っつー見方をされることが一般的だが、日本みてえな農業が盛んな地域じゃ、怖れられながらも、神として祀られてる場所も多い。

そんな日本に限ってオオカミが絶滅しちまうってえのは、皮肉な話だな。ヒツヒツヒ！」　マルコシアス

「だ、誰!？」

キバットバット三世

第六話・暗転／弔詞の詠み手・Aパート

【2年前】

「夜〜誰もいない夜〜さびしく歩く奏夜〜」

変な歌を上手に歌いながら、奏夜は夜の商店街を歩く。店は既にシャッターが降り、どこか物寂しい風景だ。

歌がサビに入ったあたりで、奏夜は足を止める。

自分の向かう先。商店街のアーチの前あたりに、二つの人影が立っていた。

一人は、自分よりもやや年下の青年。

奏夜と同じく茶が入った髪をして、目は不機嫌そうにつり上がっている。

もう一人は上から下まで黒いローブのような服を着て、顔にはカラスを模した金色の仮面に鉄の額当て。

青年の方はともかく、こっちはか〜なり怪しい。

あだ名をつけるなら、通せんぼをしてるあたり、武蔵坊弁慶。

話しかけてどいてもらうべきか。

奏夜が決めあぐねていると、青年の方が話しかけてきた。

「あんたか。この世界の“仮面ライダー”ってのは」

「……仮面ライダー？」

聞き慣れない単語だ。

「何だよそれ」

「……ああそつか。この世界じゃ仮面ライダーって呼び方はしないのか。つたく面倒くせえな。

……まあ、いいや。ホラよ」

青年は頭を軽く掻き、奏夜に向かって無造作に何かを放った。

反射的に、奏夜はそれを受け止める。

「何だこれ？ カード……じゃないな。電車の定期券か？」



奏夜の受け止ったそれは、黒い面に黄色と緑のラインが書かれたカードだった。

数は二枚。

「そいつはゼロノスカード」

「ゼロノスカード？」

「所有している者を、時間の影響から守るカードだ。俺の記憶から作ったカードなんだから、無駄にすんじゃないぞ」

「……いや、こんなん貰われても」

色々と説明をすつ飛ばす青年に、さすがの奏夜も困惑気味だ。

「大体お前誰だよ。何で俺のことを知ってる？」

「お前が知る必要はねえ。いいから黙ってカード持ってる。

この世界の時間を守るために、いずれ使う時が来る」

それを最後に、青年は質問に答えることなく、奏夜に背を向ける。

と、傍らで黙りきりだった仮面の男が、奏夜の近くに小走りで行ってきた。

「あの、すみません。侑斗は本当は凄くいい子なんです…。  
あ、これお詫びの印にどうぞ」

男はまるで主婦のような言い回しをすると、奏夜の手には袋付きキャンディを渡す。

イラストには、デフォルメされた男の顔が描かれていた。

「おいデネブ！ 早く行くぞ！」

「あ、待ってよ侑斗〜！」

青年の怒鳴り声が聞こえると、男は慌てて「侑斗をよろしく！」とだけ言って、青年の後を追いかけていく。

呆然とする奏夜の手には、二枚のカードとキャンディが残された。

「……」

奏夜は無言のまま、キャンデーの包み紙を開けて、中のキャンデーを口に放り込む。

「……美味ッ！」

その後バイオリン作りの傍ら、奏夜は半年かけてその味を再現したそう。

【2年後】

「あ。奏夜くん、いらっしやい」

「こんにちは、マスター」

授業を終えた足で、奏夜はカフェ・マル・ダムールに来ていた。犬ブルマンの世話をするマスターにコーヒーを頼み、奏夜は待ち合わせている人物を見つけた。

「やあ、奏夜くん。久しぶりだね」

「はい。お久しぶりです、名護さん」

カウンターに腰掛け、コーヒーを口に運ぶ青年に軽く礼をして、奏夜も相席する。

彼の名は名護啓介。

『素晴らしき青空の会』のエリート戦士にして、対ファンガイア用のライダーシステム『イクサ』の資格者。

奏夜とは四年前からの付き合いであり、共にファンガイアと戦った仲間だ。

当時、奏夜は名護の独善的な性格から、様々ないさかいがあっただが、現在は和解し、共に良き友人として接している。

今でもたまに、高圧的な態度になる時もあるが、当時に比べれば随分と心に余裕を持つようになった。

恵と由利という妻子を持ったのも、理由の一つだろう。

交友面においても、戦闘面においても、奏夜が頼りにする人物だ。

「キミのスーツ姿も新鮮だな」

「俺からすれば堅苦しくて仕方ありませんよ。それにどっちかっていえば、スーツは名護さんのトレードマークでしょう」

苦笑混じりに奏夜は出されたコーヒーを啜る。

確かに奏夜がネクタイさえも絞めず、ワイシャツに背緒を羽織った服装なのに対し、名護はボタンもしっかりとめ、ネクタイのズレすらない完璧な着こなしを見せている。

奏夜のスタイルに合っているのは間違いないが、どちらが似合っているかと言われれば、過半数の人間は名護と答えるだろう。

「教師という職業も大変だね」

「いえ、案外楽しくやらせてもらってますよ。最近はファンガイアが活発になってますから、嶋さんのお世話になりっぱなしですけどね」

「ああ、こちらも似たようなものだった。御崎市ほどではないが、諸外国でもファンガイアの活動が目立つ。青空の会は、ファンガイアの管理者側だけでなく、3WAにも協力を要請しているところだ」

「そうですね……。この前健吾さんからも連絡があって、名護さんと同じような状況みたいです」

「その上、キミの言う“紅の徒”か……」

名護は腕を組んで唸る。

「私も数日前、一匹だが“燐子”を倒した。封絶とやらがなかったから助かったが、もしあれば、イクサに変身していても私は動けないだろう。」

キミの話では、何か対策があるとのことだったが」

「もちろん 稀代の天才に不可能はありません」

奏夜はポケットから、二枚のカードを取り出す。

「じゃあ名護さん、これを渡しておきます」

「これが対策？ ただの定期券にしか見えないが……」

その一枚を手に取り、しげしげと眺める名護に、奏夜が説明を加える。

「ゼロノスカードという代物です。それを持つ人間は時間の歪みの影響から守られる。もちろん、時間や因果から世界を切り離す封絶にも有効ですよ。ちょっと調べてみましたが、効果は本物です」

「……相変わらずファンガイアの技術には舌を巻くばかりだな」

「ええ。そう、ですね」

奏夜は少し答えを濁した。

まさか二年前、通りすがりの二人組に貰ったなど、説明できたものではない。

(必要になるってのはこのことだったんだな)

二年経った今でも、彼らの正体はわからないが、今は素直に感謝しよう。

誰かを守るためになるものなら、何だって構わない。

「ではありがたく使わせて貰うよ。もう一枚は健吾に渡しなさい」

「ですね」

今の健吾なら、十分戦力になってくれる。

健吾も仕事が終わりに次第帰国すると言っていたから、次に会った時にでも渡せばいいだろう。

「しかし、ファンガイアが活発化しているタイミングで、“紅の徒”が御崎市に現れたことは、何か関係性があるのかも知れないな」

「俺もそう見てます。それに、今回戦った“フリーアグネ”ってやつは、チエックメイトフォークラスの力を持っていました」

「それだけの力を持つ存在が集まれば、また四年前のようになる可能性はある、か」

名護はやや憂いを帯びた表情になる。

名護は外国を飛び回っている分、ことによつたら奏夜よりも遥かに多く、掟破りのファンガイアを倒してきた。心労が増えるのはあまり好ましくないだろう。

四年前こそすれ　大切な人がいる今なら、なおのこと。

「すみません名護さん。僕らがしっかりしてれば、恵さんや由利ちゃんとも……」

「？　何を言ってるんだ。キミが謝る必要はない」

名護は柄にもなくしよげる奏夜の肩を軽く叩いた。

「キミがこの街で戦ってくれているから、私は安心して戦える。キミが恵と由利を守ってくれているから、私は二人から離れていられ



るんだ。むしろ感謝したいくらいだよ。もっと自覚を持ちなさい」

名護の言葉に、奏夜は驚いたように目を見開き、

「はい」

かつて奏夜は名護に言われた。

キミは本当に変わったと。

でもそれは、自分に限ったことではない。

みんなみんな、変わった。

名護にしる、かつてからこんな柔軟な見方が出来たわけではない。

むしろ昔は、張り摘めた弦のように刺々しい音楽を奏で、自尊心の強い性格だった。

この四年でそれが改善されたのはひとえに

「うふふー、名護くんも言ってくれるようになったわねー」

『!』

シリアスな雰囲気破壊する軽い声に肩をはね上げ、口に含んだコーヒーを吹き出しかける。

軽くむせかえりながら、奏夜と名護は後ろを振りかえった。途端、名護さんに飛び付く小さな身体。

「おとうさん、おかえりなさい!」

「おかえりなさい、名護くん」

「ゆ、由利？ 恵？」

「い、いつの間に……」

「ん？ 『キミのスーツ姿も新鮮だね』のあたりから」

「ほとんど最初からですか!」

多分、後ろのテーブル席にいたのだろうが、話に夢中で気が付かなかった。

「名護くんのいい感じなセリフも聞かせてもらったわよん。『キミが恵と由利を守ってくれているから、私は二人から離れていられるんだ』……つまり裏を返せば、本当なら片ツ時も離れたくないってことよねー」

恵、超ご機嫌。片や名護、超動揺。

「ま、待ちなさい！　違う、さっきのは言葉のあやで……」

「じゃあ私達は大切じゃないのかしら？　悲しいわねー、結婚してもう四年になるのに」

「い、いやいや。別に大切じゃないとは……」

「あら、ならいいじゃないの。さ、せっかく帰ってきたんだし、久しぶりに家族で過ごすみましょう！

さあ由利！　パパに全力で抱き着くわよー！」

「だきつくー！」

恵は名護の背中に腕を回して抱き着き、そして恵の命を受けた由利は、腹部あたりにしがみつく。

名護の動揺、更にヒートアップ。

顔を真っ赤にして二人をどうにか振りほどこうとするが敵わない。

「めめめ恵！ ゆゆ由利！ 今すぐ離れなさい！」

『やー』

恵と由利は声を揃えて名護の要求を却下する。

そんな三人を見る奏夜と、コーヒーを煎れるマスターは、口の端が歪みながらも、懸命に笑いを堪えていた。

(名護さん(くん)が面白すぎる)

二人の思考がシンクロし、そしてこれまたほぼ同時に言った。

「超ラブラブですね(だね)、名護さん(くん)」

「茶化すのは止めなさいー!!」

カフェ・マル・ダムールの店内に響く笑い声は、嶋が名護を訪ねてくるまで続いたという。

カフェ・マル・ダムールの帰り道。

夕日が煌めき、帰宅する人達がちらほら見える道路沿いを、奏夜は歩いていた。

ゼロノスカードを貰った時のことを思い出したせいか、あの時と同じように鼻唄を歌っている。

( 案外、また面白いヤツに出会ったりするかもな )

そんな臆気な期待をしつつ、奏夜は信号前で立ち止まる。

四方と十字型に横断歩道がある、小さなスクランブル交差点。

車が行き交い、たくさんの人が信号が変わるのを待っている。

( ぁの中にも、トーチがいるんだろう )

我ながら嫌な創造をする、と思いながらも、奏夜は顔を曇らす。

(……名護さん、俺は貴方に安心してもらえる程、誰かを守れちゃ  
いませんよ)

フリアグネの存在に気が付く頃には、もう相当数の人間が喰われて  
いただろう。

例えば、坂井悠二。

例えば、本当の平井ゆかり。

結局、犠牲者は出てしまう。

奏夜がどれだけ変わろうとも。

奏夜がどれだけ強くなろうとも。

それに日常か非日常かは関係ない。

それ以前の問題。

この世のリアル。

（ 父さんなら、守れたのかな ）

全てに愛された男。

真の天才、紅音也。

もし父がここにいたのなら、今の自分をどう評価するのだろうか。

立派になったと言うのだろうか。それともまだまだだと言うのだろうか。

……いや、こんな考えをすることこそ、まだまだ未熟ということなのだろう。

（ つたく、煮え切らないヤツだな。俺も ）

ネガティブ思考な自分の頭をゴンと叩いたところで、信号が青に変わった。

奏夜は群衆に混じって、横断歩道を渡る。

世界が閉じたのに気が付いたのは、スクランブル交差点の真ん中まで来た時だった。

「……」

立ち止まって至近の様子を伺う。

自分以外の人間は皆動きを止め、静寂だけが支配する空間。

「封絶か」

世界を切り取るドーム状の炎。

幾度か見たことのある光景だが、炎はまるで覚えがない、群青色だった。



「予感的中」

ぼつりと奏夜が呟く。

封絶の発生。

それが意味するものは、

「封絶の雰囲気はあまり好きじゃないんだ。

俺の庭であるこの街を、無意味に引つ掻き回す真似は止める」

「ふん、私はアンタの存在がこの街の不協和音に聞こえるけどね」

互いに好意的でないことがわかる口調のまま、二人は互いの姿を視認した。

奏夜の真正面、交差点を渡った先の歩道に、いつの間にか一人の女性立っていた。

外見は二十歳過ぎ。

欧州系の風貌に、栗色のストレートポニー。

縁無し眼鏡の向こうにある目は鋭く、表情もやや不機嫌気味。

奏夜は女性をそういつた目で見ることはないが（奏夜が唯一、音也から受け継がなくて良かったと思うものである）、万人に聞けば確実に美人と答えるだろう。

持ち物らしき、肩にかけた下げ紐の先に吊られている異様に分厚い本が、妙に目立っていた。

女性は奏夜を見るなり、深く溜め息をつく。

「デカい気配がすると思って来てみれば、ワケわかんないヤツ見つけちゃったわね」

「そらこつちのセリフだ。いきなり封絶使って話し合いのフィールド作りやがって。」

「何なんだお前。パツと見、フレームヘイズみたいだか」

「……へえ。大体のことは知ってるみたいね。手間が省けるわ」

「ヒヤーツハハ！ お前の場合、知ってようが知ってまいが説明面倒くさがブツ！」

女性の持つ『本』がいきなりハイテンションな声で喋り出した。

ちなみに最後の声は、女性が本をブツ叩いた音だ。

「一応は自己紹介しとこうかしらね。

“ 弔詞の詠み手 ” マージョリー・ドー。  
んで、こっちが “ 蹂躪の爪牙 ” マルコシアス」

「よろしくなあ！ 茶髪の兄ちゃん、ツヒヒ！」

「さて、それでアンタは一体何？ 同業者でも “ 徒 ” でもミステスでもないみたいだけど」

「紅奏夜。ファンガイアだ」

ファンガイア、という単語に、マージョリーとマルコシアスが反応する。

「ふーん。あんたファンガイアなんだ」

「ハーフだけだな。」

しかしアンタら、よく気が付いたな。

知り合いに一人フレイムヘイズがいるが、そいつでも俺がファンガイアとは気付いてないのによ」

「誰のことか知らないけど、そのフレイムヘイズかなりお粗末なヤツね。」

確かに一目じゃ気付かないでしょうけど、気配探知の自在法使えばすぐにわかるわよ」

(ほう、そんなことも出来るんだな。自在法ってのは)

そういえばフリアグネも、シャナを『炎も満足に出せないフレイムヘイズ』と称していた。

ならば、マジヨリーの言う気配探知の自在法が使えないのも頷ける。

「ま、そいつは与太話か。」

それで……マジヨリーとマルコシアスだっけか。  
アンタらはこの街に何をしに来て、俺になんのようなんだい？」

「フレイムヘイズの目的なんて知れてるでしょう。“徒”をブチ殺しに来たのよ」

何やら穏やかでない空気が、マジヨリーから流れ出ていた。

「私達が今追ってるのは“屍拾い”ラミーっていうクソ野郎よ。ア  
ンタに声をかけたのは、そいつの居場所を突き止めるのに使えそう  
だったから。それだけよ」

「なるほど、要はこの街の案内役ってところか」

「ヒツヒツヒ、頭の回りが早えな兄ちゃんよ！」

マルコシアスの笑い声を聞きながら、奏夜は思考を巡らせる。

街に“徒”がいる以上、放っておけない。

だがシャナと違い、こいつらが自分にとって味方であるとは限らな  
いだろっ。

（ 何にせよ、話を聞かないことには始まらないか）

そう結論付けて、奏夜は口を開く。

「そのラミーってヤツは、どんな“徒”なんだ？」

「あっちこっちでトーチを喰って、チマチマ存在の力を集めてるせせこましい野郎さ。ヒッヒ！」

「トーチを喰う？」

つまりトーチから存在の力を奪っているということだろうか。

だが、何故そんな面倒なことをするのだ。

トーチの持つ存在の力は、所詮仮初めに過ぎない。

普通に喰った方が、より効率良く存在の力は集まるだろうに。

奏夜の疑問を察したのか、マージョリーは補足を入れる。

「わざと消えかけのトーチを喰って、世界のバランスを崩さないようにしてんのよ」

「は？ そんなの“徒”にとっちゃどうでも……」

言いかけて、気が付く。

そうか。

トーチ、しかも消えかけのものだけを喰う。

その程度ならば、存在の消滅による世界のバランス崩壊は生まれにくい。

無害であるならば、フレイムヘイズがわざわざ討滅する理由はない。

上手いことを考えたものだ。

「ちょっと待てよ。それならほかっときばいいじゃねえか。そのラ

「ミッって奴」

奏夜は淡々と指摘する。

「世界のバランスを崩さず、普通に生きてる人間を喰わないなら、余計な戦いをしなくて済むだろ」

「……ハッ、同じように人の存在の力を喰う身でよく言えたもんね」

マージョリーの表情に苛立ちが混じる。

奏夜もまた、仲間への侮辱に対し、僅かに目を細めた。

「“紅世”についての経験が浅いようだから教えといてあげるわ。

“紅世の徒”に例外なんてない。

今はたまたま奴の都合で、他の気に障らないように動いてるだけよ。いつ溜め込んだ“存在の力”を使って災厄を起こすか、わかったもんじゃないわ」

「そいつが災厄を起こすって証拠はあるのかよ」



「“紅世の徒”は人喰いの化物なのよ、証拠なんてそれで十分！同じことを何度も言わせないでくれる!?”」

奏夜の耳を、彼女の奏でる心の音楽が揺らす。

激情に吼えるマージョリーの音楽は、まさに燃えたぎるビート。

調和など欠片もなく、ただ全てを巻き込む、暴音。

それらのバックミュージックには、鮮烈に刻まれた深い深い憎悪が鳴り響いている。

荒れ狂うマージョリーの音楽を聞き終え、奏夜は表情を変えぬまま、

「なるほど、大体わかった」

奏夜は額に手を当てて溜め息をつき、答える。

「悪いな。俺、アンタらの邪魔することにするわ」

「は？」

「あ？」

マージョリーとマルコシアス。二人分の疑問符が浮かぶ。

「いやいや、最初は協力してもいいかなーって思ったんだけどな。ただ前回の件で、“紅世の徒”にも色々事情があるって知っちゃったからさ。

何の話し合いも無しに、すぐ殺すのはやや憚られる気分ですね」

それに。と奏夜は『笑った』まま告げる。

「俺さあ、他人と解り合う気がないヤツって大ッ嫌いなんだよ」

奏夜は言い終わると同時に、下げていたバックを地面に放る。

「要するにだ。ラミーってヤツに関しては俺が処理する。」

アンタらの出番はありませんので、さっさとお帰り下さいな」

「へえ、言うじゃない」

「ヒヤハハハハーツ！　いーじゃねーか、いーじゃねーか！　滅茶苦茶面白えヤツだな兄ちゃんよお！」

マージョリーの好戦的な笑みと、マルコシアスの大爆笑に呼応するかのように、群青の炎が勢いよく弾け出した。

「交渉決裂ね。私たちの邪魔すんなら、さっさとブチ殺させてもらおうかしら？」

「やれるもんならな。

キバツト！」

「あいあい！　キバツト！」

奏夜の呼び掛けに答え、何処からともなくキバツトが飛来する。

「ガブツ！」

キバットが奏夜の左手に噛み付き、アクティブフォースを注入。

奏夜の顔にステンドグラスの模様が浮かび上がる。

「変身」

奏夜が静かに唱え、キバットがキバットベルトに止まる。

光の鎖が弾け飛び、奏夜の身体をキバへと変えた。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

突然の変貌に驚く二人を、キバは人差し指で挑発する。

「赤い鎧に、蝙蝠の仮面……！ つふふ、なるほど、最近よく聞いたり聞いたけど、アンタが『キバ』……！ ファンガイアの王……！」

「ヒヤッ、ハハハハア……！ なんだってこんなちっちゃい街にこんな大物がいるんだあ……！」

物好きな王様だなオイ。ツヒヤ、ハハ……！」

戦意をみなぎらせ、マージョリーとマルコシアスはキバを睨む。

戦うに足ると認めた相手を。

「まくた面倒くさそうなヤツだな。フレイムヘイズってみんなこうなのかなぁ？」

「さあな。ただ、平井とは違う面倒くささだとは思っぜ」

キバットのやや呆れ調の質問に、キバはあくまでもマイペースに答える。

マージョリーは肩から下げた本、神器グリモアを片手に持つ。

留め具は独りでに外れ、古めかしい字の書かれたページが捲れていく。

「準備万端ってか？」

「ちあゝ、どじかしらね」

はぐらかすような調子で二人は会話を交わす。

グリモアは半分ほどまでめくられ続け、付箋の挟まれたページで止まった。

それを合図に、キバは動く。

「ハッ！！」

両手を大きく広げるような独特の構えを取り、キバはマージョリーに突進していく。

キバの拳が彼女を捉える。

だが拳を突き出すキバの目の前で、吹き荒れていた群青の火の粉が、マージョリーを中心点に集まり出した。

「なんだあ！？」

キバットが言い終わらないうちに、彼女を包み込む炎の塊は、奇妙な獣の形を型どった。

耳はピンと立ち、大柄な体格。両腕は熊のように太く、ギザギザの牙に瞳の無い丸い目が、まるでどこぞのマスコットキャラのような印象を与えていた。

「こっちも変身！　　ってかあ？　　ッヒヒ！」

キバの拳が届くタイミングに合わせ、奇妙な獣は息を吸い込むような仕草を取る。

何かを吐き出すかのように。

「！　　キバ、よける！」

「チイ！！！」

舌打ち三寸、キバットの警告に従い回避。

「ツバハアッ！」

群青の炎が獣の口から溢れ出す。

紅蓮の本流による津波を、キバはギリギリでかわす。

「ふうん、あの位置から回避したのを見ると……」

笑いの表情を取る獣の中からマージョリーの声が聞こえ、

「ま、合格点だな。ヒツヒ」

マルコシアスが言葉を継いだ。

息を整えて、キバとキバットは冷静に相手の戦闘スタイルを分析する。

「嬢ちゃんと全く戦い方が違うな」

「ふむ。自在法ってやつをメインに戦うフレイムヘイズ……ってとこだな」

「ならあの炎に加えて、攻撃方法も多彩にあるってことか……、こいつあいくらキバツても、素手でやるには骨が折れるぜ」



「フン、なら狼には狼だ！」

キバが取り出した青色のフェッスルを、キバットが吹き鳴らす。

『ガルルセイバー！』

「ううん、負けちゃったか」

「ハッハッハ、手先が物を言うスピードなら、まだお前には負けんぞ」

「ちえ〜」と口を尖らせるラモンに対し、次狼は得意気に鼻を鳴らす。力はケーキを食べながら、二人のやり取りを見物していた。

と、賑やかなドランプリズンに軽快なリズムが響き渡る。

「あ、お呼びだね」

「このけはい……またフレイムヘイズ」

「……ったくあいつは。トラブルメーカーなどここまで音也と似やが  
って」

次狼は溜め息混じりに呟き、ラモン、力が見守る中、彫像形態とな  
って、キャツスルドランから飛び出していった。

飛んできたガルルセイバーの柄を握り締めると、キバの腕が青き装  
甲『ガルルシールド』に覆われ、胸部もまた『ウルフェンラング』  
に変化。

キバの仮面とキバットの瞳が青く染まり、『ガルルフォーム』への  
フォームチェンジが完了した。

「ヒツヒツヒ！ 青い狼と来やがったか！ なんでえなんでえ、  
俺様のお株を奪うつもりかあ！？」

「ふん、色が変われば強さが変わるのかしら」

「さあ、どづかな！」

キバが吠え、再び獣に向かって駆け出す。

「ヒャーッハハ、お次はこいつだあ！！」

獣が腕を一振りすると、無数の炎弾がキバ目掛けて射出された。

早く、数も多いが、ガルルフォームは身体能力に特化した形態。

防御と回避はキバフォーム時よりも格段に洗練されたものになる。

ガルルセイバーを使って炎を切り裂きながら、キバはガルルセイバー、次狼に問いかける。

「困った時の次狼さん。あのデフォルメ狼は何だ？」

『腹の立つキャッチコピーをつけるな』

律儀にツッコミを入れてから、次狼は答える。

『俺も実際に見たことはないが、恐らくアレは“蹂躪の爪牙” 顕現の証、炎の衣『トーガ』だ』

「衣、ね。ならあの怖いお姉さんを中から引きずり出さないと駄目なわけか」

『あいつらは自在法に長けている。炎髪のがキと違って、直線的な攻撃は無いぞ』

「はっ、上等！！」

炎の雨を持ち前のフットワークで回避し、キバは地を思い切り蹴る。

ジャンプした勢いで、近くにあった信号機の上に着地。

「逃がすかよお！！」

炎弾が飛ばされる瞬間、キバは信号機を足場に再び跳躍。

信号機が燃えないゴミに変わったのを横目に収め、キバは落下の勢いに任せるまま、ガルルセイバーを獣目掛けて振り降ろす。

「なっ!！」

「やべっ!！」

炎の嵐を一旦止め、獣は両腕を交差し、防御体勢を取る。

「甘いわ!！」

キバは空中でぐるりと身体を捻り、ガルルセイバーを振り降ろすとなく着地。

上段に腕が置かれ、獣の正面はがら空きだった。

「ハアッ!！」

ガルルセイバーの剣閃が煌めき、獣の身体を切り裂く。

二撃、三撃と刀身が振り抜かれる度に、獣の身体を作る焔が散った。

「ぐっ!!」

「つの野郎があ!!」

獣は僅かによろめくが、アンバランスな体勢のまま、炎弾をキバに吐き出した。

「がつ!!」

火球がキバの真ん中にヒットし、その身体を打ち上げる。

ざりざりざり、と地面との摩擦で火花が散るも、キバは直ぐ様身を起こしてリカバリングした。

「……やるな」

僅かに焦げた自らの鎧を見て、キバは呟く。

「ハッ、お互い様でしょうが」

苦々しげなマージョリーの声が聞こえ、獣が起き上がる。

「いやいやおでれーた。さすがはキバってところかあ？ ヒッヒ」

「この程度とってもらっちゃ困るぜえ？」

マルコシアスのシニカルな言い回しにキバットが答え、両者は再び睨み合う。

戦いが仕切り直され、一触即発の雰囲気は漂う。

互いが剣と爪を構え、隙を伺う。

『  
~~~~~  
』

彼にしか聞こえない音色　ブラッディローズの旋律が、キバの思考を揺らした。

「なっ!?!」

「おいおい、このクソ忙しい時にファンガイアかよ!?!」

狼狽えるキバに、獣は不審そうに首を傾げる。

一方でキバは大慌てだ。

このまま『弔詞の詠み手』を放っておけば、後々面倒になるのは確か。

しかし現段階で、優先させるべきは掟破りのファンガイア。

「……あゝ、畜生!?!」

苛立ちを含んだ語長のまま、キバは指をパチンと鳴らす。

すると、何処からともなく、キバ専用のバイク　マシンキバーが
爆音と共に走ってきた。

マシンキバーは馬型モンスターの脳を移植されているため、キバの
指示一つで自走が可能なのだ。

やってきたバイクに跨がり、キバはガルルセイバーの柄をマージョ
リー達に向けた。

「お前らの相手はまたしてやる！」

「は？　あんたら逃げられるとでも……」

アオオオオン！

マージョリーが言い終わるか言い終わらない内に、ガルルセイバー
から放たれた衝撃波が、道路を砕いて上がった砂煙を巻き上げ、マ
ージョリーの視界を覆った。

「くっ！？」

マージョリーは直ぐ様目を開けたが、既にキバの姿はそこにはなく、

バイクのホイール跡だけが虚しく残されていた。

しばらく獣は、呆けたようにその場に立ち尽くし、群青の炎が霧散すると、再びマージョリーの姿を現す。

「ヒヤーツハハハハ！！ 言ったそばから逃げられちゃったなあ！
我が鈍重なる追跡者、マージョリー・ドブツッ！」

「お黙りバカマルコ」

普段よりもやや強めな一撃がグリモアへと飛んだ。

交差点からやや離れた路地裏。

『ガルル・バイト！』

「ヴルアアア！」

満月をバックに、キバは『ガルルハウリングスラッシュ』を決め、

三体のラットファンガイアを撃破する。

ステンドグラスの欠片となったファンガイアの肉体から、虹色に輝くライフエナジーが放出された。

「ふうっ……」とキバは息を吐いて、ガルルセイバーを手放す。

彫像となったガルルセイバーを見送って、キバツトが言う。

「奏夜。こいつら、量産体のファンガイアだけ」

「誰かが使役する、意思のない操り人形か。でも、一体誰が……っ
！！」

そこでキバは言葉を切る。

突如、浮遊していたライフエナジーが、キャッスルドランに向かうことなく、飛び去っていったのだ。

行き先を目で追いかけると、それはすぐ近く、路地裏の入り口で止まる。

と、いつの間にかそこには、黒い人影があった。

ライフエナジーはその人影の手のひらで踊り、影の体内に吸収される。

「また、会ったな。キバの、継承者よ」

フードの下から漏れる独特な口調には、聞き覚えがあった。

「お前は、あの時のファンガイア……!!」

フリーアグネの一件で自分を襲ってきた謎の存在、ドラゴンファンガイアだ。

「あのファンガイアは、お前の差し金か」

「フツ、だったら、どうする?」

「掟を破ったファンガイアとして、許すわけにはいかない」

拳を向けるキバに、ドラゴンファンガイアの口元が怪しく歪む。

「戦う、か。それも、悪くない。しかし、今は、まだ、その時ではない」

「何だと？」

「私は、まだ、自分の身を、危険に晒す、わけには、いかないのだ。前の戦いは、お前の力を測るためのものに、過ぎない。いずれ、来たるべき時に、貴様との戦いも、喜んで受けよう。フレイルムヘイズの連中も、一緒にな」

「フレイルムヘイズのことまで……。お前、何者だ!！」

「お前達の、過去を作りし者」

そう言い捨て、ドラゴンファンガイアは指を鳴らすと、霞となって消えた。

「俺達の、過去……？」

変身を解除し、奏夜はドラゴンファンガイアの言動を反芻する。

混乱するばかりの疑念を示すかの如く、夜の帳はただ深みを増すだけだった。

『弔詞の詠み手』と“蹂躪の爪牙”。

“屍拾い” ラミー。

そして、ドラゴンファンガイア。

誰に言ってもない奏夜の愚痴が、虚空に虚しく反響する。

「さあて、面倒くさくなってきやがったな」

第六話・暗転/弔詞の詠み手・Aパート（後書き）

以下反省。

・またしてもゲスト参戦。今さら小手先の新アイテム出すよりも、他のライダー作品から封絶対策を持ってきた方がいいと思ったのであぁしました。

・ゼロノスカードの時間からの影響を守る効果にはタイムラグがあるじゃないか、みたいなツツコミは無しで（笑）
侑斗みたいに存在を消されるほどの影響は、封絶にはありませんね。

・デネブは電王チームの中で一番好きです。最終回の侑斗とのやり取りには泣いた（ー；）

・前回名護さんはシリアスだったので、今回はコミカルに。ああいう真面目な人がマイホームパパにクラスチェンジするとあぁなると思います（笑）
ちなみに名護さんも恵も、由利ちゃんには大甘な設定です。

・マージョリー&マルコシアス登場。マルコシアスは意外に書きやすいですね。逆にマージョリーが書きづらいことに気が付く……。これから大丈夫だろうか？（聞くな）

では次回もお楽しみに。

第六話・暗転／弔詞の詠み手・Bパート

バシッ！

閑静な庭園に、鈍い音が鳴る。

「っ……って」

「三十二回目」

片膝をつく悠二を、シャナが不機嫌そうに見下ろす。

「今朝だけで三十と二回。昨日は二十八回。一昨日は三十回。……
どういっつもり？」

「……ごめん」

「このところ、打たれる数が初日よりも増えているではないか。た
るむにも程がある」

アラストールの重々しい声が追い討ちをかける。

「この鍛練を提案したのは貴様なのだぞ」

「そりゃそう、だけど……」

煮え切らない態度の悠二に、シャナは眉をつり上げて、木の枝を構え直す。

「もう一度！　今度こそ目をそらさないでちゃんと見て……」

「うめん」

謝って、悠二はシャナに背を向けた。

「今日は……もう」

「え！？」

それをシャナが慌てて止めようとする。

「まっ……待ちなさいよ！　悠二……！」

「……うめん」

しかし覚束ない足取りのまま、悠二は玄関まで歩き去ってしまった。

一度も振り向かぬまま。
呆然と立ち尽くすシャナに、その様子を静観していたキバーラが飛んでくる。

「シャナちゃん。あの様子じゃ何言っても聞く耳持たずよ」

「……う」

「本人に意欲が無いのであれば、付き合っただけやる必要もあるまい。これ以上鍛練を続ける義理もなかるう」

「で…でも！」

二人の正論、しかしシャナは自分でも驚くくらいの勢いで反論する。

「“徒”がまた現れた時のために、備えておく必要があるの！」

言ったあと、必要以上に怒鳴り口調になっていたことに気付いた。

「……ごめん。アラストール、キバーラ」

「構わん」

「気にしてないわ」

アラストールはいつもの声音で、キバーラはやや素っ気なく答える。シヤナは、自分の中にある重くて嫌な何かを感じていた。

行き場を失った感情が渦巻き、思わず拳を握り締める。

(最初は、ちゃんとやってたのに)

少なくとも最初の頃の悠二は、がむしゃらで、結果に結び付かなくとも、意気込みと熱意に満ちていた。

けれど、今はあの体たらくだ。

力を抜いているくせに、毎朝の特訓自体はサボらない。

ただ、覇気が消え失せていた。

(どうして……?)

シヤナの思いに明確な答えを出してくれる者は、誰もいなかった。

「悠二。お前どうしちゃったんだ？」

家上がり、部屋のベッドへ倒れ込むように身を預けた悠二は、寝転がりながら、キバットの小言を聞いていた。

「そりゃあ、進歩が微妙だったのは確かだ。けど手を抜くにはまだ早すぎんだろ」

「わかってるよ、そんなこと」

「わかってんなら……」

「けど」

悠二は体制を仰向けにかえ、虚ろに天上を見上げながら、ぽつぽつと語り出す。

おかしくなったのは多分、数日前の“燐子”との戦いから。

いや、戦いと呼ぶにも烏滸がましい。あの騒動で、結局自分は何も出来なかったのだから。

無様に逃げ惑って、追い詰められて、あの白い騎士と会って、シヤナが来てくれて。

あの後からずっと、心の中に澱んだ気持ち沈殿し続けていた。

あれから何もかも、後ろ向きに考えがちになる。

キバットが言うまでもなく、自分がおかしいのは、悠二自身が一番よくわかっていた。わかっている、鍛練でもあの態度を取っていた。

悠二の話を聞き終わったキバットはしばらく沈黙していたが、

「アホウ」

完全に呆れた声でそう言って、キバットは目を細めた。

「悠二、お前本ツ当に鈍感だな」

「……は？」

「少しはシヤナちゃん側の身にもなってみろってんだ」

「シヤナの身って、別に何も変わらないだろ」

「……はあ」

本気でそう返してきた悠二に、キバットの瞳には呆れを通り越して憐れみが浮かんでいた。

(まったく、同情するぜシヤナちゃん)

こんな鈍いヤツを好きになっちまうなんてよ。

「ってなことが今朝あつたわけよ」

「……やれやれ、鍛練してると聞いていた時からなんか不安だったけど、やっぱりそうだったか」

坂井家から紅家に戻ったキバットは、今朝あつたことを包み隠さず奏夜に報告していた。
奏夜側もキバットとほぼ同意見で、シヤナと悠二に、それぞれ違う意味の憐れみの意を捧げていた。

「悠二も鈍過ぎだぜ。シヤナちゃんがどれだけ自分に期待してるのかわかつちやいなえ」

「恋愛感情においてもな。吉田もそついう意味じゃ大変だ」

「ん？ 何か言つたか」

「いや、何も」

そこまで言って、奏夜が頬杖をつくテーブルに、皿に盛り付けられたオムライスが置かれる。

「ほら、出来たわよ。奏夜もキバットも、早く食べちゃいましょう」

制服にエプロン姿の静香が、フライ返しを片手に言う。

「ん、ゴメンゴメン」

「はあー、奏夜の抜けてるところはいつまで経っても変わらないわね」

「手厳しい」

苦笑する奏夜の隣の席に自分の分を置き、静香は手を合わせ、奏夜とキバットもそれに倣う（キバットの場合は羽を合わせる形だが）。

『いただきます』

三人一緒にオムライスを口に運ぶ。

「ん〜、グレイト！ 静香、また腕を上げたな」

「もう、キバットったら。褒めても何も出ないわよ」

「でも、本当に美味しいよ。いつもありがとな、静香。お前も大学で忙しいのに」

「！！　べ、別に、そんなのは、いいけど……」

いつも浮かべる皮肉めいた笑みとは違う、優雅な微笑を浮かべた奏夜を見て、静香はもの凄い勢いで顔を反らした。

後ろ姿から見ると、耳のあたりがやや赤い。

「……お前も大概鈍感だ」

「？」

首を傾げる相棒に、キバツトは軽い疲労を覚えた。

「あ、そうだ。静香、ちょっと聞きたいんだけど」

「な、何？」

ぎこちない動きで顔をこちらに戻し、だが奏夜の顔は見ないままの静香に、奏夜は尋ねる。

「自信とか、情熱を無くしたヤツを立ち直らせるには、どうすれば一番いいと思う？」

突飛な質問に虚を突かれ、静香はようやく奏夜に視線を戻した。

「えっと、それって自信を取り戻させたいってことよね。生徒さんからの相談？」

「似たようなもんだ」

「うーん、自信を無くした人を立ち直らせる方法か……。でも奏夜って、その手の相談得意そうじゃない。あの頃なんて何回しよげかえってたことか」

「少なくとも、一ヶ月に二回のペースで自信無くしてたもんなあ」

「昔のことを……」

だがそれは揺るぎない事実なので否定は出来なかった。

「ま、まあ、そりゃあね。その手の話において、俺はかなりピツタリ当てはまっちゃうヤツだったわけだし？　しかもそれをかなりの回数サイクルしてたわけだし？　周りの方々にもかなり迷惑をかけて、た、わけだし……」

認めていくにつれて、奏夜のテンションが下がっていく。

普段の姿からすれば予想も出来ないコンディションだが、こればかりは彼の中で完全なる黒歴史であって、同時に、永遠に残り続ける傷なのだ。

「静香の言う通り、だいたいの相談方針は決まってる。そのための意見の一つとして、立ち直る側じゃなくて、立ち上がらせる側だった方の意見を聞きたいわけなのですよ」

我ながら勝手な話だなと思いつつも、様々な意見を集めておくに越したことはない。

教師として、彼は意外なところで実力を発揮出来る。こういう心の問題においては特に。

……逆に言うと、一般的な教師の仕事においては、常識を完全に逸脱している問題教師なのだが。

「うーん、そうだなあ。私だったら、その人が今持てる力で出来ることをやらせてみるかな」

静香は口元に指先を当て、考える仕草をする。

「あとは、やっぱり話を聞くことだよ」

「だよなあ……。それはわかるんだけどさ」

キバットの話を聞く限り、今回は一筋縄でいかなそうな雰囲気だ。

「まあ、自信とか熱意とかがって、乱暴な言い方になるけど本人の気の持ち方次第だからね。だから今回の場合、それとなくアドバイスをして、あとは放っておくっていうのがいいんじゃないかな　と私は思います」

「……そっか、そうだよな。大変参考になりました」

「いえいえ、恭悦至極」

茶目つ気を混ぜた言い方をする静香。

「……なんやかんやで、この少女には頼りつきりだ。今も昔も。」

その事実にごどこか可笑しさを覚えながら、奏夜はオムライスを平らげた。

そんなこんなで、その日の御崎高校。

普段通り、奏夜は三時間目の授業に向かうため一年二組、つまりは自分の受け持つクラスへ向かっていた。

しかし軽やかな足取りとは裏腹に、奏夜の心境は気だるさに満ちていた。

（本当にあいつらは期待を裏切らないよなあ）

と言つのも、奏夜は一時間目、二時間目の終了後、職員室で再び同僚の泣き言を聞かされていたのだ。

平井ゆかりをなんとかしてくれ、と。

大体のあらましはこうだ。

今朝方から、平井と悠二の雰囲気がいまにも険悪であり、授業をするこちらが一触即発の空気に耐えられない、とのこと。

（俺が知ったこつちやねえよそんな覚悟で教師が勤まるかヘタレ共が）

奏夜の心の中での反応はざっとこんなものだったが、確かに放って

おけない事態になったのは事実だろう。教師が気詰まりするほどの
険悪ムードなのだから、クラスメート達は更に狭苦しい思いをして
いるはずだ。

(ま、一番辛いのは二人なんだろうけどな)

やれやれ、仕方がない。

いずれにせよ、今朝のキバツトの話を聞いてから、シヤナか悠二の
どちらかとは話をしようと思っていたのだから、いい機会が出来た
と思おう。

10分間の休み時間でありながら、移動教室やらで廊下はそれなり
の賑わいを見せている。

道行く生徒に軽く挨拶を振り撒きながら、奏夜は階段を上がり、教
室の扉が延々と連なる渡り廊下を曲がりかけて、

「なに気の抜けたこと言ってるのよ!」

「おおっ」と、「

聞き知った声が通路に反響したため、奏夜はちょうど曲がり角の死角に隠れた。

見れば、廊下のご真ん中でシャナが悠二を怒鳴り散らしていた。

奇異の眼差しを向ける周囲などそっちのけで、シャナは怒りと困惑が入り混じった表情で、悠二を睨みつける。

「……そんなに怒鳴るなよ」

あまりの感情の入りように、息切れさえ起こしているシャナに対し、それでも悠二は何処か力無い態度を崩さない。

当然、シャナの苛立ちは加速する。

「っ……!! “徒”が来てるのよ!?! どこかで人を喰ってるかも知れないのよ!?!」

紅世の用語までも口走っている。

感情の爆発に、自分が何を叫んでいるのかも理解が追いつかないようだ。

(これに関しては軽い電波系って理由で誤魔化せるだろうが……)

それにしたって、だ。

判断力を見失うくらい、悠二に怒りを覚えているということか。

「何で、何でそんなにだらけていられるのよ!?!」

シヤナの剣幕に悠二はしばらく押し黙り、そして口にする。

不安定だった絆を完全に破壊する、禁断の言葉を。

「僕なんかいなくても、別に困らないだろ」

「!?!」

ぴしり。と、シヤナが凍りついたように動かなくなる。

表情がかき消え、いつも鋭気を研ぎ澄ましている彼女に似合わない、虚脱感に満ちた様子でその場に立ち尽くしていた。

「あっちゃー……」

思わず奏夜は、頭痛を抑えるかの如く、額に手を当てる。

いかんぜ坂井。それは禁句だ。

しばらくしてシャナは、悠二の脇を早足で通り過ぎ、奏夜のすぐ隣を神がかかったスピードで走り去り、階段の踊り場を曲がって姿を消した。

今にも泣き出しそうな顔をしながら。

「……ったく」

物の道理が全般的にわからないシャナにも、問題が無いわけではない。
い。

だがこの場合

(完全に坂井が悪い)

深々と溜め息をついた奏夜は物陰から出る。

「知ってるか坂井。男にはやってはならないことが二つある。女の子を泣かせることと、食べ物で粗末にすることだ」

「先生」

覚束無い足取りで教室に戻ろうとする悠二。

そんな彼に、奏夜は規則正しい足音を鳴らしながら、ゆっくり近づいていく。

「今の態度は、感心しないな」

「感心しないもなにもないですよ」

悠二はいつもと違う、何処か投げやりな雰囲気です。

奏夜はこの問題の深刻さを再認識し、呟く。

「坂井。昼放課の一時十分に、音楽準備室まで来い」

「えっ？」

突然の提案に、悠二は戸惑う。

「言つとくがお前に拒否権はない。もしも来なかった場合、現国の
お前の評定を1にする」

「職権乱用です」

「フツ、愚かだな坂井。俺が停職や免職を省みる人間だと思つのか
？」

「……………」

思わない。というか思えない。

「僕に、何のご用ですか」

「なあに。大した話じゃないさ、すぐ終わる」

含みのある笑顔をして、奏夜は教室に入っていく、悠二もそれに続
いて席についた。

「ありゃ？ 池、田中と佐藤来てないのか」

教壇に立つ奏夜は主無き場所、田中栄太と佐藤啓作の机を見つけ、目の前に座っていた池速人に尋ねる。

「はい。先生の方に連絡来てないんですか？」

「うんにゃ、佐藤は家の都合もあるから仕方ないとして、田中の方からも連絡が無いのはおかしいな……。まあ、いいか。授業始めんぞー」

いいのかそれで。

クラス全員の意見が一致する中で、悠二だけが、奏夜の呼び出しのことを考えていた。

（ やっぱりシャナ絡みのこと、だよな ）

心の中で、苦々しいものが染み渡っていくのがわかった。今朝から何度もされた質問。

平井 シャナと何かあったのか、と。

……うんざりだ。

(僕とシヤナが喧嘩？　　っはは、ありえないよ。シヤナと僕は、
そもそもステージが違っんだ)

喧嘩とか、そういう次元の話じゃない。

(そうだよ。僕とシヤナは　　違っんだ)

自分に言い聞かせるように、悠二は拳を握り締める。

それが、自らを縛る運命ひための鎖だと気付かぬまま。

「失礼します」

「よお、来たな。坂井」

約束通りの時間に、悠二は音楽準備室を訪ねた。
様々な楽器が所狭しと保管され、楽譜が積まれたテーブルに奏夜は腰掛けていた。

「コーヒーでいいよな。ミルクはいるか？」

「はい。けど先生、いいんですか？　一応オーケストラ部の機材
でしょう？」

奏夜は、部屋に何故があったコーヒーサーバーを我が物顔で使っていた。

「機材っていうか、これはオケ部顧問の私物だよ。あの人と俺は高校時代の同期なんぞな。知ってるだろ？　机なつき先生」

知っている。

確か母が高名なバイオリニストだったとかで、校内でも話題になっている人だ。

先生もバイオリン奏者だから、その繋がりもあるのかな。と悠二は何となく予想を立てる。

「ほれ、冷めないうちに」

「いただきます」

そう言いながらも悠二はコーヒーに口をつけず、奏夜を見つめた。

「それで、僕に何を……」

「まあ慌てるなよ、坂井。コーヒーを飲む時間は、この世で最も神聖な時間だ。いや、これは知り合いの受け売りだけだな」

あくまで自分のペースで、奏夜はコーヒーを啜った。

その優雅な佇まいからは、儂さにも似た美しさがあり、一つの美術品のような印象を受ける。

「今朝から随分と険悪だったみたいだな。平井と」

案の定、奏夜の用件というのはシャナのことのようだ。

「……他の先生から頼まれたんですか。平井さんをなんとかしてくれって。だったら僕に頼むのは筋違いです。僕は彼女のお守りじゃありません」

「つつかかるねえ。お前、そういう態度だと案外威圧感あるのな」

心底楽しそうな調子で、奏夜はカップをテーブルの上に置いた。

「ヘタレな同僚の頼みなんざ聞く気はないよ。第一、これはお前と平井の問題なわけだからな。お前らが何とかするべきだ。ただまあ、ちよつとくらいなら手助けしてやるうかなと思つくらいでな」

背もたれに身を預け、身体を反り返らせながら天井を見上げる奏夜。言葉のキャッチボールをする上で、間違いなく最悪の部類に入る仕事草だ。

「先生が関わるほど、重要な問題じゃありません」

「どーだかな。そついや坂井。話は変わるが、数日前、お前が河川敷で言つてた『特訓』。あれつて捗つてるか？」

自分の表情が強張るのがわかる。

そのことに気が付き、悠二は慌てて表情を消そうとするも、時既に遅しだ。

奏夜に視線を戻すと、彼は後ろを向いていたが、肩が震えていた。

確実に笑っている。

先生、絶対にわかつて聞いたな。

そう悠二は確信した。

「わかりやすい反応をどうもありがとう。」

大方、あの時言ってた『誰かに守られっぱなしはいやだから』
ってヤツ。あれ平井のことだろ？ 何か平井に助けられるようなこ
とがあつて、平井の足手纏いになりたくないと思いついたから、特
訓を始めた。だがしかし、最近それが上手くいかず、お前の進歩の
無さに苛々し始めた平井とも不仲気味……ってというのが妥当かね」

「……なん、で」

「はっ、お前らのガキっぽい悩みなんざいくらでも予想できるわ」

自分を取り巻く状況を、次々と言い当てる奏夜に、悠二は驚きを露
にする。

「お前さあ、自分に見切りつけんの速すぎ。そりゃ目標点が高いの
は認めよう。なにせあの平井だからな。学業においてもアレは天才
って言つて良いし、運動能力に至ってはそれ以上だ。この前30分
の持久走で息一つ切らさなかつたしな」

高校レベルの話じゃねえよ。

そう冗談めかしく語る奏夜に、何故か悠二は僅かな蟠りを覚える。

違う。

シャナの凄いところはそんなことじゃない。

「けどさ。何も追い付けないってステージじゃないだろ。人間頑張れば大抵のことは出来る。追い付けないにしても、足手纏いにならないくらいなら」

違う。

この人は知らないだけだ。

あの少女がどれだけ圧倒的で、絶対的な存在なのかを。

彼女　　シャナのフレイムヘイズとしての姿を、悠二は思い浮かべる。
る。

煌々と燃え上がる炎髪を靡かせ、大太刀『贄殿遮那』を振るう姿。
あのシャナを見れば、この人も『追い付ける』などと言うようなこと
とはしないだろう。

そう。本人の自覚していないところで、悠二は苛ついていたのだ。

何も知らないまま、仮の姿としてのシヤナを見て　ちっぽけな存在に過ぎない自分が、彼女に追い付けるなどと語る　紅奏夜に。

「だいたいな、根本的なことを言わせてもらっけど、平井はそこま
で……」

「　　ですか」

「ん？」

「先生に、何がわかるんですか」

自分でも驚くほどに、口から感情が溢れ出していた。

けれど、歯止めを無くした気持ちの奔流は、もう止まらなかった。

頭では、八つ当たりには過ぎないとわかっているのに。

「先生は、何にも知らないからそんなことが言えるんです。先生が、シヤナの何を知ってるんですか？」

僕の何を知ってるんですか？ 先生の物差しで、勝手なこと言わないで下さい」

醜い怒りが声に投影され、思考を支配する。

平井ゆかりではなく、『シヤナ』という呼び方をしてしまっていることにも気が付かないくらいに、悠二は余裕が無くなっていた。向かいで話を聞いている奏夜の顔は、見えない。

「シヤナは、どんな意味でも凄く強いんです。多分、先生が想像もつかないくらいに」

だから、自分がいなくても、全然困らない。
一人で、何でも出来るから。

「さつき、僕でもシヤナに追い付けるって言いましたよね。確かに先生なら、そう思うのはわかります」

紅奏夜とは、そういう男だ。

自分の指先一つで運命さえも変えられる。

そんなことが出来るわけがないのに、不思議と納得させられてしま
うような、底知れない器を持つこの人ならば。

「でも、僕は違うんです。僕は結局、ただの高校生で……強いわけでも、何が特別なわけでもありません」

自分の心を自分で斬りつけることさえも躊躇せずに、悠二は心に溜まった疲れ、諦め、悲しさ、怒り、苦しさを全て吐き出す。

「それでも、あの子の役に立てるって思ってた。……けど、違う。僕なんかがシヤナの側にいたって、シヤナに余計な負担をかけるだけなんです。みんながみんな」

先生みたいに強くなれるわけじゃないんです！！

息を切らすまでに、声を張り上げたところで、真っ白になった頭に思考能力が戻ってくる。

最初に感じたのは、やってしまった、という後悔。

(何をやってるんだ僕は！！)

こんなこと、奏夜に言って何になるといっただろうか。

彼は『非日常』の世界にいない。

奏夜が少し『日常』から外れた場所にいるがために、悠二はそれを失念していた。

……いや、それさえも言い訳だろう。

(最悪だ、僕……。こんな、ただ怒鳴り散らしてるだけじゃないか)

奏夜に何と罵られても、文句は言えなかった。ずしりと重くなった頭を持ち上げて、悠二は恐る恐る奏夜の顔を見ようとした

「……………つくく」

聞こえたのは、何かを押し殺すような音。

「そいつあ、人類史上例を見ない壮大なギャグだな。坂井、今度どつかの大会に出てみたらどうだ？ 観客みーんな抱腹絶倒だぜ。っはは、俺が『強い』か」

本当に笑える冗談だ。

まさか紅奏夜という存在を、『強い』などというカテゴリーに分類しようとは。

「坂井、随分と素敵な勘違いをしてくれたところすまないが 俺は強くなんかないよ」

収まりかけていた動揺が蘇る。

強くない？

いつも絶対の自信に満ち溢れている奏夜が、こんなことを口走るなど、誰が予想出来るだろうか。

「で、でも先生は……」

「同じことを何度も言わせるな。俺は強くなんかない。いつだって誰かの足手纏いになって、誰かに助けられ、支えられ、どうにか一人前になれる情けないヤツさ。ちょうど今のお前みたいにな」

投げやりで自虐的な口調のまま、奏夜は言葉を繋げていく。

「でもだからと言って、お前の気持ちが変わるわけじゃない。『僕の何がわかるんですか』か、なるほど、そりゃ確かにそうだ。自分のことを一番わかっているのは、どんな講釈を並べても、結局は自分だからな」

「けど」と、奏夜は言葉を切って、

「平井に関しては別だ。平井の気持ちを100%知るのは平井だけだが、99%知る人間ならいる。ハッキリ言っておくか。今の平井の気持ちなら、俺はお前よりも知ってる」

何の躊躇もなく、奏夜は言い放つ。
挑発ともとれる発言に、悠二は何故か気圧された。

「な、何を」

「言ってるのかって？　じゃあお前、さっき平井が何で怒ったのかわかるのか？」

悠二は、鋭い刃が自分を斬りつけてくるのを感じていた。

奏夜は的確に、悠二の傷をついていく。

「わからねえだろ？ いい加減自覚しろよ、坂井悠二。つまりお前と平井の関係性は現在、教師と生徒というドライな関係性にすら負けるほど、弱くなってるってことだよ。

お前はなーんにもわかつちやいない。

せいぜいのアドバンテージは、シャナっていう渾名くらいかね」

くつくつく、と奏夜はシニカルな笑顔を作る。

いつもならただ安心するだけの笑顔が、今日は何故かとても怖かった。

「下らないことで落ち込み過ぎなんだよ。お前がウジウジしたら、周りにどれだけ影響が出るのかわかつちやいない」

「いやだ。ファンガイアはイクサが倒す。俺が行っても、また痛い思いをするだけだ」

(本当　お前見てると思ひ出すよ)

昔何処かにいた、屋敷に引きこもってばっかりの臆病者を。

「『僕なんかがシヤナの側にいたって、シヤナに余計な負担をかけるだけなんです』。……こんな風に考えてるなら、平井が怒って当然だな」

「……でも、実際そうなんですよ」

「卑屈だなあ。お前、ひよっとして平井を『天下無敵のヒーロー』だとか思ってたんじゃないの？」

手持ちぶさたなのに任せ、奏夜は空になったコーヒーカップを玩ぶ。

思っているも何も、そうだろう。

ただ無敵で、美しいまでの強さで“徒”を倒すフレイムヘイズ。それが、シヤナだ。

「この世に完全無欠の存在なんていやしねえよ。そんなものがあるとするば、本物の化け物だ」

しかし奏夜は、悠二の幻想を粉々に打ち砕く。

「あいつは、確かに強いと思うぜ。けど、あれは『最強』と呼ぶにはあまりにも不安定過ぎる。平井は、あれだけの才能を持ちながら、それを使いこなせるだけの心が、まだ育っていない」

「心……」

「そう、心。あいつの才能って、その一点でかなり左右されるんだよな。アップダウンの幅が激し過ぎるんだ」

そのアップダウンを生み出したのは、お前なんだとさ。

奏夜は敢えて、重要な事実を伏せた。

「例えて言うなら、レベル1にして大魔王って感じだよ。あいつがどんな生き方をしてきたのか知らないが、あの才能は決して最強じゃない。使い方を間違ってる以上は、な」

使い方を誤った強大な力は 悲劇しか生まない。

「でも、恥じる必要はないんだよ。『最強』なんてつまらないもの、目指さない方が正解なのさ」

「えっ？」

「『最強』ってのはさ、文字通り『最も強い』。言いかえるなら『それより先はない』ってことだろ？」

どんだけつまんねんだろつなあ、それ。人間は越えられる壁があるからこそ、それを越えようと切磋琢磨するからこそ、オモシロイのによ

だからこそ『最強』はつまらない。

『先がないもの』はつまらない。

奏夜の一言一句全てが、悠二の中で反芻される。

「『最強』はありえないし、あつてはならない。『強さ』を得たいなら、『最強』を目標点にはしないことだ。『何故強くなりたいのか』。それさえあればいい」

「強くなる、理由？」

「お前、足手まといになるのは嫌だ、とか言ってたよな。なら聞くが、お前は何故、それだけの強さが欲しいんだ？」

「……………」

強くなりたい理由。

それは シャナの足手まといになりたくないから。

いや、本当にそうなのだろうか？

鍛練を始めた時に抱いていた熱意は、こんなまだるっこしいものから生まれていたのか？

（違う。これは“僕”の都合だ。理由はこんなものじゃない。もっと、簡単だった）

心に絡み付く感情を処理出来ず、悠二は黙り込む。

「わからないなら、それもいいさ。提出期限ナシの宿題だ。放課後、池と吉田と出掛けるんだろ？ リフレッシュしながらゆっくり考えてみな。」

俺が言えるのは、ここまでだ」

あとは、悠二とシャナ次第。

『理由』に気が付けさえすれば、他のことも理解出来るだろう。

シャナが怒る理由も。

自らの熱意が何故消えてしまったのかも。

（お前と平井が 人間とフレームヘイズが、何も変わらないって
ことにもな）

その後は長らく沈黙が続き、奏夜も暇をもてあましたのか、机
にあった楽譜をぼんやりと見つめていた。
予鈴が鳴り、悠二も教室に戻っていく。

「また、話しにきてもいいですか？」

「勿論。それが俺の仕事だ」

そんなやり取りを交わして部屋から出た二人は、反対方向に歩き去
る。

悠二に出されたコーヒ―は、結局飲まれることなく冷めていた。

次回、仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD!

「入ってみるか？ 俺の家」

「まさか、キバを受け継ぐ者は……」

「なんて、ところに、いるのよっ！……」

「悔い改めなさい」

「第二ラウンドってどこかしら？」

「俺の唯一尊敬する人の言葉をやるっ」

「私は、悠二に……」

【第七話・カルテットノ心の声を聞け！】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！

第六話・暗転／弔詞の詠み手・Bパート（後書き）

以下反省。

・今回は語ってばかりな奏夜。

普段と破綻っぷりから忘れがちかも知れませんが、彼は教育者なのです（笑）

悠二へのアドバイスや語らいで、先生らしさが少しでも伝わるといいのですがf^|^|^;

・そしてまたしてもキバに変身してないし（-.-;）

『仮面ライダー』なのにいいのかコレ？

次回は結構話が動きます。キバの正体を勘繰り出す人も……？
お楽しみに！

プロフィール／紅奏夜

クレナイ・ソウヤ
紅奏夜／仮面ライダーキバ

性別／男

年齢／24歳

血液型／AB型

職業／バイオリン職人&御崎高校現国教師

好き／コーヒー、バイオリン、音楽、子供、自分に真っ直ぐなヤツ。

嫌い／糸こんにゃく、音楽を侮辱するもの全て。

趣味／バイオリン作り、読書。

特技／バイオリン演奏、トランプ（イカサマ）、飴作り

座右の銘／天上天下唯我独尊

口癖／「面倒くさくなってきやがった」

体質／あまりに激しい自己嫌悪に陥ると『この世アレルギー』を発症することがある。

補足／基本的に彼が『仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD』に至るまで辿ってきた道筋は紅渡と同じですが、細部に違い

があります。

まず彼は、渡ほどオドオドしたキャラではなく、物事に反発するだけの力がありました。

引きこもっていた理由も、渡のように引込み思案だからではなく、他人（キバツトや静香を除く）に興味が無かったからです。

ですが何事にも純粋な反応をし、それ故に傷つきやすいという点は渡と同じでした。

第一話で恵と出会い、それが切っ掛けで、彼は他人に目を向けていくことになるのです。

第七話・カルテット／心の声を聞け・Aパート（前書き）

「中国のことわざに『人と交わる時には心で交われ。樹に注ぐには根に注げ』という言葉がある。

木を育てるのは、目に見えない根に水を与えるようなもの。

同じように、人と付き合う時にはうわべだけの付き合いではなく、心からの付き合いをせよ、という意味だ。

人間関係において最も重要で、最も難しいことだな」

キバットバット三世

第七話・カルテット／心のを聞け・Aパート

（おいしくない）

学校を出て、シヤナはただ歩く。

目に映る全てをうござったく思いながら、片手に持つメロンパンを頬張る。

普段なら、それは至福の時間のはずだった。

なのに、

（おいしくない）

厳選した銘柄にも関わらず、まるで砂をかじるような思いだった。

（おかしい）

原因不明の苛々は募るばかりだ。

いや……、原因はわかっている。

至極単純な話、のはずだ。

(悠二が、やる気を無くした)

そう、ただそれだけのこと。

いつもと変わらない。

この街に来る前と、なんら変わらない。

悠二と出逢う前と、何も変わらない。

(それなら、どうして)

こんなにも、平静をかき乱される。

悠二が自分を拒んだだけだ。

悠二が一緒に来なかっただけだ。

悠二が　　いないだけだ。

大したことはない。

……はず、なのに。

「全ツ然、おいしくない!!」

一際力を込めて、メロンパンを噛み千切る。

ピリピリした雰囲気は一向に消えることなく、ふと気が付けば、いつの間にか河川敷を歩いていた。

奏夜と悠二が話した河川敷でもあるが、それはシャナの預かり知らぬことである。

遮蔽物のない広々とした景色は、中々心の和むものだったが、今のシャナにとっては焼け石に水だ。

「焼き芋、おいしい焼き芋だよ」

「おひとつ、いらんかね」

メガホンで拡張された宣伝文句と共に、堤防沿いの道、シャナの進行方向から、一件の屋台が近付いてきた。

やや古めかしいデザインの服を着た少年と、屋台を引っぱる筋肉質な青年　ラモンと力の二人組だ。

シャナと屋台が近付き、双方目が合う。

『あ』

ラモンと力はシャナの姿を視認し、声を上げる。

「……なに？」

やや喧嘩腰でシャナが顔をしかめる。

ラモンと力はシャナの正体を知っているが、シャナの方は彼らの姿を『バツシャーマグナム』と『ドツガハンマー』でしか知らない。

キバと彼らを結び付けられようはずがなかった。

「うっん、なんでもない。

お姉ちゃん、焼き芋いらない？」

「おすすめ」

ラモンが慌てて誤魔化し、力が屋台の中から取り出した焼き芋をシャナに差し出す。

シャナはしばらく無言だったが、やがて力の手から焼き芋を引ってくるように受け取り、代わりに千円札を押し付けた。

「まいごあり」

「あ、お姉ちゃん、おつり……」

ラモンが言うより早く、シャナは河川敷に座り込み、焼き芋を頬張りにかかる。

ラモンと力はシャナに見られないよう、屋台の影に隠れた。

「ねえねえ。これってまずいんじゃないかな？ お兄ちゃんが正体を隠してるんだから、僕らの正体も、お姉ちゃんに感付かれちゃうとまずいだろうし」

「いまの、うちに」

ラモンと力が逃げる算段をつけていた時だった。

「なぐにやっぺんだお前ら」

いきなり割り込んできた声に、ラモンと力は飛び上がり、シヤナはぼんやりと一瞥をくれる。

「お前……」

「お、お兄ちゃん？」

そこには、怪訝そうに首を傾げる紅奏夜の姿があった。

「お兄ちゃん、今日は平日でしょ。学校は？」

「振替の授業が重なって、午後は暇だったんでな。お前からそ何やってんだよ」

「何って、見てわからない？」

「ばいよ」

「いや、それはわかるんだけど」

わかるんだけど。

「そうじゃなくて、金とかならキャツスル……ゴホン、家にたくさんあるだろうが。今さら働かなくても」

「浅はかだねー、お兄ちゃん。汗水流して働いた結果得たものこそ、本当に価値があるのさ」

「きんろつ、たいせつ」

「……前にも言ったが、お前ら何で最近、目に見えて世俗的なんだよ」

下手な人間より人間らしい。

最近、彼らがモンスターであることを忘れつつある奏夜だった。

「……正体、バラしてないよな」

「も、もちろんだよ」

「のー、ぶるぶれむ」

やや冷や汗をかきながら、ラモンと力は答える。

二人は早足のまま、屋台ごと去っていった。

後には、奏夜とシヤナがぼつんと残された。

「……」

「……」

奏夜とシヤナは、互いに無言のまま、同じ方向に歩き出した。

「……ついて来ないでくれる？」

「俺の家はこっちだ」

「じゃあ道を変えなさい」

「めんどくさい。お前が変えろ」

「嫌よ」

「じゃあ俺も嫌だ」

「……っ」

シヤナの顔に明らかな苛立ちが生まれる。

それからしばらくの間、二人は言い合いながら（正確にはシヤナが一方的にがり立て、奏夜がそれをのりくらりとあしらっていただけだったが）、河川敷を抜け、住宅地にさしかかったところで、奏夜は立ち止まった。

見事な邸宅だった。

二階建ての洋風な外装に、広い庭園までついている。

門には、『紅』の表札。

一瞬、呆けたように紅家を見上げていたシャナを見て、奏夜は悪戯っぽく言う。

「入ってみるか？ 俺の家」

奏夜に連れられたシャナは、居間に案内された。

「適当に座ってるよ。今、何か出すから」

そう言い残して、奏夜は奥の台所に姿を消してしまふ。

手持ちぶさたなのにかかせて、シャナは居間のあちこちを見て回った。

「……なにやってるんだろ」

ぽつりと、口から愚痴るような声が零れる。

考え方が、虚無的になっている気がする。

普通なら、理由なく誰かの家に入りこんだりしないのに。

今日のことがあったから、何を思うにしても、悠二の顔が頭から離れない。

「……関係ない」

儘ならない苛々が、正常な思考をかき乱しているのだらうと、シャナは自分を無理やり納得させる。

部屋をうろつろするのに飽きたのか、シャナは次に、目についた二階への階段を上がった。

「……？」

二階に上がると、部屋の雰囲気ガラリと変わった。

職人の工房　　そう表現してなんら遜色がない。

作りかけの型、ニスやその他の機材が、無造作に置かれていた。

（バイオリンだ）

音楽はあまりたしなまないが、一般的な知識としてなら心得ている。

その証拠に、試作品と思わしきバイオリンがあちこちに飾られていた。

素人目からしても、熟達した技術で作られているのがわかる芸術品の数々が、シャナを見下ろしていた。

その中でふと、一器のバイオリンに目がいった。

ショーウィンドウに飾られた作品であり、それだけでも、他とは一線を画することが予想出来るが、シャナが注目したのは、バイオリンが放つ、強い力だった。

もはや異様　　と言ってもいいだろう。

「何、これ……？ 宝具じゃないけど、何か不思議な感じがする」
妙に気になるそのバイオリン。シャナは立て掛けられている作品の
名を読む。

「BLOODY・ROSE。ブラッディ・ローズ 血塗られた薔薇……」

「っ!？」

今まで沈黙を守っていたアラストールが、息を飲んだ。

「アラストール？」

「……すまぬシャナ、バイオリンの横にある写真を、我によく見せてくれ」

アラストールが珍しく、焦燥を含んだ声で言う。

確かにアラストールの言う通り、ショーウィンドウの隣には、写真立てが飾ってあった。

ショーウィンドウに鍵はかけられておらず、それは難なく、シャナの手に渡り、コキユートスの前に示される。

写真に映っているのは、セミロングの髪の毛に、80年代の服装を着た二十代前半の男。

快活な笑みを浮かべながら、バイオリンを構えている姿が収められていた。

(OTOYA・KURENAI、紅音也……?)

写真立てに走り書きされた名を読むシャナ。

確かあの男　　奏夜の姓も『紅』だった。

ならば、この紅音也という男は、奏夜の縁者なのだろうか。

しかし、アラストールの受けた衝撃は、シャナのそれを遥かに越えるものだった。

「聞いたくば、教えてやろう!!
俺の名は、紅音也。えらゝい人だ!
いずれ全国、いや全世界の教科書に俺の名が載ることになるだろう
」!

フラッシュバックする思い出。

傲岸不遜なあの男の態度が、脳裏を過る。

「なんだ、ここにいたのか平井」

振り替えると、奏夜が階段を上がってくるところだった。

「バイオリン、作ってるの?」

「ん? ああ。まあな」

ついと尋ねるシャナに、奏夜は特に気兼ねもなく肯定する。

「けど、まだ目標には到達していなくてな。必死に切磋琢磨してる
トコだよ」

奏夜はそこで、シャナが写真立てを持っているのに気が付いた。

「おっと、ケースの鍵閉め忘れてたか。」

ほら、その写真に入ってる人と、そこにあるバイオリン　ブラッ
ディローズが俺の目標だよ」

「目標？」

奏夜は頷いて、ケースの中からブラッディローズを取り出し、シャ
ナに掲げて見せる。

「俺の父さん。紅音也の作った最高傑作、ブラッディローズ。
こいつを越えるバイオリンを作るのが、俺の目標なんだよ」

今度こそ、驚愕を隠すことは出来なかった。

(父親、だと!? 馬鹿な、紅音也は『あの時』に……)

混線していく情報を処理するアラストール。

奏夜はそのまま、バイオリンの弓を構えた。

「よし、いい機会だ。お前にも、俺の十億の演奏を聞かせてやろう。苛々した心に、音楽は良薬になるぞ」

「わ、私は別に苛々してなんか……!!」

「はっはっは、遠慮することはない。

音楽とは、いかなる人間にも与えられる」

シヤナの意向を्यानわりと無視し、奏夜の弓と弦が動き出した。

音楽が、空間を支配した。

部屋のいたるところに反響する音色は、世界の総てを掌握し、その場にいる者を魅了していく。

それは、人外の存在も例外ではない。

(……………綺麗)

最初は癢な気分で聞いていたシャナも、音楽が心に染み渡っていくにつれ、涼やかな音色に聞き惚れていく。

片やアラストールは、それを複雑な心境のまま鑑賞していた。

(紅の姓、風貌、言動、バイオリン……。確かに見逃せない共通項はある。

だが、紅音也 あやつは確かに人間だった。

これだけの歳月を、人間が生き抜くなど考えられぬ)

そう、有り得てはならない可能性、のはずだ。

だが、

『 ポロン 』

弦を弾き、演奏を終えた奏夜は、柔らかく笑う。

「『 どうだ？ 俺の演奏は 』」

笑顔に、あの男のそれが重なる。

519

あのプラス思考の塊のような表情は、誰にでも出せるものではない。

（他人の空似というには、あまりに 似すぎている）

そこまで考えて、アラストールはある情景を思い出す。

今の契約者と同じく、この上なく誇りに思う存在。

最後の戦いを前に、あの男は現れた。

数多の戦いを共に駆け抜けた契約者“炎髪灼眼の討ち手”。

その生き様を愚弄する“太古の王”を葬り去るために。

眼も眩むような

『蝙蝠もどき、力を貸せえ!!』

『ガブリ!!』

真紅の鎧を携えて。

(まさか、キバを受け継ぐ者は……)

生まれた真実の欠片。

矛先が向かうのは、この紅奏夜という存在。

アラストールの疑念に対する答えを持つ彼は、先ほどの真剣な様子を引っ込めて、演奏を終えた後、一言も喋らないシャナを見る。

音楽の感想を求められているのだとわかり、シャナは眼を反らしながらぶっきらぼうに告げる。

「……良かった」

「さいですか」

満足そうに頷いて、奏夜はブラッディローズを棚に戻す。

「さて、と。コーヒーでも飲むか？」

炎髪の仔獅子と、牙の皇子の奇妙な対談は続く。

物語を、加速させながら。

「あれ、お前飲まないのか？」

机を挟んで、奏夜とシャナは向かい合う。

淹れたコーヒーを奏夜は何の問題もなく啜るが、シャナは黒い湖面を睨んだまま微動だにしない。

何か気に食わないテイストなのかと勘繰ったが、やがてシャナは、

「砂糖」

「は？」

「砂糖。あとミルク」

「……ああ、お前甘党だもんな」

普段の生活を見る限り、シヤナの食生活はほとんどが甘味料で占められている。

フレイムヘイズに栄養バランスは関係ないのだろうが、さすがに駄目だろうというレベルで。

そんな超甘党さんに、コーヒーは大人の味だろう。

取り敢えずはリクエストに応じ、戸棚からミルクとスティックシュガーを袋ごと取り出し、スプーンを添えてシヤナに手渡す。

途端、シヤナはスティックシュガーを軽く六本は開け、コーヒーの中にブチ込んだ。

コーヒーの中身が、『かつてコーヒーと呼ばれていたゾル状の何か』に変わる。

「……………」

さすがの奏夜も引いた。

お前は何処かの猫背甘党探偵か。

「平井……、自分で淹れておいてアレだが、それ飲むの止めた方がいいと思うぞ」

「？ 何でよ」

「いや、だってそれ、もはやコーヒーじゃないもん。液体じゃなくて固体だもん」

「私が何をどう飲もうと勝手」

忠告を聞き入れることなく、シヤナはそれを口に運ぶ。

見ているだけで胸焼けがしてきた。

「……苦すぎて飲めないなら飲めないで、別の飲み物くらい出すぞ」

「別に構わない。わざわざ変えるのも面倒」

「だからってそんな飲み方するなよ。お前いつか成長バランス崩すぞ。」

せめて牛乳を飲め牛乳を。そうすりゃその小学生で通用しそうな背丈も、ぺったんこな胸も多少は大きなガツ!!」

気功砲ばりの速度で発射されたコーヒーカップが、油断していた奏夜の額にクリティカルヒットする。

痛みに悶える奏夜の前では、顔を真っ赤にしたシャナが息を切らしていた。

気にしてたのか。

とまあ、そんな馬鹿馬鹿しい会話も交えながら、二人は静かに時を過ごす。

しかし、このまま何も話さなければ埒があかない。

奏夜は取り敢えず、自分からボールを投げることにする。

「今日、お前が癩癩起こして飛び出した後の話だな」

「？」

「坂井と話したよ」

「っ！！」

ピシッ。

コーヒークップにヒビが入った。

悠二の名を出した途端これだ。実に分かりやすい動揺である。

「大変だったなあ、平井。彼処まで検討外れなこと言われたら、イラつきもするわな」

「言いたいことはそれだけ？
変な説教ならいらない」

どうやらこのことは、シャナの中で早くに抹消したい出来事のように

だ。

その気持ちは十分わかるが、そうさせてはならない。

拗れた関係から目を背けたところで、何も好転しないのだから。

「勘違いするなよ平井。別にお前を叱ろうってわけじゃない。

今回のことは、どこからどうみても坂井が悪いしな。

ただ、お前の対応次第で、この問題は早期解決も可能だった、という話さ」

努めて仏頂面をキープするシャナに対し、奏夜は反応を求めないまま続ける。

「お前が坂井に怒鳴ったのは聞いていたよ。訳の分からん単語が飛び交っていたが、それらを総合するに、お前はあいつに、何処かへ着いてきて貰いたかったんだろう?」

シャナは表情を曇らせ、顔を背ける。

うるさい、嫌なことを聞いてくるな。

言外に、そう叫びながら。

「だったらあの喧嘩腰な態度はマイナスポイントだったな。着いて来て貰いたいのなら、そう頼めばいいことだ。それこそ、小学生でも知ってることだよ」

(うるさい)

「もちろん、一番問題だったのは坂井の対応だ。けど、そこで一歩お前が譲歩すれば、ここまで面倒な状況にはならなかっただろうな」

(うるさい)

「一時の感情に流されて、自分が真に望むことから、お前は目を背けた。」

「いや、違うな。お前の場合は」

「うるさいうるさいうるさい……」

シヤナの何もかもを拒絶する激昂に、奏夜が閉口した。
気に食わない。

この男のする質問全てが、自分の神経を逆撫でする。

自分の内側を観察されるような、嫌な気分。

形容し難い不快な感情に、シヤナは襲われた。

しかし奏夜は、冷やかな眼差しを向ける。

「楽だろうな、平井」

「……？」

「そうやって、自分の中に無かったイレギュラーな感情を隠し、拒み、戸惑う。」

それらが自分に跳ね返るのも厭わず、本当の自分から逃げ惑うだけ」

本当に楽な生き方だよ。

言い放つ奏夜の眼力に怒るでもなく、シヤナはただ気圧されていた。

(どう、して)

フレイムヘイズである自分が、どうしてこんな只の人間に、威圧されてるのだ。

「よく聞け平井、『うるさい』ってのは免罪符じゃない。酷く脆弱な、一時しのぎの防波堤だ。他人との間に生まれる関わりや感情から逃げ続けるのなら、お前の成長はそこで打ち止めだ」

「……関わりなんていらぬ。私に必要が時に、あるだけでいい」

「ほざきやがれ。ロクに人生積み重ねてねえ癖に、生意気言つな」

シヤナのせめてもの反撃さえも、奏夜は軽々と撥ね飛ばす。

「お前が言うのは、『持たざる者』の強さだ。

成る程、確かに煩わしいものが存在しないのなら、そりゃあ強いだろうさ。

だが、そいつの強さは『そこまで』だ。底の見える、見せかけだけの強さに過ぎない。

お前、人に携わらないような生き方をしてきただろ」

当たり前だ。

完全なフレイムヘイズは誰にもすがらない。

その一念は、『炎髪灼眼の討ち手』という存在を形成する過程の一つだった。

「それじゃあ駄目なんだよ」

奏夜はシャナの根底を、根こそぎ否定する。

奏夜は一瞬、人との関わりを削る要因の一端を握るであろう、“紅世の王”が蔵されるペンダントを非難がましく見て、直ぐに視線を戻す。

「自分を真に強くするのは、『他人から得られるモノ』なんだよ。

『持つ者』には、弱点や面倒なことが沢山ある。けれど『持たざる

者』と違って、『持つ者』には無限の可能性があるんだ」

「無限の、可能性？」

「人は誰かのためになら、何でもできる。

誰かのためになら、いくらでも強くなれる。

そついう意味だよ」

シヤナに勢いよく指先を突き付けて、奏夜は言った。

「本当の自分から逃げるな。

お前の本心は、他者を拒絶したくなんかないはずだ。

平井、お前が何故、坂井を連れて行きたかったのか、よく考えてみる。

答えは全てそこにある」

俺が言いたいのはそのただけだ。

奏夜はテーブルから立ち上がり、コーヒーの御代わりを淹れに部屋から出ていった。

後には、呆然としたシヤナだけが残される。

「シャナ」

「……大丈夫」

アラストールの呼び掛けに対する返事にも、覇気が見られない。

奏夜は、あの男は自分の内面を見透かした。

シャナ自身が理解出来ないことを、悩んでいることを的確に突いていた。

それは決して、シャナを傷付ける目的ではない。

自分と向き合え。

そうさせたかったが故の行動だった。

だが、今のシャナがその真意に気付くのは、いささか以上に難題だろう。

彼女は奏夜の言う通り、心の機微に疎く、何処までも未熟なのだから。

（私が、悠二を連れて行きたかった？）

そう、なのだろうか。

まただ。

また、自分のことが分からなくなる。

訳の分からない感情に、自分の存在が掻き乱される。

あの不思議な“ミステス”のことを、考える時に限って。

「っ、何で、わからない!!」

全てを覆い尽くさんとする思いの奔流を感じるシヤナ。

己を理解出来ない自分自身に苛立つ。

シヤナを苦渋から解放したのは、自らの使命だった。

「!?!」

感じる。

世の全てを成す“存在の力”。

それらを駆使する自在法の波が、全身を通り過ぎた感触を。

「アラストール」

「広範囲を探る自在法か。自在師だな、用心しろ」

「うん、行くわ」

「つむ」

自在法の流れを探り、使用された震源地を割り出す。

向かうべき場所、シヤナが望む戦いを得られる場所は

「……平井？」

コーヒートを淹れて戻ってきた奏夜が、部屋の中で立ち尽くすシヤナを見つける。

いや、立ち尽くすのとは、何か違う。

まるで、あまりにも衝撃に身を凍り付かせているような印象だった。

静観していると、やがてその凍り付いた表情が、燃えるような凄まじい怒りに塗り替えられる。

「なんて、ところに、いるのよっ!?!」

ギリツ、と歯を噛みしめて、シヤナは奏夜の脇を俊足のスピードで駆け抜け、紅邸の玄関から飛び出していった。

「……ったく、せつかちなヤツめ」

シヤナの姿を見送って、奏夜はコーヒーを一気に煽る。

すると二階から羽音を鳴らして、キバットが飛んできた。

「おい、奏夜!!　今の自在法……」

「ああ、感じてたよ。恐らくは、昨日の『弔詩の詠み手』ってフレ
イムヘイズが使ったんだろうな」

「って、なに呑気にコーヒー飲んでんだよ!　早く俺様達も、シ
ヤナちゃん追いかけねえと!」

「慌てるコウモリは貰いが少ないぜ、キバット。第一、あいつが行きたいなら、放っておけばいいさ」

「なっ！」

投げやりな奏夜の態度に、キバットは目を剥く。

「あいつは恐らく、戦いが自分の悩みを吹き飛ばしてくれると思っている。

それが更に自分を追い詰めるのに気付いてない。なら、一度痛い目を見るのも人生勉強だろうさ。

今の平井じゃ恐らく『弔詩の詠み手』には遠く及ばない。

歯向かう相手がただの雑魚と分かれば、『弔詩の詠み手』も見逃すだろうよ」

「けどよお。『弔詩の詠み手』がシヤナちゃんを見逃す保障は何処にも無いだろう？」

昨日の感じからして、あいつらまさに戦闘狂ってイメージだぜ」

「だから行かないとは言っていないだろ。

俺達は今回、裏方に回る。平井が苛められ過ぎないようにする、言わば歯止め役さ」

「……薄々気付いてたことなんだがよ。
お前って、誰かを強くするためなら、どんなものでも使っよな」

「それには語弊があるな、キバット。
俺はあくまできっかけを与えるだけだ」

奏夜はコーヒークップを置き、玄関に足を向けながら言う。

「成長するしないは、そいつの自由だよ」

第七話・カルテット／心の声を聞け・Aパート（後書き）

またしても奏夜がキバになってねえええ！！（・・・；）
すんません、今回はちゃんと変身します；

・ふと気になったんですが、ラモンと力はバイトしてましたが、次狼さんはどうやって生活してたんでしょう？（普通にコーヒーに一万円出してたけど）

ビリヤードの賭け試合とかかな。

・やや過去語りが入りました。アラストールは何故彼を知っていたのか？ 彼は『大戦』で何をやらかしたのか？ それはまた投稿予定の『彼』主役の物語にて。

・一話は書き上げてあるんですが、何分彼は書きづらいんです。何せ彼は希代の天才ですからね（笑）

今回は奏夜キバだけでなく、753も登場（予定）ですので、またご贖肩に（＾Ｏ＾）

第七話・カルテットノ心の声を聞け・Bパート

「やれやれ、自在法の震源を突き止めたと思えば、よりによってここよ……」

愚痴りながら、奏夜はヘルメットを外す。

紅邸を飛び出したシャナを追うべく、マシンキバーを走らす奏夜が辿り着いたのは、フリアグネとの決戦の舞台となった、あの廃デパートだった。

あの戦いは『爆発事故』で片付けられているが、それでも未だにブルーシートがあちこちに張られ、バリケードとなるカラーコーンも置いてある。

「屋上に封絶が張られてるな」

頭上を見上げながら、キバットが言う。

「多分平井と『弔詩の詠み手』がドンパチやってんだろ。」

……平井もツラいだろうな。『なんてところにいるのよ』か。全く

その通りだな」

この場所是否応なしに、悠二のことを思い出させるはず。

ただでさえ落ち着きや冷静さが欠如している今のシャナへ、更に追いつきをかけるフアクターだ。

「んじゃま、課外授業の監督に行きますか。

キバット!!」

「よっしゃあ、キバットて行くぜえ!!」

奏夜が翳した手に、キバットが勢いよく噛み付く。

「ガブツ!!」

スタンドグラスの紋様が奏夜の顔に浮かび上がり、鎖となって腰に巻かれたキバットベルトにキバットが止まった。

「変身!!」

奏夜を覆う光の鎖が弾け飛び、その姿をキバへと変えた。

「はっ！！」

常人離れた跳躍力で、近くにある建物から建物へと飛び移りながら、キバは屋上へと文字通り駆け上がった。

マシンキバーは決して遅いバイクではないが、フレームヘイズたるシャナと比較すれば、後者が圧倒的に速い。

間に合っているといいのだが。

段々と、屋上の景色が見えてくる。

紅蓮と群青の炎の中に、炎髪を靡かせるシャナと『トーガ』を纏うマージョリーの姿も視認出来た。

「とつちゃ〜くつと」

上手く着地地点を調節し、二人の目を盗んでキバは屋上に降り立った。

そこは丁度乗降口で死角になっており、影から戦いの様子を知ることが出来た。

「むっ、シヤナちゃん劣勢？」

「みたいだな」

そう言っている内にも、シヤナは獣が振り上げた右腕の一撃を喰らい、コンクリートの床に叩きつけられた。

「ぐ、う……」

瓦礫の山からふらふらと、贅殿遮那を杖代わりにしてどうにか立ち上がる。

「……本当にガキみたいな戦い方だな。ほとんど本能で攻撃してる上に、反撃とか防御とか、攻撃の繋げ方もすっ飛んじまってる」

悠二とのいさかいで心乱れているのは解るが、不甲斐ない。

敗北したとはいえ、キバの鎧と五角の戦い方をした存在とは思えなかった。

キバの抱くそれは、マージョリーたちも同じらしく、

「あなた、本当にあの『炎髪灼眼の討ち手』？　本当にあの“狩人”をブチ殺したの？」

「ちいつと弱すぎんぜ。これだったら昨日の兄ちゃんの方がよっぽど歯応えがあつたなア。それとも、“狩人”が噂ほどでもなかったのか、ヒヤッハ！」

獣の口元から顔を覗かせたマージョリーとマルコシアスが言う。

さすがのキバでも、フォローの言葉が見つからなかった。

「も、あんたいいわ。これ以上邪魔しないってんなら、あと一撃で見逃したげる」

「そだな。あんま楽しめねえし、でけえの一発でシメにすつか」

マージョリーが再び顔を引っ込めた途端、周囲を浮かぶ火の玉が勢いよく燃え上がる。

『月火水木金土日、誕婚病葬、生き急ぎ』

破壊の旋律が紡がれる中、キバはシャナの唇が僅かに動くのを見た。

「……………どうして」

悔しさに顔を滲ませながらも、シャナはまだわからないようだった。

何故、悠二がいないことが不満なのか。

何故、自分の中の『なんにもならない』気持ちが消えてくれないのか。

『ソロモン・グランディ』

火の玉が七本の炎剣に変わり、シャナの周りに突き刺さった。

と同時に、獣の中で膨大な存在の力が圧縮される。

「お、おい奏夜！ アレやベーンじゃねえか!？」

「……」

逸るキバットに対し、キバは無言でシヤナを見るだけだ。

「奏夜、何ボサツとしてんだよ!! あんなもんマトモに喰らうたらいくらシヤナちゃんでもただじゃ済まねえぞ!」

キバは動かない。

まるで何かを待っているかのようじ。

『はい、それまで、よッ!』

マージョリーが最後の詞を詠み終え、獣の口から群青の業火が吐き出される。

炎が小さなその姿を飲み込む直前、キバはシャナの心の音楽を聞いた。

「……悠」

奏でられたのは、一人の少年の名前。

「遅いんだよ」

キバの呟きと共に、シャナは屋上から放り出された。

奇しくも、フリアグネから落とされた場所から。

ただ　あの時と違うのは、シャナの表情が苦悶に満ちていたこと。

彼女が落ちた川の波紋が、燃え上がらなかったことだ。

「……………」

探査の場を荒らしたシャナを排除したマージョリーは、トーガの中で僅かに顔をしかめた。

「……………マルコシアス」

「ああ、気のせいじゃなさそうだな。俺にも見えた」

勝利に酔いしれる間もなく生じた、一抹の違和感。

そう、二人には見えたのだ。

シヤナが突き落とされる瞬間、彼女の前に現れた、コウモリを模した紋章を。

紅の魔皇力によって生み出されたシヤナを庇い、群青の業火から彼女を守った。

タイミングこそ外れ、シヤナは下に落ちてしまったが、それでもダメージはかなり緩和されただろう。

「ヒヤーツ、ハア！！ 今日は何が多いなあ！！ そのくせ“屍拾い”には現れねえってか、因果な話だぜオイ！！」

「お黙りバカマルコ。

出てきなさい」

つり上がった目付きのまま、乗降口付近に目をやる。

金属が擦れるような甲冑の音を鳴らして、異形の王が現れた。

「やっぱりアンタか」

「ご挨拶だな、『弔詩の詠み手』マージヨリー・ドー。
わざわざ俺が訪ねて来てやったのによ」

「思ってもないこと口にするもんじゃないわよ。何？ アンタって意外と軟派なワケ？」

「……言葉に気を付ける。俺は『軟派』という言葉にいい思い出がなくてね」

唯一尊敬する人間の、唯一尊敬したくない部分を重ねられ、キバは仮面の下で眉をひそめた。

「それで？ お前達は相も変わらず“屍拾い”とやらを探しているわけか。」

俺が処理すると言ったはずなんだがな」

「アンタに指図される謂れは無いわ。ファンガイアが“紅世”の事情に首突っ込むもんじゃないわよ」

「そーもいかねえな。俺様達にとっても、この街は意味がある。退けと言われてハイそうですかと納得はできねえさ」

「そいつぁ、俺達にも言えることじゃねえのかい、コウモリくん？
ヒッヒッヒッ！」

キバットとマルコシアスにも、険悪な雰囲気が否めない。

「わからないわね。アンタ何しに来たのよ。昨日はケンカ売ってきたと思ったら、尻尾巻いてとんずらしちゃうし」

「言ったる。俺はお前の邪魔をするよ。」

まあ、今はちょっと喧嘩してる暇は無いんだけどな。下に落ち
こちたヤツを早めにピックアップしたいんだよ」

「……ああ、アンタあのチビジャリと知り合いだったんだ。」

まったく、とことん軟弱なもんね。仮にも“天壤の劫火”のフレイムヘイズが他人と、しかもファンガイアの王と仲良しごっこなんて。

弱いならいざ知らず、手を組む相手も選べないのかしら？」

「ふむ、確かに『今』のあいつが弱いには同意しよう。

だが、仲間とか手を組むとかいうのとはちょっと違うな」

「……………」

首を傾げる獣に、キバは高らかに宣言する。

「俺は教師で、あいつは生徒だ。

可愛げの無いヤツだが、俺にはあいつを監督する義務があるんだよ」

キバとシヤナの事情を知らないマージョリーの頭には、疑問符しか浮かばない。

だが、逐一説明してやる義理も義務も無かった。

「ま、それに関してはいいさ。

俺はさつさと『炎髪灼眼の討ち手』を回収したいんだ。勝負ならまたしてやるから、そこどいてくんねえかな」

「はッ！ 冗談でしょ、正面切つて邪魔をするなんて言ってきたヤツを、このまま逃がすもんですか」

「ヒーツハツハー！！ 兄ちゃん、前は消化不良のまま終わっちゃまったんだ、少しは付き合ってくれてもバチは当たanneーだろお！？」

沈静化していた群青の炎が再び弾ける。

シヤナの違う色の存在の力が、キバの眼前に展開された。

「やれやれ、どうしてこう俺の周りには、面倒事しか集まらないのかね」

「お前が面倒事に首突っ込んでるからだろ。お前さんはもっと楽しく生きるべきだと、俺様は常々思ってたがな」

「っはは、違うない」

キバットの淡々とした意見に苦笑し、キバも腕を広げ、構える。

「第二ラウンドってどこかしら？」

「ファイナルラウンドかも知れないぜ？」

実力者の余裕。

敵と相對する高揚。

群青の炎がパチリと跳ねたと同時に、それは全て鬪争本能に還元された。

『ハアツ！！』

第二ラウンドか、はたまたファイナルラウンドか。

とにかく、キバと『弔詩の詠み手』の第二戦目が、こうして幕を開けた。

キバ、そしてマージョリーの激突から遡ること一時間。

坂井悠二は、吉田一美と共に、彼女の弟への誕生日プレゼント探しに付き合っていた。

本来なら、二人の友人であるところの池速人も一緒だったのだが、彼本人の粹な計らい（空気を讀んだ、とも言う）により、現在は二人きり。

吉田がその間、ずっと顔を紅潮させっぱなしだったのは言うに及ばずだが、沈んだ気分プラスして、その姿を微笑しく思ってしまう悠二に、その真意は伝わらない。

奏夜が指摘した通り、彼は元来鈍いのだ。

「ずいぶん歩いたし、少し休もうか」

「は、はい」

御崎アトリウム・アーチと呼ばれる高層ビルの広場にて、悠二は吉田にそう提案した。

「何か飲みたい物ある？」

「えっと、それじゃあオレンジジュースを…」

「うん、わかった。」

買ってくるから、そのベンチで待っていてよ

「はっ…はい！」

悠二と吉田の朗らかな会話。

その和やかに続く会話を引き裂いたのは、すぐ近くで上がった悲鳴だった。

「!?!」

驚いた二人が悲鳴の上がつた方に視線を向ける。

「しっちゃんしっちゃん騒ぐな、どきやがね!」

見ると、ボサボサの髪に眼鏡をかけた中年男性が、女性の首筋に先端の尖った傘を突き付けながら、周囲の人々を威嚇していた。

余りにも凄惨な光景に、吉田はびくりと肩を震わせ、身体を強張らせる。

片や悠二は、驚愕に支配されながらも、冷静に思考を巡らせていた。

あの男性、見たことがある。

数日前に都内の収容所を脱獄して、指名手配になっている殺人犯だ。

ニュースでも取り上げられて、悠二もそれを目に見ている。

慌てぶりから察するに、警察に見つかりでもして、人質を取りながら逃走中、ということころだろう。

(それなら警察の人も直ぐ来るだろうけど、でもその間、人質の人が無事である保証は……)

沈み込んでいたとは思えないほどの頭の回転の速さだったが、状況が把握出来ても、今の悠二では何も出来ない。

何かを成すだけの強さを持つ少女も　　今はいないのだ。

（くそっ！　　これで一体何度目だ？　　悔しい……なんてちっぽけなんだ！）

お前は何もわかつちやいない。

奏夜から受けた言葉の刃が、再び悠二を斬りつける。

何だ、何がわかってないんだ。

何がわかれば、このちっぽけな存在を変えられるんだ？

重く、苦々しい、自分の弱さを噛み締める悠二。

その間、状況にも動きがあった。

犯人の前に、スーツを着込んだ男性が躍り出たのだ。

顔は良く見えないが、警察の人間だろうか。

「杉村隆！　もう逃げ場は無いぞ、大人しく捕まり、罪を償いなさい！」

「うるせえ！！　こんなところで捕まってたまるかよお！」

杉村と呼ばれた犯人は、人質だった女性を男性に向かって突き飛ばす。

男性が慌てて人質の女性を受け止めた隙に、杉村は再び逃走を始めた。

「待て！」

人質の女性を近くにいた群衆の一人に預け、男性は杉村を追いかける。

だが、スタートダッシュにタイムラグがあった分、杉村にアドバンテージがあった。

そこまでいって、悠二は気が付く。

杉村の走る延長線上には、何がある？

杉村の逃走ルート。

悠二のいる方向に向かっていているものの、この辺りは広場であるからして、道幅が広い。

悠二からはやや逸れた道を杉村は走ってきている。

そう　悠二から少し離れた場所にいる、吉田一美に向かって。

「吉田さん……！」

「っ！」

悠二が呼び掛けるが、吉田は動けない。

日常有り得ない恐怖は、人の精神、肉体を簡単に縛ってしまふ。

「どけえ！！！」

「ひっ」

元々引つ込み思案な性格の吉田だ。

杉村の怒号は完全に追い討ちとなる。

吉田が退かないと判断した杉村は、もはや凶器となった傘を振り上げる。

「危ない！！！」

もはや理屈も何もなく、悠二は吉田の前に躍り出ていた。

「坂井くん!？」

「どけって言うてんだろーがあ!！」

対象が変わっただけで、杉村の手が止まる筈はない。

振り上げた傘は、容赦なく悠二へと降り下ろされる

はずだった。

「っ!？」

杉村の手が止まった。

その場にいた全員が驚く。

しかし、一番驚いたのは杉村だった。

なぜだ？

手を止めるような要素は何もなかった。

だが傘を振り下ろす刹那、悠二の眼を見た途端、何か縛られるかのように凶器を持つ手が動かなくなったのだ。

土壇場で、感情の統制が効かなくなった悠二が見せた表情。

それは吉田を傷付けようとした、杉村に対する敵意。

杉村を止まらせたのは、その敵意だった。

零時の狭間をさ迷う迷子。

その奥に眠る深い深い“銀色”の怒りに。

「杉村！」

「っ！」

傘を止めていた手を別の掴む。

先ほど杉村を捕らえようとした青年だ。

「悔い改めなさい」

強烈な右ストレートが、杉村の顔面を打ち抜いた。

完全に不意を打たれた杉村は、その一撃で地に沈んだ。

激痛に悶えながらも暴れる杉村の右腕を後ろで押さえ、青年は杉村の服から器用にボタンを一つ千切る。

「記念に戴きますよ。貴方が更正出来ることを願っています」

青年は着ていた背広を使って杉村を縛り上げた。

「驚かせてすまない。怪我はないか？」

「は、はい。大丈夫、です……」

涙声でしきりに頷く吉田。

次に青年は悠二に視線を移す。

そこで悠二は、始めて青年の姿をはつきりを視認する。

「あっ」

「君は……」

青年　少し前、白い騎士となって悠二を助けた名護啓介もまた、彼の姿を見て声を上げた。

杉村を警察に引き渡した後、名護は後ろにいた悠二と吉田を振り返る。

「こんなところで出逢うとは、奇妙な縁だな、少年」

「……？　あの、坂井くん、お知り合いなんですか？」

「……うん、まあ」

悠二は曖昧に言葉を濁す。

まさかあんな非日常的な場面で出逢ったなどと、口外出来たものではない。

「警察の方だったんですか？」

「いや。だが似たようなものだ」

名護もまた、自分の素性をぼかした。

『素晴らしき青空の会』は、一般人には知られてはならない存在だ。

「しかし、さっきは見事だったな。君のおかげで杉村を捕まえることが出来たよ、ありがとう」

「いえ、そんな。大したことは何もしてないです」

偶然杉村が止まったから良かったようなものの、あのままなら自分も無事では済まなかった。

自分の身を省みず他人を守っても、それは意味がない。

自分が傷ついた分だけ、他人を傷つけるだけなのだ。

それに、

（ シャナの凄さには、全然及ばない）

名護は、悠二の顔に浮かんだ憂いの表情を見逃さなかった。

ふっと、ある少年の顔が彼と被る。

落ち込んだばかりだが、何度挫折しても、立ち上がってきた少年の姿が。

「……いや、君の取った行動は正しいものだった」

「えっ？」

落ち込んだ悠二を名護は労いつつ、悠二に諭す。

「確かに無謀な部分はある。しかし、人間は何かを守りたいと

思う時、理屈ではない行動を取ることもある。それに良し悪しはないんだ。

君は正しいと思ったからそうしたんだろう？

なら、自分を卑下してそれを後悔してはいけない。

現に、君は彼女を助けているんだ。

もっと自分を誇りなさい」

肩を叩き、悠二と吉田の間を通り、名護は立ち去っていく。

悠二は叩かれた肩を見て、慌てて名護の後ろ姿を追う。

「あ、あの！」

再び振り返る名護に、悠二は聞く。

「名前……、教えてくれませんか？」

「名護だ、名護啓介。」

まあ、他に何か相談事があるなら、この先にあるマル・ダムールという喫茶店に来なさい。大抵はそこにいますから。

……『君の身に振りかかったこと』については話せないが、それ以外なら何でも聞こう」

さりげなく、イクサや燐子の言及を封じて、今度こそ名護は広場の

階段の向こうへと姿を消した。

「凄い、人でしたね……」

「……………うん」

吉田の感嘆に、悠二も同意した。

しかし心の内では、ずっとさっきの名護の言葉が引っ掛かっていた。

『人間は何かを守りたいと思う時、理屈ではない行動を取ることもある』

それは　フリアグネの時にも思った。

シヤナを助けたい。

それは自分に何が出来るかではなくて、ただ悠二自身がやらなければならないと、心に決めたことだった。

けど、

(……ならなぜ、あんな言葉を吐いたりしたんだ……あんな言葉を吐かせた僕の胸の奥は、どうなってるんだ、あの時の力は、いったいどこに行ってしまったんだ……)

さっきは、そう思えたのに。

ただ助けたいと。

吉田を助けようとした時には、そう思えたのに。

またすぐに、その気持ちは霧散してしまった。

(……先生、僕に、何がわかるっていうんですか。自分のこともわからないのに、その上シャナの気持ち、なんて)

シャナが抱いたものと同じ疑念。

その答えを、悠二はもうすぐ得ることになる。

とある“徒”によって。

舞台は変わり、御崎市廃デパート、フリアグネの忘れ形見、宝具『
破璃壇』の安置場所。

「あれ？ 戦う相手が変わった？」

「ああ、みたいだな」

奏夜受け持ち一年二組のクラスメイト、佐藤啓作と田中栄太らは、
自分たちを『非日常』へと誘った存在、マジヨリーとマルコシア
スの戦いを、彼女の残した盤によって見ていた。

不鮮明な映像には、不可思議に蠢く影がある。

さっきまでマジヨリーと戦っていたフレームヘイズとは違う姿だ。

「さっきのフレームヘイズは、姐さんが倒したよな。じゃあ、今姐
さんは、誰と戦ってるんだ？」

「さあな、ただ……」

佐藤の質問に、田中は自分の疑問を告げる。

「なんか、戦い方がさっきとは全然違う」

「？ そりゃあ、相手が違うんだから当たり前だろ」

「そうじゃなくてさ。ほら、炎を全然使ってないってことだよ」

「あ……」

佐藤も気付く。

先ほどからマジヨリーは、自分達に幾度か見せた『ジザイホー』
という力で戦っていたが、それらは全て炎を使う物。

マジヨリーと戦っていたフレームヘイズも、僅かながらに炎は使
っていた。

しかし、今戦っている影にはそれが見られない。

ほとんど肉弾戦で戦っているらしかった。

「……フレームヘイズじゃない、“徒”って奴らでもないってことか？」

「んなもん俺に分かるかよ。何となくそうなんじゃないかって、思っただけだ」

二人は、再び盤へと視線を戻した。

と、マジヨリーと戦う影が、何かを取り出す。

映像が鮮明でないから分かりづらいが、影はそれを、自分の腰あたりを持っていく。

「なっ!?!」

「うわっ!?!」

佐藤と田中が声を挙げる。

影は一瞬で、生物的なデザインに、手には銃を携える姿へと変わっ

ていたのだ。

「お前には、これが丁度いい」

『バツシャーマグナム!』

キバットが緑色のフェッスルを吹き鳴らすと、キャツスルドランから射出されたバツシャーの彫像が、キバの手に収まった。

彫像はバツシャーマグナムに変形し、腕と胸部が緑色の装甲、スケイルアームとスケイルラングに覆われ、キバの仮面にバツシャーの幻影が重なり、その色を緑に染め上げる。

キバットの瞳も同色になり、『キバ・バツシャーフォーム』への変身が完了した。

「フン!」

トリガーを引き、獣へと水の弾丸を発射する。

寸分変わらず、弾丸はヒットするが、その中身は空。

「あっははは！ ハズレー！」

「つゞぎは当たるかな？ ツヒヤツヒヤ！」

周囲からは、エコーのかかった声が重なって聞こえてくる。

炎弾を利用して作られた、トーガの獣の分身体。

優に四十はいる獣へ、キバは手当たり次第にバツシャーマグナムを撃ちまくる。

だが、また空。

そして分身は増えていき、炎弾を浴びせてくる。

「ちっ！」

地面を転がってそれを回避し、バツシャーマグナムを構えながら、

本物のマージョリーを探す。

「ヒヤハハハ！　んな豆鉄砲じゃあ、百万発撃っても俺達にはブチ当たらんねーぜえ！？」

マルコシアスの挑発に、キバットは不適に笑う。

「ふっふっくん、本当にそうかなあ？」

キバがバツシャーマグナムの後部を、ベルトに止まるキバットにくわえさせる。

『バツシャー・バイト！』

キバットのコールと共に、キバは円を描くように腕を動かす。

すると、赤い霧が、夜の帳が、昼の空を包み込む。

「なっ！」

「夜だあ！？」

マジヨリーとマルコシアスの驚愕をバックコーラスに、夜は更に深みを増し、気が付けばキバと獣の立つ地面には、バツシャーフォームのテリトリーたる、大気中の水分で作りに出した『アクアフィールド』が生成されていた。

そして唯一の光源たる半月は、バツシャーフォームの力を最大限引き出すためのもの。

「ハア~~~~ッ！」

キバは祈りを捧げるかの如く、半月に向けて手を広げ、バツシャーマグナムを翳す。

マグナムに付帯したヒレ、トルネードフィンが回転し、アクアフィールドの水を巻き上げる。

さながら竜巻のようにキバを取り囲む水流は、バツシャーマグナムの発射口に凝縮され、一つの大きな水球を作り出した。

「俺からのプレゼントだ。　ハアッ！」

獣の大群に銃身を向け、トリガーを引く。

バツシャーフォームの必殺技『バツシャーアクアトルネード』が、
獣目掛けて射出された。

水の弾丸は、まるで意思を持つかのように弾道を変えながら、ト
ガの獣を蹴散らしていく。

あっという間に分身は排除され、残る獣はただ一匹。

「つと!？」

「危ねッ!!!」

獣はどうにか身体を反らし、水球をかわすが、

『無駄無駄。僕の弾丸は標的に当たるまで止まらないよ』

バツシャーマグナムから聞こえるラモンの声が言うように、『バツ
シャーアクアトルネード』にはキバの魔皇力が籠められており、そ
の弾丸は狙いを定めた敵をホーミングし続ける恐ろしい技だ。

しばらく弾丸をかわし続けていた獣も、やがて水球を捉えきれなくなり、

「っぐ、うあっ！！」

トーガの獣に水球が着弾し、その身体にバツシャアの文様が浮かんだかと思うと、微動だにしなくなった。

『バツシャアアクアトルネード』により、物質としての結合が緩くなった獣にキバは近付き、

「フン」

キバが人差し指でちゃんと触れただけで、トーガの獣は簡単に砕け散った。

中にいたマジョリーにも、ダメージが加算される。

「っ、はぁ、はぁっ……！！！」

髪から水を滴らせながら、マジョリーはつり上がった眼差しで、周囲を見渡す。

しかし、キバの姿はもう何処にもなかった。

マジヨリーに止めを刺す気は無かったようで、キバは本来の目的であるシャナの救出に向かったようだ。

「よ、よお。無事か？　我が麗しの酒盃、マジヨリー・ドー？」

「……ええ、何とかね」

清めの炎で滴る水を消し、マジヨリーはグリモアを抱えて立ち上がる。

「まったく、とんでもねえ野郎だぜ。異種族の力を完璧に使いこなすたあな。しかも前の狼とは違い奴を使つてやがった」

フレイムヘイズで言うなら、複数の王を従えているようなものだ。

「どーするよ？　あの嬢ちゃんに比べて、キバは面倒だぜ。俺からすりゃあ、ブチ殺し甲斐があるつてもんだが、“屍拾い”を先に見つけられると面倒だな。ヒッヒ」

「……ふん。向こうは探査の自在法も無いんだから、トーチに寄生して姿を隠してるラミィの野郎を見つけたのは無理よ。乱入してくんなら、次こそブチ殺してやるわ」

「ヒヤーツハツハ！！ 勝利の余韻が消されてご機嫌ナナメってかブツ！」

「お黙り」

マージョリーは沸き立つ敗北の苛々を、本をブツ叩くことで解消した。

その頃、ビルの真下を流れる真名川の水面に、気泡が浮かんだ。

気泡は次々と生まれ、やがて水飛沫を立てながら、キバが飛び出し、岸の堤防に着地する。

その左手には、川に落ちたシャナが、ずぶ濡れになりながらも掴まっていた。

「ふう。ご無沙汰だな、“天壤の劫火”」

「キバ……！ 何故ここに？」

「なに、ただの成り行きさ。気にしなくていい」

「……いや、礼を言わせて貰おう。手を煩わせたな」

コキュートスから聞こえるアラストールの普段と同じ声音に反し、シヤナは先ほどから一言も喋らない。

目が完全に沈み込んでいる。

「 酷い顔だな」

シニカルな口調のまま、ついでにと思い、シヤナへバツシャーマグナムの銃口を向け、ぼろぼろになった彼女の制服から水を吸い出した。

『ちよつと！ 僕の力を脱水機代わりにしないでよね！』

「あー、悪い悪い」

ラモンの抗議をやんわりと流し、キバはシャナへと語りかける。

「『弔詞の詠み手』との戦い、見させてもらった。実に無様だったな」

口から出たのは容赦ない叱責。

しかし、シャナにはもう言い返す気力すら無かった。

「なんだアレは？　考えも何もなく、突っ込んでいくバカが何処にいる。」

事情は知らないが、大方あの“ミスレス”とつまらない言い争いでもしたんだろう」

ピタリと言い当てられ（当たり前ではあるのだが）、シャナは肩を震わせ、膝を抱えて顔を伏せてしまう。

（こりゃ、ちょっと灸が効きすぎたかな）

キバは溜め息をついて、シャナの隣に座る。

「……詳しい内容には、知らないし興味もない。だが『炎髪灼眼の討ち手』。お前がやらなきゃならないことは、弔詞の詠み手』と戦うことだったのか？」

「……？」

急な問いかけだった。

世界のバランスを守る。

それを乱す者を止める。

それが、自分の使命だ。

間違っただけ、いない。

「世界のバランス？ ふん、だからバカだと言っただ」

キバはシャナを見ながら、ぴしゃりと言い放つ。

「フリアグネの時も言ったはずだ。自分の心を偽るなど。雑念があるまま戦って、果たせる使命などあるわけがないだろう。ましてや世界のバランスを守るだと？ どの口が言えるんだ」

もはや侮辱ともとれる言い草に、しかしシヤナは反論する気になれなかった。

極度の虚脱と悔しさからか、今の自分は、吃驚するほど冷静だったのだ。

(……………私は)

戦って、何が得られた？

悔しさと敗北感だけだ。

違う。

そんなモノを得たくて、あの場所に行ったんじゃない。

(私の、偽り……)

真実の扉を開きかけている少女を、キバは後押しする。

「俺の唯一尊敬する人の言葉をやろう」

信頼している人、大切な人は多けれど、自分が尊敬する人物は、後にも先にもただ一人。

その人が未来に残し、自分を後押ししてくれた魔法の言葉を、今度がキバが伝える。

「これからは本当にやりたいことをやるんだ。心の声に、耳を澄ませる」

「……心の、声に」

澄み切った言葉は、それこそ音楽の如く、シャナの心に響く。

「そつだ。心の声を聞き、どうするかはお前次第。頑張れよ」

最後の言葉は、とても優しい口調で紡がれた。

キバはそのまま、呼び出したマシンキバーで去っていったが、キバの残した教えは、シャナの中に灯り続けている。

「私の、心の声」

眼を閉じ、自分を見つめ直す。

使命への渴望は、消えていない。

だがそれは酷く薄っぺら。

脆弱な感情の奥の奥。

自分が、戸惑いと拒絶から、しまい込んでいた願い。

私が今、本当にやりたいこと。

それは

「戦いじゃ、ない」

「……………」

アラストールは否定しなかった。

使命を忘れたのか、と叱りつけても良い言葉にも関わらず、彼はただ黙って、自らの契約者の、零れ落ちるような声を聞いていた。

「嫌だ…………、一緒にいてくれないのは、嫌だよ…………」

涙声が混じる。

僅かなプライドから涙は流さない。

代わりに、拳をきつく握りしめ、それに耐える。

戦いじゃない。

本当に望んだのは、傍らにいてくれる少年の姿。

自分に笑いかけてくれた、あの不思議な“ミスセス”。

「私は、悠二に……」

感情の渦を塞ぎ止めかけるが、もう遅い。

彼女の願いは、ついに心の奥から吐き出された。

本当にやりたいことは。

本当に望むことは。

「悠二に、いて欲しかった……っ！」

目に見える不安の鎖は解き放たれた。

目に見えない繋がりは、確かな信頼と共に、動き出す。

次回、仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD!

「家の悠二がお世話になっています」

「教え甲斐がありますよ」

「ごめん、いじわるして、ごめん」

「こんな！　こんな気持ちになるのは嫌!!」

「御初にお目にかかる。キバの継承者よ」

「アンタが“屍拾い”か」

「私は『炎髪灼眼の討ち手』」

「名前は、シャナ」

【第八話・スラー／信念の楔】

WAKE・UP！　紅蓮の鎖を解き放て！

第七話・カルテット／心の声を聞け・Bパート（後書き）

以下反省。

・杉村登場。さて、彼が何故“銀”を感じたのかは……言わなくてもわかりますね。

・名護さん&悠二の絡みはやってみたかったです。多分名護さんは、悠二の中に、最初の頃の奏夜を見るだろうと思ったので。

・「心の声」のくだりは音也語録でもベスト3には入ります。
一番好きな言葉？

「俺のために争うな、二人纏めて愛してやる！！」に決まってるでしょう（笑）

さて、マジヨリー編も後半戦。

大学受験やらで、これからは少し更新が遅れるかもしれませんが、次回もお楽しみに。

PS・魔界城の話をやらないんですか？ という質問が結構あるんですが……予告をしておく、ヴィルヘルミナ登場後です。

あの話はヴィルヘルミナとアラストールがいないと成立しない話なので……これ伏線です（笑）

第八話・スラーノ信念の楔・Aパート（前書き）

「第一帝期、ナポレオン・ボナパルトに使えた政治家、タレーラン・ペリゴールは、『よいコーヒーは悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粹で、愛のように甘い』と残している。

アルコールには遅れるものの、コーヒーは知識や文化、芸術に多大な関係性を持つんだ。今でも石油に続く貿易規模を持つことからみても、コーヒーと人間の付き合いはまだまだ続いていくだろうな。もう一杯！」

キバットバット三世

第八話・スラー/信念の楔・Aパート

破格教師。

天上天下唯我独尊。

荒波を防ぐ防波堤の様に役立つ男。

様々な呼称こそあれど、紅奏夜という人間は、基本的に誰にも止められない。

浮き雲のようにつかみ所が無く、どこまでも気まぐれで、どこまでも自由。

それが紅奏夜のパーソナリティー。

しかし、奏夜は自分の身を弁えている。

半分人間でないとはいえ、自分が他の人間やファンガイアとなんら変わらないことも、重々理解していた。

つまり 彼にも、歴然とした『苦手な人種』というものが存在する。

「……………」

椅子に腰掛け、居心地の悪い思いをしながら、奏夜はただ沈黙していた。

嗚呼、ここが我が家ならどれだけいいだろう。

そんな空しい期待を抱いていると、台所からパタパタとスリッパ越しの足音が聞こえてきたかと思うと、目の前のテーブルに茶菓子が置かれる。

お盆を運んで来たのは、栗色の髪を後ろで一纏めにした、奏夜よりやや年上に見える女性。

「さ。どうぞ、紅先生」

「……どうも」

屈託がまるで見られない笑顔に気後れしながら、奏夜は茶碗を手に取り、軽く会釈する。

坂井悠二の母。

坂井千草に。

事の次第は、一時間前まで遡る。

夕暮れが差し込み、優雅な雰囲気を覗かせる【カフェ・マル・ダムール】。
鼻歌を歌いながら、紅奏夜はカウンター奥の流し台で皿洗いをして
いた。

マージョリーとの戦いを終えた彼が向かったのは、もはや仲間内で溜まり場と化したマル・ダムール。

「ごめんねえ、奏夜くん。今日は恵ちゃんも名護くんもいないからさ」

「あはは、構いませんよ。家族同士の時間を邪魔しちゃ悪いですから」

愛犬ブルマンの毛繕いをするマスターに、奏夜は疲労をまるで感じさせない笑みで応じる。

奏夜は普段お世話になっている、という理由から、たまにこうして店の用事を手伝うことがあり、昨今は臨時のバイトさんという扱いだ。

『時たま現れる謎の男性』として、ルックスの高さもあってか、訪れる女性客に人気があったりもする（無論本人は自覚していない）。

洗い物を終え、一息ついたところで、入り口の扉が開く音がする。

「ごめん奏夜くん、出てあげてくれる？」

「あ、はい」

ブルマンから目を離せないマスターに代わり、奏夜がカウンターへと向かう。

ややあって、栗色の髪をした女性客が入って来た。

買い物帰りなのか、スーパーの袋を下げている。

「いらっしゃいませ、ご注文は？」

営業スマイルもなく、奏夜はナチュラルな笑顔で対応する。

「えっと、頼んでおいたコーヒー豆を……あら？」

「あれ？」

奏夜と女性は同時に首を傾げ、互いの顔をじっと見つめる。

「紅先生？」

「坂井のお母さん？」

同時に気付き、二人は声を上げた。

そう、入って来た女性客は、奏夜が現在、色んな意味で注目している生徒、坂井悠二の母、坂井千草だったのだ。

保護者と教師という立場、しかも一学期が始まったばかりというこ

ともあつてか、会う機会はあまり無いが、最初の保護者会で顔は見知っていた。

戸惑う奏夜の横から、マスターが顔を出す。

「おやおや、二人とも顔見知り？」

「あ、こんにちはマスター。紅先生には、高校で息子がお世話になってまして」

「あらら、それは巡り合わせだ。奏夜くんはね、たまにここで働いてくれるんだけど、千草ちゃんは会う機会が無かったね」

マスターが簡単に奏夜の紹介をし、奏夜はやや気後れしながら口を開く。

「えっと、坂井さんは……」

「まあ、紅先生つたら。よそよそしいですよ。千草で構いませんわ」

「はあ……、じゃあ千草さんは、ここの常連さんだったんですか？」

「はい、来る頻度は少ないんですけどね。先生こそ、マスターと親しいようですけど」

「あはは……、まあ、色々と縁がありました」

マスターと共に苦笑いを浮かべる。

ファンガイア絡みでの付き合いなのだから、説明しようにも出来ない。

その後、適当に談笑して、千草に注文の品であるコーヒー豆を差し出す。

「ここまでなら、思わぬ遭遇で片付けられたのだが、

「じゃあ奏夜くん、今日はもう上がって大丈夫だよ」

「あ、はい。分かりました」

マスターに会釈して、カウンターから出ようとした時、話は動いた。

「紅先生。この後、何かご予定はありますか？」

「？ いえ、特にはありませんが」

でしたら。と次に出た千草の一言は、奏夜を混乱させるには十分なものであった。

「これから家で、お茶でも一緒にしません？」

そして、現在に至るといっわけだ。

断ってもよかった。

少なくとも現在の奏夜なら、キャッスルドランの時の扉を使ってでも、過去の自分をで止めにいくだろう。

アームズモンスター三人組の妨害が入るだろうが、なんならそれを振り切ってもいいくらい本気だった。

どれくらい本気かという点、力が力任せに自分を止めようが、ラムオンが泣き落とししようが、次狼が音撃真弦・烈斬を振り回そうが、止まるつもりはなかった。

しかし、あの時点の奏夜は、断るに断れなかったのだ。

千草の持つ、断つたらとてつもない罪悪感に襲われるレベルの、超・朗らかな雰囲気によって。

そんな複雑な葛藤の末、奏夜は坂井家に招かれ、こうして緑茶を啜っているというわけだ。

（一体何をビクついてんだか、俺は……）

さっきから緊張しっ放しだ。

まるで四年前に戻ったみたいだ。

「紅先生？」

「えっ？」

「お口に合いませんでしたか？」

「口目で飲む手が止まっていたことに気が付く。

「ああ、いえ。別にそういうわけでは……げほっ」

慌てて飲み干そうとして噎せた。

「す、すみません……」

「ふふっ、いいえ」

みっともない奏夜の様子にも、千草はおっとりな対応だ。

何だか、逆に気恥ずかしくなる。

（……ああ、そうか）

臆気に、この違和感が何なのか気が付く。

　　奏夜の交友関係は、その大体が“少し変わった事情を持つ人々”だ。

　　シヤナや、ミスレスである悠二のみならず、四年前に知り合った人間はほぼ、このカテゴリーに入る。

　　名護や恵等、今では多少毒抜けした人々も、変わる前だったその頃を知るからこそ、奏夜は普通に接していられる。

　　だが、千草は違う。

　　さして交友があるわけでも無し。

　　それでいて、裏表がない。

　　総合的に言えば

（俺苦手なんだ、こついう普通に“いい人”ってのが）

慣れていない、と言つべきなのかも知れない。

毒も何も無い、健全ないい人との会話に。

何なんだこの倒錯した人間性は……。

自分の持つ嫌な特異性に軽く沈みながら、取り敢えず奏夜は、話の矛先を逸らすことにした。

「坂井　　お子さんはまだ帰っていらつしやらないんですね」

「ええ。多分、クラスの誰かと寄り道してるんだと思います」

「クラスでも、それなりに交友関係は広いですからね。坂井のヤツは。当たり前はあまりないでしょう。」

まあ、最近は微妙みたいですけど」

「……紅先生、失礼を承知でお聞きしたいのですが、それはシャナちゃん　ゆかりちゃんとの事でしょうか？」

千草から聞いた思わぬ固有名詞に、奏夜は一瞬首を傾げるが、すぐ納得する。

（キバットが言ってた鍛錬が坂井家で行われてんなら、平井について知っててもおかしくはないな）

しかしシャナちゃん、と来たか。

このおおらかな性格だ。

人間というものを知らないシャナがなついても、なんら不思議ではない。

千草本人も、シャナを娘のようなものだと思っているのだろう。

本気で、シャナと悠二の仲を心配していることが伺える。

奏夜は、苦手だなんだと言ってはいられないな、と気を引き締め直し、口を開く。

「ええ。少しお子さんから話を聞かせて貰いましたが、今回は、お子さんの方に問題があったようですね。

平井の方にも、非がないわけではありませんが」

「そうですね……。申し訳御座いません紅先生、息子がご迷惑をお掛けしたようで」

「いえいえ、これが俺の仕事ですから」

頭を下げかけた千草を、慌てて奏夜は止める。

や、やりづらい……！

普段と違って、語るに一筋縄ではいかないようだ。

奏夜は、狼狽えた様子を直ぐ様抑え、話を続ける。

「けど、本当に可愛がっていらっしやるんですね。お子さんもそうですけど、平井も」

「ええ。うちには、男の人しか居ませんでしたから、何だか娘が出来たみたいない気持ちなんです。

ですから、余計に……」

「心配、ですか」

よく見ているなあ、と奏夜は声に出さず感心する。

今朝の様子からして、悠二はシヤナとのことを、千草には話していいまい。

まして、シヤナに関しては“紅世”のことさえも、千草はわからないはずだ。

曖昧ながらも、それに気付くというのは、千草の持つ聡明さに他ならなかった。

「大丈夫ですよ」

敬服も含んだ微笑みを浮かべながら、奏夜は言う。

「お子さんにも、平井にも言えることですけど、あいつらは大人びているようで、まだまだ未熟です。

どちらも違う意味で、心の機微に疎い」

シヤナは人の心を知らないから戸惑い、悠二は人の心を知りながらも迷う。

形こそ違えど、それらは全て、心の深さを知らない、幼稚な子ども
の問題。

「要するに、鈍いんです。二人とも。

こう言つては失礼になりますが、お子さんは多分、平井は当然とし
て、自分のことさえもよくわかつていません。

恐らく、今回のこともそれが原因だとお見受けしますが」

「はい。悪気があるわけではないのでしょうけど」

もし悪気があつたのなら、ぶん殴っている。

心の内に秘めた物騒な考えを引つ込め、奏夜は続ける。

「そういう隔てりがあつたからこそ、平井とは“不完全”な形で喧
嘩をしてしまったんでしょう。

喧嘩をするなら、もっと真つ向からぶつかなければならない。

互いが互いを恐れる余り、何処か遠慮がちになるようでは、相手の
本当の気持ちは伝わりませんからね」

喧嘩は決して悪いことではない。

一歩間違えれば、関係性の崩れる瀬戸際。

だが同時に、相手の本心を理解する、最大のチャンスだからだ。

それは、大人になればなるほど難しくなる。

だが、悠二とシャナは、

「あいつらは、まだまだひよっこです。

だからこそ、いくらでも成長できるし、いくらでもやり直すチャンスも与えられている」

自らの過ちを正すことは、老若関係なく難しい。

だがシャナと悠二には、それに足る才気も、それに足る心も持っているはずなのだ。

だから奏夜は、きっかけを与えた。

時に紅奏夜として、時にキバとして。

二人の成長のため。

二人の心の音楽を、更に輝かさせるため。

「俺から見ても、お子さんも平井も、見込みのある生徒だと思います。」

坂井も今でこそ迷ってますが、普段は自分に出来ることを全力で頑張れる、いい息子さんです。ただ今回みたいに、それと同じくらい不安たつぷりでもあるんですけどね。

本当 教え甲斐がありますよ」

少し格好付けだったかな。と最後は冗談めかしく纏めた奏夜。

しかし、千草の反応は、

「 本当に凄い方なんですな。紅先生は」

「は？」

虚を突かれた奏夜に、千草が笑いかける。

「少し前、悠ちゃんと先生の話をしたことがあったんです。あの子だったら、しきりに紅先生のことを『凄い人だ』って言うんですよ？」

私はまだ、紅先生と形式的に話したことしかありませんでしたから、どういう意味合いなのかよく分からなかったんですけれど……」

千草の顔に浮かぶ裏表の無い笑みが、また奏夜をたじろかせる。

「悠ちゃんの言う通りでしたね。意味合いも何もなく、紅先生は本当に立派な方です」

「い、いやそんな、俺なんて。ただの若輩者に過ぎません」

「ご謙遜なさらないで下さい。悠ちゃんのこと、ゆかりちゃんのこと、本当に理解していらっしやっただじゃないですか。まだお若いのに、そうそう出来ることじゃありませんわ」

そんなわけがない。

こんなことが出来る人なんて、いくらでもいる。

ただ、自分が“そういう”人間だったから。

“他人の心を理解出来ず、迷ってばかり”の人間だったから。

その手の話に慣れているだけなのだ。

「“凄い”なんて言葉、俺には似合いませんよ。

そういうのは近い将来、坂井みたいの可能性のある奴にこそ、似合ってくるもんです」

「いえいえ。家の悠二なんかまだまだです。少なくとも、女の子を泣かせてるような体たらくでは」

「……む。それには、恐れながら同意します」

お互いの言い種にしばらく沈黙し、奏夜と千草はどちらからともなく吹き出した。

奏夜は思う。

この人は、何となく苦手だ。

しかし、

とにかく“いい人”だ。

(坂井のお母さんとは思えないよな)

母の聡明さに感服する一方で、さらりと息子の不甲斐なさに呆れる
奏夜だった。

奏夜はそれから約一時間後、坂井家からおいとました。

まあ、それなりに長い時間話していれば、千草の朗らかさにも慣れ
てくるし、事実、彼女と話しているのは楽しかった。

しかしこのまま行くと、夕飯までご馳走になりそうな雰囲気になったため、その善意100%の誘いを丁重にお断りし、奏夜はお茶会を切り上げたのである。

「いつの時代でも、母は強しってか」

真夜然り、過去で出会った恵の母、ゆり然り。

親子の絆というのは、及びがつかないくらいに強いものだ。

千草は悠二を愛しているだろうし、シャナのことと同じくらい可愛がっている。

それだけに、つらい。

“零時迷子”という稀有な宝具を宿していようと、本当の坂井悠二は死んでいる。

いずれはその矛盾が、別れをもたらすだろう。

そしてその時、シャナもまたここを去る。

だがそれでも。

「残せるものはあるはずだ」

音也がブラッディローズに込めた祈りが、22年の時を越え、奏夜を導いたように。

人の絆は、時間などに負けはしない。

『紅先生。これからも、悠二をよろしくお願いします』

別れ際、千草が奏夜に言ったことを思い出す。

「ええ。出来る限りのことはさせて戴きますよ」

その際の返答を反芻する奏夜。

生徒を導く。

それが自分の仕事なのだから。

「さてと、キャッスルドランに寄って帰……?」

そうして、坂井家の敷居から立ち去ろうとした時だった。

「ひるんひるん……」

庭から鋭い声がする。

(……平井、か?)

見つかる危険もあったが、好奇心に負けた奏夜は庭に回り込み、物陰からこっそりとその様子を窺う。

(……あ)

一瞬で後悔した。

扉際の茂みの中に、シヤナはいた。

キバとなった奏夜と別れた時のまま、ボロボロの格好で。

そしてその前には、悠二が開口一番怒鳴られた衝撃からか、戸惑った顔で立ち尽くしていた。

「……シヤナ？」

「うるさいうるさいうるさい！　なにが、どうした、よ！」

シヤナは立ち上がり、激情にまかせた言葉を、燃えるような眼光と共に悠二へぶつける。

（うーん、これは退散した方がよさそうな雰囲気だよなあ……）

だが居心地が悪そうにしながらも、奏夜はそこを離れられなかった。

魅せられていたから、かもしれない。

美しいまでに輝く、心の音楽のぶつかり合いに。

「おまえのせいなのよ！ おまえのせいで、もう、私、全部、無茶苦茶なんだから！！」

「！！！」

「戦ってるときも！ 戦ってるのに！ おまえのせいで！！ わざわざ、”あいつ”に、助けられなくても良かったのに！！」

要点がまるで繋がらない言葉。

それを聞く悠二の心の音楽は、また乱れていた。

しかし今までとは違う、乱れ方だ。

シャナが、自分のせいで負けた。

自分のことなど、必要でないはずの彼女が。

悠二の価値観を破壊するには、十分だ。

「全部おまえが悪いんだから！　おまえがあんな、あんなことするから！」

次の瞬間、悠二は、何かに駆られたように、シャナを抱き締めていた。

「……………」

奏夜は無言のまま、顔を背ける。

代わりに目を閉じ、二人の声と、心の音楽だけを聞き取る。

「ねえ！　これ、悔しいんじゃない！　怒ってるんでもない！　これが、悲しい、なのよ！　なんで私、みんな、悠二、おまえが悪いのよ！」

「じゅん、いじわるして、じゅん」

耳を突く二つの音楽には、確かな心が籠っていた。

今までの空虚なものではない。

ただ、剥き出しの感情をぶつけ合う。

真っ向からぶつかり、相手の魂を感じ合うこと。

（ そうだよ。坂井、平井。それでいいんだ）

自分を偽っても、何も始まらない。

やりたくもないことを、やらなくていいんだ。

ただ、心の声に従えばいい。

「こんな！　こんな気持ちになるのは嫌！！」

「……うん。じゅん、じゅん」

「　っ、もっと強く！　　もっと強く！」

詰襟の縫い目が破れるくらいに、シヤナは悠二を引っ張る。

悠二はただ、シヤナを抱き締め続けた。

彼女の存在を感じるかの如く。

「うん」

「もっと強く！..！」

「うん」

そして少女は、少年に望む。

自分の心の声が、少年に求める願いを。

「.....もっと、強くなってよ.....！」

「 うん、なるよ」

少女の願いに、少年は応える。

自らの弱さと、確固たる意志を噛み締めながら。

奏夜はゆっくりと、物陰から立ち去り、坂井家を出た。

その表情には、満足そうな笑みが浮かんでいた。

「強くなれ、か」

ふと、あの黄金の魔剣を引き抜いたことを思い出す。

かつては自分も願ったこと。

大切な人を守るために、奏夜は力を欲した。

人の心に流れる音楽を守るために、奏夜は強くなりたかった。

キバとしての力が、人間とファンガイアの架け橋となる力が、きつと、自分とあの人を繋ぎ合わせてくれる。

きつと、想いを通じ合わせることが出来る。

そう　　信じていた。

「…………強くなれよ、坂井、平井」

儂さを帯びた口調で、奏夜は願う。

「俺のようには、絶対になるな」

第八話・スラー／信念の楔・Aパート（後書き）

以下反省。

・奏夜をキバに変身させられない……しかも次回も変身出来ないかも知れません；

デイケイドでユウスケが、中々クウガにならなかった頃のいもどかしさを思い出します。

すみません。どうか次のマジョリー戦までお待ちを（<|>）イクサも暴れさせる予定なので。

更新が遅れ気味ですが、出来る限り頑張りますので、応援よろしく
お願いしますm（|）m

第八話・スラー/信念の楔・Bパート

時刻は八時を回った頃。

キャッスルドラン内部の回廊。

奏夜はキャンドルの灯がゆらゆら揺れる中に、見知った人影を見つける。

「うつす、次狼」

「ん？ 何だ奏夜か。どうした、こんな夜更けに」

「いや、今日は結構身体動かしたからさ。気分転換にお前らとゲームでも思ってな。ちなみにこれは土産」

途中コンビニで買ってきた菓子類や飲料水の入ったビニール袋を次狼に手渡す。

モンスターの栄養は基本的にライフエナジーだが、別に普通の食べ物喰えないわけではない。

次狼曰く、別腹。

「なあ、もう少しジャンクフードから脱却出来ないか？ さすがにチキンラーメンはないだろう」

「土産にケチつけんな。大体コンビニにあるもののほとんどはジャンクフードだぞ。おでんとかだどこに来るまでに冷めちまうし」

「……まあいいか、たまには懐かしい物を喰うのも悪くない。しかし、26年前から進歩が無いな、これも」

「最近はや子ポケットが付いたりしたんだけどねえ。玉子かけずに食べる人にとっちゃ無用の長物だからな」

恐らくは本編とまるで関係ない雑談をした後、次狼は「ああ、そうだ」と思い出したように指を立てる。

「奏夜、お前に客が来ているぞ」

「客？」

誰だ。

キヤッスルドランを認知こそすれ、入れる人間となれば、おのずと限られてくるが。

「奥の部屋で二世と話しているから、一応顔は見せておけ」

「ん、了解」

次狼と別れ、奏夜は奥にある客間へと足を運ぶ。

と、入り口から話し声が聞こえてくる。

「ふん。お前も相変わらず、残り滓を集めるのに余念がないというわけだ」

「貴公の側も、ここ数年で随分な変革があつたようではないか。長年に渡り実現し得なかつたファンガイアと人間の共存、その実現には感銘を受ける。」

現代のキングは、余程の大器を持つ者なのだろうな」

「いや、キングの所業とは言い難いな。」

事の発端は……」

赤いコウモリ、キバットバット二世は、入り口に立つ奏夜を示す。

「こいつだ」

「……ほう、君がそうか」

椅子から立ち上がった男は、ダークスーツに身を包んだ老紳士。

杖を付きながら、老紳士は恭しく礼をする。

「御初にお目にかかる。キバの継承者よ」

「……アンタが“屍拾い”ラミーか」

「ふむ、よくわかるものだ」

「『甲詩の詠み手』から話は聞いている。無害な“徒”で通っているとな。で」

奏夜は宙を飛ぶ二世に目をやる。

「こいつをここに呼んだのはお前か？　二世」

「ああ、こいつとは少しばかり因縁があつてな。お前としても“屍拾い”に会っておくことは不利益にはなるまい？」

では、俺は帰るぞ。と飛び去る二世の姿を目で追って、奏夜はふんと鼻を鳴らし、椅子に腰かける。

「まあいいさ、それで用件は何だ？　ただ駄弁るために来たわけじゃないだろう。」

それとも、キャッスルドランに貯蔵されてるライフエナジーが狙いかな？」

「ふつ、君は歳の割に、随分と駆け引き慣れしているようだな」

喰えない奏夜の態度に、ラミーはシニカルな笑みを浮かべた。

「魅力的な誘いだが、それは止めておこう。ここは仮にもファンガイアの居城だ。相応の礼儀は弁えねばならぬだろう。」

私がここに来たのは、あくまでも君に、私が無害だと信じてもらいたいからだ。

第一、私が本当にそれをやれば、君も黙ってはいまい」

「「」明察」

奏夜は向かいの椅子を指し示し、ラミーもそれに応じて、奏夜と向かい合わせに座る。

「ま、世界のバランスを気にして、トーチしか喰わないってのは信じよう。だが、まだ疑問点が残るな。アンタはそれだけ遠回りなやり方をして、何が得たいんだ？

それが俺に不都合のない条件なら、俺はアンタを無害だと認めよう。なんなら、『弔詩の詠み手』から守ってやってもいい」

最大限、譲歩の意を示して、奏夜はラミーの返答を待つ。

「昔」

「？」

「一人の人間が私のために、たった一つの物を作ってくれた。しかしそれは、私が見る前に壊れ、永遠に失われてしまった」

何処と無く、寂寥や悔恨といった切ない感情を乗せたラミーの言葉に、奏夜は押し黙る。

「私は、彼が贈ろうとしてくれた物を、この目で見たい。この手で触れたい。確かめたいのだ」

「……んなこと、本当に出来るのかよ」

再生術というものがある。

上位ファンガイアのみが行える、死した同胞のライフエナジーを操作し、ファンガイアの個体を復活させたり、ライフエナジーの集合体、サバトを作り出すことも出来る。

しかし、それは原型が存在する場合の話だ。

ラミーの言い方から察するに、彼が復元させたいものは、彼にとって如何なる存在なのかすら不明瞭なもの。

復活は神業の領域だ。

「ああ、可能だ」

しかし、奏夜の指摘に対して、ラミーの反応は意外なものだった。

「年月を経て、そのための自在式も編み上げた」

「けど、その自在式の消費コストも半端じゃないんだろう？
何せ遺失物の再生だ。」

ましてトーチで集めるとなれば、いつまでかかるか分かったもんじやねえぞ」

「ああ。だがそれでも」

ラミーの声に、望みへの強い渴望が籠る。

「私が成すことは変わらない。その程度の労苦は、私にとって障害にはならないのだ。」

我が未練を、晴らすためならば」

奏夜は神妙な面持ちのまま、しばらくラミーの顔を凝視する。

そして、

「 分かった。信用しよう」

余りに軽く放たれた了解に、逆にラミーは目を見開く。

「警戒は、無いのだな」

「大それた嘘をつきに、わざわざファンガイアの居城に来る意味が無いだろ。」

騙されたなら そんな時はそんな時だ。俺がバカを見るだけさ。その上で、騙したアンタを叩き潰す。

これでミッションコンプリートだ」

あっけらかんと奏夜は言い捨て、「それに」と続ける。

「俺にも少しだけわかるからな」

「？」

「永遠に失った物を取り返したい気持ちだが、さ」

深い感情が刻まれた奏夜の表情に対し、ラミーはコメントを控えた。

「ま、そんなわけだからさ。」

アンタは安心してこの街にいていいぜ。

トーチに関しても、灯の強いヤツを貰わないなら、自由にしてくれていい。悲しいが、喰われた連中に関してはどうしようもないからな」

「配慮痛み入る。」

それにしても、君は随分と“徒”に理解があるようだな。ファンガイアは極力、“徒”に干渉しないと聞いていたが」

「別に大した理由じゃないさ。」

最近、この街にも“フレイルムヘイズ”や“紅世の徒”が現れたのは、知ってるよな？」

「ああ。『炎髪灼眼の討ち手』が来ているのだろ。その庇護下にある“ミステス”の少年から、大体の話は聞いている」

どうやら、悠二にも会っているらしい。

シヤナとの和解の際、妙に吹っ切れた顔をしていたのが気になっていたが、どうやらラミーに何か原因の一端があるようだ。

「んで、そいつらと少し話して……まあ、“徒”もフレイムヘイズあんまり、人間やファンガイアと変わらないなって知っただけさ」

(……ほう)

奏夜のおおらかな見識に、ラミーは心の中で感嘆の声を上げる。

(飄々としているように見えて、その実理解力も、許容力もあるよ
うだ)

ファンガイアの未来は明るい。

そう予感させる何かが、確かにこの青年にはあった。

「それよか、ウチの生徒が世話になったみたいだな」

「？ 何の話だ？」

「いや、アンタが会った“ミスレス” 坂井悠二は俺の教え子なんだよ」

「おや、仮の姿は教育者かね？」

「まあそんなとこだ、んで坂井のヤツ、最近つまんねーことできいじけててな。」

大方、あいつに何かアドバイスしてくれたの、アンタだろ」

そこでラミーはようやく合点がいったらしい。

「ああ、あの少年のことが」

何処か貫禄のある風貌に、初めて疲れのようなものが混じった。

「別に感謝されるようなことはしていない。私はただ自分に利益となるよう、動いたに過ぎぬからな。それに、利益云々を抜きにしたところで、やはり感謝は必要ない」

ラミーは表情に、憂いと皮肉を入り混ぜる。

「まだ青い、若者特有の悩みの相談相手などで、いちいち頭を下げられては敵わん」

「ははっ、同情するぜ。坂井は教えんのが面倒だからな。良くも悪くも、世の中を知る年配者はツライね」

「君が彼の師であるなら、それはお互い様、というヤツだろう?」

ラミーの言い種に、双方苦笑いらしきものを浮かべる。

長らく“世の中”を渡る二人の語らいは、しばらく続いた。

時たま、とある少年の名が出る度に、坂井家からくしゃみの音が聞こえたという。

「っ痛!」

シャナの振り下ろした枝が、悠二の頭上に叩きつけられる。

朝の鍛練。

昨日のぶつかり合いもあってか、枷が外れたように張り切るシャナと悠二だったが、結果はあまり変わらなかった。

いつも通り、シャナが悠二を叩きのめしただけ。

だが、ただそれだけのことはずなのに、二人も奇妙な達成感があった。

「……今日、いきなり進歩すれば、かなり格好良かったんだけど」

「そう簡単にできたら、誰も苦労しないわよ」

地面に倒れた悠二に向かい、シャナが至極ごもつともな返答をする。

「ふっふっん、まだまだ鍛え足りないねえ、少年」

「まして、相手がこんなに張り切ってるシャナちゃんだもんね」
キバットとキバーラが追い討ちをかける。

その言い種に少しだけへこみはするものの、今までのように気落ちはしなかった。

キバーラと入れ替わりで、縁側に座った悠二に、キバットがタオルを渡しながら聞く。

「立ち直ったみたいで何よりだ。
……で、少しは反省出来たか？」

「……うん。昨日、キバットが言ったことの意味も、分かった気がする」

シャナの気持ちになれ。

全くその通りだ。

キバットの言葉のみならず、シャナの様子からも判断することも出来た。

(それに、先生もきつと分かってたんだ。
シヤナが、やる気を無くした僕を見て、どう思ったのか)

気付くチャンスはいくらでもあつた筈なのに。

なのに、結局悠二は自分のことしか考えられなかった。

勝手に自分を見限つて、それがどれだけシヤナを裏切る行為かもわからず　ただ自分勝手な思い込みをするだけ。

「……本当に、どうしようもなくちっぼけだ」

「　いいんじゃない？　別にちっぼけでも」

悠二の嘆息に対し、キバットの反応は意外なものだった。

「ちっぼけだと思うから、自分が弱いと思うから、人間はそんな自分を変えようと頑張れるんだ。」

悠二が自分を『ちっぽけ』だと思ったなら、それは変わるチャンスなんだよ」

キバットは、かつての自分の親友の姿を、悠二に重ね合わせる。

仲間に裏切られ、信じていたものを否定され、自分の隠された生い立ちに苦しめられて尚立ち上がったきた、一人の気弱“だった”青年。

それと同じ、自分を変えられるだけの強さが、悠二にはある。

シヤナ程ではないかも知れないが、キバットも悠二を高く買っているのだ。

「だからよ、焦ることはねーさ。少しずつでもいいから、前に進んで行きゃいいんだよ」

キバットの軽い口調に、悠二は自分の心が軽くなる。

ふと、今はキバーラと談笑するシヤナを見た。

彼女にいつ追い付けるかはわからない。

けど、もう辿り着くのを諦めようとは思わなかった。

「あの子のために、強くなるんだろ」

「うん、頑張るよ。中々進歩しないけどね」

「ははっ、結構結構。目標は達成困難じゃねえとつまんねえだろ？」

そんな冷やかに苦笑いして、悠二はこの気のいいコウモリに、ただ感謝の意を述べる。

「ありがとう、キバット」

「よせやい。大したことしちゃいねえよ」

場所は移って、御崎高校渡り廊下。

『本ツ当にすいませんでした!』

「いや、俺は別にいいんだがよー」

携帯電話片手に、奏夜は昨日無断欠席した佐藤啓作に連絡を取っていた。

同じく休んだ田中栄太宅に連絡したところ、佐藤家の方に泊まっているとのことだったので、こちらの方が手っ取り早いのである。

「全く、お前らが休むのは勝手だが、連絡くらいはしろよな。出席日数の整理は意外に大変なんだよ」

『……あの、無断欠席した身で言えたことじゃないんですけど、先生が電話掛けてきた理由って、俺や田中への配慮とかじゃなくて、ただ先生が面倒なだけでしょ』

「……………チツ、バレたか」

『先生今舌打ちしましたよね!? ボソツと聞こえないように言ってみたんですけど舌打ちしましたよね!?』

「何を言うか。俺がそんな配慮に欠けた言葉を口にするはずなからう。やれやれ、自意識過剰な坊っちゃんだ」

電話越しの佐藤のツッコミを軽く聞き流し、奏夜は続ける。

「どうぞやら親御さんにも詳しい連絡してないみたいだが、何か理由があるのか？」

『……えつと』

佐藤が言い淀む。

言いたいと言えない、そんな沈黙だ。

「……それと、さつきから雑音に混じって『死ぬ、いつそ殺して』って声が聞こえてくるんだが」

『……!』

奏夜は音楽に携わっているからか、耳がいいのである。

佐藤は電話越しからでもわかるくらいに動揺した。

『き、気のせいです気のせいです!! 嫌だな先生、何を言ってるんですか!』

「ちなみに正確な分析をするなら、声質からして女性。悲鳴のトーンからして二日酔いか何かが原因と思われる」

『特殊捜査班か何かですか先生は!!』

『おーい佐藤、さっきからツッコミの声しか聞こえねーけど、どうしたー?』

佐藤の声の後ろで、田中の呼び掛けが聞こえる。

佐藤は業を煮やしたのか、半ばヤケクソ気味に、

『とっ、とにかく、昨日は俺も田中も外せない用事がありまして、その関係で今日もお休みさせて戴きます! 迷惑を掛けてすみませんでしたっ!!--!』

「あっ！　おいコラ逃げん……ったく」

一方的に電話は強制的に切られ、奏夜は溜め息をつきながら、それをポケットにしまう。

「外せない用事ねえ……」

佐藤と田中は何も不良というわけではないから、不純な動機ではないだろうが……。

「しかし、さっき電話越しに聞こえてきた女の声、どっかで聞いた気がするんだが……おっと」

思考を遮断し、向こうの廊下から歩いてきた生徒に軽く挨拶する。

「よう、坂井に平井」

「あっ、先生。おはようございます」

悠二も奏夜に気付き、頭を下げた。

「おはよ」

「……………」

“にこやかな笑顔”で挨拶してきた平井ゆかりことシャナに、不覚にも、奏夜は顔をひきつらせた。

「あ、ああ。おはよう」

奏夜がフリーズしかけた頭をフル稼働させて挨拶を返すと、シャナはご機嫌なまま、教室へと入っていく。

「……………な、仲直りは出来たみたいだな、坂井」

「はい。多分、ですけど」

「ただ少し、リバウンドが大きいみたいだが」

そう言う奏夜の心境が痛い程分かる悠二は、苦笑いを返す。

「ま、仲直り出来たなら良かったよ。昨日のレッスンも無意味じゃなかったわけだ」

「……あの、先生、昨日はすみませんでした。いきなり怒鳴ったりして」

「あーあー、気にすんな気にすんな。若い内にはよくあることさ」

そう言っつて奏夜は、謝罪する悠二の肩を軽く叩く。

「それよりも、宿題の答えは見つかりそうか？」

「はい」

何故強くなりたいのか。

それをまだ、はっきり口にすることは出来ない。

恥ずかしいといつのもあるけれど、口にすればするだけ、それは曖昧になってしまいそんな気がするから。

奏夜は悠二の何処か晴れやかな様子を確認して、

「そっか。じゃあ“口に出来る”ようになったら、また教えてくれよ」

いつもの快活な笑みを浮かべ、奏夜の脇をすり抜けていった。

「敵わないよなあ、先生には」

あの奇妙な先生は、人の内面を理解することに長けている。

今回のことで、ほんととそれを実感した。

奏夜があの時くれた助言は、どれもこれもあの際の悠二にピッタリな言葉だった。

いつも飄々としている破格教師と皆は言うが、本気でそう言う人間は、この学校にはいないと、悠二は思う。

世の常識から外れようが、ただ自由。

そんな生き方をしながら、誰かを助けられる。

端的に言って

物凄くカッコいいのだ。

シヤナとは違う意味で、憧れる。

(どうしたら、あんな風になれるんだろう)

それとも、こう思うこと事態が、昨日ラミーが言っていた“青さ”
なのだろうか。

それらを自覚し、悠二は呟く。

「 頑張ろっ」

今口に出せる、精一杯の覚悟を。

そんなこんなで、四時間目の現国。

(来た)

(動いたか、『弔詩の詠み手』)

シャナと授業を続ける奏夜は、自在法の気配を感じ取る。

シャナが立ち上がり、悠二もそれに習う。

奏夜と、クラス全員の注目を集めつつ、シャナは言い放った。

「お腹が痛いから早退するわ。坂井悠二に送ってもらおうから」

……ここまでわかりやすい嘘だと、いっそ清々しい。

だが、奏夜もシャナと悠二が早退する理由はわかっていたので、

「そうか。一応医務室には寄っておけよ」

いいのかそれで。

昨今、奏夜へのツツコミに関して、息が合ってきた一年二組である。

撤収準備を整えた悠二が、軽い調子で言う。

「それじゃ先生、そういうことで」

「ああ、気いつけてな」

二重の意味を込めた奏夜の言葉に対し、シャナも答えを返す。

「ありがとう、奏夜」

「……………」

……名前呼ばれたっ！

もはやフリーズどころの話では無かった。

昨日の件での、彼女なりの感謝なのかもしれないが……。

(……すまん平井。普通に怖いぞ)

シヤナと悠二が去っていったドアを呆然と見つめながら、奏夜は思う。

そんなびっくりイベントのせいもあってか、授業が終わってしばらく経ってから、奏夜の体感温度は下がりっ放しだった。

だがそれでも、やることは変わらない。

携帯電話を取り出し、ある人へ連絡をかける。

「あ、名護さん？　奏夜です。少し手伝って貰いたいことがあるんですけれど」

学校から抜け出した奏夜が向かった先は、昨日悠二達のいた御崎アトリウム・アーチ。

「名護さんは……まだ来てないか」

マシンキバーを近場に停め、存在の力を感じ取る。

今、この建物全域には群青色の巨大な“封絶”が張られていた。

明らかに『弔詩の詠み手』 マーシヨリーの製作物。

中からは、ラミーとマーシヨリーの気配。

そして、建物から少し離れた位置に、シャナと悠二の力を感じた。

「これなら、平井達の方が早く、ラミーと合流出来そうだな」

そう算段をつけ、奏夜はアトリウム・アーチの中へ。

ビルを一気にかけて上がり、五階まで来た辺りで、上層の外構庭園に大爆発が起きる。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！ “紅世の、つ徒” あー！！！」

「ヒヤーツハーツハーツハー！ 殺すぜ、壊すぜ、食いちぎるぜえ！！！」

マージョリー、マルコシアスの狂笑まで聞こえてきた。

「わっかりやすいなあおい！！！」

舌打ち三寸、奏夜は更に足を早める。

どうにか、庭園の一階層下まで辿り着く。

しかし、そこから見える景色は、マージョリーの入るトーガの獣が、ラミーに向けて太く長い腕を振り被るところだった。

「終わあ」

「りだ!!」

ここからでは間に合わない。

打つ手は無かった。

だが、奏夜は焦っていなかった。

刹那、獣の長い腕が真っ二つに裂けた。

「！」

「？」

トーガの獣の驚愕は、派手に割れたガラスから飛び込んできた何者かを、凝視する。

ここからでもわかる、

“紅蓮”の炎を携えた少女の姿を。

「こんにちは、
“蹂躩の爪牙”マルコシアス、
それに『弔詩の詠み手』」

威圧的に、少女は大太刀の切っ先を向ける。

「改めて名乗るわ。私は、
“天壤の劫火”アラストールのフレイム
ヘイズ。」

『炎髪灼眼の討ち手』……名前は、シャナ」

誇らしげに、堂々とシャナは名乗った。

その姿に、昨日までの憂いは微塵もない。

煌々と燃え上がる強さだけが、そこにはあった。

「奏夜くん！」

自信を取り戻したシャナの姿に安心していると、後ろから名護が追いついてきた。

「すみませんでした。急に呼び出したりして」

「いや、私の方こそ遅くなってすまない。

あれが、君の言っていたフレイムヘイズ、『炎髪灼眼の討ち手』か」

名護が庭園を見ながら言う。

「名護さん、“封絶”の中で、何か違和感はありますか？」

「取り敢えずは大丈夫だ。これのお陰でね」

ポケットから出したゼロノスカードを見せ、名護は問う。

「それで、私は何をすればいい？」

“屍拾い”という“徒”を、守って貰いたいとのことだったが「

「はい。“屍拾い”は老紳士みたいな格好で、あの青い獣っぽいヤツが、今回ブチのめさないといけないヤツです。
だから早く上に上がって」

そこで奏夜は言葉を切る。

名護もまた、自分の後ろを振り返り、嘆息した。

「どうやら、先に黙らせなければならぬ相手が来たようだな」

二人の背後には、二体の異形　ホースファンガイアとライノセラ
スファンガイアが、唸り声を上げて立っていた。

奏夜と名護は並び立ち、神経を張り積める。

「見たところ、再生体のファンガイアですね。一体誰が……」

「わからない。だが、私達のやることは、一つだ」

「ははっ、それもそうですね。

キバット！」

「っしやあ、出番だな！ キバるぜキバるぜえ！」

奏夜は飛来したキバットを掴み、左手を噛ませる。

名護も、懐からイクサナツクルを取り出し、手のひらに押し付けた。

「ガブツー！」

『レ・デ・イー』

噛み付きと待機音が鳴り、奏夜はキバットを掲げ、名護はイクサナツクルを右横に構えて叫ぶ。

『変身！！』

『フイ・ス・ト・オ・ン』

キバットをキバットベルトに、イクサナツクルをイクサベルトに装着。

奏夜の身体に巻き付いた光の鎖が弾け、ベルトから放出される圧縮されたアーマーの映像が、名護に重なる。

仮面ライダーキバ。

仮面ライダーイクサ。

二人の仮面ライダーが、ここに降臨した。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

「その命、神に返しなさい!」

フレイムヘイズと仮面ライダー。

それぞれの戦いの火蓋が、切って落とされた。

次回、仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD!

「一人でいられる強さなんざ、俺はいらなんだよ」

「群青の…狼…!」

「いかな。深手を負ったフレイムヘイズが暴走している」

「地の底で眠る我が同胞達よ、今こそ蘇りて一つになるのだ!」

「さっきもそうだったし、今もそう。」

やる事は同じ」

【第九話・不協和音／紅蓮の翼とデュアルドラゴン】

WAKE・UP！
紅蓮の鎖を解き放て！

第八話後書き&裏話(前書き)

長くなりそうなので、今回は本文と分離します。

第八話後書き&裏話

どうにか変身シーンは捺じ込めた……。けどその代わりに、内容が若干グダグダ(。・。・。)

・シャナが奏夜を呼ぶ時の名前がずっと『お前』で締まらなかった
ので、これからは多分奏夜で通します。

しかし、シャナが初めて名指して呼んだキバキャラクターが、
何気にキバーラであるという事実(笑)

・田中&佐藤の出番が増やせない！ 基本奏夜、シャナ、悠二の三
人視点だからしょうがないっちゃんしょうがないんですが……はい、
ノープランさが浮き彫りです。

・意外にキバとイクサの同時変身シーンって無いですよ。
先に戦ってたイクサに続けてキバが変身ってパターンが多かったよ
うな……。

さて、今回のマージョリー編にて、本編不遇のバツシャーをカツコ
よく見せたかったのですが、九話ではまたまた本編不遇の存在を出
します(ヒントはタイトル)。

ただ……次回更新は確実に一週間以上かかります；(テスト週間+
受験生)

本格的に忙しくなる前に、マージョリー編は終わらせたいと思いま
すので、またお楽しみ戴ければ幸いですm(。・。・。m

【本編裏話】

って言っても大した話じゃないんですがね（苦笑）

更新不定期のお詫び（という名の言い訳）に、この『仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD』が生まれた裏話を書きます。

そもそも僕は、このサイトでの初二次作品に、仮面ライダーキバではなく、仮面ライダーディケイドを選ぼうと思ってました。

今ではたたくさんの素晴らしい作者様方が書いていらつしやる、仮面ライダーディケイドと他のアニメ作品とのクロスです。

そして『紅奏夜』はその内の一つ『仮面ライダーキバ×灼眼のシャナの世界』のり・イマジネーションライダーでした。

当時、両作品共にかなりはまった時期だったので、この世界は物凄く設定を練りました。

諸事情でディケイド作品を断念したあと、『せめてこの世界だけでも』と思い、この『仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD』が生まれました。

ちなみにその他のアニメクロスはこちら

仮面ライダークウガ×夜桜四重奏

仮面ライダーアギト×とある魔術の禁書目録

仮面ライダー龍騎×ローゼンメイデン

仮面ライダー555×D・GRAYMAN

仮面ライダー剣×ZOMAE・LOAN

仮面ライダー響鬼×少年陰陽師

仮面ライダーカブト×鋼殻のレギオス

仮面ライダー電王×Pandora・Hearts

ええ、完璧偏った趣味に走ってます（笑）

此方が一段落したら、こっちも書きたいなあ……。

第九話・不協和音／紅蓮の翼とデュアルドラゴン・Aパート（前書き）

「竜は、中国を象徴する聖獣とされ、西洋にも伝わっているが、そこからは恐竜の類だという意見が多い。

神の眷属であるとされ、水の神として強大な魔力を誇ったんだ。

夏王朝時代においては竜を制御する技術があったらしいが、皇帝の徳が下がるとともに、その技術は絶えてしまったらしい。

キャッスルドラン城主たるキバの凄さは、そこにもあるってわけだな！」

キバットバット三世

第九話・不協和音／紅蓮の翼とデュアルドラゴン・Aパート

「そらっ!?!」

キバの甲冑が備えられた右足が、ホースファンガイアを蹴り飛ばす。

「グ、ウツ!」

ホースファンガイアは苦し気に数歩下がり、しかしまた直ぐにキバ目掛けてステンドグラスの装飾が施された剣を走らせる。

「ちっ」

キバは身を捻らせてそれを回避し、また打撃攻撃を加えていく。

だが相手もそれを見越して攻撃しているのか、上手く防御している。

戦いは平行線を辿っていた。

「散りなさい」

と、そこへイクサが、イクサカリバー・ガンモードの銃撃をホースファンガイアに浴びせる。

「グ、ギャツ！」

「今だ、奏夜くん！」

「はい！」

イクサの援護射撃で生まれた隙を突き、キバが拳のラッシュユを浴びせていく。

「グルオオオーツ！！！」

「むっ！」

片やイクサには、ライノセラスファンガイアが、固い身体にスピードを上乘せした突進をかけてきた。

「ハアツ！」

イクサカリバーのトリガーを引くも、発射された弾丸は、装甲のよ
うな皮膚に弾かれてしまう。

（迎撃は不可能か）

イクサは冷静な判断でライノセラスファンガイアの突撃を、横に飛
び退きギリギリで回避。

直ぐ様イクサカリバーをカリバーモードにチェンジ。

刀身が煌めき、ライノセラスファンガイアの身体に火花が散る。

が、

「ぐっ!？」

ライノセラスファンガイアのボディブローの衝撃が、イクサを貫く。

ライノセラスファンガイアの真骨頂は、サイのような見た目に
由来するパワー、そして固い皮膚による防御力にある。

かつてキバが戦った際にも、バツシャーフォームの弾丸を難なく防御するほどの代物。

（イクサカリバーでは歯が立たないか……。イクサジャツジメントならばあるいはいけるかも知れないが、決定打とまではいかない可能性もある）

戦況を冷静に分析し、対応策を練るイクサ。

そこへ、

「名護さん!!」

ホースファンガイアを抑えるキバの声がかかった。

彼の指には、紫色の宝具　ドツガフエッスル。

「！　わかった、来い!!」

イクサは一瞬で、キバの意図を理解した。

それを確認し、キバは一旦ホースファンガイアから距離を取り、フエッスルをキバットに吹かせる。

『ドツガハンマー!!』

フエッスルの呼び掛けに答え、ドツガの彫像がキャッスルドランから射出され、戦場へと飛んでくる。

すかさずイクサは、ベルト脇のサイドケースから、ドツガフエッスルと同じ紫色のフエッスルを取り出し、ベルトのフエッスルリーダーにセット、イクサナックルを押し込む。

『ド・ツ・ガ・フェ・イ・ク』

無機質な電子音と共に、キバへと渡るはずのドツガハンマーは、持ち主には向かわず、身の丈はある巨大な魔鉄槌は、イクサの両手に収まった。

フェイクフエッスル。

キバの従者たるアームズモンスターを呼び出すフェッスルの、周波数を科学的に解析。

その解析データを元に嶋が作り上げた、特殊な波長で、キバの武器を奪い取るフェッスルだ。

魔皇力を必要とするフォームチェンジは出来ないが、現段階でその必要性はない。

イクサはドツガハンマーを引き摺りながら、ライノセラスファンガイアへと足を進めていく。

ライノセラスファンガイアは、身体の間隙から蒸気機関のように煙を放出しつつ、イクサに襲いかかる。

重量のあるタックルを、イクサはタイミングよくドツガハンマーの柄で防ぎ、

「ッハア！」

そのまま勢いをつけ、ドツガハンマーをスイングする。

元々、アームズモンスターの中で最も攻撃力のあるドツガハンマーだ。

勢いを乗せたこの一撃には、さしもの分厚い装甲も役に立たない。

イクサは畳み掛けるように、ドツガハンマーの連撃を加える。

「グ、ツガア……」

装甲にヒビが入る。

すかさずイクサは、ライノセラスファンガイアをドツガハンマーに引っ掛け、キバが戦うホースファンガイア目掛けて投げた。

ホースファンガイアとライノセラスファンガイアは正面衝突し、互いのダメージもあってか、直ぐに復帰が出来ないようだ。

「よし。一気に決めるぞー！」

「わかってます！」

キバとイクサは、再びフェッスルを取り出した。

『WAKE・UP!』

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

キバットとイクサベルトのコールを合図に、キバの背後に夜の帳が、イクサの背後に煌々と燃える太陽が顕現した。

対極に位置する風景が共存するそれは、戦いの中で絶妙のコントラストを作り出していた。

キバは右足のヘルズゲートを解放して飛び上がり、イクサは臨界点に達した胸部のソルミラーから生み出される光子力エネルギーを、イクサカリバーに集める。

『ハアーーーーッ!!--!』

キバの『ダークネスムーンブレイク』が決まり、ホースファンガイアはキバの紋章のクレーターを残して砕け散る。

イクサの『イクサ・ジャツジメント』が、ヒビの入った装甲部分を袈裟に斬り捨て、ライノセラスファンガイアを両断した。

「さすがです」

「キミも腕は鈍っていないな」

放出されたライフエナジーが舞い上がるのを見上げ、キバとイクサは手を打ち合わせた。

その勝利の余韻に浸る間も無く、上層で起きたらしい大きな爆発音が、ビル全体を軋ませる。

「やれやれ、いつも戦いは待ってくれないな」

「「いつらの事も気になりますが、今は上が先ですね」

キバとイクサは頷き合って、障害の無くなった階段を駆け上がったいく。

ファンガイアの骸たるステンドグラスを残して。

「ふん、所詮は、烏合の、衆か」

キバとイクサの後ろ姿を見送ったドラゴンファンガイアは、ステンドグラスの欠片を忌々しげに踏みつける。

「しかし、あれが、スワローテイル、ビショップを葬った、素晴らしき青空の会の戦士、イクサか。成る程、キバも、さることながら、奴の力にも、警戒、しなければ、なるまい」

キバ、イクサ、そして今、ここにはいないキングの持つ、サガの鎧と『闇のキバ』の鎧。

いずれは相対する存在。

その力をなるべく正確な形で測るのは、決して無意味ではあるまい。

「ふむ。それを思えば、この、ゴミ共には、まだ、使い道が、あるか」

一片の温かみも無く、ドラゴンファンガイアは手を大きく広げ、叫んだ。

「地の底で眠る我が同胞達よ、今こそ蘇りて一つになるのだ！」

ホースファンガイア、ライノセラスファンガイア、そして彼の手から放たれた一昨日キバが葬ったラットファンガイアのライフエナジーが、宙に舞い上がり、溶け合っていた。

「つとぉ!?!」

「床が!?!」

キバとイクサが、最上階の庭園まで辿り着いたのを見計らったかの如く、フロアの床が派手な音と共に崩れた。

どうにか安定したゾーンを見つけるが、ふとそこでフロアの中央。

吹き抜けとなった穴に、悠二とラミーが落ちていくのを確認した。

「っわぁ!?!」

「むっ!?!」

ラミーが手を伸ばしたが間に合わない。

そのまま悠二は宙に放り出され、下まで急降下。

「悠二!!」

トーガの獣を追い詰めていたらしきシヤナは、瞬時に天井の強化ガラスを蹴り、落下する悠二に手を伸ばす。

トーガの獣がすかさず炎弾を発射するが、悠二を中心に展開された結界のようなものがそれを弾く。

(そーいや坂井、フリアグネの宝具拾ってたっけな)

簡単な理解を済ませるが、炎弾は防げても落下は防げない。

シヤナと悠二はそのまま、重力法則に従い、落ちていく。

シヤナがいる以上、無事ではあるだろう。

だが、ここまで戻ってくるまでの時間は絶望的だ。

どんなに早くとも、その間にラミーが始末される。

事実、トーガの獣は標的を替え、ラミーへ手を振り上げていた。

「今度こそ」

「終わりだあ!!」

今まさにラミーに襲い掛かるうとするマージョリーとマルコシアス。

「待ちなさい!!」

イクサカリバーが火を吹き、トーガの腕を貫いた。

「っぐ!?!」

撃ち抜かれた腕を押さえるマージョリー。

その隙にキバとイクサは、ラミーの盾となるよう、マージョリーの前に立ち塞がった。

「悪い。遅くなった」

「いや、いい頃合いだった。助力感謝する。キバ」

ふと、ラミーはもう一人の乱入者、イクサを見る。

「その鎧……。君は？」

「全て後にしなさい。“屍拾い”。まだ相手は膝をついていない」

イクサの言う通り、マージョリーは直ぐにトーガの腕を修復し、体軀をのしり、と上げる。

「……っ、このクソ忙しい時に！」

「いくら俺でも、再三同じことを言うのは好きじゃないが、敢えて言うてやるよ、『弔詞の詠み手』。

俺は、お前の邪魔をする」

飄々とした態度のキバに、苛ついたのか、バチバチとトーガから炎が上がる。

「……ラミーといい、あのチビジャリといい、アンタも助けを借りる気？」

他人にベタベタくっついてるようなヤツが、私の邪魔をすんじゃないわよー!」

「はっ、上等。」

なあ、助けを借りないヤツってのはさ、お前みたいに独りよがりで動いて、勝手気ままに“徒”を殺すようなヤツのことかよ?」

挑発的に、キバは仮面の下でほくそ笑む。

「だったら、そんなもん願ひ下げだ。」

一人でいられる強さなんざ、俺はいらないんだよ。」

俺は確かに、誰かに助けられなきゃならないダメなヤツさ」

悠二にも言ったことだった。

だが、この言葉には続きがある。

「けど、俺はそれでいいと思ってる。」

それはみんなが、仲間がいてくれるってことだ」

視線を合わせてきたキバに、イクサは強く頷く。

そうだ、君は一人ではない。

声に出さずとも、イクサが 名護が思っているのがわかる。

そう言ってくれる仲間がいてくれれば、仲間が自分を助けてくれるなら、

俺は、その仲間を守るために、いくらでも強くなれる。

「……だから、てめえらみたいなのは絶対負けねー。
他人を理解しようとせず、独りよがりな暴力を振り翳すようなヤツにはなー!」

「……いいわね。アンタも最高にブチ殺し甲斐があるわ!」

片や決意、片や激昂を込めて吠え、キバとマージョリーの拳がぶつかる。

勢いは互角。

つばぜり合いになったところで、イクサが動く。

「私を忘れて貰っては困るな」

イクサカリバーの斬撃が、今はキバへと伸びたトーガの腕に振り下ろされる。

「ハッ、同じ手は喰わねーぜえ!？」

「ぐっ!？」

途端、群青の炎が吐き出され、イクサを吹き飛ばす。

「名護さん!」

「余所見してんじゃないわよ!」

「下へ参りまあすつてか!? ツヒヒ!」

一瞬イクサに気を取られたキバ。

マージョリーはその隙に、先程の崩落で脆くなった足場を、巨腕をスイングすることで奪った。

「げっ!」

咄嗟の回避も間に合わず、キバは悠二と同じく、吹き抜けとなったビルの下へと飲み込まれていった。

「奏夜くん! くっ、おのれ!」

キバの戦線離脱に、炎から逃れたイクサはイクサカリバーを構え、ラミーを庇うようにして立つ。

「下がっていなさい。私から離れるな」

「ヒッヒッヒ! 一対一になっちまったが、お前さんは強いのかい? 白騎士ちゃんよ」

「フツ、舐められたものだな。イクサの力を甘く見るのは、止めた方がいい」

言いつつイクサは、ラミーを攻撃の範囲に入れないよう気を配る。

（さて……。荷物を抱えたままでの戦いとなると、ややこちらが不利か）

だがそれでも、やるしかあるまい。

別にこの老人には、好意も敵意もなく、イクサにとっては関わり無き存在。

だがキバが、奏夜が、守ってくれと言った。

彼が言うのなら、この老人は守るに値する存在なのだろう。

守る理由は、それだけで十分。

（昔の私なら、敵側の存在というだけで斬りかかっていただろうにな）

全く、難儀な性格になったものだ。

仮面の下で苦笑し、イクサは、イクサカリバーを振りかざす。

イクサの闘志を表すように、トーガの獣との間で、鮮やかな火花が散った。

「うーん、こりゃ結構ヤバイかなー」

「余裕かましてるバヤイかーッ！」

キバの朗らかした口調に、流石のキバツトも絶叫する。

キバは現在、胡座をかくような体勢のまま、景色が上へ上と流れていくのを眺めながら、壮絶なスピードで落下していた。

「お前あの攻撃絶対避けられただろ！　なのに何で俺達絶賛落下中なんだよ！！！」

「そう言うなキバット。吹き抜けのビルを落下するなんて体験、そうそう出来るもんじゃないぜ？」

「そりゃそうだろうよ！ 経験したら確実に死んでるもん！」

こんな時でも、二人のやり取りは変わらなかった。

「ま、確かに。そろそろ準備はしない、と……？」

ふとキバの耳を、何かを捉えた。

外面的なものではない。

もっと内面的な 心の音楽を聞き取るための感性。

音源は、自分よりも更に下。

もはや点のように見える、シヤナと悠二。

（これは、平井か？）

状況も忘れ、奏夜は耳をそばだてた。

(なんでもできる)

シャナの奏でる音楽が、キバの心に広がる。

(大切な誰かのためになら)

それは、奏夜がシャナに言ったこと。

『持たざる者』の強さには限界がある。

しかし『持つ者』には、

(無限の可能性がある！)

シャナは奏夜の教えを、まるで自分を奮い立たせるかの如く、心の中で奏でていた。

シャナの眩く輝いた音楽は、彼女が思うがまま、その有り様を変えた。

(なんでも、できる!!)

かつて見た、“天壤の劫火”の顕現。

あの時感じた、絶大なる存在のイメージが、再びシャナと重なる。

顕現するは 紅蓮の翼。

彼女が生み出した音楽の結晶は、シャナの背で煌々と輝いていた。

「 B r a v o ! 」

胸に染み渡る素晴らしい演奏に、キバはただ称賛の意を示す。

シヤナはしばらく不慣れな様子で、だが直ぐにコツを掴んだらしい。悠二の手を取りながら、シヤナは紅蓮の光跡を描いて舞い上がり、あっという間に落下しているキバを追い抜いた。

「っはは、すっげえ！！ あんなことも出来んだなあ！ あいっはー！」

「お、おい奏夜、ハイなどこ悪いんだが、早いとこ俺達も落下を止めようぜ！ シヤレになんねーってコレ！」

「ああ、了解了解！！ あんなもん見せられちゃあ、こっちも黙ってらんねー！」

言って、キバは自分の中に眠り、普段は抑制されているファンガイアの力を高めていく。

キバの意図に気付き、キバットはやや慌てて、

「奏夜、アレになるつもりかよ？　ウェイクアップでも良くないか？」

「言つたろ！　あんなスゲー音楽聞かされて、こっちが何もしいなんて我慢出来るかよ！」

キバは興奮冷め遣らぬまま、さらにファンガイアの力を上げた。

(……ダメだコリヤ。スイッチ入っちゃったら)

奏夜がもう止められないと悟ったキバットは、苦笑いをしながらも、意気揚々と言う。

「わかった！　けどタッチちゃん無しじゃ、精々制御は50秒が限界だ、その間にウェイクアップに切り替えるよ！」

「わかってるぢー！」

キバットの警告を聞き入れ、キバは力を一点に集める。

キバの意思に従い、ファンガイアとしての自分を抑える最後の鎖が、
ファイナルウエイクアップ
最終覚醒する。

「うおおおッ!!」

魂の咆哮に共鳴し、キバの鎧から、金色の翼が飛び出した。

「シャナ、上!」

「!」

悠二の声を聞くまでもない。

頭上、シャナの飛翔方向から、瓦礫の雨が降り注ぐ。

イクサとマージヨリーの鬨いによる余波が、よりによってまだ紅蓮の翼の微細なコントロールが出来ない時に、シャナ達へ襲い掛かった。

「悠二！ 体にしがみついて！」

「えっ!?!」

「『贄殿遮那』が振れないでしょ!?!」

「あ、ああっ!?!」

悠二が自分の身体にしがみついたのを確認する暇もなく、シャナは瓦礫の雨を迎え撃つ。

崩落してくる遮蔽物を時に避け、時に切り裂きながら、上へ上へと舞い上がり続ける。

しかし、

「なっ！」

太刀を振り抜いた先に、一際巨大な瓦礫。

まずい。

回避する暇も無い。

これを切り捨てるに足る存在の力を練る時間も無い。

自分だけぶつかるとはならまだいいが、今は悠二もいるのだ。

「くっ！」

急停止し、夜傘をせめてもの防御に回す。

しかし、衝撃はこなかった。

「……？」

夜傘を視界から退けると、巨大な瓦礫は粉々に“切り裂かれ”、細かいパーツへと別れて落下していった。

「シャナ、今何が……？」

「わ、わからない」

予測不可能な状況に、二人の呆然としていると、

ギィィィィィィ！！

甲高い鳴き声を、シャナと悠二は捉えた。

しかし、その音源は掴めない。

敵か？

もう一度、辺りを注意深く見回すと、自分の頭上を、大きな影が飛び回っていた。

（金色の、鳥？）

シヤナの最初のイメージがそれだった。

自分のものよりもずっと大きな翼。

影はその翼で、自分達へ落下していたであろう瓦礫を、瞬く間に切り裂いていた。

悠二はもちろんのこと、シヤナの動体視力をもってしても、正確な姿は見えない。

動く度に輝く、金色の軌跡が唯一の目印だった。

瓦礫雨が止むまで、ものの七秒もかからなかっただろう。

ターゲットを始末した影は急降下し、自分達のすぐ脇を通り過ぎる。

「っ!?!」

「わっ!?!」

ビュウツ、という風切り音を残して影はシャナ達の真下でどんどん小さくなる。

それが二人とほぼ同じサイズにまで縮んだところで、影は再びシャナ達の視界にまで上がって来た。

「よう、御二方」

「キバ!?!」

影の正体をハッキリ捉えたシャナと悠二は、驚きに乗せた声で、その名を呼んだ。

キバは二人の驚愕にも何処吹く風で、右足にあるヘルズゲートの翼で浮き上がっている。

「な、なんで！？　いきなり影が瓦礫を切り裂いて、その影がキバで……ええ？」

「あはは、期待通りの驚愕をありがとう、坂井悠二。だが、それについてはまた後だ」

混乱する悠二を制して、キバは上を指差す。

シャナと悠二がその先に目をやると、『甲詞の詠み手』の闘いを示す群青の炎が弾けた。

「誰かと、戦ってるのか？」

「ああ、俺の仲間が足止めをしてくれている。
同時攻撃をかけるが、いけるな？」

キバが同意を求める。

シャナはそれに、好戦的な笑みを持って答える。

「誰に言ってるのよ」

「上等」

頷き合つて、シャナは翼に再び存在の力を込め、キバも勢いをつけるように膝を折る。

「行くぞ!!」

「うん!!」

叫び、二人の戦士はそれぞれの翼で舞い上がる。

猛烈な勢いで風を切り、シャナは太刀を構え、キバはキツクの体勢を取る。

『WAKE・UP!』

「
」!

庭園でラミーを守りつつ、マージョリーと交戦していたイクサは、聞き覚えのあるコールを知覚する。

本当に微かだが、キバが落ちた、吹き抜けの大穴から聞こえてきた。

(穴……そうか！ 狙いは死角からの攻撃！)

幸いにも、マージョリーはさっきのキバットの声に気付いていない。

ならば、

『縦横無尽に咲き狂え!』

『掃除は嵐にお任せだあ!』

鋭く槍のような炎が襲い掛かる。

イクサは防御を捨て、その中に飛び込む。

最低限、致命傷を避けられればいい。

この行動を予測はしてなかったのか、攻撃はイクサの肩を僅かに焦がしただけだった。

「んなつ!?!」

トーガが目を剥くのに構わず、イクサはその懐に飛び込み、ベルトにフェッスルを装填する。

『イ・ク・サ・ナ・ツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

「喰らえッ!!」

イクサナツクルを瞬時に拳にはめ、イクサは右ストレートをトーガに叩き込む。

ナツクル装備時の必殺技『ブロウクンファング』が、0距離で炸裂した。

「っぎー!!」

よるめいたマジヨリーは衝撃からバランスを崩し、背後にあった穴へ身を踊らせる。

体勢を整えようとした時には、もう遅かった。

『っだあ　　ッー!!』

キバの『ダークネスムーンブレイク』とシャナの炎剣が、その身体に炸裂した。

「　　ッ!?!」

「なんだとお!?!」

痛みに、意識が飛んでいく。

見上げた先には、紅蓮の翼を広げる『炎髪灼眼の討ち手』と、血のように鮮やかな鎧を纏う『ファンガイアの王』。

頼りなく燃えた群青の炎を最後に、トーガの獣は真つ逆さまに落ちていった。

異変に気が付いたのは、シャナ、悠二、キバとも、ほぼ同時だった。

互いの健闘を称える時間すら貰えぬまま、アトリウム・アーチとは違うビルに着地する。

宙に浮くラミィに連れられ、イクサもこちらに向かってくる。

しかし、キバの注目はそちらに行かなかった。

(『弔詞の詠み手』の曲調が、変わった)

元々、粗野な傾向はあったが、ここまで暴走すればもはやノイズに等しい。

膨れ上がり、溢れた存在の力は、アトリウム・アーチの屋上を喰い破り、その姿を表した。

「群青の…狼…!?!」

悠二の眩きの通り、それは群青の炎で出来た巨大な狼。

フリアグネの時のアラストールと同じだ。

“蹂躞の爪牙”マルコシアスの顕現である。

が、驚きはそれで終わらなかった。

三人がその姿に見魅る中もう一つ、巨大な影がビルの一角を粉碎し、キバ達の視界に現れる。

「うわっ！ な、なんだ!？」

有り体に言えば、様々な獣のパーツが組み合わさった怪物。

表面はステンドグラスのような皮膚に覆われ、マルコシアスよりやや小柄だが、それでもかなりの大きさだ。

「あれって、燐子？」

「違う」

シヤナの疑問を、キバは即座に否定する。

四年前に数度戦ったきりだが、あの容姿は忘れようもない。

「……。世の中ってヤツは」

ファンガイアのオーラ集合体『サバト』を目に収め、キバはシニカルな口調でそう呟いた。

第九話・不協和音／紅蓮の翼とデュアルドラゴン・Aパート（後書き）

更新遅くてごめんなさいでしたm(_ _)m

最近、この小説の別名を『キバ本編不遇アイテム休載企画』に位置しつつある作者の一条です（笑）

以下反省。

・黄金の鳥……この描写でわかって貰えたでしょうか？ 劇場版で渡からこの形態（アークの力添えがありました）への変身をしていましたので、キバフォームでも出来るんじゃない？ ということで登場となりました。

・フェイクフェツスル発動。……開発者は嶋さんらしいですが、ハッキリ言おう。いらねいだろコレww
ガルルセイバー奪った時もイクサカリバーで十分だったと思う……。

・終盤マジヨリーがほぼフルボッコ状態；さすがに可哀想かと思いましたが、断行致しました（鬼）

次回でマジヨリー編はラストです。

あの不遇メカも加わっての巨大バトルになる予定ですので、またお楽しみに（^o^）

第九話・不協和音／紅蓮の翼とデュアルドラゴン・Bパート

「つまり、あの怪物はファンガイアの死体が集まって出来たモノってことね？」

「ああ。上位ファンガイアが使える魔術で、ファンガイアのライフエナジーを束ね、オーラ集合体に変えるんだ」

「あれが、ファンガイア……」

呆然と呟く悠二に、キバは、彼がファンガイアを見るのは、自分を除けばこれが初めてだというのを思い出す。

「もつとも、アレは複数のライフエナジーを使う特殊なタイプだ。作ったヤツの実力者は上の上だな」

「ふむ。今も何処かで、サバトを操っているファンガイアがいるということか。だが何のために？」

「さあな。俺が聞きたいくらいだ」

アラストールの質問には投げやりに答えつつも、キバには何となく目星がついていた。

サバトの創造主は、さっきの再生体を作り出したヤツと同じ。

ねらいはこの騒ぎに乗じて、キバ達の実力を測る……というのが最も妥当だろう。

ともすれば、容疑者もおのずと限られる。

(あの竜野郎め……、何を考えてやがる)

キバが心中悪態をついたところで、ようやくラミーがこちらのビルに降りてきた。

イクサも一緒にいる。

「無事で何より」

「お陰様でな。」

しかし いかんな。深手を負ったフレームヘイズが暴走している。このままでは封絶が解けるぞ」

「げ。マジか？」

注意を払ってみれば、確かに封絶の構成が緩んで来ている。

「も、も、もし解けたら？」

「因果が外と繋がって流れ出してしまったら、もう修復は不可能だ。奴の火勢に当てられた中の人間は皆、死ぬだろう」

悠二の質問に淡々と答えるラミー。

シャナ、悠二、キバ、イクサは、事態が急転直下の勢いで進んでいくことを再認識した。

「話して分からない相手には、とりあえずぶん殴って言うことか
す。
さっきもそうだったし、今もそう。
やる事は同じ」

シャナの迷いの無い意見に悠二は、余裕さえも含みながら言う。

「フレイムヘイズとして？」

「そう、フレイムヘイズとして」

シヤナが強く笑う。

キバもまた、その様子に仮面の下で微笑んで、隣に立つイクサを見る。

「じゃ、俺達はサバトの方をどうにかしましょうか」

「ああ。あつちは我々の専門だ」

そんなイクサの同意の声。

ずっと他に気が散っていた悠二は、ようやくイクサの姿を視認し、目を丸くした。

「あつ、な、名護さん!？」

シヤナが不思議そうに悠二を見て、キバは首を傾げる。

イクサもまた、闘いの中では認識出来なかった悠二を見て、驚きを隠せないらしかった。

「……そうか。噂に聞いた“ミスレス”坂井悠二というのは、君だったのか。」

成る程、君も私と同じ側の人間だったわけだ」

「名護さんこそ、キバの言ってた仲間って、名護さんのことだったんですね」

「こいつと知り合いだったんですか、名護さん？」

「ああ、少し縁が合ってたね。」

まあ。積もる話は、この後でじっくりしよう。今は『弔詞の詠み手』とサバトだ」

「……それもそうですね」

キバも頷いて、二人はシャナと悠二を下がらせ、ビルの端に立つ。

目標は、暴れ回るサバト。

「あの、どうするつもりなんですか？」

悠二は疑問を感じずにはいらなかった。

「いくらなんでも、あんな大きいのを倒すなんて……」

口には出さなかったが、シャナも同じことを考えていた。

しかし、キバとイクサは、

「まあ、見ている」

「大丈夫だ、見ていなさい」

シャナと悠二の疑問は直ぐに吹き飛ばすことになる。

「名護さん、“アレ”は今でも使えますよね？」

「だが、ここは“封絶”の中だぞ？ カードの効果はあくまで私のみで、“アレ”には適応されないだろう」

「大丈夫です。“封絶”の構成が緩くなってますから、“アレ”も呼べるし、この中でも動きまます」

話が纏まったのか、キバとイクサはそれぞれ、オレンジ色と白色のフエッスルを取り出した。

「よっしゃあ、奥の手だな！ キバツちやうぜえ〜〜！！」

シヤナ達が見守る中、キバツが笛を吹き鳴らし、イクサベルトが無機質なコールを発する。

『キャツスルドラン！！』

『パ・ワ・ー・ド・イ・ク・サー』

何度か見た、あの笛のような宝具。

また狼の剣のような武器を呼び出す気なのだろうか。

しかし、待てども彫像が飛んでくる気配はなく、イクサの方もそれは同じだった。

ギャオオオオオ！！

「うわっ！！」

静寂を破ったのは、何か生き物の鳴き声。

あの黄金の鳥か、と思いきや、キバはそのままだ。

その間も、声は鳴り止むことなく響き続ける。

やがて、ようやくシヤナと悠二は景色の変化に気が付く。

御崎市には珍しい、高層ビル。

その外壁がまるでカーテンのようにクルクル巻かれていくのを。

「　　っ!?!?」

「えっ、えええええーっ!?!?」

悠二は声を上げ、シヤナも悠二程の反応はないものの、目を見開いて、常識外れな光景を懸命に処理していた。

中から現れたのは、紫色の巨大生物。

胴体部分はビルのもままで、そこから頭部、足、翼が飛び出している奇妙なドラゴン。

キバの居城にして、ファンガイアの城塞たるドラゴン族　『キヤツスルドラン』だった。

ギヤオオオオオ!!!

達磨落としての如く、ドランの上層部分は下に落ち、キャッスルドランはこちらに向かってくる。

それに呼応するかの如く、今度は機械独特のエンジン音が空気を震わせた。

キバ達のいるビルの下、“封絶”の影響で止まった車を掻き分け、真っ白なマシンが走ってくる。

マシンは壁を垂直に登り、あっという間に悠二達のいる屋上の空きスペースに、砂塵を巻き上げつつ到着した。

イメージとしては、シヨベルカーが一番近いかもしれない。

メカニカルなデザインに、アームの先にある頭部と、青いポットを搭載した尻尾部分は何処か恐竜を彷彿とさせる。

対巨大ファンガイア用に開発された、イクサ専用ドラゴン型巨大重機『パワードイクサー』だ。

目を疑う情景に、シャナと悠二は言葉を無くし、アラストールとラミーは感嘆の声を上げる。

「見事なものだ。人間の技術の結晶もさることながら、稀少種プレートワイバーンも保有しているとは」

「御目が高い。天壤の劫火」

キバはそう言って、キャツスルドランの背に飛び乗り、イクサはパウードイクサーのコックピットに乗り込み、起動キーとなるイクサナックルをセットした。

「こっちはいつでもいけるぞ、お二人さん」

キバの呼び掛けで、二人は我に変える。

悠二が敢えて、シャナに訊いた。

「足手まといはいらない？」

「うん」

シャナも始めから答えは決まっていたようだった。

後はシャナの飛翔を待つだけ……なのだが、彼女は中々動かない。

キバ、イクサ、悠二の三人分の怪訝そうな視線が、シャナに突き刺さる。

「？ ……どうしたんだ？」

「『贄殿遮那』だ」

「へ？ ……ああ」

悠二がそう言うのと同じく、キバも納得した。

（翼があるから背中には掴まれないし、片手を使つと太刀が振れないからなあ）

ただ、そのためには、シャナの身体に、悠二が真つ正面から密着しなくてはならないわけで。

仮面の下でニヤニヤ笑いを噛み殺し、キバは成り行きを見守る。

「えっと、つかまるけど、いいかな？」

「……」

シャナは不承不承といった態度で、しかし赤い顔のまま、悠二の腕を引っ張った。

『あ』

キバとイクサが間の抜けた様子で、声を重ねた。

状況説明。

良識的に考えて、この場合悠二がつかまるべきは、シャナの腹部辺り。

だが、腕を引つ張った勢いのせいで、悠二のつかまった場所は、腹部よりもやや上になった。

つまり。

「ひゃわっ!?! ちょっ、どこに顔押し付けてんのよ! も、もっと下、お腹に!」

「じ…自分で引つ張ったんじゃないか! それにさっきは何も言わなかっただろ!?!」

顔を押しシヤナに対し、更に地雷を踏む悠二。

「さっき!?! さっきもこんな事してたって言っの!?!」

「痛い、痛い! そんなの覚えてないって!!! それどころじゃなかったし!」

「いっ…、言い訳しないッ!?!」

「懲罰は後だ、シヤナ!」

アラストールの仲裁で、シヤナはむっとしながらも、黙って太刀を握る。

『ふっ……くくっ』

「やれやれ…君達の歳で、あまり不純な交友をするのは止めなさい」
キバとラミーが肩を震わせて笑いを堪え、イクサが呆れ気味に真面目な意見を言う。

『そ、そんなことしてない(ません)！』

シヤナと悠二が抗議して、一先ず場は締まった。

「……覚えてなさいよ」

「忘れて欲しいんじゃないっわっ!？」

悠二が言い終わるか言い終わらない内に、シヤナは急発進した。

「大丈夫なのか？ あれで」

「やる時にはやるタイプの奴らですんで」

イクサに軽く答え、キバはキャツスルドランに飛び乗る。

ギャオオオオ！

キャツスルドランが一鳴きし、パワードイクサーのアーム部分を噛む。

そのまま、天守閣たるマスターハウスの接合部、ドランマウントにジョイントする。

「じゃ、行きますよ！」

「ああー！！」

キャツスルドランが羽を羽ばたかせ、サバトに飛翔していった。

「来た！」

こちらに気が付いた群青の狼とサバトが、炎の豪雨と、魔皇力の光線が飛び出してくる。

「出来る限り援護するが、期待はするな。予定通り、お前らは狼。俺達はサバトだ」

「わかってる！」

それを最後に、シャナ、キャッスルドランは豪雨と光線の空域に飛び込んでいく。

ギャオオオオオ！

キャッスルドランのサイドに備え付けられたマジックミサイルが、迎え撃つ。

だが、直ぐに弾幕を通り抜けた数撃が現れる。

「任せなさい！」

イクサがコックピットのレバーを操作し、連動してパワードイクサーのアームが、後ろに稼働。

尾にあたる部分に積まれていた青い爆弾、イクサポッドを挟み、アームの反動を利用して投擲する。

爆炎と共に、残りの炎弾と光線は相殺された。

「行け！」

「うん！」

キバ達の作り出した機を逃さず、シャナは紅蓮の軌跡を描いて群青の狼へ向かっていく。

それを見届けて、キバ達はサバトへ方向転換した。

ガアアアア！

サバトはシャナと悠二を標的から外し、キャツスルドランへと光弾を発射していく。

片や狼は、シャナと悠二にホーミング式の炎弾を繰り出す。

援護をしたいところだが、今はサバトが先だ。

「狼のが無くなった分、弾幕が薄くなってるぜ！」

キバの指示に従い、マジックミサイルを発射していくドラン。

イクサもイクサポッドを次々と投擲し、サバトの身体は爆炎へと包まれていく。

二体分の火力には敵わず、相殺仕切れなかった攻撃はサバトにヒットし、ステンドグラスが覆う身体にはヒビが入っていく。

グ、ウガアッ！

巨体をよろめかせ、サバトが特攻をかけてきた。

大きな腕が、キャツスルドランに向かって打ち出される。

「フン、接近戦ならどうにかなると思ったか！」

いち早くその攻撃を見切っていたイクサは、パワードイクサーのアームを左右に動かし、パンチの軌道を反らす。

力のベクトルがいなされ、サバトはバランスを崩す。

「接近戦の手本を見せてやれ！　キャツスルドラン！！」

キバットの煽りに、キャツスルドランはカウンター気味の体当たりを仕掛ける。

グゴッ！！

ドランの突進に、サバトの悲鳴が上がる。

「まだまだ行くぞ！」

イクサが更に追い撃ちをかける。

パワードイクサーのアームが、至近距離からサバトを左右に殴打した。

ガン！ と小気味のいい音が連なり、とうとうサバトは下へと落下していく。

「名護さん、決めますよ！」

「わかっている！ これで終わりだ！」

「フィニッシュ行くぜえ〜！」

キバはキバットにウエイクアップフェッスルを、片やイクサはアームの先端、パワードイクサーの頭部に飛び乗る。

『WAKE・UP!』

夜の帳が、群青の封絶を呑み込む。

それは当然、狼の懐に飛び込む機を伺うシャナと悠二の眼にも入る。

「向こうも決めるみたいだ」

「こっちも終わらせる!」

高揚をみなぎらせ、シャナはまた狼の腕が迫るのに合わせ、叫んだ。

「悠二!」

「っ!」

火除けの指輪、『アズール』の結界が展開され、追撃となる狼の前足がかき消された。

勢いを保ったまま、二人は巨大な狼の内部へと飛び込む。

“グリモア”を抱き、眠るように動かないマジヨリーを見つけ、シヤナは大太刀を構えた。

「ハア~~~~ツ!!!」

キバはヘルズゲートを解放して飛び上がり、落ちつつあるサバトに向かつて右足をつき出す。

ギヤオオオ!!!

キャッスルドランの口から射出された光球『ドランプッド』がキバを包み、キバの必殺技『ダークネスムーンブレイク』を更に強化する。

「はっ!!!」

イクサもまた、後方に大きく引かれたアームに乗り込み、押し出される加速を利用し、サバトに向かつてのキックを繰り返す。

『ハアアアーツ!』

「だぁーっ!」

Wライダーキックが、サバトの巨体を貫き、大太刀『贄殿遮那』の一撃が『弔詞の詠み手』に叩き込まれた。

サバトが砕け散り、残骸であるステンドグラスがパラパラと散る。

更には、雄叫びを最後に霞んでいく狼。

それを構成していた群青の炎の灯りが反射し、ステンドグラスを輝かせている。

まるで、星の雨だ。

「おお……」

屋上にて戦いの終止を傍観していたラミーは、芸術とも言える光景に感嘆の声を上げた。

キャツスルドランが近付き、ビルに着地する。

そこからキバとイクサが。

ややふらふらした足取りのシャナが、悠二と気絶したマージョリーを抱えて降りてきた。

「紅蓮の翼が出せなくなるまで力使つなよ。俺が拾わなかったら、そのまま下にまっ逆さまだったぞ」

「体力の配分は、戦士にとって重要だ。精進しなさい。『炎髪灼眼の討ち手』」

「うるさい、わね……。仕方ないでしょ。力加減が、まだ、掴めないんだから」

「目、目が回りそうだったあ……」

まだまだ元気なキバとイクサの煽りに、シャナと悠二が息を整えながら答える。

「……っふふ」

ラミーは何処か朗らかな様子に、固い表情を綻ばせ、懐へ手を伸ばす。

出てきたのは、眼球程の大きさの毛糸玉。

糸の端が緩やかにほどけていき、やがて深い緑色の火の粉が沸き上がる。

「おいラミー、それって……」

「構わんさ。恩義には行動をもって返さなければならぬからな」

やはり、あれは今まで集めた存在の力か。

キバはしばらく考えて、

「 ドラン」

屋上に座り込むキャツスルドランに呼び掛ける。

シュン。

キバが何を言いたいのかわかったらしく、キャツスルドランはやや不服そうに頭を垂れる。

「んな小動物みたいな目をするな。今日は5個も食べたんだから、少しくらいいいだろ」

キャツスルドランは尚も不満がありそうだったが、渋々頷いて、口から3個のライフエナジーを吐き出し、ラミーが出した分に加える。

「焼け石に水かも知れないが、無いよりはマシだろ。使ってくれ」

「 何から何まで、君には借りを作りっ放しだな」

「気にすんな。」

若者の人生相談に対する礼だとも思っといてくれりゃあいい」

親しみを込めたキバの態度に感謝し、ラミーはその力を自分の物に溶かしていく。

それらは封絶内に降り注ぎ、戦いの傷痕を修復した。

「……生きてんのね」

「お互いにな」

ややあって、マージョリーが目覚めた。

力を限界まで出しきったその姿は頼り無く、饒舌なマルコシアスでさえ、言葉にいまいち覇気が無かった。

マージョリーは、自分に勝った少女を見る。

「……よく殺さなかったもんね。あれだけ酷い目に遭わされて」

「お前達なら、そうしたかもね。でも、私たちは違う」

「それは、フレイムヘイズの……」

「そう、フレイムヘイズの使命」

「……」

その言葉に反抗さえ無く、マージョリーはキバに視線を移した。

「俺は酷い目に遭わされちゃいなーからな。」

仮に遭わされたとしても、それくらいで相手をどっこいしょじよつとは思わないぞ。

しばらくラミィを追わなければ、お前の邪魔をすれば、それで俺の役目は終わりだよ」

「……何よそれ」

可笑しな連中だ。

可笑しくて……嫌な奴等だ。

『炎髪灼眼の討ち手』と『ファンガイアの王』。

自分を否定するくせに、何か羨ましく思ってしまう。

これが、世に恐れられた存在なのか。

「第一、もうその面白ブツクに釘刺されちまってるんでな。『俺の酒盃に手を出したら、顕現しててめえらを噛み殺してやる』だとさ。」

あはは、面白いパートナーだな」

「うるせえ、今も変わらねえぞ。世界のバランスなんぞ知ったことか。周りの“存在の力”を全部飲み込んで、てめえらを殺して殺して殺して殺し尽くしてやる」

グリモアから炎が弱々しく噴き出す。

ふとキバは、この相棒の声にマジヨリーが泣きかけているように思えたが、それに関してはコメントを控える。

代わりにラミーが、杖の先に群青の炎を灯し、口を開いた。

「済まんが、見た」

「だが、“銀”は追うな」

「!?!」

マジヨリーが、その単語に異常な反応を示した。

「あれは、追うだけ無駄なものなのだ。追えど付けず、探せど出でず、ただ現れる、そういうものなのだ」

「っ、そんな、そんな言葉だけで！ 私の全てを諦めきれもんか
!?!」

負傷した身体にも構わず、マジヨリーは自分の存在理由を込めて叫ぶ。

「誰にも駄目なんて言わせない!! この復讐は私のもの、この憎しみは私のものよ!!」

「……………“銀”、か」

キングの日記によれば、フレイムヘイズが生まれる理由には、復讐が多いらしい。

察するに、その銀とやらが、マジョリーの“人間としての”自分を破壊した存在なのだろう。

「では、言い方を変えよう。あれは、来るべき時節が来れば必ず会える、そういうものだ」

「……………なんですって……………?」

「私はそのことを伝えたかったただけだ。それをどう受け取り、行動するかはおまえの勝手だ」

用向きはそれだけ、と言わんばかりにマジョリーから視線を外す。

「世話になったな、ファンガイアの王。白き騎士。『炎髪灼眼』…
…いや、シヤナ、か」

「別に。こんくらいのトラブル、いつものことだ」

「私は彼に付き添ったに過ぎないからな。気にすることはない」

「使命に従ったまでのことよ」

「なるほど、さすがは“天壤の劫火”の契約者。よいフレイム
ヘイズだ。

ファンガイアも、君たちのような者がいれば、昔とは違う未来を歩
めるだろうな」

ラミーは笑い、最後に悠二を見た。

悠二は立ち上がり、何を言っべきか迷って、結局出てきたのは素直
な謝罪だった。

「悪かったね。せつかく集めた“存在の力”を修復に使わせて」

「なに、望みへ至る時を得た礼……そう思えば安いものだ」

そんなわけがない。

と、キバのみならず、悠二も思った。

キャットスルドランのエネルギーがあつたとはいえ、あれだけ広範囲の破壊を修復したのだ。

ロストした分は、1年や2年の旅路で集めたレベルではないはずだ。

誤魔化すようにラミーは苦笑のようなものを浮かべ、代わりにこう言った。

「最後に、利害抜きで助言を一つ、サービスしてやろう」

「？」

なんとなく、キバはラミーの助言とやらが、悠二には不釣り合いなものだと想像し、そしてそれは予想通りだった。

「これからは、不安になったら、黙って抱き寄せてキスの一つでもしろ。それで、何もかもが、すぐに分かる」

「っな！　　ななな　　！？」

「きす？」

「……若者に何を吹き込んでるんだよ、ラミー」

「ははは」

ラミーは軽く笑って、赤面する悠一、不思議そうに首を傾げるシャナ、呆れたように頭に手を当てるキバとイクサに背を向けた。

「では、さらばだ“天壤の劫火”。我が古き友よ。因果の交叉路で、また会おう」

最後に向けられた別れの言葉は、一人の紅世の王へのものだった。

アラストールも、静かな様子で別れに応じる。

「……いつか望みの花吹く日があるように、“螺旋の風琴”」

ほんの一瞬だけ、老紳士の姿が、儂い風貌の少女に変わった。

少女は悠然とした笑みを浮かべ、夕暮れの赤に溶けていった。

「螺旋の風琴？」

悠二の問いに、シャナ、キバットが、柄にもなく驚愕した風と言う。

「……封絶を始めとする、数多くの自在法を編み出した“紅世”最高の自在師よ」

「ファンガイアの使う魔術の発展にも、多大な貢献をしたヤツだぜ」

「俺も聞いたことがある。
その正体は謎つてのが通説だったが……なるほど、“紅世の徒”だったわけか」

「そんなに凄い自在師が“屍拾い”なんて名前を名乗って、何百年も他の“徒”の作ったトーチを拾い続けて……たった一つの品物を、元に戻すためだけに……？」

「坂井悠二。人間もファンガイアもフレイムヘイズも“徒”も、叶えたい望みつてのは、他人から見れば意外とちっぽけなものなんだよ」

「何を大切に思うかは、各々で違う。貴様らと同じだ」

悠二をたしなめ、キバは軽く伸びをして、気楽な口調で言う。

「さて、と。用は片付けたし、帰りましょうか。名護さん」

「そうだな。いい頃合いだ」

キバに同意して、名護はイクサの変身を解除する。

「じゃあ、俺達はこれで」

「うむ、また世話になってしまったな。キバ」

「困った時はお互い様だろ。」

また何かあったら助けてやろうか？ 『炎髪灼眼の討ち手』」

「私が苦戦するようなことになったら、ね」

キバの皮肉にも、シャナは余裕を持った笑みで答える。

これも成長か。

悠二はそんな調子のシャナを微笑ましく思いながら、こちらを見る名護に向き合う。

「元気が出たようで何よりだ。あの時は、随分と沈んでいたようだったからな、坂井悠二君」

「はい、ありがとうございます。名護さん。」

あの、また会えますよね？」

「ああ、何かあれば、いつでも『マル・ダムール』に来なさい。及ばずながら、力になるう」

夕暮れと夜の狭間。

非日常は一先ず、日常へ至る。

「ふわあゝゝ、眠い」

ゴールデンウィークを挟み、御崎高校。

間の抜けた欠伸を噛み殺しつつ、奏夜は教室に向かう。

(少しダルいけど……ま、フリアグネの日程じゃないか)

楽勝ムード……と言うとマジジョリーに悪いが、ファンガイアのキング(代行)がそう何度も追い詰められてはしまらない。

だが、特に変わらなかった。

追い詰められようが追い詰められまいが、さして日常は変わらない。

シヤナは幸せ顔でメロンパンを食べていた。

悠二は疲れを感じさせない顔で挨拶をしてきた。

吉田は顔を赤らめながら、坂井に弁当を渡していた。

佐藤と田中は、休んだツケもあつてか、やや不服そうな池に勉強を教わっていた。

緒方はばつの悪そうにする二人を見て笑っていた。

今頃だと、名護と恵は由利を幼稚園へ迎えに行っている頃だ。

何のことはない。

何も変わらず、これは日常で、紅奏夜の人生だった。

「 戦うことも、俺の人生か」

ファンガイアのことが一区切りについても、次は“紅世”。

けど、それもいい。

俺はキバなのだから。

キバで　　紅奏夜だ。

もうとっくに受け入れたこと。

戦うことに逃げていた、もうあの頃とは違う。

だからこそ、平井と坂井を放って置けなかったのかも知れない。

理由は違えど、戦いから逃げた二人を。

全く、どうしてこうも自分と重なる面倒を抱えるのだろうか。

「見てる俺の身にもなれってんだ」

自分を見ているようで、落ち着けやしない。

落ち着かないから、もう少し面倒を見てやるとしよう。

そんな風に理由付けつつ、一年二組の扉を開ける。

「おーし、授業始め」

スコーン！

『あ』

教室中の視線がドアに注がれた。

奏夜の顔面に激突したのは、菓子箱の箱。

投げたのはシャナ。

放物線上に、吉田と悠二がいるところを見ると、吉田と話す悠二が
気に入らず、八つ当たり気味に箱を投げたのだろう。

しかしすんでのところまで悠二はそれをかわし、結果、延長線上にい
た奏夜にヒット。

……教室を沈黙が支配する。

シヤナ以外はみんな青ざめた顔をし、扉の前で微動だにしない奏夜
の審判を待っていた。

「ふ、ふ、ふふ、ふふふ」

引きつった顔のまま、奏夜はポケットに手を突っ込む。

「平井、坂井」

「は……、はい」

「何」

そして取り出したのは、もはやネット通販でしか売っていないような、連射式の輪ゴム鉄砲。

「お前らの罪を数えやがれええー！！」

輪ゴムを撃ちまくる奏夜。

反射的に奏夜を迎え撃つシヤナ。

悲鳴を上げて逃げ惑う悠二。

もはやどうしたらいいのかわからず、呆然と成り行きを見守る吉田、佐藤、田中、池、緒方らクラスメート達。

それは無茶苦茶で、しかし楽しさもある、ただそこに在り続けるだ

けの、日常だった。

次回、仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD！

「なーんか、やることないのよね」

「お前は贅沢だよ」

「キスって、どんな意味があるの？」

「それってはっきりと、そうだ、って分かるようなもんじゃないだろ？」

「佐藤、田中。俺とゲームをしようか」

【第十話・レッスンマイウェイ／導きの遊戯】

WAKE・UP！

紅蓮の鎖を解き放て！

第九話・不協和音／紅蓮の翼とデュアルドラゴン・Bパート（後書き）

マージョリー編終了！

どうにか忙しくなる前に、シャナ第二巻の話を終えられて良かった。

・巨大バトル。『W&ディケイド』でも凄かったですね。特に「とディケイドのバトルが。」

・パワードイクサーって本編使用回数二回くらいでしたか。劇場版とかでも出せば良かったのになあ…。

更新が遅れてしまっていてごめんなさい。

3月まではこんなペースになるとおもいますが、長い目で見ていただけると嬉しいです。

それでは（＾Ｏ＾）

外伝・ミラージュ／異界の龍騎士と舞踏姫・中

「あ、ここだよ」

キットに連れられるまま辿り着いたのは、一軒の本屋。

グレース堂書店、という立て看板が見えた。

「書店でありますか」

「僕の仲間の店だよ」

キットに引き連れられ、ヴィルヘルミナは中に入っていく（リュックサックは店前に置いた。かなりの重量なため、盗まれる心配は皆無だ）

外装通り小綺麗な店内で、木造の床が歴史を感じさせる。

「やあマヤ」

キットはカウンターでパソコンのキーを叩く女性に声をかけた。

「あら、キット。いらっしやい。

？ そっちの人は？」

マヤと呼ばれた女性は、キットの後ろにいたヴィルヘルミナを見て、怪訝そうに首を傾げた。

「あー、ヴィルヘルミナ・カルメルさんっていうんだって」

「……あ。もしかして、『仮面ライダー』絡み？」

「半分正解かな。

話しただろ。例のレムオルとか言うヤツ。

あいつのことを知ってるみたいなんだ」

「ああ、なるほどね。レンなら奥にいますと思うわよ」

「わかった。じゃあ奥の部屋借りるね」

キットの頼みに頷いて、マヤはカウンターから立ち上がり、ヴィルヘルミナに手を差し出す。

「マヤ・ヤングよ。初めましてカルメルさん」

「こちらこそ」

手を握り返して挨拶をし、ヴィルヘルミナはキットに連れられて、書店の奥へと入っていく。

たくさんの本や資料が置かれている部屋で、書店らしいレイアウトだ。

「レン」

キットがパソコンの前に座ってキーを叩く男に話しかける。

キットよりもやや年上の青年で、黒いジャケットとジーンズを身に纏い、目にはサングラス。

大柄でがっしりとした体格が、屈強な印象を与えていた。

「キット、帰ってたのか。どうだった？」

「何にも。ただの雑魚モンスター達だったよ。ライダーもゼイビア

ツクスも出てこなかった」

「そうか。だが、被害者が出なかったならそれで十分だろう。よくやった。で」

レンと呼ばれた男はキーを叩くのを止め、キットの後ろ、立ち尽くすヴィルヘルミナを見て、溜め息をつく。

「キット、また仮面ライダーであることを明かしたな？」

「うつ……、し、仕方ないだろ。非常事態にトラブルは付き物だ。それに、今回は結果オーライってやつだよ」

「？ どういう意味だ」

「ほら、この前会ったレムオルとかいうヤツ。この人が何か知ってるらしいんだよ」

「何？」

興味を示したレンはパソコンの前から立ち上がり、ヴィルヘルミナと向き合う。

「ヴィヘルミナ・カルメルであります」

「俺はレン。」

最初に聞いておくが、お前仮面ライダーではないんだな？」

キットにもされた質問に、ヴィルヘルミナは首肯する。嘘は言っていないと判断したのか、レンは「そうか」とだけ呟く。

「キット、『仮面ライダー』については、説明していないな」

「話すなって言ったのはレンだろ。だからレンの許可を貰いに、ここまで着いてきてもらったんだよ」

「成る程、お前にしては正しい判断だ」

「どういう意味だよ！」と怒鳴るキットを無視して、レンは二人の脇を通り抜ける。

「ここじゃ話すのも気詰まりだろう。取り敢えず移動して、そこでお互いに情報交換だ。アンタもそれでいいな？」

「構わないのであります」

場所は移って、近くのファミリーレストラン。

それぞれの席が仕切られ、ある程度のプライバシーが確保される仕様となっているため、内緒話にはうってつけだ。

「つまり、アンタは“紅世”という異世界からやって来た“紅世の徒”を狩るフレームヘイズ、というわけか」

「その、ヘッドドレスが、カルメルさんの契約してる“王”なんだね」

「これはあくまでも意思を表す媒体ではありますが、見た目だけという意味ならば、確かにこれは、我が身の内に眠る“紅世の王” ティアマトーであります」

「初見」

淡々とした挨拶をティアマトーが述べ、レンは口元に手を当て、考

える仕草をする。

「“紅世”か……。にわかには信じがたいが、ベントラも異世界には違いないからな」

同じような平行世界があってもおかしくはないか。思考を巡らすレオンに、ヴィルヘルミナが問う。

「ではそろそろ、あなた方の素性についてお聞きしたいのでありますが」

「……レン、カルメルさんは、ゼイビアクスの手先じゃないよ。あいつなら、騙すのにこんな回りくどいやり方はしない」

「そうだな。確かに、信用は出来そうだ」

キットに促され、レンはヴィルヘルミナに向き直る。

「いいだろう、何から聞きたい？」

「まずは彼、キットが変身した騎士 “仮面ライダー” とやらについてであります」

「仮面ライダーは、ベントラの騎士だ」

「ベントラ？」

「鏡の向こうの世界さ。この世界とは鏡合わせに存在する、言わば
パラレルワールドだ」

そう言えば、あの化け物や龍も、鏡を基点に出現していたのを思い
出す。

「けど、その世界は今、ゼビアクスって悪いヤツに支配されて
るんだ。

ゼビアクスは仮面ライダーを全滅させて、奪ったカードデッキ
を使い、仮面ライダー軍団を送り込んでるのさ」

キットが自分の持つドラゴンナイトのカードデッキをテーブルに置
く。

「ふむ。“宝具”と同じく、並々ならぬ力を放っているのでありま
す」

「異様」

「俺はベンタラの仮面ライダーとして、唯一生き残った。そして、ヤツが次のターゲットに選んだ地球にやってきたのさ」

「僕は成り行きで仮面ライダーになったんだけど、今はレンと一緒に、ゼイビアックスと戦ってるんだよ」

「このカードデッキ、というより、ゼイビアックスとやらが送り込んで来た仮面ライダーは、全部で何人いるのでありますか？」

ヴィルヘルミナの問いに対し、レンはポケットから新たにカードデッキを取り出し、テーブルに並べる。

ドラゴンナイトのデッキに加え、レンの持つウィングナイトのデッキ。

更にインサイザー、キャモのデッキだ。

「俺達が回収出来たのはこれだけだが、俺とキットを含め、仮面ライダーは全部で13人だ」

「13……」

これだけの力を持つカードデッキが、それだけ存在している。

彼らの持つ事情の深刻さは、フレイムヘイズであるヴィルヘルミナとティアマトーにとっても、戦慄せざるを得なかった。

「僕らとしても、レムオルってやつのは早めに片付けたいんだよ。“紅世”の事情もわかるけど、ベントラに関しては僕らの領分だからね」

「何か情報を持っているなら、俺達も助力は惜しまない。だからアインタも、俺達を信用してくれないか」

「……了解であります」

「容認」

キットとレンの真摯な対応に、二人は頷き、自分の持つレムオルの情報を伝える。

そして『フレイムヘイズに見つからないことを得意とする』という項目を聞いたキットが、何かに気付いたらしく、ヴィルヘルミナに

ストップをかける。

「なあ、もしかして、レムオルが見つからないのって、ベントラに逃げ込んでるからじゃないのかな」

「えっ？」

「俺達がレムオルと出逢ったのは、ベントラの中なんだ。人間のライフエナジー……アンタらで言う存在の力を奪ったモンスターを追っていったんだが、レムオルがそのモンスターから、更にライフエナジーを吸い取っていたんだ」

「恐らくは、そうやって存在の力を集めていたのでありましょう。……成る程、ヤツの逃げる手段がそもそも“自在法”でないのなら、それがわからないのも当たり前でありますな」

「認識相違」

探査の自在法が働かないのも頷ける。

さすがに鏡の中までは適応範囲外だ。

「しかし、ベントラには誰でも入れるものなのでありますか？」

「いや、ベントラ側のモンスター、または仮面ライダーに引き込まれない限り、如何なる存在もベントラには入れない」

「ならば」

「ベントラ側のモンスターか、“仮面ライダー”以外ならな」

レンはわざとらしく、“仮面ライダー”の単語を強調する。

「……レン、まさかあのレムオル、仮面ライダーだっていうのか？」

ヴィルヘルミナは目を見開き、ティアマトも僅かに、ヘッドドレスを揺らす。

「ああ、まだ仮説だな」

「仮面ライダー……というより、このカードデッキは、我々“徒”でも使えるのでありますか？」

「……使う奴によるな」

ヴィルヘルミナの問いに、レンは曖昧に答える。

言い淀むレンの代わりに、キットが説明する。

「カードデッキは特定のDNAで反応するんだけどね。
ベントラは、この世界とは鏡合わせの存在。パラレルワールドなんだ。だから同じ人間が、全く違う生き方をしていることもあるんだよ」

「つまり、同じ平行世界である“紅世”にも、仮面ライダーに変身出来る資格者が存在するということでもありますな」

「そういうことだ。　　ますます、俺達は協力し合わねばならなくなつた。そうは思わないか？」

「……確かに、私達だけではどうにかかなりそうにない話でありますな」

「妥当意見」

ヴィルヘルミナはこくり、と頷いて、キットとレン、それぞれと握手を交わす。

「尽力させて戴くのであります、キット・テイラー、レン」

「協力要請」

「ああ、よろしく！ カラメルさん、ティアマトーさん！」

「俺達も協力する。一緒にレムオルを倒そう」

互いの利益が理由だと言われれば否定出来なかった。だが、二組はそれに固執はしていなかった。

お互いに、同じ世界を守る存在として 鏡の騎士と戦技無双の舞踏姫は、固く握手を交わした。

「とは言ったものの……」

数日後。

外灯のポールに凭れて、キットは溜め息をつく。

「結局は向こうのアクション待ちなんだよね……」

「無駄口」

早くもモチベーションが下がりつつあるキットを、ティアマトータしなめる。

昼のストリートを歩き合う人々が、傍目からは独り言を言っているように見えるキットと、メイド服という奇抜な服装のヴィルヘルミナを奇異の眼差しで見ると、時間はただ無意味に流れていく。

レンと二手に別れ、レムオルが現れるまで、もしくはベンタラの扉が繋がるまで、張り込みをする。

効果的だが、地味であるがゆえの退屈さだ。

しかもヴィルヘルミナは自分から雑談に花を咲かすタイプではない（数日の付き合いで、それはなんとなく分かっていった）。

ますますキットの気だるさは募る。

「カルメルさんは、どうしてこんな仕事してるんですか？」

会話のない状況に焦れたのか、キットから言葉のボールを投げる。

ヴィルヘルミナも、会話をすることに気は進まなそうだったが、無視はせず、キットに視線を合わせる。

「だって、嫌になりませんか？」

僕たちと違って、ゼイビアクスみたいな親玉もいないし、フレイムヘイズは死ぬまでずっと戦わなきゃいけないんでしょ？

そこまでして戦う理由が、一体何なんです？」

「何故、そんなことを聞くのでありますか？」

ヴィルヘルミナの問い掛けに、キットは一瞬躊躇うような仕草を見せるが、僅かに本心が勝つたらしく、

「……僕は、ほとんど成り行きで仮面ライダーになったんです。

カードデッキを偶然拾って、レンに会って、ドラグレッダーと契約して。そんな調子だから、まだ迷ってるんです。

戦うことを」

キットは今のところ、仮面ライダーを倒したことは無いのだという。

……同じ人間である仮面ライダーを倒すのに、どうしても躊躇いを覚えてしまうから。

それは、同胞殺しを生業とするフレイムヘイズに通じるものがあった。

だからヴィルヘルミナは、

「……わかるであります」

と答えた。

「レンも、本当はライダーをベントなんかしたくないんです。なのにあいつは、自分を押し殺して戦ってる。」

だからカルメルさんは、同じ仲間とどうして戦うことができるのか、気になったんです」

「彼の、レンの足手まといになりたくないから、でありますか」

キットは黙って頷いた。

(……辛いのでありましょうな)

知った風な意見だと解りながらも、ヴィルヘルミナは思う。

キットは、同じ人間と戦うのが、正しいものなのかどうか分からないから、悩んでいる。

悩んで尚、戦わなければ生き残れないと、世界を守れないと、自分を奮い立たせている。

フレイムヘイズなら、覚悟が無いということは、汚点にしかならない。

しかし、彼は“人間”だ。

人間は元来、簡単に人間を殺そうとは思えない。

自分と同じ存在を消すということは、どうすることも出来ない苦痛なのだ。

『だって、私はフレイムヘイズとして生きたいんだもの』

(…… “あの子”のような存在など、そうそうはいないのであります)

ふと過った、自分達の育て上げたフレイムヘイズの少女の姿を思い出す。

あの少女は、あまりに早熟だった。

過程も何もかもを抜かし、足りないものを全て覚悟で補った。

不足を補って 余りある絶対の覚悟。

それを持てる人間は、ほぼ皆無だ。

だからヴィルヘルミナには、キットの葛藤が至極当たり前だと思っ
た。

葛藤し、迷うのが人間という生き物なのだから。

「あくまでも、私の個人的な見識ではありますが」

「参考意見」

教育係の延長のつもりか、ヴィルヘルミナは、この青年の問いに、驚くほど素直に答えていた。

「私が戦うのは、もちろんそれが私の使命だからであります。

ですが、それ以前に、私がそうあるように選んだからであります」

「そうあるように、選んだ？」

頷き、ヴィルヘルミナは続ける。

「戦うと決めたのも、全てが私の選んだ道。何があるうと、その道

を歩き続けなければならない。それは、選んだ者の責任であります」

「……もし艱難辛苦を越えた先のゴールが、想像もつかないような地獄でも？」

「キット、そうではないのであります。

そうなった時大切なのは、“道を間違えたこと”ではなく“自分が選んだ道を最後まで歩き抜いた”ということなのであります」

予想しなかった切り返しに、キットは目を剥く。

「貴方も、気負う必要はないのであります。戦うことを選んだのなら、それはもう取り消せない。

だから、ただ前に進むことで、レンと対等になることも出来る筈であります」

「……っはは、それって、もうジタバタするなってこと？」

悪戯っぽく笑うキット、ヴィルヘルミナは無表情のままだったが、秀囲気は何処か柔らかかになっていた。

吹っ切れた様子で、キットは空を仰ぐ。

「……そうだよな。もう逃げられないなら、悩んでてもしょうがないか」

「無論それだけでなく、鍛練の積み重ねも重要であります」

「要努力」

「ああ、それはわかる。親父が、よく言ってたよ。

『世の中、タフなヤツがいつも生き残る』って」

「良い父上でありますな」

「どーも」

打ち解けた様子で、二人の会話はしばらく続く。

大抵がとりとめの話だが、ヴィルヘルミナからすれば、ここまで饒舌になるのは珍しかった。

しかし、そんな稀有な時間でさえも、非日常は塗り潰す。

キイイイン！！

「来たっ！！」

キットが反応し、

「カルメルさん、“徒”……レムオルの気配はある？」

「近いのであります。恐らくは、ベントラの扉と同じ場所に」

「合致」

「よし、行こう！」

人混みを掻き分け二人、いや三人は、戦場へと急ぐ。

気配を辿り、着いたのは普段ならば様々なスポーツが催される巨大なドーム。

「またレムオルの気配が消えたのであります」

「くそつ、逃げ足の早いヤツめ」

キット達が周囲を見回す間に、バイクに乗ったレンも到着する。

「キット、カルメル。レムオルは見つかったか？」

「いや、何処にもいない。

やっぱりあいつは……」

キットは、ドームの外装に使われているガラスを見た。

歪んだ扉の先は、ベントラ。

「行くぞキット」

「ああー!!」

キットとレンは懐からカードデッキを取り出し、鏡の前で翳した。

赤と青のスパークが腰回りで収束し、銀色のベルト『Vバックル』を展開する。

『KAMEN・RIDER!!』

デッキが装填され、二人を赤と青の球体が包む。

二重のサークルが一周し、キットは銀色の甲冑と鉄仮面に、赤を基調とする身体の戦士、仮面ライダードラゴンナイトに。

レンは蝙蝠を模した仮面に、ドラゴンナイトと同じ銀色の甲冑。しかし身体は黒を基本色とした戦士、仮面ライダーウイングナイトに変身した。

「カルメルさん！」

ヴィルヘルミナが頷き、ドラゴンナイトの伸ばした手を取り、鏡の中へと入っていく。

中はまるで、万華鏡のように鏡が鏡を幾重にも写し出している。

ドラゴンナイトとウイングナイトに連れられ、光の先を目指していくと、

「ここが、ベントラ……」

本当に向こうの世界とそっくりだ。

唯一決定的な違いは、人が誰もいないということか。

「よお」

『！！』

自分たちのものではない声に、三人は身構える。

声が出た方には、ブラックコートに金細工、耳にはヘッドホンとい

う、いかにも若者、という出で立ちの青年が立っていた。

「とーとー、ここまで来ちまったかあ。『万条の仕手』」

「……“霞の迷彩” レムオル」

倒すべきその名をヴィルヘルミナが呟く。

「しかしやるねえ。まさかベントラの存在にまで辿り着くたあな」

「無駄な会話に付き合う気はないのであります。あなたにもう、逃げ場はない」

「早期決着」

「ひゅー、おつかねえ」

レムオルはシニカルな笑みを浮かべながら、次に彼女をここに連れてきた二人を見る。

「ゼイビアックスから聞いてるぜ。アンタらがドラゴンナイトとウ

イングナイトか」

「だったら何だ！！」

「いゝや別に。ドラゴンナイト君には来てもらう。ウイングナイトには消えてもらう。それだけのこった」

「フン。そう簡単に消されてやるほど、俺は弱くもお人好しでもないぞ」

「だろうな。なら力強くで消してやるよ。
……目障りな『万条の仕手』共々な！！」

言って、レムオルは水色のカードデッキを構える。

「“霞の迷彩”、あなたは……！！」

「カードデッキ……。やっぱり仮面ライダーか！」

「！ 気を付ける二人とも！ あのカードデッキのライダーは、格が違うぞ……！！！」

ウイングナイトの戦慄と共に、レムオルはVバツクルにカードを装填した。

「KAMEN・RIDER!」

藍色のサークルがレムオルの身体を一周し、その姿を変容させる。

水色の身体に、生物的なデザインの鎧。

覆う仮面は、三本のヒレの装飾が成された鯨のような作りだ。

「レン、あいつは?」

「仮面ライダーアビスだ。最も新しく作られ、故に最も技術が洗練されているライダーだ。用心しろよ、二人とも」

「わかっているのであります」

「戦力理解」

「さあ、一丁派手にいくぜえ!？」

レムオルの狂気に満ちた声を皮切りに、戦いの火蓋は切って落とされた。

外伝・ミラージュ／異界の龍騎士と舞踏姫・中（後書き）

外伝中編、けど今回なんかグダグダ……。

以下反省

・アビスはドラゴンナイトには出てませんが、この小説ではゲスト参戦扱いです。

余談ですが、ゼイビアクスの怪人態のスーツを改造して出来たのがアビスだとか。

・レムオルは『チャライヤツ』をイメージしたらあつという間にキヤラが出来上がりました； 次回はその辺りもクローズアップされる予定です。

・ヴィルヘルミナに色々今回は語って貰いました。けど未だに彼女が書きづらい……。

外伝は次回の下編で終了予定なので、またお楽しみに。

それでは（＾Ｏ＾）

小説版、仮面ライダー祭り！！

辞令。

デンライナー署・刑事課を命ず。

劇場版仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD

『超・クライマックス刑事』

「行くぜ行くぜ行くぜえー！！」

今度は刑事！？

『俺達、参上！！』

イメージとファンガイアが手を組みやがった！！

「ネガタロスとかいうヤツは、パスを使って過去の厄介なヤツを全て呼び寄せるつもりだ」

「モモの字、出番やでえ!!」

「人間共は皆、オレ様の前にひれ伏すことになる」

「来な、俺様が全員食ってやる」

「今度こそアイツら必ず殺す!!」

電王、キバ、灼眼のシャナ!!

三世界の夢の共演を、見逃すんじゃないやねえぜ!?

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め!」

「図が高い小童共だ」

「使命は変わらないわ。例えそれが未来でも」

「燃やしちゃうけどいいよね? 答えは聞いてない」

「僕にやれることがそれしかないなら、存分に使ってくれ！」

「僕に、少しだけ時間くれないかな？　ね、お姫様」

キバって行くぜえ！！

ここからが、俺達のクライマックスだ！

劇場版仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD

『超・クライマックス刑事』

近日公開！

デンライナー署、出勤だ！

第十話・レッスンマイウェイノ導きの遊戯・Aパート（前書き）

「ボールの語源は1205年、ラヤモンが著した英国史『ブルート』に初出すると言われている。今日ボールにおけるポピュラーな材質は天然ゴムや合成ゴムであるが、昔は中身に木屑や羽毛を積み、弾ませるボールもあったんだ。

更に、バイキングがイギリスの村を襲った際、浜辺で住民の生首や頭蓋骨を使ってサッカーをしたという言い伝えまであるらしい。

うゝ、首がむず痒くなってきたぜ……あつ、俺様最初から首無いじやん！」

キバットバット三世

第十話・レッスンマイウェイノ導きの遊戯・Aパート

御崎市内某公園。

早朝6時。

公園で激しく運動する若者が二人。

「あの、名護さん……、す、少し休みませんか？」

「どうした奏夜君！ この程度で膝を折るようでは、いざという時に体力がもたないぞ！」

だから、ハーフファンガイア以上に高い貴方の体力が異常なんです。

そう言いたいのを必死に押さえ、奏夜は身体を動かす。

朝の公園、何もラジオ体操は珍しくはない。

しかし、二人しかいないラジオ体操というのは、さすがに浮く。しかも流れているのは名護自作の鍛練体操『イクササイズ』。加えて、名護本人はまたしても自作の青いTシャツを着ていた。

ロゴには753（＝名護さん）の文字。

羞恥もさることながら、とにかく疲れるのだ。

(それもこれも、静香とキバットが余計なことを言わなけりゃ……)

原因が自分だとわかっていても、何処か納得がいかない。

事の次第は、最近、名護が帰って来たのを知った静香が、キバットと共に、名護に上訴したことだ。

『名護さん、奏夜の寝坊癖を何とかして下さい!』と。

名護も『奏夜君、戦士に怠慢は敵だ! 私の早朝トレーニングに付き合いなさい!』と超ノリノリで、それを承諾した。

ハッキリ言おう。完全にいい迷惑だ。

しかし、多分名護は善意100%でやっている。

だから滅茶苦茶断りづらい。ますます奏夜に逃げ場はなかった。

（まさかその辺も静香は織り込み済みか？ くっ、静香。恐ろしい娘）

未だに、あの少女には逆らえそうになかった。

「奏夜君、ペースが遅れているぞ！ しっかり着いて来るんだ！」

「……………」

とにかく今は、名護に付き合っただけじゃないようだ。

結局その後、奏夜は丸々30分、名護と共にいい汗をかき羽目になった。

「ああ……、でも身体は活性化されるから、あながち間違いとも言えないんだよなあ」

複雑な気分で、名護から解放された奏夜は、ようやく帰路につく。

(けど、名護さんのあの様子じゃ、しばらく続くだろうな……。あー、ダルいダルい)

死んだ魚のような目で、頑なに自堕落な生活をキープしようとする奏夜の姿は、完全にダメな大人である。

かような人間が教師になれるのだから、世の中わからない。

「まずは何かしらもつともらしい理由を考えねえと……ん？」

ふと、奏夜の足が、とある邸宅の前で止まった。

紅家よりも敷地は広く、十分豪邸の範疇に入る家。

「佐藤の家、だよな……」

職務上、何度か訪れたことのあるクラスメート、佐藤啓作の家に、奏夜は決定的な違和感を嗅ぎ取っていた。

「　　なんで“あいつ”の気配がここからする？」

早朝。

まだ活動を開始した人間は少ない。

「……」

奏夜は一瞬迷い、結局好奇心に負けた。

パチンツ！

指を一鳴らしすると、次の瞬間にはもう、奏夜の姿は消え失せていた。

「で、これは一体どういう状況なんだ？」

奏夜はうんざりしたように額を押さえる。

「ん？ こりゃ珍しい客だな、ヒツヒ」

カウンターの椅子に置かれた本『グリモア』が、意思表示を示す炎を灯す。

「よう、 “ 蹂躩の爪牙 ”。 アンタの酒盃はお取り込み中か」

「ヒツヒヒ、見りゃわかるだろい。それと、あんま仰々しい名前で呼んでくれんなよ、キバの兄ちゃん」

「ん。そいつあ悪かったな、マルコシアス。 しかし、酒臭いなこい」

「勘弁してやってくれや。我が麗しの酒盃は、景気が悪くていらっしやブツ！ー！」

「バカマルコ………いらぬこと、言っんじゃない、わ、よ、うえっぶ」

佐藤家室内バーのカウンターテーブル。

奏夜が見たのは、青ざめた顔で、二日酔いの脅威と戦う『弔詞の詠

み手』マージョリー・ドーと、その相手をする“紅世の王”、“蹂躪の爪牙”マルコシアス。

いやもう、なんというか、マージョリーの様子が形容し難いレベルに達している。

容姿が整っている分余計に。

親が見たら泣く姿だ。

「あー、水とか出すか」

「……カウンターの奥」

答える代わりに、マージョリーは水の場所を提供してきた。

もうそれは答えに近かったので、奏夜はそそくさとカウンターに入り、水の入ったポットを見つけた。

「……アンタ、なんでここにいるわけ？」

「いや、何のへんてつも無い民家でお前の気配を見つけたもんだから。まあ、好奇心だな」

コップに水を入れながら、奏夜は答える。

「人間の法律ってあんま詳しくないんだけどさ……、アンタのそれ立派な家宅侵入ってヤツじゃないの？」

「はっはっは、魔術で入りましたので法律は適応されませんな」

完全犯罪。

コナンくんでも解けはしない。

奏夜の入れたコップを一気に煽り、マジョリーはまた机に突っ伏した。

「まったく、二日酔いがツライなら飲まなきゃいいのに」

「俺様もまったくの同意見だな」

「それ、以外、やることないで、しょう、うっ、うっ、うっ、うっ」

「はあ、ったく、こんなもんの何がいいんだか」

空の酒瓶を拾い上げる奏夜。本気で理解出来ないという顔だった。

「ヒツヒ、何だい兄ちゃん。意外に下戸ってわけか」

「いや、飲めなくはないんだけどな。」

ずっと前に、知り合いの結婚式の二次会で、一度だけ酒飲んだことがあったんだよ」

「ああ、それで二日酔いの気分がトラウマになったってか？」

「いや、それもあるんだけどさ。」

酒を飲んだ後の数分間くらい記憶が飛んで、気が付いた途端に、同席してた全員から『お前は二度と酒を飲むな』って言われたんだ。アレはトラウマだったな……」

「……」

マルコシアスは閉口した。

酒を飲んだ後、何があったのだろうか。

マルコシアスは知るよしもないが、その時奏夜へ『禁酒勧告』を出したメンバー内に、名護、太牙、アームズモンスター三人という歴戦の戦士がいたことから、その凄まじさが伺えた。

「ただまあ……どつちにせよ、教師っていう立場上、酒飲好きはあまり歓迎されないんだよね」

「あん？ お前さん、センサーなんてやってたのか」

「ああ。ついでにこの家に住んでる坊っちゃんも受け持っていたり」

「……ケーサクの、教師？」

マジヨリーが僅かに反応を示した。

「ふーん……世間って狭いわ。」

ケーサクの教師ってことは、エータの教師でもあるわけよね」

「……やっぱりあの二人、アンタを手伝ってたんだな」

「手伝い……っていうか、子分みたいなものよ。

……もしかして、巻き込んだこと怒ってんの？」

「いや全然、選んだのはあいつらだろ」

「ふーん、そう……じぶっ」

マージョリーはまたうめき出した。

その姿からは、この前のような苛烈さも、燃え上がる殺意も感じられなかった。

「なんかお前、本当に調子悪そうだな。酒とか関係無しに」

「……半分は、アンタとあのチビジャリのせいだと思っただけどね」

「……？」

首を傾げる奏夜に、マージョリーは愚痴るような口調で告げる。

「あの戦いの後……、何か思い出せなくなっちゃったのよ」

「何をだ」

「私が、今まで何を理由にブチ殺してきたのかってこと。アンタらに、負けたから」

あの戦いで、シャナ、悠二、アラストール、キバ、イクサと対峙し、彼女は破れた。

持てる力、戦う理由、自信ら全てを打ち砕かれて。

「要するに、なーんか、やる気が出ないのよ。どう動いたらいいか、何のために動いたらいいのか、全然思い付かないのよ」

「“銀”とかいうヤツはどうすんだよ。」

ラミーが言うには、いつか必ず現れるみたいな話だったが

「……いつか勝手に会えんなら、私から動くことなんかないじゃない」

『…………』

奏夜とマルコシアスの二人分の沈黙が、薄暗いバーを支配する。

やがて、奏夜が無言でカウンター席に座り、

「大体わかった」

面倒くさそうに口を開いて、

「お前は贅沢だよ」

そう続けた。

マジョリーが怪訝そうに顔を上げる。

「やることがわかってるなら、それをただやりやいいだけの話だろうが。」

復讐？　大いに結構。お前が選んだんなら、それも一つの目的地だ」

奏夜にしては珍しく、かなり真剣な言い方だったろう。

止まることなく、口はしつかり動き続ける。

「なのに一度負けたくらいで意気消沈すんのかよ。やることがわかってて悩むなんざ、怠慢以外の何物でもないぜ」

「……負かしたアンタがそれを言う？」

「ふん。そんなの言い訳だろ」

奏夜はマージョリーの反抗をピシヤリとはね除ける。

そこには有無を言わさぬ雰囲気があった。

「敗北は勝利よりもよっぽど価値がある。得るものが多いからな。今回のことは、お前にとって無意味じゃないだろ」

「知った風な口を聞くわね……」。

アンタの 最強を謳われる、ファンガイアのキングの人生に、一体幾つの敗北があったってこのよ」

「そりゃあもう。負けっ放しの人生ですよ？」

意地悪めいた質問の答えは、逆にマージョリーを驚かせた。

あっさりと自分を敗北続きの存在と認めた青年は、シニカルな笑みを浮かべる。

「だからこそ、今の俺があるんだよ。

敗北はプラスだ。プラスファクターに一喜一憂して、自分の全てを棒に振ってるようじゃ、お前はまだまだ贅沢の領域を出ないさ」

「……そんなもん？」

「そんなもん」

言いながら、奏夜は空瓶を弄んでいる。

「……復讐を、否定はしないのね」

話の勢いが消えたせいか、投げやりな口調でマージョリーは言った。

「アンタの最初の印象って……頭ごなしに復讐を否定するような、偽善者っぽく見えてたんだけど」

「失敬な。他人の意思決定を無下にするようなことはしないよ。

本当、お前は恵まれてるよ」

復讐ヲ果タスベキ相手ガ 殺意ヲブツケラレル相手ガイルンダカラ。
ラ。

「っ!!」

酔いが一気に消し飛んだ。

頭痛も忘れ、マージョリーは反射的に奏夜の方を見た。

しかし、そこにはもう奏夜の姿はない。

代わりに、ひやりとした刃の如き殺意の残痕が、マージョリーを襲う。

「っはあ、っはあ……。マ、マルコシアス」

「……ああ」

マージョリーの言わんとすることを察し、マルコシアスはただ同意する。

「とんでもねえな、あの兄ちゃん。

俺達と戦った時にゃあ、まるで本気じゃなかったってワケだ」

ほんの一瞬。

吹き出した奏夜が持つ力の片鱗は、マージョリーの価値観をひっくり返すには十分だった。

あれで、まだ本気じゃない。

キバに変身して尚、封印の鎖『カテナ』を施して尚、奏夜はまだ力を押さえ付けている。

「……この力で、この殺意で負け続け？　よくそんなことが言えるわね」

苦笑いを刻み、マージョリーはカウンター席に沈み、再び顔を俯かせる。

奏夜の辿った道を、“紅世”に属す者達はまだ誰も知らない。

奏夜の人生が負け続きであったということが、決して嘘ではないことも、今なお、闇の中だ。

場所と時間は移って、御崎高校。

時刻はあと少しで1時。

御崎高校では昼放課で、昼食を買いつ生徒やら、場所取りやらで、廊下がごった返す時間だ。

そんな中、ここにも廊下を歩く人間が二人。

「『風都騒然！ 蘇る死者と謎の骸骨戦士！』か。平井、お前幽霊とかつて信じる？」

「はむっ、状況や、証拠次第。けど、物事には必ず確固たる理由があるから、はむっ、信じてないと言えば信じてない」

「なるほどね。ごもつともだ。 風都か。翔太郎とフィリップ大丈夫かな」

「？ どうかした？」

「ああいや、何でもないよ」

言って、奏夜は新聞を置く。

隣を歩くシャナは少し首を傾げたが、すぐにまた幸せそうにメロンパンをかじる。

昨今、シャナと話す機会が増えたように思う。

今にして、下の購買で会っただけで、こうして一緒に歩いている。

（最初の頃から考えれば、あり得ないよな）

マージョリーとのいざこざの時、相談にのって以来、名前で呼ばれることから始まって、今では普通に話したりもしている。

（坂井ほどで無いにせよ、気を許してくれてんのかね）

それはそれで、普通に喜ばしいことなのだけれど。

結果的に、坂井や吉田、他の生徒と話す機会も増えているのだから、決してマイナスではない。

今から坂井達に誘われ、一緒に昼食を取る予定もあったりと、フレンドリーさは更に上がっている。

（その原因が、一番協調性の無かった平井だっただから、面白い話だよな）

心の機微に疎かったこのフレームヘイズの少女も、しっかり成長しているということだろう。

うん。善きかな善きかな。

そんなことを思いつつ、階段を上がる奏夜。

そんな彼に、シャナが「あ」と思い付いたように、メロンパンをかじる手を止めた。

「ねえ、奏夜」

「？ 何だよ」

「一つ、訊きたいことがあるの。ずっと調べてみたけど、やっぱりわからなかった」

「へえ、お前にもわからないことがあるなんて、珍しいな。いいぜ、俺が答えられることなら答えてやる」

奏夜の許可を確認して、シャナは簡潔に、しかし奏夜にとって、とんでもない質問をした。

「キスって、どんな意味があるの？」

ばざり。

持っていた新聞紙が滑り落ち、乾いた音を立てる。

() つな!?()

奏夜、そしてシャナの胸に下げられた神器“コキュートス”に蔵さ

れたアラストールが、ほぼ同時に、心中で叫び声を上げる。

(なななななななななな)

もはや言葉が見つからないほどに、二人とも動揺していた。

何だ、こいつは今何を聞きやがった!?

フリーズ状態の奏夜を不思議そうに眺めて、首を傾げる。

「奏夜もわからないの?」

「いや、わからないというか何というか……」

頬を軽く掻きながら、周囲に誰もいないことを確認する。

「何でそんなこと聞くんのだ?」

「少し前、不安になったら私にキスしろ、って悠二に言った奴がいたの。『それで、なにもかもが、すぐに分かる』って」

(ラミーいいい！ てめえが元凶かぁアアアア！！)

確かに言っただけど！

去り際にいらんアドバイスしてたけど！

恐らくは今も何処かでトーチを集めている老紳士に、呪詛の言葉を
呟く奏夜。

そこで奏夜は、自分にも負の波動が向けられていることに気が付く。

出所は“コキュートス”、というかアラストール。

もはや言わずともわかる、この保護者魔神が何を言いたいのか。

『余計なことを吹き込めば、明日の朝日は拝めぬと思え』

決して冗談ではないだろう。

一つでもアラストールの琴線に触れたが最後、顕現してでも、奏夜

を叩き潰すに違いない。

冷や汗を一筋滴らせ、奏夜は「あー、うー」と悩んだ拳げ句、

「平井、そういうのはな。あんまり男に聞くもんじゃないよ」

「？　　そうなの？」

「うん。別に悪いわけじゃないんだけど……。ただこれは、凄く繊細で曖昧な問題だ。俺の答えが必ずしも、お前にとっての答えになるとは限らないんだよ」

「……よくわからない」

「うん、正直な話、俺も上手く説明が出来ないんだ。もし聞くんなら……そうだな。千草さんあたりに聞いてみる」

「千草に？」

「知り合いなんだろう？　　今度聞いてみるよ。俺が答えるよかよっぽどいい」

シヤナは少し納得いかなそうだったが、千草に相談することに対しては頷けるらしく「わかった」と言う。

取り敢えず、危機は脱したか。

。アラストールからも、負の波動は感じられなくなった（と思いたい）

「ほら、早く教室行こうぜ。昼休みが終わっちまう」

「ん」

二人はようやく止まっていた足を再び進ませる。

しかしその途中、またシヤナは口を開いた。

「奏夜は」

「ん？」

「キスしたことあるの？」

「……………」

奏夜はたっぷり十秒間沈黙して、やや低い声で呟く。

「いや、無いよ」

と答えたあと、

「これから先もな」

と続けた。

「……………」

声のトーンの違いを感じ、シヤナは奏夜の顔をのぞきこんだ。

いつもと変わらぬ様子で刻まれている表情。

しかし、その表情は何処か、憂いを帯びていた。

「えー、んじゃあ授業始めんぞー」

ボードを肩に担ぐようにして、奏夜は指示を出す。

一年二組六時間目、科目は体育。

今回、奏夜は体育担当の教師から、臨時の監督者を頼まれ、こうして生徒達の前に立っている。

「本日は体力測定の予定だったが、臨時監督者の俺がやってもグダグダになるだろうから、今日は自由競技とする」

「でも先生、測定するだけなら、誰がやっても変わらないと思いますけど」

池が至極もつともな意見を出す。

「うん、まあぶつちやけ俺が面倒なだけなんだけど」

「だろうと思いました」

さらりと言つてのける奏夜に、池が苦笑いすると共に、クラス全員も似たような表情になる。

「このコートで出来るやつ限定だ。お前から何かアイディア出せ。ちなみに俺のオススメは50分間耐久泥玉投擲戦線だが」

「……あの先生、ちなみにそのゲームのルールは？」

先頭にいた悠二が聞かなくてもいいことを聞く。

「タイムリミットは文字通り50分。参加者は二チームに別れ、コート内に仕掛けられた様々な罠を掻い潜り、泥玉をぶつけ合う。相手チームが一人も動かなくなったら勝ちだ」

「もはやゲームじゃなくてサバイバルですよねそれ!？」

「しかも一瞬間き逃しそうでしたけど“罨”っていう単語が聞こえましたよ!？」

「相手チームが動かなくなったらってどんだけ過酷なんですか！戦時の国民学校じゃあるまいし！」

悠二、そして佐藤と田中までもツッコみに回る。

しかし奏夜は止まらない。

「ちなみに罨のレパトリーとしては、大型地雷に召喚のワナ、大洪水のワナを考えている」

「不思議のダンジョン!？」

「無論、エンカウント率は意図的に上げてある」

「モンスター出現するんですか!？」

「つるはしを使えば、地面の下には黄金の間に続く隠し階段が」

「隠し要素まで……!」

奏夜は話をどんどん脱線させていく。

付き合いの良い悠二、佐藤、田中にも責任が無いわけでもないが。

結局、その後の良識的な話し合いの結果、ドッジボールという結論に落ち着く。

少なくとも、泥玉投擲戦線よりは数倍マシな結論だ。

奏夜は最後まで不服そうだったが（つまりあの提案は本気だった）、最終的にその案を容認した。

で、ゲームスタート。

アバウトな組分けとしては、池のいるAチーム。佐藤&悠二のいるBチーム。田中がいるCチーム。シャナのいるDチーム。吉田のいるEチーム。

「やれやれ、こんな寒空の中子供は元気だねえ」

なんて、年寄りくさい感想をばやきつつ、奏夜は試合状況を見学。

最初はAチームvsBチーム。

試合開始からしばらくして、ふと奏夜は悠二の視線が、コート外に逸れていることに気が付いた。

悠二の視線の先を追うと、

「……………ああ」

納得した。

Dチームの生徒たちが、シャナに親しげに話しかけている風景が、そこにはあった。

（平井がクラスのみなどと打ち解けてるのは嬉しいが、自分以外の奴と話しているのもまた面白くない、か）

若いねえ。

ただ、ドッジボールで余所見は禁物。

「あ、バカ！」

「へ、ブッ!？」

佐藤の警鐘と同時に、ボールが悠二の頭へとクリティカルヒット。

当然の結果として、悠二は衝撃でひっくり返る。

「うわっ！ さ、坂井、大丈夫か？」

ボールを投げた池が心配する中、コートに奏夜が入り、悠二の容体を見る。

「足元がふらついてるし、軽い脳震盪だろうな。取り敢えず座って休んでろ」

「だ、大丈夫です……」

何とか立ち上がるうとするも、そう言ったそばから、また足がふらつき、地面に倒れる悠二。

「そんなナリでどうボールを回避するつもりだ？ さっさと座って休め」

奏夜の呆れ調の指示に、悠二は覇気のない声で返事をし、生徒達の待機場へ。

試合結果。

佐藤が最後まで健闘したものの、押しきられる形で、Aチームに軍配が上がった。

CチームとDチームがコートに入るのをぼんやり見ていると、コートから出た佐藤が奏夜の隣に座った。

「お疲れさん」

「は、はい……」

流石に疲れたのか、
息を切らしながら、佐藤が答える。

「あー、悔しいなあ。勝てない勝負じゃなかったのに」

「けど、お前中々頑張ってたじゃないか。いつもより気合いが入ってたな」

「あ、わかつちやいますか？」

「わかつちやいますねえ」

冗談めかした奏夜の言い方に、佐藤は疲れを忘れて笑う。

一方コートでは、田中とシヤナが火花を散らす。

「ふっふっふ、ソフトでの凡退の借りを、今日この場で返すぜ。泣いてくれるなよ、平井ちゃん。俺が悪者になるからな」

「ふん、どうせ負けは決まってるんだから、無駄に疲れる前に降参

したら？　優しく当てたげるわよ」

いつになく闘志に満ち溢れた試合である。

というか普通、授業の一環でここまでドラマチックにはならない。

「田中も何だか妙に気合い入ってるねえ。

そう言えば、この前休んだ頃からだったっけな。

お前らが変に頑張り出したのって」

びくっ！

佐藤の肩がはね上がった。

「何か素敵な出会いでもしたか？」

（す、鋭い！）

「具体的には、女性？」

（エスパー！？）

以前の電話の時も思ったが、この教師のポテンシャルは計り知れない。

「まあ、お前にせよ田中にせよ、頑張るのはいいことだ。

若い内は特にな。どいつもこいつも簡単に境界線を越えていく」

「……先生だつて若いでしょう。そんな爺くさい」

「俺なんか。これからの世の中を面白くするのは、お前みたいなヤツだよ」

奏夜はけらけらと笑う。

そうこうしてる内に、舞台が整ったようで、クラスが緊張と興奮に包まれた。

「頑張れよ田中あー！」

「いよーっ、待ってました御大将！」

「平井さん、頑張つて！」

「体力バカに負けないでよー！」

エールの嵐に佐藤も加わる。

「田中あ！ “こんなところ”で負けてんなよ！？」

「……………」

佐藤の言葉に、奏夜は違和感、というか確信を覚える。

(マージョリーに感化されたかね、これは)

悠二がシャナに憧れたように、マージョリーの強さに佐藤と田中が魅せられたのならば、あの頑張りの理由にも説明がつく。

(大方、マージョリーとマルコシアスに着いていきたくとか考えてんだらうな)

世間は狭い。

知らないところでまた二人、非日常に巻き込まれていく。

他人が選んだ道に、いちいち干渉する気は無いのだが……。

それにしたって、である。

(どづしてどづ、俺の周りの人間ばかり……)

これじゃ、冗談じゃなく四年前と同じような状況になるかも知れない。

ただ、成長する人間が変わるだけで。

「……面倒くさくなってきやがったな」

「えっ？ 先生、何か言いましたか？」

「あ、いや、何でも」

思考がつい口から出ていたのに気付き、奏夜は慌てて佐藤にそう言う。

尚も首を傾げる佐藤の視線を振り切るように、試合の様子に視線を戻した。

試合はほぼイーブン。

ムード的には、シャナと田中の一騎討ち。

また一人アウトになり、田中サイドにボールが移る。

「　　っ!？」

シャナの目線が驚愕に染まり、コート外に集中する。

奏夜はなんとなく、その目線の先にある光景を予想していたが、半ば仕方なしに、そっちにシャナの見る方向を確認する。

「……あー、やっぱり」

そこには予想通りというかなんというか、吉田が悠二を介抱していた。

少し血が滲んだ坂井の指に、吉田がハンカチを当てている。

(平井、お前は悠二を見て何を学んだんだ?)

敢えてもう一度言おう。

ドッジボールに余所見は禁物。

「っせい!」

田中の放ったボールが、シャナの小さな体躯へと吸い込まれていく。

「っ」

やや遅れてシャナが反応する。

踏ん張りが効かず、シャナが吹っ飛ぶ。

「っ、と！」

尻餅を付きながらも、シャナはしっかりボールをキャッチ。

「……これは、セーフなのよね？」

「かーっ！　なんてしぶとい奴だ、ったく！」

田中、お前は何処の下っぱ戦闘員だ。

平井さん凄ーい！　と女子の喝采が上がる。

「平井ちゃん凄いつすね……。田中だって、運動神経悪いわけじゃないのに」

「田中のポテンシャルが低いんじゃないよ。田中の力が上の中で、平井の力が上の上なのです」

「先生、それは某大手企業社長の台詞です」

律儀にツッコむ佐藤。

ボケ役には欠かせない存在だ。

「ふーっ」

シャナが気合いを入れて、ボールを構える。

洗練された空気に、田中のみならず、全員が気を張り積める。

鋭い瞳と共に、シャナが体重を片足に乗せる。

「っだあ!!」

「来い!!」

田中が受け止める姿勢を取る。

だがそこで、シャナが体勢を崩した。

転んだ？ いや違う。

シャナは足でグラウンドの砂埃を巻き上げた。

アンダースローのようなフォームで、砂塵の壁の中へとボールを叩き込む。

（フエ、イント！？）

アップercットの如きボールが、田中の顎に直撃した。

判定など取るまでもない。

シャナの勝ちだ。

女子を中心に、クラスの皆が拍手喝采を上げる中、啞然とする佐藤

の隣で奏夜がぼつりと、

「砂塵を巻き上げてボールの姿を隠すか……、あんな技あったな。フルスイングな野球漫画で」

メタな発言を呟いていた。

その後の経過としては、田中という要を失ったCチームはDチームに敗退。

「痛つて……」

「惜しかったな、田中」

顎を押さえる田中を、奏夜は肩を叩くことで労う。

「良い試合だった」

「あはは、お恥ずかしいっす、男として」

そんなことはない、と奏夜は思う。

事実大健闘だったし、シヤナが相手なら当然の結果だ。

「授業終わったら保健室には行っておけよ。

後は俺に任せるがいい」

「えっ？」

田中の反応を見るより早く、奏夜はコートに入っていく。

腕時計が指す時刻によると　まだ授業終了までには余裕はある。

「平井」

女子陣の歓声に包まれるシヤナに、奏夜がボールを拾いつつ、声をかける。

「勝負しねえか？　俺と」

きよとんとした表情になるシャナ。

周りの生徒たちも同様だ。

「どうして?」

「いや、まだ時間が余ってるし、俺も少し身体を動かしたくなっただんでな。お前が疲れてるなら、無理強いはしないが」

奏夜の挑戦的な眼に、シャナの瞳にも、戦いの時を彷彿とさせる光が宿った。

「いいわよ」

「よう」

笑い返し、生徒たちがコートから上がり、奏夜とシャナの二人のみとなる。

勝負の波乱を示唆するかの如く、日光を遮る曇天が空を覆っていく。

「教師でも容赦しないわよ、奏夜」

「やってみる。田中の弔い合戦だ」

先生、俺死んでません。

コート外から田中の訂正が入る。

「音楽は凄かったけど、こっちはどうかしらね。勝つ気満々みた
いだけど」

「当然だろ」

奏夜は、人差し指を天に掲げる。

すると厚い曇り空から、一筋の陽光が。

「一番強いのは俺だからな」

何処かで聞いたような台詞と共に、試合スタート。

「基本ルールは同じ。ただし、ボールは必ずキャッチしなければならぬ。取り落としや、外野ボールが出た時点で負けだ」

「わかった」

「先行はくれてやろう」

余裕の雰囲気を漂わせる奏夜に、シヤナは少しむっとくる。

だが、冷静さは失わない。

(あの余裕は、驕りからじゃない)

自分の力に、絶対の自信を持つが故の態度だ。

(なら)

様子見は無用。

奏夜を眼前に、シャナはボールを構え、

「つやあ!!」

無駄なモーションを省いたシャナの投球が、奏夜へと放たれる。

バシッ!

防御の構えすらそこそこに、なんと奏夜はその豪速球を片手で受け止めた。

「!!」

さすがのシャナも、目を見開く。

観戦する生徒たちも同じだ。

大人の身体能力があっても、あの豪速球は、両手こそすれ片手で受け止められるものではない。

「いい投球だ。だが、直線的過ぎるな」

ボールを弄びつつ、奏夜が笑う。

「確かに、普通に受け止めることはほぼ不可能だろう。それなら答えは簡単だ、インパクトの前にその威力を落としてやればいい」

両手をひらひらと見せる奏夜。

片手で受け止めたにも関わらず、両の手が赤くなっている。

それを見て、シャナがハツとした。

「あっ！」

「その通り。まず、投球の側面を右手で押さえる。摩擦力と回転でスピードの落ちたボールを、左手で受け止めりゃあいい。

あはは、種明かしをすると大したことないね」

いや、もはや超人の領域だ。

マークなどでは誤魔化されない。

「やるわね」

「音楽だけの優男だとも思ったか？」

意地悪い表情の奏夜に対し、シャナも好戦的に口角を釣り上げる。

それからしばらく、この世のものとは思えないラリーが続いた。

クラス全員が、そのプロ顔負けの試合に釘付けとなる。

と、そこで一旦は差し込んだ光も影を潜め、暗い雲から生み出された大粒の雨が、グラウンドに降り注ぐ。

「わーっ、雨!？」

「ちよっ、強っ!」

観戦席から悲鳴が上がる。

「ふむ、酷くなってきたな。」

「おい、濡れたヤツや汚れちまったヤツは、クラブハウスのシャワー室を教え。」

「緒方、みんなに場所と使い方教えてやれ。」

「えっ、いいんですか？」

いきなり話をふられた緒方は当惑する。

無論バレー部員として、あの施設の使い方は知っているが。

「ああ。カギは自分で取りに行けよ、俺から許可が出ましたって言えればいい。それで大体通る。」

「はあ……」

その傲岸不遜な言い方はどうかと思うけど。

「さて、平井。雨天途中中断なんぞ、味気ないよなあ?。」

「当然！」

雨に打たれながら、奏夜とシヤナは互いに同意し、試合続行。

「いいぞーやれやれー！」

「せんせーい、シャワーはこの試合終わってからにしまーす！」

抜け出す人間は一人も出なかった。

シヤナvs奏夜の対戦カードは、シヤナvs田中と同じくらいに白熱していたのである。

(さてと、このまま行ってもジリ貧だしな……)

あの手で行くか。

奏夜は軽く助走をつけ、足を大きく前に踏み出す。

バシャツという水音がし、水溜まりから泥水が跳ね上がる。

シャナが使った、ボールを隠したフェイント技だ。

(どうして、二番煎じが意味を為さないのはわかってるはずなのに)

自分が使った手なのだから、タイミングをずらすことも予想は出来ている。

泥水の壁の何処かからボールが飛び出してくるのは間違いないのだから、自分はそれを待てばいい。

だが、シャナの目論見に対し、ボールは一向に投球されてこなかった。

「……………」

跳ね上がった泥水が、重力法則に従って落ち、泥水のボールが剥がされる。

そこに立っていたのは、無論奏夜。

だがその手に、ボールはない。

「何処に……」

「ちて、どろでしょーか」

軽く両手を広げた奏夜。

「……」

シヤナは気付いた。

(しまっ
)

だが、気が付いたとしても僅かに遅い。

ポーン。

“上空に打ち上げられていた”ボールが、シャナの背中に当たり、
気の抜けた音を立てた。

(……泥水の壁は、そこに私の気を剝らして、その隙に上空へ投げ
たボールを悟らせないため)

自分の肩から地面に落ちたボールに目をやりながら、シャナは本当
に悔しそうに拳を握り締める。

ギャラリーの生徒たちは勝負が決したと理解するのに、数秒を要し
た。

決着。

奏夜の勝ちだ。

勝利の余韻に浸るでもなく、奏夜はシャナの側まで雨水に濡れなが
ら歩いていく。

「いやー、強いな平井。ギリギリだった」

嫌みも何も無い、純粋な労いがかけられる。

「最後のも不確定要素が結構あつたし、次は負けるかもしれない」
嫌な気分にはならない。

悔しさはあるが、むしろ清々しい気分の方が大きい。

だがそれでも、シャナの負けず嫌いな部分が、せめてもの強がり
を言う。

「……かもじゃない。絶対勝つ」

「っはは、おっかないおっかない」

シャナは笑いながら、奏夜の手を自分の手で打ち鳴らす。

パシッ、という乾いた音が、雨中の決闘の終結を告げた。

第十話・レツスンマイウェイノ導きの遊戯・Aパート（後書き）

クリスマスにも関わらず、この小説の時系列は春→夏だったり。

・イクササイズと753Tシャツは無駄に印象に残ってます。

特典DVDでアレを初めて聞いた時は爆笑したなあ……。

・ドッジボール対決。奏夜が使った勝ち方には、モデルというか元ネタがあります。またしてもわかる人いるのかってレベルのネタですが……わかる人は拳手をよろしくお願いします（マンガでジャンルはミステリ。アニメ化もされてました）。

・ちなみに、ドッジボールで使われたボールは比較的柔らかい素材なんで、背中に当たるとダメージはあまり無いですよ、念のため。悠二は当たり所が悪かった。

では皆さん、メリークリスマス！

第十話・レックスンマイウェイノ導きの遊戯・Bパート

「いやいや、実にいい青空だと思わないかね、お二人さん」

「……………」

「……………」

悠二と池が溜め息をつく中、奏夜はまるで気にした様子もなく、青空観賞を続ける。

雨天ということ、体育の授業を早めに切り上げたクラスは、クラブハウスのシャワー室を借りていた。

観念的な話から、男子が先に入り、後に女子という順番。

三人は無論、既にシャワーを浴び終えている。

ならばなぜ、まだクラブハウスの前で駄弁っているのかと言えば、端的に言ってみ張り番である。

(……………僕は、このクラブハウスを、カギが外側からしか掛けられないような構造にした人間を恨む)

彼にしては珍しい、負の感情を込めながら、悠二はまた顔を俯かせ

る。
口には出さないが、池も似たような心境らしい。

「へえ、一美って着痩せするタイプなんだ？」

「えー、うそー？」

「あ、あんまり見ないで」

「いいじゃん、吉田ちゃん。触っちゃおーかなー」

……こんな会話が扉越しに聞こえてくれば気も滅入る。
二人はわざとらしく咳払いをした。

「ていうか池はまだクラス委員って理由もあるけど、なんで僕まで……」

「僕のシンユーだからということ。それに、スケベなことをしたらひっぱたく人、泣いちゃう人、両方揃ってるからだってさ」

「平井と吉田はこういう時に、お前の若さゆえの過ちを防ぐリミッターになるわけだ」

「誤解を招く言い方は止めて下さいよ……」

けらけら笑いながら、この状況に全く動じない奏夜に、悠二はある意味の尊敬を覚えた。

「先生はこういう役割は平気なんですな」

場をもたせるためか、池がなんとなく聞いた。

「ま、担当教師としては仕方ない役割だしな」

「大人の余裕ってやつですか？」

「フーかさ、ここでお前らみたいに一喜一憂してるようじゃ、教員
って務まらないと思うけど」

「……成る程、ごもつとも」

さすがにこのくらいの常識はあるらしい。

よくよく考えれば、聞くまでもない質問だった。

「まあ、平井さんだって、ソレはソレで綺麗だと思うけどなー」

三人の（実質二人だが）居心地の悪さなど省みず、女性陣達の会話は続く。

「うんうん、すごい綺麗、お世辞じゃなくってさ」

「……よく分かんない」

「ありやりや、坂井君も罪な男なこと」

「守備範囲の広いモテモテ君よねー」

「だとな」

話し声を拾い、奏夜は悠二を見る。

「要するに、女子のジャッジからすれば、お前はギャルゲの主人公というわけだな」

「皆まで言わないで下さい」

「おや、否定しないのか」

「否定しないんじゃないやありません。否定させてくれないんです」

悠二はやはり、この状況に困っているらしい。

優柔不断というわけではなく、あまりの目まぐるしさに思考が追いつかない、というのが妥当か。

はつきりしない調子な悠二に、池が問う。

「なあ、坂井」

「ん？」

「平井さんが好きなのか？」

「っ!!」

悠二が壁に頭を打ち付けかけた。
驚いたのは、奏夜も同じだ。

（おお、まさか池から色恋話を振るとは）

池は、こういう話を間接的にしろしないタイプかと思っていたのだが。

「お、おまえ、こんなときに……」
「どうなんだ」

池はいたって真面目な口調で繰り返す。

「俺も興味あるな。実際どうなのよ、坂井」

奏夜からも追い討ちがかかる。
上辺だけの言葉は意味がない。そう判断したのか、悠二は考えるだけ考えて、今の自分の返答を言葉にした。

「そ、それってはっきりと、そうだ、って分かるようなもんじゃないだろ？」
「ふうん……」

池は納得したような、していないような様子だった。

「なるほど、正しいかどうかはともかく、面白い意見ではあるが」
「……さっき、吉田さんが休んでる僕の所に来たの、お前の差し金
だろ」

質問の仕返しのもりか、拗ねたように、悠二は聞き返した。

「ん？ 何でそう思う？」

「吉田さんが自分から、あんなことしてくるわけないじゃないか、
つおぐ！？」

池が裏拳で悠二の胸板をドスン、と叩き、奏夜がまたあの連射式輪
ゴム銃を、悠二のこめかみ辺りに発射した。

「そりゃ、吉田さんを舐めすぎだな」

「あいつはな、坂井。お前が思ってる以上に頑張り屋さんだぞ」

「えっ？」

思わぬカウンターを喰らい、戸惑う悠二をよそに、池はぼやいた。

「はつきりと、そつだ、って分かるようなもんじゃない、か……な
るほどね」
「……」

奏夜は池の様子に違和感を覚える。
それは 覚えのある違和感だった。

「お前は”どうなんだ？ 池」

敢えて重要な部分を省略して、奏夜は聞く。
池は驚いたようだったが、すぐに自嘲めいた表情を浮かべる。

「どうなんでしょうね」

「……そうか」

言って、奏夜は面倒くさそうに頭を掻く。

「坂井、池」

投げやりな調子で、奏夜は二人に告げる。

「一つのことを悩むのはいい。だが、なるべく早くに決断しろよ」

「えっ？」

「……」

悠二が首を傾げ、池が少しだけ顔をしかめた。

「時間は有限だ。モタつくと、すぐ手遅れになっちまうからな」

様々なニュアンスを込めた警告をし、奏夜はふと空を見上げる。いつの間にか、曇り空から日が差し込み始めていた。

「田中、顎大丈夫か？ 平井ちゃんのボール、かなりキレーにキマってたが」

「ああ、大したことねーよ。明日にゃもう治ってるさ」

授業後。

佐藤と田中は、本日の白熱した体育の授業について語り合いながら、帰路についていた。天候はあの大雨が嘘のように晴れ渡り、輝く夕暮れが、空によく映えていた。

「しかし、平井ちゃんはもちろんだけど、先生も凄かったよな」

「ああ、アレはもうプロの領域だろ。現国の教師である運動神経は

さすがにねーわ」

ちなみに、後で佐藤が、どうやってそんな卓越した運動能力を得たのか、と聞いてみたところ、

『愚問だな、それは俺が稀代の天才、紅奏夜だからだ!』

だそうである。
身も蓋もねえ。

「負けた俺が言えることじゃねーけど、平井ちゃんはやつぱ強い。半分反則気味とはいえ、その平井ちゃんに勝っちゃう紅先生も」
「ああ。けど、褒めてばかりもいらねーぜ？」
「だな」

そうだ。他人のことだけでなく、自分のこともちゃんと考えなければ。

目標　というより、憧れ。
『甲詞の詠み手』マージョリー・ドーに追い付いていくために、ここでモタつく気は二人には無かった。

「さて、さっさと帰るか。今頃姐さん、確実に酔い潰れてるだろうし」

「っはは、想像出来ちゃうな」

ちなみにその時、佐藤家内のバーにて、くしゃみをするマーシヨリの姿があつたとか無かつたとか。

「……………」

突然立ち止まつた佐藤を、田中が振り返つて言う。

「どした？ 佐藤」

「いや、今そこの公園で……………」

はっきりしない佐藤の態度をいぶかしむ田中、しかしふと、聞き覚えのない音が耳を捕らえる。
鼓膜を震わせる旋律は、

「バイオリンだよな、多分」

「いや、この際バイオリンは問題じゃないんだけど……………」

佐藤が公園の奥を指を指す。

数歩下がって、田中は佐藤の指先を目で追う。

次の瞬間、田中は自分の目を疑った。

「先生？」

人の心を奪うバイオリンの音色。

煌々と輝く夕暮れさえも、背景にしかならない。

そして、ブラッディローズを手に、刹那の芸術を生み出し続ける人物。

それは間違いなく、紅奏夜その人だった。

佐藤と田中は気付かれないよう、入り口の表札近くに身を屈める。

「おい、何で隠れるんだ？」

「いや、何となく」

田中の手を引いた佐藤自身も、いまいち理由がわからなかった。

あまりに普段と違う雰囲気を纏う奏夜に、話し掛けづらいつつというのが一番の理由かも知れない。

幸いといふかなんというか、奏夜は二人には気付いていないようだ。ただ一心不乱に、バイオリンを操っている。

『ポロン』

最後に弦を一本指で弾き、演奏は終わる。

ぱちぱちぱち。

称賛の拍手に、奏夜は軽く礼をする。

「うん、やっぱり奏夜くんのバイオリンは流石ね。何度聞いても飽きないわ。ねー、由利？」

「うん！ 奏夜お兄ちゃんのおいおりん、やっぱりだいすき！」

「ありがとう、恵さん、由利ちゃん」

すぐに視認は出来なかったが、奏夜は誰かにバイオリンを聞かせていたらしかった。

少し佐藤と田中が身を乗り出してみると、ベンチには親子と思われるき、整った顔立ちの女性と、幼稚園服を着た少女が座っている。

「……まさか、奥さんとかかな？」

「だとしたら不釣り合いだろ……」

田中がさらりと酷い事を言う。

まあ、奏夜は容姿こそ整ってはいるものの、破天荒極まりない人物であり、あのベンチに座る女性は、誰がどう見ても美人の部類に入る。

ある意味、妥当な判断ではあった。

「お母さん、わたしもおいおりん弾いてみたい！」

「あら、由利もバイオリンに興味を持つようになったのねえ。」

どうかしら、奏夜くん。由利がやってみたいなら、私としては習わせてあげたいんだけど」

「構いませんよ。俺に余裕がある時でいいなら、喜んで」

「やったー！」

由利は両手を上げて喜びを表現する。

その可愛らしい仕草を見ながら、奏夜と恵が顔を見合せ、笑みを交わし合った。

「うーん、奥さんとかじゃないみたいだな」

「でも、ただの知り合いってわけでもないだろ。あんな親しげだし」

佐藤はそう予想して、奏夜をよく見ようと、更に身を乗り出す。

「あつ、おい佐藤っ！！」

「へっ？ うわっ！！」

田中はそもそも、表札脇から斜めに身体を仰け反らすという、ギリギリのバランスを保っていた。

そこへ、佐藤が急に体勢を変えたため、彼を下敷きにする形で、ぐらりと地面に倒れ込んでしまった。

派手な音が、公園に響く。

さすがに、奏夜たちも気が付いた。

「……佐藤、田中？」

奏夜は目をぱちくりさせ、乱入者一人を視界に収める。

「あ、あはは」

「こ、こんにちは」

もはや佐藤と田中は、ばつが悪そうに笑うしかなかった。

「へえ、奏夜くんの生徒さんなんだ」

佐藤と田中が粗方の事情説明を終えて、恵が二人に手を差し出した。

「初めまして。名護恵よ、よろしく！」

「なごゆりです！ はじめまして！」

『よ、よろしくお願ひします』

快活な笑顔と共に差し出された二本の手を、佐藤と田中はかなりドキマギしながら握り返す。

由利はともかくとして、恵の容姿は多感な高校生を動揺させるのに十分なものだった。

「ったくよー、何でお前らわざわざ隠れるんだ。まだるっこしい」「んなこと言われても、入っていきける雰囲気じゃなかったし……」「第一びっくりしてたんすよ。先生、バイオリンなんか弾けたんですね」

佐藤と田中の弁明を聞き、恵が首を傾げた。

「奏夜くん、バイオリンのこと、生徒さんとかに話してなかったの？」

「何人かには話したことありましたけど、それも成り行きみたいなもんですし、言っただって何にもならないでしょう？」

「やれやれ、そーいう自分の領域を作っちゃうところは四年前と変わんないのね」

「手厳しい」

恵の言い種に、奏夜が苦笑いを浮かべる。

二人の間には、立ち入れなさにも似た親密さが伺えた。居心地の悪さを感じ、佐藤は無理矢理にでもと話に入っていく。

「あの、先生と恵さんは、もしかしてご夫婦だったりするんですか？」

そうでないことは何となくわかっていたが、場を保たせるため、敢えて佐藤は聞く。

突如、奏夜と恵の目が点になると、次の瞬間には、奏夜と恵は吹き出していた。

「あはは、違う違う。奏夜さんと私はそういう仲じゃないわ」

「恵さんじゃあ、俺よりもっとカッコいい旦那さんがいるんだなコレが」

抱腹絶倒状態で、二人は否定した。

「じゃあ、どういづご関係なんですか？」

二人の笑い具合に面食らいながらも、今度は田中が質問した。

奏夜と恵は目配せした後、悪戯っ子のような口調で言う。

『死地を共に戦い抜いた親友』

「……………」

ぽかーん、と佐藤と田中が呆ける。

「あの、それってどういう……………」

「そのまんまの意味だが？」

「いや、陸軍にでも入ってなきゃ出てこない友人関係ですよ……………」

「さあ？ あとはご想像にお任せするわ」

恵はそう言い置いて、足にへばりついていた由利を見る。

「じゃあ由利、そろそろ帰ろっか」

「えー！？ まだお兄ちゃんとあそびたいよう」

「うん。けど、奏夜お兄ちゃんも疲れちゃうでしょ？」

またいつ

でも遊べるから」

「むー」と唇を尖らせるも、由利はこくりと頷く。

「わかった」

「よしよし、いい子ね　　付き合わせちゃってごめんなさいね、
奏夜くん」

「いいですって。幼稚園のお迎えくらい、それこそいつでも付き合
えますから」

気の良い返事＋敬語。

佐藤と田中はもう呆気に取られっぱなしだった。普段の傍若無人な
奏夜はどこにいったのだろう。

「それじゃあね、奏夜くん。啓作くんに栄太くんも、いつかまた
「ばいばーい！」

恵と由利は手を振りながら、公園から姿を消した。

二人が見えなくなるまで、奏夜、佐藤、田中は手を振り続けていた。

「いい人だろ、恵さんも由利ちゃんも」

奏夜がそう言うのに合わせ、佐藤と田中も頷く。

「さて、と。お前らまだ少しは時間あるよな？」
『えっ？』

二人の返事もそこそこに、奏夜はバイオリンをケースに入れて、近くにあった、恐らくは子供が忘れていったのであろう、柔らかい素材のボールを手取る。
奏夜の真意を計りかねる二人を見て、彼はニンマリと笑う。

「佐藤、田中。俺とゲームをしようか」

足で地面にラインを引き、即席のコートを作り、「さて」と奏夜は言う。

「ルールは、体育でやったドッジボールと同じだ。俺に当てればお前らの勝ち。」

どっちが外野か内野かは、お前らが決めてよし」

「……まだ俺らやるとは言っていないのに、先生やる気満々ですね」

佐藤がもつツッコむのも面倒臭そうに呟く。田中も同じような雰囲気である。

いまいち気乗りしない二人に、奏夜は魔法の言葉を唱える。

「お前らが勝つたら、次の時間の漢字テスト免除」
『やります』

計画通り。

奏夜は死神ノートでも保有しているような勢いで、邪悪に笑う。

「あ、先生。一つ質問が」

「はい、田中栄太くん」

「やるぶんには構わないんですけど、先生はどうするんすか？」

「どうするって？」

奏夜が首を傾げ、佐藤も質問に加わる。

「先生の勝利条件ですよ。内野の一人をアウトにすれば勝ちってことですか？」

「いや、お前らが先にバテたら俺の勝ち」

さらりと言っただけ。

つまり、佐藤と田中の体力が尽きるまで攻撃を避け続けるということとだろうか。

そんな無茶な。

「そんな無茶な」

口から出ていた。

「無茶かどうかは、試合すればわかるぜ。それとも何か？
授業
での威勢は見かけだけかい、お二さん」

むかつ。

今時小学生でも乗らないような安い挑発に、二人はあっさり乗って
しまう。

875

「分かりました。受けますよそのゲーム！」

「試合後で泣かないで下さいよ、先生！」

「ああ、存分にかかってこい！ 世界の広さと、お前らのセリフ
が完全なる敗北フラグだということを教えてやるっ！」

そんなこんなで、ドッジボール延長戦開始。

その頃、真南川の河川敷。

「今月で既に八人目か。悪は埃のようなものだな」

少し見過ごすだけで、またすぐに蔓延ってくる。

名護啓介はボタンを指先をしばらく弄ぶと、今まで集めたボタンが連なるホルダーにそれを通し、ポケットにしまう。

名護は四年前と比べ、自分が随分変わったと自覚している。

そんな中で唯一変わらないのが、犯罪者を捕らえた時の記念である、このボタン集めだ。

恵には「由利の教育上良くないわ」と言われているため、どうにか止めたいものだが、昔に染み付いた癖は中々消えない。

一応由利に見られたことはないが、それにしたっていつまでのことやら。

(ふう、煙草より質が悪い癖だ)

自嘲気味めいた考えを消し、名護は夕暮れを目に収めながら、恵と由利が待つ我が家へと急ぐ。

「よお。あんたかい？ イクサの資格者ってのは」

と、土手から軽い声がかかった。
声の主は土手から立ち上がり、名護の行く道を塞ぐ。

奇妙な出で立ちだった。

暖かいこの時期に、黒いロングコート。

顔は仮面舞踏会でしか使わないような、シンプルな白い仮面で覆われている。

「……貴様、何者だ。何故イクサを知っている」

名護は警戒心を強めつつ、仮面の男を睨む。

「つとお、怖いなあ。別に誰でもいいだろ。それに、質問に質問で返すのはマナー違反だぜ？　もう一度聞くぞ、あんたがイクサの資格者なのか？」

「だったらどうする」

「いや？　別に“俺”はどうもしねーけどな。……ただ、“こいつ”があんたに怒りをぶつきたいみたいだね」

自分を指差しながら、仮面の男はわけのわからない事を言って、ニヤリと笑う。

「あんたに恨みはねえが、ちいっとストレス発散に付き合ってくれ

「や」

仮面の男の肌が、ステンドグラスの模様に覆われていく。
やがて、黒ずんだ羽根に、ストローのような口という蠅を彷彿とさせる姿、ベルゼブブファンガイアへと姿を変える。

「やはりファンガイアか。いいだろう、相手になってやる。 変身！」

『レ・デ・イ・ー』

『フ・イ・ス・ト・オ・ン』

イクサナツクルを手に押し当て、ベルトにセット。
電子音と共に現れたオレンジ色の映像が重なり、名護の姿をイクサへと変える。

「その命、神に返しなさい！！」

クロスシールドを展開し、セーブモードからバーストモードへ移行直ぐ様、イクサカリバーの弾幕を、ベルゼブブファンガイアに浴びせる。

「うおっとお！？ 危ない危ない！」

回避のため、ベルゼブブファンガイアは地面を転がる。

「今度はこっちからいくぜえ!？」

ベルゼブブファンガイアの翼から、金色のりん粉が飛び出し、イクサを襲う。

りん粉がイクサに触れた途端、空中で幾重もの爆発が起こる。

「くっ!！」

りん粉を振り払い、イクサはイクサカリバーをソードモードに変える。

狙うは接近戦。

「はっ!　いい度胸だ!！」

ベルゼブブファンガイアもステンドグラスの剣を召喚し、イクサを迎え撃つ。

「ハアッ!！」

「うおりゃっ!！」

剣がぶつかり合い、火花を散らす。

（強い。一介のファンガイアではないな）

自分のパワー、スピードに難なくついてくる。
長引けば不利か。

（ならば、一撃で叩き潰すまで！！）

イクサカリバーとベルゼブファンガイアの剣が交錯した瞬間、イクサはつばぜり合いのまま、ベルト脇のホルダーに入ったフェツスルをベルトに差し込んだ。

『イ・ク・サ・カ・リ・バー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

胸部のソルミラーにエネルギーが集まり、イクサカリバーに伝導していく。

「うおっ!?!」

イクサの必殺技『イクサ・ジャツジメント』の力に、ベルゼブブアンガイアの剣が押され始める。
バチバチとスパークが弾け、とうとう剣にヒビが入った。

「わわっ、シャレになんねえっての! カアッ!?!」
「何っ!?!」

ベルゼブブファンガイアは、イクサに向かって、0距離でりん粉を吐き出した。

バアンツ!

「ぐあっ!?!」

爆炎が光り、衝撃にイクサが吹き飛ばされる。

イクサカリバーに集まったエネルギーも霧散してしまった。

「いや、マジ終わるかと思ったぜ。さすがに強えな。イクサ」
「ふざけるのもそこまでにしなさい!! イクサの力は、まだまだこんなものではない!」

言って、イクサは仮面の口元に手を伸ばそうとするが

「あー、いやいや、今日はもういいや」

ベルゼブブファンガイアはおどけるような仕草で、変身を解除してしまった。

「!?!? 何の真似だ!」

「悪い悪い。ホント言うとき、ストレス発散つてのは建前で、あんなの実力を確かめに来たんだよ」

「何?」

「そつ、オレの仲間は人使いが荒くてよー。まいつちまうぜ。あははは、上司と使えばの関係ってこんなもんなのかもな」

パチンと指を鳴らすと、ベルゼブブファンガイアの姿は輝くりん粉に変わり、風に乗って霞に溶けていく。

「なっ! 待ちなさい!」

イクサの真の力ってヤツは、また会った時に見せてくれや!

キバもサガも纏めて相手してやつからよ!

高笑いを残して、それきりベルゼブブファンガイアの声は消え、周囲には静寂が戻る。

「……………」

イクサは無言のまま、変身を解除する。

（私の力を確かめに来ただと？ まさか……………）

最近、俺達のことを嗅ぎ回ってるファンガイアがいるんです。これが結構強くて、名護さんも、ちょっと注意してて下さいね。奏夜から聞いた情報を、名護は反芻する。

「竜のファンガイアと聞いていたが、あのファンガイアがその仲間だと言うのは考えられる、か」

名護は険しい表情のまま、沈む夕日を見つめた。

どうやら自分も、徐々に巻き込まれつつあるようだ。

四年前と同じ、闘争の渦に。

(終わった、か)

頭に鳴っていたブラッディローズの音色が鳴り止んだのを感じ、奏夜は一先ず安心する。

本当なら、直ぐ様ファンガイアを倒しに行くべきだったのだが、近くには名護の音楽も感じていたため、一先ずは成り行きを見守るつもりだった(名護の実力を信頼している、というのもある)。

結果、イクサの音楽が残り、ファンガイアの音楽が消えている。

ライフエナジーが放出された気配は無いから、多分逃げただけだろう。

(結構強い力だったし、あの竜のファンガイアと関係してるのかもな……。ま、それは後で名護さんに聞けばいいか)

今はこっちに集中。

とはいえ、

「さあ、どうした！ もうおしまいかなぁ？」

「……、ハアツ、だ、誰が！」
「はあ、くそッ、せいっ！！」

田中がスローしたボールが、奏夜目掛けて投球される。

申し分ない威力。まさしく豪速球だ。

「なので避ける」

それさえも難なくかわしてしまふ奏夜。

ボールは威力を落としながら、今度は佐藤サイドへ。

「ま、また避けられた……」

「はあ、あ、アンタどういう体力してんですか！」

「鍛えてますから」

ゲーム開始から早30分。

その間、奏夜は息一つ切らさず、佐藤&田中チームのラリーを回避し続けている。

（俺と田中で、ほとんどインターバル無しで投げてるってのに……、本当に現国教師かよ）

（普通のコートよりも狭い条件下で、両方向からの攻撃にも、直ぐ

様反応してくる……)

滅茶苦茶だ。

はつきり言って、プロのスポーツ選手とタメが張れそうなレベル。自信の高さも納得だ。

「さあさ、頑張りたまえ。体力が残ってても、日が暮れちゃったら流石に俺も帰るよん」

佐藤と田中が、西の空を見ると、もう日が沈みかけ、夜の帳が空を覆い始めている。

(もう、疲れたとか言ってられねえな……)

佐藤はボールに力を込め、田中もまた表情を険しくした。もはや二人とも、意地の勝負である。

奏夜を凄いと認めても、それは負けた時の言い訳にはならない。

(“こんなところ”で)

(負けられるか!)

憧れの存在に追い付くために、意地でも勝つ。

「っらぁー!」

体力を総動員して、佐藤はボールを放った。

「おっと」

ボールは奏夜の右足近くを通り抜ける。

パシッ。

向かいの田中が直ぐ様ボールをキャッチし、ボールは戻ってくる。

「ほいっと」

今度は左足付近。奏夜は二人の全力のボールさえも、難なくかわしていく。

そんな全力投球のラリーが続く中、

(これは)

奏夜は違和感に気が付いた。
さつきから段々と、自身の動きが鈍くなってきていた。
おかしい、まだ余力は残していたはずだ。

(いや、むしろ“動くこと”が少なくなってる……)

そして、気付いた。

(成る程、足元か)

動くことが少なくなってきた。
それはつまり“避けるために必要な動き”が減ってきているということ。

そして、先ほどから佐藤と田中の投球は、一貫して奏夜の足元狙い。

(バランスを崩す気だな)

攻撃対象が足のみ。避けるには激しい足さばきが必要。
しかも地面は、昼の雨で多少ぬかるんでいる。ますます分が悪い。

(バランスを崩してよろけさえすれば！)
(俺達の勝ちだ！)

投球の嵐が奏夜を襲い続ける。
やがて、

「おっと？」

間の抜けた声を上げて、奏夜はボールに気を取られたせいか、ぬか
るみで足を滑らせ、身体をのけ反らせた。
今の状態ならば、いくら奏夜でも回避は不可能だろう。
待っていた好機に、佐藤はボールの狙いを定める。

「つだぁ！」

身体を蝕む疲労をもとせせず、ボールは奏夜目掛けて吸い込まれ
ていく。

(決まっ
)

勝利を確信し、佐藤と田中の口元に笑みが浮かぶ。

「ほいさっ」と

奏夜は足力だけで、バック転を決めた。

「っな!?!」

「うそお!?!」

二人の驚きを他所に、滞空する奏夜に当たることのないまま、ポールは情けなく地を転がった。

「うん。努力賞ってどこかね」

着地し、奏夜は意地悪く微笑む。
その余裕は、二人の戦意と体力を削ぐには十分なものだった。
疲労に足が震え出し、佐藤と田中はふらふらと膝を折った。

「わーい、奏夜くん勝ちましたー」

奏夜のおどけた態度に反応する余裕さえ無かった。
息を切らし、佐藤と田中は悔しさに唇を噛む。

「佐藤、田中、そう気落ちするな。最後の作戦、あれは中々よかつたぞ」

「ぜえっ、はあっ……、そ、そんな反則ギリギリのことやっても、勝てなかつたってことじゃ、ないですか」

「反則ギリギリって言っても、十分効果的なやり方だったと思うけどなあ。第一、元々この勝負、普通にやったらお前達に勝機は全くないよ」

『えっ!?!?』

衝撃発言に、二人の声が裏返った。

「考えてもみる。いくらコートが狭いからって、入る人間が一人な

ら普通のものと変わらない。

これだけのスペースがあるなら、例え二対一でも、ボールの動きをしつかり目で追えば大抵の投球は避けられる。ましてや、大人と子供の体力差を考慮すれば、先にバテるのは確実にお前らだ」

淡々とした説明に、佐藤と田中は、啞然とする。

「奏夜は敢えて、自分に有利なゲームを仕掛けた、ということか？
一体何故？」

物知らずな生徒に、物知り顔の奏夜は、このゲームの意図を明かす。

「フーマリー、お前らが勝つには、必然的に正攻法以外のやり方をしなきゃならんわけだ。

さっきの足元狙いの戦い方がそうだな。それまではお前ら、ばか正直に投げてただけだったろ？」

確かに、最初の方は、これといった作品もなく、一心不乱に全力投球するのみだった。

体力が尽きかけ、思考がクリアになったことで、あの戦法を思い付いたのである。

「そのひらめきこそ、お前らに必要なものだ。最近、お前ら妙に頑張っているようだが、がむしゃらに努力したところで、それは実を結ばない」

びくり、と佐藤と田中は肩を震わせる。
それはまさに、マージョリーに追い付くため、自分たちのしている
行動そのものだったからだ。
二人の仕草を見てみぬふりをして、奏夜は続ける。

「大切なのは、自分に何が出来て、何が出来ないのか。出来ないの
なら、いかにして出来るように頭を使うのか、だ。音楽が、発想と
ひらめきの産物であるようにな」

その何気ない一言は、佐藤と田中の心に染み渡る。

と同時に、奏夜の底知れなさを否応なしに理解させられた。
この教師に、マージョリーのことは話していない。にも関わらず、
ここまでおあつらえ向きのアドバイス。こんな回りくどい真似まで
して、奏夜は教えようとしていたのだ。

いつの間にか、佐藤と田中から悔しさが消え、代わりに苦笑いが刻
まれる。

「あはは……本っ当に、何者なんですか先生は」

「いつものはっちゃけっぷりは何処いっちゃったんです?」
「失礼な。これこそが地の俺ですよ?」

二人の皮肉った言い回しに、奏夜は普段のちゃらけた口調を返す。
一人の教師と二人の生徒を　夕暮れの僅かな木漏れ日が照らして
いた。

次回、仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD!

「お兄様に何をします!?!」

「私……何でこんなだろう?」

「逃げるな、向き合え」

「っだめ!?!」

「何でアンタがいるわけ?」

「バラバラに戦っても始まらない。協力しなさい、『甲詞の詠み手』」

「いいだろう、人間の力とやら、拝見させてもらおうか」

「ウルフェンの誇りを嘗めるな！」

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

【第十一話・トライアングル／つがいの愛染兄妹】

W A K E ・ U P !

紅蓮の鎖を解き放て！

第十話・レックスンマイウェイノ導きの遊戯・Bパート（後書き）

今年の更新はこれにてファイナル。

ただ言わせてください。

……どこのドッジボールファイターだこの小説はあああ！（一人ツッコミ）

・マジヨリー編にて佐藤&田中の出番が少なかった故の話でしたが、作者的には楽しく書いていたのですが、ややくどい話になっちゃったかも知れません。

・ベルゼブブファンガイア登場。彼もまたキーパーソンになるキャラクターです。

このシャナ第3〜4巻編で、ドラゴンファンガイアが何者なのか、というヒントも出していく予定です。

・さて、ここで一つお知らせを。

この更新から、受験が終わる3月まで本編は休載になります。

その代わりに、ここからしばらくは書き溜めてあった『クライマックス刑事』編を投稿していきます。

楽しみにして下さいっている皆様、ごめんなさい（<―>）

早く復活出来るよう、学業の方を片付けて参ります。

それでは皆様、よいお年を!!

第十一話・トライアングルノつがいの愛染兄妹・Aパート（前書き）

「草薙の剣とは、日本神話を代表する有名な神剣だ。

高天ヶ原を追放されたスサノオノミコトが、八俣遠呂智を退治した際に、その尾から出てきたのがこの剣だ。

王権を象徴する宝神器、『三種の神器』の一つでもあるんだぜ。

奏夜のある魔剣とどっちが強いかな？」

キバットバット三世

第十一話・トライアングルノつがいの愛染兄妹・Aパート

「くわあぁ〜」

早朝、奏夜は気だるそうに大欠伸をして、御崎高校へと足を進めていた。

ここ数日は色々と面倒なイベントが満載だったため、やや寝不足気味でなのだ。

具体的には、違う世界に行つて、ネコ言葉の女と一緒に戦うも
う一人のキバと会ってきたり。

「ねむねむ」

「何がねむねむだ。名護の早朝トレーニングも意味なしかよ」

鞆に入ったキバットが、やれやれといった風に溜め息をつく。

「しゃーねーだろ。この前はドッジボール漬けだったし、あの高杉とかいうヤツのいた場所から戻ってくればもう深夜だぜ？ おまけに名護さんは新しいファンガイアに会ったって言うしさ」

「ふむ。やっぱりあの竜の仲間なのかね。例の蠅のファンガイア」

「さあな。分かってるのは一つだけ。あいつらは俺達を試してるってことだ」

「試すねえ。どっちかと言えば戦力を計ってるって感じだよな。

……やば。悪い予感しかしねえや」

「今までファンガイア絡みで、一度でもいい予感があったか？」

戦うなら迎え撃つだけさ。

大した感慨もなく言い放ち、奏夜は大通りを外れて袋小路に入っていく。

この裏道は人気こそ無いが、学校への近道でもある。

物騒な世の中、カツアゲの恐れもあるが、奏夜ほどの力があれば、その心配は皆無に等しい。

「む」

ふと、奏夜は立ち止まり、自分が向かう方向とは違う道に目をやった。

「まったく、日本語喋れねえのかよ、こいつ！」

「日本語できねえなら、日本に来んじゃねえっての！」

ガラの悪い五人ほどのグループが、十代半ばの少年を蹴り飛ばしていた。

「むっ」

奏夜は教職に就く人間である。

この状況下で取るべき行動は、もはや決定していた。

「いや、そういう義務や責務じゃないか」

何というか。

ああいう光景は見ていて実に、

……不愉快だ。

奏夜は頭をがりがり掻きながら、不条理な暴力の嵐へと足を進めていく。

「おい、そのパツとしないモブキャラ共」

初対面の人間に対し、間違いなく最悪の部類に入る態度だった。

「ああ？」

水を差されたことに苛ついた様子で、青年グループ達が奏夜を見る。

「よってたかってよくもまあ……恥ずかしくねーのかよ。お前らあれですか？ 触れるもの皆傷つけ、盗んだバイクで走り出し、暗い夜道の中に行く思春期ですか？」

気だるそうに言い放つ奏夜を、青年達は「なに言ってるんだコイツ」みたいな目で見ていた。

「大体、今からそんな遊んでたらダメだぜい？ 髪を染めるのもマ
イナスだな。後々ハゲるぞ」

「わけわかんねえこと言ってるじゃねえよ！ なんだてめブツ！？」

青年の言葉は最後まで続かなかった。

奏夜の鮮やかなシャイニングウィザードが、青年の顔面を撃ち抜いたからである。

青アザと共に、青年は地に崩れ落ちた。

「なっ！？ てめえ！」

「世の中に、嫌いなものが二つある。糸こんにゃくと、間違ったことを平気でやるバカ野郎共だ」

いきり立ち、奏夜を取り囲む青年に対し、奏夜はいつそ清々しいま
でにマイペースな口調で告げる。

「さあ、お前らの罪を数えろってか？」

余裕綽々の奏夜を、青年達の拳が襲った。

難なくそれを避け、一人の腕を掴み、見事な一本背負いをキメた。

「ほいっと」

啞然とするグループの隙をつき、奏夜は見事なアッパーカットを繰り出す。

ものの数分で、五人の内の四人が殲滅されてしまった。

「う、うあああ!?!」

危機感を覚えたらしいリーダー格の青年は、ポケットからバタフライナイフを取り出す。

「おっと」

それを見越していたのか、奏夜は右足で青年のバタフライナイフを蹴り上げる。

「なっ……!!」

状況が飲み込めぬ青年をよそに、奏夜は落ちてきたバタフライナイフを器用にキャッチする。

「世間の荒波を知らん坊っちゃんには、過ぎたオモチャだ。俺を相手にするなら青竜刀でも持ってこい」

笑顔の奏夜から右ストレートを貰い、リーダー格の青年もまた、地面に沈んだ。

「やれやれ、未成年でもこんなもんを持つ時代か。世知辛いな」

奏夜はナイフを投げ捨てた後、暴行を受けていた少年に近づく。

びくり、と少年は肩を震わせたが、奏夜は少年を安心させるように手を差し伸べる。

「大丈夫か？ 少年」

おずおずと、躊躇うように、少年は奏夜の手を取ろうとした。

時だった。

「お兄様に」

つかつかつか。

間隔の狭い足音が聞こえてくる。

その細い声の方を見た奏夜の顔面に、

「気安く触れるなこのゴミ虫があつ！…！」

「あばあつ！…！」

……少女の見事な飛び蹴りが炸裂した。

「申し訳ありません。お兄様を助けて戴いたのに、とんだ非礼を……」

「痛てて……。ああいや、状況が状況だったし、気にすんなよ」

素直に頭を下げる金髪に高貴なドレス姿の少女に対し、奏夜は額をさすりながら答える。

少女　ティリエルのダークネスムーンブレイク顔負けのキックを喰らい、奏夜が気を失っている間に、助けた少年（こちらはソラトと言っらしい）が事情を説明してくれたらしく、どうにか誤解は解けていた。

その流れで、三人はに路地を抜けて、大通りを一緒に歩いていた。

「見たところ日本人じゃないよな。観光か何かか？」

「ええ、そんなようなものです。少々、探しものがありました。

もう、駄目でしょう、お兄様。私が待っていてと言ったら、ちやんと待っていないと」

ティリエルの後ろで、ソラトが弱々しく縮こまる。

ただ、ティリエルもさして怒っているわけではなさそうで、奏夜にはむしる微笑ましい光景に見えた。

「仲良いんだな。兄妹二人で」

「あら」

奏夜の素直な感想に、ティリエルは顔を綻ばせた。

「そう思われますか？」

「ああ、俺にも一人兄さんがいるんでな。小さい頃には色々事情があつて、一緒に遊ぶ機会が少なかったからさ。だからティリエルと

ソラトが羨ましいよ」

「ふふ、ありがとうございます」

年相応の少女らしく、ティリエルは笑い、ソラトに肩を寄せた。

周りの何人が奇異の眼差しを向けるが、奏夜はなんら変わらず、二人を見ていた。

「奏夜さんは、あまり体裁を気になさらないんですね。日本人は陰に籠ってせせこましい印象があったのですけれど」

「外面なんて飾りだろ。そりゃあ整ってるに越したことはないけどさ」

ティリエルの手厳しい評価に苦笑して、奏夜は答える。

「それが二人の趣味嗜好なら、俺が口出しできるものじゃないだろ」

「本当に卓越した見解をお持ちですね。そういつ考えの方が増えれば良いのでしょうか」

「まったくだ」

さすがに『毎日もつと奇抜なものを見てるからさー』とまでは言えない奏夜だった。

「そうだ。ここで会ったのも何かの縁だし、この辺りを案内しようか。確か、探しものがあるんだろ？」

「いえ、そこまでお世話になるわけには

それに」

私たちの探し物は、そう簡単には見つからないものなので。

今までとは違う、含みを持たせた言い回し。

奏夜はその違和感に首を傾げる。

「おい。ソラト、ティリエル」

だが、奏夜がその感情を処理する間もないまま、三人を呼び止める声があった。

振り替えると、一人の男が立っていた。

ダークスーツをすらりとした長身に纏い、オールバックの髪に、視線を隠すサングラスという出で立ち。

あだ名を付けるならT-800だな。

と、奏夜はいらない判断を下した。

「シュドナイ！　あなた、いったい何処にいたの！」

ティリエルがさっきまでの和やかさを消して、男に食って掛かる。

シュドナイと呼ばれた男は、ゆったりとした口調で彼女に対応する。

「そうピーピー喚きなさんな。勝手に何処かへ行ったのはお前さん方だろう。それに、ソラトが一人になったところで、どうなるわけでもあるまい」

「何を言ってるの！　あなたが目を放したせいで、あんなゴミ虫

共がお兄様に触れることになったのよ！　奏夜さんがいなかったら、どうなっていたか考えるのもおぞましいわ！」

「奏夜さん？　ああ、そちらの青年か」

あくまでもマイペースに、シュドナイは奏夜を見る。

「珍しいなティリエル。キミが見ず知らずの人間と話すとは」

「話を逸らさないで！　このような怠慢、今度は許しませんことよ！」

ティリエルはフン、と鼻を鳴らして、ソラトに抱き着きつつ、シュドナイに険悪な眼差しを向け続ける。

「すまん。連れが世話になったようだ」

「いや、別に構わないよ。アンタ、ボディーガードか何かか？」

二人の高貴な雰囲気から判断した奏夜に、「ああ、そんなようなものだ」とシュドナイは答えた。

「なら、俺はお役御免か。じゃあ、あとはお任せでいいのかな？」

「お任せ、ね。人間に関して言えば、こいつらに俺の護衛など意味が無いと思うがな」

「えっ？」

「いや、何でもない。だが、一応礼は言わせて貰おう。青年」

シウドナイはシニカルに煙草のケムリを吐いた。

不信感だけが募るが、ティリエルとソラトの手前、表情には出さない。

「じゃあな。ティリエル、ソラト。縁があったらまた会おうぜ」

「ええ、また」

花のように笑うティリエルの後ろで、ソラトもおおずおおずと手を振った。

軽く手を振り返して、奏夜は三人組に背を向けた。

ティリエル、ソラト、シュドナイの姿が見えなくなったところに、奏夜は嬉しそうに口を開く。

「いやいや、人間関係のもつれが嘆かれる世の中だけどさ、まだまだ捨てたもんじゃないよな。あんな仲良し兄妹がいるんだからさ」

「……………」

バックの中にある相棒は、何のリアクションも取らない。

「キバット？」

「奏夜、さっきの奴ら……………」

「？ ティリエル達がどうかしたか？」

「……………いや、何でもねえ」

まさかな。

あり得ない。キバットは頭を振った。

だが、キバットの懸念は、最悪な形で的中することになる。

もつとも、それは奏夜にとって、だが。

「
」

「上機嫌だな、ティリエル」

シュドナイは、意外と本気で驚いていた。

ティリエルは兄のこと以外で、ほとんど朗らかな笑顔を見せないからである。

「さっきの男か？ 見たところ、君の目を惹くような特徴は無かったが」

「外見だけを見るのは浅はかね、シユドナイ。着飾る者ほど、中身が空虚なものよ」

「ふむ」

ならまず、自分達の派手な服装を止める。

そう思いつつ、シユドナイは口には出さなかった。

このあたり、分を弁えている。

「本当、“人間”にしておくには勿体無いわ。それに加えて、私とお兄様を仲良しだなんて！　ね、お兄様！」

「うん！」

もしこの場に奏夜がいたのなら、確実にソラトの言葉へ違和感をもっただろう。

なぜなら、ソラトの発した言葉は、もはや音として形容出来ないよ
うな、不気味極まりないものだったのだから。

「まあ、キミでも人間に興味を持つことがある、というのは実に救われる話だがな。それはそうと、本筋の方はどうなっているんだ？」

「磐石とまではいきませんが、フレイムヘイズ一匹への罠としてはもう十分。あとは、こちらから仕掛ければ直ぐにでも。」

ではお兄様、参りましょうか」

「うん、ティリエル。はやくみつけようね。』にえとののしやな』」

互いに笑みを交換し合って、紅世の徒“愛染自”ソラトと“愛染他”ティリエルは、深く唇を重ね合う。

その傍らで、紅世の王“千変”シュドナイは、やれやれと溜め息をついて、煙草に火をつけた。

早朝の御崎高校。

教師からすれば普通のタイムテーブルだが、生徒の登校時間にはや

や早い。

奏夜は人気の少ない廊下を鼻歌混じりに進み、教室へと足を運ぶ。

今朝の連絡を黒板に書き込むためだ。

引き戸を開け、一年二組の教室に入る。

と、そこには先客がいた。

「よう、早いな吉田」

「あ……。おはよう、いびきます」

誰もいない教室にただ一人。吉田一美は机に俯いてぼつんと座っていた。

「ちえつ。今日は一番乗りだと思ったんだがなあ。早起きってのも難しいもんだよ」

「そう……ですね」

歯切れ悪く、吉田は曖昧に相槌を打つ。

力無く肩を落としている様子からは、悲しみ以外の感情が読み取れない。

(ああ、こりゃなんかあつたな)

溜め息混じりに、奏夜は教室正面の黒板に向かう。

「何か悩みがあるなら聞いてやるぞー。連絡書くついででいいなら」

言って、奏夜はチョークを片手に、黒板へ連絡事項を書き連ね始めた。

カッ、カッ、カッ。

チョーク特有の乾いた音がしばらく続く。

やがて、奏夜の背中にか細い声がかけられた。

「……今朝、早くのこと、なんですけど」

「ふむ」

奏夜もそれに軽く言葉を返す。

「その……忘れ物を、届けようと思って」

「所有格が抜けてるぞ吉田。忘れ物って、坂井の持ち物か？」

しばし沈黙。ややあって「……はい」という声が聞こえた。

「そこまでは普通の学園モノだな。あまりに出来すぎな展開なのが腑に落ちんが……っと悪い、脱線したな。続けてくれ」

奏夜が促し、吉田はより一層元気がない様子で、声を絞り出した。

「それで……その、途中、真南川の方から……来るのを、見て」

「今度は主語が抜けてるぞ。俺が現国教師と知っての挑戦かコラ」

お前、頭は良い設定だろ。

しかし、奏夜なりの気遣い（もとい、渾身の笑い）にさえも、吉田は反応らしい反応を見せなかった。

奏夜は黒板にチョークを走らせながら、軽く頭を掻いて、

「……纏めると、平井（多分）と坂井が一緒にいるのを見た。そういうわけか？」

言葉に出して言われると尚つらくなるらしく、吉田は更に顔を俯かせた。

見た、というのは、文脈やら人間関係から察するに、シヤナと悠二が一緒にいる光景か何かだろう。

鍛練とやらは続けているようだから、その最中を吉田は偶然見てしまった、こんなところか。

軽くはない衝撃だったはずだ。

吉田が悠二に好意を抱いているのは、奏夜も知っている。

シヤナは精神面を除いて、才色兼備で魅力的だろうから、敵わない
と思っ、吉田が落ち込むのもわかる。

.....。

うん。

いや、わかるよ？ すっごくわかる。

わかるんだけど.....。

「.....」

バキッ。

手元のチョコレートが折れた。

奏夜は苛々と呆れを半々に込めて、言った。

「バカだなお前」

振り向き様に放たれた鋭い一言に、吉田は驚いて顔を上げた。

「そのどどこが悩みだ。身構えちゃったじゃねえか」

呆ける吉田の前に、奏夜は早歩きで移動して、ビシッ！ と人差し指を突き出す。

「それに何の関係がある」

「えっ………?」

「平井と坂井の仲が良いことと、お前が坂井を好きなことが、一体全体何の関係があるんだよ」

自分がそうだったからか、人の成長や心の機微に対し、奏夜は出来る限り、解決策を用意するよう心掛けている。

だが今回ばかりは、解決策など用意できるはずもない。

これは悩みですらないのだ。

「前にお前が、俺の音楽を聞いた時のこと、覚えてるよな？
そんな時にも言ったはずだぜ。『誰かを好きになったなら、悔いは残すな。ただその相手を好きでいろ』ってな。
お前、開始2ヶ月ちよいでそれを破る気が」

「で、でも……」

「でもモデモナータもねえ」

奏夜は、吉田の頬をぐにゅと引っ張った。

「ふえ、ふえんふえい、いひゃいれふ！！（せ、先生、痛いです！

！」

「黙って聞け。

お前は平井には無いものを持つてる。お前はあいつを強いと思って
るかも知れないが、どっこい、そういうわけでもない」

シヤナは、自分が悠二に抱く感情を知らない。

しかし吉田は、“その感情”が何なのかを知っている。

シヤナは、そのイレギュラーな感情を恐れている。

吉田は、それを恐れてはいない。

この差は、とても大きい。

奏夜はゆっくり、吉田の頬を放す。

「それが何なのか、よく考えてみる。

お前はいろんなことから逃げ過ぎだ。ちゃんと向き合え」

「……？」

ひりひりする頬を押さえ、吉田は疑問符を浮かべ続けている。

……まだよくわかってなさそうだが、これは自分で気付かなければ意味がない。

奏夜に出来るのはここまでだ。

少し後ろ髪を引かれる思いで教室を出ると、ちょうどそこには、登校したばかりの池がいた。

「あ、先生。おはようございます」

「おう池、バットモーニング」

「……朝の爽やかさが一気に消し飛ぶ挨拶ですね。先生が珍しく早朝登校したと思ったら」

ほっとけ。

「ああ、そうだ。池、お前ちょっと教室にいるヤツの相談乗ってやってくれや」

「はい？」

池は首を傾げ、だがすぐに何か気付いたような表情を浮かべる。

「もしかして、吉田さんですか？」

「察しがいいな。」

俺がいくらか言っただけ、まだ落ち込んでるっぽいから。お前からもどうにか慰めとして」

「……わかりました」

「うん。頼んだぜい、メガネマン」

吉田を池に任せ、奏夜は教室をあとにした。

池は頼りになるヤツだし、少なからず、吉田に好意を抱いているはずだから、まあ悪いようにはなるまい。

そう判断してのことだった。

しかし、この判断は、後に思いもよらぬ事態を巻き起こすことになる。

『あ』

さて、場所は移って御崎市内の商店街。

道の真ん中で、四人と一人のフレームヘイズが間の抜けた声を上げた。

片や、由利を嶋に預け、日用品の買い出しに来ていた名護夫妻。

片や、暇を持て余し買い物に出た『甲詞の詠み手』マージョリー・ドーと、そのお供、佐藤啓作と田中栄太である。

『恵さん!』

「あら、栄太くんに啓作くんじゃない!」

「? 恵、知り合いか?」

一瞬だけ、マージョリーと火花を交錯させた名護が、恵に問う。

「ええ、佐藤啓作くんに、田中栄太くん。二人とも奏夜くんの教え子よ」

「ああ、成る程。そういつつながらか」

名護は二人に手を差し出す。

「名護啓介だ。よろしく」

その手を、佐藤と田中はおずおずと握り返す。

(この人が恵さんの旦那さんか。ちょっと厳しそうだけど……)

(でも、先生の言う通りカッコいいなあ)

奏夜の弁で言うなら「俺よりずっとカッコいい旦那さん」だったが、容姿に関して言うなら、奏夜がそういう気持ちもわかる。

無論、奏夜がカッコよくないというわけではないが。

「それで」

佐藤、田中と握手を交わした名護が、一転して低い声を唸らせる。

その対象は、二人の隣　マージョリーに向けられる。

「何故キミがここにいる。『弔詞の詠み手』」

「っ!?!」

佐藤と田中の肩が跳ね上がった。

何故。

『弔詞の詠み手』。

自分たちの憧れである女性　マージョリーの決して知り得るはずのない二つ名を、この男性は知っているのだ。

「……はん。私が何処にしようが勝手にしょ」

「私が言っているのはそういうことではない。キミがどついつ目的でその少年たちと一緒にいるかだ」

名護の警戒心は更に強まったようだった。

「何か力任せな協力を強いているなら……」

「しないわよ。そんなめんどくさいことするくらいなら、最初から一人でどうにかしてるわ。こいつらは」

言いかけて、ふと唇の動きが止まった。

こいつらは　なんだろう？

最初はただの道案内のつもりで、次は寢床を間借りして、あの戦いで負けた後も、何故か一緒にいて

ちらりと目線を泳がせると、佐藤も田中も少し不安そうに、マージョリーを見ていた。

二人もまた、自分がマージョリーにとって何なのか、気になったらしい。

(……私にどう答えろってのよ)

マージョリー自身にすらわからないのに。

心の中で愚痴るマージョリーに、意外なところから助け船が出た。

「何なに？　このキレイな女の人、名護くんの知り合い？」

一人蚊帳の外だった恵が、二人の間に割って入る。

何処か焦っているようにも見えた。

「あーいや、知り合い………というか何というか」

「いいから名護くん、はっきりしなさい!」

今度は名護が言い淀む番だった。

はっきりしなさいも何も、奏夜こそすれ、名護とマージョリーにはほとんど接点はない。

せいぜい“刃を交わしあった仲”とでも言うべきか。

「何!? 私に言えないような仲なワケ!」

「め、恵、首が絞まる首が絞まる! 何をそんなに怒る必要が……」

「お、怒ってなんかいいわよ! いいからさっさとあらいぎらい吐いちゃいなさい!」

……ある意味、典型的とも言える夫婦のすれ違いに、

「……なあ、あれどうすりゃいいかな」

と佐藤が、

「さあ……？」「こはやっぱり止めたほうがいいのか」

と田中が、それぞれコメントして、

「ツヒヒ、やめとけやめとけ。痴話喧嘩にゃあ首突っ込まねえ方がいい」

声を潜めたマルコシアスが、ニヤついたような笑い声で答えた。

「ちあて、唇飯唇飯っ」と

午前の授業を滞り無く終えて、奏夜は弁当片手に屋上へ向かった。

弁当喰う時に、夏の青空ってなんかオツだよね。という思いつきの結果である。

「そう言えば、坂井達も今日屋上って言ってたっけか」

正確には、シャナ、悠二、池、吉田の四人だったが。

「ふむ。たまには生徒と交流を深めるのも悪くないかもな」

言いながら、奏夜は屋上まで辿り着き、鉄扉に手をかける。

「やめて!!--」

開けた瞬間、飛び込んできたのは鋭い一声。

「しゅっしゅっ。」

目をぱちくりさせて、奏夜は事態の理解を急ぐ。

えっと……吉田が泣きながら弁当放り捨てて、坂井と池がそれを見て絶句して、平井はきよとんとして……。――。

……すみません。理解が追いつきませんでした。

「た、頼んでないよ、池君！　こんなこと――！」

「よ、吉　」

「私、そんなのじゃないの！　違うの――！」

吉田は駆け去り、奏夜に目もくれず、階段を駆け降りていった。

一連の光景に、その場にいた全員がフリーズしていた。

「ちょっと、席外してくれないか？」

「？ ……うん」

悠二の言葉に素直に従い、シヤナは屋上から出ていく。

その時、奏夜と目が合った。

「あいつ、どうしちゃったの？」

「……さあな」

シヤナの問いをはぐらかし、奏夜は彼女と入れ違いに屋上へと入る。

「先生」

「あー、お邪魔だったかしら？」

「……いいえ、むしろいてくれるとありがたいです」

悠二が反応の無い池に代わり、苦々しく笑う。

「何処から聞いてました？」

「吉田がシャウトしたあたりから」

奏夜は、俯く池に視線を移す。

さっきは軽く動揺してしまったが、今なら状況は大体わかる。

簡単に言っで、池は悠二に怒っていたのだ。

今朝のことで落ち込んだ、吉田の代わりに。

自分が少なからず好意を抱く少女の代わりに。

(シヤナと吉田の間をフラフラしてる坂井に苛立って、けどそれは吉田が望んでいたわけじゃなくて……)

だからこそ『頼んでないよ!!』か。

(他人の厚意におんぶだつこな吉田にも問題はあるけどな……)

それはまた、後で問い質すとしよう。

今はこの悩める少年だ。

「池、こんなこと言われなくても分かると思うが、お前 いや、お前らのために言っておく。俺は吉田を慰めるとは言ったが、坂井を糾弾しろとは言っていない」

「っ！ 何も池はそんなつもりで言ったんじゃない……」

「いいよ、坂井。悪いのは僕だ」

悠二の弁明を、池は遮った。

奏夜は、悠二と池を交互に見て、溜め息をつく。

「まったく、本当にガキってやつは。」

「……まあ、俺にも責任が無いわけじゃないからこれ以上は言わん。ただ、謝るべき人間には謝っとけ」

わかってます、と頷いて、池は坂井に向き直る。

「……すまん、坂井。さつきも、いきなりカツとなっちゃって」

「いいよ。おまえの言った『半端な気持ちで相手を傷つける』って
いうのは……ホント、情けないけど……全然間違っていないさ」

お互いに覇気のない声で謝る。

奏夜は取り敢えずフェンスに寄りかかり、お握りを頬張る。

「……おまえでも失敗するんだな、池」

「する、みたいだな。するとは思わなかった……。なんていうか、
お節介が過ぎたっていうのかな」

「後悔先に立たずだ。次に生かせ次に」

さらりとした口調だったが、隣にいた悠二にも奏夜が「池を慰めて
るんだろうな」というのは感じ取れた。

それからしばらく、悠二、池、奏夜は手持ち無沙汰に青空を眺めていた。

無言のまま、陰鬱になりかける気持ちを叱咤して、悠二は池に聞く。

「なあ

ん
」

「……吉田さんのこと……好きなのか？」

「腹減った」

「お腹すいた」

校庭裏庭の木。

枝に止まる二匹のコウモリがいた。

キバットバット三世とキバーラである。

「奏夜のヤツ、昼飯食べ終わったら差し入れ持ってくるって言ったのによぉ〜」

「しかもそれまで隠れとけだなんてえ……。お兄ちゃん、もしかして奏夜、私たちもう忘れちゃってるんじゃない?」

「大いに有り得るな」

キバットとキバーラの予想、大正解。

すっかり屋上で黄昏ている主を待ちながら、キバットとキバーラは枝の上でお腹を鳴らす。

「……………むむ?」

ふとキバットが、木の下景色に目を向けた。

「どしたのお兄ちゃん」

「キバーラ、下、下」

お笑い芸人のようなフレーズに誘われ、キバーラも同じように裏庭を見る。そこには、二つの人影。

「あれって、シヤナちゃんと吉田さんかしら？」

そこにいたのは、目許に涙の跡を残す吉田と、彼女を追いかけたシヤナ。

ただ 二人の間には、かなり近寄りがたい雰囲気があった。

やがて 吉田が、意を決したように口を開く。

「ゆかりちゃんは、ずるいよ」

「……何が」

シヤナは何故か、この問いかけに恐怖心を覚えていた。

謂われのない侮辱ともとれる。

だが、例えそうだとしても、シャナは言い返せなかった。

ただ、怯える。

吉田は、決意を込めたまま、シャナにその感情を突き付ける。

「坂井君のこと、好きなんでしょう」

「っ!!」

心臓が脈打ち、衝撃が身体を、心を駆け抜ける。

(……好き？ 私が、悠二を……？)

押し潰されそうな圧迫感が、胸を締め付ける。

なんだろう。

吉田の言葉は、自分の中の何かが、覆されてしまっような、凄まじい力だった。

(きゅー) ナニナニ? この急転直下なラブコメパート!

(おいキバーラ、身を乗り出すなって! 見つかったまっだろうが!)

(お兄ちゃん何言ってるのよ! こんな美味しい展開だからこそ、身を乗り出して見る価値があるんじゃない!)

(だからって今見つかってみる! 逆に俺様達KY路線まっしぐらだぞ!)

(大丈夫よ、その時は私、お兄ちゃん置いて逃げるから)

(怪しい笑みを浮かべるな、我が妹よ! 本当にやりそうで怖いわ!)

キバーラがブラックな一面を覗かせる間にも、二人の会話は続いていく。

「なのに、素っ気なくして、知らない振りして、なのに、私よりもずっと、ずっと近くについて……ずるいよ」

「……………」

シヤナは、まるで言い返せなかった。

吉田の気迫に気圧されていたのだ。

その後、シヤナがここに来るまで、吉田はずっと考えていた。

(私って……なんていやらしい子なんだろう)

いつも優しく、自分を助けてくれた池に甘え、自分が聞けなかったことをあっさり聞ける彼に嫉妬して、あんな酷いことを言ってしまった。

『お前は色んなことから逃げ過ぎだ。ちゃんと向き合え』

先生も、教えてくれていたのに。

結局自分で動けなかった。

(誰のせいでもない。全部、私の覚悟が足りなかったから)

私の覚悟　それは。

(誰かを好きになったなら、悔いは残しちゃいけない。ただ、最後まで好きでいる)

ちゃんと向き合って、逃げ出さずに。

凄く怖いけど　すべてに向き合つのは本当に怖いけど。

それでも、やるしかない。

彼を　好きでいたいから。

「……な、なんでお前にそんなこと言われなきゃならないのよ」

「言う資格、あるもの」

シヤナの威圧感は、もはや吉田にとって何の意味も為さなかった。

「私も、坂井君が好きだから」

「!?!」

彼女の突き放すような言い方は、吉田にとって薄っぺらな精神武装でしかない。

『お前は平井には無いものを持ってる』

今なら、わかる。

奏夜の言っていたことが何なのか。

(ゆかりちゃんは、怖がりだ)

“その感情”がなんなのかわかっているはずなのに、肯定も享受もせず、否定し、拒絶する。

なのに、自分以外の誰かが、その感情を見せようとするれば、ただ怯えるだけ。

(それが先生が言っていた、私が持っていて、ゆかりちゃんが持っていないものだ)

私は、この思いを受け入れられる。

ゆかりちゃんは、この思いを拒絶する。

それが、二人のあまりに大きすぎる違いだった。

だから、

(負けない)

ゆかりちゃんには、負けない。

「私……私、決めたの。もう、あやふやなままにはしない。って。他の人にもしてもらったことを期待したり、頼ったりしない……自分で、頑張って、やってみようって」

「……あ」

シヤナの胸の痛みは止まらず、吉田の決意も衰えない。

950

自分が立っている場所がぐらりと揺れる。

「私、坂井君にもう一度、今度こそはつきり自分の口で、好きです、って言う」

「っだめ!..!」

シヤナは叫び、理解した、理解してしまった。

曖昧だった気持ちだが、はっきり形を持って具現する。

（私が、悠二を　私は、悠二を　）

嫌だった。

誰か違う人間が、悠二と話したり、一緒にいることが。

それは誰でもない、自分の本当の気持ち。

奏夜が見抜いていた“好き”という感情。

「だめよ、そんなの！！　言っちゃだめ！！」

「ううん、言う。決めるのは坂井君。好きだ、って言うてもいない
ゆかりちゃんには、負けない……！！」

お互い、一步も譲らなかった。

シヤナは崩れそうになる脚を叱咤し、涙をこらえ、あらん限りの力で、宣言する。

「私、私だって　　！！」

その時　　再び世界が閉じた。

山吹色の霧が漂い、目の前の吉田が、全ての動きを停止した。

（えっ、何なの、この変な霧！？）

（自在法だ！！）

固唾を呑んで、シヤナと吉田のやり取りを見ていたキバットとキバ
ーラムも、突然の事態に動揺を隠せない。

「　　」

片や、シャナの心に浮かぶのは動揺ではなかった。

「っな、に、すん、のよ!!」

怒号に呼应し、灼眼、炎髪、黒衣、大太刀『贄殿遮那』。

それらが全て、自分の使命に加え、やり場のない怒りと共に顕現した。

「すぐに聞かせてやる！ 私の気持ちをおまえなんか、全然、悠二は、私と、ずっと、もっと、たくさんあるんだから!!」

時を止めた吉田に、シャナは烈火の如く、咆哮した。

「おまえなんか、絶対に負けない!!」

『炎髪灼眼の討ち手』、その魂の叫びを、二匹のコウモリだけが聞いていた。

第十一話・トライアングルノつがいの愛染兄妹・Aパート（後書き）

えー、まだ完全復活とまでは行きませぬが、取り敢えず仮復活ということで、投稿させて戴きます。

しかし 年末から時が止まっとるがなこの小説；

・愛染兄妹。奏夜と少し仲良くなってますが、奏夜は結構危ない橋渡ってます。ソラトを一言でも馬鹿にしようものならば、その場でバトルでした。

シユドナイの本格戦闘も次回に回します。

・恵、微妙な嫉妬。名護さんは浮気とかやろうと思っても出来なさそうなんです……信頼しつつも心配になるのが心の複雑さ。

・冒頭で奏夜が少し話していましたが、この前（っていつても1月くらいですが；）エンジェル先生の『デルタと黄金の不死鳥』に、奏夜が出演してます。

この場を借りまして、エンジェル先生、ありがとうございました
m () () m
その話では、奏夜の意外な一面も出てますので、未読の方は是非見
てみて下さい。

さて、次回はようやくバトルパートです。

『キバ不遇アイテム休載企画』の名の元に（笑）、また新たな不遇設定も出していきますのでお楽しみに！

第十一話・トライアングルノつがいの愛染兄妹・Bパート

「ど、どうしたんですよー!？」

その違和感が付いたマージョリーは、人目も憚らず叫ぶ。

「ど、どうしたんです、マージョリーさん？」

「姐さん？」

「あんたたち、今すぐ『玻璃壇』に向かいなさい」

その言葉が意味するところに気が付き、二人は飛び上がらんばかりに驚く。

「う、嘘でしょ!？」

「“徒”ですか!？」

「何だと!?!」

恵に締め上げられていた名護もまた、事態への緊張を露にする。

「本当か、『弔詞の詠み手』」

「こんなつまらない嘘、つくわけないでしょうが!」

「で、でも姐さん。前に『これだけの騒動が起こったこの町には、もう“徒”は来ない』って……」

「私だつて間違つときは間違つわよ! さあ、いいから早く!」

二人を怒鳴り付けるマージヨリーの傍らで、恵だけが状況を把握出来ずにいた。

「名護くん、“徒”って奏夜くんの言つてた……」

「ああ、新しい敵だ。『弔詞の詠み手』。佐藤くと田中くんが行く場所は、安全な場所なのか?」

「? まあ、他にいるよりかはね」

「恵もそこに避難させてくれないか。彼女は事情を知っている」

「……いいわ。邪魔しないならね」

名護は頷き、恵に緑と黄色のラインが入ったカードを手渡す。奏夜から預かっていた、二枚目のゼロノスカードだ。

「恵。これを持って行け。“封絶”の中でも動けるはずだ」

ちなみに由利は嶋やマスターと一緒に、御崎市外のテーマパークへ遊びにいっている筈なので、心配はいらない。

「名護くんはどうするの？」

「無論、戦いだ。私はイクサの資格者だからな」

「……うん。わかったわ」

恵は多くを問うことなく頷く。

私がいても、名護くんの足手まといになるだけ。それは即座に理解していた。恵の心中を察してか、名護は笑いながら彼女の肩を叩く。

「また、時間を作るよ。今度は由利と一緒に出掛けよう」

「絶対よ。忘れたらひどいんだから」

「ああ、楽しみにしていなさい」

恵が笑い返したのを見て、名護は佐藤と田中と言う。

「恵を頼む」

『は、はい!』

イマイチ状況は飲み込めなかったが、とにかく「二人は事情を知っている」と佐藤と田中は理解した。

「ほら、さっさと行きなさい。グズは嫌いよ」

「りよ、了解! 頑張ってくださいね!」

「それじゃ行きます、お気をつけて、姐さん!」

二人が駆け出し、恵もそれを追っていく。

(……頑張ってください? お気をつけて?)

マジジョリーが愉快さに思わず表情を崩したのを、名護は見逃さなかった。

「いい協力者だな」

「ただの子分よ」

慌てて表情を引き締める。

「さて、と。今の私はどこまでやれるのかしら」

以前奏夜に言った戦う理由、それはまだ取り戻せていなかった。

「何を悩んでいるのかは知らないが、戦いに雑念は枷だ。気を引き締めなさい」

「ヒツヒ、キバの兄ちゃんに続いての叱責だあな」

「お黙り」

マルコシアスを軽く叩いて、存在の乱れを探り当てる。

「近くのデパートね。火の手が上がってるみたいだし、ナビが無くてもいけるでしょ」

「わかった。向こうで合流するとしよう。恐らく君の方が早く着く」

「ふん、そっちが来るころには終わってるわ」

先行くわよ、と告げ、グリモアに乗って飛び去っていく。高飛車な物言いに名護は溜め息をついた。

「さて、まずはイクサリオンを取りに行った方がいいな」

「……」

悠二と奏夜は同時に、その違和感を感じ取る。

（自在法！？）

山吹色の霧が、周囲を覆っていく。これが意味するのは、戦い。
……………。

（ヤバい！）

そう思ったのは奏夜だった。
隣で池が停止したのを見たところ、これは“封絶”と似たタイプの

自在法。

つまり “悠二からすれば” 一般人である奏夜も、停止しなければならぬわけ。

「先生、池!」

「……………」

つ、つらい! 地味につらい! 某忍者マンガで「人間は動かないことが一番難しい」とか言ってたけど確かにそうだ!

すいません今までの戦いで封絶の中にいた人! ずっと「気楽そうでいいよな」とか思ってたけど、これかなり苦行です!

そうこうしているうちに、シヤナまでも屋上まで駆け上がってきた。更にクリア難易度アップ。

「シヤナ、と、“徒”は裏庭かい!」

「えっ?」

「さっき、負けないとか怒鳴ってただろ?」

「あ」

しまった。という風な顔をするシヤナ。
さっきの吉田への宣言が聞こえていたことへの焦りと、それを悠二
が誤解して捉えている安堵が半々だ。

「いいの」

「え、だって」

「いいの！ ……そっちじゃない。“徒”じゃないの、大丈夫」

「……？ わ、わかったよ」

曖昧に納得する二人の前に、「おい」という気の抜ける声が割り
込んでくる。

「悠二ー！」

「シヤナちゃんー！」

「キバーラー！」

「キバットー！」

シヤナと悠二は、二匹のコウモリを出迎える。

「よかったぜい、近くに二人ともいて」

「町が凄いいことになっちゃってるわよ」

確かにキバーラの言う通り、ここから見える、山吹色の霧が御崎市
全てを覆う光景は、中々に不気味だった。

「じゃあ、この気持ち悪い封絶みたいな感じは……」

「近付いてくる方の“徒”の仕業ね」

「それだけじゃない。市街の辺りにも凄く大きな奴がいて……戦つ
てる」

「相手は『弔詞の詠み手』と……名護も一緒か」

「名護さんも？」

悠二がキバットに聞き返す。

「ああ。だか敵もバカ強いぜ。近付いてくる方も、名護達が戦って

るほどじゃあないが、かなり強い」

「相手は最低二人……私は近付いてくる方を片付ければいいわけね。アラストール」

「うむ。戦場の環境を操る自在師のようだ。敵本体だけでなく、周囲にも気を配るのだぞ」

「うん」

その後の話し合いで、シャナが“徒”の相手、悠二はこの自在法の核となる宝具探し（最初シャナは渋っていたが）、ということになった。

「俺様達はキバを呼んでくるぜ。……幸い近くにいるみたいだしな」

キバットは止まったフリをしている奏夜を見て「お前も大変だな」みたいな笑みを浮かべた。

ほっとけや、と奏夜が心中で毒づいたのは言うまでもない。

「坂井悠二、断っておくが、お前の行為は危険も付きまとう。この自在法がどのような力を持っているか、それも現状では判断できぬ。あるいは“燐子”の現れる可能性さえある」

「……僕が言い出したことだ。その責任もとるよ」

「うむ」

「きゃ〜、悠二くんカッコいい〜」

悠二の返答に、アラストールは珍しく満足げな声で答えた。
キバーラのはやし立てには苦笑いするばかりだが。

「じゃあ、もう行くわ。出来る限り離れて戦うから、その間に学校から出て」

「うん」

「頑張つてね、シヤナちゃん！」

「ありがとう」

キバーラに笑いかけ、飛び出しかけたシヤナを悠二が「シヤナ！」と呼び止める。

「なに」

「学校……皆を、守ってくれるかい？」

シヤナは数秒間を置いて、

「できる範囲での最善を尽くすことだけは、約束するわ」

「ありがとう。僕もやるよ」

「分かってるわよ」

ふと、悠二は思い立ったことを言った。

「なんか役に立ったら、ご褒美でもくれよな」

「っ」

悠二のそんな言葉に、シャナの頭にここしばらくの出来事がフラッシュバックした。

「ば、馬鹿!!」

「っ!？」

顔を真っ赤にしたシャナが唐突に叫ぶ。

「ば、馬鹿はないだろ」

「うるさいうるさいうるさい！ やってもないことで、見返りを期待するんじゃないわよ！」

「分かった分かった！ そんなに怒らなくても……」

「いや、青春だ（ね）」

そんな二人を見ながら、キバットとキバーラはニヤニヤ笑いを押しえられなかった。

ようやく気持ちを落ち着かせて、

「じゃあ、あとで」

「うん」

それを最後に、シヤナは戦場に向けて跳んでいく。シヤナの後ろ姿を見送って、悠二は「よし」と意気込む。

「僕も行くよ」

「ああ、頑張れよ」

「シヤナちゃんに良いとこ見せなきゃだしね」

「あはは。うん、やるだけやってみるよ。キバにもよろしく」

悠二が階段を降りていくのを確認して、

「奏夜、もう大丈夫だぜ」

「……………つぶはあ！」

奏夜は大袈裟に息を吐く。
が、二十分はフリーズしていたのだから、それも宜なるかな、という話だ。

「あーぶーねー！」

「感謝しろよ。トークでシャナちゃんと悠二の気を逸らしてやったんだからな」

「ああ、後で飴ちゃんくれてやるよ。ちっ、身体固まっちゃまった。多分俺、今なら仙術チャクラ練れるぞ」

「ファンガイアの魔術に蛙組手は無かったと思うけど」

キバーラが冷たく突っ込む。

「で、どうすんでえ。シャナちゃんの方を助けに行くのか？ そ

れとも名護と『甲詞の詠み手』の方か？」

「いや、俺の相手は別だな」

奏夜が「聞こえないか？」と言うと、キバットとキバーラも気が付く。

~~~~~

警告音。

ファンガイア出現を表す、ブラッディローズの音色だ。

「な？　街全体が封絶に覆われている。これに乗じて動くファンガイアがいても不思議じゃない。そっちを先に終わらせよう」

「けどよぉ、今回の相手は複数だぜ？　シヤナちゃん達だけで足りるのかよ」

「そっちも心配いらねえさ。キバーラ、今すぐキャッスルドランに向かってくれ」

「えっ、何ですよ？」

首を傾げるキバーラに、奏夜はニヤリと口の端を吊り上げた。

「ゲームばかりで運動不足なあいつらにも、活躍の場をやるんだよ」

場所と時間は移って、とある広い大通り。

山吹色の爆炎を挨拶に、マジヨリーの前に現れたのは、三人の人影だった。

紅世の徒“愛染兄妹” ソラトとティリエル。

その護衛である紅世の王“千変”シュドナイ。

互いの挨拶もそこそこに、両陣営は三対一の闘いを始めようとしていた。

「さあ、およろしいわよ、お兄様」

「うん！」

最愛の妹、“愛染他”ティリエルの許可で、鎧と大剣『吸血鬼』を携えた“愛染自”ソラトは、獲物へと飛び掛かる。

「っ舐めるな！」

大剣を避け、群青の炎を走らせる。  
しかし、ソラトの剣閃はそれを瞬時にかき消す。

「舐めているのはどっちな」

シウドナイの声に次いで、再び大剣の殺気がマージョリーを襲おうとする。

だが次の瞬間、ソラトの身体は吹っ飛ばされていた。

「うわあっ!?!」

「お兄様!?!」

ソラトの叫びとティリエルの悲鳴が重なった。  
残るマージョリーとシウドナイは、ソラトを吹き飛ばした衝撃波の出所を目で追う。

「危なかったな」

「はっ、あの程度、ちゃんと防げたわよ」

マージョリーの後方には、イクサナツクルを構えた名護が立っていた。

「人間だと？」

シユドナイは少なからず驚きを示す。

「ミスセス、では無いな。かといって同業者でもない　貴様、何者だ」

「何者でも構わないわ！」

ティリエルが怒りを露にする。

973

「ゴミ虫風情が、お兄様を傷つけたことを後悔させてあげますわ！」

「ふん、ゴミ虫とは随分だな。正義の味方と呼びなさい」

名護はイクサベルトを巻き、イクサナツクルを掌に押し当てる。

『レ・ディ・ー』

「変身！」

『フ・イ・ス・ト・オ・ン』

真横に構えたイクサナツクルをベルトにジョイント。

圧縮されていたアーマーの映像が名護に重なり、クロスシールドが展開。

仮面ライダーイクサへと姿を変える。

「その命、神に返しなさい！」

名乗りを挙げるイクサ。三人という数に臆ないのは、歴戦の経験の賜物だった。

「姿が変わっただと？」

「……あなた、一体何なの」

「誰でもない。ただの人間だ。行くぞッ！」

イクサカリバーを構え、トリガーを引く。

銃口が火を吹き、銀の弾丸が躍り出る。

「っせい!!」

マージョリーもまた、群青の炎弾を放つ。

「フンッ！」

シュドナイは腕を虎の頭部に変化させ、炎弾と弾丸を全て薙ぎ払った。

だが、イクサの弾丸の幾つかは、シュドナイの腕に食い込んでいる。

「ただの弾丸ではないな」

「対ファンガイア用の特注品だ。貴様達“徒”も無事では済むまい」

言いつつ、イクサは銃撃を続ける。

「ファンガイアだと？ 成る程、そういうことか」

「シュドナイ、どういうこと？」

攻撃を防ぎながら、ティリエルが尋ねる。

「少し前、噂で人間とファンガイアが和解したという話を聞いたことがないか？」



「ファンガイア　ああ、あの節操なく存分の力を喰うケダモノ共」

「そうだ。恐らくあの騎士は、ファンガイアに相對する人間の一派という所だろう。　　抜け目がないな、『弔詞の詠み手』。協力する人間を選ぶ時も、能力の高さを買うわけか」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ。そいつとは獲物が同じなだけッ！」

イクサとマージョリーの嵐のごとき攻撃。

だが、決定打にはならず、闘いは平行線を辿っていた。と突然、後ろに下がるソラトが、

「ちがうよ！　こいつらじゃない、こいつら、持ってないよ！」

「なんですって、お兄様？」

兄の緊張感のない一声に、ティリエルが目を剥く。

「持っていない？　　どういことだ」

「あいつらの狙いは、炎髪の嬢ちゃんが持つてる『誓殿遮那』って刀なんだよ」

イクサの疑問に、マルコシアスが小声で答える。

「刀だと？」

「ああ。“天目一個”っつー化け物ミステスが持ってた刀でな。こいつらはその坊っちゃんの我が儘で、その刀をいただきに来たってわけさ」

「そんなことのために、これだけのことを」

「都合なんてコロコロ変わるわよ。あんた達人間と同じ」

何を今さらという風に、マジョリーが鼻を鳴らす。

「まあ、なんて無駄骨でしょう。ご挨拶と思ったら人違いだったなんて……」

ティリエルは肩を落とした。

「今で本命にも気付かれたでしょうし、最悪、威力圏内から逃げられてしまうわね……シユドナイ、この方達を足止めしておいて。『オルゴール』が起動したら、改めて指示を出すわ」

「わかった」

シウドナイの同意を聞き、ティリエルは自分とソラトの回りに、山吹色の木の葉を嵐の如く纏い、その姿を消した。

「あんなのが今回の依頼人とは苦勞するわね、“千変”。そろそろ仕事から解放されてみる？」

「君こそ、不調を押しして励むほどの仕事でもなからう。永の休暇でも取ったらどうだ？ その白騎士も、人間なら尚更厳しい仕事だろう」

「フン、生憎と苦勞に見合うだけの報酬は貰っている。休暇ならこれが終わった後、家族とじっくり取らせてもらうさ。イクサの力を人間の力をなめるなよ。“紅世の王”」

「　　ツクク、面白い男だな。いいだろう、人間の力とやら、拝見させてもらおうか」

三人は虎の腕、群青の炎、イクサカリバーをそれぞれ構える。混じり合う闘志が臨界点に達した時、沈黙した大通りを轟音が支配した。

『甲詞の詠み手』『マジヨリー・ドー』&『仮面ライダーイクサ』名護啓介vs“千変”シウドナイ。

スタート。

「っ！」

一方その頃、ブラッディローズの音色に導かれるままにマシンキバーを走らせていた奏夜。

突如彼の視界を、紫色の光が覆った。

（攻撃か！）

マシンキバーを横向きに急停車させ、光弾の余波を最低限に抑える。

「ようやくお出ましか。キバ」

煙が霞んでいき、奏夜は襲撃者の姿を捉えた。

「……！」

しかし、そこにいたのは奏夜にとって、意外な人物だった。

「久しいな、貴様に滅せられて以来か」

「お前……、確か兄さんの会社にいた」

スーツに身を包んだ初老の男性　黒沢は皺の刻まれた顔を歪める。  
黒沢　ファンガイアの中でも地位は高く、かつては奏夜の兄、太  
牙の世話役を勤め、彼が成長してからは、彼の会社『D & P』で側  
近も兼任していた人物だ。

「何故、お前が？　お前は俺が確かに倒したはずだ。それも再生  
体でもなく、意思を持った個体として復活するとは　一体、何の  
トリックを使いやがった」

「ふん、出来損ないの貴様に、逐一説明してやる謂れはない。話は  
聞いているぞ。人間とファンガイアの共存を果たしたとな。　　貴  
様といい、キングの息子といい、ファンガイアの面汚しめが」

黒沢は吐き捨てるように言う。

奏夜はその言い草に、不快感を露にした。

「おい頑固頭。俺の前で兄さんを馬鹿にすることは許さないぜ。  
兄さんは、誰よりも強く、優しさを持った真のキングだ」

「キングに優しさなど必要ない！　必要なのは他者を圧倒的なまでに

「屈伏させる力だ！」

「……ああ、そうかい」

奏夜はマシンキバーから降り、黒沢と対峙する。

「なら試してみるか？ お前の力とやらで、ファンガイアの面汚しに勝てるかどうか」

「以前のようにはいかんぞ。この私の手で貴様に引導を渡してくれる」

言って、黒沢の姿はヘラジカをモチーフにした異形　ムースファ  
ンガイアへと変貌していった。

「キバット、来い！　こいつをブチのめして、規制ギリギリの辱しめを受けさせてやる！」

「おおともよ！　水車に磔にして大回転も追加しとけ！　ガブッ！」

キバットが奏夜の左手に噛み付き、アクティブフォースを注入。彼の顔には、ステンドグラスの模様が浮かび上がる。

「変身！」

巻かれたキバットベルトに、キバットを逆さまに装着。  
光の鎖が弾け飛び、コウモリを模した仮面、キバ・ペルソナが輝く。  
奏夜の姿は仮面ライダーキバへと変身を遂げた。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

挑発するかのように指を突き出し、反逆者への宣告を下す。

「切り刻んでくれる……！」

ムースファンガイアが召喚した剣を手先で研ぐ。

「先に俺が蹴り飛ばしてやるよ！」

「そのとおり！」

キバが手を大きく広げる独特の構えを取った。  
刹那、両者の目に火花が散る。

『はぁッ！』

次の瞬間には、キバの拳とムースファンガイアの剣が交錯していた。

『仮面ライダーキバ』 紅奏夜 vs ムースファンガイア。

スタート。

現在のところ、御崎市で行われている三つ目の戦い。

シウドナイを残して戦線を離脱したソラトとティリエルは、存在の力を追ってきた、自分達の真の標的 大太刀『贄殿遮那』を持つ フレームヘイズ、シャナと対峙していた。

ソラトの斬撃、ティリエルの操る蔓を、上手く路面を蹴ることで回避し、信号機の上に着地する。

「戦力を見誤ったか」

「やるわね」

「ふふ、なにをしても無駄ですわよ。この『揺りかごの園』クレイドル・ガーデンの中で  
の私達は無敵」



ティリエルが指を一撫ですると、何百もの山吹色の蔓が、通りを津波のように飲み込んでいく。

「さあ、私は手出しいたしませんわよ。せいぜいの奮闘をなさって」

「ちっ！」

「『にえとののしやな』！」

蔓に乗り、跳躍してきたソラトが大剣『吸血鬼』を振り下ろす。  
があん！ という重厚な音と共に、『贄殿遮那』と『吸血鬼』がぶつかった。

「っっ！」

僅かに力負けし、シヤナが怯む。  
無論、ソラトはそれを見逃さない。

「は！」

ソラトが存在の力を注ぎ込むと、『吸血鬼』の刀身で揺らめく波紋が、その速さを増した。

「ぐっ!?!」

突如、全くノーマークだった方向から来た斬撃が、シャナの右首筋を浅く切り裂いた。

「すごいだろ、ボクの『ぶるーとざおがー』!! “そんざいのちから”をこめれば、けんにさわってるあいてが、きずをおうんだ。こんなふうに!!」

それこそ子供のような無邪気さで、ソラトは狂気を振り翳す。

「あっっ!」

ソラトの絶妙な技巧から刀を離すことも出来ず、シャナの肌にも更なる傷がつけられていく。ぎりっ、と歯噛みすることで痛みを耐え、シャナはソラトへ鮮血が滲む足を突き出そうとした。時だった。

「ふんっ!」

大きな拳が、ソラトの身体目掛けて強烈な一撃を叩き込んだ。

「つぐう!？」

奇声を漏らし、ソラトは後方へ仰け反る。

「!!」      「っだぁ!」

機を逃さず、シャナはソラト目掛けて鋭い蹴りを炸裂させた。バランスを崩していたソラトは、数メートル先まで路面を滑る。

息を切らして、シャナは自分を助けた拳の持ち主を見る。

「だい、じよぶ、か？」

「お前……!!」

そこにいたのは、タキシードに身を包み、髪をオールバックにした大柄な青年。力だった。

(どうして? 封絶は張られてるのに)

シャナの疑問が口に出かけた矢先、新たに二人の影が彼女の隣に立つ。

「この姿で会うのは初めてだな、『炎髪灼眼の討ち手』。中々、面白い見せ物だった」

「お姉ちゃん、久しぶり〜」

タキシードを着崩した鋭い風貌の青年　次狼が、シャナに乾いた拍手を送る。

セーラー服に身を包む幼さの残る少年　ラモンは、この場に似つかわしくない明るい明るさを振る舞った。

「ふん、何やら激しく盛り上がってるようだな。どれ、俺達も混ぜさせて貰おうか」

「お兄ちゃんに頼まれちゃったしね。焼き芋のおつり分は働くよ」

「おお、あばね」

「……お前ら、何？　フレームヘイズなの？」

シヤナは未だに理解が追いつかない様子だった。  
彼女はラモン、力との面識はあるが、彼らの素性は焼き芋屋としか知らない。

いきなり現れて、手を貸すと言われても、反応に困るだけだ。

「 貴様ら、もしかキバの従者か? 」

アラストールの問いに、次狼、ラモン、力は頷く。

「アラストール、こいつら何なの? 」

「シヤナ、此奴らはキバの使役していた武器だ」

「えっ? 」

理解出来ず、シヤナは首を傾げる。

「なんのこつ」

これには次狼も、不満そうに眉を寄せる。

「おい、俺を真南川に道連れにしておいてそれはないだろう」

「真南川？」

「あっ！」

思い出した。

フリアグネとの戦いの時、キバが貸し与えてくれた剣　ガルルセイバー。

シヤナはそれを持ったままフリアグネに撃たれ、真南川に落下したことがあった。

「あの時の剣！」

「やっと思い出したか。まったく、あの後俺は大変だったのに」

「次狼ったら油断して風邪ひいちゃったもんねー」

「うるさいぞラモン。とにかく、キバの命は『炎髪灼眼の討ち手を可能な限り助ける』だったんでな。悪いが、勝手に助けさせて貰う」

「いや、助力感謝しよう」

「でも、アラストール」

信用……出来るのだろうか。それ以前に、こいつらは自分達にとつて、足枷にならないのだろうか。

「キバの助力なら是非はない。武器化してあの力なら、我等にとつ

ても不利益はなかるう」

シヤナは不安を覚えながらも、信頼する契約主の言葉に従う。

「わかった。けど私は、足を引つ張る奴は助けないわよ」

「ふん、そういう減らず口は俺の十分の一でも生きてから言っただな」

シヤナの突っぱねた物言いを軽くあしらって、次狼、ラモン、力が並び立つ。

「ティリエル、またへんなやつがきたよ！ きつちやってもいいかな？」

「ええ、勿論ですわお兄様。……けど、本当に余計な連中が多いわね。この街は」

新たなイレギュラーに、ティリエルは齒噛みする。

「ファンガイア風情が……！ 私達の、お兄様の邪魔をしないで下さるっ。」

テイリエルの言葉に、今度は次狼のみならず、ラモンと力も表情を曇らせる。

「ファンガイア？ 検討違いも甚だしいな。“愛染兄妹”」

「そーそー。僕達をファンガイアと一緒にしないでよね」

「おれたちは、ほこりたかき」

王の従者は、自らのプライドを乗せ、雄叫びを挙げる。

「ウルフェンだ！」

「マーマンだ！」

「フランケンだ！」

獣の咆哮と共に、次狼を蒼、ラモンを緑、力を紫のオーラが包んでいく。

異形の幻影が浮かび上がり、三人の姿がオーラと重なる。

光が消えると、そこに“人間”としての彼らはいなかった。



ウルフェン族の末裔　俊足を誇る蒼き狼、ガルル。  
マーマン族の末裔　水を支配する半魚人、バツシヤー。  
フランケン族の末裔　剛腕の人造人間、ドツガ。

キバの臣下たる彼ら、その真の姿だった。

「ウルフェン、マーマン、フランケン……まさか、13魔族の生き残り!?」

ティリエルは語り聞いた記憶を掘り起こし、驚愕する。

ウルフェン、マーマン、フランケン。

どれも全て、かつて栄えた滅ぼされた希少種族。

ファンガイアの手勢に屈し、滅亡こそしたものの、元来はファンガイアに勝るとも劣らぬ怪物達だ。

「……本ツ当に、どうなっているのかしらね。この街は」

計算外にも程がある。一体何人、人外存在を抱え込んでいるのか。  
だが、

(『揺りかごの園』がある以上、まだ戦うには十分だわ)

ティリエルは優位を崩さず、ソラトに寄り添った。

「よし、久々に暴れるぞお！」

バツシャーがはしゃぐように腕をあげ、

「ぶっ、つぶ、す」

ドツガが拳を打ち鳴らし、

「行くぞ、『炎髪灼眼』……！」

ガルルが爪を構え、鋭い歯を光らせる。

「えええ！」

彼らの変化への余韻もそこそこに、シャナの瞳にも再び力が灯った。

六人は標的を目に捉え、戦意の赴くままに飛び掛かっていく。

『炎髪灼眼の討ち手』 シャナ & アームズモンスターズ vs “愛染自  
” ソラト & “愛染他” ティリエル。

スタート。

闘いのトライアングルから燃え上がる戦火は、優しき日常を全て呑み込む。

次回、仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD！

「貴様らが勝てるものか……我が新たな主に！」

「弱気……？ 誰に、言ってるのよ」

「戦う気があるのか？ 君に」

「せめて、よき地獄を」

「僕に出来ることがあるなら、頑張らなきゃいけないんです」

「お前らが……、“紅世の、徒”？」

「それが、お前の……？」

「そう、愛」

【第十二話・メトロノーム／その想いは誰がために】

WAKE · UP!

紅蓮の鎖を解き放て!

## 第十一話・トライアングル／つがいの愛染兄妹・Bパート（後書き）

・「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

これ、一応オリジナルの決めセリフなんですが……センス無いなあ俺；

・今回の不遇救済企画。

強さのインフレにつき、後半に行くにつれてフェードアウトしていたアームズモンスターズ。

武器形態も使われなくなったし、魔獣形態は過去編で使われたには使われたけれど、戦籍はあまり良くないし……。みんな強そうなのになあ。

・ムースファンガイア。 覚える人いるのかな？ 一応説明しておく、一度だけ使われたエンペラーサンダースラップで倒されたヤツです。シンケンジャーの世界でもカイジンライドで現れました。

さあ、次回はバトルパートですよ。

不遇救済もまだまだやりますのでお楽しみに。

第十二話・メトロノーム/その想いは誰がために・Aパート(前書き)

「ハードボイルドとは、『固茹で玉子』の意から転じて、感情を交えず、客観的で冷徹な態度　つまり、非情な探偵を主人公とする推理小説のジャンルだ。

私立探偵フィリップ・マローウを主人公とした、レイモンド・チャンドラーの『大いなる眠り』等が有名だな。

男は時に、非情な決断を強いられることがある。

だが、男の人生の八割は決断、あとはオマケみてえなものだ。

どんな決断をし、その上でどんな人生に行くのかは　その人間だけが決められることなんだ」

とある私立探偵

第十二話・メトロノーム/その想いは誰がために・Aパート

「そっつ！」

「喰らえッ！」

マジョリーの火弾が、寸分変わらずターゲットに叩き込まれ、イクサのイクサカリバーが、シュドナイの伸ばした虎の腕を切り捨てる。

だが直ぐ様、シュドナイの放った紫色の爆発が、二人を吹き飛ばす。

『ちいっ』

「“全く本気を出せず”にこの戦闘力……さすがはフレイムヘイズ屈指の殺し屋だ。その白騎士も、人間とは思えん力を持っている。

だが、この“千変”シュドナイを倒すには弱すぎる」

イクサが切断した腕は紫色の火の粉になって弾け、また新たに、今度は右肩から、シュドナイの腕が生えてくる。

「趣味の悪い虚仮脅しね、“千変”」

「あれが、あの“王”の力なのか」

「ああ、フツー“徒”の連中は定めた姿を変えねーもんなんだがな。コイツはその場その場で姿をコロコロ変えやがるんだよ」

「文字通り、『変わりもの』というわけか。だがしかし、悪趣味なことには私も賛同するところだ」

「手厳しい評価をありがとう。」

「が、欲を言えば、素の自分を常に晒している、と言ってほしいな」

煙草を吸う余裕さえ見せ、シュドナイは片腕をみるみる肥大させる。

瞬く間にそれはスーツを突き破り、中から虎の剛腕が現れた。

(……よう、マージョリー。それと白騎士の兄ちゃん)

マルコシアスがグリモアから、マージョリーとイクサにのみ聞こえる声で話し掛ける。



(なによ)

(どうした、“蹂躪の爪牙”)

(ここは一旦退くぜ)

(何?)

イクサが怪訝そうな声になる。

(まだ闘いはこれからだろう)

(言い分はわかるがな、“千変”が只モンじゃねえのはもうわかったろ?)

“愛染”の張った妙な自在法もあることだしよ、ちいと体勢の立て直してやつさ)

(む、確かに一理あるが……お前たちはそれでいいのか?)

逆にイクサが聞き返す。しかし、返事は余りにもあっさりしたものであった。

(……そうね)

(……?)

それにイクサは違和感を覚えた。

二人の付き合いはほぼ皆無に等しい。

だが、自分が戦った時のマージョリー・ドーは、こんなに気軽さで闘いから身を退くような人格ではなかった。

むしろ、誰が止めようと闘いを求める戦闘狂……というイメージである。

何か、理由があるのだろうか？

イクサが勘繰る間に、マルコシアスが話を進める。

(つーわけよ。付き合わせちまうが……悪いな、白騎士の兄ちゃんよ)

(いや、私は構わない。敵を倒すのも重要だろうが、状況の把握が必要なも確かだ)

(決まりね。注意を引いたら、地下に逃げるわよ)

言うが早いか、群青の炎がマージョリーを中心に回りだし、刹那、まばゆい閃光が通りを包む。

「ぬっ!?!」

『イ・ク・サ・ナ・ツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

目眩ましながら、火弾とイクサの必殺技『ブロウクンファング』の衝撃波がシュドナイを捉えた。

「くっ!?!」

背中から生やした蝙蝠の翼を防御にまわし、マージョリーとイクサの攻撃を風ぎ払う。

が、注意を外した僅かの際に、マージョリーとイクサは砕いた

マンホールの下へと逃げ去っていた。

「まさか『弔詞の詠み手』が逃げを打つとはな」

手際の良さと、僅かの呆れを込めて、シュドナイは異形の翼を引っ込めた。

「あの白騎士も中々やるな。舐めてかかる訳にもいかないか」

しかし。

ふと、シュドナイは顎に手を当てる。

（異形を討つ白騎士、ね）

はて、何処かで聞き覚えがある噂だ。

（ババアに聞いたのは確かなんだが……いつだったかな）

確か『大戦』の頃だった筈だ。

フレイムヘイズ側に与し、同胞を幾人も討滅したとされる『白い騎士』の話。

「……考え過ぎか。あの騎士は人間で、あれは四百年も前の話だ」

意味のない考察を止め、シュドナイは、ぽっかりと口を空けた地下への穴を見下ろした。

「っせい!」

「甘いわっ!」

キバが拳を振るうと、ムースファンガイアは剣の腹でそれを防ぐ。

「ぬうんっ!」

直ぐ様剣が、キバの鎧を切り裂く。

「がっ!」

鎧から火花が散る度に、キバが仰け反っていく。

「どうした！ その程度か！」

「うるせえよっ！」

キバは右足のヘルズゲートで、剣の連撃を受け止め、そのまま腕ごと剣を蹴り上げた。

「だりゃあっ！！！」

機を逃さず、渾身のパンチを叩き込む。

「ぐっ……、ふん。腐っても王の兄弟か」

殴られた部位を見下げ、ムースファンガイアは呟く。

「しかし解せんな。何故『黄金のキバ』にならない？」

「……」

「私の力が分からぬ馬鹿でもあるまい。何より、私を滅した力は、『黄金のキバ』のものだったはずだ。」

その力を持った貴様を倒さなければ、私の復讐の意味は薄れてしま  
う」

「……うっせえな。こっちにも事情があんだよ」

出来ることなら、とっくの昔にそうしている。

いや、『黄金のキバ』どころか、通常のフォームチェンジすら儘ならないのだ。

（タツロットはあのヤローに“盗まれたまま”だし、次狼達は平井のとこだし……畜生、意外にピンチだな）

まあ。

（やるしかないんだけど、なっ！！）

再びキバが駆け出したのを見て、ムースファンガイアは、

「……まあいい。出し惜しみをするなら、それも構わん。その判断を後悔して死ぬがいい!!」

落とした剣の代わりに、右手から紫の波動を撃つ。

近くの地面が爆発したが、怯まずキバは突き進む。

しかし、キバの狙いは攻撃では無かった。

「ハッ！」

キバはムースファンガイアを、タイミングよく飛び越える。

「何っ!?!」

キバはムースファンガイアの後方に乗り捨ててあったバイク、マシンキバーに乗り込んだ。

「ド凄いのが来るぜえ〜?」



ニヤリと笑うキバットに、キバはベルトのケースから黄色のフエツスルを引き抜き、口にくわえさせる。

『ブロンブースター!!』

キバットは軽快な音色を吹き鳴らした。

現在無人のキャツスルドラン。

廊下の明かりに次々と火が灯り、その奥にある影を照らし出す。

黄金の彫像はドランポッドに包まれ、キャツスルドランから飛び出していった。

空の彼方から飛来した黄金の彫像『ブロン』はキバの頭上で二つに分かれ、マシンキバーのフロントと後方のエンジン部分にジョイントした。

『ブロン』。

その昔、著名な魔術師が製造したとされるゴーレムという名の人造モンスターだ。

内部に巨大な魔皇力を宿し、融合したもののポテンシャルを拡大に上げる力を持っている。

ブオン、ブオン！

威嚇するかのようなアクセルを鳴らし、後方のマオーブーストエンジンが爆炎を吐き出す。

それを推進力に、マシンキバーはムースファンガイアに特攻をかけた。

「！ くっ！！」

横っ飛びにそれを回避する。

「逃がすかつ！！」

即座にマシンキバーを反転させるキバ。

車体をウィリーさせ、反転した勢いそのまま、先端のブレイカーホーンでムースファンガイアを跳ね飛ばす。

「ぐおっ！！」

「よし！」

地に転がるムースファンガイアへ、だめ押し of 突進を加える。

「くっ、舐めるなよキバ！」

だが、ムースファンガイアは直ぐにダメージから復活する。

猛スピードで迫り来るマシンキバー！

「っはぁ！！」

ムースファンガイアはギリギリのタイミングでマシンキバーを再び回避。

更には、紫色のエネルギー弾を、乗り手であるキバの左肩に喰らわせた。

「うあっ！」

危ない。

ダメージは浅いが、バランスを崩されかけた。

(やるな。ブロンブースターのスピードにまでついてくるか)

やはり、一筋縄ではないかない。

( ヤツの言う通り、出し惜しみは無意味だな )

キバは再び、マシンキバーのアクセルを入れる。

「バカめ！ 同じ手が何度も通用すると思うか！」

今度は完璧にタイミングを合わせ、ムースファンガイアはエネルギー弾を乱射した。

耳を貫く轟音と共に、マシンキバーを駆るキバへ、弾丸は寸分違わず命中する。

乗り手を失ったマシンキバーが、虚しく横転した。

「ッ、ククッ、ハハハハ！ 最後は無様な散り様だったなあ、キバ！」

やった。

ついに、黄泉の淵から這い戻ってまで、果たすべき復讐を完遂した。

達成感に、口から狂笑とも言える声だけが飛び出してくる。

（クククッ、手土産はこれで十分だろう、何せキバの首だ。これで  
“我が主”の元での私の地位は磐石なものにな）

急に、ムースファンガイアの笑い声が小さくなっていく。

目の先は、横転したマシンキバー！。

その座席には　　。

（キバがない！？）

「同じ手なんて使うかよ、ばーか」

ザンッ！！

ムースファンガイアがその声に気付いた時には、もう彼の身体は叩き斬られていた。

「がふッ……！」

斬られた箇所を抑え、よろめくムースファンガイア。

（私の攻撃の粉塵を目眩ましに、バイクを足場に飛び上がったのかッ……！）

つまり、マシンキバーは囷。

注意を散漫にさせるための策。

「だ、だが、有り得ぬ！ 私の肉体を、素手で砕くなど……」

「素手じゃあな」

キバの手には、いつの間にか一本の剣があった。

だが、ガルルセイバーではない。

封絶の中にあるつとも、高貴な輝きを失わない、美しき黄金の魔剣。

「ザンバット……ソードだと!？」

ファンガイアに伝わる宝剣、ザンバットソード。

ファンガイアのキングに脈々と受け継がれてきた宝具であり、キバフォームでも扱うことが出来る。

然。無論、ファンガイアの外皮と言えど、この剣の前では紙切れ同

「馬鹿な!？」 その魔剣は、貴様のような出来損ないが扱える代物ではない!」

「四年前まではな。あれから俺が、コイツを扱う努力を怠ったのも思ってたか?」



そう、四年前の奏夜は、ザンバットソードを使用すると、剣に宿る邪悪な意思に操られてしまっていた。

制御するには、ガルル、バツシャー、ドツガが融合した幻影モンスター『ザンバットバット』が必要不可欠。

だが、奏夜はこの四年で、魔皇力の扱いにも慣れ、この剣をザンバットバット無しでも使えるようになっていたのである。

「 急所は外してある。お前には聞きたいことがあるからな」

キバはムースファンガイアを見下ろす。

「お前を蘇らせたのは誰だ？」

「……………」

「再生態が意思を持ったまま蘇るなんて聞いたことがない。今伝える魔術にも、そんなものは存在しない」

あのビショップでさえも、再生態に意思を持たせることは不可能だった。

「誰が、こんな真似をした？」

ザンバットソードをムースファンガイアの首筋に当てる。

ムースファンガイアはしばらく沈黙し、

やがて唸るような声を絞り出す。

「……貴様らに、勝ち目はない」

「？」

「黄金のキバも、サガも、青空の会の戦士も、闇のキバも、全てが無に帰る」

「何を言っている。俺の質問に答えろ」

「ハハハッ！ 何もかも終わりだ！ 人間は駆逐され、再びファンガイアが全ての頂点に立つ！」

ムースファンガイアは狂ったような笑いを止めようとはしない。

まるで、それが自分に残された唯一の感情であるかのように。

そっだ。

勝てずともよい。

ただ、キバに絶望を与えられれば。

感情に支配され　彼は憎むべき敵に、その事実を告げる。

「貴様らが勝てるものか……我が“新たな主”に……！」

「おいおいダメだぜ。勝手なこととして貰っちゃア」

一瞬の出来事だった。

ムースファンガイアの身体を、何処からともなく投擲された、ステンドグラスの剣が刺し貫いたのである。

「ぎっ、グガアアアア！？」

聞くに絶えない断末魔の悲鳴を上げるムースファンガイア。

「なっ！？」

どういふことだ。

キバは勿論、ザンバットソードを突き立ててはいない。

だが、全く攻撃が認知出来なかった。

「ったくよ、せつかく蘇らせてやればコレだもんな」

戦場にはあまりに似つかわしくない声。

発生源は、空から。

「っ!？」

キバが咄嗟に上空を見上げると、そこには黒い翼をはためかせる一匹のファンガイア。

「いやはや、ドラグの読みは大正解か。『雑魚ファンガイアは感情に任せて、余計な事を口走る』か。どんだけ先を読んでんだっつーハナシだよ」

「蠅の姿……。そうか、お前が名護さんと戦ったっていうファンガイアか」

「おー。アンタがキバの継承者か。戦い見させて貰ったぜ。中々やるじゃん」

フレンドリーに手まで上げて　ベルゼブブファンガイアは着地する。

「がつ、あ……ぜ、ゼブ様。な、何を!？」

「あん？　決まってるだろ、制裁だよせーさい。ただの捨て駒の癖して、俺達のことバラそうとしたヤツへのな」

「す、捨て駒？」

「え、何？　まさかお前、本気でキバに勝てると思ってたワケ？  
あははははー!!　い、いい歳こいて何言ってるんだよ!」

腹を抱えながら、ベルゼブブファンガイアは、ムースファンガイアに刺さった剣に手をかける。

「あー、笑った笑った。んじゃ取り敢えず、ご苦労さん」

「ま、待ってくれ！　も、もう一度　」

ドシユッ。

嫌な音を立てて、剣が引き抜かれた。

続けざまに、ムースファンガイアの身体はガラスとなって砕け散る。

「はい、お仕事おしまーいっ」と

「……」

何の感慨もなく、同胞を殺したベルゼブファンガイアに、キバは戦慄する。

（ヤバイ、あの龍のファンガイアの時も思ったが、こいつも絶対ヤバイ）

本能的に、キバはそれを理解した。

「……………」

「ん？ キバ、何かずいぶん口数少なくなったな」

「目の前で他人が消えて、気分良くなるヤツがいるか？」

「はあ？ 何を今更。お前今まで、何人ファンガイアを殺してきたんだよ」

「…っ、一緒にすんな！ 俺は好きでファンガイアを殺してるんじゃない！」

それが 自身の背負った責任だからだ。

「もういい、話していても苛々するだけみたいだな」

ザンバットソードの切っ先を、ベルゼブブファンガイアに向ける。

「単刀直入に聞くぞ。お前の目的は何だ？」



今みたく、俺を消しにでもきたのか」

「……なんかイクサといいお前といい、この街には血の気が多いやつばっかだなあオイ。  
たださっきのファンガイアを、始末しにきたただけだって言ったっしよ」

ベルゼブブファンガイアはおどけるように肩をすくめる。

「ドラグ……お前が会った龍のファンガイアの事な。あいつも言うてたんじゃないか？」

俺達は“まだ”お前らと闘う気はねえんだよ」

「それを信じるってか？」

「さあ？ それはご自由に。」

「ってか、アンタはこんなことしてるヒマないんじゃないの？」

あのフレイルムヘイズのガキとかさ」

「……………」

確かに、そつだ。

次狼達三人を向かわせてはあるが、不安は拭えない。

出来れば、すぐにでも加勢に行きたいところだ。

何より、チェックメイトフォークラスの敵と戦うのに、『黄金のキバ』が無いのはキツイ。

「……行け。だが、次は容赦しねえぞ」

「ではお言葉に甘えて」

ベルゼブフファンガイアはわざとらしく頭を下げ、背を向ける。

が、

「あ、そうそう。——いいいか?」

思い出したように振り向く。

「アンタさあ、何でザンバットソード使えんの？」

急に、キバが閉口した。

「ザンバットソードは、修行したからってどうこうなるモンじゃねえ。

何せキングに伝わる魔剣だ。アームズモンスター無しとなりや、問題になるのは技術じゃなく、血筋のハズだろ？」

ややあつて　キバは口を開く。

「……別に。使えたから使えた。それだけだ」

「ふーん。ま、シラを切るならそれもいいけどさ」

んじゃな。

それを最後に、ベルゼブブファンガイアは光となって消えた。

「……」

「……おい奏夜、大丈夫か？」

立ち尽くすキバに、キバットが気遣わしげに声をかける。

「……ああ、問題ねえよ」

「本当か？」

「しつこい。さっさと平井のトコ行くぞ」

淡々と答えて、キバもまたマシンキバーに跨がり、新たな戦場へと向かう。

『仮面ライダーキバ』 紅奏夜 vs ムースファンガイア。

ハンディキャップを背負いつつも、勝者、『仮面ライダーキバ』紅  
奏夜。

『はあ………』

とある廃ビル、宝具『玻璃壇』を前にして、三人の人間が深い溜め  
息をついた。

「マージヨリーさん、大丈夫かな………」

「名護くん、大丈夫かな………」

「佐藤、恵さん、そのセリフもう五度目」

佐藤、田中、恵、三人の待機組である。

「繰り返したくもなるわよ。」

いきなり御崎市を変な霧が覆っちゃって、名護くとあの女の人  
が戦いに行つて、避難した先には怪しいビルで、もうワケわかんない  
わ」

恵は何だか心配のあまり、苛々し始めているようだった。

ぎすぎすした雰囲気になるのはゴメンなので、佐藤と田中は話の矛先を反らすことにした。

「あの、恵さん。旦那さんはどうして、マージョリーさんについて  
つたんですか？」

「？」

質問の意図が分からず、恵は首を傾げる。

「えっと、つまり旦那さんが、どうしてマージョリーさんと一緒に  
戦えるのかってことです」

「そうそう。それに恵が“紅世”のことを知ってるのも不思議です  
し」

「……ん」

果たしてどう答えたものか。

恵は思考を巡らせ、当たり障りの無い答えを返す。

「私が“紅世”のことを知ってるのは、ある人に教えられたからよ。提供者は企業ヒミツ。名護くんが戦いに行けるのは……」

恵はそこで、悪戯っぽく笑う。

「彼がヒーローだから、かな？」

『ヒーロー？』

今度は佐藤と田中が首を傾げた。

「啓作さんと栄太くんは知らないだろうけれど 四年前のこの街にはね、三人のヒーローがいたの。 四年前のこの街人知れず、仮面で正体を隠して戦うヒーローがね」

「四年前っていうと……失踪事件が流行ってたところですよね？」

「あら啓作くん、よく覚えてるわね。そう、その失踪事件のことよ。」

で、一連の事件の犯人である怪物達を倒してたのが、三人の仮面のヒーロー」

「……？」

佐藤と田中の頭に、どんどん疑問符が浮かんでいくのを見て、恵は苦笑しつつ、

「今はそんなに深く考えなくていいわ。名護くんが帰ってくればすぐわかるわよ」

(まあ、あなた達の近くにも一人、ヒーローがいるんだけどね)

恵が、彼らの担任の顔を思い浮かべたところで、フロアの入り口からダルそうな声が響いた。

「ふーん、私のいない間に随分仲良くなってるのね」

「あ、マージョリーさん！」

「姐さん、怪我は？」



「あるわけないでしょ、誰に言ってるつもり？」

「かーなり、ヤバかったがな、ヒッヒ。白騎士の兄ちゃんがいなけりやどうなってたかね」

「お黙り、バカマルコ」

「白騎士？ 姐さん、誰の……ごと」と

田中の声がどんどん小さくなる。佐藤も絶句していた。

マージョリーとマルコシアスが言い合う後ろには、二人にとっては見慣れぬ白い姿、イクサが立っていたからだ。

「ちょ、ちょっとマージョリーさん、なんか知らない人が立ってるんですが……！」

「名護くん！」

佐藤の言葉を遮り、恵がイクサに駆け寄る。

「大丈夫だった？」

「ああ、問題ない。恵も大事なようだな。良かった」

イクサは佐藤と田中に軽く頭を下げる。

「佐藤君に田中君、ありがとう。妻が世話をかけたな」

「あつ、その声！ それに、名護さんって……！」

「ちよつ、何なんですか、その白い鎧！」

「すまないが、質問はまた後にしてくれ。今は“徒”への対策を練らなければならぬんだ」

名護の変身に驚く佐藤と田中をイクサが制している間、マージョリは調査の準備を始めていた。

「『玻璃壇』起動。んで、トーチのみの表示つと」

部屋中央に置かれた、御崎市の精巧なミニチュアに、不気味な灯りが点った。

「どうだ、『弔詞の詠み手』。あの三人以外に敵はいるか」

「今んとこ、それらしい気配はないわね」

「……その三人って、この前の“屍拾い”ってやつよりも強いんですか」

佐藤が心配そうに聞く。

「そーね。実害では比べ物にならないくらい厄介よ。だから状況把握のために一回逃げて来たんだけど……」

佐藤と田中は、その言葉に微妙な違和感を感じ取った。

（“逃げて来た”？）

覇気 憎悪 燃え盛るような闘争心、圧倒的なまでの力を持つ、自分たちの憧れが、急に霞んでしまったような気がしたのだ。

二人の危惧をよそに、話は続く。

「この御崎市全体を覆っている、奇妙な模様は何だ？」

「このデケー封絶を維持するためのモンだろーよ。やたら配列が装飾だらけだけどな」

「たぶん、式の本体を隠す偽装がほとんどね。式の効果やら、連中の目的を探すなら、直接目でみるしかなさそうだわ」

「地道に潰していくしかないということか……」

「？ 名護くん、ここで動いてる点はなにかしら？」

恵が指差す先には、確かに御崎市を猛スピードで移動する点がある。

「ホントだ。姐さん、これってトーチと人間しか映さないんですよね？」

「そうよ。 たぶんキバでしょうね、これは」

『キバ？』

「……この前のいざこざで、屋上で戦ったヤツのことよ。チビジャリをぶっ飛ばした後、変な影が出たの見てたでしょ」

マージョリーは軽く溜め息をついて説明を加えた。

「キバ……そうか、彼はハーフファンガイアだから、これにも映るのだな」

「キバの兄ちゃんに聞しちゃ、放つといってもいいだろ。あの兄ちゃんは、勝手に動く方が性に合うタイプだろうしな」

『確かに』

キバ 紅奏夜を知る、イクサ、マージョリー、恵の答えがシンク口する。

「それで、マージョリーさん、その“徒”たちが今どこにいるか、この前の気配を探るジザイホーとかで探ったりはしないんですか？」

「馬鹿。こっちが気配察知なんか使ったら、逆に相手に場所を報せることになるでしょうが。今はこっちが狩られてる立場なのよ？せいぜい隠れて、この封絶もどきをぶち破る算段をしないと」

狩られてる。

隠れる。

それらの単語はあまりに、マージョリーとは縁遠いものだ。

田中が、おそらく佐藤も思っただろう、不安な気持ちを声に出す。

「……なんか、弱気ですね、姐さん」

「弱気………？ 誰に、言ってるのよ」

僅かに声を揺らすマージョリー。

「………」

イクサは一連のやり取りを、冷静に見つめていた。

率いる者は、率いられている者のために、決して揺らいではならない。

（それをわかっているのか？ それをわかって、彼らを選んだのではないのか？ 『甲詞の詠み手』）

イクサは、やるせなさに苛まれる佐藤と田中に心の底から同情した。

そして、彼ら二人のために、イクサは彼女に問いかける。

「『甲詞の詠み手』」

「何よ」

「私は戦うつつもりだ。さつきも、逃げずに戦い、あの“千変”に勝つ気だった」

「だから何を……」

「戦う気があるのか？ 君に」

「っ」

マージョリーが顔を歪め、閉口する。

「力を持つ者には、様々な責任が伴う。

力を高めること。

力を正しく使うこと。

力を持たない者を全力で守ることも、またしかりだ。

だが今のキミは、力の使い方を見失っている」

イクサは的確に、マージョリーの不調の原因を見抜いていた。

「……っ」



思わずマージョリーは、握り拳を作る。

(わかってんのよ、そんなことは)

燃えたぎらせるものが、ない。

あれだけ渦巻いていた“徒”への殺意も、今は消えている。

『トーガ』も纏えず、即興詞さえも作れない。

なんと 無様な話か。

「……回りくどいわね。何が言いたいのよ。アンタは」

「足手まといになるなら、戦いに出るのは止めなさい」

シンプル、それ故にイクサの言葉は、マージョリーの心に深く突き刺さった。

怒りが生まれ、だが一瞬で消える。

こんな 言い返すことさえも、出来ないのか。

佐藤、田中が一触即発の雰囲気、冷や汗を流し、恵とマルコシアスは無言で、事態を静観する。

ふと、佐藤が二人の険悪さを直視出来ず、『玻璃壇』に視線を移した。

「マ、マジヨリーさん？」

「……………」

不機嫌そうではあったが、彼女は一応受け答えはした。

「『玻璃壇』のここ……………」  
「トーチが動いています」

「あん？」

「なんですって?」

その場にいた全員の目が、『**玻璃壇**』に向かった。

キバが戦った場所とは、別の大通り。

こちらでも白熱した戦いが繰り広げられていた。

「っだあ!」

「ヴルアア!」

ビルを平行に駆け上がる、シャナの炎剣とガルルの爪が、ソラトへ牙を剥く。

「ひらーり……」

だがソラトは、二人の攻撃を難なく『**吸血鬼**』で阻み、圧倒的なエネルギーの波をもって押し返す。

「くっ！」

「ちいっ！」

シヤナとガルルが別のビルに飛び移ると、さっきまでいたビルが、力の奔流を受け止め切れず、倒壊する。

「なんて滅茶苦茶な奴！」

「パワーだけなら力にも劣らないな……」

「つぶぶ、余所見をする暇は無いのではなくて!？」

ビルに貼り付く二人に、ティリエルの操る蔓が襲いかかる。

「ラモン、頼む！」

「了解っ！　　ぷうっ！」

地上にいたバツシャーの口から、しゃぼん玉のような水球が発射される。

勢いのついた水球達が、蔓を引き裂いていく。

「くっ、これならどう!？」

ティリエルは蔓の標的をバツシャーに変える。

「むだ、だ。　　っふん!！」

ドッガがバツシャーを庇うように立ち、拳で地面をブチ砕く。

隆起した瓦礫の盾は、蔓の攻撃をすべてを弾く。

「　　すいっ」

「蔓は無視しろ、ラモンがなんとかする。

俺達はそのガキを仕留めるぞ」

「うむ。手の内が分からぬ以上、一撃で決めるべきだろうな」

「わかった」

頷いて、シャナは足の裏を爆発させる。

ガルルも自らの跳躍力を用い、シャナに負けず劣らずのパワーで飛び出す。

「させませんわ!」

蔓が再び、行く手を阻む。

「無駄だよ、　ぷうっ!」

「フンガッ!」

バツシャーの水球と、ドツガが投げた岩石弾が、壁を蹴散らす。

二人の作った勝利への道に、シャナとガルルは勢いを殺すことなく飛び込む。

赤と青の影が、ソラトに飛び掛かる。

「あ  
」

ソラトの声が、中途に途切れる。

刀と爪が煌めき、真正面の目標を一閃した。

「キヤアアアア  
　　！！」

ティリエルの叫びが虚空を貫く。

だが、シャナとガルルは止まらなかった。

（次で終わりだ！！）

二人は既に目標をティリエルへと移していた。

ソラトの残骸を飛び越えて、次なる敵を滅すべく飛ぶ。

だが、

「すーいー!」

『っ!?!?』

来るはずのない方向からの声に、シャナとガルルは驚愕する。

そこには、シャナの炎剣により黒炭と化したはずのソラトがいた。

ただ 山吹色の蔓が間に合わせの身体を作っているという、間に合わせの姿ではあったが。

「炎髪灼眼、離れる!」

「っく!?!」



ガルルの警告に、ほぼ反射的に身体を動かすシャナ。爆発による加速で距離を取ると、ガルルもそれに追い付き、バツシヤーとドツガもそれに続く。

「それが『にえとののしやな』のちから？　ほのおのけんだ！」

無邪気にはしゃぐソラトの身体は、急速なスピードで回復しつつあった。

「再生………？」

「馬鹿な、早すぎる」

「何かの、自在法」

「確かにおかしいね。あそこまで深手を負ったら、いくらなんでも再生なんて………」

「いや、僅かだが、存在の力の流れを感じる」

ガルルの指摘に、シャナもそれに気付く。

「そうか……！」

「この巨大な結界はそのためのもの、ということだな」

「そうだ」

無意味に巨大な異界の力は、封絶のみではない。彼らに存在の力を供給する能力も兼ね備えているのだ。

「なら、この結界を破らなきゃ、再生は続くね」

「だが破ろうにも、自在法の構造まではわからんな。“天壤の劫火”、何か策は？」

「いや、看破しようにも、我らにその類いの自在法は使えぬ。与えられた情報を分析するしかあるまい」

「……やれやれ。努力不足だな。『炎髪灼眼』」

あからさまに、ガルルは落胆の溜め息をつく。

「魔神の契約者なら、それくらいの自在法は会得しておけ」

「う、うるさいわね！ ……その手の自在法は、得意じゃないのよ」

「すききらい、よくない」

と、微妙に緊張感の抜けた会話の間に、ソラトは破けた鎧の代わりに、ティリエルが用意した新しい鎧を身に纏っていた。

「新しいお洋服に、新しい鎧……はい、出来ましたわよ」

最後に彼女は、ビルに突き刺さった『吸血鬼』を蔓で絡め取り、兄に差し出す。

「剣は、もう少しの間、これで我慢してくださいね。      あの剣を、すぐに、いただきますから」

「うん！」

ソラトが剣を無造作に取り上げ、片やティリエルはシャナ達に、負

の感情をすべて叩き込んだような声で、

「許せない……私のお兄様に傷をつけた報い、その命で償って貰いますわよ」

「ふん、今のうちに言ってなさい」

シヤナが、二人のやり取りへの不快感を口にし、再び大太刀を構える。

と、そこでガルルが、何か気が付いたように耳打ちする。

「炎髪灼眼。あの蔓を見る」

「蔓？　あの女が操ってるヤツ？」

「ああ。さっきの戦いを思い返して気付いたんだが、あの蔓は一定の巨体に固まり、“愛染他”の意思に応じて起動している。しかし、そのリモートコントロールの中で、さりげなく、常にある一方向を塞ぐよう動いているんだ」

「……その方向に、あの自在法の種がある？」

「確証は無いがな。状況の打開策にはなるかもしれん」

シヤナはもう一度、愛染兄妹の身の回りを、具に観察する。

確かに、ソラトへのエネルギー供給は、蔓を媒体に行われ、ケ  
ーブルの如く一つの方向へ向かっている。

「わかったわ。他にヒントも無いし、お前の案に乗る。

私が飛び込むから、あいつら抑えるのは任せていい？」

「僕はいいよー」

「おれも」

「小回りが効くのはお前だろうからな。やむを得まい」

ガルル、バツシャー、ドツガもそれに同意する。

「それともう一つ、お前、使える武器は刀だけか？」

「えっ？ ううん。武器なら大抵のものは使えるけど」

元々、フレイムヘイズのための修行では、様々な武器の扱い方を学んできていた。

今では刀が一番扱い安いが、あくまで最初に手に入れた武器が『贄殿遮那』だったというだけのこと、他の形態の武器も、使おうと思えば使える。

「そうか。ならば、少しは突破の確率が上がるな」

「お話は済んだかしら？」

ティリエルが挑発的に笑う。

闘争心をたぎらせた眼光でそれに応じ、四人は再び　今度は一丸となつて駆け出した。

浮き上がる二人の脇を走り抜け、そこで四人は散り散りに走る。

「あら、不恰好ですこと。数が多ければいいとも思ったのかしら

「？」

ティリエルが指を走らせ、四人を追う形で蔓を操る。

狙いは、一番機動力に優れたシャナ。

「っはあー!!」

一喝、炎で蔓を尻ぎ払う。

「にがさないぞ、『にえとののしやな』!」

ソラトがさっきのように蔓を滑りながら、シャナに迫る。

「あぶ、ない!」

近くを走っていたドツガの身体が、紫に輝く。

紫のオーラはドツガを包み、光球となってシャナの手元へと飛んでいく。

「わ！ な、何！？」

見れば、シャナの手には魔鉄槌『ドツガハンマー』が握られていた。

『つかえ。おれ、がんじょう』

「っ！」

一旦『贄殿遮那』を夜傘にしまい、シャナはドツガハンマーを両手に持った。

「っだあ！」

スイングされたドツガハンマーは、ソラトの腹部に重厚な衝撃をブチ込んだ。

「うぎゃっ！」

「お兄様！」



吹っ飛ばされたソラトにテイリエルが駆け寄る。

「うっ、重たっ、キバはこんなの振り回してたのね……」

『いいから、おれをおいて、はやくいけ』

ドツガの言葉に、シヤナは直ぐ様、ドツガハンマーを放り、走り出す。

足止めにはなつたか。シヤナはそれに期待するが、その見積りは甘かった。

「逃がしませんわ!」

シヤナの行く手を、四方八方からの蔓が覆っていく。

「いかん、完全に道が塞がれるぞ」

「お姉ちゃん、僕を使って!」

見れば、今度はバツシャーが光球となって飛んでくる。

新たに来た武器は、魔海銃『バツシャーマグナム』。

「銃の扱いはそんなに上手くないけ、どっ！」

バアンツ！ バアンツ！

そう言いつつも、シヤナは肉眼でバツシャーマグナムの照準を合わせ、蔓を的確に撃ち落とした。

『なんだ。お姉ちゃん、結構上手いじゃん』

「ありがとっ！」

役目を終えたバツシャーにそう答え、シヤナは足の裏を爆発させて、スピードを維持しつつ、ゴール目掛けて走る。

やがて、

（あった！）

少し先に見える、コの字のマンションの中庭に、奇妙な山吹色の花が咲いていた。

あれが、自在法の仕掛けを担う、存在の力を集める燐子か何かだろう。

だが、もう少しというところで、ソラトとティリエルが追いついてきた。

「きん……」

ソラトはティリエルに支えられながら、

「があん！」

気の抜けるような口調で、『吸血鬼』を降り下ろす。

「っく！」

即座に『贄殿遮那』を取り出し、攻撃を受け止める。

ダメージは無いが、道は二人によって封鎖される。

(あと少しなのに)

舌打ちするシャナの手には、再び青い光球が飛んできた。

その光は剣の姿を型取り、魔獣剣『ガルルセイバー』へ姿を変える。

『二刀流は使えるな』

「勿論」

ガルルの言葉に短く答え、二本の剣を掲げる。

相変わらず、兄と身体を絡めながら、ティリエルが声を放る。

「ああ、退屈ですわ、あなた。お仲間さんとはかり話して、全然お喋りしてくれないんですもの。

トモガラガニクイー、とか、ワタシノフクシユウノリユウハー、てか、なにか場を盛り上げるようなことを仰る気はありませんの?」

「……」

「もしかして、その余裕もないと？」

「……」

しばらく黙って、シヤナはより一層不機嫌そうに、『贅殿遮那』とガルルセイバーを持つ手を、左右に広げて構える。

「教え上げるわ」

「？」

「おまえたちと話をしないのは、おまえたちが」

ぐっ、と踏み込む足に力を込める。

「ベタベタして不愉快だからよ！」

蹴った地面が碎けるレベルの力で、生み出された瞬発力は、シヤナを難なく標的へと運ぶ。

「だぁーっ!!」

『贄殿遮那』とガルルセイバー。二刀の猛追が、ソラトの『吸血鬼』と火花を散らす。

ガンッ、ガンッ!!

凄まじい力で叩き付けられる剣圧は、ソラトの剛腕でさえも、やすやすとは捌き切れない。

「わっ!!」

とぅとぅソラトの手から、『吸血鬼』が弾かれる。

「っく  
「!!」

ティリエルが蔓を伸ばして、剣の柄を掴もうとするが、

「いくわよー!」

『ああ、思い切りやれ!』

合図もそこそこに、シヤナはガルルセイバーを、蔓目掛けて投げた。

ガルルセイバーは回転しながら、丸ノコのように蔓を切断する。

(これで、武器はしばらく使えない)

同時に、自分への対応も遅れる。

シヤナは、兄妹が動きを止めた隙に、紅蓮の両翼を顕現させ、二人を上空から抜き去った。

遮蔽物がなくなった今、残るはあの花のみだ。

「ふっ」

『贄殿遮那』が、彼女のイメージする魔神の炎を纏い、煌々と輝いた。

「　　っ燃えるお！！」

大気を震わす轟音と共に、全てを灰塵へと変える火柱が、シャナを起点に燃え上がる。

怒濤の勢いで膨れ上がった豪炎は、巨大花をあっという間に飲み込み、焼き尽くす。

（これで、状況に何かの変化があるはず　　）

突破口を開いた。

少なくとも、シャナはそう思っていた。

「いや、まだまだ！！」



「うふ、かかった」

アラストールの鋭い声と、ティリエルの嘲りはほぼ同時だった。

しかし、気付いたところでもう遅い。

シヤナが破壊した花の焼け跡へ、御崎市全体から、急速に力が供給される。

それは幾重にも重なった円形の文字列 “愛染兄妹” が仕掛けた、自在法の罫を起動させた。

「しまっ ……！」

「しまった、罫か…！」

「お姉ちゃん！」

「これ、は！？」

驚くアームズモンスター達の前で、シャナは山吹色の光る自在式により、磔にされ、四肢の自由を奪われていた。

「わあ、すごいよティリエル！　　こんどもつかまえたね！」

「ええ、当然ですわ、お兄様。フレイムヘイズってみんな、頭が悪いですもの」

「くっ……！」

兄妹の罵りに歯噛みし、シャナはどうか枷を外そうとするが、彼女の力をもってしても、ビクともしない。

「着眼点は悪くなかったのですけれどね。そこの狼さんが言った通り、その花は『ビニオン』という“燐子”の一種で、存在の力の供給、放出を担うものですわ」

互いに抱き合う“愛染兄妹”が、ゆつたりとシャナの眼前に降りてくる。

「ただ、あなた方の誤算はその数と仕組み。『ビニオン』は『揺りかごの園』全体で……そう、二、三十は設置してありますの。

無論、壊そうとすれば、今の貴女のように、よりどりみどりの罠が発動するようになっていきますわ。

一つで足りないというのなら、どうぞいくらでも壊してくださいな。

……ああ！」

わざとらしく、気付いたような仕草をするティリエル。

「そついえば、最初の二つ目で、もう動けにくくなっているのですわね、ふふ」

歪んだ笑みを浮かべ、ティリエルは巨大な蔓を操り、シャナの腹を打った。

何度も何度も、どんどん痛々しい音が連なっていく。

「つかは！」

「やっぱり動けないようすわね、ふふ」

悪びれなど欠片も見せないティリエル。

「では、そろそろ『贄殿遮那』を、渡していただけます?」

「ボクにちょうだい! はやく!」

しかし再び、シャナを打つ蔓が切り裂かれた。

ガルル、バツシャー、ドツガが、シャナを庇うように“愛染兄妹”と対峙する。

「おい、俺達を忘れて、もう勝利を確信か?」

「まだまだこれからだよ!」

「俺達、たたか、える」

「あら、まだ歯向かいますの?」

『ビニオン』からの供給は止められず、かといって『ビニオン』そのものを破壊することも出来ない。  
それとも『揺りかごの園』内の存在の力が切れるまで、攻撃し続けてみますか？  
何年かかるか、わかったものじゃありませんけれどね、ふふ」

「……………」

ティリエルの言う通りだった。

(俺達に“愛染兄妹”は倒せない……………ならば)

できることは、せいぜい時間稼ぎだ。

損な役回りだな、とガルルは俄に苦笑した。

その時である。

バイクのエンジン音が、周囲の静寂に轟いた。

「な、何っ!？」

「…………来たか」

“愛染兄妹”とシャナは驚愕を、アームズモンスターは歓喜を込め、戦いへの乱入者を見る。

紅のバイク、マシンキバーが、山吹色の霧から現れた。

その乗り手は、ただ一人しか有り得ない。

「キバ!！」

最初に声を上げたのは、シャナだった。

「キバ…………ですって!？」

ティリエルの声に、僅かな畏怖が混じる。

バイクを急停車させたキバに、アームズモンスターが駆け寄る。

「悪い。遅くなったな、次狼、ラモン、カ」

「まったくだ。一体どこで油を売っていたんだ」

「お兄ちゃんおそーい！」

「たいへん、だった」

緊迫した状況を鑑みないやり取りに、シャナは僅かながらに安心する。

キバなら、負けるはずがない。

そんな無条件の信頼感が、シャナの中にあっただからだろう。

（私も早く、この枷を外さないと）

少なくとも、自分がこの枷を解除出来るくらいの時間は作ってくれるはずだ。

頼りっぱなしなんて、イヤだ。

そう考え、シヤナはゆっくりと、だが着実に存在の力を溜め、

（ あれ？ ）

シヤナが“それ”に気が付いたのは、それからすぐだった。

「……………」

バイクから降りたキバが、まるで世にも恐ろしい存在を見るような様子で、“愛染兄妹”と向き合っていたからだ。

「 そんな 」



キバの声は、震えていた。

シヤナは目を剥いた。こんな弱々しい声をキバが挙げるなんて、信じられなかった。

(キバが……怖がってる?)

どうしてだ。と思考を巡らせる間もなく、キバは、呆然と言葉を絞り出す。

この世の、どうしようもなく残酷な巡り合わせに。

「お前らが……、 “紅世の、徒”？」

第十二話・メトロノーム/その想いは誰がために・Aパート(後書き)

ああ、またごちゃごちゃした話に……。

・ようやくブロンを本来の使い方で見ました。シューちゃんよりはマシですが、映画含めて出番は二回；

・最近、キバキャラがシャナキャラを諭すというパターンが確立しつつあるなあ……。キバはそういう意味で、人の成長が一番見られた作品じゃないかと思えます。

・シャナがドツガハンマーを使う姿……執筆していて軽く吹きました(おい作者)

・新事実。奏夜はタツロット使用不可です。誰に盗まれたかは……まだ秘密です。ですが容疑者はあまりいないはず。

さて、遂に悲しい事実を知ってしまった奏夜。

彼の決断とは？

次回をお楽しみに(＾Ｏ＾)

## 第十二話・メトロノーム/その想いは誰がために・Bパート

「あんだ、封絶の中で動けるくらいしか出来ないんでしょう。なんで隠れてないわけ？」

フラットな口調のまま、グリモアに乗って低空飛行するマジヨリ  
！。

「うぐ、ちょ、うげ、苦、ぐ」

その手がズルズル引き摺り、軽く呼吸困難となっている少年。

『玻璃壇』によって見つけられ、先ほどマジヨリ&イクサと合流した坂井悠二である。

さすがに気の毒になったのか、マルコシアスが、

「よお、マジヨリ、首だ」

「……………ん？ ああ」

「私の方に乗りなさい、悠二君」

「げほっ、げほっ、は、はい………お願いします、名護さん」

マージョリーの手から、悠二はイクサの駆るイクサリオンの後部へと移る。

ちなみにこのイクサリオン。

マージョリーによって自在式が組み込まれ、封絶内でも活動が可能となっている。

「名護さん、市街地の方で戦ってるって、キバットから聞きましたけど、無事だったんですね」

「ああ、大事ない。それはそうと悠二君、あまり無茶をするな。君はあくまで、普通の高校生なんだ」

「う………」

イクサにたしなめられ、悠二は少し肩を落とした。

「『甲詩の詠み手』、恵達から、何か報告はあるか？」

「あー、ちょっと待ちなさい」

マージョリーは『玻璃壇』と通話を始める。

が、悠二からすれば、ただの独り言だ。

「なにをしてるんですか？」

「別の場所にいる協力者と、連絡を取っているんだ」

「紹介は勘弁な。今後の活動に支障が出るといけねえんでよ、ヒツ  
ヒ」

その協力者の中に、自分のクラスメイトである田中と佐藤がいることを、悠二はまだ知らない。

「子分二人が言うには、式がぐちゃぐちゃで何が何だか、だそうよ。  
あの女　　メグミだっけ？　　メグミからも似たような報告が来た  
わ」

「つまるごとく、なーんの手掛かりもナシだな」

「そうか」

イクサはさほど落胆した様子もなく、辺りの観察に戻る。

マージョリーは取り敢えず、イクサリオンの後ろに乗る、この頼り無さそうな少年に話を聞いた。

「そついや、なんであなた、あんな所にいたわけ？」

「え、ああ、あそこにあつた“存在の力”を集める仕掛けを、なんとか壊そうと思つて、急いで走つて……まあ、“燐子”だったことは知らなかつたし、あんなのが相手じゃ、実際何ができたとも思えないけど……」

「!!! おめえ、あの仕掛けがあることを、発動する前から察知してたつてえのか!？」 自在法の心得もねえのに!？」

「え? ……と、特別なことなのか？」

悠二が、マルコシアスの予想外な反応に戸惑う。

この町は現在、偽装や攪乱の自在式が張り巡らされている。

そんな中での確に、“ 燐子 ” ビニオンの位置を特定するのは、かなりの神業らしい。

( 『 零時迷子 』 の力、なのかな )

つい悠二は、自分の中に見える炎に目を落とした。

「なるほど、チビジャリも案外良い子分を持つてるじゃない。  
あんた、私の嫌がらせに協力しなさい。チビジャリの方は、あの陰  
険変態兄妹との戦いで忙しいし。結果的に、チビジャリを助けられ  
るわよ」

「待ちなさい、『 弔詩の詠み手 』」

ここで異議を唱えたねはイクサだ。

「彼は少し普通と違うだけで、ただの人間だ。我々が連れ回して、

彼を危険に晒すわけにはいかない」

「じゃあどうすんのよ。はっきり言って、私でもコイツほどの確に、花モドキの場所は探知出来ないわ。」

第一、ここから『玻璃壇』まで連れてく道中の方が危険じゃない？」

「だったら、俺様達と一緒にの方がアンゼンってもんだろつよ」

「だが……」

「名護さん」

尚も渋るイクサを制したのは、悠二本人だった。

「名護さんが、僕を心配してくれてるのは、凄く分かります。けど　もう、決めたんです。」

この戦いで、少しでもいいから、僕にできることをするって」

みんなを守ると言ってくれた、そして今も頑張ってくれている、あの子のために。

「だから、僕に出来ることがあるなら、頑張らなきゃいけないんで



す。

お願いします、やらせて下さい」

「……」

自分を見つめる真摯な眼差しに、イクサはしばらく口を閉ざす。

やがて、仮面の下から聞こえてきたのは、満足そうな笑い声だった。

「……“彼”が君を気に入った理由がわかった気がするよ」

「えっ？」

首を傾げる悠二に、イクサは、かつての“彼”  
紅奏夜を重ね合  
わせていた。

(まるで、四年前の彼を見ているようだ)

例え自分に力が無くとも、決して諦めず、立ち上がれる信念。

それを、この少年は持っている。

「 わかった。だが、勝手な行動は取らないようにしなさい。危なくなったら、逃げることを第一に考えるんだ。逃げるのは決して恥ではないからな。わかったね？」

「 はいっ！」

勢いのある声でそう言って、悠二はマージョリーとマルコシアスに向き直る。

「 じゃあえっと、取り敢えずその、変態？ 兄妹……とか、事情を説明してくれよ」

この世は決して優しくない。

どんなに頑張っても、叶えられないことはある。

楽園がいきなり地獄に変わることもある。

人はゴミのような死を迎える。

勧善懲悪など、戯れ言もいいとこだ。

「こんな汚れた世界の空気を吸って平気なら、俺も汚れた人間ってことなんじゃないか？」

かつて、世の中を拒絶してきた青年はこう言っていた。

やがて彼は、この世のリアルを、その身を持って知ることになるのだが、

知っていることと、それに耐えられることは、別の話だ。

「お前らが……“紅世の、徒？”

キバを震えさせているものが何なのか。

それは、キバとキバットしか知り得ない。

愛染兄妹も、アームズモンスターも、アラストールも、そしてシャナも。

恐怖をもって戦いに臨んだキバを、奇異の眼差しで見つめていた。

(何で……、何でこの二人が、平井や次狼たちと戦ってるんだ!?)

感情は、事実を否定する。

しかし理性は、この現実を、直ぐ様受け入れていく。

気付く機会があった。

この兄妹に会った時、キバットは何かに気が付いたような素振りを見せている。

今にして思えば、油断していたとしか言いようがない。

キバットが気付いていたなら、奏夜にも気付けたはずだ。

ただ　あの時は、

(……ああ、そういうことか)

混乱していた頭が、急速に冷えていく。

仮面の下で、奏夜は唇を噛み締めた。

ただ嬉しかったから、気が付けなかったんだ。

二人の仲の良さと、笑顔を見て、いい奴らだと思った。

自分の力は、この兄妹のように、儂く、だが素晴らしい存在を守るためにあるのだと。

だが、違った。

兄妹は守るべき存在ではなく、むしろ、倒さなければならぬ存在。

人の音楽を喰う、“紅世の徒”だ。

「……この街は、人間とファンガイア。両者の架け橋となる場所だ」

威圧的な口調に、キバへの警戒を続けていた兄妹が身動く。

「お前達は、人間やファンガイアを喰ったのか？」

「……？」

シヤナは、さらに不信感を抱く。

(なんで、あんなことを)

兄妹に聞くまでもない。

人を喰った痕跡を嗅ぎとったからこそ、自分達は動いた。

キバが知らないわけがない。

ティリエルも同じようなことを思ったらしく、

「……高貴な身分の割に、おかしなことを聞きますのね。  
キバ　ファンガイアの王」

やや落ち着きを取り戻したのか、ティリエルは再びソラトへ寄り添う。

「そんな解りきった質問など無意味でしょう。なんなら、もう一度同じことをして差し上げましょうか？」

「……」

「私達は早く、そちらのフレイムヘイズの持つ刀を戴きたいのです。邪魔をするのなら、貴方も贅となって貰いますわよ」

「……そうか」

これで、兄妹を見逃してやることは出来なくなった。

一縷の望みに掛けてみても、結果は同じだった。

（ 情けない ）

やっぱり、俺はバカだ。

こんなになってもまだ、戦いたくないと思っている。

だが、もうそれは通用しない。

「ならば 俺も容赦はしない」

残された選択は一つだけ。



キバとしての責任を果たさなければならない。

全ての感情を仮面に封じ込め、キバはゆっくりと、兄妹に人差し指を突き出す。

「お前達に、夜が来る」

宣告と共に、キバはベルトのケースから、三本のフェッスルを引き抜いた。

「キバット、五分でカタをつける。やれるな？」

「……いいのかよ？」

キバットの言葉。

だがキバの答えは、

「それに答える価値は無い」

「 わかった、んじゃ、出血大サービスといくか」

冷やかな返事に、キバットは、いつものハイテンションさを消していた。

(……………どうして、こいつばかり)

いいヤツなのに、俺様の無二の親友なのに。

どうしていつも、こんな重みを背負わなきゃならないんだ。

「……………カミサマ、恨ませてもらうぜ」

ぽつりと言った呟きを最後に、キバットは押し黙った。

「次狼、ラモン、カ。来い！」

「……………ああ」

「みんなで行くよー！」

「てんじ、もり」

そしてキバットは、青、緑、紫、三本のフェッスルを吹き鳴らした。

『ガルルセイバー！』

ガルルが青い彫像に。

『更に、バツシャーマグナム！』

バツシャーが緑の彫像に。

『そして、ドツガハンマー！』

ドツガが紫の彫像に。

三つの彫像は光球となり、それぞれ右腕、左腕、胴体と重なり、その部位に鎖が巻き付き、その姿を変えていく。

ドガバキフォーム。

キバフォームをベースに、左腕はガルフフォーム。右腕はバツシャ  
ーフォーム。胴体は、ドツガフォーム。

アームズモンスター全ての力を取り込んだ、まさに四位一体のフ  
ォームチェンジ。

キバットの魔皇力コントロールの関係から、五分以上変身が続けれ  
ば、キバの鎧が大破するばかりか、五人の命も危険に晒されるとい  
う、リスクな姿。

だが反面、その力は絶大だ。

「行くぞ」

ゆっくりと歩いてくるキバに、

「もう！　ボクのじゃましないでよー！」

飛び出したソラトが『吸血鬼』を振り被る。

「無駄だ」

剣筋を見切ったキバは、剣を難なく受け止める。

「つかんだな！」

ソラトが存在の力を『吸血鬼』に込める。

『吸血鬼』の能力、触れた相手を切り刻む見えない斬撃が、キバを襲う。

だが、

「……今、何かしたのか？」

「えっ？」

ソラトが間の抜けた声を挙げる。

存在の力が込められたにも関わらず、キバは無傷だった。

それもそのはず。

ドガバキフォームは、全てのフォームの力を取り込んだ形態。

ドッガの鉄壁の防御力が、キバを守ったのだ。

「この距離なら、鎧も意味が無いな」

『吸血鬼』を掴んでソラトを固定したまま、キバは右手に構えたバツシャーマグナムを向ける。

バン！

連なった音が合計七発。

0距離でソラトに命中した。

「っ、うわああ！」

「お兄様！」

ティリエルが蔓を伸ばし、兄をキバから引き剥がす。

「ティリエル。あいつ、なかにいっぱい、かいぶつをとりこんでるよー！」

ソラトの身体は『揺りかごの園』により、すぐ回復する。

「ええ、お兄様。……さすがはファンガイアの王、というところですわね」

言いつつ、ティリエルの声にはまだ余裕があった。

（でも、あれだけの力をそう長く維持は出来ないはず……。それに『揺りかごの園』は依然起動中。上手く逃げ切れれば、向こうが勝手に自滅してくれるわ）

ティリエルの読みは、的確なものだっただろう。

しかし、兄妹は見くびっていた。

キバの力を。

「戦いのお喋りとは、随分余裕じゃないか」

「っ!？」

いつの間にか、キバが後ろに回り込んでいた。

見れば、足元がバツシャーの能力により、水が張られたアクアフィールドと化している。

キバはその上を高速で滑り、二人の背後に回り込んだのだ。

「ッハア!！」



アクアフィールドを使い超加速。

「うぎっ！…！」

「う、ああああ！…！」

目にも止まらぬスピードで、左腕に持つガルルセイバーを振りい、二人を斬りつけていく。

兄妹の悲鳴が、キバの耳を貫く。

「……………」

赤い血が舞うのを、キバはガルルセイバーを、きつく握り締めることで耐える。

（ …… いかんな ）

ガルルセイバーとなっている次狼は思う。

（ 完全に戦いのことしか考えていない ）

奏夜が“こっ”になると、ロクなことにならない。

だが、今の自分に止める術は無かった。

あくまで次狼は 彼の臣下の身なのだ。

「ヴアアー!!」

最後の一太刀で、ソラトは数メートル先まで斬り飛ばされる。

「ぐ、あう……」

回復よりも、痛みが先に立つようになったのか、ソラトがうめいた。

キバは無言で、ドツガハンマーを引き摺りながら、ソラトに近づく。

「無駄、ですわ……」

回復を急ぐティリエルが、キバの背中に語る。

「『揺りかごの園』の中なら、私達は無敵。何度でも、再生が出来ますわ」

「そうか。それは大層な自在式だ」

だが。とキバは言葉を繋ぐ。

「回復に使う力が無限でも、一度に供給出来る力には限界があるんじゃないか？」

キバが淡々と言い放つ。

「見たところ、お前の蔓から存在の力は供給されている。だが、お前の兄の再生は正確には一瞬じゃない。ダメージに比例するが、大体2、3秒のラグがあった。」

つまり、ダメージ量が供給量を越えれば、再生は無意味だ。回復が追い付かないからな」

「!」

さあっと、ティリエルの顔が青ざめた。

わかったからだ。

ドツガハンマーを構えたキバが 何をするつもりなのか。

「力の供給が追い付かなくなるまで、叩き潰してやる」

ツガアン！！

倒れたソラトへ、叩き込まれたドツガハンマー。

ソラトの呻きが聞こえるが、キバは手を緩めない。

ただ一心不乱に、ドツガハンマーを振り下ろし、叩く。



「……………」

磔にされたシャナもまた、その非情なまでに凶悪な力へ、畏れを抱いた。

その一方で、シャナの中に、それとは違う感情が沸き上がっていった。

(どうして……?)

“愛染兄妹”に同情するわけではない。

けれどシャナは確かに、キバの戦いを見るのを、嫌だと思っていた。

(今のキバを見ると、凄く悲しくなる)

シャナの知るキバの力は、あんな狂った強さじゃない。

自分や悠二を導いてくれたような、聡明さがあつたからこそ、シャナは彼の強さを信じていたのだ。

だが、今のキバは違う。

(力に身を任せて、感情を押し殺してる)

感情を押しえ付けるのが、どれほど大変なのか、シャナはマージョリーとの戦いで、よく知っていた。

キバは今、それをやっている。

内に眠る力を、暴走させてまで。

(どうして、そうまでして戦うの?)

自分は、まだいい。

それが使命だから。そうあるように生まれたから。

ただ“徒”を討ち滅ぼす存在として、割りきれる。

でも、キバは違うはずだ。

最初から、守るために戦っていた。

守る強さが、キバの強さなのに。

(どっしり)

シヤナは、悠二の時とは違う胸の痛みを感じた。

( どうしてそんな、今にも泣きそうになってまで戦うの?)

シヤナの問いに答える者は、いなかった。

「……」

キバは静かに、ドツガハンマーを地面に降ろす。

ソラトはもはや、声を挙げることも出来ず、形容するのも惨たらしい状態だった。



再生こそしているが、シャナの時ほどの速度はない。

「 ザンバット」

ドガバキフォームを解除すると、三体の彫像がキバから飛び出してくる。

三体の彫像が一つに集まると、光の中から、幻影モンスター『ザンバットバット』が現れた。

キバは何処からともなく、魔剣ザンバットソードを呼び出し、ザンバットバットが刀身部分を噛むように取り付く。

「キバット、行くぞ」

ザンバット頭部の仮面に付いていたフェッスルを外し、キバットに吹かせる。

『WAKE・UP!!』

ザンバットバットを刀身の上まで引き上げるにつれ、ザンバットソードが紅の魔皇力に染まっていく。

ザンバットソード使用時の必殺技『ファイナルザンバット斬』が発動する。

「……………」

キバに　　紅奏夜としての優しさは無かった。

感情を殺し、ただ目の前の敵を滅する。

キングの代行者　　キバの頭にあるのは、それだけだった。

「断罪の牙の下……………転生の輪廻に沈め」

ソラトを一瞬だけ見下ろし、キバが低く言い放った。

ザンバットソードが、紅の軌跡と共に牙を剥く、

「!!!」

突如、キバの刃が止まった。

彼とソラトの間。

そこへティリエルが、髪を振り乱し、割って入ってきたからだ。

目には涙の痕があり、息を切らせ、シャナへ見せていた余裕の態度もない。

ただ両手を広げ、キバの行く手を阻む。

意味が無いのは、分かっている。

しかしそれでも、ティリエルは必死だった。

兄が死ぬ。

それは自分にとって、世界が閉じるのと同じことだった。

兄を助けたい。その一心で、ティリエルは叫ぶ。

『「」やめて！！』

「っ！！」

『どっして……どっしてこんなことを！！』

『人間など価値のない存在だ。何も悲しむことはない』

『許さない……、絶対に!!』

対峙する『黄金の戦士』と『青と白の戦士』。

『WAKE・UP・ファイバー!!』

『やめて……!!』

一つの影に、守るはずだった人に、自らの力が牙を剥く。

「……め」

仮面の下に封印した感情が戻ってくる。

僅かな畏れは、水面に落ちた雫の如く、心に波紋を広げていく。

(……俺は今、何をしようとした?)

右手が震え、取り落としたザンバットソードが、乾いた音を立てた。

最もやつてはいけないことを。

二度としてはならない過ちを、再び犯そうとしていたのではないか？

「あ、あ……!!」

自分へのおぞましさに、後退りするキバ。

そこに、一瞬の隙が生まれた。

「っだああ!!」

ようやく回復が追い付いたソラトが、ティリエルを飛び越え、キバへ『吸血鬼』で斬りかかったのだ。

「っ!!」

反応が遅れ、ザンバットソードを拾おうとする。

しかしそれより早く、ソラトはキバに、『吸血鬼』の刃を合わせ、存在の力を注ぎ込んだ。

「つぐ、あああ!？」

ドツガフォームほどの防御力が無いキバフォームに、『吸血鬼』の斬撃は防げない。

キバは血の雫を撒き散らせ、大剣のスイングに吹き飛ばされた。

その勢いのまま、戦いで崩れたビルに、キバは叩き付けられる。

『キバ!!!』

シヤナと次狼達の声を最後に、キバの意識は闇に吞まれた。

「…………ツハア、ハアツ」

テイリエルが息を切らし、緊張の糸が切れたのか、その場へ座り込みながら、気絶したキバを見る。

(生きて、いる……?)

ティリエルが、自分の生存に疑問を持つのも、無理からぬことである。

(あの時、キバが刃を止めなければ、確実に討滅されていた……)

何故刃を止めたのか、それはわからない。

だが今は、その幸運に感謝するしかないだろう。

(……けれど、いつキバが目覚めるかわかりませんわね)

立ち上がったティリエルに、先程とは打って変わった無邪気さを、ソラトは見せる。

「ねえティリエル！ あいつやっつけたよ！ はやく、『にえとののしやな』をもらおうよ！」

「ええ、もちろんですわお兄様」



一部始終を静観していたシャナへ、ティリエルは僅かな焦燥を込めた瞳を向ける。

「あまり、モタモタはしていきられなくなりましたわ。早く『贄殿遮那』を、渡していただけます?」

「背理、回帰順配列!」

マジヨリーが掛け声と共に、光る指先を動かす。

現在、マジヨリー達は『ビニオン』の削除に動いていた。

悠二が偽装された『ビニオン』を見つけ、マジヨリーが分解し、再構成。イクサはその間、二人の護衛だ。

「あと何個だ、悠二君」

「ええと、多分二・三個くらいです」

「そうね。でも残念」

マージョリーがグリモアを宙に止めた。

イクサと悠二も、気が付く。

「……来たか、“千変”。悠二君、手筈通りに行くぞ」

「けど名護さん、マージョリーさんも本当に大丈夫なんですか？  
その、囿役なんて」

「なーにを今更言ってるのよ」

「提案したのはお前さんだろがい、ヒツヒツ」

かつてのフリアグネが使った“都喰らい”のように、自在式の核となる“何か”は効果範囲の中心にあることが通例である。

だが無論、敵はそこに気を配っているはずだ。

そこで、悠二は二人にある作戦を持ち掛けた。

早い話が囿作戦。

“愛染兄妹”はシャナが押さえている。

ここで“千変”をマージョリーとイクサが押さえれば、ノーマークの悠二は、核探しに集中できる、というものだ。

「私は別に反対しないわよ。

それに、こつちで百年も過ごしてない、ちょいと物隠すのが上手いからって調子に乗ってるガキ共に舐められっ放しで黙っていられるほど、私は人間が出来てないの」

「んーなもん、見れば分かるってブツ！」

「お黙り、バカマルコ」

「悠二君、キミが私達を本当に心配してくれるのなら、必ず核を見つけてくれ。

危険な役になる。だから、私との約束を忘れないようにしなさい」

「はい！ 二人も、気を付けて！」

悠二が走り去るのを見て、マージョリーとイクサは気配の方を睨む。

「戦えるのか？」

「まあね」

イクサの問いに素っ気なく答えると、

《マージョリーさん》

《姐さん》

佐藤と田中の声が、頭に響いた。

「お黙り。集中したいのよ。粘れるだけ粘ってみるつもりだけど、結果はわかんないしね」

《最初からそんな弱気なんて、マージョリーさんらしくないですよ！》

《以前の、あの強くてかっこいい姐さんは、どこにいったんですか  
!》

怒鳴りたくなる気持ちを、マージョリーはぐっと押さえた。

(私は、お前たちが思ってるほど、強くも格好よくもない！ 間違えるときは間違えるし、負ける時は負けるし、逃げるときは逃げるし、落ち込む時は落ち込むのよ!!)

苛立つマージョリーに、また違う声がかかる。

《あの、マージョリーさん》

恵だった。

「よ……何よ」

《私も前に、マージョリーさんと同じことで迷ったことがあります》

「……………」

《戦士として戦うか、戦わないかを》

かつて、恵は名護と同じファンガイアハンターだった。

母、ゆりの意志を受け継ぎ戦う。

それに迷いは無いはずだった。

しかし一度だけ、戦うことに、恐れを抱いてしまったことがあったのである。

《でも、ある人に言われたんです。『自分の弱さを受け入れる』って》

「……………弱さを、受け入れる？」

《あなたは、戦う理由を見失ってる。

だから、戦えない。それはあなたの弱さです。

けど、弱さは悪いことじゃない。強くなるためには、弱さが必要なの。

憎しみ以外で戦う理由が見つからないなら、他に理由を探せばいいじゃないですか」

「……今まで好き勝手やってきたからね。今更新しい理由なんか湧かないわよ」

《そう……なら、啓作さんと栄太くん達を守るっていうのはどうかしら？》

恵の案に、マージョリーは啞然とする。

《会ってすぐの私でも分かるくらい、啓作くんも栄太くんも、あなたが凄く好きなの》

《……め、め、恵さん！？》

《な、何をイ、イキナリ！？》

後ろで二人の慌てる声が聞こえるが、恵は構わず続ける。

《自分を好きでいてくれる人と、その周りにいる人達を守るくらいできるでしょ？ 名護くんと一緒に戦えるあなたなら、それだけ

の強さがあるはずだわ》

「……あまり、買い被らないでくれる？」

恵の必死な言葉から逃れるように、マージョリーはそう呟く。

言う間に、タイムリミットが来てしまった。

「お三方、戦闘中は話し掛けんじゃねえぞ」

「また、後でね」

マルコシアスとマージョリーの声を最後に、通話が終わった。

と同時に、周囲を包む紫色の爆炎が、相手の到着を告げた。

「さて、本当どうしましょう」

「てめえで考えろい」

「ここまで来たんだ。腹をくくりなさい」



三者三様の言い合いをする間に、近くのビルを突進で破壊し、それは到着した。

「どつやら今度こそ本気、最後の最後までやり合えそうだな」

口角を吊り上げるシウドナイの姿は、虎、鷲、蝙蝠、蛇、様々な姿が合わさった奇妙な生き物へと変貌を遂げていた。

“千変”とはよく言ったものである。

「存分に、狂宴を楽しもう。殺戮の美姫、異形を狩る白騎士よ」

「ふん……あんまり、その気にさせてくれない格好ね」

「悪趣味もこれ極まりだな。見てくれに少しでも気を配るなら、さっきの人間の姿をお勧めする」

「やれやれ、せっかくの誘いだというのに、つれないことを言うてくれる……が、まあ先程よりは、幾分かマシな力が期待出来そうだな」

虎の口を苦笑に歪め、シュドナイを力の奔流が覆う。

「ではそろそろ、幕を引くとしようか」

「……………」

ビルの瓦礫が蠢き、意識を取り戻したキバが、中から出てくる。

「あ、やっと起きた!!」

「だい、じよぶ、か？」

「ラモン、カ……………」

身体を起こすも、まだ少しフラついた。

あれだけの存分の力が直撃したのだから、これくらいで済んで御の字だろう。

「お目覚めか、我が王よ」

「奏夜、何処が悪いトコはあるか？」

「……ああ、何とかな」

次狼とキバットの気遣いも、あまり耳に入らない。

全身を襲う疲労感に、キバは膝をついた。

戦いの場からは、そう離れてはいないらしい。

建物の隙間から、紅蓮の劫火がちらほら見える。

「あれから、どうなった？」

「『炎髪灼眼』がまた戦っている。

お前が奴らの相手をしている間に、“存分の力”を溜めて、拘束の自在式から脱出したらしいな。

『贄殿遮那』は“愛染自”に奪われたようだが……まあ、さしたる

問題はあるまい。

奴らの『揺りかごの園』とやらも、ミステスのガキ達が壊している  
ようだから、ご自慢の高速再生も使えないだろうさ」

「……坂井達も、動いてたのか」

「そうだ。だからお前が戦わずとも、カタがつく」

最後の言葉には、遠回しな非難が込められているような気がした。

畳み掛けるように、次狼が問う。

「何故、止めをささなかった？」

「……」  
「……」

「何か理由があるのか？」

「……」  
「……」

「……最近、マスターが新しいコーヒーメニューを作っていたな」

「……」

重症だな、これは。

次狼は溜め息をつき、頭を掻く。

古い友人の息子は、かなり変わった。

具体的には、親父に似てきている。

だが次狼に言わせれば、根っこの部分はまだまだヒヨッコ。

どうしようもない、お人好しのままだ。

「謝るな奏夜。別に怒っているわけじゃない。俺達の主はお前で、俺達はお前に従っただけだ」

それに。と次狼は言葉を次ぐ。

「あそこで刃を止められる”からこそ、俺達はお前を主と認

めたんだ」

次狼の言葉にキバが顔を上げると、ラモンと力もまた、キバに詰め寄る。

「お兄ちゃんがふらふらしてどうするの。  
もっとしっかりしてよね、僕達もついてるんだからさ」

「おれたち、なまか」

「お前がその優しさを失わない限り、俺達はお前を裏切らない。  
お前が新たな罪を犯すなら、俺達が少しずつ背負ってやることも出来る。」

お前が苦悩する時、助けてやるのが、音也との約束だからな」

次狼が手を伸ばす。

キバが躊躇いがちに、その手を掴み、立ち上がった。

「……次狼、ラモン、力。俺は……どうすれば」

「お前の心に従え。音也はいつもそうやって、先に進んできた」  
また何かあれば呼べ。

次狼達が彫像となり、キャツスルドランに帰っていく。

「……………」

「奏夜、ツライなら、行かなくてもいいんだぜ」

天に昇る紅蓮の炎を見つめるキバに、キバツトは言う。

答えは、分かりきっているけれど。

それでもキバツトは、奏夜に傷付いて欲しくなかったのだ。

「……………ありがとな、キバツト」

いつも一緒にいてくれる相棒に礼を言って　キバはまた選ぶ。

己の道を。

「でも、行かなきゃならない」

拳を握り締め、迷いを振り払う。

「選んだ責任は、自分で取るさ」

「っはあ!!」

シヤナ自身が持つ炎により、形成された一対の紅蓮の刃が、地面に振り降ろされた。

大爆発が起こり、ソラトとティリエルを熱波が襲う。

「な、なんてこと」



ティリエルの焦りも、爆音に掠れていく。

片やシャナは冷静に、二人を観察する。

「やはり、先程までの再生スピードはないな」

「うん」

アラストールの声に頷き、

（悠二が、やってくれたんだ）

そのことに、嬉しさが込み上げてきた。

（私達は、こいつらとは違う）

こんな、お互いにすがり合うようなことはしない。

（共に在ってすがらず、ただ互いを強く感じ、力を得る）

そうあるように、私が自身が選んだ。

(悠二と、一緒にいたい)

心の声は、そう叫んでいた。

本当にやりたいことをやるんだ、心の声に耳を済ませる。

キバが、教えてくれたことだった。

(キバなら、きっと大丈夫)

どうして、あんなにも彼が取り乱したのかはわからない。

だが、シャナは心配していなかった。

(キバはいつもこの街を 人間を守るために戦ってる)

人は誰かを守るためなら、何でも出来る。いくらでも強くなれる。

これは、あの奇妙な教師の教えだった。

（だから、キバも大丈夫）

本当のキバは、ずっとずっと強い戦士だから。

戦いに集中し直して、シャナは両翼で空を滑空し、兄妹の距離を積める。

「っ！ お兄様！！」

「うん、ほのおのけん」

奪った『贔殿遮那』に、ソラトは力を込めるが、無駄なことだ。

大太刀に広がっていた紅蓮の炎は、あくまでシャナの『炎髪灼眼の討ち手』としての力。

ソラトでは、火の粉一つ起こせはしない。

隙を逃さず、シヤナは頭上からの斬撃をキめる。

ソラトは反射的に『贄殿遮那』でそれを受け止める。

「  
」

ティリエルが眼を見開いた。

シヤナの手にはいつの間にか、『贄殿遮那』を奪った際、ソラトが捨てた『吸血鬼』があったからだ。

「お兄さ  
」

ティリエルが兄に警鐘を鳴らそうとするが、もう遅い。

「っだあああっ  
！！」

力の供給に反応し、『吸血鬼』の波紋が広がり、ソラトの身体を切り刻んだ。

「あっ？」

呆けた声を漏らし、ソラトの身体から血浜き上がる。

ソラトの手からこぼれ落ちた『贄殿遮那』を、キャッチし、

「返す」

流れるような動作で放られた『吸血鬼』が、ティリエルの胸に突き刺さった。

二人は悲鳴すら挙げることなく、  
ティリエルの鍔広帽子だけが、儚くふわりと舞う。

インターバルを置かずに、飛翔するシャナの瞳と髪が、輝きを増した。

(悠二)

ちゃんと私を助けてくれた。

近くにいらなくても、離れていても、ちゃんと繋がっている。

（ そう ）

燃え上がるような熱さで、心が満たされていく。

フルボリウムで奏でられた、強くも激しい心の音楽が、更なる紅蓮の力をシャナに与える。

（これが、一緒にいるってことよ！！）

煌めく紅蓮の奔流が、火柱となって、二人の“徒”を覆い尽くした。

「はーっはっはっは！

弱い！

炎と言っなら、これくらいは

やって欲しいものだ！」

マージョリーが放った群青の炎弾を、涼風の如く掻き消し、シュドナイの口内から、紫色の火炎が吐き出された。

「っち！」

爆砕した道路を見て、マージョリーは舌打ちしつつ、折れた道路標識を拾い上げた。

「せえ、の！」

群青の炎を纏わせ、投擲した。

だが、この勢いでさえも、シュドナイは片手で受け止める。

「込める“存在の力”が足りないな。これでは、簡単に自在の干渉を受けてしまうぞ」

余裕のシュドナイの背後から、白い影が斬りかかる。

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー、ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

「はぁアアアー ツ!!」

フエツスルを装填したイクサの、光粒子を纏った刃『イクサ・ジャ  
ツジメント』が炸裂する。

「ぬうつ!?!」

すんでのところで、シュドナイはイクサカリバーを白刃取りで止める。

尚もイクサは踏み込んで来るが、イクサカリバーはシュドナイに届かない。

「その命、神に返せ“千変”!!」

「フツ……、人間が、よくここまでの力を発揮出来るものだな……  
だがッ!!」

横から、シュドナイが虎の剛腕を振り被った。



「！！　しまっ  
」

反応が遅れたイクサは、そのまま勢いに乗り、近隣のホテルの一階まで激突した。

「ケイスケ！！」

「余所見とは舐めてくれるな！！」

マージョリーが気を取られた一瞬の内に、シュドナイは両の掌で、マージョリーを押し包む。

「無様だな。再戦も、所詮無謀の産物だったか」

「　くうっ！！」

声すら挙げられず、万力の如きパワーからは抜け出せなかった。

「別れは常に寂しいな」

言いつつ、シュドナイに悲しみは見られない。

マージョリーを掴んだ腕を伸ばし、思い切り振り回し始める。

「せめて安らかに逝けるよう、激しく抱き締めていよう。  
腕だけで、な」

シュドナイの両腕が、ブツンと切れ、遠心力に従い、マージョリーは立体駐車場に激突し、中にある機材や車を粉々にする。

シュドナイは止めに、最大級の炎弾を、マージョリーが作った穴目掛けて撃ち出した。

紫色の爆炎が上がり、全てを焼き尽くしていく。

生死など、確認するまでもあるまい。

暫くの間、マルコシアスの顕現を警戒したが、群青の残滓には何の変化もない。

イクサが叩きつけられたホテルの方にも、動きは見られなかった。

(……特異な存在とはいえ、人間は人間か)

僅かな落胆を滲ませて、シュドナイは人間の姿に戻り、せめてもの手向けに、短く呟いた。

「せめて、よき地獄を、マージョリー・ドー。異形を狩る白騎士」

『弔詞の詠み手』『マージョリー・ドー&『仮面ライダーイクサ』名護啓介vs“千変”シュドナイ。

不調を押しての戦いも虚しく、勝者“千変”シュドナイ。

キバがそこへ着くと、丁度シャナの炎が、兄妹を呑み込んだところだった。

「……」

心に、重く淀んだ何か沈殿していくのがわかる。

「キバ」

彼に気が付いたシャナが、眼前に舞い降りてきた。

「無事だったのね」

「……ああ。すまない。助けに来たつもりが、逆に助けられた」

「いつも、お前の助けが必要なわけじゃない。困った時はお互い様って言ったのは、お前だったでしょ？」

「……はは、そうだったな」

乾いた笑い声を漏らすキバだが、そこにいつもの覇気は皆無だった。

シャナは躊躇いがちに、口を開いた。

「……ねえ、キバ、さっきどうして」

シャナの問いは、最後まで続かなかった。

『！…！』

キバとシャナが、同時に身構える。

瓦礫の山が、蔓の柱によって巻き上げられ、山吹色の光球が飛び出してきたからだ。

光球の中から出てきたのは、やはり『吸血鬼』を携えたソラトと、兄の首に腕を絡める形で寄り添う、ティリエル。

「あれだけの攻撃を喰らって」

驚きつつ、シャナは『贗殿遮那』を向け直した。

「ボクのだ！　ボクの『にえとののしやな』を返せ！」

「……まだそんなことを」

「 渡して、いた だきま、す わよ」

紡がれたティリエルの声には、遠くから聞こえてくるような違和感があった。

不審に思ったキバとシャナは、彼女に目を向ける。

「 ……！！」

二人とも、言葉を失った。

ティリエルの身体の輪郭は、半分ほどモソラトと重なり、まるで陽炎のように、儂い姿となっていたからだ。

「おまえ……まさか、その周りの力は……！！」

「自分を構成する”存在の力……!?”」

霞がかかった声で、ティリエルは答えた。

「『揺りかごの園』が 崩れたいま あの とんでもない、  
一撃 防ぐこと 私のお兄様 治す と、両方行うに  
“存、在の力” 足りな、か たんですもの」

二人は呆然と、彼女の言葉の意味を理解させられた。

堪らず、キバが問う。

「本質を構成する領域の力は、削ればもう戻らないんだぞ？」

「知って います」

「もう、元の姿には戻れないんだぞ？」

「知って います」

「君は 死ぬんだぞ？」

「知って　います」

ティリエルはただ、優雅に笑うだけ。

いつの間にか、キバは彼女に魅せられていた。

容姿ではない。

彼女の奏でる　心の音楽にだ。

「……なぜ、そこまでの？　私なら、自分たちを守るための自在式が破綻したら、敵なんか捨てて、迷わず逃げる」

シヤナの真つ当な疑問にも、ティリエルの音楽は動じなかった。

ただ純粹に“一つの想い”だけを弾き続ける。



「何度も　　いって、差し上　　たはずです　　けれど？」  
私は、お兄様　　望み　　叶える　　守る、それが私　　全て。  
私の　　お兄様　　望み　　まだ、叶って、いない　　だから  
私　　叶える　　邪魔を、す　　者から、お兄様　　守る」

理由は、ただそれだけ。

兄のために、自らをも差し出す。

誰に何と言われようと、その“想い”だけは否定させない。

（そうだ。この子が奏でる想いは　　）

キバは思い出した。

彼女のあまりに悲しくて儂く　　だが、この世の何よりも純粹で、  
美しい音楽の名前を。

シヤナがキバの心を代弁するかのように、確かめる。

「それが、お前の……?」

ティリエルは、シャナに初めて、嘲りや侮蔑ではない、本当の笑顔  
を向けた。

「そう、愛」

迷い無き想い。

ティリエルの音楽を聞き終えたキバは、言い知れぬ切なさを感じて  
いた。

「ソラト、ティリエル」

もう二人には届かないと知りながら、それでもキバは呼び掛けた。

「違う形で、会いたかったよ」

「……？」

「『お前達が仲良くしてる姿が、羨ましかったんだけどな』」

覚えのある言葉に、霞んだティリエルがハツとした表情を浮かべる。

「……そう、でしたの。“あなた”が　キバ、だった　ですね」

納得して、ティリエルの微笑に悲しみが混じった。

「申し訳、ごさいませんでした　剣を止めて　くださった、の  
に」

「謝るなよ。」

君が大切に思うのはソラトで、俺が大切に思うのは、君達の糧であ

る人間達だ。

決して相容れず 戦うことでしか、俺と君達は分かり合えない」

キバが、突き放すような口調で言った。

「 終わらせよう、“愛染兄妹”。  
あつてはならない出逢いだっただ」

「 ええ」

二人の間で交わされたそれは紛れもない、決別だった。

「 ティリエル、はやくほしいよ！」

「 ええ、ええ、 分か、って すわ、お兄様」

妹の様子を気遣うでもなく、ソラトはただ自らの欲望を満たそうとする。

シヤナは我慢出来ず、馬鹿な質問だとわかっていながら、

「なんで、そんなやつに」

「理屈じゃないんだよ。“どうしようもない”んだ」

ティリエルの代わりに、キバが答える。

「あなたにも この、どうしようもない 気持ち、感じ、させ  
てあげ しょうか？」

「 えっ」

微笑を崩さず、ティリエルは告げる。

「あの橋に、いま しょう年が、一人 いますの」

「!?!」

ティリエルは、顔を青くしたシヤナを満足そうに見て、

「 やっぱり、お兄様 橋、に 」

「 うん！！」

二人を再び山吹色の光が包み、舞い上がった。

「 待つ ！！ 」

シヤナは紅蓮の両翼を羽ばたかせ追う。

「 …… 」

シヤナが飛び去って、キバは無言のまま指をパチンと鳴らす。

轟音を唸らせて、マシンキバーが自動走行してくる。

座席に跨がり、アクセルを入れた。

兄妹とシヤナを追い掛けながら、キバは思う。

（俺はまた、こうやって誰かの音楽を奪う）

自分が大切に思う人の、音楽のために。

（四年経った今でも、俺にはまだ分からない。何が正しいのか）

あるいは、正しさなど何処にもないのかも知れない。

世の中はいつだって、“どうしようもない”から。

なにかもが、理不尽に奪われ、消えていく。

（だけど、それでも俺は　　）

グリップを握る手に、力を込める。

「 ああそうさ。命ある限り、戦ってやるよ」

それが俺 キバなのだから。

次回、仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD!!

「またこうやって、なにもかも無くしてから、瓦礫の中、罪に塗れて、這いつくばって、やり直すのね」

「まさか、貴様 “ そうなのか”」

「見なさい、イクサの本当の姿を!!」

「なんて、馬鹿なの」



「キバは、守ってくれたよ」

「俺の手を、離さないでくれ」

【第十三話・威風堂々／滲むパープルアイ】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！

## 第十二話・メトロノーム/その想いは誰がために・Bパート(後書き)

長くてすみません。キリのいいところで済ませたかったです；

・不遇救済ドガバキフォーム。  
まず懺悔を。作者がドガバキを最初に見た感想は『ひでえな……』  
でした(笑)  
かと言って、この小説での出番はまだありますのでご安心を。

・序盤の奏夜や、原作最終回近くの渡のように、容赦なく力を行使する状態を、作者は『キングモード』と呼んでいます(知るか)  
この状態の奏夜は、過去キングクラスの力があると思っいて下さい。  
い。

・奏夜が奏夜らしくなかったかも知れませんが、あれは彼自身、どうすればいいのかわからなかったが故の行動です。  
立場上、兄妹を許すわけにはいかず、かといって『敵』とも割り切れない……といったところですね。

・恵とマージョリーを会話させてみました。似た点が多いと思うんですよ。勝ち気なトコとか、なんやかんやで面倒見がいいとかか。

あと一・二回の更新でシャナ四巻分は終わりです。

その後はちよっくらオリジナルストーリーに入る予定なので、お楽しみー！

第十三話・威風堂々／滲むパープルアイ・Aパート（前書き）

「かの有名なイギリスの作家、ウィリアム・シェイクスピアは『これが最悪、などと言える間は、まだ本当の最悪ではない』としている。」

本当のどん底にいる人間は『最悪だ』なんて言ってる暇もねえんだ。若人達よ、ネバーギブアップ!!」

キバットバット三世

### 第十三話・威風堂々／滲むパープルアイ・Aパート

「……………」

瓦礫をどうにか退かし、イクサの変身を強制解除された名護が出てきた。

浅い場所に埋まっていたのは幸이었다。

だが、助かったところで状況は変わらない。

「まさかイクサ・ジャッジメントを完璧に防ぐとはな……………」  
「千変」、  
恐るべき相手だ」

名護は頭を直ぐ戦いに切り替えた。

ことによれば、相手はチェックメイトフォー以上の力量。

となれば、対抗手段は“あれ”しかない。

「やはり、出し惜しみはするものではないな。それに、一人で戦うのにも限界が……」

そこで名護は初めて、あのフレイムヘイズのことを思い出す。

「そうだ。『弔詞の詠み手』の安否も確認しなければ」

「その心配はいらねーぜ、白騎士の兄ちゃん。こっちだこっち」

マルコシアスの声に導かれ、名護は崩れた立体駐車場に辿り着く。

中の惨状に顔を曇らせつつ、その一角、瓦礫に埋もれ、気絶したマージョリーを見つけた。

「無事で何よりだ、“蹂躩の爪牙”」

グリモアから群青の火が漏れ、軽い調子の笑い声が響いた。

「ヒヤハハ、お前さんもな。白騎士の鎧が消えたまま瓦礫に埋まって、よく生きてられたもんだ」

「運はいい方だ。それに、人間は元々、頑丈な生き物だからな。私まで鍛えれば、片足で車も止められる」

「今さらりと凄えこと言わなかったか？」

おっと、我が怠惰なる戦人が起きるな」

マージョリーがうめいたのを見て、マルコシアスは言う。

「なあ、白騎士の兄ちゃんよ。

これから俺様がマージョリーに言うことは、全部“嘘”だと思ってくれや」

「嘘？」

「ああ。いい加減、この絶不調な眠り姫も、目を覚まして貰わなきゃならねえからな」

名護がイマイチ理解出来ないまま、マージョリーが目を覚ました。

「……………生きてた……………」

ぼんやりした表情のまま、マージョリーは立ち上がり、服の汚れを落とした。

「ヒツヒツヒ！　全く、おめえの往生際の悪さにやあ感動すらするぜ、我が頑強なる生命、マージョリー・ドー」

「……本当に、死んだと思ったんだけどね」

「まるで死にたかったような口振りだな」

名護が非難がましい視線を、マージョリーに向けた。

「やるべきこともやらずに、まるで脱け殻だぞ『弔詞の詠み手』」

「脱け殻……ふん、そうかもね」

言い返すこともなく、マージョリーに相変わらず気力は無い。

「後悔もなにもない。ただの脱け殻よ、だって、もう、本当にやることはないんだし……」

「……」

本気で怒鳴ってしまおうか。

名護は割と真剣にそんなことを思った。

たださっき、マルコシアスが言ったことも引っ掛かっているため、  
ここは自制する。

「さつて、と。いつまでもこんな所に埋もれてらんないわね。外は  
どうなってるのかしら……」  
ケーサク、エータ、自在式は今、どんな感じ？」

答えはない。

「……」

マルコシアスもまた、無言だった。

「……なによ、今は戦闘中じゃないから、喋ってもいいのよ」



やはり答えはない。

「どうしたの、ケーサク、エータ、なんとか言いなさい！ マル  
コシアス、どうしたの、通信の自在法は途切れてないわよ！？」

ただマージョリーの声だけが、虚ろに反響する。

やがてマルコシアスが、ぽつりと言った。

「さっきから、ずっと出ねえ。物音も、ねえ」

「なっ！？」

名護が思わず声を上げる。だが、

「……………」

直ぐに感情を潜め、瓦礫に腰かけた。

「ど、どついうことよ、なに言ってるのよ!? ケーサク!!  
エータ!!」

脳内で処理仕切れない現実が、マージョリーを襲う。

そんな事実、認められない。とでも言うかのように、マージョリーは怒鳴り続ける。

「まさか勘付かれて、“千変”に? あの兄妹が? なんで、待ってよ! マルコシアス、ケイスケ、なんで起こさなかったのよ!!」

「私が合流したのはついさっきだ。今、初めて知った」

名護は素っ気なく言い放つ。

それきり、暗闇と沈黙が続く。

「っ、マルコシアス!!」

耐えきれず、マージョリーはわけもわからず、無言なままの相棒を

呼んだ。

「おめえの望んだ結果だよ、我が怠惰なる愚者、マーシヨリー・ド  
ー」

「な　！？」

マルコシアスの口調に、いつもの陽気さは無い。明瞭な侮蔑が込められていた。

「後悔もしねえ脱け殻だあ？　そう嘯いている間に、このザマだ。おめえなんとかすることができた。

なのにしなかった。  
白騎士の兄ちゃんや、あの姉ちゃんが、わざわざ忠告してくれたにも関わらず、な。

だから、こうなった……どの口で、誰に文句を言っよ？」

マルコシアスの叱責を、雷にでも打たれたかのように、マーシヨリーは呆然となった。

名護はそんな彼女に構わず、マルコシアスに聞く。

「そんなこと」よりも“蹂躪の爪牙”。“千変”は今何処にいる？」

「！！」

名護の言い種に、マージョリーは思わず言葉を失った。

「私達が負けたとあつては、悠二君が危険かも知れん」

「ん？ ああ、ちょっと待てよ………」

「あ、アンタ……！」

凄まじい勢いで、マージョリーは名護の襟首を掴む。

「アンタわかってんの！？ ケーサクとエータがやられたなら、あのメグミって女だって……！！！」

「……ああ、だろうな」

名護の冷ややかな目に、マージョリーはたじろいた。

「だから何だ？　腑抜けて何もせず、大切な子分二人すら守れなかったキミに、とやかく言われる筋合いはない」

「っ……！！」

怒りが飽和状態に達しかけるマージョリーに、名護は更に現実を突きつける。

「恵はいつも、覚悟を持って戦場にいた。もちろん私もだ。こんな仕事だからな。どちらが死んでもおかしくはない。分かるか？　私達は、死など、とうの昔に覚悟している」

揺らぎない口調で、名護は続ける。

「だから恵が死んだとしても、私は歩みを止めはしない。私が歩みを止めれば、それは恵に対する最大の侮辱だ。死んでいった者の命を受け取り、繋ぐ。それが、生きる者の責任だからだ」

自分を掴み上げている手を払い、名護は逆に言い返す。

「それに引き換え、キミは何をした？  
佐藤君と田中君は、まだ高校生だ。死ぬ覚悟が出来ていたとは思えない。」

「ならばそれこそ、力のあるキミが、守ってやらなければならなかったのではないか？」

「……………」

マージョリーの手が震え出していた。

「“蹂躪の爪牙”の言う通り、キミは結局、何もしなかった。」

『戦う理由が見つからない』。

「そんな下らない理由で、戦いから逃げ、佐藤君と田中君が、キミに抱く憧れに甘えていただけだ」

「だって！」

顔を附せ、マージョリーはさすがのように、感情を爆発させた。

「もう少し休ませてくれても、甘えさせてくれてもいいじゃない！  
！ 何百年私がやってきて、いきなり全部、それを奪われて、そんな、急に自分を帰るなんてことなんて出来ないわよ！」

「いい加減にきなさい!」

今度は名護が、マージョリーを瓦礫の壁に押し付けた。

その顔には、本気の怒りが刻まれている。

「戦いでそんな甘えが通用すると思ってるのか!?

自分を変えることなんて出来ない!? 変えようとしなかった分際で、よくそんな口が叩けるものだな!」

いつもの冷静さは何処へか、名護はマージョリーを怒鳴り付けた。

やがて、語調は落ち着いたが、瞳だけはマージョリーを強く睨み付けていた。

「私もかつては、キミと同じだった。

自分の本質を変えられず、幼稚な正義を否定されれば、自暴自棄になるだけの弱い人間だった」

今ならわかる。

あの時、他人が自分をどういう風に思っていたのか。

自分が、どれだけ愚かだったのか。

けれど、あの頃の自分は、あまりに頑固で、自分勝手過ぎた。

それを言い訳にするつもりは無いが、とにかく、本当の自分を認められなかったのだ。

そんな時だ。

彼に会ったのは。

「彼は、強大な力を持って余っていた。だが、それに負けない心の強さがあった。何度傷付こうが、何度自分の信じたものに裏切られようが、その度に成長し、変わり続けてきた」

彼には、言葉で言い尽くせないほど感謝している。



彼がいなければ、今の自分はいない。

「だがキミは、彼の足元にも及ばない。

たった一度の挫折で挫け、そのたった一度の挫折すら、受け入れられないでいる。

やらなかったことを、言い訳にするのは、もう止めなさい」

名護が手を放すと、マージョリーは糸の切れた人形よろしく、足から崩れ落ちた。

身体がずしりと重い。

広がる虚脱感は、涙すら流させてくれなかった。

それからしばらく、三人共言葉を交わさなかった。

沈黙が続き、ようやくマージョリーが重い口を開く。

「……………やらなかったことは、罪なの……………？」

「おめえがそう感じるのならな。それも、勝手さ」

「大切なのは、罪に向き合った時、どうするかだ」

マルコシアスと名護が答える。

「……………今度のは、壊したいものじゃない、守りたいものだったの」

言って、マージョリーの周りに群青の火の粉が集まり出す。

「またこうやって、なにもかも無くしてから、瓦礫の中、罪に塗れて、這いつくばって、やり直すのね」

「そーいうこった。おめえは、とっくに選んでんだぜ？ なにもかも無くして、それまでもこれからどうしようもねえ場所で、まだ立ち上がる……………そんな道をよ」

「まだ、立ち上がる、か……………でも、案外、結構、凄く……………堪えるわ。」

ねえ、ケイスケ」

ふと、マージョリーは名護に尋ねた。

「アンタは何で、立ち上がれるの？」

「決まっている」

名護の答えは簡潔だった。

「この身体の細胞一つ一つが、正義の心に燃えているからだ」

決してそれは、幼稚な理想ではない。

戦う理由。

名護を支える、確固たる信念だ。

「ふうん……そりゃ大層な理由ね」

少しだけ笑い、マージョリーはよろよると立ち上がった。

群青の炎が、更に輝きを増す。

「ここまで聞いてまだ、ここにほとぼりが冷めるまで潜んでるかい？」

「まさか。“可愛い子分”を殺されたのよ。こっちの手落ちだとしても、ただじゃ済まさないわ」

「ヒヒ……じゃあ、行くか」

ずんぐりした群青色の獣 炎の衣『トーガ』を纏い、ギザギザした歯を光らせて、マージョリーは瓦礫の山に立った。

と、その時である。

「ん、えっ!?!」

「どわあっ!」

「きゃっ!」

驚く声が、三人分。

「え?」

『トーガ』の中から、呆然とその光景を見下ろす。

「……ケ、ケーサク、エータ……?」

そこには、瓦礫を掘出そうとしていたらしい佐藤、田中、恵の三人が  
いなくなったと思っていた三人がいた。

「……ちよっ、と、どっ、いっ、こと……?」

傍らを見れば、名護とマルコシアスが、笑いを必死に噛み殺していた。

「ヒッ、ヒヒ、ヒ、まあ、この世もたまにや、甘えツラを見せることがあるってえわけだ」

「ふ、ふふ……本当に、迂濶だぞ『弔詞の詠み手』。少し考えれば違和感に気付いたろうに」

「か、担、いだ、わ、ね……バカ、マルコ。ケイ、スケまで、グルに、なつて……!!」

怒りのあまり、トーガから火花が弾ける。

「あーん？ 俺あ、『さつきから誰も出ねえ、物音もしねえ』とは言ったが、ご両人が死んだなんて、一言も言っちゃーいねえぜ？  
ご両人も、“俺が”『ここに埋まってる』って言ったから、姉ちゃんを護衛に頼んで来てもらっただけだしよ。ミナミナ、おめえの早とちりだろ」

「私も恵が死んだ“場合”の話はしたが、はっきり彼女が死んだとは言っていないぞ。ただ、“蹂躪の爪牙”に『これから俺が言うことは全て嘘』と言われただけだな」

「おいおい、俺様に全部責任転化かあ？」

「提案者はキミだろうっ？」

「そーだったかあ？　ヒヤッヒヤッヒヤ！」

「はははは」

「あん、た、たち、ねえ……！！！」

爽やかにドツキリ成功の余韻を楽しむ二人を、恨みがましい視線で見る。

「マ、マージョリーさん！」

「姐さん……！」

「名護くん、ちゃんと生きてるー？」

三人が瓦礫の下から声を張り上げる。

隣で名護が「ああ、ちゃんと生きてるぞー」と返す傍ら、マージョリーは佐藤と田中を見た。

二人が、生きてた。

その実感が急に込み上げてきて、マージョリーはさっきまで出せなかったものが、瞳からポタポタ流れてくるのがわかった。

（ う、うわ、ちょ、待っ!?! ）

「? マージョリーさんどうかしたの?」

瓦礫を登ってきた恵が、青い獣が肩を震わせているのを見て首を傾げる。

「気にしてやるな恵。佐藤君と田中君も、ここはもう大丈夫だから、もう戻りなさい」

「え、でも怪我とかは?」



佐藤が気遣わしげに言うこと、

「ヒッヒッヒ、この程度で我が不死身の猛者、マージョリー・ドーが傷付くもんかい。むしろ戦いに向かいたくてうずうずしてるよ」  
「よ」

「この程度って……もうえらい惨事ですけど」

田中は、世紀末世界のように荒廃した周囲を見渡す。

「早く『玻璃壇』に戻れとさ、今ヒス状態だからよ、下手に絡んだら、このドでけえ手で思いつ切りぶったたかれるぜ？」

マルコシアスの言葉に取り敢えず納得したのか、佐藤が頷いて、

「そうですね。じゃあ、俺達、戻ります」

瓦礫を降りる途中で田中が、

「“徒”なんか、ぶっ飛ばしてやってくださいよ……」

二人の声を聞いて、無言のままマージョリーは頷く。

名護もまた、恵に声を掛けた。

「恵、二人を頼んだぞ」

「まっかせなさい！ 名護くんこそ、怪我して約束すっぱかしたら許さないからねー！」

笑顔で言い返し、恵も下に降りていく。

ややあつて、マージョリーが、名護とマルコシアスにだけ通じる声で聞いた。

(……お礼、言つべきなわけ、コレ)

(ゴゴゴ、ちっきのとコレでキャラ、ってゴゴゴゴゴゴ)

(全部自分で撒いた種でしょうが……なんなのよ、もう……私、馬鹿みたいじゃない)

(馬鹿を見ただけで済んだ、と思ったらどうだ？ 世の中、それくらい余裕を持った方が面白いぞ)

(そ。んじゃ、その勢いに乗ったまま、余裕でカタをつけちゃいましょうか)

(ああ)

(そーこなくつちな)

迷いなく、新たに生まれた強い決意を胸に、二人の戦士は再び走り出す。

非情なる戦場を目指して。

同時刻、御崎大橋。

依然として、悠二の危機的状況は継続中だった。

名護の危惧通り、彼ら二人が負けたことにより、“千変”シュドナイは、あっさり御崎大橋まで辿り着き、悠二と対峙している。

どうにか さっきまでは自分のミステスという立場を利用し、以前シャナから聞き知っていた、史上最悪のミステス“天目一個”と信じ込ませることが出来た。

だが、それも限界である。

(……ど、ど、ど、どうし、よう)

力の流れを手繰れば、シャナとキバが、ここへ近付いて来ていることはわかってる。

だが、シュドナイもまた力の波動を感じ取り、戦意をみなぎらせてしまっていた。

絶対的強者の殺意にあてられ、若干普通でないとはいえ、ほとんどただの高校生である悠二が、それに耐えられるはずもない。

カチカチカチ、と恐怖は歯の震えとなって表れる。

無論、シウドナイがそれに気付かぬはずもない。

「！　　　　貴様！！！」

（ま、ずい！！）

疑念が怒りに染まり、シウドナイは一瞬の内に、腕を伸ばして、悠二の胸を突き刺した。

「この俺をペテンにかけたな？」

「あ……」

ミスレスである悠二は、核たる宝具を取り出されれば、その存在は消える。

既知の、だが残酷な事実を、悠二は恐れと共に実感していた。

「ちっ、なんてことだ。せめて中身くらいは当たりであってくれよ

あまり期待していないような口調のまま、シュドナイは悠二の中から、目当ての宝具を探り当てる。

(あつた)

(っ、シャナ、ごめん!!)

悠二はぎゅっ、と目を瞑った。

にやりと笑ったシュドナイが、“それ”に触れる

ピシ。

何かが軋んだような音。

「？ つが」

だんだんと、思考力が戻ってくる。

「ぐ、お」

消えていない。

悠二がそう認識するのに数秒。

「おおお」

そしてシュドナイが、自分の腕 悠二の中に潜り込んでいた部分  
が、根刮ぎ失われたのを認識するのに、更に数秒を要した。

「ぐ、がああああーっ！？」

濁った炎を弾けさせる傷口を掴み、シュドナイはこの世のものとは

思えないような、絶叫を上げた。

「……か、『戒禁』！？ 馬鹿な、俺を、この“千変”を退けるほどの『戒禁』だと！？」

「う、う」

シュドナイの叫びに、悠二は大した反応を取らなかった。

自分の中に取り込まれた、シュドナイ腕の存在感、異物感、不快感。

自分の中とのズレに苦しんでいたからだ。

「一体、何を蔵している。貴様……いや、“封絶”の中で動く……」

何かに気付いたように、シュドナイの動きが止まる。

さっきまでの苦悶は消え、代わりに壮絶な歓喜が沸き上がる。



「まさか、貴様 “そうなのか”」

「う、あ」

「やはり、そうか……。クク、まさか、これほど早く見つかるとは……ク、クク、クククク……」

見た者を凍りつかせるような笑みのまま、シュドナイは再び、悠二に手を伸ばす。

だが、

「ちょっと待ったー！ー！」

ちょうどそのタイミングで、シュドナイの顔面に、白い影が、凄まじい勢いで衝突した。

「がっ！？」

スコーン！　　と、といういい音がして、シュドナイはよろめく。

悠二の眼前には、真っ白なコウモリ。

「大丈夫！？　　悠二くん！」

「キバーラ、何でここに……！」

「悠二くんの気配と、“徒”の気配がかち合ってたから、急いで助けに来たのよ！」

「シューちゃん、お願い！」

「キュルオオオツ！！」

幼げな鳴き声と共に、御崎大橋の下の川から、赤いドラゴン　　シ  
ユードランが飛び出してきた。

「キバツト族にドラゴン族だと……！？　　ちいつ、こんな時に！」

「一先ずは、シュードランを始末するべく、紫の炎弾を撃つシュドナイ。」

だが、小回りの聞くシュードランに、それは当たらない。

「さ、悠二くんは早く逃げなきゃ！」

「け、けど……」

「大丈夫よ、“千変”のお相手はもう来てるわ！」

キバーラが言い終わるか言い終わらないうちに、

「ドカーン！！！」

「ぬっ！？」

上空のシュドナイを、炎の塊が横様に蹴っ飛ばした。

「うーん、ちよいとタイミングは遅れちゃったかしら？」

「が、戦機は熟して、程好い食い頃だぜ、ヒー、ハー！」

そこにはトーガの獣が、不敵な笑みで立っていた。

やや遅れて、イクサリオンに乗った名護も到着する。

「悠二君、無事だったか？」

「名護さん！ 良かった、二人とも無事で……」

「ヒハハッ、色々紆余曲折はあったがな！」

「お黙り」

「あっ、そ、そうだ、『オルゴール』！！ この上に……！！」

悠二が指差す先、御崎大橋の主塔を、名護とマージヨリーは振り仰ぐ。

「なるほど、よく見つけてくれたな。だが……」

「あれはチビジャリとキバに任せましょ。こっちはあのグニャグニャ野郎の邪魔をしないと」

「え？　でもさっき……うつつ！！」

力の膨張を感じ、悠二がうめく。

「あいつがああ程度で死ぬようなら、誰も苦労しないっての」

「キバと嬢ちゃんに教えてやんな。白騎士の兄ちゃん、乗っかな」

「ああ！！」

肩に名護が乗ったのを見て、トーガは真南川をすっ飛んでいく。

やがて、水中に浮かぶ影　海蛇のような姿のシュドナイが表れる。

「くっ、邪魔をするな、『弔詞の詠み手』！」

「なーに？ つれないこと言ってくるじゃない“千変”」

「そう言われると邪魔したくなるのが、世の常ってもんだぜい、ヒヤーツハハハ！！」

「悠二君に手出しはさせん！ この街にもだ！」

名護はイクサベルトを巻き、イクサナツクルを手に押し当てる。

『レ・デ・イ・ー』

「イクサ、爆現！！」

『フ・イ・ス・ト・オ・ン』

アーマーの映像が重なり、頭部のクロスシールドが展開。

光子力を放出させ、名護は再びイクサへと変身する。

「その命、神に返しなさい！！」

「さて、さっきは歌えなかったからね……。  
今度は聞かせたげるわよ、とびつきり酷いのをね!」

「ヒーツヒヒヒ!!　いいねえ、いいねえ!　一丁、派手にブチかますとすつかあ!」

『甲詞の詠み手』マージョリー・ドー&『仮面ライダーイクサ』名護啓介vs“千変”シュドナイ。

リターンマッチ、スタート。

「……来た!」

「シャナちゃん!」

悠二とキバーラは、ほぼ同時に、シャナの姿を視認する。

二人は指（キバーラは翼）で、主塔の上を指す。

宝具の位置を教えるためだ。

（あの馬鹿！）

自分が狙われていることも知らないで！

シヤナは呑気な態度に呆れ、だが同時に嬉しくもあった。

（やっぱり、一緒にいてくれた）

気持ちを弾ませ、更に速度を上げる。

だが、先に行く“愛染兄妹”までの距離は、まだ遠い。

「さあ　いきます、わよ　彼に、ごあい拶を　！」

ティリエルが生み出した火の粉は、一瞬で炎弾まで膨らみ、悠二目掛けて飛んでいく。



「ちいつ！」

腕を振り、紅蓮の炎を発生させるが、力の消耗のせい、大分サイズが小さい。

いくつかの炎弾を取り零した。

直ぐ様滑空し、残りを防ぎにいくが、間に合うかどうかはギリギリだ。

と、シャナの視界、御崎大橋の端から、轟音を響かせる紅のバイクが走ってくる。

シャナとは違い、陸路を追ってきたキバだ。

『キバ！』

「坂井悠二、キバーラ、上手く避ける！」

『えっ？』

悠二とキバーラの声が重なった。

キバはブレーキをかけるどころか、更にアクセルを入れて突進してくる。

「うわぁ!」

「キヤー!」

悠二とキバーラはほとんど転がるように、マシンキバーを回避。

「ハッ!」

マシンキバーをウィリー走行させ、反転。

車体のターンを利用し、“愛染兄妹”の炎弾を弾き返した。

「無事だったか」

「無事だったか、じゃないわよっ!!!」

キバーラが頬を膨らませ、悠二も、

「危うく轢き殺されかけたじゃないか!」

いや、もう死んでいるけれど。

「悠二!」

追いついたシャナが、呼びながら悠二の手を掴んだ。

「来て」

「うん」

頷いて、悠二はシャナの手を、しっかりと握り返す。

紅蓮の軌跡を描きながら、

二人は主塔へと舞い上がっていく。

「キバーラ、お前はここにいろ」

「わかったわ」

言い残し、キバも柱を蹴り移りながら、シャナ達を追い掛ける。

「ぐえっ！」

主塔の屋上に悠二が乱暴に放り捨てられ、続いてキバとシャナが降り立つ。

屋上の中心部に、小箱に入った宝具　オルゴールがポツンと置かれていた。

規則正しく、涼やかな音楽を奏でている。

「やっととまった！　ねえ、はやくわたしなよ、ボクの『にえとののしやな』！！」

「さあ……お兄様に、渡し、て」

キバ達とは反対側に降り立った愛染兄妹は、相も変わらず、シャナの宝具を欲していた。

「な、な……!?!」

悠二が、顔半分の輪郭以外を保っていないティリエルを見て後ずさる。

片やシャナとキバは冷静に、状況を把握していく。

「その『オルゴール』とやら、自在法を音色に変えて奏でているのか」

「あら よく、気付きましたわね」

「ああ、音楽は好きなんだな」

素っ気ない口調でキバは答える。

「ボクらの『オルゴール』はすごいんだぞ！　　むずかしいじざい  
ほーを、まとめてたくさんつかえるんだ！！」

「　ええ、その通りですわ、お兄様。複雑な『ピニオン』稼働の  
ための自在式も、一度これに込めれば、あとは自動的に行ってくれ  
る」

言いながら、ティリエルはまた新たに、自在式を打ち込んだ。

『オルゴール』の音色が、また変わる。

(力の消費が、更に加速した)

ティリエルの姿が、更に霞んでいく。

シヤナは、彼女にしては珍しい、別れを惜しむような口調で言う。

「なんて、馬鹿なの」

ティリエルは笑みを崩すことなく、消滅に一抹の恐怖も抱かず、返  
す。

「うふふ “ありがとう” でも私は、私のお兄様以外から、  
賞賛を受けようとは思っていませんのよ  
いえ そう、  
誰からも” “

「 貪り愛し、他に染まる。 “愛染他” か。  
キミに相応しい名だよ、ティリエル」

キバはぽつりと呟く。

「ええ、そう  
それが、私  
ですわ」

当たり前のように答えたティリエル。

「……そうか」

キバにもはや、贈れる言葉は無かった。

口を閉ざし、シヤナと並び立つ。

「行くぞ、『炎髪灼眼』」

「大丈夫なの？」

シヤナは短く問う。

戦えるのか。

裏打ちされた思いが、キバの頭に響いてくる。

「……………」

キバは沈黙したまま、腕を空に翳す。

赤い魔皇力が雲を切り裂き、上空に紅の紋章を描いた。

コウモリの如きそれは、キバの紋章。

キバを受け継ぐ者、人間とファンガイアを守る戦士の証。



「戦つた」

今度は優しさではなく、弱さを仮面に封じ込め、キバは答える。

「何もかも、俺が決めて選んだ旅路だ。すべてを背負う覚悟は、もう出来ている」

「そう」

『贄殿遮那』を構え直し、

「なら、いいわ」

再び満ちた二人分の戦意は、空気をピリピリと震わせる。

シヤナは一度だけ、後ろの悠二に宣言した。

「大丈夫」

「うん」

ただそれだけのやり取り。

一緒にいるんだ。

それだけを、シャナと悠二は感じる。

「さあ、参りましょう お兄様」

「うん、ティリエル！　ボクの『にえとののしやな』！！」

バックミュージックは、ソラトの我欲、ティリエルの献身。

『オルゴール』の、何処か悲し気な音色がそれらを彩り、決着の時は訪れた。

『炎髪灼眼の討ち手』 シャナ&アームズモンスターズvs“愛染自” ソラト&“愛染他” ティリエル。

延長戦。

『炎髪灼眼の討ち手』 シャナ & 『仮面ライダーダーキバ』 紅奏夜 VS  
“愛染自” ソラト & “愛染他” ティリエル。

スタート。

第十三話・威風堂々／滲むパープルアイ・Bパート

『ペニイ！ ペニイ！ ペニイ！ ペニイ積もればお金持ち、  
つとー！』

「ヒヤーツ、ハーツ、ターマヤー！！」

炎弾の流星群が、水中のシュドナイを容赦なく撃ち抜いていく。

「ぐはおおおおー！！」

屠殺の即興詩は次々と浮かんでくる。

憂いはもはやどこにも無かった。

「絶好調だな、『弔詞の詠み手』」

「ええ、何か気分良いわ。  
なんだ、憎しみ以外でも結構、戦えるじゃない」

「みてえだな、ツヒヒ！」

二人の様子にイクサは笑って、トーガの肩から腕に移る。

「思い切り頼むぞ！」

「りょーかい、いっくわよーッ！」

ブオンツ、という風切り音と共に、弾丸よろしく、イクサは飛んでいく。

その先には、炎弾により、水面に海蛇の身体を出しているシュドナイ。

「ハアーーッ！」

スピードにより貫通力が追加されたイクサカリバーが、シュドナイに迫る。

「ぬっ！！」

「舐めるなあ！」

間一髪、身を反らしたシュドナイ。

イクサの斬撃は、彼の身体を掠めるだけに終わる。

瞬時に、顕現した虎の剛腕が、イクサに襲い掛かる。

「ちいっ!!!」

空中で身動きの取れないイクサは、両腕をせめてものガードに回す。

キュルオオーツ!!

と、そこへシュードランが猛スピードで突進してきた。

シュードランはイクサを間一髪のところまで救出し、シュドナイの腕は空を切る。

「す、すまない。助かった」

キュルルル。

ぶら下がるイクサが礼を言うと、シールドランは嬉しそうに喉を鳴らす。

「人間風情が、俺を退けようなどと、身の程を知らんのか！」

「身の程を知らない、か。ふん、舐めているのはどっちな、  
“千変”」

「……何だと？」

不敵な態度をいぶかしむシウドナイをよそに、イクサはシールドランの背中に乗る。

「言ったはずだ。人間の力を、イクサを甘くみるなど。  
人間は確かに弱い」

だが。とイクサは言葉を継いだ。

「その分、諦めが悪い。勝つまで、いくらでも食らい付くぞ」

仮面の下で、名護は余裕のまま、ニヤリと笑った。

「見なさい、イクサの本当の姿を!!」

叫び、イクサは右手を口元に翳す。

すると、マスク部分が外れ、携帯端末『イクサライザー』へと変わった。

慣れた手付きで、イクサはボタンをタッチしていく。

【1・9・3】

『ラ・イ・ジ・ン・グ』

起動の電子音が鳴り、最後にイクサは【ENTER】キーを押した。



胸部のイクサエンジンは完全開放され、白いアーマーが弾け飛ぶ。

剥き出しのボディは、新たに青空を思わせる装甲、『ガーディアンコバルト』に覆われ、ソルミラーがあつた中央には、血脈を思わせる赤いエンジン、『コロナコア』が覗く。

クロスフィールドがイクサメット上で組み変わり、雄々しき黄金の衝撃防御装置、『ライジングホーン』に変化した。

最後に、イクサライザーヘグリップ部分となるフェッスルをセットし、ブラスターモードに移行させれば、完了。

ライジングイクサ。

22年のパワーアップの末にロールアウトされた、通常形態で抑制されているイクサの力を、最大限発揮出来る強化形態だ。

「行くぞッ!!」

甲高いリズミカルな発砲音と共に、イクサライザーから、オレンジ色のエネルギー弾が発射される。

「はっ、今さらこんなものを使って何になる!!」

イクサカリバーの弾丸と同じように、シュドナイはそれらを腕で薙ぎ払おうとする。

だが、

「がふっ!?!」

押し負けたのはシュドナイだった。

海蛇の身体が仰け反り、弾痕が浮き上がる。

「私に同じことを二回言わせてくれるなよ、“千変”。『人間の力を、イクサの力を舐めるな』」

「くっ……!!」

ライジングイクサの嘲りに、シウドナイは屈辱余り、サングラスの奥の瞳を怒りに血走らせている。

イクサライザーの火力は半端なものではなく、当初はライジングイクサ自身も持て余していたレベル。

ましてや、油断していて防御出来る代物ではない。

「ヒューウ、やるじゃねえの兄ちゃん!　ヒッヒッヒ!」

「んなかくし球があるなら、もっと早く使いなさいよ」

「奥の手は、取っておくからこそその奥の手だ　おっと」

シウドナイの反撃を、トーガとシールドランは危うくかわす。

「畳み掛けるぞ」

「言われなくてもッ!」

「そのつもりだぜ、ヒャー、ハー!!!」

一匹の竜と、一匹の獣は縦横無尽に水面を飛び回り、敵の攻撃を軽々回避していく。

勿論、反撃も忘れない。

イクサは【2】を押し、トリガーを引く。

『ブ・リ・ザ・ー・ド』

すると、イクサライザーから霧のような氷結ガスが噴射される。

「なっ!?!」

シウドナイの周囲の水が一瞬で凍り付き、その動きを奪う。

『薔薇の花輪を作ろうよ、っは!』

『ポッケにゃ花が一杯さ、っと!』

分裂したトーガがシュドナイを囲み、一斉に弾ける。

「ぐおおっ!？」

(おのれ、こつも一方的に……!)

こんなことをしている場合ではないというのに。

ようやく『零時迷子』を見つけたというのに。

だがマージョリーも、イクサも、シュドナイをして異常だと思いつ  
らしめる強さだった。

それに、愛染兄妹も、もう保たない。

微かに感じる気配を辿ってみれば、あの兄妹が劣勢なのは明らかだ  
った。

(しかし、だとすると、あの兄妹と独力で渡り合っているフレイム

ヘイズも、相当な使い手ということになるが……何者……)

「 うおっ!?! 」

イクサとマージョリーの、エネルギー弾と炎弾が、二方向から浴びせられる。

蝙蝠の翼を使い、上空へと退避する。

シウドナイの視界が一気に開けた。

もちろん、もう一つの戦いも目に入る。

「!」

始めに、煌々と燃え上がる炎。

次に、空に刻まれた赤きコウモリの紋章。

( 紅蓮の炎!!      しかも、あのマークはまさか……!! )

忘れるはずもない。

紅蓮色を宿す、唯一人のフレイムヘイズ。

世界の闇を支配する、破壊の魔帝。

「 『炎髪灼眼』 と 『ファンガイアの王』 だと!？」

「 じゅめーとー!?! 」

「 あ、た、り、だ!?! 」

「 イクサ……、爆現!?! 」

らしくもない隙を作ったシュドナイに、トーガの両腕と、ライジン  
グイクサのイクサカリバーが叩き込まれた。

「ぐわあっ!!」

真南川に叩き落とされながらも、シュドナイの頭に浮かぶのは、後悔と危惧だけだった。

(最悪だ! “天壤の劫火”が!! 『破壊の魔帝』キバが!  
! 『零時迷子』と一緒に!!)

最高と最悪の状況が同時に来たことを知り、シュドナイは何も出来ないもどかしさに、握り拳を作る。

(過干渉は出来ない!! 我々との関わりを気取られたら終わりだ!!)

くそっ、この場に『弔詞の詠み手』と、あの白騎士さえいなければ、すべてが上手くいくものを……)

後ろ髪引かれる思いで、だが冷静に、彼は行動を選ぶ。

「ん!？」

「なぬっ?」



「何？」

三人の追っていた水面の影は薄まり、すぐ見えなくなる。

マージョリーが目を見開いた。

「“千変”が……逃げる？」

戦いの痕を感じさせない、いつも通りの真南川が、そこにはあった。

『甲詞の詠み手』マージョリー・ドー&『仮面ライダーイクサ』名護啓介vs“千変”シュドナイ。

リターンマッチ。

“千変”シュドナイ逃走につき、『甲詞の詠み手』マージョリー・

ドー&『仮面ライダーイクサ』名護啓介、判定勝利。

「はあっ!!」

「ヴアア!!」

シヤナは紅蓮の大太刀が射出し、ガルルフォームとなったキバは、俊敏さを生かし、上空からソラトに斬りかかる。

片や、ソラトはシヤナの炎を真っ正面から突き破り、そのままガルルセイバーを受け止める。

「ちっ!!」

『吸血鬼』とは斬り結べない。

直ぐ様キバは跳躍し、ソラトと距離を取る。

「防がれた」

「さつき宝具に打ち込んだのは、火除けの自在式か」

シヤナとアラストールの分析は、キバの耳に入らなかった。

自在式は、確かに“ソラト”を守った。

だが、もう一人は適応範囲外だ。

「私の お兄様」

紅蓮に飲まれる時さえも、ティリエルは最愛の兄のことを想っていた。

「なんでも なさって 私が、許し」

真名の通り、愛の為に生きた少女は、霞となって消え果てた。

「……………」

キバはガールセイバーを握り締め、顔を上げる。

「『炎髪灼眼』」

キバの声に、シャナは耳を傾ける。

「最後は、俺にやらせてくれないか」

沈黙したシャナに、キバは告げる。

「落とし前は、自分でつけたいんだ」

「わかった、任せる」

刀を収めた彼女に頷き、キバはガールフォームを解除し、新たなフエッスルを取り出す。

「こいつなら負けないぜ！ 力には力だ！」

キバットが紫のフェッスルを吹き鳴らした。

『ドツガハンマー！』

重厚な音色に誘われ、ドツガの彫像が飛来し、魔鉄槌『ドツガハンマー』に変形。

それを掴んだ両腕から鎖が巻き付き、腕をライトニングシールド、肩をハンマーシールド、胸部をアイアンラングと呼ばれる紫の重装甲が覆う。

キバとキバットの瞳も同じ色に染まり、キバ・ドツガフォームへの変身が完了した。

「ハアアア………フン……！」

肩を回し、ドツガハンマーを引き摺りながら、倦怠感溢れる動きで、キバはゆっくりと前に進む。

「もう！　　じゃましないでっていつてるじゃないかー！」

妹の消滅も意に返さず、ソラトはキバに斬りかかる。

「ハッ！！」

その腕を片手で弾き、流れるようなモーションで、ドッグハンマーを振り被る。

「フン！！」

拳の形をした本体が、強烈なインパクトをもって、対象物を破壊する。

「じぶっ！？」

腹への衝撃に身を折りながら、ソラトは主塔の床をざりざりと滑る。

「一気にキメるぜ！！　　キバ！」

キバットの掛け声に応じ、キバはドツガハンマーの柄を、彼にくわえさせる。

『ドツガ・バイト!』

コールと共に、キバの魔皇力が周囲を支配する。

作り出された夜空には、ドツガのパワーを最大まで引き出す朧月が浮かんでいる。

ピシャアア!

「っ!」

「うわぁ!」

突然起こった紫の落雷に、近くにいたシャナと悠二は目を覆った。

キバがその身に雷の力を呼び込むと、紫の仮面、キバ・ペルソナが妖しく輝いた。

「うああああ！」

動かないキバを好機と見たのか、ソラトが突っ込んで来る。

キバからすれば、愚作でしかない。

ドッガハンマーを地面に立てたキバは、後部のレバーを外した。

ガチャン！

ドッガハンマーの拳が開き、中に内臓された巨大な眼『トゥルーアイ』が、ソラトを睨む。

刹那、『トゥルーアイ』から放出された魔皇力が、ソラトの身体機能を麻痺させる。

ソラトはまるでビデオの一時停止のように、走る姿のまま、動きを止めた。



「ハアア……ッ！」

キバがドツガハンマーを天高く持ち上げ、横に振り回していく。

すると、放出されたオーラが、巨大な拳の幻影『ファントムハンド』を作り出した。

ドツガハンマーを振り被る瞬間、キバは微かな声で、ただ一言だけを、送る。

「……すまない」

真上から振り下ろされたドツガフォームの必殺技、『ドツガサンダースラップ』が炸裂し、ソラトを圧倒的な力をもって粉碎した。

持ち主を失った『吸血鬼』が、墓碑のように突き刺さる。

キバは無言のまま、取り残された剣を目に収めた。

「キバ？」

いつもと様子の違うキバに、悠二が駆け寄ろうとする。

「どうかし……」

「今は」

だがキバは、悠二にも、同じように走り出していたシャナにも、振り返らなかった。

「話し掛けないでくれると、嬉しい」

有無を言わせぬ口調に、シャナと悠二はもう何も言えなかった。

寂寥が刻まれたキバの背中は、まるで泣いているようだったといふ。

『炎髪灼眼の討ち手』シャナ&『仮面ライダーキバ』紅奏夜VS“愛染自”ソラト&“愛染他”ティリエル。

深くつらい傷を残して、勝者、『炎髪灼眼の討ち手』シャナ&『仮面ライダーキバ』紅奏夜。

「……………」

しばらくして、キバは振り返らぬまま、主塔から去るつとにする。

「あ……………」

悠二は思わず声を上げる。

どうしてもわからない。

ただ、このままキバを行かせてはいけない。

何故か、そう思った。

「キバ！」

話し掛けるな、という禁を破り、大声を上げた悠二を、キバは振り返りこそしなかったが、動く足を止めた。

シヤナも驚いて、悠二を見ている。

「……………えっと」

引き止めこそしたものの、何を言えればいいのか。

迷った拳げ句、悠二は口を開く。

「キバは、守ってくれたよ」

「……………」

「キバが、何でそんな悲しそうなかわからないよ。」

「……………」でも、キバはシャナと一緒に、この街を守ってくれた。そのことだけは、間違っていないと思う。

だから、その……………」

何を持って、励ませばいいのかわからないままに、悠二はがむしやらに言葉を選ぶ。

シャナもまた、悠二と同じ気持ちのまま話す。

「私も、助けて貰ってる。お前が自分を認められなくても、私達はお前を認めてるわ」

「……………」

不器用で、わかりづらい言い方。

だが、キバには、二人が言いたいことは、伝わっていた。

「  
ありがとう」

キバの礼にも、やはり力は無かった。

結局キバは、二人を見ることなく、主塔から降り、姿を消す。

下から聞こえてきた、静かに響くエンジン音が、キバの空虚さを表しているように、悠二は思った。

シヤナ達よりも早く、キバは御崎学校に戻り、奏夜の姿に戻った。

だが奏夜は、元いた屋上に戻ることなく、校舎裏の木に腰掛けていた。

いつものふざけた調子は無く、彼にしては珍しい、物憂げな表情だ。

「なあ、奏夜」

「ねえねえ、元気出してよ」

隣に座るキバットとキバーラが声をかけるが、何の反応も無かった。

無理もない。

そうキバットは思う。

（また、あんな辛い選択をしちまったんだもんな……）

（お兄ちゃん、私は先に戻るわね。お兄ちゃんと二人だけの方が、奏夜も話しやすいだろうから）

（ああ。悪いな、キバーラ）

気を利かせたキバーラが去った後も、奏夜はだんまりを貫いていた。

「奏夜。その、さ」

堪らず、キバットは話し掛け続ける。

「ここにや、俺しかいないし、泣いてもいいんじゃないかな」

「……泣き方なんか、とっくの昔に忘れたよ」

いや、泣く資格すら無い。

「俺はまた、人の音楽を守るために、人の音楽を奪ったんだからな」

「そりゃ、仕方ないだろ。……そうしなきゃ、こっちがやられちまうんだから」

「でも、罪は罪だよ」

何の迷いもなく、奏夜は言い切る。



「俺は、ソラトとティリエルを良いヤツらだっけ知ってた。けど、最後にはあいつらを殺しちゃった。」

俺は結局、掟破りのファンガイアと何も変わっちゃいない」

ガブツ！

キバットが奏夜の腕に本気で噛み付いた。

キバに変身するわけではないため、傷口からは赤い血が流れる。

「オイ！！ 最後のセリフ、俺様の前で二度と言っんじゃねえぞ！」

奏夜は僅かに、表情に驚きを混ぜる。

温厚なキバットが、本気で怒っていた。

「俺様を見くびんじゃねえ！！」

てめえは俺様が、罪もねえ人間を喰う連中と、親友になるとでも思っただけか！！」

耳の穴かっぽじってよく聞きやがれ！！

前置きし、キバットは奏夜を怒鳴りつけた。

「お前は紅奏夜で、人とファンガイアを守る戦士で、バカがつくほどのお人好しな、俺様の親友だ!!」

そんなヤツが、掟破りのファンガイアと同じなわけあるか!!」

息を切らせ、尚もキバットは止まらない。

「俺様はお前が優しいってことも、そのせいで苦しんでいることも知ってる！」

だから俺様も次狼達も、お前を見捨てねえ!

誰が否定しようが、お前の味方でいてやる!!」

「……………何で？」

「親友だからに決まってるんだろ、バカたれ」

最後にもう一度だけ、軽く奏夜の頭を翼で叩き、キバットは彼の肩に止まった。

急に、奏夜は目頭が熱くなるのを感じた。

そんな自分自身に驚き、慌てて顔を附せる。

こんな情けない顔、もう誰にも見られなくなかった。

精一杯の強がりの中、奏夜は震える声で、呟いた。

「 なら、他力本願で悪いけどさ」

「 何だよ」

奏夜は顔を附せたまま、キバットに言う。

小さな声だったが、それは確かに、奏夜の弱さだった。

「 俺の手を、離さないでくれ。相棒」

「ああ。ドンと任しとけよ、親友」

前触れなく、街を囲っていた封絶が消えていく。

創り手を示すように、咲き乱れる山吹色の火の粉。

まるで花園だ。

『あ……………』

刹那の芸術に、顔を上げた奏夜とキバツトは目を奪われる。

戦火から生まれた美しさは、傷ついた心に染み渡っていく。

「……………ああ、綺麗だなあ」

抑え切れなかった感情が、一筋の涙となって零れる。

(ソラト、ティリエル。お前らが、見せてくれてるのか?)

馬鹿な幻想とわかっていながら、そう思わずにはいらなかった。

手のひらに舞い込んだ火の粉を見て、奏夜は僅かに、顔を綻ばせる。

唯一つ、大きなミスを犯していたことも知らずに。

## 断章

「とまあ、そういうわけだ」

「……本当に、とても良い知らせと悪い知らせですね」

冷然と、だが僅かに狼狽したように、少女は答える。筈よろしく立つ柱、先の見えないほど広がる床、天井は満天の星空。

そんな場所で、“千変”シュドナイは、とある少女と話していた。

小柄な体躯に、大きな帽子とマント纏い、冷ややかな表情が特徴的な少女 “頂の座”ヘカテーである。

「ままならないものですね。最大の目的と最大の敵が一つ所にあるとは」

「あの場には『弔詞の詠み手』もいた。恐らく「仮装舞踏会」絡みというくらいは知られてしまっただろう。どう思うね、俺の可愛い“頂の座”ヘカテー」

「私はあなたのもものではありません。確かに思いもよらない事態ですが、誤差の範囲内でしょう。私からベルペオルにも話しておきま

す

「ふん、腕を、落として、拾ってきた情報が、その程度、か。落ちたものだな、“千変”」

会話に割り込んできた声に、二人は反応する。  
フードに身を包んだ長身の姿が、そこにはあった。

「ドラゴンファンガイア。盗み聞きとは、ずいぶんと無粋な真似をするな」

シユドナイは不愉快そうに、顔をひきつらせた。

「ふん。だとしたら、ずいぶんと、無意味な、盗み聞きだ。今さら、『キバ』や、『零時迷子』の、事とは  
「何だと？ どういう……」

言いかけて、シユドナイは気が付く。  
へカテーも同じだった。

「知っていたのですね。『キバ』のことも、『炎髪灼眼の討ち手』のことも、そして『零時迷子』のことも」  
「知らないでか。キバは、我々にとって、最も、警戒すべき存在。そ

ここに、『炎髪灼眼』や、『零時迷子』が、転がっていて、気付かぬわけが、あるまい」

「ならば何故、それを黙っていた？」

鬼気迫る口調で、シユドナイは問う。

「忘れたか？ 我々の、契約は、『我々が、お前達の命に、従う限り、お前達は我々を、保護すること』。命令外で、何が起ころうが、知ったことでは、ない」

「貴様……!!」

ドラゴンファンガイアに詰め寄りかけたシユドナイを、ヘカテーが手で制す。

「落ち着いて下さいシユドナイ。 “逆鱗に触れし者への断罪”よ、確かに我々の契約は、あなたが申し上げた通り。ですが、我々に話すべきことの区別がつかないほど、貴公は愚かではないでしょう。次はこのようないことが無きように」

「ふむ。命令とあらば、仕方がない。次から、そうするとしよう」

慇懃無礼な態度で、ドラゴンファンガイアは再び、暗闇へと消えていった。



苦虫を噛み潰したような表情で、シウドナイは煙草に火を点けた。

「なあ、ヘカテーよ。長らく留守にしていた身で言うのもなんだが、いつまであの連中を置いておく気だ？」

「確かに信用は出来ません。ですが、我々と違い、彼らは表立つた行動が出来る分、扱いやすいのもまた確か。一先ずは、利用出来るだけ利用させてもらいましょう」

「ふむ、それはごもつともだがな」

取り敢えずは気を落ち着かせ、シウドナイは煙草の煙を吐いた。

……。

「……………」

「……………煙草は止めて下さいね」

ヘカテーが彼女にしては珍しく、心底嫌そうに、シウドナイを睨んでいた。

「よう、ドラグー！」

「……………ゼブ、か」

広い回廊を進んでいたドラゴンファンガイアに、後ろから肩を回す男がいた。

黒い仮面に、ブラックコートをつけた青年、ベルゼブブファンガイアだ。

「お使いは終わったぜい？　これで俺の仕事はしばらくナツシングってことでいいんだよな？」

「ふん。ここに、来るまでに、あちこち寄り道をしておいて、よく言えたものだな」

「うげ、お見通しか」

ゼブは、大袈裟に仰け反る。

「それだけ、道楽を尽くしたなら、貴様には、新しい仕事を、やってもらおうか」

「しかもやぶ蛇かよ……。仕方ねーじゃん、ここの生活、窮屈でたまらねーんだからよ。なあ、いつまであんな奴らといるつもりだ？」「利用出来るまで、つまり、“我が主”が、お戻りに、なられるまで」

「やっばし」

決まりきったドラグの答えに、ゼブは益々落ち込んだ。

「だが、そう遠い話でも、あるまい。“我が主”が戻られれば、貴

様もまた、存分に羽を伸ばせると、いうものだろう」

「ま、そりゃそーだな。うっし、一丁頑張りますかね！」

「ああ、それで、いい。……私も、そろそろ、考えておかねばなるまい」

ドラグのフード下の笑顔は、狂喜に満ちていた。

「新たな、タイムプレーをな」

「あれ？　なあ、池」

御崎高校屋上、池との話を取り敢えず済ませた悠二は、池に聞く。

「先生、何処行つたんだ？」

「先生？」

「奏夜先生だよ。さっきまで一緒にいたじゃないか」

「……？　何言つてんだよ坂井。屋上に来たのは僕とお前の他に、吉田さんと平井さんだけだったろ」

「いや、だから吉田さんが飛び出した後すぐに……」

尋ねかけた途中で、悠二の声が小さくなっていく。

何だ？ 何か、とんでもない事実に行き着いてしまう気がする。

悠二の脳裏に、ここへ来る前、アラストールと交わした会話が蘇ってくる。

『もし封絶が解けた時に僕らがいなかったら、どうなるんだ？』

『トーチ消滅の場合と、原理的には同じだ。不自然さを無理矢理に納得させるために、意識と記憶の変化が起こる』

『元からいなかったように思わされる、ってこと？』

『そうだ』

(……そんな、まさか)

答えを導き出したる思考が、感情によってフリーズした。

あるはずがないと、悠二は否定したかった。

だが、一つに繋がった情報の欠片は、提示された信じられない事実を肯定する。

（先生が、封絶の中で動いていた……！？）

世界は優しくない。

だが、それ以上に気まぐれである。

制約の鎖に縛られた者のことなど、気にも止めない。

ただ、雲のような気儘さで揺れ動くだけだ。

次回、仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD！！

「奏夜先生、どうしちゃったのかな」

「これは由々しき事態よー！」

「名護さん、少し聞きたいことがあるんですけど」

「お前はキバをどう思う？」

「シヤナが怪談話い!？」

「十字架背負わせたげるわ」

「まさか、あなたもう一人の奏夜くん!？」

「貴様、何者だ」

「紅、音也だ」

【第十四話・英雄ノ天才再臨】

WAKE・UP! 紅蓮の鎖を解き放て!

## 断章（後書き）

今度の電王映画は三本立てらしいので、今回は三連発の更新です（関係あんのか  
燃え尽きたぜ……真っ白にな。

・ライジング見参！！ 放映当初、名前からして『アルティメットイクサ』という更なる強化変身があると思ってました。

ブリザードは、本編で使われなかったイクサライザーの機能です。  
……今回不遇救済が多いなあ。

・ドツガは基本形態4フォームでは一番好きです。紫のカラーリングって良いですね（クウガの場合も、タイタンが一番好き）

・今回は普段表に出さない、奏夜の弱さをクローズアップしました。またしても辛い選択をした奏夜ですが、作者はそれでも立ち上がる心の強さこそ、キバの資格だと思っています。だから最後、奏夜に「よく頑張った」と思って貰えると嬉しいです。

・アラストールに続き、そろそろ悠二も気付き出しました。彼の行き着く真実とは？

さて、後味の悪い幕引きになりましたが、シャナ四巻の話も遂に終了です。

告知の通り、次回はオリジナルストーリーです！（と言っても、間にドラゴンナイト編最終章を挟みますが）

傷付いた奏夜。そんな彼を導くのは、やはりあの男！

彼がどんな登場をするのか、第十四話をお楽しみに！



## 第十四話・英雄／天才再臨・Aパート（前書き）

「百物語とは、日本伝統の怪談形式の一つであり、百の怪談話を語り終えると、本物の怪異が現れるというものだ。

一説には、幽霊や妖怪も、そういった怪談話に興味があるからだという話もある。

もしかしたら、キミの身近にも……？

フハハ、フフハハハ……！！」

キバットバット三世

### 注意

今回登場の『彼』について、作者独自の非公式な設定が御座います。詳しくは後書きにて。

第十四話・英雄／天才再臨・Aパート

御崎高校一年二組。

四時間目、科目は現国。

いつもの授業風景。

「あ、先生」

そんな中、クラスのメガネマン、池速人が右手を挙げた。

「何だ？」

「和歌の作者名が、小野小町じゃなくて小野妹子になってます」

「……おお、すまん」

ベタな間違いをした奏夜は、黒板消しを手取る。

が、

「……あの、先生」

池に続いたのは、田中栄太だ。

「それ黒板消しじゃないっすよ。はんぺんです。何処にあったんですかその加工食品」

「……悪い、間違えた」

どこをどう間違えたら、はんぺんと黒板消しを取り間違えるのだろう。

躊躇なく、手にしたはんぺんをゴミ箱に捨てる奏夜。

食べ物は大切に。

「あと先生。俺からもいいですか？」

ようやく誤記を訂正した奏夜に、佐藤啓作がまたまた手を挙げた。

「最初、授業始まった辺りからツッコミたかったんですが……」

「……んだよ」

「片手に広げてる教科書、DSライトです」

確かに、奏夜の片手にあるのは、銀色に輝く携帯ゲーム機である。

「……内容は同じだからいいだろ。文部科学省推薦ソフトだし」

「いやそれ、問題は出してくれますけど、教科書見るシステム無いでしょ。」

てか、今までよく板書出来ましたね」

逆に凄い。

「あの、先生……体調が良くないなら、無理しない方が……」

吉田一美が奏夜を気につけ、おずおずと提案する。

「……何を言うか。俺は絶好調だよ。  
さ、下らないこと言っていないで授業の続きガツ!？」

言いつつ、奏夜は誤って、DSを取り落としてしまった。

DS落下箇所の爪先から、全身駆け抜けた痛みに、身悶えする奏夜。

クラス中が、疲れたような溜め息に包まれた。

紅奏夜の元気がない。

そんな噂が流れ出したのは、愛染兄妹が討滅されて、一週間後のことだった。

他愛ない噂話　　そう捉えられるだろう、普通なら。

だがこれは、御崎高校内の人間にとって、かなりハイランクに位置するビックリイベントだったりする。

天上天下唯我独尊。

世間体など路傍の石。

常に幸せ満開状態。

こんなレッテルを貼られた男が落ち込むなど、紅奏夜を少しでも知る人間なら思うだろう。

だが、その噂は確かなものだ、奏夜自身が証明していた。

まず、さっきの授業のようらしくない、というか、神がかかったドジが目立つ。

遅刻をしない。

勝手な行動を取らない。

言動が常識的。

ほとんどが人として当たり前の項目だが、軽く社会人失格状態

の奏夜が、今までそれを実践してみせたことは無かったのである。

生徒と教師が、そのギャップ戸惑いつつも、奏夜の不調は治る気配を見せていなかった。

此度の騒動は、そんなある日の昼休み、一年二組在席の女子、緒方真竹の一言から始まった。

「これは由々しき事態よ！」

ぐっ、と握り拳を作り、緒方は熱の籠った口調で、一年二組の直面している問題を提示する。

昼食を終えた現在、一年二組にて、数人の生徒が各々の机をくっ付け合い、まるで会議でもするかのような雰囲気醸し出していた。

ちなみにメンバーは緒方の他に、シャナ、悠二、吉田、池、佐藤、田中といういつもの面々だ。

「知っての通り、ここ数日の先生はあまりにもおかしいわ！」

「確かに、オガちゃんの言う通り、最近の先生、輪をかけて奇行が目立つよなあ」

田中が腕を組みながら唸り、佐藤も頷く。

「そうそう。なんつーか、冗談やらギャグやらにキレが無いって感じ？ 池はどう思うっ？」

「うーん、冗談やらキレはさておき、元気が無さそうなのは確かだよな」

「奏夜先生、どうしちゃったのかな……」

吉田も本気で心配しているらしく、顔を附せがちに呟く。

「気にし過ぎじゃないかな。先生だって、落ち込むことくらいあるよ」

「あれ？ 意外だな坂井。お前が一番、先生を心配しそうだと思うんだけど」



「……いや、別に、今までの奏夜先生からして、そこまで大事に捉えなくてもいいんじゃないかなって」

いぶかしむ池に対し、悠二はそう答える。

だが緒方は「甘い!」と一蹴する。

「先生がテンション下がってる理由はこの際どうでもいいの! 問題は、それに比例してクラスの雰囲気まで、暗くなってるってことよ!」

指先をビシッ、と立てる緒方の指摘には、他の六人も反論は出来なかった。

奏夜は、明るいキャラ立てもあってか、教師でありながら、クラスのムードメーカーの役割を担っていた。

そのためかここ数日、一年二組の持ち前の明るさが、やや損なわれ気味なのである。

「だからここは一つ、ズバツと先生の憂いを晴らすのよ、このメンバーで!」

「どうやって?」

シヤナがストレートに聞いた。

シヤナもなんやかんやで彼には世話になっている。

だから彼女自身、協力するのはやぶさかでは無い。

問題は、どう彼の元気を取り戻すかだ。

「えっと、ほら、先生の喜びそうなこととかで!」

「奏夜の喜びそうなことって?」

またしても直球。

だが、シヤナの質問に、緒方含む六人は一先ずシンキングタイムに入った。

言われてみれば、いつも一緒にいる割に、意外と彼のプロフィールは謎だらけである。

急に喜びそうなことと言われても、なかなか思いつかない。

が、

『……あ』

悠二、吉田、佐藤、田中、そして質問者であるシャナ、五人の頭に一つの案が浮かんだ。

「あるな。先生の喜びそうなこと」

「うん、やっぱりアレだろ」

「あれ、佐藤と田中も知ってるのか？」

「私も知ってるわよ。実際奏夜に聞かせて貰ったし」

「わ、私も」

思い付いた案について、五人は話を進めていく。

「ちょっとちょっと、五人だけで話進めないでよー！」

「みんな、何か知ってるのか？ 先生の喜びそうなこと」

置いてきぼりの池と緒方がストップをかける。

五人は顔を見合せ、口を揃えて言った。

『バイオリン』

「よし、今日の授業終わり。半日授業だからって、ハメ外し過ぎんなよ」

それから数日後。

諸連絡を終えて、奏夜は教室を出た。

(……ツマンネ)

ここ最近、本当に絶不調だ。

自分をぶん殴りたい。

いつまで引き摺っているつもりだ、と。

気持ちの折り合いはついた。

だが、どうしても嫌なわだかまりは残り続けている。

(情けないよな……、あれだけキバットが叱咤してくれても、このザマだ)

あの気のいいコウモリには、本当に感謝している。

だからこそ、逆に申し訳なかった。

何がキバだ、何が破壊の魔帝だ。

(自分さえ、どうこう出来ない癖に)

ふと 昔読んだ本に、こんな架空のヒーローがいたのを思い出した。

悲しみを仮面に隠し、人類のため、人知れず戦うヒーロー。

名を『仮面ライダー』。

(確か本のタイトルは、『仮面ライダー』という名の仮面』だったか)

ベストセラーにもなった本で、話の種に読んだ記憶がある。

当時は「まるでキバそっくりだな」と思ったものだが、今にして思

えは随分と滑稽だ。

俺が仮面に隠しているのは悲しみじゃなく、どっしりゆづもない弱さじゃないか。

「……………はあ」

止めよう。

気持ちのベクトルが後ろ向きにしかない。

「今日は早いとこ帰って、コーヒー飲んで風呂入って寝……………どわっ  
!?!」

ネガティブ状態の奏夜を、背後から衝撃が襲った。

「……………おい。佐藤、田中、いきなり腕掴んで何のマネだ?」

「先生っ！！ 今日、このあと暇っすよね？」

「俺達と一緒にちょっと出掛けませんか？」

「は？」

「ふふふ、先生に拒否権はありません！ 佐藤、田中！ そのまま先生をポイントAに！」

『イエッサー！』

いつの間にか後ろにいた緒方の指示に従い、佐藤&田中は奏夜を引き摺っていく。

「おい、ちょっと待てコラ！ 何勝手にストーリー進行させようとしてやがんだ！ せめて理由を……」

「あーもう、じれったいわね！ ゆかりちゃん、GO！」

「分かった」



短く答え、シャナは助走をつけ飛び上がり、

「えいつ!」

「あべしっ!」

暴れる奏夜に当て身をキメた。

糸が切れた人形のように、がくりと頭を垂れた奏夜が運ばれていく。

一部始終を見ていた吉田は、つい言葉を漏らす。

「あの……これ、何か間違ってますか?」

「さ、さあ……?」

「……僕はもうツッコミたくない」

悠二が苦笑いし、池が額に手を当て、溜め息をついた。

「……………うおっ」

目を覚ますと、そこは何処かのコンサートホールだった。

人が集まっていて、開演丁度なのか、辺りが暗くなってきた。

覚えがあるホールだ。

確か御崎高校が、合唱コンクール等で世話になったことがある。

「あ、先生起きました？」

「いいタイミングっすね」

ひよいと、後ろの席から緒方と田中が顔を覗かせる。

悠二、シヤナ、吉田、池、佐藤も一緒だ。

「……俺を拉致したことに関しちゃ不問にしてやる。  
だからいい加減、お前らが何をしたいのか吐け」

「すぐにわかりますって」

佐藤が笑いながら、ステージを指差した。

首を傾げ、奏夜は佐藤の指先を目で追った。

ややあつて。一人の少年が入ってきた。

ぎこちなくお辞儀をして、手に携えたバイオリンを弾き始める。

音がホールに反響し、聴き手の耳を揺さぶった。

「  
おお」

奏夜は目を閉じ、演奏に聞き入る。

(荒削り……だがそれ故に、熟達した者には無いひたむきさがある

音色だ)

心地好い。

さっきまでの憂いを忘れ、奏夜は素直に、バイオリンの世界へと入り込んでいた。

そんな奏夜の様子を、七人はほっとしたように見つめていた。

「このコンサートのためだったのか？ わざわざこんな手の込んだ演出までして」

ホールから出るなり、奏夜はそんなことを言う。

「あはは、まあ、そういうことっすね。ちなみに、立案も企画もオガちゃんです」

「えへへ やっぱりこういうサプライズの方が、先生は喜ぶと思っつて」

田中に言われ、緒方は悪戯っぽく舌を出す。

「あの男の子　芸名がワタルくんって言うんですけど、最近、巷で有名な天才少年なんですよ」

池の説明に、佐藤が更に説明を加える。

「そうそう。チケットも超人気でなかなか手に入らないし」

「……大変じゃなかったか？」

「坂井くんが、色々準備してくれたんです」

「い、いや、僕は大了たことしてないよ。  
なつき先生に頼んで、チケットとかが手に入り安いようにしてもらっただけだし」

吉田に褒められ、焦ったように顔を赤くする悠二。

隣でシヤナが「むっ」と顔をしかめた。

「さあさ、まだ時間は余りまくってますし、次行きましょ次！  
ゆかりちゃん、どうせまた先生は抵抗するだろっから、また当て身  
よろしく!!」

一瞬、不穏になりかけた空気を、緒方は手を叩いて払拭する。

「次!? まだ俺色々振り回されるのか!?

……っておいちよっと待て平井、坂井が吉田に照れて不機嫌なのは  
わかるが眉間に怒りマークつけつつこっちくんなきのは地味に  
痛かったのですが　!!」

不調なりに必死の抵抗を試みるも、そんな状態で、イライラモード  
なシャナに敵うはずもなく、

「うる、さいっ!!」

「ぐがっ!!」

完全に八つ当たりなシャナの一撃を喰らい、奏夜、本日二度目の昇  
天。

その後、奏夜含む八人は、プランナー緒方の予定に従い、様々な場所を回るようになった。

色んな、と言ってもカラオケやゲームセンター等の娯楽施設がほとんどで、奏夜が楽しめるかどうかが問題ではあった。

が、奏夜は何だかんだ言いながら、生徒達に付き合っている。

……決して、シャナの当て身が怖いだけではないと信じていた。

「……………」

と、前方で佐藤、田中、緒方と話す奏夜を、複雑そうに見る少年がいた。

坂井悠二である。

「……………」

「坂井くん？」

「悠二？」

黙りっぱなしの悠二の両脇から、シャナと吉田が話しかける。

「え？　ああ、ごめん。何か話してた？」

「い、いえ。そういうわけじゃ、ないですけど……」

「坂井、先生もそうだけど、お前も最近変だぞ？」

池が心配そうに聞き、シャナも頷く。

「悠二、この間からぼーっとしてる」

「……そうかな。僕は全然、そんなつもりじゃないんだけど」

はぐらかして、悠二はシャナの首にかかったペンダント『コキユートス』を見る。



アラストールの音が、聞こえてくるようだった。

(余計なこととは言わずともよい)

(……わかってるよ)

目線だけで会話し、悠二は溜め息をついた。

話は、数日前に遡る。

数日前、坂井家二階、悠二の部屋。

「紅奏夜が封絶内で動いていた？」

愛染兄妹の襲撃後。

悠二は直ぐ様、アラストールにこの事実を報告した。

ちなみにこの時、下でシャナは千草と話しており不在。

アラストールもついさっきまで、千草と話していたらしく、携帯電話  
話に収納されたままである。

自室で、繋がっていない携帯電話と話す男子高校生。

……見た目だけなら、かなり痛々しいシチュエーションだ。

さすがの千草も卒倒するだろう。

閑話休題。

「確かか？」

「うん。“封絶”が張られた時と解除された時で、先生のいる場所  
が変わってた。間違いないよ」

「…………やはり、そうなのか」

「やはり？」

思わせ振りに唸るアラストールに、悠二は詰め寄る。

「アラストール、何か知ってるの？ 先生はやっぱり“紅世”に  
関係あるのか？」

「……………」

(さて、どうしたものか)

紅奏夜が何者なのか…………一応、アラストールに仮説はある。

だが、あまりに突拍子のない話なため、証拠はなかった。

下手に話して、悠二を動揺させてもつまらない。

「坂井悠二」

しばらくし、アラストールは口を開いた。

「な、何？」

「お前はキバをどう思う？」

アラストールは遠回しに、自分の答えを述べる。

だが、悠二は、

「えっ？ 何でここでキバの話なんかするんだよ。先生とキバは“全然関係ない”じゃないか」

(……………こ奴は)

本当に、頭がキレるのかキレないのか。

「……………話しにくいな、どうも」

アラストールの嘆息に、悠二は首を傾げた。

「坂井？」

はっと気が付けば、考えにふけってしまっていたらしい。

メンバーのほとんどが、自分の前を歩いており、目の前では奏夜が、自分の顔を覗き込んでいた。

「どうした？ 体調悪いわけじゃなさそうだが」

「い、いえ。何でもないです」

「そうか？ ならいいが……」

再び、奏夜と悠二は肩を並べ、歩き出す。

悠二は横目で、奏夜をちらりと見た。

(……やっぱり、“徒”みたいな気配は感じないけど)

彼が封絶内で動いていたのは、事実。

“徒”か、フレイムヘイズか、自分のような特殊なミスレス、という考え方も出来る。

(フレイムヘイズとかならまだいいけど、もし先生が“徒”だったりしたら……)

嫌な予感が、悠二の心を締め付けた。

嫌だ。

今まで、自分やシャナに向けられた笑顔が偽物だなんて、思いたくない。

「……お前らにも、心配かけちゃったみたいだな」

「えっ？」

急に、奏夜がそんなことを言ってきた。

「なんか……悪かったな。」

俺がすっかりしてねえから、お前らに変な気を使わせたみたいなものだし」

頭を軽く掻いて、奏夜はぎこちなく、悠二に笑いかけた。

「ありがとよ。」

すぐ立ち直るのは無理かも知れねーけど、なるだけ早く、いつもの調子に戻るようにするからさ」

「……いつもの調子だと、それはそれで困るんですけどね」

「あははは」

いつもより少し元気は無さそうだけれど、それでも奏夜は笑う。

笑顔を見て、悠二はまた思った。

(やっぱり、信じたくない)

だから、証明しよう。

奏夜が、人を喰う化け物なんかじゃないと。

「結構色んなところ回ったなあ、そろそろどこかで一休みするか？」

「ああ、いいな。コーヒーとか飲めたりするとなお良しだ」

佐藤と田中の何気ない提案に、奏夜が食らいついた。

「コーヒーか……、いいな。それなら俺、良い店知ってるぞ」

奏夜に案内されるがまま、一同が辿り着いたのは、白い外壁に囲ま



れた古い店。

「わぁ……可愛い店」

「中身は80年代の世界だけだな」

吉田の評価に苦笑し、奏夜が扉を開け、中に入っていく。

ふと、悠二は店の名前に目を止めた。

「『カフェ・マル・ダムール』？」

はて、何処かで、聞いたことがあるような……。

悠二が首を傾げる中、奏夜に連れられ、店内へ。

一世代前の店内BGMが、一同を迎えた。

「マスター。コーヒー八人分ね、今日は俺のおごりで」

「やあ、奏夜くん。今日は大人数だねえ、みんな生徒さんかい？」

「はい。お前ら、こちら、マスターの木戸明さんだ」

「よろしく、少年少女たち」

カウンターにいた50代くらいの男性が、陽気に挨拶する。

全員が、ぎこちなく挨拶を返した。

「そう言えばマスター、名護さんと恵さん、いますか？」

『！！』

奏夜の口から意外な名前が出たことに、悠二、シャナ、佐藤、田中が反応した。

「ああ、恵ちゃんと一緒に厨房だよ。

名護くん、恵ちゃん！」

マスターの呼び掛けに、カウンターの奥から、スタッフ用のエプロ

ンを着た男女二人組が現れた。

「名護さん、恵さん、こんちはー」

「あら、奏夜くんじゃない！ そちらは制服着てるのを見ると、生徒さんかしら？」

「そんなところです。……なんか、名護さんがキツチンスタッフって似合いませんねえ」

「少々人手不足だな。手伝いに回っていたんだ」

と、そこで名護と恵は、呆けたように三人のやり取りを見ていた、シヤナ、悠二、佐藤、田中の顔を見つけた。

『……………あー！』

すっとんきょうな声が、マル・ダムールに響いた。

その後、全員が全員の立場（もちろん、“紅世”やファンガイア関連のことは伏せて）を理解し、名護や恵も、一年二組の生徒達と打ち解けつつあった。

特に恵は、シャナと吉田が気に入ったらしく、「ゆかりちゃんに—美ちゃん可愛いわね—」と抱き着いて頬擦りする始末。

「は—な—れ—ろ—！」

「は、恥ずかしいです……」

「ああ、抵抗する様子がますます可愛いわ—！」

頬を染め、ジタバタ暴れるシャナと吉田の様子に、店内の雰囲気の花が咲いたようにほわんとした。

「わ、私も……」

「オガちゃん、気持ちはわかるが悪ノリは止めとけ」

シヤナと吉田の可愛さに、セーフティが外れかかった緒方を、田中が抑える。

「先生、止めなくていいんですか？」

「止められるヤツがいたら、そいつは勇者にクラスチェンジ出来るな」

池と奏夜も、あの女の園に入っていく勇氣は無かった。

佐藤もまた、我関せずを貫きつつ、奏夜に聞く。

「恵さん、いつもあんな感じなんですか？」

「ああ……良くも悪くもノリがいい人だから。バンド始めるって言った矢先、ギター用意してきたし」

恵のあの性格は好きだ……が、あのノリの良さは、たまに迷惑にもなる。

ちなみに、悠二はというと。

「……どうもキミは、度胸があるのかないかわからないな」

「返す言葉もありません……けど、今度は逃げて正解だと思います  
っ！」

名護のいる奥の席に避難していた。

(「じめん。シャナ、吉田さん」)

あの状態を直視し続けていたら、確実に理性がぶっ壊れる。

屋上での一件以来、悠二はあの二人をそういう目で見るのは避けたかった。

なので、気を紛らわすべく、名護にひそひそ声で話を振る。

「名護さん、少し聞きたいことがあるんですけど」

「聞きたいこと？ いいぞ、なんでも聞きなさい」

「名護さんって、先生と長い付き合いなんですよね」

「ああ、もうかれこれ四年になるかな」

「先生って、どういう人なんですか？」

「ごく普通の質問に、名護はすぐに答えなかった。

直感的に、この質問の重さを感じ取ったのである。

紅奏夜　　仮面ライダーキバ。

悠二の質問の答えを、名護は持っている。

（だが、答えれば彼の危険も増える）

考え、名護はこう言うに留めた。

「悠二君、キミはキバをどう思う？」

「だから！　なんで名護さんまでキバのことを聞くんですか！  
キバと先生は“全然関係ない”でしょ？」

「……………」

名護は半ば呆れるように、額に手を当てて、一言。

「言いくいな……………どうも」

「あらら？　空が曇ってきたねえ」

マスターがカップを拭きつつ、窓の外を見る。

全員がつかれて外を見たが、次の瞬間、

ピシヤッ！

雲の切れ間に光が走り、轟音が鳴り響いた。



「ひゃうっ！」

吉田が肩を震わせた。

「雷か……。梅雨の時期だから、らしいっちゃらしいけど」

吉田を宥めつつ、恵が言葉を漏らす。

言う間に、外は雨が降りだした。

「うわっ、雨降ってきた！」

「ニュースでは通り雨と言っていた。今3時だから、4時には止むだろう。」

それまでここにいなさい」

佐藤の危惧に、名護が冷静なまま答える。

「4時か……。結構暇になるな」

「仕方ないだろ田中、濡れて帰るよりはマシだ」

田中がぼやき、池が正論を述べる。

「それならいい暇潰しがあるよお……………」

妙に間延びした声を出すマスター。

全員が、皆に背を向けたマスターを見て、尋ねる。

『な…………、何を？』

「何って、決まってるでしょ。そろそろ、夏のミサゴ祭りも始まる時期だし……………」

くるり、とマスターが振り返った。

「か・い・だ・ん」

『わっ！！』

『ひゃっ！！』

全員（シヤナ以外）が驚きに仰け反った。

いつの間にか手にしていた蠟燭が照らすマスターの顔は、ただただ不気味だった。

こうして、脈絡のない怪談は始まった。

薄暗いカフェで、テーブルを片付け、床に円を組むように座る。

（何故私がこんな非科学的な真似を……）

（俺達はおつとオカルトチックなもの見てますしねえ）

（まあまあ、ここは二人とも空気を読んで！）

小声で文句を言う奏夜と名護を、恵が諫めたところで、怪談話スタート。

じゃんけんで負けた人間から、それぞれが持つ怪談話をしていこうという運びにより、最初に負けたのは、

「私負けた」

シヤナだった。

一年二組の面々の心中に、同じ思いが走った。

（最も怪談話と縁遠そうな人が……）

絶対、怪談話のストックなど持ち合わせてはいまい。

仕方なく、悠二が助け船を出した。

「あの……シヤナは飛ばしても」

「じゃあ、私から話すわね」

『ええっ!?!?』

一年二組＋奏夜の叫び声に、シヤナはきよとんとした顔になった。

「どうしたの?」

「いやいやいや!　　どうしたのじゃなくて!」

本気で驚いた悠二は、シヤナに詰め寄る。

「シヤナ、本当に怪談わかってる!?!　　というか、怪談なんて語れるの!?!?」

「知ってるし語れるわよ、それくらい」

あっさりと言いつ切るシヤナ。

だが、悠二の心境はそんな生易しいものではなかった。

(シャナが怪談話い!?)

シユール過ぎる!

色んな意味で怖いが、逆に気にもなる。

他の一年二組勢も、そう思っているらしかった。

「じゃ、じゃあ、話してくれる? シャナ」

「? 変な悠二」

怪訝そうにしつつ、シャナはこの怪談を覚えてくれた『教育係』のことを思い出す。

(そう言えばヴィルヘルミナ、怪談の前はこう宣言するといいつて言ってたっけ)

蠟燭を手に取り、シャナは妖しく笑った。

「十字架背負わせたげるわ」

そのセリフにぞくり、と全員の背筋が凍った。

「昔、あるところに大きな古い屋敷があった。

そこは昔、高名なバイオリニストが、スランプを理由に自殺した場所で、近くに住む人間は気味悪がって誰も近づかなかった」

（平井、俺へのあてつけか？）

バイオリニスト、という単語に奏夜が反応しつつ、話は続く。

「でもある時、四人の子供が、興味本意でその屋敷を探検しにいったの。

そして、寂れた屋内で、一器のバイオリンを見つけた。

傷んでて、しかも弦が張られてなかったのだけれど、年代物だったから珍しい品だとも思ったんでしょね。四人はそれを持ち帰った。

でも、次の日から“それ”は始まった。

四人の内の一人が、翌朝冷たくなって見つかったの」

外が更に暗くなった……気がした。

全員がごくりと息を飲む。

「その死に方がおかしくてね……」。

耳の神経が、細長い糸みたいになってるのは知ってると思うけど、それが意図的に“抜き取られた”上で、天井から吊るされていたの……そう、まるでバイオリンの弦のように細い糸でね」

なかなか恐怖心を煽られる語り口だった（吉田なんかは、もう涙まですで浮かべている）。

しかもシヤナが、彼女は性格上、かなりフラットな声音で語るため、恐怖も倍増する。

「ここまでなら、ただの不幸な話で終わっていたけど、次の日また、四人の内の一人が死んでいた。



一人目とまったく同じ死に方で。  
さすがにおかしいと思った四人の内の一人　現在、例のバイオリ  
ンを持つている人間なのだけれど　が、ふと持ち帰ったバイオリ  
ンを見たの。  
そしたら　」

無かったはずの弦が増えていたの。

死んだ人間の数　つまり二本分。

「『あの屋敷に住んでいた音楽家の霊が、足りない弦を探している  
んじゃないのか』。  
『殺した人間の数だけ、弦を増やしているのではないか』。  
そう思った矢先、三人目が死んだ。  
やはりまた一本、弦が増えていた。最後に残ったのは自分だけ  
いよいよ次の晩は、自分が死ぬ。  
そしてやってきた、真夜中」

遠くで、雷が鳴った。

「当然、恐怖で眠れなかった。

震えながら布団に隠れてた。

そして聞こえてきたのは、バイオリンの音色。

何処から聞こえてくるのかもわからない、奇妙な音色……。

それに伴い、ひた、ひたと響く足音……」

シヤナの語り口に熱が入っていく。

「 けれど、突如音が全て止んだ。

おかしく思い、布団を上げて、辺りを見回してみても、何も無い。

助かった。

安堵し、布団に戻ろうとすると、」

首が奇妙に曲がった男が、そこに立っていた。

音が聞こえなくなったのは、男が既に耳の神経を取り出していたから。  
5。

白い糸のようなそれを手に持って、男はにやりと笑った。

「ああ、やっとバイオリンが弾ける……」

ピシャッ！

近くで落ちた雷が、シヤナを背後から照らす。

才子の恐怖を煽る効果としては、最適だった。

『わああっ！！』

『ひゃあああ！！』

悠二、池、田中、佐藤が大声を挙げ、吉田、緒方、恵は目に涙を浮かべ、身体を震わせている。

名護やマスターはさすがに大声こそ挙げなかったが、どちらかといえは雷に驚いたようだった。

「……そんなに怖い？ この話」

自分がヴィルヘルミナから聞いた時は、そこまですりでもなかったのだが。

「い、いや、確かに話自体はありきたりだったけど……」

「平井さんが語ると、怖くなるというか……」

悠二と池が、鳴り止まぬ心臓を落ち着けながら言う。

そう、話自体はそれほどでもないが、シャナの語り口が怖いのだ。

怪談のコツは内容よりも、相手を引き込むこと。

シャナはそれが群を抜いて上手かったのだ。

「こ、怖かったあゝ。一美なんか、途中で気絶しかけてたもの」

「……わ、私、しばらく、バ、バイオリン、見られない、かも……」

「それは奏夜くんが可哀想ね……ってアレ？　　奏夜くんは？」

わんわん泣いている吉田を落ち着かせつつ、恵は奏夜がいた方を見る。

奏夜は、床に倒れて気絶していた。

「そ、奏夜くん!？」

「奏夜くん？　　どうした、しっかりしなさい！」

名護の呼び掛け、だが、奏夜は目を覚まさなかった。

空は、さっきまでの雨が嘘のように、晴れ渡っていた。

もちろん、奏夜は怪談の恐怖に気絶したわけではなかった。

(あ、あれ……？ 頭がぼーっと……)

シヤナの話が始まった辺りから、奏夜は意識が朦朧としていた。

眠気ではない、不思議な感覚が、精神を揺さぶっているような、そんな感覚。

「ああ、やっとバイオリンが弾ける……」

そして、オチと同時に雷が轟いた時、とうとう奏夜は微睡みに負け、倒れてしまった。

(ダメだ、思考が、ぼんやり……なんか、もう眠りたい……)

頭を必死に働かせるが、思うようにいかない。

身体が、自分の制御下を離れようとしているようだった。

(まるで、誰かが、俺の中に……入っ、て……く……)

その思考を最後に、奏夜は意識を手放した。

がばっ！

眠っていた奏夜が、ベッドから跳ね起きた。

『わっ！』

周りにいた全員が身を引く。

あの後、「安静にできる場所に移した方がいい」という名護の提案から、奏夜は紅邸へと運ばれていたのである。

「そ、奏夜……？」

『先生……？』

「奏夜くん？」

「大丈夫か？」

一年二組勢、恵、名護が起き上がった奏夜を覗き込む。

「……………」

ギギギギギギ……………。

奏夜の首が、奇妙な形で回ったように見えた。

不気味さに全員が驚く。

そんな全員の様子に、奏夜は沈黙したままだった。



が、急に顔をしかめたかと思うと、突然奏夜は口を開いた。

「何だ貴様ら！！  
……こそ泥か？」  
ひとん家に勝手に上がり込みやがって！

『は？』

いきなりな言動に驚く一同。

奏夜はというと、恵に視線を合わせ、にやっと思地の悪そうな笑みを浮かべる。

「ほう……こそ泥にしちやいい女だな」

「え？ えっ？」

慌てる恵の手を取り立ち上がる奏夜。

「何だ？ オレのハートを盗みに来たのか？

いいだろう、存分に盗んでいくがいい！

オレのハートに続く扉は、全ての女性に対して常に解き開かれている！」

（先生が壊れた！っ！？）

両手を広げる大胆なアピールまで披露する奏夜。

いくら自由奔放がウリの奏夜とはいえ、ここまでの奇行はしない。

「せ、先生、どこか頭でも打ちましたか？」

悠二が皆を代表して聞く。

しかし、

「先生？ おいおい、残念ながら、オレはお前のような坊やを弟子にした覚えはない。

大人の恋愛を教えるのに、お前はまだ若すぎる。

後ろの坊や達も、あと10年したらまた来るがいい。  
オレの華麗なテクニックをたっぷり伝授してやるう！」

これである。

(ダメだこの人……早くなんとかしないと……)

僅か数秒で、今の奏夜のダメさを全員が理解した。

怪談のショックで、頭のネジが外れでもしたのだろうか。

世間的に色々と問題がありそうな奏夜は、次にシャナ、緒方、二人の間に隠れる吉田に目をつける。

「おやおや、よく見れば、ダイヤの原石ばかりじゃないか。  
安心しろ仔猫ちゃん達。今にお前達も、目も眩まんばかりに輝く宝石となる！ このオレが保障しよう！」

「ひひ」

「あそこまで言つと逆に天晴れね……」

「？」

吉田が怯え、緒方が呆れ、シャナが首を傾げた。

「いい加減に下さい！　キミはいつからそんなだらしない人間になった！？」

さすがにこれ以上、今の奏夜を放置するのはまずいと思ったのか、名護が止めに入った。

だが、奏夜の口から飛び出したのは、名護にとって思いもがけないことだった。

「ああ、お前どっかで見たことあると思ったら、前に『未来から来た』とか言つて、オレからイクサを盗ろうとしたガキか」

「っ！？」

名護が驚愕に目を見開いた。

奏夜は恵と名護を見比べ「……なるほどな」と、口の端を吊り上げる。

「惚れた女は出来たみたいだな。どうだ？ お前なりの『遊び心』は見つかったか？」

「……キミは、いや、“お前”は……？」

「まさか、あなたもう一人の奏夜くん!？」

恵の発した名前に、ぴくり、と奏夜が反応した。

「奏夜？ お前、奏夜を知って……」

言い掛けて、奏夜は自分の手をじっと見る。

次に、慌てた様子で、部屋に飾られていた鏡を見た。

「……どういうことだ、これは。何故オレが“奏夜”の姿をしている……？」

鏡に映る事実が信じられない、とでも言うつように、奏夜は何度も自分の顔を触る。

「あー、もう！ さっきから何言ってるのよ奏夜！ いい加減目を醒ましなさい！」

焦れたシャナが、奏夜を蹴っ飛ばす。

「痛って！？ おいコラ、いきなり何すん……！！」

奏夜は額に青筋を浮かばせ、自分を蹴飛ばしたシャナを見た。

正面から はっきりと。

「っ、お前……？」

まじまじと、奏夜はシャナを穴が開くほど見つめる。

「な、何よ……？」

シャナが身動くと同時に、奏夜は言った。

「お前……、ひょっとしてマティルダか？」

（なっ！？）

驚いたのはシャナではなく、アラストールだった。

何故、その名を知っている。

この現代に生きる奏夜が、どう転んでも知り得ないはずの情報だ。

（まさか……いや、さっきまでの言動や行動、まさに“奴”そのものだ……！！）

疑念が核心に変わりかけた時、奏夜の手が、アラストールの蔵されたコキュートスに伸びた。

「……っ！ やっ！！」

「うおっ！？」

まあ、女性の胸元にかけられたペンダントを取ろうとする行為は、はたから見れば軽くセクハラなわけ。

反射的に、頬を染めたシャナは、奏夜に見事な一本背負いをキメた。

結果、奏夜は落下の際、床に頭を打ち付けた。

「がっ！！」

鈍い音　同時に、奏夜は憑き物が落ちたように、呆けた表情になる。

「あ、あの、平井サン？　何故オレは寝起き早々、背負い投げをキメられているのでショウカ？」

そう言った奏夜の口調は、普段のものだった。



「先生？　大丈夫ですか、僕らのこと分かりますか？」

「何故、重症患者に呼び掛けるみたいなフレーズを……」

顔をぺちぺちと叩く悠二の手を払う奏夜。

どうにか、元には戻ったらしい。

だが、部屋の二階から、一部始終を見ていたキバットは、気が  
気ではなかった。

「おいおいおい、まさか、また奏夜に“あいつ”が乗り移っちまっ  
たのか……？」

キバット、名護、恵、アラストール。

四人の危惧をよそに　また一つ、紅蓮と牙の物語は繋がった。

過去の願いを、未来へ繋いだ男によって。

## 第十四話・英雄／天才再臨・Aパート（後書き）

すみません、ドラゴンナイト編挟むとか言っておきながら、こっちが先に書いてしまったので、お先に投稿します；

・ついに登場希代の天才！！

前書きにもあった非公式な設定とは『以前奏夜に憑依し、恵に会った音也が何故恵を知らないか』です。

作者の中で、恵にアドバイスした音也は『奏夜が歴史を改変する前、何らかの形でキングを倒し、死んだ音也』で、今回奏夜に憑依した音也は『奏夜による歴史改変後に死んだ音也』です。

だからこの音也は、奏夜に憑依するのは初めてですし、奏夜を知っているのです。

…… ややこしくてすみません。

・メロンパンに関する知識以外にも、ヴィルヘルミナはシャナに変な知識を与えている……という話があったので、今回はシャナらしくないことをやらせてみました。

・序盤に出たワタルくんは……まあ、ディケイドのワタルくんのおそっくりさんだと思ってください。

他にも今回は、ライダーネタが結構あります。

音也はまだまだ暴れますので楽しみに。

今回は、個人的にやりたかった音也と“あるキャラクター達”との会話がメインになります。

お楽しみに！



第十四話・英雄／天才再臨・Bパート

翌日。

御崎高校への通学路。

昨日の奇妙な状態から回復した奏夜は、来る途中で会ったシャナ、悠二と共に、通い慣れた道を歩いていた。

「先生、あれから体調はどうですか？」

隣を歩く悠二も、奏夜を気遣っていた。

「ああ、絶好調だよ。お陰様でな」

「いや、僕が言ってるのは違うことなんですけど」

「……うーん、本当に俺がそんなことしたのか？」

「私は軽く胸触られかけたけど」

「……スミマセン」

未だに根に持っていていらっしやる。

こんな事実が証拠なんて、相当にイヤな話だが、事実は事実なので素直に謝罪。

「恵さんから聞きましたけど、前にも似たようなことがあったんですよね」

「ああ。四年前にな、数日で元に戻ったけどさ」

そう言えばあの時は、ずっと悩んでたヴァイオリンの型が作れてたりしてたな。

アレを誰がやったのかはわからないが、今の奏夜からしても相当な腕だった。

「あんまり無理しないで下さいね。気分悪かったら早退もしなきゃいけないし」

「ん。合点承知」

言いながら、三人は通学途中のガード下に差し掛かる。

と、前からガラの悪そうな三人組の青年が歩いてきた。

「!!! テメエ!」

三人のリーダー格と思わしき青年が、奏夜に食って掛かる。

「あん?」

奏夜はダルそうに青年を見る。

「テムエ、あん時はよくもやってくれたな!!」

「.....どちらさんで?」

「なっ、テムエ、忘れたとは言わせねーぞ!」

言いつつ、顔の青アザを指す青年。

奏夜は記憶の彼方だが、彼らは以前、奏夜が迷子のソラトを救った際、叩き潰した不良グループである。

ソラトやティリエルのことは、奏夜もあまり良い思い出ではないので、無理からぬことかも知れなかった。

なので、こう答える。

「すみませんね。たった一話かそこらで、しかも原作じゃ斬られてそんな駄キャラなど、いちいち覚えていられないもので」

ブチリと青年の血管が切れた音がした。

「ちよ、先生！」

「奏夜。手があるなら貸すわよ」

「下がつとれ坂井。平井も、お前が出るまでもないさ」

慌てる坂井と、青年を不快そうに見るシャナを制し、奏夜は前に出る。

「今日は授業がある上、朝方でテンションが低いんだ。来るならさっさと来い」

「な、なめんじゃねえぞコラア!!」

青年の拳が、奏夜を捉える。

不調とはいえ、奏夜からすれば止まっているに等しいパンチ。

のはずだった。

突如、自らの身体の支配権が奪われたのだ。

(がっ ま、またかよっ!?)

自分を襲う奇妙な感覚に負け、奏夜の顔に青年のパンチが叩き込まれた。



「先生！！」

「奏夜！！」

悠二とシャナが飛び出しかける。

青年が爽快感にニヤリと笑う。

だがすぐに、その表情は驚愕に変わる。

奏夜は拳が入ったまま、青年の腕を思い切り掴んだ。

「っが！？」

凄まじい力で圧迫された腕を押さえ、青年は仰け反る。

顔を苦痛に歪ませた青年を見て、奏夜はまた口角を吊り上げ、挑発的な目線を作る。

「世の中に、嫌いなものが二つある。  
糸こんにゃくと、ア・ホ・な・ガ・キ・だ」

奏夜は青年を指差しながらそう言った。

口調の変わった奏夜に、その場にいた者は呆気に取られる。

「よくそんなバカ面下げて、拳を振るおうなんて思えるもんだ。  
これ以上何かするなら、その残念な顔が更にブサイクになるぞ」

「っ、この野郎がああ!!」

再び拳を突き出す青年。

奏夜は難なくそれを避け、続けざまに青年の脛を蹴った。

「いびっ!」

足を抱え踞る青年の背後から、残りの二人が襲い掛かってきた。

だが奏夜は、意地の悪そうな笑みを崩さず、今度は攻撃が決まるよりも早く、二人の頭を掴んで勢いを止め、そのまま互いの頭を打ち付けさせた。

残る二人も、激突した頭を押さえる。

「どうした、もう終わりか？」

ゆっくり近付いてくる奏夜。

「うがー!!」

「う、うわあああ！」

脅すように奏夜が手を上げると、不良グループは情けない悲鳴を拳げながら逃げていった。

「ふん、可愛げも張り合いも無いガキだ」

奏夜は余裕の表情のまま、シヤナと悠二を振り返った。

「大丈夫か、若人達よ」

二度目の奏夜の変貌に、悠二とシヤナはただ頷くしかなかった。

「よろしい。んじゃ、オレはこれにてお役御免だな」

「は？　ちょ、ちょっと待って下さい先生！　学校どうすんですか！」

「学校？　オレ様の可能性は、狭い学舎に収まるようなものじゃあない」

悠二の制止も聞かず、奏夜は学校とは逆方向に歩き去ろうとする。

「待って」

張りのある声と共に、シヤナが奏夜を睨む。

その瞳は警戒心に彩られていた。

「何だ嬢ちゃん。残念だが、お前さんの歳で逆ナンはまだ……」

「お前、誰？」

シヤナの一方的な、だが強い物言いに、奏夜は言葉を切った。

「お前、奏夜じゃない。全然違う」

「……ほう」

奏夜は心の中で、密かに感嘆する。

（恐らく根拠は感覚からだろうが、フレームヘイズとしては合格点だな）

知らず知らずに、表情が緩む。

マティルダの約束は、果たされたわけだ。

「そうだな。強いて言うなら、通りすがりの愛の天使ってトコだ。別に覚えなくてもいい」

「っ、ふざけないで！　早く奏夜を返しなさい！」

「はっはっは、そうカッコシなさんな。

何せ、せっかく“未来”に来たんだ。

この身体を使うのは気が引けるが、もう少しゆっくりさせて貰って  
もらおうね」

今度は振り返らず、奏夜はシャナと悠二を置いて歩き去ってしまった。

「シャナ、先生が先生じゃないって、どういうこと？」

「……そう言っつてことは、悠二は何も感じなかったのね」

とは言え、悠二は力の流れを感じられるようになって間もないから、  
仕方ないのかも知れない。

「“存在の力”の質が違うの。似てるけど、奏夜のものとは違う。  
……まるで身体は同じで、心が違うみたい」

「心が違っって……じゃあ、あの変な状態の先生は、先生と違う人格なのか？」

「あくまで例え話よ。それこそ昨日の幽霊話じゃあるまいし」

「……幽霊、か」

「アラストール？」

コキユートスから聞こえてきた物憂げな声に、シヤナは違和感を覚える。

「シヤナ、坂井悠二。あの紅奏夜は、しばし保留としておけ」

『えっ？』

シヤナと悠二は、驚きについ目を見合わせた。

アラストールが、“徒”と関わりそうな事象を見逃すなど、信じられなかったのだ。

「すまんが、まだ理由は言えぬ。

だが、この状況を見過しても、紅奏夜に害が及ぶことはない。それだけは我が断言しよう」

「……アラストールがそう言うなら、いいけど」

悠二が言っつて、シヤナは納得仕切れていなさそうだったが、一応は「わかった」と同意する。

（ それにしても ）

アラストールは心中、疲れたように嘆息する。

（ 我の契約者が変わろうが、貴様は変わらず、自分の道を行くのだな ）

そう考えて、彼は苦笑のような呟きを漏らした。

「 変わらず 貴様は気に食わぬわ 」



アラストールの小さな笑い声は、僅かな嬉しさを帯びていた。

「へえ。奏夜のヤツ、教師なんてやってるのか」

シヤナと悠二の前から立ち去った奏夜は、自分のバックの中身にあった資料をめくっていた。

口元には、嬉しそうな笑みが浮かんでいる。

「元気がどうか不安だったが、あいつも立派にやってるみたいだな。感心感心」

資料をしまつて、奏夜は座っていたベンチから立ち上がる。

「しかし、よりによってマティルダの次世代と一緒にとはなあ……。くっくっく、これだから世の中は面白い」

さて、これからどうするか。

― 先ず思案顔になる奏夜。

(あの堅物魔神と、昔話に花を咲かせるのも悪くないが、奏夜とあいつらの関係もよくわからないしな……)

余計な真似をして、奏夜に迷惑をかけてしまうのもつまらない。

となれば、

「やれやれ、気は進まんが、あいつらにも礼は言っておかないと寝覚めが悪いな」

行き先を決め、奏夜は歩き出した。

御崎高校一年二組。

明け透けに退屈そうにする少女が一人。

(……暇)

授業は三時間目、今さら学ぶものの無いシャナは、面倒くさそうに目を擦った。

隣の悠二はノート取りに必死なため、余計に億劫だ。

そんな必死にならなくても、一言言えば教え……、

(っ！ な、何を馬鹿なことを……)

自分が何を考えようとしていたかに気付き、シャナは染めた頬を隠そうと、窓の方に視線を反らした。

「!?!」

突如、シャナが跳ね上がるように、席から立った。

教師の授業内容しかなかった教室に、椅子の足と床が擦れる音は、いやに響く。

「ひ、平井？」

一体どうした、と教師が聞くより早く、シヤナは悠二の首をひっ掴み、教師から飛び出した。

「ぐえっ、シヤ、シヤナ！　首、首が絞まる！　なんか西部劇みたいになってる！」

しばらく廊下をずるずると引き摺られ、悠二はようやく解放された。

「悠二、気付いてる？」

「げほっ、げほっ、あ、ああ。屋上に現れた気配だろ？」

引き摺られる必要性はわからなかったが、連れ出された理由はわかっていた。

御崎高校屋上。

身体を駆け抜けた感覚が、“敵”の来訪を告げていた。

「“徒”かな？」

走りながら、悠二が聞く。

「わからない。ファンガイアかも」

「いずれにせよ、気を抜いてはならん。

屋上から場所を変えぬ理由はわからんが、何か狙いがあるはずだ」

「うん」

シヤナは階段を駆け上がり、屋上のドアを蹴破った（ちなみにラミ  
ーの時と合わせ、これが二回目である）。

風が吹き抜ける爽やかな空が広がる。

しかし、その風景のただ一点、ステンドグラスのような皮膚をした  
異形が、せつかくの情緒を塗り潰していた。

背中から透き通るような羽根を生やし、人間でいう目の位置には黒

い複眼。

右手首から延びている銀色に輝く針は、見る者を戦慄させるには十分な凶器。

まるで蜂のような姿の異形　ヘルホーネットファンガイアは、自らのテリトリーに踏み込んできたシャナと悠二を、目で捉えた。

「……ほう。キングがかかると思っていたが、フレイムヘイズと“零時迷子”の方が来たか」

シャナと悠二は警戒心を強めた。

(僕のこと、シャナのことも知ってる……)

思わず、胸の灯火に目を落とす悠二。

彼の傍らで、シャナが口を開いた。

「お前、ファンガイアね。わざわざこんな不恰好に姿を見せて……狙いは何？」

「貴様らフレイムヘイズに構っている暇などない。  
我が目的はただ一つ、キバの抹殺だ」

「!?!」

キバの名に反応したシャナと悠二に、ヘルホーネットファンガイアは、口角を吊り上げた。

「やはり、キバを知っているらしいな。

ここに来たのも、まんざら無駄足でも無かったようだ」

「どつという意味？」

「意味だと？ …… ああ、そうか。貴様らは知らないのだな。  
良いだろう、ならば教えてやる」

滑稽だとも言うように、ヘルホーネットファンガイアはその事実を告げた。

「キバは、この御崎高校の中にあるのだよ」

「!？」

「な　っ！」

予想だにできなかった言葉に、二人の身体を衝撃が駆け抜けた。

あのキバが、こんな身近にいる。

信じがたいが、ここでヘルホーネットファンガイアが嘘をつく理由もわからない。

「だからこそ、この学校にいる人間には利用価値がある。何せ、キバが見知った人間ばかりだからな。一人二人だけでも、十分効果が望めるだろう」

「っ!!　お前、みんなをどうするつもりだ!？」

言葉の意味を本能的に察知し、悠二は思わず叫んだ。

「知れたこと。キバをおびき寄せせるも良し、人質に使うも良し、目の前でライフエナジーを喰らうというのも悪くないな」



その宣言には何の感慨もなく、ましてや情などというものは皆無だった。

（ 最悪だ ）

ここでこいつを逃すわけにはいかない。

結論付け、シャナが手を掲げると、指先に灯りが点った。

「封絶」

赤いドーム状の光「封絶」が、屋上一帯を覆い、世界の因果から切り離す。

シャナの瞳と髪が紅蓮色に染まり、煌々と燃える火の粉が弾けた。

続けて、黒衣「夜傘」から大太刀「贄殿遮那」を取り出し、構えた。

「お前は 二つで討滅する！」

「血気盛んなことだな、『炎髪灼眼の討ち手』。  
まあ良かろう、前座には丁度いい。」

ドラグ様への、勝手な行動の詫びにもなるだろうからな」

片腕の針を構え、ヘルホーネットファンガイアの目にも戦意が宿った。

「悠二、下がってて」

「えっ？ でも……」

「悠二。悠二が出来ることを、悠二自身が考えて」

シヤナが言ったのは、愛染兄妹の時と同じことだった。

悠二がはっとしたような表情になり、頷いた。

「わかった。気をつけて」

「はっ」

悠二は一步下がったのち、シャナはヘルホーネットファンガイアに切っ先を向け直す。

再び、非日常が始まるうとしていた。

時間は少々遡り、キャッスルドラン内、ドランプリズン。

「あ、娘が生まれるだって。カ、子供のピン取って」

「次はオレだな、『宇宙人と友達に、200000円貰う』。……最近の人生ゲームは、随分突拍子のないマスがあるな」

「……おれ、いえが、たいふうに」

『御愁傷様』

嘆く力に、次狼とラモンが合唱する。

いつものように、三人はお茶とお菓子をつまみながら、ゲームに興じていた。

「ねえねえ、そう言えばさ、お兄ちゃん、まだ立ち直れてないのかな？」

ゲームの最中、ラモンが思い出したように言う。

「結構堪えてたみたいじゃなかった？ この前の“徒”のこと」

「しょう、しん」

「そう騒ぎ立ててやるな。あいつもいい加減ガキじゃないんだ。自分のことは自分で決められるだろう」

そこまで言って、次狼はふと、虚空を睨んだ。

「　　噂をすれば、か」

回廊の方からコツ、コツと足音が響き、三人のいる部屋の前に人影が現れた。

「よう奏夜、今日は平日だぞ、学校はよかったのか？」

「……………」

「……………？ 奏夜？」

「お兄ちゃん？」

「どっ、した」

何も答えない奏夜を、三人は怪訝そうに見つめる。

奏夜は次狼、ラモン、力を順々に眺めていたが、やがて意地悪そうな笑みを浮かべ、

「随分と楽しくやっってるみたいだな。意外と退屈してなさそうではないよ。オレ様の可愛いペット達よ」

『……………!!』

三人は驚きにカッ、と目を見開く。

間違っはずがない。

見た目が違えど、あのからかい文句を聞き間違えはしない。

「お前、まさか……………」

いち早く混乱から抜け出した次狼が、絞り出すように声を発する。

対して、奏夜は笑みを崩さないままだ。

「皆まで言うなよ。」

久しぶりだな、次狼、ラモン、カ」

フランクに言い放ち、奏夜は手近にあった椅子に座る。

「……一体何がどうなっている」

「どうしてお兄ちゃんの手で……」

「びっ、くり」

「ああ、お前らの言い分はわかる、オレも未だに信じられないからな。

が、起こったものはしょうがないだろう？  
きっと、カミサマのプレゼントってヤツさ」

「地獄の沙汰も気分次第、か。

……お前らしい」

あまりな事態に次狼が苦笑し、奏夜もつられて頬を緩ませる。

そして奏夜は、今日ここに来た用向きを伝える。

「約束、守ってくれてるみたいだな。礼を言っぞ、三人とも」

「よせ。お前から礼など、気味が悪い」

「あはは、言えてる」

茶化すラモンの隣で、カモうんうんと頷いている。

「はっはっは、そうだな。素直に礼など、オレ様らしくない」

「それはそれで問題だがな。で、どうだ。この時代は？」

「悪くない。奏夜のヤツが、こんな良い時代を生きていると思うと、さすがに嫉妬しちまうね」

「当たり前だ。奏夜だけでなく、“お前”が守った未来でもあるんだからな」

「……………」

初めて、奏夜は笑みを消した。



次狼の言葉がこそばゆくなり、頭をがりがり掻く。

「気持ち悪いこと言うなよ。それこそお前のキャラじゃねえだろ、次狼」

「そう言うな。何せ26年振りの再会だ。お前には言ってやりたいことが山程ある」

「あ、僕も僕も」

「おれ、も」

次狼を皮切りに、ラモン、カモ、会話に加わった。

奏夜はうんざりしたように溜め息をついたが、まんざらでもなさそうに、三人と他愛ない話を楽しんだ。

親友と呼ぶには、この関係性は複雑だ。

いがみ合い、果てには殺し合ったことさえある。

だがいつの間にか、こうして気軽に話す仲にはなっていた。

ケンカ仲間、というのが一番近いかも知れない。

親友でもないし、だが犬猿の仲というほどでもない、そんな奇妙な縁。

だからこそ、なのだろうか。

あんな約束を26年守ってくれた三人。

王に喧嘩を売ってまで、自分達を救い出してくれた男。

言葉になど出来たものではないが 四人は同じことを思っていた。

また会えてよかった。

会話の中で、ふとラモンがこんなことを聞いてきた。

「ねえねえ、もうクイーンには会ったの？」

クイーン、その名を聞いた途端、奏夜はばつが悪そうに顔を反らした。

「……いや、会ってない。会う気もない」

「へ？ 何でさ」

奏夜は軽い口調ながらも、何処か寂しそうに告げる。

「真夜とオレの間には、もうやり残したことはないからな。

オレはもうこの世にはいないし、まして奏夜の身体を借りていくなんてマナー違反もいいとこだ。

第一、ここに来るのだって、正直かなり迷ったぞ。

だが、一応お前らに礼は言わなきゃならなかったからな」

「じゃあ、奏夜にも会わない気か？」

お前の魂がその身体に入っているなら、奏夜の魂に呼び掛けること

も出来るだろう。

今は、あいつもお前に会いたいと思ってるかも知れんぞ」

「奏夜がそうだとしても、オレが会いたくない」

キツパリと言い切った。

奏夜の事情については、彼もさつき、次狼から聞いている。

その上で、会いたくないと言ったのだ。

「あいつにも、もう教えるべきことは教えてある。

それに、ここでオレが手を貸せば、またあいつはオレに甘えちまう」

ある意味、真夜より会いづらい。

「それに」と奏夜は続ける。

「奏夜なら心配いらないさ。

何せ、オレ様の究極の遺伝子を継いだ息子だからな」

「フツ、そうだったな」

「頻り三人と話し終え「さてと」と奏夜は席から立つ。

「オレはそろそろ行くぞ。もう一人、会わなきゃならんヤツがいるんでな」

「もう一人？」

「ああ、500年くらい前からの知り合いだ」

（また訳のわからないことを）

次狼は心中呆れたが、奏夜の言葉を理解することはしなかった。

理解出来ない言動や行動ばかり。

このバカは、そういう男だ。

「それじゃあな、次狼、ラモン、力。茶菓子も美味かったぞ」

「はいはい、以後、気軽にあの世から戻ってこないよーに」

「ぐっど、らっく」

ラモンと力が冗談めかしく別れを告げ、次狼は何も言わなかった。

が、奏夜が部屋から出ていく直前になって、次狼は「おい」と彼の背中に呼び掛けた。

振り返らず、奏夜は立ち止まる。

「何だ次狼？」

次狼は感情を隠すように、ぶっきらぼうな口調でただ一言、

「またな」。音也

意外な別れの挨拶に少し驚いて、奏夜は振り返らないまま、だが笑って別れを告げた。

「ああ、“またな”。次狼」

奏夜が去った後、ラモンは物悲しそうにコーヒーを啜り、力は大声で泣き出し、次狼は顔を伏せ、こっそり目から零れたものを拭いた。

「だあっ!!」

シヤナの大太刀から放たれた紅蓮の奔流が、ヘルホーネットファンガイアを捉える。

「ぬるいわ!!」

透明な羽を使い、ヘルホーネットファンガイアは空中へ退避。

左腕に付いた発射口から、右腕の針より一回り小さな針を発射する。

「くっ!!」

夜傘を防御に回し、針の雨を振り払う。

シヤナは昇降口の壁を蹴り、空中のヘルホーネットファンガイアの頭上を捉えた。

「ぬっ！」

右腕に付いた針で、『贄殿遮那』の斬撃を阻む。

ガキイン、と金属音が鳴り、互いの武器の間に火花が散る。

「さすがは魔神の契約者、というところか……。だが！」

「!?!」

シヤナは目を見開く。

「甘い！」

“背後に回った”ヘルホーネットファンガイアが、右腕の針を振り被る。



自身に向けられた殺意の塊を、どうにか大太刀で弾き、屋上の床に着地する。

「どづいづこと？ あいつ、確かに私の正面にいたはずなのに」

「ふむ。高速移動、というよりは、急に姿が消えたように見えたが」

嘲笑うように、ヘルホーネットファンガイアが言う。

「所詮はこの程度か。崇高な存在たるファンガイアに齒向かおうなど、身の程を知るべきだったな！」

殺那、またヘルホーネットファンガイアは消える。

シャナの動体視力をもってしても、捉えられない超高速だ。

「う、ぐっ！」

紙一重で攻撃を回避、ヘルホーネットファンガイアはまた消え、針を突き出して来る。

そのループは、シャナの攻撃の手を鈍らせ、着実に体力を削り取っていく。

一方、昇降口の側から、戦いの一部始終を見守る悠二はと言つと、

(ダメだ……全然わからない)

シャナを助けられない歯痒さに苛まれながらも、必死に戦いから情報を読み取るうとしていた。

戦いには参加出来ない。シャナの足手まといになるだけだ。

ならせめて、あの超加速のタネだけでも見破らなければならない。

以前取り込んだ“千変”の右腕の気味悪さはあるが、“零時迷子”の直感力はまだ健在なのだから。

(あいつが僕に気を払っていない内に、どうにかしないと)

考える、与えられた情報を組み直せ。

加速、否、シヤナにも捉えられないなら、あれはもはや瞬間移動だ。

端から見ても、確かヤツは一瞬消えている。

(本当にそういう能力なのか？ くそっ、だとしたら、手の打ちようがないぞ)

自在法か何かなら、まだ破りようはあるが、純粹な身体能力だったりしたらお手上げだ。

すぐに針を突き立てられて……。

……。

(待てよ、なら何であいつは、最初からアレを使わなかったんだ?)

屋上上がった直後、あの加速を使われていたなら、勝負にすらならず、やられていた。

なのにヤツは、わざわざ二人と会話をしていた。キバの情報まで与えて、だ。

（おしゃべりを楽しむような性格には見えないし、僕達をキバへの人質にする気でもなかったはずだ）

だったら、フレイムヘイズであるシャナや、その庇護下にある自分を相手になどせず、この学校にいる、誰か普通の人間を拐ってしまえばいい。

（そつだ。キバが狙いなら、尚更僕らと戦う利益はない。あの加速なら、僕らを撒くのも簡単はずなのに）

何故、それをしなかった。

無意味な会話。

加速の不使用。

この2つの矛盾に、悠二は辿り着く。

(何かあるんだ。あの加速を使えないわけが)

ふと、悠二を奇妙な感覚が襲った。

(何だ？ 耳が、少し痛い……)

よく耳を澄ませば、キーン、という壊れたテレビが発するような音がした。

かといって、電子機器などこの近くにはない。

零時迷子の感覚が、発信源をその告げる。

(あいつの、羽?)

ヘルホーネットファンガイアの背にある両翼。

よく見ると、飛んでいない時以外でも、小刻みに震えている。

（ あっ！ ）

悠二の脳内で、一つの仮説が生まれた。

確証は無いが、これならすべてに説明がつく。

「 シャナ！ 」

悠二は、大声で彼女に呼び掛ける。

敵の注意も引いてしまいが、それは相応のリスクだ。

「 騙されるな！ そいつは瞬間移動なんかしてない！ 」

「 ！！！ 」

シヤナは戦いながらも、悠二の言葉に耳を傾ける。

それは、致命的な油断となった。

「はぁッ！！」

轟音。

ヘルホーネットファンガイアが射出した魔皇力の弾丸が、悠二ごと屋上の床を吹き飛ばしたのだ。

「う、わぁっ!?!」

悠二の悲鳴が拳がり、周囲は硝煙に包まれた。

「っ、悠二！！」

シヤナは青ざめ、一瞬全ての注意を削がれていた。

「シヤナ、後ろだ!!」

アラストールの警鐘にも、反応出来なかった。

硝煙に紛れ、近づいたヘルホーネットファンガイアの針が、シヤナの肩を刺し貫いた。

「っぐ、あ!？」

焼けつくような痛みが走り、シヤナは身体をよろけさせる。

振り向く先には、ヘルホーネットファンガイアの勝ち誇った顔。

(あ、れ? 見え、ない……目が、霞ん )

目だけではない。傷口から、どんどん身体が麻痺していく。

アラストールが呼び掛けているが、聞き取れない。



悠二の安否を確かめることも出来ず、意識は闇に飲まれた。

「脆弱なものだ」

自らの針に宿る“毒”により、意識を失ったシャナを見下し、ヘルホーネットファンガイアは呟く。

「やはり我々こそ、世を支配するに相応しいのだな」

次にヘルホーネットファンガイアは、屋上に出来たクレーターの上で気絶した悠二を見る。

「生きていたか。中々にしぶといな、人間というやつは。  
……まあいい。少々予定は狂ったが、こいつらを人質とさせてもらうとするか」

言って、ヘルホーネットファンガイアは悠二に近付いていく。

その時だった。

「ふう、やれやれ」

昇降口の鉄扉が開き、一人の男が屋上に姿を表した。

「この時代になってもまだ、人を襲うファンガイアがいるとはなあ？」

「……ようやくお出ましか。キング」

聞き知っていた容姿を確認し、ヘルホーネットファンガイアは言う。

しかし、直ぐ様その表情は、怪訝そうな顔つきに変わる。

「いや……“違う”。身体はキングだが、中身が違う。  
……貴様、何者だ」

その質問に、乱入してきた青年　奏夜は、不敵に微笑み、自らの名を告げた。

「紅、音也だ」

次回、仮面ライダーキバ / BLAZING・BLOOD!

「久しぶりだな、堅物魔神」

「じっとしてるなんて、出来るわけないだろ!？」

「さあ、狂宴を始めようか!」

「御崎市の間人間全員が操られている!」

「俺の、せいなのか?」

「答えはもつと単純だ」

「シャナに、僕の大切な人達に、手出しはさせない！」

「変身！」

「俺は紅奏夜。またの名を、ファンガイアの王、キバ！」

【第十五話・再演／天才の贈り物】

W A K E ・ U P !      紅蓮の鎖を解き放て！

## 第十四話・英雄／天才再臨・Bパート（後書き）

今回は少々時間かかっちまいました；

・前回あとがきに書いたやりたかった会話、というのは、音也&次狼達の会話です。

ええホント、大好きなんですよ、この四人組。色々ドロドロした過去編ですが、この四人組のやり取りで大分明るくなった気がします。特に後半の、次狼さんと音也のやり取りなんかもう……！！

逃げられたはずなのに、音也と真夜を庇って封印された次狼さんも、それを見て激昂し、キングに向かっていく音也も。

そして最後、音也との約束のシーンで涙腺決壊しました（T-T）  
今回のシーンは、四人組の仲が再確認されるよう書きました。  
それが伝われば幸いです。

・オリジナルストーリーらしく、オリジナルキャラ、ヘルホーネットファンガイア。ちなみに真名は“移り気な悪女”です。  
カプト見てた人ならモデルはわかる、かな？

今回は色々波乱の展開です。

名護さんとマージョリーを出せるかどうか真剣に思案中ですが、どうか暖かい目で見守っていて下さい。

それではm（）（）m

第十五話・再演／天才の贈り物・Aパート（前書き）

「『X』とは、ギリシャ語の『X』、つまりキイ又はカイに由来すると言われているアルファベットである。

日本ではエックスという呼び方が一般的だが、ラテン語やイタリア語ではイクスと呼ぶのが主流だ。

また記号自体の意味としては、『正体不明の存在』を表すこともあるんだぜ」

キバットバット三世

第十五話・再演／天才の贈り物・Aパート

「紅、音也だ」

名乗りを上げ、奏夜　否、音也はヘルホーネットファンガイアと  
睨み合っ。

「……ふん。まあいい、魂は違えど、貴様を始末することに変わり  
はない」

ヘルホーネットファンガイアは、意識を失ったシャナの右腕を掴み  
上げる。

「御崎市の電波塔まで来い、私はそこで待つ」

そう言い残し、ヘルホーネットファンガイアの姿は、シャナごと金  
色の光となって消えていった。

「……ちっ、面倒くさいことになってきたな」

ファンガイアが消えた虚空を見ながら、奏夜はダルそうに頬を掻く。

「紅音也」

「あん？」

足元から声がした。

「おやおや、遂にアスファルトの地面にまで、オレの名は轟いちま  
ったか」

「……その軽口も、久方ぶりに聞くと勘に触るな」

「はっはっは、ジョークだジョーク」

言いつつ音也は、シャナが 恐らくは掠れる意識の中 外した  
であろう、コキュートスを拾い上げ、目の前にぶら下げる。

「久しぶりだな、堅物魔神。またお前の辛気臭い声を聞くとは思わ  
なかったぜ」

「ああ、我も貴様の腹ただしい軽口を、再び聞くことになろうとは



思いもよらなかったぞ、紅音也」

紅世の魔神と希代の天才。

再会の文句は、二人とも毒からだった。

「  
」

悠二が目を覚ますと、薬品の匂いが鼻をついた。

（ 保健室？ ）

背中にベッドの感覚もある。

眩しい照明の光を右手で遮りつつ、状況把握のため、悠二は頭を整理していく。

（えと、授業抜け出して、ファンガイアが来て、攻撃に巻き込まれて、シャナが……）

直ぐ様、ベッドから飛び起きる。

「そつだ、シヤナは!？」

慌ててベッドから這い出る悠二を、くぐもった声が呼び止める。

「坂井悠二」

「え、あ、アラストール？ あれ、どこから話してるんだ？」

「枕の下だ」

今まで頭を乗せていた枕の下を探すと、見慣れたペンダントが出てきた。

「あ奴め、話し終わった矢先、枕の下に隠していきおつて……」

「？ 何が？」

「いや、こちらの話だ。坂井悠二、どこまで状況を覚えている？」

「ええと、あいつに吹っ飛ばされたあたりまで」

「うむ。あの子の話だがな、シャナがあの子をファンガイアに捉えられた」

「えっ、ど、どういふことだよ!？」

「そのままの意味だ。キバをおびき寄せるため、あの子を使う気だろう。電波塔で待つと言っていたが……」

淡々と告げるアラストールに対し、悠二の思考は焦燥に塗り潰されていく。

「……まずい、早く行かなきゃ!！」

次の瞬間には、悠二はコキュートスをひっ掴み、保健室を飛び出していた。

アラストールが何か言っていたが、悠二の耳には入らない。

(シヤナ……シヤナ！)

シヤナの安否、それだけを思い、悠二は冷静さを欠いていた。

校門前まで来たところで、ようやくアラストールが制止が届く。

「落ち着け。あの子にも言われたらろう、貴様が行って何になる」

「っ……でも！」

「とにかく頭を冷やせ。何もするなどは言っておらん。

先ずは、『弔詞の詠み手』とあの白騎士に会うべきだ」

「名護さん達に？」

「うむ。『弔詞の詠み手』は怪しいが、あの白騎士ならば、協力も望めよう」

こちら側に戦力が無い以上、助けを求める。

至極妥当な案だ。

けれど、

「……それしか、僕に出来ないのか？」

「……………」

アラストールの提案に、悠二は悔しさに拳を握り締めた。

「助けを呼びにしか、行けないのか？」

無力さを嘆くように、悠二は気持ちを吐き出していく。

出来るなら、今すぐにでもシャナの元へ向かいたいのだろう。

アラストールもそれはわかっていた。

（だが、現実には通じぬ）

ここで悠二を止めなければ、シヤナを助け出すことはより困難になる。

だからこそアラストールは“悠二”のためにも、厳しい言葉をかけた。

「ああ、そうだ」

「やめとけやめとけ。お前の力じゃ勝負にもならん」

だが、かかった声は一つでは無かった。

悠二が振り替えると、いつの間にか校門脇の壁に、一人の男性が寄り掛かっていた。

「……先生」

「いや違う。オレ様は通りすがりの愛の天使だ。そう言わなかったか、少年？」

「そうですね。なら、僕は忙しいので失礼させて貰います」

今、悠二にこの奇妙な状態の奏夜を相手にする余裕は無かった。

「くっくっく、つれないねえ」

歩き去ろうとする悠二を見ながら、奏夜は心底楽しそうに相好を崩した。

「まあ確かに、忙しいのは当たり前だな。  
呼び止めて悪かったよ」

自分じゃ何一つ出来ない、無力な少年くん。

びたり、と悠二は足を止めた。

「ほらほら、さっさと行けよ。あのイクサ泥棒のガキなら、このくらいでどうにかしまうだろうさ。  
お前みたいなただの坊やは、裏方役がお似合いだ」

「……何が言いたいんです？」

「別にいい？　ただ、情けないと思うだけさ。惚れた女一人助けようとしなないなんてな」

思わず、悠二は奏夜の胸倉を掴んでいた。

以前にも、こんなことはあった。

ただ、以前は確実に自分の落ち度だったが、今回は違う。

「何の真似だ？　オレは当然のことを言っただけだぞ。あの化け物のトコに行くなんて、愚の骨頂だ。」

お前は助けを呼んだら、どっか安全なところでじっとしてろ」

「……っ、じっとしてるなんて、出来るわけないだろ！？」

「じゃあ聞くが、オレから離れて何処に行こうとしてたんだ？」

奏夜の質問に、悠二は押し黙る。



燻る思いこそあれど、あのまま奏夜が呼び止めなかつたら……。

自分は、名護やマージョリーの元へ、足を動かしていた。

「そうだろ？　認めるよ、そいつがお前の本心だ。戦略だの、力の無さだの、もっともらしい理由をつけて、お前は結局あの娘を助けにいく自信が無いんだ」

「そんな、こと……」

ない。

そう言い切れるだけの正しさも強さも、悠二の中には無かった。

奏夜は悠二の腕を払い、伝える。

「お前は、あのイクサ泥棒のガキと違って、遊び心を持つだけの余裕がある。

力も、まあ、その歳にしちやなかなかだ。

けど、強くなるにはまだ足りない」

奏夜は、悠二の目先に指を突き出す。

「覚悟だ」

「かく、」

「そうだ。大切な人のためになら、何でも投げ出せる覚悟。投げ出した結果、誰かを傷付けたとしても、その傷すら背負う覚悟だ」

悠二は、呑まれていた。

普段から、奏夜の言うことには含蓄がある。

だが、今の奏夜の言葉には特に、まるで吸い込まれるような力があった。

「人間、覚悟さえあれば大抵のことはできる。吸血鬼の王をブツ飛ばすことだって夢じゃない。

オレがその生き証人……いや、この場合死に証人か。どっちでもいいけどな。

さて」

お前にはあるのか？      それだけの覚悟が。

「……………」

悠二は即答できなかった。

彼女のために強くなろう。

そう誓ったことはある。

でも、それは果たして、本当に心からの決意だったのだろうか。

（もし、僕にそれだけの覚悟が無かったら……………）

そう考えると、自分がとても恐ろしいものに思えてきてしまう。

この質問に、軽々しく返事をしてはいけない。

故に悠二は、口を開けなかった。

「……ま、お前さんにはちょっと難しい話かもな」

奏夜が頭を軽く掻き上げた。

「誰かを頼るのを否定するわけじゃない。だがもし、お前が自分の力であの娘を救いたいなら」

言いつつ、奏夜は悠二に“ある物”を押し付けた。

「!!! こんって……!!」

「オレ様からのプレゼントだ。  
コイツを上手く使えば、お前さんでもあの娘を助けられる、かも知れん。」

あとは、お前の覚悟次第だ」

最後に、軽く悠二の肩を叩き、奏夜は立ち去っていった。

悠二はその後ろ姿を呆然と見送り、次に奏夜から手渡されたものに目を落とした。

「何なんだよ。僕に、一体どうしろっていつんだ」

誰にともなく、悠二は問う。

だが、答えは無い。

そんな悠二を見て、アラストールは、

(まったく、余計なことをしていきおって……)

心の中だけで、こっそりと不満を漏らした。

「さて、もうそろそろ、こちらに向かっている頃か……」

御崎市内の電波塔。

市の中央付近に位置し、高層ビルの少ない御崎市では五指に入る高さという、それなりに大規模なもの。

それに隣接する、コントロール用施設の屋上に立ち、ヘルホーネットファンガイアは、御崎市を一望していた。

「では、始めるとしよう。最高のショーをなあ」

口角を吊り上げ、ヘルホーネットファンガイアは透明な羽を広げる。

羽は残像を見せるほどに振動し、高く耳障りな音を生み出す。

空気の震えに乗って、その怪音波は御崎市全域に伝達されていく。

「人間どもよ聞くがいい……我が『破壊の音楽』を！」

「ぐっ!?!」

名護啓介はその日、『マル・ダムール』にいた。

バウンティ・ハンターとしての仕事を滞りなく終え、いつものようにコーヒートを啜り、至福の一時を過ごしている……はずだった。

「な、にを……する!! マスター!」

マスター、木戸はその質問には答えず、ただ名護をpushさえつけ、彼の首を絞めようとする。

突然のことだった。

普通に皿洗いをしていたマスターが、いきなり目の色を変えたかと思つと、名護に襲い掛かってきたのだ。

マスター以外にいた他の客も、力のないふらふらした足取りで、名護に向かつてくる。

(ファンガイアか、それとも“徒”の仕業か……っ!? どちらにせよ、マスターも他の客も、普通の状態じゃない!)

早く、状況を把握しなければ。

「マスター、すまない!」

マウント体勢のマスターを蹴飛ばし、無理やり引き剥がす。

マスターは机に激突したが、軽い打ち身程度だろう。

他の客を振り切り、名護はマル・ダムールの外へ。

だが店外にも、大勢の人が待ち伏せしていた。

「くっ、戦うしかないか……?」

「ケイスケ!」

と、戦う覚悟を決めようとしていた名護にかかる声。



声の主は、握りられかけた名護の拳を一瞬で掴み、そのまま空中に舞い上がる。

「グッドタイミング！」

「ヒャーハハッ！ 無事だったかい？ 白騎士の兄ちゃんよ！」

「ああ、助かったよ、『甲詞の詠み手』」

「あら、えらく素直な礼じゃない」

「よく言うぜ、礼言わなかったら言わなかったでふてくされブツ！」

「お黙り」

グリモアで浮かぶマジョリーとマルコシアスのやり取りを、名護はぶら下がりながら聞いていた。

眼下には、獲物を探すかのように蠢く人の影。

「それより、状況を説明してくれ。一体何がどうなっているんだ？」

「どーもこーも、こいつは相手方の魔術でしょうね」

「魔術……ということは、ファンガイアか」

「そーゆーこつた。俺達みたいに耐性があるヤツは大丈夫みてーだが、大抵のヤツは操られちまつてる」

「ならば、御崎市の人間全員が、操られているとみた方がいいな。手の込んだ真似を」

「手が込まなきや、こんなもの作れないわよ。……この分じゃ、ケーサクもエータも同じ状態か」

苦々しく、マジョリーが舌打ちした。

「『甲詞の詠み手』。何かこの魔術の解除法は無いのか？」

「魔術は専門外よ。  
見たところ『操られていない人間を攻撃しろ』って命令をインプット  
してるみたいだけどね……。  
時間かけりゃ理解はできるだろうけど、それまで相手が待ってくれる  
保証はないわ」

「これ解除するよりも、これを仕掛けたクソツタレを潰した方が早  
そうだけ」

「場所は分かるのか？」

「さっき気配探知で調べたわ。あの電波塔よ」

何故か同じ場所に、もう一人のフレイムヘイズの気配もしたの  
だが、それをマージョリーは口にしなかった。

「少しかつ飛ばすけど、勢いに負けて、手放さないようにね」

「ふん、誰に言っている」

「揺れますので、シートベルトをお付けくださいあい！！　なんてな、  
ヒーッヒーッ！」

軽口を叩き合い、マージョリーの乗るグリモアは、空に軌跡を描いて宙を滑っていった。

場所は移って、紅邸二階。

奏夜はバイオリン工房を見渡し、机の上に置きっぱなしだったバイオリンの原型に目をつけた。

手近にあったノミを使い、型を丁寧に削っていく。

と、そんな奏夜を窓から覗く影があった。キバットである。

手がないため、歯で「ちくしょう、開けこんにやる!」とぼやきながら、ようやく窓を開け、中に入る。

「おい、奏夜!」

「ん？　おお、二世の息子。元気にしてたか？」

「……俺様をそう呼ぶってことは、やっぱりお前音也なんだな？」

「む。つまらんリアクションだな。もっと驚けよ」

「お前にゃ前科があるからな。……ってんなことはどうでもいいんだよ！」

外がえらいことになってるんだ！

街のみんなが誰かに操られちまってる！」

「……ほう、ヤツも動いてるってわけか」

音也はノミを置いた。

「二世の息子、よく聞け。お前らも知ってるフレームヘイズのガキが拐われた」

「んなつ！？」

「敵は八チみたいなのファンガイアだ。御崎市の電波塔にいる。理由は分らんが、キバを狙っているらしい。」

オレが身体から離れたら、奏夜にそう伝える」

「ちょ、ちょっと待て!! お前が何でシヤナちゃんのことを…

…」

「悪いが、説明してる時間はない。じゃ、頼んだぜ」

キバットが止める暇もなく、奏夜は膝から崩れた。

次に目を開けた奏夜の雰囲気は、いつものものだった。

「え？ あ、あれ？ 俺、何で家に戻って来てるんだ？」

「奏夜、大丈夫か？」

「キバット？ 俺、一体何を……」

奏夜が言いかけたところで、一階から物音が聞こえてきた。

二階から見てみれば、子供から大人十数人が、紅邸に押し寄せていた。

「うおっ、何だありや!?!? 目がヤバイ人達が怒涛のように家宅侵入してきてるんだが!?!?」

「話はあとだ! 今とはにかくキバツて逃げるぞ!」

「何故に!?!? 話の脈絡がまるで見えないんですけど!」

「いいから早く!?!」

「……あーもうっ!」

舌打ちし、奏夜は窓から飛び出しかけるが、

「……っと、これだけは置いていけないな」

ケースに入っていたバイオリン、ブラッディローズを掴む。

人々が二階まで上がってきた。

その様子を横目に捉え、間一髪、奏夜は窓から飛び降り、紅邸を脱出した。

「わけわかんねー！　いつから御崎市はラクーンシティになったんだよ！」

「いつから御崎市はラクーンシティになったんだー！」

同時刻、悠二は追ってくる人々から逃げながら、奏夜と同じツッコミをしていた。

「恐らくは魔術の一種だろうな。キバ以外の敵を効率良く始末するためだろう」

悠二の首にかけられたコキュートスから、アラストールの声がする。

奏夜と別れ、これからどうするかを決めていた矢先、悠二は操られている人々の襲撃を受けた。



以後、ほとんどノーインターバルで走り詰めだった。

「キバは、もう電波塔に着いたかな？」

「どうだろうな。ただ、存在の力の大きな衝突は、今のところ無い。ところで坂井悠二、お前は今、何処に向かっているのだ？」

「……………」

悠二は少し黙って、

「電波塔だよ」

と答えた。

「……………坂井悠二」

呆れるように溜め息をつくアラストール。

当然だろう。

あれだけ、助けを求めにいけと言っただのに。

（ああそうさ。僕はただの分からず屋で、身の程知らずなガキだ）

悠二自身も、そう思っていた。

でも、

「操られた人がこんなにいるなら、もうマル・ダムールにはたどり着けないよ。

ここまで大きな騒ぎになったら、いくらなんでも、名護さんやマー  
ジョリーさんは動いてるはずさ。

だったら、向こうで合流できるかも知れないだろ？」

「……………む」

確かにそれはそうだ。

マル・ダムールに行くよりは、電波塔の方が近い。

もし名護やマージョリーがいるなら、むしろ危険は減るだろう。

「それだけじゃ、ないけどさ」

小さな声で悠二は付け加えた。

アラストールはまた呆れかけたが、声には出さず、代わりに深い溜め息をついた。

「わかった。もう何も言わない。状況を見ても、それが最善だろうからな」

「ありがとう」

悠二が礼を言ったのを最後に、二人はしばらく互いに話さなかった。

襲い掛かってくる人をやり過ごしつつ、悠二はようやく電波塔前に辿り着いた。

悠二は目を閉じ、シャナの気配を探る。

(よし、ここまで来れば、気配は分かる)

シヤナの位置を把握した悠二、だが直ぐ、唸るような声が背後から聞こえてきた。

操られたたくさんの人々が、悠二を取り囲み始めたのだ。

「くそっ、あと少しなのに……！」

「悠二君！」

と、悠二の頭上から声が聞こえてきた。

上空を見上げると、グリモアに乗ったマージョリーと名護が、悠二の眼前に降り立ったのである。

「名護さん！ マージョリーさん！」

「無事だったようだね、良かった」

「まーたアンタはチヨロチヨロしてたのねえ」

「ま、何にもしねーよりかはマシだがな、ヒツヒ」

言って、名護とマージョリーは周囲を取り囲む人々を見る。

「ほらほら、事情はなんとなくわかってるから、アンタはさっさとチビジャリ助けてらっしゃい」

「えっ、でも……」

「ヒツ、俺達の都合だから気にすんなよ兄ちゃん。  
どっちにせよ、こいつらを黙らせねーと、目一杯暴れられねえんだ。  
間違っただけで殺したりすると、それだけで存在の歪みが出来ちまうから  
な」

「それに、彼らを入質にされたりするのも厄介だ。ここで食い止めよう。」

悠二君、我々に構わず早く行きなさい」

悠二にはまだ葛藤があったようだが、躊躇いがちに頷いた。

「 分かりました。気をつけて下さいね」

「 ああ、任せなさい」

「 誰に言ってるのよ」

頼もしい言葉を聞き、悠二は電波塔へと入っていった。

「 さあで、と。手加減はあんまし得意じゃないんだけどね」

「 ヒヤーツハハ！ つい最近まで絶不調だったヤツの発言たあ思えブツ！」

間髪入れず、グリモアをブツ叩くマジョリー。

「 お黙りバカマルコ。それはそうとケイスケ、アンタあの白騎士になつときなさい。  
あいつら、操られてる分動きにキレは無いけど、力はちょっと強くなってるから」

「 人間にイクサの力を使わないのが私のポリシーなのだが、まあ、仕方ないか」

気が進まなそうに、名護は懐に手を入れる。

「……………」

怪訝そうに名護は顔をしかめ、彼にしては酷く慌てた様子で、服のポケットに手をつ突っ込みまくっていく。

「ケイスケ？」

「どうしたんでえ？」

名護は呆然としたように、唇を動かした。

「……………無い」

『はっ』

「イクサナツクルが、無い……………」

施設内に、階段を駆け上がる音が反響する。

「この階のはずなんだけど……」

やたらに広い分、探すのが大変だ。

薄暗く、石柱の多さに比例して物陰も多くなるため、見落としも起こる。

敵がいる可能性もあるから、早く探さなきゃならないのに。

「あのファンガイアもいるのかな」

「いや、屋上から動く気配は無い。当分は大丈夫だろう」



「ってことは、キバも来てないんだな。何やってるんだろ。……やっぱりこの前のこと、まだ引き摺ってるのかな？」

「さてな。だが、いない者のことを気にしてもいられまい」

「そりゃそうかも知れないけどさ……っ！？」

会話を途中で切り、悠二は柱の後ろに隠れた。

(シヤナ！)

見つけた。

張り巡らされたパイプの先、発電用の機械の傍らに、ぐったりと横たわっている。

「やはり、あのファンガイアの毒が効いているらしいな。あの子の力が弱まっている」

「だ、大丈夫なのか？」

「そこまではわからん。今は無事としか言えぬな。それよりもまず、“あれ”を見る」

アラストールの示す“あれ”とは、先ほどからシヤナの周囲を巡回する三体のファンガイア、ワーカービーファンガイアだ。

ヘルホーネットファンガイアと似ているが、体色も違っし、若干小柄である。

「ヤツの分身態、といったところか」

「これじゃ近付けないな……よし」

奏夜から貰ったものを取り出しかけた悠二を、アラストールが止める。

「待て。確かにそれを使えば、あのファンガイア三体には勝てるかも知れんが、同時に親玉に感付かれるぞ。

シヤナが勝てなかった相手に、貴様が立ち向かっても結果は同じだ」

「じゃあどうするのやー」

このまま待ち続けても、ヤツらが警戒を怠るとは思えないし、モタモタしていると、自分が見つかってしまっただろう。

「悠二くん」

踏み込めないでいる悠二に、後ろから小さな声がかかった。

「こっちこっち」

そこにいたのは、小さな白いコウモリだった。

「キ、キバーラ？ 何でここに？」

「いきなり街の皆がおかしくなっちゃったから、シヤナちゃんか悠二くんなら何か知ってるかなと思って探してたのよ。けど、それよりよっぽど厄介なことになってるみたいね」

キバーラはワーカービーファンガイアを横目で見る。

「わたしがあいつらの注意を引くわ。その際にシヤナちゃんを助け

「てあげて」

「大丈夫？」

「余裕よ。あいつらは分身態だから、知能は高くないから」

本当なら、キバーラを危険な目に合わせたくない。

だが、明確な作成もない。

「……じゃあ、頼むよキバーラ。でも危なくなったらすぐ逃げてくれ」

「まかせて、トモダチのためだもん」

ウインクし、キバーラはワーカービーファンガイアの方に飛んでいく。

「鬼さんごうちらー」

ギイイイツ！

反射的に反応したワーカービーファンガイアは、逃げ惑うキバーラを追いかけていく。

警備は手薄になった。

「今だ！」

キバーラに感謝しつつ、物陰から飛び出した。

「シャナ、大丈夫!？」

力無く横たわるシャナのもとに駆け寄る悠二。

軽く揺さぶると、シャナは目をゆっくり開けた。

「ゆっ……じ？」

息は荒く、顔もやや紅潮しているが、それでもシャナは反応を示す。

「なん、で……悠二が、ここに？」

「助けに来たに決まってるだろ！」

「さ、早く逃げなきゃ。キバーラが時間稼ぎをしてくれてるから」

悠二は手早く、シヤナを後ろに背負った。

シヤナが、毒とはまた別の意味で顔を赤くした。

「ば、ばか悠二、な、に……すんのよ……！」

「文句なら後でいくらでも聞くから！」

シヤナはまだ何か言いたげだったが、毒がづらいのか、大人しく悠二の背中に身を預けた。

「悠二くん！ シヤナちゃん助けたなら急いで！ あいつらが来るわよ……！」

「……！」

舞い戻ってきたキバーラと一緒に、悠二はその場から逃げ出した。

シヤナは体躯通り、とても軽く、走る上で苦にはならない。

ワーカービーファンガイアの鳴き声を振り払うように、悠二は走り続ける。

だが、

「……………あれ？」

おかしい。

もう階段が見えてきても、おかしくはないはずなのに。

一向に周囲の景色が変わらない。

「気付いたか、坂井悠二」

「アラストール、これってまさか……………！」

「ああ、不味いな。また魔術だ。同じ場所を何度も巡らされているぞ」

「ええ！？ ど、どつするのよー！」

「ひとまず隠れる。物陰なら山ほどある」

アラストールの提案で、四人は柱が密集しているエリアに隠れた。

「どつ？ 悠二くん」

「無理みたい、ここから全然動く気配がないよ」

隠れてからも、ワーカービーファンガイアの鳴き声は止まず、この近辺を探し回っている。

「アラストール、そっちは？」

「ダメだ。清めの炎でも毒は消えぬ」



再びシャナの首にかけられたコキュートスから、アラストールが言う。

シャナの顔色は一向に良くならず、息づかいも荒くなる一方だ。

「解毒の術は、あのファンガイアしか分からぬだろうな」

「マズイわ、見つかるのも時間の問題よ」

キバーラの緊張は、三人にも伝染していく。

掴まれば、シャナが戦闘不能な以上、このままでは確実にやられてしまうだろう。

「……………だい、じょうぶ」

か細い声に悠二が振り替えると、夜傘から取り出した『贄殿遮那』を杖代わりに、シャナが立ち上がるところだった。

だが、足は覚束なく、酷く頼りない。

「シヤナ!？」

「はあっ、わ、私、なら……戦える、から……」

「ダメだよ、君はもうふらふらじゃないか!」

「そうよシヤナちゃん! その毒だつてどんな特性を持ってるかわからないのよ!?! いくらフレイムヘイズだからって、死んじやうかも知れないわ!」

「勇気と無謀は違う。シヤナ、お前も分かっているはずだろう」

満身創痍にも関わらず戦おうとするシヤナを、三人が阻む。

「……じゃあ、他に、手が、あるの……?」

シヤナの瞳は、どんなことがあっても退かないと語っていた。

気圧される三人を見て、シャナは安心させるように言う。

「……だい、じょうぶだよ、悠二、キバーラ、アラストール。  
わたしは、フレイムヘイズ、だから……。  
あんな奴らに、負けないから……」

果敢にもそう宣言し、シャナは紅蓮に染まりつつある目で、悠二を見つめ、微笑む。

それは 触れれば砕け散ってしまいそうな、今にも消えてしまい  
そうな、儂い笑顔だった。

身体に毒が回りつつあり、意識も朦朧としている筈。

だがそれでも、シャナは笑っていた。

「安心、して……。悠二も、皆も……。私が、絶対に守るから」

「……っ！」

衝撃が、悠二の身体を貫く。

以前、悠二はシャナに頼んだ。

『皆を、守ってくれるかい？』

そう。シャナに皆を守ってくれるように頼んだのは、悠二だ。

彼女をこうあるように変えたのは、悠二だ。

シャナはその約束を果たすため、こうしてボロボロの身体を引き摺ってまで、戦おうとしている。

だが、悠二の心の中に沸き上がったのは、喜びではなかった。

「けるな」

「？」

小さくつむがれた言葉を、三人が認識するより早く、悠二は、

「ふざけるな！」

反響するのも構わず、シヤナを怒鳴り付けていた。

キバーラは目を丸くし、アラストールも何も言わないでいるが、驚愕はしているらしい。

シヤナもまた、自分が慕う少年が、どうしてこんなにも怒っているのかわからず、茫然自失とするばかりだった。

「僕は……僕はそんなつもりで、キミに『皆を守ってくれ』なんて言ったわけじゃない!!」

立ち上がろうとしていたシヤナを、強引にまた座らせる。

「キミだって、自分の身体のことくらい分かってるだろ!? だってら何で戦おうとするんだよ! 何で死ににいくような真似をするんだよ!」

「だ、だって……」

「だってじゃない!」

溜め込んでいたものを吐き出すように、悠二は叫ぶ。

「キミも、大切な人、なんだよ」

「……?」

「キミだって、僕にとっては皆と同じ、守りたい人なんだよ!」

普段滅多に聞かない、悠二の怒り。

それはまさに心の咆哮だった。

そこに気恥ずかしさなどは微塵も見られず、その剣幕には、シヤナでさえ威圧するほどの、力強さがあつた。

「なのに何でキミは、自分を守らないんだよ！

自分を大切にしないで皆を守ってもらっても、僕は全然うれしくない！

たとえそれで、敵を倒せても、僕や皆が助かったとしても」

そのせいでキミがいなくなったら、守れなかったのと変わらないじゃないか！

「……………」

シヤナは唾然とし、同時に、胸の奥から何か熱いものが込み上げてくるのを感じていた。

毒の痛みすら忘れるほどの熱を持ったその感情は、シャナの中に広がり、心を満たされていく。

(……………なに、これ)

悠二を想う心とは違う、名前のつけられない感情に戸惑うシャナ。

片や、悠二は立ち上がり、物陰からゆっくりと出ていく。

「キバーラ、シャナをお願い」

「えっ、ゆ、悠二くん！　ダメよ、キミが行っても……………」

キバーラの静止も聞かず、自分の声に寄ってきたファンガイアと向かい合う悠二。

眼光は鋭く、迷いもない。

普段とは比べ物にならない雰囲気だ。



悠二の態度の裏には、あの奇妙な状態の奏夜が発した問い掛けがあった。

『お前にはあるのか？　それだけの覚悟が』

よくよく考えれば、今更だろう。

(最初は覚悟なんて何も無く、僕はこの非日常に放り出された)

そしてシャナと出会い、彼女を助けたいと願った。

もうとっくに、覚悟はしていたじゃないか。

(そうだ。だったら、力があるとかないとか、そんなもの関係ない)

結果なんか気にしても仕方ない。

(今はとにかく動けばいいんだ、理屈も何もなく、大切な人のために)

大切な人のためなら、何でも出来る。

それで、大切な人を守るなら。

「ああ。覚悟なんか、いくらでもしてやるぞ」

深い決意が刻まれた悠二の目に、三体のワーカービーファンガイアは、怯えていた。

今までは確実に『狩る』側だった自分達が、いつの間にか『狩られる』側に回った、そんな悪寒に苛まれていた。

力に頼るものは、それ以上の力を持つものに、逆らう術を持たない。

悠二は無言のまま、懐から、奏夜から貰ったものを取り出した。

悠二の手に握られているのは、白と金色の装飾がされた手甲型の機械　イクサナツクルだった。

「シャナに、僕の大切な人達に、手出しはさせない！」

悠二は腰にイクサベルトを巻き、イクサナツクルに、左手を押し当てる。

『レ・デ・イー』

待機音が流れ出し、悠二はまるで何処かのヒーローの如く、右から左へイクサナツクルをスライドさせる。

「凶らずもそれは、26年前、このイクサを最も使った男と同じポーズだった。」

そして悠二もまた叫ぶ。

無力な自分を捨て去る、魔法の言葉を。

「変身！」

『ファイ・ス・ト・オ・ン』

電子音と共に、足下から、イクサナツクル内に圧縮されていたアーマーの映像が現れ、悠二の身体と重なった。

純白の鎧を身に纏い、悠二は仮面ライダーイクサへと変身を遂

げる。

名護の変身時とは異なり、イクサメットの防護装甲『クロスシールド』は展開されておらず、セーブモードでの変身だった。

「着心地は、悪くないな」

イクサはワーカービーファンガイアに手を突き出す。

伸ばした指を自分の方へ曲げる姿は、完全に相手を挑発していた。

「さあ、かかってこい！」

自分を鼓舞するように、イクサは宣戦布告する。

三体のワーカービーファンガイアは雄叫びを上げ、イクサへ襲い掛かっていく。

## 第十五話・再演／天才の贈り物・Aパート（後書き）

今更ながら、オリジナルストーリーの難しさに気付きました……。

・悠二が眠っている間のアラストールと音也の会話は、断章に回します。

・クラ刑事編に続き、悠二再びの変身！

何故セーブモードなのかは……：すいません。単純に僕が、バーストモードよりもセーブモードの方が好きなので（爆）

・名護さんも音也も大好きなんですけど、名護イクサと音也イクサどっちが好き？ と聞かれれば音也と答えてしまいます。

名護イクサファンの方、ごめんなさい。

初登場シーンと変身ポーズのかっこよさで、音也イクサにやられてしまった作者を許してください（……）

オリジナルストーリーは、あと三回の更新で終わります。

次回はいよいよ、彼の正体が……？

お楽しみに！

第十五話・再演／天才の贈り物・Bパート

ギイイイツ！

ワーカービーファンガイアは、右腕の針をイクサに突き出す。

三体の攻撃を回避するイクサには、余裕が見受けられた。

（よし、避けられないほどじゃない！）

シヤナとの鍛練の成果が、少なからず出ている上、零時迷子の感応力もある。

三対一というアドバンテージはあるが、勝ち目は十分にあるだろう。

「ふっ！」

突き出された腕を掴み、自分の身体を支点にすると、ワーカービーファンガイアを背負い上げ、地面に叩き付ける。

「だあっ！」

大きく引かれたイクサの拳が、仰向けになったワーカービーファン  
ガイアに叩き込まれた。

ワーカービーファンガイアは断末魔の悲鳴を挙げ、ステンドグラス  
となって碎け散る。

「よしっ！」

やはり、分身態というだけあって、戦闘能力はヘルホーネットファ  
ンガイアほどではない。

「さあ、かかってこないのか？」

イクサの挑発に、ワーカービーファンガイアは威圧され、後退りす  
るが、またすぐに攻撃を再開する。

( やっぱり、びびってはくれないか…… )

悠二は、自分を強いとは思っていない。



だからあの挑発には、ワーカービーファンガイアを怖じけ付け、冷静な判断力を削ぐ目的もあったのだが……。

逆に悠二への油断が消え、残る二体の動きにキレが出てきている。

（殴るだけじゃキツいかな……。だけど僕は名護さんみたいに、剣も銃も使えないし）

それならまだ、自分の一部である拳の方がマシだろう。

「……あ」

ふと、思い付く。

なんだ、武器ならまだたくさんあるじゃないか。

イクサは身を翻し、ワーカービーファンガイアに背を向けて駆け出す。

ギィィィ！

ワーカービーファンガイアは急に逃げを打った標的に虚を突かれたが、すぐに我に返り、イクサを追いかけていく。

(喰らいついた！)

仮面の下でしたり顔を作ったイクサは、足に力を込め、アスファルトの地面を蹴る。

目の前には石柱。

そこまでの距離を一気に詰め、空中で身体を反転。

垂直な壁に足をつけた。

「だあっ！！」

再び石柱を蹴り、今度はワーカービーファンガイアの方へ、まるで弾丸のように飛んでいくイクサ。

空中で右足を伸ばし、キックの体勢を取る。

ワーカービーファンガイアは慌てて防御か回避をしようとするが、もう遅い。

「はああああ ツー!!」

勢いのついたライダーキックが炸裂し、ワーカービーファンガイアの身体を砕く。

「あと一体!!」

着地し、残りラストのワーカービーファンガイアと向き合うイクサ。

ギ、ギイガアアア!

二体の仲間を瞬殺され自棄になったのか、ワーカービーファンガイアの動きにもはや精密さは無かった。

ただ目の前の敵を排除せよ。

脳内にそれ以外の情報伝達がされていないかのように、嵐のような攻めを見せている。

「くっ！」

ヤバいかも。

さりげなくイクサは冷や汗を流した。

ここまでの悠ニイクサは、かなりの余裕を持って、二体のワーカービーファンガイアを倒したように見える。

だが、実際はそうではない。

(三体を相手になんて、実戦経験ほぼゼロの僕が出来るわけないのになあ)

自嘲気味なその考えは間違っていない。

ミステスだなんだと言われようが、悠二は一介の高校だ。

戦闘テクニクの拙さは言わずもがな。

基本スペックも、いくらイクサがあるとはいえ、悠二は名護のように、それ専用のトレーニングプログラムをしてはいない。

なら、ここまでの快進撃はなんだったのか？

それは、さっきの挑発と同じである。

悠二が“余裕があるように”見せかけていたのだ。

キバーラによれば、ワーカービーファンガイアは知能が弱い。

つまりそれは、獣とさして変わらないということ。

生物は強者に対し、本能的な恐怖を抱く。

その恐怖は判断力を鈍らせ、戦闘能力の低下に直結する。

すべては、ワーカービーファンガイアと戦い易くするための、悠二の作戦だったのだ。

(けど、ここからは騙し騙しは効かないな)

最後の一体になったことで、相手に余裕がなくなり、攻撃ががむしやらになっていた。

だが、自暴自棄というのは、恐怖心を強引に振り払うものでもある。

つまり今こそ、ワーカービーファンガイアの全力状態なのだ。

(つまり、僕自身の力で、コイツを倒さなきゃならない！)

それもまた　一つの覚悟である。

「せいっ！」

悠二に喧嘩の経験はあまり無い。

それでも不器用なりに、拳を振るう。

ギイイイツ！

だが、ワーカービーファンガイアも必死なのか、多少の攻撃には怯みもしない。

防御をほぼ捨て、針をイクサに突き刺そうとしてくる。

悠二にとっては、やりづらいつとこの上ない。

「くっ……！！」

段々と、悠二が押され出していた。

腕を交差し、防御体勢主体になり、攻撃を食らわないようにするのが手一杯という様子だ。

ギッ！

「っ！？」

下半身から伝わる衝撃。

ワーカービーファンガイアが、ノーマークだったイクサの足を払ったのだ。

「うっ！」

無様に転び、イクサは仰向けのまま倒れる。

無論、ワーカービーファンガイアはその好機を見逃さない。

イクサに立ち上がる暇すら与えず、右腕を引く。

毒の針が煌めき、仰向けのまま身動きの取れないイクサに突き刺さる、

だが、そうはならなかった。

突き出されたワーカービーファンガイアの右腕を、すんでのタイミ



ングでイクサが掴んだのだ。

シヤナとの鍛練で身に付いた反射神経が、この土壇場で生きた。

ギイツー！？

驚きの声を挙げるワーカービーファンガイア。

チャンスがピンチに変わったのを理解し、右腕を引つ張るも、拘束は緩まない。

イクサは、仮面の下で笑う。

「逃がさないよ」

仰向けのまま、イクサはベルトのサイドケースから、フエッスルを取り出し、イクサベルトのフエッスルリーダーにスロットする。

『イ・ク・サ・ナ・ツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

電子音が流れると同時に、イクサはイクサナツクルを握り締め、ワ

カービーファンガイアに至近距離での『ブロウクンファング』をキメた。

イクサナツクルから放出されたエネルギー波が直撃し、カービーファンガイアは身体を粉々に砕け散る。

舞い落ちるステンドグラスをぼんやりと見つめ、イクサは変身を解除した。

アーマーが消え、イクサは悠二の姿に戻るが、悠二は仰向けのまま動こうとはしない。

（し、死ぬかと思った！ 本当に死ぬかと思った！！）

緊張の糸が切れたのか、さっきまでは露ほども感じなかった恐怖心が、悠二の精神に戻ってくる。

（シャレになんないって！ 最後の針とかはもう完全にラッキーだったし！）

改めて、シャナや名護がどれだけ恐ろしい戦いをしているのか実感

した。

だが、まあ。

(なんとか、なった)

悠二は生き延びたという事実を噛み締めた。

「悠二くん!」

「坂井悠二」

頭上から軽い声と重い声が同時にかかる。

いつの間にか、シャナとキバーラが物陰から出てきていた。

シャナは無表情のまま無言で悠二を睨み、代わりにキバーラと、彼女の首にかかるアラストールが、声を発す。

「本当に貴様は……。今回はいくらなんでも綱渡りが過ぎるぞ」

「もっつ、悠二くん無茶苦茶よ！　イクサなんか持ち出して！  
死ぬ一歩手前だったかも知れないのに！」

「酷いなあ、ああするしかなかったんだし、多目に見てくれよ。  
それに持ち出したのは僕じゃないって痛い！　キバーラ、額に夕  
ツクルは止めてくれ、地味に痛い！」

「ふえ、う、うわあああああん！」

相当心配だったのか、とうとうキバーラは泣き出してしまった。

「キ、キバーラ？」

「えぐつ、無茶しないでよう……。わたしにとっては、シャナちゃ  
んも、悠二くんも、いなくなっただけ欲しくないんだからあ……。」

「……うん、ごめん」

非常にいたたまれなくなり、悠二は片手で泣きじゃくるキバーラを  
よしよしと宥めた。

「ゆっ、じ」

新たにかかった声は、シャナのものだった。

だが、名前を呼ばれただけで、シャナは喋ろうとしない。

「……………」

「……………えっと」

「……………」

「取り敢えず……………勝ったよ」

シャナは溜め息をつき、毒のせいか力無く、悠二の頬をぺちっ、と叩き、呟くように言っ。

「……………ばか」

続けて、

「……あり、がとう」

シヤナのぎこちない感謝の言葉。

だが悠二はそれだけで、この戦いでの疲労が帳消しになるような気がした。

「あはは………。いつも助けて貰ってるからね」

たまには、カッコいいと見せないと。

冗談っぽく言って、悠二はようやく立ち上がる。

今ので、本当に緊張が取れたらしい。

つくづく都合のいい精神だなと、悠二は自嘲する。

「さ、そろそろ行くつ。出口探さなきゃ」

言って、悠二はまたシャナを背負おうとする。

「……っ、あ、あとで…覚えてなさい、よ」

「はいはい」

顔を赤らめながら、悠二の背中に身を預ける。

悠二はその体勢をさして気にするでもなく（このあたり、彼はやはり鈍感である）、この空間からの脱出口を目指し歩き始め、泣き止んだキバーラも後に続く。

自分にとってはあまりに恥ずかしい状況下に、シャナは悶々とする羽目になっていたが、

（……あつたかい）

同時に、悠二の背中から伝わる熱　　近距離での触れあいを、心地よく感じる自分もいた。

もう何がなんだか。

奏夜がおかしくなったり、ファンガイアと戦うことになったり、自分のミスで拐われたり。

悠二が、助けに来てくれたり。

「……………」

イクサの力が無ければ、悠二はあの三体のファンガイアを倒すには至らなかった。

これは事実。

だが、イクサの力だけであの三体のファンガイアを倒したのではないのも、また確か。

人間は力を手に入れても、それをすぐに使いこなせるわけではない。



力を使うに足る、覚悟が要求されるのだ。

悠二の場合、覚悟で経験不足を完璧に埋めていた。

場違いだとわかっているながら、シヤナは思う。

（ 悠二は、ちゃんと強くなってる ）

それだけでも、頬が緩んでしまうのに、

『 キミがいなくなったら、守れなかったのと変わらないじゃないか  
』！

彼の覚悟が、少なくとも今は、自分に向けられている。

それは、何だか凄く、

（ 嬉しい ）

温かな気持ちで、心を満たしていく。

悠二がシヤナのお礼で立ち上がったように、彼女もその気持ちだけで、毒の痛みが和らいでいくような気がした。

「はっ！」

名護は当て身で、自分に襲いかかってきた男性を気絶させる。

「意外だな。操作されているのだから、気絶させても当人の身体を省みず、またすぐ立ち上がらせる、くらいのことはしそつだと思っ  
ていたのだが」

「そりゃそつさ。  
操る人数と操作有効範囲をここまで広くしちまうと、どつやっても  
操作パターンが単純になるんだよ。  
自在法も魔術も、そこはかわらねえ」

マルコシアスの説明によれば、相手は多少パワーが上がってるだけで、普通の人間。

変身せずとも、足止めは十分に可能である、とのことだった。

「アンタも意外とドジねー、自分の武器無くすなんて」

マージョリーが半ば呆れ、半ば同情するように言って、また一人操られた人間を気絶させる。

「無くしたんじゃない。これはどう考えても盗まれたんだ」

「盗まれたって、あんなもん誰が盗むのよ」

「一つ心当たりがある」

盗まれる機会があったとすれば、あの時だ。

『どうだ？ お前なりの『遊び心』は見つかったか？』

(まったく、私としたことが……)

奏夜が“あの男”の口調で話し出したことに驚き、油断してしまっ  
た。

以前、自分がイクサを盗もうとしたことへの仕返しのもりだろう  
か？

(……一言貸せと言えば、貸しても良かったものを)

癪な話だが、あの男には大きな借りがある。

自分が変わり出したのは、あの男との出会いが始まりだったの  
だから。

名護は溜め息をつきながら、ぼつりと呟く。

「あの男……、奏夜くんの身体で、何か他に悪さをしてなければい  
いが」

「……本来、されなくてもいい心配をされた気がするな」

奏夜は、いきなりそんなことを言う。

操られた人々を撒いて、奏夜とキバットは、状況把握のため、一時この廃屋に隠れていた。

あちこちに家具や木材が打ち捨てられているが、それらも隠れるにはもってこいのオブジェクトである。

そんな場所で、奏夜は何をするでもなく、ただ虚空を見上げていた。

「俺の、せいだ」

一連の話の流れをキバットから聞いた時、奏夜の口から出たのは、罪悪感だった。

「また　関係ない人を巻き込んだ」

「な、何言っただよ奏夜」

キバットが慌てて止めようとするが、奏夜は止まらない。

「だってそうだろ？」

相手はキバを　俺を狙ってこんなことを仕出かした。巻き込んだも同然だよ」

「おい！　んなネガティブスパイラルに入ってる場合じゃねえぞ！　事情が分かったなら、さっさと電波塔に行かねえと！」

「……俺が行って、また誰かを傷つけるんじゃないのか」

ソラトやティリエルみたいに。

奏夜はそれきり黙って、顔を俯かせる。

（……はあ、せっかく悠二たちのお蔭で、立ち直れかけてたのに）

タイミングが悪すぎる。

本当なら引つ張つてでも連れて行きたいところだが、こんな後ろ向きなまま戦つても、負けるだけだ。

キバットは取り敢えず「俺様は見回りに行ってくるぞ」と言い残し、飛び去っていく。

後に残された奏夜は俯いたまま、身動き一つしない。

代わりに意識も朦朧な頭で、思考する。

そうすることしか、冷静さを保てないかのように。

(俺は、周りに不幸を呼び寄せてばかりだな)

自嘲気味に、奏夜は笑った。

いつもの快活なものではなく、それには寂寥が込められている。

(……迷つても仕方がない。起こってしまったことは、もう取り返

しがつかない。人は前を向いて生きるしかない)

わかっている。

そんなことは　もうわかっている。

けれど、

(……割り切れねえんだよ)

あの兄妹のことを思い出す。

知り合いでなければ、まだ良かった。

だが奏夜は、あの兄妹が殺戮を楽しむでない、温かな一面を持っていることを知ってしまった。

(知った上で、その温かさを破壊した)

大切なものを守るために、他者の大切なものを破壊した。



四年分のフィードバックが、一気に押し寄せてきたのだ。

戦うことに迷いが無かったと言えば嘘になる。

それでも、折りはつけていた筈だった。

けれどあの兄妹のことは、奏夜に“自分”を思い出させるには十分だった。

自分、ファンガイアの王、キバ。

その強さは決して、救いを与えるだけではないということ。

自分が愛したもののさえも、破壊するということ。

「……………」

重く淀んだ何かが、心の奥底に沈殿していく。

今動かなければシャナも、恐らくは悠二も危険になる。

二人だけではない。街の住人全員が。

それでも 奏夜は動かなかつた。動けなかつた。

また、何かを壊す。

それが堪らなく怖かつた。

服の袖を握り締め、絞り出すように奏夜は唇を動かす。

「俺はどうすればいいんだよ……」

何をするのが、正しいんだ。

「　　そういつトコは相変わらずだな、我が息子よ」

「えっ？」

奏夜が顔を上げると、そこは廃屋では無かった。

端的に言えば、大都会にありそうな噴水広場だ。

周りには高層ビルが建ち並び、煉瓦敷の地面である。

そこまでなら普通であるが、問題は上だ。

まだ真昼だと言うのに、いつの間にか辺りは薄暗い夜。

しかも、本来真っ黒な夜空があるはずの上空には、まるで鏡合わせの如く、道路が走り、建物が逆さに建っている。

「な  
」

なんだこの場所は。

奏夜がそう言いかけた時、噴水の前に人影があるのに気が付く。

暗くて顔はよく見えないが、身長はさして変わらないから、奏夜と  
同年代だろう。

人影も奏夜に気が付いたのか、こちらを振り向き、歩いてくる。

「やれやれ、お前とは会わないって決めてたんだがなあ……」

「お、おい。アンタ、この世界は  
」

言って、奏夜は心臓が止まりかけた。

光に照らし出されていく人影の姿。

やや古いデザインな水色の背広に、オレンジのネクタイ。

爽やかな印象を与えるセミロングの髪に、端正な顔立ち。

片手には バイオリンケース。

(まさ、か)

枯れそうな声で、奏夜はその人の 自分が最も尊敬する人の名を  
呼んだ。

「……父、さん？」

「よお、久しぶりだな。奏夜」

この有り得ない現象を前にして、男　紅音也は普段通り、人を食ったような笑顔を見せた。

「何で、どうして父さんが……」

「おいおい、どうでもいいだろ、そんなこと。それよりも今は、オシ達の再会を喜ぼうじゃないか」

驚く奏夜への説明を「どうでもいい」で一蹴する音也。

(夢？　けど……)

夢にしては、リアル過ぎる。

今、目の前にいる音也は、容姿も態度も、最後　26年前で別れた時と寸分変わらず同じだった。

ならば、

「……本当に、父さん？」

「ああ、勿論だとも。何だよ、この希代の天才にしてえらい人、  
紅音也の姿を忘れたか？」

くっくっく、と音也は喉を鳴らす。

夢じゃ、ない。

「っ、父さん！」

歓喜が沸き上がり、奏夜は音也に駆け寄る。

「父さんっ、父さん……！」

「ははは、でかくなっ たなあ 奏夜」

音也も嬉しそうに、奏夜を抱き寄せ、背中を軽く叩く。

奏夜の中には、様々な感情が込み上げてくる。

会いたかった、どうしてここにいるの、あれから色々なことあったんだよ、話したいことが山ほどあった。

だがそれより早く、音也が口を開いた。

「が、でかくなつたなりに、悩みもあるみたいだな」

「……………」

無言で、奏夜は音也から手を離す。

「話してみるよ」

「……………」

いいのだろうか。

この人はあれだけ、俺に道を示してくれたのに。



また迷ってるなんて、知られなくなかった。

音也は奏夜の心境を知ってか知らずか、噴水の縁に座る。

「ほら、父親に遠慮なんかするもんじゃないぞ。積もる話もあるだろ?」

促され、奏夜は少し迷ったものの、

「……うん」

小さく頷いて、音也の隣に腰を下ろす。

そして、ぼつぼつと、今までのことを話し出した。

フレームヘイズのこと、“徒”のこと、新たにできた守りた  
い人達のこと、自分が殺した兄妹のこと。

すべてを聞き、音也は「そうか」とだけ返した。

頬を軽く搔いて、音也は口を開く。

「なあ奏夜、正義って何だと思う?」

「えっ?」

唐突な質問に、奏夜は戸惑いながらも答える。

「えっと、『正しいこと』?」

「そう。『正しいこと』だ。

だが『正しいこと』って色々ある。

それこそ、人やファンガイアの数だけな。こっちでは正しいってことが、あっちでは正しくないなんてことは、世の中ザラにある話だろう?」

そうでなきや、善や悪なんて言葉は広辞苑に載らない」

はあ、と奏夜は適当な相槌を打つ。

正しさは形を変える。それは確かに当たり前のことで、奏夜にもわかってのことだ。

音也は、何を言いたいのだろうか。

「要はそれと同じなんじゃないのか？」

「同じって、言われても」

「その兄妹とやらの正義は『願いのためなら、人間の命を省みない』こと。」

お前の正義は『人間とファンガイアの命』を守ること。相容れない正義がぶつかるのは必然。歴史はそういう争いの繰り返しだ。

そしてお前は勝ち、相手の正義を打ち砕いた。自分自身の正義を貫くためにな」

それも、わかっている。

だが、理解出来ても、許容することが出来るとは限らない。

だから　　こんな気分になるのだ。

「お前の性格上、落ち込んでしまっるのはわかる。だが、それで落ち込むのは相手に失礼じゃないか？」

「えっ……？」

予想しなかった言葉についていけず、奏夜は虚を突かれたように声を漏らす。

構わず、音也は続ける。

「正義と正義のぶつかり合い、これは最早回避不能な世界の真理だ。どうにも出来ようがない。

なら、自らの正義を貫き、相手の正義を打ち砕いた以上、お前はお前の正義を貫き続けなきゃならない。でなきゃ、相手に失礼じゃないか」

「失礼」

「お前が迷ったら、何のためにその兄妹は死んでしまったんだよ。

お前が自分の正義を放り出したら、その兄妹の正義は何のために打ち砕かれたんだよ。

そうだったら、兄妹の死にも意味がなくなっちまうだろうが」

「……う」

畳み掛けられる音也の言葉。

奏夜は、ある種の不快感に苛まれた。

見方がひっくり返り、価値観がぐちゃぐちゃになる。

だが同時に、自分の中の何かが組み変わっていく上で、奏夜は自分を縛り付けていた枷が、ゆっくりと外れていくのを感じていた。

その様子を良い傾向と取ったのか、音也は薄く笑う。

「正義を語るなら、砕いた相手の正義の重さを、背負う覚悟を持たなきゃならない。それを放棄するのは、優しさじゃなくて甘さだけ？」

優しさではなく甘さ。

慈悲ではなく偽善。

厳しくも優しい言葉を、音也は悩める息子に掛ける。

「小難しい話や禅問答じゃねーんだ。問題は、自分の正義を貫くことが出来るか、出来ないかだろう。」

もう一度よく考えてみるよ奏夜、答えはもっと単純だ。それに、「俺はもう答えを教える。」

お前の正義は お前が戦う理由は何だ？

「……俺は」

躊躇いがちに、だがはつきりした声音で、奏夜は口を開く。

かつてと同じ覚悟を。

歩むと決めた道を、再び選ぶ。

「俺は誰かの心に流れる音楽を守りたい」

「わかってるじゃないか」

心底嬉しそうに、音也は奏夜の頭をがしがしと撫でる。

「父さん　ありがとう」

「いいさ、このくらい安いもんだ。」

お前は、俺の友達が残したものを守ってくれたしな」

最後に付け加えられた言葉に、奏夜は首を傾げた。

「何のこゝろ？」

「ああ何でもない。ただの独り言だ。さ、そろそろオレも行かなきゃな」

何処に行く、とは聞けなかった。

「……父さん」

だから奏夜は、悲しみを笑顔の下に隠す。

せめて最後くらい、安心させたかった。

自分の強さを、見せたかった。

「いつか、またね」

言って、奏夜が手を伸ばす。

「ああ、またいつか」

音也もまた笑顔で、伸ばされた手を握り返す。



二人の手が触れ合った瞬間、周囲の風景を光が包んだ。

目を開けると、そこは元の廃屋だった。

「……おおっ」

意味不明な呟きを漏らし、奏夜は立ち上がる。

あの噴水広場は無く、道路の浮かんでいた空は、ただの老朽化した天井だ。

勿論、音也の姿もない。

「……っはは、そっか。そりゃそうだよな」

少しだけ落胆し、握手したはずの右手を見る。

何故か、温かみを感じたような気がした。

「……………」

ぎゅっと、奏夜は右手を握り締める。

「うん」

強く頷いた奏夜の目から、迷いは消えていた。

「奏夜、敵の姿は無かったぜ……………奏夜？」

見回りから戻ってきたキバツトが、右手を見たまま微動だにしない奏夜を、いぶかし気に見る。

「奏夜、どうした？」

「……………何を悩んでるんだ俺は」

「は？」

驚くキバットをよそに、奏夜は笑う。

いつも通りの、人を食ったようで、だが力強い笑顔を。

「キバット。そのファンガイアの居場所は電波塔だったな」

「へ？ あ、ああ」

「よっしゃ、じゃあぼちぼち、反撃するのでしょうか」

床に置いてあったブラッディローズを拾い上げ、奏夜は立ち上がる。

「……急に、前向きになったな」

「何を言う、俺はいつだって前向きな」

数分前のお前を見せてやりたいよ。

キバットはやれやれと首を振った。

(何があつたか知らねえけど……)

キバットの口角が、嬉しさにつり上がった。

(立ち直つたみたいだな)

キバットはテンション高く、周囲を飛び回る。

「わはは、いいねいいね!

いつもの奏夜らしくなってきたじゃねえか!」

「おおともよ、ついでに、このラクーンシティ状態を打破する妙案も浮かんだ。

チエックメイトはもう目の前さ」

一言一言に、説得力がある。

まるで、奏夜が願うことが全て現実になるかのようだ。

（そうだそうだ、この奏夜だよ！）

キバットは興奮に打ち震える。

（落ち込みから立ち直った奏夜は　　）

ハンパなく強いのだ。

「よっしゃあ！　　そうと決まれば、俺様もキバツちゃうぜ、親友  
！」

「ああ、期待してるぜ相棒！」

「こうして、ファンガイアの王は、再び戦場に足を踏み入れる。

自らの正義を、貫くために。

「キバーラ、何か見つかりそう？」

「ううん。出口はおろか窓も見つかんないわ」

「そっか……参ったな」

シヤナを背負ったまま、悠二は唸る。

あれから30分は歩き詰めだが、未だにこの階層から抜け出せない。

「わざわざ逃げ道を用意するとも思えぬ。キバか白騎士か、『弔詞の詠み手』があのでファンガイアを討滅するのを待つしかあるまい」

「結局、八方塞がりか……」

いや、八方塞がりなのはまだいい。

問題はシャナの病状だ。

「シャナ、大丈夫？」

「っはあ……うん、まだ、だいじょうぶ」

気丈にも笑うシャナだが、その息づかいが更に荒くなっており、熱も上がっている気がする。

仮に誰かがあのファンガイアを倒せても、それまでシャナが保つかどうか。

「せめて、安全なところで休ませてあげたいんだけどな」

悠二がそう呟いた時だった。

「まさか、人間如きがここまでやるとはな」

「なっ!？」

いつの間にか、景色が変わっていた。

のっぺりとしたタイル状の床に、空と送信用のパラポラアンテナが見えるのを見ると、ここは建物の屋上なのだろう。

そして、アンテナの傍らには、蜂を模した異形、ヘルホーネットフアンガイア。

「ミステスと言えど、ただの子供だと思っていたが……我が分身を退ける力を持っていようとはな。舐めていたわ」

ヘルホーネットフアンガイアは、悠二に敵意ある視線を向ける。

眼光だけで人を射殺せるなら、こっぴつ目を言うのだろうと、悠二



は思った。

その危険信号は、シヤナ、アラストール、キバーラにも広がっていき。

(ねえ、これってカーナリーまずい状況じゃないかしら?)

(やむをえんな……坂井悠二、まだ戦えるか?)

(わかんない。でも、できるだけやってみる)

せめて、キバか誰かが来るまで持ちこたえなければ。

シヤナを床に下ろし、悠二はイクサナツクルを構える。

「遅い!」

悠二が変身するよりも早く、ヘルホーネットファンガイアのエネルギー弾が、三人を吹き飛ばす。

「う、わあああ!」

「つぐ!?!」

「きゃー!」

床が爆発し、悠二、シャナ、キバーラは地面を滑る。

その拍子に、悠二の手から零れ落ちたイクサナツクルを、ヘルホーネットファンガイアが踏みつける。

「成る程、イクサの力を持っていたというわけか。なかなか楽しませてくれる……だが、それもこれまで」

「う、ぐっ……」

痛みに呻く悠二に、ヘルホーネットファンガイアが手を翳す。

魔皇力が収束され、人間を消し去るには十分な威力が、ヘルホーネットファンガイアの右手に集まっていく。

「おとなしく捕らわれていれば良かったものを。もういい、人質に

ならず、私の邪魔をするのなら、貴様らにもう利用価値はない」

(まず、い……)

身体が言うことを聞かない。

イクサナツクルもない。

間違いなく、やられる。

「悠二い！」

シヤナが悲鳴にも近い叫びを上げる。

だが、攻撃の手が止まることは無かった。

「さらばだ。奇怪なミステスよ」

( シャナ……みんな、ごめん )

最後の最後まで、彼は自分の大切な人達のことを想っていた。

全てを奪い去る紫色の弾丸が、悠二に向けて放たれる。

……。

……あれ？

悠二は、いつまで経っても痛みが来ないことを不思議に思った。

恐る恐る、目を開ける。

辺りには硝煙が立ちこめているが、身体は五体満足だ。

(生き、てる?)

どうして、と考えるよりも早く、頭上から声がかかる。

「おいおい、主役の登場を盛り上げ過ぎだろ」

気が付けば、自分の目の前に、見覚えのある後ろ姿があった。

セミロングの茶髪に、着崩した黒いスーツ姿。

右手には ヘルホーネットファンガイアの攻撃を防いだであろう、黄金の魔剣、ザンバットソード。

「ま、その心遣いには感謝する限りだがな。ここまでデッドオアアライブを争わなくてもいいだろうがよ」

人影はザンバットソードを肩に担ぎ上げ、シャナと悠二を振り返った。

「そうだろ？ 平井、坂井」

『 つ！？ 』

二人に笑いかけるその顔は誰であろう、紅奏夜その人だった。

「 せ、先生！？」

「 奏夜！？ 」

二人の驚愕をよそに、奏夜は普段通りに気さくさをもつて接する。

「あはは。変な顔だなー、お前ら。何か良いことでもあったのかい？」

言いながら、奏夜はシャナの頭を撫でる。

「悪かったな、平井。少し遅くなっちまった。

見たところ、毒か何かみたいだが、まあ安心しろ。俺が何とかしてやる」

「え、あ……」

普段との変わらなさに、シャナの頭から疑問が吹き飛んでしまう。

なんでここににいるのか、なんて質問が馬鹿馬鹿しく思うくらいに、自分の頭を撫でる手からは、温かな安心感が伝わってくる。

次に奏夜は、悠二にそつと触れた。

奏夜の手が輝き、光が悠二へと移動する。

「あ。傷が……」

「応急処置に過ぎないが、歩くくらいは出来るだろう。  
シヤナとキバーラ連れて下がってる」

「先生……先生は」

「おっと」

言いかけた悠二の口に人差し指を当てる奏夜。

「質問はあると思うが、今は全部あと回しで、な？」

言いつつ、奏夜は悠二の頭にも手を乗せる。

「頑張ったな坂井。まさか平井をお前だけで助け出しちまうとは思  
わなかった。あとは俺に任せて、ゆっくり休んでろ」

「は、はい……」



安堵感を与える笑顔に、悠二もまた何も言えなくなってしまう。

「さあて、と。随分暴れてくれちゃったみたいだなあ？」

立ち上がった奏夜は、ヘルホーネットファンガイアにザンバットソードの切っ先を向ける。

混乱から抜け出したヘルホーネットファンガイアは、不敵な笑みを浮かべる。

「ようやくお出ましか」

「この街で暴れる以上、覚悟は出来てるよな」

「ふん、この街がどうなるかと知ったことではない」

ヘルホーネットファンガイアの右手から毒針がせり出してくる。

「貴様を殺せさえすればな」

「そうか。……なら遠慮はいらない、なッ！」

踏み込みから、奏夜は一気に距離を詰める。

ザンバットソードが振りかぶられ、刃の軌跡がヘルホーネットファンガイアを捉えた。

「あつ、先生、ダメだ！」

悠二が叫ぶが、もう遅い。

ヘルホーネットファンガイアはザンバットソードの射程圏から消え、奏夜の後ろに回り込んでいた。

シヤナと戦った時と同じ、超高速だ。

「貰ったぞ！」

毒針が煌めき、奏夜の背中に突き立てられる。

「ふーん、成る程。そういう能力か」

奏夜は後ろ向きのまま、毒針は避けた。

「なっ!?!」

驚くヘルホーネットファンガイアの間を突き、回り込んで後ろを取る奏夜。

だが、その標的はヘルホーネットファンガイアではなかった。

ヘルホーネットファンガイアの後方 “何も無い虚空” に向かって剣を振り下ろしたのだ。

「ぐあっ!?!」

何も無いはずの場所から呻き声が発せられた。

虚空が歪み、そこから何と、“二体目のヘルホーネットファンガイア”が現れた。

「バ、バカな！　貴様、何故私がここにいと……」

斬りつけられた箇所を抑え、ヘルホーネットファンガイアが吠える。

同時に、さっきまで戦っていた一体目のヘルホーネットファンガイアが霞のように景色へ溶けていった。

「テンプレートなセリフをありがとう。だが俺に、そんな子供騙しは通用しない」

「！　い、今の一瞬で、私の『破壊の音楽』を、見切ったと言うのか！？」

「ああ、見切るほどのもんでもないさ。坂井も気づいてたみたいだしな」

すっ、と奏夜はヘルホーネットファンガイアの透明な羽根を指差す。

「お前の能力は超高速じゃない。その羽根を摺り合わせることで発生する音波とリズムで、相手の脳に暗示をかけ、方向感覚や距離感、果ては視覚情報を支配することだ。

さっきの超高速も、その応用テクニクに過ぎない」

つまり、今まで見えていたヘルホーネットファンガイアは、シャナや悠二の認識を惑わせて、あたかも『そこにヘルホーネットファンガイアがいる』と認識させることで生まれた幻覚。

本物もまた、『そこにヘルホーネットファンガイアはいない』という暗示をかけて姿を消し、背後等から攻撃。

幻覚が、本当に攻撃しているように見せていたのだ。

「この電波塔に呼び出した理由も説明がつく。このデカイパラポラアンテナは、認識操作の音波を拡大するにはもってこいだ。

魔皇力を広範囲に伝達させ、街中の人間を操作することも出来る。

ま、直接操るわけじゃないから、単純な命令しか下せなかったみたいだけだな」

「し、しかし、タネが分かったとしても説明がつかぬ！  
貴様は何故、私の暗示が効かんのだ!？」

「いや？ バツチリ効いてるぜ？ さっきのさっきまで、俺にはお前が超高速したように見えていた」

「ならば……」

「だから言っただろ。“俺”には効かないってな。  
例え認識をズラしても、お前が奏でる醜い『心の音楽』だけは明確にお前の位置を覚えてくれる。  
いくらなんでも、第六感までは騙せねえだろ？」

「そ、そんな感情論如きで私の『破壊の音楽』が破られたと言っのか!」

「信じないのは勝手だが、俺がお前の能力を破っているのは事実だ。  
何なら、もう一度試してみるか？」

ぐっ、とヘルホーネットファンガイアは押し黙る。

片や奏夜は、ヘルホーネットファンガイアに向けて、指を三本立てる。

「お前の罪状は三つだ。

一つ、王の代行者への反逆。

二つ、何の罪もない街の人々を戦いに巻き込んだこと。

そして三つ」

奏夜は一気に声の調子低くする。

「この俺の前で、人を幸せにするためにある音楽を  
不幸せにするために使ったことだ」

ヘルホーネットファンガイアを鋭い眼光が貫いた。

「許せないな。てめえ、音楽を何だと思ってやがる？」

奏夜の瞳は、燃えるような激情に満ちていた。

反抗心を食い尽くすような威圧感、その場にいる者全てを畏縮させる。

刺すような圧力に、大気が震えているような錯覚さえ覚える。

それは紛れもない　　シャナと悠一も初めて見る、奏夜の“怒り”  
だった。

「き、貴様　！」

ヘルホーネットファンガイアもまた、奏夜の気迫に吞まれていた。

（なんだ、こんな、こんな完全なファンガイアでもない紛い物の王に、何故私が恐怖しなければならない！？）

有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない有り得ない！



こんな脆弱な肉体のどこに、こんな力があるのか、理解できなかった。

「貴様、何者だ！」

そんな意味のない質問に、奏夜はシニカルな笑みを作る。

「では、改めて名乗らせてもらおうか」

奏夜はザンバットソードを消し、声を張り上げる。

どこか誇るように。

そうある自分自身に、何の後悔もないように。

「俺は紅奏夜」

ゆっくりと、奏夜は右手を掲げる。

「またの名を、ファンガイアの王、キバ！」

金色のコウモリ、キバットバット三世が飛来し、奏夜の右手に収まる。

「行くぜキバット！」

「ああ、キバツて行くぜ！                      ガブツ！」

キバットが左手に強く噛み付く。

キバットの牙を介し、奏夜の体内にアクティブフォースが流れ込み、顔にはステンドグラスの紋様が浮かび上がる。

腰に鎖が巻き付き、赤い止まり木『キバットベルト』に変わった。

キバットを前に突き出し、奏夜は叫ぶ。

「変身！」

キバットがベルトに止まり、奏夜の身体を光の鎖が包む。

鎖が弾け飛んだ時、そこに奏夜の姿はなかった。

赤いカラーリングのボディに、ルシファーマタルに封印の銀『トラ  
イシルバニア』を加工した甲冑『キングシングレット』。

身体を血脈の如く流れる魔皇力供給器官、『ブラッドベッセル』。

身体中に巻き付く封印の鎖『カテナ』。

右足に装着された地獄の門の名を冠す拘束具『ヘルズゲート』。

コウモリを模した仮面『キバ・ペルソナ』が輝き、変身完了。

人間とファンガイアを守る戦士、仮面ライダーキバの姿が、そこにはあった。

シャナと悠二は、驚愕に息を飲んだ。

「……………うそ」

「先生が……………」

『キバ！？』

キバは一瞬だけ二人を振り返り、すぐにヘルホーネットファンガイアに向き直る。

今までそうしてきたように、王の判決を告げた。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

次回、仮面ライダーキバ・BLAZING/BLOOD!

「今はこいつを倒すのが先ね！」

「俺の音楽を聞け！」

「隠すことないじゃないですか」

「これからもよろしくな」

【第十六話・開演Vibノキバの正体】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を、解き放て！

## 第十五話・再演／天才の贈り物・Bパート（後書き）

・悠ニイクサが、図らずも音也イクサみたいな戦い方になりました。ブロウクンファンングはシンプルですが好きな技です。

・奏夜、遂に明かしちいました。  
今後の展開の都合上、そろそろ二人には明かさないといけなかった  
ので。

・奏夜と音也が話した場所……実はデイケイド第一話で土と渡が話した場所です。特に意味はありませんが、小ネタだと思ってください。多分気付いた人いないと思いますし（苦笑）

次回更新でオリジナルストーリーは終わりますんで、またお楽しみに。

第十六話・開演vib/キバの正体(前書き)

「みんな知ってるか？」

仮面とは、顔を覆い隠す衣類のことであり、転じて正体や本性を隠す意味合いがある。

また、とある民族文化では、仮面に象られた神、精霊、動物に成りきり、その力を借り受けるとも信じられていた。

ちなみに、キバの仮面『キバ・ペルソナ』は、その力を知る者を震え上がらせる畏怖の象徴なんだぜ。頭が高いっ！」

キバツトバツト三世



## 第十六話・開演Vib/キバの正体

「はあっ！」

両手を大きく広げる独特の構えのまま、キバはヘルホーネットファンガイアに特攻をかける。

「くっ！」

もう認識操作は無意味と悟ったのか、ヘルホーネットファンガイアもまた肉弾戦を取ったらしい。

キバのジャンプからの踵落としを腕で防御する。

「甘いつ！」

防御された右足を支えに、キバは空中で、残った左足をヘルホーネットファンガイアの顔面にヒットさせた。

「う、ぐおっ！」

よるめくヘルホーネットファンガイア、着地したキバはすかさず、ヘルホーネットファンガイアの身体に拳を次々と叩き込んでいく。

ガガガッ、とパンチの音が連なり、比例してダメージも蓄積されていく。

「せいっ！」

フィニッシュにキバは、ヘルズゲートの装備された右足での回し蹴りを放つ。

「いっぶッ！」

肺の空気を吐き出しながら、ヘルホーネットファンガイアはキックの勢いに負け、アスファルトの地面に沈む。

「っしゃ！ 一気にキメつか！」

「あつ、先生待ってください！」

ウェイクアップフェッスルに手を伸ばすキバを、悠二の声が止める。

「倒す前に、そいつからシャナの解毒方法を聞き出さないと！」

「えー、だって今必殺技チャンスじゃんかよー」

「ぶざけてる場合じゃないです！ とにかくトドメは待ってくだ  
さいー！」

「しかし物語の尺の都合上、早めの決着もやぶさかではないだろう。  
何よりもまず、俺が疲れるか疲れないかが大切だ」

「健康状態より人命を優先しろおー！」

悠二、魂のツッコミである。

何気にこれが、キバ状態の奏夜への初ツッコミだった。

キバの方もまた、シリアスなキャラを被る必要が無くなったので、  
奏夜本来のキャラ全開である。

キバは「やれやれ、リクエストの多い坊ちゃんだ」とぼやき、ウエ  
イクアップフェッスルをしまう。

無論、キバとしても解毒云々のことはわかっていたので、さっきのは冗談である。

「じゃ、こいつがいいな」

ウェイクアップフェッスルの代わりに、緑色のフェッスルをキバツトに吹かせた。

『バツシャーマグナム！』

空から飛来したバツシャーマグナムを右手でキャッチし、キバは『バツシャーフォーム』へとフォームチェンジ。

「さて、さっさと解毒法を読み取るとしますか」

バツシャーマグナムを構え、キバはヘルホーネットファンガイアを凝視する。

バツシャーフォームの能力は遠距離戦だけではない。

緑色に染まった仮面『エメラルドレンズ』は4フォーム中最高の視力を持ち、敵の観察力にも優れているのだ。

キバの視界が、相手の全てを見透かしていき、やがてヘルホーネットファンガイアの一点に照準を合わせる。

「そこだッ！」

バッシュアーマグナムのフィンが回転し、射出されたアクアバレットは、ヘルホーネットファンガイアの右腕に装着された針を弾き飛ばす。

「っ、しまった！」

宙を舞った針を、キバは即座にキャッチし、悠二へ放った。

「その針刺して、平井を解毒しろ」

「で、でもこれ、毒針なんじゃ……」

「毒を使う者は、解毒の術を常に持っていないてはならない。つまり、ヤツの中には必ず免疫成分が存在する。あいつが、あいつ自身の毒で死なないようにな」

いつもの授業のように、キバは言葉を繋いでいく。

「さっきの観察で、ヤツの体内にある免疫成分もまた、その針から分泌されているのはわかっている。外部から衝撃を受けた時、ほんの少しだけな。さっきのオレの攻撃で、その針にはもう免疫成分しか残ってはいない」

悠二は舌を巻く思いだった。

たった一瞬で、キバはそれだけのことを理解し、行動に移している。

(やっぱり……先生はキバなんだな)

真実を改めて自覚し、悠二はシャナの解毒作業に取りかかる。

横目でそれを確認し、キバはバツシャーマグナムのトリガーを引く。

「ハッ！」

寸分変わらず、アクアバレットはヘルホーネットファンガイアへ吸い込まれていく。

「ぬうつ！ 舐めるなよキバ！」

着弾したアクアバレットにも怯まず、ヘルホーネットファンガイアは残った左腕の針を発射する。

「チッ！」

地面を転がることで針を避け、体勢を瞬時に立て直し、バツシャーマグナムを撃つ。

片やヘルホーネットファンガイアもまた、キバの攻撃を寄せ付けず、針による反撃を繰り返す。

キバとヘルホーネットファンガイアの戦いは、平行線を辿っていた。

「ハハハ！ 最初の勢いはどうしたキバ！」

ヘルホーネットファンガイアの嘲りにもキバは動じない。

バツシャーマグナムを撃ち続けるだけだ。

「クツクツク、話す余裕も無いか？」

だとすればしめたものだ。

遠距離戦は、ややこちらが有利。

このまま長丁場に持ち込めさえすれば、いずれは、

「油断し過ぎだよ」

キバが仮面の下で笑うのとほぼ同時に、解毒を終えたシャナがヘル



ホーネットファンガイアの背後に回り込んでいた。

「なっ!?!」

ヘルホーネットファンガイアが青ざめる。

どうにか警殿遮那による斬撃は免れるが、

「だあっ!?!」

回避した先にあつた、シャナの回し蹴りは防げなかった。

蛙を踏み潰したような呻き声をあげ、ヘルホーネットファンガイアは数メートル床を転がり、地に臥す。

着地したシャナは、隣に歩み寄ったキバの仮面を見上げる。

その下にある表情は伺えないが、なんとなく笑っているような気がした。

「……いろいろ言いたいことはあるけど」

シヤナは贅殿遮那を構え直す。

「今はこいつを倒すのが先ね」

「よくわかってるな」

言いつつ、キバは新たに、二本のフェッスルをサイドケースから取り出した。

「片付いたら、きっちり全部説明してもらってから」

「ああ、そのつもりだよ。なんならコーヒーもお付けしましょうか、お客さん」

「コーヒーは好きじゃない。それよりも、一回殴られることは覚悟しときなさい」

「手厳しい」

大袈裟に肩をすくめて、キバは二本のフェッスルをキバットにくわえさせる。

『ガルルセイバー！ ア〜ンド、ドツガハンマー！』

青と紫の彫像が現れ、キバの左腕、胸部と融合する。

キバフォームをベースに、左腕にはガルル、胸部にはドツガ、右腕にはバツシャーの力が宿る。

四位一体の形態、ドガバキフォームだ。

「さあて、一気に終わらせるぜ、乗り遅れんなよ！」

「そつちこそ！」

何処か余裕のあるやり取りを交わし、二人は強く地を蹴る。

「くっ！！」

敵は二人。どちらを迎え撃てばいい？

今まで幻覚により、圧倒的な勝利を修めてきたヘルホーネットファンガイアにとって、これは普段有り得ないことだった。

その一瞬の逡巡が、決定的な隙を作る。

「フンッ!!」

ドッガハンマーのスイングが、ヘルホーネットファンガイアの腹部に叩き込まれる。

ダメージに呻く暇も与えぬまま、キバはバツシャアの能力を使い、地面を覆う水面、アクアフィールドを展開する。

「そらよっ!!」

アクアフィールドを滑るように移動するキバ、右手のバツシャーマグナムから、バンバンバンッ、と連なつた発射音が鳴り響く。

「ぐ、あっ、き、貴様ア　　!!」

逆上したヘルホーネットファンガイアは防御を捨て、キバへと突進してくる。

「冷静さを欠いたら、勝負は負けだぜ？」

「っ!？」

キバが言い終わるより早く、シャナが上空から怒涛の勢いで、贄殿遮那を振り下ろす。

「はあっ!！」

鋭い剣閃は、ヘルホーネットファンガイアの片翼を切り落とした。

つんざくような悲鳴を上げるヘルホーネットファンガイアに、シャナは不敵な笑みを向ける。

「暗示が効かなくなった途端これ？ 基礎からやり直してきなさい」

「くっ、っ……!！」

暗示にばかり頼ってきた報いが、ここにきて表面化していた。

「お、のれえ……!!」

ヘルホーネットファンガイアは屈辱に齒噛みする。

激情のベクトルを向けられたキバはそしらぬ顔で、ゆっくりとアクアフィールドに右手を浸す。

「さて、化学は専門外だが、ここで特別授業といこう」

「……?」

指先からドツガの能力である雷の力が、アクアフィールドを伝っていく。

「化合物を水溶液、または熔融状態として、これに電気を通し、化学変化を起こすことを『電気分解』と言います。」

ではここで問題」

水を分解した場合、生成されるものは何でしょうか？

「　　っ！」

ここでようやく、ヘルホーネットファンガイアは、キバの意図に気が付いた。

慌てて上空に退避しようとするも、片翼のため、飛ぶことができない。

シヤナの攻撃は、このための布石だったのだ。

『正解は』

シヤナとキバが口を揃える。

『水素と酸素』

贅殿遮那から、小さな火の粉が弾けた。

大気を震わせる轟音 と共に、屋上は爆炎に包まれた。

「が、は……！」

吹き飛ばされることはどうにか避けられたものの、ヘルホーネットファンガイアのスタンドグラスのような外皮には、あちこちにヒビが入っている。

水素爆発によって再び生まれた水を被り、ヘルホーネットファンガイアは膝をつく。

「し、信じがたい連中だ……はあっ、まさか、こんな、自分たちまで吹き飛ばすような爆発を……」

自分がこのザマだ。



相手も無事ではいまいが……。

そう、ヘルホーネットファンガイアが考えた時である。

『WAKE・UP!!』

粉塵と硝煙を隠れ蓑に、キバとシャナが飛び出してきた。

「なあっ!?!」

バカな。

あんな爆発の後で、すぐ攻撃に転じられるわけがない。

しかも、二人はまったくの無傷。

混乱するヘルホーネットファンガイアだが、キバとシャナの背後  
煙の中の一点が紅く輝いているのに気が付く。

「僕が持ってたものは、イクサだけじゃないんだよね」

そこには、いつの間にか悠二が立っていた。

火除けの指輪『アズユール』の結界を張り巡らせて。

「ハアアーツ!!」

「っだあ！」

事態を理解すると同時に、キバの『ダークネスムーンブレイク』とシヤナの炎剣が炸裂した。

「が、ぐう、く、おのれえ、キバああああアアアア！」

聞くに耐えない絶叫が、ヘルホーネットファンガイア最後の言葉だった。

ギャオオオオ！

砕け散った身体から飛び出したライフエナジーも、飛来したキャツスルドランが飲み込んだ。

「あ」

「ん？」

「ああん？」

施設前で戦っていた名護、マージョリー、マルコシアスの動きが止まる。

操られていた人々が、急に大人しくなったのだ。

立ち尽くしたまま、だらりと頭を垂れている。

「支配からは、みんな逃れたみたいね」

「っーことは……」

「奏夜くんか『炎髪灼眼の討ち手』が、やってくれたようだな」

名護はほっと胸を撫で下ろし、マージョリーも戦い詰めだった身体を伸ばす。

「さて、あとは操られていた全員の混乱を治めるだけだな」

「あー、私がやるわよ。ここにいる理由を刷り込むくらい、封絶の応用で簡単にでき……!？」

マージョリーが言葉を切った。

名護も緩めていた緊張を張り直し、操られていた人々を見る。

「こりゃあ、もうひとオチありそうだなオイ」

マルコシアスがうんざりしたように、グリモアから火の粉を吹き出す。

何かにあてられたかのごとく、操られていた人々が一斉に奇声を上げた。

その様子を、別の三人が屋上から見下ろしていた。

「ど、どうなってるんだ。あのファンガイアは倒したのに」

悠二が見つめる先には、声を上げながら、奇妙な行動に走る人々の姿があった。

ある者は他の人間を殴りつけ、ある者は頭を抱えてうずくまり、ある者は自傷に走り、混沌としか表現できない状況だった。

「まだ、あいつの洗脳が残ってるのかしら？」

「でも、街を包んでた違和感は無いわ。

あの人間達にも、変なところは感じない」

キバーラの推測を、シヤナが否定する。

「いかな。心の音楽が暴走してる」

理解不能な現況に、キバが答えを出す。

「どついうことだ、キバ　いや、紅奏夜」

「今まで強制的に操られてたのが、あのファンガイアが消えたせいで、暴走しちまったんだろつよ。」

普通、魔術はかけた本人が死ねば消えるが……あいつが操ってた脳は複雑な作りだからな。

脳内操作なんて負担をかけられてたときに、コントロールを失って、誤作動を起こすのは当たり前だ」

淡々と説明するキバに対し、悠二の顔は青ざめていく。

「じゃあこのままじゃ……」

「ああ、泣き喚く赤ん坊と同じで、何が起こるかわからないな。マトモな判断が出来ないだろうから、最悪高いトコから飛び降りたり、なんてことも考えられる」

「っ！」

「大変じゃないですか！」

シヤナが焦燥に駆られ、そのまま下へ飛び降りようとする。

だが、キバがそれを呼び止める。

「止めとけ。大方、暴れてる人間を気絶させようとしてるんだろうが、大元の解決にゃならん」

「じゃあどうしろって言うのよ！ 他に何か手があるの！？ 頭の中の誤作動なんて、一人一人診てたら拉致があかないわよ！」

「殴つてどうにかなるもんでもねえだろ。壊れたメガドライブじゃあるまいし。」

ま、ここは俺の出番かな」

危機感など微塵も感じさせない口調だった。

いつの間にか、キバの手には一器のヴァイオリン　ブラッディロ  
ーズが握られている。

「先生、ヴァイオリンなんか出してどうするんですか？」

「要はヴァイオリンの修理や調律チューニングと同じさ。ズレた弦を戻してやればいい。

幸いにも、ここにはあのファンガイアが使ったアンテナもあるしな」

「……まさか、今度はヴァイオリンの音色で人間を操る気なの？」

「ばーか。んなことするかよ。  
街の人達の脳は、あのファンガイアの操作に気を取られてるようなもんだ。

だったら、それ以外のものに目を向けさせればいい。  
“俺達を襲え”なんて負担のかかるものじゃない、もっと楽しいものにな」



つまり、

「俺はただ、演奏をするだけだよ」

シヤナと悠二、アラストールとキバーラが見守る中、キバはパラボラアンテナに、魔力を注ぎ込む。

もっとも、流す音はヘルホーネットファンガイアのような超音波ではないため、キバにとっては巨大なアンプのようなものだ。

「さあ、野外コンサートの時間だ」

ヴァイオリンを顎と鎖骨部分で固定し、右手で弓を弦に添える。

「俺の音楽を聞け！」

次の瞬間には、音楽が全てを支配していた。

拡張されたヴァイオリンの音色が、電波塔のみならず、御崎市全域に響き渡っている。

洗練された技術によって生まれる旋律。  
それが届く対象は、暴走した人も例外ではない。

破壊の音楽により傷を追った心を、優しく包み込んでいく。

「  
「 凄い」

「  
「 うわぁ……」

「  
「 やっぱり素敵だわ、奏夜の音楽！」

「まったく……、とことん“あ奴”を思い出させてくれる」

「これ、ソウヤが？」

「相変わらずの腕だな、奏夜くん」

「まったく、自在法顔負けだぜ」

操られていない者達も、演奏者への賞賛を捧げながら、安らかな音色に聴き入る。

ポロン。

弦を一本弾き、キバは演奏を終えた。

悠二とシャナがもう一度下を見ると、操られていた人々は眠るように倒れていたが、気絶しているだけのようだ。

直に意識を取り戻すだろう。

ブラッディローズを下げ、キバは静かに変身を解除した。

シヤナと悠二を振り返った奏夜は、いつもと同じ　正体を明かす  
前と変わらない、柔らかい笑顔を浮かべた。

「」静聴感謝します」

恭しく、演奏者は鑑賞者に頭を下げる。

その姿に惜しめない拍手が贈られたのは、言うまでもない。

「名護さん、これ、お返しします」

テーブルの上に置かれたイクサナツクルを、名護が懐にしまい、悠二が頭を下げた。

「すみませんでした。勝手に借りたりして……」

「気にするな、今回は状況が状況だ。

それに、盗ったのはキミではないからな」

「俺にやまったく覚えがないんですけどね」

名護の非難がましい目に、奏夜は苦笑いを浮かべる。

自分のそ知らぬところで、犯罪者扱いされるのはさすがに嫌らしい。

「言い訳は見苦しいわよ、ソウヤ」

「ヒャーハツハ！ ネタは上がってるんでえってか？」

「ちょっと、どーでもいいのよそんなことは」

シャナが脱線しかけた話を軌道修正し、奏夜を睨む。

悠二も、いつになく真剣な様子だった。

「何もかも、全部、きっちり、説明してもらおうよ、奏夜！」

「……も」

「先に選択肢潰しておきますけど、『黙秘権を行使します』とか言わないでくださいよ！」

「……坂井、お前最近遅しくなったな」

「ええ、お陰様で！」

シャナと悠二の剣幕は相当なもので、やや奏夜も引き気味である。

戦いが終わり、奏夜、シャナ、悠二、名護、マージョーリー、キバット、キバーラは、人払いが済んだカフェ・マル・ダムールに集まっていた。

人々の混乱は警察の迅速な対応により（『素晴らしき青空の会』が根回ししたらしい）、ひとまず沈静化され、街の住人は元の日常に戻っている。

死者は出ず、こちらの知り合いにも、マスターが「なぜか腰が痛いんだよね〜」とぼやいていたこと以外は、被害ナシである（名護が思い切りばつが悪そうにしていた）。

そして現在、シャナと悠二の希望通り、奏夜にキバやその他諸々のことを説明してもらおうと、こうして審問……もとい集会を開いているわけだ。

「ま、まあ、悠二くんもシャナちゃんも落ち着いて、ね？」

「そーそー、こちらとしてもやむを得ない事情があったりなかったりだったわけで」

キバットとキバーラが二人を宥めるが、逆に火に油を注ぐ結果となった。

「キバーラも知ってたのよね？　　奏夜がキバだって！」

「キバットも何で教えてくれなかったんだよ。言う機会はいくらで

もあつたのに」

思わぬ叱責に、キバットとキバーラはしゅんと頭を垂れた。

「シャナ、坂井悠二、気持ちわかるが落ち着け」

アラストールが諫め、二人は取り敢えず勢いを静めた。

その様子を見て、奏夜が言う。

「アンタは気付いてたみたいだな、アラストール。俺がキバだって」

放たれた言葉に、アラストールは特に動じた様子もなく答える。

「……ふん。今までの貴様とキバを照らし合わせ、答えに至ったま  
でのことだ」

「むー。そんな簡単にバレちゃうもんなー。  
キバと俺を結び付けられないよう、俺はこんなキャラ立てをしてい  
ると言っても過言ではないのに」



嘘つけ。

その場にいた全員がそう思った。

「まあアレだ。

さっき見せた通り、キバの正体は俺だよ。  
んでもって、ファンガイアの王様……の代行人なんだけどな」

「……じゃあ先生は、やっぱりファンガイアなんですか？」

悠二が恐る恐る、といった風に問う。

それは悠二の中で『奏夜が味方なのかどうか』という質問にも似ていた。

「半分だけ正しい。俺はファンガイアと人間のハーフなんだよ」

「ハーフ？」

「そう、だから俺はキバになれる。人間とファンガイア、どちらでもあるし、どちらでもない。それが俺さ」

奏夜は九九でも唱えるかのように、自分の身の上を説明する。

「だから安心していいぜ。坂井」

「えっ？」

「とぼけんなよ。俺の正体知って、俺が味方なのかどうか分かんなくなっちまったんだろ」

見透かされていた。

決まりが悪そうに顔を俯かせる悠二に、奏夜は軽い調子のまま告げる。

「心配すんなよ、俺は今まで通り、お前らの味方だ。

『人とファンガイアの共存』の提唱者が、余所様に迷惑かけられるはずもねーしな」

「じゃあ、なんで私達に正体を隠して来たの？」

今度はシャナが、まっすぐ奏夜を見た。

「やましいことが何もないなら、私達に話してたでしよう？  
私達に話さなくて、『甲詞の詠み手』に話したのだけっておかしいじやない」

「……………」

奏夜は閉口し、頬を掻いた。

ごまかしは利かない。

直感的に、奏夜はその雰囲気を感じ取っていた。

「……………あー」

後ろめたさに苛まれながらも、奏夜は意を決して、重い唇を動かした。

「ぶつちやけ、言うタイミング外してたから」

『……………』

急に静かになったシャナと悠二は、ゆつくりと、奏夜の言葉の意味を理解していく。

段々と、シャナの目元がピクピクと震え出す。

ピシリ、とシャナが触れていた机の一部にヒビが入った。

悠二は破壊衝動にこそ駆られてはいないものの、額に青筋が浮かんでいた。

器用にも、表情はにこやかな笑みのまま。

その場にいた全員が固唾を飲んで見守る中、二人は息を吸い込み、溜め込んだ感情を解放する。

『なんだそりゃあああああ！！』

「なによそれ！ そんな理由で納得できると思ってるの！？」

「さんざん勿体付けた挙げ句、何ですかその微妙なオチ！」

「いやあ、そう言われてもねえ」

「**事実**は**事実**だ。」

はつきり言って、それ以外に理由が思い付かない。

「マージョリーに正体明かしたのも、ほとんど成り行きだしな」

「そうね。私が初めて会った時、ソウヤはキバになってなかったし」

「んでそのままバトルに突入しちまったもんだから、兄ちゃんも仕方なくキバになったって感じだったからなァ」  
「マージョリーとマルコシアスも同意する。」

要するに、奏夜は特に本腰を入れていたわけではなかったが、極力隠すようにはしていたというわけだ。

「私はてつきり、奏夜くんが何か理由があって隠していたと思っていたからな」

「名護に同じ」

「名護さんとお兄ちゃんに同じ」

名護、キバット、キバーラも、あまり気を払ってはいなかったらしい。

『いつか気付く時には気付くだろっ』という雰囲気だ。

「我は一応、それとなく話していたのだがな、坂井悠二」

「うっ……で、でも、あんな遠回しな言い方じゃ分かるわけないだろ」

確かにアラストールは、悠二に奏夜のことを聴かれた際、『キバをどう思っ』と聞かれていた。

だが、そこから答えを連想するのは、シャナでも難しかったかもしれない。

わざとかどうかはさておいて、さっき奏夜の言ったように、キバは奏夜のイメージは、なかなか浮かばないのだ。

『……………はあ』

全てを知り、シャナと悠二は大仰に溜め息をつき、肩の力を抜いた。

「……なんか、どうでもよくなっちゃった」

「だね。いちいち聞いてたら、自分が馬鹿みたいに見えてきたよ」

「おいお前ら、自分から話せとか言っというてそりゃねーだろ」

拍子抜けした、と言外に語る二人に、さすがの奏夜も眉をひそめる。

しかしシャナは、

「だって、全然変わらないんだもの」

「は？」

「キバだっということが分かってても、全然奏夜のイメージが変わらないんだもの」



シヤナの表情は苦笑いには違いなかったが、僅かな喜びのようなものが感じられた。

「うまく言えないけど、キバが奏夜で良かった」

「うん。今考えてみれば、変に納得しちゃいましたよ。先生はいつも、僕達を助けてくれてたんですね」

「助けるって……んな大層なことしてねえよ」

「先生はそうかもしれないけど、僕達からすれば、そういうことなんです。」

シヤナもそうだよな」

「まあ、謙遜されたら、こっちの立場が無いつてくらいにはね」

奏夜に向かって、二人は声を揃えた。

『ありがとう。助けてくれて』

「……………」

どうしよう。

顔にこそ出さなかったが、奏夜はかなり戸惑っていた

(すげー嬉しい)

火照った表情を悟られぬよう、奏夜は顔を逸らす。

「あー。そういうの止めようぜ。辛気くさい」

奏夜は頭を軽く掻いた。

「助けるのなんか当たり前だろ。俺はお前らの担任なんだしさ。だからさ、これから俺がお前らを助けても、礼なんか言つなよ。お前らが俺を助けた時も同じだ。」

そっという理屈抜きで助け合うのが、“仲間” ってもんだろ？

ま、要するに「

席から立ち上がり、奏夜はシャナと悠二に手を差し出した。

「今後ともよろしくってことだ。

“シャナ”、“悠二”」

奏夜が二人の呼び方を変えたことが、全てを物語っていた。

改めて、奏夜は認めたのだ。

二人を、仲間だと。

一緒に戦おうと。

シャナと悠二は、込み上げた嬉しさを隠すことなく、笑顔で手を握り返した。

「うん。よろしく、奏夜！」

「よろしく願います、先生！」

「結局学校はサボっちゃったね」

「しょうがないでしょ。封絶も張られてなかったから、操られてた時の記憶はごっそり抜け落ちちゃってるだろうし。授業どころじゃないわ」

今頃は臨時休校よ、とシヤナが締めくくる。

マル・ダムールからの帰り道。

悠二はふと、周囲の景色に視線を向ける。

警官の姿をちらほら見かけるものの、御崎市からはようやく混乱が

消えつつあるようで、人々がそれぞれの生活に戻ろうとしていた。

あれだけのことがあっても、日常はそう簡単には揺るがない。

悠二はそれがとても頼もしく、そして少し怖くもあった。

(でも今日は、僕も早く休みたいな)

顔にこそ出ていないが、シヤナもそうだろう。

色々、驚くことがありすぎた。

そのほとんどのに、奏夜が絡んでいるのは笑える話だが。

( そついえば )

思考が非日常から日常にシフトし、悠二はふと、あることを思い出した。

( あの時 )

ヘルホーネットファンガイアにシャナが拐われた前、悠二は攻撃を喰らった。

そして気が付いた時には、学校の保健室に運ばれていた。

そう、  
“運ばれていた”。

「アラストール」

「何だ？」

「あの時、誰が僕を保健室まで運んでくれたんだ？」

「……………」

アラストールは一瞬沈黙して、

「紅奏夜だ」

「あ。やっぱり先生だったんだ」

肝心な部分を隠した答えに、あっさり悠二は納得してしまい、以後、この話題を振ることはなかった。

だが、この答えにしろ、嘘は言っていない。

(それに、本当のことを言って、どうなるものでもないだろうな)

あの時交わした会話は、限られた者にしか通じないのだから。

あつたかも知れない会話。

「なるほど。俄には信じ難いが、そうすれば全て説明がつく」

「頭の固いお前にしちゃ、案外すんなり信じたな」

「貴様を最初から理解しようなど思ってはおらんわ。いや、理解

しようとしても出来んだろう。  
なら、最初から全て受け入れてしまう方が利口だ」

「相変わらず気に入らねえな、堅物魔神。ま、話が早いならそれに越したことはない。

オレが時を渡つて“大戦”時代に現れたことと、この身体　ってか、奏夜がオレの息子で、キバだつてことを信じてくれりゃあいい」

「誰か他に、それを知っている者はいるのか？」

「マテイルダには話したぜ。

ヴィルにも話したが、ありや信じてなかっただろうな」

「あれだけ毛嫌いされていれば、それも致し方無かるうな。

あの跳ねっ返りと我が、何度『万条の仕手』から貴様に関わる愚痴を聞かされたか……」

「そついや、ヴィルはどうしてんだ？

てつきり一緒かと思つてたんだが」

「いや、あの子が独り立ちした時に別れたつきりだ」

「独り立ちね……。じゃあ、お前もヴィルもメリヒムも、約束を果



たしたわけだな」

「ああ。だが、我にしろ、『万条の仕手』にしろ、『虹の翼』にし  
ろ、きつかけを作ったに過ぎん。  
それが実を結ぶかどうかは、あの子次第だ」

「ああ、それについてちゃ大丈夫だろ」

「？」

「そいつ 確か悠二だっけ？  
あの嬢ちゃんとそいつが奏でる音楽、お前とマティルダが奏でた音  
楽にそっくりだ」

「……こ奴はまだ、“そういった者”に足る器ではない」

「はっ、過保護者」

「黙れ軟派が」

「……………」

「……………」

「……つくく」

「……ふ、ふ」

「変わんねー」

「変わらん」

「いいことだから、別に構わないんだけどな。……さて、オレはそろそろ行くぜ。」

「約束は守れよ、堅物魔神」

「お前が“大戦”でやったことを、紅奏夜には言わない、だったな」

「頼むぜ。代わりにオレが、あの嬢ちゃん助けるのを手伝ってやる」  
「う」

「……嫌な予感しかせんが」

「気のせいさ、好意はありがたく受け取っとけよ。」

「じゃあ堅物魔神、また会おう」

「ああ、できれば、三度目は無いとありがたいがな……待て、何故我を持つ。ぬおっ!？」  
止める、わざとらしく枕の下に入れていくな  
「!」

こうして、過去と現在を繋ぐ橋は再び閉じた。

だが、全ては起こるべくして起こる。

運命の鎖は再び、紅蓮と牙を引き合わせるのだ。

断章・connect to the negaworld

奏夜が去った後、謎の噴水広場。

音也は噴水の縁に腰掛け、高層ビルを眺めていた。

「別れは済んだようですね」

と、涼やかな印象を受ける声を、音也の耳が捉える。

「別れじゃないさ。あいつは、俺の魂を立派に受け継いでくれた。奏夜がオレの魂を未来に繋いでくれる限り、オレは常にあいつと共にある。」

お前も、そうだろ？」

「……ええ。その通りです」

ビルから零れる光と月明かりが、暗闇から現れた声の主を照らし出す。

音也とそう年齢は変わらない青年だった。

髪は音也と同じ、茶髪。

その下にある表情は物憂げだが、端正な顔立ちも手伝ってか、むしろミステリアスな雰囲気醸し出している。

白いセーターにマフラー。青いジーンズが、背の高さを引き立てていた。

「で？ 今日はどうした。お前が来たってことは、何か計画に狂いが出たのか？」

「ええ。少々……いえ、かなりマズい状況です。

“世界の破壊者”が、九つの世界のライダーを、すべて仲間にしてしまいました」

「世界の破壊者は、全てのライダーと戦い、消えゆくライダー達の歴史を繋ぎ、人々の記憶に刻まなければならない。だったな」

「はい。大シヨツカーからは、アポロガイストが動いているようです。世界の融合は更に加速するでしょうね。

このままでは、『完全なる融合を果たしたこの世界』でさえも、滅びの現象に呑み込まれる可能性があります」

「予断を許さない状況ってわけか……。よし、オレが“あいつ”を見極めてくるとしよう。

“あいつ”に、旅を続ける資格があるかどうかをな」

「お願いします。ではこれを」

青年が手渡したものは、マゼンダと黒でカラーリングされたタッチパネル式の携帯端末だった。

「世界の破壊者にその資格があるなら、これを渡して下さい」

「わかった。オレはどの世界に渡ればいい？」

「彼は今、光夏海の世界の裏側　ネガの世界に向かっています。先回りできるよう手筈を整えますから、その間に準備を整えてください」

「ネガの世界……。確かダークライダーの世界だったな」

「ええ。あなたには仮の身体と『闇のキバ』の力を与えます。今後

のためにも、ネガの世界を支配し、ダークライダーとモンスターを抑えておくべきでしょう」

「悪役を演じろってワケか。嫌な役回りだぜ」

不服そうに、音也は鼻を鳴らす。

「世界の破壊者が使命を全うしさえすれば、世界は再生されます。少し間だけ耐えてください」

「やれやれ、人気者はツライな」

おどけるように言いながらも、音也はシニカルな笑みを作る。

「ま、仕方ないか。他ならぬ“息子”の頼みだからな」

青年は少し驚いたように目を見開く。

無表情だった顔に、僅かな笑みが浮かんだ。

「この世界にいても、あなたは変わらないんですね」

「はっはっは、オレ様の天才性は、世界すら越えるのだ」

青年に見送られ、音也は地面から現れたオーロラの中に消えていった。

残された青年は、ふと夜空を見上げる。

そこには、先ほど奏夜が見たビルの代わりに、無数の青い惑星地球が瞬いていた。

「……………この世界を頼みましたよ。」

紅奏夜 僕に最も近い、仮面ライダーキバ」

次回、仮面ライダーキバ・BLAZING/BLOOD！

「どうしたら奏夜みたいになれるの？」

「料理にや愛情を込めるんだとさ」

「あなたは、知っているのですか？」



「先生のお兄さん!？」

「王の判決を言い渡す。……死だ」

【第十七話・Return・OF・THE・KING / 裁きの蛇】

WAKE・UP! 紅蓮の鎖を解き放て!

更新遅くてすみませんm(\_\_\_\_)m  
大学準備やらで忙しかったのです……

・ようやく共闘らしくなりました。

ドガバキフォームが使った水素爆破は、カーナリー昔(まだ一巻のストーリーの時)感想欄に投稿してくださった人に提供してもらったアイデアです。

かなりのロングパスになって申し訳ないありませんっ；

うまくストーリーが組めれば……ってかドガバキをもうちよつと早く出せれば……。

・予告しとくと、おとやんの出番はまだあります。まだ先ですけれど。

・断章のあれは……まあ、僕なりのデイケイド音也への救済措置です(妄想とも言う……)。

もしかしたら、あんな説だったのかも？ みたいなノリで見てください。

さて、次回からようやく本編に戻ります。

……ただ、大学の関係で更新は遅れがちになるかも知れません。

ですが、なるだけ早く更新するように頑張りますので、応援よろしくお願いします！

予告に出たあの方の登場もお楽しみに！

第十七話・Return of the King/裁きの蛇・Aパート(前書

「蛇とは、爬虫綱有鱗目へび亜目に分類される爬虫類の総称である。足を持たない長い体、毒を持つ身体、脱皮等の特徴から「死と再生」を連想させ、その異常な生命力から、古来より蛇を「神の使い」とする宗派も多い。

によるーん。って擬音は、蛇にゃ可愛い過ぎかもな」

キバットバット三世

第十七話・Return of the King/裁きの蛇・Aパート

「この景色も久しぶりだな」

御崎市最寄り駅、入り口に立つ青年の目には、見慣れながらも懐かしい景色が飛び込んでくる。

と、青年が片手に下げていたバックが不自然に揺れた。

『！』

「ここら、早くみんなに会いたいのわかるが、ここで顔を出すな。周りに迷惑がかかるだろ？」

中から聞こえてきた理解不能な鳴き声を窺め、青年はバックを担ぎ直す。

「さて、奏夜も母さんも、元気にしているかな」

再会への高揚感に胸を踊らせ、青年は道行く人々の雑踏の中へと消えていった。

「落ち込むこともあるけれど、俺は元気です！」

教卓に立つ奏夜は、帰りの会が始まるなり、声を張り上げた。

「……いきなり何言ってるんですか先生」

前列に座る池速人が、白けた目線を向ける。

「いや、場面転換の繋ぎに必要だったからな。文章構成上の都合というヤツだ」

またわけのわからないことを。

だが奏夜は「よし、じゃあ諸連絡だけするぞー」と、クラスの反応を鮮やかに無視し、話を進める。

「知ってるヤツがほとんどだろうが、そろそろ『御崎市ミサゴ祭り』の時期だ」

奏夜が放った単語に、クラスのテンションが僅かに上がる。

御崎市ミサゴ祭り。

早い話が夏の風物詩、ありふれた花火大会である。

だが、ありふれたとは言っても、真南川の河川敷をメインに行われ、市外からの参加客も多く、当日には繁華街にも熱気が伝播し、御崎市が誇るビッグイベントだ。

クラス内でも、最近はこの話題でもちきりで、誰と行くーだの、出店どこ回るーだの、ミサゴ祭りに関する雑談に溢れている。

「当日は教師も、交代で見回りに入る。このクラスは大丈夫だと思うが、あまりハシヤギ過ぎて補導されたりしないようにな。節度を守ってれば、面倒くさい大人の介入も少なくてすむぞ。俺からはそれだけだ。夏のイベントを、各々存分に楽しむように。以上！」

形式的な連絡が終わり、礼をして全員が帰り支度を始める。

奏夜もこの後は仕事が無いため、帰宅するだけだ。

「奏夜」

と、そこへ彼の生徒、平井ゆかり　もとい、世界のバランスを守るフレームヘイズ、シャナが声をかける。

「おう、どうしたシャナ」

「今日の夜、悠二の家に来られる？」

「夜？」

二人の立場上、聞きようによつてはかなり危ない会話だが、彼女の素性を知る奏夜は、気にせず答える。

「まあ時間によるが、多分大丈夫だぞ。一体どうした」

「その時間、悠二の鍛錬をしてるの。  
もうお互い知らない仲じゃないし、奏夜がいいなら、悠二の鍛錬を手伝って欲しいって、アラストールが」

「ああ、キバットが言ったトレーニングのことか……」

奏夜はつい先日、長らく秘密にしていた自分の正体を、シャナと悠二に明かした。

仮面ライダーキバ。

ファンガイアの王。

あれから、同じ敵と戦う者同士、関わり合いが増えてきていた。

紅奏夜としても。キバとしても。

今後、協力していかなければならない仲だ。断る理由は無い。

「わかった。悠二が頑張ってるかどうか興味もあるし、参加させて貰うかな」

「ありがとう」

礼を言って、シャナが時間を伝える。



「了解、じゃあその時間に」

「うん」

頷き合って、奏夜はそこでふと尋ねてみる。

「そう言えばシヤナ、お前はどつするんだ？」

「？ 何を？」

シヤナは首を傾げる。

「何って、ミサゴ祭りだよ」

てつきり悠二を誘っていくかと思っていたのだが。

「お祭りって行かなきゃダメなの？」

「いや、だから……」

素朴な、というか、疑問をそのまま跳ね返しているようなシャナの態度から、奏夜は思い出す。

(そっか。こいつはそういう娯楽に興味無さそうだもんな)

フレイムヘイズという職業柄、シャナの性格柄、そういう楽しみからは無縁でも何ら不思議ではない。

それでも一応、奏夜は教師として彼女の視野を広げようとする。

「えつとだな。祭りっていうのは夏のテンション上がる時期に、みんなが集まって騒ぐイベントであってだな。見たことくらいはあるだろ？」

「あるけど、周りが熱狂するのって息苦しくなるから、あんまり好きじゃない」

逆効果だった。

「いや、まあ、俺も以前は人混みとか熱狂と違って好きじゃなかったから、分からんでもないけどよ」

「そうなの？ 今は全然そんなことなさそうだけど」

「ってか出たくても出られなかったんだよ。あの頃は迂闊に人前へ出ると“この世アレルギー”がな……」

「この世アレルギー？」

「あ……いや、何でもねえ」

自分の語彙に無い単語に反応するシヤナをそうあしらって、奏夜は話を戻す。

「とにかくだ。暇があれば行ってみるよ。きっと楽しいからさ」

「わかった。考えとく」

シヤナはあまり気が進まなそうに、素っ気なく答える。

と、そこへタイミングよく、帰り支度を終えた悠二が合流する。

「あ、シヤナ。用事終わった？」

「ん。お待たせ」

頷き、悠二の隣に並ぶシヤナ。

「じゃあ先生、僕らはこれで」

「またね」

「ああ、お前らにゃいらん心配だろうが、気いつけて帰れよ」

シヤナと悠二はそのまま、取り留めのない会話をしながら去っていく。

二人の後ろ姿を見送りながら、奏夜は一言。

「……うーむ。今回の勝負は、ちょっと展開が読めないな」

よし。

ここはシャナの恋敵にも、話を聞いてみるとしよう。

そんなこんなで下校の途。

以下は、夕方になっても未だに人だかりが出来ている大通りにて、  
為された会話である。

「そう言えば、ミサゴ祭りの話だけどさ。一美はもう坂井くん誘ったの？」

「ふえっ!？」

クラスメート、緒方真竹のいきなりな質問に意表を突かれ、吉田の顔が真っ赤に染まった。

「緒方、もう少しオブラートに包めよ。切り出し方が急過ぎだ」

「そんなこと言っちゃって、先生も気になってたんじゃないんです

「かあ？」

「……む」

図星。

奏夜は大人しく閉口する。

現在の場面登場人物は、紅奏夜、吉田一美、緒方真竹という何とも珍しい組み合わせ。

ミサゴ祭りというビッグイベントを前に、何となく吉田がどうするのか（悠二へのアプローチ的な意味で）気になった奏夜が、既に帰る約束を取り付けていた緒方と吉田に付き添った、という経緯である。

「ほらほら、先生も気になってることだし、一美も正直に言っちゃいなさい！」

「そ、そんなこと……簡単になんか、言えないよ……」

「何だ。まだ言ってなかったのか」

吉田の性格を思えば、ある意味予想通り だが。

「もうあんまり時間無いぜ。誘うなら誘っとかねーと」

「で、でも」

「あーもうじれったいわね！ 『わたしと一緒に行きませんか？』、これだけなんだからビシツときめなさい！！」

緒方もこの膠着状態に、もどかしさに近いものを感じているようだ。

友人を叱咤激励すべく、緒方はもう一人、悠二の傍にいる女の子の名を出す。

「そんなんじゃない、ゆかりちゃんに先越されちゃうわよ」

「！」

吉田の気弱そうな瞳に、一瞬力が籠もった。

「……地雷起爆」

二人に聞こえないよう、奏夜がボソツと呟いた。

その言葉の通り、吉田は伏せがちだった視線を僅かに上げる。

(ゆかりちゃん)

同じ人を好きである女の子。

(負けたく、ない)

声にこそ出さなかったが、あの少女の名を聞くと、吉田は自然とそう思うようになった。

あの屋上での、いや、校庭での一件。

ゆかりちゃんには負けない、と宣言した。



悠二をミサゴ祭りに誘いたいと思うのに、シヤナへの対抗心があるのは否めまい。

少し前なら考えられなかった吉田の姿に奏夜は、

（吉田もちゃんと、前に進んでるんだな）

教え子の進歩は、教師としては嬉しいものだ。

実際に今日、奏夜とシヤナが話している間にも、彼女は悠二に話し掛けようとしていた。

もし良かったら、私と一緒に。と。

はっきり言って、これだけでもかなりの変化である。

（あとは、シヤナにせよ吉田にせよ、何かきっかけがあればいいんだが……）

いや、それは高望みし過ぎか。

実質的な可能性としては、シャナ、吉田、悠二の三人でミサゴ祭りに行く　という可能性が一番高い気はするが。

(それこそ、俺が考えることじゃないな)

こうして探りを入れてみたところで、結局自分は傍観するしかないのだ。  
悲しいかな、誰が誰とミサゴ祭りに行こうが、奏夜には何の影響もない。

影響が無ければ　関わろうと思っても関われないのだ。

(……あ、そう言えば)

ふと奏夜は、緒方に会話対象を切り替える。

「緒方、お前はどなんだ？」

「えっ？」

急に話をふられ、緒方は戸惑う。

だが、次の奏夜の言葉は、完全に緒方の意表を突いた。

「お前だって、田中とか誘うんじゃないの？」

「……………」

緒方は急に足を止めた。

「緒方さん？」

驚いた吉田が気遣うのも構わず、奏夜の問いを何回も反芻し、ようやくその意味を理解する。

「なっ！？」

彼女にしては珍しく、本気で顔を赤くした。

「な、なななんなん、そそそんなこと」

「……………吉田からかう資格ねーぞお前」

プロフィールに設定追加。

緒方真竹は、奏夜の仲間、マージョリーの子分、田中栄太に好意を寄せている。

それも、奏夜からすれば、吉田と同じくらい分かりやすい好意で、何故田中が気付かないのか不思議なくらいだ。

(田中も罪だねえ。悠二ほど鈍感でもあるまいに)

どいつもこいつもじれった過ぎだ。

呆れたように奏夜は肩を竦める。

「お前の方こそ、さらっと誘っちまえば いい気がするけどな。田中もどつせヒマだらうし」

彼が尊敬するところのマージョリーは、お祭り事に興味がありそうなタイプではない。

「な、なんでさっきから田中を誘うこと前提なんですかつ！」

「おや、誘わないんデスカ？」

「さ、誘いませんよ！ そんな高校生にもなって、今更……」

否定こそしたが、語気がどんどん小さくなるあたり、まだ葛藤が見られる。

「煮え切らねえな。お前ら普段から仲良いじゃんよ。佐藤から聞いたけど、中学も同じだったんだろ」

「関係ないですよ、そんなの。……むしろ仲が良過ぎるせいで、逆に田中も気付いてないみたいですよ」

「……うわ、難儀だな。お前も」

「ふんだ。同情するなら金下さいってんですよ」

「べーっ、と舌を出す緒方。」

最後少し誤魔化された気がしたものの、奏夜はそれ以上、緒方と田

中について言及しなかった。

「って言うか、先生こそどうなんですか。私と一美にだけ聞いといて、ちゃっかりミサゴ祭りに行く相手とか決めてたりして」

余裕が戻ってきたのか、緒方は仕返しと言わんばかりに、ニヤついた笑みを向ける。

「誰と行くも何も、俺は見回りがあるから……」

「嘘ばかり。先生がそんなマトモに職務するわけないじゃないですか」

「ひどっ!」

だが何気に、否定はしない奏夜だった。

実際、当日はサボる気満々だったのである。

「ほらほら、ネタは上がってるんですから、言えばラクになりますぜ」

「何で急に刑事口調なんだよ。おい吉田、お前からも……」

助け舟を求める奏夜。

だが吉田は、

「……ごめんなさい先生。私もちょっと、気になります」

「本当に裏切ったんですかー！」

吉田の目には好奇心が見て取れた。

まさかの裏切り、人生は라이어ゲーム。

「だからよ、本ツ当に誰かと行く予定はねえっつの」

「えー？ 先生なら引く手数多だと思うのに。カッコいいし、女の人はべらせてそう」

「おい、俺はプレイボーイキャラかコラ」

父親がああなので、奏夜にとってはシャレにならない話だった。

「それに、当日、知り合いはみーんな予定入ってるから、誘うに誘えないのだよ。分かったかね？ 緒方くんは吉田くん」

「……なんか意外です」

「むう、つまんないなあ」

奏夜の面白エピソードが聞けると思っていたのか、少し残念そうに、吉田は肩を落とし、緒方は唇を尖らせた。

そんな顔されても、本当なんだから仕方ない。

名護は恵と由利を連れて楽しむつもりだし（奏夜も誘われたが、家族水入らずを邪魔したくなかったため辞退）、嶋とマスターは、そんな名護ファミリーのために、『素晴らしき青空の会』名義で花火を出すらしい。

次狼達は夜店のアルバイト。真夜は二世と一緒に、遠くから花火を眺めると言っていた。



(静香も多分、大学の友達と回るだろうし、キバットとキバーラは外に出られねーしな)

キバット兄妹に関しては、鞆にでも入れて『ぬいぐるみです』と答えればいいが、それであるの二匹が納得するかは疑問だ。

そんなわけで、奏夜はもの見事に一人ぼっちなのである。

(……考えてたら悲しくなってきた)

いかんいかん。前向きに行こう、前向きに。

奏夜が気を取り直したところで、三人は交差点にさしかかる。

帰り道の関係上、ここで奏夜はお別れだ。

「ま、俺みたいなヤツよりも、お前ら自身のことを考えろよ。命短し、恋せよ乙女だ」

「あはは、キザったらしいですねー」

「いやいや、本心からそう願ってるよ。じゃあな。吉田、緒方」

「はい、また明日！」

「さよなら」

信号が切り替わり、奏夜は軽く手を振りながら、人混みに溶け、見えなくなった。

「じゃあ一美、私も行くね」

二人でしばらく歩いた後、緒方も他の交差点で吉田と別れる。

「あの、緒方さん」

去り際、吉田は口を開いた。

「ん？なに」

「……頑張って」

小さく、しかし不思議とはっきりした声だった。

「私も、頑張るから」

「うん。ありがとね、一美」

二人とも何を頑張るのかは、言わずとも分かっていた。

緒方と別れ、吉田は一人帰宅路を、どこか物寂しく感じながら辿る。

(頑張るから、か)

本当に、そうしなければならぬ。

ミサゴ祭りに関して言えば、猶予はもうないのだから。

だが、緒方にああはいったものの、その頑張りをどういつ形で見せればいいのか。

( どうしたら、坂井君を誘えるのかな )

考えれば考えるほど、思考が堂々巡りになっていく。

( どうしよう )

惑うことしか出来ない自分に、苛立ちさえ覚える。

( どうして、こうなんだろう、私…… )

気持ちの整理がつかないまま、吉田は伏し目がちに歩き続ける。

そんな時 だった。

「っ!？」

ぞわり、と得体の知れない悪寒が、吉田を頭上から貫いた。

日常に漂う残滓は、その源泉へと吉田をいざなう。

「あ………！」

そこに、いた。

10になるかならないかという少年。

左手には、小さなガラス玉を繋ぎ合わせた飾り紐。

パーカーのフードから覗く褐色の肌をした顔に、表情らしい表情は  
浮かんでいない。

ただじっと、吉田の方を見ていた。

違和感の極めつけに、少年の背中には、その身の程二倍はある巨大  
な棒が立てかけられている。

何かが、“違う”。

(な、なに……?)

吉田は自分に直感に問いかけた。

答えは勿論無く、彼女の脳に、奇妙な違和感だけを送信し続ける。

やがて少年は、ゆっくり口を開いた。

「あなたは、知っているのですか？」

年相応のトーン。

「……あ」

しかし吉田は、それにさえも違和感を覚える。

まるで、何年も何年も生きてきた老人　　枯れ果て、老成したような口調に思えた

「ちて、はて……」

顎に左手をやる動作、子供には有り得ない仕草だ。

「気配の端が濃く臭ったのですが……協力者ではないのですか？」

「ふつむ」

少年の見た目とは合わない声と違う、嘎れた声が、どこからともなく聞こえてくる。

「偽装して定住する者の傍におるがゆえの影響じゃろつ。この歪みを目指す“徒”を警戒しておると見たが、ふつむ」

「ああ、気配だけはやたら大きいですからね。

何やら同胞とは違う気配も感じますが……これは、もしやファンガイアですかね？」

「ふつむ。いずれにせよ、仕事の合間にでも、挨拶に出向くとしようか。

もしここがファンガイアの領地なら、尚更じゃろつ」

「ああ、そうですね。ともあれ、このおじょうちゃんには是非、協力していただきたいところですが」

「……あ、あの」

一人で（吉田にはそう見える）会話を続ける少年に、吉田は声をかける。

あまりにおかしい少年。

日常にはない光景を人は認めない。

この違和感を　早くに拭い去りたかったのだ。

「ああ、すみません」

吉田を置いてけぼりにしていたことに気が付き、少年は軽く頭を下げる。

「申し遅れました。私は『儀装の駆り手』カムシン……カムシン、で構いません」



「僕は“不拔の尖嶺”ベヘモット。僕も、ベヘモットでよいぞ、おじょうちゃん」

運命の鎖が、吉田一美へと絡みつく。

「うーん、月夜の晩、気持ちがいいねえ」

「どこがだよ。……ふわあ。やっぱり眠いな」

零時少し前。

人々が寝入り、静寂に包まれる住宅地を、奏夜は歩いていた。

彼の肩に止まるキバットが、眠気覚ましに奏夜の頭を叩く。

「おいおい、行くつったのはお前だろうが。シャキツとしろシャキツと」

「はあ……。キバツト、お前は夜行性でいいよなあ。どうせ俺なんか……」

「その某兄貴っぽい態度もやめい。ほら、着いたぜ」

キバツトが翼で指し示す先には、二人の目的地、坂井悠二の自宅があった。

もっとも今は、シャナが形成したと思わしき紅の陽炎『封絶』により、あの空間は因果から切り離されてはいるが。

「ま、俺には効果ありませんけどね」

封絶に停止することなく、石造りの門構えを過ぎ、庭に回る。

そこから見える屋根には、見知った姿が月光の下照らし出されている。

シャナ、悠二、マージョリー。そして姿は見えないが、アラストール、マルコシアスの五人。

屋根に飛び乗る奏夜とキバットに、全員の視線が注がれる。

「あら、ソウヤも呼んでたの？」

「うん。悠二の鍛錬ついでにね」

「やあやあ、みんな揃って御機嫌麗しゅう」

「ヒツヒツ、兄ちゃんも相変わらずみてーだな。蝙蝠クンも息災かい？」

「まあな。変わらずキバツてるよ、“蹂躩の爪牙”」

気軽に話す様は、全員がこのメンツに慣れてきた表れだろう。

「先生、少し遅かったですね」

「約束の時間は11時頃と言っておいたはずだが」

悠二とアラストールの問いに、奏夜は「フツ」と微笑み、右手を翳しながら、夜空の月を仰ぐ。

端正な顔立ちであるため、その様子は（無駄に）絵になっていた。

「ちょっと、池袋の都市伝説になりにな……」

「首無しライダー！？」

確かにライダーはライダーだが。

ちなみに本当の理由は、単純に奏夜が時間を間違えていただけだ。

「いやー、悠二は欲しいところにツツコミを入れてくれるよな。感  
心感心」

「不本意です！ 僕ここまで嬉しくない感心のされ方初めてですよ  
！」

「タイトルは『キバババ！』か『シャナナナ！』だな」

「語呂悪っ!」

御崎市にはカラーギャングも、情報屋も、コンビニのゴミ箱をぶん投げるバーテンダーもいない。

念のため。

「はいはい。遊んでないで、さっさと話進めましょ」

マージョリーが手をぱんぱんと打ち、脱線した話を軌道修正する。

「話って?」

「この前話したでしょ。このボーヤの中にある“千変”の腕のこと」

「ああ、名護さんが言ってたやつか」

奏夜は手を悠二の頭に置き、存在の力を汲み取る。

「確かに違和感があるな。悠二、何か悪いところはないか？」

「今のところ特にありませんけど……腕がもう一本あるみたいな感じですよ」

奏夜と悠二が感じた、正常に機能する流れの中にある一点の淀み。

この街を襲った“王”、“千変”シュドナイが、悠二を分解しようとした時に千切れ、残った腕だ。

奏夜が、マージョリーに問う。

「悠二を分解しようとしたって言うけどよ、なんでシュドナイの腕が千切れたりしたんだ？」

「ボーヤの“零時迷子”には『戒禁』がかけてるのよ」

『カイキン？』

自分達の魔術に無い名前に、奏夜とキバットが首を傾げる。

「簡単に言えば、『ミステス』に収められた宝具を守るための自在式だ」

「加えて言うのだ、かけた際の意志力に比例して、スグレ物だと封絶の中でも動けたりするわけよ、ヒヒヒ」

無知な二人に呆れることなく（そもそも魔術と自在式はフィールドが違うのだ）アラストールとマルコシアスがレクチャーを入れる。

「『解禁』か、誰が仕掛けたかはわからないのかよ」

「さーな。俺らは“約束の二人”の片割れだと思ってたんだが……」

「約束の二人」……ああ、『零時迷子』本来の持ち主ね」

「？ 聞いたことがあるのか？」

アラストールの問いに、奏夜は何の気なしに答えた。

「ああ、まだフリアグネと戦ってた頃、人づてに聞いたんだ。ファンガイアなんだけど、その人は『約束の二人』の片割れが“壊刃”に仕留められた』とかなんとか……」

『!?!』

悠二以外、全員の目の色が変わった。

「ちょっと奏夜、なんでそれ黙ってたの!？」

「いや、もう、知ってるもんかと思って……」

詰め寄るシャナの剣幕は、奏夜の話した事実の価値を物語っていた。

「確かなのか」

「ああ。ちなみに情報ソースは、ファンガイアのクイーンとキバツトの父上」

「クイーンだと?」

予想だにできなかった名前に、アラストールの声が揺れた。



(やっぱり知り合いだったのか)

奏夜は、真夜が先代『炎髪灼眼の討ち手』とは知り合いだ、と言っていたのを思い出す。

「クイーンって誰？ アラストールの知り合いなの？」

クイーンを知らない現代『炎髪灼眼の討ち手』、シヤナが尋ねる。

「うむ。古い友人だ。……そうか。クイーンからの話なら、疑いようがないな」

「でもよお、主犯が“壊刃”なら、誰かの依頼を受けてやったってことだよなあ？」

「しかも、『これほど早く見つかるとは』なんて言ってたし、“千変”の知る範囲で行われたんでしょうね……ん？」

マージョリーは自分の推測の中から、一つの言葉に引っかかりを覚え、

「“千変”の知る、範囲内……いや、そうか、「仮装舞踏会」  
」

マージョリーはパートナー共々、苦々しそつに言う。

「まさか、“逆理の裁者”の絡んだ企みなのかしら」

「おいおい、カンベンだぜ、“千変”の野郎。今さら忠勤を気取る柄かよ」

「「仮装舞踏会」って何だ？」

奏夜が隣に立つシヤナに聞く。

「“徒”の大集団の一つよ。最近はあまり目立った活動をしてない  
って聞いてたけど……」

「うむ。坂井悠二」

「え、はい!？」

今まで置いてけぼりだったため、アラストールの声に悠二は反射的に背筋を伸ばす。

「貴様の『零時迷子』に関する事態は、我らが考えていたよりも、意外に大きいやも知れぬ」

「……」

「奴らが動き出すとなれば、あらゆる可能性を視野に、今後の方針を決めてゆくことになるうからな」

あらゆる可能性。

それはつまり、

「……お前らが、この街を出てく可能性もあるってわけか？  
アラストール」  
ア

「!?!」

奏夜の補足に、悠二は心の中で息を飲んだ。

(旅、立つ……?)

相手が『零時迷子』を狙う以上、一所にいるのは危険だし、何より周りに迷惑がかかる。

いつか来るとはわかっていたこと。

だがその事実が、急に眼前へと突き付けられたことで、悠二は平静を保てなくなっていた。

「御崎市を、家を、出る……?」

震える声に、誰も答えを返さない。

シヤナだけが、彼の心境を知りながらも、はっきりと告げる。

「そう、出る」

シヤナの言葉に、悠二は嬉しさと恐怖が入り混じっていくのを感じた。

シヤナ達と一緒にに行けるのは嬉しい。

むしろ、自分から望んでさえもいた。

けれどそれは、15歳の少年が背負うにはあまりに重い、生まれ育った街や大切な人々との別れと同義だ。

それだけではない。

この街を出る。それは次に何らかの形で“徒”が騒ぎを起せば、それを迎え撃つ者がいなくなるということだ。

可能性の話、と言って割り切れるほど、悠二は強くも合理的でもない。

自分の知らないところで、日常が破壊される。

大切な人達の未来がすべて、絶望に彩られている気さえした。

「……………」

シヤナはただ無言で、悠二の手を握り締めた。

「……………」

手から伝わる暖かさは、悠二を暗い思考の海から引き戻す。

「あ……………」

「……………」  
「まだ、今すぐ出るわけじゃねえんだろ。アラストール」

悠二の気持ちを察してか、奏夜は彼に猶予を与えるべく問いかけた。

「うむ。この街の歪みは大きすぎる。フレームヘイズの中に、この歪みを調整、修復出来る『調律師』を生業とする存在がいる」

「せめて調律師が来るまでは、“徒”の襲撃を警戒しないと」

「裏を返せば、その調律師が来たら出てくってわけか」

シヤナが首肯したのを確認し、奏夜は悠二に向き直る。

「安心しろよ悠二。お前らが去った後も、俺や名護さんはここに  
いる」

「えっ？ ……あ」

そうだった。

彼らは悠二達が出て行くのが、ここにいる。

あの強さだ。“徒”が来ても、街を守り抜くだろう。

「お前がまだ、この街を出て行きたくないのはわかる。  
だから、これだけは約束させて貰う。

例えお前やシヤナがいなくなっても、その後でお前の大切な人達が  
喰われる、なんてことには絶対にしない」

「その通りだぞ悠二。オレ様たちは、ズーっとそうやって、人々を守ってきたんだからな！」

笑いながら告げる奏夜とキバットの姿に、悠二は無条件の安心感が広がっていくのがわかった。

勿論、大切な人々と別れる決心がついたわけではない。

でも、

(少しだけ、楽になったかも知れない)

みんなを守ってくれる人がいる。

他力本願でもなんでも、悠二はそれが嬉しかった。

「……ありがとうございます。先生」

「は、よせよ。俺は俺の義務を果たしてるだけだ。……ま、俺個人



としちゃ、お前らとは別れたくねーってのが本音だけだよ」

「あら、ひねくれ者のアンタにしちゃ素直ね」

「うっせ」

マージョリーの冷やかに、気恥ずかしさから目を逸らす奏夜。

その様子に苦笑しつつ、悠二はシヤナに言う。

現実に向き合い、前に進む覚悟を抱きながら。

「もう少し、待ってよ」

「……うん」

シヤナもまた、この少年の覚悟を受け止め、頷いた。

一連のやり取りを目の端に捉えつつ、ぼんやりと夜空を見上げる。

(別れ……か)

シヤナや悠二が、日常から消える。

果たしてそれは、周りにどれだけの影響を与えるのだろう。

特に　あの臆病なりに、悠二に想いを伝えようとするあの少女には。

……いや、影響も何もない。

どのみち、悠二がいなくなる時、吉田の記憶から彼の痕跡は忘失される。

何も変わらないのだ。

例え彼女が悠二を好きであっても、世界は例外を認めなどしない。

(ちっ、なんて虚しいのかね)

軽く舌打ちをし、奏夜は一言。

「面倒くさくなつてきやがったな……」

さっきまでただ美しいと思っていた月は、まるで迷える者を嘲笑っているかのように、青白い光を放っていた。

「ちょっと、早く来過ぎちゃったかな」

翌日。

真夏の夕刻という人通りの多い時間。

学校の終わった吉田一美は、大通りに沿うビルの壁に寄りかかり、ぼつりと呟く。

（やっぱり、変な悪戯だったのかも）

そうだったのなら、変な子供に騙され、自分がちょっと馬鹿を見た、ということでも済む。

だが、そうならいい。と思う一方で、そうなって欲しくない。と思う自分も確かにいて、

(……約束の時間はもう少し先だし、待ってみよう)

結局吉田は、待ってみることにしたのだ。

昨日出会った奇妙な少年、カムシン。

名乗った後、カムシンはわけのわからないことを羅列していた。

街の歪みがどうなの、違和感を感じ取れる人間を探していたのだ。

吉田がかろうじて理解できたのは、「この仕事には人間の手助けがいるため、おじょうちゃんには是非とも、その手伝いをしてもらいたい」ということだけだった。

おかしな子。

そう一笑に付すことも出来ただろう。

むしろ、その方が一般的な対応だ。

だが、吉田はここにいた。

つまりは、カムシンが待ち合わせに指定した場所と時間に。

だが勿論、あの戯言を信じたわけではない。

(もしかしたら、何かが変わるかも知れない)

自分が何も出来ず、ただ手をこまねいているこの状況に、日常では有り得ない違和感。

うじうじした自分を引っ張り上げてくれるかも知れない力。

それが持つ甘美な誘惑に負け、吉田は、

「じゃ、じゃあ……少しくらいなら……」

と答えたのである。

怖いことがあれば、そこでやめればいい。

騙されただけなら、それもよし。ただの笑い話になるだけだ。

無理やり自分を納得させ、吉田はここにいる。

自分を変える瞬間を、待ちわびながら。

「……まだ暑いなあ」

照りつける夕暮れの日差しを、翳した手で遮る。

せめて日除けになる場所って言うっておけば良かったかな。

そんな風に、吉田が思った時だった。

「……？」

足元に、何かが当たったような気がした。

目線を落とすと、そこには赤い果実。

「林檎？」

それを拾い上げ、何の気なしにまじまじと見つめる吉田。

「キミ」

聞き覚えのない、張りのある声。

反射的にを振り向くと、そこには一人の青年が立っていた。

艶やかな黒髪の下には、どこか貫禄を漂わせる風貌。

薄手のジャケットにジーンズ。肩に下げる大きめのショルダーバックは、いかにも旅行帰りというイメージ。

違和感があるとすれば、真夏日に、しかも左手にだけに手袋をつけていることか。ちなみに、もう一方の手は紙袋を支えている。

「すまない。その林檎、僕が落としたんだ」

「あつ、ごめんなさい」

「いや、いいんだ。拾ってくれてありがとう」

吉田が慌てて返した林檎を、青年は手袋をした方の手で受け取った。

改めて、吉田はその青年を見据える。

（……………あれ？）

初対面の人間を相手に、受けるはずのない印象を持つ。

（なんだろう。どこかで会った……………ううん、違う）



“誰かに似ている” ような……。

吉田の視線を気にした様子もなく、青年は彼女の制服に目をやる。

「その制服、御崎高校のだね」

「は、はい」

「懐かしいな。僕もあそこに通ってたんだよ。もっとも、色々あつて中退してしまっただけだね」

「そ、そうなんですか」

自分でもよくわからない相槌を打つ。

初対面の人間とフランクに話せるほど、吉田は対人能力があるわけではない。

青年も、あまり会話の風呂敷を広げるつもりはないらしく、年長者としての注意だけを述べる。

「夏は何かと物騒だからね。気をつけるんだよ」

青年は裏表のない笑顔を浮かべる。

(……………あっ)

その笑顔を見て、吉田は気づいた。

この既視感の正体が。

この青年が誰に似ているのか。

「奏夜先生に、似てるんだ……………」

吉田が、ついその名前を声に出すと、

「奏夜？」

それを聞き取った青年が反応した。

「キミ、奏夜を知っているのか？」

「えっ？ はい、担任の、先生です……」

青年の反応に驚き、吉田は事実だけを伝える。

目を丸くしていた青年はしばらくして、声を上げて笑い出した。

「あははは！　そうかそうか、あいつの教え子さんだったのか！  
いやあ、まさか帰ってきて早々、こんな出会いがあるとは思わ  
なかつたな」

心底愉快そうに、青年は相手を崩す。

「キミ、名前は？」

「あ、吉田、一美です」

「美ちゃんか。いい名前だね」

「あの……、先生をご存知なんですか？」

話の流れとして、吉田は問う。

しかし、次に返ってきた答えは、吉田の想像を遥かに超えるものだった。

「ああ、すまない。自己紹介が遅れたね。  
僕はあいつの兄なんだ」

「……………」

その情報を処理するのに、吉田はたっぷり数十秒かけ、

「……………っええ!？」

彼女にしては珍しい、かなりの大声を挙げた。

「せ、先生のお兄さん!？」

吉田にとっては、かなり驚きの素性を持つ青年は、その弟と同じ、柔らかな笑みを浮かべながら頷く。

「ああ、登太牙だ。よろしく。一美ちゃん」

『偽装の駆り手』は、少女の日常を破壊する。

『裁きの蛇』がもたらすものは、破壊か、救済か。

第十七話・Return of the King/裁きの蛇・Aパート(後書

書く時間が無いぜひゃっほうー!!(ヤケクソ)

・ミサゴ祭り編書くのめんどくさい……。今まで一番書きづらかったのは愛染兄妹編だったんですが、記録更新ですねこれは(笑)

・太牙兄さん登場。僕の中では、いまだに白峰さんのイメージが払拭出来ません(え)最近では、太牙の俳優さんが仮面ライダーゴジラで仮面ライダーラスト(ガイ)をやったがために、そっちのイメージまで……。もう何が何だか；

さて、期せずして吉田と出会った太牙。

更新が滞りがちになりそうですが、これからの展開をお楽しみに！

次回はちゃんと変身しますよー(＾O＾)

第十七話・Return of the King/裁きの蛇・Bパート

「先生にお兄さんがいたなんて知りませんでした」

「仕事の都合で外国にいてね。あいつも話す機会が無かったんだろ  
う」

期せずして、奏夜の兄を名乗る青年、登太牙と出会った吉田一美。  
最初は吉田も半信半疑だったが、嘘を言う理由も分からなかったし、  
彼の語る奏夜の人間像はあまりに忠実だった。

何より、あの奏夜そっくりの笑顔は、なかなか出せるものじゃ  
ない。

強いて、疑う余地があるとすれば、

「でも、太牙さんと先生、苗字が違いますよね」

「異父兄弟だね。」

小さい頃から互いを知ってはいたんだが、四年くらい前まで兄弟だ  
とは知らなかったんだ」

「あ……」

複雑な事情が想像出来る話に、吉田は聞いたことを後悔する。

「ごめんなさい……。余計なことを」

「いや、気にしないでくれ。僕もあいつも気にしちやいないから」

吉田の不安を感じ取った太牙がそう言い、ひとまず重い空気は収束する。

「奏夜は元気にしているかい？」

「はい。最近少し落ち込んだこともありましたけど、今は元氣過ぎるくらいですから」

「そうか……。いや、元氣ならそれでいいんだ。」

「美ちゃんも苦労するだろう、普段のあいつは元氣を通り越して破天荒だからな」

「い、いえ、そんな。いつもお世話になりっ放しです」

「からかわれながら、だろうっ？」



「……う」

否定出来なかった。

その反応は当然だとしても言うように、太牙は苦笑いする。

「奏夜の考えは、理解しづらいと思う。

でも一美ちゃん、あいつを嫌わないでやってくれ。

ああ見えて、結構寂しがりなヤツだからさ」

太牙の紡ぐ一言一言からは、兄弟としての優しさが伺えた。

(……本当に、お兄さんなんだ)

吉田は今までのやり取りで、段々と太牙の人格を察しつつあった。

優しいのだ。奏夜と同じく。

「……嫌ったりなんかしませんよ、太牙さん」

「？」

「私、先生が担任でいてくれて良かったと思つてますから」

世辞でも何でもなく、紛れもない本心から、吉田は答える。

先生はいつも、教室を明るくしてくれた。

困っている時、いつも相談に乗ってくれて、滅茶苦茶なやり方ながら、いつも悩み事を解決してくれた。

言ったこと全てを現実にするような、底が知れない人。

「あんな凄い先生を、嫌いになれるわけがないですよ」

太牙はしばらく無言だったが、段々とその目は喜びに彩られていく。

「ありがとう、一美ちゃん。」

安心したよ。あいつをちゃんと理解してくれる生徒さんがいて」

「私だけじゃないですよ。私達のクラスで先生を嫌いな人なんていませんから」

これも本心。というより単純な事実。

彼の奇行に呆れの視線を向ける人はたくさんいるが……それはともかく、彼は何だかんだで好かれてるのだ。

それからもしばらく、太牙と吉田は他愛ない話に興じていた。太牙がとても話し易い人物だった、というのもあっただろう。その心地よい時間が途切れたのは、二人の目の前に音もなく、カムシンが現れた時だった。

「お嬢ちゃん」

「あ、カムシンくん……」

「遅れてすみません。少々、マーキングの位置特定に手間取ってしまいました」

起伏のない口調で、カムシンは唇を動かす。

「待たせてしまいましたか？」

「う、ううん、私が早く来すぎてたから」

そもそも、吉田が来たのは約束の30分以上前だ。

約束の時間自体には、カムシンはそれほど遅れてはいない。

「ああしかし、私の方に非があるのは確かなので、謝罪はさせてもらいます。

本来ならもう少し早く済むのですが、何分この街は複雑な作りで…

…おや？ こちらの方は？」

そこでようやく、カムシンは太牙の存在に気付いたらしかった。

「あ、この人は……」

太牙を紹介しようとした吉田は、突然口を閉ざした。

「…………お前」

太牙の声は、吉田を怯えさせるには十分なものだった。さっきまでの柔らかな物腰は息を潜め、張り詰めた糸のような警戒心を、目の前にいる少年、カムシンに向けている。

「……お前が嶋さんの言っていたフレームヘイズだな」

思わぬ指摘に、さすがのカムシンも目を見開く。周囲の雑踏など気にも止めず、カムシンと太牙は視線を交差させた。やがて「ああ、なるほど」とカムシンが呟き、

「あなたが現代の“キング”ですか」

「ああ、チエックメイトフォーが一人、キング継承者、登太牙だ」

「御会い出来て光栄です。ファンガイアの王よ。フレームヘイズ“儀装の駆り手”カムシンと申します」

恭しく礼をするカムシンに続き、

「御初にお目にかかる。同じく、紅世の王“不拔の尖嶺”ベヘモツト」

カムシンの飾り紐から、ベヘモットの声が響く。  
一連のやり取りに、驚いたのは吉田だ。

（えっ、あれ？ 二人って知り合いなの？ それにキングって……？）

戸惑う吉田が入る隙を与えず、話は進む。

「ああ、手間が省けました。

下準備の折、キングがこの街を管理していると聞きまして、近々挨拶に伺おうと思っていたところだったので」

「僕を知っているのか」

「現代のキングは名君と名高いからもう。我々も聞き及んでおったのじゃよ」

身長差倍以上の男性二人、という奇妙な絵面の会話は、外観とは裏腹に、重い緊張感が漂っていた。

「お手数をかけますが、ご同行願えませんか？ 積もる話もありますし、あなたもこの街の状況を知りたいでしょう」

「ああ、いいだろう。」

出来れば何も知らない女の子を連れてくる理由も、教えて貰えるとありがたいな」

頷く太牙の瞳に一瞬、蛇のような獰猛さが走った。

「……………新手のテロかこりゃ」

坂井家を訪れた奏夜は、鼻をつく臭いに顔をしかめた。

「あら、奏夜先生！」

台所に立つ悠二の母、坂井千草の出迎えに、奏夜は軽く頭を下げる。

「勝手にお邪魔してすみません。一応インターホンは押したのですが、灯りが見えたもので。」

あ、これ、この前お茶に招待して下さった時の御礼です。よかったですら召し上がってください」

「まあまあ、すみません。お気遣いをさせてしまったようで」

「いえ、お気になさらず。俺としても、あのお茶会は楽しかったですから。」

「……それで、この惨状は一体」

「ええ、ちよつとシヤナちゃんが……」

苦笑する千草の傍らには、この焦げ臭い臭いの原因を作り出したと推察される少女、シヤナが立っていた。

かなり不機嫌そうに、黒こげの物体Xをへばり付かせたフライパンを睨みつけながら。

「一応確認しますけど……料理、ですよね？」

「はい。シヤナちゃんがどうしても、悠ちゃんに作ってあげたいとのこと。」

恐らく、吉田がいつも悠二に弁当を作っているのを見ての思い付きだろうが……。

(シヤナも随分、積極的になったもんだ)



声に出さず、奏夜は感心する。

「ちなみに、今日のメニューは？」

「野菜の炒めものです」

「……………」

簡単な炒めものでこの有り様か。

これは先が思いやられるな。

「千草さん。台所をお借りしてもよろしいでしょうか」

「えっ？ はい、構いませんが……………」

千草の了承を受け、奏夜は軽く手洗いをし、別のフライパンを用意する。

「奏夜？」

「シャナ、料理全てに共通するコツを伝授してやろう」

シャナを居間に下がらせ、奏夜はてきぱきと準備を始めた。

一人暮らしなだけあって、経験も豊富な奏夜は淀みない動きでフライパンや食材を操っていく。

食卓に待機するシャナと干草は、料理人の姿を黙って見守るしかなかった。

「お待ちどう様」

フライパンの熱が奏でる音が止み、完成品の乗った皿が運ばれてくる。

「……オムライス？」

出された料理は、何の変哲もない、ただのオムライスだった。上手には出来ているが、なんら特別な様子は見受けられない。本当にコツなんて使ったのだろうか？

訝しげに、シャナはスプーンを口に運んだ。

「……………!!」

舌に衝撃が走った。

「美味しい……………」

思わず声を漏らす。

美味。その一言以外で表現出来ないような一品。

少し味見させてもらった千草でさえも、先ほどのシャナの感想を繰り返すばかりだった。

作り手である奏夜は満足気に笑いながら、

「美味しいだろー。コツを掴めば、お前もすぐ作れるよつになるぞ」

シャナにとっては、これ以上ない救いの言葉だった。

「教えて！ どうしたら奏夜みたいに出来るの？」

身を乗り出すシャナに、奏夜は特に隠し立てもせず答える。

「このオムライスの作り方な。俺の母さんが教えてくれたんだが、ポイントは隠し味だ」

もつとも、真夜は音也に教わつたらしいのだが。

音也も真夜も、恋する女の子になら、教えるのを許してくれるだろう。

「隠し味に、食べてもらう人への愛情を込めるんだとさ」

「あいじょうっ？」

「そ。愛情。お前は、誰に料理を作つてあげたいんだ？」

奏夜の意地悪に、シヤナは「うっ」と言葉を詰まらせ、顔を逸らす。

「……さっき千草から聞いたでしょ」

「俺はお前の口から聞きたい。  
ほらほら、言っちゃいなYO!」

「……………悠二に」

気恥ずかしそうに呟くシヤナ。

微笑ましい限りだ。

「俺が言った愛情つてのは、正確に言うとお前の作った料理を、悠二に食べて貰いたい』っていう想いのことだよ。

その想いがさえあれば、技術なんて後からいくらでもついてくる」

食べさせる相手である奏夜への愛情があったからこそ、真夜の料理はいつも美味しかった。

今も、奏夜はシヤナへ“料理に込める愛情”を伝えたかったからこそ、美味しく作ることができたのだ。

「お前は飲み込みは早い方だから、すぐ上手になるよ。  
俺も協力するからさ、相手への想いを忘れずに頑張れ!」

ずっと話を聞いていたシヤナは、嬉しさがこみ上げてくるのを感じた。

千草やアラストールとは、違う意味で尊敬する人からの励ましに、自然と笑みを浮かべることができた。

「 うんっ、頑張る！」

「 よしー！」

この頑張る姿が見られただけでも、このコツを教えた甲斐があった。着替えのため、居間を出て行くシャナの後ろ姿を見ながら、千草は言う。

「 ふふっ、やっぱり奏夜先生は、立派な教育者ですね」

「 買いかぶりですよ。千草さんには遠く及びません」

成長する少女の行く末を思い、二人の保護者は笑みを交わし合った。

「この世には、そこに在るための根元の力……“存在の力”というものがありません。

この街に、その“存在の力”を奪う、人喰いが潜入しました」

「……えっと、ゲームか、なにかのお話？」

カムシンの歩きながらの説明に、吉田は至極当然の反応を示す。

カムシン側も、すぐ納得してもらえとは思っていない。  
絵空事と捉えられても仕方ないことだ。

「いや、心配せずともよいのです。もう私の同志がやっつけました」

「殺人鬼とか、そういう怖い人が来たってこと？」

「……そうだったら、まだ可愛い方だな」

隣を歩く太牙がぼつりと呟く。

カムシンも同意見だが、口には出さない。

「人ではありませんが……ともかく、その人喰いは、自分が人を喰ったのを気付かれないよう、ある細工をしていました。  
トーチという仕掛けです」

カムシンがトーチの仕組みを簡単に教えると、吉田は「……怖い話」という、未だ目の前にいる少年の話を、空想と信じているが故の感想を述べる。

信じてはいなくとも、話は聞いてくれている、いい傾向だ。

「私は主に、その後始末を生業としています。  
人と人、互いに影響し合うはずだった本来の調和の欠如……そこには不自然な歪みができ、規模が大きいと、ひどい災いが起こる可能性も出ます」

「随分と曖昧な表現だな。ひどい災いとは」

「今まで調律が失敗したことは滅多にありませんからね。  
記録としてはその前段階……予兆までしか起こっていませんから、詳しいことまでは何とも」

「だが確実に“よくないこと”は起こる、か」

「……？」



顎に手を当て、考え込む太牙を見た吉田は、不自然さを覚える。

あまりに、積極的過ぎるのだ。

ばかなことをしている自覚がある自分はともかく、何故太牙がここまで、この少年の話に付き合っているのだろうか？

「だから私は、災いが起きぬよう、その歪みを修正し、調整するために世界を巡り歩いているのです」

太牙のことを考える間もなく、吉田の思考はカムシンの言葉で遮られた。

慌てて意識を、会話に戻す。

「カムシン君？　あの……」

「うむ、訊けることなら、訊いておくのがよい。話しておくね」

どこからともなく聞こえるベヘモットの声に驚きつつ、吉田は口を開く。

「え、と、カムシン君たちのお仕事がそうだとしたら、この街はもう、人喰いにたくさん食べられた後ってこと？」

気付かないだけで、もういっぱい人が死んで、そのトーチだらけに

なつてて……それって大変なこと、だよな？」

正鵠を射た内容に、カムシンは立ち止まり、感嘆の声を上げる。

「ふーむ、おじょうちゃん、あなたは、なかなか……」

今までの話の中から、これだけのことを理解してくれば、もういいだろう。

「百聞は一見にしかず、と云うでしょう」

そう判断したカムシンは、左手を手品師か何かのような仕草で、軽く胸元で振る。

金属が擦り合う音が鳴り、カムシンは左手を開いた。

そこにあったのは、鼻にはめるためのブリッジとパッドが付いた小さなガラス板。

「最近は、これの元となった道具もほとんど見ませんが……知っていますか？」

「僕はまだ、“見たまま”の年齢なのでね。だが、どういふものは知っている」

「……眼鏡？」

「ああ、その通りです。片眼鏡モノクルというんですが……これで周りを御覧なさい」

あるいはここで、吉田の側にいた人間が奏夜だったのなら、まだ話は違ったのかも知れない。

(一美ちゃんに何を見せようとしているんだ?)

不幸にも太牙は、奏夜と違って“紅世”の存在との経験が浅すぎた。

(……いや、待てよ……?)

だから 気づくのが遅れてしまった。

(片眼鏡、周囲には人間、街はトーチだらけ、映す、見せる、ただの人間に……！)

今の状況から得られる情報を繋ぎ合わせる。

(まさか　！？)

太牙もようやく理解する。

カムシンが、吉田に何を見せようとしているのか。

片眼鏡が、何を映し出す『宝具』なのか。

「ダメだ、一美ちゃん！」

僕の “ 僕達のいる世界 ” を見てはいけない！

太牙が片眼鏡を奪おうとするが、彼の手は届かなかった。

それよりも早く、吉田は片眼鏡から “ 見てしまった ” 。

「　　っ！？」

トーチを映す力を持つ道具から、本当のことを　太牙や奏夜、シヤナや悠二が立つ世界を。

紅邸に響くバイオリンの音色　と聞けば、演奏者は紅奏夜と思われるかも知れないが、今回は違う。

「　うん、合格。　静香も上手くなってきたな」

「奏夜が言つと嫌みにしか聞こえないよ」

バイオリンをテーブルに置く静香が苦笑混じりに言つ。

静香が紅邸に来ているのは、何も生活破綻者の奏夜を気遣っているだけではない。

彼から、バイオリンの技術を学ぶためでもある。　普段何かと静香に頭が上がらない奏夜も、この時ばかりは立場が上だ。

「まあ、嫌みに聞こえようが聞こえまいが、本当に静香は上手になってきてるよ。なあキバット」

バイオリン型の巣箱から、キバットが飛んでくる。

「うむうむ、俺様も大満足の演奏だぜ。

……なあ静香、そろそろ本格的に下克上を……」

「待ちなさいキバット。それはまだ早計だわ。相手の実力は計り知れないし、技術を奪うだけ奪ってから……」

「俺の知らないところで、教え子と親友の間に不穏な動きが!？」

そんなやり取りにキバットと静香が笑い、つられて奏夜も相好を崩す。

四年前からのメンバー内では、この三人が一番付き合いが長い。奏夜も静香もキバットも、こんな風に冗談を言い合える仲を気に入っている。

(ありがたいよな)

こうして一緒にいるだけで、“日常”を感じることが出来る。自分が戦うだけの価値が、ここには沢山詰まっている。そのことに感謝しながら、奏夜は言う。

「よし、じゃあ今日の練習はここまで。お疲れ様でした」

『お疲れ様でしたー』

三人が一礼し、練習が終わりを迎える。

「静香はこの後どうする？　もし夕飯食べていくなら、親御さんに連絡は入れとけよ。帰りは俺が送ってってやるから」

「うん、わかってる。………ねえ、奏夜」

「ん？」

夕飯の支度のため、一階に降りようとした奏夜が振り返る。

「どづした？」

「あ、あの……えっとね」

歯切れが悪そうに俯く静香。

何事もはつきり口にする彼女にしては珍しい仕草だ。

「そ、奏夜は明日って……誰かと一緒に行くの？」

「明日？ ……ああ、ミサゴ祭りのことか。」

いや、別に誰と行く予定も無いぞ。見回りもサボる気満々だし」

「あ……そう、なんだ」

静香は何処か安堵したように、肩の力を抜いた。

今の話に、何か安心するポイントがあっただろうか？

奏夜にはわからなかった。

「じゃ、じゃあ、さ。もし、奏夜が良かったら、私と一緒に行かな



い？」

「えっ？」

奏夜は目を丸くする。

てつきり静香は、大学の友達と一緒に回るとばかり思っていたからだ。

静香はというと、顔を耳まで赤くしていたが、その様子は二階の薄暗さに隠れ、奏夜には見えなかった。

「静香、がんばれ」

夜目が利くため、静香の状態を見ることができたキバットは、小さく親友の女の子を激励する。

「……ダメ、かな？」

答えが無いことを不安に思ったようだ。

今にも泣きそうな静香の表情に、奏夜は慌てて言う。

「い、いや、ダメじゃないぞ。」

わかった。一緒に行こうぜ」

「ほ、本当？」

「こいで嘘ついてどうすんだよ」

奏夜の答えに、静香の表情がぱあっと明るくなる。

「やった！」

「やった？」

「あ……ううん、何でもない！」

じゃあ明日の5時くらいに、この家の前で待ち合わせね！  
奏夜も忘れちゃだめだよ！」

矢継ぎ早に約束を取り付け、静香は親への連絡のためか、奏夜の脇をすり抜けていった。

「何だってんだ、静香のやつ……？」

一緒に祭りに行くくらいで、今更あそこまで喜ぶなんて。

「やれやれ、お前も罪な男だよなあ」

怪訝そうに頭を掻く奏夜に、キバットがニヤニヤ笑いを浮かべる。

「罪？ 何がだよ」

「何がってお前、あんな可愛い女の子と二人でデートだぜ。いや、  
ニクいねえ」

「何がデートだよ。」

ただ静香が氣い使ってくれたただけだろ。浮き足立ち過ぎだったの

「……………」

キバットは、親友のてんで見当違いな発言に、怒りを通り越した哀れみの目線を送る。

「お前は一度、秘密組織にでも誘拐されて、脳改造を受けるべきだ」

「俺そこまで言われるようなことしましたか!？」

奏夜は目を剥くが、キバットはかなり本気だった。

静香のためにも、こいつは自分の鈍感さ加減を直すべきだろう。

「　　っじゃ!?!」

真南川の土手。

柔らかい地面目掛け、カムシンは担いでいた布巻き棒を突き込む。  
派手な音と共に、先端の形　　円形の穴が空いた。

「さて、これで昨日からつけておいたものと合わせて、何とかなる  
でしょう」

「……………」

「本当に手伝ってもらうのは、これからですが……よいですか、おじょうちゃん」

カムシンの言葉は、吉田にとって虚ろにしか響かなかった。

（私、本当の、馬鹿だ）

愚かな決断をしてしまった、昨日の自分を悔いる。

（なんでこんなこと、引き受けてしまったの）

こんな恐ろしい存在と、関わるべきではなかったのだ。  
自分が変わるきっかけになるかも知れない。

そんな　ふざけた理由で。

あまりに残酷な“本当のこと”を知り、俯く吉田を一瞥し、カムシンはあくまで、使命遂行の過程として口を開く。

「おじょうちゃんの精神の平衡を乱したことについては謝ります。  
しかし我々への協力には、違和感を決定的に感じてもらう必要があります。  
です。」

おじょうちゃんの賢さに油断して、少々先走ってしまったようです。すいません」

「ふうむ、儂からも、謝らせてもらおう」

飾り紐から、ベヘモットの声が聞こえる。

「じゃがな、我々の行いによって、これから人喰いがこの街を目指す確率を格段に減らすことができるんじゃない。

我々を恨んでくれてもよい。おじょうちゃんにはその権利がある」

「しかし、協力はして欲しいのです。

他でもない、おじょうちゃんのためにも」

「……でも、あんな、あんな……」

「『偽装の駆り手』」

肩を震わせる吉田を庇うように、太牙が、彼女とカムシンの間に割り込む。

太牙の表情にもはや柔らかさはなく、彼が放つ威圧感は空気を震わせ、眼光は蛇の如く研ぎ澄まされている。

「ああ、何かご不満がありますか、キング」

それでもカムシンは一瞬の揺らぎも見せず、太牙と対峙する。キングの威圧と言えど、歴戦で培われた貫禄の前では意味をなさなかった。

「もし、巻き込んだことに関して不満があるのでしたら、それはどうにもならない。とだけ言わせてもらいます」

「ふうむ、もしおじょうちゃんが、今日の約束に来なかったのであれば、我々は違う人間を探しただろうからのう」

「ああ、そうだろうな」

今回はたまたま、選んだ相手が、弟の教え子だっただけ。では見ず知らずの他人だったなら不満は無かったか、といえば、それもまた違う。

他人にも、それぞれの世界があり、人生がある。

そしてカムシン達は吉田と同じように、その誰かの世界を、容赦なく破壊するだろう。

もつと大勢の人々を救わなければならない、という大義の下に。

「……御崎市は、人間とファンガイアが共存するための架け橋。キングである僕は、ここを管理し、守らなければならない身だから、お前達の働きにはむしろ感謝しているし、一美ちゃんを巻き込んだことを、咎めることも出来ない」

自分は誓った。愛する人と弟に、立派なキングになると。

上に立つ人間が、私情に左右されるなど、あつてはならない話だ。

「『大勢の命のため、一人の平穏を破壊する』。だが何も、その一人が死ぬわけでもない。お前達のしたことは全て正しいものだ。それくらい僕にも理解できるさ」

「ああ、なら」

「だが」



カムシンが、次の調律の手順を教えようとした時、もう太牙は動いていた。

「その行いを理解すること」と、“その行いを許すこと”は別の話だ」

太牙の左拳が、カムシンの頬に叩き込まれた。

骨と骨がぶつかる、気味の悪い音が土手に響く。  
太牙の背後、吉田が「ひっ」と声を挙げた。

それはそうだろう。

見た目からすれば、大人が子供を殴り飛ばす凄惨な光景だ。

だが、太牙に躊躇いは無かった。

きっと、弟もこうしただろうから。

「……」

カムシンは、常人なら確実に骨が砕けていたであろう一撃にも仰け  
反らず、無表情のまま太牙を見つめ返す。

「ああ、さすがはキングですね」

「避けられただろう」

「あなたの気が済むのなら、いくらでも。“そんなこと”に構って  
いる暇はありませんから」

二人の間に再び、一触即発の雰囲気漂う。

傍らで見守る吉田はもう、心の許容量の限界を超えかけていた。  
張り詰めた糸のように、緊張仕切った状態。

その膠着は、突然降り注いだ光弾により幕を引いた。

「!?!」

「むっ」

「きゃっ!?!」

幸いにもエネルギー弾は逸れ、硝煙を巻き上げる。

「美ちゃん、大丈夫かい？」

「は、はい」

頷くも、突然のことに吉田の動悸は収まらなかった。

「ああ、どうやら、予期せぬ客のようですね」

カムシンは、光弾の飛んできた方向を睨む。

「ギギギ……見つけたぞお、キング……!!」

硝煙が晴れ、夕暮れは異形の姿を映し出す。

ステンドグラスの身体に、浅黒い体毛と翼。

平面で大きく湾曲した嘴。

カモノハシを思わせる怪物、プラティプスファンガイアが、不気味な鳴き声を挙げる。

「ギギギ……キングが戻ってきたとは聞いていたが、まさかここまで早く見つかるてはなあ……」

(な、何？ あ の、お化け……?)

非日常の存在は、吉田は恐怖に陥れる。

(いや……いや！ なんて、なんでこんなことばかり……!!)

ショック続きの彼女に、もはや身体の震えを止める術はなかった。

目から涙が零れ、平穩が壊れたことを否応なしに自覚させられる。

どうして、どうしてこんなところになきゃ

「美ちゃん」

暗い感情に支配されかけた吉田の手を、暖かさが包む。

「たい、が、さん……」

「大丈夫」

静かに、太牙は言葉を紡ぐ。  
手袋を隔ても、太牙の手から伝わる熱は、吉田の心を光に照らして  
いく。

「すまない。キミが巻き込まれるのを、止められなくて」

心の底から申し訳なさそうに、太牙は頭を下げ、立ち上がる。

「……やはり僕は、奏夜のようにはいかないみたいだ」

呟かれた言葉は、誰に向けてのものだったのか。

それは太牙にも分からなかった。

「『偽装の駆り手』。一美ちゃんを頼む」

「ああ、手は貸さなくても？」

「愚問だ。それより、話はまだ終わっていないからな。覚悟しておけ」

突き放すように言い、太牙はプラティプスファンガイアに向かっていく。

「貴様がキングかぁ……ギギギ、人間とファンガイアとの共存を成し遂げた愚かな王……その座、俺が貰い受ける……！！」

欲望にギラつく目を、太牙は路傍の石を見るような目つきで睨み返

す。

「キングへの反乱、それが意味することはわかっているな？」

「何を今更！　貴様がキングの器でないことを証明してやる！」

「……そうか」

太牙はゆっくりと、左の手袋を外す。

「ならば、人間とファンガイアの共存を乱す者よ」

太牙の左手の甲と内側、一つずつ刻まれた刻印　　チエツクメイト  
フォーの証が、紅く輝いた。

「王の判決を言い渡す。……死だ」

太牙の顔にステンドグラスの模様が浮かび上がり、彼の背後に王冠を模した紋章が現れる。

紋章に記された称号は 【KING】。

「サガーク！」

太牙の呼び掛けに答え、土手に置かれた彼のバックから、白銀の影が飛び出した。

『○ ！』

（円、盤？）

それが、その生き物に対する吉田の率直な感想だった。

円盤のような薄い身体を持ち、側面には小さな牙とつり上がった目。太牙にしか理解できない言語 古代ファンガイア語で鳴きながら、人工ゴーレム『サガーク』は、太牙の腰に取り付き、『サガークベ



ルト』に変わる。

待機音が鳴り、太牙は、右手に握られた縦笛の意匠を持つプロトタイププフェッスル『ジャコーダー』を構え、叫ぶ。

「変身！」

ベルトのスロットに、ジャコーダーをインサートし、一気に引き抜く。

『レン・レン』

サガークベルトが回転し、蒼い螺旋状のウェーブが太牙の身体全身に行き渡る。

目映いばかりの光は、やがてガラスになって弾け飛んだ。

キバの鎧に巻き付くカテナとは異なり、サガの力を強化する鎖『デユナミスカテナ』。

ファンガイアの体組織に酷似しているステンドグラス状の胸部アーマー『エターナルラング』。

その中央には、『黄金のキバ』が持つ三つの魔皇石に匹敵し、代々キングに受け継がれてきた『漆黒の魔鉱石』がはめ込まれている。

頭部には魔石『ファングストーン』で作られた、キングの威光を示す王冠『キングクラウン』。

その下にある蒼色の仮面『サガ・ペルソナ』の輝きが、変身完了を告げる。

## 仮面ライダーサガ。

『運命の鎧』の異名を持つ、キングのみが装着を許される鎧だ。

「太牙さんが、変わった……?」

「あれが、サガの鎧ですか」

「ふうむ、初めて見るのう」

三者三様の反応を受けつつ、サガはゆっくりとプラティプスファンガイアに足を進めていく。

「ギイツ!」

プラティプスファンガイアは、嘴から先程見せた光弾を三発発射する。

「フン、つまらん技だ」

サガが握るジャコーダーからは、いつの間にかバイパートングと呼ばれる、赤いロッドが伸びていた。

「ッハア!」

サガがジャコーダーを一振るいすると、ロッドだった部分は鞭のようになり、プラティプスファンガイアの弾丸を薙ぎ払った。

「なっ!？」

攻撃はあっさり防がれ、プラティプスファンガイアは動揺した。

ジャコーダーのバイパーティングは、ブラッディアイアンという形状記憶合金で出来ており、ロッド剣状の武器である『ジャコーダーロッド』と、鞭状の武器『ジャコーダービュート』に自在に変化する。

サガの意思に合わせて、多彩な攻撃を可能とする武器なのだ。動揺の隙を逃さず、サガはジャコーダーを再びロッド剣状態に変える。

「ふっ!！」

ジャコーダーを振るうサガの剣さばきは、突きと払いが主体のフェンシングスタイル。

淀みない動きからの攻撃は、的確にプラティプスファンガイアの身体を斬りつけていく。

「ぐっ、舐めるなよ!!」

言うが早いか、プラティプスファンガイアは、エラのついた鍵爪を構える。この鍵爪には毒が仕込んであり、一掠りでも致命傷を負わせることができる。

爪が走り、サガと激しく斬り合う。

プラティプスファンガイアの戦闘技術はなかなかのもので、サガの攻撃の手を防ぎ、時には反撃までこなしてみせる。

だが、

「甘いな」

距離を取ったサガは、ジャコーダーを鞭状にチェンジ。

ジャコーダービュートを伸ばし、プラティプスファンガイアを絡め取る。

そのまま指揮棒のようにジャコーダーの柄を操り、プラティプスファンガイアを振り回していく。

「あつ、ガアアアア!!」

固い岩石が敷き詰められた地面に何度も叩き落とされるプラティプスファンガイア。

地を這うプラティプスファンガイアを、サガは威圧感と共に見下す。

「ヒツ……!!」

その時点で、プラティプスファンガイアの心は折れていた。後悔が全身を駆け巡る。

歴然とした格の違いに吞まれ、プラティプスファンガイアは悲観的なイメージしか浮かべることができなかった。

「そろそろ、終わりにするとしよう」

サガは蛇の紋様が描かれたフェッスルを取り出し、ベルトの上部サガークの口にくわえさせる。

『ウェイクアッブ』

サガークのコールと共に、サガは再びジャコーダーをスロットにインサート。  
覚醒エネルギーがジャコーダーを伝い、バイパートングが赤い光に包まれる。

サガがビームサーベルのようなそれを眼前に構えると、蒼い霧が景色を塗り潰していく。

「夜……？」

「こつも容易く、世界の理をねじ曲げるとは……」

「さすがはキング、といったところかのう」

吉田のみならず、カムシンとベヘモットさえも感嘆の声を挙げた。

さつきまで夕日が輝いていた空は、夜の帳に包まれ、サガの仮面と同じ蒼い月が浮かんでいる。

「ヒ、ヒイイイイイ！」

恐怖しか与えないキングの姿、臆病風に吹かれ、プラティプスファ  
ンガイアは敵に背を向け逃げ出す。  
だが無論、サガはそれを逃しはしない。

夜空に、彼の魔力によって作り出された『キバの紋章』が、漆黒の闇を切り裂き顕現した。絶対的強者の威光は、王に刃向かう愚か者を絡め取る。

「ハアツ!!!」

サガがジャコーダービュートを突き出すと、紅い光に包まれた刀身が伸びる。

伸縮した閃光は、一瞬でプラティプスファンガイアを刺し貫いた。

「グツ、ガアアアア!!!」

プラティプスファンガイアの悲鳴をバツクコーラスに、サガは上空へ飛び上がる。

キバの紋章を潜り抜けて着地すると、ジャコーダービュートの光は紋章を支点に、まるで絞首刑の縄の如く、プラティプスファンガイアを吊り上げた。

畏怖しか生まない行為に躊躇うことなく、サガは静かな手付きで、ジャコーダーを一撫でする。



「フンッー!!」

ジャコーダービュートから、生成された増幅魔皇力が注ぎ込まれていく。

「ギヤアアアアア!!」

聴くに耐えない断末魔と共に、サガの必殺技『スネーキングデスブレイク』は貫いた対象を内側から破壊した。

砕けたファンガイアのガラス片が、雨のように降り注ぐ。

渦中に悠然と立つ一人の戦士。

恐ろしくも、高貴な美しさを漂わせるサガの姿はまさに 王そのものだった。

次回、仮面ライダーキバ・BLAZING/BLOOD!

「……少し、遅れてもいいですか」

「『良かれ』と思う方を選びなさい」

「僕は、使つべきではないと思う」

「私、ちゃんと、言えなかった……」

「シヤナ。一つ、昔話をしてやろう。

二人の男と一人の女の、ひどい昔話をな」

「くそっ！ そんな……また、またなのか!？」

「祭りを邪魔するヤツは、万死に値することを教えてやるわあ!!」

【第十八話・彎曲／非情なる現実】

WAKE・UP!  
紅蓮の鎖を解き放て!

第十七話・Return of the King/裁きの蛇・Bパート(後書)

太牙兄さんはやっぱり、ダークキバよりサガだと思った今日この頃。

・奏夜にフラグ。けどくつつくかどうかは、まだわかりません。

・本編でも太牙兄さんは、怒りの沸点低い気がしますが、今回は彼なりに考えた上での怒りです。

この辺りも、一つの成長ではないかと。

・スネーキングデスブレイクは必殺仕事人を意識したんでしょうが……ええ、最初見た時は衝撃でしたとも(笑)

さて次回なんですけど……すみません。どうしてもやらなきゃならぬ話がありました、また番外編です；

16話と17話の中間にあったストーリーなんですけど……『じゃあ17話更新する前にやれよ』と思った方拳手！ はい、まったくもってその通りです( < | > )

ですが、楽しんでもらえるような話にしますので、どうかお付き合いをお願い致しますm( | )m

では、また次回にて。

## 第X話・十字路ノ牙と剣（前書き）

今回はエンジェル先生の『デルタと黄金の不死鳥』とのコラボ企画です。

『デルタと黄金の不死鳥』未読の方は、最後のページにキャラ紹介が御座いますので、参考にしてください。

「クロスオーバーとは、複数の独立したシリーズが一時的に一つのストーリーを共有、進行させる事をいう手法のことだ。

語源は、並立して進むストーリーラインを、新たなストーリーラインが横断して行く、と言われている。

ちなみに、平成仮面ライダーにおいて、初のクロスオーバー作品は、『仮面ライダー電王&キバ・クライマックス刑事』とされている。

しかし劇場作品以外を入れれば、『ハイパーバトルビデオ・仮面ライダー 龍騎VS仮面ライダーアギト』。

またパラレルではあるが、クウガと世界観を共有するアギトが、初のクロスオーバー作品とする話もある。

目覚める、その魂！」

キバットバット三世

## 第X話・十字路ノ牙と剣

某日某所、とある【555の世界】。

「うにゃあ〜                    いい天気になって良かったにゃ」

「今年の春は雨ばかりだったからな。桜も早くに散っちまって寂しいもんだ」

「でもでも、ミルはご主人様とデート出きるなら、どこに行ってもいいよ」

「お！                    嬉しいこと言ってくれるじゃねえか」

着物を着崩した青年が、猫耳と尻尾を持つ少女をよしよしと撫でる。

ミルと呼ばれた少女は気持ち良さそうに、青年に寄り添う。

高杉晋作とミルフィーユ・キャットウン。

ある【キバの世界】での仮面ライダーキバであるが、わけあってこの【555の世界】で暮らしている。

見ての通り、仲の良いカップルである二人。今日はミルの希望により、街へとデートに来ていた。

平日であるからして、かなり街は空いていたが、二人にそんなことは関係ない。

いつものように、熱いデートをするだけ。

そのはず、だった。

「お前が『仮面ライダーキバ』か」

気が付けば、二人の目の前に、一人の眼鏡をかけた長身の男が立っていた。

「にやにや!?!? ご、ご主人様、変なヤツがいるにや!」

「……なんだお前？ どうしてキバを知ってる」

「ふん、どうでもいいことだろう。貴様個人に恨みは無いが、少々そっちの娘に用がある。一緒に来てもらおうぞ」

ミルを指差す男に、晋作は不快感を露わにする。

「おいおい、新手のナンパかよ？ ミルちゃんに手え出すなら、容赦しねえぜ」

「ご主人様……」

庇うように立つ晋作。ミルは嬉しさに目を輝かせる。

「チツ、相変わらず人間は理解出来んな。……さっさと終わらせて貰う」

言いながら、男の姿は、ギラファノコギリクワガタの始祖『ギラファアンデッド』に変わる。

「アンデッドか！ ミルちゃん、変身だ！」



「了解にゃ」

高杉の呼び掛けに答え、ミルはキバの鎧を纏わせるべく、ミルキバットに姿を変えようとする。

「おっと。仮面ライダーとまともに戦う気は無いさ」

キラファアンデッドが口角を吊り上げ、

ドスッ！

「う、あ……！！！」

歪な刺突音と同時に、高杉の隣にいたミルが崩れ墜ちた。

「ミルちゃん！？」

ミルの背後には、蠍とカメレオンを掛け合わせたような異形、合成アンデッド、ティターンが立っていた。

「おい、ミルちゃん！！　しっかりしろ！　目を開けてくれ！」

高杉が揺すっても、ミルは地面に伏し、ピクリとも動かない。

彼女を刺したティターンの触手からは、黒ずんだ雫が滴り落ちていく。

「くそっ、このアンデッド、いつの間だー!？」

「そいつはティターンと言ってな。」

蠍の毒、カメレオンの擬態能力の両方を使える。つまり、その姿を消すことも可能ってわけさ」

「ッ、てめえ!!！」

表情を憤怒に染める高杉だが、ギラファアンデッドは素知らぬ顔で言う。

「安心しろよ仮面ライダー、死んじやいない。殺しては意味がないからな。」

それに、これで俺の……いや、俺達の目的は達した」

ギラファアンデッドはあの一瞬で、晋作の側にいたはずのミルを担ぎ上げていた。

「なっ、待てこの野郎！ ミルちゃんを返しやがれ！」

「返すくらいなら最初から攫うものか。じゃあな。仮面ライダー」

ギラファアンデッドとティターンは、ミルごと光のオーロラの中へ平行世界に姿を眩ます。

高杉も追い掛けようとするが、光のオーロラは霞のようにかき消えていた。

「ッ、畜生があ……！」

油断した自分への怒りか、むざむざミルを拐われたことへの無力感か、高杉は拳で近くの街灯をへし折った。

時を同じくして、とある公園。

「キミが仮面ライダーブレイド、いや、ジョーカーかね？」

買い物帰りに、少し遊んでいくつもりだった仮面ライダーブレイド、沖田総司&その義妹であるキャットタウン族の少女、沖田結衣もまた、謎の老人に敵意を向けられていた。

「お、お兄ちゃん……」

「下がっている、結衣。貴様、何故ジョーカーとブレイドのことを知っている？ アンデッドか」

「ふむ。当たらずとも遠からず、といったところだな。

私の名は天王路博史」

「天王路……知らないな。どこかで会ったか？」

「出会った、か。ブレイドに関して言うならそうかもしれないがね……」

いや、どうでもいいことか。

それよりも沖田総司くん。ジョーカーであるキミを見込んで、少々協力して貰いたいことがあるのだが」

「悪いが、断らせてもらう。

……経験上、俺をジョーカーだと知って近づいてくる人間に、ロクなヤツはいないんでな。

何より、結衣との時間を裂きたくない」

「クツクツク、随分と人間にご執心のような、沖田総司。人間はキミを裏切ったと聞いていたのだがね。

……所詮は、紛い物のジョーカーか」

「っ、総司お兄ちゃんを悪く言わないで！ お兄ちゃんがどんなに苦しんできたかも知らないくせに！」

今にも飛びかからんばかりに天王路を睨む結衣。

そんな結衣に、天王路は冷たい視線を送る。

「戯言を言うてないよ、お嬢さん。キミの知る沖田総司は、全て幻だ」

天王路は背広の懐から、一枚のカードを取り出す。

トランプのような絵柄のそれは、

「それは……ラウズカード!?」

だがその絵柄に描かれた生物は、ジョーカーである総司でさえ知らないものだった。

「変身……!」

天王路は左腕に装着されたカードリーダーに、人造アンデッド【ケルベロス】のカードを通す。

天王路は頭部、両肩、胸部、合わせて四つの頭部を持つ最強の人造アンデッド、ケルベロス?へと姿を変えた。

「やっぱりアンデッドか! 何の始祖か知らないが、俺が封印してやる!」

ブレイドに変身すべく、ブレイバツクルとカテゴリーAのカードを取り出す総司。

だが、

「残念だが、変身はさせないよ。

ブレイドの姿は、もう二度見たくないのね」

ケルベロス？が手を翳すと、カテゴリーAが総司の手を離れ、ケルベロス？の体内に吸収されてしまった。

「なっ、カテゴリーAが！」

カテゴリーAだけではない。

総司の持っていた52枚のカード全てが、ケルベロス？に吸い寄せられていく。

「フフ、ハハハ！ これは凄い！ まさか全てのラウズカードを吸収できる日が来ようとはな！！」

「バカな、ラウズカードを吸収するアンデッドだと……うぐっ！？」

言い終わるか言い終わらない内に、総司が胸を押さえ、苦しみだし

た。

「う、ぐ、があああ!!」

「総司お兄ちゃん!？」

慌てて結衣が駆け寄るが、その声も届いているかは怪しかった。

「眼が青く……まさか、またジョーカーの力が……!」

キャットタウン族である結衣は総司に噛み付き、ジョーカーの力を抑えようとするが、

「が、う、ああああ!!」

「ど、どうして? 何で結衣の力が効かないの?」

「無駄だよお嬢さん。

彼は強靱な精神力でジョーカーの力を抑えていたらしいね。

だが本来、ジョーカーの闘争本能はそんなもので抑えられるほど生易しくはない。

つまり、彼は少なからず、私が吸収したラウズカードの力に頼って



いたというわけだ」

柱が1・2本でも消えれば、家屋は崩落する。

総司はラウズカードの支えを失い、残った精神力だけでジョーカーの力を抑えられなくなったのだ。

「クツクツク、これでいい。ジョーカーの力と、キャットウン族が持つキバの力、この2つの力さえあればな……」

ケルベロス？は高笑いを上げ、総司と結衣に向かってエネルギー弾を放った。

「きゃっ！！」

強烈な光と爆音に目を瞑る結衣。

目を開けた時にはもう、総司もケルベロス？の姿も無かった。

「ど、どうしよう？ お兄ちゃんが、総司お兄ちゃんが……！」

あのままでいたら、再びジョーカーに、外道に墜ちてしまう。

だが自分は剣道の嗜みこそあれど、所詮はただの無力な女子高生。

卓越した力を持つ総司を、あの天王路という男は確かに負かしたのだ。

「あんな人からどうやって、お兄ちゃんを助ければ」

「総司がどうかしたのか？」

突然、後ろから声がかかる。

錯乱に近い状態の結衣を止めたのは、【カリスの世界】からやってきたもう一人のジョーカー、黒木翔哉／仮面ライダーカリスだった。

「翔哉、さん？」

「ああ、やっぱり結衣ちゃんだ。久しぶり」

翔哉は人間でないとは思えないほど、屈託のない笑顔を浮かべる。

「あいつに何かあったのかい？ 俺は総司とアンデッドの力を感じたがら来てみたんだけど、もし何かあったならってうわあっ!？」

いきなり結衣がタツクルに近い勢いで、翔哉にしがみついていた。

「うっ、ひっく……」

「……結衣ちゃん？」

自分のジャージを掴んで泣きじゃくる結衣を、翔哉は驚いて見つめる。

真珠のような涙をこぼしながら、結衣は叫んだ。

「お願い翔哉さん！」

お兄ちゃんを、お兄ちゃんを助けて！」

世界は変わって、【BLAZING / BLOODの世界】。

御崎高校は、今日も平和に授業を終え、校庭はほのぼのとした下校風景に彩られていた。

そんな中、近頃キバであることを明かし、色々吹っ切れた紅奏夜は、シヤナと悠二に提案する。

「よし、せっかくだから、スタバでも寄って帰るか」

「……」

「なんだ悠二。何か言いたそうだな」

「あの、先生。スタバもいいですけど、『マル・ダムール』へのこだわりとかは？」

「今日は何だか、違う店の味が恋しくなる気分なのだ」

「どこの夢見る乙女ですか」

「細かいことは気にすんなって。シャナも行きたいだろ？　スタバ」

「私がコーヒー苦手なの知ってるでしょ。行くなら一人で行きなさい」

「スタバには甘味もあるんだけどねえ」

「ピピッ。」

シャナのトレードマーク、頭頂部から伸びる寝癖のような髪の毛がぴくりと反応した。

やがて、シャナがぼそつと「……行く」と呟く。

「ふっ、ちよろいな」

「……僕、今でもたまに、先生がキバだって信じられない時があり

ますよ」

「現実は大體こんなもんだ。お前も大人になればわかる」

「僕は今、ピーターパンの気持ちがわかりましたけど」

少なくとも、こんな大人にだけはなりたくない。

悠二はそう心に誓った。

馬鹿馬鹿しくも穏やかな会話を交わしつつ、三人は校門を出る。

「あつ、いたいた!!      おい、奏夜!」

「……………」

俺は何も聞こえなかったし何も見なかった。

即決し、奏夜は足早にその場を去り、空を見上げる。

ああ、いい青空だなあ。

「わざとらしく無視すんじゃないやねええ!」

着物の青年のドロップキックが、奏夜の後頭部に炸裂した。

「ぐぐぐぐ!」

情けない呻き声と共に、煉瓦敷きの歩道をざりざりと滑る奏夜。

「ちよ、おい晋作!

何やってるんだよ、この人がこの世界のキバなんじゃないのか!」

「ち、やり過ぎです……」

一緒にいた少年と少女が、慌てて高杉と呼ばれた青年を止める。

少年 黒木翔哉は黒っぽいジャージ姿。

少女 沖田結衣はふわふわした茶色のロングヘアに、大きな麦藁帽子を被り、ゆったりしたワンピースは大人しめの印象を受ける。

「いーんだよ。音也と同じで常にふざけ倒してるヤツだから。おい、起きろ奏夜」

「はっ、こっはどっ？ 私は紅奏夜！」

「正常じゃねえか！ ボケてねえでさっさと立て！」

置いてけぼりなシャナと悠二が一連の流れに啞然とする中、洪々奏夜は立ち上がり、着物の青年を真っ正面から見つめる。

「……よう、久しぶりだな高杉晋作。また会うことになるたあ思わなかったぜ」

「ああ、俺も思わなかったよ。

紅奏夜 いや、もう一人のキバ」



「んじゃ、話を整理しようか」

場所を移し、とある公園のベンチに座る奏夜が、シャーペンを回しながら言う。

「お前らはあのネコ娘と、総司ってやつを何者かに拐われ、二人を取り返すべく、ナディアさんの力を借りてこの世界に。」

で、ここが俺の世界だとわかった高杉が、俺に助けを求めに来たってわけか」

「ああ。本当ならミルママの力でも世界は越えられないんだが、今は世界の壁が緩くなってるみたいだな。」

どうにかあのアンデッドの居場所を特定して、この世界に来れたんだ」

「成る程。ちなみにそのナディアさんは？」

奏夜の質問に、翔哉が答える。

「総司が居候してるとこの、広瀬って人について貰ってます。」

広瀬さん、総司がいなくなって大分混乱してたみたいだから」

翔哉が苦々しく言っつて、隣に座る結衣も表情を曇らせる。

「ふむふむ。ちなみに、結衣ちゃんが総司ってやつのお義妹で、翔哉くんがその友達ってことでいいのかな？」

「はい。沖田結衣です。……あの、奏夜さんがこの世界のキバ、なんですよね？」

「もちのろんだぜ！ ファンガイアの王、キバとはここにおわす紅奏夜のこと……モガッ！」

「キバット、拡張高いキャッチコピーを出すな」

奏夜は呆れ顔で、いつの間にかいたキバットの口を塞ぐ。

翔哉がその様子を見て呟いた。

「なんか、晋作と随分イメージが違うなあ」

「どつという意味だそりゃ……」。

まあいい。で、奏夜。最近何か変わったこととかは無いか？」

「目の前に異世界から来た人がいます」

「もう一回ドロップキック喰らいたいかコラ」

しれっとした表情で言い返す奏夜と、額に青筋を浮かべる高杉。

翔哉じゃなくとも、あまりに違うと思うだろう。

「ま、それはそれとして。変わったことか……」

さすがに脱線し過ぎたと思ったのか、奏夜は恐ろしいほど自然に、話の流れを戻す。

しかし、

「ちょっと待ちなさい！」

「ちょっと待ってください!」

ここまでの話の流れについて行けず、シャナと悠二が慌ててストップをかけた。

「何だよ二人とも、物申すことがあるのかね?」

「いやありまくりですよ!」

さっきまで蚊帳の外で、しかも奏夜は普通に【異世界】なんて言葉を使っている。

質問が無い方がおかしい。

「もう一人のキバとか、異世界とか、何ですかそのいきなりな展開は!」

「いきなりな展開も何も、そういう展開ですとしか言えないっつのお前らが、頑張って信じるしかないな」

「そんな話、いきなり信じられるわけないでしょ!」

「つつてもなあ……」

どう説明したものかと思案していると、

「落ち着け、二人とも」

シヤナの身の内に宿る“紅世の王”アラストールが助け舟を出した。

「おお……。本物のアラストールだ」

【555の世界】で小説となっているシヤナの物語を読んだ高杉は、さして驚かなかったが、

「ペ、ペンダントが喋ってる……」

それを知らない翔哉と結衣は驚きを隠せなかった。

「今更、不可思議な現象を否定するな。

それにシヤナ、紅世もまた、この世界から見れば、異世界だぞ」

「あ……」

そう言われればそうだ。

この世の歩いてはいけない隣、言わば平行世界、それが紅世だ。」「  
あの、シヤナさん、悠二さん……」

駄目押しに結衣が、被っていた麦藁帽子をとる。

「!?!」

「ね、ネコ耳？」

悠二が触ってみると、作り物では有り得ない質感。

つまりは本物だ。

「も、もういいですか?」「

「あつ、ごめん」

結衣は恥ずかしそうに、帽子を被り直して翔哉の後ろに隠れてしま  
う。

翔哉もまた、ジョーカーラウザーを顕現させ、中央部のスリットに  
カテゴリーA  
を通した。

「変身」

【CHANGE】

無機質な電子音と共に、翔哉の身体は蠼螂を模したハートス  
トの仮面ライダー、仮面ライダーカリスに変わる。

「結衣ちゃんと、俺のこの姿で信じて貰えないかな？」

絶句したシャナと悠二にカリスが聞く。

「これで信じるなって方が無理よ」

「……シャナに同じです」

「ありがとう。話が早くて助かるよ」

満足気に頷き、カリスは【SPIELIT】のカードをラウズ。

透明なゲートをくぐり、翔哉の姿に戻る。

「俺も以前、高杉達のいた世界に迷い込んだことがあってな。高杉とネコ娘には、その時世話になったんだ」

「いよいよ持って、何でもアリになって来ましたね……」

奏夜の補足説明に、悠二が額を押さえる。

（僕自身が非日常的な存在だけど、これはあんまりな状況だよな）



疲れたように溜め息をつく悠二に苦笑し、奏夜は高杉に向き直る。

「んで、話を戻すが、ネコ娘と総司ってやつのは居場所については知らないし、攫ったアンデッドって連中のこともわからない」

「……そうか」

「ただ」

落胆を隠せない高杉達に、奏夜は手を差し伸べる。

「俺でよければ手を貸すぜ。お前らには一応借りがあるからな」

「俺様も付き合っぜ。同じキバのよしみだ」

「　　ありがとよ、奏夜。キバツト」

高杉は力強く、奏夜の手を取った。

「シヤナ、悠二。お前らはどうする？  
お前らにとっちゃ赤の他人だし、借りがあるのは俺だけだから、無理には言わないが」

ずるい。

わざとらしい問い掛けに、シヤナと悠二は口に出さず、そう思った。  
こんな聞き方されて、断れるわけがないのに。

「勿論協力しますよ。赤の他人でも、困ってる人には違いありませんから」

「要はそいつらの探してるヤツを取り返せばいいんですよ。」

厄介事は“徒”やファンガイアだけで十分だわ」

「うむ、我も異存はない。歪みがこれ以上拡大するのは、望ましい事態ではないからな」

「結構」

奏夜は全員の意向を、高杉、結衣、翔哉に伝える。

「さっさと取り返しに行こうぜ。お前らの大切なもんをさ」

その答えを待ち構えていたかのように、光のオーロラが六人を包んだ。

「予定通りかね？」

「ああ、少々手間取ったが、奴らを別の場所に分断させた」

「ライダーは三人か……物足りないな」

暗闇に三つの声が反響する。

そこは漆黒の闇が全てを塗り潰す、不気味な世界。

光源の一切ない空間ながらも、何故かそこにいる三名の輪郭だけはハッキリしていた。

天王路、ギラファアンデッド、そしてもう一人　ベージュ色の外套と帽子、眼鏡をかけた男、鳴滝である。

「まったく誤算だった……。」

世界の壁が不安定だったとはいえ、まさかこの“完全な融合を果たした世界”に奴らを導いてしまうとはな」

「そう言うな鳴滝君。計画は順調じゃないか。

既にジョーカーもキャットタウン族も我らが手の内。

連中を始末した後、彼らの力を使い、歪みの原因たるライダー“片倉景綱”を倒せばいいだけのことだろう？」

片倉景綱。

【555の世界】の仮面ライダーデルタにして、仮面ライダーオーデインの時間改変により、一度死の運命を歪められた存在。

だがそれによって、本来辿るべき道を違え、歪みの原因になってしまった者。

鳴滝は彼を始末すべく、とある【ブレイドの世界】の存在、天王路とキラファアンデッドを蘇らせたのだ。

「簡単にはいかんぞ。キミ達はこの世界にとっては毒。

“完全な融合を果たした世界”は、繊細なバランスの元成り立っているが故に、破壊されれば大きな歪みを生む。

あまり時間をかけるなよ。

この世界の破壊がトリガーとなり、他の世界も滅びに向かうかも知れん」

「成る程な……わかった。我々はキミに蘇らせて貰った身だ。従うとしよう。

だが、片倉景綱を始末した後は、自由にさせてもらおうぞ」

天王路が念押しすると、鳴滝は頷く。

「ああ、私は片倉景綱を始末してさえくれればそれでいい。

キラファアンデッド、君もそれを忘れるな」

「ふん、お前こそ忘れるなよ。

オレはライダーを倒せるという利害があるからこそ、貴様に従っているだけだ」

「フツ、頼もしいな。では頼んだぞ」

鳴滝は指を鳴らし、光のオーロラを呼び出す。

この時鳴滝は、天王路達の余裕に反して、表情を曇らせていた。

天王路達には言わなかったが、鳴滝には一つ、奏夜達とは別に危惧していることがあったからだ。

「彼らが、動かなければいいのだが」

不安要素が現実にならないことを祈りつつ、鳴滝はオーロラの中へ消えていった。

「ダイヤのカテゴリークが？」

「ああ、いつの間にかカードから解放されていた。無論、リモートのカードも使ってはいない」

「ふむ、おかしいですね。あなたでないとしても、違う世界のレンゲルが解放したとも思えま……っ！」

高層ビルに囲われた箱庭のような噴水広場。

白いマフラーにセーターを着た青年が、空に浮かぶ無数の惑星を睨む。

「どうした？」

彼の隣にはもう一人、ダークスーツに身を包んだ青年がいた。

茶髪の下にある表情はサングラスに隠れているが、白いセーターの青年とさして変わらない年齢に見えた。

「マズいですね。“完全な融合を果たした世界”に他世界から干渉者が現れました」

「干渉者？」

スーツの青年が顔をしかめた。

「一体どの世界の人間だ」

「“黄金の不死鳥の世界”ですよ」

「何ッ!?!」

予期せぬ言葉に、スーツの青年が苦虫を噛み潰したような顔になる。

「クソッ!! よりによってあの世界と繋がっただと……オーデインは何をしている!?!」

「仕方がないでしょう。あの世界の特異性はもはや、オーデインでも完全には把握出来ません。あれだけ様々なライダーが集まれば、無理からぬことです」

白いセーターの青年は疲れたように溜め息をついた。



「とは言え……放っておくわけにも行きませんね。カードの解放に関しても、此度の事件と無関係とは思えません」

「ああ。恐らく、カテゴリーKもそこにいるだろう。」

『黄金の不死鳥の世界』のライダーは何人いるか分かるか？」

「気配からして……おや？ 偶然ですね。キバにカリス、そしてブレイドです」

「……あの世界のブレイドか。確か、沖田総司という名だったな」

「僕はここで監視を続けます。あなたにお任せしても？」

「ああ、勿論だ」

スーツの青年は手を翳し、光のオーロラを呼び出す。

「ブレイドの不始末は、ブレイドがつける」

彼の手には、ケルベロス？が吸収した筈の、カテゴリーAのカードが握られていた。

『デルタと黄金の不死鳥』、キャラ紹介より抜粋。

高杉晋作／仮面ライダーキバ

『キバの世界』出身の青年。結構いい加減で享乐的な性格だが、自分の信念には忠実で命を捨ててまでも貫く漢らしい一面がある。白い着物を左側だけ着るといふ奇抜なファッションをしている。今作随一のツッコミキャラだが、余計な事を言っただけで死亡フラグをたてて、ミルフィューに調教される毎日を過ごしている。また今作で1番FFRを嫌がる人物でもある。意外にもバイオリンの演奏をはじめ、ダンスや音ゲーの才能に優れる。ミルフィューとは相思相愛のバカップル。『龍騎の世界』に行つた事があり、仮面ライダータイガのカードデッキを持っている。因みにファンガイアではないらしいが……

ミルフィュー・キャットウン

晋作を『ご主人さま』と呼ぶキャットウン族の少女。ロリ顔に淡い栗色のツインテールに猫耳・尻尾を生やしている。愛称は『ミルちゃん』で猫らしく、『うにゃあ』『くだにゃ』等が口癖。『猫耳美少女』を自称する等、過剰な自己主張をするが大抵晋作にスルーされ、仕返しに調教している。『キバの鎧』の所有者で、キャットウン族の力で尻尾を絡ませて電気を発したり、爪を尖らせる事ができる。悪戯好きな女の子だが、晋作を一途に愛しており、少しヤンデレ。胸が小さい事をかなり気にしており、胸の事をバカにした人物や巨乳好きを血祭りにする。

沖田総司／仮面ライダーブレイド

『剣の世界』出身の青年。真面目で正義感が強くツンデレだが、深い殺意や憎悪といった激情にかられやすい感情的な一面がある。黒髪ロングヘアで袴履きと古臭いファッションをしている。実は新

撰組一番隊隊長・沖田総司その人で、自らの経験を活かして『岡元道場』で剣道を教えている。『剣の世界』で仲間裏切られたり、社会から拒絶されたり等壮絶な過去を経験しており、そのせいで外道に墜ち、自ら不死生物『ジョーカー』に変貌してしまう。ジョーカーの力を解放した時には瞳の色が青くなり、直接キングフォームに変身出来る。また一時期人間不信に陥っていた。大シヨツカーとの決戦に参加し、ライダートーナメントでは仮面ライダーストロンガーと戦っている。

#### 沖田結衣

総司に拾われたキャットタウン族の少女。しかし本人にはその記憶がない為、ミルフィューヤナディアのような力があるのか不明。だが、総司のジョーカーの力を解放させたりと潜在能力は未知数。ミルフィューヤと同じく猫耳と尻尾を生やしているが、本人はいらな思っているらしく、外出時は帽子で隠している。最初は猫の鳴き声しか話せなかったが、今では普通に会話出来るようになった。拾ってくれた総司を『総司お兄ちゃん』と呼び、彼から貰った首輪を大事にしている。総司が好きで妹のような恋人のような曖昧な立ち位置にいる。

#### 黒木翔哉／仮面ライダーカリス

『カリスの世界』出身の少年。外道に墜ちてジョーカーに変貌した総司と異なり、生粋のジョーカーである。アンデッドではあるが、人間を愛し、アンデッドと人間はわかりあえると信じている。その為、人間は永遠に孤独で、誰とも理解する事が出来ないと考える総司と意見が対立する事になった。自分の出身である『カリスの世界』のブレイド／剣崎怜とは恋仲である。

## 第X話・十字路/牙と剣(後書き)

ついに始まりました、エンジエビル先生とのコラボ企画『黄金の不死鳥編』！

これは以前、エンジエビル先生の作品『デルタと黄金の不死鳥編』に、紅奏夜を出演させて戴いた時のアンサー企画でもあります。

エンジエビル先生、遅くなってしまって申し訳ありません( < | > )  
初のクロスオーバー企画ということで慣れない点もありますが、エンジエビル先生の生み出したキャラ達の魅力を精一杯出せるよう、頑張ります！

さて、分断されてしまった仮面ライダーチーム。ミルと総司を使い、暗躍する天王路達の目的は？ そしてもう一人、ブレイドの原典である『彼』はどう動くのか？

黄金の不死鳥編は全四話編成ですので、またお楽しみに！

ではまた、次回にて( ^ O ^ )

第X話・EPISODE・RED / 憤怒の虎・悲哀の猫

御崎市郊外の森。

人も滅多に寄り付かない不毛な土地で、荒れ放題の草地と、徒等を組んで立つ木々が、せめてもの自己主張であるような場所。

周囲の状況を把握し、高杉は唸る。

「ダメだな。翔哉達とは見事に分断されちまった」

「敵の干渉？」

「ああ、多分ミルちゃんを拐った連中の仕業だろうよ」

「こっちの面子は俺に、高杉、シャナの三人か……」

キバットが「俺様を忘れんなあ！！」と怒鳴るものの、奏夜は意に返さなかった。

「もしそうならマズいわよ。向こうで戦えるのは、翔哉ってヤツだ  
けなんじゃないの?」

三人一緒にいる保障もないし、最悪、一人一人バラバラな可能性も  
ある。

悠二と結衣はまるで戦えない、というわけではないが、それでも一  
般的な水準だ。

敵に対抗する力はない。

「しゃーねーな。ネコ娘と総司ってやつを探しつつ、悠二達と合流  
すっか」

「場所は分かるのかよ」

「悠二の居場所だけならね」

存在の力を手繰ると、悠二もこちらに向かっていているようだった。

そのことに安堵しつつ、シヤナは歩き出し、奏夜と高杉もそれに続  
く。

「そついや、シヤナちゃんは……」

「シヤナでいい」

「そうか。じゃあシヤナはさ、悠二とはどこまでいってんだ？」

ゴソツッ！

シヤナは近くの木に思い切り頭を打ち付けた。

高杉を振り向く顔は、真っ赤に染まっている。

「な、なんで会ったばっかのお前に、そんなこと言われなきゃならないのよ！……」

「あん？ そりゃ、俺達の世界じゃお前等の物語は……」

ライトノベルの中の話として描かれている、と言おうとしたのだが……、

「ちよつと待てやあ!!」

奏夜が高杉の口を、某特殊部隊のEースが使う接近戦格闘術で塞ぐ。

以下、シャナ&アラストールに聞こえないレベルのこそこそ話。

(モガツ、な、なにすんだよ!!)

(迂闊なこと喋るな! いくら違う世界の話だからって、自分が虚構や夢物語の存在だと知って、気分良くなるヤツがいるわけねえだろ!)

お前はFF?をプレイしてないのか!?)

(お、おお分かった。そこで何故FF?を例えに出すのかはわからんが、とにかく分かった)

よし。と奏夜は腕を外す。

「高杉を責めてやるな。」

俺が前に会った時、お前と悠二のことを話してたんだよ」



「は、話したって……」

「フレイムヘイズのことから、お前達の恋模様まで」

「そ〜う〜やあ〜!!」

シヤナの右ストレートに打ち抜かれ、奏夜の身体は宙を舞い、地面に落下。

「……神よ。あなたは優しい嘘でも許さないんですか？」

痛みと世の不条理を嘆く奏夜に合掌し、高杉は更に聞く。

「で、結局どうなんだよ。キスくらいはしたのか？」

「きつ……、し、しない！ だいたい、私と悠二は、そんなことするよつな関係じゃないんだから！」

「……まさかここまで見事なツンデレ反応が見られるとは思わなかったぜ。」

つまりそつ言つのは言葉だけで、本当は好きで好きでたまらないと

「うっ……づるさいづるさい……い……！」

「おお、まさかシャナの代名詞と言われるセリフまでも……ミルちゃんにも聞かせてやりたかったって危なっ……！！  
止める、贅殿遮那を振り回すな……！」

その後、真っ赤になりながら刀を振り回すシャナを奏夜、キバツト、アラストールが宥め、一行は悠二達と合流すべく、森の中を進む。

「でもよシヤナ。真面目な話、そうやってシンケンするのは、あまり良いことじゃないぜ」

「？」

からかいの口調は息を潜め、高杉は言う。

「俺の知り合いの話だけだよ。  
そいつはさ、“惚れた相手を守る覚悟”があるかってことに悩んでたんだ」

こことは違う世界で出会った“キバ”を思い出し、高杉は続ける。

「惚れたかどうかはさておき、少なくとも悠二はお前にとって、守りたい人なんだろう？」

「……」

シヤナは一瞬だけ考え、

「うん」

今度は照れもせず、はっきりと頷く。

それは恋路とは関係なく　ただ素直に、守りたいという感情が浮かんだからだった。

シヤナの返答に、高杉は異世界の“キバ”の時と同じ言葉を告げる。

「そう思えるなら、もっと単純に、本能の赴くまま大切な人を守ってみよ。」

その時になれば、心が何をすべきか教えてくれる。  
でなきゃ、今の俺みたいになっちまうぞ」

最後の言葉には、深い寂寥が込められていた。

愛する者を奪われた痛み。

彼が漂わせる悲しみは、奏夜とシャナにも伝わる。

「晋作にとっては、ミルってヤツが大切な人なのね」

「ああ。何にも代えられない、一生懸けて愛すると誓った人だよ。だから、必ず助けなきゃならないんだ」

高杉の背中には、シャナでも及ばないような覚悟、使命感が伺えた。

「シャナ、高杉をよく見てろよ」

「えっ？」

奏夜がシャナの耳元で囁く。

「高杉の背負う“愛”の形は、俺がどうやっても教えられないもの

だからな」

「……どういふこと？」

「俺がとやかく言うより、本当の愛を見ろってことだよ」

奏夜は曖昧に言葉を濁し、耳元から口を離した。

「ところで高杉、その悩んでたヤツって、誰のことだ？」

「ああ、こことは違う世界のキバだよ。

桜井黒乃っていうんだが、まだ高校生のクセに、凄えガッツのあるガキだよ……」。

“大切な人を守りたい”って気持ちは人一倍強いし、俺から見てもかなり見所があるライダーだな」

「へえ……。確かに面白そうなヤツだな」

大切な人を守りたい、か。

悠二みたいに、自分にできることを頑張れるやつなんだろうな。と奏夜は評価する。

と、そこまで奏夜が言ったところで、三人は森林地帯を抜け出した。

「っ!」

三人は一気に警戒心を強める。

木々が周囲を取り囲む開けた空間。

そこに二つの人影が見えた。

「世界を超えてまで追ってくるとはな。嘗めてたよ、仮面ライダー」

「ブウウ……!」

「っ、てめえら、あの時のアンデッドだな!」

キラファアンデッドとティターンを睨み付ける高杉。

「あれが、晋作の敵？」

「ああ、油断するなよ。あいつらアンデッドは死なねえからな」

「死なない？　　どういふことだ高杉」

「そのままの意味だ。アンデッドは殺せない。何度倒してもしばらくしたら復活しちまう」

「なにか対処策はあるのか？」

アラストールの質問に、高杉は着物の裾から何枚かのカードを取り出す。

「それは？」

「翔哉から借りたラウズカードだ。活動停止したアンデッドにこいつを投げれば、封印できる」

「成る程な。」

よし、シヤナ、お前はあの蠍とカメレオンを足して二で割ったようなヤツをやれ。

俺と高杉はクワガタをやる」

「わかった」

瞳と髪を紅蓮色に染め、シヤナは夜傘から取り出した贄殿遮那を構える。

「ふん、世界が変われば様々な異能者がいるようだな……」

シヤナを見て呟くギラフアアンデッドに、高杉が吠える。

「おいアンデッド！ ミルちゃんは無事なんだろうな！！」

「相当あの娘が大切らしいな。ツクク、なら会わせてやるつか？」

「何？」

ギラフアアンデッドは口角を吊り上げた。

「そら、お前の後ろに来ているぞ！！」



『なっ!?!?』

奏夜、シヤナ、高杉の頭上を、爪が掠めた。

どうにか反応が間に合うものの、三人は地面を転がる。

顔を上げた三人の目の前には、

「ミルちゃん!?!?」

「ネコ娘!?!?」

そこにいたのは、ネコ耳を生やし、長い栗色の髪をツインテールに結い、白いTシャツに身を包んだ少女、ミルフィーユ・キャットウソだった。

「ミルちゃん、一体どうし……!?!?」

「シャツ!?!?」

「っ痛！」

バチイツ！！

普段の無邪気さを欠片も見せず、恋人であるはずの高杉にさえ、手加減なしの電撃を浴びせる。

「高杉、大丈夫か！？」

「あ、ああ」

「……どうなってるの？ あいつが晋作の大切な人じゃなかったの？」

シヤナに対する答えを、高杉は用意できなかった。

軽く焦げた手を押さえ、高杉は信じられないと言わんばかりに、豹変したミルを視界に収める。

「何を言おうが無駄だ。この娘にはテイタンの持つ毒が回っている」

「毒だと？」

「テイターの毒は闘争心を覚醒させ、刺した相手を戦闘マシンに変える。

お前の声は届きはしない」

「マジかよ……おいネコ娘！ 本当に何も聞こえねえのか！」

「カツ！」

獣のような唸り声を挙げ、見た目と同じ獣のような動きで、ミルは奏夜に襲いかかる。

「ちっ！」

「無駄だと言っているだろう。ふん、なんとも脆いものだな。仲間だ恋人だと言っても、ふとしたことでこのザマだ。

なあ、高杉晋作」

貴様の言う愛も、所詮はまやかしだったということだな。

ブチッ。

ギラファアンデッドの蔑みが、高杉の感情を決壊させた。

「……………つ、貴様ア！！」

湧き上がる憎しみを爆発させ、内に眠る力を解放する。

「殺すッ……………殺す殺す殺す殺す殺す殺す！！」

殺意の嵐は、奏夜とシャナにも伝わる。

（凄い威圧感……………）

（ファンガイアじゃないとは聞いてたが……………そもそもこんな強烈な殺意を、生き物が出せるのか？）

改めて、二人は高杉がどれだけの怒りを包括しているのかを認識する。

そんな二人に構うことなく、高杉が懐からコバルトブルーのカードデッキを取り出すと、彼の腰に銀色のベルト、Vバックルが装着された。

「変身ッ！」

デッキをバックルに挿入すると、高杉の身体に幾重もの影がオーバーラップ。

彼の姿は、白銀の虎を模した鏡の戦士、仮面ライダータイガに変わった。

「ほう、まだライダーの力を隠していたか。面白い、少し遊んでやるわ」

「お前らアンデッドは死ねないんだっただな……。ちよつどいい。死の痛みを何度でも味わせてやるぜクソ野郎があアアアア！！」

激昂と共に、タイガは斧型の召還機『デストバイザー』を握り締め  
る。

「おい待て高杉!! 冷静さを欠いて適う相手じゃ……」

奏夜の制止も聞かず、タイガはギラフアアンデッドに襲いかかって  
いく。

「~~~~! あー、まったく!! シャナ、さっきの手筈通りに  
行くぞ。どうにかテイターンを止める!」

「わかってる!」

シャナがテイターンに斬りかかるのを確認し、奏夜は左手を突き出  
す。

「キバット!!」

「あいあい! キバツて行くぜえ〜!!  
ガブツ!」

キバットがその手に噛み付き、アクティブフォースを注入。

腰に巻かれた鎖が、キバットベルトに変わる。

「変身！」

キバットをベルトへ逆さまに止まらせると、奏夜の身体に光の鎖が巻き付いていく。

鎖が弾け飛ぶと、そこに立っていたのは、ファンガイアの王、仮面ライダーキバだった。

「行くぞッ！」

キバは両腕を広げる独特な構えを取り、タイガと同じ標的、ギラフアアンデッドへ向かっていく。

「ハアッ！」

タイガがデストバイザーをギラフアアンデッドに振り被る。

「舐めるな！」

ギラファアンデッドは持っていた双剣『ヘルター・スケルター』で斧を受け止め、タイガごと弾き返す。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め！」

「チツ！　もう一人のキバか！」

すかさずタイガの背後から、キバが跳び蹴りを放つ。

ギラファアンデッドが、キバへの対応に追われる隙を逃さず、タイガはデツキからカードを一枚引き抜き、デストバイザーにベントインする。

【STRIKE・VENT】

「しゅっしゅっ！」

両手に装着された虎の鉤爪『デストクロー』がギラファアンデッドを捉える。



だが、

「にゃッ！！」

ガキーン、という金属音が鳴り響く。

ミルが尖った爪で、デストクローを受け止めたのだ。

戦意しか宿っていないミルの瞳に、晋作は一瞬動揺する。

「ミ、ミルちゃ

「かつ！！」

晋作の言葉にさえも耳を傾けず、手加減なしのミルサnderが、爪を伝って弾ける。

「ぐ、があああ！！」

痺れを伴う激痛に、タイガが地面に崩れ落ちる。

「高杉！」

「余所見をしている暇があるのか！！」

キラファアンデッドの斬撃の餌食となり、キバも高杉の近くに転がる。

「ぐっ……、さすがに強いな」

起き上がったキバの隣に、シャナが着地した。

「手強い」

「うむ、異世界の存在なだけはあるな」

グルルル……。

うなり声を挙げるティターンを、紅蓮の瞳で睨むシャナ。

「どうだシャナ、何とかかなりそうか」

「時間をかければ、確実に倒せる。でもその間、あのネコ女に邪魔される可能性もあるから、油断はできない」

「何にせよ、相手を傷つけられない状況は、あまり好ましい事態じゃないか。

高杉、まずはクワガタとネコ娘を引き剥して……」

「んな悠長なこと言ってるっか！ ミルちゃんを、早く助けねーと……！」

「だからその為に戦法考えてんだろっが、もっと冷静になれよ」

「冷静になんか出来るか！

あんな……あんなミルちゃん見た後で！」

理不尽に突き付けられたミルの敵意。

自分の中に沸き起こるギラフアアンデッドへの憎悪と、ミルに襲われるという混乱は、晋作の冷静さを失わせるには十分だった。

錯乱一步手前の晋作に、ギラフアアンデッドは更なる追い討ちをかける。

「ライダー二人に、異能の力を持つ小娘か……ふむ。キャットウ  
族の娘は手中にあるが、念には念を入れておきましょう」

仮面ライダーを、決して侮ってはならない。

かつての経験から、ギラファアンデッドはそれを嫌というほどわか  
っていた。

「娘。ティターンに鎧を渡せ」

ギラファアンデッドの命に、ミルは無言でミルクバットに姿を変え、  
ティターンの右手を噛む。

「カプツ……」

ティターンのアンデッドバックルの上から、キバットベルトが巻か  
れ、ティターンは静かにミルクバットを突き出す。

「メ\* (変身)」

三人にはくぐもった声にしか聞こえないアンデッド語を唱え、ティ

ターンはミルキバットをベルトに止まらせる。

光の鎖が弾け、ティターンの姿は、仮面ライダーキバへと変身を遂げた。

もつとも奏夜のキバとは異なり、背中からはティターンの持っていた毒の触手が覗き、腕や胸部も生物的で禍々しいデザインではあったが。

だがそれでも、キバであることには違いない。

「奏夜と同じ、キバ？」

「馬鹿な、ファンガイアでもないヤツがキバの鎧を……！」

「……ミルちゃんの一族、キャットウン族はキバット族と違って、種族を問わず、しかもノーリスクでキバの鎧を纏わせることが出来るんだよ」

苦虫を噛み潰したような口調で、タイガは仮面の下で唇を噛んだ。

「テムエら……どこまでミルちゃんを戦いの道具にする気だぁ!!」

タイガが吠え、ティターンキバへ向かっていく。

「だから冷静になれつつつてんだろぅが……」

舌打ち三寸、キバはベルトのサイドケースから、緑色のフェッスルを取り出す。

『バツシャーマグナム!』

キバットの音色に呼び寄せられたバツシャーマグナムが、キバの姿をバツシャーフォームへと変える。

「シヤナ、高杉の方頼むぞ!」

「わかってる!」

シヤナが、ティターンキバとタイガの戦いに向かっていく。

キバはもう一人の敵、ギラファアンデッドへと銃口を合わせた。

何にせよ、ギラファアンデッドに、高杉とシヤナの邪魔をさせないようになければ。

「喰らえッ！！」

射出された水球、アクアバレットは、寸分変わらず、ギラファアンデッドへと吸い込まれていく。

だが、それらの弾丸は全て、ギラファアンデッドの表皮の一步手前、見えない壁により防御されてしまう。

「なにい！？ 奏夜、変な防壁に弾かれちゃったぞ！」

「見てたよ。クソッ、バリアかなんか貼ってやがるな」

忌々し気に毒づく奏夜に対し、ギラファアンデッドは余裕の声をもって返す。

「どうした？ 足止めにもならんな」

「ハッ、まだまだこれからだ。

恋人の仲を引き裂くような性根、俺が叩き直してやる」

遠距離戦は不利。

全てあのバリアにはじかれる。

ならば、あのバリア硬度を超える一撃を。

『ドツガハンマー!』

キバットが紫のフェッスルを吹き鳴らし、キバはパワー形態、ドツガフォームへ。

召還されたドツガハンマーを引きずりながら、近づくキバ。

「フン、随分と鈍重な動きだな!」

キラファアンデッドとしても接近戦は望むところなのか、不用心に射程圏へ入ってくるキバへ、双剣を振るう。



だが刃は、先ほどのアクアバレットよろしく、ドツガフォームの装甲には傷一つつけられなかった。

「ドツガの防御力を甘く見るなよ。

っせい!!」

「ゴフツ!?!」

重厚なハンマーの一撃に、バリアごと仰け反るギラフアアンデッド。

次に顔を上げた時、彼の口元は好戦的に歪んでいた。

「面白い。高杉晋作よりは楽しめそうだな、仮面ライダー」

言ってる。

ギラフアアンデッドのまるで見当違いな目算に、キバは心中で失笑した。

ギラフアアンデッドは、晋作の強さそのものが“キバの鎧”だと思

っている。

それを奪った今は、戦うに値しないと。

(傑作にもほどがある)

晋作の“本当の強さ”を、根本的に測り間違えている。

今の晋作は、怒りで忘れてるだけだ。

自分が、何故戦っているのかを。

(普段のあいつなら、俺もテメエらも相手にもならねえっつの)

だから、あいつが思い出すまでは、自分とシャナがどうにかしなければならぬ。

(やれやれ、損な役回りだぜ)

仮面の下でシニカルな笑みを作り、ドツガハンマーを振り上げたキバは、ギラファアンデッドへと向かっていく

「ヴアアア!!」

「ちっ!!」

「ぐっ!!」

ティターンキバの操る触手が、タイガとシャナを薙ぐ。

七本全てに毒があるため、触れれば一撃でアウト。

それを理解していた二人は、ギリギリでそれを避ける。

しかし、ティターンキバ本体も拳を繰り返してくるため、計八回の猛攻をガードしなければならず、反撃が出来ない。

(なら )

贄殿遮那から火の粉が弾け、刃の筋を紅蓮の炎がコーティングする。

「焼き尽くすッ!!」

シヤナが内から解放した力が、刀から放射された。

劫火の奔流は、触手を根刮ぎ灰燼に変える。

「これなら……」

加減もしたし、ミルにまでダメージが及ぶことはないだろうが

タイガとシヤナは武器を収めぬまま、警戒を続ける。

結果的に、その判断は正しかったと言えるだろう。

『っ……』

立ち込める粉塵から、再びティターンキバが現れた。

炭に変えたはずの触手も、完全に再生している。

「毒に加えて再生まで……」

「愛染兄妹の物と肩を並べるスピードだな」

攻撃の手は封じられない。

かといって、一撃必殺の威力を出すとなれば、ミルを巻き込みかねない。

攻めきれないシヤナ。

片やタイガは、触手を回避しつつ、デッキから新たなカードを引き抜く。

「焼いて駄目なら凍らせてやる!」

流れるような動作で、カードをデストバイザーにベントイン。

【FREEZE・VENT】

デストバイザーから流れる電子音と共に、膨大な冷気が発生する。

「ギ、ガ……」

周囲の草原を瞬時に氷結させていき、最後にはティターンキバを触手ごと完全停止させる。

先程までの体勢を維持したまま、ティターンキバはピクリとも動かない。

「止まつ、た？」

「よし……！！」

動きを止めたティターンキバに、タイガはゆっくりと近付いていく。

氷結したベルトから、ミルキバットを引き剥がすためだ。

毒に関しては 後でどうとでもなる（それこそ、ジョーカーである翔哉にでも聞けばいい）。

ミルを早く助ける。

そしてこのアンデッドに制裁を下す。

正反対の感情が渦巻く中、タイガはミルキバットに手を伸ばす。

ドンッ。

「……………つな？」

腹から嫌な熱が広まっていく。

銀色の装甲を貫く、鋭い感覚。

「晋作!?!」

シヤナの声で、よじやく気が付く。

自らを刺し貫いた凶器　白い爪の先を目で追う。

「みる、ちゃ……」

ミルキバットの変身を解除し、フリーズベントから抜け出したミルが、そこにはいた。

感情の読めない冷たい瞳を向けながら。

「　　つ!!!!」

ショックを受ける時間さえも無かった。

激痛と共に、朦朧としていく思考。

タイガの変身が強制解除され、晋作は意識を手放し、地面に崩れ落



ちた。

「高杉!!」

ギラファアンデッドとの戦いの最中、晋作がミルに刺された。

シヤナが晋作に駆け寄るが、今なお戦い続けるキバに、そこまでの余裕はない。

「ほう、これは傑作だな」

「笑えるか、よッ!!」

キバはドツガハンマーをスイングするも、再びバリアに阻まれる。

だが、まるで効いていないわけではないのか、ギラファアンデッドも、段々とバリアの硬度が下がっているのに気が付いていた。

(俺の障壁を僅かでも突き破る威力……あといくらか喰らえば、バ

リアが破られる可能性もあるな)

以前は、バリアの貼れないゼロ距離から射撃を喰らい、封印されてしまったが……。

やはり、仮面ライダーは侮れない。

「だからこそ、潰しがいがあるというものだ」

ギラフアアンデッドの刃が光り、キバもドツガハンマーを構え直す。

一瞬の好機を狙う両者は、それぞれの武器を携えたまま動かない。

緊迫する膠着状態は、意外な形で崩された。

突如、全員の視界がぐらりと揺れる。

何の前触れもなく、大きく振動する大地。

溢れ出し続ける力に戦いは途切れ、敵味方問わず、その自由を奪っていく。

「うおっ！？ なんじゃこりゃ！」

ベルト越しにも伝わる揺れに、キバットは目を剥く。

「地震……にしちゃ突然過ぎるな」

「ちっ、あの男が言っていた通りになっただか。  
仮面ライダー、悪いが、もう遊びは終わりだ」

「なっ！？ 待てお前、逃げる気か！」

「ああ。貴様らを葬れないのは残念だが、“世界の融合”に巻き込まれる気は無いんでな」

揺れに気を取られるキバに、淡々とした口調で言い残し、ギラファアンデッドは手を掲げ、光のオーロラを呼び出す。

フリーズベントから回復したティターン、ミルの前にもそれは現れた。

シヤナは晋作を庇いながら戦い続けていたが、二人はあっさりと彼女から興味を外し、オーロラの霞へと消えていく。

「待て！」

「よせ、シヤナ。手傷を負った者がいる今、深追いはするな」

オーロラに飛び込みかけたシヤナを、アラストールが制す。

苦々しげに、シヤナは引き下がり、

「……………」

見た。

揺らめくオーロラの中に立つ、ミルの様子。

その表情には、相変わらず感情らしい感情は浮かんではいない。

ただ一つ、潤んで輝く、宝石のような瞳を除いては。

シヤナが確認するよりも早く、ギラファアンデッドやティターンも  
るとも、ミルの姿はかき消えていた。ギラファアンデッドは、現れ  
た光のオーロラへと消えていく。

地面の振動が収まったのを確かめ、刀を夜傘に収める。

「……あいつ、泣いてた？」

あの少女が消えた虚空を見つめ、シヤナは誰に問うでもなく呟く。

だが、オーロラの消えた先から、答えが返ってくることはなかった。

「うっ……」

目覚めた晋作を待っていたのは、腹部を襲う鋭い痛みだった。

体の裏側からつつかれていているような、気味の悪さが、皮肉にも晋作の意識を覚醒させたらしい。

「お、やっと気付いたか」

「……奏夜」

「あんま動かねー方がいいぜ。普通なら1時間で治る怪我じゃねえし」

森の中の草原、という場所は変わっておらず、横たわる晋作の身体には奏夜の背広がかけられている。

シヤナとキバットの姿は見えなかったが、見回りか偵察にでも行っているのだろう。

「しかしよお、お前って本当に頑丈なのな。最悪、キバットにお前を噛ませて、治癒力を底上げしようかとも思ってたけど……その心配もいらなそうだ」

着物の一部が破れてはいたが、晋作の身体に残る刺し痕は、もう何年も前の古傷のようになってる。

「人間だとは前に聞いてたが、それにしても異常な回復力だよ。お前、ご飯にポンドでもかけて食べてんの？」

「そういう質問は、俺とキバットの中の人的に止めとけ」

ゆっくりと身体を起こす晋作。

身体が重い。

いくらなんでも、流れ出た血の量が多すぎたのだ。

「……ミルちゃん達は？」

「オーロラ揺らめく時空を越えてっちゃんいました」

「つまり、逃げられちまったんだな」

「ああ、シヤナによると気配は感じるらしいから、まだこの世界のどこかにはいるはずだけどな」

「……そうか」

起こした身体を、再び断続的な痛みが襲ってきたため、再び横たわる晋作。

（いや、傷の痛みだけじゃねえな、こりゃ……）

ミルが作った傷に目を落とす。

（これはさすがにシライ）



操られていると分かっているとしても、ミルに刺されたという事実は、深く晋作の心を抉った。

単純に、ミルを救えなかった敗北感も相成ってか、立ち上がる気力さえも、根刮ぎ奪われていく。

呼び掛けに答えなかった以上、ミルを目覚めさせるのは難しい。毒を中和する技術もない。

キバの力は敵の手中、タイガでもダメだった。そもそも間接的にとはいえ、ミルと戦うことだけでも、かなり精神力が削られる。

(本格的に打つ手無し、か)

自虐的に笑い、吹き抜けの空を仰ぐ晋作。

奏夜はそんな彼を見て、

「さてと。なあ、高杉よ」

「? 何だよ」

「歯ア食いしばれ」

晋作が疑問符を浮かべると、奏夜は彼の傷目掛け、思いっきり拳を振り下ろした。

「ぐぼっ！！　　な、なにしやがんだ！」

「無様極まりないスタンドプレーの罰だ」

高杉の抗議にも、奏夜はしれっとした顔で返す。

「俺ちゃんと言ったよな。『冷静になれ』って。  
お前が熱くなつてちゃ、助けられるもんも助けられねえぞ」

「だからあんな状況で冷静になんか……」

「あんな状況だからこそ、冷静にならなきゃいけねえんだろ。  
頭冷やせバカたれ」

傷口への二撃目。

再び晋作は痛みにも悶絶する。

額に手を当て、奏夜は嘆息する。

シヤナや悠二のみならず、とうとう異世界の人間にまで教えなければならぬのか。

いや、晋作の場合は、普段ミルが近くにいたからこそ、別段意識していなかっただけかも知れないが。

「高杉、お前の強さはあんな狂った強さじゃないだろ」

一転、諭すような口調で、奏夜は言葉を紡いでいく。

「俺さ、あの世界でお前とネコ娘と会った時、凄く羨ましいと思ってたんだよ」

「……羨ましい？」

「うん、あんな風に、一途に相手のことを想っていられたらなって

さ。

「あ、勿論工口方面は除いてな」

そこだけはしつかり断りを入れ、奏夜は続ける。

「実際、ネコ娘と一緒に戦ってるお前は強かったよ。

あんな完璧なコンビネーション、俺にやとても真似できない」

晋作の強さは、キバやタイガじゃない。

パートナー、ミルと純粋な想いで繋がることの出来る心だ。

自分は、他人を好きにはなれても、愛することは出来ない。

それが、奏夜と晋作の違い。

「けど、さっきのお前はそうじゃない。“ネコ娘を助きたい”って想い以外にも“相手をブチ殺したい”って不純物が混ざってた」

「……………」

否定は出来なかった。

ミルにあんなことをしたヤツを、晋作は今でも許せない。

この怒りは、決して間違ったものではないはず。

(けど、確かに冷静さは失ってた)

その怒りは、一方で力を高めはしたものの、冷静な判断力を閉じ込める諸刃の剣。

奏夜は、晋作の内面を的確に見抜いていたのである。

「さつき、クロノとか言うヤツに言ったセリフ、そのまま返してやるよ。もっと単純に、本能の赴くまま大切な人を守ってみるよ。余計な憎しみなんか入れるんじゃないねえ。」

お前の強さは、ネコ娘を好きだと思っ心なんだからさ」

「……」

ポロポロだった晋作の内に、奏夜の言葉が広く染み渡っていく。

目が覚めた　　否、怒りで忘れかけていたものを、はっきりと自覚する。

（　　ったく、何やってたんだ俺は）

自分の行動原理は　　戦う理由は、今も昔も変わらないじゃないか。

（ミルちゃんのため、大切な人のためだ）

重く感じていた身体が、急激に軽くなっていくのが分かった。

「　　戦える」

まだまだ、いくらでも。

礼を言おうと、晋作は口を開きかける。

だが奏夜はダルそうに頭を掻き、

「やっぱ面倒くせえわ。シヤナや悠二と違って、成人男性に説教な  
んざ柄じゃねえ」

「さっきの良いセリフ台無しだ!!」

「テンション下がってきたー」

「言うだけ言ってその対応!？ 俺報われなさ過ぎだろ！  
お前それでも教育者かよ！」

「教育者なんて大体こんなもんだろ。  
あんま教え子に感情移住し過ぎると、勢い余ってフォーリンラブな  
展開になっちゃって、そのまま教師止めちゃったりすることもあ  
るんだぜ？」

「ぐあつ！ 不覚にも知り合いに一人そういうヤツがいるから反  
論出来ねえ！」

奏夜の語った例がほぼ、彼の知り合いである片倉景綱／仮面ライダーデルタと合致していたため、思うように言い返せない晋作だった。

「ま、たまにはいいか。悩む人間が減るのはいいことだな」

「本ツ当にお前は……」

晋作は苦笑いし、

「ありがとうよ」

「おう。俺を崇め奉れ」

「それは断固拒否する」

くだらないやり取りに、緊張の糸が切れたのか、二人は顔を見合わせ、朗らかに笑う。

しばらくして、見回りを終えたシャナとキバットが帰ってきた。



「奏夜」

「おうシヤナ。で、どうだった？」

「やっぱり歪みが拡大してるみたい」

「先刻の地震は、その前触れだろうな。うかうかしていると“徒”の連中も動き出すかも知れぬ」

「ふむ。考えられる可能性は、高杉やアンデッド達が来た影響か何かなんだろうが……」

「こりゃ早いところ、キバツてミルちゃん助けなきゃな」

全員が頷き合い、シヤナが晋作と目を合わせた。

「？ どうした、シヤナ」

「晋作の大切な人、泣いてた」

「！」

目を見開く晋作に、シャナは手を差し出した。

「きつと、まだ間に合う。

だから、晋作も頑張つて。

私も出来る限りのことはする」

「ああ！」

歓喜と共にシャナの手を握り、晋作は立ち上がる。

力強い姿に、シャナも満足気な笑顔を見せた。

「よし、シャナと高杉が程良く打ち解けたところで、みんなに俺の奇策を伝授しようか」

「奇策？」

「ああ。奇策を練るからこそその奇策師！まさに、俺のためにあるような言葉！」

「お前は12本の刀でも集めてんのか！」

「じゃあ訂正。このゲームの必勝法があ……」

「止める！ それは逆転される時のフラグだ！」

不敵に笑う奏夜に、その場にいた全員が妙な危機感を覚えた。

晋作が全員を代表して聞く。

「で？ その奇策だか必勝法ってのは何なんだ」

「ああ、仕組みは簡単さ。だが勿論、お前らの協力が必要だがな」

思わせぶりに人差し指を立て、奏夜は告げる。

「では説明しよう。

俺とシヤナの腕っ節、キバットの技術、高杉の想い。

これら全てが組み合わさり、成功する奇策をな」



第X話・EPISODE・RED/憤怒の虎・悲哀の猫(後書き)

高杉と奏夜の掛け合いが楽しくて仕方ない今日この頃。

- ・キバの小説書いてると、タイガがレイにしか見えません(笑)
  - ・ティターンキバのスペックは、キバとほぼ同じです。
- 見た目はSICのキバみたいなものと思っていてください。

・今回はもう一つ、闇丸・EXE先生の作品『けいおん!仮面のバイオリン弾き』より、桜井クロノの名前を使わせて戴きました。

以前、『けいおん!仮面のバイオリン弾き』に奏夜の名前を出して戴いたことがありまして、そのアンサー企画です。

次回は悠二、結衣、翔哉チームです。ブレイド原典の彼も現れますのでお楽しみに!

第X話・EPISODE・BLUE / 集うエース・原書の蒼剣

「うーん。なかなか見つからないな、晋作も総司も。悠二はどうだ？」

「一応、シャナがこっちに向かって来てくれることはわかるんですけど……、さすがに詳しい位置までは」

「早く見つけなきゃ、ですね」

分断された翔哉、悠二、結衣。

オーロラによる移動で辿り着いた先は御崎市市街地で、現在は平日でまばらな人ごみに混じり、奏夜達と合流&総司達探索を試みていた。

ひとまずは、市街地と歓楽街を分ける御崎大橋に向かっている。

翔哉はせわしなく、周囲の景色を観察していく。

「やっぱりこの世界も変わらないよなあ」

「変わるのは仮面ライダーと怪人の種類だけですね」

翔哉のぼやきに、結衣も同意する。

「あの、翔哉さんと結衣さんは……」

「タメ口でいいよ。見た目ほとんど変わらないだろ」

「結衣もそれでいいです。『さん』付けはあんまり慣れてませんか  
ら」

「あ……、うん。じゃあ翔哉くんや結衣ちゃんの世界は、どういう世界なんだ？ その、怪人や仮面ライダーだけで言うなら」

「俺の世界か……【仮面ライダー555の世界】より前には、【仮面ライダーブレイドの世界】にいたな」

「私は……ちょっとわかりませんね。」

お兄ちゃんに会った時、拾われた時より前の記憶は、あんまり覚えてないんです」

「結衣ちゃんのお兄さんが、その仮面ライダーブレイドなんだよね。」

どんな人なの？」

「んー。素直じゃないヤツ、かなあ」

「翔哉さん！」

からかうような口調の翔哉に、結衣は少し頬を膨らませた。

「悠二さんが勘違いしちゃう言い方しないでください！」

「でもさ、あいつって現代で言うところのツンデレだろ？」

「だから誤解を生みますってば！」

悠二さん、違いますからね、お兄ちゃんはそのようなキャラじゃありませんからね！」

「は、はあ、そうなんだ」

「そうなんです！」

物凄い剣幕で詰め寄られる悠二。



周りからは奇異の視線が突き刺さる。

「それは、お兄ちゃんは確かにちょっと素直じゃないところもあります」

じゃあ翔哉くんの言ってること正しいんじゃない。

そう思うも、空気を読んだのか、悠二は敢えて口にはしなかった。

「でも困ってる人は見過ごせない人だし、かつこよくて、いつだって結衣達を助けてくれて……」

誰から見ても、好意を持っていると分かる笑顔で、結衣は兄のことを挙げ連ねていく。

翔哉も「ま、それもそうだけどさ」と肯定する。

彼もまた、異世界に来てまで助け出したいと思うくらいには、総司を気に入っているのだ。

(立派な人、なんだろうな)

他人にここまで好かれている人物、沖田総司。

悠二は会ってみたいと思うと同時に、

(シヤナも先生も今はいない。それなら僕が、二人の助けにならなきゃ)

分を超えた決意表明と分かっているながらも、悠二は口を開く。

「総司さんが好きなんだね。翔哉くんも結衣ちゃんも」

「はい。自慢のお兄ちゃんです！」

「大好きっていうか……まあ、仲間ではあるわな」

結衣は満面の笑みで答え、翔哉は決まり悪そうに頬を掻いた。

全員が全員、大人しい気性なためか、早くも打ち解けつつある三人だった。

が、ここで結衣が余計な一言を付け加える。

「大好きって言うなら、悠二さんとシャナさんも同じですね」

「えっ？」

やや天然気味な結衣は悪気無く、悠二目掛けて爆弾を投下する。

「あれ？ 悠二さんも、シャナさんのこと大好きなんじゃないんですか？」

ゴンッ！

派手な音を立てながら、悠二は近くの電柱に頭を打ち付けた。

「な、ななな、ゆ、結衣ちゃん、なな、何を言って……！」

「純情を絵に描いたような反応だな」

顔を紅く染めるといふ、あまりにテンプレートな悠二の反応に、翔哉は苦笑いを刻む。

ちなみに同時刻。

御崎市郊外の森林内で、晋作から似たような質問をされたシャナが、同じようにその顔を羞恥に染め上げているのは、また別の話である。

「でも、仲良さそうに見えましたよ？」

「いや、そりゃ、決して仲が悪いわけじゃないし、好きっていう気持ちもあるにはあるけど……」

だが、どうなのだろう。

「僕が普通の人間じゃないことや、“紅世”のことは、行きすがら話したよね」

「はい。“徒”っていう悪い人を倒すのが、シャナさん達フレームヘイズなんですよね」

「そう。だから僕と僕の大事な人を助けしてくれたシャナには、感謝もしてるし、好きだとも思ってる。

でも、それが“そういう意味”での好きなのかは、わからないんだ」  
理不尽に引き込まれた非日常の世界。

時間からも切り離された自分はあまりに孤独だ。

その孤独な世界にあって、シヤナの強さに縋っているだけ、と言われれば、悠二は反論出来ないだろう。

「それに今まで、非常識な戦いを一緒に切り抜けてきたからね。仲間意識が転じて、この気持ちが生まれたのかも知れないし」

「ふーん。吊り橋効果ってヤツか？」

「それはちょっと語弊がある気がするけど」

翔哉のどこまで本気なのかわからない発言に、少しだけ笑う悠二。

シヤナに好意を持っているのは確か。

だが、それが友愛か恋慕なのかは、分からない。

どっちつかずであやふやな感情。

悠二が未だに、結論を出せずにいるモノだ。

「……だめですよ。そんなんじゃない」

悠二の言葉に、結衣は声を落とす。

「自分の気持ちはハッキリさせておかなきゃだめです。

特に好きか好きじゃないかってことに關しては。

そうしないといつか、その人の手が離れてっちゃいますよ。

今の私みたいに」

大人しめな口調から一転、凜とした雰囲気を漂わせる結衣に、悠二は戸惑い気味に閉口する。

「……なんて」

結衣はまたころりと表情を変え、いたずらっ子のように笑う。

「そう言う結衣も、妹と恋人の間で、ふらふらしてるんですけどね」

言うだけ言って、結衣は悠二の反応にも構わず、先に歩いていってしまっ。

呆然とする悠二、結衣の代わりに翔哉が彼の隣に立つ。

「気を悪くしないでくれ悠二。あの子なりに、お前ら二人を心配してるんだ」

「いや、別に気にしてないけど……僕とシャナの心配って？」

「多分、お前とシャナちゃんを、自分と総司に重ねちまったんだろ  
うよ」

「あっ……」

思わず声を挙げた悠二に、翔哉は頷く。

「そう。自分と同じように、仲良しな男女。」

けど結衣ちゃんは今、それが引き裂かれたのを直に経験してる。  
……明るく振る舞ってるが、あれは相当参ってるぜ」

翔哉が苦々しげに舌打ちした。片や悠二は、きつく拳を握り締める。

あんな年端もいかない少女に、こんな苦しみを与えた連中に対する  
憤りが感じられる仕草だった。

「早く、総司さんを探さなきゃね」

「ああ、最初からそのつもりだ」

改めてそう誓い、二人は気丈を装う少女を追いかけていく。

騒がしい街の風景が嘲笑うかの如く、三人を見下ろしていた。

その後は重苦しくこそならなかったものの、さしたる会話も無く、  
三人は奏夜チームと合流すべく、歩みを進める。



悠二によれば「シヤナは今、同じ場所において動かない」とのことだった。

「急ごうぜ。この状況下じゃ、何かあったって考えるのが自然だ」

翔哉が若干焦り気味に言い、先を急ぎだした三人は、ようやく住宅街と歓楽街の境、御崎大橋まで辿り着いた。

日はまだ高いが、時間的に人や車の行き交いが減っている御崎大橋を、渡っていく三人。

「っ！」

三人は動きを止めた。

「やあ、キミの方と会うのは初めてだね。カリス　異なる世界の  
ジョーカー」

「お前……」

車道に沿った広めの歩道の先。

鴉のように真っ黒なスーツに身を包み、実際の年齢を感じさせない、貫禄ある風格の老人　天王路が立ち塞がるように、三人の行く手を阻んでいたからだ。

「お前が天王路だな。総司をどうした」

「そう慌てるな。互いのためにも、話す時間を設けようじゃないか」

天王路が指を鳴らすと、あの不気味なオーロラが、四人を透過する。

翔哉たちが目を開けると、周囲を走っていたはずの車、歩道を歩いていた通行人が全て消えており、頭上は灰色の空に覆われている。

(封絶？ いや、この感じは時間を切り離したっていうより……)

悠二の戸惑いを見て取ったのか、天王路が付け加える。

「世界を移動させたのだよ、少年くん。

キミのいた世界の、言わば裏側にあたる世界だ。ここなら、ゆっくりと話が出るだろう」

一連の所行を見て、翔哉は警戒心を強める。

（結衣ちゃんから聞いていたけど、ラウズカード吸収に加え、世界移動の力が……）

予想以上に、厄介な相手になりそうだ。

普段の温厚さを潜めた結衣が喰ってかかる。

「あなたと話すことなんかない！ 早くお兄ちゃんを返して！」

「残念ながら、それは無理な注文だ。

我が崇高なる目的のために、彼の力は必要不可欠なのだよ」

「目的だと？」

天王路の言う総司の力      それは仮面ライダーブレイドと不死の存在、ジョーカーの力。

それを使つての目的はいくらでも思い付く。

しかし、次に天王路の口から発せられた言葉は、翔哉の予想だにしないものだった。

「キミ達も知つての通り、この世には無数の平行世界が存在し、異なる仮面ライダーと怪人もまた、各世界に跋扈している。

それらに共通するのは、両者は必ず対立しているということ。

世界はライダーと怪人の力が拮抗しているが故に、光と闇のバランスは保たれている。

ならば」

仮面ライダーと怪人、両者の力を掌握することは、世界を掌握することと同義とは考えられないかね？

「なっ!？」

「仮面ライダーと怪人を、掌握する……?」

翔哉と結衣が声を挙げ、悠二は話の壮大きさに着いていけないでいる。

「そう。テイターンの力を使い、仮面ライダーと怪人を我が支配下に置く。」

そして全ての世界を、我が手中に治める。

かつて私が欲した神の力も、これに比べれば微々たる目的よ」

「じゃあ、翔哉や晋作の大切な人を攫ったのも……」

「そう。彼らは我が目的の先兵なのだよ。」

まして彼らは、異形でありながら仮面ライダーの力を持っている。私の手駒にするには適任だったというわけだ」

ジョーカーという不死生命体でありながら、仮面ライダーブレイドの資格者。

キャットタウンという人外存在でありながら、仮面ライダーキバの鎧の管理者。

異形であり、仮面ライダーでもある。

確かに、天王路の目的には則していることは否めないだろう。

「黒木翔哉、キミもまた、敵にしておくには惜しい人材だ。どうかね。総司くん共々、我が下で働く気はないか？」

「ベタベタな悪役台詞をどうも。だが俺は、付く人間を選ぶ夕チでね」

「そうか、残念だよ。……では」

天王路はわざとらしく肩を落とす。

「ジョーカーが手中にある今、もう一人のジョーカーは厄介者ではない。

ここで封印されてくれたまえ。

君のご友人にな」

天王路が言い終わるよりも早く、彼の背後から、得体の知れない影が、猛スピードで突進してくる。

いきなりすることに、悠二と結衣は反応出来ず、身体を硬直させてしまった。

「悠二、結衣ちゃん！」

唯一反応出来た翔哉が、二人を庇うように立ち、影の攻撃を腕で受け止める。

異形の証、緑色の血が滴る腕を挟み、襲撃者の顔を目に収め、翔哉は唸る。

「どういってもりだ……ッ、総司……！」

腰まで伸びる艶やかな黒髪、袴という和風スタイルの装い、手には翔哉の腕の肉を絶つ日本刀。

見間違うはずがない。

二人の探し人、沖田総司だった。

「この人が、総司さん……！」

「お兄ちゃん!!」

悠二と結衣にも、さしたる反応を返さず、総司は刀を引き、間合いを取る。

その瞳に光は無く、外道に堕ちた者としての殺意だけが煮えたぎっていた

「グウウウ……」

「お、お兄、ちゃん？ どうしたの？」

あからさまな敵意に怯えながらも、結衣は総司に近付こうとする。

「っ、結衣ちゃん、ダメだ！」

慌てて悠二が、結衣の手を掴み、自分側へ引き戻す。

さっきまで結衣の胸があった部分を、神速の剣閃が掠めた。

一歩遅ければ、確実に結衣は二つのパーツに別れていただろう。



「結衣ちゃん、大丈夫!？」

「は、はい……」

答えるものの、結衣の耳に、悠二の言葉は殆ど入っていなかった。

目の前にある事実を認めたくない。

彼女の表情と仕草が、そう物語っていた。

無論、傍らに立つ翔哉も同じである。

「一体どうなってるんだ。総司が結衣ちゃんを斬ろうとするなんて有り得ねえぞ」

「翔哉くん。腕の傷は……」

「これくらいどつてことねえよ。それよりも今は総司だ」

緑色の血を滴らせる傷は、悠二が見る間にみるみる塞がる。

「ほう、さすがはジョーカーといったところかな？」

「てめえ……、翔哉に何をした」

「彼の中にある枷を取り払ってやったただけだ。

ラウズカードを失い、彼はもはや闘争本能に支配されている。

かつて、人間に裏切られた彼だ。怒りの矛先が人間に向いてもなんら不思議ではあるまい」

「う、嘘だよ！ お兄ちゃんはまだもう、人間を拒絶してない！人間と分かり合えないなんて思ってもん！」

「すぐるように叫ぶ結衣。」

だが、そんな願望にも似た脆弱な論理では、現実を崩せはしない。

「表面上がそうだとしても、全ての人間に裏切られたのだ。

何にも受け入れられなかった孤独の傷は、そう簡単に癒えはせん。癒えたように見えて、心の奥底に眠り続けていたのだ」

この凄惨な状況において、まるでコメディでも楽しむかのように、

天王路は口元を歪ませた。

「つまり、この“人間を憎む彼”こそ、内に眠っていた本当の沖田総司なのだよ」

「……そんな」

しきりに「嘘」という言葉が、結衣の口を通過して飛び出してくる。

だが、否定すればするほど、自分に刃を向けた総司の顔が蘇ってくる。

この世の負の感情全てを注ぎ込んだような、暗く、澱んだ瞳がフラッシュバックし、結衣の心を射抜く。

「いや、いやあ！ 嘘、嘘、嘘、嘘、嘘、嘘！！」

「結衣ちゃん！ しっかりして！」

悠二が錯乱直前の結衣を宥めるのを見て、翔哉は握り拳を作り、天王路と総司の二人と対峙する。

「……悠二。結衣ちゃんを頼む。  
戦いは俺の役目だ」

「えっ、でも翔哉くん一人じゃ……それに、総司さんとも戦わなきゃならないんだよ?」

「望むところだ。」

「……ぶん殴つてでも目え醒まさしてやる」

総司へ睨みを利かせ、翔哉は駆け出す。

ポケットから取り出したカテゴリーA【CHANGE・MANTLER CARD】のカードを、腰に現れたハートの意匠を凝らした覚醒器『ジョーカーラウザー』にラウズする。

「変身!」

【CHANGE】

無機質な電子音が流れ、走る翔哉の身体に水しぶきのようなエフェクトがかかった。

「せいっ！」

伸ばした拳が、総司の刃とぶつかる数瞬前、翔哉の身体は黒いカメラキリをモチーフとしたライダー、仮面ライダーカリスへと変わる。

総司の斬撃を、手に現れた醒弓『カリスラウザー』で阻み、二人は互いの刀を挟んで火花を散らす。

「おい総司、お前本当にジョーカーの力に吞まれちゃったのか！  
例え理解されなくても、困ってるヤツを見たら助ける、それがお前の正義じゃなかったのかよ！」

悠二にはああ言ったものの、翔哉も総司と戦いたいわけではない。

総司が本来の自分を取り戻せるよう、訴えかけ続ける。

総司の口から飛び出したのは、翔哉が望んでいたものとは正反対の言葉だった。

「俺は人間にも、アンデッドの味方にもならない……！  
この世の全てが俺の敵だ……貴様もな！」

燃え盛る怨嗟に吼え、総司の身体にもまた、水しぶきのようなエフ  
エクトがかかる。

黒と藍色の体色に金色の瞳。

右腕には、鏢に当たる装甲部分に銃が一体化した剣。

背中に靡く金色の長髪が、野性的なイメージを植え付けている。

アンドロマリウスジョーカー。

悪魔の名を冠し、オオカミの如きその姿で敵を滅する、総司のジョ  
ーカー態だ。

「ヴアアア！」

カリスラウザーを剣で薙ぎ払い、至近距離からの砲撃をカリスに叩き込む。

「ぐっ！」

腹部を襲う衝撃に意識が飛びかける。

全く容赦のない一撃。

向こうは本気だ。

「ホウ……ジョーカー対ジョーカーか。これは見物だな」

天王路はバトルを観戦するだけで動こうとはしない。

カリスとしては好都合だが、それを差し引いても、不利なのはこっちだ。

（アンデッドは殺せない。封印も論外。）

なら、総司の目を醒ませなきゃならないが)

具体的な方法はまったく思いつかない。

こうなったらもう、一端アンドロマリウスジョーカーを戦闘不能にするしかないが、それも一筋縄ではいかない。

自分もジョーカーだから分かる。

アンドロマリウスジョーカーの力は、カリスが全力を出したとしても、敵うかどうかというところ。

(ワイルドカリスになろうにも、カテゴリーJとQがないしな……)

以前あの姿になった際には、総司の持っていたカードを借りていた。

が、その総司は今敵。



つまりは、本格的に打つ手なし。

「あ〜っ、畜生！」

もう考えるな。

やるだけやるしかないんだ。

打算的に、カリスはカリスラウザーにジョーカーラウザーをジョイント。

腰のホルダーから、二枚のカードを取り出しラウズする。

【CHOP】

【BIO】

カリスラウザーが触手が伸び、アンドロマリウスジョーカーを絡め取る。

「っは!!」

触手に引き寄せられたアンドロマリウスジョーカーへ、カリスの強化された手刀がヒットする。

「グッ……、オオオオオオ!!」

「何っ!?!」

手刀に一瞬怯みはしたものの、アンドロマリウスジョーカーはすぐ様反撃に転じる。

右腕の刃から発生した半月状の衝撃波が、カリスを吹き飛ばす。

「ぐ、あっ!!」

至近距離に引き寄せたのが仇となり、カリスは防御体制を取る間も無く、橋の鉄塔に打ち付けられた。

「痛ってえ……」

「翔哉くん!!」

「翔哉さん!!」

近くにいた悠二と結衣が駆け寄る。

「大丈夫？ やっぱり翔哉くん一人じゃ……」

「いらない心配すんなよ。お前は結衣ちゃんの傍にいりゃいいんだ」

「翔哉、さん。結衣は、結衣は……」

結衣は翔哉に掛けるべき言葉を選べないでいた。

無理もない。

優しい結衣のことだ。大切な兄と友達が争う姿は、彼女の心に更なる傷を作っているのだろう。

「結衣ちゃんもちゃんと下がってる。」

今のあいつを止められるのは、俺だけみたいだからね」

「でも、そのせいで翔哉さんも怪我して……」

「だから、このくらいどろってことないってば。」

安心してよ結衣ちゃん。あいつは、俺が絶対助けるからさ。」

彼女の不安を感じ取り、カリスは結衣のふわふわした髪を撫で、立ち上がる。

悠二は翔哉の姿に、一つの憧れを抱いていた。

(こんな状況でもまだ、総司さんを救おうとしてる)

相応の力がなくとも、やると決めたことを、必ず成し遂げる。

迷いなど欠片もない、純粹な想いの中から生まれる力。

悠二が求める、『強さ』そのものだ。

「……………」

だが、自分はどうか？

大切な人のために戦う戦士、泣いている少女の前で、何もしないまま、突っ立っているだけ。

無力で、何も出来ない弱者。

（何をやってるんだ、僕は！！）

何のために、先生に「手伝う」と言っただ。

何のために、翔哉や結衣に着いてきたんだ！

「……………翔哉くん、僕も戦わせてくれないか？」

口から、自然と声がこぼれていた。

「は？」

仮面の下で呆ける翔哉。

至極妥当な反応である。

「な、何言っただよ悠二。お前の力じゃ……」

「じゃあ、僕に何か出来ることはないのか？」

強い口調の悠二に、これは冗談でないと翔哉は悟る。

態度を改め、聞き返す。

「……無いことはない、が、かなり危険だぞ」

「危険なのは最初から分かったことだよ。それにこんな経験は、もう二回や三回じゃ無い。」

頼む。何かあるなら、やらせてくれ」

瞳に覚悟を宿し、翔哉を見つめる悠二。

「……はあ」

やがてカリスが折れたのか、盛大な溜め息をついた。

「お前はバカだ。

さっき会ったばかりのヤツ、助けようとするなんてな」

「誰かを助けるのに、理由なんかいらないよ」

「っはは、もっともだな。      ほらよ」

薄く笑い、カリスはどこからともなく、箱型の機械と、一枚のラウスカード、ダイヤのカテゴリーA【CHANGE・STAGBEE TLE】を取り出し、悠二に手渡す。

「これは？」

「ギヤレンバツクル。俺の今は亡い仲間が、かつて身に付けていたものだ」

カリスの声に暗さがよぎる。

翔哉の世界にいた仮面ライダーギャレンは、カテゴリーKとの死闘の末、殺されていた。

「これを使えば、お前も仮面ライダーになれる、かもしれない」

ブレイドのライダーシステムには、アンデッドとの融合計数というものが存在する。

融合計数が高ければ高いほど、ライダーとしてのポテンシャルは上がり、弱ければ逆に変身出来ない場合もある。

いわば、ライダーになる素質を表す数値だ。

「変身出来なければ、その分の反動も起こり得る。最悪、身体の一部が使えなくなるなんてこともザラだ。それでも、やるか？」

「……ああ、やるよ」

躊躇いなく、悠二はギャレンバックルにカテゴリーAをスロットする。



カリスから見ても、いつそ清々しいまでの思い切りの良さだった。

「もちろん、リスクは承知の上だよ。

でも、もう決めたんだ。

シヤナや先生と同じように、キミ達を助けるって」

悠二は不安そうにする結衣の方へ目を流す。

「安心して結衣ちゃん。お兄さんは、絶対に助け出すから」

「……悠二さん」

結衣は泣きそうになりながら、首を縦に振った。

彼女に頷き返し、カリスと悠二は、アンドロマリウスジョーカーに向き直る。

「悠二！ 遅れんなよ！」

「ああ！ そつちもね！」

激励を交わし合い、二人はアスファルトの地面を蹴る。

「ヴアアアア！」

アンドロマリウスジョーカーもまた、正面の敵を排除すべく、輝いた刃を二人に振り下ろそうとする。

だが悠二はそれよりも早く、ギャレンバツクルを腰に当てていた。

銀色のカード型ベルト【シャッフルラップ】が腰に巻きつき、ギャレンバツクルを固定。

流れ出した待機音をバツクに、悠二は握り拳を作った手を手前にやり、叫ぶ。

「変身！！！」

走りながら、悠二はベルト右側のハンドルを引っ張る。

【TURN・UP】

バックル中央部のダイヤモンドから、クワガタの紋様が描かれた「オリハルコンエレメント」が射出された。

「ゲッ!!」

オリハルコンエレメントの衝撃波が、アンドロマリウスジョーカーを弾き飛ばす。

そのまま悠二はゲートを通り抜けた。

不適合だった場合の恐怖に怯え、ゆっくりと目を開ける。

と、初めに両手が赤いことに気が付いた。

上半身の程良い重みは、ダイヤモンドが施された銀色の鎧。

頭部は、緑色の複眼に、ダイヤの意匠を凝らした仮面。仮面の上部は湾曲した二本角が聳え、クワガタのような雄々しさを醸し出す。

ダイヤスートの戦士、仮面ライダーギャレンである。

「……本当になれた」

変身した本人が一番驚いたらしく、ギャレンは手を開いたり閉じたりしながら、鎧の感覚を確かめる。

「ギャレンだと？」

さすがの天王路を眉をひそめる。

「フム、融合計数も安定している。あの少年もまた、仮面ライダーになる資格を持っているということか……」

面白い。

天王路は口元を歪める。

せっかくここまで、ブレイドのライダーが集まったのだ。

少々趣向を変えよう。

「ジョーカー!!!」

「!!!」

アンドロマリウスジョーカーは反射的に、天王路の投げたそれをキヤッチする。

ケルベロス?が吸収した13枚のスピードスーツのカード、そして銀色の機械、ブレイバツクルだ。

「使いたまえ。ライダーと最強のアンデッド、その融合を私に見せてくれ」

「……フン」

短く鼻を鳴らし、アンドロマリウスジョーカーは、スピードのカテゴリーA【CHANGE・BEE TLE】をブレイバツクルにスロツト。

腰にシャッフルラップが巻かれ、待機音が流れ出す。

「……………変身」

普段よりも低い声でそう唱え、ハンドルを引く。

【TURN・UP】

ヘラクレスオオカブトが描かれた金色のオリハルコンエレメントが射出され、アンドロマリウスジョーカーを通過する。

ディアマンテゴールドに塗装された黄金の鎧。

スピードスートのカード全てが彫られたアンデッドクレスト。

王冠を思わせる仮面は、否応無しにその姿を偉大さを象徴し、蒼き瞳は氷のように冷たい光を放つ。

仮面ライダーブレイド・キングフォーム。

13体のアンデッド全てと融合した、ブレイドの最強形態だ。

更に増した威圧感に、カリスとギャレンも戦慄を隠せない。

「ようやくお出ましか」

「あれが、仮面ライダーブレイドなのか？」

「正確にはブレイドの最強形態だ。ジョーカーの力も加わってるから、さっきの状態よりも厄介だぞ。

悠二、ギャレンは使いこなせそうか？」

「戦わないことにはなんとも言えないよ。翔哉くん、このライダーの特徴は？」

以前変身したイクサとは、大分勝手が違うようだ。

感覚も、身体能力の伸びようも、微妙に違っているのが分かる。

「ギャレンは遠距離タイプのライダーだ。ベルトに吊ってるギャレンラウザーって銃がメイン武器」

「銃……あ、これが」

手に取ったギャレンラウザーは、ハンドガンタイプのようだが、それにしてはなかなか大きい。

無論、悠二は銃など使ったことがないので、撃てるタイミングは限られそうだ。

「銃がダメなら、無理せず近距離戦で行け。」

それかさっきの俺みたいに、カードをラウズしてアンデッドの力を得るんだ」

「翔哉さんの弓みたいに、この銃の溝にカードを通せてことだね」

飲み込みが早い。

翔哉は声に出さず感心する。



「作戦会議は済んだかね？」

天王路の声が、開戦の合図だった。

「さあ、ライダーバトルの始まりだ！」

「ハッ、上等だ！」

きっちり総司救って、てめえのすかした顔面をぶっ飛ばしてやる！」

「幸せに過ごす人達を巻き込んだこと、絶対に許さない！」

「……斬る！」

図らずも揃った三人のブレイドライダーが、この世界で激突する

「せいっ！」

振り下ろされたカリスラウザーの双刃を、ブレイドKFは重醒剣『キングラウザー』で受け止める。

「ウアッ！」

鏝迫り合いにもならぬまま、ブレイドKFはカリスをラウザーごと押し返す。

だがカリスも、この程度は計算済み。

「悠二、頼むぜ！」

「ああ！」

カリスの合図に応じ、ギャレンはギャレンラウザーに、カードをラウズする。

【BALLET】

アンデッドの図柄がギャレンラウザーに張り付く。

強化された弾丸は、反動で戻り返ったカリスの頭上を上手く通過し、そのままブレイドKFへ。

「グッ！」

計三発の攻撃は、右肩、仮面の端、残り一発は外れるという結果。

（ダメージは右肩だけか）

シヤナとの特訓、もうちょっと厳しくして貰えば良かったかも。

悠二は自分の未熟さを噛み締める。

彼には勿論、銃火器の使用経験はない。

ギャレンにより筋力は強化されているが、照準も甘く、重量感のあるギャレンラウザーは、両手を使っても手ブレしてしまう。

狙いが雑になるのは自然が、この状況では、そんなことを言っていられない。

カリスは戦いの流れから、すぐに次の戦略を組み立てる。

「やっぱり、銃はまだ使いこなせないか」

「ごめん。至近距離なら、さすがに当てられるとは思っけど」

「そうか。よし、悠二、お前はそのまま後ろにいる。

俺が前に出るから、俺との戦いで総司が隙を見せたら、近付いて弾丸をブチ込め」

ギャレンが頷き、再び前に出たカリスと、ブレイドKFの戦いが始まる。

ライダーとしてのスペックは、ブレイドKFが圧倒的に上。

だが、戦いが始まって以後、ブレイドKFの攻撃は一度たりとも当たらない。

「ヴウ……」

「は、伊達に長生きしてねえっての……」

カリスは、身のこなしとカリスラウザーのリーチを活かし、ブレイドKFの斬撃をいなしていく。

時に弾き、時に受け流し。

防御主体の戦闘スタイル。

全ては、ギャレンに攻撃の瞬間を与えるためだ。

「ヴァアア！！」

業を煮やしたのが、ブレイドKFは大きく振り被り、パワーを乗せた斬撃を繰り出してきた。

（来た！）

しかしそれこそ、カリスの待っていたタイミングだった。

すかさず、カードを一枚ラウスする。

【REFLECT】

カリスとキングラウザーの間に、光の壁が生成され、ブレイドKF

の攻撃を阻む。

「ッ!？」

今まで使ってこなかったやり方だっただけに、ブレイドKFが攻撃を防御されたのを理解するのに対し、僅かなタイムラグが生まれる。

片や、ギャレンが走り出し、ブレイドKFに銃口を向けるのは、ほぼ一瞬だった。

「喰らえっ!！」

「!！」

ブレイドKFがようやくギャレンに反応するが遅い。

絶好のチャンスを逃さず、ギャレンはトリガーに指をかける

【MAGNET】

一枚のラウズ音。

ギャレンが気付けたのはそこまでだった。

「う、あっ!？」

ブレイドの拳が、ギャレンの腹部に叩き込まれる。

トリガーを引いたギャレンラウザーは、ブレイドKFとはまるで外れた虚空へ発射された。

「悠二!!」  
「がっ!」

カリスマもまた、キングラウザーの斬撃を喰らい、ギャレンと共に地を滑る。

「う、くそっ！　悠二、大丈夫か！？」

「げほっ、あ、ああ、なんとか」

腹部を抑え、よろよろと立ち上がるギャレン。

「でもどうなってるんだ。さっき、攻撃はちゃんと当たるはずだったのに……」

「総司のヤツ、引き金引かれるより早く、【MAGNET】のカードでお前を引き寄せたんだよ」

【MAGNET】のカードは磁力を操る力。

攻撃阻止可能範囲まで悠二を引き寄せ、カウンターをキメる。

コンマ一秒遅れていれば、危険度が更に増していたであろう策。

並大抵の技術ではないが、ブレイドKFにとって、それは造作もないことだ。



「小細工は通用しないってわけか……」

ならばもう、力業で押し切るしかない。

カリスは三枚のカードをケースから取り出す。

「悠二、俺らの全力をぶつけるぞ。」

総司はやっぱり強い。全力でようやく気絶に追い込めるだろう」

「……確かに、手加減する余裕はなさそうだね」

手加減すれば、此方がやられる。

助け出すべき相手と言えど、このままでは間違いなくやられる。

あの強さだ。二人が全力を出してようやく気絶に追い込める……と  
いったところだろう。

総司の耐久力を信じ、カリスはカードをラウズした。

【FLOAT】

【DRILL】

【TORNADO】

【SPINNING・DANCE】

立体化した三枚のカードが周囲に現れ、カリスにその力を与える。

ギャレンもカリスと同じように、ギャレンラウザー後部のホルダーから取り出した、三枚のカードを通す。

【PODD】

【FIRE】

【GEMINI】

【BURNING・DIVIDE】

電子音と共に、カリスは童巻を纏い浮き上がり、ギャレンは足に炎

を灯してジャンプし、身体を一回転させる。

ブレイドKFも、相手を迎え撃つべく、鎧に描かれたアンデッドクレストから、強化されたギルドラウズカードを顕現。

手に取った五枚のカードは、キングラウザーのスロットへと吸い込まれていく。

【SPADE・2・3・4・5・6】

【STRAIGHT・FLASH】

キングフォームに到達した者のみが見える、五枚使用のカードコンボ。

ブレイドKFが左手を翳すと、キングラウザーの他に、もう一本の剣が現れる。

炎を吹き上げるキングラウザーと、蒼い雷電が迸るブレイラウザーの二刀流だ。

「ハアーーーーッ!!!」

「だあーーーーッ!!!」

カリスが放つ、削岩機の如き速度での回転キック、スピニングダンス。

空中で分裂し、炎を纏ったドロップキックを放つギャレンのバーニングデイベイド。

必殺技と言うに申し分ない威力のそれを、ブレイドKFは、

「ヴァアッ!!!」

キングラウザーの横薙ぎでカリスのスピニングダンスを弾き、返す刃でカリス本体を斬る。

「なっ!? があああ!!!」

次にブレイラウザーに宿った雷電で、二体のギャレンの体勢を崩し、

カリスと同じように斬りつけた。

「うわああ!!」

火花を散らしながら、両者は受け身も取れず、真つ逆様に地面へ叩きつけられる。

ギャレンに至ってはダメージの影響か、再びオリハルコンエレメントが現れると、変身が強制解除され、悠二の姿に戻ってしまった。

「が、ぐ……」

カリスは翔哉にこそ戻らなかったものの、ダメージは甚大らしく、立つことも出来ない。

変身解除された悠二も、似たり寄つたりの状態である。

（っ、くそっ!! ワイルドカリスが使えないとはいえ、何てザマだ……!!）

全力をぶつけても、この有り様。

齒噛みしたい思いとはこのことだ。

無力感を味わうしかない二人を、冷酷に見下ろすブレイドKF。

天王路の高笑いが聞こえてくる。

「ハツハツハ、終わってみれば無様なモノだ。もう少し楽しませてくれるかと思っただがね。

まあいい、ジョーカー。ヤツを活動停止まで追い込み封印しろ。もう一人は殺して構わん」

近付いてくるブレイドKFの足音は、まさに死へのカウントダウンだった。

これから始まるであろう惨劇に、打算的な覚悟を決めかけていた。

敗者に一瞥をくれ、殺意の光に輝くキンググラウザーが振り上げられる

「やめてー！」

キンググラウザーの手が止まる。

ブレイドKFと二人の間に、結衣が割って入ったのだ。

「どけ……」

「いや」

両手を広げ、二人を庇う結衣に、ブレイドKFは通告する。

「どけと言っている……！」

「いやー！」

より強く叫び、結衣は首を横に振る。

目は大粒の涙を浮かべながら。

「これ以上、誰かを傷つけるなら、お兄ちゃんでも許さない！」

傍らにいたカリスは、驚きを隠せなかった。

あの結衣が、総司にこんなことを言うなど。

愛する人に立ち向かう。

それは一体、どれだけの勇気がいることなのだろう。

「結衣ちゃん、ダメだ……！早く、逃げて！」

「退きません！」

悠二が声を振り絞るも、結衣は動かない。

「もう……お兄ちゃんが誰かを傷付けるところなんか、見たくないんです！」



憎まれ口を叩いても、困っている人を放っておけない優しさ。

誰かを守るために戦う姿を、もう一度見たい。

優しい兄の姿を、取り戻したい。

結衣の願いはただそれだけだ。

(それだけ、なのに……)

どうして。

どうしてこんなにも、兄との距離は遠くなってしまったのだろう。

「退かないのなら……消える。人間」

一片の暖かさもない声を聞いた時、結衣は全てを諦めていた。

悲しみというにも生温い。

兄が離れてしまったことへの、深い絶望感。

抜け殻のようになった結衣目掛けて、命を刈り取るキンググラウザーが、剣閃を描く。

『結衣ちゃん!!』

翔哉と悠二の絶叫をさえも耳に入らぬまま、結衣は静かに死を受け入れようとしていた。

ブォン!!

「えっ？」

悠二は最初、何が起きたか理解出来なかった。

かろうじて認識できたのは、ブレイドKFが、急に攻撃を停止した  
ことだ。

冷静に見れば、結衣の真正面に、灰色の光を放つオーロラが現れて  
いる。

「世界の、壁？」

その場の誰もが呆然とする中、翔哉が唯の事実だけを口にする。

最初に聞こえたアクセル音は、オーロラから聞こえてくるらしい。

それは段々と大きくなり、そして

蒼いバイクが、灰色のオーロラから飛び出し、ブレイドKFを弾き飛した。

「ゲアッ!!」

思いもよらぬ襲撃に反応が遅れ、ブレイドKFは情けなくアスファルトの道を転がる。

「どうにか間に合ったな、大丈夫か？」

「……は、はい」

結衣が戸惑いながらも言う。

ブレイドKFを轢いたバイクの乗り手は、二十代後半の男性だった。

黒ずくめのスーツにジーンズ。

茶に染めた髪はやや長く、その下にある表情はサングラスに隠れている。

が、カリスが目を奪われたのは、そこではなかった。

（あのバイク、ブルースペイダー……？）

ブレイド専用の高スペックマシン、ブルースペイダー。

それを持つということは、この男も……？

カリスの疑問をよそに青年はバイクを降り、ブレイドKFと天王路を睨む。

外したサングラスの下には、視界に入れたものを射殺すような、強い眼光が光っていた。

「もう会うことはないと思っていたが……久しぶりだな。天王路」

「貴様は……っ！！」

天王路から、先ほどまでの余裕は掻き消えていた。

青年を見た途端、苦虫を噛み潰したようになったのを見る限り、二人はどう見積もっても、友好的な間柄ではないらしい。

「また、私の邪魔をしようというのか！！」

我が、崇高なる目的を！！」

「ロクでもない考えしか起こさない身の上で良く言ったものだな。崇高だろつがなんだろつが、それが世界のバランスを崩すのなら、俺はお前達を放つてはおかない」

「違う！！ 私の計画は世界のバランスを保つ為のものだ！ライダーと怪人を統括すれば、争いの無い、真の世界のバランスを創ることが出来る！」

「そして、お前がその世界の支配者となる……か？」

青年は、まるで変わらない、目の前の妄念に取り憑かれた男に失笑する。

天王路はさらに語気を強めた。

「ええい！ これだけ言っただけわからぬか！ 貴様がやるうとしていることは、平和を妨げる行為に他ならないということをし！」

「お前こそ、まだわかっていないようだな」

青年は一枚のカード、カテゴリーA【CHANGE・BEETLE】を翳す。

「全てのアンデッドを封印する……それが俺の仕事だ。そう言わなかったか？」

青年が放つ威圧感に、その場にいた全員が畏縮する。

それはまさに、研ぎ澄まされた剣。

過酷な運命の中で研磨され、切り札となるに相応しい精錬され尽くされた力。

「さあ来い。天王路、ジョーカー。俺が封印してやる」

「ふっ、ちょうどいい！ 貴様も纏めて始末してくれる！」

剣崎、一真ア!!」

「!! 剣崎、一真!?!」

天王路が零した名前に、カリスが異様な反応を示す。

「オリジナル・ブレイド……!!」

翔哉、悠二、結衣の前に立つ青年 剣崎一真は、総司の持つものと同じ、ブレイバックルにカテゴリーAをセット。

ベルトが巻かれ、待機音が流れ出すと共に、剣崎は右手をゆっくりと上げていく。

「変身」

前方に出す手を入れ替え、ハンドルを引く。

【TURN・UP】



黄金のオリハルコンエレメントが剣崎を通過。

次の瞬間、剣崎は金色の鎧を纏う騎士　総司と同じ、仮面ライダー  
ーブレイド・キングフォームへ変身を遂げていた。

ただし、総司ブレイドとは違い、複眼の色は鮮やかな赤色だったが。  
現れたキングラウザーを片手に、赤目のブレイドKFは、ゆっくり  
と歩みを進める。

「ぬうつ……、変身!!」

ケルベロス?に姿を変えた天王路が、真っ先に赤目のブレイドKF  
目掛け、肩にある獣の頭から、火炎弾を発射する。

「フンッ!!」

キングラウザーの一薙ぎで炎をかき消し、赤目のブレイドKFは熱  
をもともせず、ケルベロス?との距離を詰める。

「っはあー!!」

踏み込みからの一閃が、ケルベロス？を袈裟に斬る。

「ぐ、うおー!!」

痛みに悶えながらも、ケルベロス？は手を赤目のブレイドKFへ翳す。

「!!　　おい、離れろ!!　　そいつはラウズカードを吸収し

」

だが、翔哉の警告は意味をなさなかった。

赤目のブレイドKFが即座に、キングレーザーの腹で、ケルベロス？の腕を払ったからだ。

カード吸収能力は、対象を指定出来ず、不発に終わる。

「なっ!?!」

「お前は、復活しても大人しくしているべきだったな」

作った隙を逃さず、ブレイドKFは融合させているアンデッドの力を解放。

「っせい!!」

輝く炎を灯した拳を突き出す。

「が、ぐあぁッ!!」

直撃したパンチに防御さえ出来ず、吹っ飛んだケルベロス？はダメージからか、さっきの悠二のように、天王路の姿へ変身解除された。

「……………」

立ち上がれずに呻く天王路を、冷たく見下ろす赤目のブレイドKF。

カリス、悠二、結衣は啞然とするしかなかった。

圧倒的。

そう表現するのに何の不足があるだろうか。

ケルベロス？は決して弱い相手ではない。総司相手に勝ち、彼を捕らえた実力の持ち主だ。

しかし彼 剣崎一真の力は、それを遥かに超えていた。

「な、何なんだあの人……？ あの人、ブレイドなのか？」

「ただのブレイドじゃない」

未だ混乱が覚めやらないカリスが答える。

「オリジナルライダーだ」

「オリジナル？」

「……結衣達が住む平行世界には、奏夜さんや晋作さんのように、同じキバでも、それぞれが微妙に異なるライダーが無数の世界にいます。オリジナルライダーは、それら異なる世界のライダー達の雛型……そのライダーの始まりなんです」

「なら、あの剣崎って人は、仮面ライダーブレイドの原典ってこと？」

翔哉と結衣が頷く。

悠二はもう一度、赤目のブレイドKFを見る。

ケルベロス？を下した彼は、次の相手、蒼目のブレイドKFを視界の端に捉える。

挑発するように、キングラウザーの切っ先を向けた。

闘争心の塊と化した蒼目のブレイドKFは、激情を瞳に漲らせ、

「ヴウ………ウアアアアア！！」

二本のキングラウザーが交差し、赤い火花が散る。

二合、三合と斬り合い、時に鎧と剣が擦れ合う音が混じる。

しかし、その音が鳴る度に傷ついていくのは、蒼目のブレイドKFの方だった。

赤目のブレイドKFは、野獣のように荒々しい剣さばきを、淀みない動作で受け止める。

鏝迫り合いにおいても、やや赤目のブレイドKFが優勢だ。

「ヴ、ガアアアア!!」

「……哀れだな」

互いの剣を挟み、赤目のブレイドKFは告げる。

「お前は運命に負けるのか」

剣崎の口調は変わらない、だが僅かな悲哀が込められたように聞こえた。

「お前は守りたかったんじゃないのか。

人間とアンデッドが分かり合えないと思っ  
ていても、お前は希望を捨てたくなかった。

だから、人間を守っていたんじゃないのか」

赤目のブレイドKFは横目で、戦いを見守る結衣を示す。

「ヴ、うう……！！」

蒼目のブレイドKFの力が、僅かに緩む。

途端、赤目のブレイドKFの蹴りが叩き込まれ、キンググラウザーの刃が鎧を切り裂く。

「グ、ウ……」

鎧の隙間から、翔哉と同じ緑の血が流れ出す。

結衣が息を詰まらせるのが聞こえた。

「解放されたジョーカーの力は全てを滅ぼす……お前が愛そうとした人々も。」

それでもいいのか!」

「!」

脳裏によぎる映像。

華のように暖かい笑みを向けてくれる、結衣と広瀬。

「……っ、俺には、止められない!」

ジョーカーの闘争心が、大切な思い出を塗り潰していく。

沸き立つ異形の血が身体を動かし、赤目のブレイドKFを排除するためだけに動く。



蒼目のブレイドKFは、アンデッドクレストから五枚のカードを顕現する。

ブレイドKFが持つ最強コンボ『ロイヤルストレートフラッシュ』の発動に必要なスペード10～Aまでのカードだ。

【SPADE・10・J・Q・K・A】

【ROYAL・STRAIGHT・FLASH】

カードを読み込んだキンググラウザーが黄金の光に包まれ、彼の正面には五枚のカードが並ぶ。

「……そうか」

赤目のブレイドKFの声が、一瞬翳りを帯びる。

「ならば、お前にブレイドである資格はない。  
俺が、ここで封印する……!」

赤目のブレイドKFもまた、鎧に描かれたアンデッドクレストからカードを呼び出す。

総司と同じ、『ロイヤルストレートフラッシュ』。

だが、その枚数は

51枚。

「……!!」

「す、全てのスートのラウズカードを!？」

アンデッドの力を51枚分操る。

ジョーカーである総司と翔哉には、それがいかに非常識なことかが理解出来た。

悠二と結衣にしる、赤目のブレイドKFの背後に浮かぶカードが、  
どれだけの力を秘めているかは理解できる。

「ダイヤのカテゴリKが無い以上、パワーは落ちるか……」

赤目のブレイドKFの目の前で、51枚のカードは、四つのカテゴリごとに集約され、四枚の【WILD】のカードを生み出す。

もつとも、ダイヤスートの【WILD】のみ、絵柄が欠けてはいたが。

最後に赤目のブレイドKFは、自分の力の分身 【JOKER】のカードを生み出し、四枚の【WILD】ごとラウザーにスロットする。

【WILD・WILD・WILD・WILD・WILD・JOKER】

【FINAL・STRAIGHT・FLASH】

腰を落とし、キングラウザーを構える赤目のブレイドKF。

カードが五枚現れるのは『ロイヤルストレートフラッシュ』と同じだが、そこに込められたパワーは段違い。

剣を覆うオーラも、黄金ではなく虹色だ。

「ハアア……、ツウエイ!!」

振り抜いたキングラウザーから発生した衝撃波『ファイナルストレートフラッシュ』が、通過した五枚のカードで強化され、蒼目のブレイドKFに迫る。

「!!　　ツハア!!」

蒼目のブレイドKFも、ロイヤルストレートフラッシュを繰り出すが、その差は歴然。

ファイナルストレートフラッシュに、黄金の衝撃波は涼風の如くかき消され、赤目のブレイドKFにクリーンヒットした。

「グツ、ガアアア!!」

虹色の衝撃波がキングフォームの鎧に炸裂し、ダメージ限界からか、黄金のオリハルコンエレメントが発生。

ブレイドKFは、総司の姿に戻る。

「ガ、ハッ……」

「……」

血を流し、動けないのは明らかなアンドロマリウスジョーカーに対し、ブレイドKFは、ラウズカードを取り出す。

それが意味するのは アンデッドの封印。

躊躇いなく、彼がカードを投擲しようとした時だった。

「やめろ!!!」

「っだめ!!!」

カリスと結衣の叫びに、ブレイドKFの手が止まる。

全ては、その刹那に起こった。

グラリ。

『うわっ!!』

「きゃっ!!」

振動が大地を伝い、御崎大橋を揺らす。

カリス、悠二、結衣の音が重なり、三人がバランスを崩す。

「……遂に、始まったか」

ブレイドKFが呟く傍ら、天王路が動く。

「クッ、まだジョーカーは封印せん!!」

天王路は光のオーロラを呼び出し、霞の中へと姿を眩ます。

気絶したままのアンドロマリウスジョーカーもまた、オーロラに呑み込まれ、姿を消してしまった。

「……………逃げたか」

ブレイドKFはブレイバツクルのハンドルを引き、剣崎一真の姿に戻る。

しばらくして揺れは収まり、残された三人も立ち上がる。

「なんだったんだ、今の地震……………。全然予兆もなかったのに」

悠二が危惧するように、あれだけの規模でありながら、初期微動すらない不自然な揺れだった。

「わからねえ。もしかしたら、天王路達がこの世界に来たせいか……………」

「違うな」

カリスの仮説を、剣崎が否定する。

「天王路はあくまでこの世界に続く扉を作ったに過ぎない。  
さっきの地震 この世界が崩壊に向かうのは、【黄金の不死鳥の  
世界】から来たお前達のせいだ」

「……何だと」

【SPIRIT】

カテゴリー2『スピリットヒューマン』をラウズし、カリスもまた  
翔哉の姿になる。

「どつという意味だ」

「お前と沖田結衣は本来、ブレイドとキバの世界に属している。そ  
れだけならまだ良かった。  
しかし、お前達は【黄金の不死鳥の世界】からこの世界に来た。そ  
れは、大きな過ちだった」



「過ち？ そんな、私達はこの世界に迷惑をかけようとなんか……」

「お前達がそうでも、この世界にとっては違う。」

……【黄金の不死鳥の世界】は様々なライダーが混在する世界。お前達はもはや、キバとブレイドの世界だけの人間ではない。九つのライダーワールド、全ての物語に関わる存在だ」

殊更忌々し気に、剣崎は告げる。

「ここは本来、世界の融合に巻き込まれる恐れが無い、『完全な融合を果たした世界』。」

だが、お前達が来たことにより、この世界までも『様々なライダーが混在する世界』になりつつある。

完璧だったバランスは崩され、この世界はいずれ破壊されるだろう。言わば、お前達は全員、この世界にとってのデイケイドだ！」

「俺達全員が……デイケイド」

その事実が何を意味するか、翔哉はよく知っていた。

自分達は、この世界に『異物』を運び込んでしまったのだ。

キバの物語に、様々なライダーの物語という異物を。

「どうすれば、いいんですか」

翔哉と同じく、事実を突き付けられた結衣が尋ねる。

「どうすれば、この世界は破壊されずに済むんですか」

「この世界から出ていけ」

一片の温かみも無く、剣崎は言い放つ。

「歪みの原因であるお前達が出て行けば、世界の融合も止まる。簡単な話だ」

「そんな……じゃあお兄ちゃんとミルさんはどうなるんですか!!」

「……奴らはもはやお前達の友ではない。

完全に敵の手中に落ちた以上、俺が始末をつける」

「っ、待てよ!! あいつはジョーカーになってしまったのは、カードを失ったからだ! 天王路からカードを取り戻せばまた…

…」

「取り戻してどうなる？ 天王路から聞いただろう。ジョーカーの闘争心に身を任せたあの姿が、ヤツの本心だ。例えカードを再び渡したとして」

お前らは沖田総司を再び仲間と呼べるのか？

二人は反論する術を持たなかった。

カードを奪われ、感情を抑える壁が消えた時、総司の憎悪は人間へと向いた。

普段から、心の奥底で、他者を怨んでいなかったと、誰が言い切れるだろうか。

信頼と猜疑心がせめぎ合い、二人は判断を下せなくなっていた。

総司は、自分達が助けしてくれることを望んでいるのだろうか。

仮にそうだとしても、自分達が居続けることで、この世界に迷惑がかかってしまう。

そうなってしまえば、取り返しのつかないことになる。

「時間は限られている。お前達が元の世界に帰るといふのなら」

「違う」

突如、剣崎の言葉が遮られた。

ずっと黙りきりだった悠二が、口を開いたのである。

「まだ、総司さんを救える可能性はまだ残ってる」

「……正気か？　　坂井悠二。お前の世界を危険に晒すことになるんだぞ」

半眼になる剣崎。

呆れたような視線が気に入らないのか、悠二は対抗心を露わに、剣崎を睨み返した。

「……総司さんがどんな仕打ちを受けてきたのかは、翔哉くん達から聞いている。

確かに、人間を恨んでも仕方ないと思うよ。

でもそんなの、誰だってそうじゃないか。

生きてたら、誰かを憎んだこと一回や二回あるはずだろ」

剣崎は感情の読めない瞳のまま、悠二の話を聞いている。

翔哉と結衣も同じだ。

「あれは総司さんの本心じゃない。誰もが持つてる心の一部なんだよ。」

それなら、まだ賭けてみる価値はあると思うけど」

「戯言だな。確証も何もない絵空事だ」

考慮さえもせず、剣崎は悠二の言葉を斬り捨てる。

「そんな曖昧な可能性に賭け、自分の世界を危険に晒すなどバカげている。」

沖田総司を知らないお前が、勝手な理屈を述べたところで、誰がそれを信じる」

「ああ、確かにそうだよ。総司さんどころじゃない、翔哉くんや結衣ちゃんのことだって、僕はよく知らないさ」

でも。

語気を強くする悠二。

「翔哉くんと結衣ちゃんが、総司さんを助けたいって気持ちは、嫌ってほど伝わってきた。」

だから、それだけ信頼されてる総司さんを、僕は信じてみたい」

世界を危険に回してでも、助けるべき素晴らしい人だと、信じてみたいのだ。

きつと、自分が憧れる少女も、こころするだろうから。

「だから、まだ諦めたくないんだ。

世界は消させないし、総司さん達も絶対に奪い返す。　　そうだよ  
ね、翔哉くん、結衣ちゃん」

翔哉と結衣を振り返り、悠二は問う。

あとは、二人の意思次第とも言つように。

「……俺達は、お前らの世界を破壊するかもしれないんだぜ？」

ややあつて、翔哉が躊躇いがちに唇を動かす。

悠二は、まるで奏夜の如く、おどけた態度で答える。

「それより早く、総司さんを助ければいい」

「結衣達が助けようとしてる人は、悠二さんの世界を賭けてまで、助ける価値が無いかもしれないですよ」

「心にもないこと言わないでくれよ。結衣ちゃんは、総司さんを助けたくないなんて、思ってないだろ」

結衣への返事にも、同様の態度だ。

実際のところ、悠二の話すことは、剣崎が言つとおり戯言なのかもしれない。

翔哉や結衣に見せた対応も、ただの強がりなのかも知れない。

だがそれは、決して不純な思いの産物でないことは、誰にも分かるはずだ。

この状況で、そんな台詞が吐ける悠二の姿に、

『っ、あははは！』



翔哉と結衣は、自然と笑みが浮かんでいた。

「ああ、そうだな。俺達もお前らに迷惑をかけるつもりは無い。さつさと、総司達を取り返して、天王路をぶっ飛ばす！」

「結衣もです！ お兄ちゃんを取り返したら、凜ちゃんと一緒に、心配させた罰として、目一杯叱ってやらなきゃいけませんから！」

「よし！」

迷いが吹っ切れたらしい結衣と翔哉を見ながら、

（ちょっと、先生の気分が分かったかも）

迷っている人のために道を示す、紅奏夜の生き様。

あんな生き方、絶対真似できないと思っていたけれど、

（先生はきつと、こういう晴れやかな表情を原動力にしてるんだ）

奏夜には及ばないと自覚しながらも、悠二は迷う人の役に立てた実感を噛み締める。

そんな悠二に、結衣と翔哉は、素直な気持ちを伝えた。

「……ありがとう、悠二」

「ありがとうございます。悠二さん」

「それは総司さんを取り返した時に言ってくれ」

軽く手を合わせた後、翔哉は口を閉ざしたままの剣崎に向き直る。

「と、そういうわけだ。オリジナル・ブレイド。  
あんたが何と言おうが、俺達は総司達を取り戻す。  
例えあんたがブレイドの始まりでも、邪魔はさせない」

さっきの脆弱さとは打って変わった気迫に、剣崎は視線を逸らさず、

「……一つ聞かせる」

とだけ言った。

「何故そこまで、沖田総司を助けようとする。

世界が違えど、お前の使命はアンデッドを封印することの筈だろう。アンデッドであり、違う世界を生きる沖田総司を、何故助けようとするんだ」

「それは悠二が思い出させてくれたよ。

使命も世界も関係ないし、そもそも誰に命じられたわけでもない」

俺はただ、一人の友達として、総司を助けたい。

そう願っただけだ。

翔哉の宣言した決意。

彼にとっては至極当たり前な答えに、剣崎は驚いたように目を見開く。

次の一瞬、剣崎はほんの少しだけ、顔を綻ばせたように見えた。

もつとも、翔哉達が確認するより早く、剣崎は口元を、何処からか取り出したカードで隠してしまったのだが。

「面白い」

剣崎は持っていたカードを翔哉に手渡す。

翔哉が手元を見ると、それは三枚のラウズカードだった。

「これは？」

「俺のカードだ。」

これを上手く使えば、沖田総司を助けられる可能性が少しは上がる、かも知れない」

「……何で、こんなものを俺に？」

「勘違いするな。少し猶予をやるだけだ」

言って、剣崎は虚空に手を翳す。

世界を繋ぐ光のオーロラが現れ、翔哉達とは別方向に移動していく。

「今のオーロラは？」

結衣が尋ねると、

「はぐれたお前達の仲間を、天王路の場所に移動させた。  
今から追えば、まだ間に合うだろう」

同じように剣崎はもう一つ、オーロラを呼び出す。

「お前達も行け」

「うおっ」

「きゃっ」

「わっ！」

オーロラは翔哉達に向かって進み、三人を呑み込む。

「……運命の切り札を掴み取ってみせろ、黒木翔哉。  
お前に、ライダーの資格があるなら」

次元移動の最中、翔哉は確かに、剣崎の激励を聞いていた。

第X話・EPISODE・BLUE/集うエース・原書の蒼剣(後書き)

今回は笑えるほど長くなってしまいました；

エンジェビル先生の素晴らしいキャラに触発され、ブレイド好きの血が騒いでしまいました。だが、私は謝らない。

・今回の三人は常識人チーム。よく考えれば、もう一方に非常識人が集まり過ぎていた気が(笑)

・アンドロマリウスジョーカーは、エンジェビル先生オリジナルのジョーカーです。比例して、沖田総司の強さが伝われば幸いです。

・悠二がギャレンになりました……が、今回はあまり活躍ナシ。でも橘さんのギャレンも、大体あんな感じじゃありません？

・ピーコック戦とギラファ戦での凄まじい強さはさておいて(酷)悠二ギャレンの活躍は、次回に回します。

・ファイナルストレートフラッシュは、ふつと考えついて入れた技です。オリジナルライダーの実力アピールになったでしょうか？

・本編でやった音也救済と同じく、ディケイドでは分からなかった剣崎の優しさをちらつと出してみました。

本来の剣崎なら「ディケイドを倒さず、世界を救う方法があるはずだ！」とか真っ先に言ってくれそうだったのに……。ディケイドでは、あの最終回に見せた優しさをもう一度出して欲しかった。

次回でコラボ企画は終わりです。

奏夜の奇策とは？

剣崎が渡した三枚のラウズカードは？

コラボ企画フィナーレをお楽しみに！



第X話・EPISODE・VIOLET／封印と解放・三枚の切り札

御崎市沿岸部。

海岸から見える波は荒れ、切り立った崖はサスペンスの舞台を想起させる。

そこに現れたのは、世界を繋ぐオーロラ。

鈍い輝きは次第に霞み、後には六人と一匹　奏夜、シャナ、悠二、キバット、晋作、結衣、翔哉の姿。

「ありや？　何処だここ？」

「悠二！」

「シャナ、先生！　良かった、みんな無事で！」

「みんな何処行ってたんでえ？　はぐれちまったから、俺様達心配してたんだぜ？」

「結衣ちゃんと翔哉も無事だったか」

「はい。晋作さん達こそ」

「何にせよ、全員集合ってトコだな」

剣崎は本当に奏夜達をここに運んでくれていたようだ。

安堵し、顔を見合わせたのも束の間、六人と一匹の視線は、静かな海には似合わぬ、荒々しい気配へと向く。

「来たな。仮面ライダー共」

ごつごつした岩場の先、奇襲を警戒してか、既にケルベロス？に変身している天王路が立っていた。

剣崎との戦いが堪えたのか、今までのような余裕は無く、異常なまでの闘気を漲らせている。

「しつこい連中だ。まだ諦めようとしはないのか」

ケルベロス？とは対照的に、キラファアンデッドはせせうんぞりしたように肩を竦める。

「グルルル……！！」

「……………」

その傍らには、戦いへの渴望にうなり声を挙げるティターンキバと、口を閉ざす蒼目のブレイドKFの姿があった。

『……………』

晋作、結衣、翔哉が顔を曇らせるが、冷静さが勝っているのか、拳を握り締めるに留め、まだ動かずにいた。

代わりに奏夜が口を開いた。

「戦う前に一応言っておくぜ。攫った二人を今すぐ返せ。そうすれば見逃してやらんでもない」

「馬鹿を言うな、今更問答は無用だ。

我々としても、これから先貴様らに追い回されるのは我慢ならん。

「ここで消えてもらおう」

「そりゃ残念。」

「なら、力づくで取り返すまでだ」

奏夜、晋作、シャナ、翔哉、結衣が威風堂々と並び立つ。

「結衣ちゃんは下がってる。応援者がいるだけで随分違うからな」

「はい。……翔哉さんも、みんなも怪我しないでくださいね」

気遣わしげな結衣に微笑み、翔哉はカテゴリーAを構える。

「悠二。お前も下がってなさい」

「いや、僕も戦うよ。翔哉くんから借りた『これ』がある」

「む。異世界の宝具か」

悠二はシャナとアラストールにギャレンバツクルを見せ、戦う意志を示す。

「足手まといにはならない。どうしても助けたい人がいるんだ」

「……本気、なのね？」

強く頷く悠二に、シヤナは呆れるでもなく、対等な立場で戦う者として、言葉をかける。

「わかった。でも忘れないで。」

悠二はまだ弱い、その上で、自分が何をすべきなのか決めなさい」

「ああー!!」

下手な激励よりも、よっぽど身に入る言葉だった。

シヤナは髪を紅蓮に染め上げ、夜傘から取り出した贅殿遮那を両手で握り、悠二はギャレンバックルにカテゴリーAを装填する。

「高杉。今度は勝手なマネすんなよ。俺の手筈通りにやれ」

「何度も言わなくなたって分かってるっつの。……現状、お前の奇策

以外に、ミルちゃん助け出せる可能性は無いみたいだからな。だったらイヤでもやるしかねえだろ」

「よろしい。それじゃ、そろそろ始めるか!!」

“奏夜がコバルトブルーのカードデッキ”を構え、

「頼むぜキバット！力を貸してくれ！」

「任せろい！キバツていくぜえ高杉!!」

“高杉がキバットバット三世”を呼び出し、腕を強く噛ませる。

「ガブツ！」

アクティブフォースが流れ込み、晋作の腰に真紅の止まり木『キバットベルト』が鎖と共に現れる。

それぞれの変身ツールを手に、四人の声が重なった。

『変身!』

【TURN・UP】

【CHANGE】

晋作に巻き付いた光の鎖が弾け飛び、彼の身体は仮面ライダーキバに。

奏夜に幾重にもオーバーラップした影が重なり、仮面ライダータイガに。

悠二は射出されたオリハルコンエレメントを通過し、仮面ライダーギヤレンに。

翔哉は水しぶきのようなエフェクトと共に、仮面ライダーカリスに。

四人の仮面ライダーにシャナを加えた五人が、ここに並び立った。

「みんな、行くぞ!」

タイガの号令を合図に、戦士達はそれぞれの敵に向かっていく。

【K I V A ・ S I D E】

「っせい！」

タイガは呼び出したデストクロード、ギラファアンデッドに飛びかかる。

それを双剣で受け止めるギラファアンデッドには、まだ余裕がある。

「無駄だ！ そのライダーの力は既に見切っている！」

「なら、俺の教え子の力は見切ってるのかな！！」

シヤナはタイガを隠れ蓑にし、死角から贄殿遮那を振るう。

「やあっ！」



「ちいつ！」

先刻も使ったバリアを貼り、シャナの斬撃を阻もうとする。

「無駄よ」

煌めきを宿す刃は、寸分の狂いもなく、ギラファアンデッドを真一文字に切り裂く。

「ぐおっ！？」

予想外の事態に、ギラファアンデッドは傷口を押さえながら一歩後退する。

「バカな……俺の力が働かないだと！？」

「贗殿遮那に、陳腐な異能は通用しない」

相棒を誇るように、刀を揺らすシャナ。

彼女の太太刀『贄殿遮那』は、刀身に干渉する力全てを無効化する。今の場合、斬撃を阻む障壁が、刀への干渉とみなされ、バリアを無効化したのだ。

(この娘、俺とは相性が悪いな……)

ギラファアンデッドは、双剣を構え直す。

純粹な格闘戦に持ち込むつもりらしい。

だが、それこそシャナとタイガの思惑通りだった。

(第一関門は突破出来そうだな)

(奏夜、その力は使いこなせそう?)

(ああ、キバとは多少勝手が違うが、そこは経験でカバー出来る)

(何にせよ、あとは高杉晋作次第だな。あれを使うタイミングを見

誤るなよ。紅奏夜)

(了解)

ここからは長期戦になる。

どっだけギラファアンデッドを、こちらに引き付けられるかがカギになるだろう。

(頼むぜ晋作、キバット。なるべく早くしてくれ)

“ 囷役 ” の任を果たすため、タイガは距離を詰める。

デストクローと、ギラファアンデッドの双剣が再び火花を散らした。

一方、晋作が変身したキバは、ティターンキバを相手取っていた。  
「ヴァアッ！」

毒の触手をかいくぐりつつ、キバは攻撃の隙を探す。

「おい高杉。こっちのキバは使いこなせるか？」

「問題無いぜキバット。ミルちゃんのキバとほとんど変わらねえ」

鞭のようにしなる攻撃を、キバは上手くかわしていくが、決定打を浴びせるには至っていない。

（俺はとにかく、数秒だけティターンキバの動きを止めりゃいいんだがな……）

そう簡単にはいかないらしい。

あの触手では、殆どの攻撃には対処されてしまう。

全ての動作が一時停止するレベルの一撃。

奏夜の奇策において、それがキバに要求されたものだった。

だが、なかなかどうして、容易ではない。

広範囲の攻撃に加え、アンデッドの不死性とキバの鎧の防御力は伊達ではない。

そこまでの一撃ともなれば、難易度は必然的に上がる。

と言いつつも。

(一応、アイデアは浮かんでるんだけどな)

上手くいくかはわからないが、今更悩んでももられない。

「ふっ！」

キバは間合いを取り、伸びてきた触手 毒の滴っている針の下、鞭の部分 を掴む。

「グッ!?!」

ティターンキバの驚愕も束の間、

「オラアアッ!?!」

キバは触手を思いつきり引つ張ると、その出所であるティターンキバの身体が浮き上がり、宙に放り出された。

背負い投げの要領で、キバはティターンキバを地面に叩き付ける。

「まだまだあ！！」

触手に再び力を込め、ティターンキバを宙に浮き上げ、また地面に叩き付け、それを繰り返し続ける。

「ギ、ガ、グツ！！」

重力と遠心力が加わった衝撃に、さしものティターンキバもただでは済まない。

キバが動作を止める頃、ティターンキバに蓄積されているダメージは相当なものになっていた。

「グツ、があ、ア……」

ひび割れた地面に転がっている様を見ても、しばらく活動不可なのは明らかだ。

「奏夜あ！！ やれ！！」

「待ってましたあ！！」

キバの合図に、ギラファアンデッドの相手をしていたタイガが動く。

「シヤナ！！ 時間稼ぎよろしく！！」

「わかった！」

シヤナがギラファアンデッドの相手を引き受け、タイガはデストバイザーにカードを装填する。

【FINAL・VENT】

鳴り響く電子音に呼応され、タイガの契約する虎型モンスター『デストワイルダー』が現れる。

「グルオオオ!!」

デストワイルダーは動けないティターンキバを爪で引きずりながら、主人であるタイガの元へ疾駆する。

その先には、デストクローを構えたタイガの姿。

「っ!?!」

と、その最中、ティターンキバの鎧から、ミルキバットが外れた。

地面を転がりながら、ミルキバットはミルの姿へ戻る。

(狙い通り!)

タイガは心中でガッツポーズしつつ、変身を解除され、引きずられてくるティターンへ、デストクローを突き立てた。

「ガフッ!?!」



タイガの必殺技『クリスタルブレイク』を喰らい、ティターンはその場へ崩れ落ちる。

ティターンの腰にある、二つのアンデッドバックルが割れ、アンデッドの戦闘不能を告げた。

「お休みの時間だ」

タイガは晋作から預かった二枚のラウズカードをスローする。

緑色の光に包まれ、合成アンデッドであるティターンは『シーフカメレオン』と『ポイズンスコープιον』のカードへ封印された。

「!!!  
貴様！  
最初からティターンと娘を分断させるつもりで！」

「あら、今頃気が付いた？」

シヤナは、刀を合わせるギラファにほくそ笑む。

タイガも仮面の下でしたり顔を浮かべる。

「前の戦いで、高杉がティターンを凍らせた時、ネコ娘は真っ先に分離した。

つまり、命令の優先度から言えば、装着者の安全より、俺達の排除が上位命令ってことだろ？」

すぐにネコ娘は変身を解くと踏んだのさ」

ただ、懸念もあった。

ティターンキバのウリである触手の広範囲攻撃は、殆どの攻撃に対処出来る。

更に言えば、ミルキバットを通じ、ティターンキバはキバの必殺技を全て知っているから、キバでトドメを刺すのは難しい。

だが、洗脳され、晋作のことを認知出来ないミルキバットが伝えられるのは、キバの情報のみ。

つまり、龍騎ライダーであるタイガの必殺技までは、伝わらなかったのだ。

「くっ、だが娘の毒はまだ抜けてはいない！ 何の解決にもならんぞ！」

「そいつは高杉次第だ。ここから先、俺とシヤナには何も出来ない。せっかくだ、お前の相手してやるよ」

悠々とタイガが、ギラファアンデッドとの戦いに戻る中、キバは再びミルと向かい合う。

「フッ！」

「……」

キバは一瞬瞳を伏せ、静かにサイドケースから、一本のフェッスルを取り出す。

「ミルちゃん。ちょっと痛いかもしれないけど、我慢な」

そのフェッスルは、ミルの髪と同じ栗色と濃い黄色で塗装されており、何処か猫を彷彿とさせるデザインだった。

「キバット。やれるか？」

「ふん、俺様を誰だと思ってんだ。由緒正しきキバット族の末裔だぜ？」

「……ふっ、そうだったな」

鼻を鳴らすキバットに苦笑し、晋作はフェッスルをキバットにくわえさせる。

『ミルフィーユ、封印だ!!』

三つの音色がユニゾンしたような旋律が流れる。

封印具『シールフェッスル』が発動した。

「ハッ！」

キバの右手から放たれた真紅のスパークが、ミルへ伝っていく。

「じゃ、ああああ!？」

弾ける光が、ミルを包み込んでいく。

目映いばかりの光が収束していき、フェッスルと同じ、ネコの意匠を凝らした彫像が、地面へ無造作に落ちる。

「ふう………」

これで第二関門クリア。

だが、まだ終わらない。

最後にして最大の手順が残っている。

「高杉、こっからはお前の取り分だ。キバツて行けよ！」

「ああ、わかってる」

みんながここまでやってくれた。

俺が必ず、ミルちゃんを取り戻す。

さっきまでシールフェッスルだった宝具、水晶の輝きを放つ『ミルフィーユフェッスル』を、再びキバットが吹き鳴らした。

『ミルフィーユクローー!!』

ミルの彫像が浮き上がり、一对の獣の爪を思わせる手甲『ミルフィーユクローー』へと変わる。

ミルフィーユクローーはキバの両腕に装着され、鎧にフォームチェンジを促す。

「う、ぐっ!」

と、キバの鎧にも奇妙な電光が弾け、装着者である晋作にも、全身を突き刺すような痛みが襲う。

まるで、ミルフィーユクローーがキバを拒絶するかのようだ。

(確かに、こりゃ最終関門に相応しいな……ッ)

苦しみつつ、キバの脳裏には、先ほどの会話が浮かぶ。

「ミルちゃんを封印する!？」

奏夜の語る奇策に、晋作が鋭い声を挙げる。

「おっと、早とちりするなよ。あくまでも一時的にだ」

「一時的に……」

「お前も知つての通り、キバのフォームチェンジは、アームズモンスターとの融合によって行われる。

普段なら、資格者とキバツトの力で、暴走するアームズモンスターの力を抑えるわけだが、今回はそれを敢えてしない」

「どうして?」  
「それじゃあ、武器に意識を乗っ取られちゃうでしょ」

「いい質問だシヤナ。だが考えてもみる。意識が乗っ取られるって

ことは、相手の意識がこっちに入ってくるって意味だ」

「……あー!」

晋作は気付いたらしい。

奏夜は満足気に頷く。

「そう。相手の意識が流れ込んでくるなら、自分の意識を相手に流れ込ませることも可能なはずだ」

ギラファアンデッド言うには、テイターンの毒は『闘争本能を覚醒させる』もの。

洗脳ではなく、一つの感情を強めるもの。

ならば、深層意識の中には、まだ本当のミルの心は残っているはず。

「だからまずは、このシールフェッスルを俺が、ネコ娘用に加工する」



奏夜がポケットから取り出したのは、無色透明なフェッスル。

何かあれば、ということまでキバットバット二世から譲り受けたものだ。

まさかこんな使い方をするとはい、夢にも思わなかったが。

「んで、お前はキバットを使ってキバになり、ネコ娘を封印し、フォームモンスターとしての力を持たせる。

後は簡単だ。フォームチェンジする時に乗じて、ネコ娘の意識へ入り込み、あいつの心を引っ張り上げてこい」

「……本当にそんな上手くいくの？」

「そーだぜ！ だいたい俺様じゃ、シールフェッスルを扱えるかどうか……」

「上手くいなきゃ、ネコ娘は帰ってこない」

シヤナとキバットのやや否定的な意見を、ピシヤリとはねのける奏夜。

「いいか。関門は三つ。

一つ。ギラファアンデッドを退けつつ、ティターンキバからネコ娘を引き剥がすこと。これは俺とシャナの腕っ節。

二つ。ネコ娘をシールフェッスルに封印すること。これはキバットの魔皇力操作技術。

三つ。ネコ娘の心を引っ張り上げること。これは

お前が持つ、ネコ娘への想い次第だ、高杉。

「……」

「俺達は出来る限りのことをする。

だから、お前は必ず、ネコ娘を助け出して来い！」

「わかってるさ、奏夜……！」

絶対に負けはしない。

みんながここまで繋いでくれた道。

無駄にしてなるものか。

みんなを信じ、ミルを助け出すことだけを考えればいい。

「う、おおおおお！」

様々な人の想いを背負い、高杉晋作の孤独な戦いが始まった。

【BLADE・SIDE】

「ウオオッ！！」

カリスラウザーとキンググラウザーがぶつかり合い、激しい火花が散る。

「総司……！！」

「いい加減目え醒ませ！」

刃を挟み、カリスはブレイドKFに呼び掛け続ける。

「お前は、ただ戦うだけのアンデッドとは違うだろう！  
闘争本能という運命に負けず、誰かを守る優しいヤツだ！！」

「お兄ちゃん！ お願いだから元の自分を取り戻して！」

「ヴ、アアア！！！」

カリスと結衣の呼び声も虚しく、ブレイドKFはキンググライダーに力を込める。

押し返され、バランスを崩したカリスに、重厚な刀身が振り下ろされる。

短く声を漏らし、カリスは弾き飛ばされる。

「頼むよ総司！」

俺は、お前と戦いたくないんだ！」

「戦うことでしか……、俺とお前は語り合えない!!」

まさに一匹の獣。

ブレイドKFは、更なる攻撃の嵐をカリスにくわえていく。

このままでは、彼を助けるどころではなくなってしまう。

ケルベロス?の胸部の顔から、不快な高笑いが響く。

「無駄だ、無駄だ!!」

「ジョーカーはもはやただの戦闘マシン、君達の声など届きはしない!!」

「やってみなくちゃわからないだろ!!」

ケルベロス?の相手を引き受けた悠二　ギャレンが叫ぶ。

反撃を考え、距離を取りつつギャレンラウザーのトリガーを引く。

連なつた発砲音と硝煙。

弾丸はケルベロス？に向かつて飛ぶ。

「キミも、いい加減に諦めたまえ」

だが、それらの弾丸は、全てケルベロス？に届かず、彼の外皮寸前で、奇妙な壁に弾かれてしまう。

「くそっ！！」

「未だ私は、沖田総司の持つスピード以外のカード全てを吸収している。

ジョーカーを除けば、私こそが最強のアンデッドなのだよ」

今のバリアは、前回の戦いでカリスも使った【REFLECT】のカード。

障壁を作り出し、相手の攻撃を防御する効果がある。

「キミのように、銃を扱ったこともない人間が適うわけがないのだ。

大人しくそこを退け。私はカリスを封印しなければならん」

「うるさい……！」

つい、シャナのような台詞を口走る。

つまりは我を忘れるくらい、悠二は戦いに燃えていた。

「翔哉くんの邪魔はさせない……！」

【BULLET】

【RAPID】

【FIRE】

【TOISSING・G】

「……じ……おひじ」

ギャレンラウザーから放たれたサッカーボール台の大火球が、ケルベロス？をバリアごと仰け反らせる。

「ぬうつー!!」

これにはさすがに、防御体勢を取らざるを得ない。

ギャレンは仮面の下で口角を釣り上げる。

「何が無駄だった?」

「貴様ア……!!」

怒気を漲らせ、ケルベロス？はギャレンを排除すべき敵と認める。

(そつだ。僕の方へ来い)

カリスから離れてくれさえすれば、何も問題はない。

あの後、三人に策らしい策は浮かばなかった。



かるづじて思いついたのは、翔哉と結衣の言葉で、総司を目覚めさせる、というあまりに分が悪い賭け。

だったらせめて、翔哉と結衣が呼び掛け続けることを、邪魔させないようにしなければ。

(いつものことだけど、損な役回りだよね)

だが、自分でやると決めたことだ。

なら、やれるところまでやってやる。

一歩たりとも退くものか。

グリップを握りしめ、ケルベロス? に向け、ギャレンラウザーが再び火を吹いた。

(くそっ、どうしたらいい!?)

カリスはカリスラウザーのリーチを利用し、何とかブレイドKFの攻撃をいなす。

見ればギャレンも押され出している。これ以上は危険だ。

カリスのスペックでは、ブレイドKFを戦闘不能に追い込むことはできない。

だが、総司の心を目覚めさせることもできない。

これでは自分ばかりか、結衣と悠二の命まで危険に晒される。

(頼みの綱はこれだけか)

オリジナルブレイド、剣崎一真から譲り受けた、三枚のラウズカード。

上手く使えば、総司を助け出す確率が上がるかもしれない。とは剣崎の談。

だがカリスは、これを使えずにいた。

いや、この三枚の“上手い使い方”というのはわかっている。

けれど、

（その使い方には何の意味があるんだ？）

再び、キングラウザーがカリスをかすめる。

何もしなければ、ブレイドKFによる一方的な戦いにしかならない。

迷っている暇は無さそうだった。

「　　っ、ええい！　こうなりやヤケだ！」

ギャレンが作ってくれているチャンス、無駄だけはしたくない。

カリスは、三枚の内一枚を手に取り、残る二枚を宙に放る。

すかさず、カリスラウザーにカードを読み込ませる。

【REMOTE】

カードから放たれた紫色の線が、宙に放られた二枚のカードと繋がった。

クラブのカテゴリ10【REMOTE・TAPIR】の力により、カードが緑色に輝き、中に封印されていたアンデッドを解放する。

「ふわあゝあ、よく寝た、っと」

一体は、金色の皮膚に、雄々しき角を持った甲虫　スペードのカテゴリK『コーカサスビートルアンデッド』。

「ふむ。睦月くんか誰かが解放してくれたのかな」

もう一体は、紫色の刺々しい外皮に、八本の腕を持つ蜘蛛のような異形　クラブのカテゴリK『タランチュラアンデッド』だ。

「ヴー？」

新たに現れた敵に、ブレイドKFは身じろぐ。

ヘラクレスビートルアンデッドとタランチュラアンデッドは、臨戦態勢を取るブレイドKFを見て、

「……成る程。剣崎くんも回りくどい真似をする」

次にタランチュラアンデッドは、自分達を解放したカリスを見る。

「キミは違う世界のカリスだね」

「あ、ああ」

「リモートで解放された以上、我々はキミの命令を聞かなければならないわけだが……我々は何をすればいいのかな？」

おどろおどろしい外見に似合わず、柔らかな物腰のタランチュラアンデッドに戸惑いつつ、カリスは、

「……あいつを、総司をジョーカーの闘争本能から解放したい。力

を貸してくれ」

「承知した」

「ちえっ、ブレイドの手助けなんてまっぴらゴメンなんだけど……ま、退屈だったし、手伝ってあげるよ。別世界のカリス」

コーカサスビートルはアンデッドは、不承不承といった風に、ブレイドKFへ向かっていく。

「ふーん。ブレイドって僕の力を吸収するとああなるんだ。結構カッコいいじゃん」

さすがは僕。などと自信家なのかナルシストなのかわからない発言をするコーカサスビートルアンデッド。

無論、余裕の態度はブレイドKFにとって隙でしかない。

「ブウ……アアア！」

うなり声と共に、目の前の敵を排除しにかかる。

「残念だけど無駄だよ。僕はキングだからね」

コーカサスビートルアンデッドの身体に、キングレーザーが触れるより早く、ブレイドKFの動きが止まった。

「ゲッ、ア……！！！」

苦しむブレイドKFのアンデッドクレストは、不気味に躍動し、まるで封印されたアンデッドが暴れているかのようなようだ。

「スピードのアンデッドと融合してるのが仇になったね」

せせら笑うコーカサスビートルアンデッド。

彼は、スピードスーツ全てのアンデッドを統べる存在。

まさにキングと呼べる彼は、ある程度、スピードスーツのアンデッドを配下に置くことが出来る。

13体のアンデッドと融合しているブレイドKFにとっては、身体  
の支配権を奪われたも同じだ。

「さ。やるならさっさとやりなよ、蜘蛛男さん」

「ああ。わかっている。カリス と、そこのお嬢ちゃん」

突然呼ばれ、縮こまる結衣。

アンデッドへの恐怖、というのもあるだろう。

「大丈夫だ結衣ちゃん。このアンデッドは、多分信用できる」

カリスの助け舟に、結衣は恐る恐る、タランチュラアンデッドに近づく。

その反応には慣れているのか、タランチュラアンデッドは特に気にせず、話を進める。

「私の力は風を使って、他者の記憶や想いを読み取ること。今からキミ達の想いを読み取り、それを風に変えてジョーカーの心に届ける」



「結衣達の、想いを？」

「そうだ。彼を信頼する想い、愛する想い。それを知るのはキミ達だけだ。やれるかい？」

「そうすれば、総司を助けられるのか？」

「キミ達の想い次第だ」

カリスと結衣は顔を見合わせ、強く頷く。

「頼む」

「お願いします」

「いい答えだ」

タランチュラアンデッドは、不格好な笑みを浮かべつつ、二人の頭の上に手をやる。

小さな風が巻き起こり、カリスと結衣の想いを、タランチュラアンデッドは形にしていぐ。

カリスは仮面の下で目を閉じ、結衣も祈りを捧げるかの如く、手の平を合わせている。

ギャレンと戦うケルベロス？が、それに気が付いた。

「あれは……カテゴリーK！？　くっ、何をする気かは知らんが、ジヨーカーは渡さんぞー！」

己の野望のため、ケルベロス？はタランチュラアンデッドを封印しに動く。

「通さないと云っただろー！！」

## 【UPPER】

ラウザーカードで強化されたギャレンの拳が、ケルベロス？を打ち抜く。

「くっ、邪魔をするなあ!!」

一瞬怯むも、バリアに阻まれたためか、ケルベロス?にダメージは無い。

振り向き様に、腕の爪でギャレンを切り裂く。

「ぐあっ!!」

身動きつつ、ギャレンは懸命にギャレンラウザーを構えようとする。

だが、それより早く、ケルベロスの追撃が、次々とギャレンに浴びせられていく。

「馬鹿なヤツだ! ジョーカーのために命を捨てるとはな!」

「ガ、はっ……」

『悠<sup>きん</sup>二!!』

「集中しなさい」

膝を折るギャレンに、動揺するカリスと結衣を、タランチュラアン  
デッドが諫める。

「キミ達が行けば、彼の行動は全て無駄になる。  
彼を信じるんだ、私の知る仮面ライダーは、いつもそうしていた」

カリスと結衣は、精神力を総動員して、意識を集中させ直す。

（ああ。それでいいんだ）

キミ達は、総司を取り戻すことだけ考えていてくれ。

度重なる攻撃を喰らい、フラフラのギャレンは、岩場の一つに身を  
預ける。

「どっつやら限界のようだな……」

ケルベロス？の見立てでも、ギャレンに立ち上がる気力は見られな

かった。

「ちょうどいい。キミの持つダイヤスートのカードも吸収させて貰おう」

更なるパワーアップを図るケルベロス？。

恐らくは、カテゴリーク二体への対処のためだろう。

勝利を確信し、近付いてくるケルベロス？に対し、ギャレンは肩で息をしたまま、動こうとしない。

何の抵抗もできないまま、ギャレンにケルベロス？の手が翳される

ガシッ！

突如、ギャレンがケルベロス？の腕を掴んだ。

右手が握るギャレンライザーの銃口とケルベロスの距離は、ほぼゼロ。

「この距離なら、バリアは貼れないな！！」

「！！」

次の瞬間、ケルベロス？を襲ったのは、ギャレンライザーの零距离連続射撃だった。

ダン、ダン、ダン、ダン！！

火薬が連なって弾け、ターゲットへ弾丸が打ち込まれていく。

「ぐ、ああああ！！」

そう、ギャレンはこのカウンターを狙っていたのだ。

これだけの至近距離。

どんな下手くそでも当たり、手ブレしても影響がない上、威力も申し分ない。

一か八かの策だったが、上手くいった。

「う、ぐっ、このっ!!」

だが、そこはケルベロス？。ただ撃たれ続けるだけではない。

至近距離なのはケルベロスも同じだ。

爪が何度も何度も、ギャレンに叩きつけられる。

鎧に爪痕が刻み込まれ、肩当てが砕けた。

それでもギャレンは腕を放さず、トリガーを引き続ける。

遂に爪が顔面にヒットし、衝撃に耐え切れなかったギャレンのマスクが砕けた。

仮面の亀裂から、悠二の顔が覗く。

「僕も、総司さんや翔哉くんと同じさ」

「っ!？」

『零時迷子』の力で未来永劫、悠二は時から忘れ去れた存在となっ  
てしまった。

不死であるアンデッドと、根本的には変わらない。

「総司さんや翔哉くんがどんな思いで生きてきたのか、僕にはわか  
る」

永遠が意味する孤独を知った時、悠二は怖くなった。

自分だけが変わらず、周りの人々はどんどん、時間の流れに呑み込  
まれていく。

「でも」



そこで、とある少女の姿が浮かんだ。

同じ永遠を生きる、自分よりずっと小さな女の子。

たったそれだけで、恐怖心が消えていった。

「大切な人が側にいれば、永遠なんか怖くないんだ」

例えその人が、自分より早く死んでしまっても同じこと。

想いや絆は、死などでは決してほどけない。

「だから、翔哉くん達の　あの人達の大切な想いを引き裂いたお前を、僕は絶対に許さない！！」

再びギャレンラウザーが火を吹き、ケルベロス？を撃ち抜いていく。

(後は、キミ達がどうにかするだけだよ。翔哉くん、結衣ちゃん)

戦い続けるギャレンの横顔を、一陣の風が撫でた。

「よし……！」

タランチュラアンデッドはカリスと結衣から受け取った想いを、風に変えて右手に宿す。

小さな気流の如き、それは、言わば感情の奔流。

そのままタランチュラアンデッドは、コーカサスビートルアンデッドの前から動けないブレイドKFへ向け、右手を構える。

「聞いてくれブレイド、キミを愛する者達の声を……！」

想いの風は、ブレイドKF　　沖田総司の心の中へと溶けていった。

【KIVA・SIDE】

「うおっと？」

晋作が目を開けた時、そこは一面闇の世界だった。

仄暗い、無限の漆黒。

「ここが、ミルちゃんの世界？」

キバのフォームチェンジに同調し、自分の精神だけがここに来てしまったというのが妥当な説か。

じゃらり。

晋作の耳が、金属同士が擦り合うような音を捉える。

見れば暗闇の一点だけが、薄く光っていた。

「……ミルちゃん？」

半ば自然と、足が動き出す。

心臓の動悸に比例し、歩幅はどんどん広くなる。

走って、走って、とうとう晋作は光の先へ足を踏み入れた。

「っ!？」

その先に広がる景色を目に映し、息を飲む。

空間に巻き付く、おびただしい量の鎖。

縦横無尽にラインを描くそれは、言外に不可侵の意志を放ち、晋作の進行方向を塞いでいる。

不気味なまでに張り巡らされた拘束具は、一人の少女を縛り付けていた。

「ミルちゃん!！」

鎖の束を掻き分け、探していた女の子の元へ向かう。

ミルは空間の奥、一際太く、禍々しい気配を放つ黒い鎖に繋がれていた。

「ミルちゃん！　おい、しっかりしろ！」

ぺちぺちと軽く頬を叩くと、ミルの瞳がうっすら開いた。

反応があり、安堵する晋作。

だが、その安堵も一瞬だった。

「ひっ………！」

瞳が見開かれ、ミルの表情が恐怖に歪む。

「嫌ああああ　　………！」

「ミ、ミルちゃん!？」

「いや、嫌あ! ご、ご主人様、ごめんなさい……ごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさい」

鎖を引きちぎらんばかりの勢いで暴れ、壊れた蓄音機の如く、自分  
に詫び続けるミル。

目には悲観の色しか宿らず、涙がとめどなく零れ落ちている。

普段からは考えられない常軌を逸した行動に、晋作はただ呆然とす  
るしかなかった。

「お、おいミルちゃん! 何をそんな……何でキミが俺に謝って……  
……」

「ごめんなさいごめんなさい……っ! 許して、お願いだからあ!

ミルにはまるで聞こえていないようだ。

ますます、晋作はわけがわからなくなる。

「ミルが、ミルが、ご主人様を……！ 私の手、ち、血が滲んで……ご主人様が倒れて、わかってたのに、でも、私止まらなくて……っ！！」

会話とも呼べない独白、だが晋作は合点が言った。

つい、と未だに残る腹のキズを見る。

前の戦いで、ミルに刺された時のものだ。

シヤナが、ミルが泣いていたのを見たのはその後。

恐らくミルは、皮肉にも晋作を刺したショックで、僅かながら我に返ったのだろう。

（でも元々、操られて精神不安定になってたところで意識が戻ったんだ。逆に混乱しちまっても不思議じゃない）

ましてや、刺した相手が相手だ。

精神的ショックは計り知れないものだったろう。

(じゃあこの鎖は、今のミルちゃんの状態そのものか)

血濡れの手を削ぎ落とす、贖罪の象徴。

深く、暗い冥府に自らをつなぎ止める運命さだめの鎖。

それが、この禍々しい黒い鎖なのだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……！！　お願いだから、ミルのこと嫌いにならないで……！　何でもするから、何も我が儘言わないから、だから、嫌いにならないで、嫌いになっちゃいやだよお……！！」

尋常ではない懇願に、晋作は拳を握り締める。

……ある意味、原因は俺だ。



また、自分が情けなくて堪らなくなるが、自責の念は全て頭の片隅に追いやった。

後悔なら、後でいくらでも出来る。

今は、この子を助けることだけを考えればいい。

俺にはそれしか出来ないから、変身しようがしまいが、俺に出来るのは、ミルちゃんを想うことだけだから。

俺の強さは、ミルちゃんを大切に想う心、だよな。 奏夜。

それを思い出させてくれた友達に感謝して、晋作は口を開いた。

【BLADE・SIDE】

「お前は誰にも受け入れられない」

暗闇の中で、総司は自分に掛けられる嘲りの声を聞いていた。

黒く縁取られた大きな鏡。

鏡面に結ばれた像に映るのは、自分のもう一つの姿　アンドロマリウスジョーカー。

「違う。もう一つも何もない。これがお前の本当の姿だ」

鏡に映るアンドロマリウスジョーカーは、滑稽だと言わんばかりに、異形の牙を剥き出して笑う。

「う、あ……」

「ははは。そう悲観するな。貴様がバケモノだということくらい、とっくに気付いていたことだろ？」

総司は怯えながら鏡から後退るが、アンドロマリウスジョーカーの口は止まらなかった。

「お前はカードを奪われ、ジョーカーの本能が解放され、真つ先に何をした？  
大切なんだ言ってた結衣や、お前を助ける為に戦う翔哉を斬ろうとしたんだぞ？」

返す言葉は無かった。

あの時、オリジナルブレイドが現れなければ、力づくでも自分を止めてくれなかったら。

(俺は、二人を )

自分自身のおぞましさ、心を覆い尽くしていく。

怖い、怖い怖い怖い！

理性も躊躇もなく、誰かを傷つけられる自分が、血濡れの獣である自分が！

鏡の中 自分の真の姿は、逃げ場を絶つように、声を落とした。

「お前に誰かを愛することは出来ない。その資格もない。お前が出来るのは戦うことだけだ。本能の命ずるままに戦う。」

それが俺の　お前の運命だ」

アンドロマリウスジョーカーが、鏡の中からその異形の腕だけを伸ばす。

鏡面から生えるように出たその手は、地獄への手招きのようだった。

「俺に全てを委ねろ。戦うこと以外考えるな。お前には、それしかないんだ」

生気の見られない瞳のまま、総司は虚脱感にもつれる足を動かさず、鏡へ近づいていく。

もはや全てがどうでも良かった。

この苦しみを、この悲しみを消してくれるなら。

悪魔にでも何にでもなってしまうればいい。

どうせ傷付けるのなら、何も感じたくない。

「ただ戦えば、いい」

謔言のように呟き、総司はアンドロマリウスジョーカーへ手を伸ばした

「おっと」

総司の手首を、誰かの手が掴む。

突然の乱入者、反射的に総司は、その手の主を見る。

「鬼に袖を引かれるのは、まだ早いだろ。総司」

「しょう、や？」

普段と変わらぬ姿で、黒木翔哉がそこには立っていた。

何故？ どうして？ という簡素な疑問だけが先に立ち、総司は口が動かなかつた。

そんな彼の心境を察したのか、翔哉は砕けた態度で言う。

「ふーん。こんな真つ暗闇じゃ、目が醒めなくて当たり前か」

「なんで、お前が？」

「お前があんまり寝坊助なもんだから、起こしに来てやったんだよ。もちろん、あの子もな」

にやにや、と今度は冷やかすような笑顔で、総司の背後を顎でしゃくる。

「お兄ちゃん」

呼吸が止まりかけた。

涼やかな印象を受けるか細い声。

だがこの暗闇では、無条件の暖かさを与えてくれるもの。

恋焦がれ、必死に守ろうとした女の子。

沖田結衣が、そこにいた。

「迎えに来たよ」

「ゆ、い……」

「翔哉さんの言うとおおり、お兄ちゃんは本当にお寝坊さんだね」

凜ちゃんも怒っちゃうよ、と結衣。

戸惑う総司に構わず、彼女は自然な動作で近付いてきた。

柔らかな笑みを浮かべたまま、翔哉が手を掴んでいない方を、無造作に握ろうとする。

「っ!!」

その瞬間、総司は手を引っ込め、翔哉の掴んでいた手も、強引に振り払う。

「来るな」

翔哉と結衣が目を瞬かせる中、総司は震える声で告げる。

「俺の身体は、もう俺の意思ではどうにもならない。  
今こうして、欠片となって残っている理性も、いつ消えてしまっか  
わからないんだ」



次の瞬間には、また二人を襲ってしまうかも知れない。

完全なジョーカーに戻ってしまえば、きっと今度こそ、この手で、二人の命を刈り取ってしまう。

それだけは、嫌だった。

「……元々、あつてはならない出会いだったんだ。どこまで行っても俺は、一緒にいる人達を傷つけてしまう」

結衣や凜、翔哉と出会って、何かが変わると思った。

ここなら俺も、自分と戦えるかも知れないと。

でも、出来なかった。

自分自身で、居場所を壊してしまった。

「俺はもう、誰も傷付けたくない。

お前達も、他の誰かも。

だから頼む。俺の理性が少しでも残っている間に

」

俺の前から、消えてくれ。

二人への拒絶に鏡の中のアンドロマリウスジョーカーが、口元を吊り上げる。

総司もまた、内心でほっとしていた。

(これでいい)

これで少なくとも、この二人は傷付けずに済む。

だが、

『……………はあ』

黙って話を聞いていた結衣と翔哉の反応は、気の抜けるような溜め息だった。

「馬鹿だな、ミルちゃんは」

「馬鹿だな、総司は」

「馬鹿ですね、お兄ちゃんは」

軽い、いつも話す時と変わらない口調。

やれやれと首を振る晋作に、ミルが目を丸くする。

「俺がミルちゃんをキライになるわけねえだろうが」

「今さらお前がバケモンだからって理由で、誰がお前の傍から離れるんだよ」

「結衣達を見くびらないでよね。結衣達だって端から見れば普通じゃないんだから」

出来の悪い子供を叱るような言い方だった。

気が動転した総司の隙を見逃さず、結衣と翔哉は彼の手を握り締める。

晋作は鎖に繋がれたミルの頬に両手を当てる。

「今までの生活振り返ってみる。

俺が何回、ミルちゃんの電撃喰らったと思ってる。何回、ヤンデレモードのミルちゃんに折檻されたと思ってる。

ミルちゃんが俺を傷つけた？ 日常茶飯事だろうがそんなもん。俺の気持ちは、そんな程度じゃブレねえよ」

「お前がバケモンだったのはみーんな知ってるんだ。その姿も脅威も知った上で、お前と一緒にいるんだよ」

「だから結衣達の気持ちも変わらないよ。だって、ジョーカーの力にだって負けない、お兄ちゃんの優しい姿を知ってるもん」

「……っけど、俺はまたお前達を傷付けるかも知れないんだぞ！？  
だいたい、俺の理性が弱かったから、ジョーカーの力にも負けて……」

頬に当てられた晋作の手を、ミルは首を振って払う。

「違うよ！ あの時ミルは、本当にご主人様を殺そうとしてたもん！  
普段じゃれてる時みたいな感じじゃなくて、本当にご主人様を憎く思ってたもん！

こんな……こんな感情が、ミルのどこかにいつもあったせいで……」

『えーい！ まだ言うかこの口は！！』

晋作がミルの両頬を。

翔哉と結衣が、総司の頬を片方ずつ引つ張った。

「俺は気にしてないって言ってるんだろ！

あんな怪我、キズの内に入るか！ 普段の電撃の方が何倍も痛い  
わ！

それともミルちゃん、俺に本気で嫌われたいのか？」

「っ！」

ミルは頬を引つ張つられながらも、そこだけはちゃんと首を横に振

った。

「そうだろ？ 傷付け合うのなんて、生きてりゃ当たり前だ！  
その後、ちゃんと仲直りすればいいだけの話だろ！  
俺はこの『頬引つ張りの刑』でミルちゃんを許す！ ハイ、仲直り終わり！」

「お兄ちゃんが殺したくないっていうなら、結衣達は死んであげません！ 傷付けられてもあげません！  
何があっても、絶対に！」

「総司、お前と初めて会った時、俺を助けてくれただろ？  
あの優しさがあれば、ジョーカーなんて下らない力、相手にもならん！  
今回失敗したからって諦めんな！ また失敗しても、俺達が絶対止めてやる！」

二人の魂の叫びは、凍てついた総司の心を溶かしていく。

「だからさ、こんなところに閉じこもってないで、早く行こうぜ。みんな待ってるからよ」

空間を埋め尽くしていた鎖が、千切れだした。

金属が擦り合う音を背に、溢れる涙を止めようともせず、ミルは問う。

「なんで……そこまでミルを？」

「決まってるだろ」

にいつ、と笑い、晋作はミルへ顔を近付ける。

「ミルちゃんが」

「だからお兄ちゃん、早く行こうよ。こんなところにいる暇なんか無いんだからね」



「あんまり寝ると、健康に悪いぞー？」

鏡の中のアンドロマリウスジョーカーが、次第に薄まっていく傍ら、総司は問う。

「なんで……そこまで俺を？」

「決まってるんだろ」

「決まってるでしょ」

結衣は総司の腕にしがみつき、翔哉は肩に肘を置く。

「あなたが」

「お前が」

「大切な恋人だからだ」

「大切なお兄ちゃんだからだよ」

「大切な友達だからさ」

黒い鎖は全て碎け散り、自由になったミルの身体が、晋作に倒れてきた。

それをしっかりと抱き止め、泣きじゃくるミルの背中を撫でる。

「ふえ……えぐっ、ご主人様あ……」

「よしよし、おかえりなさい。だな」

伝わる温かさから、互いの存在をしっかりと確かめ合う。

普段なら何でもないそれが、今は本当に幸福だった。

「じゃあ行くのか。奏夜達のもとに」

「うんっ」

二人が唇を重ねたのを最後に、全てを包む暗闇が、光と共に消えていった

「……………う、あ」

流れ出る涙を慌てて拭う総司。

「……………あり、がとう」

結衣と翔哉にとっては、その言葉で十分だった。

笑みを返す二人を見て、総司は鏡に目を移す。

鏡の中のアンドロマリウスジョーカーは、ただ一言。

「……お前は、戦うしかない。忘れるな」

それが、アンドロマリウスジョーカーの最後の言葉だった。

総司がその拳で、鏡を砕いたからだ。

割れた破片だけが、下にパラパラと落ちていく。

「俺は、戦わない」

誰かを傷付ける戦いは、もう御免だ。

「守るために、戦う」

固い決意を秘めた拳に、手が添えられる。

結衣と翔哉の手だ。

「行こうぜ」

「みんなが待ってるよ」

「ああ!!」

今度こそ総司は、二人の手をしっかりと握り返した。

【K I V A · S I D E】

『!!--』

その場にいた全員が、立ち尽くしていたキバを見る。

拒絶反応の証だった電光が収まり、腕に装着されたミルフィーユクローから、鎖がキバに巻きつき、腕と胸部を茶色の毛皮に覆われた『ビーストアーム』と『ビーストラング』へ。

キバットの目と、キバ・ペルソナも茶色に染まっていく。

ミルの力を取り込んだ強化形態『仮面ライダーキバ・ミルフィーク  
フォーム』。

「姿が変わったってことは……」

「 やったんだな。高杉！」

シヤナとタイガが喝采を上げる中、キバMFは、ミルフィーククロ  
ーを摺り合わせ、

「はっ！」

驚異的加速力で、キラファアンデッドに特攻する。

「ぬおっ！？」

勢いに負け、キラファアンデッドが地を転がる。

「すげえ……！ ガルルフォーム以上のスピードが出せる！」

「クロックアップみたいだよ」

「ミルフィーユクローから聞こえるミルの声も、いつも通りだ。」

「うっし、高杉、よくやった！」

「ああ。奏夜にシャナ、世話かけたな」

「気にしてないわよ」

「声は素っ気ないが、シャナも笑みを浮かべていた。」

「奏夜たん久しぶりにゃ 助けてくれてありがとう」

「よう、ネコ娘。元気そうじゃ何よりだ」

「お前が、晋作の大切な人ね？」

「うん　そう……ってあーっ！　本物のシヤナちゃんだにゃ！  
！」

晋作と同じく、シヤナの知識があるミルが、驚きの声を挙げた。

「そっか！　ここは奏夜たんの世界だから、シヤナちゃんや悠二くんがいるんだったにゃ！」

「あー、ミルちゃん。シヤナと話したいのはわかるが、また後にしよう。まずは、あのアンデッドを黙らせないとな」

再び三人が、ギラフアアンデッドと対峙する。

信じられないものを見るような目で、ギラフアアンデッドはキバM Fを睨み返す。

「バカな……テイタインの毒を、中和しただと……！？」

「へっ、生憎だったな」

「ミルとご主人様の愛は、あれくらいじゃほどけないよ」



ミルフィーユクローを研ぎ、狩猟獣のような構えを取るキバMF。

「キバット、奏夜のところに戻れ」

「へっ？ いいのかよ。キバの鎧が解除されちまうんじゃ……」

「大丈夫だよ ミルならこの姿からでも、キバの鎧を操作出来るから」

「そっか……よし分かった！ 奏夜、キバツて行くぜ！」

「ああ！」

タイガの変身を解いた奏夜の左手に、キバットが噛みつく。

「ガブツ！」

「変身！」

キバットベルトにキバットが止まり、奏夜は再びキバへと変わる。

「行くぞ！」

まず、キバMFが先程の加速力でギラフアアンデッドを攻める。

「ご主人様。この姿、スピードが上がった分、攻撃力が落ちてるみたいだよ！」

「なら、手数で勝負だ！」

超高速スピードの世界から、ミルフィーユクローの連続攻撃が、ギラフアアンデッドを攪乱する。

「くっ、ちょこまかとー！」

「余所見はいけないな！」

ギラフアアンデッドが対応に終わった隙に、キバの拳とシャナの炎剣が、炸裂する。

「っせい！」

「だあっ！」

渾身の力が込められた一撃は、容易くギラファアンデッドのバリアを突き破る。

「ぐと、こんな、こんなことが……!!」

「今だ、一気に決めるぞ！ 高杉、シャナ！」

「ああ！」

「うん！」

畳みかけるように、キバはキバットへフェツスルをくわえさせ、シヤナは贔殿遮那に存在の力を蓄積し、紅蓮の輝きを増していく。

『WAKE・UP!!』

『ミルフィーユ・バイト』

甲冑『ヘルズゲート』を解放し、赤い翼の生えた右足で飛び上がるキバ。

ガチャンと、爪を摺り合わせるのを合図に、黄金に輝くレーザークーローを生み出し、超高速の世界へ消えるキバMF。

刀へ身の丈以上の炎を纏わせ、紅蓮の翼を顕現させ、加速力を追加した突きを繰り出すシヤナ。

それぞれの必殺技は、ギラフアアンデッドを中心に重なった。

『はぁーッ！！』

シヤナの炎剣が突き刺さり、キバMFの『ミルフィューアクセルスライサー』が切り裂き、トドメにキバの『ダークネスムーンブレイク』が、ギラフアアンデッドを吹き飛ばす。

「ぐ、がああああ！！」

相乗された攻撃力がクリーンヒットし、ギラファアンデッドが爆炎を挙げると、戦闘不能の証であるアンデッドバツクルが割れた。

「じゃあな」

キバMFが投げたラウズカードが、ギラファアンデッドを飲み込んでいく。

「おのれえ……仮面、ライ……」

ギラファアンデッドは緑色の光と共に封印され、キバMFが飛んできたカード『エボリユーシヨン・ギラファ』をキャッチする。

「高杉、シヤナ」

キバが二人に向け、拳を出す。

「お疲れさん」

「おっ」

「奏夜もね」

ガッ、と拳を打ち鳴らす音が、戦いの終幕を告げた。

【BLADE・SIDE】

「ん？」

コーカサスビートルアンデッドが、ブレイドKFに向ける手を止めた。

「……」

ブレイドKFがいきなりハンドルに手をかけ、変身を解除したのだ。

「総司？」

「お兄ちゃん？」

恐る恐る、カリスと結衣が口を開く。

総司は閉じていた瞳を開き、二人を見て笑った。　　そう、“笑った”。

「ありがとな、翔哉、結衣」

結衣の表情がぱあつと明るくなり、仮面の下で翔哉も満面の笑みを作った。

二人の反応を目に収め、総司はギャレンと戦うケルベロス？を睨む。

「　翔哉、行くぞ！！」

「ああ、遅れんなよ！！」

カリスと共に駆け出しつつ、総司は再びカテゴリーAをプライベートクルに装填。

手を前に掲げ、叫ぶ。

「変身!!」

【TURN・UP】

青色のオリハルコンエレメントを通過し、奏夜の姿はブレイドへと変わる。

「っはあ!!」

ギャレンと戦うケルベロス?へ、容赦なしのブレイラウザーの斬撃が飛ぶ。

「ぐっ!?!」

相手が怯んでも、ブレイドの攻撃は止まない。

その隙を突き、ブレイラウザーによる連続切りから、渾身のキックへと繋げ、ケルベロス?を蹴り飛ばす。



「悠二、大丈夫か!？」

「っはあ、はあ……な、なんとかね」

割れた仮面から、疲労の色が濃い笑みを覗かせる悠二。

「それより、総司さんは……」

「ああ。助け出せたよ。お前の時間稼ぎのおかげでな」

ギャレンが目を向けた時、ブレイドは無双の強さでケルベロス?を追いつめていた。

(身体が軽い)

憑き物が落ちたようだった。

身の内に抑えつけているジョーカーの力も、まるで負担に感じない。

むしろ、意のままにその力を引き出せているようだった。

「貴様、キングフォームにもならずこれほどの力を……いや、それ以前に何故ジョーカーの闘争本能に抗える!?」

「何もしゃいない、ただ力の使い方を変えただけさ。俺は今、誰かを傷付けるためではなく、誰かを守る為にこの力を使っている!」

「バカな!! ジョーカーの力は、ただの闘争本能の塊! 戦うことこそ、貴様の使命の筈だ!」

「俺の使命なんざ知るか!」

ブレイラウザーにカードを通し、ブレイドは己の誇りと共に叫ぶ。

「誰に命じられたわけでもない! 俺はただ、もう戦いで誰かを傷付けさせたくない! そう願った!」

【BEAT】

「だあっ!!」

強化された右ストレートが、ケルベロス?を打ち抜く。

「ゴ、ガッ!？」

最大級の重みが乗った拳を受け、岩壁に叩き付けられるケルベロス?。

「総司!」

カリス、とその後ろからついてきたギャレンに、ブレイドは目を止める。

「お前、坂井悠二って言ったな」

「あ、はい。あなたが沖田総司さんですね」

「お前のことも、心の奥底から見えたよ。礼を言わせて貰う」

「あはは……お礼なんていいですよ。僕は結衣ちゃんと翔哉くんに付き添っただけですし」

「何謙遜してんだよ悠二。俺と結衣ちゃんを立ち上がらせたのはお前なんだ。

間接的に、総司を助けたのもお前だろ」

カリスがギャレンを軽く小突く。

打ち解けたような雰囲気は、ケルベロス？の呻き声によって遮られる。

「チャンスがあるとすれば今だな。悠二、翔哉。いけるな？」

「はい！」

「任せとけ！」

皆まで言うまでもなく、三人のライダーはそれぞれのラウザーへ、カードを通していく。

【KICK】

【THUNDER】

【MACH】

【LIGHTNING・SONIC】

ブレイドが地面に剣を突き立て、

【FLOAT】

【DRILL】

【TORNADO】

【SPINNING・DANCE】

カリスが回転しながら宙へ浮き上がり、

【DROP】

【FIRE】

【BURNING・SMASH】

ギャレンが炎を纏った足で地面を蹴る。

『ハアアアーツ!!』

ブレイドの加速からの電光キック『ライトニングソニック』。

カリスの竜巻を纏いながらの錐揉みキック『スピニングダンス』。

ギャレンの空中からのドロップキック『バーニングスマッシュ』。

ブレイドライダーズ必殺の一撃は、バリアをいとも簡単に貫き、三連弾のキックがケルベロス?に炸裂した。

「グッ、があああああ!!」

身体から火花を挙げて吹っ飛んだケルベロス?は、最後の一瞬だけ、天王路の姿を見せた。

「許さんぞライダー共……!!」

世界の融合が続く限り、我が野

望は、費えぬ！　いつか再び……！！」

その言葉を最後に、ケルベロス？の肉体を爆炎が包んだ。

亡骸もなく、後には『ケルベロス』と、吸収された総司のカードだけが残った。

爆発の熱波を受けつつも、ブレイドはそれらを全て回収する。

今度こそ、こんなことが無いようにしなければ。

『総司』

カリスとギャレンが手を挙げている。

ブレイドもそれに答え、二人と手を打ち合わせた。

甲高いハイタッチの音が、戦いの終わりを告げた。

「本当に、いいのか？」

「ああ。我々の役目は、もう終わったからね」

「やるなら早くしてよ。僕はもう眠くてしょうがないんだからさ」

そう言って、タランチュラアンデッドとコーカサスビートルアンデッドは、自ら戦闘放棄の意志を示し、アンデッドバツクルを割った。

翔哉は少し迷いながらも、封印のカードを投擲する。

「あんだ達にも言うておくよ。ありがとうな」

「気にするな。未来ある若者が闇に吞まれるのを見たくなかっただけさ」

「なるべく、もう会わないことを祈ってるよ」

そう言い残し、二人のアンデッドは再び封印された。



二枚のカテゴリークを眺める翔哉へ、悠二がばつの悪そうに、ギャレンバツクルを手渡す。

……バツクル部分が見事に壊れたギャレンバツクルを。

「あちゃー。これはまた修理のやり直しだな」

「ご、ごめんね翔哉くん。大分ムチャな使い方しちゃったから……」

「いいよいよ。悠二に大怪我が無かったんだから、それでいいさ」

翔哉が悠二を笑って許す傍ら、奏夜とシヤナは晋作とミルの扱いに手を焼いていた。

「ご主人様あゝ 帰ったらまたデートのやり直しにゃ」

「そうだな。邪魔された分もあわせて、今日は楽しんじまおう！」

「……そ、奏夜。」

「……俺が最初、高杉をシカトした理由がわかつたる」

人前でも平気でキスをするほどべったりな二人に、耐性のないシヤナは顔を赤くしている。

目ざとく、ミルがそれに気付く。

「可愛い〜、シヤナちゃん赤くなってる　　やっぱり悠二くんとかういうことしたいのにかにゃ？」

「！！　　だ、だから何でお前も晋作も悠二を例えに出すのよ！」

「むう、そんな潔癖な態度じゃ駄目にゃよ？　　悠二くん鈍感だから、いきなりキスするくらいじゃないと、シヤナちゃんの気持ちに気付いてくれないよ」

「出来るわけないでしょそんなこと！　　だいたい、今私と悠二はそついう関係でも無いし……」

「ふ〜ん？　　今ってことは、将来的に予定があるんだあ」

「……」

シャナの顔が更に赤みを増す。

「悠二くんも幸せだにゃ〜      こんな可愛い子に想われてて!」

「う、うるさいうるさいうるさい!」

笑いながら逃げるミルを、シャナが赤面しながら追いかけていく。

「……………どうもお前らの愛は、シャナに対して重過ぎたかも知れないな。晋作」

「よく言っぜ。俺とミルちゃんのエッチ見て赤面してた癖に」

「今のは俺への宣戦布告と見なしていいんだよなあ!？」

珍しくキレた奏夜もまた、晋作を追い回す。

「元気だな。あいつら」

「そうだねー」

総司と結衣のみ、岩場に腰掛けのんびりしていた。

ふと、総司が口を開く。

「なあ結衣」

「駄目だよ」

総司が何を言おうとしたのか気づいた結衣は、即刻否定する。

「やっぱり駄目か?」

「当然です。凜ちゃんには、自分から謝りなさい。心配かけました  
って」

「……骨の二、三本は覚悟しないとな」

「甘んじて受け入れなきゃ駄目だよ。凜ちゃん、すっごく心配して  
たんだから」

「りよーかい」

結衣の真つ当な意見に苦笑いする総司。

と、

『わっ！！』

奏夜、総司、翔哉、晋作が声を挙げる。

彼らがそれぞれ持っていた『シーフカメレオン』『ポイズンスコーピオン』『ケルベロス』『エボリューシオンタランチュラ』『エボリューシオンコーカサス』『エボリューシオンギラファ』のカードが舞い上がり、いつの間にか立っていた青年の手に収まったからだ。

「一応、ご苦労と言っておこうか」

「……剣崎一真」

現れた剣崎は、回収したカードをしまい込み、もう一人の自分とも

言える総司を見る。

「……少しはマシな顔になったな。ブレイドとしては、合格点だ」

ぶっきらぼうながら、それなりに賞賛が感じられる口調で、総司を評価する剣崎。

「仲間に感謝することだ。お前一人では決して、あの暗闇から抜け出せなかったことを忘れるな」

「……言われるまでもねえよ」

総司の返事に頷き、剣崎は指を一鳴らしする。

現れたのは、世界移動のオーロラ。

「さあ、元の世界へと帰るがいい。ここは、お前達がいてはならない世界なのだからな」

そう言い残し、剣崎もまた、オーロラの中へ消えていく。

晋作は神妙な顔で、奏夜を見た。

「またお別れだな。奏夜」

「うん、ナディアさんにもよろしく伝えてくれ。いつか、またどこかで会おうぜ。もう一人のキバ」

「ああ、いつか必ず会おう。もう一人のキバ。勿論、キバットもな」

「おうよ。晋作もキバるんだぜ!!」

「シヤナちゃんもアラストールも元気でにゃ」

「うん。またいつか」

「うむ。また会える日があることを祈ろう」

翔哉と悠二もまた、別れの言葉を述べる。

「世話になったな、悠二。大変だろうけど、お互い頑張ろうぜ」

「うん。翔哉くんこそ元気で。結衣ちゃんも、総司さんと仲良くね」

「はい！　悠二さん、本当にありがとうございました！」

「大したことも出来ずに悪かったな。この借りはいつか、必ず返す  
よ」

五人がオーロラの中へと足を踏み入れる。

やがてその姿は灰色の霞の中へ消え、見えなくなっていく。

『いつか、また！』

全員の声が重なったのを最後に、世界の橋は閉じられた。



「やはり、オリジナルライダーが動いてしまったか」

ベージュ色の外套と帽子を被ったメガネの男性、鳴滝は一人こちる。

“完全な融合を果たした世界”に手を出した以上、こうなることは予想の範疇ではあるが……。

「仕方がない。こうなってしまったてはまず、景綱よりもまず、デイケイドを優先させなければならん」

暗闇に浮かぶ無数の惑星。

その一つに浮かぶ、憎きマゼンダ色のシンボル。

「予想以上のスピードだな……。このままでは“ライダー大戦の世界”に行き着くのも時間の問題か」

そうなってしまえば、非常にマズい。

もしかすると、いつか“この世界”にも。

(……チツ、可能性は十分にあるな)

この世界の仮面ライダーキバは、“ディケイドの物語と僅かながら関わっている”。

そのリンクが、世界の破壊者を引き込むかも知れない。

「おのれディケイド……！！ 貴様の好きにはさせんぞ！」

外套を翻し、鳴滝は世界のオーロラへと消えていった。

第X話・EPISODE・VIOLET/封印と解放・三枚の切り札(後書き)

遂にコラボ編フィニッシュ！　な、長かった！

・エンジェル先生、また勝手なフォームを作ってしまいすいません！！(スライディング土下座)  
ミルフィーユフォームのデータを下に載せたので、もし良かったら使ってみてください。

・『この距離なら、バリアは貼れないな！』　これに関してはただ言わせたかっただけです(笑)

またブレイド魂が暴走してしまいました。この全四話で一体何個、仮面ライダーブレイドのセリフが出たかと思うとそろそろ恐ろしいです；

・この話書く前、仮面ライダーブレイドを見直したんですが、嶋さんはやっぱりいい人です！　そしてキングは無条件にカッコいい！

今回はこの二人を出せて良かった。  
最後の鳴滝のセリフは……今後の伏線と思ってもらって結構です。

さて、今回でコラボ編はおしまいです。次回より、本編に戻ります。

最後に、素晴らしい世界観とキャラクターをお貸しして下さったエンジェル先生に、この場を借りて感謝を。

先生が満足のいく仕上がりにしているかどうかは分かりませんが、そうなるよう精一杯やってみました。コラボ企画、本当に楽しかったです。ありがとうございました！

それでは、また次回！

## 仮面ライダーキバ・ミルフィークフォーム

イメージ・仮面ライダーWのスミロンドーパント。

アームズモンスターの力を得たミルが『ミルフィーククロー』として融合し、偶発的に生まれたフォーム。

キバの変身は資格者の魔皇力によって行われるため、ミル一人でのフォームチェンジが可能。

クロックアップ並の加速力を得る反面、攻撃力が著しく低下するため、連撃や他ライダーのコンビネーションで力を発揮する。

必殺技は加速状態から、魔皇力で生み出したレーザー状の爪で敵を切り裂く、『ミルフィークアクセルスライサー』。

## 第十八話・彎曲／非情なる現実・Aパート（前書き）

「シチューとは、野菜や肉、魚介類を出汁やソースで煮込んだ料理のことである。」

古代ローマの皇帝アウグストゥス時代、『料理大全』という料理書を記したアピキウスは、さまざまなレシピを残しているが、その中には30〜40種もの材料が入る、所謂「ごった煮」がいくつもあり、事実、そうしたシチューの原型はヨーロッパでかなり普及していた。

日本でも、手っ取り早く栄養が取れるとされ、戦時中は軍の食事としてもポピュラーなメニューだったんだぜ。  
クリームシチュー 美味しいよなあ……」

キバットバット三世

## 第十八話・彎曲／非情なる現実・Aパート

ファンガイア。人間を糧とし、それは太古より栄えてきた闇の一族。

チエックメイトフォー。ファンガイアを管理し、その秩序を守る四人の戦士。

キバ。サガを始め、装着した者に絶大な力を与える魔の鎧。

そして キング。チエックメイトフォーの中でも一線を画し、ファンガイア全てを統率する権限を持つ王。

「そのキングが……、太牙さんなんですわね」

「うん。闇の一族の王にして、サガの鎧の資格者。それが僕、登太牙だ」

御崎市のとある路地裏。

結局あのまま、カムシンのマーキングに付き合つことになった吉田一美と登太牙の両名。

カムシンは現在「この辺りのマーキングは複雑なので、しばらくここで待っていてください」と言い残し、何処かへ消えていた。

結果的に、この二人きりという状況下は、太牙にとって逃げ場が無くなったのと同義だった。

不可抗力とはいえ、サガの変身を見せってしまった太牙は、吉田への説明を余儀無くされてしまったのである。

ここまでしてしまったのなら、知らないよりも知った方が、彼女の危険は減るとの考えだった。

( 『儀装の駆り手』 のことも言えないな…… )

度重なるショックに俯く吉田を見つつ、太牙は自己嫌悪に陥る。

幾分か配慮はあるものの、結果的に彼と同じことをしてしまった。

「……僕らの名誉の為にも言うておくけれど、今のファンガイアの

殆どは、人間を餌としていない。

“徒”と比べれば、格段に友好的な種族だよ」

口から出る励ましも、今の吉田にとっては、酷く頼りない支えに過ぎない。

（なんで……私は“こんなところ”にいるんだろう）

自分の認知から外れた世界、そこから現れるファンガイアの恐ろしさを、彼女は身を持って体感してしまった。

常識をいとも簡単に破壊する恐怖は、なかなか拭い去れるものではない。

『 ○／＼！！ 』

「きゃっ!?!」

突然視界に現れた円盤

サガークに驚く吉田。

外に出られた喜びからか、くるくると吉田の周りを飛び回る。



「この子って、さつき太牙さんと一緒にいた……」

「ああ、サガークと言ってね。悪いやつじゃないよ」

『 ！ 』

サガークはしきりに奇妙な言葉を発しているが、無論吉田に、その意味はわからない。

「えっと、サガークくんは何て言ってるんですか？」

「サガークの円盤に手を置いてごらん」

太牙に促され、吉田はサガークの頭部（？）にある青い円盤へ手を乗せる。

『 ハジメマシテ 』

緩やかに円盤が回ったかと思うと、吉田の脳に、機械的な声が届く。

奇妙な感覚に驚きつつも吉田は、

「は、初めまして」

ぺこりと可愛らしく頭を下げるサガークに、吉田も軽く会釈する。

『ゴメンネ。サツキハコワガラセチャツテ』

「う、ううん。別に太牙さんやサガーくんが悪いわけじゃないよ」

『デモ、ヤツパリイマモコワガツテル』

心中を見抜かれ、吉田は肩を跳ね上げる。

『ダイジョウブ。タイガハツヨイカラ、キットマモツテクレルヨ』

機械的な声からでも、はっきり伝わる温みのある言葉だった。

今のは、なくさめてくれたのだろうか。

太牙がこそばゆそうに頬を搔く一方、吉田は暗くなりかけていた心が、少しだけ軽くなるのを感じた。

自然と、顔が笑みを作る。

「……ありがとう。サガークくん」

『！』

気を良くしたのが、サガークは吉田の頭の上へちょこんと乗る。

「珍しいなサガーク。一美ちゃんが気に入ったのか？」

『！』

サガークの表情は変わらないものの、吉田と同じく笑っているようだった。

「すまないね。こっぴど見えて子供っぽいヤツだから」

「あ。いえ、気にしないでください」

サガークが与えてくれる和やかさは、吉田も純粹にありがたかった。

が、その空気を読まないのが、あの老成したフレイムヘイズである。

「ああ、お待たせしました」

音も立てず、路地裏に現れたカムシンに、吉田の肩が跳ね上がった。

「マーキングとやらは終わったのか？」

太牙が変わらず、不機嫌そうに問う。

「ええ。少々手こずりましたが、これで昨日からつけておいたものと合わせて、何とかなるでしょう」

「……」

「本当に手伝わってもらうのはこれからですが……よいですか、お嬢ちゃん」

「安心してくれてよいぞ。この作業が終われば、まずお嬢ちゃんの生きている内は、人喰いがこの街を襲うようなことはあるまい」

ベヘモットの言葉がどこから本当で、どこからが希望的観測なのか、吉田には判断する術がない。

よいですか、と聞かれても、彼女にはそれを信じるしかなかった。

吉田が頷いたのを確認し、カムシンは彼女の手を握る。

「お嬢ちゃん。怖ければ、目を瞑っているように」

今までの恐怖からか、吉田は言われたとおり目を閉じる。

「キング、あなたは自力で着いてくれますか」

「みくびるな、僕を誰だと思っている」

「ああ、これは失敬」

そんなやり取りを聞きつつ、吉田が次に感じたのは、まるでジェットコースターにでも乗っているかのような圧迫感と風の轟音。

目を開けた時、吉田の視界は御崎駅付近にある、高いビルの屋上へと移動していた。

「っと」

隣で太牙が、左足から地面に着地した。

彼の姿を見るに、どうやら自分はカムシンに連れられ、ここまで飛んできたらしい。

「では、そろそろ始めるとしましょう」

手際良く、カムシンは準備を進めていく。

「おかしなところを直すために、あちこち行くんじゃないかなかったですか……?」

「ああ、それはそれで間違っていますね、例えでもあるんです。さっきまで行っていたマーキングによって、お嬢ちゃんはこの街を自由自在に感じるようになります」

「？」

『？』

吉田が首を傾げ、頭に乗ったサガークがそれを真似た。

「ああ、そうですね。とりあえず、作業を始めた方が早いかもしれ  
ません」

「うむ。キング、少々自在法の操作を手伝ってもらえんかね」

「僕がか？」

「ええ。何分この街は魔皇力の色が濃く、自在法の発動が僅かに阻  
害されるのです。」

私の力は全体を上手く纏めるのに向いているのですが、そのせいか  
そこら中の魔皇力まで自在法に組み込んでしまつようでした」

「成る程。だから魔皇力が入らないようにしたいというわけか」

自在法と魔皇力は、互いに発動システムが大幅に異なるため、併用すればどちらかが誤作動を起こす。

ここ一帯には、人造ライフエナジーのプラントもいくつがあるため、それも無理からぬことだった。

「いいだろう。だが、一美ちゃんに手荒な真似はするなよ」

「勿論」

カムシンとしても、そのつもりはまるでない。

もつとも、彼からすれば、それも何十回と繰り返してきた手順に過ぎないのだろうが。

カムシンは無造作に、オレンジ色のフードを取った。

『……』



その下にあつた顔の全体に、吉田のみならず、太牙も息を呑んだ。

褐色の肌に、痛々しく走る無数の傷跡。

二人がその異様さに身を強ばらせる。

「……フレイムヘイズに、視覚的な変化は起こらないと聞いていたが」

「本当は全て治せたんじゃないが、こ奴がきかなくてのう」

「治、せた……？ 消せた傷を、残したんですか」

背中に背負っていた布巻き棒を、片手で巧みに操りながら、カムシ  
ンは吉田の疑問に答える。

「ああ、これは私の戦いの思い出なのです。

キングの言う通り、我々の体は本来変化しないのですが、誰かとのやり取りを……その結果、刻みつけられたものを受け入れることで、自然と跡が残ることがあるのです。戦歴が長いとその分、思い出もたくさんたまってしまつ」

一言一句に、歴戦の中で培われた貫禄が垣間見えた。

僅かな畏敬を感じつつ、太牙は魔皇力の操作を手伝いつつ、隣のカムシンに問う。

「『儀装の駆り手』。なぜわざわざ、つらい戦いの傷跡を、思い出として刻む？」

「つらいからこそ、です。痛みを覚えていなければ、そこにあった他の思い出をも忘れてしまいますから。」

あなたも立場上、似たような感情を抱いたことがあるのでは？」

太牙の顔が、引きつり、次に苦虫を噛み潰したような表情に変わる。

「……随分、見透かしたようなことを言ってくれるな」

「失礼。気を悪くされましたか」

琴線に触れたのを感じ、あっさり退くカムシン。

だが、太牙の心に落ちた不快感は消えない。

四年前のつらい戦いがあったからこそ、自分はここにいる。

“あの人”との別れも　また然り。

否応なしに、今の喜びは過去の悲しみによって培われたということ  
を、再認識させられてしまった。

魔皇力を操る手は止めないまま、太牙は隣に立つ淡白なフレイムへ  
イズを睨む。

どうも太牙は、カムシンが好きになれそうになかった。

場所は移って『カフェ・マル・ダムール』。

既に店は閉まり、限られた人間のみが店内に残る程度。

普段ならば、マスターが静かに明日のコーヒー豆の準備をしている時間。

そう、普段ならば。

「さすがにそれは聞き捨てならんぞ奏夜君！」

名護の鋭い声が、店内に響く。

テーブルには、本日の夕飯、クリームシチューとご飯。

「そりゃこっちのセリフです！　いかに名護さんと言えど、こればかりは譲れませんよ！」

奏夜の下にもシチューはあるが、傍らにあるのはご飯ではなくフランスパンだ。

「黙りなさい！　俺は常に正しい！　俺が間違っことはない！」

「懐かしいフレーズをどうも！　だが私は謝らない！」

「……まーだやってんのね、向こうは」

別のテーブルで、同じくシチューを口に運ぶ恵が、悲しいものを見るような目で、奏夜と名護を見ていた。

「静香お姉ちゃん。お父さんと奏夜お兄ちゃんは何やってるの？」

「今の二人を見ちゃいけません。」

大丈夫、由利ちゃんは永遠に理解しなくていいことだから」

静香の淡々とした答えに首を傾げる由利だったが、食欲には勝てないのか、すぐに食べる作業へ戻る。

#### 状況説明。

祭りの約束をした奏夜と静香は、そのまま紅家で夕飯を食べる予定だった。

だが、ここ連日忙しかった（主に第X話の騒動）奏夜は、買い溜めしていた材料が切れていたのを忘れていたのである。

年頃の女の子にインスタントは忍びない。ということ、マル・ダ

ムールへと足を運び、夕飯にあやかろうとしたわけだ（ちなみにキバットとキバーラは、インスタントで満足したため留守番）。

幸い、名護ファミリーもまたマル・ダムールで夕飯作りをしていたため、二人は手伝いをする条件で、夕飯をご馳走になることとなった。

「ここまででは良かったんだけどね……」

「まさか奏夜と名護さんに、こんな無駄なこだわりがあったなんて……」

シチューに目を落としつつ、恵と静香は溜め息をつく。

そう、シチューを作ったまでは良かったのだ。

問題はその付属品。

主食となるべきものに対し、奏夜と名護の意見がはっきり分かれたのだ。

要するに、

「私に同じことを二度言わせるな！  
シチューはご飯と合わせてこそ美味いんだ！」

「考えらんねえ！  
カレーでもあるまいし！ シチューに合う主食はパン以外ありえ  
ません！」

「ううううううである。」

ありがちな、食べ物に対する無駄なこだわりだ。

『どつちでもいいのにねえ』

恵と静香は、騒がしい二人を捨て置き、自分のペースで食を進める。

「ここまで言っても分からないか！ ならばそのふざけた精神、食  
の神に返しなさい！」

「いいでしょう、ただしその頃には、名護さんは八つ裂きになつて  
るでしょうけどね!」

奥の席では物凄い激論もといバトルが繰り広げられているが、まあ、あの二人の  
ことだから、その内自然と仲直りするだろう。

長い付き合い故に許される、完全スルー。

「そう言えば静香ちゃん。ミサゴ祭りって誰かと行くの?」

奥の席の二人に意識を向けられないよう、恵はタイムリーな話題を振る。

「もし静香ちゃんが良かったら、私達と一緒に回れないかなーって  
思ってたんだけど」

「静香お姉ちゃんも、由利たちと行くことよ!」

「あ……えっと」

期待100%の笑顔に、歯切れ悪く言いよどむ静香。



「じめんなさい。私、その日はちょっと……」

「あら、もう予定入ってたかな」

「や、あの、予定ってどうか……」

静香の視線が、恵の背後へと動いた。

目ざとくそれに気付いた恵は、振り返って静香の視線の先を追う。

行き着いた先は、自分もよく知る茶髪の青年　紅奏夜。

「……ああ」

ニヤニヤと、楽しいおもちゃでも見つけたような笑みを浮かべる恵。

片や静香は、顔を耳まで紅潮させていた。

「？　静香お姉ちゃん、顔赤いよ？」

「だ、大丈夫よ由利ちゃん。にやんでもないから」

動揺からか、見事に言葉を嚙んでいた。

恵は口に手を当て、笑いを堪えている。

「そっかそっか。静香ちゃんもよーやく、そういうアクションが取れるようになったかー」

「茶化さないでくださいよ……。私にとって、今回はかなり冒険だったんですから」

「あはは。ごめんごめん。けど、まだ安心しちゃダメよ」

恵は静香ちゃんの前で、人差し指をビシッと立てる。

自分と名護のことを思い出し、世話を焼きたくなってしまったようだ。

「奏夜くん、他人のことに目が行きがちで、自分のことが疎か気味だから、かなりはつきりした好意を見せてあげなきゃ、静香ちゃんの気持ちには気付かないわ」

静香は頷く。

それは常日頃から思っていることだ。

「だからさっさと押し倒しちゃえ」

「っ!？　　いいい、いきなり何言ってるんですか!」

奏夜に聞かれないかと様子を見るが、幸いにもシチュー道を語るのに忙しい彼には届かなかった。

「いいじゃない。なんかもう色々と捧げちゃいなさいな」

「何をですかっ!？　　突飛な話しないでください!　　大体、私と奏夜はまだそういう関係じゃないですっ!！」

「ふん？」

まだ、か。

(そういつことしたい願望が無いわけじゃないのね)

これをネタにしようかと思うも、顔を赤く染め、若干涙目になりつつある静香をこれ以上いじめるのは、さすがに可哀想だった。

その思考を飲み込み、恵の静香いじりはひとまず終息する。

「でも、静香ちゃん。これだけは覚えておきなさい」

さっきのからかい口調から一転、恵は真剣なトーンと共に唇を動かす。

「あなたが奏夜くんに向ける感情は、必ず彼を苦しめる」

貴女が報われるか報われないかに関わらず、ね。と恵。

「……………」

静香は閉口し、恵の話の話を聞く。

「それに、もしすべてが上手くいったとしても」

「わかってます」

自分がどれだけ、身勝手なことをしているのかは、とうに理解していた。

奏夜が、“その感情”のせいでどれだけ傷付いたのかは、まだ記憶に新しい。

（私が想いを伝えたら、きっと奏夜は“その感情”を思い出してしまっ）

それはあまりに醜悪で、残酷こと。

だが、それだけではない。

恵の言う通り、静香の想いが実るということは

奏夜の中から、“あの人”を消し去るという意味だ。

奏夜はいつも前を向いて生きている。

“あの人”との約束だから　と奏夜は言っていた。

だが時たま、奏夜はとても辛そうに、顔を曇らせる時がある。

その時、静香は気付いた。

奏夜は心のどこかで、まだ“あの人”のことを、自分のせいだ  
と  
思っている。

幸せになっ  
てはいけ  
ないと、  
自らを縛り付けている。

心の暗闇を見据える奏夜に、自分の想いを伝えればどうなるか  
それは容易に想像できる。

「……わかってますよ、恵さん。私は本当に自分勝手に、酷いやつ  
です」

それが当然、と言わんばかりに、静香は言葉を紡ぐ。

私は奏夜がたまに見せる、悲しい顔が凄くキライだった。

だから、暗闇なんて抱え込まなくてもいいから、奏夜に心から笑っ  
て欲しかった。

ずっとずっと、そう思い続けて、いつの間にか彼は、自分の一番身  
近にいる男性になっていた。

『静香、大丈夫か？』

四年前、そう言って私を背負ってくれた彼の背中が、とても大きく  
て、頼もしかった。

それは、自分の想いを認識するには十分過ぎる出来事で。

「でも私、諦められないんです」

“あの人”の影がどれだけ強敵であっても。

この選択が不幸しか呼ばなくても。

それに負けなくらい、奏夜を幸せにしたい。

「そのためなら、奏夜を幸せにするためなら、どんな茨道でも歩いていきます」

だって、私は。

「奏夜が好きですから」

迷いのない表情の静香を見て、恵は「……そっか」と呟く。



本当にこの子は 奏夜くんにはもっ たいない。

「だったら私からは何も言わないわ。友達として、静香ちゃんを全力で応援してるわよ！」

「はい！」

強く頷き合う二人。間に挟まれた形の由利は、ただきよんとんとしていた。

片や、恵と静香がそろそろ仲直りしたかな、と思い、奏夜と名護の方を見てみると、どれだけ暴れたのか、二人とも仰向けで床に倒れていた。

「っはあ、はあ、どうやら、勝負はドローのようですね……」

「その、ようだな……。ライス派とパン派、どちらが正解か、答えを出すのはまだ先のようだ……。その日まで、勝負は預けよう」

「はい、きつと今度は、俺が勝ちますよ……」

何故か『いがみ合っていた味方同士が、拳と拳で語り合い、互いの実力を認め合った』みたいな空気が漂っていた。

しかも奏夜のセリフが、某沢木さんのようになっている。

……いまだかつて、ここまで無意味な割に激しいバトルがあっただろうか。

そのおかげで、恵と静香の会話が、奏夜に聞こえなかったのだから、複雑な話だ。

取り敢えず、言えるのは一つ。

『二人とも、食事の時はなるべく静かに』

『……………すみません』

女性二人の低い声に、身の危機を感じた男二人は、即座に詫びを入れた。

確かに、テンションが上がりすぎていたのを自覚し、そのまま何事もなく、夕食は終了。

各々談笑に戻る中、店のドアの鈴が鳴った。

入ってきた人物を見て、マスターが手を上げる。

「お疲れ様、嶋ちゃん」

「ただいま、マスター。お、奏夜さんと静香くんも一緒か」

「ちわっす」

「お邪魔してます、嶋さん」

二人が頭を下げる傍ら、嶋は何やら、長方形の箱をテーブルの上に置いた。

「あ！嶋さん、出来上がったんですか？」

「ああ。ギリギリだったが、何とか間に合った。出来る限り、恵く  
ん達の要望に答えたつもりだと自負している」

「ありがとうございます、嶋さん。わざわざ時間をかけさせてしまったようで……」

「気にするな、名護くん。君達のためなら、いくらでも時間を割かせてもらおうよ」

礼を言う名護夫妻に、嶋は疲れなど微塵も見せず、むしろ達成感に満ちた顔をしていた。

「嶋おじちゃん、これなあに？」

「見たとこ、そんなに大きいものじゃないっすよね？」

「このサイズだと、服とかですか？」

「静香くん、少し正解」

おどけた口調で、嶋は箱の蓋を外し、中に入ったものを由利に手渡す。

「はい由利ちゃん、お父さんとお母さんからのプレゼントだ」

「わあ！」

箱の中身は、子供サイズの浴衣だった。

ピンクの布地に、黄色い花がよく映えた可愛いらしいデザインだ。

由利が瞳をキラキラさせながら、嶋から浴衣を受け取る。

「へえ。可愛い浴衣ですね。名護さんと恵さんが頼んだんですか？」

「まあねー。由利も大きくなってきたし、そろそろお洒落してみるのがいいかなって」

「デザインは私と恵で決めてみたんだが、どうだ由利、気に入ってくれたか？」

「うん！           ありがとう！           お父さん、お母さん！」

由利は本当に嬉しそうに、愛情の詰まった宝物を抱え込みながら、華のように笑う。

無邪気な笑顔に、店内がほんわかした雰囲気に包まれた。

「あ、そうそう」

名護ファミリーが浴衣の話題で盛り上がる中、嶋が奏夜へ向き直る。

「奏夜くん、キミに言伝がある」

「？ 俺に？」

「ああ、さっき連絡があつてな。太牙がこっちに帰って来ているらしい」

「兄さんが！？」

先程の由利のように、目を輝かせる奏夜。

「今日ってことは、もう御崎市にいるんですよねー！」

「ああ、だが昼間に少し用事があつたらしくてな。今日はどこかのホテルにでも止まって、明日会いに行くと言っていたよ」

「明日か……。じゃあどうせなら、ミサゴ祭りを一緒に回れるようにすれば……」

「えっ」

隣にいた静香が、小さく声を漏らす。

恵が「あちゃー」と額に手を当てる。

「？ 恵、どうした？」

「名護くん、ちょっと……」

首を傾げる名護に、恵が耳打ちする。

その間、二人の視線は奏夜と静香に向いていた。

やがて名護が「……なるほど」と呟き、

「奏夜くん、太牙には私達と合流するように言っておくよ」

「へっ?」

「実はミサゴ祭りが終わった後、『マル・ダムール』の前で、花火をやるうかと思っていてね。太牙となら、そこでも会えるだろう」

「は、はあ、わかりました」

何だろっ、名護さんと恵さんから有無を言わせないオーラが…。

無言の圧力に畏縮する奏夜。

隣で静香が口パクで「ありがとうございます」と伝え、「気にしないで(するな)」と名護と恵もまた、口パクで返事をした。

奏夜の鈍感さ加減には慣れているのか、名護と恵も、これくらいの気遣いは手慣れたものである。

無論、そんな気遣いなど知るよしもない奏夜は、祭りへの期待を胸に、拳を高く上げる。



「じゃ、明日はみんな楽しく盛り上がるうー！」

『おー！』

なんだかんだで、キバの周りは今日も平和だった。

そう、  
“今日”は。

時間は少々巻き戻り、夕方。

ビルでの調律を終えたカムシン、吉田、太牙の三人の姿は、夕方で  
込み合う大通り沿いの道にあった。

「では明日の夜八時、西側堤防の大石段で待ち合わせ、ということ  
で」

「か、勝手を言って、すいません」

「ああ、構いませんよ。ただ、私としては」

カムシンは自分が貸し与え、今は吉田の手が握っている、片眼鏡のような宝具『ジエタトウーラ』に目を落とし、

「それを使うのは、止めた方がいいと思います」

「……」

「ありきたりな言い回しをするのなら、『知らない方が幸せなこと』もありませんからね」

「うむ。我々は助言したぞ？ 使わぬ方が良く、と。だからあとは、おじょうちゃん、『良かれ』と思う方を選ぶんじゃない」

「……はい」

カムシンとベヘモットの言葉を重く受け止め、吉田は頷いた。

「ああ、ではまた後ほど。キングも、助力感謝致します」

「別に大したことはしじゃない。……調律の件については、こちらも礼を言っておくよ。『儀装の駆り手』」

未だ刺々しい太牙の返事を最後に会話は途切れ、カムシンは街の雑踏へと消えていった。

手持ち無沙汰なまま、吉田と太牙はフラフラと大通りを歩く。

その間吉田は、ずっと片眼鏡『ジェタトウーラ』を見つめていた。

「—美ちゃん」

見るに絶えず、太牙は口を開く。

「迷うくらいなら、僕もそれは使うべきではないと思っ」

「……」

「その 悠二くんと言ったか。その子が喰われたかどうか確かめ

たところ、やはりキミにはどうにも出来ない。キミのみならず、誰にもね」

酷なことを言うようだが、こつでもしないと、吉田は迷ったままだろつ。

「……分かってます」

ぎゅっ、と両手で片眼鏡を握り締める。

「分かってます、けど」

やはり、簡単に結論は出せない。

(どつしたら、いいんだろう)

その思考だけが、吉田の中で蓄音機のように再生され続けていた。

調律における、吉田の手伝い自体は、すぐ終わった。

カムシンのマーキングを中継点に、この街の存在の力の流れを、吉田が感じ取れるようにリンクさせる。

街本来の姿を知る彼女が、歪みによってズレた場所を、存在の力の流れから見つけ出していく。

要するに、間違い探しのようなものだ。

あとは、修正ポイントを把握したカムシンが、調律によって歪みを正すというだけ。  
問題はその後だ。

カムシンとの会話の中から、吉田はある可能性に行き着いた。行き着いてしまった。

何故気が付かなかった、と思うようなレベルの話。

だがそれは、吉田の心に恐慌をもたらすには十分だった。

かつて、この街にいたという人喰い。

大量に生み出された、力の残り滓『トーチ』。

その中にもし、自分の知り合いがいたのなら。

坂井くんが、いたら。

吉田は、カムシンにそれを打ち明けた。

だが返ってきたのは、『それは、どうしようもありません』という  
至極当然で、残酷な答え。

どちらにせよ、ただの人間である吉田には、仮に坂井悠二が消滅し  
ても、その違和感を感じ取れない。

認識出来ても、そこにあるのは悲しい別れ。

勿論、無事な可能性も十分にあるが、確実とは言えない。

その“もし”という考えが拭いきれなかったのだ。

葛藤する吉田を見て、カムシンは何を思ったのか、彼が彼女に貸していた、人間をトーチかどうか見分ける宝具『ジエタトゥーラ』を、もう1日預けると言ってきた。

『それを使うかどうか、おじょうちゃんが、自分で選ぶのです。無事だという十分な可能性に賭け、それを使わず、今までと同じように暮らしてゆくか……それとも、リスクしかない真実を欲してそれを使い、安心を得るか……それとも、結局は忘れてしまう、その場だけの懊悩を得るか』

あくまでも、選択を吉田に任せる形で、カムシンは『ジエタトゥーラ』を渡したのである。

「『良かれ』と思う方を選びなさい」

カムシンの言葉が、脳内で幾度も反芻される。

(……坂井くんと、『良かれ』と思える選択……)

カムシンの与えたきっかけをトリガーに、吉田はある決意を固めつつあった。

確かめるか否かの結論はまだ出せないが、代わりに自分が真に望んでいたものを、得ることが出来た。

強い想い。

『良かれ』と決めた選択。

明日のミサゴ祭りで、絶対に。

「……」

太牙は、不安そうにしながらも、芯の通った決意をした少女を複雑そうに見ていた。

話を少し聞く限りでもわかる。

その坂井くんという子は、この子にとって、どっという存在なのか。



(奏夜は、この子にどんな風に言葉をかけたんだろうな)

きっと、必要以上に親身になっていただろう。

“あの人”のように、なって欲しくなかっただろうから。

(……いけない。どうも考えが後ろ向きになる)

太牙が髪を軽く引つ搔いたところで、大通りが四つ辻に別れる。

「じゃあ、一美ちゃん。僕はこの辺りで失礼するよ」

「えっ？」

唐突な別れに声を挙げるが、よくよく考えれば、太牙は自分が付き合わせたようなものだ。

時間的にはむしろ、振り回し過ぎてしまっている。

「その、ごめんなさい。散々付き合わせて、大したことも出来なくて……」

「いいさ。弟の生徒さんと話すのは初めてだったからね。僕も楽しかったよ」

カムシンと違い、会おうと思えばいつでも会えるのだ。

(……そう言えば)

吉田はもう一つ、引っかかりを覚える。

(太牙さんがファンガイアなら、先生は )

異父兄弟とは、言っていたけれど。

吉田は太牙に聞こうとしたが、すぐに止めた。

(太牙さんがこんなにいい人なんだもの)

だったら、先生は、あの鳥のファンガイアみたいに、誰かを傷付け

たりしない。

トーチの時と違い、吉田は恐れずに受け入れることが出来た。

ファンガイアである太牙が自分を守ってくれた、というのが大きかったのだろう。

「それと一美ちゃん、最後に一つだけ」

去り際、太牙は言い残す。

「もし誰かを好きになったなら、悔いは残さないようにね。何があつても、最後までその人を好きでいるんだ」

吉田は目を瞬かせ、小さく笑う。

「太牙さんは、やっぱり先生のお兄さんなんですね」

「えっ？」

「さっきの言葉、先生も言っていましたから」

「……そっか」

可笑しさからか、つい太牙も、口元を緩めてしまう。

「じゃあまたね。一美ちゃん」

「はい。サガークくんもまたね」

『○\*!』

太牙のバツクから、僅かにサガークの声が聞こえてきた。

多分『マタネ』と言ってくれているのだろう。

また会いたい、ということを中心に留め、二人は別々の道へと歩き去っていった。

次の邂逅が、二人にとって、思いもよらない状況下になるとも

知らずに。

2020

## 第十八話・彎曲ノ非情なる現実・Aパート（後書き）

ここ最近バトル詰めだったんで、今回はやや小休止みたいなノリです。

・サガークはあのテーブルに手を乗せると意思疎通が出来る……という設定があったので、今回起用しました。  
僕の中で、サガークはあんな感じのキャラです。

・まさか「俺は常に正しい！俺が間違うことはない！」のセリフを使える日が来ようとは……。  
ちなみに僕は、シチューはパン派です（聞いてない）。

・正直、ここまで静香を動かす気は無かったんですが……はい、筆が乗ってしまいました。

次は奏夜が、ほんの少し自分の傷を明かします。

奏夜曰く『ひどい昔話』は、誰にどんな影響を与えるのか。

更新が遅くなりがちですが、次回もご期待を！

## 第十八話・彎曲ノ非情なる現実・Bパート

どことも知れない空間。

「しかあーし、ああの街は本当に興味深いでえーすねえ」

背骨に針金が入ったかのような細身の体格に、白衣を纏う男“教授”が、手を淀みなく動かし続けながら言う。

「えーっと、例のファンガイアがどうとかってヤツですよ。けど教授、前にドラグだかゼブとかいうヤツを引っ張りこんで、ファンガイアについては粗方理解しははひはいひはい」

ガスタンクのように真ん丸なボディを持つ“燐子”が、ガシヤンガシヤンと、機械らしい擬音を響かせながら言う。

ちなみに後半のセリフは、教授のマジックハンドにより、頬を抓られた為に出た声である。

「ドオーミノオー、分かあーり切ったことを言うーんじゃありません

ん。わあーたしが興味深あーいと言ったのは、フアーンガイア云々とは似いーて非なるものです」

「ふあ、じゃあ、なにが気になつとひはいひはい」

抓る力が更に上がる。

「があーくがありませんねえ。

フレイームヘイズの連中に加え、フアーンガイアの連中が集まる街にいー、おああーつらえ向きの“歪み”。こおーんな偶然が、はあーたしてただの偶然と呼べるのかあーという話でえすよ！」

今がまさに至福の一時。

教授の特徴的なしゃべり方からは、飽くなき探求心が伺い知れた。

「こおーたびの実験は、ひよおつとしたら本来の目的以いー上の結果がでえーるかも知れませんねえ！」

嗚呼、すうばらしい！ 真理の探求はやはり、なにものにも勝る、エエーキサイティングでエエークセレントなものですねえ！」

教授と燐子の背後で輝く自在法が、教授の意志に呼応するかのよう



に蠢き続けていた。

「うし、本日の授業オシマイ。ミサゴ祭りに行く連中は、トラブル云々にや気を付けろよ」

『はーい！』

きつちりとかみ合った返事を最後に、教室内の生徒はばらばらと解散していく。

中には残って「今日どうするー?」だの「一緒に行こー」だの、祭りに関する最終確認をする生徒もいる。

無論、それは奏夜の身近にいる生徒も例外ではない。

シヤナは授業が終わった後、これ以上ないほどウキウキしていた。

それとなく、奏夜が理由を聞いてみると、

「今日、悠二を誘ってみる！」

だそうだ。

「へえ。これから誘うのか？」

「うん、千草が浴衣用意してくれてるから、悠二が帰って来た時にびっくりさせるんだ！」

稀にみるご機嫌状態だった。

感情がここまで顔に出るのは、シャナの純粹さ故だろう。

「そっか、良かったな！」

微笑ましさからか、奏夜も表情を緩める。

「お前の浴衣姿見たら、悠二のヤツ絶対驚くだろっから、そこで一気に祭りまで引っ張ってけ！」

「分かってる！」

期待に胸を膨らませる少女を見送り、奏夜は一言。

「青春だねえ」

まあ、かく言う奏夜にも予定が入っていたりするのだが。

腕時計を見ると、静香との約束にはまだ余裕がある。

家に帰って、着替える時間をふまえても十分だ。

「なつき先生の手伝いでもするかな」

結局、祭りの見回りについては、同僚の机なつきに替わって貰った。

教員としては付き合いが長い為、奏夜が事情を話すと、快く引き受けてくれた。

……引き受けた後の「紅くんも、ようやくそついう子が出来たのね」というセリフはともかくとして、貸しがあるのには違いない。

「オケ部の楽器のチェックとかなら手伝えるしな……。取り敢えず音楽室で時間潰して、4時くらいに帰りや間に合うか」

予定を纏めつつ、奏夜は階段の踊場にさしかかる。

「あ、先生！」

後ろからの声に振り返ると、小柄な女子生徒が近づいてきた。

「良かった。まだ帰ってなくて……」

「おう吉田、どうかしたか？」

こいつが自発的に話し掛けてくるなんて珍しい。

理由を想像しつつ、奏夜の目線は、彼女が持つ紙袋に向く。

と、吉田はおもむろに、紙袋を手渡してきた。

「これを先生に渡したかったです」

「あん？　俺に？」

中を見ると、果物の詰め合わせだった。

だが奏夜には、受け取る理由が思い浮かばない。

「えっと、正確には先生じゃなくて……」

吉田は言いづらそうに、唇を動かす。

「先生、お兄さんいますよね？」

「！」

予想外の言葉に、奏夜は目を剥いた。

「えっ、ちょい待ち。なんでお前知ってんの？」

兄、太牙のことは、学校内の誰にも話していないはずだ。

「昨日偶然お会いして、色々お世話になったんです」

吉田は何故か気恥ずかしそうに、経緯を説明する。

「だから、そのお礼がしたかったんです。先生なら連絡先を知っているかなと思って」

「成る程ね。ったく、本当に世間は狭いなあ……兄さん、何か言ってた？」

「先生のこと、嫌わなくて言ってみましたよ。太牙さん、素敵なお兄さんですね」

「くあっ」

メチャクチャ恥ずかしい。

兄からの心配を、それも自分の生徒に伝えられるのは、自分の頼りなさを露呈させてしまった気分だ。

頬を掻き、奏夜は平静を装う。

「まあ、分かった。この果物を兄さんに渡せばいいんだな」

「はい。よろしく願いします」

最後にぺこりと頭を下げ、吉田はやや急いだ様子で、奏夜の脇をすり抜けていく。

(……そう言えば)

奏夜は、吉田の後ろ姿に声を投げかける。

「誘うつもりなのか？」

誰を、とは言わなかった。

吉田は振り返り、

「はい」

力強く頷いた。

緊張はあるようだが、普段のオドオドした態度は欠片も見られない。

「坂井さんと、一緒に行きたいですから」

「……そっか」

今までの彼女には無かった、確かな覚悟がそこにあった。

先の少女のことを思うと複雑だったが、それでも奏夜は、シャナに掛けたのと同じ言葉を送る。

「頑張れよ」

奏夜の激励に笑顔で応え、吉田は階段を降りていった。

悠二の帰宅ルートは、池あたりから聞いているだろうから、舞台セツトは問題なし。



シヤナは浴衣の準備で一旦先に帰っている。

トドメに　あの吹っ切れたような表情。

あの様子なら、臆さずに告げることが出来るだろう。

坂井くん、今日のミサゴ祭り、一緒に行きませんか、と。

(……ありゃ兄さんが誰かが、何かアドバイスしたな)

皮肉めいた笑みを浮かべる奏夜。

悠二と吉田が祭りに行くことについて、奏夜はなんら不満はない。

むしろ祝福すべきことだ。

しかし、シヤナの　戦いしか知らなかった彼女の、祭りに対する

期待に満ちた様子を目の当たりにしているため、素直に喜べる気にもなれない。

あちらを立てればこちらが立たず。

それは 奏夜のみならず、太牙も嫌というほど味わっているのだから。

「兄さんも、タイミングが良いんだか悪いんだか」

フルーツの入った紙袋に目をやり、溜め息をつく。

（まあ、悠二がシャナを選ぶにしろ、吉田を選ぶにしろ、俺が口出  
しできることじゃねーけどさ）

教員である以上、奏夜は生徒の問題には、積極的に関わるべきだ。

しかし、こと恋愛に置いては、個人個人の問題。

アドバイスはしても、深く関わり過ぎるのはNG。

どちらの味方もせず、中立であらねばならない。

「もどかしいよな、こういうのも」

見てられない、という方が正確かも知れない。

かつて      あの三人と同じ関係性を持った人間として。

「……俺と兄さんみたいにならないでくれよ。シャナ、吉田」

奏夜は願わずにはいられなかった。

その願いが、決して実現しないと分かっているにも。

御崎市郊外のとある山奥。

岩肌の濃い洞穴に、四人分の声が反響する。

「久しぶり、母さん」

「ええ、お帰りなさい、太牙」

「サガークも息災のようだな。安心したぞ」

『メ〇¥ー！』

太牙は今日、帰国したことを伝えようと、母親である真夜に会いに来ていた。

長らく留守にしていたため、母の元気な姿を見たかった、というのもあるが。

「二世にも世話をかけたな」

「気にするな。俺とお前の仲だ」

キバットの父、キバットバット二世は、羽音を鳴らしながら答える。

「奏夜にはもう会ったの？」

「いや、予定がつかなくてまだ会ってないんだ」

「あら、じゃあ会いがてら、二人でミサゴ祭りに行ってきたら？  
確か今日だったでしょう」

「あー、それも考えたんだけど……」

真夜の提案に対し、太牙はやっぱりと言葉を濁す。

「ここに来る途中、名護達から連絡が来てね。一緒に花火大会を見  
ないかと誘われたんだ」

正確には、嶋のコネで特別席が確保出来ているらしく、そこで待ち  
合わせないか？ という誘いである。

真夜は訝し気に、首を傾げた。

「嶋さんがみんなの為に、花火を出すのは聞いてたけど……それに  
したって、随分急なお誘いね」

「ああ、僕もそう思って、詳しく聞いてみたんだ。そしたら、名護  
達の都合じゃなくて、奏夜の都合みたいだね」

「？ どういう意味？」

「今日、奏夜は静香ちゃんと行くみたいなんだ」

太牙の説明に真夜と二世は『ああ、そういうことね（か）』よつや  
く合点がいったようだった。

「ふふっ、奏夜も隅に置けないわね」

「だろっ?」

要するに名護達は、奏夜と静香の邪魔をしないようにしたいのだ。

静香と並ぶ息子（弟）の姿を想像し、どちらからともなく、太牙と真夜は笑い合う。

四年前、あんなことがあっただけに、奏夜と静香のことは、二人にとって喜ばしい出来事だ。

ならば協力は惜しまない、と太牙も、名護の提案に乗ったのである。

「それで、せっかくだから母さん達も誘おうと思ったんだけど、どうかな？」

「ありがとう。でも、遠慮しておくわ。人が多いところは苦手だし」

ここから静かに眺めるだけで満足よ、と真夜。

二世も「俺が行くのはマズいだろう」と妥当な見解を見せた。

「分かった。名護達にも説明しておくよ」

「ごめんなさいね。みんなにも謝っておいて頂戴」

目尻が少し下がった真夜は、本当に申し訳ない気持ちで一杯らしかった。

『タイガ、ボクモココニノコルヨ』

と、そこへサガークも加わる。

「えっ？ でもいいのか？ お前がいいなら、バックの中にも入れば……」

『ソレジャア、タイガガタイヘンデシヨ。ダイジョウブ、キバツトクンタチモサソウカラ、サミシクナイヨ』

確かに、キバツトやキバーラも、サガークや二世と同じ理由で、留守番をしている可能性は高い。

あの面子なら、寂しくなるということはないだろう。

「分かった。悪いな、サガーク」



『キニシナイデ。アツ、デモオミヤゲニ、ワタアメヲカツテキテク  
レルトウレシイナ』

「ああ、任せろ。それと、祭りの後にはマル・ダムールで小さな花  
火をやるらしいんだが、そこなら来ても大丈夫だからな」

『ウン、ワカッタ』

互いの気遣いに感謝する。

二人もまた、奏夜とキバットのようになり、小さな頃から苦楽を共にし  
てきた親友なのだ。

「それじゃあ母さん、また来るから。今後は奏夜も連れてね」

太牙が手を差し出し、真夜がそれを握り返す。

「ええ。楽しみにしてるわ」

屈託のない笑顔を最後に、太牙は洞穴から去った。

その姿を最後まで見送っていた真夜は、握手をした方の手を見る。

「また来るから、か」

自然と、顔が綻んだ。

四年前は考えられなかった、息子からの暖かな愛情。

久しぶりに感じたそれは、真夜にとって何物にも勝る幸福だった。

「誘ってくれただけで十分よ。太牙」

手から伝わった太牙の優しい“音楽”に、真夜はそっと目を閉じた。

『 \* ? 』

「そっとしておいてやれ」

真夜の様子を伺うサガークを、二世がたしなめる。

空は、茜色に染まりつつあった。

同時刻、紅邸。

「キバット、キバーラ、やっぱりこれっておかしくないか？」

「何を言う。俺様とキバーラが着付けしたんだぜ。パーフェクトさ」

「やっぱり奏夜は元がいいから、何でも似合うわね」

二匹のコウモリの評価に対し、奏夜は落ち着かなそうに、鏡に映る自分を見る。

奏夜が纏った黒一色の浴衣は、シンプルながら、日本の和を意識した装いとなっていた。

「つーか、祭りだからってここまで気合い入れるか？ 私服でいいだろうがよ」

「あら、冷たいわね。静香ちゃんとのデートなんだから、これくらいはしなきゃ」

「だからデートじゃねえっての……。大体、こういう江戸っ子みたいな服装は、俺よりもキバットがするべきだろ。中の人的に」

「奏夜。お前はいい加減、メタ発言の限度を覚えろ」

俺様じゃ浴衣なんざ着れねーし。

キバットが至極もつともな意見を述べたところで、下のインターホンが鳴った。

「む、お相手のご到着だな」

「ちゃーんと、エスコートしてあげなさい」

「お前ら今回、妙にテンション高えな……」

自分との温度差にやや戸惑いつつ、奏夜は下に降り、ドアを開ける。

庭に出ると、見慣れた少女の姿が。

(……あれ?)

突如、身体が硬直する。

冷静な判断力を失った思考は、目に映るものを受け入れられなくな  
った。

「あ。奏夜」

こちらの様子に気付かないまま、その少女は普段と変わらない態度  
で接してくる。

濃い藍色染めの布地に、薄いピンクの紫陽花が映えた浴衣。

母親にでも着付けて貰ったのか、着こなしは完璧だ。

「30分くらいの遅刻は想定してたから、早めに来ちゃったけど、奏夜にしては珍しく、ちゃんと準備してたみたいだね」

感心感心、という皮肉も、ろくに耳に入らなかった。

普段の幼さが残る顔立ちは、凜とした優雅さに変わり、口調でさえも大人びたものに聞こえてくる。

だがそれでも、間違いなくこの少女は、野村静香だ。

いつもバイオリンを教えている、奏夜の一番身近にいる女の子。

「……………」

「？ 奏夜、どうかした？」

言葉を失い、立ち尽くす奏夜の頬に触れる静香。

「……………っ！」

静香の手から伝わる体温は冷たかった。

つまり、自分の体温が上がっているということ。

「なんか奏夜、ちょっと熱くない？　顔も少し赤いし」

「い、いやいやいや、なんでもない！」

わたわたと、狼狽えながら、静香の手を引き剥がす。

だがその後も、静香を直視することは出来なかった。

（なんでだ？　そりゃ吃驚はしたけど、何も目を合わせられないなんてことは……）

奏夜自信も、自分が動揺している理由が分からなかった。

混乱する奏夜に、静香がからかい半分に告げる。

「あ　ひょっとして、私の浴衣姿に見とれちゃったかなー奏夜くん？」

袖を持ってくるりと回る静香。

「っ！」

無論、その可愛らしい仕草は、奏夜を更に追い詰めるには十分で。

(やばい。上手く言えないが、今日の静香は本当にやばい)

しかし、いくら心の中で警鐘を鳴らそうが、静香のご機嫌にはまるで変わりがない。

「ほらほら、可愛いなら可愛いと素直に言いなさいな」

顔を紅潮させる奏夜が珍しく、静香はつい、普段なら言えない大胆なことを聞く。

だが最後の最後で、静香は墓穴を掘ってしまった。

「……ああ、可愛いよ」



「えっ？」

「だから、可愛いつて」

「……」

いやいやいや。

有り得ない。聞き間違いだ。

可愛い？ あの朴念仁の奏夜が？

そんなの、天地がひっくり返っても、言わないセリフじゃないか。

恐る恐る、静香は聞き返す。

「か、可愛いつて、誰が……」

「……お前以外誰がいるんだよ」

奏夜が未だに顔を赤らめながらも、呆れたように告げる。

「浴衣も似合ってるし、その……うん、とにかく、今日の静香、凄え可愛い」

「……………」

奏夜の比にならないほど、静香の顔が赤く染まっていく。

漫画表現なら、煙が上がっているだろう。

「あ、ありがとう……。奏夜の浴衣も似合ってるよ」

「お、おう。ありがとな」

「……………」

「……………」

二人が、赤面しながら黙り込む。

(ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど)

軽い冗談のつもりが、こんな羞恥を味わうことになるなんて。

可愛いと言わせるよう強いたのは静香自身なため、完全なる自爆だった。

(や、やばい。ワケ分かんなくなって、とんでもない台詞言っちゃまった……)

奏夜は奏夜で、どうしたらいいのかわからなかった。

静香と、ここまで気まずい雰囲気になるのも久しぶりだし、昔とはその理由も違う。

ただ 静香が可愛いと再認識しただけの筈なのに。

「と、取り敢えず、時間だし、行くか！」

「う、うん。そうだね！ 行こう行こう！」

不自然な早口は、緊張か、照れ隠しか。

そんな微妙な空気のまま、二人のミサゴ祭りは始まった。

「行ったな」

「行ったわね」

二階から二人の様子を観察していたキバットとキバーラ。

その口元には、ニヤニヤ笑いが浮かんでいる。

「ひよっとしたら脈ナシなのかなって心配もしてたけど……余計なお世話だったかしら」

「ああ。奏夜も静香に対して、異性としての意識が無いわけじゃな

「いみたいだな。安心したぜ」

鈍感な奏夜には、あれくらい静香が『女の子』の雰囲気を出すくらいで丁度いい。

わざわざキバーラが「せっかくの祭りなんだし、浴衣着ていったら？」と静香に進言しておいた甲斐があった。

「さ、俺様達のお膳立てはここまでだ。あとは静香に任せよう」

「そうね。私達はキャッスルドランから、ゆっくり花火でも……あらっ」

キバーラが目を向けた窓の外に、白い円盤のような影が見える。

影はしきりに、鍵のかかった窓ガラスを叩いていた。

「お、サツちゃんじゃねえか！」

キバットがロツクを外すと、工房にサガークが飛び込んできた。

「サツちゃん、久しぶりだなあ！」

『ヒサシブリ！』

「元気そうで何よりだわ　で、何かご用かしら？」

『ウン。コレカラマヤノトコロデ、イツシヨニハナビヲミルツモリ  
ナンダケド、フタリモコナイ？』

「おお、いいねえ！　キバーラと二人じゃ寂しいと思ってたところだ  
し、ご一緒させて貰うかな！」

「ええ、クイーンのところならお父さんにも会えるし、みんなで盛り  
上がっちゃいましょうー！」

キバット達は宴の準備（主に食品類）に飛び回る。

不思議生物三匹も、なんやかんやで祭りを楽しんでいた。

「……」

「……」

祭りの客でござった返す大通りを歩く、奏夜と静香。

だが二人の間に、会話はない。

ただ気まずそうに、目を逸らし合っているだけ。

互いに居心地の悪さを感じながらも、二人は口を開けないでいた。

今、顔を見合わせでもしたら、確実にまた赤面してしまう。

(つてか、今でも多分、顔赤いよなあ……)

伝わる火照りを感じながら、奏夜は小さく嘆息する。

まったく、あそこでからかいの二つや二つ口にすれば、こんな面倒

なことにはならなかったものを。

かと言って、あの時静香を『可愛い』と思った気持ちに嘘はなく、冷静さを欠いていたあの時では、どう転んでも軽口は叩けなかっただろうが。

「……………あー、静香」

このまま黙っているわけにもいかない。

取り敢えずこちらから、会話のボールを投げる。

「じゃ、じゃにかな？」

静香は静香で緊張しているのか、セリフをもの見事に噛んでいた。

「いや、まだお礼言ってなかったなーって思ってた」

「お礼？」

「うん。今日のことだけど、誘ってくれてありがとな」



「あ、ああ、そのこと。そんなお礼言われるほどのことじゃないよ」  
どの道、奏夜と行きたかったし。とは言わなかった。

「いや、それでも嬉しかったよ。てっきり静香は、学校の友達と一緒だと思ってたから」

ここ四年は、高校、大学とあって、奏夜も静香と中学生の頃ほど頻繁には会えなかった。

静香も学校生活が楽しいのだろう、と納得してはいたが、若干気兼ねしていたのは間違いない。

それもあってか、誘いがあった時には本当に驚いたのだ。

「だから、今年はちょっと新鮮だよ。二人で歩くのも良いもんだな」

「そうだね」

静香は奏夜と目を合わせた。

「私も新鮮だよ。奏夜と一緒に歩くの、凄く楽しい」

「そりゃどうも、お嬢さん」

やっと普段の調子が戻ってきた。

まだ気恥ずかしさはあるが、さっきに比べれば大分マシだ。

「さて、花火は名護さん達と見るとして、その間はどつする?」

「そうだね……奏夜は行きたい出店とかある?」

「いや、特に無い。今日は静香に付き合っよ」

「そう?　じゃあやっぱり定番で、かき氷が食べたいかな」

「お、いいな。確か次狼たちが、かき氷の店出してたから、先ずはそこに行くか」

「やっぱりミサゴ祭りでも働いてるんだ……。あの三人は遅しいよねえ」

「あいつらは下手な人間より人間らしいからな」

「漫画で例えるなら怪物くんだよ。で、奏夜がドラキュラさん」

「怪物くんじゃないんだ！　そしてそれだとラモンが仲間外れ！」

と、楽しくも恐らくは本編とは関係ない話をしながら、二人は祭りの会場へ足を進める。

照れも抜け、普段通りの関係性が戻ってきた。

（うん。やっぱり俺と静香はこうでなくちゃな）

居心地が良く、一番気楽に話せる間柄でなければ。

「……」

ただ少し、本当に少しだけ、さっきの空気が惜しいとも思ってしまうのだけだ。

(あの空気の何処に惜しむ要素があるんだかな……)

思考を巡らすも、答えは出ない。

しかも、考えれば考えるほど、何故か羞恥心が嵩んでいく。

(ま、いつか。別に)

奏夜はあっさり結論算出を放棄し、通りの角を曲がった。

どんっ！

「わっ！」

「きゃっ！」

衝撃。

よろめいた身体を反射的に立て直し、二人は自分達にぶつかってきた何かを、視界から導き出す。

目の端に捉えた影は二人を横切るような形で、ミサゴ祭りが開かれる河川敷とは、逆方向に走っていく。

後ろ姿から得られた情報は、長い黒髪と小柄な体躯。

「……………シヤナ？」

奏夜は適当な判断から、さっきの影と知り合いの少女を重ねる。

「奏夜、知り合いの子？」

静香が、少女の走り去った方を見ながら尋ねる。

「ああ、断定は出来ないけど、多分俺の生徒だ」

「どうしたのかな。なんか、急いでたっというより、無我夢中で走ってるみたいだったね」

「……………無我夢中、か」

その言葉だけを復唱する奏夜。

直感的に、嫌な予感がした。

シヤナが我を忘れるほどに走る、という状況もそうだが、もっと直感的な不安である。

(……………どうすっかな)

奏夜は踏み切れずにいた。

本音を言つと、今ここでシヤナの後を追いかけてたい。

だが、静香を一人にしてしまうというのも問題だ。

彼女の気持ちを考えれば、礼儀を仕損じるようなことは、静香を幻滅させるようなことは、奏夜もしたくない。

「奏夜」

頭の中を読んだように、静香が奏夜の浴衣の袖を引っ張る。

「行ってあげた方がいいよ」

「えっ？　でも、それじゃ静香が……」

「ばか」

ぺちっ、と軽く頭を叩かれる。

「多少のロスくらいは大目にみてあげるから、早くさっさきの子を追いかけてなさい」

静香は人差し指を、奏夜の眼前に突き出した。

「生徒が困ってたら助ける、それが先生でしょ？」

「……」

本当　　この子には適わない。

感情と謝罪の気持ちで一杯になりながら、奏夜は頷く。

「ごめん。すぐ戻るから、出店の入り口辺りで待っていてくれるか？」

「うん。着いたらケータイで連絡してね」

「わかった。本当にごめんな、静香」

去り際、もう一度頭を下げて、奏夜は踵を返し、シャナのあとを追いかけていった。

残された静香は軽く溜め息をつき、

「本っ当に、奏夜は誰にでも優しいなあ」

人の気も知らないで、奏夜は誰も彼も助ける。



彼の優しさは、自分にだけ向けられるものではない。

それは、ほんの少し悔しい。

でも、

そんな奏夜だからこそ、私は好きになった。

「惚れた弱みだよね」

皮肉っぽく笑いながら、静香は歩き出す。

戻ってきた時のために、りんご飴でも買って置いてあげようかな、と思いつながら。

程なくして、シャナは見つかった。

団地に囲われた小さな公園だが、今日がミサゴ祭りなのと、大通り

から外れているので、人影はない。

奏夜と、シャナを除いて。

「シャナ」

ベンチに座る小柄な姿に声をかける。

肩が僅かに揺れ、俯いていたシャナが顔を上げた。

「!?!」

奏夜は絶句した。

「……そう、や？」

普段よりずっと小さな声は、僅かに震えていた。

潤み、赤くなつた目からは、一筋の涙の跡。

泣いていた。

あのシヤナが、フレイムヘイズ『炎髪灼眼の討ち手』が。

「……隣、いいか」

かろつじて言えたのはそれだけだった。

シヤナが小さく頷いたのを確認し、奏夜はベンチに腰掛ける。

重い沈黙。

さっきの静香とは、また違う種類の気まずさだった。

「話したくないなら、話さなくていい」

彼女のことを重んじ、慎重に言葉を選ぶ。

「けど、話すことでお前が楽になるなら話してくれ。俺でよければ聞き手になるさ」

それだけ言って、奏夜は口を閉ざした。

あくまでも、そこにいるだけ。

だがシャナが望むなら、いくらでも助けを出す。

奏夜なりの気遣いが、今はとても嬉しかった。

「私……言え、なかったの」

安心感と共に、こらえていたものが溢れ出す。

「吉田、一美に、先に言われちゃった……私、行きたかったのに、悠二、取られ……」

「……そっか」

全てを察し、奏夜は嗚咽する少女の背中を撫でた。

「ごめんな、シヤナ。俺が、祭りに誘ってみるなんて言ったから……」

「ち、違うの、奏夜は悪くないの……私が……嫌だっって言え、なかった……一緒に行って、って……私が言えなかった」

奏夜の手から伝わる優しさを感じながら、シヤナは泣き続ける。

「それで私、悠二、連れてどこかに行こう、とか思って、ひどい、でも、私」

「うん」

「取られるの、やだから、取っちゃやだ、って思って」

「うん、うん」

「そんな、こと、私、でも……」

まともな声はそこまでだった。

慟哭するシャナの心が奏でたのは、深い悲しみの音楽。

悲哀に満ちた旋律は、奏夜の心にも伝播し、シャナの辛さを否応無しに響かせてくる。

何も出来ない無力感を噛みしめながら、奏夜は静かに、シャナの感情を受け止め続けた。

「落ち着いたか？」

「……ごめん。迷惑かけて」

「いいさ。泣ける時に泣けるのは、悪いことじゃない」

ひとしきり泣いて、多少落ち着いたシャナに、奏夜は言う。

「シャナ、やっぱりお前は変わったよ。今までのお前じゃ、絶対に泣かなかっただろうからな」

「……私、やっぱり、弱くなったのかな」

拳を弱々しく握る。

こんな情けなくなつて、フレイムヘイズとしての使命さえ果たせなくなる。

それはシャナに取つて、もっとも恐怖することだった。

だが奏夜は、

「違う違う。むしろ強くなつたと俺は思ってる」

「えっ？」

予想しなかつた答えに、シャナは首を傾げる。

「いつだったか言つたよな。『持たざる者の強さには限界がある。だが持つ者の強さに限界はない』って」

覚えている。

悠二と一緒にいたら、何でもできる。そう思えたのも、奏夜の助言がきっかけだった。

「そしてお前は、もう大切なものを手に入れてる。今流した涙感情もその一つだ」

どこが嬉しそうに笑いながら、奏夜は言葉を紡ぐ。

「お前、吉田が悠二を誘った時、悠二を連れて行きたいって思ったんだよな」

「……うん。でも」

「できなかった。正確には踏みとどまった、って感じかな？でもさ、悠二と出会う前のお前なら踏みとどまりもしないし、そもそも悲しんだりしなかったんじゃないか？」

強引に、相手の気持ちを配慮に入れず、理性的に行動する。

完全なフレイムヘイズであった頃のシャナなら、そうしていただろ



う。

「お前は悠二を連れて行かなかった。だから苦しんでる。でも、苦しみはイコール悪いことじゃない。苦しいってことは、お前の中に感情が芽生えてるってことなんだ」

「感、情？」

「そう、感情。

歓喜、憎悪、悲哀、快楽。誰かへの好意も、感情の一つだ。

お前は悠二を好きだと想えるようになった、それって凄く素敵なことでだろ？」

感情が無ければ、こんなに苦しまなかった。

でも同時に、悠二を好きだと想うことも無かった。

(……そんなの)

いやだ、シヤナは強く思った。

悠二を好きでいたい。

苦しくても、この想いは無くしたくない。

理屈も何もなく、シヤナはそう考えることが出来た。

「だから、泣きたい時には思いっきり泣けばいいんだ。  
高杉も言ってる。人は時に、本能のままに動いた方がいい時もある。」

一人で泣くのが辛いなら、遠慮なく誰かを頼れ。  
俺でも、千草さんでも、それこそ悠二にでもいい。  
感情だけじゃなく、お前は大切な人も持つてるんだからな」

笑顔のまま、くしゃりとシヤナの髪を撫でる。

(……温かい)

無条件の心地よさが、痛くて仕方なかった心に染み渡っていく。

奏夜の心の音楽は、それほどまでに優しい音色を奏でていた。

「悠二と吉田のことは、まだいくらでも何とかかなるさ。お前がちゃ

んと、悠二を好きでいるならな」

「……そう、かな」

「そうだよ」と奏夜は撫でる手を止める。

「お前らは、俺達とは違っただからな」

「…」

さっきとは違っ、暗がりから聞こえてくるような声。

シャナの心に、再び悲しみが去来する。

だが、それはシャナ自身の悲哀ではない。

(こねって、奏夜の……?)

奏夜から伝わる旋律は変わっていた。

果てしない絶望と悲痛。

奏夜に目立った変化は無いが、真っ黒な瞳が、底の見えない奈落を連想させた。

(なんで、どうして奏夜が、こんな悲しい音楽を……?)

戸惑うシャナを余所に、奏夜は唇を動かす。

「シャナ。一つ、昔話をしてやろう。  
二人の男と一人の女の、ひどい昔話をな」

奏夜は語り出す。

四年前を境に、誰にも言わなかった、滑稽な物語を。

「昔々、あるところに一人の男がいました。

彼は他人に興味を持たず、自分に近づく人間を全て拒絶し、狭い箱庭のような世界から出ようとしません。

彼だけにあつた特別な力も、ただ頭に聞こえる『ファンガイアと戦え』という声に従つた時しか使えない。

どうしようもなく情けない男でした」

「しかし、ある出会いを境に、彼は変わり出しました。

他人と触れ合い、時に笑い、時に泣き、様々な人の中に宿る『心の音楽』を知りました。

彼は自分だけの世界から飛び出し、人の中に流れる『心の音楽』を、悪いファンガイアから守りたいと、強く願うようになりました」

「そんな折、彼はある女性と出会いました。

その女性は、彼と同じく引つ込み思案ながらも、綺麗な音楽を持つ女性でした。

二人は互いに惹かれ合い、やがて恋に落ちました」

「しかしその幸せは、彼の父親違いの兄が現れた頃から崩れ出しました。

その女性はファンガイアの女王。つまり彼の敵だったので。

そして、彼の兄もまた、ファンガイアの王であり、女王は彼の兄と結ばれる運命にありました。

二人の兄弟の絆は、同じ女性を好きになったことで、醜く歪んでいききました」

「やがて兄弟は互いにぶつかり合いました。人間を守る者と、人間を搾取する者として。

同じ女性を好きになった恋敵同士として。宿命の鎖は二人を引き寄せ、戦いはもはや避けられませんでした。

戦いでしか、人間の未来と女性への愛を勝ち取れないまでに、二人の男と一人の女の関係性は狂っていたのです」

「そして運命は、二人の男に相応しい罰を与えました」

「二人を止めようとした女性は、兄弟の戦いに巻き込まれ、命を落としたのです」

「弟の絶望は計り知れませんでした。

直線的でないにしろ、女性が死ぬ発端となったのは間違いなく彼でした。

女性と出会いさえしなければ、女性は兄との未来を歩めていたのですから」

「彼は自らの力で過去へ渡り、自分の存在を消し去ろうとしました。しかし彼は、そこで物心つく前に死んだ、偉大な父親と、大切な友人の母に出会います。」

大切な友人の母は言いました。『彼女はきつと、あんと出会ったことを後悔していない』と。

偉大な父は言いました。『彼女を生かすためには、お前が強く生きるしかない』と」

「彼は再び立ち上がりました。彼女を心の中で生かすために、彼女のような人を、もう二度と生み出さないために」

「そして遂に、運命の鎖を解き放った彼は、兄との関係に決着をつけ、兄弟はファンガイアと人間の共存を成し遂げました。自分の世界に閉じこもっていた頃とは違う、大切な仲間と共に」

「ただ、彼は今でも思うことがあります。

彼女が自分と関わらなければ、自分と出会っていないければ、彼女は幸せになれたのではないかと。

どうしても 考えずにはいられないのです」

「そうして、彼は今も、罰を受け続けています。

正しさと過ちの狭間で、一生答えを探し続けるという罰を」

「そういつ、昔話だ」

顔を上げ、“どうしようもなく情けなかった男”は夕日を仰ぐ。

シヤナはただ呆然と、奏夜の話聞いていた。

「今の話……って」

「多分、お前のご想像の通りだ」

奏夜の浮かべた微笑は、今までのどれよりも儂く、寂しい笑みだった。

「お前らは、俺達とは違う」

それは、“そうであって欲しい”という願いにも似ていた。

「だからまだ、いくらでもやり直せる。シヤナ。お前も悔いだけは残すな。最後の最後まで、悠二を好きでいる」

強く言い切り、奏夜はシヤナに背を向け、公園から出ようとする。

(……ダメだ)



このまま、奏夜を行かせてはいけない。

シヤナは、直感的に思った。

「奏夜」

小さく、シヤナが呟く。

「……ありがとう」

「ん、気にすんな」

「それから……ごめんね」

あんな話を、させてしまった。

「……それも、気にすんな。あれは俺の問題だ」

感情の読めない口調を最後に、奏夜は公園から姿を消した。

その後ろ姿に、シャナは愛染兄妹の時とは違う、奏夜の本当の悲しみを見た気がした。

「……なんであの話しちまったかなあ」

誰に問うでもなく、奏夜はぼやく。

意図的に避けてきた話題、だったのは間違いない。

名護達でさえも、滅多に口にしない奏夜の傷。

だが今日、奏夜は何故か、自らあの話を語った。

恋愛でどんなことがあっても、俺よりマシだと告げられたからだろうか？

「……無いな」

そこまで被害妄想は激しくない。

では結局……。

「あ、紅先生！」

考えを巡らせていた奏夜を呼び止める声。

見ると、前方から見知った人が走ってきた。

「千草さん？」

息を切らしながら、悠二の母、坂井千草は、彼女にしては珍しく、何か焦っているようだった。

「すみません、この辺りでシャナちゃんを見かけませんでしたか！？」

その剣幕に驚きつつも、奏夜は千草の目的を大体理解した。

「ああ、その公園にいましたよ」

「本当ですか！」

千草の表情に安堵が混じった。

もしかして、歩きでずっとシャナを探していたのか。

本当に大した人だ。と感心する。

「一応俺がいくらか言っておきましたけど、千草さんからも何か慰めてあげてください。男の俺じゃ、伝わらないこともありますから」

「はい。わざわざありがとうございます」

丁寧な礼をして、千草は足早に公園へと走っていく。

あの人がいれば、シャナも大丈夫だろう。

俺の滑稽な昔話より、ずっと温かい言葉を掛けてくれるはずだ。

「俺は、シャナになんて声をかけたら良かったのかな」

もう一度、沈みかけた夕日を仰ぐ。

「深央　　キミならどう思う？」

どこからも、答えは返ってこなかった。

投げられた輪が、くまのぬいぐるみに嵌る。

「はい当たり前い〜！」

輪投げ屋のオヤジが挑戦者

名護にくまのぬいぐるみを手渡す。

「わあー、お父さんありがとう！」

「おー、さすががつすね、名護さん」

「俺らじゃどうやっても出来ませんよ」

「ポイントは手首のひねり具合だ。慣れれば、田中君と佐藤君も出来るようになる」

ゲットした景品を由利に渡しつつ、名護は田中と佐藤に、輪投げのコツを伝授していた。

「マージョリーさんは、お祭りとかって行ったことあるの？」

「メグミの言う祭りの定義によるけど、外国のパレードみたいなやつは見たことあるわ」

「お前さんの場合、酒さえありゃどこでもパレードだがな、ヒヤハハハ！」

恵の隣、マージョリーが「お黙り」とマルコシアスをぶっ叩くというお馴染みのやり取りを繰り返していた。

「でもラッキーだったなあ。偶然名護さん達に会えて、しかも特等席で花火を見れるなんてさ」

思わぬ幸運に歓喜する田中、佐藤も同じく嬉しそうだが、一応礼儀として、名護に尋ねる。

「でも良かったんですか？　　せっかくの家族水入らずだったのに」

「ああ、気にすることはない。せっかくの祭りなんだ。人数が多い方が楽しいだろう」

「栄太お兄ちゃんも、啓作お兄ちゃんも、マージョリーお姉ちゃんも、みんな花火見ようよ！」

由利の無邪気に楽しむ様は、5人の空気を和ませる。

佐藤と田中とじゃれあう由利を見ながら、マージョリーは感心しているのか呆れているのか、微妙な口調で、

「ガキはいつも一直線ね」

「ふふ、でもいいことじゃないかしら」

「……そーかもね」

私と違って。とは付け加えなかった。

「ねえメグミ」

「なに？」

「ソウヤやケイスケは、この街を守ってるのよね」

「そうよ。もう何年もね」

「私達が出てった後も？」

「えっ？」



虚を突かれた恵に、マージョリーは簡単に伝えた。

以前から、調律師を生業とするフレームヘイズが来た時、この街を出ると決めていたこと。

その調律師『儀装の駆り手』カムシンが、数日前に到着したこと。

佐藤と田中に付き合い、ミサゴ祭りに来たのも、最後の思い出作りのつもりだということ。

「そんな……まだもう少しくらいは」

「私達は、あんまり一所に止まらない方がいいのよ」

「俺達の周りにゃ、否応無しに面倒事が飛び込んでくっからなあ」

「そっか」

全てを聞いた恵は、残念そうに顔を伏せる。

「でも、何でその話を私にしたの？」

「……あー」

一転して言いづらそうに、マージョリーは頬を掻いた。

その様子から、恵は適当な当たりをつける。

「啓作さんと栄太くんのこと？」

「……」

沈黙。つまり肯定だ。

自分達がいなくなっても、“徒”はいる。

通常、一度襲った街を、もう一度“徒”が襲うことは滅多にない。

だがこの街は、無害だったラミーを含め、三回の襲撃を受けている。

もう一度が起らない、という保障は無かった。

「あいつらは私に着いて行きたい、なんて言っただけだね」

そればかりは、どうやっても無理だ。

マージョリーは苦笑混じりに、恵を見る。

「だから、今のうちに、頼んでおこうかなって思ったの」

自分がいなくなった後も、二人を守ってほしいと。

マージョリーの想いを汲み取り、恵は強く頷く。

「うん、わかった。名護くんにも言っておくし、私も、出来る限りのことはする。約束するわ」

「ありがとう」

短い礼には、彼女の最大限の感謝が込められていた。

「姐さん、置いてっちゃいますよー！」

「恵さんも早く早くー！」

「ほら、呼んでるわよ。行きましょ」

「まったく、あいつらはもっと落ち着いて回れないのかしらね」

「ヒッヒッ！ お前さんの口から“落ち着き”なんて言葉が出るとは思わなかブッー！」

「お黙り」

普段より気合いの入った拳をマルコシアスに叩き込み、マーシヨリと恵は、先に行く四人と共に、雑踏へと紛れていった。

川沿いに並ぶ出店の一角。

怪物二人が経営するかき氷屋にて。

「おっす、ラモン、力。儲かってるか？」

「お。来たね、お兄ちゃん！」

「ありゃ？ 珍しいね、静香お姉ちゃんも一緒か」

「ひさし、ぶり」

「うん、久しぶり。ラモンくん、力くん」

注文受け付けのラモンと、奥で氷を削る力が、奏夜と静香を出迎えた。

「お前らは気付けば店出してるよなあ」

「うん。嶋さんの知り合いが、人手が足りなくて困ってたみたいだね。半分は手伝いみたいなものかな」

「お祭りは回らなくていいの？　これからみんなで、花火見るつもりなんだけど」

「あはは、ありがと。でも、僕らは取り敢えず、祭りの雰囲気だけ楽しめればいいから」

「おかねで、かえないたのしみ」

なかなか情緒深い楽しみ方をする二人だった。

まあ、よくよく考えれば1000年近く生きてる連中だ。

祭りの楽しみは味わい尽くしてるのかも知れない。

「ま、そんなことより、せっかくだからかき氷買ってよ。サービスするからさ」

「んじゃ俺は、ブルーハワイ」

「私はレモンかな」

「はいはい。カ、ブルーハワイとレモンを一つずつ!」

「いえす、さー」

力の怪力により、氷がどんどん削られていくのを見ながら、ラモンは「それにしても」とニヤついた笑みを浮かべる。

「お兄ちゃんも隅に置けないね。祭りの日に女の子とデートなんてさ」

奏夜は額に手を当てる。

キバットやキバーラに続きお前もか。

「だからよお、そついつんじじゃないって」

「うんうん、恋仲を誤魔化す時は、みんなそつ言つよね」

「もう一回彫像に封印してやるつかコラ。静香からも何か言ってる」

「ふえっ！？ あ、えっと……」

急に話を振られ、慌てた様子で赤面した顔を隠そうとする静香。

「御馳走様」

「おしあわせに」

「だから違つって」

笑いをこらえるラモンと、変わらず無表情な力から、かき氷を受け取る。

そこで奏夜は、ふと尋ねる。

「あれ？　　そういや次狼は？」

「ああ、次狼は別行動だよ。太鼓叩きの手伝い」

「太鼓？　　あいつの場合、使える楽器はギターだろ」

「お兄ちゃん、祭りの日くらい、ギリギリなネタは控えようね。祭りの企画で、太鼓体験みたいなこともやってみたいだから、今



頃、誰かに太鼓教えてるんじゃないかな」

四人の声は、祭り囃子と人々のざわめきに溶けていく。

「おい、その坊主」

「はい？」

呼び止められ、悠二とその隣りを歩く吉田は足を止めた。

見ると、黒い甚平羽織と袴を纏う男　次狼が、祭りの大太鼓の前に立っていた。

鋭い風貌に、木製のばちを持った姿は、『粹』の文字が良く似合う。

「一度叩いてみないか？　今なら空いてるぞ」

「えーっと……」

どうしたものか。

せつかくの祭りなのだから、勢いに乗ってみるのもやぶさかではない。

だが、今は一人ではなく、吉田もいるのだ。自分だけが楽しんでも意味はない。

確認のつもりで、吉田を横目で見ると、彼女は笑って、

「私のことなら、気にしないでください」

「でも……いいの？」

「ほら、せつかくのお祭りなんですから」

吉田に促され、結局悠二は太鼓の前に立つ。

「ん？ お前、どっかで見たと思ったら、奏夜と一緒にいた小僧か」

「えっ？」

思わぬ名前が飛び出し、次狼を見上げる悠二。

「先生を知ってるんですか？」

「……ああ、そうか。お前さんと、この姿で会うのは初めてだったな」

吉田に聞こえていないことを確認しつつ、次狼は声を落とす。

「俺の名は次狼。蒼い狼の剣……って言ってわかるか？」

「蒼い狼……あっ！」

奏夜 キバの使っていた剣、ガルルセイバーが脳裏をよぎる。

「……普段は、そういう姿にもなれるんですね」

「ああ。まあ、これも本当の姿じゃないんだがな。そっちは彼女が何かか？」

「そ、そういうわけじゃ、ないんですけど」

わたわたと焦る悠二に苦笑いしながら、次狼はばちを手渡す。

「よし、もう少し腰を落として、ばちを大きく振り上げろ！」

「？ な、なんか一気に気合い入りましたね……」

「ダメだダメだ、もっと世界中の憂いを全て晴らす気で叩け！」

「縁日にしちゃレベル高くないですか!？」

「音撃欧・一撃怒涛!！」

「必殺技!？」

余計なスイッチが入ったらしい次狼に振り回されながらも、悠二の叩く太鼓の音は、吉田の耳にも届いた。

悠二の様子が何処かおかしく、つい吉田は笑ってしまう。

一緒にいるという充実感、それが与えてくれる笑顔。

紛れもなく、それは吉田の望んだ、幸せな日常の証明だった。

(これが、“あんな世界”だなんて……信じられない)

袂にある片眼鏡『ジエタトウーラ』を握りしめる。

(早く会って、これを返そう)

動くきつかけをくれた感謝と、別れの言葉を添えて。

その片眼鏡の持ち主、カムシンは花火の見物人に紛れ、堤防の土手に座っていた。

「ああ、これを見ながらの調律実行というのも、また乙なものですね」

「この辺りじゃ大きい花火大会だからな。僕の知り合いも花火を出している」

その傍らには 何故か太牙が座っていた。

彼のキャラに似合わない綿アメ（ちなみに二つ。甘党なのだろう）を持ち、カムシンと同じく河川敷を眺めている。

「ああ。そろそろ始まるようですが、待ち合わせている方々のところへ行かなくても？」

「予想以上に混雑しててな。花火が始まれば、人も多少はけるだろうから、しばらくはここで待つよ。1つどうだ？」

「ああ。どうも」

薦められた綿アメを受け取り、一口かじるカムシン。

その様子は、年相応の少年だ。

「そう言えば、一美ちゃんとの約束は大丈夫なのか？」

「先に調律を済ませるつもりです。まだ時間はありますからね」

カムシンの左腕津の飾り紐から、べへモットの声が聞こえてきた。

「ふむ、おじょうちゃんは、選んだことで、幸せを得られたじゃろうか」

「ああ、そうですね。そうであってほしい。彼女がどんな選択をしたにせよ、結果的に、幸せであって欲しい……」

「……？」

カムシンの言葉を、太牙は意外に思った。

今の口調からは、使命や常識ではなく、心からそう願っているのが感じ取れたからだ。

(感性が全て、枯れ果てたわけではないんだな)

そんな皮肉を、太牙が心の中で思ったところで、スピーカーから花火開始の一報が入る。

「ああ、では我々も、始めますか」

「ふむ、そうじゃのう。さぞかし綺麗な、輝きの元に、調和が戻るじゃろうて」

カムシンは立ってフードを下ろし、太牙に綿アメを預ける。

「ここでやるのか？ 人目につくぞ」

「ご安心を。周りには、大道芸か何かにしが見えませんよ」

野晒しにしてあった鉄棒を振り上げ、左手を胸の前に出す。

「起動」

カムシンの掌に、先日吉田から写し取った、調和の風景が、炎となつて灯る。



「自在式、カデシユの血脈を形成」

べへモットの声に合わせ、御崎市に付けられたマーキングに、複雑な文字列が刻まれた光が灯った。

「展開」

調和の炎が、鉄棒に絡みつき、紋様が移り込んでいく。

「おお……」

高ランクの技術に、周囲の人間のみならず、魔術の心得を持つ太牙も、感嘆の声を挙げる。

「自在式、カデシユの血流に同調」

この街の“本来あるべき姿”のイメージが、歪んだ箇所を矯正していく。

失われ、途切れたものを、温かな力が癒やしていった。

「調律、完了」

「自在式、自己崩壊させる」

歪みは正され、ここに調律が成される。

はずだった。

夜空を照らし、煌々と輝いた花火が、歪んだ。

「えっ………?」

千草と共に、祭りに来ていたシャナは、有り得ない方向に光を放ち、

ねじ曲がる花火を見た。

「調律の、失敗？」

「なにが……？」

「起こって……ない、のか？」

歪んだ花火を人々は気にも止めない。

その異様な状況に、佐藤と田中は息を呑む。

「あんたたち、まだ、一仕事あるみたいよ……！」

「ヒヤーツ、ハーツ……！　　まったく、なんてえトコだ、この世ってのはよお……！」

「“徒”め……また、この街を荒らそうというのか……！」

マージョリーとマルコシアスの狂言と、名護の怒声がかみ合った。

「『儀装の駆り手』、あの花火は一体どういうことだ!？」

「奴、ですね……外界宿で何度となく警告を受けておきながら、迂闊でした」

「気配を全く感じなかったし。この歪みも、いったい何を狙っておるのか……」

カムシンとベヘモットの苦々しい後悔。

そこから太牙は、事態がいかにか切迫しているのかを知らされた。

「どつやら、無粋な連中がいるようだな……」

「なになに!?!? 一体何がどうなってるの!?!?」

「はなび、ぐにゃぐにゃ」

合流した次狼を含むアームズモンスターズの中から、祭りの余韻が霧散していく。

「こんな、こんなことって……」

「……上等じゃねえか」

言葉を失う静香の横で、奏夜は口元を怒りで吊り上げる。

「おばあちゃんが言っていた……祭りの邪魔をするヤツは万死に値するってな……！」

「くそっ！　　そんな……また、またなのか!？」

周りとは明らかに違う悠二の反応に、吉田は違和感を覚えた。

（ “またなのか” ）

この異常な景色を見て、何故そんな言葉が出る？

そんなまるで、この異常を“知っている”かのように……。

チャリン。

袂の中で、片眼鏡が揺れた。

日常を塗り潰す混沌の中、震えながら、吉田は片眼鏡を手取る。

『良かれ』と想って。

自分が大好きな少年が、確かな存在だと、信じられるように。

今までの楽しかった時間が、儚いユメでないと証明する為に。

そして、彼女は見た。

非常なる、現実を。

次回、仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD！

「いやああああ　　！！！」

「知られたんだな、あいつに」

「いーざ征かん！　　心ときめく実一っ 駿場へ！！！」

「好きでいることに、理由も境遇も関係ないよ」

「なんで、彼女を巻き込んだんだ」

「ここまで来ちまったんだ。あとのことを決めるのは吉田だろう」

【第十九話・トラジコメディー／絶望を振り切れ】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！



第十八話・彎曲／非情なる現実・Bパート（後書き）

なっがーい！！

しかし七巻の話は更に面倒そうです……いやはや困りましたねこれは（苦笑い）

・教授書き辛い……あのマッドな感じが出せない……。

・奏夜と静香のやり取り。書いてる途中、こっちが恥ずかしくなりました（じゃあ書くな）。  
ラブコメパートの技術を上達させたいです……。

・奏夜の過去語り。

彼唯一にして最大のトラウマです。

ちなみに奏夜は、渡とは違い“他人に興味がない”から引きこもってました。

その辺りの話も、いつか書きたいです。

・今回は次狼さんで遊びました。だが後悔はしていない（笑）

次回更新は分離的に、遅れるかもしれませんが、またよろしく願います。

では（＾Ｏ＾）

第十九話・トラジコメディー／絶望を振り切れ・Aパート（前書き）

「今回のキバツトリビアは……え、えっと、四大悲劇『ハムレット』  
で有名なイギリスの劇作家、ウィリアム・シェイクスピアの言葉に  
『過ぎてかえらぬ不幸をくやむのは、更に不幸を招く近道だ』って  
いうのがあります。」

だから、何て言えばいいのかな……重い不幸は、確かに人の足を竦  
ませてしまうけど、ずっと立ち止まってたら、何も解決しない。

み、みんなも、不幸なことに出会ったら、それを悔やみ過ぎないで。  
……例えどれだけ不幸でも、それは何もしなかったことの言い訳に  
はならないからね」

とある不幸体質の少年

「もうちょっとハキハキ喋れよ……」

紅奏夜

第十九話・トラジコメディー／絶望を振り切れ・Aパート

歪んだ花火と、それになんら反応しない人々。

怪現象 非日常からの侵略。

温かな日常への幻想を捨て、奏夜は非日常の自分  キバとしての  
自分へと、スイッチを切り替える。

「次狼」

「わかっている。もう呼んだ」

次狼の二つ返事と共に、周囲に爆風が巻き起こる。

ギャオオオツ！！

上空を仰げば、ビルの体躯を持つ紫色のドラゴン

キャツスルド

ランが飛翔していた。

奏夜とアームズモンスターズ、非日常との付き合いから、違和感を多少感じ取れる静香を除き、普通の人間には視認出来ない。

「静香。ドランに乗って、母さんのいる洞穴に避難しとけ」

「えっ？」

奏夜は真剣なトーンで告げる。

「あの花火を見りゃ分かるだろ。多分また、この街は戦場になる。程度によるが、正直、お前を守りながら戦える自信は無い」

「……足手まといっってこと？」

「あほ。心配してんだよ」

静香の額を指先で弾く。

「痛あつ!?!」

「ほら、さっさとドラムの中に入れ。」

お前にはちゃんと役割があるんだからよ」

「や、役割？」

顔をさする静香に、奏夜はふっと相好を崩す。

「『マル・ダムール』での花火。ちゃんと計画立てとけ」

これから戦いに赴くとは思えない余裕。

奏夜は、今日という日を、戦いだけで塗り潰すつもりはさらさら無い。  
い。

先の言い回しは、静香の身を案じるばかりではなく、ちゃんと彼女のいる日常に帰ってくるという、決意でもあった。

それを理解した静香は、強く頷き、しかし何処か不安そうに、

「うん、わかった。奏夜も怪我しないよね？」

「善処するよ」

くしゃりと静香の髪を撫でて、次狼達に向き直る。

「静香をドランに入れたら、すぐ恵さん達を迎えに行け。  
お前達はみんなを母さんのとくに送ったら、ドランプリズンで待機  
してろ」

「仰せのままに」

「いつでも呼んで！」

「気を、つけて」

静香と次狼達に見送られながら、奏夜は河川敷を駆け出す。

人混みを掻き分け、出店の景色は次々と後方に流れていく。

と、奏夜は目の端に、赤い浴衣に身を包んだ、小柄な影を捉えた。

「シャナ！」

探し人を見つけ、下駄で器用に急ブレーキをかける。

「奏夜！」

少女　シャナも動きを止め、こちらに歩み寄ってくる。

「オイ、どうなってんだこれ？」

「解らない。最初は調律の失敗かと思ったんだけど……」

「調律、ってこの前言った、歪みを直す作業のことだよな。それを使うヤツってのは、未熟な連中が多いのか？」

シャナに代わり、彼女の内に宿る紅世の王、アラストールが遠雷の如き声を、ペンダントから発する。

「いや、調律師とは通常、使命感の塊となるまで戦い抜いた、熟練のフレームヘイズが請け負う。加えて、この地へ来た調律師は、最古のフレームヘイズと名高い存在だ」

「失敗は考えにくいってわけか。じゃあやっぱ、“徒”だな」

「恐らくはね。ファンガイアに動きは無いの？」

「いや、今のところ、その兆候は無い」

ブラッディローズの音色が、頭の中で鳴っていないのが良い証拠だ。

「いずれにせよ、判断材料が少な過ぎる。調律師 『儀装の駆り手』の下へ向かい、現状を把握すべきであろうな」

「だな」

何処かにいる名護とマジヨリーも、きつとそう考えるだろうから、向こうで合流も可能だろう。

「後は悠二も拾ってきた方がいいだろうな……ってシヤナ。我が儘



は聞かんぞ」

悠二、という単語に顔を曇らせたシヤナを、奏夜がたしなめる。

悠二の洞察力と、彼の中に眠る宝具『零時迷子』の超感覚は役に立つ。

戦いへの骨組みとして、外すわけにはいかない。

「悠二の居場所、わかるか？」

「大体でいいなら」

シヤナも私情を抑え込み、奏夜と共に、悠二の気配を追いかけ始めた。

歪んだ花火が、嘲るように、周囲を照らしていた。

滑稽　　そう表現するのになんの不足があるだろう。

「あ、あ……」

「吉田、さん？」

非日常は、日常を食い潰す。

少女の儂いユメなど、歯牙にもかけない。

（どうして、そんな顔を）

普段の愛しみに満ちた笑顔はかき消え、吉田の瞳には暗い感情が揺れていた。

（どうして、なぜ、そんな顔で、僕を）

“本当はわかっている”にも関わらず、悠二は認めたくなかった。

吉田が自分をあんな風に見る理由など、他に無いというのに。

「……よ」

「っ  
」

一歩、吉田が後ずさる。

非日常下での洞察力 が働いてしまったのは、幸か不幸か。

悠二は吉田が何かを握っているのに気が付いた。

見事な意匠が成された片眼鏡。

（ “宝具” だ ）

直感的に片眼鏡『ジエタトウーラ』の正体を見抜く悠二。

だが、この際それが宝具であるか否かはどうでもいい。

それが、吉田に何をもたらしたかだ。

(眼、鏡……“眼鏡”?)

単純な推測が、次々と組み上がっていく。

眼鏡。見る。そのガラスを隔てて。宝具。“紅世”から生まれしモノ。

今、彼女は何を見た？

自分だ。

なら彼女は、自分に何を見た？

それ以前に、自分は何だ？

(“トーチ”)

喰われた人間の形をした、陽炎。

既に死した人間の、残り滓。

「吉田さん」

「あ、ああ」

吉田の震えが加速する。

瞳は潤み、絶望へと彩られていく。

二人の間は、歩幅にして僅か二歩。

だが今や、その距離はあまりに遠く感じた。

それでも悠二は、凍りついた時の中で、吉田へと手を伸ばそうとする。

「吉」

「いやあああああああー！ー！ー！」

拒絶。

この世の、あまりに残酷な現実を知り、吉田は逃げ出した。

「田、さん……」

後には、呆然と立ち尽くす悠二が取り残された。

伸ばした手は空を掴み、そこにあつた大切なものの喪失を、否応無しに伝えてくる。

“トーチ”であることを、彼女に知られた。

彼女が紅世を知るに至つた経緯も、理由も分からなかったが、それだけは歴然とした事実。

空洞化した胸中、ただ悠二は、吉田からの拒絶に打ちのめされていた。

「おお、いたいた」

「悠二！」

と、吉田とほぼ入れ違いになる形で、よく聞き知った声が、悠二の耳を突く。

「……シャナ、先生」

「まったく、探したぞ」

「“これ”、分かるわね」

シャナは私情も何もかもを押し込み、ただ使命のみを告げる。

悠二もまた、単純な事実として答えを返す。

「う……うん」

「攻撃だと思っ？」

彼の土壇場での洞察力に期待しながら、シヤナは答えを待つ。

自分と悠二の間にある、信頼関係から来る言葉だった。

しかし、悠二は口を開かない。

「悠、二？」

「おい、ちゃんと話聞いてんのか？」

シヤナのみならず、奏夜も怪訝そうに尋ねる。

悠二は行動も熱意もなく、ただ祭りの雑踏に意識を向けていた。

その様子と、ここにいるはずの人間がいないことから、奏夜は適当なアタリを付ける。

「悠二、吉田はどうした？」



『！！！』

悠二とシャナが、同時に身を強ばらせた。

しかし仕草は同じでも、胸にくる痛みは別種だった。

「知られたんだな、あいつに」

「……はい」

肯定する悠二に、奏夜は溜め息をつきかけた。

（お前は何だっっていうつも、戦いの最中に戦い以外の厄介事を……）

白けたように視線を逸らす奏夜、片や、悠二は覚束無い足取りで、半歩踏み出そうとする。

「追いかけなきゃ」

自分が怖がらせてしまった少女を。

「追いかけて、説明しないと」

「オイ、気持ちは分かるが今は」

「“そんなどうでもいいこと”、放つときなさいよ!」

奏夜と悠二の声を、無理やりシヤナは遮った。

怒りしか無いように思えた。

しかし、奏夜は裏打ちされた想いを感じ取る。

悠二も同様だったろう。

吉田一美なんかよりも、私と一緒に。

その想いに奏夜はやるせなさを、悠二は何故か、猛烈な怒りを覚え

た。

「シャナー!」

「あ、っ」

悠一の怒号に、シャナは身じろぎ、奏夜はそろそろ止めるべきか、  
と思いつつも、静観するのみだった。

「なんでそんな」

「っ、っ、うるさい!……　うるさいうるさいうるさいうるさいうるさい!……!」

割り込むようにシャナは怒鳴る。

「なんで今、今みたいなときに、そんなこと言うの!?!」

悲しみと怒りを入り混ぜて、シャナは叫んだ。

「シャ　　!」

「うそつき”……!”」

「……」

直接ぶつけられた感情に気圧され、悠二は今度こそ、完全に思考が停止したようだった。

声の主であるシャナも、強く歯を噛んで俯く。

「……空気読めねえな。お前はよ」

奏夜が髪を掻き上げつつ、悠二の後方を指差した。

「後でいくらでも説得できるとは思いますが……ま、今吉田を追つと言  
うなら止めない」

「先、生」

「ほら、さっさと行け。ただ、優先順位くらいは頭の中に入れとけよ」

俯いたシヤナを見て、しかし葛藤を押さえ込み、悠二は告げる。

「……ごめん、なさい」

ただ一言、謝罪を残し、悠二は人混みの中に消えていった。

シヤナが何事か口にした気がしたが、それは人々の喧騒に紛れてしまふ。

「大丈夫か？」

「……うん、大丈夫」

奏夜の気遣いが、無性に嬉しかった。

「あのバカは放つといってもいつか来るだろ。俺達は先に、その『儀装の駆り手』とか言うヤツのとこに行こう」

「うむ。幸いそれほど遠くはない。直ぐに向かおうとしよう」

「うん」

奏夜に続く形で、シャナは髪を揺らしながら走り出す。

「大丈夫。ちょっと前までと 同じ」

気配の端を辿り、二人が着いた先は御崎大橋だった。

そこには既に、マージョリー、名護、カムシンの三人が揃っていた。

「遅いわよ」

「ヒーツヒツヒ、俺達の方も、来て一分経ってねえだろブツ」

普段のやり取りは、状況が状況なので全員スルーした。

「奏夜君」

「どうも、名護さん。キャツスルドランは行きましたか？」

「ああ、助かったぞ。恵と由利だけでなく、嶋さんとマスターも避難済みだ。礼を言おう」

「いえいえ、恐悦至極。……で」

名護から、隣に立つ小柄な影　カムシンに目を移す。

「あんたが『儀装の駆り手』か」

「ああ、お初に御目にかかります。もう一人の王、『キバ』。御兄弟より、お話は伺っておりました」

「は？　御兄弟？」

聞き捨てならない単語に、奏夜が顔をしかめると、

「おい、『儀装の駆り手』。近くのマーキング位置を見てきたが、やはり僕では詳しい分析が」

背後から聞こえてきた懐かしい、しかし聞き知った声。

振り返れば、そこには、白いジャケットに青いジーンズを着た姿。

「兄さん!？」

「太牙!？」

「奏夜、それに啓介！」

奏夜と名護を見た太牙も、再会への喜びを見せる。

「久しぶりだな。元気そうぞ何よりだ」

「兄さんこそ久しぶり！」



「帰ってきてたとは聞いてたが、また妙なところで会っつな。太牙」

「ああ、僕もそう思うよ。啓介」

フレンドリーな会話を展開する三人。

吃驚したのはフレイムヘイズ二人だ。

「兄さん？」

「あん？ 兄貴なんていたのかよ？」

マージョリーとマルコシアスが、現れた青年を見ながら、驚愕を刻んだ声を発す。

さすがのシャナも、目を見開いていた。

「奏夜の、兄弟？」

「ああ、シヤナやマージョリーには話してなかったっけ。兄さん、電話で話したろう。俺の仲間」

シヤナとマージョリーに向け、太牙は頭を下げる。

「『炎髪灼眼の討ち手』と『弔詞の詠み手』だな。奏夜から話は聞いている。チエックメイトフォーのキング、登太牙だ」

似てない。

シヤナとマージョリーは素直にそう思った。

礼儀正しいなんて言葉とは無縁の奏夜と、こんな礼節をわきまえた人間が兄弟なわけがない。

「なんかすげー失礼なこと考えなかったか？」

奏夜は鋭かった。無駄に。

「ああ、そろそろ話を進めても？」

場の空気をまるで読まないカムシンだったが、今回ばかりは、その判断は正しいだろう。

奏夜絡みの話は、どうやっても、会話の本筋から反れる。

「ああ、頼むよ。一体何がどうなってるんだ？」

奏夜の言葉を皮切りに、六人の話は始まる。

「つまり、纏めるとこういうことか」

粗方の事情を聞き終え、名護が現状を整理していく。

現在行っている“異常”は、カムシンの作り出した、調律の自在式の支配を、ある“紅世の王”に奪われたことが原因である。

“探耽求究”ダンタリオン。通り名は“教授”。

彼は紅世とこの世の双方に関心を持ち、それらの有り様を解き明か

す、研究者のような活動をする強力な王。

知識欲に忠実かつ、気分屋な彼の行動は、熟達したフレイムヘイズでも読みづらい。

端的に表現すれば、紅世の王屈指の変人だ。

事実、カムシンやマージョリーといった歴戦の猛者までも、今回のダンタリオンの『目的』は想像がつかなかった。

「ふむ。なるほどね……なあカムシン。参考までに聞くが、調律のコントロールってのは、そのマッド博士が目をつけるほどのモンなのか？」

「正直な話、あまり価値があるとは言えませんね」

「ふつむ。こと教授の知識欲を満たす、という点で言えば、調律は既に確立し尽くされた自在式じゃしもの」

カムシンが短く答え、ベヘモットが補足する。

事件の糸口は、そう簡単に見つからないようだ。

「だが、やはり妙だな」

そこへ太牙が口を挟む。

「いずれにせよ、高度な自在式であるのは確かだ。なら、使用者の気配がまるでない、というのは可笑しいだろう」

「あー、確かにキングの兄ちゃんの言う通りだな。

こーやって自在法は動いてんのに、あのトンチキ発明王の気配を気ほども感じねえ」

「そうね。あの“愛染の兄妹”でも、自在法の起動後には気配を現してたのに」

経験と照らし合わせ、マジヨリーとマルコシアスも唸る。

「とにかく、ここで考えてても埒があかねーぜ。

その調律とやらの自在式を、片っ端からぶっ壊していこう」

「そうね。調律ならやり直しが効くし、ぐずぐずしてたら、何かしらの手が打たれてしまいかねないわ」

奏夜の単純な提案に、シヤナも同意する。

「ああ、できればいいのですが」

だが、カムシンは同意しかねるという風に、重々しい仕草で、顎に手を当てる。

「はあ？ その自在式はあんたたちが設置したんでしょ？」

「僕に破壊は無理だったが、仕掛け人であるお前が、破壊できないということはないだろう」

太牙とマージョリーの抗議にも、カムシンは思案する態度を崩さない。

「ああ、いえ、単純な推測です。あの“探耽求究”が、自らの仕掛けの鍵とした血印に、易々と手出しをさせるとは思えませんから」

「確かに。聞いた限りでは、かなり狡猾なヤツのようだからな。罠を仕掛けている可能性は高い」

名護も慎重に、これからの行動を見極めていく。

「じゃあさ、マッド博士の自在法の範囲から、発生源　中心を推測して辺りを探ってみるってのはどーよ？  
何か俺達がアクションを起こしゃ、向こうもリアクション取るだろ」

「まー当面はそんなトコか。隠れてる奴を炙り出してブチ殺す。基本中の基本だ。ヒツヒ」

マルコシアスは安直に同意したが、全員もとりあえず、それが最善策と取ったらしく、太牙がカムシンに聞いた。

「自在式の中心地はわかっているのか？　“儀装の駆り手”」

「ああ、感じていますよ。答えはごくごく単純です」

「ふむ。つまりは市街地の、人通りの多い駅前から大通り辺りじゃないな」

カムシンとベヘモットが言い終わるか言い終わらない内に、シヤナは紅蓮の翼をはためかせ、

「じゃあ、行く」

言い捨て、夜の帷へと舞い上がった。

「なに焦ってんのかしら、あいつ」

「そつとしいてやってくれ。シヤナも思春期真っ最中だからさ」

「いや思春期……ってああ、そつか。坊やと喧嘩でもしたの？」

「ご明察」

奏夜の適当なフォローを聞きながら、マージヨリーもグリモアに腰掛け、宙に浮かぶ。

「それじゃ、私たちも行きますか」

「そだな。あ、名護さんと兄さんは、念のため、別の場所調査してみて下さい。

こっちの頭数は、三人で十分ですんで」



「わかった、任せなさい。適度な時間で落ち合おうとしよう」

「よし、啓介と僕は市境を中心に当たろう。御崎市以外にも、被害があるのか否か、探りは入れるべきだ」

「ふむ。では我々も、マーキングしたカデシユの血印を探し、本当に妨害があるか、その動きで奴が僅かでも、尻尾を出すか試してみるところだろうかのう」

「ああ、結構、それでいきましょう」

各々方針を定め、成すべきことを果たすべく散っていく。

戦いの狼煙が、夜の闇に上がった。

「シャナー！　何か見えつかあ！？」

御崎市大通り。

爆音を轟かせながら、真紅の鉄馬・マシンキバーは走らせる。

来る途中、浴衣から着替え、普段の着崩したワイシャツとスーツに戻った奏夜は、自在式の中心地に向かっていた。

紅蓮の翼で飛翔するシャナが、上空から声を張り上げる。

「御崎駅！ 繭みたいなものが巻き付いてる！」

「マッド博士の気配は！」

「うっん、やっぱり“王”の気配は感じない！」

「あの妙な建造物が隠蔽しているようだ！」

「それなら！」

「うん！」

奏夜とシヤナ、二人の声が重なる。

「ぶっ壊すッ！」

「焼き払うッ！」

シヤナの双翼が、煌々と輝く軌跡を描き、コードや電気パイプが絡みつく奇妙な繭へ突っ込んでいく。

「奏夜あゝゝ！」

マシンキバーを駆る奏夜、そこへ金色のコウモリ、キバツトバツト三世が飛んでくる。

「探したぜえ！　　一体何がどうなってんだこりゃ？」

「話は後だ。あの繭を壊す、キバの鎧出してくれ！」

「づえ？　　いいのかよ、ここかなり人目につくぜ？」

「安心しろ。今回は大丈夫だ」

現在、御崎市には“平静の波”というものが発生している。

簡単に言えば、“そこにある異常を、それが普通だ”と強制的に納得させてしまう作用。

カムシンが言うには、誤作動を起こした調律の“歪みを正す”という特性が中途半端に生きた結果らしい。

「だから、キバへの変身も思う存分にできるってわけさ」

「なるほどねえ。よっしゃ、んじゃま、キバツて行くぜ！」

奏夜が翳した手を、飛び回るキバツトが力強く噛む。

「ガブツ！」

アクティブフォースが注入され、奏夜の頬にステンドグラスが浮かび上がる。

『変身!』

キバットベルトにキバットが止まり、奏夜に光の鎖が巻きつき、弾け飛ぶ。

夜の闇に、蝙蝠の仮面を輝かせ、キバへの変身が完了した。

「おい、あれ!」「蝙蝠、いや吸血鬼?」「違う、あれ仮面ライダーだ!」「マジで!」「風都以外にも居たのか!」「でもあれって都市伝説だろ!」「すげー、本物だ!」

ギャラリーの歓声が、バイクが切る風に乗って入ってくるものの、構いはしない。

また平静の波が来れば、キバの姿も常識に埋もれてしまうのだから。

「シャナ! 同時攻撃だ!」

「わかった!」

贄殿遮那の刀身に、紅蓮の炎が渦を巻き、キバはベルトからバツシヤーフエッスルを取り出す。

『バツシヤーマグナム!』

キバットが吹き鳴らす音色。呼び寄せられたバツシヤーマグナムを掴んだキバは、バツシヤーフォームへと変わる。

「ラモン、手加減なしでいくぞ!」

『りょうかいつ!』

『バツシヤーバイト!』

キバットが銃身の後部を噛み、魔皇力がチャージされる。

夜空に浮かぶ月が霧に覆われ、キバBFのテリトリーである半月へと変わった。

バイクを止め、繭に向けて照準を合わせる。

『いけえ！』

シヤナが生み出す凄まじい熱量の奔流が、キバBFがアクアファイ  
ルドから作り出した水球『バツシャーアクアトルネード』が、御崎  
市駅へと牙を剥く。

しかし、

「なっ！？」

「げっ！？」

急に、攻撃の道筋が反れた。

シヤナの火炎流は、天に向かって直角に立ち上り、キバBFの水球  
に至っては、進んでは戻り、進んでは戻りを繰り返している。

「くっ！」

「……いい攻撃だ。感動的だな。だが無意味だ」

『この状況でそのセリフ止めてくれます?』

ラモンのしょげた声を聞くに、余程自信のある一撃だったのだろう。

バツシャーアクアトルネードは、狙いを定めた敵をどこまでも追いかける、ホーミング攻撃。

しかし、その追尾能力はターゲットをロックできたに過ぎず、何らかの力に阻まれ、弾丸はいつたり来たりを繰り返している。

「これじゃ多分、次狼も力も効果ナシだな」

遠距離戦は無意味と悟り、一旦バツシャーフォームを解除するキバ。

「なら、直接突入して」

「だな」

「待て、キバ、シャ」



アラストールの警鐘を無視し、シヤナとキバはそれぞれ、繭に向かって特攻をかける。

が、

「っあ!？」

「っとお!？」

突然だった。

シヤナは双翼のコントロールを失い、アスファルトの地面を砕きながら落下。

キバは、マシンキバーの前輪があらぬ方向に向き、そのまま見事に横転した。

「く……しまった」

「どうした、迂闊だぞ」

アラストールの冷静な声がシャナを諭す。

「……なあキバット。マシンキバーに保証書って付いてたっけ」

「心配しなくても、新型プリ スミたいな問題はこのマシンにねえ  
「よ」

早よ立て、とキバットに促され、キバは気怠そうに、シャナの傍へ。

「俺達自身も、軌道を反らされる範囲内ってわけか」

「うん。いきなり翼が操れなくなった」

予想以上に堅牢な防御に立ち往生する二人。と、そこへようやく、  
グリモアに乗ったマジョリーが舞い降りた。

「見事な横転だったわね」

「言っとくが、車検にはちゃんと行ってるからな。」

で、お前の方はどうだ？」

「うーん、そうね……」

グリモアに手を添え、自在式を繰るマージョリー。

「とりあえず、こんなもんかしら」

「あいあいよー。弾は」

「あれ」

マルコシアスに答えるマージョリーが指差した先　ビルの避雷針が根元から折れ、群青の炎を噴きながら、彼女らの元に飛来する。

『バンベリーの街角へ』

『馬に乗って見に行こう』

『白馬に跨る奥方を』

『指には指輪、胸に鈴』

『弔詞の詠み手』の十八番『屠殺の即興詩』が紡がれ、避雷針に幾多の自在式が巻き付いていく。

『どこへ行くにも伴奏つき、よ！』

駅を指差したマージョリーに呼応し、群青に輝く避雷針が、閃光となって突撃する。

バツシャーアクアトルネードが阻まれた先へ、避雷針は突き進んでいく。

しかし、進む距離に比例して、避雷針に刻まれた自在式は剥がれ落ちていき、最後には弾かれてしまった。

「あーらら、あれだけ念入りに干渉への防御を施したってのに、半分もいかない内に解除されたか」

「こーりゃ、ちよいと厄介だな。我が技巧の自在師、マージョリー・ドー？」

さすがに行き詰まりの空気は否めない。

優れた自在師たるマジヨリーでどうにもならなければ、シヤナとキバなど論外だ。

「闇雲にやるだけじゃダメってことね」

「うむ……さすがは世に名だたる“探耽求究の自在式よ。色々と不審な点もあるが、正攻法で崩すのは難しかろう」

「かといって、こつちにあるカードじゃ、対抗策は練れそうにないぜ。

幻想殺しか赤い鉄碎牙でもあれば、話は別だけだよ」

キバの例えはともかくとして、確かに事態は深刻だった。

繭を忌々しげに睨みながら、全員が頭を抱えることになる。

そんな時だった。

《姉さん！》

「わっ!？」

「おっ」

マージョリーとマルコシアスしか聞こえない声が、二人の意識内に入ってくる。

「遅い!　なにグズグズしてたのよ」

傍目から見ると、独り言にしか聞こえない様子に、キバとシャナは怪訝そうな顔つきになる。

「マージョリー、誰と話してんだ?」

「こっちの協力者。ソウヤも知ってんでしょ」

「ちいっと離れた場所から、この自在式の観察頼んでんだよ、ヒッ  
ト」

「協力者……って、ああ。なるほど」

田中と佐藤のことか。

浴衣姿のマージョリーからして、祭りに来ていたのは明らかだった為、田中と佐藤が一緒にいるのは、別に可笑しくない話だった。

マージョリーは最初、通話先と揉めているらしかったが、すぐ的確な指示を与える。

「で、自在式はどうなってるの。表現できる範囲でいいから説明して」

シヤナとキバに向き直りつつ、マージョリーは人差し指を二人の額に添える。

マージョリー達にしか聞こえない会話を、二人にも聞かせる為のものだ。

《道路沿い、でしょうか。以前の“愛染の兄妹”の『ピニオン』みたいに、街のあちこち、所構わず、って状態じゃなくて……ほとんど道路だけに張り巡らされてます》

頭に響く声は、田中栄太のもの。

「……？ この声、どこかで……」

マージョリーと彼の関係を知っているキバはともかくとして、シヤナはそれを奇妙に思う。

「うーむ、やっぱり規模から見ても、トンチキ発明王が自分で直接、ドでさえ自在法をしかなきゃなんねえはずだがな」

「それって、気配消して出来る芸当なのか？」

「難しい……っていうか、ほぼ無理ね。“教授”はかなり力の強い王だから、どうやっても気配の残滓くらいは残るわよ」

それが無いから、問題なのだ。

キバは顎に手を当てる。

「完全に雲隠れってわけか。

ちっ、今にも立木さんボイスで『INVISIBLE』とか聞こえてきそうだ。いくらなんでも手掛かり無さ過ぎだぜ」

「この分じゃ、気配探知にも引つかからないわね」



《？》

通話向こうで、田中は首を傾げた。

この気だるさの権化のような声と、凜とした張りのある声。

どこかで聞いたような気がしたからだ。

「いつそ、でけえ封絶でも張って、人間以外を吹き飛ばしちまうつてのはどうだ？　ヒッヒッ」

「そーね。自在式が消えたら御の字。そうでなくても、街に自在式が仕込まれてんだから、街をブチ壊せば、手掛かりくらいは見つかるんじゃない？」

「うーん、気乗りしねーけど、確かに封絶張つとけば、街や人は再生可能だしなあ」

かーなーり渋々ながら、キバはゴーサインを出しかけて

「待って」

シヤナが制止の声をかけた。

「なによ、文句　　って」

言い返しかけたマージョリーが固まる。

「馬鹿な」

「どーいうことだ？」

声を驚愕に染める二人の王。

「なるほど。俺達は初動捜査からして間違ってたわけだ」

「見つからねえわけだぜ」

キバとキバットも、遙か彼方　　“教授”のけたたましい気配を感じ取っていた。

初動捜査の誤り。

この周辺 御崎市から“教授”の気配はしない。

当たり前だ。

そもそも“教授”本人が御崎市にいなければ 気配など捕捉しよ  
うがないのだから。

御崎市から遥か遠くに位置する白峰駅。

ここでも一つの“異常”が、日常を食い潰していた。

なんと、御崎市方面への線路上 それこそ戦隊モノのセットよろ  
しく、地面が開き、奇妙な車両『我学の結晶エクセレント2918  
2 夜会の櫃』が姿を表したからだ。

地の文にするのも躊躇われるネーミングのそれは、ウィーン、ガシヤン！ というお約束極まりない効果音を立てながらせり上がってくる。

同時に拡張機から無駄にハイテンションな声が轟く。

《エエークセレント！ やーはり発進は地いー下からが基本ですねえ ？》

“教授”がよくわからない美学を語りつつ、

《そおーれでは、いーよいよ実験もクライマックス！！

『我学の結晶エクセレント29182 夜会の櫃』……発

ツ、進！！》

教授の合図とポチツ、という人によってはかなりイラツとくる音と共に、機体とエンジンからは蒸気が沸き立ち、付属する汽笛が一斉に雄叫びを挙げた。

《いーざ征かん！！ 心ときめく実ーっ 験場へ！！》

凄まじいスピードで、教授の研究成果は御崎市に向かい始める。

(助けて)

吉田一美は河川敷の一角にしゃがみこんでいた。

浴衣はやや着崩れ、目を泣きはらしている。

悲哀、絶望を体現したようなその様を、道行く人々は物珍し気に眺めるが、その視線に構っている余裕は、吉田に微塵も残ってはいなかった。

(ここから、私を出して)

受けたショックを鑑みれば、当然の話だった。

(お願い、誰か、ここから、私を、坂井君を、助け出して！)

彼女が味わった絶望は、どう見積もっても、一般的な高校生の女の子が許容可能なレベルを超えている。

否　誰にでも、許容など不可能だろう。

ただ一つ信じたかった現実　大切な人は生きていくということ、  
『坂井悠二は生きている』という希望を、根刮ぎ打ち砕かれたのだから。

失意の内の逃避も、至極当然な反応。

奈落の底に叩き落とされた少女はただ、世界の理不尽さを嘆く。

（坂井君が、もう……どうして、坂井君が、坂井君だけは無事でいてって、“それだけ”なのに！！）

泣ころが喚ころが、どうしようもない願いを聞けるほど、世界の真理は暇ではない。

世界はただ、少女を苛み続ける。

坂井悠二はトーチ。

いずれは燃え尽き、墓標もない忘却へと消える存在。

彼女の抱いた想いさえも、全ては無に帰す。

（嫌だ！）

認めたくない、吉田は懸命に抗う。

それが決して、世界に聞き届けられない“どうしようもないこと”だと、自覚したくない一心で。

（嫌だ嫌だ嫌だ！  
私は坂井君が好きなの、なのに、どうして  
）

「美ちゃん？」

『 〇 』

なんの前触れもなく、そこにいた。

声に振り向き、吉田の眼前に飛び込んできたのは、銀色の浮遊物体。

『〇っ。』

「サガーク、くん？」

吉田の掌に乗るサガークの瞳は、何処か心配そうに、彼女を見つめていた。

次いで、土手沿いの道から掛かる、聞き知った声。

「こんなところで、何かあったのかい？」

白いジャケットを羽織った青年もまた、吉田の纏う雰囲気に、目を瞬かせていた。



「太牙、さん……」

吉田の頼りなく、絶るような口調から、太牙は慎重に言葉を選ぶ。

「なにかあったなら聞こう。泣き顔は、女の子には似合わないよ」

□

『！』

太牙の優しい笑顔と、サガークの励ますような声。

今の吉田にとって、それはあまりに温かく、安らぎを与えてくれるモノだった。

□

『あ』

抑え切れなかった感情が、涙となって零れ落ちる。

次の瞬間、吉田は堰を切ったように泣き出した。

太牙達がくれた安堵も、未だに残る不安も、全てがごちゃ混ぜにな

り、ただ嗚咽を洩らすことしか出来なくなる。

「え、ちょ、一美ちゃん!？」

『 ○!？ 』

太牙とサガークが慌てているのが分かったが、結局それを止めることは出来なかった。

世界に助けは届かずとも、違う誰かに助けは届く。

絶望の淵に立つ少女の声は、確かに裁きの蛇へと届いていた。

## 第十九話・トラジコメディー／絶望を振り切れ・Aパート（後書き）

投稿時に気付きました。今回のサブタイ、アクセルみたいじゃん！！

・七巻は説明書きが多くて大変です……色々、シーンをカットせざるを得ないのが残念でなりません。

・仮面ライダーキバ、原作を含めて初めてのバイク転倒；  
保証人は、マシンキバーを作ったというモトバツトでしょうか？

・太牙、サガーク、吉田、再びの邂逅。  
この三人組は、書いていて楽しいです。

次回もまた、シャナ側の少年少女達の葛藤がメインになりそうです。  
キバチームの動向もお楽しみに！！

では、また次回にて。

・どうでもいい近況

最近、『トランスフォーマーアニメイテッド』でグリムロックの声  
が、ビーストウォーズのダイノボットと同じだと気付き、懐かしさ  
に涙が出そうになりました。

## 第十九話・トラジコメディー／絶望を振り切れ・Bパート

「こーいう他力本願ってあんまり好きじゃないんだけどさ……」

奏夜達三人、調査を終え、合流した名護とカムシンの前で、マージヨリーは口火を切った。

御崎駅の繭は破壊出来ない。

“教授”の目的も分からずじまい。

別行動だったカムシンも「調律への干渉は、ものの見事に阻まれました」と、まさに八方塞がり。

そんな中で、まさに不確定要素とも言つべき可能性に、彼女は手を伸ばした。

「あの“ミスセス”の坊やに協力してもらつてのはどつ？」

シヤナが肩を跳ね上げたのが分かる。

しかし奏夜は、気付かないフリをした。

名護は顎に手を当て「なるほど」と同意する。

「確かに彼は、“愛染兄妹”の自在式を見破った。  
今の状況、彼の意見が突破口になる可能性は高い」

「ああ、その“ミステス”は何を蔵しているのですか？」

カムシンの事務的な質問に、アラストールが短く答える。

「『零時迷子』だ」

「！……………ほほう」

「ふむ、それは、また大したものじゃ」

「普段はヘタレだけどな」

しれっと、奏夜は辛辣な評価を下す。

「結構やるのよ。戦力としちゃ論外だけど、頭は切れるわ」

「あの“千変”相手にも、ハツタリで勝負をかけるようなムチャな兄ちゃんでああ、今度もなんとかやってくれんじゃねえか？」

名護やマージョリー達の口調からは、悠二に一目置いているのが窺い知れた。

自分以外の人間が、悠二を褒めることを、複雑に思っていた。

「……ちよつと共闘したからって、悠二のこと全部分かったみたい  
に」

「シヤナちゃんよ」

シヤナの小声を目ざとく聞いていた奏夜は、自らもまた、小さく唇を動かす。

「独占欲は、中途半端だと見苦しいだけだぜ」

「っ！　っ、っるわ」

「反論は『うるさい』以外で頼むぞ」

心中を見抜かれ、シヤナは反射的に怒鳴ろうとするが、即座に奏夜は言葉を被せてくる。

「『うるさい』はその場しのぎの防波堤だって言ったよな？ 意見があるなら、誤魔化さずにはつきり言え」

口調こそいつも通りだったが、一方で奏夜の横顔は無表情だった。

畏縮し、シヤナは黙りこくる。

何回目かの、整理がつかない気持ち。

悠二のことを考えると、冷静でいられなくなる。

さっき悠二を怒鳴りつけてから、ずっとこの調子だ。

悲しくなったり、嬉しくなったり。どっちつかずで、訳が分からない。

(これも、「どうしようもない気持ち」なの……?)

思い詰めるシャナを余所に、マージョリー達とアラストールは、調律師達に悠二の特徴を伝え、捜索にかかるうとしていた。

去り際、カムシンは単なる情報追加のつもりで訊いた。

「ああ、そういえば、その“ミステス”の少年、名はなんと言うのです?」

マージョリー、奏夜、名護は無言で、シャナの方を見る。

不承不承といった風に、シャナは口を開く。

「坂井悠二」

「!」



カムシンの無表情の仮面が、僅かに揺らいだ。

「ああ、サカイ……“坂井君”？」

「ふつむ……なんと」

「悠二を知ってんのか？」

シヤナに代わり、奏夜が問う。

「知っている……というより、どうやら、我々の協力者の知り合いのようですね」

「ふむ、そうか。出会った当初に匂っていた気配は、『炎髪灼眼の討ち手』の……」

「ああ、“見ていなければ”、いいのですが」

カムシンの言い回しに、奏夜は奇妙な違和感を覚えた。

シヤナも同様である。

（ “見ていなければ”？ ）

思考が次々と連結していくのが分かった。

つい先刻の、悠二が口走った言葉が、二人の脳裏をよぎる。

（ 「吉田さんに“、知られた”んだ  
）

辿り着いた結論が、か細い声に乗った。

「……吉田、一美」

「……そうか。“お前が巻き込んだ”んだな」

「ああ、やはり知り合いですか」

シヤナは、吉田がとうとう、自分と悠二の立つ世界に入ってきた、  
という事実から、凍るような恐怖を。

奏夜は、関係ない少女を巻き込んだ、目の前にいるフレームヘイズへの怒りを、それぞれ抱く。

「ああ、では早々に、その坂井悠二君を探しに行くとしましょう」

「ふむ、必要性以外の理由でも、早く見つけることができればよいのう」

カムシンらが夜の虚空へ消えた後も、二人はしばらく、無反応のままだった。

「……マージヨリー、名護さん」

「何よ」

「何だ？」

奏夜の低い声音に、マージヨリーと名護は僅かに身構えた。

「俺はカムシンに付き添って、悠二を探します。名護さん達は名護さん達で、悠二を探してください。」

くねぐねも、俺のあとを追わないように」

「まあ、バラけるのには賛成だけど、何であとを追っちゃダメなわけ？」

「お前や名護さんに、八つ当たりしかねないからだよ」

言い捨て、奏夜は振り返らずにマシンキバーへ乗り込む。

マシンキバーは、乗り手の憤怒を主張するかのような、悪魔の唸り声を挙げ、遠ざかっていった。

「……………」

シヤナもまた、紅蓮の双翼を羽ばたかせ、刹那の煌めきを描いて飛び去った。

後には、名護とマージョリー達を取り残される。

「ありゃ、二人とも相当キてるよなあ」

「……ねえケイスケ。チビジャリはともかくとして、あの状態のソウヤは大丈夫なわけ？」

「大丈夫でなかったとしても、あんなった奏夜君は誰にも止められないさ」

名護が肩を竦めて見せる。

普段温厚な分、奏夜はキレると怖い。

飄々としつつも、あれでキングと同格の実力を持つ戦士だ。

頭が冷えるまで、放っておくしかないだろう。

やれやれ、と名護は首を振りながら、イクサリオンに乗り込む。

「まったく……、この忙しい時に、太牙はどこで油を売っているん

だ？」

「落ち着いたかい？　一美ちゃん」

「は、はい……ありがとうございます」

『 # ○！ 』

一方、太牙は神社へ続く石段に腰掛けていた。

隣には、顔を俯かせる吉田一美と、彼女を心配そうに見るサガークの姿があった。

吉田はサガークをそつと膝へ移し、円盤に手を乗せる。

理解不能だったサガークの意味が、テーブルを通じて伝わってきた。

『カズミちゃん。ダイジョウブ？　マダ、ドコカイタイノ？』

「うん……大丈夫だよ。ありがとう、サガーくん」

言葉とは裏腹に、吉田の声は僅かに震え、泣き腫らした瞳は未だに潤んでいる。

名護と同じく、街境の調査を終えた太牙は、戻る途中、河川敷にうずくまっていた吉田を発見。

直後、急に泣きつかれたことから、並々ならぬ事情があると察し、彼はこうして、彼女の傍らに鎮座している。

ただ、

(僕は、どう声をかければいいんだろうな……)

事情は、吉田の嗚咽混じりの言葉から、全て理解した。

カムシンから借りた宝具『ジエタトゥーラ』を使ってしまったこと。

彼女の想い人、坂井悠二が、トーチであったということ。

もう彼女の気持ちも、どうにもならなくなってしまったこと。

これはもはや、絶望的としか言えない状況だった。

太牙が何と声を掛けようが、坂井悠二を人間に戻すことは出来ない。

動かしようがない世界のルールに、太牙は歯噛みする思いで一杯だった。

(ふざけている……ッ！)

理不尽だ。

何故、こんな年端もいかない少女が、世界の闇に苦しまなければならない。

この子のように、表の光ある世界で生きる人々が、世の裏側に引き込まれないようにする為に、自分はずっと戦ってきたんじゃないのか。



無力感から、太牙は拳を握り締める。

何がサガだ。何がキングだ。

(僕は結局、何も出来ちゃいないじゃないか……！)

吉田の前で、サガに変身し、ファンガイアという非日常を教えてしまった時にも、思ったこと。

僕は、奏夜のようにはいかない。

いつだって、誰かに手を差し伸べられる弟と違い、自分は何もできないまま、その手を取った人でさえ、助けられず、傷つけてしまう。

今、隣で泣いている少女のように。

(……奏夜、か)

あいつなら、どうするのだろうか。

太牙はおるか、誰にも見つからない答えを、あっさり用意してしま  
う気がする。

だが、ここにあいつはいない。

吉田に救済の光を与えられるのは 太牙だけなのだ。

(……そうだ。僕にしかないなら、僕がやるしかないじゃないか)

自分でも気付かないうちに、太牙は選んでいた。

(一美ちゃんに、僕と同じ道を歩かせちゃいけない)

『良かれ』と思う決断を。

彼女が抱いている想いは、自分が二度と取り戻せないものだから。

それを、失くして欲しくないから。

「美ちゃん」

固い決意を思わせる口振りで、太牙は吉田に向き直る。

吉田はゆっくりと、顔を上げた。

「一つ、昔話を聞いてくれるかい？」

「……昔話？」

「ああ。二人の男と一人の女の、ひどい昔話だ」

「昔々、あるところに一人のファンガイアがいました。彼は生まれる前から、ファンガイアを統率する使命を背負う、言わば王族の血を引く存在でした。」

成長した彼は、血筋、才気、地位、全てに恵まれた、歴代最強の王と称えられるようになります。

彼自身もまた、自分が王であることに、誇りを持っていました」

「やがてある時、彼はある女性を好きになりました。

彼が王ならば、その女性は王女に当たる存在であり、いずれにせよ、彼と結ばれる運命にあったのですが　彼はそんな運命とは関係無く、彼女を愛していました」

「ですが、その想いは、ずっと離れ離れだった彼の弟が現れた頃から、徐々に崩れ始めました。

女性が好きなのは彼ではなく、彼の弟だったのです。

そして彼の弟は、同朋を狩り、人間を守る戦士　　言わば、彼の敵だったのです」

「初めこそ、彼は弟を自分の右腕として、自らが率いるファンガイアに引き込もうとしていました。

しかし、王としてのプライドと、弟への下らない嫉妬心から、彼は弟を敵視するようになっていきました。

二人の兄弟の絆は、同じ女性を好きになったことで、醜く歪んでしまったのです」

「やがて兄弟は互いにぶつかり合いました。

人間を喰らうファンガイアを倒す戦士と、ファンガイアの掟を守る王として。

同じ女性を好きになつた恋敵同士として。

宿命の鎖は二人を引き寄せ、戦いはもはや避けられませんでしたが。戦いでしか、ファンガイアの存亡と女性への愛を勝ち取れないまでに、二人の男と一人の女の関係性は狂っていたのです」

「そして運命は、二人の男に相応しい罰を与えました」

「二人を止めようとした女性は、兄弟の戦いに巻き込まれ、命を落としたのです」

「兄の絶望は計り知れませんでした。

やがて兄は、女性を殺した真の仇を見つけ出したのですが、それが切欠となり、兄は王の座を追われ、弟にその権威を奪われてしまいました」

「愛する人を失い、キングの資格を失い、自棄になつた兄は失意の果てに、封印されていた『闇の鎧』を纏い、キングの座を奪い返すべく、弟に戦いを挑みました」

「しかし、彼はそこで、弟の真意を知りました。弟がキングとなったのは、傷付いた兄を守る盾となり、ファンガイアの業を全て背負う為だったのです」

「全てを知り、兄は犯した罪から、王の座を諦めるつもりでした。そんな時、弟は言いました。『違う、やっぱりキングは兄さんだよ。兄さんならきつと、ファンガイアと人間に、明るい未来をつくることができるはずだから』と。」

敵であった兄さえも恨まず、弟は遅しく成長していました。キングなどというものが、ちっぽけに見えるほどに」

「そして兄は、再びキングの地位に就きました。」

人間もファンガイアも関係無く、みんなが笑っていられる未来を目指すために。

弟の想いに報いるために。

そして 彼女のような存在を、もう二度と生み出さないために」

「ただ、彼は今でも思うことがあります。」

彼女が自分と関わらなければ。

彼女を、王女の資格にかこつけて、自分の傍に縛り付けていなければ。

彼女は幸せになれたのではないかと。

どうしても 考えずにはいられないのです」

「そうして、彼は今も、罰を受け続けています。」

正しさと過ちの狭間で、一生答えを探し続けるという罰を」

「そついう 昔話だ」

太牙の瞳は、まるでそこに風穴が空いたかのように、空虚だった。

傍らの吉田は、呆然と、彼の話に聞き入っている。

「今の話、は……」

「美ちゃんが想像したので、間違っていないと思うよ」

言いながら、太牙が浮かべた笑みは、酷く自嘲めいていて、ふとしたことで消えそうなくらい、儚かった。

「僕はとっくの昔に絶望した人間だ。

けどね……絶望なんて、それこそいつでもできるんだよ」

諦めさえしなければ、絶望は何処にもない。

希望への道が、どれだけ苦しくとも、そこに至る道筋は、決して不幸ではない。

太牙は、吉田の頭を軽く撫でた。

「美ちゃん。キミなら、きっとまだ間に合う」

「……でも」

吉田が頷けないのももっともだ。

坂井悠二がトーチであるという事実は、動かしようがない。

支えも何もない中、何を信じろというのだろうか。

それこそ、都合のいい奇跡でも起きない限り。

「都合のいい奇跡か。いいね、それで十分だ」



「えっ？」

「可能性は0じゃない。ジタバタ動くには、十分過ぎる支えじゃないかな？」

「……………」

吉田は目を瞬いた。

世の非常を目の当たりにしたばかりの吉田に、太牙は世のご都合を信じると言っているのだ。

「坂井君が、本当は無事だっという奇跡。確かにそれは、百分の一の確率かも知れない。けど万が一、それが起こったらどうする？」

諦めたら、全ての可能性は0だけど、諦めなければ、可能性は決して0にはならない。

現に僕は、百回目の確率で起きることが、一回目に起きるところを、何回も見ている」

太牙自身、こんな無茶苦茶な戯言が、正しいとは思っていない。

常識的な判断とは思えない理屈を、妙な自信で固めているだけだ。

だが　　そうだとしても、太牙は吉田を立ち上がらせたかった。

それがどんなに脆弱な希望でも、彼女に諦めて欲しくなかった。

「『誰かを好きになったのなら、悔いは残すな。最後まで好きでいる』。」

—美ちゃんは、もう悔いはないのかい？

こんな救いの無い終わり方で、本当に満足してるのかい？」

「……………」

満足している、わけがない。

この絶望は、だからこそ生まれたものだ。

吉田の『何にもならない』気持ちを感じ取り、太牙は問う。

「どんなに脆い奇跡でも、それを信じてみたいかい？」

「……………」

「そつすることです、更に傷付く覚悟はあるかい？」

「……はい」

「悠二君への想いを、諦めたくないかい？」

「……っ、はい!！」

普段からは考えられないほどに大きく、強い覚悟を込めて、吉田は叫んだ。

また涙が出そうになるが、ぐっと堪える。  
こつすることです、絶望を振り切れなくても、もう後悔する気はない。

覚悟と、自分出来る全てを懸けて、吉田は選んだのだ。

だって、私は。

「……決して」

「？」

ぎゅっと拳を握り、吉田は自分の心を吐き出す。

「決して変えられなくても、絶対にどうしようもなくとも……」

私は、坂井悠二君が、好きなんです。

曖昧さもごまかしも無い、真摯な決意。

太牙はただ、真正面からそれに応える。

かつて同じ感情を持っていた者として。

「好きでいることに、理由も境遇も関係ないよ」

太牙は立ち上がり、彼女に手を差し伸べる。

「キミ自身が好きでいさえすれば、ね」

「……はいっ！」

太牙の手を取り、吉田もまた立ち上がる。

『 \*! 』

もはや定位置と化したのか、立った吉田の頭の上に、サガークが鎮座した。

「こらサガーク。お前は飛んでいけるだろう」

『 ……!』

イヤイヤ、と身体を揺らし、退かないという意思を示すサガーク。

「ふふっ」

二人の緊張感の無いやり取りに、表情が緩む。

そこで吉田は、笑っていられる余裕が戻っていることに気が付いた。

不安定だったように思えた地面も、今はしっかりと踏みしめることが出来る。

「 ……大丈夫」

吉田の表情は、もう誰かに助けられてばかりの、弱い少女のものではない。

前に進むと決めた者にしか出せない、心の強さに満ち溢れていた。

「ちゃんと、進める」

私の『良かれ』と思う選択は、坂井君を好きでいることなのだから。

「カムシン」

「ああ、何でしょうか」

マシンキバーを走らせる奏夜と併走しながら、カムシンが答える。

バイクと、見た目子供なカムシンが、同速度で走るといふのは、傍目から見ればとんでもない光景だったが、すぐに『平静の波』がその違和感をつさらってしまふ為、問題はない。

「お前さ、なんで吉田を巻き込まなきゃならなかったんだ？ 協力

者とか言ってたが、吉田の任意同行とは思えねえし」

「ああ、調律のイメージ採取の為、ですね。この街で生まれ育った人間でなければ、イメージ採取は不可能なので」

「ふーん……」

感情の読めない口調で相槌を打つ。

奏夜の横顔は、不機嫌というより、完全な無表情だった。

興味本位から、カムシンは与太話として尋ねる。

「ああ、やはり怒りましたか？」

「怒ってないさ、ただぶん殴りたいだけだよ」

鉄面皮を一切崩さず、某池袋最強の男のようなセリフを吐く奏夜。

カムシンもまた、フード下の表情を、ピクリとも変化させなかった。



「ああ、殴るなら今の内ですよ」

「マゾ？」

「私への個人的な怨嗟で、あなたの士気が下がっても困りますからね」

奏夜の額に青筋が浮き出る。

どこまでも、合理性に徹するフレイムヘイズに、形容し難い苛々が募った。

「ですから、あなたの怒りが晴れるのなら、それもやぶさかです」と、思っただけです」

「魅力的な申し出ではあるが、止めておこう。

よくよく考えれば、殴るくらいじゃ収まりそうにねーわ」

殴るにしても、オベリスクゴッドハンドクラッシュャーくらいの勢いでなければ気が済まない。

「だから、早くこの戦いを終わらせちまおう。お前とは、その後でじ〜っくり話をしよう」

「ああ、ではそのように」

まったく無関心なその様に、奏夜は本気でキレかけた。

取り敢えず、こいつとは仲良くなれそうにない。

浅倉威もびっくりな苛立ちオーラを発散すべく、更にアクセルを入れる。

「……」

と、奏夜は加速させかけたマシンキバーを急停車させる。

「11の気配は……」

「ああ、向こうから知らせてくれましたか」

どうやら悠二は、自ら存在の力を放出し、それを狼煙として使った

ようだ。

そう遠くもないから、すぐに辿り着けるだろう。

(だがこれは、場所を知らせるつもりって言うより……)

奏夜が気掛かりなのは、そこだった。

感知した気配は、確かに悠二のもの。

しかし、そこにはいつもの柔らかさは無い。

響いてくる心の音楽も、弦をひたすらかき鳴らしているような、激しいビートだ。

(悠二のヤツ、怒ってるのか?)

確証を得られない内に「早く行きましょう」とカムシンは先へ。

一抹の不安を抱えながら、奏夜もマシンキバーの方角を変え、後を追う。

適当な場所でマシンキバーを止め、辿り着いた先は、河川敷だった。

教授の思惑が着々と進む中でも、夜店の賑わいは相変わらずである。

平静の波のせいで、何ら異常無く生み出される祭りの空気が、かえって非日常とのズレを明確にしていた。

そして、肝心の悠二はその先にいた。

人だかりから離れた、祭りの余剰機材が積み上げられた広場。

二人を真っ直ぐに見据えるその様は、待ち構えていた、という表現がよく似合っている。

（ああ、やっぱりキレてる）

もっともそれは、奏夜ではなく、カムシンに向けられたものだが。

彼がカムシンに怒る訳など、一つしか思い浮かばない。

奏夜と、同じ理由だ。

「ああ、実は、あなたに」

「どうして」

簡単な自己紹介を済ませ、本題に入ろうとしたカムシンの声を、悠二は遮る。

「なんで、彼女を巻き込んだんだ」

「調律に必要な、人間の適性者だったからです」

「っ、そういうことじゃない!!」

滅多に聞かない悠二の怒声に、奏夜は少し驚いた。

だがカムシンは、やはりそれを平然と受け止め、

「ああ、つまり、彼女に“本当の姿”を見られてしまったのですね」

「!」

「なぜ自分が“ミスレス”だとばれるような真似をしたのか、と言いたいのですか？」

恐れからぼかしてきた事実を、カムシンは淡々と声に乗せていく。

「ああ、しかし、その怒りはお嬢ちゃんへの侮辱ですね。我々は、お嬢ちゃんに本当のことを……あなたのことを、知ろうとすべきではない、と勧めたのですから」

「ふむ、それでもお嬢ちゃんは自分で『良かれ』と思える方を選んだのじゃから、儂らを非難するのは筋違いというものじゃよ」

絶対的な正論に打ち負かされ、悠二は言葉を押し込められてしまう。

「だ、だからって、そんな……」

「悠二」

弱々しい反撃を止めたのは、意外にも奏夜だった。

「今は“それどころ”じゃねえ。わかってんだろ？」

「っ!!」

見えない鎧が、頭に振り下ろされたような衝撃を受けた。

悠二はこれまでの付き合いから、紅奏夜に全幅の信頼を置いていた。

間違ったことを許せず、一を切り捨て九を救うような、合理的な考えはしない。

形振り構わず、十を救おうとする人だと思っていた。

だが今の、今の言葉は、

「ここまで来ちまったんだ。決めるのは吉田だろう。俺達には俺達で、やることがある」

そう。吉田のことを、放っておけと言っているのだ。

自分が傷付け、泣いているだろう少女を。

そつでないとわかっていながら、悠二は裏切られたような錯覚に陥る。

「先生は！！」

耐えきれず、悠二は叫んでいた。

「先生は、それでいいんですか！？」



「アホ。良いわけないだろ」

真つ向から言い返され、悠二は押し黙った。

「お前がカムシンに怒る気持ちも、俺に怒る気持ちもよく解る。けど、さっきお前が、吉田を探しに行く時も言ったよな？ 優先順位を考慮ろって」

奏夜は駄々っ子に言い聞かすような口振りで、言葉をかける。

「吉田を放っておけなんて言っつてねえ。

ただ、それは後からでも出来る。

吉田は聡い子だから、ちゃんと話しさえすれば、お前のことを理解してくれるだろうよ。

だが、吉田を説得する前に、この街が滅んでもみる、本末転倒じゃねえか」

カムシンと同じ正論。

違うのは、未熟な少年への気遣いがあるかないかだ。

奏夜の温情に、悠二は怒りに熱くなっていた頭が、急速に冷えていくのがわかった。

「この状況、突破するにはお前の力が要る。  
その後で、吉田を説得するなり、俺やカムシンを怒鳴るなり、好き  
にすりゃあいい」

伝えるべきことを伝え、奏夜は会話を切った。

(やっぱり、僕は馬鹿だ)

自分の浅はかさに嫌気が差し、拳を握りしめる悠二。

こんなことだから、彼女を傷付けてしまっただ。

先生が、誰かを気遣わないわけがないじゃないか。

素直に謝罪の言葉が、口から出てきた。

「……すみませんでした先生。勝手なこと言って」

「いっよ、別に」

軽い返答を聞き、悠二はカムシンに視線を移す。

その眼差しは、やや厳しいものではあったが。

「まず、その調律ってやつを、詳しく説明してくれ」

スイッチが切り替わったように、凜とした雰囲気を纏う悠二。

こうなった彼が導き出した答えは、戦況を大きくひっくり返すことになる。

「ふむ、“探耽求究”は、随分と、面白いことを、しているらしいな」

特徴的な舌足らずの口調で、ドラゴンファンガイア　ドラグは、フード下の唇を動かす。

頭上を見上げれば、奇妙な自在式。

見れば見るほど不気味な空だが、自分達にとっては好都合だ。

「今なら、キバも、イクサも、サガも、動けはしまい。  
裏で動くには、またとない、機会だ」

「ええー、もう行くのかよお？」

ブラックコートに、シンプルな仮面を被ったベルゼブブファンガイ  
ア　ゼブが、不満に口を尖らせる。

彼の両手には、一本ずつリンゴ飴が握られ、金魚が入った袋まで吊  
っている。

「……貴様は、ここに何をしにきた」

「祭りをエンジョイする為じゃね？　あ、ドラグも一本どうよ？」

差し出されたリンゴ飴を、無言で受け取るドラグ。

次の瞬間、ドラグはリンゴ飴の割り箸部分だけを、カづくで引き抜いた。

流れるような動作で、割り箸をゼブの仮面　穴の空いた眼の部分へと突き刺す。

「ぎゃあああああ！　目が、目があーー！！！」

某ラピユタ王の如くのたうち回るゼブを捨て置き、ドラグは目的地へと足を進める。

「急がなければ、なるまいな」

“アレ”は、我々の計画に不可欠なものなのだから。

「一応、思いつきは、したけど……」

すべての事情を聞き、悠二はあまりにあっさりと答える。

「ああ、そんな、簡単に……?」

「ふむっ?」

「おお、さすがだな。悠二」

三者三様の反応が返ってくる中、悠二はそれ以上先を言わなかった。

良策ではあるが、僅かなデメリットの為に、使うのを躊躇っている。

そんな印象から、奏夜は適当な推測を立てる。

「もしかして、吉田が関係しちゃってたりするの?」

「!?!」

易々と心中を見抜かれた悠二の動揺が、二人に伝わってくる。

どう促したものが、と悩む奏夜に対し、カムシンはなし崩しに話を進める。

「ああ、お嬢ちゃんを、そんなに巻き込みたくないのですか？  
それは、どうしてです？ 彼女を恋愛対象として大切に思っているからですか？」

「な！　なんで、そんなこと言わなきゃ……」

ド直球な物言いに、悠二は身じろぐ。

「ふむ、この場合は、割と重要な問いのように思えるがのう」

「俺も興味あるな。ここらでハッキリさせたらどうだ？」

「先生まで……」

無回答、という選択肢は用意されていなかった。

「……吉田さんは、優しい人なんだ」

本心を絞り出すように、悠二は言葉を紡ぐ。

「いくら一度巻き込まれたからって、またこんな惨いことしかない世界に、覚悟もないのに、連れ込むようなことは、しちゃいけない人なんだ。できるのなら、元の世界に……」

都合のいい話だとは思っ。

切欠はカムシンでも、彼女を傷付けたのは、間違いなく自分だ。

ただ、そうだとしても、悠二は吉田に、日常の中で生きていて欲しかった。

彼女と、日常の中で感じてきた思い出は、紛れもない幸福だったのだから。

「吉田さんは、僕が零れ落ちてしまった“あそこ”に、いるべき人なんだ」

「ああ、シヤナ、と呼ぶあの少女は、違うのですか？」

「シヤナは、違っよ」



シヤナの強い有り様と生き方から、単純な事実を口にする。

「シヤナは、フレイムヘイズなんだ。彼女があんたの生き方を選んで、そこで強く、そうあるべきだと信じて立っている」

「つまり、シヤナには、非日常で生きる覚悟があり、吉田にゃ非日常で生きる覚悟がないと？」

悠二が頷くと、奏夜は何故か、意地の悪い笑みを浮かべた。

「そいつはどうか？ あいつはお前が思ってるほど、弱い女の子じゃないぞ」

「えっ？」

含みのある言い回しに、問い返しかけた悠二の背に、

「シヤナっていうのは、ゆかりちゃんのことですか？」

「!!」

反射的に振り返ると、見慣れた姿がそこにはあった。

「!! 吉田、さん」

「注意力散漫だな、悠二君？」

奏夜のみならず、カムシンまでもが、クツクと笑っている。

あつ、と悠二はようやく気が付いた。

「さっきから変な質問ばかりすると思ったら……」

「ああ、さすがの『零時迷子』の“ミステス”も、人間の気配を察知することはできないようですね」

「ふむ、儂らのせいで、悲しい目に遭わせてしまった、ほんの罪滅ぼしじゃよ」

「気付かないお前も悪いって。なあ、吉田？」

急に話を振られながらも、吉田は微笑み返してくれた。

「俺がなんでここにいるかは……わかってるみたいだな」

「来る途中、太牙さんから、全部聞きました」

「そっか」

まあ、そんなことだろうとは思っていた。

カムシンと太牙が知り合いであった以上、そこに吉田がいたことは、想像に難くない。

そして太牙が、ファンガイアのことを話せば、彼の兄弟である奏夜の素性も、自ずと知れてくる。

「吉田、ここまで知っちゃった以上、選ぶのはお前だ。後悔しないように選べ」

「はい」

頷き、吉田は悠二の傍らに駆け寄っていく。

短い激励だけを送った奏夜は、手近にあった機材に腰掛け、その様子を見守る。

「彼が悠二君か」

と、その背後にはいつの間にか、太牙が立っていた。

身体を反らし、下から彼を見上げる。

「お疲れ様。随分と吉田に世話焼いたみたいだね」

「なに、僕は選ぶチャンスをあげただけだ。動いたのは、一美ちゃん自身の力だよ」

「うん。確かに吉田のヤツ、いい顔してる」

前に進むことを、非日常にしていることを、選んだ者の顔だ。

「どうなるかな？」

「信じよう。一美ちゃんは不幸になっちゃいけない子だ」

兄弟が見守る中、二人の男女の会話は続く。

「覚悟」

「えっ」

吉田の瞳は、目を逸らすことを許さないほど、強い意志に満ちていた。

「私にだって、あります。ここに、坂井君のいるここに、入る覚悟が」

「駄目だ！」

悠二の即断でさえ意に返さず、吉田は続ける。

「ゆかりちゃんには、あるのに？」

「シヤナはこのカムシンと一緒に、フレイムヘイズって特別な存在だからだよ！　吉田さんは普通の人間じゃないか！？」

「名護さんとかも普通の人間なんですけどー？」

「揚げ足取らないでください！」

振り向き様に奏夜を黙らせるも、吉田の勢いはまるで止まらなかつた。

「坂井君は、先生やカムシンさんや太牙さん……ゆか、シヤナ、ちゃんと同じなんですか？」

答えづらい質問に、しかし吉田がこちら側に来ることを認めたくな

い一心で、悠二はその事実を突き付けた。

「僕は……僕も、人間じゃないんだ」

零時迷子を蔵された“ミステス”であること。

自分はフレイムヘイズを助けられる力からこそ、ここにあること。

だが、それらをどれだけ突き放すように告げても、吉田はまだ反論してくる。

「でも、坂井君の考えた、私の関係している街を救う方法というのも、あるんでしょう？　なら、坂井君と私は、役に立っているという意味では、同じ立場のはずですよ」

「う……」

いよいよもって、手立てが無くなってきた悠二に、吉田は告げた。

すべてを包み込むような、温かい笑顔と共に。

「坂井君は、人間です」

何気ないそれに、悠二の思考がフリーズした。

全身を駆け巡った衝撃の正体は、吉田の言葉に込められた、真摯な想い。

「あんな風に私のことを言ってくれる人が、人間じゃないなんてこと、絶対にありません」

「……吉田、さん」

吉田が自分の手を握る。

再び、あの心地良い温かさが押し寄せてくる。

もう、彼女を止めることは出来そうになかった。



それだけの想いを、覚悟を、見せられてしまったから。

奏夜と太牙も、取り敢えず一安心し、悠二と吉田の微笑ましいやり取りを静観していた。

「ああ、さて、同意が得られたところで、話の続きをしたいのですが」

まるで空気を読まず、不躰にカムシンがそのムードを台無しにする。

「ふむ、時間も差し迫っておることじゃしろう」

「あつ、す、すいません！」

今になって恥ずかしさが押し寄せてきたのか、吉田は慌てて悠二の手を放す。

顔は耳まで真っ赤だ。

『……………』

口を閉ざしたままではあったが、悠二、奏夜、太牙の心中は一致していた。

やっぱりカムシンとは、仲良くなれそうにない。

次回、仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD！

「全員集合だな」

「なんで先生がここにいるんですか!？」

「怒って、ない？」

「サガの新しいフェッスルさ」

「こおーのかぁーんぺきなるフォルムが理いー解できないというんですかぁー!？」

「そんなもの、列車とは認めん!！」

「久しぶりに三人でいきますか！」

『変身！！』

【第二十話・ハーモニー／RIDERS・S・FORCE】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！

## 第十九話・トラジコメディー／絶望を振り切れ・Bパート（後書き）

・ひどい昔話ver太牙。原作において彼も、怒りや嫉妬心のあまり、つらい経験をしていましたね。

このあたりは、過去キングからの遺伝でしょうか。

・なんかドラグとゼブが久し振りだ；

この話のラストでぼちぼち、彼らの目的の一端が明かされるかも知れませんが。

あと二回で、シャナ七巻の話は終わりにして、ようやく第一部完とあったところですね（本当に先は長いです）。

その後は、またオリジナル展開が入る予定です。

フォルティッシモな竜の行方と、ある仮面ライダーに関わるエピソードとなりますので、またお楽しみに。

では、また次回にて！

第二十話・ハイモーター／RIDER・S・FORCE・Aパート（前書き）

「鉄道は、リチャード・トレビシックが1804年にイギリスで蒸気機関車を走行させたことに始まるとされている。

一般にはジョージ・ステイヴンソンが発明者と思われているが、彼は鉄道を“一般に普及”させた人物であり、実際の発明者はトレヴィシックが正しい。

レールや蒸気機関車の開発で多くの課題を抱える中、実用化の為に動いた功績は、後の鉄道史に大きな影響を与えた。

ちなみに、日本の鉄道開業は1872年の品川 - 横浜区間が最初なんだぜ」

キバットバット三世

## 第二十話・ハイモーター／RIDER・S・FORCE・Aパート

旧依田デパート屋上。

シヤナやマージョリーに、悠二と吉田を見つけたと連絡を入れ、全員がそこに集まっていた。

問題はその後である。

亡き“狩人”フリアグネの宝具『破璃壇』を囲み、数名の人影が、互いのことを信じられない顔で見回していた。

黙っていても埒が明かない為、紅奏夜が代表して口火を切る。

「九時ダヨ、全員集合!!」

「全員集合、じゃありませんよ!」

奏夜の懐かしいフレーズに、マージョリーの子分、佐藤啓作がさすがズツッコむ。

同じく子分、田中栄太も同様だ。

「名護さん、なんで先生がここにいるんですか!！」

「……ああ、そう言えばキミ達は知らなかったな」

名護が少々ばつが悪そうにする。

「奏夜君、あれから結局、佐藤君や田中君に話していなかったのか？」

「話す意味も無さそうでしたからね。」

……佐藤に田中よ。人がそこにいる意味を求めるのは、無粋だと思わんかね？」

「何故ちよっという台詞!？」

「誤魔化されるな田中! 先生はぐらかす気満々だ!」

奏夜を問い詰めようとする二人を見て、悠二も呆然としている。

「なんで佐藤と田中がここにいるんだ?」

「いや、そりゃこっちの台詞なんだけど……」

佐藤が逆に問い返す。

「そっちこそ、フレймヘイズと“ミスレス”だった？　吉田ちゃんまで？」

吉田も、今の状況に着いていけなくなりそうだった。

「坂井君が、その“ミスレス”だって知ってたんですか？」

「いや、“ミスレス”ってことだけで、誰かは……それより、平井ちゃんがフレймヘイズ？」

訊く田中と佐藤を見て、シャナが彼らの親分を睨む。

「なんでこいつらがこんなところにいるのよ!？」

「……知り合い、だったわけ？」



「世間ってな狭えなあ、オイ」

「貴様ら、なにを考えてこの二人を巻き込んだ」

アラストールが低く唸ったところで、あまり顔の知られていないカムシンと太牙がストップをかけた。

「ああ、ちょっと落ち着いて、皆さん」

「積もる話もあるだろう。取り敢えず一人一人、自分の身の上を明かしたらどうだ？」

「ふむ、出来る限り簡潔にな」

ベヘモットが最後に付け加え、全員の混乱はようやく落ち着いた。

互いの抱える事情を話すのは、やはり衝撃も大きかった。

本物の坂井悠二と、平井ゆかりが既に死んでいるのもさることながら、やはり奏夜「キバというのが一番驚かれた。」

しかし、当の本人はどこ吹く風で、

「俺の天才性が、高校教師という器に収まると思っていたのか？」

と言っただけだ。

身も蓋もない。

「しかし、随分ごちゃごちゃした相関図だったな」

「よく言いますね先生。自分だけ誰がなにをやったか知ってた癖に」

佐藤がジト目気味に一瞥をくれる。

その視線に、奏夜はおどけるように肩を竦めた。

「成り行きだよ成り行き。俺はある意味、物語を裏側から見てたよ  
うなもんだからな」

「キバ　　つていうか、先生が前に姐さんと戦った時、もう俺達のことには気付いてたんすか？」

田中の問いに、奏夜は首を横に振る。

「いや、あの後、マージヨリーと個人的に話す機会があったな。  
お前らのことはそこで聞いた」

「はあ……結構裏で動いてたんですね」

「意外と動揺しないんだな。悠二の事情を聞いた時もそうだったが」

「いえ、さっきの話じゃありませんけど、普段の先生見てれば、別に先生がキバでも可笑しくないかなーって」

「どつという意味だコラ」

「あー、つまるところ、『先生は何でもアリ』って認識なんです」

佐藤の言い分に、田中も乗っかる。

「そうそう。」

むしろお兄さんがいたことの方が吃驚でしたよ」

「……奏夜。お前は一体どんな身の振る舞いをしてるんだ」

太牙の白い目線が突き刺さる。

キバであることが大した問題じゃない。むしろ奏夜ならすぐ納得できる。

確実に、奏夜の日頃の破天荒っぷりが招いた結果だった。

「あはは。ま、まあ、その辺は置いといて」

さすがに兄の威厳には耐えきれないのか、奏夜は慌てて目線を『破璃壇』に移す。

現在『破璃壇』には、御崎市の“存在の流れ”が映し出されている。

“探耽求究”が作り出した、自在式の全体像だ。

「ふむ。大通りに繁華街　人混みの多い辺りに、存在の力の流れが集中しているな」

「んで、花火打ち上げ用の舢に仕掛けられた自在式が、あの花火を歪ませたワケね」

名護とマージヨリーの冷静な分析に、カムシンも頷く。

「ああ、我々が起動した自在式から制御を手放した、その一番最初に、この密集した自在式して、歪みを生み出したのですね」

「さて、悠二よ。現状把握が終わったところで、お前の策ってヤツを教えてくれねえか？」

奏夜の口調からは焦燥が伺えた。

“教授”が着実に近づいて来ている為である。

悠二も同じ気持ちだったが、自分の案に必要な少女　への引け

目から、

「……いいかい、吉田さん」

「はい、大丈夫です」

自分には向けられない気遣いから、シャナが顔をしかめていたが、気付いたのは奏夜だけだった。

そのまま、悠二が言う。

「僕は、もう一度、吉田さんに調律の元になるイメージを写し取る作業を、やってもらいたいんだ」

「えっ……?」

吉田を含む、全員が顔を驚きに染める。

「んなことしてなんになるのよ? もう実際におかしくなっちゃってるの」

「……いや、待てよ。そういうことか」

調律に付き添った記憶から、太牙はいち早く、悠二の策に気が付いた。

「つまり悠二くん。もう一度、間違い探しをするんだね？」

「そういうことです、太牙さん」

頭が回って適応力も高まっているのか、初対面の太牙にも、悠二は親しみを持って頷く。

「調律の雛型になったイメージを持つ吉田さんに、今の……“自在式でいじられた御崎市”を見せて、どこがどう違っているのか、感じて貰うんだ」

太牙の言う通り、二回目の間違い探しだ。

“教授”によって改変された御崎市を、正しい見本を見ながら、違っている箇所を探す。

そして、発見した“違ってしている箇所”にこそ、この自在式のカラク

りと、“教授”の真の目的が隠されているはずだ。

有効かつ現実的な案に、それぞれが感嘆の声を挙げた。

「ひゅー、さすが悠二」

「そうだな。今の段階では、最良の手だ」

「ふーん、やっぱりやるじゃない」

「ふむ……たしかに、やってみてもよいな」

「ピピピ、ピーりゃいよいよっ！ かり掴まえとくべきだなあ、嬢ちゃん」

「なっ、しるわっしるわっしるわっ！ そんなことより、早くしなさいよー！」

「ああ、それもそうですね。時間もありませんし……よいですか、お嬢ちゃん？」



「はい」

カムシンが肩に背負った鉄棒の布を解き、指揮棒の如く振るう。

「さあ、始めましょうか」

風を切る鉄棒の周囲から、褐色の炎が吹き出し、生み出された怒濤の輝きが吉田を包み込んだ。

悠二達が息を呑む中、炎の渦は球状の形に落ち着いて行き

「……………うわっ!?!」

「っえ!?!」

「おおっ!?!」

眼前の光景に悠二と佐藤と田中が叫んだ瞬間、群青色の光が弾けた。

「そこの六人、見たら死刑ね」

「ヒヒヒ、脅しじゃねーぞお？」

マージョリーとマルコシアスの警告に戦慄しつつ、三人は目を瞑って後ろを向いた。

無理もない。

カムシンの自在式『カデシユの心室』内に浮かぶ吉田一美は、一糸纏わぬ姿をしていたのだから。

見れば奏夜、名護、太牙の三人は 火が吉田を包んだ時から嫌な予感がしたのだろう とつくに背を向けていた。

さすがに、歴戦の直感力が活きている。

無駄に。

「……先生。ちょっと前に、このテの事に一喜一憂してたら、教師は出来ないとか言ってますでした？」

「さすがにあれば許容不可」

悠二の非難めいた言葉に、奏夜はか細く言い訳をした。

「でも、先生はそうだとして、名護さん所持持ちじゃないですか」

「そうっすよ。既婚者が今更」

「……既婚者、という理由で、恵が許すと思うか？」

佐藤と田中は押し黙る。

思えない。

最悪、名護が神に命を返されることになる。

名護のかつてない真剣トーンからも、それは伺えた。

「みんな、あまり余計な口を叩かない方がいいぞ。

……『弔詞の詠み手』に本気で消される」

太牙の呟きに、全員ただ同意するばかりだった。

男性陣のどうでもいい葛藤を余所に、間違い探しは続く。

吉田の間違い探しから、理解したことは二つ。

一つ。

街に張り巡らされた自在式は、『フレイムヘイズやファンガイアの存在の力やライフエナジーを利用して起動し、攪乱の効果を発言させる』ということ。

言わば、反射。

シヤナの火炎弾が返されたのは、火炎弾自身に込められた“存在の力”を持って返された。

奏夜のマシンキバーやバツシャーアクアトルネードは、キバの鎧に

内蔵された魔皇力によって、誤作動を起こしたのである。

二つ。

件の“攪乱の自在式仕掛け”は、ミサゴ祭りのシンボルとして、あちこちに取り付けられた鳥の飾りによって起動する。

人間の業者に、配置と取り付けを任せ、フレームヘイズに気取られぬようカモフラージュ。

後は勝手に包囲網が完成するというわけだ。

相手の戦略は、これで掴めた。

しかし、

「でも、どうやってこの仕掛けを壊す？  
攪乱されるだけじゃないの？」  
気付かれたら、また

「確かにな」

シヤナの意見に、奏夜も頭を抱える。

攻撃しなければ破壊出来ないのに、攻撃すればすぐ攪乱される。

二律背反だ。

「一個や二個は破壊可能だろうけどなあ」

「だが、それではすぐ警戒されてしまっただろうな」

「ええ、大元の駅を叩こうにも、あそこは攪乱用の飾りもタップリあるしね。

実際、私もチビジャリもソウヤも、近付けなかったわけだし」

「しかも駅前の飾りは、不意打ちじゃ破壊出来ないくらいの量だも  
んね」

名護とマージョリー、頼みの綱の悠二にも、良い策は思い浮かばな  
かった。

「他に狙える標的と言えば、“教授” 本体だろうか……」

「ああ、無理ですね。御崎市外周部の飾りを壊し、市外に出たとしても、その隙に駅の“燐子”が何をするかわかりません。最悪、戦力を分断される可能性もあります」

太牙の案をカムシンが否定し、再び一同が考え込む。

鉄壁にして穴のない計略。

“教授”の最終目的がなんであれ、彼が御崎市に到着すれば、成就する類いのものなだろう。

(それを阻止するには、もう一手必要だ)

奏夜の望むもう一手は、意外な人物にもたらされた。

「あ、あのー」

強者達の威圧感に畏縮しつつ、佐藤がおずおずと手を上げていた。

「なに、ケーサク」

「俺……駅の中、入ったんですけど」

「はあ？」

マーシヨリーのみならず、全員が目を見開く。

「えっと、ここに来る途中、なんですけど」

「いやいやちょっと待て」

奏夜が佐藤の言葉を遮る。

「お前、そもそも何で駅に入ったんだ？ マーシヨリーの指示とは思えないし」

「っ、それは……」

不自然に言い淀む佐藤。

見れば、マーシヨリーと田中も、やや渋い顔になっている。



「あー、キバの兄ちゃんよ。あんま追求しねえでやってくれや」

更に言及しようとした奏夜を、マルコシアスが諫める。

「我が麗しの酒杯が、じゅーぶんに叱つちまった後だからよ」

「……はあ、わかったよ」

何となく事情を察した奏夜は、それ以上何も言わず、瞬時に思考を切り替える。

「佐藤が入れたのは、ただの人間だからか？」

「ああ、そうでしょうね。あの自在式は、あくまで存在の力や魔皇力に反応するものですから。」

恐らく“教授”は我々に重きを置き、人間に注意を払わなかったのでしょうか」

人間があゝの繭に入ったところで、できることはたかが知れている。

その判断は妥当なものだが、今の状況では、こちら側の突破口に成り得る致命的なミスだった。

「……ケーサク、エータ」

ずっと思索に励んでいたマージョリーが、物凄く気が進まなそうに、二人の子分の名を呼ぶ。

「はい？」

「何です、姐さん？」

「アンタらにしか頼めないことがあるわ」

唐突に紡がれた提案。

呆けたように首を傾げる二人に向け、マージョリーが淡々と説明を付け加える。

「まず、アンタらに誘導標識の付箋を渡すわ。

これは私の自在法を引き寄せる効果がある　つまりは目印ね。

これを駅内のどこかに貼り付けてくれさえすれば、私の攻撃は攪乱の自在式に惑わされない。

そうすれば、私は警戒されずにデカイ自在法を使えるから、一撃で駅付近の飾りもぶっ飛ばせる」

「おい待てマジョリー」

話の進行に、奏夜が慌ててストップをかける。

「確かにそれなら、少なくとも駅付近の攪乱の自在式は無効化出来る。」

でも、田中や佐藤へのリスクが高すぎるだろ」

「奏夜くんの言う通りだ。それなら、私が彼らの代わりに侵入し、イクサで中から駅を破壊すればいいだろう？」

名護もまた人間である為、駅への侵入は可能。

場数を踏んでいる彼の方が、適任であるように思えた。

「ダメよ。」

駅の中に入れても、アンタの白騎士には、周りの飾り全てを破壊するだけの火力はないでしょ」

「しかし……」

「……私だって、誉められた策じゃないのはわかってるわよ。けど、他に良い案あるの？」

正論に言葉を詰まらせ、しかし尚も異議を唱えようとする名護に、佐藤と田中が口を揃えて言う。

危険を伴う作戦に対する恐怖はなく 単純に、憧れの人から頼られた、という歓喜の方が勝っていた。

「名護さん、やらせてください。今んとこ、それしか対処策がないんでしょっ？」

「俺達も何か、名護さん達みたいにな、出来ることをしたいんです」

真っ正面から見つめられ、熱意に負けた名護は、肩を落として溜め息をついた。

「……わかった。ただし、私も同行させて貰うぞ」

名護はおもむろに、懐からイクサナツクルを取り出した。

「護衛役くらいは構わないだろう？」

『弔詞の詠み手』

「ええ、最初から頼むつもりだったし、お願いするわ」

「ヒャーッハハ！！」

お前にしちゃ随分と配慮ある行動だブッ！」

「お黙り」

マルコシアスをブツ叩き、マージョリーはシャナ、カムシン、奏夜、太牙を見渡す。

「聞いている通りよ。私とケイスケで駅前の繭を何とかするから、ア  
ンタらは他の場所の飾りを破壊しときなさい」

「わかった」

シャナが使命感から強く頷き、奏夜と太牙もそれに習う。

「ああ、では私は残って、お嬢ちゃんと“教授”の目的を探りまし  
よう」

「うむ、『弔詞の詠み手』が攪乱の自在式を破壊してくれれば、『カデシユの心室』を通じ、お嬢ちゃんがああ、の繭を調べられるから」  
「う」

「じゃあ、悠二もここで待機しておけ。」

吉田の調査が進めば、また気付くことがあるかもしれないからな」

「はい、わかりました」

自らの分はわきまえている為、悠二の返答に迷いは無い。

付け加えるように、奏夜は彼に耳打ちした。

「シヤナとは、ちゃんと仲直りしとけよ」

「！………わかってますよ、言われなくても」

悠二はシヤナを目に収める。

凜とした態度は普段と変わらないが、ほんの僅かだけ、刺々しい雰

困気を醸し出しているようにも見えた。

悠二の目線に気付いたのか、シャナが傍へ寄ってくる。

奏夜を挟み、じっと向かい合うような様子だ。

「……あの、シャ」

「悠二」

沈黙に耐えきれなくなった悠二より早く、シャナが口を開いていた。

彼女にしては珍しく、声の端々から緊張を感じ取れる。

「悠二……怒って、ない？」

「！」

声の調子を弱め、瞳の奥に不安を隠す少女の姿に、悠二は心底驚い

た。

だがすぐに、

「……なんだ、そうだったんだ」

安心感から、相好を崩していた。

「な、なにがおかしいのよ!？」

「ご、ごめん、でも違うんだ。僕もてっきり、シヤナが怒ってる……  
……って思ってたから」

気づいてみれば、こんなもの。

すれ違って、互いに遠慮していただけ。

最初のギクシャクした空気は、どこかにすっ飛んでしまっていた。

「……怒って、ない？」



「うん、僕の方こそ、怒鳴ったりしてごめん」

「……うん。私も、ごめんね」

仲直りから生まれた歓喜に、二人は笑みを交わし合う。

「街を、みんなを頼むよ」

「うん」

憂いの晴れた様子で、シャナは悠二から離れ、奏夜を見上げた。

「良かったな。仲直りできて」

「うん」

満面の笑顔を刻み、シャナは再び、髪を紅蓮に染め上げる。

「行くぞ、奏夜」

「ああ、さっさと済ませて、花火の続きだ」

言いながら、奏夜は名護と太牙に目配せで合図し、屋上の柵近くに立つ。

「じゃあ久し振りに、三人でいきますか！」

「ああ、任せなさい」

「この街を、必ず守ろう」

名護と太牙も、強い意志を持ってそれに応えた。

「キバット!!」

「っしゃあ！ キバツて行くぜ！」

奏夜は、飛来したキバツトをキャッチし、自分の左手を強く噛ませる。

『ガブツ！』

スタンドグラスの紋様が、奏夜の頬に刻まれ、腰に巻きついた鎖が真紅の止まり木・キバツトベルトと化す。

キバツトを正面に突き出し、奏夜は叫ぶ。

名護は取り出したイクサベルトを巻き付け、手甲型の変身ツール、イクサナツクルを左手に押し当てる。

『レ・ディ・ー』

無機質な待機音が流れ出し、名護はイクサナツクルを右横に構え、叫ぶ。

「サガーク!!」

『!!』

太牙の呼び掛けに応じたサガークが、彼の腰に取り着き、白銀に輝くサガークベルトとなる。

プロトタイプフェッスル・ジャコーダーを携え、太牙は叫ぶ。

『変身!!』

キバットがベルトに止まり、奏夜に巻き付いた光の鎖が弾け飛ぶ。

『ファイ・スト・オ・ン』

イクサナツクルがベルトにジョイントされ、地面からアーマーの映像が現れた。

アーマーは名護の姿と重なり、頭部のクロスシールドが展開する。

『ヘン・シン』

スロットにジャコーダーをインサートし、一気に引き抜くと、サガークベルト中央部が回転。

蒼いウェーブが太牙の身体を駆け、目映いばかりの光が、ガラスになって弾け飛んだ。

仮面ライダーキバ。

仮面ライダーイクサ。

## 仮面ライダーサガ。

御崎市が　ファンガイアの中枢都市が誇る、三人の仮面ライダーだ。

壮観な光景に、誰もが息を呑んだ。

佐藤と田中に至っては、かつて恵から聞いた話を、記憶の底から引っ張り出していた。

今なら分かる。あの言葉の意味が。

四年前のこの街にはね、三人のヒーローがいたの。人知れず、仮面で正体を隠して戦うヒーローがね。

ヒーロー。

そう呼ぶになんの不満があるだろうか。

それほどまでに、三人の後ろ姿は絶対的で、何処か羨望すら感じる風格を、見る者に与えていた。

第二十話・ハーモニー／RIDER・S・FORCE・Aパート（後書き）

七巻は説明話が多過ぎる……なるべく簡略化したつもりですが、読みづらかったらすみません；

・初のトリプル変身！！

ようやく三人の仮面ライダーが揃いました……およそ連載一年をかけて（笑）

残るライダーもぼちぼち登場させたいです。劇場版ライダーを含め、資格者はもう全員決めてあったり。

次回で七巻は終わります。

サガの新しいフェッスルなんかも出ますので楽しみに。

PS

活動報告でも告知はしましたが、一応こちらにも。

今回『みてみん』サイト内にて、僕の小説『仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD』の主人公、紅奏夜のイメージ絵を投稿致しました。

以前、感想内で『奏夜はどんな容姿なんですか？』みたいな質問がありました、此度投稿させていただきました。

ただ……所詮はド素人の絵なんで、かなり雑かと思われます（汗）

奏夜のイメージCVなんかも発表してますので、紅奏夜のイメージ



を壊したくない！ という人は、あまりオススメしません。

見たい！ という心の広い方は、『みてみん』で『仮面ライダーキバ』を検索ワードに使ってみてください。それで引っかかります。

では、これからも『仮面ライダーキバ/BLAZING・BLOOD』をよろしく願いますm( )m

## 第二十話・ハーモニー／RIDER・S・FORCE・Bパート

御崎駅西口、駅舎メンテナンス用扉前。

「よし、これでいいかな。佐藤、お前も」

「もう貼ったよ。後はマージョリーさんの仕事だ」

「よくやってくれたな、佐藤君、田中君。さあ、早くこの場を離れなさい。もうじき戦いが始まる」

「はい、名護さんも気を付けてくださいね」

「俺と田中も、マル・ダムールでの花火、楽しみにしてますから」

「ああ、任せなさい」

白騎士を残し、二人の少年は去っていく。

街を守ると約束してくれたヒーローへの、激励と期待を残して。

自分が担う役割の重みを再認識し、白騎士　イクサは通信の自在式が込められた付箋を取り出す。

「準備は整ったぞ」

『よーっしゃ、上出来だ。ご兩人も白騎士の兄ちゃんもやるねえ』

『んじゃ、そろそろ行くこうかしらね』

軽薄なマルコシアスの笑い声と共に、通話向こうで炎が弾ける音が聞こえてくる。

マージョリーが炎の衣『トーガ』を纏ったのだろう。

『遠慮容赦ナシの全力で行くから、せいぜいケイスケは吹き飛ばさないよーにね』

「今更爆発如きでどうこう言わんさ。思い切りやりなさい」

「ヒーツヒヒ！ 言ってくれるねえ、んじゃ早速……」

駅舎の外で、トーガが鋭い牙の奥に、群青の炎をたぎらせ、駅舎内のイクサは、白色のフェッスルを取り出す。

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

光子力を纏った赤い刀身が、シャッターの先を覗む。

『ギイヤーーーーッハハハハハハ！ 殺すぜ、壊すぜ、食いちぎるぜえっ！……』

『ぶち壊してぶち壊してぶち壊してぶち壊すわよっ “紅世のっ、徒” あー！ー！ー！ー！』

「イクサ、爆現！！」

『んなあ！？』

この駅舎を守る教授の“燐子”、ドミノでさえ、何が起こったか理解出来ぬまま、群青の火炎弾が、山吹色の剣閃が、駅舎のホームを吹き飛ばした。

「たーまやーっ！……っつて言うには、ちょっと情緒が足りないかね」

「馬鹿なこと言わないの。戦いなのよ」

狂乱の渦中から、少し離れた高層ビル。

太牙が経営する企業『D & P』本社の屋上で、キバ、シャナ、サガの三人は待機していた。

御崎市駅には群青と山吹色の爆炎が上がり、さながら狼煙のように、戦いの始まりを告げている。

「私は“教授”を討滅する」

紅蓮の輝きを瞳に灯すシャナ。

憂いは完全に消え去り、フレイムヘイズとしての自分を取り戻している。

「駅を破壊するのが一番手っ取り早いけど、また何かされる可能性もある」

「うむ。その場合に備え、やはり大元を絶っておくべきであろう」

アラストールが補足し、キバとサガも同意する。

「では僕らは、予定通りに駅舎以外の飾りを破壊しよう」

「うん。粗方終わったら、兄さんは駅舎の方を手伝いにいってくれ。俺はシャナと一緒に“教授”を止める」

今回の相手は、あまりに奇天烈な戦法を取る。  
シヤナの直線的な力だけで、“教授”に対応できるかどうかは、正直微妙なところだ。

「シヤナもそれでいいか？」

「うん、わかった。奏夜が来る頃には、終わってるかも知れないけど」

「はっ、お前も言うようになったな」

皮肉っぽい笑みを浮かべ合い、シヤナは紅蓮の双翼を羽ばたかせ、夜空に紅い軌跡を描きながら飛び去っていった。  
フレイムヘイズの少女を見送り、キバはオレンジの塗装が成されたフェッスルを取り出す。

サガはというと、見慣れないサファイアカラーのフェッスルを携えていた。

「兄さん、それは？」

キバが知る限り、サガが保有するフェッスルはウェイクアップフェッスルのみ。

最初期に制作されたが故の弊害であり、サガの弱点でもあったのだ

が……。

キバの心中を見越したサガは、

「サガの新しいフェッスルだよ。そろそろ、一本だけではキツくなってきたからね」

キバがよく見れば、サガークベルトのホルダーには、いくつか初見のフェッスルが収められていた。

彼なりに強さを追究した結果、といったところか。

「さっすが兄さん。じゃ、そろそろ……」

「ああ、行こう！」

それぞれのフェッスルを、キバットとサガークが吹き鳴らした。

『キャッスルドラーン!!』

『ヨルムンガンド』

ギャオオオ！！

キュルオオ！！

主の呼び掛けに応え、キャツスルドランとシュードランが、天空から屋上に降り立つ。

『奏夜、知り合いは全員、クイーンの洞窟へ避難させたぞ』

「サンキュ、次狼」

中から聞こえる次狼の声に礼を言うキバ。

と、

シャガアアアツ！！

次なる異形の鳴き声が、大気を震わせた。高層ビル下の地面が大きく揺れ、巨大で細長い生き物が、硬質なアスファルトを砕いて飛び出してきた。



黒く固そうな鱗が身体を覆い、体面には禍々しい紋様。同じく黒い鬣に、幾重にも彎曲し、枝分かれした角。細長く黄色い瞳は、一睨みで相手を射殺せると錯覚するまでに鋭い。

ヨルムンガンド。

サガの新たな眷属にして、キャツスルドランと同じドラン族でありながら、その出自を全く異にする蛇神だ。

「おお、またデカいの連れてきたね兄さん……」

「デカいだけじゃないぞ。僕でさえ、フエッスルを介さなければ扱えないじゃじゃ馬だからな」

サガがビルの縁に立ち、ヨルムンガンドに手を伸ばす。しばらくして、ヨルムンガンドは恭しく頭を垂れ、主をその上に乗せた。

「僕は西側を殲滅する。お前は東側を頼む」

「りょーかい!!」

シュードランの足に掴まり、キバはキャツスルドランの頭上に着地。

シュードランはその後部、ドラムマウントに合体した。

途端 キヤツスルドランの眼が鋭く輝く。

瞳孔は開き、小さかった黒い翼は、ドランの側面全てを覆えるまでに広がる。

ギャオオオオツ！！

普段は抑えられていた闘争本能が、シュードランによって覚醒したウェイクアッブキヤツスルドランは、天を震わす叫びと共に舞い上がった。

「兄さん、気を付けて」

「そっちな」

戦士として、必要最低限の言葉を贈り、二人はそれぞれの目的地へ。

兄は大地を、弟は天空を進む。

一方、戦乱の渦中にある御崎市駅では。

「ちっ、これじゃ結構時間かかるわね」

「ドミノの野郎も逃げ回ってるみてーだしなあ」

「愚痴を言う隙があるなら、手を動かさない」

火炎弾とトーガの剛腕で御崎市駅を破壊していくマージョリー。  
イクサカリバーを乱射イクサは新たなフェッスルを取り出す。

「今は敵の自在式を破壊することだけを考えなさい。壊すのは君達の得意分野だろう」

「は、言ってくれるじゃない、のッ!」

キラキラした戦意が迸り、トーガから再び特大の火球が吐き出された。

『パ・ワ・ー・ド・イ・ク・サ・ー』

無機質なコールから程なくして、重厚なエンジン音が轟く。

駅舎の壁を豪快にぶち破り、イクサの所有するドラゴン型重機『パワードイクサー』が現れた。

「頼むぞ、パワードイクサーー!!」

コックピットに、起動キーたるイクサナックルを差し込み、パワードイクサーが雄叫びを挙げる。

「ハッ!!」

機体を駆るイクサは、マシン後部のイクサポッドを、パワードイクサー頭部を使い投擲していく。  
マジヨリーの大破壊も相成って、威力は更に上がっていく。

と、

《ああ、『弔詞の詠み手』に名護啓介、聞こえますか》

通信用の付箋から、カムシンの淡々とした声が届く。

「どうした、何かわかったのか？」

「ええ、駅周辺の攪乱が消えたお陰で、お嬢ちゃんが敵の“自在式”の正体を感じ出来ました。 奴の狙い 駅舎にあるものは、“探耽求究”到着によって起動する調律の“逆転印章”（アンチシール）です」

「はあ！？」

「おーいおいおいおい！！ 新手的パーティージョークにしちゃ悪質過ぎだろお！？」

「“逆転印章”？」

敵の狙いに、驚きを通り越して呆れるマージョリー達に対し、自在式に疎いイクサは、彼女らが取り乱す理由を理解出来なかった。

「何かマズいものなのか？」

「単体じゃ意味の無い自在式よ。自在法を正反対の向きに作動させる為の自在式でね。普通は防御陣なんかに使われるんだけど……」

「調理の正反対……待て、まさか！？」

ようやく話の根幹が呑み込めたイクサに「ご推察の通りだよ」とマルコシアス。

「俺達のミナミナ大破壊とは比べもんならねえ、まさに“完全破壊”ってヤツだ。発動しちまったら最後、この街はごっそり、世界から切り取られちまうぜえ？」

さすがのマルコシアスも、普段の軽薄な態度は微塵も見せなかった。

“教授”の目的成就が引き起こす大災害が、どれだけの影響をもたらすのかを物語っていた。

「……こうしてはいられない」

ショックから我に返り、イクサは操縦桿を握り締める。

「一刻も早く、ここを破壊しなければ……！」

《ああ、言われるまでもありません。我々も直ちに攻撃に加わり、駅舎を破壊しますので、よろしく》

カムシンの堂々とした宣言に、青ざめたのはマージョリーとマルコシアスだ。

「え、ちょっと待ちなさいよ！」

「馬鹿おめーら、俺達がまだ中に」

抗議する二人を鮮やかに無視し、カムシンは一方的に通信を切った。

「あ、の、クソ爺い共……！！！」

通信用の付箋をぐしゃりと握りつぶし、マージョリーはイクサに告げる。

「ケイスケ、もう一発デカいの叩き込んだら、さっさとずらかるわよ……！」

「何を馬鹿な！ さっき早く駅舎を破壊すると言っただけ……！」

「いーからさっさとその恐竜をUターンさせろい……！」

いつになく焦る二人にただならぬものを感じ、イクサは渋々、三発ほどのイクサポッドを叩き込み（マージョリーも特大の炎弾を置き

土産にした)、パワードイクサーが開けた風穴から脱出を図る。

イクサとマージョリーが駅を出たのと、突然沸き起こった爆風が、二人をぶっ飛ばしたのがほぼ同時だった。

「なっ!?!」

「んきゃー!?!」

「オギヤー!?!」

間の抜けた悲鳴を挙げ、マージョリーはトীগごと、イクサはパワードイクサーごと、駅舎前の大通りに投げ出された。

「くっ、い、一体何が……?」

操縦桿を動かしてパワードイクサーを起こし、イクサは再び御崎市駅を見る。

天から降り注ぐ、炎を纏った岩石弾が、隕石よろしく駅舎に降り注いでいる。



自分はあれに吹き飛ばされたのだ。

《よーくーもーやったなー！？》

中を管理するドミノの叫びが聞こえ、イクサの隣にいたマージョリーは、自分の背後目掛けて怒号をぶつける。

「ちょっと爺い、外れてるわよ！  
相手を怒らせただけじゃ意味ないでしょうが！」

《ああ、それはどうも。しかし事前に断りは入れておいた筈ですが》  
「思いやりが足りねーんだよ、てめーらにゃ！」

マージョリーとマルコシアスのシャウトが届く先　ちようどさっきまで自分達のいた、旧依田デパートの方に顔を向けるイクサ。

「な………！！」

見た途端、絶句した。

そこにはパウードイクサーを優に越す、瓦礫の巨人が立ち上がったからだ。

カムシンが操る瓦礫の巨人を、キバは遠目から眺めていた。

「すげえな……あの偉そうな態度は伊達じゃないってわけか」

ちょうど旧依田デパート付近をドランで飛んでいたキバは、その一部始終を目撃していた。

奏夜達に、“逆転印章”を伝えたかと思うと、カムシンは向かいの廃ビルに飛び込んだ。

途端、屋内から例の“カデシユの血脈”という綱のような炎が、廃ビルを駆け巡り、自在式が発動。コンクリートが内部から爆ぜ、廃ビルが巨人生成の材料へと組み変わり、カムシンの力の証たる、褐色の炎を吹き出した。

カムシンが持っていた布巻き棒『メケスト』は、巨人が瓦礫を炎で繋げて作り出した、超重量級の鞭の柄になっている。

イクサ達を吹っ飛ばされた爆風は、この『メケスト』の一雑ぎによるものだ。

「あの破壊力じゃ、俺が行っても無駄骨だな……」

「なら、“教授”をさっさと止めちまおうぜ。ヤツの目的も分かったし、ここらの飾りを壊すよか効率的だ」

キバットの提案を聞き入れ、キバはキャッスルドランを、線路へ向けて駆る。

駅舎の飾りが壊れたのなら、それ以外の場所を壊すメリットは少ない。

ならば、相手の勝利条件を潰しにかかるべきだろう。

黒い翼を羽ばたかせるキャッスルドラン、その眼下には、見慣れた線路を疾走する奇妙な列車の姿があった。

「あれ、シャナがない？」

訝しみながらも降下し、列車の隣にドランを付ける。

「取り敢えず、一当てしておくか。ドラン！」

ギャオオオオッ！！

ドランが吼え、身体の側面に備え付けられたマジックミサイルが火を吹いた。

目映い爆炎と共に、列車の正面部分が消し飛ぶ　はずだったのだが、

「あ？」

「なぬっ？」

二人が目を剥いた。

ドランのマジックミサイルが、奇妙な方向へ弾道を曲げたのだ。

しかし、件の攪乱の自在式とは異なり、湾曲したミサイルは、列車の後部へ命中し、爆炎を上げた。

「ぬぁーんて野蛮なことを、しいーてくれるんですかぁ!？」

と、列車の前方に、せり上がった運転パネルと、その運転手“探耽求究”ダンタリオンが立っていた。

「攻うー撃をブチ当てるなら、真っ正面から当てなさい!!」  
側面から当てたせいで、後ろに弾道が曲あーがってしまったではありませんか!!」

「……初対面の相手、しかも敵にツツこむのはどうかと思うが、それでも敢えて言おう。そんなに列車が大事なら、後ろにも自在式かけとけや」

「列車ですとお!？　そおーんなもので一括りにしないでほしいたいですねえ!!　そおーもそもこの『夜会の櫃』は」

教授の話が終わるより早く、ドランの第二波が列車を襲う。

が、今度は列車の中から現れた巨大な野球バットが、ミサイルを全て打ち返してしまう。

「タイムボカンに出てきそうなメカだな……ったく」

弾かれ、空中で爆発するミサイルを見ながら、キバがうんざりしたように呟く。

「おい、マッド博士。一つ訊かせる。俺の仲間、『炎髪灼眼の討ち手』が先にここへ来てた筈なんだが」

「んんー？ やぁーはりフレイムヘイズとのパイプを持っていたようですねえ？ ファーンガイアの王は」

メガネを押し上げ、心底面白そうに、教授はニヤリと笑う。

(こいつ……俺を、キバを知っているのか?)

反対に警戒心を強めるキバに、教授は言う。

「『炎髪灼眼の討ち手』はこおーの中にいますよお？」

教授は自分の足元　つまり、『夜会の櫃車』の車両の一つをダンダンと踏み鳴らす。

見れば確かに、その車両だけ、隙間から微かに紅蓮の炎が漏れていた。

「さぁーきほど私の『夜会の櫃』をウエルダンにしてくれましてねえー？　少々大人しくしてもら　んん？」

教授が言葉を切る。  
贄殿遮那と思しき刀が、車両の屋根に突き出したのだ。

「あつ、さあーでは直接、私の『夜会の櫃』をお破壊しよおーうと  
していますねえ？　全く無うー駄なことを、えいや」

教授は操作パネルの傍らにあつたレバーを、グイと引っ張った。

途端、

『　　つ！ー！』

中からこの世のものとは思えないシャナの悲鳴が聞こえてきた。  
何が起こったのかと心配するキバの目の前で、あまりの大暴れつぷ  
りに、列車の車輪が2つ外れる。

「んんー？　お女の子なのに五百匹かあらなるアグレエーツシブ  
な『我学の結晶エクセレント29004　毛虫爆弾』が逆ー効果の  
よおうですねえ」

「いじめっ子かー!!」

不憫過ぎるシャナの為、キバは全力で抗議する。

「何でそんなピンポイントかつ緊張感のない罠が搭載されてんだよ  
!!」  
俺が言うのもあれだが、もっと残虐性に特化したヤツ使え  
よ!!」

「わあーかってませんねえ。そおーんな何の捻りもなさそうなもの  
作ってなあーんになるんです? それと、罠ではあーりません!!」

『我学の結晶エクセレント29004』

「だあー!! うぜえ!! どのエクスカリバーだテメエはあ  
!!」

教授のあまりの変人奇人っぷりに、理性の許容範囲内を超えたキバ  
は、キャッスルドランからジャンプし、ライダーキックを教授に叩  
き込もうとする。

「無う駄ですと言ーってるでしょお?」

またレバーが引かれ、『夜会の櫃』内から飛び出してきたトンカチ  
が、キバを殴りつけた。



「痛っ！」

回避が出来ぬまま、キバは車両の屋根を転がる。

「さあーらに、ポチッと！」

教授が手近にあるボタンを押すと、キバのいた車両の屋根が、まるでどんでん返しのようにくるりと反転した。

「なっ、忍者屋敷かよ!？」

驚愕と共に、キバは車両内の床に叩き付けられた。その間に屋根は再び回転し、閉じ込められてしまう。

「くそっ、まったく動きが読めねえ。認めたくないが、かなり厄介な……」

「奏夜、気い抜くな!!！」

キバットの声で、キバも気付く。床の一角が開き、大量の何かが這い出てきたのだ。

いやに細長く、色素が薄い。生物兵器か何かか。

「蛇、にしちゃ小さいな……奏夜、用心しろよ」

「ああ。毒か何かを持つてる可能性もあるからな。十分に間合いを取っ、て……」

キバの声が、どんどん尻すぼみになっていく。

蠢く“何か”の姿を視認した途端、仮面の下にある奏夜の顔から、色が失われていった。

「な、ななな……」

じりじりと、キバが後退りを始める。

何故なら、その“何か”は、奏夜の数少ない弱点だったからだ。

蠢くその名は 『我学の結晶エクセレント28223 糸こんにゃく蛇』。

父、紅音也が苦手としたものであり、その息子奏夜も、食べた瞬間

気絶するという脅威の加工食品。

「　　っだからなんでこんなピンポイントな発明があるんだよおおおおおー！？」

もつともな意見は、列車の喧騒によってかき消された。

あらゆる事態を想定し　　おおよそ何にでも備えてある、それが教授の我学の強みなのである。  
キバとシャナ、二人分の悲鳴がデュエットを奏でる中、『夜会の櫃』は汽笛を吹き上げ爆進する。

目と鼻の先にある、御崎市崩壊という名のゴールへと。

巨人の放つ褐色の炎を纏った瓦礫『ラーの礫』が巻き起こす大破壊を、マジヨリーとイクサは何とも言えない面持ちで眺めていた。

「さすがに負けるわ、これは」

「まー、俺達の役目は最初で終わったようなもんだからな」

「うむ。最後が他人任せなのは少々気が引けるが、あの力なら、我々よりも効率良く……?」

イクサは言葉を切り、闇に包まれた夜空を睨む。

数百羽の影が、御崎市駅を取り囲む形で近づいて来ていた。攪乱の自在式を生み出す、例の鳥の看板である。

「いけない、ドミノの奴、破壊してなかった分を呼び戻してるわ！」

「何!? あれが一定量集まれば、攪乱の自在式がまた発動してしまうぞ！」

《ああならば、集結する前に破壊しなければなりませんね》

「やーれやれ、この世ってなあ、我慢までさせてくんねえのかあ？」

ヒッヒッ

全員が、標的を鳥の看板へと移す。

それを狙い澄ましたかのように、駅舎前の大通りを這いながら、大蛇ヨルムンガルドが到着した。頭部には、サガの姿もある。

「太牙！」

「済まない。いくらか破壊し損なった。ヨルムンガルド！」

シャガアアア！

ヨルムンガルドが吼え、大きく裂けた口から、紫色の閃光が吐き出された。命中した数十枚の看板が、一瞬で腐敗し、地に細かな木屑だけが残る。

全てを腐食させる神の毒、“ヘルデッドブレス”だ。

「大通り側は僕がやる。名護達も四方について、看板を迎撃してくれ！」

「ああ、任せなさい！」

イクサ、マーシヨリー、サガ、カムシンが、全方位を取り囲み、各

方向から来る看板を迎え撃つ。

イクサの駆るパワードイクサーの投擲するイクサポッドが。マージョリーの『屠殺の即興詩』による群青の火炎弾が。カムシンの振るう『メケスト』から放たれる『ラーの礫』が。サガが操るヨルムンガルドが吐き出すヘルデッドプレスが。

歴戦の戦士が放つ四位一体の攻撃に、看板は次々と爆砕していく。

だが、

「ちっ、数が多いな」

サガの言うように、どれほど薙ぎ倒しても、すぐ次の波が来る。防げはするが、攻撃に転じる余裕も無い。

「先に駅の“逆転印章”を破壊するのは、やーっぱ無理かしらね」

「ドミノの野郎を一撃で破壊できるんなら、それもいいがよー、奴は親玉に似て逃げるのだからやーめえからな」

「逃げ回られている内に、攪乱に必要な看板が揃っては元も子もない。今、我々に来るのは足止めだけだ。“教授”討滅は、シヤナ

君と奏夜君に任せておきなさい」

「まったく、またソウヤとチビジャリに託すしかないってわけね……  
って」

マージョリーの視線は、高架上にある線路の先へ向いていた。

もうそれほど遠くない距離、“逆転印象”発動の最後のピースたる奇妙な列車『夜会の櫃』が近付いてきていたのだ。  
多少破損してはいるものの、その周囲にキバとシャナの姿は無い。

無情にも吹き上がる汽笛に対し、マージョリーは額に青筋を浮かべる。

「あー、もう！ 言ってる傍からなにやってんのよ！ あの二人は！」

「ああん？ 気配はあん中だぞ。嬢ちゃんとキバの兄ちゃんが、大人しく捕まってるたあ思えねーが」

「何にせよ、最悪のタイミングだな」

忌々しげにサガが舌打ちする。

手が離せないこの状況で、相手の勝利条件が破壊出来ていない。あちらが立てば、こちらが立たずだ。

「こつなつたら意地でも看板を破壊し尽くすしかないな。おい名護  
!」

サガがイクサに呼び掛ける。

だが当の本人は、線路を爆進する『夜会の櫃』を見たまま、微動だにしない。

「名護？」

「ケイスケ？」

看板を壊す傍ら、サガとマージョリーは再度呼ぶと、イクサは仮面の下で、僅かに唇を動かした。

「んだ」

『はっ』



「なんだあのふざけた列車はあああああー！ー！ー！」

ビール瓶300本は粉々にしそうな、イクサの壮絶なシャウトに、さすがの二人も肩を跳ね上げる。

「フォーム、蒸気機関、どれをとっても列車の常識を大いに逸脱しているツー！　古き良き時代のロマンがまるで感じられん！」

人が変わったように、鉄道談義を始めるイクサ。

あまり知られていない事実だが名護啓介、鉄道マニアである。

「大体なんだあの緑色の炎は！！　蒸気機関から迸る炎は、造り手と運転手達の汗と涙の結晶！　それをあんな不細工な炎で汚すなど考えられん！　開発者の顔が見てみたいわ！！」

《ぬあー！ー！ですとおー！ー！！》

さすがに届いたのか、当の開発者がいたく憤慨した様子で、拡張された抗議を飛ばす。

《聞いていき捨てたりしませんねー！！　こおーのかあーんべきなるフォルムが理いー解できないというんですかあー！？》

「黙りなさい！　そんなもの、列車とは認めん！！　謝りなさい！　偉大なるステイヴンソンとトレビシツクの墓前で、頭を擦り付けて詫びなさい！！」

価値観の相違が、無意味な論争を生み出していた。置いてけぼりな周囲に、イクサはただ一言。

「あれを落とすぞ！　あんなものがレールの上にあるなど耐えられん！」

「ああん？　落とすったつておめー、トンチキ発明王もその辺りは警戒してるだろ。また妙な自在式で邪魔されんのがオチ……」

「違う。狙うのは高架と線路だ！」

イクサの言葉に、全員が水をかけられたようにハツとする。

いかに高度な発明でも、列車である以上、所詮はレールを走る乗り

物。  
足場を奪えば、下に自然落下する！

「『儀装の駆り手』。お前のパワーも必要だ、手を貸しなさい！」

《ああ、勿論　！！》

《うむ、『アテンの拳』を！》

巨人の腕とパワードイクサーが、線路方面に狙いを定める。

途端、巨人の腕がロケットパンチよろしく、褐色の炎を噴射しながら射出された。

パワードイクサーも、乗り手の怒りを示すように、有らん限りのイクサポッドが、豪速球のレベルで投擲していく。

頑丈なコンクリートと言えど、フレイムヘイズきつての壊し屋と、本気ギレ状態のイクサにかかれば一溜まりもない。細かな瓦礫と粉塵が散り、『夜会の櫃』の進行方向から、進むべき線路がごっそり抜け落ちる。

「のおーう！！　なあーんてことおしいーてくれるんですかあ

！？」

自らを待ち受ける断崖に、教授は絶叫する。  
足場を失い、列車の終着駅は奈落の底。

となるはずだった。

「  
が!?!」

その場で一回転という、いつそ清々しいまでのオーバーアクションを決め、教授はパネル中央の巨大なボタンに、人差し指を添える。

「こおーんなこともあーろつかとお！      スイッチ      、オン!?!」

2299

ポチッ、という効果音も欠かさず、夜会の櫃の正面ライトが、ピカッと輝いた。

「なあ!?!」

「んげえ!?!」

マージョリーとマルコシアスが、本気で驚く。

サガとカムシンでさえ、驚愕に身体を硬直させていた。

シャキーンという耳障りの良い駆動音と共に、『夜会の櫃』の両サイドから、メカニカルな翼が飛び出したのである。

「さーあ飛べ、『我学の結晶エクセレント29182 夜会のお  
ー櫃』!!!」

「…………どこまで列車を愚弄する気だ貴様ああああ!!!」

イクサの怒号も虚しく、『夜会の櫃』は後部からのジェット噴射で、御崎市駅へと飛び立つ。

「 エーキサイティング!!! エークセレント!!! 見  
よ、世界はこんなにも美しい!!!」

教授は屋根の上で両手を広げ、完全勝利の高笑いを挙げる。  
吠える負け犬の表情を見てやろうと、列車下に目を向けた。

「つな、なな？」

教授の表情に、初めて焦りの色が浮かぶ。

『夜会の櫃』の進路が上反りになり、どんどん上昇していくのであ

る。

それもそのはず。

列車の床側に空いた穴から、シャナの腕が伸び、紅蓮の炎を放出していたのだから。

強大な推進力により、夜会の櫃はどんどん反り返っていく。

ギャオオオツ！！

「おおおっ！？」

龍の激昂が、教授の鼓膜を突く。

主の身を安じるキャツスルドランが飛来し、トドメと言わんばかりに、下側から『夜会の櫃』をひっくり返した。

「ああーれえー」

真つ逆様に『夜会の櫃』は、乗り手を巻き込み落下していく。

刹那、床面を強引に切り裂き、車内から飛び出した二つの影があった。

毛虫の大群により、ガサガサにされた髪を逆立てるシャナ。

糸こんにやく蛇のぬめった体面により、鎧全体が奇妙な光沢を放つ

ているキバ。

両者とも憤怒に身を震わせ、（キバは仮面の下で）軽く半泣き状態だ。

『よくも、よくも　　！！』

シヤナの贄殿遮那に紅蓮の炎が、キバのザンバットソードに真紅の魔皇力が宿る。

『この、大バカ（野郎）——ッ！』

「ほんぎゃー！？」

落下した列車は主を押し潰し、その頭上から、紅蓮の奔流と、巨大な半円形の衝撃波が、『夜会の櫃』ごと“教授”を呑み込んだ。

《きよ、教授　　！！》

駅舎内から絶叫するドミノに構わず、シャナと共に着地したキバは、未だ怒りの収まらない声で叫ぶ。

「名護さーん、兄さーん！！」

キバが赤いフェッスルを取り出したのを見て、イクサとサガは、呼び掛けの意味する所を察した。

「太牙！！」

「分かっている！！」

イクサは脚を模したフェッスルを、サガは蛇の意匠がなされたフェッスルを取り出した。

『WAKE・UP！！』

『イ・ク・サ・レ・ッ・グ・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ』

『ウエイクアップ』



キバの左足のヘルズゲートが解放され、真紅の翼が靡く。

イクサのコロナコアが展開し、生成された光子力エネルギーが、山吹色の光となって、右足に収束する。

サガはジャコーダーを両足に巻き付け、そのままサガークベルトへインサート。ジャコーダーを介し、サガークの魔皇力がサガの両足へ供給されていく。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈めえ！！」

「その命、神に返しなさい！！」

「王の判決を言い渡す。死だ！！」

各々の力の象徴たる三日月、太陽、蒼月をバックに、三人は天高く飛び上がる。

キバの翼を生やした左足からの『ダークネスムーンプレイク』。

イクサの太陽光に輝く右足から放つ『イクササンライズパニッシュャー』。

サガの螺旋状の紅光を纏った錐揉みキック『スパイラルデスプレイク』。

《 はひえ！？ 》

三人の戦士が放つトリプルライダーキックが、ドミノの守る御崎市駅に炸裂し、辿り着く列車を無くした駅舎は、爆炎を上げながら崩壊していった。

まだ毛虫と蛇が残っていないかと、身体中を粗探しするキバとシヤナはふと、ほぼ同時に呟く。

『……なんで最初からあの翼で飛んで来なかったんだろっ？』

「知らん」

「切り札にしておきたかったんじゃないか？」

「飛んで見せて、驚かせたかったのだから」

イクサ、サガ、アラストールが、至極どうでも良さそうに答えた。

「ゆかりちゃん、今日から『シヤナちゃん』って呼ぶね」

吉田が穏やかな口調で言った。

「うん」

場所は『カフェ・マル・ダムール』。

全てを片付けた面々は、シャナ達を加え、当初の計画通り、小さな花火大会を開いていた。

「私ね、ずっと感じてたの」

「なにを」

調律は吉田のイメージを使い、今度こそ滞りなく行われた。久しく感じなかった、街というコミュニティが生み出す暖かさを、全員が感じていた。

「坂井君と、ゆ シャナ、ちゃんとの間にある、私には見えない、絆みたいなもの」

「そう」

太牙が蛇花火に火を付け、カムシンとサガークは物珍しそうに、日本独特の花火に魅入っていた。

「それが、羨ましかった。きっと私には分からない、なにか特別な関係なんだと思ってた」

「その、通りじゃない」

名護と恵は、由利と共にスパーク花火に興じている。辛い戦いの余韻を忘れさせてくれる、家族だけの時間だ。

「うっん、違う。特別じゃない。同じ場所に立ってるだけ。普通の人間には見えない世界に一緒にいる、そんな繋がりだと、今では思ってる」

「……だから、なんだっていうの」

佐藤と田中が、打ち上げ花火をセットする。祭りでは終ぞ見られなかった夜空に咲く花に、マジヨリーもまんざらではなさそうだった。

「だから私、改めて言うね」

次狼とマスターが悪のりし、数個の爆竹花火の導火線を纏め、一気に火を付けた。弾ける騒音に、ラモン、カ、嶋が耳を塞ぐ。

「これで、私とシャナちゃんは、本当に対等だから」

“こちら側”に来る覚悟を決めた少女の言葉に、シャナは言い知れない恐怖を覚えた。

「……わ、私」

怯えから、自分の持つ線香花火に目を落とす。

もう吉田は、どうしようもなく強い敵となっていた。

幼稚な独占欲などものともしない、強い想いを秘めた少女。

だがシャナの中では、自分から動くしかないという気持ちと、動くことでフレームヘイズたる自分の有り様が変わってしまうという気持ちとが、互いにせめぎ合っていた。

それでも必死に、酷く弱々しい声で、シャナは言う。

そうすることしか、できなかった。

「私は、悠二が好きなの」

「うん、知ってる」

僅かな反撃さえも受け止め、吉田は揺らぐことなく、シャナを迎え撃った。

「私も、坂井君が好きなの」

「……………」

悠二、静香、キバットとキバーラの四人と、線香花火を楽しみつつ、奏夜は二人の少女の話を聞いていた。

(これは吉田が一步リードだな)

今回の一件で、吉田はシャナと同じステージに立った。

カムシンや太牙との邂逅が、彼女を劇的に変えたのだ。

ならばシャナもまた、自分の殻を破らなければならない。

シャナが本当にしたいこと　　心の声を聞かなければ、この状況は  
ひっくり返せない。

いずれにせよ、二人の勝負はこれからだ。

（なるべく早めにケリがつくといいんだけどねえ）

苦笑して、奏夜は誰にも聞こえない小さな声で、ぼつりと呟いた。

「俺には、あまり時間が無いからな」

奏夜の線香花火が、静かに地面へ落ちた。



断章・SLEEPING・UNKNOWN

「やれやれ、ようやくと見つけたわ」

「んー？」

「はえ？」

『我学の結晶エクセレント7930 阿吽の伝令』により、すんでのところまで難を逃れた教授とドミノを待ち受けていたのは、一人の女性だった。

長身に、タイトスカートを着こなす妙齡の美女で、その周囲には幾重もの鎖が蠢いていた。

右目に眼帯、しかし左目に加え額にも目がある、三つ目の女性。

〔仮装舞踏会〕三柱<sup>トリニテイ</sup>臣、ヘカテー、シュドナイと並ぶその一柱“逆理の裁者”ベルペオルだ。

「はづあー！ 軍師さま！？ きよきよきよ教授、みみみ見つかっちゃっはひはひはひ（たいたい痛い）」

「あまり遠くにお行きでないよ、“教授”。“壊刃”に行き逢って行く先を聞けなんたら、どうなっていたことやら」

「んー、やあはり、奴の雇いを解おーくべきではありませんでしたねえ」

困ったように頬を掻く教授に対し、女性は感情の読めない笑みを浮かべた。

「実験も一段落したのだろうか？　そろそろ私たちの方も、手伝ってはくれないかね？」

「んんー、「仮装舞踏会」でえすかー？　『星黎殿』も『暴君』も、いいー加減いじるのに飽あーきたんでえすがねえ？」

「近々、『零時迷子』が手に入るかもしれない、としたら？」

教授の目の色と気分が、一瞬で変わった。  
ドミノをどつき、すぐ様、次の実験場への引越準備にかかる。

その様子に口角を吊り上げたベルペオルは、思い出したように付け加える。

「ああ、そうそう。もう一つ、お前さんが興味のあるものがあるんだがね」

「ほーう？　あなたにしてはいいー前が良いですねえ？　な

あーにか裏があるんでえーすか？」

「いやいや、これは単純に、我々の大命と関係ない話だけさね」

訝しむ教授に向け、ベルペオルは告げた。

「教授、“深淵のキバ”について、興味はあるかい？」

「おいドラグ、教授はやられたみたいだぜ？　早くしねーと感づかれるぞ」

「待て。もう、終わる」

奏夜達が戦った御崎市。

限られた者しか知らないある入り口を使い、ドラグとゼブは御崎市の遙か地下を通る、隠された洞窟の深部にいた。

続く道には何重にも罫が仕掛けられていたが、二人にとってはなんのこともない。

遂にドラグは、巧みに魔術を操り、奥へ続く最後の結界を破る。

石造りの重々しい扉が開き、中の光景が二人の目に飛び込んできた。

そこにあったのは　黒塗りの大きな棺桶だった。

古めかしい様式だが、貴重な宝石や装飾がいくつも成され、埋葬された人物の地位が見受けられる。

フードの下でドラグが歓喜に身を震わせ、軽薄なゼブでさえも、神妙な様子でその棺を見ていた。

やがて二人は棺の前で、恭しく膝を折る。

『お迎えに上がりました。我らが主よ』

## 断章・DESTROYER・OF・THE・WORLD

その日、奏夜は次の授業のため、一年二組へと足を運んでいた。

階段をゆったりとした動作で上がり、踊り場に立つ。

「……………」

ふと、頭上に位置する二階の廊下に、誰かが立っているのがわかった。

一昔前の旅人のようなコートを身に纏い、鍔のついた帽子と眼鏡を着た中年の男性。

見ない顔だ。

生徒というには無理があるし、かといって教員なら奏夜が知らぬ筈がない。

「……………」あー、一応部外者の立ち入りは「

「いつか、君の前に悪魔が現れる」

「は？」

男は急にわけのわからないことを言い出しかと思うと、次の瞬間には、奏夜の背後に回り込んでいた。

「ッ！」

奏夜は慌てて飛び退く。

今、この男は何をした？

自分に視認されず、後ろに回り込むなど不可能。

異形の存在ならまだわかるが、気配でわかる。こいつはファンガイアでも“徒”でもない。

驚愕を隠せない奏夜に、男は続ける。

「その悪魔は、これまでも様々な世界を破壊してきた。完璧な調和の保たれたこの世界でさえも、あの悪魔は破壊してしま

うかも知れん。

悪魔を破壊しろ。君の世界を破壊されたくなければ」

言い置いて、男の姿は突然現れた不気味なオーロラの中に消えていく。

「なっ！　おい、待てよ！」

「その悪魔の名は“デイケイド”。  
忘れるな。ヤツを、世界の破壊者をこの世界から排除するのだ！」

言い終わるか言い終わらない内に、男はオーロラの壁に呑まれ、姿を消した。

「……世界の破壊者、“デイケイド”？」

一人取り残された奏夜は、呆然とその名を呟いた。



次回、仮面ライダーキバ／BLAZING・BLOOD！

「奏夜が大怪我した！？」

「またキバの世界なんでしょうか？」

「臨時の高校教師、それが俺の役割らしい」

「なんか、先生とあんまり変わらない授業……」

「この世界のお宝、贗殿遮那は僕が戴く」

「俺の友達は返して貰うぞ、海東大樹！！」

「通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！」

第二十一話・旅人／BLAZING・BLOODの世界

全てを破壊し、全てを繋げ！

## 断章・DESTROYER・OF・THE・WORLD（後書き）

三話連続更新 and 七巻しゅりょ！ いや、説明多くて大変だった（汗）

・ヨルムガンド、サガとイクサの新たな技の説明については下に纏めました。よろしければ一読を。

・奏夜の糸こんにやく嫌い設定は、音也が糸こんにやく嫌いだったからという理由ですが、名護さんの鉄道マニアは『裏キバ』からのネタです。

あん時の名護さんには笑ったなあ……。

さて、今回は色々謎を深めた話になりました。

深淵のキバとは？

あの棺の中身は？

奏夜の発した言葉の意味は？

これらは無論、今後の展開に関わってきますので楽しみに。

そして次回は予告で書いたように、あの仮面ライダーが通りすぎります！

どんなストーリーになるか、こちらも期待してください！

では、また次回（＾Ｏ＾）

・ヨルムンガンド

サガの新たな眷属にして、伝承にある神をも殺す毒を持つ蛇神。その力はサガをもつてしても、フェッスルを介さなければならぬほど。

以前、サガが使っていたククルカンとは違い、飛翔能力は無いが、代わりに地中や海中での戦いを得意とする。

口から吐き出されるヘルデッドプレスは、物質のみならず、並の自在法ならば、その構成式を腐敗させることが可能。

・イクササンライズパニツシャー

レッグフェッスルにより発動する、イクサジャツジメントの際に使われる光子力エネルギーを、右足に集中させて放つキック。パワー30t。

・スパイラルデスブレイク

紅い螺旋状の光を纏いながら放つ錐揉みキック。イメージとしては、ナイトの飛翔斬やカリスのスピニングダンス。足に巻き付けたジャコーダーをベルトにインサートすることにより、スネーキングデスブレイクの際に使う魔皇力を、両足に収束させて放つ。威力40t。

## 第二十一話・旅人／BLAZING・BLOODの世界・Aパート（前書き）

「decade」とは、10からなる一組が原義であり、一般的には十年間を意味する。

ちなみに当初、仮面ライダーディケイドは、あまりに奇抜なデザインという認識が強かったが、これは過去のライダー達と並んだ時でも、その存在感をアピール出来るように。という意味合いもあるらしい」

キバットバット三世

### 注意

今回の話は、ディケイドとのコラボであると同時に、神崎はやて先生の作品『仮面ライダーディケイド After the Movie War』とのコラボでもあります。

ただ、基本的に登場人物は、門矢士を始めとするいつものメンバーなので、『仮面ライダーディケイド After the Movie War』を未読の方でも、十分楽しめるようなストーリーになっております。

・『仮面ライダーディケイド After the Movie War』作品紹介

ムービー対戦2010から一年。ネガの世界（リ・イマジ世界）でディケイドを倒せなかった鳴滝は、自らを首領とする新たなシヨッカーを立ち上げ、ポジの世界（オリジナルライダーの世界）への侵略を開始。

剣崎一真から再び旅立ちを促され、士達もまた、ポジの世界を巡ることとなる。

カプトの世界、Wの世界、世界から拒絶された怪人が集まる世界、キバの世界を巡る傍ら、謎の少女、彩香を仲間に加え、ディケイド達の旅は続く。

第二十一話・旅人／BLAZING・BLOODの世界・Aパート

「これまでの仮面ライダー・ディケイド After the Movie Warは！」

「俺にもう一度、ディケイドになれと？」

「もう脅威は去りました！　なのに、なんでまた私達が戦わなければならぬのですか！？」

「これが俺の……………俺たちの力だっ！」

「よく覚えておきたまえ。僕のお宝を横取りしようとする奴は、たとえ誰であろうと……………叩き潰すよ？」

「おお、あんたこそどちらさん？　彩香さやかは今コーヒータム中なのだ。静粛な態度をしもーする！」

「写真にポジとネガがあるように、ポジ世界とネガ世界は表裏一体。そして士。お前が旅してきたのは、ライダー達のネガ世界だ」

「ショッカーはまだ滅びてはいない。新たな指導者を迎え、さらに方々の怪人たちと手を組み、攻勢を強めている」

「どこのどいつだ？　やつらの新しい頭つてのは」

「……………ゾル大佐。本名は、鳴滝という男だ」

「彼はネガ世界ではお前を倒すことは出来なかった。そこで、俺達ポジの世界に目を付けた。まだお前の影響を受けていないポジの世界なら、倒すことが出来るかもしれない。だが、本来ポジの世界は他の干渉を受けるはずがない世界。その干渉は歪みを生み、世界に波紋をもたらした。このままではこの次元は……………全て消滅する」

「ああ、任せておけ。全部まとめて、俺が救ってやる！」

「お婆ちゃんが言っていた。他人を道から蹴落とす奴は、いつか自分も崖から落ちるってな」

「知ってるか？ 友情とは、友の心が青臭いと書くんだそうだが、青いなら青いなりに共に足掻いて、時には励まし、時には本気でぶつかり合う。それが仲間だ！」

「興味深いねえ……………。ああ、検索したい！」

「お前に何が解るんだよ！？ 俺がどんな思いでドーパントを倒してきたか！ どんな思いでその犯人達を警察に送ってきたか！」

「お前の信じる師匠の教えとやらは、そんな簡単に崩れるものだったのか？」

「こいつには、共に生きる仲間もいる。大切なことを教えてくれる  
師匠がいる。そんなやつを操ろうとしようとも、その絆がある限り  
こいつは負けない。そう、誰にもない！」

「2人で1人の……………」

「通りすがりの……………」

「仮面ライダーだ！」

「さあ、お前のバツクルをよこせえっ！」

「デイエンド、だと……………!?」

「鳴滝を追って、あいつに復讐することを目的にライダー達と戦っ  
てきた。けど、それを否定して生きていける自信が、俺にはないん  
だ……………」

「……………きっとあいつは、誰かを守るために何かを破壊する。つま  
り、大切な誰かを守るために戦え、って言ったんじゃないかと思う」

「破壊しか出来ないなら、大切なものを傷つけようとする敵を破壊  
してやればいい！　それが、俺たち破壊者なりの　　守り方  
だ！」



調律を終え、カムシンが去った御崎市。

「がはッ……!!」

キバが地に倒れ、水溜まりが飛沫をあげる。

雨が降りしきる夜のこと　それは本当に、突然の出来事だった。

少し厄介なデスクワークを片付け、帰路についていた奏夜は、路地裏で突然襲われた。

「もう終わりなのですか？　世に名高いキバが、この程度の実力とは」

人間ではない。姿形は海老に似た、見覚えの無いファンガイア。キバに変身して応戦する奏夜だったが、ついこの前の“教授”との戦いでの披露が、彼の動きを鈍らせる。

キバはせめてもの抵抗として、悲鳴を挙げる身体を起こし、敵を睨み付ける。

「お前っ、一体何なんだ……!!」

「答える義理も義務もありません。  
私の用向きはただ一つ　貴方が持つ、キバの鎧です!!」

ファンガイアが、甲殻に覆われた手を翳す。紫色のスパークが放たれ、キバのベルト中央部　キバットに直撃した。

「ぐ、おおおお!!」

「キバット!?!」

「キバットバット三世、私に従いなさい!!」

キバットは紫電により、ベルトから引き剥がされ、ファンガイアの手の中に収まる。

同時に、奏夜はキバの変身を強制解除させられた。

「貴、様……キバットを、返せ!!」

「出来ない相談ですね。キバの鎧、確かに貰い受けました」

奏夜の激昂にも耳を貸さず、ファンガイアは指を一鳴らしして、夜の暗闇に消える。

「ま、待て……ッ！」

懸命に立ち上がろうとする奏夜だが、傷の痛みは感覚を麻痺させ、身を打つ冷たい雨が、無情にも彼の体力を奪っていく。

「畜生……これじゃ、タツロツトの時と、おな……じ……」

底知れない悔恨を胸に、奏夜は意識を手放した。

### 【三日後】

御崎市内某所、一世代前の衣装を残す店【光写真館】。

からんころん、と来客用の鈴を鳴らしながら、店内から四人の男女が現れた。

「ここが、次の世界か……」

呟く長身に茶髪の男。

彼の名は門矢士。“世界の破壊者”の異名を持つ戦士、仮面ライダーディケイドにして、様々な平行世界を渡る旅人である。

全ての世界を征服せんとする悪の組織、スーパーショッカーとの戦いを終えて一年。

彼らは現在、剣崎一真／仮面ライダーブレイドの頼みにより、かつて土達の巡ったネガのライダー世界と似て非なる、ポジのライダー世界 俗に言うオリジナルライダーの世界を巡っていた。

一年前、彼らの前に立ちふさがったゾル大佐 本名鳴滝を指導者とする新たなショッカー。

彼らの目的、ポジの世界侵略を止める為である。

彼らは既にカブトの世界、Wの世界、世界から拒絶された怪人達の

世界、キバの世界を巡り終え、新たな世界に渡り来ていた。

「見たところ、変わったところはありませんね」

「うん。ポジ・カブトの世界みたいに、廃墟ばかりでもないしね」

「どんな世界なのかな。彩香様は楽しみだぞ〜！」

光家の一人娘にして、仮面ライダーキババーラ、光夏海。

ネガ・クウガの世界から来た仮面ライダークウガ、小野寺ユウスケ。  
Wの世界から付き添ってきた謎の少女、彩香。

三人もまた、士と共に世界を守る為動く、大切な仲間である。

「一体ここは、何の世界なんだろう」

「さあな。ただ、カーテンの絵から察するに……」

「やっぱり、またキバの世界に来たんでしょうか？  
けど、カーテンの絵は……」

「この前と違ったね！」

四人の疑問はもつともだ。

士達の世界移動は、写真館にある背景ロールを引くことで行われる。

その背景ロールには、行き先の世界の特徴が描かれているわけだが……。

今回の絵は、キバの世界であることを示すキャットスルドランと、紅蓮の炎を纏う魔神の姿が描かれていたのだ。

「ポジ・キバの世界で、あんな炎の巨人はいませんでしたよね」

「俺がワタルのところで働いてた時も、あんな怪物見たことないぜ」

夏海、ネガ・キバの世界に長く滞在していたユウスケの証言は、士も納得するところである。

「なら、ここはネガでもポジでもないキバの世界ってことだろ」

「そんな簡単に纏めちゃっていいんでしょうか……？」

いつもながら、妙な自信に溢れる士に、夏海は不安を隠せなかった。

「あーあ、こういう時こそ海東がいてくれると助かるんだけどなあ。一年前ならこのあたりで『やあ士、この世界について教えあげようか?』とか言いそうなのに」

「あのコソ泥の物真似は止めろ」

妙に上手いユウスケの声真似に、士は不機嫌を隠そうともせず唸る。

海東大樹。

士とは別ルートで世界を旅する存在、仮面ライダーディエンドにして、世界を股に掛けるトレジャーハンターである。

根っからの悪人では無いのだが、お宝を手に入れる為には手段を選ばないところがあり、士達とは、時に衝突したり協力したりと、喧嘩仲間のような関係だ。

士も内心、海東を認めてはいるが、普段はいけ好かないヤツでしかない。

不機嫌になるのも道理だった。

と、海東の名を出した途端、「あ、忘れてた！」と彩香が土の袖を引っ張る。

「ねえ土、大樹から伝言預かってるよ」

「海東から？」

「うん。」

実を言うと大樹、この世界に来る直前まで、写真館にいたんだよ。でも、カーテンの絵を見てすぐ、私に手紙押し付けて出ていった」

ほい、と彩香が渡した手紙を土が広げ、三人も横側から覗き込む。

『土へ。僕は訳あって、この世界では姿を眩ますことにした。

今までみたいに君が泣きついてきても、手助けは出来ないからそのつもりで。

君達が移動する頃には、僕も移動するよ。

PS・これは他意の無い忠告だ。あまりこの世界に長居するのは止めておきたまえ』

「いつ俺が泣きついた！」



読み終えた手紙を、土はくしゃくしゃに丸める。

「でも、珍しいですね。大樹さんがこんなに謙虚なのって」

「うーん、確かに夏海ちゃんの言う通りだよ。普段なら嫌でも関わってくるのに……」

ユウスケが言うように、海東は今までもお宝を得る為、ライダー世界の事情に関わり続けてきた。ここに来て、こんな態度を取るのには妙だ。

「ねえ彩香ちゃん」

「ん？ 何かな、ゆうくん」

「この手紙を渡した時、海東に何か変わったところは無かった？」

「えーっとね。確かカーテンの絵を見た時、こう言ってたよ」

『…………ヤバ。この世界、“あのキバ”がいる世界じゃないか』

「あの大樹さんが、ヤバい？」

「それに“あのキバ”って…………この『長居をするのは止めておきたまえ』ってのとの関係あんのかな？」

「どっちにしる、あの目立ちたがり屋がしゃしゃり出てこないなら、俺達としちゃ好都合だ」

士は心底嬉しそうに、人の悪い笑みを浮かべる。  
さっきの手紙が癩に触ったのか、今は当面の間、海東の顔を見たくないらしい。

「俺達は今まで通り、俺達の役目を果たすだけだ」

「そついや士、今回の格好は一体なんなんだ？」

ユウスケが見る士の服装は、きつちりと着付けられたリクルートス  
ーツ。

鞆を携え、何故か伊達眼鏡をしている。

「見た感じ、サラリーマンみたいですけど……」

「いや、違うな」

士が財布の中から取り出したカードを、三人に見せる。

「なんだこりゃ？ 免許証みたいだけど」

「高校の教員免許だ。御崎高校一年の代理教師、それが俺の役割らしい」

『はあ！？』

夏海とユウスケが仰け反る。彩香は「お、士先生誕生だ」と無邪気な反応をしていたが。

「……お前ら、なんだそのリアクションは」

「だ、だって士くん、先生ですよ先生！！ 先に生きると書いて先

生ですよ!?

土くんが先生になったら、確実に担当クラスは荒れます!」

「そつだぞ土! 落ち着いて冷静に話し合おう、お前は先生なんて役割を担えるほど常識人じゃない!」

散々な言い分であるが、土の滅茶苦茶な人となりを少しでも知る人間なら、確実に夏海とユウスケの意見に賛同するだろう。

それほどまでに、土の前科は数多いのだ。

「……………ほあゝ? 言ってくれるじゃねえか」

当の土は眉間に皺を寄せ、挑戦的な笑みを作る。

「いいかお前ら、俺に写真を撮ること以外で、出来ないことは無い。覚えておけ!」

夏海とユウスケが止める間もなく、土は写真館沿いの道を下つていった。

「あのままじゃ絶対、面倒なことになる気がするんですけど……」

「まあ、何時ものことっちゃ何時ものことだけどさ」

そもそも、土が誰かの指図を聞き入れること自体が珍しいのだが、唯我独尊に振る舞いながらも、彼はあのスタンスで全ての世界を救っている。

付き合いの長さから、土の行動に順応性がある夏海とユウスケも、それは良く分かっていた。

「じゃあ俺達は俺達なりに、この世界のことを探ってみよう」

「そうですね。土くんは放っておいても……というか、放っておくしかなさそうですね。彩香ちゃんもそれでいいですか？」

「もちろんだよ、なっちゃん

じゃ、れっつごー」

数々の不安要素を抱えつつ、デイケイド一行は各々、写真館を後にした。

「……………」

身体中を駆け抜ける鋭い痛みが、奏夜の意識を覚醒させた。瞼を開くと、白い天井が目に入ってくる。

「……は……？」

「あつ、奏夜！　気が付いた!？」

すぐその視界に、静香の顔が入ってきた。ぼんやりした頭で応対する奏夜。

「静香……ここ、どこだ？」

「タイガの会社が傘下に置いてる病院よ、ソウヤ」

少し身体を起こすと、椅子に座ってふんぞり返っているマージョリの姿があった。傍らには、マルコシアスが蔵されたグリモアもある。

「おはよーさん！ って言うにゃあ、ちょっと遅えかな？」  
ヒッ

「……俺、何日寝てた？」

「3日くらいだよ。もう、本当に心配したんだからね？」

劣るように、静香が頬に触れてくる。

「ねーちゃんに礼言っとけよお。殆ど毎日見舞いに来てたからな、  
ヒッヒッ」

「そっか……。悪いな静香。大学もあるだろうに」

「そんなの気にしないでよ。今日は振替だし、それに、奏夜の方が  
ずっとずっと大事だもん」

添えられた手から、心地よい暖かさが伝わってきた。  
知らず知らず、奏夜の顔が赤くなる。

「しっ馳走様」

「やかましい」

ニヤニヤ笑いを浮かべるマージョリーを睨み、奏夜は再びベッドに横たわる。

「で、一体何がどうなってんだ？」

「私達が聞きたいわよ。三日前の夜、倒れてたあんたを近所の住人が発見。」

その住人が幸いにもファンガイアで、あんたがタイガの弟だって知ってみたいだったから、ファンガイアに理解がある病院に搬送」

「治療はしたけど、意識不明のまま。」

誰かに襲われた可能性もあるからって、マージョリーさん達が交代で護衛してくれたの」

「成る程……何か各方面に迷惑かけてるなあ、俺」

「そう思うなら、何があったのか洗いざらい吐きなさい。あんたがボロボロになるなんて、よっぽどなことですよ」

マージョリーの問いに、奏夜の中で三日前の出来事がフラッシュユバ



ツグしてきた。

「……学校からの帰り道、ファンガイアに襲われたんだ。キバになつたんだが、“教授”との戦いの疲労が残つてて……いや、それを差し引いても、勝てたかどうか分からない、強いヤツだった。俺は負けて、キバットがそのファンガイアに拉致られた」

三人が目を剥いた。  
キバット誘拐、それが意味する事態を知っているからだ。

「妥当な線だと、そのファンガイアの狙いはキバの鎧、ってことにならあな」

「ソウヤ、そのファンガイア、何か特徴はあつた？」

「海老みみたいなファンガイアだったな。声質からして、多分女だ」

「随分断片的ね……」

マージョリーとしても、これだけでは何とも言えない。

「いっぺん、白騎士の兄ちゃんやキングと相談した方が良くねーか？」

「そうね。一応、あんたの回復も伝えなきゃなんないし」

「よし、俺も行くぞ」

起き上がりかけた奏夜を、静香がでこピンでベッドに沈める。  
普段なら何ともない一撃だが、やはり弱っているらしい。

「つてえ！！　なに考えてんだ静香！」

「こっちのセリフよ！　何やんわりと退院しようとしてんの！  
まだ怪我が治りきってないんだから、安静にしてなきゃ駄目！」

「こんなもん掠り傷だ！　キバツト連れ去られて黙ってられ痛てててて！！！」

尚も抗議する奏夜に対し、静香は包帯が巻かれた右腕をつつく。  
骨折こそしていないが、奏夜の傷は、ハーフファンガイアと言えど、  
すぐ回復はしないレベルなのだ。

「何が掠り傷よ！　いいから黙って大人しくしてなさい！」

「そののねーちゃんの言う通りだな。こっちはこっちで何とかすつから、たまにゃあ休んどけよ。ヒヒヒ」

「じゃ、そゆことで。シズカ、もう一回くらい傷口ついついときなさい。ソウヤは往生際が悪いからね」

「了解です、マージョリーさん！」

「おい待てコラ！　お前ら絶対楽しんでぎゃああああ！」

マージョリーが病室のドアを閉めた後も、奏夜が激痛に喘ぐ声は響いていた。

場所は移って、御崎高校一年二組。

『先生が大怪我！？』

当人の苦勞など知るよしもなく、シヤナと悠二が語った報告に、全員が驚いていた。

ちなみに、教室隅の席に集まっているのは、シヤナと悠二の他に、佐藤、田中、吉田といった、“本当のことを知る”面々である。

「そんな、先生風邪だって聞いてましたけど……」

「うん。学校側には、嶋さんがそういう風に言っているみたいなんだ」

「シヤナちゃんと坂井は、三日前から聞いてたのか？」

佐藤の問いに、首を振る二人。

「いや。僕もシヤナも、昨日マル・ダムールで名護さんから聞くまで知らなかった」

「なんでまた、名護さんはひた隠しにするんだ？　俺達になら、教えてくれてもいいはずだろ」

「そもいかない事情があるからよ」

不満気な田中に、シヤナは顔色を変えずに応える。

「奏夜が怪我した日から、“蝙蝠”も行方不明みたいなの」

『！！』

周りに一般生徒がいることも考え、シヤナは“蝙蝠”と表現したが、三人にはそれが何を指すのか理解していた。

「“蝙蝠”が行方不明ってことは、相手は“鎧”が狙いだっただってことか？」

「ああ、名護さん達はそう見てるみたいだった」

悠二達に教えなかったのも、奏夜が意識を取り戻すまで、余計な動揺はさせたくないかった為らしい。

佐藤らが更に詳しく問おうとした直後、HRの予鈴が鳴り、全員は取り敢えず、自分の席に戻っていく。  
悠二は一人、机に座りながら考える。

（もし、先生を襲った相手が、キバの鎧を盗んだんだとしたら……）

単純な理由としては、キングの継承争いの為だろう。

今のキングは太牙だが、キバの鎧もまた、王の資格には違いない。そうでなくとも、キバの力は絶大だ。

太牙を倒し、キングの座を狙うなら、キバは大きな手助けとなる。

だが、悠二はこの線をあまり信じていなかった。

（だったら、なんで先生を殺さなかったんだ？）

名護の話によれば、発見された際、奏夜は満身創痍だったという。キバを倒した敵に、打ち損じがあるとは思えないし、故意にやったのだとしても、そこにあるのはデメリットだけだ。

奏夜を殺して、その遺体を隠すなどして発見を遅らせれば、此方の動きも鈍る。

乱暴な話だが、その方がよっぽど現実的だ。

(だからこそ、それをしない理由がわからない)

小さな違和感から来る不安が、悠二の心にずっと引っかかり続けていた。

(やっぱり、このままだと何かが起こる)

隣に座るシヤナは、険しい顔をしたまま、ずっと物思いに耽っている。口にもこそ出さないが、シヤナも自分と同じ、嫌な予感を感じているのだと思った。

その証拠に、

「悠二、終わったら奏夜のいる病院に行くわよ」

小声で告げられた言葉に、悠二は「もともとなく」「うん」と承諾した。

やがてHRが始まり、奏夜の代理として、学年主任の教師が、生徒達に、奏夜の休養を報告した。

さすがに詳しい病状は伏せられ「すぐ復帰なさいます」とは言っ

いたが、知らずにいた生徒達は驚きを隠せない。中には「先生、大丈夫かな」という声も挙がっているところから、奏夜の人望が伺えた。

「というわけで、本日から僅かな間、このクラスを受け持つ、臨時の先生がお越しになっています」

静まりかけていた教室に、再びどよめきが起こった。

学年主任が「どうぞ」と促すと、スライド式のドアが、ガラガラと引かれた。

軽い足取りで教室へ入ってきた人物に、期待と好機の眼差しが向けられる。

年齢的には、奏夜とあまり変わらない。

整えられた茶髪に長身。

フォーマルなスーツとは対照的に、眼鏡の奥で光る目は鋭い。

学年主任が出ていった後、彼は気だるそうな手付きで、黒板にチョークを走らせた。

「通りすがりの高校教師、門矢士だ。どうせ短い付き合いだろうから、覚えなくていい」



渋い名前を持つ彼　　門矢士は、開口一番そうのたまった。

（ああ、また面倒そうな先生が来たな……）

その時、一年二組の全員の思考は、確かに一つになった。

「ええと、門矢先生。この前までの授業は……」

「いや、教えなくてもいい」

クラスの良心、池の言葉を鮮やかに遮る士。

「教科書やノートは仕舞え。俺のパーフェクトな授業に、そんな形式ばったものは不要だ」

奏夜との間で培われた順応性の早さは、この場合幸いとすべきか不幸とすべきか。

皆特に動じた様子もなく、士に従う。

「ホウ……、全員順応性があるな。なかなか見込みがあるクラスだ」  
そりゃアンタそっくりな人と、毎日付き合ってますからね。

ニヤリと笑う士に対し、生徒達は何かを諦めたような表情になる。

悠二も教科書を仕舞いつつ、こっそり溜め息をついた。

「奏夜先生といい……日本の教員選抜基準はどうなってるんだらう？」

もったもな意見を述べる悠二の隣で、

（あいつは……？）

シヤナが、警戒心に染まった眼差しを、士に向けていた。

「今のところ、仮面ライダーも怪人も見かけませんねえ」

通りを歩きながら、夏海がぼやく。

「うーん、ネガ・キバの世界ほど、ファンガイアの存在が一般的じゃないのかな」

「または、ここがキバの世界じゃないかのどっちかですね」

「ねえねえ、なつちゃん、ゆうくん。そろそろどこかで休まない？

午前中ずっと歩き詰めだしさ」

やや憔悴した彩香が、ユウスケと夏海に提案する。

確かに、今のところ手掛かりは無い上、根を詰めすぎるのも良くないのは確かだった。

「じゃあ、どこか適当な喫茶店で休みましょうか。写真館まで行くとなると、ちょっと遠いですし」

「だね。美味しいコーヒーが飲めたりすると更にグッド……」

言いながら門を曲がったユウスケが、突然言葉を切った。

「ユウスケ？」

「ゆーくん？」

「夏海ちゃん、彩香ちゃん、あの店って……」

ユウスケが指差す先には、白塗りの外装を持つ、一軒の建物があった。

夏海が目を丸くする。

「『マル・ダムール』……！」

ポジ・キバの世界にも存在した『素晴らしき青空の会』の拠点である喫茶店だ。

「やっぱりこの世界は、キバの世界なんだ」

「じゃあ、あそこに行けば、この世界での使命について、何か分かるかも！」

「休めるし一石二鳥だね」

思わぬ手掛かりに喜びつつ、三人はマル・ダムールへと足を踏み出す。

ぐに。

「ぐに?」

ユウスケの足元から、奇妙な感覚が伝わる。  
ゆっくり下へと視線を移す。

そこには、ユウスケが踏んだと思しき、一人の青年が大の字に倒れていた。

『うわっ!?!』

三人が声を合わせて仰け反るものの、青年はアスファルトの地面に突っ伏したままだ。

「な、なっちゃん、警察呼んで！ 火曜サスペンスだよ！」

「お、落ち着いて下さい彩香ちゃん！ これは死体じゃありませんから！」

珍しくパニックる彩香を落ち着かせようとするが、当の夏海も随分と動揺していた。

ユウスケが恐る恐る、青年に近付く。

「行き倒れ、かな？」

「このご時世に、しかも喫茶店の前ですか？」

「じゃあ、二日酔い？」

「アルコール臭はしませんけど」

「ソウルサイドに意識が飛んでる？」

「ここはWの世界じゃありません」

「……………」

「……………」

まさかまさかまさか。

三人の間に、嫌な沈黙が落ちた。

「あ、あはは。だ、大丈夫だって。こんな白昼堂々と、警察沙汰になるような事件が起きるわけないって！」

さすがは『世界中を笑顔にしたい』と願う男。  
こんな状況でも、夏海と彩香を安心させる為、ユウスケは懸命に笑う。

若干、その笑みは引きつっていたけれど。

勇気を総動員して、ユウスケは青年の肩を揺すった。

「あの、もしもし？ こんなところで寝てたら、健康に悪いですよ？」

「……………」

ノーリアクションのまま、五秒経過。

十秒、二十秒、三十秒、一分。

.....。

「.....返事が無い。タダノ屍ノヨウダ（彩香裏声）」

『皆まで言わないでええええええええええ!!』

ユウスケと夏海の絶叫が轟いた。

「まったく、君というヤツは..... 『甲詞の詠み手』が、意識回復を



伝えてくれた途端にこれか？」

「……返す言葉もございません」

『マル・ダムール』で奏夜が意識を取り戻した時、そこには名護の呆れ果てた表情があった。

「静香君の目を盗んで病院を抜け出した拳げ句、疲労と貧血で倒れるとは……」

「だって、じっとしてなんかいられないですよ。こうしてる間にも……」

「君の気持ちはわかるが、倒れたら元も子もないだろう。なあマスター」

「そうそう、コーヒーを淹れる時と同じだよ奏夜くん。何事も急ぐのは失敗の元さ」

「うっ……」

名護のみならず、マスターにまで言われては、奏夜も形無しだ。

「それよりも、君には私より先に、謝罪と感謝をすべき相手がいるのではないかな？」

「わかってますよ」

奏夜は、後ろのテーブル席でコーヒーをご馳走になっている三人  
自分を『マル・ダムール』まで運んでくれた、ユウスケ、夏海、  
彩香に頭を下げた。

「えっと、ユウスケに、夏海ちゃんに、彩香ちゃんだったよな。  
ありがとう。世話になった」

「いやいや、そんな畏まらなくてもいいってば」

「当たり前的事をしたただけですしね」

「うん　　こうしてコーヒーも奢って貰ってるし」

三人は特に気にせず答える。　　もしかすると、最初に死体と間違えてしまった引け目かもしれないが。

「私からも礼を言わせて貰おう。まだ若いのに、立派なものだ」

「そんな、名護さんまで水くさいこと言わないで下さいよ。俺達、一緒に戦った中……」

「ユウスケッ!!」

危うい発言をしかけたユウスケの首筋に、

「光家秘伝　笑いのツボ!」

夏海が慌てて親指を突き立てた。

「くっ、ふ、あははははははははは!!」

突如、腹を抱えて笑い出したユウスケに、さすがの奏夜と名護も退いていた。

「ど、どうかしたのか?　小野寺君、急に笑い出したように見えたが……」

「い、いえ、こっちの話ですから！ 名護さんはお気になさらず！」

夏海が誤魔化し、名護は首を傾げたものの、それ以上追求はしてこなかった。

笑いが止まったユウスケは、夏海に口パクで「ごめん、助かった」と告げる。

（やっぱり、この名護さんは、ポジ・キバの世界で会った名護さんとは別人なんだな）

ユウスケと夏海（彩香はどうか知らないが）は、すんなりこの事実を受け入れていた。

一年前に通りすがった『仮面ライダーBLACKの世界』と、『仮面ライダーBLACK・RXの世界』では、同じ容姿でありながら、まったくの別人である仮面ライダー、南光太郎の前例があったのが、大きな理由だろう。

ならば、土の読み通り、ここはポジでもネガでもない、新たなキバの世界なのだろうか。

（でも、もしそうなのだとしたら、この世界のキバは一体誰なんでしょうか？）

(うーん。普通に考えれば、渡さんともワタルとも違う人なんだとは思っけど……)

名護にでも訊いてみたいところだったが、ユウスケ達が異世界から来たという事実を、彼は知らない(それどころか、完全に初対面だ)。

下手に事情を話しても、相手の不信感が募るだけだろう。

他に訊くとしたら、キングである登太牙だろうが、彼の行方も調べがっついていない。

手掛かりを見つけはしたが、結局ユウスケ達は、直接的な行動に移れなかった。

「あとは土が、何か良い情報を拾ってきてくれりゃいいんだけど」

「でも土くんのことですから、使命そっちのけで滅茶苦茶な授業してるかも……」

夏海の言う土の姿は、ユウスケにも容易に予想できた。

……土にも、あまり期待は出来なさそうである。

先行き不安な二人。

呑気に「コーヒーおかわり」と注文している彩香が、素直に羨ましい。

そんな中　騒動の火種は、ユウスケと夏海が揃って溜め息をついた時に起こった。

「!!!」

奏夜が、いきなり立ち上がったのだ。

勢い余って、椅子が床に倒れ、乾いた音を立てる。

『~~~~』

店内の人々が目を剥く中、奏夜は頭の中に響くブラッディローズの音色を聞いていた。

それが意味するのは　ファンガイアの出現。

「まさか、キバットを攫ったヤツか……!!!」

言うが早いか、奏夜は弾かれたように、マル・ダムールから飛び出していった。

「あつ、待ちなさい奏夜君!!　今の君では何も出来ないだろう  
!」

奏夜に続く形で、店を飛び出していく名護。  
残されたユウスケ達は、奏夜の口走った単語を聞き逃していなかった。

「キバット……キバットだって!？」

「ユウスケ。キバットって、キバの鎧を持つてる蝙蝠ですよね?」

「ああ、キバールと同じ、キバット族の末裔だよ」

キバットの名を、それもあんな親しげに語ると言うことは……。

「まさか、あの奏夜って人が……!？」

「ねえ、ゆうくんになっちゃん! 早く行かないと、見失っちゃうよ……!」

彩香に促され、二人は我に返る。

僅かな手掛かりを逃さぬようにすべく、三人もまた、奏夜と名護を追いかけ走り出した。

第二十一話・旅人／BLAZING・BLOODの世界・Aパート（後書き）

ようやく始まりましたデイケイド編！

この場を借りまして神崎先生、コラボ企画了承ありがとうございますとございましてm（ー）m

先生が満足いくものを作れるよう頑張ります！

・いきなりの奏夜変身不可。蛭名のファンガイアは、此度の騒動の中核を担うキャラです。

・彩香は神崎先生のオリジナルキャラなんですが、『仮面ライダーデイケイド After the Movie War』本編では一挙一動が本当に可愛いんです。

今回、その可愛さが少しでも出ていれば幸いです。

・海東、今回は変身していなくてもインビジブル状態（笑）。何故姿を眩ましたのかについては次回に回しますが、今まででいくらかヒントは出ています。

次回はデイケイドチーム変身！（予定）  
お楽しみに！



第二十一話・旅人／BLAZING・BLOODの世界・Bパート

小野寺ユウスケ達が、奏夜を拾う数十分前。紅邸で成された会話。

「じゃ、そんなわけでよろしく頼むわ」

「……ええ」

「なんだよ。不満そうだな」

「今の話のどこに、わたしを満足させる要素があったのかしらね」

「でも、引き受けてくれただろ」

「『これは主からの命令だ』なんて宣言しといてよく言えるわね。これじゃ、わたしに選択肢無いじゃない」

「ははは」

「笑い事じゃないわよ。まったく……」

「そう嫌な目で見ないでくれよ。キバットがない今、頼れるのはお前だけなんだよ」

「シヤナちゃんや名護さんは？」

「……正直な話、今回の敵はヤバそうなんだな。できるなら、俺一人で片付けたいんだよ」

「そう。……ねえ、一ついいかしら？」

「なんだよ」

「あなた、自棄になってないわよね？」

「……………」

「正直、不安なのよ。」

あなたはお兄ちゃんが捕らわれた途端、真っ先に私を頼ってきた。簡単にそういう決断ができるのは、あなたがもう“自分の時間”を諦めてるってことなのかもって思ったから

「……………考え過ぎだよ」

「どうかしら？ その割には、わたしとお兄ちゃん、タッチちゃんとクイーン以外には話してないわよね。」

“あなたの時間”のこと

「話す意味もないだろ。どうにもならないんだし」

「それ、本気で言ってる？」

「だから嫌な目すんなって。」

「今、キバの力を失うわけにはいかないんだ。わかってくれるだろ」

「ええ。理解はしてるし、力も貸してあげるわ。」

「けど、絶対に納得はしないわよ」

「冷たいねえ。ま、力の方だけはちゃんと貸してくれよ。んじゃ、そういうことでよろしく」

「……本ツ当にバカ。バレバレな嘘なんかつくんじやないわよ」

「あの門矢士って男、ただの人間じゃない」

ブランコに腰掛けるシャナが、いつもの無表情のまま告げた。

突如現れた謎の教師、門矢士。

彼が生徒達に強烈な印象を植え付けた日の帰り。

悠二はシャナに連れられ、市内某所の公園に来ていた。

御崎市では比較的広い公園だが、中途半端な時間だからか、人影はまばらである。

「士先生が？　　僕は何も感じなかったけど」

連れてこられた矢先にそんなことを言われても、悠二としては混乱するばかりである。

「うむ、貴様の『零時迷子』による感覚は、常時働いているわけではないからな。無理もあるまい」

アラストールが話し終わるのを待ち、シャナが続ける。

「私達を感じたのも、殆ど勘に頼った違和感だけど、門矢士には何かある。これだけは確かだと思っわ」

「勘って……なんかシャナ達らしくないな。一体全体、士先生は何者なんだ？」

ファンガイアや“徒”の類なのか」

推論を立てるにしても、論理的な組み立てをするシャナが、自分の“勘”を信じるということは、それだけ得体の知れない相手ということか。

「違う。ただの人間ではないのは間違いないが、貴様達の定義する『人間』の範囲からは出てはおらぬ」

「えっ、じゃあ……？」

アラストールの意外な答えを、シヤナが補足する。

「私達にもはつきりした言葉で、あの男の違和感は語れない。それでも敢えて言うなら　あの男は、“世界から拒絶”されているの」

「世界から、拒絶？」

「光も、景色も、人でさえも、あの男を本格的に拒絶してる。まるで“歩く封絶”だわ」

「……そんな人間が、いるのか？」

「普通なら有り得ない。　だからこそ、あの男は異常なの」

シヤナの口調には、明確な畏怖が込められていた。

彼女の見解をもってしても　門矢士の存在は、認知可能なレベルを超えているらしい。

「……土先生が、普通じゃないのは分かったよ。それで、具体的に僕らはどうすればいいんだ？」

「今のところ、向こうの出方次第ね。  
フリアグネの時みたく、あの男が何を企んでるか分かってる訳じゃないし……」

「士は何もしやしないよ。自分の瞳に、世界を写すだけさ」

『！！』

突然、いた。

シヤナも悠二も、アラストールでさえ、声が発せられるまで、その男の気配に気が付けなかった、

「やあ、はじめまして。そこのお嬢ちゃんが『炎髪灼眼の討ち手』かな？」

遅れながらも、警戒の視線を向けるシヤナ達に対し、青年は爽やかな笑みを浮かべる。

歳は二十代前半。

ライトブラウンのジャケットにジーンズを履き、やや横跳ねした髪型をしていた。

「やれやれ、“あのキバ”と会わないように姿を隠してたんだけど……やっぱりダメだね。どんなリスクも、お宝の魅力の前じゃ無意味だ」

「お前、何？ 門矢士の仲間？」

困ったように頬を掻く青年に、シヤナはそれだけを尋ねる。

「仲間、か。そう言われればそうかもね。君達の言う仲間とは、ちよっと違うかも知れないけど。ま、君達には関係無い話さ」

青年は指先をピストルに見立てると、シヤナ目掛けてバン、と撃つ真似をする。

「無駄話をしてる暇は無いから、単刀直入に言うよ。君の持つ宝具、『贄殿遮那』を僕に渡してくれないかい？」

「何ですって？」

シヤナの目が見開かれる。

“愛染兄妹”の時を思い出す状況だった。

「僕は、様々な世界のお宝を集めていてね。史上最悪のミステス“天目一個”が残した名刀なら、僕が盗むに相応しいお宝だ。本当なら、その“ミステス”君の中身も戴きたいところだけど……」

悠二の肩が跳ね、シャナが悠二を庇うように立つ。

「でも、それはいいや。後味も悪くなりそうだし。というわけで、その代わりに贄殿遮那をくれ」

「　　つ、誰が渡すか！」

シャナの瞳と髪が紅蓮に染まり、夜傘から取り出された贄殿遮那が、彼女の手に収まる。

「封絶！」

指先を天に掲げ、半円形の紅いドームが周囲を覆う。しかし、青年は停止することなく、ただ感嘆するだけだ。

「ふーん。これが封絶ってやつか。

ちようどいいや、邪魔が入らないなら、それに越したことはないしね」



シヤナを相手にして、余裕の風格を漂わせる青年に、悠二は再び問う。

「あんだ、一体何者なんだ？」

悠二の問いに、青年 海東大樹は不適に笑い、謎の戦士が描かれたカードを取り出した。

「そうだね。強いて挙げるなら、通りすがりの仮面ライダーってところかな？」

シアンにカラーリングされた銃器      デイエンドライバー側面のライドリーダーに、カードを装填。  
ポンプアクションの要領で、銃をスライドさせる。

【KAMEN・RIDE】

紋章が浮かび上がったデイエンドライバーを、海東はゆっくりと上空に向けた。

「変身!!」

声を張り上げ、トリガーを引く。

【DI-END!!】

発砲音と電子音が流れ、ディエンドライバーの銃口から、数枚のプレートが空中に打ち上げられる。

海東の身体に、幾重にも重なった虚像が、強化服、ディヴァインスーツとディヴァインアーマーへ。

落下してきた次元通行手形、ライドプレートが頭部に突き刺さり、鎧の色がシアンへと染まり、変身完了。

仮面ライダーディエンド。

世界を旅するトレジャーハンター、海東大樹が変身し、複数の仮面

ライダーの力を操る戦士だ。

「変わった？」

「ディエンドだって……？」

シヤナ達の反応に、ディエンドは仮面の下で薄く笑い、彼女達へと銃口を向ける。

「さあ、警殿遮那争奪戦の始まりだ！」

開戦の狼煙を上げるように、ディエンドライダーが火を吹いた。

シヤナとディエンドが戦う公園は、それなりに広い。

入り口も東側と西側に別れ、シヤナ達がいるのは東側。

そして、西側の噴水広場に、門矢士の姿はあった。

「……？」

噴水の縁に腰掛けていた土が、ふと顔を上げる。

「先生、どうかしました？」

「いや、なんでもねえ」

まさか、反対側の広場で戦いの火花が散っているとは露知らず、士は首に下げた二眼レフカメラから、ファインダーに景色を収め、シッターを切る。

その傍らには何故か、吉田、佐藤、田中の姿もあつた。

「で、なんでお前らがここにいるんだ？」

「成り行きですよ成り行き。帰る方向が同じだったんだし、先生に付き添うくらい構わないでしょ？」

佐藤の言葉には無論、門矢士への単純な興味、というのもあつた。口には出さないが、吉田と田中も同じである。

案の定、というか何というか、門矢士の授業は滅茶苦茶だった。一例として、士が授業で語った内容を拾ってみると、『目玉が右に

あるのがカレイで、左にあるのがヒラメだ』だの、『身体が大きめで鼻先が尖っているのがアフリカ象、身体が小さめで鼻先が丸いの  
がインド象だ』等。

挙げ句『向かって左がマナ、右がカナだ』という十代には無理があり  
りそんな知識を披露とこいづかたてしていた。

「そう言えば門矢先生、あの見分け方って一人しかいない時はどう  
するんですか？」

「……………」

吉田のド直球な指摘に、土は一瞬沈黙し、

「おお、ここの噴水はなかなか良いデザインをしているな」

誰が見てもわかる誤魔化しに、三人は溜め息をついた。

「この辺り、奏夜先生そっくりだよな」

「奏夜先生？」

田中の呟いた名前に、奏夜はカメラを弄る手を止めた。

「誰だそりゃ？」

「うちのクラス本来の担任で、簡単に言えば生粋の常識ブレイカーです」

「田中くん、それはちょっと言い過ぎ……」

否定しつつも、吉田の声には力がない。

内心、常識ブレイカーは否定できないのだろう。その様子に苦笑しつつ、佐藤が続ける。

「だから俺達も、土先生がああいう風にクラスを纏めてくれて、ちよつと安心してるんですよ。  
変にクラスの雰囲気が変わらずに済みましたから」

「ほう。あの内容でも、お前らにとつちや普通扱いか」

一応、滅茶苦茶な授業内容という自覚はあったらしい。

「俺と気が合いそうだな。その奏夜ってやつは」

「気が合いそう……ああ、確かにそんな気がしますね」

主に俺様な部分だ。

と佐藤は思ったが言わなかった。

田中も同意見だったが、やはりここでもフォローに回るのは吉田だ。

「でも先生、いつも破天荒なわけじゃないんですよ？」

他人の悩み事をすぐ理解しちゃうし、豪快な性格かと思ったら、バイオリンが趣味だったりして……」

「待て」

吉田が“バイオリン”という単語を口にした途端、土が彼女の言葉を遮った。

「その奏夜って男、名字は何だ？」

「えっ？ “紅”ですけど……」

雰囲気が変わった土に戸惑いながら、吉田は答える。  
しかし、土は彼女の様子に構っている暇は無かった。

（キバの世界で、“紅”の姓を持ち、バイオリン弾きだと？）

今まで巡った二つのキバの世界。  
その際の経験と照らし合わせると、この符合は偶然とは思えなかった。

「お前ら、その奏夜ってやつのこと、もう少し詳しく……」

と、土が口を開いた時だった。

ガアアアンツ！

『うわっ！』

「きゃっ！」

大気を震わす轟音と、巻き上げられた硝煙。

佐藤、田中、吉田は顔を伏せ、土はさすがと言うべきか、即座に、



自分達へ敵意を向けてきた相手を捕捉する。

「グルル……!!」

羊を彷彿とさせる、ステンドグラスの意匠が成された羽毛。ライフエナジーを喰らう獣、シープファンガイアだ。

「ふん、ファンガイアか」

士が発した単語に、彼の後ろにいる三人は少なからず驚く。

「か、門矢先生……ファンガイアのこと、知って……?」

「そういうお前達も、完全に堅気ってわけじゃなさそうだな」

言いながら、士は吉田にカメラを放る。危うい手付きながら、彼女はしっかりそれをキャッチした。

「それ持って下がってる。さっさと片付けてやる」

「えっ、ちょ、士先生!」

「どつする気ですか！ あんなの生身の人間が適う相手じゃ……」

佐藤と田中が止めるのも聞かないまま、土はどこからともなく、白いバツクルを取り出した。

どこかカメラを彷彿とさせるデザインのそれを、土は腰の中央に当てる。

サイドから伸びた帯がバツクルを固定すると、土はサイドハンドルを引き、バツクル部分を回転。

ベルト脇に付けられた無限ホルダー『ライドブッカー』から一枚、謎の戦士が描かれたカードを引き抜き、手前に構える。

「変身！！」

カードを反転させ、バツクルに装填。

【KAMEN・RIDE】

無機質な電子音と共に、土はサイドハンドルを押し込み、再びバツクルを回転させた。

【DECADE!!】

ディケイドライダー内部に備え付けられた未知の鉱石『トリックスター』が輝くと、周囲に現れた十の幻影が土と重なり、ディヴァインスーツとディヴァインアーマーを形成。

次元通行手形であるライドプレートが頭部に突き刺さり、ボディが一瞬でマゼンダカラーに染まった。

仮面ライダーディケイド。

土が変身し、全ての仮面ライダーの系譜を継ぐ存在にして“世界の破壊者”と呼ばれる姿だ。

「か、門矢先生が……」

「変わった……？」

「ディケイドだって……？」

三人が啞然とする中、デイケイドは、パンパンと両手を払うように叩き、シープファンガイアへ向かっていく。

「ギイイイ!!」

突如現れたイレギュラーにも動じず、シープファンガイアは手に装備したショットガンのトリガーを引く。

「フン!!」

デイケイドはライドブッカーを取り外し、ガンモードへ移行。流れるような動作で、シープファンガイアの弾丸を撃ち落とした。すぐ様デイケイドは反撃に転じ、デイケイドライバーにカードを装填する。

【ATTACK・RIDE・BLAST!!】

マゼンダの光弾が連なって放たれ、シープファンガイアの外皮を撃ち抜く。

「ガッ!!」

威力に押され、シープファンガイアはショットガンを取り落とした。

だが、武器無し、手負いとなったシープファンガイアだったが、まだ全ての手が封じられたわけではない。

「フツ!!」

地に伏していたシープファンガイアが立ち上がり、突如として姿を消した。否、よく見れば眼の端々に、高速で動き回る影がある。

「あのナリで高速移動か　　つと!?!」

シープファンガイアの特攻を紙一重で避けるディケイド。なんとか回避には追いつけるが、この反撃できないのでは持久力が枯渇するだけだ。

「羊の癖にちょこまかと……いいだろう、本当の速さってヤツを見せてやる!!」

ディケイドはまた新たに、ライドブッカーからカードを取り出す。描かれているのは、紅いカブトムシを模した戦士。

【KAMEN・RIDE・KABUTO!!】

緑色の六角形が身体中を覆い、デイケイドの姿は赤く雄々しい角と甲殻を持つ戦士。仮面ライダーカブトに変わる。

Dカブトは高速移動する影を睨みながら、また新たなカードをライドブツカーから引き抜く。

【ATTACK・RIDE・CLOCK・UP!!】

カブトの世界のライダーが持つ高速移動技術『クロックアップ』。その速さは、端から見る吉田達三人を置き去りにし、一瞬でシープファンガイアのスピードに追い付いた。

「ハッ!!」

シープファンガイアの速さにぴったり張り付きつつ、ライドブツカーをソードモードへ切り替え、斬りつけていく。

「ギッ!?!」

斬撃の火花が弾け、シープファンガイアは高速移動の世界から叩き出され、再び地を這う。

「これでトドメだ」

Dカブトはディケイドの姿へ戻り、ディケイドの紋章が描かれた黄色いカードを、ディケイドライバーへスロットした。

【FINAL・ATTACK・RIDE・DE・DE・DE・DE  
CADE!!】

ディケイドとシープファンガイアの直線上に、十枚の巨大なカードが浮かび上がる。

飛び上がったディケイドが右足を突き出しながら、十枚のカードを通過していく。

「ハアアア            ツ!!」

「ギイ、ガアアア!!」

ディケイドの必殺技『ディメンジョンキック』が炸裂し、シープフアンガイアを粉々に粉碎した。

圧倒的な強さと、爆炎の中に立つその姿はまさしく、破壊者と呼ぶに相応しいものだった。

【ATTACK・RIDE・BLAST!!】

ディエンドライバーから発射されたシアンの光弾を、シャナの贄殿遮那の剣閃で弾く。

「シャナ！」

「悠二、下がってて!!」

悠二を下がらせ、シャナは足裏で爆ぜた紅蓮の炎を推進力に、ディエンドとの間合いを一気に詰める。

「はあっ!!」



「やるね」

神速の刃を、ディエンドは銃身の腹で、贅殿遮那を受け止める。だが、そこまではシャナの想定範囲内だ。

「ッ燃えろお！！」

阻まれた刃からディエンド目掛け、紅蓮の奔流が零距离で放射された。

「何っ！？」

慌ててディエンドは、刀から銃身を離すが、それこそがシャナの狙いだった。直ぐ様刀を引き、紅蓮の炎を剣先に一点集中させ、ディエンドの身体へと刺突する。

「おっと！」

構え直されたディエンドライバーが火を吹き、刀の軌道をズラす。その隙にディエンドは、再び距離を取る。

「仕留め損なつた」

「飛び道具主体のスタイルだな。遠距離では分が悪い、距離を詰めていけ」

「うん」

緊張の糸を張り直すシャナとアラストール。片やディエンドは、今にも小躍りせん勢いで、目の前のお宝が持つ力に酔っていた。

「素晴らしい！ 絶対手に入れるよ、その力をね！」

言いながらディエンドは、ベルトサイドのホルダーから、二枚のカードを新たに装填する。

【KAMEN・RIDE・ACCEL!!】

【KAMEN・RIDE・TOUKI!!】

「行け!!」

ディエンドがトリガーを引くと、重なった七色のシルエットから、二人の戦士が姿を表した。

ヘルメットを模した仮面に、バイクの意匠を凝らした紅い装甲を持つ戦士　仮面ライダーアクセル。

大柄な体躯と白熊のような毛皮を持ち、この季節にも負けない凄まじい冷気を放つ鬼の戦士　仮面ライダー凍鬼。

「さあ……、振り切るぜ!!」

アクセルが地面に刺さったエンジンブレードを振り上げ、

「仏のもとへ還れ!!」

鳴刀・音叉剣を携えた凍鬼が吠え、シャナに襲いかかる。

「なっ、こいつらどこから……!!?」

「考察は後だ、来るぞ!!」

突如として出現した二体の仮面ライダー。シャナにとって、いい状況ではなかった。

二体とも剣を使っている為、剣技に自身のあるシヤナとしては、1対1ならまだ賞賛はある。だが、アクセルも凍鬼も大柄で、パワーならシヤナよりも上。持久戦になれば、勝機は薄い。

次第にシヤナは、アクセルと凍鬼に押され出していた。彼女が凍鬼に気を取られた隙に、アクセルはガイアメモリを、エンジンブレードのマキシマムスロットへ挿入する。

【ENGINE!!      MAXIMUM・DRIVE!!】

「絶望がお前の、ゴールだ!!」

Aの形を模した衝撃波『エースラッシャー』がシヤナ目掛けて飛んだ。

「っ!!」

すんでのところで反応し、凍鬼から距離を取ろうとする。しかしそれよりも早く、

「邪鬼退散!!」

凍鬼の口元から、凄まじい冷気が放出された。

噴射されたそれは、大気の温度を急激に冷やし、シャナの足元を氷付けにし、彼女の機動力を奪う。

「！ しまっ……」

アクセルと凍鬼の連携により、回避行動を取れぬまま、放たれたエースラッシャーの衝撃波が、シャナに牙を剥いた。

「ぐ、あっ！！」

どうにか、刀は間に挟めたものの、それで相殺できるほど、甘い攻撃ではない。

足元の氷が砕けたと同時に、シャナは後方へ吹っ飛ばされた。

「素晴らしい反応だ。でも、ちょっと遅かったかな？」

「くっ……！！」

ディエンドを睨み付ける瞳にも、疲労の色が濃い。

ディエンドは一片の容赦もなく、自らの紋章が描かれたカードを、ライドリーダーに装填する。

【FINAL・ATTACK・RIDE・D.I・D.I・D.I  
END!!】

デイエンドライバーの銃口の先に、幾つものライダーカードが、シアンカラーのエネルギーとなって円環状に並ぶ。

『う、ああああ!!』

アクセルと凍鬼もまた、カードの螺旋に吸い込まれていく。同時にデイエンドは、地に伏すシアナへ狙いを定めた。

「手加減はしよう。耐えられるかはキミ次第だ」

呟くと同時に、デイエンドがトリガーを引く。カードに眠る力を解放して放つ砲撃『デイメンジョンシユート』が、先のエースラッシャーとは比較にならないパワーで、シアナへと発射された。

「シヤ  
」

悠二が叫んだ気がしたが、シアナにはよく聞こえなかった。夜傘をせめてもの防御に回し、シアナは襲い来る衝撃に目を閉じた。

「ザンバット!!」

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

シヤナを庇うかの如く、彼女の前に二人の人影が立つ。

掛け声と電子音が轟くと同時に、人影が持つザンバットソードとイクサカリバーの刀身が輝く。  
魔皇力と光子力の光が弾け、ディメンジョンブラストのエネルギーを真つ二つに切り裂いた。

「なっ!」

これにはさすがのディエンドも驚いたのか、自分の技を切り裂いた相手の姿を見やる。

「ふう、間一髪だったな」

「大丈夫か。シヤナ君、悠二君」

「奏夜、名護……」

シヤナの眼前に立っていたのは、ザンバットソードを携えた奏夜と、名護が変身するイクサだった。

シヤナ、そして悠二の容体を確認し、奏夜はディエンドを睨む。

奏夜に似つかわしくない、心に宿る負の感情を総動員したような、冷たい視線だった。

「ファンガイアの気配が消えたと思った矢先、新しい気配を感じ取ったと思えば……どうやら、キバットとは違う『探し物』を見つけたららしいな」

「……ちえっ、キミと会う前に、贄殿遮那を戴きたかったんだけどねえ」

「つれないな。俺はお前に会いたくて会いたくて仕方なかったぜ？」

シヤナと悠二は、ディエンドの拗ねたような言い回しと、奏夜の怒りを孕みながらも親しげな口調に、違和感を覚えた。

「先生、あいつを知ってるんですか？」



「知り合いつてほどでもねえよ。ただの加害者と被害者だ」

悠二の質問を適当にあしらいつつ、奏夜は警戒の目線を送り続ける。

と、そこへ声が割り込んできた。

「海東!!」

「大樹さん!!」

奏夜と名護を追いかけてきた、ユウスケ、夏海、彩香の三人だ。

「やあ小野寺君。こんなところで何をしてるんだい？」

「それはこっちのセリフだ!!  
アンタこそ、そんな女の子に銃  
を向けて何やってるんだよ!!」

「人聞きが悪いなあ。お宝の為にはやむを得ないし、なるべく穏便  
に済ませようと努力はしたよ?」

「まず相手のものを奪うこと自体ダメなんですよ!!」

「そーだそーだ、立派な犯罪だぞ大樹！」

三者三様の抗議を、素知らぬ顔で受け流すデイエンド。  
乱入者三人を、端から見るシャナと悠二は、信じられない顔で見  
ていた。

「シャナ。あの人達、封絶の中で動いてるぞ？」

「……そんなハズない。封絶は機能してるし、あいつらは確かに人  
間よ。悠二も分かるでしょう？」

反論するシャナだったが、現にこうしてユウスケ達は動きを止めて  
はいない。  
ミステスでも“徒”でもない存在が、何故。

「アンタらも、この男の知り合いだったんだな」

「あ。いや、知り合いというか、腐れ縁というか……」

反応に困ったユウスケに一瞥をくれ、奏夜は視線を外した。

「まあ、それはどうでもいいことか。……名護さん、シヤナと悠二をお願いします」

「なつ、待ちなさい奏夜君！　今のキミはキバの鎧を……」

イクサの制止も聞かぬままに、奏夜はシヤナと悠二を任せ、ディエンドと対峙する。

「最初に言っておく。お前が俺から奪ったものを返せ。そうすれば見逃してやらんこともない」

「出来ない相談だね。返せと言われてハイそうですかと渡すくらいなら、最初から盗みはしないさ」

「成る程。そりゃコソ泥側からすれば道理だな。なら……」

奏夜の内から、封じられていた魔皇力が噴き出す。  
シヤナ、名護、悠二は勿論のこと、ユウスケ達三人もまた、目の前にいる男から放たれる圧力に気圧されていた。

「ユウスケ、やっぱりあの人か……」

「うん。間違いない」

ユウスケと夏海は、奏夜が持つ力をもって、疑念を確信に変えていた。

「タツロツトは力づくで奪い返させて貰うぞ、海東大樹!!」

言いながら、奏夜は腕をゆっくりと手前に掲げた。

「キバーラ!!」

「キャハハハ、行つくわよ」

奏夜の呼び声に応えたのは、彼普段の相棒ではなく、その相棒の妹である白い蝙蝠 キバーラ。

飛来したキバーラは、奏夜の人差し指を小さな牙で甘噛みした。

「かっぷっ」

指の先端からステンドグラスの紋様が広がったと共に、奏夜はキバ  
ーラを突き出し、叫ぶ。

「変身!!」

キバーラの頭部から放たれた紅いスペード型のウェーブが、奏夜の  
身体を覆っていき、ガラスとなつて弾け飛んだ。

その姿に一番早く、そして最も驚いたのが、光夏海だった。

「あ、紅い、キバーラ……?」

そう。奏夜が変身したのは、夏海が変身する戦士、仮面ライダーキ  
バーラだった。

ただ、彼女の変身した姿とは異なり、やや身体つきが男性に近くな  
り、鎧の白かった部分は、血に染まったかのような赤色である。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め!」

専用武器キバーラサーベルと、ザンバットソードの二本を携え

仮面ライダーRキバーラは降臨した。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD！

「ヤツらの名は『アヴェンジャー』。人間との共存を良しとしないファンガイア達で構成された組織だ」

「お前のことは聞いている。世界を破壊する悪魔だとな」

「手を貸してやってもいいぜ」

「魔皇竜に見合うお宝でもあれば、返してもいいけどね」

「人間など、存在する価値はありません」

【第二十二話・アチエレランド／崩壊の兆し】

全てを破壊し、全てを繋げ！

## 第二十一話・旅人／BLAZING・BLOODの世界・Bパート（後書き）

まず謝罪を。前回、デイケイドチーム変身とか言っときながら、クウガと夏海キバーラを出せませんでした（<|>）  
今気付きましたが、登場人数メチャクチャ多いですね；  
さすがに+5人はツライ。

・デイエンドvsシヤナ。アクセルは炎つながり。凍鬼は次狼さん  
つながり（笑）

・士の授業内容、何が元ネタか分かりますか？

・仮面ライダーRキバーラは、冴子さんのRナスカをイメージしました。

ちなみに僕は、蒼いナスカ……ってか霧彦さんの方が好きです（聞いてない）

霧彦さん、スピノフでの復活おめでとう！

今回はデイエンドvsRキバーラ。

……なんですけど、大学の試験が近く、更新が遅くなると思います。  
楽しみにしてくださいっている方にはすみません。特にコラボ元の神崎先生には特にご迷惑をお掛けしますm（|）（|）m  
なるべく早く更新できるようにしますので、どうかご容赦を。  
では、また次回！

仮面ライダーRキバーラ

キバーラの力を借り、奏夜が変身した姿。彼本人の魔皇力が反映さ

れ、鎧の白かった部分が紅く染まっている。

光夏海の場合、キバーラ自身の魔皇力を用いて変身するが、Rキバーラの場合、奏夜本人の魔皇力をキバーラが覚醒ウエイクアップさせることで変身する為、変身の際に、キバーラが嘔み付くというプロセスが加えられた。

二人分の魔皇力+奏夜の実戦経験が相成って、光夏海のキバーラよりも更に強力なっている。

フォームチェンジこそ出来ないが、アームズモンスターやザンバツトソードを呼び寄せることも可能。

ただし『黄金のキバ』よりも魔皇力消費が激しく、変身を長期間保てないという弱点があり、持久力では光夏海のキバーラに劣っている。



## 第二十二話・アチエレランド／崩壊の兆し・Aパート（前書き）

「カメラは、語源であるラテン語では&amp;quot;Camera&amp;quot;。つまり「小さな部屋」を意味し、英語のCameraは「暗室」を意味する。

カメラそのものは、かなり昔から知られていたのだが、当時では使う人間はごく限られていて、大衆に普及したのは、19世紀末あたりらしい。

ちなみに俺が使うのは、トイカメラと呼ばれる『Black Bird Fly』で、多重露光や長時間露光も可能な2眼カメラだ。詳しいことは各自調べとけ」

門矢士

## 第二十二話・アチエレランドノ崩壊の兆し・Aパート

「行くぞー!!」

Rキバーラは、ザンバットソードとキバーラサーベルを交差させ、軸足に力を込める。  
生み出された爆発的な瞬発力により、Rキバーラはディエンドとの距離を一瞬にして詰めた。

「おっと!?!」

ディエンドは一对の剣を、ディエンドドライバーの銃身で受け止める。

カキン、と軽い金属音が響くが、その音をディエンドが捉えた時、Rキバーラは既に彼の背後にいた。

(早ッ……!!)

「っはぁー!!」

ディエンドでさえも瞠目せざるを得ないスピード。  
感知する隙さえも与えない刃が、ディエンドを袈裟に斬りつける。

「JG……」

【ATTCK・RIDE・ILLUSION!!】

電子音と共に、ディエンドの姿がぶれ始めると、生まれた残像が実体化し、新たに二人のディエンドが現れた。

「今度は分身……あいつ、本当に何者なんだ？」

「攻撃が多彩過ぎる。いくら奏夜でも……」

見守るしかない悠二とシャナを嘲笑うように、ディエンドは新たなカードを装填する。

【ATTCK・RIDE・BLAST!!】

「今度のは、そのスピードでも避けられないよ」

三丁のディエンドライバーから、追尾能力のある【ディエンドブラスト】が放たれる。流星群の如く飛来する光弾、しかしRキバーラは動じない。

「確かに避けるのは難しそうだ。      それなら」

Rキバーラは構えた二本の剣を、上空目掛けて振り抜く。目にも止まらない、残像さえも生み出す高速斬撃に阻まれ、シアン色の光弾は全て撃ち落とされる。

「全て止めればいいんだよな」

啞然とする人間の中で、悠二が隣に立つ少女と白騎士に尋ねる。

「……シヤナ、名護さん、見えた？」

「初撃だけ。あとは朧気にしか見えなかった」

「私も似たようなものだ」

だが、驚愕するのは彼らだけではない。

「い、一瞬であれだけの弾丸を……」

「すごい！　びゅんびゅん動いてて全然見えないや！」

「あの人、凄いです……。私よりも完璧に、キバーラを使いこなしてる」

はしゃぐ彩香に対し、夏海はやや羨望が混じった瞳を浮かべていた。彼女が仮面ライダーキバーラに変身した回数は、未だに両手で数えられる程度。

片や奏夜は、キバとして長年戦い続けていた歴戦の戦士。経験による戦闘スキルの差は、もはや言うまでもないレベルだった。

デイエンドの口調から余裕は消えていたが、それでもまだ、皮肉っぽい笑い声を、仮面の下から漏らす。

「へえ……キミ、そんな鎧も持ってたんだね。この前僕が“魔皇竜”を盗んだ時は、使っていなかったけど」

「ああ、今は諸事情でキバが使えないんでな。それまでの代用品だ」

「ちょっと！　私をいらぬ子みたいに言わないでよ！」

バックルのキバーラから抗議が聞こえてきたが無視する。

「確かに、基本スペックは『黄金のキバ』をも凌いでいる。

素晴らしいお宝だ　けど、その鎧には何かリスクがあるようだね。でなければ、キミは普段からそっちの鎧を使っているはずだ。

一番可能性がありそうなのは……変身の時間制限ってところかい？」

「……さあて、それはどうかな？」

誤魔化すRキバーラだが、ディエンドの読みは当たっていた。

黄金のキバよりも、変身に要する魔皇力が多いRキバーラには、長時間変身を維持できない、という弱点がある。

相手が持久戦を狙うのを避ける為、あまり知られたくない事実ではあったのだが、ディエンドには無駄だったようだ。

Rキバーラは再び、二本の剣を重ねる。

「例え時間制限があるのが無かろうが、お前をボコボコにするのに、そこまで時間はかけないさ」

「ふっ、ボコボコにされるのはどちらだろっね」

二体の分身を解除し、ディエンドは新たな二枚のカードを取り出した。

「君には、これなんかちょうどいい」

【KAMEN・RIDE・OUJA!!】

【KAMEN・RIDE・ZANKI!!】

「行ってらっしゃい」

ディエンドがトリガーを引くと、七色の影がオーバーラップし、二人の戦士の姿を象った。

「祭りの場所は、ここかあ………?」

首をゴキリと鳴らすのは、コブラの意匠を凝らした紫色の戦士

仮面ライダー王蛇。

ギター型の武器、音撃真弦・烈斬を担ぐのは、筋肉質な黒い外皮を持つ戦士 仮面ライダー斬鬼。

「またあの召還能力か……」

『厄介な能力だな。蛇と……鬼か？』

ザンバットから聞こえる次狼の声に、

「鬼だ」

斬鬼が次狼と似た声のトーンで答え、Rキバーラへ向かってくる。

「つとー！」

烈斬をまるで槍のように使いこなす斬鬼の攻撃を、ザンバットソードで受け止める。

「俺も混ぜろお……！！！」

そこへ別サイドから、王蛇のベノサーベルが振り被られた。キバーラサーベルで防御するも、王蛇は鬼気迫る勢いで剣を押しつけてくる。

「どつした、この程度か……。俺をイライラさせるなよお……！！！」



「知るか！ そんなイライラするならサバでも喰っとけ！！ カルシウム含まれてるから！」

「サバじゃねえ……！！！」

どこかで聞いたようなやり取りをしつつも、Rキバーラはきっちりベノサーベルを弾き返す。

「高速移動で一気にカタをつけるぞ……！」

「わかった！」

キバーラが応じると、Rキバーラは再び超高速の世界へと姿を隠す。

「ホウ……本当に楽しいなあ、ライダーってのは……！！！」

Rキバーラにも動じず、王蛇は召還杖ベノバイザーの上部、カードリーダー部分を開き、アドベントカードをスロットする。

【UNITE・VENT】

電子音に呼び寄せられ、何処からともなく王蛇の契約モンスター、ベノスネーカー、メタルグラス、エビルダイバーが現れる。召還された三体が一所に集まり、一体のモンスター『ジエノサイダー』へと姿を変えた。すかさず王蛇は、新しいカードを装填する。

## 【FINAL・VENT】

ジエノサイダーの腹部が開き、小型のブラックホールが顔を出す。圧倒的な吸引力が、Rキバーラのスピードを鈍らせ、高速移動状態が解除される。

「なっ、そうきたか!?!」

加速を維持しようとするが、直ぐ吸引力に阻害される。すかさず、ジエノサイダーの背後にいた斬鬼が、音撃真弦・烈斬に、バックルの音撃震を装着し、本体下部の刃を展開する。

「音撃斬!!! 雷電斬震!!!」

斬鬼が音撃真弦・烈斬をかき鳴らし、激しいビートの音楽が周囲一帯を支配する。

「なんだ？ あっちの鬼、いきなり音楽弾き出したけど」

「いえ、ただの音楽じゃないわ！ 奏夜、離れなさい！！」

悠二の観察通り、端から見れば、ただの野外ライブか何かにしかな見えないだろう。

しかしシヤナは、斬鬼の奏でる旋律に、存在の力に近い何かを感じ取っていた。

「せいやっ！！」

しかし、時すでに遅し。斬鬼は曲を弾き終え、音撃真弦を地面に突き立てた。

清めの音が地を伝い、Rキバーラの足元を吹き飛ばす。

「うおっ！！」

踏ん張る力を失い、浮き上がったRキバーラが、ジェノサイダーへ吸い込まれていく。

『奏夜！！ キバーラ！！』

シヤナとイクサが駆け出すとほぼ同じく、

「うるあああ！！」

吸い込まれるRキバーラの背後から、追い討ちをかけるように王蛇が、吸引力を上乘せしたキック【ドゥームズデイ】を叩き込む。

「終わりだ！！！」

斬鬼もまた、ジェノサイダーの背後からジャンプし、音撃真弦を振り被る。

二体のライダーによる挟み撃ちの状態だ。

「……なーんちゃって」

「うふふ、WAKE・UP！！！」

おどけた口調で、Rキバーラは内に秘めた魔皇力を高める。

キバーラのコールと共に、真紅に輝く　シヤナの物にも似た紅の翼が、Rキバーラの背中から広がった。

羽ばたく翼が、王蛇と斬鬼の攻撃から、Rキバーラを上空へ逃がす。

『なにっ！！』』

「そのヘンテコモンスターの上空なら、吸引力も何もねーだろ！！」

今度は逆に、王蛇と斬鬼の方が、空中で身動きが出来なくなっていた。

これを見逃すRキバーラではない。

「じゃあな。 はあっ！！」

二刀を構えたキバーラが二体のライダーに突撃し、彼の必殺技『ソニックスタップ』が発動。  
翼による加速と、持ち前のスピードを併用した一撃は、王蛇と斬鬼に敗北すら通知しない。

『ぐああああっ！！！！』』

二体のライダーが、七色の影となって消えたのを目の端に収め、Rキバーラは勢いを殺さず、そのままディエンドへと特攻していく。

(夏メロンのキバーラより速いし、避けるのは無理だな……なら)

ホルダーからカードを取り出し、素早い動作で、ディエンドはライダーへ装填する。

「迎え撃つまでだ!!」

【FINAL・ATTACK・RIDE・DII・DII・DII  
END!!】

ディエンドライバーの銃口を正面に向ける。彼の必殺技『ディメンジョンシュート』の発動動作だ。

「くらいやがれっ!!」

「ハアッ!!」

ほぼ同じタイミングで、Rキバーラが二刀を振り被り、ディエンドがトリガーを引く。

二人の必殺技が、正面からぶつかった

「……お前ほど発言が信用できないヤツはいないな、海東」

ぶつからなかった。

銃を持つディエンドの腕と、Rキバーラの二刀を、何者かが差し止めていたからだ。

【TIME・OUT】

電子音が鳴り、黒いボディに赤い複眼の戦士、仮面ライダーDファイズ・アクセルフォームが現れる。

「この世界にいる間、お前の顔を見なくていいと思った俺の喜びを返せ」

「……僕は奪ったものをそう易々とは返さないよ、士。君の喜びとやらもね」

ディエンドが銃を収めたのを見て、DファイズAFは変身を解除し、ディケイドが彼の腕を放す。

「ほら、あんたも剣収めて。いきなり拳で語るっていうのも良くないだろ」

「その声……あんた、ユウスケか？」

Rキバーラを止めていたのは、小野寺ユウスケが変身した超古代戦士 仮面ライダークウガ。

その運動能力特化形態、ドラゴンフォームだった。

その手には、棒きれから変化させたドラゴンロッドが握られており、長い柄はRキバーラの二刀を受け止めていた。

「なんの真似だ。俺はそいつに盗られたものを取り返したいだけなんだが？」

「と、とりあえず、剣を押すの止めてくれないか？ 足が笑ってきた」

クウガDFに言われ、Rキバーラも渋々剣を収める。

「まーまー。あんたの言い分は、海東の所業を考えればすぐよく分かるんだけどさ。もうちょっと話し合わないか？ 闘うのなんて、そうした後でも遅くないだろ？」



RキバーラはクウガDFをしばらく凝視した後、

「……ふん、一理あるな。だが話合いがどうなるかと、俺の友達はどんな手を使ってでも返して貰うぞ」

静かに変身を解き、Rキバーラは奏夜の姿へと戻る。

デイケイド、デイエンド、クウガも変身を解除し、それぞれ本来の姿に戻った。

シヤナ、悠二、イクサらが状況について行こうとする中、士が奏夜に向けて口を開く。

「あんたが“この世界のキバ”だな」

「お前、何でそれを知って……いや」

“この世界”という単語から、奏夜はある名を連想する。

「そうか。お前がデイケイドってヤツだな」

「ほう、俺を知ってるのか」

「ああ、お前のことは聞いている。世界を破壊する悪魔だな」

聞き覚えのあるフレーズに、土の顔がやや曇る。

「……………チツ、随分と懐かしい手を使ってきやがったな。鳴滝のヤツ……………」

吐き捨てるように毒づき、土は奏夜に向き直る。

「この世界について、いくつか尋ねたいことがある。こっちのこそ泥の話も聞かせてやるから着いてこい」

「オイオイ、物の頼み方がなってないな。『着いてきてください』じゃないのか？」

互いの不遜な対応が癢に触ったのか、土と奏夜の間火花が散った。その場にいた全員が、二人の性格を照らし合わせ、思った。

(この二人、絶対相性悪いな)

「白状しなさい、あなたがニセモノでしょ!？」

「言いがかりはやめて頂戴!      あなたこそニセモノなんじゃないの!？」

場所は移って光写真館。

士達はあの後、『内緒話ができる所』という括りでここを紹介し、キバや紅世に関わる人間を招いていた。

その際、デイケイド一行のキバーラと、奏夜の連れられたキバーラが鉢合わせてしまい、前述のようなやり取りになってしまったのだが。

「……なんか、すみません。奏夜さん」

「いや気にしないでくれ、こっちにも問題はあるから」

苦笑いしながら、奏夜と夏海がキバーラを諫めている内に、店の奥から夏海の祖父      光荣次郎が現れる。

「さぞ、皆さん。コーヒーでもいかがですか？」

栄次郎が、シャナ、悠二、吉田、田中、佐藤といった1年2組のメンバーに、コーヒーを振る舞う。

「……コーヒー好きじゃない」

「シャナ、折角出してくれたのに失礼だろ。吉田さん、佐藤と田中にも回してあげて」

「はい」

「あ、どうも」

「わざわざすみません」

「ハハハ、なんのなんの。しかし今日はまた大所帯だねえ」

佐藤と田中の礼に笑顔で返しつつ、栄次郎を館内を見渡す。

先の1年2組メンバーに加え、奏夜と名護。合流した太牙とマージヨリー。

士達ディケイドメンバーを含めれば、計15人の人間がこの写真館に集まっているのだから。

「と、ここまでが俺達の素性だよ」

「世界を救う為に、様々な世界を旅している、か」

ここにきてまず、土達（土が説明を拒否した為、実際に説明したのはユウスケだったが）は、自分達が何者なのかを明かした。ディケイド、様々なライダー世界、シヨッカー、その他諸々を余すところ無く。

「俄には信じがたいが……土君やユウスケ君の変身を見れば、信じるしかあるまい」

「君達は、僕や名護のことも別の世界で知っていたのかい？」

「はい。名護さんにも太牙さんにも、ポジ・キバの世界でお会いしたんです」

太牙の疑問に答える夏海だったが、やはり名護も太牙も困惑しているらしかった。

まだ半信半疑なマージョリーが口を開く。

「世を渡って長いけど、平行世界ねえ……」

「こりゃまた突飛な話だぜ。ヒッヒッ」

グリモアから聞こえるマルコシアスの声に、ユウスケと夏海がびくりと肩を揺らす。

「ほ、本が……」

「しゃべってます!!」

「わー!!　　凄い凄い!!　　しゃべる本なんて初めて見た!!」

彩香がグリモアに目を輝かせるのを見ながら、奏夜が言う。

「ま、お前らの素性に関しちや信じてやるよ」

「随分と物分がいいな」

「俺も、異世界のことなら多少は知ってるんでな」

かつて、奏夜、シヤナ、悠二は【黄金の不死鳥の世界】からやってきたライダーと対面したことがある為、異世界に関しては否定材料を持たなかったのだ。

「じゃあそろそろ、お前達のことについても話して貰うぞ、紅奏夜。俺達の素性を聞いて、今更何も教えないってのはナシだぜ」

「説明したの主にユウスケと夏海ちゃんじゃねえか。門矢はただコ―ヒー飲んでただけだろ」

「細かいことをネチネチと……みみっちい器をお持ちだな。この世界のキバは」

バチリ、と再び奏夜と土の間に火花が光る。

(お互い俺様気質っぽいもんなあ……)

やはり相容れないのか。

二人の授業を受けている一年二組メンバーがそう思っていると……。

「二人とも止めて下さいっ!! 笑いのツボ!!」

仲裁に入った夏海が、二人に親指を突き立てた。

『ぶっ、あはははははははははは！！』

苦しそうに笑い出す奏夜と士。

突然の事態におののく一同に、ユウスケは柔らかな笑みを向ける。

「あ、大丈夫大丈夫。いつものことだから」

「いつものことって……」

どんないつもなんだろう。

悠二は、爽やかなユウスケの笑顔の裏に、底知れない苦勞を感じ取った。

運悪く巻き込まれた形の奏夜は、ひいひいと腹を抱えながら、同じく笑い疲れた様子の士に向き直る。

「た、確かファンガイアやキバについては知ってるんだっただな……  
ならまずは、紅世のことから話してやるよ」



「ここまでの話、わかったか？」

「ああ、だいたいはな」

紅世、フレイムヘイズ、徒のことを聞き終え、土は唸る。

「人間の持つ存在の力を喰う徒に、徒を狩る討滅者、フレイムヘイズか……」

「シャナちゃんやマージョリーさんが、そのフレイムヘイズなんだよね？」

ユウスケの問いに、シャナとマージョリーが頷く。

「私が『炎髪灼眼の討ち手』で、そつちが『弔詞の詠み手』。紅世の王を身に宿し、世界のバランスを保つ為に戦う存在よ」

堂々とした名乗りを聞きつつ、夏海は物思いにふける土を見る。

「……土君、ポジ・キバの世界でも、ネガ・キバの世界でも、フレ  
イムヘイズなんて言葉は聞きませんでしたよね」

「ああ、やはりこの世界は、何か他の世界と異なっているのかも知  
れないな」

「そりゃそうさ。ここは『完全な融合を果たした世界』だからね」

ここに来て、ずっと黙ったままコーヒーを啜っていた海東が割り込  
んできた。

「『完全な融合を果たした世界』？ ……どういう意味だ、海東」

海東は「言葉通りの意味さ」とコーヒーカップを置いた。

「かつて、土が中心となって起こった世界の融合……引き寄せられ  
た世界同士がぶつかれば、両方の世界が消滅するのは知ってるよね。  
しかし、ぶつかった2つの世界が、何かしらの意味で“似通った”  
世界だった場合、稀に消滅を免れることがある。

消滅を免れた世界は、崩壊を伴わない完全な融合を果たし、以後、  
世界の融合に巻き込まれることもない」

「その『完全な融合を果たした世界』が、このキバの世界なのか？」

「そういうことだよ」とユウスケの疑問を解消し、海東はコーヒーにミルクを追加する。

「言わば、ここはキバとフレイムヘイズの物語が融合した世界な  
さ。知る人間には【BLAZING・BLOODの世界】とも呼ば  
れているけどね」

「BLAZING・BLOODの世界……」

「ずいぶん詳しいな、海東。こそ泥稼業の為の下調べか？」

棘のある土の言い回しに、海東は肩をすくめた。

「前に来たことがあるから知ってるだけだよ。そこのキバとも、そ  
の時に会ったんだ」

「……そーいや、その話がまだだったな」

がたりと席を立ち、奏夜は海東に詰め寄る。

「おい海東大樹、俺の友達を何処へやった。今すぐに返せ」

「そーだぞ海東、今のうちに返して、穩便に済ませた方が良いつてなるべく戦いになるようなことは避けたいユウスケも、説得に加わるが、海東は齒牙にもかけない。」

「さっきも言っただろ。返せと言われて返すくらいなら、最初から盗みやしないってね。」

百歩譲って返すとしても……そうだな。『魔皇竜』に匹敵するお宝を提供してくれるっていうなら、返してあげてもいいけどさ」

「んだとお!?! てめえ何様のつもりだ!?!」

海東に掴み掛かろうとする奏夜を、今度は名護と太牙が諫める。

「落ち着きなさい奏夜君。キミらしくないぞ」

「ここで拳に訴えても、状況を悪くするだけだ。今は目の前のごとを片付けよう」

二人の正論に、奏夜は舌打ちをして海東から離れる。

（なんだか、今までのキバとはだいぶ違う人だなあ）

ユウスケは思う。

今まで出会ったネガ世界のキバであるワタル、ポジ世界のキバである紅渡、二人と照らし合わせてみると、紅奏夜はどちらにも似つかない。

内向的だった二人に比べ、ガンガン自分の感情を出していくタイプに見えた。

そこまで考え、ふとユウスケは単純な疑問を口にする。

「そう言えば奏夜さん、キバの鎧はどうしちゃったんですか？  
海東と戦ってた時は、キバーラの力を借りてみたいだけだ」

「……………」

表情を曇らせ、奏夜は椅子に深く座り込む。

「奪われたんだよ。つい数日前、海東大樹とは違うヤツにな」

「奪われたって……王の証を!？」

ユウスケが目を丸くする矢先、土がクツクと口角を吊り上げた。

「おいおい、反省を活かせてないな。海東に友達とやらを盗まれて、今度はキバの鎧まで盗まれたのか？ いい仕事をしていらっしやる」

「おい土、そんな言い方……」

「いいよユウスケ。そこに関しては、門矢の言う通りだ。病み上がりとはいえ、油断してた」

あっさり自分の非を認める奏夜。それだけ、今回の出来事は思いもよらない事態であり、また屈辱だったのだろう。

「だから落とし前は俺がつけなきゃな」

コーヒを一気に煽り、奏夜は玄関口の扉に手をかける。

「奏夜。どこにいく気だ？」

「決まってるだろ兄さん。あのファンガイアを探してキバットを取り返す。目の前の問題から片付けようって言ったのは兄さんじゃないか」

「それはそうだが……」

言い淀む太牙の後ろから、土が奏夜に声をかける。

「どうしてもっていうなら、俺が力を貸してやってもいいぜ、紅奏夜」

「これは俺の問題だ。部外者を巻き込むわけにはいかない。第一、悪魔なんて呼ばれてるヤツを信用できるか」

「……ああ、そうかい」

館内に剣呑な空気が流れたが、奏夜はしばらく土を睨み付けた後、キバットを引き連れて、写真館から出て行った。

「お前らの先生ってのは、あまり好感が持てるヤツじゃないな」

士に指摘されるまでもなく、全員が当惑していた。不遜な態度こそすれ、奏夜があそこまで淡泊な態度を取るなど、今までに一度もなかったからだ。

「今までのキバとはまったく違う。あんなのが王じゃ、未来は暗いな」

「奏夜のことを悪く言っな!!」

誰もが一瞬、誰が叫んだのかわからなかった。

声の主の隣に座っていたはずの、悠二や吉田でさえも、だ。止まった思考を再起動し、ようやく声を張り上げたのが、シャナだったと気が付く。

周りに構わず、シャナは士に言葉をぶつける。

「会ったばかりで、奏夜のこと何も知らない癖に、知ったような言葉並べないで!!」

無性に腹が立った。

さっきの態度からすれば、士の奏夜に対する判断は仕方がないとは思う。

しかしそれでも、士の言い方には我慢ならなかったのだ。



それだけ、シャナにとって奏夜の存在は大きい。口にこそ出さないが、ここにいる全員にとっても、それは同じことだろう。それを臍気ながら感じ取った士は、

「……………」

じっとシャナの鋭い視線を受け止め、溜め息をついた。

「…………成る程、そういうことが。面倒くさいヤツだ」

「?」

士の発した言葉の意味を理解できず、首を傾げるシャナ。しかし次の瞬間、彼女の瞳が緊張に揺らいだ。傍にいたマージョリーも同様である。

「気付いたか、シャナ」

「うん、存在の力の動きがある」

「こりゃあ中々の大物みてえだな、ヒヤハハ!!」

「ファンガイアの気配もあるわね。こっちも結構デカいわ」

言うが早いか、二人のフレイムヘイズは勢いよく写真館から飛び出  
していった。

「あつ、シヤナ。僕も……！！」

「待て悠二くん」

後を追いかけた悠二を、太牙が引き止める。

「君は純粋な戦いでは、役に立てないだろう。ここに残っておいた  
方がいい」

「でも、またミサゴ祭りみたいな手を使って来たら……！！」

「なら尚更ここにいるんだ。」

君の仕事は戦いじゃない。得た情報から、何か策を見つけることだ  
ろう？

情報を持ち帰るのは、僕らの仕事だ」

悠二を落ち着かせて、太牙は名護を見る。

「名護は、一美ちゃんたちを見ていてくれないか？ 二二二に連中  
が来ないとも限らない」

「わかった。任せなさい」

名護が頷く傍ら、ユウスケも土を促していた。

「早く行くぞ土、怪人退治なら、俺達の出番だろ！？」

「……まったく世話の焼ける」

土は渋々と立ち上がり、夏海を指差す。

「夏みかんは、そこそこ泥を逃げないように見張ってる。ついで  
に、そこのお気楽娘もな」

「わかりました。土君もユウスケも、気を付けてくださいね」

夏海の気遣いと、彩香の「誰がお気楽娘かー!!」という抗議に見送られながら、士、ユウスケ、太牙もまた、写真館から飛び出していく。

## 第二十二話・アチエレランド／崩壊の兆し・Aパート（後書き）

テスト期間より復活リ・ボーン！！

結果は……まあ多分大丈夫さ（笑）

・ああああ……完全にRキバーラがRナスカにい……！！

・次狼さんと斬鬼さん、禁じられたクロスオーバー。

王蛇のセリフの意味がわかった方、挙手求めます。

・ドラゴンフォームは初登場時、かなりのスピードでビルを飛び移ってましたので、クロックアップばりのスピードにもついていけるかと思ひ、今回使いました。パワーバランスは難しいですf^| ^;

・やや余裕の無い奏夜。これは彼の抱える事情にも少し関係があります。

次回は再びバトル。ぼちぼち今回の敵も明かしていきます。  
では（^o^）

どうでもいい近況2

テスト期間が終わった勢いで、9話あたりで視聴が止まっていた【Angel・Beats】を最後まで視たんですが……パソコンの前でガチ泣きしてしまいました。

おかしいなあ、地下降下作戦の前半とか大爆笑してたのに（ちょよ主に第十話と最終回に全てを持ってかれまして。

## 第二十二話・アチエレランド／崩壊の兆し・Bパート

「奏夜、これからどうするの〜?」

あてどなく街を彷徨う奏夜に、キバーラはポケットからこっそり問う。

「ファンガイアが現れるまで、適当に街をぶらつくぞ。

あの海老のファンガイアがこのまま何もしないとはいえないし、こうしてヤツを嗅ぎ回ってれば、あいつも俺を邪魔に思っ出てくるかも知れないだろ」

至極淡白な口調で告げる奏夜に対し、キバーラは思う。

やはり奏夜はキバットを奪われて以降、投げやりというか、つつけんどんになっている気がする。

士への態度が良い例だ。

初対面で、しかも得体の知れない相手というので警戒するのは分かるが、普段ならあそこまで不躰な対応はしない。

(まあ“奏夜の時間”のことを考えれば、余裕がなくなるのもわかるけどね……)

いや、それ以前の問題か。  
幼い頃から連れ添ってきた親友。  
それを奪われれば、他に気を払えないのも無理からぬことだ。  
しかし、このままの状態が続くのも、キバールとしては気詰まりしてしまふ。

ので、遊んでみた。

「ねえねえ塔矢」

「……俺の名前を某囲碁漫画における、プロ棋士期待の新星みたい  
に呼ぶな。俺の名前は奏夜だ」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃないっ!?!」

「かぶっ」

「リアルにポケットに入れた俺の指を噛むな！！　つかこのネタの場合、お前がやらなきゃいけないのはスポーツ腐女子だろう！」

余裕の無い時でも、ボケとツツコミだけは忘れない奏夜だった。

例え周りの人間の目が、悲しいものを見るような光を帯びていたとしても。

と、そんな時だった。

「随分と楽しそうなことですね」

「……そう思うなら、お前の目は節穴だ」

突然、背後からかかった涼やかな声に振り向く奏夜。

目線の先にいたのは、黒いローブのような服装に、蒼眼蒼髪を持つ容姿端麗な女性。

年齢はさして奏夜と変わらないようだが、細長い切れ目と、口元に浮かべている優美な微笑のせいか、より大人びて見える。

現実離れした美しさに、道行く人々は好奇の視線を向けるが、奏夜



の瞳には敵意しか宿らなかった。

「その声……お前がああ時のファンガイアだな」

「ええ、レティシア・リネロと申します。以後、お見知りおきを」

奏夜の威圧的な眼光にも屈さず、レティシアは笑みを崩さない。

「レティシア……成る程、お前がああ『アヴェンジャー』の頭目か。何の用だ？ 俺を確実に消しに来たか」

「いえ、正直な話、私“達”の目的において、貴方にはもう興味はありません。ただ、証を失った裸の王が、どんな様子でいらつしやるのか気になりました」

「そうだな。わざわざ被害者の前に、面を晒しにくる盗人くらい間抜けだろうな」

「くすつ、皮肉を言うだけの覇気はありますのね。取り敢えず、場所を変えませんか？ このように人間共がのさばった場所では、貴方もやりづらいでしょう」

「気が利くな。気が利くついでに、俺の親友をさっさと返して貰いたいんだが」

「それもまた、向かった先でお話いたしますわ」

ローブを翻し、奏夜の脇をすり抜けていくレティシア。

「むきーっ！ なんなのよあの女！ 癪にさわる態度取って！」

「カツカすんなよキバーラ。何を考えてるか知らねえが、俺達にとつて好都合には違いないだろ」

好戦的に口角を吊り上げ、奏夜はレティシアの後に続いた。

「で、一体どういふことかしらねーりゃ」

マジヨリーが面倒くさそうな、どこか投げやりなような口調で、目の前にある現状を批評した。

士もまた、似たり寄ったりの口調で言葉を返す。

「どういづことかも何も無い。ファンガイアの一团だろ」

「こんなにたくさん、街の中心地で、それも封絶の中ですか？」

太牙がクールながらも、驚愕を刻んだ表情で告げる。  
顔にこそ出さないが、隣に立つシヤナも同感だ。

「どうなってるんだ？　ここまで沢山の敵対ファンガイア、ワタルのどこでも見たことないのに……」

ユウスケの言う通り、現在五人の眼前には、ビースト、インセクト、アクア等様々なクラスのファンガイアが、ステンドグラスの如き外皮を輝かせながらひしめき合っていた。

場所は大通りに面する交差点。

人気は少ないが、ファンガイア達のすぐ傍には、ライフエナジーを吸われ、色素が透明に変わった人々の亡骸が幾つか転がっていた。

救えなかった人々を想い、太牙は悔しさに歯を軋ませる。

「くそつ、封絶の中なのをいいことに、人々を貪り食うとは……！」

「冷静になれ、登太牙。先刻感じた“徒”の気配も近い。判断力を欠けば、敵の思つ壺だ」

太牙を窘めるアラストールの声を聞きながら、既に炎髪を靡かせているシヤナは、贄殿遮那を握り締める。

アラストールの指摘にあった、“徒”の存在を警戒しているのだ。

今まで、封絶内にファンガイアが乱入してきたことはあった。

しかし、こうしてファンガイアが狩り場とした場所に、打ち合わせたかのように配置された“封絶”。

これらが意味するものは、

(ファンガイアと“徒”が組んでいる)

シヤナの読みは的中していた。

ファンガイアの群れが両脇に捌け、謎の人影が現れたのである。

端が破れ、不気味にはためくコートだけなら、まだ常識の範囲内。だがその姿は、人間の身体にカラスの頭部を持つ異形。

「あれが、“徒”ってヤツか」

士とユウスケはその出で立ちの異様さから、シヤナ、マージョリー、太牙は存在の力の質から、あのカラスが敵の中でも一線を隔す存在  
“徒”と悟る。

異形は五人を見やり、嘴を僅かに動かす。

「この街に同朋殺しが常駐しておるとの噂は聞き及んでおったが…  
…まさか魔神の契約者と、フレイムヘイズきつての殺し屋とはのう」

「“冥夜の船頭”カロン」

アラストールが、ペンダントから遠来の如き唸り声を漏らす。

「ホウ、儂も名を知られるようになったものじゃ。  
……その二人もただの人間ではないのう。もしか、世界の破壊者の一派か？」

「はっ、この門矢士を知っているとは、なかなか博識なカラスだな」

「なに、あの奇妙な外套を着た男から聞き知っていただけのことじや」

「お前……やっぱり鳴滝の仲間か！」

食ってかかるユウスケだったが、カロンは肩を竦めるだけだ。

「ただ少々協力を仰いだだけの仲じゃ。世界の破壊者共の排除を依頼されてもいたが、所詮は口約束に過ぎん」

「ふん、誰の差し金かなんてどうでもいいわ。“渡し守”がこの街に何の用よ？」

直接の邂逅は無くとも、噂からこの“徒”のえげつなさを知るマーシヨリーは、忌々しげに問う。

「儂の 否、儂等の目的に必要なモノを調達しに、かのう」

「儂“等”ですって？」

「まさかオメーみてえな変わり種が、今更誰かと組んだってのかわあ？ ヒツヒ」

「そのまさかよ。キング、貴様なら名くらいは知っておるのではな

いか？　　我が組織　　“アヴェンジャー”を」

「何!？」

太牙の表情が驚愕に変わったのを見て、シャナは問う。

「太牙、アヴェンジャーって……?」

「……アヴェンジャー。未だ存在する、ファンガイアと人間の共存を良しとしないファンガイアで構成された組織だよ。

共存に関わる様々な重要拠点を破壊しているテロリストのようなものだ。

そうか、では奏夜を襲ったファンガイアが、あのレティシア・リネ口か!!」

「1」明察」

黒コートを靡かせ、カロンは手甲に覆われた右手を突き出す。

「彼女は少々、貴様の弟に用があるようでのう」

「奏夜にだと？ バカな。お前達の目的は知らないが、キバの鎧を奪った以上、奏夜にもう構う理由は無いはずだ」

「理由までは知らんよ。僕は邪魔をされないようにと足止めを買って出ただけじゃ。悪いが、ここでしばらく、このファンガイアと踊って貰おう」

「せっかくのお誘いだけど遠慮しとくわ」

炎の衣『トーガ』を纏い、マージョリーはその群青の巨体を震わせる。

「あたしは自分を安売りしないし、アンタらよりよっぽど、世話のかかるヤツがいるみたいだしね」

「ヒヤーツハハハ！！ 確かに、今のキバの兄ちゃんは、放つとくと何しでかすかわかんねえからな！！」

シヤナと太牙もまた、贄殿遮那とジャコーダーを構える。

マージョリーの言うように、今の奏夜を一人で戦わせるのはまずい。余裕が無い精神状態も心配だが、何か言い知れない不安を感じていたからだ。



「シヤナちゃん、マージョリーさん、太牙さん、俺達も手伝つよ」

ユウスケが力強く前に躍り出る。土はやや気乗りしない様子ではあったが、

「やれやれ、あいつはあまり好かないが……ま、これも縁には違いないか」

溜め息をつきながら、彼はカードとデイケイドライバーを取り出した。

ユウスケも、古代に繁栄した種族、リントの勇者が残したベルト『アークル』を顕現させ、太牙の下にはサガークが飛来し、彼の腰に取り憑く。

『変身！！』

土がカードを反転させ、デイケイドライバーに装填。

ユウスケはスライドさせた右手を、左手と共にアークルの側面へ押し込む。

太牙はジャコーダーをサガークベルトにインサートし、一気に引き抜く。

【KAMEN・RIDE・DECADE！！】

『ヘン・シン』

トリックスター、アマダム、蒼いウェーブの光がそれぞれのベルトから放たれ、三人の姿をディケイド、クウガ、サガ 三人の仮面ライダーに変える。

「ファンガイアの王に平行世界の戦士か……面白い」

カロンがファンガイア達に見えるよう、ディケイド達を指し示す。

「行け。場合によっては滅しても構わん」

ウオオオオツ！！

空気を震わす雄叫びを挙げ、ファンガイアの軍勢は獲物を排除しようとして襲い掛かってくる。

「足を引っ張るなよ、赤チビ」

「どつちが」

手を軽く打ち鳴らすデイケイドと、彼を未だ敵意を込めた視線で見  
るシャナを筆頭に、五人はファンガイアの群れに向かっていった。

「おい、どこまで行く気だ」

「二分二十秒前にも同じ質問をされましたね。せつかちな方は嫌わ  
れますよ」

ちっ、と舌打ちをして、奏夜はレティシアの後に続く。

せつかちになるのにも理由はあった。

レティシアに連れられて二十分弱。歩いている場所は既に御崎市の  
外れ “何度となく通った道” なのだから、否が応でも予想はつ  
いてしまう。

しかし、脳は必死にその推測を捨て去ろうと働く。

(大丈夫)

連れて行かれるのは“あの場所”じゃないと。

「着きましたよ」

雑木林を抜けると、青空の光が差し込み、景色が開ける。周囲を山岳が取り囲み、目先には小高い丘。その頂上には。

「……」

奏夜は口を閉ざしたまま、レティシアに促され、丘の頂上へ。点在する岩に紛れ、煌びやかに研磨された石碑を前にし、よつやくレティシアは立ち止まった。

「よく手入れされていますね、このお墓」

おもむろにレティシアは、蒼みがかかった石碑　否、墓標に触れる。

「普通、こんな場所で野晒しにされていたら、どんどん状態が悪く

なっていきますのに……手入れはあなたがしていますの？ それとも、兄君がされているのかしら」

「……気安く」

質問に答えず、奏夜は声を怒りに震わす。

「それに触れるな……！！」

「あら、失礼」

シニカルな微笑を浮かべたまま、レティシアはあっさり手を退いた。

「意外と女々しいんですね。四年経った今でも、同じ女性を愛し続けているなんて」

「……回りくどいのは嫌いだね。」

お前は一体何が言いたいんだ、レティシア・リネロ。こうして俺の“過去”を晒して、みっともないと小馬鹿にしたいのか」

「いいえ。言ったでしょう、あなたにもう用は無いと。あなたをここに呼んだのは、つまらない与太話の為ですよ。」

あなたの過去については……ただ、懐かしいなと思うだけですな」

「懐かしい？」

「ええ」

妙な言い回しをするレティシア。奏夜は警戒を怠らぬまま、自分の怒りを抑えつける。

「私もかつて、人間を愛しました」

不躰に、レティシアは口を開く。

だが、淡々と語られた事実は、奏夜をその話に引きつけるには十分だった。

「まあ、貴方が生まれるずっと前の話ですけれどね」

遠くを見るような目で、レティシアは続ける。

「貴方達が中世と呼ぶ時代、ファンガイアは今よりも認知されていましたが、それ故に、人間の畏怖の対象でした。

既にその頃、ファンガイアは全ての種族の頂点にいましたが、人間の中には、無論、それを良しとしない連中がいましたね。

各地でレジスタンスが結成され、末端のファンガイア達を弾圧して  
いました」

「……酷い話だな」

素直にそう思うが、当たり前だとも思った。  
一時期『素晴らしき青空の会』が自分をそう見られていたのと同じ  
く、ファンガイアを未だ恐怖の象徴として見る人間は多い。

人間は、自分と違うものを恐れる。

レティシアは奏夜の心中を見越したのか、

「ええ、酷い話です。ですが、そんな時代に、私は人間を愛したの  
です」

と、答えた。

ほのかに、暖かさを感じさせる声で。

「私は当時、さしたる力も持たない一介のファンガイアに過ぎず、  
人々から虐げられて生きてきました。

そんな時、人間によって瀕死の状態に追い込まれた私を助けてくれ  
たのが、私の夫です。彼は辺境に住む医者で、私がファンガイアと  
知って尚、私に手を差し伸べてくれました。

『傷付いた誰かを放つてなどおけない』なんて理由ですよ？」

お人好しですよ。とレティシアは言うが、決して貶すような口調ではなかった。

「私は彼と暮らし、互いに愛し合うようになりました。人間の家族と同じように、ささやかですが、それでも私にとっては十分な幸せを手に入れました。既に禁忌とされていた人間とファンガイアの恋ですが……、掟や規律で恋心が縛れないのは、貴方もよく知っているでしょう？」

「……」

知っている。嫌と言うほどに。

そして最悪の場合、それがどういふ結末をもたらすのかも。

「……失ったんだな。あんたも、愛した人を」

レティシアは何も言わない。  
沈黙。すなわち肯定だ。



「なんで、失った？」

「殺されました。人間に」

冷水をかけられたような衝撃を受ける奏夜。

それほどまでに、レティシアの放つ威圧感が、劇的に変化したのだ。

それこそ日溜まりのような暖かさから、絶対零度の冷たさにまで。

「魔女狩りという言葉くらいは、知っているでしょう。」

人間であっても、人外のものを匿うということは、その時点で異端とされる行為。

人間とファンガイアが共にあることを知った人間は、私達家族を捉えました」

奏夜は、足元がぐらつくのを感じた。

「まず、夫が私の目の前で焼き殺されました。」

次に、生まれたてだった私達の息子も焼き殺されました。

逃げおおせた私も、火炙りよりも激しい絶望を味わいました」

ふっ、と息をつき、レティシアは奏夜に向き直る。

冷やかな瞳を浮かべたまま。

「貴方の理想は、それは素晴らしいものでしょう。人とファンガイアが互いに手を取り合って生きていく。理想的な形です。ただ」

私は受け入れられない。

「人間もファンガイアに苦しめられたでしょうが、ファンガイアも人間に苦しめられた。」

互いに傷つけあって、今更共存など出来るわけがない」

何も言い返せず、奏夜はただレティシアの声に気圧されていた。

「だから私は、人間に虐げられたファンガイアを集め、アヴェンジーヤーを作った。痛みを抱えた者のことなど知らず、のうのうと生きる人間に、我々の苦痛を知らしめる為に」

「そ、そんなのただの八つ当たりじゃない!!」

我慢出来なかったのか、奏夜のポケットからキバーラが飛び出した。

「人間に酷いことをするヤツがいるのはわかるわよ!! でも、何の罪もない人達を襲って、それじゃ貴女の家族を殺した人間と変わ

らないじゃない!!」

「知った風な口を聞くな、キバツト族!!」

さっきまでとは段違いな剣幕に、キバーラは小さく悲鳴を挙げる。

「ならばこの憎しみはどこにぶつければいい!? 私が見られなかった人とファンガイアの幸せを見せ付けられ続ける世界で、この憎しみがいつ晴れるというのだ!! 共存などと下らない絵空事を掲げた連中に、私の痛みが分かるものか!!」

魂の奥底から響いてくるような叫び。

レティシアから聞こえる心の音楽は、地獄の劫火を思わせるような、激しい憎悪を奏でていた。

「……私が貴方に会いに来たのは、貴方が私と同じ痛みを持ちながら、私とまるで違う理想を追っていることに、興味を持ったからです」

レティシアは冷静さを取り戻した声で、しかし奏夜にとっては、絶大な苦しみを伴う質問を口にした。

「紅奏夜　いえ、影のキングよ」

貴方の理想は果たして、本当に人間とファンガイアを幸せに出来るものなのですか？

「……それは」

答えられなかった。

ずっと信じてきた。

人間とファンガイアは手を取り合える。

そうすれば、もう誰も自分のように傷つくこと無く、みんなが笑って暮らせるようになるよ。

だが今、目の前にこうして、その掟を享受出来ず、新たな苦しみを

抱えたファンガイアがいる。  
信念を根底から揺るがされた奏夜は動揺し、もはや答えを導き出す術を見失っていた。

「答えられないのですか？」

呆れたようにも、落胆したようにも取れる淡白なトーンで、レティシアの言葉は紡がれていく。

「私は先刻、貴方を消すつもりはないと言いましたね。……ですが、気が変わりました」

ゆっくりと、レティシアは手を前に掲げる。

「信念を貫く意志もない者など、見苦しくて仕方がない。ここで消えなさい」

宣言を合図に、レティシアの姿は海老を彷彿とさせる異形  
スターファンガイアへと変わる。      ロブ

「っ、キバーラー!!」

我に返った奏夜は、未だに動揺した様子のまま、キバーラを己の指

に噛みつかせる。

「か〜ぷっ  
」

頬にステンドグラスの模様を浮かべ、奏夜はキバーラを手間に突き出す。

「変身!!」

スピードの光が奏夜の身体に収束し、その姿は瞬く間に仮面ライダーキバーラへと変化した。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め!!」

「沈むのは……貴方です」

召還したクレイモア型の大剣を、片手で軽々と持ち上げながら、レティシアは挑発的な態度を崩さずに告げる。

Rキバーラはザンバットソードとキバーラサーベルを交差させ、ロブスターファンガイアと対峙する。

その心を、激しく揺れ動かせたまま。

同時刻、御崎市大通り。

「くそっ、キリが無い！」

ジャコーダーから伸びる真紅の鞭を振るい、サガは周囲のファンガイアを尻ぎ払う。

だが、砕けたファンガイアのステンドグラスを踏みしめ、また新たなファンガイアの波が押し寄せてくる。

「こいつら、一体何人いるんだ!？」

クウガが肉弾戦はきついと悟ったのか、敵の一体の手を蹴り上げ、所有していた槍を奪い取る。

「超変身！」

アークルが青色に輝き、クウガは運動能力に長けたドラゴンフォームへ。

「はっ、だりゃあっ!!」

槍から変化させたドラゴンロッドを振り回し、敵を倒していく。

「中々やるのう、じゃが……!!」

観戦していたカロンの腕に装着されていたガントレット、手の甲にあたる部分に装え付けられた小さな鏡が輝く。

ギイイイツ!

雄叫びを挙げながら、鏡が生み出す光の中から、新たに数体のファンガイアが現れた。

「なんだありゃ? 中からファンガイアが出てきたぞ」

「ヤツが“冥夜の船頭”や“渡し守”といった異名で呼ばれる理由……屍を繰る宝具“死者の書”だ」



ライドブッカーでファンガイアを切り倒すデイケイドに、アラストールが答える。

「ヤツの記憶にある魂の情報から、対象者が存在していた頃の姿を映し出すことができる。」

ファンガイアの魔術と違うのは、リビングデッドと化しても、そのファンガイアの力が劣化しない点だ」

「死人をそっくりそのまま呼び寄せるってワケか。道理で何体か、何の意志も感じられないファンガイアが混じってたわけだけ」

つまり、アヴェンジャーに所属する生者のファンガイアと、カロンの蘇らせたファンガイアが入り混じっているわけだ。

「でもそうだとすれば、敵は無尽蔵に出てくるんじゃない？」

シヤナが危惧するように、このままではゴールの見えないマラソンマッチを永遠に続けることになる。

（早く、奏夜のところに行かなきゃいけないのに）

敵が何を思って奏夜に会っているのかは知らないが、どうせロクな

ことでは無いだろう。  
尚更、奏夜の身が案じられる。  
珍しく焦りを見せるシヤナの心境を察したのか、

「なら、何人がこのファンガイア達を足止めするしかないだろう」

ディケイドの提案に、近くで戦っていたマージョリーとサガが、

「確かに、こいつら片付けつつ奏夜のとこに行くのは難しそーね」

「足止めは、僕と『弔詞の詠み手』が買おう。数だけの相手なら、二人もいれば十分だ」

この状況での最善の策、ということを認識し、二人はあっさりとディケイドの提案に乗った。

「でも、本当に大丈夫なんですか？ たった二人で」

「ヒヤーツハハ！！ 気にすんなって！ むしろ、こーゆーただぶつ壊せばいいだけの仕事は、俺様達の専売特許つてもんだ！」

気遣わし気なクウガの言葉をマルコシアスの声が一蹴したところで、  
全員の意見が纏まる。

「なら、道を作らなきゃね」

言って、シャナは贄殿遮那に存在の力を送り込む。  
紅蓮の炎に包まれていた刀身が、更に輝きを増した。

「炎か……なら、こっちも炎だ」

デイケイドはライドブッカーから、新たなライダーカードを取り出し、  
デイケイドライバーに装填する。

【KAMEN・RIDE・RYUKI!!】

現れた白い虚像が、幾重にもオーバーラップしたかと思うと、次の  
瞬間、デイケイドの姿は鏡の世界の騎士 仮面ライダー龍騎に変  
わっていた。

【ATTACK・RIDE・STRIKE・VENT!!】

天から落ちてきた手甲、ドラグクローを装着した右手を引き、D龍騎は腰を深く落とす。

「サービスだ。火力はヴェルダンにしてやる。      ハアツ!!!」

「だあっ!!!」

シヤナの贄殿遮那から生み出された紅蓮の奔流と、D龍騎のドラグクローから放たれる昇竜突破が、ファンガイアの軍勢の一角を、正面から根刮ぎ焼き払った。

ギ、ガアアア!!!

後には、消し炭と化したファンガイアと、包囲網を突破する大きな通り道。

「行くぞ、ユウスケ、赤チビ!!!」

「ああ!!!」

「赤チビって言うな!!!」

カロンの生み出すファンガイアによって、再び塞がろうとする道を、D龍騎、シャナ、クウガは駆け抜ける。サガとマージヨリーが、敵を蹴散らしていくのを目の端に収めながら。

ガンツ！！

交差させたザンバットソードとキバーラサーベルが、ロブスターファンガイアのクレイモアと真っ向ぶつかる。

「クソツ、舐めんな！」

火花が散り、剣の重圧に足が笑うのを必死に抑え、Rキバーラはロブスターファンガイアを押し返す。

「腐っても王ですね。ですが！！」

クレイモアを構えたまま、ロブスターファンガイアの姿が残像を残して消え去る。

「無駄だ！　キバで戦った時とは違う！！」

キバーラもまた加速能力を使い、超高速の世界に入った。

常人には認知すらできない領域での戦いが、二人の間で巻き起こる。

聞こえるのは、互いの剣がぶつかる際の、甲高い金属音だけだ。

剣を挟み、ロブスターファンガイアは不適に笑う。

「成る程。確かにこれで手数は互角ですね。でも、やはり貴方は私には勝てない」

「何っ！？」

言葉を交わす間にも、二人は壮絶な剣さばきで相手へのダメージを狙う。

一方が攻めれば相手が防ぐ、逆もまた然り。

だが、その均衡が破られるのにそう時間はかからなかった。

「はっ！！」

ロブスターファンガイアのクレイモアが、Rキバーラのキバーラサ

ーベルを剣先で弾き飛ばしたのだ。  
Rキバーラがそれに気を取られたのは一瞬だったが、ロブスターフ  
アングエアにとってはそれで十分だった。

「しゃッ!！」

水の波動を纏った刀身が、Rキバーラを真一文字に切り裂いた。

「が、はっ!！」

傷口を抑えながらも、Rキバーラは追撃に備え、相手から距離を取  
る。

2478

「奏夜、大丈夫!？」

「あ、ああ。何とかな……」

キバーラサーベルを持っていた右手を見ると、痙攣を起こし、痺れ  
るような感覚に覆われている、

「いかに手数が互角だろうと、貴方の獲物は、所詮細身の刀剣。  
片や私は、一撃必殺をも狙える重量級のクレイモア。剣で防御すれ

ばするほど、貴方の腕にはダメージが蓄積されていく。戦略としては、受けるのではなく避けるべきでしたね」

「くっ……」

普通なら、こんなことは有り得ない。

本来両手持ちのクレイモアを片手で軽々と操り、軽量の刀剣と同スピードで振るえるロブスターファンガイアのパワーがあつてこそだ。

(やはり、一筋縄じゃいかないか……)

奏夜は気づいていなかった。

基本的な実力差以上に、先刻の質問が、彼の心を大きく揺さぶり、奏夜の力を鈍らせていることに。

普通の奏夜なら 仮面ライダーキバである紅奏夜なら、一度戦い、戦闘スタイルを把握した相手に対し、こんな愚作は使わないだろう。

冷静な判断が下せないまでに 奏夜には余裕が無かったのだ。

(キバーラ。ウェイクアップだ……一撃に賭ける!!)



自分の状態に気付く由もなく、奏夜は残ったザンバットソードを構える。

「WAKE・UP!!」

キバーラのコールと共に、Rキバーラは紅の翼を羽ばたかせ、ロブスターファンガイア目掛けて特攻する。

Rキバーラの必殺技『ソニックスタップ』だ。

「愚かですね。最後の技がその程度とは」

流れるような動きで、ロブスターファンガイアは宙に指を走らせる。

彼女の魔皇力に引き寄せられ、大地の奥深くの水脈から、怒涛のような水流が吹き出した。

ソニックスタップの解除は効かず、Rキバーラの特攻は、彼女の操る水流に阻まれる。

（み、水で俺のスピードを……!!）

Rキバーラが理解できたのはそこまでだった。

「貴方が、転生の輪廻に沈みなさい」

ザンツ！！

彼をせき止めていた水流を目眩ましに、ロブスターファンガイアがクレイモアの一撃を叩きつけた。

「ぐああああ　　っ！！」

「ぎゃああああ！？」

轟くような悲鳴を挙げ、剣と水流の勢いに負けたRキバーラは、地面に叩き付けられた。

小さなクレーターができたのと同じくして、Rキバーラの変身は強制解除される。

後には、激痛に呻く奏夜と、目を回したキバーラが残された。

「うっ……」

「きゃぷ……」

「……まだ息がありますか。しぶとさは人間並みですね。忌々しい」

倒れた奏夜に近付き、クレイモアを突きつける。  
確実に、トドメをさすためだ。

「せめて安らかに眠りなさい。愚かな信念を掲げた王よ」

「そこまでだ」

【ATTACK・RIDE・BLAST!!】

「!..!」

突如放たれたマゼンダ色の光弾、ロブスターファンガイアはすぐ様これに対処し、奏夜から離れた。

「よお、随分と楽しそうだな。俺達も混ぜてもらおうか」

戦場に駆け付けたデイケイドがライドブツカーの銃口を向けながら、不敵に言い放つ。

傍らには、シャナとクウガの姿もある。

「奏夜、キバーラ、無事？」

「門矢、シャナ、ユウスケ……？」

「喋っちゃ駄目だ！ 傷が深いんだから！」

クウガが奏夜を担ぎ上げ、シャナが目を回したキバーラを夜傘に隠す。

「ごめんね、シャナちゃん……私が、奏夜を守ってあげなきゃいけなかったのに……」

夜傘から聞こえる、キバーラの沈んだ声。シヤナはキバーラを気遣い、頑張ってくれた友達に優しい言葉を返す。

「大丈夫。あとは私達が何とかするから、キバーラはゆっくり休んでて」

「……うん、ありがとう」

ややあつて、キバーラの安らかな寝息が聞こえてきたのを確認し、シヤナは仲間と友達を傷つけた敵　ロプスターファンガイアを、烈火の如き瞳で睨む。

「……世界の破壊者の一派、それに魔神の契約者ですか」

「名乗りは要らなそうね。……討滅させてもらおう」

シヤナの怒りを真っ向から受け止め、ロプスターファンガイアは疲れたような溜め息をつく。

「あなた達三人を相手にするのは、少しばかり骨が折れますね。やむを得ませんか」

次の瞬間、ロブスターファンガイアが掲げた掌には、金色の蝙蝠キバットバット三世の姿があった。

「キバット!？」

シヤナの呼びかけにも反応しないところを見ると、やはりロブスターファンガイアの魔術で操られているらしい。

ロブスターファンガイアはそのまま、腰に巻かれたベルトにキバットを止まらせる。

「変身……」

光の鎖が巻きつき、ステンドグラスのように弾け飛ぶ。

彼女が変身したのは、奏夜と同じ仮面ライダーキバ。

変身プロセスこそ同じだが、奏夜のものとは異なり、アクアクラス

であるロブスターファンガイアのイメージを反映したのか、鎧の各部分は固そうな甲殻に覆われ、キバ・ペルソナはガルルフォームよりも鮮やかなマリンブルーに染まっていた。

「蒼い、キバ？」

「こいつは手間がかかりそうだな……。赤チビ、ユウスケ、お前らは下がれ」

前に進み出るディケイドを、二人は当然のごとく止める。

「待てよ士！！ キバになったってことは、あいつは並みのファンガイアじゃないぞ！ だったら三人で戦った方がいい！」

「お前の勝手な指図は受けないわ」

「なら奏夜とキバーラはどうする。コートに入れたり、背中に担ぎながら戦うわけにもいかないだろ」

ディケイドの正論に、二人は押し黙る。

「安心しろ。俺は全てのライダーをも破壊した男だ。今更あんなパ

チモンのキバにやられるかよ」

「大層な自信ですね。それともただの慢心ですか？」

「どうか。やればわかるさ」

アナザーキバの挑発にも、ディケイドは余裕綽々といった口調だ。彼はそのまま、ライドブッカーから一枚のカードを取り出す。

「本物の力ってヤツを拝ませてやるぜ」

【K A M E N ・ R I D E - K I V A ! !】

新たなカードを入れたディケイドの身体を光の鎖が包み、ステンドグラスとなって弾け飛ぶ。

奏夜の使うキバと同じ、赤い仮面ライダーキバの姿がそこにあった。

「キバの鎧!？」



「キバにはキバってね」

驚く仕草を見せるアナザーキバに、Dキバは悪戯を成功させた子供のような気分だった。  
しかし、驚いたのはシャナも同じだ。

「あいつ、キバにまでなれるの？」

「当然だよ。全ての仮面ライダーの力と、歴史を受け継ぐ仮面ライダー。それがディケイドだからね」

事情を知るクウガは別段驚きはしない。戦いの行方と、奏夜の容態を気にかけるだけだ。

「はあっ！！」

奏夜のキバと酷似した構えを取り、Dキバは鋭いパンチを繰り出す。  
対するアナザーキバは変身前と同様に、クレイモアの腹でそれを防ぐ。

「甘いな！」

Dキバはそのまま、アナザーキバのクレイモアを持つ腕を自分の両腕で挟み込んだ。

斬撃を封じ、キバは再びカードを取り出す。

【FORM・RIDE・KIVA・GARURU!!】

狼の鳴き声と共に、Dキバはガルルフォームへとフォームチェンジ。

「ハアッ！」

デイケイドライバーから出現したガルルセイバーを掴み、相手の右腕を離れた瞬間に、その刃を振り抜く。

「くっ、小癩な!!」

ダメージをもとめせず、クレイモアを振り被るアナザーキバに背を向け、DキバGFは次なるライダーカードを装填する。

【FORM・RIDE・KIVA・DOGGA!!】

「そら、よッ!!!」

重装甲に覆われたパワー形態、ドツガフォームは、振り返り様に魔鉄槌・ドツガハンマーをスイングする。

「ガハッ!!!」

さすがに耐えきれなかったのか、重厚な一撃に押し負けたアナザーキバは、数メートル先まで吹き飛ばされる。

「まだまだ行くぜ!」

【FORM・RIDE・KIVA・BASHER!!】

バツシャーフォームの持つ魔海銃・バツシャーマグナムから発射された水球が、ドツガハンマーの攻撃に怯んだアナザーキバを襲う。

「ちいっ!」

アナザーキバは手を突き出し、バツシャーマグナムと同じように魔

皇力の籠もった水球を放ち、DキバBFの弾を叩き落とす。

「ほう……パチモンにしては中々やるじゃないか」

「貴方こそ、さすがは世界の破壊者と謳われるだけのことはありますね。その王とは比べ物になりませんわ」

多少ダメージを喰らいながらも、アナザーキバはまだまだ余力があるらしかった。

（ユウスケの言う通り、ただのファンガイアじゃなさそうだな。少なくともワタルの親父と同等の力は持っている）

敵の強さを再認識し、DキバBFは、更に畳み掛けようとするが……。

「ですが、これ以上の戦いは無駄なようですね」

「……何だと？」

DキバBFの目の前で、アナザーキバは変身を解除し、レティシアの姿にまで戻る。

「おい、何の真似だ。まさか今さら敵前逃亡かよ」

「そう思いたくばどうぞ。」

貴方がいかに強者かは分かりました。ここで貴方に勝てたとしても、残る二人を相手にするだけの力は残らないでしょう。今戦ったのは、あくまで貴方の力を試す為ですよ」

「俺がそのまま逃がすと思うのか？」

「逃がすしかないんじゃないやありませんか？ そのの方が背負う愚

かな王 早くしないと手遅れになりますよ」

よく見ている。

士は相手の掌で踊らされた気分だったが、確かに奏夜の容態は素人目に見ても危ない。

できるだけ早く、医者に見せるべきだろう。

「狸野郎が。あいつの容態を見越して俺と戦ったってわけか」

「何とでも。私は無理な戦いはしない主義でしてね。」

私達の いえ、私の果たすべき目的を達成するまで、私は決して

「死ねないのです」

ローブを翻し、レティシアはDキバBFに背を向ける。

「愚かな王が目覚めたら伝えてください。貴方の思想は、所詮ただの綺麗事だと」

その言葉を最後に、レティシアの輪郭はぼやけ、周囲の景色へと溶けていった。

「……“私”の果たすべき、目的？」

変身を解除した土の言葉は、誰に届くでもなく、吹き抜ける風に溶われていった。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD！

「俺は、間違ってるのかな」

「あいつは変な所で不器用なんだ。他の世界のキバと同じようにな」

「僕はまだよく分からないんだよ、仲間ってヤツがどんなお宝なのか」

「あなたにも仲間がいるなら、それは分かる筈でしょう?」

「奏夜が誰かの笑顔を守るなら、俺も一緒に守る!!」  
みんなの  
笑顔も、奏夜の笑顔も!!」

【第二十三話・協奏曲／闇を晴らす蒼天】

全てを破壊し、全てを繋げ!

## 第二十二話・アチエレランド／崩壊の兆し・Bパート（後書き）

まず始めに、遅れてすいません！！（スライディング土下座）  
夏休みにまさか予定がここまで詰まるとは……。

・レティシアは読者様からのアイデアキャラです。

彼女の設定が今回の話にぴったりだった為、此度採用致しました。  
アイデアを提供してくださったゲイルライダーさん、この場を借りてありがとうございます。

・新たな“徒”カロン。名前や通り名の由来は、神話で冥界への渡し守とされるカロンから。

・キバットを奪われ余裕が無い奏夜へ、畳み掛けるようなレティシアの問い。

そに対する奏夜の答えが、今回の話のキーになってくるでしょう。

今回は奏夜の葛藤がメインです。彼を支えるのが誰なのかは予告とタイトルにヒントがあります。

では、また次回！

ロブスターファンガイア

クラスノアクア

モチーフノ海老

俗名ノレティシア・リネロ



真名／美酒が彩る魔の散華

戦闘／クレイモアを使った剣術。

高速移動能力。

水、それに準ずる物質の操作。

仮面ライダーアナザーキバ

奏夜のキバとは異なり、アクアクラスである彼女のイメージが反映され、身体が甲殻に覆われ、キバ・ペルソナの色はマリンブルー。

キバの鎧の力に加え、クレイモアによる剣技、バツシャーと同等の水操作能力、甲殻による防御力UPと、奏夜のキバを上回る力を秘めている。

ただし現在、アームズモンスター達が利用されるのを危惧した奏夜が、ザンバットソードへ彼らを一時的に封印している為、フォームチェンジはできない。

第二十三話・協奏曲／闇を晴らす蒼天・Aパート（前書き）

「青空は、基本的に晴れた日中の空を指す。昼間、空が青く見えるのは、太陽から出た光のうち、地球に一番届きやすいのが青色だからなんだ。

ちなみに夕焼けは、太陽の角度が変わっていくにつれ、赤色の光が届きやすくなるから赤く見えるんだよ。

みんなも辛い時は、青空を見上げてみてくれよな！」

小野寺ユウスケ

## 第二十三話・協奏曲／闇を晴らす蒼天・Aパート

「……またこんなパターンか」

目を覚ました奏夜を待っていたのは、身体中を襲う痛みと、見慣れない天井だった。

「……何処だろ。ここ」

少なくとも病院ではなさそうだ。

あちこちに包帯が巻かれた身体を叱咤し、奏夜は上半身を起こす。周囲を見渡すと、自宅に少し似た作りだが、部屋のレイアウトはまるで違っている。

「えっと……」

何がどうして自分はこんな怪我をし、見知らぬ部屋に横たわっていたのか。

（門矢のそこから出て、あのレティシアってファンガイアが来て、戦って、負けて、シヤナ達が来て……）

俺が今までしてきたことを、真っ向から否定されて。

「……………」

胃の中に、澱んだ何かが重々しく沈殿していく。

物理的なそれとは違う痛みに、奏夜は再び上半身を倒した。

今まで見えていた道が、いきなり崩れ落ちてしまったような、明確な道標を失ったような不安。

奏夜を苦しめるのはそれだった。

目を閉じれば、すぐレティシアの言葉が浮かんでくる。

共存などと下らない絵空事を掲げた連中に、私の痛みが分かるものか！！

「あそこまで否定されると、流石にこたえるよな……………」

何も言い返せないのだから、余計に苦しみは増す。

レティシアの痛みは　とても身近に感じる痛みだ。

だからこそ否定は出来ないし、彼女が選んだ道も理解できる。

そして彼女の道が、自分の道にとって強大な障壁となることも。

貴方の理想は果たして、本当に人間とファンガイアを幸せに出来るものなのですか？

「……………わからねえよ」

これは模範解答が存在しない問題だ。  
賛成率100%の政策は存在しない。

誰かが幸せになるということは、必ず誰かが不幸せになるという意味でもある。

レティシアが正にそうだ。

レティシアに限らず、誰か一人でも不幸せになれば　それは奏夜の理想とは違う。

(分かってたはず……………なんだけどな)

みんなを幸せにすることが、限りなく不可能に近くても、そうあるように努力しなければ、本当に望みは閉ざされてしまう。

だから頑張ってみよう。がむしゃらでも何でもいいから、誰も不幸にさせないようにしよう。

そうやって、自分にできることをしてきたつもりだった。

しかしレティシアの凄惨な過去が、『現実』という形で奏夜にのしかかってきたのである。

(結局は、綺麗事なのか?)

倦怠感に包まれた動作で、蛍光灯の光に手を翳す。

「俺は、間違ってるのかな」

がちやり。

「!」

虚を突いて開いた扉に、奏夜は肩を跳ね上げた。

「あ！ 気が付いたんですね」

入ってきたのは、氷枕を抱えたユウスケだった。

「良かった良かった。結構危なかったんですよ？ 傷もかなり深かったし」

「ユウスケ……ここは何処だ？ あれからのくらい寝てた？」

「光写真館の二階ですよ。」

今はちょうど、1日経った後の夜ですね。

あ、まだ身体起こしちや駄目ですよ。ハーフファンガイアでも、一週間は安静にしてなきゃって話ですから」

言いながら、パツパツと氷枕を代えていくユウスケ。  
手際の良いヤツだな、と奏夜は思った。

「……お前が、ここまで運んでくれたんだよな。ありがとよ、これで二回も助けられた」

「気にしない気にしない。困った時はお互い様ですって」

ユウスケは屈託の笑顔を浮かべる。

やや気落ちしている奏夜は、その笑顔に応えないまま、ユウスケに問う。

「キバーラは、無事だったか？」

「大丈夫。怪我はしてませんが、奏夜さんと比べればずっと軽傷です。明日には治りますよ」

良かった。

奏夜は胸を撫で下ろす。

自分に付き合わせて、一緒に大怪我を負わせてしまっただけは洒落にならない。

「あれから奏夜さんが眠った後……」

「奏夜でいいよ。あと敬語もいらない」

「えっ、でも……」

「気にすんなよ。見たところ、歳も変わらねーだろ」

「そう？ えっと、じゃあ奏夜が眠った後の話なんだけど、土やシヤナちゃんを中心にあって、今後の方針を決めたんだ」

あの後、レティシアがディケイドから逃げおおせたとはほぼ同時に、“冥夜の船頭”カロンも、サガとマーシヨリーの前から姿を消した。



『貴様らに裂く力はあまり持ち合わせておらんでな、とか言いながら、屍を盾にしてすたこら逃げてったわ。あのカラス爺』

とは、獲物を逃がして不満そうにするマージョリーの談。

その後、全員の聞いた情報を踏まえ、太牙の指揮下にあるファンガイア達を、御崎市全域の巡回に当てて犠牲者を減らし、相手の出方を見ろということになった。

太牙は、ファンガイア側への手回しの為にD&Pへ戻り、名護とマージョリーは吉田、田中、佐藤を送り届け、彼ら三人の護衛にしているらしい。

彼らは事情を知りすぎている為、狙われる危険性が高いと判断された為だ。

「一美ちゃんも、栄太くんも、啓作くんも、去り際までずっと奏夜を心配してたぜ」

「そっか……」

ばつが悪そうに頬を掻く奏夜。

生徒に心配されているようでは、教師の名折れである。

「シヤナと悠二は？」

「土達と一緒に一階にいるよ。俺達の中じゃ、奏夜が一番狙われやすそうだから、護衛の意味も兼ねてるんだって」

「……迷惑かけてばかりだな、俺」

気分は重くなるばかりだ。

ユウスケから視線を外し、ぼんやりと天井を見つめる。

突っ走った挙げ句、この体たらく。笑い話 いや、もう笑うことすらできない。

2505

奏夜は暗い表情を見て、ユウスケは、

「なあ。何か俺にできることってある？」

「……？」

奏夜はユウスケの方に顔をもたげた。

「あのファンガイアが最後に言ってたんだ。あんたの理想は綺麗事だって。何か、あいつに言われたから悩んでるんだろ？」

「……………」

「話したくないなら話さなくていいし、話したいならいくらでも話を聞くよ。俺は俺にできることをやりたい。だから、俺に何かできることがあるなら、何でも言ってくれ」

ユウスケの目は真剣そのものだった。

何故そんなにも自分を気遣うのかは分からなかったが、これが彼の優しさなのは、奏夜にも伝わってきた。

が、ユウスケの言葉にも、奏夜は表情を変えられなかった。気落ちした奏夜の心が欲するものは、条件反射の如く口から飛び出す。

「そつだな……。じゃあ爆笑必至のジョークを一つ」

「ハードル高ッ！？」

「はい。3、2、1、スタート」

「え、えーっと、宿に止まったグレースとマイケルが、食堂で肉料理を注文すると……」

「ありがとう。もういいや」

「いや、せめて最後まで聞いて!？ 自分でもつまんないかもって予感があったけど!！」

「肉料理か……そういえば腹が減ったな。何かない？」

「本筋と関係ない部分に食らいついた!！」

ブルーな奏夜は扱いづらかった。  
食べ物など用意していないユウスケは慌てて、ジャケットのポケットを漁る。

「……あ」

そんな中、ユウスケが見つけたのは、ある意味“キバである奏夜”へ渡すに相応しいものだった。

「こんなもんしかないけど」

「棒付きアメ？」

「昔、ある世界で出会った友達の好物なんだ。あれ以来、癖で持ち歩いててさ」

「……誰か知らないけど、ガキみたいなヤツだな。その友達」

いや、実際にワタルはちびっ子だったんだけど。というユウスケの心境など露知らず、奏夜は棒付きアメを口元に運ぶ。

「甘い」

「そりゃ良かった」

オレンジ味を舌で楽しみながら、奏夜はぼつぽつと語り出す。

「なあユウスケ」

「何？」

「さっき、話したいなら話を聞くなって言ったよな」

「？ ああ」

奏夜は何故か、言葉を紡ぐのに躊躇いを覚えなかった。まるで昔から知っていたような、違う世界で出会いでもしたかのような、奇妙な安心感をユウスケから感じていたからかも知れない。

「じゃあさ、ちょっと俺の下らない話を聞いてくれよ」

「ねえ」

写真の現像作業をしていた土に、背中から声がかかる。手を止め、土が振り返ると、泊まり込みで奏夜の護衛についたフレームヘイズ シャナの姿があった。

「何か用か？ ちびっ子はもう夕飯の時間だぜ」

「子供扱いしないで。お前に聞きたいことがあるの」

シヤナはじっと、自分を睨むように見つめてくる。  
本当なら話したくもない。とでも言いたげな眼孔だ。

「……ふん、まあいい。ちょうど作業も一段落したところだ」

「お前。奏夜のこと、何か知ってるの？」

「意味が何重にも取れるな。具体的に言えよ、赤チビ」

シヤナの額に青筋が浮かんだが、ここは自重すべきと思ったのか、  
大人しく質問を変える。

「私が怒鳴った時、お前言ってたわよね」

成る程、そついうことか。面倒くさいヤツだ。

「……キバットを盗られてから、奏夜はどんどんおかしくなってる。  
仲間をいいようにされているからってだけじゃ、説明がつかないく

らしい」

士への態度が正にそれだ。

普段の奏夜には、良くも悪くも余裕がある。それは彼の強みであり、戦いにおいて冷静な判断力にも繋がる。

だが今の奏夜は、戦いどころか、他人に気を配る余裕すら無くなっている。

それは、悪い結果にしか繋がらない。

「だから、何か思い当たったなら、教えて欲しい」

「心配なのか？ あいつが」

シヤナは沈黙を持ってそれに答えた。  
すなわち肯定である。

「俺は今まで、多くの仮面ライダーに会った」

士は手近にあったアルバムを開く。  
今まで巡った世界で、彼の写した写真の数々が収められているものだ。



「世界が変わればライダーも変わる。姿形からその資格者までだが、ただ一つだけ、どこの世界のライダーでも変わらなかったものがある」

「変わらなかったもの？」

「戦う理由 常に誰かを助ける為に戦うってことだ」

多少の違いはあれど、全てはそこに直結していた。最後にはそれぞれの世界を守る為、互いに戦うことにまでなったのだから。

「あいつも仮面ライダーなら、誰かを守る為に戦ってるハズだ。そんなヤツが、他人を遠ざけているんだとしたら、そこに何のメリットがあると思う？」

シヤナの脳裏に、今までの奏夜の姿が浮かぶ。思いのほか、その答えは早く導き出された。

「……他人を巻き込みたくないから？」

「正解」

士は笑い、アルバムのページを進めていく。

「あのレティシアとかいうファンガイアは、俺からみても中々の敵だ。キバまで盗られりゃ、いよいよ危険度は増す。

自分の落ち度で敵を強くして、誰かが傷付かせたくないんだろうよ。……わざわざ、会ったばかりの俺にまで気を使ってな」

シヤナも今なら分かる。

思えば奏夜が、士に一番剣呑な態度を取ったのは、士が奏夜に協力をもち掛けた時だ。

あれは、出会ったばかりの士達を、自分のせいで傷つかせたくないかったのだろう。

「要するに、あいつは変な所で不器用なんだ。他の世界のキバと同じようにな」

本当に面倒くさいヤツだ。と士は繰り返す。シヤナは浮かない顔で口を開く。

「奏夜は、大丈夫だと思っ？」

ああ見えて、奏夜は頑なだ。シヤナ達が何度言おうが、協力を求め

たりはしないだろう。

「また、無茶なことをしてしまうかも」

「さあな。結局はあいつ次第だが……まあ多分、問題ないだろう」

「どうして？」

「あいつが無茶しても、お前達が止めるだろ」

急な言葉。

呆気にとられたシャナを、土は指差す。

「お前が俺を怒鳴った時、奏夜とそれくらいの信頼関係は築いてる  
と思ったんだが？」

淡泊な口調は変わらない。

しかし、シャナはその土の言葉から、僅かに柔らかさを感じたように思えた。

「……お前も、奏夜を不器用って言えないと思う」

「どっぴり意味だよ」

「別に」

不機嫌そうに口を尖らせた土を見て、シヤナは僅かに笑う。  
まだわだかまりが溶けた訳では無いが、シヤナは少しだけ、土への  
認識を改めた。

「奏夜が起きたら、また話を纏めましょう。邪魔したわね」

「まったくだ。神聖な現像室へ勝手に入ってくるな」

シヤナが部屋から出て行くのを見送り、土はアルバムを片付けなが  
ら呟く。

「そう……。あいつらが奏夜を信頼しているように、奏夜もあいつ  
らを信頼している」

しかし、もしそうなら、シヤナに話した理由では、説明がつか  
ない。

「分からない。紅奏夜……お前は何を考えている？」

一方、シャナと共に泊まり込みの護衛についている悠二は、

「シャナ？ ……はあ、どこ行つたんだか」

シャナを探し、写真館をうろろしていた彼は、溜め息をつきながら、撮影用のカーテンロールのある居間に戻ってくる。手近にあるテーブルにつこうとするが、そこには先客がいた。

「やあ、“ミステス”くんじゃないか」

「……海東さん」

気さくな海東に対し、悠二はやや固い声だ。彼がシャナの刀を狙ったことを考慮すれば、当然のことだが。

「『炎髪灼眼の討ち手』なら現像室だよ。何か用でもあるのかい？」

「いえ、これといって特別な用は無いんですけど」

海東は「そう」と短く相槌を打ち、悠二から目線を外す。

「海東さんは、何やってるんですか？」

「ん？ お宝の手入れだよ。すぐ壊れるようなシヨボいお宝を集めてるつもりはないけど、どうしても埃とかは溜まるからね」

意外に几帳面な性格のようだ。

清掃用の布を動かす海東の前 円形のテーブルには、確かに悠二が見たこともない物品が置かれていた。

「突っ立ってないで座れば？ せっかくだから、僕のお宝を見ていたまえ。ただし、手は触れないでくれよ」

「はあ……」

お宝至上主義な言動に、なんとなくフリアグネを思い出しながら、悠二は席につく。

そのまま海東に促された通り、彼のお宝を眺める。

(確かに、これは『お宝』かも)

それが悠二の感想だった。

彼には理解不能なものばかりだったが、その『わからなさ』に、興味をそそられる。

携帯電話と一体になったベルト。

豪華な宝石が散りばめられた黄金のピストル。

奇妙なアルファベットが描かれたUSBメモリ。

動物の刻まれた赤と金のメダル。

そして、何故か何の変哲もないコシヨウ。

「このコシヨウは何ですか？」

「コシヨウとは失礼な。土から貰ったお宝でね。大航海時代、かのバスコ・ダ・ガマが命がけで捜し求め、金と同じ値段で取引されたという伝説のスパイスさ」

ぜってー嘘だ。

悠二は即座にそう判断したが、得意気な顔をする海東を見た途端、真実を語る気が削がれてしまった。

世の中、優しい嘘を信じさせたままの方がいい時もある。

(そう言えば……)

ふと悠二は、宝の山の中から“あるもの”を探そうとする。

「断っておくけど、あのキバが探してるお宝は別で保管してるから」

悠二の意図を見透かした海東が先手を打つ。

「言つたる。同じ価値のお宝がなければ、魔皇竜は返さないって。なんなら、キミの中身を差し出すかい？」

「……さすがにそれは出来ませんが」

零時迷子を取り出されることは、坂井悠二消滅を意味するのだから、当たり前だ。さして期待はしていなかったのか、すぐ作業に戻った海東に、悠二は問う。

「貴方は先生から何を盗んだんですか？」

奏夜のあの様子じゃ、相当大切なものようだったが。



「魔皇竜と呼ばれるドラゴン族の子供だよ。キバの鎧を最終覚醒させ  
る存在さ」  
ファイナルウエイクアップ

「魔皇竜……」

今聞いた役割からすれば、その魔皇竜もキバットや次狼達と同じ、  
自分達と出会う前からの大切な仲間ということだろう。

「じゃあ、尚更返してください」

「やだよ。何度も言わせないでくれたまえ」

「っ、何ですか！ 仲間を失えば誰だって辛い！ あなたにも仲  
間がいるなら、それは分かる筈でしょう!？」

あんまりな言い草に声を荒げた悠二に、海東は一瞥をくれる。

「……仲間、ねえ」

独り言のように呟く海東。悠二の怒りには微塵も威圧されていない  
ようだ。

「キミの言う仲間が土達のことを言っているなら、それは少し違うな」

「えっ？」

「いや、キミ達の言う仲間とは違っていてどこか」

海東は机に頬杖をつく。

「僕にとっては、仲間もお宝の一つなんだよ」

「仲間が、宝？」

「ああ。ただ、これがまた価値の判断しづらい代物でね。土はしょっちゅう口にするんだけど、仲間が一体どういう意味を持ち、何を与えてくれるのか、僕には分からないんだ」

冗談を言っているようには聞こえなかった。

今までのフラットな口調とは打って変わって、海東の声は明らかに

本気の感情が籠もっている。

「要するにさ、僕はまだよく分からないんだよ。仲間ってヤツがどんなお宝なのか。僕はそれを知る為に、土達に引ッ付いてるってワケ。

ほら、キミ達の言う仲間とは違うだろ？」

もはや悠二は絶句していた。

仲間をお宝を定義するのもそうだが、何より海東の考え方そのものが、明らかに常識を逸脱していた。

（ああ、そうか）

ようやく理解した。

海東大樹は、あまりに特殊な価値観を持った人間であり、シャナや悠二とは明らかに違うのだと。

だが、

「あまり、深く考えなくてもいいんじゃないですか？」

「えっ？」

悠二は躊躇いがちに口を開いた。

「仲間の意味なんて、人それぞれ違いますよ。海東さんが『仲間ってこういうものなんだ』って思えば、それが答えです」

「……答えを決めるのは、僕自身ってことかい？」

「はい。仲間の意味が分かれば、仲間を失う気持ちだって分かる筈です。僕達からすれば、海東さんと土さん達は、もう十分仲間だと思いますけどね」

「ふむ……」

また思案顔になる海東。深い思考の海へ入り込んでしまったようだ。

（僕が説得できるのは、ここまでかな）

海東がちやんと、奏夜の友達を返してくれるといいのだが。自分の手で奪い返す力の無い悠二にできる、これが最大限の努力だった。

席を立ち、部屋から出ようとする悠二に、

「キミにとってのお宝は“炎髪灼眼の討ち手”なのかい？」

「は？」

海東は予想外の質問を投げかけた。

「違うのか？ てっきり恋仲か何かかと思ってたけど」

「じつ……！！」

最初は反応が鈍かった悠二だったが、海東の言葉にどんどん顔が赤くなっていく。

海東としては、自分に『仲間』の意味を教えようとした少年に興味を持っただけで、特に他意は無いのだが。

「それとも吉田って女の子の方？ 彼の友達と比べれば随分親しげだったけど」

「い、いや、あの、二人は、そういう話とはまた別で」

「別？ それなら一体……」

「し、しし失礼します!!」

追求を恐れた悠二は、顔を染め上げたまま、居間から逃走した。

「何なんだ？」

自分のせいだという意識は一切無のまま、海東はお宝の乗ったテールブルに視線を戻す。

「……仲間の意味は人によって違う、か。そうかも知れないな」

海東は足元の鞆から、鎖の描かれた小箱を取り出す。

「他人にとってはガラクタでも、人によってはそれが『お宝』だっ  
てこともあるしね」

小箱の中にあつた“黄金のフェッスル”を撫でながら、海東はぼやいた。

そして、全員が寝静まった夜中。

「……ダメだ」

小野寺ユウスケは寝付けずにいた。

原因は分かっている。先程、奏夜から聞いた話のせいだ。

彼を悩ませている、答えのない問題。

奏夜は「聞くだけでいい」と前置きしてくれたが、いずれにしても、ユウスケが明確な答えを出すことは不可能だっただろう。

結局はユウスケも、奏夜と同じ深みに嵌ってしまったわけである。

「俺も……って言うか、誰にも答えられないだろ。こんな質問」

言い方を変えれば、結局は奏夜の気持ち次第という話だが、そこで納得できないのが小野寺ユウスケという男だ。

友を止める為、『究極の闇』にまでなった彼のこと。目の前で困っている人間を放っておける筈がなかった。

（あー、でもそれだけじゃないんだろうな）

単純な自分に苦笑いを浮かべるユウスケ。

奏夜を助けたいと思うのは、自分の性分だけでなく、どこかで。

ブオンツッ!!

「わっ!」

突然の音にユウスケは跳ね起きた。

一階から聞こえてきた音は、なるべく大音量にならないようにしているようだが、どう聞いてもバイクのアクセル音。

「……まさか」



ユウスケは嫌な予感がした。  
他の人を起こさないよう、しかし出来る限り早足で、隣の奏夜が寝ている部屋へ。

扉を開けると、心地の良い夜風が通り抜ける。  
しかし、ユウスケにそんな心地良さを感じる隙は無い。

部屋のベッドは蛻の殻。近くの開け放たれた窓から流れる風が、カーテンを靡かせていた。

「身体は……ま、全快時の二割ってところか？」

「そんなに大丈夫なの？」

「何とかなるだろ。それよかキバーラ、お前の方こそ大丈夫なのか？」

「奏夜よりは大丈夫よ。もう怪我也治ったし。それに最初、キバの鎧を取り返すまで付き合えって言ったのは奏夜じゃない」

「……悪いな」

「気にしてないわ」

キバットをポケットに隠し、奏夜はマシンキバーのアクセルを入れようとする。

「こんな夜中にお出かけとは、有明の海でも見に行くのか？」

と、夜の静寂を突然の音が破る。

気が付けば、いつの間にか光写真館の表札の柱に、誰であろう、門矢土が寄りかかっていた。

「……バレねーように気は払ったんだがな」

「俺は人の気配を探ることにおいても、頂点に立つ男だ」

その言葉の意味はわからないが、とにかく凄いのは分かった。

「分かってるだろうが、止めても無駄だぞ。それに、お前の手は借り……」

「俺達やお前の生徒達を巻き込まないように、か？」

「……そこまで分かってるなら」

「ああ、俺も止めるつもりはない。そうする義理も義務も無いしな」

士は眠そうに欠伸をする。

……まさか奏夜が抜け出すのを予想し、出るタイミングを待つ為にずっと眠気と戦っていたのだろうか。  
だとしたら涙が出る。

「だが、本当にそれだけなのか？」

「？ 何がだよ」

士は表情を変えないまま、何の前置きも無く言い放つ。

「俺達やあいつらを巻き込みたくない理由は、本当にそれだけなのか？」

「……………」

閉口した奏夜の顔に、感情の色はなかった。

シヤナ達がみたらさぞ驚いたであろう　あまりに虚ろな顔だった。

しばらくして、奏夜は土から視線を外す。

「何の話だ？　これはあくまで俺の落ち度で、お前らは何も……………」

「とぼけるな」

奏夜の声が揺らいだのを見て、土は畳み掛けるように言う。

「お前の生徒達と話せば、お前達が本当に信頼し合っているのは分かる。その信頼する相手を、自分のいざこざに巻き込みたくないっ

て気持ちに、嘘は無いんだろう」

奏夜は無表情のまま、ただ黙って土の言葉を聞いていた。

「だが、お前がそこまで仲間を思いやれるヤツなら、本当の信頼がどういふものか分かっているハズだ。

一人で突っ走ってお前が傷付けば、仲間も同じだけ傷付くってこともな。

多分、普段のお前なら、仲間を信じて、一緒にキバットを取り返そうとするんじゃないか？」

持論を展開していく土に、奏夜は段々と無表情だったその顔を曇らせていく。

だが、無論土は止まらない。

「お前にはまだ、何か隠していることがある。何か、あいつらに知られてはならない秘密がな。敢えて予想するなら」

親友だつてこと以外にも、早くキバットを取り返さなきゃならない事情がある、とか。

「……………んー」

奏夜は土の問いには答えず、困ったようにそう呟く。

首を変に曲げたり、あらぬ方向に視線を向けたり、身体をゆらゆら揺らしたりと、奇妙な動揺の仕草を繰り返し、

「参ったねこれは」

奏夜は薄く笑った。

笑みを作るだけの余裕はあるようだが、困惑した雰囲気は消えていなかった。

「本当に変なヤツだな。お前」

「お前に言われたかねえよ」

「あはは。そりゃそつだ」

マシンキバーを止めて機体から降り、奏夜は土に向き直る。

「さて、お前は誤魔化せないだろうし、聞きたきゃ聞かせてやるが……シャナや悠二に言わないでくれよ?」

「ああ、そんなつもりはない」

士としてはあくまで、気付いてしまったから聞く、程度の興味だ。奏夜に不都合があるなら、シャナ達に話す気は皆無である。

「門矢。確かお前は、二つのキバの世界を巡ったらしいな」

「ああ、そつだ」

「その世界のどちらかで、ハーファンガイアにも会ったか?」

「勿論。まあ、あの世界でハーファンガイアは、キバの資格者くらしいものだったかな」

「……つまり、二人だけか」

しかし、すぐ士は後悔することになる。

興味本位で奏夜の 奏夜の抱える『爆弾』の話聞いてしまった

ことだ。

「門矢、ここで一つクイズだ」

なんでハーフファンガイアは、数が少ないんだと思う？

含みを持たせた奏夜の問いに、士は何の気なしに答える。

「昔から、人間とファンガイアが交わるのが禁忌だからじゃないのか？」

「50点だな。確かにその掟のせいもあるだろう。けど、お前の巡った二つのキバの世界では、人間とファンガイアの共存が果たされてたんだろ？  
ならもう少し、ハーフファンガイアが増えてもいいんじゃないか？」



「それは……」

言われてみれば、確かにそうだ。

単純に、偶然出会ってないだけという話かも知れないが、そんな偶然が果たして成り立つだろうか。

「時間切れだな。では正解発表」

士の思案顔に満足しながら、奏夜は笑顔で言い放つ。

そう、  
“笑顔”で。

「ハーフファンガイアには、“時間”が無いからだよ」

「とまあ、そういうわけ。理解したか？」

「……………」

すべてを聞き、士は言葉を失った。

有り得ない。

奏夜の行動の全ては、まさに生命の暴走だった。

自らの全てを燃やし尽くし、その先のゴールが決して救いではないと分かっていたながら、尚も進む。

かつては士も似たようなことをした。世界を蘇らせる為、ただ一人だけで歩む道を選び、孤独にライダーを倒し続けた。だが、そんな士でさえも、奏夜の生き方には、畏敬の念を抱かざるを得なかった。

「何故だ」

耐え切れず、士はバイクに戻ろうとする奏夜に問う。

「そんな運命に縛られて、お前は何故先に進もうと思える？ お前

は、自分を待つ未来が怖くないのか？」

「……怖いよ。怖くて仕方ない」

今だって、レティシアにもう一度会つのを考えただけで、足が竦んでしまう。

「でも、俺は止まれないんだ」

まだ、レティシアの問いへの答えは出ていない。

結局、いくら考えても分からなかった。

しかし 例えが出なくとも、立ち止まることだけは許されない。

「俺はキバで、仮面ライダーで、人とファンガイアを繋ぐ架け橋だから」

平和な世界で、みんなの顔に浮かぶ笑顔。

それを背負った自分が、立ち止まってなどいられるものか。

「俺の理想が間違ってたとしても構わない。みんなが笑っててくれれば、俺は立っていられる」

「……お前が、その笑顔の中にいなくてもか」

「ああ。……少し、残念ではあるがな」

小さく本音のようなものを漏らし、奏夜はマシンキバーのアクセルを入れる。

「ああ、そつだ門矢」

「何だ？」

「言い忘れてたよ。レティシアの時、助けてくれてありがとな」

朗らかな笑顔だった。しかし士は何か気が喰わず、つんと顔を逸らす。

「空元気の笑顔で礼を言われても嬉しくねえよ」

「そつか。悪いな、今はちよいと上手く笑えねーんだ」

それじゃあな。と言い残し、マシンキバーはあっという間に夜の闇

へ消えていった。土がその姿を見送ると、入れ違いに写真館の中から、ユウスケが飛び出してきた。

「土！ 奏夜がここに来なかったか？」

「夜のお散歩だとさ」

それが言葉通りの意味でないのは、さすがにすぐ分かった。ユウスケは舌打ちしつつ、止めてあった彼のマシン、トライチェイサーに乗り込む。

「行くのか」

「ああ」

「今のあいつを、本当の意味で笑わせるのは難しいぞ、ユウスケ」

「それが何だ」

ユウスケはヘルメットを被りながら答える。

「目の前の人を笑顔に出来ないで、世界中の人を笑顔になんか出来るかよ」

ヘルメットのグラス越しに見えるユウスケの目は、強い光を宿していた。

重厚なエンジンとアクセルの音と共に、トライチェイサーはユウスケを乗せ、あっという間に土から見えなくなった。

「単純なヤツめ」

どこか喜びを含んだ表情のまま、土は二人が消えた夜の闇を見つめていた。

## 第二十三話・協奏曲／闇を晴らす蒼天・Aパート（後書き）

・土とシャナ、ユウスケと奏夜、海東と悠二の会話。……夏海と彩香とイカデビルは？ とか言わないでください；

・お宝の中のメダルは……まあ隠しネタです。

・海東の仲間の認識は、僕の中であんな感じですよ。海東は未だに、仲間の概念がまだ良く分かってないんじゃないかなーって思ってます。

・奏夜の時間について少し触れました。彼を待つ運命とは？

・最後のユウスケのセリフは、ディケイド最終回なのですが、好きな台詞なんで使いました。ユウスケは本当に清々しいヤツなんで大好きです。

では、また次回！

## 第二十三話・協奏曲／闇を晴らす蒼天・Bパート

「もう夜明けですね……」

古城の一室。レティシアは天井のステンドグラスを見上げていた。色彩豊かなガラスに光が差し、煌びやかな輝きが彼女に降り注ぐ。

この場所は好きだ。血生臭い出来事ばかりの中にあって、唯一心が安らぐ場所。

「世界は、こんなに美しいものを作れるのに」

私達は何と愚かしく、矮小なことか。  
くだらない理由で互いに牽制し、争い、傷つけ合う。その中に安息の時など無い。

レティシアは自身もまた、そんな世界のシステムに組み込まれた存在だと自覚している。  
所詮は自分も、己の願望の為に争っているだけなのだから。

(影のキングが愚かしいというのなら、私も同じなのでしょうね)



所詮、同じ穴の貉。しかし、それがどうした。

今更、自分の罪など数え切れはしない。

迷いは愚の骨頂。

目的の為ならば、そんな汚名も喜んで被ろう。

影のキングをもはや危惧する必要はない。注意すべきはやはり、フレイムヘイズと世界の破壊者か。

「大丈夫」

ライフエナジーを集め、キバの鎧を手に入れ、ようやくここまで来たのだ。

余計な邪魔を入れさせはしない。

祈りを捧げるかのように、首にかかったペンダントを握り締めるレティシア。

「待っていて。もう少し……もう少しだから」

「レティシア」

振り向くと、カラスの頭部を持つ異形　自分の宿願になくてはならない“徒”。カロンが立っていた。

「首尾の方は？」

「問題はやはりライフエナジーと存在の力じゃが……まあ差し支えはなかるう。あとはぬしのキバがあれば、不足分に補えようて」

「そうですか。では」

「うむ、いよいよじゃ。儂が死者の王となり、ぬしは非情なる運命から、己の過去を奪い返す」

それぞれの望みを確認し、頷き合った二人。

しかし　いざという時に、余計な邪魔は入るものである。

「！」

カロンとレティシアはほぼ同時に、ここへ近付いてくる気配を感じ取った。

「……まったく、黙って見ておればよからうに。往生際の悪いこと  
じゃな」

「忌まわしきは、諦めの悪い人間の血ですね。カロンの、私が行きま  
すから、準備の方は任せましたよ」

「良いのか。ぬしが出向かずとも、守護の為の兵は配置しておろ  
う？」

「別に彼を迎え撃つわけではありません。彼が来たところで、今更  
私達を止められるわけがないでしょう？」

「ならば、何をしにいくと？」

レティシアは肩を竦め、淡白な口調で答える。

「一応は、答えを聞いてあげようかと思いましたがね」

「？」

疑問符を浮かべるカロンの、レティシアは苦笑する。  
自分でも馬鹿げているとは思う。  
こんなこと、本当は意味などないというのに。

「まあ、所詮は与太話の類いですよ」

直ぐ戻ります。レティシアがロープを翻すと、細かな光の粒子が輝き、彼女の姿は掻き消えた。

「……………」

カロンは彼女の消えた虚空をしばらく見つめ、ステンドグラスの部屋を後にした。

「薄気味悪い森ねえ…………… 奏夜、普通に整備された道を通った方が良かったんじゃないの？」

「舗装された道の先は結界が張られてる。通れるのはこっちしかない」

森に轟くバイクのエンジン音。

写真館を出た奏夜とキバーラは目下、レティシアの魔皇力を感じ取った場所　町外れの森林地帯へやってきていた。

朝方だというのにも関わらず、光の差さない森は、キバーラの言う通り薄気味悪い。

「でも何で、この森しか結界が張られてないのかしら？」

「侵入経路を絞る為だろ。八方を防ごうとすれば、必ず無理が生じる。迎撃し易いポイントを敢えて用意するのも手だ。……ま、よっぽど腕に自信が無きゃできない策だな」

実際、それだけの力はある。

カロンとかいう“徒”については分からないが、レティシアに関して言うなら、彼女の力はチエックメイトフォークラス。

Rキバーラさえも完封したのだから、そのポテンシャルの高さは認めざるを得まい。

(せめて『黄金のキバがあればいくらか違っただらろうが……])

やはり夜中の内に、海東の荷物にガサ入れしておくべきだったかと、奏夜が今更な後悔をした時だった。

「……」

マシンキバーが土を巻き上げながら止まり、奏夜は森林地帯を貫くように伸びる道の先を見る。  
行く手を阻むように立つ、黒いローブに蒼眼蒼髪の女　レティシア・リネロと目が合った。

「貴方も相当往生際が悪いですね」

「お褒め戴き光荣だ、レティシア・リネロ」

台詞こそ軽口めいたものだったが、奏夜の表情は真剣そのものである。  
このファンガイアに対し、一片たりとも油断できないのは、もう理解していた。

「答えは」

レティシアは問う。

「答えは……出ましたか？」

「……」

奏夜は言葉を発せなかった。

答えを提示しようと思えばできないことはない。

だが、考え抜いた結果に生まれた解答は、どれも味気ない定型文のようなもの。

そんなものでは、誰も納得などしない。

レティシアも それこそ奏夜でさえも。

だから、奏夜は口を開かない。言わばこれは、記号選択式ではなく記述式なのだ。

問題の意を理解しなければ、部分点すら与えられない。

「……わからねえよ」

「そうですか」

レティシアは感情の読めない口調で、短く返す。

呆れたとも、幻滅したとも取れた。

「お前には分かんのかよ。俺の望む理想が、果たして希望なのか絶望なのか」

「絶望だと “私” は思います」

強い口調で言い切るレティシア。

「いかに貴方の思想が素晴らしかったとしても、百人中九十九人が貴方の思想に共感しても、私は認めません。

それが私の選んだ答え。選んだことで、いずれ報いを受けることになったとしても、この意志だけは奪わせない。

私は人間を憎み、私の願いの為に生きる。それだけです」

僅かな迷いも感じられなかった。

正しさも間違いも全て飲み込み、前に進む覚悟。

レティシアにはあって、今の奏夜にはないもの。

奏夜が 見失ってしまったもの。

(こいつは“本物”だ)

ある種の敗北感さえ、抱いてしまう。

頼りなく立つ影の王。

既にレティシアの瞳からは、彼への興味が失われていた。



「答えを出せぬ貴方が、ここにいる資格はありません。今度こそ、転生の輪廻に沈めてあげましょう」

パチンとレティシアが指を鳴らした途端、上空や木々の影から、数多のファンガイアが姿を現す。レティシアの揃えたアヴェンジャーの精鋭と、カロンの蘇らせた死者の軍勢だ。

「今の貴方など、私が手を下すまでもない。我が同胞よ、貴方達の好きになさい。私が許します」

ウオオオッ！

覇気雄々と、ファンガイア達は己の持つ殺気を、容赦なくぶつけてくる。

「では、ご機嫌よう」

指をもう一鳴らしして、レティシアの姿は掻き消えた。

一抹の虚無感を覚えながらも、奏夜は戦いへと思考を切り替える。

「奏夜、この数いける？」

「やるっきゃねーだろ」

正直なところ、まだ本調子ではない。

回復率は全体の二割。

精神はガタガタに揺れ、燃料供給がストップしたかのように、何の闘志も湧き上がってこない。

（ ソラトとティリエルが襲ってきた頃のマージョリーも、こんな最悪のコンディションだったんだろうな ）

戦いへの矜持がまるで生まれない、というのは予想以上のハンディキャップだが、それでも『逃げる』という選択肢だけは浮かんでこなかった。

闘志を失っても 戦えないわけではないのだから。

「行くぞキバーラ」

「オツケイ!!!」

ポケットから飛び出したキバーラが、奏夜の指先に噛み付く。

「か〜ぷっ  
」

「 変身  
」

静かに唱えた奏夜を、スピード型の紅光が覆い、ステンドグラスと  
なつて弾け飛ぶ。

不調を賭して光臨したRキバーラの姿は、それでもその凛々しさを  
失っていないかった。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈めえ！」

鼓舞するように叫び、手元の二刀剣を交差させるRキバーラ。

それを皮切りに、ファンガイアの群れはRキバーラへと襲いかかっ  
ていく

「なんで奏夜を一人で行かせたの!？」

机をばんつと叩くシャナ。傍らには彼女ほどではないが、険しい顔をした悠二もいる。

が、土は終始表情を変わず、しかめっ面のままだ。

「ちょっと土くん、シャナちゃんと悠二くんの話聞いているんですか？」

「あー、聞いている聞いている。やっぱり天使と悪魔は映画より原作の方が……ってちょっと待て、わかった。冗談だから親指を立てながら近付いて来るな夏みかん」

夏海に笑いのツボ発動を示唆され、はぐらかそうとした土の目論見は失敗に終わる。

「真面目に答えて下さい。なんでみすみす奏夜さんを行かせたんですか。何故かユウスケまで出て行っちゃいましたし」

「そうですね。先生はまだ怪我也治りきってないし、例えユウスケさんが着いていったとしても……」

「あいつ　　奏夜は、誰かに命令されて足を止めるようなタイプじゃない」

悠二の言葉に被せる形で、士は自分の考えを述べる。

「むしろ、一度決めたら頑固に突っ走るタイプだ。お前らも分かっているだろう？」

「それは……」

反論しかけて、シヤナは口を噤む。

確かに、奏夜はそういう性格だ。力もあるし、本気になれば誰も奏夜を止められないだろう。

「でも士さん！　今の先生はいつもの調子を取り戻せてません！

このままじゃ、今度こそ大怪我じゃ済まないかも知れないじゃないですか！」

「だったらどうする。確かお前らは、奏夜がキバにならなきゃその気配を追えないんだろ？　すぐに追い掛けたユウスケならいざ知らず、今更どこに行ったかなんてわかるかよ」

もつともな意見に、悠二も言葉を無くしてしまった。

事の発端であるレティシアの気配を探ろうにも、シヤナの話によれば、彼女は魔術で気配を消しているらしく、奏夜や太牙クラスでなければ、その所在地を探ることはできない。

「大人しく、太牙かマージョリーとかいう女が来るのを待ってる。……それに、奏夜にはユウスケもついてるだろうしな」

淡泊な口調。しかしその台詞からは、士がユウスケに抱く信頼感が滲み出ていた。

「あいつはバカがつく程のお人好しだが、頼りにはなる」

「……あいつ　ユウスケって、そんなに強いのか？」

ディケイドの強さを知るシャナからすれば、士が一目置くという時点で、その相手は凄まじい強さを持っていると思わざるを得なかった。

「ああ、あいつは強いよ。何より『心』が強い」

士はふっと笑って、

「俺を止める為に、究極の闇にまでなるような奴だからな」

「……？」

どういう意味。と問おうとしたのとほぼ同時に、写真館のドアが勢いよく開け放たれた。

館内の人間が肩を跳ね上げるのを後目に、名護、太牙、マージョリーの三人が入ってくる。

なにやら不穏な空気を感じ取ったマージョリーが、

「んー？      なんかお取り込み中だったかしら」

「いや、別に何でもない。何かあったのか？」

「ああ、太牙が集めた情報を元に、連中の目的が見えてきたんだ」

名護の報告に館内がどよめく。

太牙がテーブルに抱えていた資料を広げ、全員の目をこちらに向けさせる。

「奴らの目的は、単なる殺戮じゃなかった。      誰もが願う、だが決して願ってはいけない望みの為に、人々を喰っていたんだ」

『WAKE・UP!!』

キバーラのコールと共に、二本の剣が紅い光に包まれ、Rキバーラの背中から輝く両翼が顕現する。

「ウオオオオツ!!」

急降下から繰り出される斬撃『ソニックスタップ』が、ファンガイア数十体を薙ぎ払う。砕け散ったステンドグラスが視界に入るが、気にしている隙は無い。

グルオオオツ!!

仲間の屍を踏み越え、新たに現れた数十体が、間髪入れずになだれ込んでくる。

「チイツ!!」

キバーラサーベルとザンバットソードを振り抜き、目の前の敵を斬り捨てていく。

だが、相手は一向に減る気配がない。

(クソツ、今何体倒した? あと、何体倒せばいい?)



連日の無理が祟ったのか、Rキバーラにも疲労の色が濃い。  
剣技のキレも鈍ってきている。

「なかなかしぶといな。影のキング」

軍勢を押し分け、一体のファンガイアが姿を現した。  
外観はラットファンガイアと似ているが、外皮の一部がハリのように尖った亜種　スパイキーラットファンガイアである。  
はつきりした言語を話したのを見ると、屍ではない。  
アヴェンジャーの一派か。

「次の相手は、お前か？」

「そして、貴様の最後の相手になる」

「ほざいてる!!」

Rキバーラの姿がぶれ、超高速の世界に消える。

(一撃で決める！)

同じスピードを持たない限り、Rキバーラは認知できない。

こちらが劣勢である以上、相手の力が発揮される前に潰すべき。

現状を鑑みれば、Rキバーラの判断は満点と言えるものだった。

しかし、

「ぬっん！」

それは適わなかった。

突如、スパイキーラットファンガイアの外皮 突起状になってい  
る毛皮が、全方位に張り巡らされたのである。

「なっ！」

これでは加速しても意味はない。

展開された防御膜は、Rキバーラの攻撃を阻み、彼の鎧の一部を貫く。

「全力を出せぬ身でこの力とは恐れ入る……しかし、ここまでだな」

「はっ、傲るなよ。その針だって、剣をぶつけ続けりゃいつかは壊れるぜ」

肩の傷を押さえながら、Rキバーラは魔皇力を再び高める。  
また超加速を発動させる為だ。

「いや」

スパイキーラットファンガイアは動じず、薄く笑う。

「ここまでだ」

スパイキーラットファンガイアがそう呟いたのと、Rキバーラの鎧に電光が走ったのがほぼ同時だった。

「が、あああああああ！！」

「じ、時間切れ……!? は、早く解除しなきゃ……!!」

聞くに耐えない絶叫を挙げるRキバーラのベルトから、キバーラが外れた。同時に鎧が弾け飛び、そのまま奏夜は地面に倒れる。

「ぐ、が……」

「きゃぷ……」

奏夜は地を這いながら激痛に悶え、キバーラは目を回している。だが、ファンガイア達はまだ動ける連中ばかりだ。

「だから言っただろう。終わりだと」

「て、てめえ、制限時間のこと知ってやがったのか……!!」

Rキバーラはキバと違い、魔皇力消費が激しく、変身時間は短い。数で押しながら持久戦に持ち込み、確実に倒す。奏夜はスパイキーラットファンガイアの策にまんまと嵌っていたわけだ。

「レティシア様ほどではないが……我々にとつても貴様は憎むべき相手。悪いがその命、貰い受けるぞ」

『おい、俺達を忘れてくれるなよ。アヴェンジャー共』

不躰に聞こえてきた声。

見れば、Rキバーラの変身解除時、突き刺さったザンバットソードが輝き、ザンバットの中から、三体の異形　ガルル、バツシャー、ドツガが現れる。

「次狼、ラモン、カ……」

「ここは任せて、お兄ちゃん」

「やす、んで、ろ」

「ほう、希少種族最後の生き残りか……面白い」

スパイキーラットファンガイアの合図に応え、新たな標的達をファンガイア達を取り囲む。

三人がいかに歴戦の戦士といえど、この数はさすがに厳しいだろう。

「ラモン、力。何体までいける？」

「さあね。ま、やるだけやるしかないんじゃない？」

「ぶっ、つぶ、す」

三人は劣勢にも動じぬまま、自らの主を傷付けた敵を睨む。恐らく、全ての敵を倒すことはできない。

だが、このままみすみす主を死なせては、従者の名折れ。

何よりも、親友との約束を破ることになる。

全力を賭し、一体でも多くの敵を倒す。

その覚悟で挑まなければならない。

（俺もヤキが回ったな……）

ガルルが僅かに笑い、鋭い爪を立てる。

遂に来るか、とファンガイア側にも緊張が走った。

だから、理由を付けるならそのせいだろう。

誰もが、森に近付いてくるバイク音に気が付けなかったのは。

ブオン！

重厚なバイクの叫びが森に轟く。

ファンガイア達を跳ね飛ばしながら、フロントに金色の装飾が施されたマシン　トライチェイサーが現れた。

「ハアッ！！」

バイクの乗り手は、アームズモンスター達の前で急停車。ウィリー走行の要領で前輪を上げ、そのまま後輪を支点に、バイクを一回転させる。

車体がヒットし、ファンガイアの何体かが吹っ飛ばされた。

乗り手はバイクから降り、無造作にヘルメットを取り、奏夜の方を見やる。

「ごめん奏夜。遅くなった」

ヘルメットの下には、小野寺ユウスケの屈託の無い笑顔があった。

「ユ、ユウスケ？ お前、何で、どうしてここに……？」

「助けにきた。それだけじゃダメか？」

戸惑う奏夜にそう告げ、ユウスケは、打って変わって険しい顔つきでスパイキーラットファンガイアを睨む。

「随分好き勝手してくれたみたいだな。ファンガイア」

「……ふん、人間か。この結界に入ってきた以上、ただの人間ではないようだが……まあいい。侵入者は侵入者、偽物の王を片付ける前に、貴様を始末してやるう」

「……奏夜が偽物だと？」

反応したユウスケに、スパイキーラットファンガイアは、高らかに宣言する。

「そうだ！！ あと少し……あと少しでレティシア様は、王をも超える力を手に入れる。人間は駆逐され、ファンガイアの新たな時代が始まるのだ！！」



そうならば、そこにいる王は、偽物へと成り下がるのだよ！」

「……そうか。なら、お前のご主人様は、王にはなれないよ」

ユウスケは一片の躊躇もなく言い放った。勿論、スパイキーラットファンガイアも黙ってはいない。

「何……？ 貴様、レティシア様を侮辱する気か！？」

憤怒の感情にも気圧されず、ユウスケは奏夜を一瞬だけ振り返り、強い眼差しでスパイキーラットファンガイアに啖呵を切る。

「人間とファンガイアがいがみ合うのを望む王なんか間違ってる！  
俺が認める王は、奏夜だ！」

「！」

胸が熱くなるのがわかった。何故ならユウスケの台詞は、今奏夜が最も欲しかった言葉だったから。

ユウスケは、認めてくれているのか。

自分が、王だと。

ユウスケは変身の前段階として、腹部を覆うように手を当てる。

「遅いッ！」

しかし、アークルが出現するよりも早く、一瞬で距離を詰めてきたスパイキーラットファンガイアに首を掴まれ、木へ打ち付けられる。

「ぐっ!?!」

「ユウスケ!?!」

奏夜が声を挙げる。

「次狼、ユウスケを!!」

「分かっている！」

主の命を一瞬で察し、アームズモンスター達が早々に動くものの、敵はスパイキーラットファンガイアだけではない。幾多のファンガイア達が、三人の行く手を阻む。

「もっつ、邪魔しないでよ！」

「ぶっ！！！」

「ファンガッ！！！」

ガルルの爪、バツシャーの水球、ドツガの剛腕が次々とファンガイアを消していくが、ユウスケの元に辿り着くには、まだ時間がかかる。

「くっ、キバーラ……！ 変身は、まだ出来ないのか？」

「む、無理……。あと三十分は待たないと……！」

舌打ちし、奏夜はふらふらの身体を気力だけで立たせ、スパイキーラットファンガイアとユウスケの方へ足を進めていく。幸いにも、雑兵のファンガイアはガルル達を相手にしている。危険は少ない。

満身創痍の自分に何が出来るのかという疑問は、既に存在していなかった。

「馬鹿なヤツだな……。あのような王の為に命を捨てるのか？」

「が、うっ……！！！」

首を掴む力を緩めず、スパイキーラットファンガイアは彼に哀れみの言葉を投げかける。

「人とファンガイアがいがみ合うのは間違いだと言っただが、実際はどうだ？ ファンガイアに虐げられた人間。我々のように、人間に虐げられたファンガイア達。『共存』などという道を選んだが為に、行き場を無くした者も数多くいる」

ユウスケの言葉で生まれた熱さが一瞬で消し飛び、奏夜はまた、胸を刺す痛みを苛まれる。

「人間とファンガイアは、所詮相容れぬ種族だ。

我々は最初から、どちらかがどちらか一方を支配するしか道は無かったのだよ！！！」

「がつー!!」

ユウスケはスパイキーラットファンガイアに勢いよく放り投げ、そのまま土を巻き上げながら地面に叩き付けられた。

「ファンガイアは人間を貪り尽くし、人間はファンガイアを恐れる。そこにあるのは殺し合いしかない!!」

共存をなど、現実の见えていない綺麗事に過ぎんだ!!」

ぐらり。

奏夜は、自分の意思が暗転仕掛けるのを感じた。

唇を血が出るまで噛み締め、意識をつなぎ止める。

しかし、痛みは止まらない。

ずきずきと、奏夜を内側から壊していく。

頑張ってきたつもりだった。

誰も不幸にならないよう、努力してきたつもりだった。

でも事実、奏夜が作った世界を望まないものがある。

そればかりか今日の前で、ユウスケやガルル達も、奏夜への憎しみに巻き込まれ、傷ついている。

(きれい、ごと……)

その言葉だけが反芻される。

自分の理想は結局、何も解決しない、新しい怨嗟を生むだけだったのだろうか。  
誰も幸せに出来ないのだろうか。

脳が思考を止め、痛みでさえも薄れていく。  
姿の見えない何かが、奏夜を暗闇へ引き込んで

「……………綺麗事の」

奏夜は一気に、現実へと引き戻された。  
小さく、しかし何故かよく聞こえる声を漏らし、ユウスケは立ち上がったのである。

スパイキーラットファンガイアが怪訝そうに彼を見る中、ユウスケは自分の感情を爆発させた。

「綺麗事の何が悪いんだよ!!」

ここにもし、土や夏海がいたのなら、さぞ驚いたことだろう。  
その時、ユウスケが発したあまりに鋭い語調は、長い付き合いの彼らでさえ、数えるほどしか聞いたことがないであろう力強さを持っていたからだ。

「奏夜の言っていることは、確かに綺麗事なのかもしれない。酷い現実ばかりの世界で、それを叶えるのは絶対に無理なのかもしれない」

事実、現実には酷いことばかりだ。  
守ると誓った人を失うこともある。  
自分を助けてくれた親友と、世界のために戦わなければならないこともある。

「でも、その何がいけないんだ!？」  
人間もファンガイアも関係ない、みんなが笑顔でいられる世界を願って何がダメなんだよ!

酷い現実のせいで誰かの涙が流れるなら、誰も泣かない綺麗事を現

実にしなきゃいけないんじゃないのか!？」

ユウスケの言葉の一つ一つが聖なる泉となって、傷付いた心に降り注いでくるようだった。

呆然とする奏夜を庇うように立ち、ユウスケは言う。

かつて、無二の親友が自分にかけてくれた言葉を。

「奏夜が誰かの笑顔を守るなら、俺も一緒に守る!!  
みんなの笑顔も、奏夜の笑顔も!!」

響き渡る声を聞きながら、奏夜はずっと、前に立つ青年の背中に目を奪われていた。

見た目よりも、遥かに大きく見える背中。

まるで、浄も不浄も選ばず全てを包み込み、太陽の温かさを与える偉大な青空だ。



高ぶったユウスケの魂に呼応するかの如く、彼の腰に銀色に輝くベルト 『アークル』 が現れる。

突き出した右手をスライドさせながら、ユウスケは叫んだ。

「変身ッ!!!」

スライドさせた右手を、左手と共にベルト右側へと押し込む。  
希望の霊石『アマダム』が真紅に輝き、ユウスケの身体を変えていく。

甲殻を思わせる赤いプロテクター。

雄々しく伸びる黄金の二本角。

プロテクターと同じ真紅の瞳は、燃える炎の如く輝いていた。

「なっ!?! 貴様、何だその姿は……何者だ!?!」

「仮面ライダー……クウガ!?!」

邪悪なる者あらば、希望の霊石を身につけ、炎の如く邪悪を打ち倒す戦士あり。

超古代の能力を宿した戦士、仮面ライダークウガは拳を握り締め、戦場に降り立った。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD！

「何で、俺にそこまでするんだ。違う世界から来たはずのお前が…」

「アンタが道に迷ったなら、俺が連れてってやるよ。アンタが目指す所まで」

「お前は、奏夜とは違う」

「奏夜は、信じる理想の為に戦える。こいつがその心を忘れない限り、仲間もそれに応える！」

【第二十四話・リバイバル／信じる答え】

全てを破壊し、全てを繋げ！

## 第二十三話・協奏曲／闇を晴らす蒼天・Bパート（後書き）

ユウスケは十分主人公の器だと思っんですよね（爆）

・ワタルのこともありますから、ユウスケは奏夜と絡ませてます。今回はユウスケのバトルと、二人の会話がメインになりそうです。

・色々批判意見も多いユウスケですが、僕が最近見て、一番頭に来たのがこれでした。

「アルティメットクウガを気軽に使うな」

ユウスケが初めてアルティメットになったのは、キバーラの力を借りて強制的に変身させられ、二回目は自らの意思で変身を果たしました。

一回目はさておき、二回目に変身する際ユウスケは、親友である土を止める為、心中も覚悟の上でアルティメットクウガに変身しています。

その覚悟と、五代が誰かの笑顔を守る為、アルティメットになった時の覚悟と何が違うんでしょうか？　これを気軽にアルティメットを使ったと言えるんでしょうか？

何で五代もユウスケも、同じクウガだと認められないんでしょう…。そんな憤りもあってか、今回は小野寺ユウスケにスポットを当てました。五代だけでなく、彼もまた仮面ライダークウガだと感じて戴ければ幸いです。

余談ですが、この小説がスタートしてそろそろ一年になります。

ライフエナジーと存在の力の類似だけから始まったこの作品、ここまで続けられたのも、ひとえに読者様方の応援があつてこそです。本当に応援ありがとうございます。

これからも、仮面ライダーキバ・BLAZING・BLOODをよろしく願います！

では、また次回！

PS・現在、闇丸・EXE先生の作品『けいおん！仮面のヴァイオリン弾き』に奏夜達が出張中です。闇丸先生が描く主人公、桜井クロノとのWキバにもご注目を！

## 第二十四話・リバイバル／信じる答え・Aパート（前書き）

「笑顔とは、人間の表情のひとつであり、読んで字の如く、笑った時に浮かべる顔である。

ちなみに日本では『照れ笑い』等で笑顔になったり、自分の失敗などを卑下する際に、自嘲気味に笑顔になる場合があるが、欧米にはこの『照れ笑い』『自嘲笑顔』の風習はなく、緊張感が足りないと誤解されるらしい。

コミュニケーションには気を配れよー!!」

キバットバット三世

## 第二十四話・リバイバル/信じる答え・Aパート

「はあっ!!」

クウガの鋭い拳が、スパイキーラットファンガイアを貫く。

「くっ!!」

カウンターのパンチを肘で受け止め、がら空きになった下腹部に強烈なキックを繰り出すクウガ。

赤のクウガ、通称マイティフォームは、その名の通り汎用性に優れ、肉弾戦を得意とするが故に、様々な相手への対応力がある。しかしユウスケは、

「!!」

キックした脚を即座に退かせ、スパイキーラットファンガイアと距離を取る。

「気付いたか。なかなかの判断力だ」

「その身体……」

見れば、攻撃を行ったクウガの拳と脚から、僅かに血が流れている。出血の原因は、スパイキーラットファンガイアの身体を覆う、鋭い体毛だ。

「針鼠みたいなもんか」

「その通り。鋼の強度を誇る私の身体は無敵の盾であり、そして

」

スパイキーラットファンガイアは、先程奏夜に見せたように、身体を丸くした状態で、ハリを巨大化させた。

「こうして最強の矛にもなる！！」

歪な球体が回転を初め、真っ直ぐクウガに突撃してくる。

ハリがスパイク代わりとなり、攻撃力にスピードによる突進力が付与され、当たればクウガとてただではすまない。

「ちっ！」



クウガは横つ飛びで球体の魔手から逃れようとするが、

「甘いわ！」

球体は軌道をすぐ様修正し、再びクウガを串刺しにしようと同かってくる。

回避は不可。恐らくドラゴンフォームになっても結果は同じ。

(なら、真つ正面から受け止めてやる！)

クウガの意思に呼应し、アマダムの輝きがその色を紫に変える。

「超変身！」

クウガの瞳がアマダムと同じ紫へと変わり、その身体に紫のラインが描かれた重厚な鎧を纏わせる。

邪悪なるものあらば、鋼の鎧を身に着け、地割れの如く邪悪を切り裂く戦士あり。

クウガの持つパワー形態、タイタンフォームだ。

「変わった……？」

奏夜が呟く傍ら、クウガTFは両手を大きく広げ、スパイキーラックトファンガイアと真っ正面から対峙する。土を巻き上げながら突進してくる球体が、遂にクウガTFへと届くが

「なにっ!？」

驚いたのはスパイキーラックトファンガイアの方だった。球体がクウガTFに接触した途端、球体の動きが止まり、回転の勢いが完全に殺されたからである。しかも、ハリは刺さっていない。

「紫のクウガのパワーと硬度を舐めるなよ……!!」

「くっ、だがこのままでは貴様も反撃は出来まい！  
の装甲は丸腰で碎けるほどぬるくは無いわ!!」  
加えて、我

「丸腰ならな！」

言いながらクウガは暴れるファンガイアの群れの中から、青い影を見つけ出す。

「ガルルさん！」

「！」

群れの中で戦っていたガルルが振り返る。このガルルはユウスケの知るガルルではないが、ネガ・キバの世界の経験から、彼がどんな能力を持っているのかは、ユウスケも知っていた。

「今だけでいいです、俺に力を貸してください！」

「わかった！」

ガルルもまた、ユウスケとの面識はない。だが、力を貸すことに対しては、何の躊躇いも無かった。

自分の主を認め、救おうとしてくれている。力を貸す理由は、それで十分だった。

「ラモン、カ！　しばらく持ちこたえろ！」

ガルルの身体がブルーの光と共に、彫像形態へ。  
浮かび上がった空中で彫像は更に姿を変え、魔獣剣ガルルセイバーとなり、球体を押し止めるクウガの右手に収まる。

すると、ガルルセイバーの湾曲した刀身が両刃に変化し、生物的だったデザインが、シンプルな大剣『タイタンソード』となった。

これはクウガの持つ力、決められたイメージを持つ物体を、各フォームの特性を活かす武器に変えることができる力だ。

渾身の力でスパイキーラットファンガイアを僅かに押し返すクウガTF。  
またすぐに回転を取り戻すだろうが、彼にとってはその僅かな時間だけで十分だった。

「うおりゃああー!!」

封印エネルギーを刀身に込めた一点突破の突き技『カラミティタイタン』が、スパイキーラットファンガイアに炸裂した。

「ぐがつー!!」

カラミティタイタンのパワーは針を砕き、そのままスパイキーラットファンガイアの頑丈な皮膚にまでヒビを入れた。

「ぬうつ、これしきの傷!!　　ウオオオツ!!」

スパイキーラットファンガイアが自身を鼓舞するように雄叫びを挙げる。  
それだけで、攻撃を食らった腹部に浮かぶクウガの刻印は掻き消えた。

「確かにパワーはある……ならばスピードはどうかな!!」

スパイキーラットファンガイアは再び身体を丸め、球体は二・三度その場で跳ね、

「シャツ!!」

「!!」

クウガTFは、反動を溜めたスパイキーラットファンガイアの突撃を辛うじて避ける。

が、球体は近くの木々に当たって跳ね返り、クウガTFを狙い続ける。

縦横無尽に跳ね回るその姿は、まるでピンボールだ。

(くっ、敵が見えない……!!)

カブトの世界で見たクロックアップと同じだ。

視認できなければ勝負にもならない。

装甲の代わりに機動力の欠如したタイタンフォームでは無理だ。

「フハハハ!! 反動による加速、貴様の視力では捉えられまい!!」

「それなら……!!」

クウガTFはガルルセイバーを一旦手放し、

「バッシャーくん! 頼む!」

「オツケイ!!」

彫像に戻ったガルルセイバーと入れ替わりに、バツシャーはクウガの元へ向かう。バツシャーの彫像から変化した魔海銃バツシャーマグナムをキャッチし、クウガは再び姿を変える。

「超変身!!」

クウガの眼とアマダムが緑色に染まり、身体は左肩にプロテクターの付いた、同じく緑の鎧へと変化。  
右手にはバツシャーマグナムから変化した縦型のボウガン『ペガサスボウガン』が握られる。

邪悪なる者あらば、その姿を彼方より知りて、疾風の如く邪悪を射抜く戦士あり。

感覚機能に特化した形態、クウガ・ペガサスフォームだ。

(……………)

クウガPFは地面に片膝を突き、感覚を研ぎ澄ませた。

余計な雑音は全て排除。

スパイキーラットファンガイアが動くことにより生まれる音を聞き逃さぬよう、全神経を集中させる。

木々を跳ね回るスパイキーラットファンガイアは、そこまで知る由も無かったが、クウガPFが微動だにしないことに警戒心は覚えたようだった。

（諦めたか……？ いや、ならば何故姿を変えた？ いずれにせよ、接近するのは念の為避けるべきか）

あの武器の形状 動いてさえいれば的中確率は低い。  
ここはこちらも遠距離から攻めるべきだ。

スパイキーラットファンガイアは戦法を決め、歪な球体から伸びる針の一本を、クウガへと向ける。

細い針、速い発射スピードに加え、その出所は掴めない。  
完璧な状況だ。

（消える、異形の戦士！）

射出された針が、風を切りながらクウガPFに迫る。

「！」



強化された聴覚でなければ知り得ない風切り音。

クウガPFが頭を上げ、射出方向を見ることさえもせず、指先だけで針をキャッチした。

「なっ!?!」

「見つけた!!」

針を捨て、クウガPFはペガサスボウガン後部のレバーを引く。弧の部分が緊張し、射出口に封印エネルギーが収束された。

針の飛んできた方向、敵のスピード、僅かな木々の動き。

あとは、それらから算出されたポイントにトリガーを引けばいい!

「ハッ!!」

バシユッ!!

甲高い音と共に、クウガPFの必殺技『ブラストペガサス』がボウ

ガンから発射された。放たれた弾は、スパイキーラットファンガイアを寸分違わず捉え、カラミティタイタンが作ったヒビに命中した。

「ぐ、ああああー!!」

さすがに二撃目には耐えられない。

落下するスパイキーラットファンガイアの腹には、クウガの刻印が再度浮かび上がり、ステンドグラスの外皮のヒビは、さらに広がる。

「よし、今だ!! ドツガさん!!」

「まか、せろ」

即座に手持ちの武器を、バツシャーマグナムから、ドツガの武器形態である魔鉄槌ドツガハンマーと入れ替え、クウガPFのアマダムが青色に輝く。

「超変身!!」

アマダムと同じ青い瞳と肩無しの軽量装甲。

両手にはドツガハンマーから変化した、先端に金色の装飾が成された棒状の武器『ドラゴンロッド』。

邪悪なる者あらば、その技を無に帰し、流水のごとく邪悪を薙ぎ払う戦士あり。

運動能力に優れた形態、クウガ・ドラゴンフォームである。

「ふっ！」

その身体能力をもって、クウガDFはスパイキークラットファンガイアの落下地点まで一気に踏み込む。

(マズい……か、回避を……！)

だが、腹部の激痛がそれを阻害する。  
スパイキークラットファンガイアは受け身の体勢すら取れず、自然落下に身を任せる他無かった。

無論、クウガDFにとって、その時間は好機。

「ッハアー！」

ドラゴンロッドの横薙ぎから繰り出される打撃技『スプラッシュユドラゴン』が、三度腹部の外皮に直撃した。

「ガ、アアアア!!!」

バキィーン!!!

その一撃で遂に、スパイキーラットファンガイアのヒビが入っていた鋼の針と外皮が砕け散った。

スプラッシュユドラゴンの勢いに負け、地面に叩き付けられたスパイキーラットファンガイアの腹部は鬱血し、刻印の刻まれた脆い皮膚が露出していた。

「バ、バカな!!!　こ、こんなことが……」

どうにか立ち上がるスパイキーラットファンガイアだったが、その足は覚束なく、戦いの構えすら取れていなかった。

「　超変身」

彫像に戻ったドツガハンマーが飛び去り、クウガは再びマイティフ

オームへ。  
狙いを定め、クウガは両手を広げながら右足を一步退く。

「はあああ……ッ！」

黄金に輝く封印エネルギーを右足に収束させ、クウガは駆け出す。

クウガが踏んだ大地に残るエネルギーの残滓は、勝利へのカウントダウン。  
踏み切った片足の反動からクウガは天高く飛び上がり

「だりゃあああああ　　ッ！」

マイティフォームの必殺技『マイティキック』が、スパイキーラットファンガイアの脆くなった腹部に炸裂した。

「グ、ガアアアッ！！」

固い外皮が砕けた今、マイティキックの威力を妨げるものはなにもない。スパイキーラットファンガイアは、キックのパワーを直に受け、吹き飛ばされる。

そのまま近くの樹木で背中を打ったかと思うと、スパイキーラットファンガイアはピクリとも動かなくなつた。

「倒……した？」

「ハアツ……ハアツ……！！！」

着地したクウガが、息を切らしながら立ち上がる。

（一応、急所は外したけど……）

アヴェンジャー達の事情を知っているだけに、クウガはトドメを刺しきれなかった。

もつとも、しばらく動けなくしたことに変わりはないが。

「た、隊長殿が……」「嘘だろ？」「なんなんだあのクワガタは！？」

ガルル達と戦っていたファンガイア達も、指揮者が倒された為か、

戦意を失いつつあった。

あれなら、向こうを相手にすることもないだろう。

クウガが奏夜の方を一瞥し、手を差し伸べる。

「大丈夫か？　奏夜」

「あ、ああ……。ていうか、むしろお前の方こそ」

奏夜が、クウガの血が滴る足と拳に目をやる。

「このくらい平気だって。傷の内に入んないよ」

仮面の下からでも、クウガがニカリと笑っているのが分かった。

奏夜は気が抜けたように目尻を下げ、クウガの手を取ろうとした

時だった。

「ヴ、ア……」

「……」

クウガと奏夜が、ほぼ同時に同じ方向に視点を合わせる。  
気絶していた筈のスパイキーラットファンガイアが、満身創痍ながら立ち上がったのだ。

「あいつ、まだ動けるのか……？」

「お、おい止める！！ それ以上動いたら本当に死んじまうぞ！！」

呆然とする奏夜の傍らでクウガが叫んだが、スパイキーラットファンガイアの目はまだ死んでいない。

「ハッ！！」

スパイキーラットファンガイアが手を翳す。しかしそれはクウガや奏夜に向けてではなく、ましてや攻撃でさえも無かった。

スパイキーラットファンガイアが手を翳したのは、仲間のファンガイア達の方。



放たれた光は、攻撃を遮断する障壁を生み出す魔術だった。

「た、隊長殿!?!」

「皆、伏せている!?!」

「!?!」

スパイキーラットファンガイアの言葉。

意図せずして、結界の内側にいたガルルが、顔を青ざめさせた。

「おい、そのガキと奏夜!!　今すぐそのファンガイアから離れる!?!」

「っ!?!」

そこで奏夜もようやく気が付く。

スパイキーラットファンガイアの内に、膨大な魔皇力が収束しつつあることに。

「自爆か!?!」

「フ、ハハハ！！ 気付いたとて無意味！！ この威力……この森  
全域 我が張った結界以外の場所は確実に消し飛ぶ！！」

そう 彼が張った結界は、仲間を巻き込まないようにする為だっ  
た。

アームズモンスター達まで範囲に入れてしまったのは計算外だっ  
たが、心配はあるまい。

アヴェンジャーの精鋭達だ。 たかだか三人、どうとでもなる。

だからこそ自分は

「レティシア様の為、アヴェンジャーの為、貴様らは生かしておか  
ん！！」

傷口から魔皇力が溢れ出す。 爆発の前触れだ。

「奏夜！！ くそっ！！」

アームズモンスター達が結界を破ろうとしているのが見えたが、頑  
丈な障壁はビクともしない。

「キバーラ、まだ変身無理か!？」

「無理無理無理　　!！」

「くっ……!？」

どうする。

クウガは次々と思考を展開させていく。

逃げる。

奏夜とキバーラを連れて、この数秒の内に森の外まで?　ドラゴ

ンフォームでも不可能だ。

爆発の前にヤツを倒す?

倒せたとしても、爆発自体が止まる保証はない。最悪、爆発までのカウントダウンが早まるだけに終わる可能性もある。

「諦める!!　影のキングに異形の戦士!　貴様らの命という

旅は、ここで終わりだ!!」

スパイキーラットファンガイアは、勝利を確信し、仲間達を見る。

「レティシア様を……頼んだぞ、同朋達よ!!」

「隊長殿!!」

その言葉を皮切りに、スパイキーラットファンガイアの身体が膨張を始める。

「ここまでか……!？」

奏夜は歯噛みし、自分の無力さを嘆く。

クウガは何も語らず、目の前に近づく旅の終わりを見つめ、

「……まだ、終わらないよ」

「？」

瞠目する奏夜を庇うように、クウガが前に立つ。

こんなところで終われるか。

あの人と約束した。

世界中の人を笑顔にすると。

もう二度と、誰かの涙を流させないと。

「俺はまだ、あんたの本当の笑顔を見てない!!」

「消えろお!!」

スパイキーラットファンガイアが内側から爆ぜ、眩いばかりの光が周囲の景色を飲み込んでいく。

(みんなの笑顔を守る為なら、俺は )

爆炎の中で、クウガのアマダムが『黒色』に輝いた。

「何なの？ この自在式」

太牙が広げた資料の内、シャナは複雑な陣と式の描かれた模様に着目する。

「我にも見覚えのない自在式だな」

「そりゃそうでしょうね。だってこれ、自在式と魔術を複合させた陣だもの」

マージョリーが軽く付け加えたその言葉に、館内の空気が変わった。

予想した通りの反応に構わず、太牙は話を進める。

「これは大昔、魔術に精通したファンガイアが作った代物でね。あの場所に保管されてあったんだが、以前アヴェンジャーに、原典を盗まれていたんだ。」

作られて以来、解読不能と呼ばれてきた魔術だったんだが」

それも当然である。魔術の他に、自在式という全く理論の異なる要素が混じっていたのだから。

今回、自在師であるマージョリーがいなければ、太牙も気が付かな

かっただろう。

「恐らく開発者のファンガイアは、紅世と通じていたのだろうな。しかし、自在式と魔術を組み合わせると……？ そんなことが可能なのか？」

「可能かどうかは問題ではない。問題は、この式が何を生み出すのかだ」

アラストールの指摘に答えながらも、名護は険しい表情を崩さない。それほどまでに厄介なものなのだろうか。

「連中にこれが盗まれた以上、何か関係あると見て間違いない」

「つーわけで、マジヨリーと俺様、キングの兄ちゃんてこいつを解読してみたんだよ。そしたら何とビックリ」

「私とタイガの解読が間違ってなきや　これって死者を黄泉から引き戻す式なのよね」

『！！』

全員が受けた衝撃は、先程のものを遥かに超えていた。死者を黄泉から引き戻す。それは、つまり

「死んだ誰かを、生き返らせる式ってことですか？」

「そのとおり。」

しかも、カロンの野郎が呼び出す死体以上 魂まで持ったまんま  
生き返らせちまうみてーでな。

加えて、一度起動の為の自在式さえ入れちまえば、何度でも働く永続式の陣だ。

ヒヒツ、いよいよ何でもアリって感じだあな」

悠二はマルコシアスの冷やかしが、ややシニカルな口調であることに気付いた。

その態度が逆に、事の重大さを理解させる。

「でも、死者を呼び戻すなんてバカな真似できる訳ない！！」

自在法に疎いシャナでも知っていること。いかなる自在法を持って



しても、死者は生き返らない。  
理論以前の問題、言わば絶対の真理。  
アラストールもまた、その真理を疑ってはいなかった。

「かの“螺旋の風琴”ですら、遺失物を復元させる自在式を組むのが限界だったのだぞ？  
無機物ならいざ知らず、生命ある者をいくらでも蘇らせられるなど、夢物語もいいところだ」

「ああ。事実、この陣は不完全だった。このままでは自在式としても、魔術としても体裁を成さない。使えたとしても、膨大な存在の力とライフエナジーが必要だ」

「ならば……」

「だが、今回は状況が違うんじゃないか？」

アラストールの声に被せるように、沈黙し続けていた土が口を開く。  
彼の中では既に、全てが繋がっていた。

「連中は今、王の鎧である『キバ』と魂の無い死体を劣化させずに操る『死者の書』を手中に収めている。　　そういうことだろ、太牙」

『キバ』と『死者の書』。

それらの単語により、シャナ達も土の言いたいことが分かった。  
太牙が頷き、話を続ける。

「ああ、その通りだ。『キバ』は装着者に強大な力を与える。例えばライフエナジーが足りずとも、不足分を補うことくらいはできるだろう。

しかもレティシアは、チエックメイトフォークラスの實力者だ。不完全だった自在式も、完成させているとみていい」

「あのカラス野郎も、紅世じゃ名の通った自在師よ。

『死者の書』の能力を考えれば、陣発動のサポートには十分でしょうね。プラスして、生き返らせた連中を操ることもできるわ」

太牙とマージョリーの説明を否定できる者はいなかった。

これだけの要素が集まれば、世の理をひっくり返せる可能性も、無視出来ないものとなる。

疑問は、これで全て氷解した。

「“冥夜の船頭”の目的は恐らく、自身の軍団を最強のものにする  
ことであるかな」

「だろーよ。『死者の書』は破格の宝具だが、蘇らせるヤツの記憶  
がなきゃならねえし、その対象が強けりゃ強いほど、使う存在の力

もデカくなってくるからなあ、ヒツヒツ」

逆に此度の永続式の陣が起動すれば、厄介な制限は消え、同時に、死した数多の徒、ファンガイアを自由に呼び出すことが可能となる。そうなればカロンは、真に死者を自在に操る強大な敵となつて、自分達の前に立ち塞がるだろう。

「あのファンガイア レティシアがカロンに協力してるのは」

悠二が口元に手を当てながら呟き、シャナが言葉を継いだ。

「……大切な誰かを蘇らせる為」

「ま。あのアヴェンジャーって組織の根幹を考えりゃ、それが妥当なところだな」

士が緊張感の感じられない様子で付け足した。

人間を敵と見る組織。そんな組織の構成員の中になら、レティシアのみならず、大切な誰かを失ったファンガイアは五万といるだろう。

「レティシアとカロンが組んだのは、利害が一致したからだろうな。何しろあの陣は、魔術と自在式の素養が無ければ読み解くことすら出来な」

名護が突然口を閉ざす。彼にしてはかなり焦った様子で、写真館の中を見渡していく。

「……土君。多少予想がつくんだが敢えて聞かせて貰いたい。奏夜君はどうした？」

「ユウスケとバイクツーリング中だ」

夏海の「何故わざわざ暗に伝えるんですか」というツッコミも間に合わないまま、まず名護と太牙が写真館から飛び出していった。

二人のバイクのエンジン音が轟いた後、マージョリーはシャナ達の方を振り向き、

「じゃ、私達も行こうかしらね。どーせアンタ達のことだから、奏夜の気配感じ取れなかったんでしょ？」

「ば、馬鹿にするな！」

「明確に否定はしないんだなあ」と悠二は思ったが、言った瞬間にシャナの鉄拳が飛んでくるのは目に見えていた為、口には出さない。

「土君、私達も行きましょう」

「……仕方ない。ユウスケも拾ってこなきゃならんしな」

「アヴェンジャーの本拠地……お宝もありそうだね」

『お前は留守番してろー!!』

「えー？」

いつの間にかいた海東を指差す土とシャナの動きがシンクロした。

こいつは場を引っ掻き回すことしかない。

土はもちろんのこと、シャナも何となくそれを理解しつつあった。

「仲間外れにするなよ土。僕とキミの仲じゃないか」

「何が俺とお前の仲だ、ただの被害者と加害者だろー!!  
おい彩  
香、爺さん、こいつを縛り上げて物置にでも」

店の奥にいる二人を呼ぶ士の声が、突然止まった。数瞬遅れ、シヤナ達もまた、その波動を感じ取る。

「な……なんだ、この、気配……！！」

辛うじて、声を発することができたのは悠二だけだった。

シヤナとマージョリーは突如現れた存在の解析に全ての神経を使い、声を出せるような余裕はなく、アラストールとマルコシアスもまた同じだった。

士、夏海、海東だけが目の色を純粋な驚愕に染め上げ、虚空を睨んでいる。

遙か遠くで吹き上がり、しかしここからでも、その暗さと恐怖は否応なしに人の精神を蝕む。

そして士は、誰よりもその恐ろしさを知っていた。

今、生み出されている『闇』はかつて、自分の前に立ちただかった存在なのだから。

「ユウスケ……『究極の闇』になるつもりか？」

爆発は起こらなかった。

「……………」

アームズモンスターとファンガイア達が、恐る恐る目を開ける。

凄まじい光があった。

全員がそれを爆発の合図と判断し、反射的に目を瞑ったのだから。

しかし既に結界は解除され、周囲には煙が立ち込めているものの、景色そのものにはなんら変化はない。

木々は消し飛ぶどころか一本も折れたり燃えたりはしていないし、大地が焼け野原になっているということもない。

「どうなっている……………」

「確かにあのファンガイアが膨らんで、凄い光が見えたよね？」

「そうやは、ぶじか？」

アームズモンスター達もファンガイア達も戦うことを忘れ、状況把握に全力を注ぐ。

と、風のお蔭で段々と視界が晴れていく。

まず目についたのは、砕け散ったステンドグラス。

これがスパイキーラットファンガイアのものなのは間違いないだろう。

不思議なのは、ステンドグラスに炎が灯っていることだ。

「これは……」

ガルルが近くでそれを観察する。

爆発による炎 ではないだろう。規模が中途半端過ぎる。

(この炎があたのファンガイアを、爆発する前に焼き尽くしたのか?)



だが、ただ燃やし尽くすだけでは爆発は止められない。刺激を与え、爆発時間を短縮して終わりだ。

(まるで……)

原子・分子レベルで、内側から自然発火でも起きたかのような

ザッ。

その時、大地を踏みしめ、奮迅の向こうから黒い影が歩いてくる。

その場にいた全員が身構え、彼の放つ絶大なオーラに畏縮した。

黒く歪な形状に、血管の如く金色のラインが駆け巡る鎧。

鋭く天を突くように伸びる四本角。

アークルの外観は黄金に染まり、アマダムの色は深い闇を思わせる漆黒。

希望の霊石と同じブラックに染まった無機質な瞳が、ファンガイア

達を睨み付けていた。

聖なる泉、枯れ果てし時。凄まじき戦士雷の如く出で、太陽は闇に葬られん。

『究極の闇』の名を冠す最強形態、クウガ・アルティメットフォーム。

世界の破壊者に勝るとも劣らぬ力を持つ、究極の域に達した仮面ライダーだ。

クウガUFは流れるような動作で左手を上げる。

ボウッ！！

すると、ファンガイア達が立つ直ぐ傍の気が、何の前触れもなく燃え上がった。

突然の怪現状に、ファンガイア達が震え上がった。

クウガ・アルティメットフォームが持つ超自然発火能力。

対象物を即座にプラズマ化し、内側から原子・分子レベルで焼き尽くす。

衝撃を与えないのだから、誘爆の危険性もない。原子・分子の単位で敵を燃やすのだから尚更だ。

「……あのファンガイアは、残されるお前達のことを想って、自爆の道を選んだ」

クウガUFのクラッシャーの下から、低く唸るような声が漏れる。

「あのファンガイアの遺志を無駄にしたいっていうなら、相手になるろう。」

だが、気を付けろよ」

この姿は、俺自身も上手く手加減できないからな。

そのクウガUFの警告がトドメだった。

彼が纏う絶対的強者の風格。

このまま戦えば、スパイキーラットファンガイアが犬死になってしまっ。

アヴェンジャー達がそう理解するのに、時間は要らなかった。

「……っ、全員撤退だ！ 負傷者に手を貸せ！」

アヴェンジャー勢は苦虫を噛み潰したような表情でクウガUFを睨

みながら、森の奥深くへ消えていった。

「……………っっ！」

同時に、クウガUFの姿がブレた。

スパークが走り、アルティメットフォームの輪郭が、どんどん変化していく。

(やっぱりまだ、こいつは制御出来ないか……………っ!?)

これ以上の変身はマズい。

アルティメットフォームの破壊本能に精神が飲み込まれる。

制御の手綱を手放し、クウガUFはふらりと後ろ向きに倒れた。

その身体が地面につくかつかないかという内に、クウガの姿は白い弱体化形態・グローイングフォームに変わり、すぐユウスケの姿へと戻る。

ガシッ。

だが、ユウスケが地面に倒れることはなかった。

「……サンキユ」

「どういたしまして」

ユウスケの振り返った先　同じくフラフラな紅奏夜が、彼の身体をしっかりと受け止めていた。

「ユウスケ。お前何で、俺にここまでするんだよ」

不寐に、奏夜がユウスケに尋ねる。

アームズモンスター達をキャツスルドランへ返し、キバーラは奏夜のポケットの中で睡眠中。  
奏夜とユウスケも戦いの疲れからか、小休止のつもりで近くの木に寄りかかっていた。

「何かあるとすぐ落ち込んで、理想を見失っちゃまうようなヤツの為に、どうして違う世界から来たお前が戦ってくれるんだ？」

「いくら情けなくても、俺が違う世界から来た人間でも、それが奏夜を助けない理由にはならないよ。ただ俺は、アンタが泣いてるの

を見たくなかったんだ」

ユウスケはまるで悩むこともなく、軽々とした様子で答えた。逆に  
奏夜は納得がいていないらしく、

「それだけか？」

「俺はそれで十分な理由だと思うけどな。あと他に理由があるとする  
れば」

ユウスケは目を細める。

誰かの笑顔の為に戦う。けれど、奏夜を助けたいと思った理由はそ  
れだけではなくて

「似てるからかな」

「え？」

「アンタさ、俺の友達にそっくりなんだよ。」

誰かに迷惑を掛けたくなくて一人で頑張っちゃうところとか、一度  
迷うとすぐ思考の袋小路に入っちゃうところとか」

奏夜と同じ、ネガ・キバの世界の仮面ライダー、ワタル。

最初は似ていないと思った。  
ワタルと違い奏夜は、自分の本音をガンガン出していくタイプだと思っていた。

けれど、そうではなかった。

ワタルが前に進まないことで、周囲の人々と向き合うことを拒絶したのに対し、奏夜はがむしゃらに前に進むことで、自分の本音の人々に悟られまいとした。

ワタルのは弱気で、奏夜のそれは空元気。

要するに、

「アンタ、強いように見えて、凄く危なっかしいんだよな」

だから放っておけない。

フラフラしながら前に進んでも、道は開けない。  
旅路の過酷さに負け、すぐ倒れてしまう。

「俺は、奏夜の理想は間違っていないと思うよ」

奏夜から目を逸らさず、ユウスケは真っ正面から告げる。  
力の無かった奏夜の瞳が、僅かに揺れた。

「そりゃ、反対するヤツはいるだろうさ。どんな理想でも、それを拒絶するヤツは必ずいる。でも、本当に自分の理想を貫きたいなら、そいつらとも向き合わなきゃダメだと思う」

「向き合う?」

「ああ。そいつらの抱えた理想も全部受け入れた上で、みんなが笑っていられる為にはどうすればいいのか考えていかなきゃ」

迷うのではなく、考え続けること。

ユウスケもかつて、答えの無い二択を迫られたことがあった。親友と世界とを天秤にかけるといって、残酷な選択。だが最後には、親友を止めるべく、心中も覚悟の上で『究極の闇』になることを選んだ。

それがもたらす結果を、覚悟の上で。

「奏夜ならできるよ。奏夜は、自分の選択から逃げないだけの覚悟があるはずだ。」

もし、選択の重さに耐え切れなかったり、理想を見失って迷い道に



出たりして、アンタが行きたい場所に行けないって言うなら」

ドンと自分の胸を叩き、ユウスケは自分が今できる最高の笑顔で告げる。

「俺が連れてってやるよ。奏夜の、本当に行きたいところまで」

呆けたように奏夜はユウスケを見つめる。  
彼の言ったことを脳が処理し終えた瞬間、奏夜は盛大に破顔してしまった。

「馬鹿だな。お前」

少し小馬鹿にするような口調。だがその表情に刻まれたのは紛れもなく、奏夜の本当の笑顔。

「馬鹿で、度を越えたお人好しだ」

「よく言われるよ」

「……………つくく」

「……………ははは」

緊張の糸が切れたのか、二人はしばらく声を出して笑い合う。特に奏夜は、今までの余裕の無さが嘘のように、声のトーンを落とさず、心の底から笑っていた。

さっきまで真っ暗だった心が、今は青空のように澄み切っているのがわかる。

一人でスタボロになるまで戦っていた分、傍らに誰かがいてくれることが、堪らなく嬉しかったから。

「ユウスケ、悪いんだけど、もうしばらく付き合ってくれないか？」

一頻り笑い声を出し切った後、奏夜は立ち上がった。

「会わなきゃならないヤツが 答えを聞かせなきゃならないヤツ

「がいるんだ」

「りょーかい」

ユウスケもよっこらせと足を立たせる。

「どこまででもお供しますよ。我らが王」

冗談めかした言い方に、奏夜はいつもの人を喰ったような態度で応える。

「うむ、苦しゅうないぞ。ついて参れ」

二人の仮面ライダーは疾駆する。

互いに支え合うような、二本のわだちを残して。

## 第二十四話・リバイバル/信じる答え・Aパート（後書き）

更新遅れました。車校なんて……車校なんてっ！！

・映画版Wに触発され、クウガのフォームチェンジラッシュ。お気に入りはタイタンフォームです。あの攻撃を全て受けながら、カラムティータンを叩き込む戦闘スタイルがgood。

・奏夜は渡よりも、どちらかと言えばワタル寄りというイメージで、それがあってか、ユウスケは奏夜が放っておけないのです。……お母さんか（一人ツッコミ

次回はまた会話+土のスーパー説教タイム（予定）。

では（^O^）

・どうでもいい近況3  
オーズカッコいいよオーズ。OPはBLADE・BRAVEより好きかもしれない。  
ついでに玩具バレでガタキリバのサウンドを聞いたのですが……あれ凄いですね。『タ・ト・バ、タトバ、タツ、トツ、バツ！』とタメはります（笑）

## 第二十四話・リバイバル/信じる答え・Bパート

眼前に広がる、炎の赤い輝き。

レティシアはその光景を茫然と見つめていた。

「サミュエル……？ ジェフ……？」

愛する夫と息子の名前。しかし、その呼び掛けに答える者は誰もいない。

聞こえるのは、周囲を取り囲む人間達の蔑みだけ。

『化けもの』『化けもの』『化けもの』『化けもの』『化けもの』  
『化けもの』。

事態について行けないレティシア。

ふと彼女は、炎の中に2つの影を捉える。

貼り付けにされ、今まさに業火で身を焼かれる2つの影を。

ややあつて、炎は静かに消えていく。黒く焼かれた大地に残る、  
二つの消し炭。

「ひっ……………！！！」

限界まで見開かれたレティシアの瞳に、『地獄』が映り込む。

無残な亡骸と化した、夫と息子の姿が。

「いやあああああああああつ!?!」

「レティシア!?!」

「!?!」

傍らで自分の肩を揺するカロンの呼び声により、レティシア　ア  
ナザーキバの意識は覚醒する。

見ればここは、自分達のアジト二階層にある広いホール。

目の前の床には、自らの悲願を達成する力ギとなる、綿密な研究・  
計算がいくつも書かれた模様　『蘇生陣』。

「す、すみません。カロン。コントロールを手放してしまいました」

「いや、僕も先程まであの気配にあてられ、意識を失っておった。  
あれは一体なんだったんじゃ……？」

レティシアとカロンの言う『気配』。それは、クウガ・アルティメ  
ットフォームの生み出した悪しき波動のことである。

普段ならば威圧こそすれ、気絶するほどのことではないのだが  
今回は状況が違った。

「迂闊でしたね。蘇生陣の発動にばかり集中していて、他への警戒  
が疎かになっていました」

「うむ。ただでさえ、蘇生陣発動に裂く集中力は尋常なものではな  
いからな」

二人は蘇生陣発動に全精神力を注いでいた為、他への警戒心が限りなく削がれていた。

そこに出現したクウガUFの持つ『究極の闇』のエネルギー。不意を突かれ、心構えさえしていなかった精神に、クウガUFの力は影響が大き過ぎたのだ。

(……あんな白昼夢を見たのも、あの波動のせいですかね)

もはや何かの啓示のように思える。

運命が自分を駆り立て、先へ進むことを促しているかのような。

(……大丈夫。もう少し、だから)

レティシアは掌の上にあるペンダントを握り締める。

あの波動の持ち主が来たとしても、負けるわけにはいかない。

長い間、ただ一つの願いを叶える為だけに、ここまで歩き続けて来たのだ。

どれだけの屍を見ても、どれだけの罪を負っても、どれだけの返り血を浴びても、歩き続けた。



あと少しで、二人の温もりを感じることができる。

邪魔など、させるものか。

「……カロン、陣発動を続けましょう」

「うむ、今度は更に処理スピードを上げるとしよう。次はあの波動に当てられることも……」

ない。と続けようとしたカロンの言葉は、背後から聞こえた派手な音に遮られた。

ドガッ！！

凄まじい勢いで蹴破られたドアがホールの床を滑り、壁に激突して止まる。

「……」

カロンとレティシアが警戒心を露わに、侵入者の姿を捉えた。

「よお、お二人さん」

「……貴方ですか」

黄金の魔剣を担ぎながら現れた紅奏夜に、レティシアは敵意に満ちた眼光を向ける。

「今更、何の用じゃ？」

「決まってるだろ」

その隣に立つ小野寺ユウスケが奏夜と声を揃え、カロンの問いに答えた。

『邪魔しに来た』

「あれが、アヴェンジャーの居城？」

紅蓮の翼で滑空するシャナの眼前には、切り立った崖の上にそびえ立つ、古めかしい城が広がっていた。

その真下でバイクを駆る太牙が頷く。

「ああ。その昔、レジエンドルガと呼ばれる種族が使っていた場所だよ」

「ふむ。巨大なアジトだな」

「でもあんな場所、御崎市にありましたか？」

古城を見上げながら、イクサリオンを操る名護の後ろで、後部座席に座る悠二は疑問符を浮かべた。

悠二は生まれも育ちも御崎市だが、あんな城の存在は認知していなかったのである。

しかしその疑問は、シャナと同じく、グリモアで空路を行くマジ

ヨリーが解決してくれた。

「ファンガイアの魔術結界の跡があるわ。普段は人間が視認できないようになってたみたいよ」

「跡……ってことは、今は別の結界が張られてるんですか？」

「ええ。今は自在式製の、単純に侵入者の行く手を阻む結界ね。この進行方向だと、あと少してブチ当たるわ。  
途中でルート変更すれば、結界は貼られてないみたいだけど……」

「結界が貼られてない方の道はどうせ罠だろ」

マシンディケイダーに乗る土がしれつと言いつつ。  
その意見には全員同意するところだ。

「このままの道で問題ない。私が結界を斬るから」

シヤナが夜傘から、贄殿遮那を抜く。

異能の力全てを無効化するこの刀なら、結界など紙切れに等しい。

「でも結界が破られてないってことは、奏夜さんとユウスケはもう

「一つの道を行っただんですよね？」

ならば、何かしらの罠にかかっている可能性もある。

マシンディケイダーの後ろに乗る夏海は二人の身を案じていた。

「余計な心配をするな夏みかん。ユウスケのしぶとさは、お前もよく知ってるだろ」

「奏夜は殺したって死なないわよ」

「こっちが心配したと思えば、すぐケロツとした顔で帰ってくるもんね」

あのバカが付くほどのお人好しが、そう簡単にくたばる訳がない。あの非常識が服を着て歩いてるような教師が、そう簡単にやられるわけがない。

やや歪んではいるものの、士、シャナ、悠二の評価は二人への信頼に他ならない。

だからといって、彼らの救援に急ぐ足を緩めようとは思わないが。

そうこう話している内に、遠巻きに見えていた古城が目の前まで近付いていた。  
マージョリーの読み通り、進む先には複雑な文字や陣形の刻まれた自在式の障壁。

「ふっ！」

シヤナは短く息を吐き、双翼から吹き出す炎の勢いを上げる。  
紅蓮の軌跡を描きながら、シヤナは障壁に特攻し、

「　　だあッ！！」

一閃。

振り抜かれた贄殿遮那は、幾重にも刻み込まれた式を造作もなく切り捨てる。

「やるな」

「どっつってことない」

士とシヤナの短いやり取りと共に、全員が結界の内側に侵入する。

「!」

しかし、古城の門まであと少しという所で、全員が足を止めた。

グルオオオツ!!

周囲の景色から切り取られたような、円形の広場。重く閉じられた城門を守護するかの如く、大勢のファンガイアが群れを成して待ち構えていたのである。

「再生態のファンガイアか」

「奴らめ……どうやら残る兵力全てをここに集めていたようだな」

名護と太牙が呟く間にも、カロンが生み出したであろうファンガイア達は侵入者を排除するべく進行してくる。

「ふう、屍人形なんてブチ殺し甲斐が無いけど、どーやら蹴散らしていくしかないみたいね」

「それっきゃねえか。      シャナ、遅れんなよ」

「そつちこそね。士」

二人が好戦的な笑みを浮かべ合い、士はバイクのアクセルを入れ、シヤナは翼を羽ばたかせ、ファンガイアの軍勢に向かっていく。

「来い、サガーク！」

『 ぞー!!』

「キバーラ、行きますよ!!」

「はいはい、おつ任せ」

太牙がサガークを、夏海がキバーラを呼び出し、士と名護はディケイドのカードとイクサナツクルを構える。

『変身!』



【KAMEN・RIDE・DECADE!】

『ファイ・ス・ト・オ・ン』

『ヘン・シン』

「チュツ」

十の虚像、山吹色のアーマー、ブルーのステンドグラス、無数のハ  
ート型の光が四人に重なり、彼らの姿をそれぞれ仮面の戦士 仮  
面ライダーディケイド、イクサ、サガ、キバラーへと変えた。

『そこを退けえー！ツ！』

覇気勇々とした戦士達の声が大気を震わせ、両陣営の最終決戦の狼  
煙は上がった。

「はっ!!!!」

「っ!!」

古城内のホール。  
ザンバットソードの一薙ぎを二の腕で受け止め、至近距離で睨み合う奏夜とアナザーキバ。

「どうしました？　変身しないのですか？」

「へっ、お前なんざ、この魔剣一本で十分だっつ。そっちこそ、自慢の高速移動はどうしたんだよ？」

「……変身していない貴方など、この身一つで十分です!!」

強がる二人だが、それぞれの力を使わないのにはちゃんと理由があった。

奏夜は連日の戦いによるダメージと、変身に不可欠なキバラーが、変身時間超過による負担からまだ回復していないことと。レティシアは蘇生陣発動時、膨大な魔皇力を消費しており、高速移動に避ける力が残っていなかったということ。

「答えを持たぬ者が　今度こそ消えなさい！」

「うおっ!?!」

ただ、やはり互いにハンデがあつたとしても、奏夜とアナザーキバの力の差は歴然だ。

アナザーキバが呼び出した水球が奏夜を取り囲み、一斉に弾ける。ギリギリで回避と防御は間に合ったかにみえたが、肩に出来た僅かな傷痕を見て、奏夜は舌打ちした。

「ちっ、さすがに生身じゃ限界があるか……」

唯一の救いは、カロンの相手をユウスケが変身するクウガが引き受けてくれていることか。

「だあっ!?!」

「ぬうつ、小癩な！」

クウガの拳を回避し、カロンの鳥の形を模した炎弾を飛ばす。

ユウスケとカロンも、アルティメットフォームの蘇生陣の負担からか、勝負はほぼ互角だった。

死体呼び出せない分、カロンの方がやや不利だろうか。

しかし、レティシアと奏夜の戦いは、明らかに奏夜の劣勢だった。

(ま、嘆いたところで、今持ってるカードで戦うしか無いけどな…  
…)

アナザーキバの腕を弾いて距離を取り、ザンバットソードを構え直す奏夜。

「……理解しかねますね」

問いかけるアナザーキバは、拳を構えながらも仕掛けてくる様子は

無かった。

「答えを持たぬ時点で、貴方がここにいる資格はない……そう言った筈ですが？」

「……………」

奏夜は何も答えない。ただ、視線だけは逸らさなかった。

「何の支えも無く進んでも、それはただ苦しみが続くだけ。貴方の信念は、所詮夢物語。掲げたとして、それが何の支えになるのですか？」

「ハッ、夢物語はお互い様だ。……さつき発動させようとしていた陣、死者を蘇えらせるものだろう？」

蘇生陣は魔術と自在式が組み合わさったもの。奏夜には魔術の心得はあっても、自在式の素養は無かったが、今までのレイシアの言動等から、推測は立っていた。

「……夢物語などではありません。私達が今まで集めたライフエナジー、キバの鎧、そしてカロンの死者の書。これらがあれば、死を超越することは十分に可能です」

「……そんなやり方で蘇らせて貰って、お前の大切な人達が喜ぶとでも思ってたのかよ」

「強がりには止しなさい。貴方になっっているでしょう？」

何を投げ打ってでも、蘇らせたいと願う人が。

「……………」

奏夜の瞳が僅かに揺れた。

「私達の大命は、敵である貴方にも利を与えるもの。貴方の自分本位な理想郷、どちらに人やファンガイアが着いてくるか、もう分かっている筈です」

「……………ああ、そうだな」

奏夜はあっさりとそれを認める。

「出会い方が違っていたのなら、奏夜はレティシアに着いていなかったらう。」

もし叶うなら、“あの人”との時間を取り戻せるなら。

例え悪魔にでも魂を売っていたであろう時が、奏夜にも確かに存在していたからだ。

「貴方と私は似た者同士なのかも知れません。」

違うのは、叶う理想を追っているか、叶わぬ理想を追っているのかどうか。

貴方が答えを見つけられず、自らの理想に絶望したのなら　まだ遅くはない」

アナザーキバは無造作に、奏夜へ手を差し出す。

「私達と共に来なさい。貴方の過去を、運命の鎖から解放しましょう。」

奏夜にとって余りにも甘い誘惑。

身動きさえ出来ず、頭をくらくらと揺らし、冷静な判断を奪う毒。

叶わぬ理想を追って何になる。

そんなものの為に、何故大切な人との未来を捨てなければならない。

奏夜の口元に笑みが浮かんだ。

酷く虚ろで、歪んだ笑顔。

担いでいたザンバットソードを下ろし、奏夜はレティシアに近付いていく。

差し出された手に、自分の手を伸ばしながら、奏夜は確かな意志と共に、自分の答えを述べる。

「やなことだ」

奏夜の笑みはいつの間にか虚ろなものではない、いつもの人を喰ったようなものに変わっていた。



「!!!」

レティシアがそれに気付いたころには、もう遅かった。

奏夜は彼女の手をはたき、返す拳で、アナザーキバの仮面を渾身の力でぶん殴る。

「がつ……!!」

生身のものとは思えないほどの力に、アナザーキバは数歩仰け反る。

「あ、痛え痛え。やっぱり生身だと色々不便だなあ」

拳から血を滴らせながら、奏夜は緊張感の無い口調で呟く。

「な、何故……ですか!？」

アナザーキバの仮面の下から、驚愕の言葉が漏れると同時に、

『奏夜が、お前とは違うからだ（よ）』

窓に貼られていたステンドグラスが割れ、細かく砕けた破片を浴びながら、二つの影がホールに着地した。

「ようユウスケ、生きてるか？」

「土！」

「ごめん奏夜。遅くなった」

「シヤナ！」

颯爽と現れたデイケイドとシヤナに、奏夜とクウガは呆けたように立ち尽くす。

「外のファンガイア達が思いの外多くてな。ヤツらの相手を名護達に任せて、俺達だけ先に来たんだよ」

ディケイドはすれ違い様に、奏夜の肩を叩く。

「あのカラスは俺とユウスケが相手をする。奏夜、俺もお前の答え、聞かせてもらっぞぞ」

「……………」

まったくコイツは　いちいち見透かしたようなことを言う。  
奏夜は苦笑して、

「ああ。頼んだぜ、門矢」

ディケイドは小さく頷き、カロンと戦うクウガに加勢する。

「クッ……………世界の破壊者か……………!!」

「ユウスケ、いつまでもこんなヤツに手間取ってるな。それとも、主役の俺に見せ場を取られたいのか？」

「……………相変わらずすげー自信だな。お前はさ」

皮肉っぽく言いながらも、クウガはこの友人の助けに感謝しつつ、拳を構え直す。

「見せ場はまだまだこれからだよ。何てったって、俺はクウガだしな」

「よし、その意気だ。行くぞ！」

付近でライドブツカーの弾丸とカロンの炎弾が舞う中、シャナは奏夜庇うように、彼の前に立つ。

「奏夜、下がってて。その様子じゃ身体もボロボロだし、変身もできないうでしよう?」

「そーだな。せつかくだ、お前に出番を譲ってゆっくり……と  
言いたいとこだが」

一度は後ろに退いた奏夜が、シャナを押しつけ再び前に出る。

「これは俺がケジメを付けなきゃならん戦いなんぞな。ちよっと任してくんねえか?」

シヤナを見る奏夜の瞳は穏やかで、とても戦いに赴くようなものはなかった。

しかし、シヤナにとってはもはや見慣れたもの。

(いつもの奏夜だ)

それを確かめ、しかしシヤナは奏夜の背中に回るようなことはせず、代わりに彼の隣に立つ。

「いやよ」

「あん？」

「ここまでずっと奏夜の好きにさせて来たんだから、いい加減私も手を出すわよ。それに」

好戦的な、しかしさながら奏夜の如く、シヤナは快活に笑った。

「やるなら二人で、でしょ？」

「……はっ、お前も言っつようになっってきたな！」

奏夜が、シャナの髪を乱暴に撫でたのを気に二人の武器、ザンバツトソードと贄殿遮那が交差した。

「そーいうわけだ、レティシア。残念だが、お前の信念とやらに賛同するわけにはいかない」

「……何故、ですか」

レティシアの声はどこか震えていた。

「貴方は何故、立っていられるのですか？　貴方だって、生き返らせた人がいるでしょう？　まさか本気で、自分の夢物語が現実になるとでも思っているのですか？」

「思ってるんじゃない、信じてんだよ」

仮面ライダークウガ　小野寺ユウスケに教えられたことだ。

「例え夢物語と笑われようが、それを諦めずに信じ続ける限り、可能性は0じゃねえだろ」

酷い現実を信じ、自分の願いを諦めるな。  
優しい綺麗事を信じ、誰も泣かない現実を願い続ける。

「これが俺の答えだ。

誰が何と言おうが、俺は人とファンガイアが笑っていられる世界を作ってやる。

信じて、信じて、俺がくたばるまで信じ続けてやるよ。

レティシア、お前も含めてだ」

奏夜は真っ直ぐ、アナザーキバを見据えた。

「お前の理想が間違っているとは言わない。でも、それは俺の理想と相反するものだ。だったら、俺の理想の中でお前を救ってやるよ」

流れるように告げる奏夜。

しかしレティシアは、それを自分への侮辱として拒む。

「わ、私にそんな絵空事を押しつけるなッ！！ 貴方に救われる謂われなど無い！」

「そうか？　今の俺にはお前が自分の理想のせい、もがき苦しんでるように見えるがな」

「戯れ言を！　私が私の理想に何故苦しめられなくては……」

「なら何故、俺を殺さなかった」

刹那、レティシアの全ての動きが止まった。  
奏夜は言葉を切ることなく、唇を動かしていく。

「よくよく考えりゃおかしな話だ。  
アンタにや俺を殺すメリットはあっても、生かしておくメリットはない。

最初に戦った時は、ただでさえマッド博士との戦いでグロッキーだったからな。

造作もなく俺を殺せたはずさ」

シヤナも　そこは引つかかっていた。

レティシアにとって、奏夜は邪魔にしかない。  
ならば何故、奏夜を殺さず生かしておいたのか。

(奏夜は、あいつがわざと見逃してたっていうの?)



シヤナは黙って、奏夜の話の続きを聞く。

「信念だの理想だのと、アンタが執拗に問い掛け続けた問題にもこれで説明がつく。」

アンタは俺の理想を夢物語と言ったが、本当は俺がその夢物語を、現実にくれくれるのを望んでいたんじゃないのか？ 理想のために人間を犠牲にし続けるアンタ自身を、止めて欲しかったから」

「ふ、ふざけるなッ！！ 人間など価値の無い生き物だ！ 私

の理想の糧となればそれでいい！」

「いや、アンタは知っているハズだ！」

奏夜はザンバットソードの切っ先をアナザーキバに向けた。

今から自分が彼女に与える事實は、ある意味では絶望の刃と成り得る。

だが、それでも言わなければならない。

運命の鎖から、彼女を解き放つために。

自分の理想を貫いた上で、彼女にも救いを与えるために。

「アンタは人間の醜さを嫌と言うほど知っているだろうが、それと

同じくらい人間の素晴らしさも理解しているだろう！  
アンタの　夫と息子から！」

「ッ！」

レティシアの中で、記憶がフラツシユバツクする。  
だが、先刻の残酷な白昼夢ではない。  
自分を呼ぶ声と、三人で暮らした暖かな時間。

「……アンタは非情に成り切れなかった。  
アンタの夫と息子と同じである人間を、理想のために殺し続ける自  
分が恐ろしかった。  
その感情を『自分の信念』という形で正当化し、無理やり抑えつけ  
ていた」

最初の頃と、もはや立場は逆転していた。  
奏夜は毅然と立ち、レティシアはその有り様を揺るがされている。

奏夜は、レティシアが投げかけた問いを思い出す。  
自分の理想は果たして、本当に他の誰かを幸せにできるものな  
のか。

「この問いに誰よりも苦しめられていたのは 他ならぬアンタだ  
つたんだ。

レティシア・リネロ」

「ハアッ!！」

「ぐおっ!?!」

デイケイドのライドブツカーが、カロンを横薙ぎに斬りつける。  
傷口を抑えながら後退すれば、次はクウガの追撃だ。

「だりやッ!！」

「ちいっ、舐めるでないわッ!！」

クウガの拳を、至近距離からの炎弾で防ぐ。

クウガが爆炎で吹き飛ばされたのが見えたが、ダメージはそこまで追ってはいまい。

（せめて死者の書を使うだけの力が残っておれば……、いや、いずれにせよこのままではマズい……！！）

足止めの屍達がやられれば、『弔詞の詠み手』達も加勢に来るだろう。  
だが撤退するにせよ、レティシアと死者の書、キバの鎧だけは死守しなくては

「余所事考えてる暇があるのか？」

【ATTACK・RIDE・BLUST!!】

「!!」

マゼンダカラーの光弾が、硝煙の彼方からカロンを狙う。

「ぐ、あつ!!」

カロンが動けない隙をつき、ディケイドは新たなカードをドライバ

ーに装填する。

【FINAL・FORM・RIDE・KU・KU・KU・KUGA  
!】

「ユウスケ、ちょっとくすぐったいぞ！」

「げっ！　アレやるのかよ！」

クウガの悲鳴も束の間、デイケイドが彼の背中に手を翳すと、クウガの鎧が割れ、中から甲虫を模した装甲が現れる。

クウガの頭が装甲に吸い込まれ、空中で反転。クウガの姿は黒と金でカラーリングされたメカニカルなクワガタ虫『クウガゴウラム』へ変わる。

「ハアッ！」

翼の後ろから噴出されたエネルギーが推進力となり、クウガゴウラムは一瞬で、その銀の二本角を用いてカロンを挟み込む。

「ぐっ、こ、れしきいいー！」

振り解こうとするカロンのだが、身体はがっちり挟まれている上、飛翔するクウガゴウラムのスピードよってかかるGが、更に彼の活動を緩慢にさせていた。

【FINAL・ATTACK・RIDE・KU・KU・KU・KU  
GA!!】

「決めるか」

カードを入れ、手を軽く叩くデイケイド。

クウガゴウラムはカロンを挟んだまま、広いホールの天井付近で回転。

加速しながらデイケイドへと標的を運ぶ。

デイケイドがタイミングを合わせて飛び上がり、マゼンダのオーラに包まれた右足を突き出す。

『ハアーーーーッ!』

「ぐ、おおおおお！？」

クウガゴウラムとの連携技『デイケイドアサルト』が炸裂し、カロンはダメージによって受け身すら取れぬまま、地面に叩きつけられた。

「ぬ、おお……」

傷は、かなり深い。

カロンは自らの存在の力が漏れ出していくのを、まるで他人事のように感じていた。

(……もはや、儼にこの先を見届けることは不可能、か)

自分には、レティシアのように大層な理由など無かった。

ただ、自らの持つ死者を操る力を、どこまで高められるのか。そしてその力で如何なる景色を見ることができるのか。それが知れさえすれば良かった。

レティシアと出会い、共に行動してきたのも、言わば探究心の延長に他ならない

(そのはず だったのじゃがのう)

カロンは嘴を僅かに歪ませる。  
変わった女だった。

激情に駆られた哀れな存在かと思えば、同じ境遇の持ち主にはまるで慈母のように接する一面もある。

所詮は、各々の都合上組んでいただけのこと だが、数百年に渡る旅路の中を、それだけの理由で共に歩んだのか、と問われれば、確実に嘘となるだろう。

今ここで自分が消えれば、その旅路も、何もかもが水泡に帰す。

それは、それだけは。

「み、とめぬぞ……!……!」

『!……!』



ディケイドとクウガゴウラムが警戒する中、カロンはポロポロの身体でホールを進む。

向かう先は、蘇生陣の中心。

「無限に死者を呼び出すことは叶わなんだが　　今までに集めたら  
イフエナジーと、我が存在の力を束ねれば、一度限り、歴戦の猛者  
を呼び出すことが出来る……！！」

「！！　あいつ、ここで何かヤバイヤツを蘇らせる気か！！」

ディケイドの瞳に移る死者の書が輝きを増すと、陣の様子が呼応するかのよう蠢き始める。

「レティシア！！」

「っ！！」

陣が発動したのを確かめ、カロンは腕に装着されていた『死者の書』を取り外し、アナザーキバに放った。

迷いを見せていたアナザーキバが、咄嗟にカロンの方をみやる。

「許せ、今まで集めていた力をここで使う！！　　主は儂が今から  
呼び出す死者を使い、こやつらを滅ぼせ！！」

「カロン……そんな！！」

アナザーキバ　　レティシアの声は震えていた。  
普段とあまりにも違うその様子に、カロンは自身の状態も忘れて、  
笑い声を挙げた。

「何というザマじゃ。貴様の理想は、あの男の言葉程度で失われる  
ものではなかるう？」

カロンの姿は、もはや頭半分しか残っておらず、他の部分は、蘇生  
陣の光と同化しつつあった。

「最後まで　　貴様の理想を貫け　　我が、友よ　　」

それが、カロンの最後の言葉だった。

存在の力全てを消費し、その身は蘇生陣発動の糧となり果てたのだ。

「あ　　ああ………！！」

アナザーキバの身体から力が抜け、精神状態を乱したのか、ベルトからキバットが外れた。アナザーキバの鎧が弾け飛び、その姿は口ブスターファンガイアへと戻る。

「きゅっくっく………」

「キバット！」

奏夜が呼び掛けると、キバットは「ハッ！」と目を醒まし、主の元へ飛んでくる。

「奏夜……！　　良かったあ、来てくれんの待ってたぜえ！」

「再会の挨拶は後だ、今はとにかくこの城から　　」

奏夜が言った途端、ホールの床がひび割れ、瓦礫となって下へ落下

していく。

「やべっ！...！」

「奏夜、捕まって...！」

「士、お前も早く...！」

「ああ...！」

クウガゴウラムと紅蓮の翼を顕現させたシャナが、すんでのところでデイケイドと奏夜を回収する。

瓦礫の雨を縫うようにして、四人は間一髪、古城を脱出した。空中で一旦制止し、四人は再び崩れ行く建造物を眼下に収める。

途端、全員が言葉を失った。

「な、なんだありや......！」

クウガゴウラムからユウスケの驚愕の声が漏れた。

他三人も口にこそ出さないが、この事態について行けないのは同じである。

古城の瓦礫を砕き、中から首をもたげた巨大な影。岩肌のような両翼を広げ、鋭い瞳は、死者の書の支配下にあつて尚、強者の光を宿していた。

「……馬鹿な」

この面々の中で、一番眼前の状況を信じられなかったのはアラストールかも知れない。

今、目の前で冥界の淵から蘇ってきたのは、かつての契約者と自分の前に立ち塞がり、死闘の末にようやく倒れた、まさに歴戦の“紅世の王”だったからだ。

「甲鉄龍”イルヤンカ　　！！」

遙か昔に起きたフレイムヘイズと徒の一大戦争、その発端となった組織「とむらいの鐘」最強の将、『両翼』の左、イルヤンカ。

虹の翼“メリヒム”と並び、討たれた後もその名を轟かす実力者。死者の書は、蘇らせる死者の記憶を、使用者が持っていなければな

らないはずだったが

「迂闊だった……“冥夜の船頭”め。“大戦”に参加していたのか……！」

「凄い気配……」

シヤナに“大戦”の知識は無いが、あの龍が今までの“徒”の中でも、最上位に入る力を持っていることは理解できた。

「コイツは骨が折れるな……」

「あつ！ みんな、あの龍の背中！」

クウガゴウラムが角で刺す先、重厚そうな外皮の上に、威風堂々と立つ影。

「……レティシア」

「な、なんなんですか。あの龍……!」

「……もしかしくなくても、かなり面倒な状況なんじゃない？ コレ」

古城を食い破って現れたイルヤンカを見上げつつ、夏海 仮面ラ  
イダーキバーラは息を飲み、マージョリーは本気で面倒くさそうに  
呟く。

無論、周囲に群がるファンガイアに炎弾を叩き込むのも忘れない。

「例えそうでも、我々がやるべきことは一つだ」

「奏夜達のためにも、ここで屍達を食い止めなくてはな」

イクサの銃弾が放たれ、サガのジャコーダービュートが伸び、また  
ファンガイア達がステンドグラスとなって砕けた。

「シヤナ、先生……」

空で微かに光る紅蓮の炎を見つめる悠二。

今は、信じて待つしかない。

イルヤンカの背に降り立ったディケイド、シャナ、奏夜、クウガの四人。

まだ死者の書の所有者が命令を下していないためか、イルヤンカが暴れ出す気配は無い。

改めて、四人とレティシア　ロブスターファンガイアは真っ向から対峙する。

「……あくまで、戦わなきゃならないのか」

最初に口を開いたのは奏夜だった。

「ええ」

レティシアは、小さく頷く。

その腕には、カロンから譲り受けた死者の書が光っている。

「私は貴方の理想を否定しなければならない。

そうしなければ私……いえ、私達の旅路は、何の意味も無くなってしまっ



一瞬でも揺らいでしまった自分への怒りを込め、レティシアは宣言する。

「私達の理想は、所詮相容れない。」

夢は、ただの夢に過ぎません」

「だが、お前は」

「本心からそう思っちゃいない」

しかしディケイドとクウガは、レティシアの揺らぎを見逃さない。力強く、二人は前に踏み出す。

「奏夜は信じる理想の為に戦える。」

目の前に立ちはだかる敵が、例え自分と相反する理想の持ち主だったとしても、それさえも受け入れ、互いが笑っていられるように全力を尽くすことができる！」

「アヴェンジャーのファンガイアが、アンタに着いてきたのと同じだ！ その姿にこそ、ファンガイアも人間も、シャナちゃん達仲間

も着いてくる！　それが、みんなが笑っていられるよう世界を作り出せる、真の王の姿だからだ！」

「お前はそんな世界を望んでいたんじゃないのか？　お前と大切な人々との間に起きた悲劇を二度と繰り返させない、人間とファンガイアが手を取り合っけいられる世界を！」

「今のアンタを動かしているのは理想じゃない、ただの使命感だ！　アンタの選んだ道が間違っているなんて誰も言わない！　でも奏夜は、アンタにも幸せになつて欲しいと願っている！　なのに、なんで俺達が争わなきゃならないんだよ！」

「　　そこまで分かつてるなら、こうなることが必然だと言うことも分かつているでしょう？」

レティシアは涼しい口調で、相好を崩す。  
異形の姿のせいで酷く分かりづらい笑顔。だがそれは、不思議と好意的なものに見えた。

「私はもう選んだ。今更、救いの道を進むことは許されない。カロンも同胞も、それこそ糧としてきた人間達も、それを許しはしないでしょう。」

もはや、正しいかどうかではないのです。  
私は最後の時まで、選んだ道を進み続ける、それだけですよ」

最後通告に似たその言葉に、ずっと話を聞いていたシヤナは、

「……なんて、馬鹿なの」

いつだったか、ある“徒”の少女に　最後まで自分の想いに生き  
た少女に言った言葉を、再び送る。

「本当に　馬鹿だわ」

「ふふ　そうかも、知れませんね」

シヤナに笑いかけながら、レティシアは死者の書に手を添える。  
もはや　話は終わりだという意味表示か。

「奏夜」

「ああ、分かってるよ門矢。　キバツト!」

「あいあい!　俺様ふつかあ〜つ!」

飛来したキバツトが、操られていた分のフラストレーションもあつ

てか、気合い十分に奏夜の手を噛む。

「ガブツ！」

スタンドグラスの紋様が奏夜の頬に浮かび、腰に巻き付いたキバットベルトに、キバットが逆さ向きに留まる。

「変身！！！」

アクティブフォースが奏夜の体内を駆け巡り、その姿を仮面ライダーキバへと変えた。

並び立つ四人の戦士にレティシア　　ロブスターファンガイアは戯れのもりで問う。

「最後に聞いておきましょうか　　貴方達は、何者ですか？」

レティシアから目を逸らさぬまま、四人は誇るように、自らの名を高らかに告げた。

『通りすがりの仮面ライダーだ!!』

「ファンガイア影の王、キバ!」

「“天壤の劫火”アラストールのフレイムヘイズ、『炎髪灼眼の討ち手』、シヤナ!」

『覚えておけ!!』

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD!

「これを受け取りたまえ」

「レティシア、最後の勝負だ」

「私は何も後悔はしない」

「負けるなよ奏夜。お前の運命に」

「また連れてってくれるか？ 俺の望むところってやつに」

「WAKE・UP・FEVER」！！！！」

【第二十五話・凱旋ノエンペラーゴールド】

全てを破壊し、全てを繋げ！

## 第二十四話・リバイバル/信じる答え・Bパート（後書き）

なあーがぁーいいー！

しかも纏まりが無い……文才が、文才が欲しい！！

・今回デイエンドがいませんでしたが……海東のキャラ上、さすがに誰かのバイクの後ろに乗るといのは考えにくかったため、現在は頑張つて古城まで走ってます（超スピノフネタ止める）  
やはり海東には、マシンディエンダーを与えるべきだ。

・次回よりレイシアとのファイナルバトル。

本当は最初、この回でレイシアを退場させ、カロンをラスボスにするつもりだったのですが……今回のデイケイド編、物語の核はレイシアだったので、ここで彼女を退場させると、彼女のキャラが余りに薄っぺらくなってしまふ気がしたので止めました。  
ただそのせいで、カロンが物凄く不便なキャラに……コイツは結構気に入ってたので、もっと掘り下げてやりたかったです。

・土とユウスケのWスーパー説教タイム。デイケイド全編通じて、この二人はいいコンビだったと思ってます。また二人のやり取りが何処かで見れないかなあ……。

・イルヤンカ登場。この龍さん大好きなんです……シャナ十巻の過去編で一番好きといっても過言ではないのですが……現在構想中の音也主役の話で、彼の出番が極度に少なくなりそうなんで（オイ）こちらにて登場させました。

再生態に近い為、意志は無いのですが、実力はそのままで。次回で暴れさせたいのですが……さすがにデイケイドチームが相手だとなあ（苦笑）

では次回か次々回にて、コラボ編は終了で御座います。

皇帝形態&フォルティッシモな龍の登場もお楽しみに！



## 第二十五話・凱旋ノエンペラーゴールド・Aパート（前書き）

「皇帝とは、君主の称号の一種で、伝統的には、標準的な君主号である『王』よりも上位のものとして扱われることが多い称号です。ちなみに『皇』という漢字は、『自』（はじめ）と『王』の合字であり、人類最初の王を意味し、『帝』という漢字は、元来、3本の線を中央で束ねるという意味なんですよ〜」

とある魔皇竜

今回『仮面ライダーディケイド After The Movie War』のオリジナルカードが登場致します。

## 第二十五話・凱旋ノエンペラーゴールド・Aパート

「ほいさつと！」

炎の衣『トーガ』に身を包んだマジヨリーの剛腕が、ファンガイアの軍勢を叩き潰す。  
やはり、この再生態は相手ではないが

「死者を生み出すペース、段々上がってきてるわね」

「あくまでも、僕達と奏夜達の合流をさし止めるつもりだろう」

サガがジャコーダーを振るい、キバーラがサーベルで敵を斬りつけつつ、城に鎮座するイルヤンカを見上げた。

「早く行かなきゃいけないのに……。いくら士くんやユウスケでもあんな龍を相手にしてたら……。きゃっ!？」

突如巻き起こった衝撃に、キバーラのみならず、全員が一瞬怯む。地上に待機していたイルヤンカが飛翔したことに伴い、巻き起こされた爆風だ。

その巨体の背中では、時折紅蓮とマゼンダの光が視認できる。

「名護さん、シヤナ達が……」

「ああ、見えているよ。これは出し惜しみしている場合ではなさそうだな」

悠二の傍でファンガイアを蹴散らしていたイクサは、仮面の口元からイクサライザーを取り外し、コードを入力していく。

【1・9・3・ラ・イ・ジ・ン・グ】

【ENTER】

アーマー胸部のコロナコアと頭部のクロスシールドが展開し、装甲の一部が弾け飛ぶ。ガーディアンコバルトの鮮やかな青がイクサを覆い、ライジングイクサへの変身が完了した。

「死者達よ、その命、今一度神に返しなさい！」

イクサライザーから放たれるオレンジのエネルギー弾が、ファンガイアを打ち抜いていく。

マジヨリー、ライジングイクサ、サガ、キバーラ。火力は十分のはずだが、全てを殲滅するとなれば、時間がかかるだろう。

それまで奏夜達があゝの龍を落とすか、持ちこたえてくれればいいが、戦いに絶対はない。

早期決着は全員が望むところだった。

「どつやら苦戦してるみたいだね」

「！」

涼やかな声と、後方で煌めくシアンの光弾。

その影は軍勢の一角を撃ち抜きながら、凄まじいスピードで5人の前に現れた。

「大樹さん！」

「海東さん！」

「やあ、夏メロンにミステス君」

声を揃えた悠二とキバーラに片手を挙げ、ディエンドは振り向き様にディエンドライバーの引き金をひく。

「海東さん、何でここに……？」

「愚問だね。僕の行動理由はお宝だけ……と言いたところだが、今回はそれだけじゃないかな。」

ほら、これを受け取りたまえ」

デイエンドは握り拳を解き、何かを悠二の掌に落とす。

悠二が目を落とすと、そこにはゴールドカラーのフェッスルが光っていた。

「これって、先生が使ってる笛ですか？」

「ああ、魔皇竜を呼び出すための起動キーさ」

「魔皇竜……って、まさか!？」

デイエンドが奪った、奏夜の友達の名前ではないか。口を開きかけた悠二だったが、デイエンドは「おっと」と言葉を遮る。

「勘違いするなよ。今はレティシアの持ってる『死者の書』

あ

「うちの方が貴重なお宝だと思っただけさ」

さすがにそれが建て前だということは分かったが、それを口に出すほど、悠二は野暮ではなかった。

「それと、こっちは土に渡してくれ」

デイエンドがベルトのケースから一枚のカードを悠二に手渡す。絵柄には、悠二も見たことがない姿のキバと、弓のような武器が描かれていた。

「FINAL・ARM・RIDE……なんですかこのカード？」

「土に渡してくれば分かるよ。」

あのキバをファイナルアームライドさせるには、このカードじゃなきゃダメなんだ。紅奏夜は、オリジナルの『残像』だからね」

(……………?)

一瞬、悠二はデイエンドの口調に引っかかるものを感じたが、切迫した状況に、その思考は直ぐに埋没してしまった。

「ま、とにかく、僕はこの屍達を片付けるから、キミはそれを土とキバに届けてくれたまえ」

「いや、届けるって言われても……」

困惑した悠二は上空を仰ぐ。

どうしろと言うのだろうか。

例え悠二が百人肩車しても、これを届ける為に必要な高さには足りない。

「世話が焼けるねえ……夏メロン、ミステス君を二人のどこまで送ってくれ」

「だから！ 私は夏メロンでも夏みかんでもなくて夏海です！」

いつになったら覚えてくれるのだろうか。

「それに大樹さん、二人の所になら私が一人でも行けますよ。……あんな場所に悠二くんを連れてくのは危ないです」

「いや、ここは彼が行かなきゃダメだ」

デイエンドは有無を言わせぬ雰囲気のまま、悠二に向き直る。

「『炎髪灼眼の討ち手』やあのキバがキの言う“仲間”なら、そのくらいはやってみせてくれ」

「！」

挑発。いや、試されている。

悠二は本能的にそれを感じ取った。

海東に仲間の意味を説いたのは悠二。

ならば、身を持ってその意味を証明すべきなのも悠二だ。

「はい！」

首肯し、悠二はキバーラに頼み込む。

「お願いします夏海さん、僕を上まで運んで下さい！」

「分かりました。悠二君本人がそう言うなら」

悠二の眼光に並々ならぬものを見て取り、キバーラも彼の願いを承諾した。



片手で悠二を抱き留めるように支え（情けない体勢ではあるが、バランスの関係上仕方ない）、紫色に輝く両翼を生やすと、キバーラはイルヤンカ目指して飛翔していく。

「ま、あとは彼次第か。 さて、こっちもさっさと片付けちゃうかな」

二人を見送り、ディエンドは仮面の下で不敵に笑った。

「落ーちーる ！」

「この高さはシャレにならねえな」

キバの絶叫とディケイドの舌打ちが重なる。

悠二達が贈り物を届けるべき4人は、現在空を絶賛落下中であつた。

戦闘開始直後、レティシアは四対一の戦いを最初から不利とみたのか、イルヤンカを操り、両翼を羽ばたかせる。

その巨体にそぐわぬ速さで龍は飛翔し、背中に乗っていたキバ、デイクイド、シャナ、クウガは空中に放り出されていた（レティシア当人は、愛剣であるクレイモアを突き刺し、踏みとどまっていたが）。

「くっ！」

シャナは紅蓮の双翼を顕現させ、

「奏夜、掴まってくれ！」

「悪い！」

再びクウガゴウラムにファイナルフォームライドしたクウガの足に、キバが掴まり、

「空の勝負ならコイツだ！」

【ATTACK・RIDE・JET・SLINGER!!】

地上に乗り捨ててあったマシンデイクイダーを、を模した紋章が

通過。

オールレンジホイールと五つものジェットエンジンを搭載した、銀色に輝く高性能バイクマシン。ジェットスライガーが、エンジンの噴射で滑空し、主であるディケイドの下へ飛んでいく。

「奏夜、シヤナ！ 一気に叩くぞ！」

「分かった！」

「おう！」

操縦席に乗り込み、ディケイドはパネルを操作。

ジェットスライガーのフロントが開き、二段重ねに搭載されたミサイル弾が、パネル上でイルヤンカをロックオンする。

「はぁ……ッ！！！」

シヤナの構える贗殿遮那の刀身が煌めき、紅蓮の奔流に包まれる。全てを灰燼に帰すには十分な火力だ。

「バツシャーマグナム！！ ア〜ンド、バツシャー・バイト！！！」

飛来したバツシャーマグナムにより、キバはバツシャーフォームへ。キバットの魔皇力チャージにより発動した『バツシャーアクアトルネード』の水球が、銃口付近に生成される。

「ユウスケ、悪いが弾の反動は我慢してくれ！」

「俺は気にしないでいい、思いっきりやってやれ！」

掴まるクウガゴウラムの声援を受けながら、キバBFはトリガーに指をかけ、

『行けえ！！』

バツシャーの魔力が込められた水球『バツシャーアクアトルネード』が放たれ、それに伴い、シャナの大太刀から特大の火炎流と、デイケイドのジェットスライガーから無数のミサイル弾が発射された。

イルヤンカは迫り来る脅威に対し、開いた口から並んだ牙を覗かせ、

「ッガハアアア

!!!」

イルヤンカが吐き出したのは、蒸気にも似た鈍色の粉塵。空中で広範囲に広がったそれは、三人の攻撃を阻むにはあまりに粗末な代物に見える。

しかし、三人の攻撃が粉塵と接触した途端、豪快な衝突音と共に、水球は弾け、火炎は掻き消え、ミサイルは部品さえも残さず砕け散った。

その光景をジェットスライガー内から見ていたディケイドは、他人の気持ちを代弁するかのように呟く。

「おいおい、ミサイルを弾く煙ってどんな煙だよ」

「アラストール、あれは？」

「『甲鉄竜』イルヤンカの持つ、最硬の防御力を誇る自在法、『幕障壁』だ」

「幕障壁……」

シヤナの問いに対するアラストールの答えを、キバBFが復唱する。

「先のように拡散させれば無敵の防御壁に。集束させれば全てを貫く鋼の砲弾にも成り得る」

「攻守自在ってワケか……。遠距離がメインで、一撃のダメージが低いバツシャーフォームじゃ勝ち目ねーかもな」

「近距離で攻撃を入れていくしかなさそうね。反撃のリスクもあるけど、あつちはあの巨体だから、小回りの利くこつちの方が回避はし易い筈」

「だな。レティシアの方は援護に回ってるみたいだし」

クウガゴウラムの言う通り、レティシアは現段階で攻撃を仕掛けてきてはいない。

蘇生陣に使った魔皇力が回復していないのだろう。イルヤンカの手をメインに、自分は後衛にということか。

「俺も病み上がりなんだがな……。ま、仕方ないか。門矢、シヤナ、バラけて攻撃するぞ。固まったら幕障壁の餌食だ」

「うん。奏夜、負傷中なのが分かってるなら、無茶しないでよ」

「油断して落とされるんじゃないぞ、お前ら」

キバBFがシニカルに言い放ったのを合図に、散った三人はそれぞれ別の方角からイルヤンカへと迫る。

(それにしても、なんて威圧感)

スピードの差から、最初にイルヤンカへ辿り着いたシャナは、改めてイルヤンカの強さを肌で感じ取る。歴戦の中で磨き上げられた力は、例え操られた身であっても褪せることはない。

(でも、勝つ)

巨竜の正面近くに描かれた紅蓮の軌跡に、闘争心しか無かったはずのイルヤンカの瞳に、微かな感情の炎が灯った。

「炎髪灼眼の 討ち手……！」

「 久しいな。かつての好敵手よ」

紡がれた声に、アラストールは懐かしさと敬意を込めた言葉を送る。 だけ

だが、その余韻も直ぐに戦いへと吞まれていく。

「斬る！」

瞬時に形成された巨大な炎剣が、イルヤンカの外皮に振り下ろされる。

「!!!」

シヤナの表情が驚愕に彩られる。

手加減なしの一撃にも関わらず、自身の炎剣は、イルヤンカの肌に僅かな傷と焦げ跡を残しただけだったからだ。

「離れる！」

「っ！」

アラストールの声に反応し、ギリギリで回避行動を取ったシヤナの



すぐ傍を、イルヤンカの翼が掠めた。  
巻き起こる爆風に踏みとどまり、シャナは再び距離を取る。

「油断するな。屍と言えど、あやつは大戦にその名を轟かせた強力な王だ」

「うん」

気を引き締め、シャナは紅蓮の翼を羽ばたかせる。

その下方、デイケイドはジェットスライガーを走らせ、攻撃の機を伺う。

（さっきのシャナの攻撃からして、コイツの外皮はかなり硬い。攻撃を加えるなら）

やはり、この竜を操っている本人。

ジェットスライガーを浮上させ、イルヤンカの背中　レティシアをミサイルの射程圏に入れるデイケイド。

「やはり私を狙いますか」

現れた銀色のマシンを見やり、レティシアは不敵な笑みを浮かべる。

「ですが　よもや私が、それを予想していなかったとお思いですか？」

レティシアはゆらりと、手を動かす。

ガガガガガッ！！

「なっ！？」

デイケイドの乗るジェットスライガーが、連なって襲い来る衝撃に揺れる。

レティシアもイルヤンカも、攻撃を加えてきた様子は無い。だが現に、ジェットスライガーは見えない攻撃に火花を散らし始めている。

「クソッ！！」

せめて撃墜だけは避けなければ。  
デイケイドは新たなカードをバックルに装填した。

【ATTACK・RIDE・HARD・TERPULAR!!】

ジェットスライガーをWの紋章が通過し、その機体を黒いフロント部分に、赤い安定翼とジェットエンジンを搭載したマシン 『ハードターピュラー』に変えた。

バイクの表面積が少なくなったことで、衝撃は止んだ。だが未だに、レイシアの攻撃はディケイドでも視認できない。

「ッバハア　　!!」

「チイツ!!」

隙を突き、先刻の防御用ではない　　煙を集束させた幕障壁の弾頭が、ハードターピュラーを狙う。

アクセルを入れ、幕障壁を緊急回避するディケイド。  
そして見た。

避け際、先程まで自分がいた場所を幕障壁が通過すると、何か水泡のようなものが弾けたのを。

「しゃぼん玉……いや、そうか!」

ディケイドは気付く。

先の見えざる攻撃は、レティシアの魔皇力が籠もった、破壊力抜群のしゃぼん玉。

消えていたのは、恐らく光の三原色を利用していたからだ。

（三原色の赤、緑、青が交錯すれば、しゃぼん玉は無色となり、太陽光を反射する透明球と化す……！）

光を扱うカメラマンである彼の知識が解答を導き出すが、分かったところで対処のしようがない。

レティシアが先程手を動かしていたのを見ると、あのしゃぼん玉はある程度方向操作ができるとみていい。

これではレティシアへの攻撃も未然に防がれる。

アクアクラスのレティシアなら、魔皇力もそれほど消費せず、しゃぼん玉を生成できるだろう。

重厚なジェットスライガーを揺らす威力のしゃぼん玉なら、迂闊に割ることもできない（最悪、バイクから落ちてしまう）。

しかもその間に、幕障壁でのカウンターも考えられる。

「考えてやがるぜ、敵ながら」

当面は、ジェットスライガーより小回りの利くハードターピュラーで、突破口を見つけるしか

「先生ー！ー！！ 土きーん！！」

『！！！』

戦場に響く自分達を呼ぶ声に、ディケイドとバツシャーマグナムの弾丸を放っていたキバBFが、声のした方を振り返る。

「悠二！？」

「夏みかん？」

イルヤンカからやや離れた後方。  
輝く翼で飛翔するキバーラと、彼女に抱えられた悠二に驚く二人。

「悠二、お前何しに……!!」

「話は後です！ 先生、これを!!」

「土くんも!!」

悠二、キバールが投げて寄越した何かを、キバBFとディケイドは器用にキャッチする。

「!!！ お前、これ……!!」

「なんだ、新しいカードか？」

キバBFの掌には、黄金に輝くフェッスル。  
ディケイドの手には、ファイナルアームライドのカード。  
どちらも、戦局を変える切り札と成り得るものだ。

「海東さんが二人に渡してくれって!!」

「……ハッ、こそ泥が、粹なことするじゃねえか!!」

仮面の下で満面の笑みを浮かべながら、キバはバツシャーフォームを解除。

クウガゴウラムの足から背中によじ登る。

「ユウスケ、ちょっと背中借りるぜ」

「へ？ 別にいいけど……何をするんだ？」

「なあに、大したことじゃないさ。

……寝ぼすけな友達を、ちよつくら起こしてやるだけだよ！」

イルヤンカを見据えながら、キバは金色のフェッスルを構える。

「キバット、頼むぜ！」

「おうよ！ 久々の再会だあ！！」

ベルトに留まるキバットも、キバと同じく歓喜の声を挙げた。

黄金のフェッスルをくわえ、キバットは高らかに覚醒の号令を吹き鳴らす！！

『タツロツトオーー!!』

))

「ねえねえおじいちゃん! こっちこっち!」

その頃の光写真館では、まるで何かを呼ぶかのように、絶え間ない音色が響き渡っていた。

「おお、彩香ちゃん。音の出所が分かったのかい?」

「うん、ホラ。あの鞆!」

栄次郎を引っ張る彩香が指差すのは、部屋の片隅に置かれた年代物の鞆。



「こりゃ大樹くんの鞆じゃないか」

「なんだろ？ 携帯の着メロかなにかかな？」

どこか緊張感の無い二人は、心の中で海東に断りを入れつつ鞆の中を探り、この奇妙な音の出所を突き止める。

彩香が中から取り出したのは小さな小箱。

何故か鎖が幾重にも巻かれ、それこそ携帯電話のバイブの如く、音を鳴らしながら小刻みに震えている。

「この箱が出所っぽいねえ」

「でもこの箱、鎖が巻き付けてあって外れないよ？ どうやって止めたら」

そう彩香が言い終えるか言い終わらない内に、小箱の震えは更に激しさを増し、鎖を引きちぎらんばかりに暴れ初めた。

「わあっ!?!」

突然の振動に驚いた彩香は、つい小箱を床に落としてしまった。

ガツチャーーン！！

箱の『中身』の目覚めにより脆くなっていた封印の鎖は、落下の衝撃により粉々に砕け散る。

それとほぼ同時に、箱を構成する六面の板が吹き飛んだ。

「じゃっじゃ〜ん！！」

「おおっ！？」

「わわっ、竜だ！ 金ピカの竜だ！」

彩香の言う通り、中から飛び出したのは、翼に銀色の二本角を持つ小さなドラゴンだった。

「ドラマチックに行きましょう〜うっ!」

黄金の身体を歓喜に震わせ、魔皇竜『タツロツト』は、自分を呼ぶ主の元へ飛び去っていく。

「奏夜、なにぼんやりしてるのよ!」

クウガゴウラムの上に乗ったまま、急に動きを止めたキバをシャナが叱咤する。

「慌てるなシャナ」

だがキバは動じない。

威風堂々と、何かを待ち続けていた。

「そっいや、お前にはまだ見せてなかったっけな  
を見せてやるよ」

俺の切り札

「切り札？ ちょっと、何のはな」

「ジュンジュンジュンジュンジュン……！」

ハイテンション極まりない甲高い声。

彼方から雲を掻き分け、猛スピードで接近してくる黄金の影。

キバとキバットにとっては見慣れた、しかし懐かしい親友の姿だ。

「タツロット！」

「タツちゃ〜ん、こっちだこっち！」

「奏夜さあ〜ん、キバットさあ〜ん……！」

主と友達の元に到着したタツロットは、久方ぶりの再会に涙まで浮かべていた。

「久しぶりだなタツちゃん！ 無事で何よりだ！」

「うつつ、本当にお久しぶりですっ！ ずっと会えなくて寂しかったですよ〜！」

「ああ、悪かったなタツロツト。一人ぼっちにさせちゃって」

よしよしとタツロツトの頭を撫でるキバ。状況に着いていけないのは周りの面々だ。

キバの近くを浮遊していたシャナが、突然の乱入者であるタツロツトをじっと見つめる。

「何なの、こいつ……金色の竜？」

「おんやあ？ なにやら知らない人がチラホラいますねえ」

「話は後だ。タツロツト、久しぶりに頼むぜ」

「おっとっと、そうでしたそうでした！ ワタシの役割を忘れちゃいけませんね！」

（役割？）

シヤナが首を傾げ、キバに何が起こるのかを見守る。

「そんじゃ、いつちようキバツて」

「テンション、フォルティツシモオーー　　！！」

タツロットがキバの周囲を飛び回り、キバの肩当て　プテラプレートに巻き付いた封印の鎖『カテナ』を解き放つ。

鎖の外れた肩当ての隙間から零れた黄金の光が、無数の蝙蝠を型取り、空へと舞い上がっていく。

全ての準備が整ったキバが左腕を振り上げると、そこに装着された真紅のとまり木『パワールースト』に、タツロットが収まった。

カチヤリ！

タツロットによって鍵が回され、キバの力を封印していた最後の枷ファイナルウエイクアップが遂に究極覚醒した。

「変・身ー！！」

キバの全身を、黄金の光の蝙蝠が飛び交い、その姿を『キバ本来の姿』に変えていく。

膝にはヘルズゲートの代わりに、クローを展開することによって強烈なニークラッシュを放つことができるルシファーマタル製のニーパッド、シルヴァ・ニークロー。

全身には魔皇力の影響で金色に染まったルシファーマタルにより、防御力を通常の5倍に跳ね上げたインペリアルアーマー。

宙、水、地の魔皇石を固定するヘルズマウントは、キバの強大な魔皇力を制御すべく右脚から移動し、身体の中心部に位置するヘルズブレストに変化している。

顔を覆う仮面は、並のファンガイアでは見ただけで戦意を喪失するとされる、キバ本来の禍々しき面構えを象徴したエンペラー・ペルソナに。

炎と共に背中に伸びた、血霞の如き真紅のマントを翻せば 変身完了。

仮面ライダーキバ・エンペラーフォーム。

奏夜の持つ『黄金のキバ』本来の姿であり、封印された魔皇力を究極覚醒させた、キバの最強形態だ。

( 王 )

傍目から見ていたシャナ、悠二にも、理屈抜きでそう思わせるほどの神々しく、気高い姿。

帰還せし王は自らの道を阻む者に、己の誇りを持って宣言する。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め!!」



## 第二十五話・凱旋ノエンペラーゴールド・Aパート（後書き）

今週のオーズは面白い展開でしたね（毎週面白いんですが）。

カマキリが奪われ、ガザリの獣系のメダルを入手とは！ 今後はフアイズみたいドライバーの奪い合いになるんですかね。

そしてアンク……お前は一拳一動が微笑ましいよ（え  
携帯で人間を学ぶ怪人なんて、初めて見るタイプの怪人じゃないで  
しょうか。

そして次回、ゆかなさんメインっぽいんで楽しみだ（^o^）

・テンション、フォルティッシモオー！！

エンペラーフォーム遂に登場！ 今回は御披露目のみとなりましたが、次回は色々と動かしますよ。本編未使用の不遇技なども披露予定。

・今回はさりげなく海東に、後々とんでもなく重要になることを口走らせました。その意味が明かされるのはまだ先です。

・レティシアのしゃぼん玉には元ネタ……というか、戦法を流用した漫画があります。分かったら拳手求ム（ハッキリ言って分かったら凄いです）。

・幕障壁、現段階でかなり気に入ってる技。あとはマティルダの騎士団とか好きですね。なんか過去編の人ばっかだ；

結局二話跨ぎになりましたが、次回でディケイド編は終了です。最後までお楽しみに！！

・ファイナルフォームライド

最強形態に変身したライダーをファイナルフォームライドさせるカード。ファイナルフォームライドよりもその力は強化されており、放てる力も段違いに向上する。

## 第二十五話・凱旋ノエンペラーゴールド・Bパート

「うーん、やっぱタッチちゃんがいると違うぜえ！」

「ええ、ワタシも奏夜さんとキバットさんがいる場所が一番落ち着きますよ！」

遂に本来の姿、エンペラーフォームに強化変身したキバ。

興奮の余り語らうキバットとタツロットを目に収めながら、キバE  
Fは声を張り上げる。

「門矢！ シャナ！ 一瞬でいい、あの竜の幕障壁を撃てない  
ようにしろ！」

『！...』

八方塞がりなこの状況にあって、確信の籠もったキバの宣言。

奏夜が突破口を切り開く。

そう信じ、彼の指示に従うことに一瞬の躊躇もなく、シャナとデイ  
ケイドは視線を交差させる。

「シャナ、炎を最大まで刀に集める！ あの生意気な外皮をぶつた斬る！」

「わかった！」

シャナの刀が紅蓮の輝きを増していく中、ディケイドはマゼンダと黒でカラーリングされた、タッチ式の携帯端末『ケータッチ』を取り出す。

ディケイドは中にカードを挿入し、描かれたライダー達の紋章を画面越しにタッチしていく。

【KUUGA・AGITO・RYUKI・FAIZ・BLADE・  
HIBIKI・KABUTO・DEN-O・KIVA!!】

【FINAL・KAMEN・RIDE・DECADE!!】

ケータッチのコールと共に、ディケイドの瞳が赤色に変化。

肩幅にかけて装着されたヒストリーオーナメントには、9枚のライダーカードが収められ、仮面の額には、ライダー世界の王者の証、ディケイドクラウンが輝く。

ケータッチをベルト中央部に付け替えれば、変身完了。

全ライダーの力を引き出すディケイドの真の姿、仮面ライダーディケイド・コンプリートフォームがここに光臨した。

「切り札が出揃いましたか……異形の竜よ、迎え撃て!!」

エンペラーフォーム、コンプリートフォームを楽観視できるほど、レティシアは自分の力を過大評価してはいない。早期決着を狙い、死者の書でイルヤンカの動きを操る。

ゴオッ!!

イルヤンカが肺に空気を吸い込み始める。幕障壁へのアプローチだろっ。

「向こうもやる気満々みたいだな」

「なら、真っ向から勝負するだけ」

シヤナの炎剣は彼女の身の丈を優に越し、その熱気は大気を揺らさせるほど強い。

デイケイドCFの言葉通りに、彼女の全力を注いだのだろう。

「土、半端な攻撃なら必要ないわよ」

「ハッ、それはこっちのセリフだ！ お前こそ、俺の足を引っ張るなよ！」

デイクイドCFはケータッチに描かれたクレストの一つ 仮面ライダー響鬼の紋章をタッチする。

【HIBIKI!! KAMEN・RIDE-ARM】

ヒストリーオーナメントのカードが反転し、ハードターピュラーの右翼に、赤く重厚な装甲を纏う戦士『仮面ライダー装甲響鬼』が現れる。

これこそがデイクイド・コンプリートフォームの力。九人の仮面ライダーを最強フォームの状態で呼び出し、その力を使役することができる。

装甲響鬼と動きをシンクロさせながら、デイクイドCFは、右腰に移動したデイクイドライバーにカードを装填する。

【FINAL・ATTACK・RIDE-HI・HI・HI・HI

BIKI!!】

『はああああ……ッ!!』

デイケイドCF、シャナ、装甲響鬼が各々の剣を振り被る。すると、デイケイドCFのライドブッカー、装甲響鬼のアームドセイバーからも、マゼンダと赤色の炎が立ち上っていく。

勝負の時と言わんばかりに、正面のイルヤンカは吸い込んでいた息を止め、

「バハアア                   ッ!!」

凄まじい勢いで発射された攻撃用の幕障壁が、風を切る轟音と共に撃ち出される。

『ハアッ!!』

迸る三本の炎剣が、一寸のズレも無く振り抜かれた。

一本では力不足だったその剣も、三本分となれば話は別。

刹那の罅迫り合いの末、三本の炎剣は幕障壁を切り裂き、そのまま延長上にある、絶対の硬度を誇っていたイルヤンカの右腕を深く抉った。

「オオオオオオ　　ッ!?」

切り口から鈍色の光を噴出させ、イルヤンカは激痛にその巨体を振る。

「くっ!!」

レティシアの死者の書に光が灯るも、イルヤンカの支配権はなかなか戻らなかった。

例え意志がなくなるとも、ダメージを受容する感覚までもが失われたわけではない。

錯乱したイルヤンカが、レティシアの支配を妨げているのである。

「上出来だぜ。門矢、シヤナ」

次は自分の仕事だ。

クウガゴウラムから様子を窺っていたキバEFの右手には、いつの間にかバツシャーマグナムが握られていた。

そのままキバEFは、左腕に止まっているタツロットの角『ホーントリガー』を引く。

すると、タツロットの背中に装備された『インペリアルスロット』



が回り始める。

やがて回転を止めた図柄が示すのは、緑色の銃器。

『バツシャー・ファイバ〜〜!!』

タツロットが左腕から外れ、代わりにバツシャーマグナムの銃口部分にジョイントする。

「カチャッ!!」

アームズコネクターから魔皇力が注入され、バツシャーマグナムをファイバーモードへ移行する。

トルネードフィンが、通常とは比にならないレベルで回転し、大気中の水分を限界まで吸い込んでいく。

「喰らえッ!!」

バアンッ!!

バツシャーアクアトルネードが水球だったのに対し、今回射出口から放たれた『エンペラーアクアトルネード』は、水蒸気に近い細かな水が螺旋を描く姿は、渦潮のような形状だ。

だが、魔皇力が含まれていようと所詮は水。

イルヤンカの脇腹に勢いよく噴射されたそれは、頑丈な外皮に弾かれ、パラパラと地上に落ちていく。

だが、それでいい。

“頑丈だろうがなんだろうが、その皮膚が上皮組織と結合組織から成り、身体の内側にまで続いてさえいれば”、この技からは逃れられない。

「爆ぜな」

キバEFが指を鳴らすと、突如としてイルヤンカの腹部から水の粒が飛び散った。太陽光を反射し、美しく輝く様子とは裏腹に、イルヤンカの悲鳴は更に激しさを増す。

それはそうだ。

（何せ、“内側から体内器官をブツ壊されてんだからなあ”）

通常のバツシャーアクアトルネードは魔皇力を含んだ水球により、

外側から敵の細胞結合を弛緩させるもの。

対してエンペラーアクアトルネードは、“細かな水の粒一つ一つ”に魔皇力が込められており、例え堅い外皮であろうとも、僅かな隙間から体内に入り込み、内側の細胞結合を弛緩させる技だ。

水の一発一発が細かい粒の為、粉塵の盾である『幕瘴壁』では、本体に届くより先に塵へと付着し、阻まれてしまう技だが（ディケイドCFとシャナに隙を作って貰ったのもこの為だ）、バツシャーアクアトルネードよりも多人数戦に優れ、水球では覆い切れない巨大な敵にも効果がある。

あれなら防御用の幕瘴壁は、しばらく貼れまい。

「ふう……さすがに、しんどいかな」

バツシャーマグナムを下ろし、キバEFはクウガゴウラムの背に膝をつく。

周囲にはディケイドCF、シャナ、キバーラに抱えられた悠二らが集う。

「王サマとしちゃ、及第点ってとこだな」

「……はは、お前のジャッジは厳しいな。門矢」

キバEFの声には、疲労の色が濃い。  
当然だ。

エンペラーフォームに戻れたとはいえ、ここに来るまでの奏夜は連戦に次ぐ連戦。

正直な話、いつ限界が来ても可笑しくない状態のまま、この戦いに望んでいたのだから。

「先生、やっぱり今まで無理して……」

「奏夜、もう離脱した方がいい。あとは私達で何とかできると思っ  
気遣わし気な悠二とシャナの言葉に、キバEFは自分のボロボロな  
身体を省みる。

レティシアとの決着はつけねばならないが、しかしシャナやデ  
イケイドの足手まといになるのでは話にならない。

「……そうだな。確かにこのままじゃ、お前らの邪魔になっちまっ  
か」

「いや、そうでもないかも知れないぜ？」

だが、ディケイドCFは平然と現実を鑑みずに告げる。

「レティシアと決着をつけるべきなのはお前だ。あれだけの啖呵切つて逃げるなよ」

「ちょっと土くん、それはいくらなんでも無茶苦茶ですよ……」

「夏海ちゃんの言う通りだぞ！ レティシアだけならまだしも、それに加えてあの竜と戦えるほど、奏夜の力はもう残ってないだろ！」

「『奏夜の力』は、だろ？」

呆れるキバーラと食ってかかるクウガゴウラムに、ディケイドCFは涼しい口調のまま、一枚のカードを取り出す。

絵柄は、ディケイドとキバが輝く光の糸で繋がれているというもの。

「なら、他の力を借りればいいだけだ」

【LINK・RIDE・KIVA!】

ディケイドライバーの音声と共に、細い光の糸のようなものが、ディケイドCFとキバEFを繋ぐ。

「わ！ 何だこりゃ!？」

ファイナルアームライドに次ぐ、ディケイドの新たな力、リンクライド。

そのカード効果は、対象のライダーと味方の間で、それぞれに掛かっている能力を共有すること。

だが、光の糸が繋ぐライダーは二人だけではない。

「何だこの光の糸は。敵意は無いようだが……」

「ああ。むしろ逆に力が湧いてくるようだ」

地上で戦っていたライジングイクサとサガは、突如として上空から

降り、自分の背中と繋がった光の糸に困惑していた。

「自在法……じゃないわね。かといって魔術でも無いわ」

「土の力だよ。君達は今、土とあのキバと能力を共有しているのさ」

トーガから聞こえるマージョリーの分析に、ディエンドが質問を加えた。

「早くその力を使ってみてくれたまえ。いい加減僕も、この屍達にはウンザリしてきたところだ」

「言われなくてもそうしてやるさ。名護、始末をつけるぞ」

「ああ、任せなさい」

未だにひしめき合っている屍のファンガイア達を真正面から見据え、ライジンググイクサとサガが並び立つ。

『ハアアア……ッ』

動作とタイミングを揃えながら、二人は両手を広げるような構えを取る。

ややあって、二人の足元に朧気な光が集束し、太陽と王冠 ライジングイクサとサガを象徴する紋章を象った。

『ハアツ！』

キバEFとの能力共有によって作られた紋章は、二人の意志に従い、荒れた大地を滑り出す。紋章は徐々に面積を広げながら、屍のファンガイア達を目映いスパークで捕縛した。

ギイイイイイイ！！

荒々しく弾ける光は、屍のファンガイア達の動きを縛り、動作を起こすことを許さない。

動かせるのは悲鳴を上げる口だけだ。

無論その状態は、四人からすれば好機以外の何物でもない。

「さっきのはソウヤの魔術……」

「なるほどなあ、力を共有するってのはこういうことか！」



「感嘆は後にしたまえ。攻撃するなら今だよ」

トীগアの反応を余所に、デイエンドは新たなカードをドライバーに挿入する。

【KAMEN・RIDE・OOO!!】

「取って置きだ。 行け!!」

トリガーが引かれると共に、幾重にも重なった影が、一人の仮面ライダーの姿を作り出す。

身体は上から赤、黄、緑を三段重ねにしたようなカラーリング。

頭部の仮面は鷹を模したタカヘッド。虎の猛々しさを示すトラアーム。圧倒的な跳躍力を秘めたバツタレッグ。

胸部には、ベルトに装填されたメダルの特性を示すオーランドサークルが刻まれている。

【タカ、トラ、バツター!!】

【タ・ト・バ!!      タトバ、タ・ト・バ!!】

同種のメダルによるコンボ発動を認識したベルトが発する奇妙な歌をバツクコーラスに、メダルの力を操る仮面ライダー、オーズが召還された。

傍らでその歌を聞いていたマージョリーはしばし沈黙し、

「……何よ、今の耳に残る歌」

「歌は気にしない。さあ、終わらせるよ」

【ATTACK・RIDE・CROSS・ATTACK!!】

召還したライダーとの同時攻撃を発動する『クロスアタック』の力  
ードを使うディエンド。

ディエンドライバーの銃口が輝き、弾丸のエネルギーが溜められて  
いく。

オーズは専用武器である大剣『メダジャリバー』に、銀色のセルメ  
ダルを三枚投入し、オースキャナーで刀身をスキャンする。

【トリプル!! スキヤニングチャージ!!】

甲高い音声と共に、メダジャリバーの刃を青白い光が覆う。

「その命、神に返しなさい！」

ライジングイクサは、イクサライザーのグリップ部分にあるライザーフエッスルを取り外し、ベルトのイクサナツクルに読み込ませる。

『  
』

法螺貝を吹き鳴らすような深みのある音色が流れ、ライジングイクサ胸部のコロナコアから、右手のイクサライザーへと、光子エネルギーが吸い込まれていく。

『ウエイクアップ』

無機質なコールと共に、サガークがウエイクアップフエッスルを奏でる。

サガはジャコーダーをベルトにインサートし、赤い魔皇力に染まったロット部分を構えた。

『木を削れ、土を練れ、岩を運べや堀を掘れ』

『築いた牙城は一級品』

『余剰分は？』

『積み木に使い！』

屠殺の即興詩が紡がれ、トーガが吐き出した火の玉の一つ一つが回り出し、サーカスの如き円環状の火の輪を作り出す。

ファンガイア勢が迫り来る攻撃に『ギツ！？』と呻くが、自らを縛る結界は一向に力を緩めない。

それに、動けたとしても、回避出来たかどうかは怪しかっただろつ。

ディエンドのシアンに煌めく光弾の嵐。

オーズの空間ごと敵を切断する『オーズバツシュ』。

ファンガイアの肉体を一瞬で破壊するライジングイクサの『ファイナルライジンググブラスト』。

鞭のように敵を刺し貫くサガの『スネーキングデスブレイク』。トーガの頭上の輪から放たれる群青に燃える火炎弾の一斉砲撃。

五人の強者達の持つ必殺の一撃が、ほぼ同時に牙を剥いたのだから。

耳を貫く衝撃音。

それぞれの武器（トーガは腕）を下げた五人の眼前に残ったのは、炎と大量のステンドグラス片。

ふう、と全員が安堵と疲労から来る溜め息を付く。

「し」苦労様」

何を思ったか、召還時間を過ぎて消えていくオーズに、労いの言葉をかけるディエンドに、

「ライダーは助け合いでしょ」

その一言だけを継げ、オーズの輪郭は霞ようにぼやけ、瞬く間に消え去った。

「やっ」

虚空から目を離し、ディエンドは上空を見上げる。

「向こうもそろそろケリがついた頃かな」

「……魔力が、少し戻った？」

リンクライドの光に繋がれながら、キバEFはゆっくりと腰を上げる。

戻った力は僅かだが、戦うには十分だ。

「下にいる太牙とも力を共有してるからな。ホラ、行くぞ」

「ああ！」

二人が手を広げると、足元にキバとディケイドの紋章が浮かび上がる。

『ハアッ！！』

平面的なそれらは空中で向きを変え、イルヤンカの巨体を双方向から挟み込む。

「くっ!？」

「オオオオツ!？」

赤とマゼンダのスパークが散り、レティシアごと対象を捕縛した。デイケイドCFはライドブツカーから、二枚のカードを取り出す。どちらもファイナルアームライドのカードだが、一枚目はポジ・キバの世界で紅渡をファイナルアームライドさせたもの。二枚目は、先程悠二づてに海東から貰ったカードだ。

「海東からの貰い物ってのが癪だが……仕方ねえ、使ってやるとするか」

しばし悩んだ末、デイケイドCFは海東から貰った方のカードを選び、左腰のデイケイドライバーに装填する。

【FINAL・ARM・RIDE・KII・KII・KII・KIVA!  
!】

「奏夜、ちょっとくすぐりたいぞ」

「は?」

仮面の下で口を開くキバEFを無視し、ディケイドCFは先程のクウガの時と同じように、彼の背中へ手を突き入れる。

「のわっ!?!」

背中から金と赤色の翼が現れ、足の部分が折り畳まれるように収納。そのままキバEFは更に様相を変えていく。

見た目は、巨大なキバット。

だがその姿の至る所には、キバEFの鎧の名残が見られ、おでこには巨大なインペリアルスロット、足に当たる部分には銃のグリップ。前方には、タツロットの頭部が融合しており、開いた口からは、ヘルズゲートの甲冑を模した矢が覗いている。

キバEF、もう一つのファイナルアームライド      エンペラーキバ  
ボウガンだ。

「奏夜が、武器に?」

「ちょ、ちょっと土さん!      これ中の先生は大丈夫なんですか!?!」



「心配すんな。本人はちょっとくすぐったいだけだ」

驚愕を覚えつつ、視覚的にかなり惨い変型を遂げた奏夜の身を案じるシヤナと悠二。

デイケイドCFは素知らぬ様子でグリップを握る。

すると、エンペラーキバボウガンから、かなり動揺したキバEFの声が聞こえてきた。

「オイ、ちょっとどうなってんだこれ！？ 視界が明らかにお

かしいし、さっき足があらぬ方向に曲がったぞ！？」

「喧しい。痛みは無いんだから我慢しろ。ユウスケ、後ろから支えてくれ。このバイクの上じゃ、反動でぶっ飛んじまう」

「よっしやー！」

乗り手のいなくなったクウガゴウラムがデイケイドCFの背に回り、角で挟むようにして彼を支える。狙撃体制が整い、デイケイドCFはエンペラーキバボウガンの照準をイルヤンカに合わせていく。

「シヤナ、まだ炎は出せるか？」

「？ ええ、余力はまだ残ってるけど」

「十分だ。お前もグリップを持つてみる」

デイケイドCFに促され、シャナは怪訝そうにしながらも、エンペラーキバボウガンのグリップを握る。

その途端、エンペラーキバボウガンの金色だった外装が、紅蓮の炎に包まれ、目も覚めるような真紅に染まる。

「！！ これって、私の力を……」

「そうだ。使い手の力を吸収し、己のパワーに加える。これがこのボウガンの いや、俺達のカだ！」

キバの鎧は、ガルル達アームズモンスターの力を反映し、フォームチェンジを行う。

故に、このエンペラーキバボウガンにも、その特性は引き継がれているのだ。

煌めく紅蓮はまさに、シャナの力を吸収した証であり、その色に紛れ、デイケイドCFのマゼンダのエネルギーと、キバEF本人の持つ真紅の魔皇力も視認出来る。

「キバツて！！」

「テンション、フォルティッシモ!!!」

バキインー!!

キバットとタツロットの声が重なり、エンペラーキバボウガンの先端にあるヘルズゲートが開放される。

弓が引き絞られていき、弾け飛んだ鎖の下には、紅蓮、マゼンダ、真紅の光を交互に放つ、三叉の矢。

『はああっ!!!』

トリガーが引かれ、緊張していた弓が戻ると同時に、先端から目映い光の矢が放たれた。

四方八方に飛び散っていく無数の閃光は、マゼンダ、紅蓮、真紅の軌跡を描きながら、イルヤンカの巨体を射抜いていく。

百を優に超える、破壊の流星群。

連なった刺突音を奏でる閃光の勢いに負け、イルヤンカの巨体は急速に高度を下げていく。

「オオオオオオ

ッ！！」

広がった翼をも閃光に貫かれ、イルヤンカは回避の術を失っていた。強固だった筈の外皮も次々に剥がれ落ち、矢によるダメージを追っていく。

強大な“王”は遂に大空を離れ、叩き落とされた大地には、王の威光を示すキバの紋章が、巨大なクレーターとして刻まれる。完全敗北を喫したイルヤンカは、自らを葬った者達を瞳に移すと、その肉体は砂のように崩れ落ち、元の屍へと帰っていった。

(ここまで、ですか)

イルヤンカの残滓とも言える霞が、風に乗って流れて行く。

閃光に貫かれ、歪にひび割れたステンドグラスの肌を見ながら、口ブスターファンガイア レティシアは静かに、自分自身の幕引きを受け入れていた。

あの矢に射抜かれた傷から、魔皇力が流出していくのが分かる。身体は地に吸い付いているかのように重く、寄りかかっている木々

には、ファンガイアの青い血が滲む。

腕にあった筈の『死者の書』も無い。

イルヤンカと共に落下した際に紛失したか、それとも跡形も無く砕けたのか。

今となつては、もはや気にすべくも無いが……。

「……カロンには、謝らないといけませんね」

皮肉めいた笑みを浮かべる余裕も、終わりを迎える今だからこそ湧いてくるものだった。

……そう。やっと終わる。

サミュエルとジェフを失った時から始まった、この長い旅路が。

「よお」

状況に似つかわしくない軽い声。

顔を上げると、輝かしい黄金の光が目飛び込んでくる。

その後ろには、彼の仲間の姿もあった。

「あら、ごきげんよう」

そう返したものの、機嫌はまったくよろしくない。  
今にも意識が飛びかねないのだ。

余裕ぶつてはいるが、あれだけ連戦を積み重ねていたキバEFも、致命傷は負っていないにしろ似たような容態だろう。肩で息をし、足元は目に見えてフラついている。

「……何だよ、逝っちまうのか」

「ええ。そのようです」

キバEFはボロボロになった自分を仮面に映したかと思うと、こちら目掛けて何かを放り投げる。  
いつの間にか手から離れていた愛剣、クレイモアが土塊を巻き上げ、近くの地面に突き刺さった。

「俺達はお互いに、もうズタボロだ」

行動の意図が読めないままに、キバEFは告げる。

「最初の戦いも、二回目の戦いも、俺は病み上がりだったからな。今回も門矢達の力を借りた以上、フェアとは言い難い」

「……………」

「けど今は」

二人共、満身創痍。

背後で見守るディケイド達にもシャナ達にも、手は出さないように言っている。

「レティシア、最後の勝負だ。俺とお前のケリをつけようぜ」

疲労を感じさせない気迫を纏うキバEF。

「……………」

レティシアもまた口元に笑みを蓄えながら、クレイモアを杖代わりに立ち上がる。

「良いですね。貴方を倒して散るといふ幕引きも、悪くない」

「悪いが、俺は死ぬつもりは無えぞ。お前は俺の超カッコいい勝利ポーズを見ながら散るんだ」

冗談めかしい態度を取るキバEF。  
だがレティシアには、彼の本意が見えていた。

キバEFの理想、レティシアの理想。どちらが正しいのかは、永遠に答えの無い問題。  
求められるのは、正誤の枠組みに囚われず、理想を追い続ける強い意志。

1対1で対等な条件の元、互いの信念をぶつけ合うキバEFとの勝負。  
それは正に、レティシアが最後の一瞬まで理想を貫いた証に他ならない。

(まったく貴方という人は……つくづく甘い)



こんな勝負、私をただの負け犬にしないための手向け花じゃないか。どこまでも甘く、優しさに溢れた王に向けた笑みは、敬服か、それとも嘲りか。レティシアが握るクレイモアが、今までとは比べ物にならないほど濃密で、凄まじい量の魔皇力に包まれる。

「……凄えな」

文字通り、死力を尽くした最後の一刀。

彼女が奏でる心の音楽は、死にもまるで臆さず、凜とした力強さに満ちている。

（全力で行こう）

後のことなんざ知るか。

今、レティシアの音楽に応えられるだけの力があればいい。

敬意と共に、キバEFはタツロツトのホーントリガーを引き、インペリアルスロットを回転させる。

出た絵柄は、大きく広がった真紅の両翼。

『WAKE・UP・FEVER』!!』

タツロットのコールに呼応し、足裏のルシファーズナイフに真紅の魔皇力が集束していく。

腕を交差させるキバEFの周囲は、溢れ出した力が大気を震わせていた。

渾身の力を持って望む真剣勝負。

デイケイドCF達にせよ、シャナ達にせよ、今はキバEFの勝利を信じることにしか出来なかった。

視線を交錯させ、二人はほぼ同時に動く。

キバEFは上空へと飛び上がり、レティシアが踏み込みから一気に距離を詰め

『はあああああ　　ッ!!』

レティシアの青白い魔皇力で生成された巨大なエネルギーブレードと、真紅の翼を生やした両足から繰り出すキバEFの『エンペラームーンブレイク』が、真つ向から衝突した。

轟音と、剣の切っ先と両足の境目に起こった力の激突が、周囲にいた全員の視界と聴覚を奪う。

見えるのは、輝く真紅と蒼の閃光のみ。

光が止んだ頃には既に、キバEFとレティシアは地に足を付いていた。互いに微動だにせず、まるでそこだけ時間が止まっているかのよう。

どちらに軍配が上がったか判断しかねている一同だったが……。

「……………」

苦渋に満ちた呻きと共に、キバEFの身体が僅かに揺れた。まさか。という思いが全員の胸中を駆け抜ける。

「……お見事」

ほんの僅かに唇を動かし、レティシアは地に崩れ落ちる。

エンペラームーンブレイクのダメージからか、倒れた瞬間にレティシアの身体は砕け、元の間態に戻っていた。

手を離れたクレイモアが下に突き刺さり、身体の一部だったステンドグラスが散らばる。

キバEFは紙一重で致命傷を避けた身体を引きずりながら、レティシアの傍に歩み寄る。仰向けのまま、自分を見上げてくるレティシアに、キバEFは静かに告げる。

「……謝んねえぞ」

「ええ。それでいいのです」

謝れば、すべてが無駄になる。

貫くべき自分の覚悟も、結果的に自分が砕いたレティシアの覚悟も。

「まあ……、貴女が謝ろうと……謝るまいと……、私は自分の人生を悔やむつもりは、ありませんよ」

一字一句を紡ぐ間にも、レティシアの身体は崩れていく。だが、彼女にとってそれはさして重要ではないようだった。ただぼつり、ぼつりと自分の心情を吐露していく。

「私の人生は全部、私が選んで……この結末を迎えた。私は、何も後悔しません……。きっと何度選択の岐路に立たされようとも……同じ道を行くでしょう……」

「……シヤナも言ってたが、本当に馬鹿だな。アンタ」

「ふふっ……貴方も、でしょう?」

その言い草に反論する気は 何故か起きなかった。

「おや そろそろ、時間、です、ね……」

砕け、身体から離れた右腕を眼に収めながら、レティシアは僅かに首をもたげた。

「転生の輪廻の先で……貴方の理想が　作る景色を、見極めさせて貰いますよ……」

「ああ、言われなくても見せてやるよ。アンタが真に望んでた世界をな」

迷いを感じさせない言葉に、レティシアは皮肉っぽくも満足そうにも見える表情を浮かべた。

「……ああ」

朦朧とする意識の中で、彼女はおもむろに虚空へと手を伸ばした。まるで、そこにいない誰かの手を取ろうとしているかのようだ。

蒼い瞳からは零れ落ちたのは、一滴の涙。  
震える声で、レティシアは唇を動かした。

「……やっと、一緒にいられるね。サミュエル、ジェフ……」

暖かな過去を取り戻す為、必死に運命と戦い抜いた女性。  
愛した者の名前を最後の言葉に、レティシアは命という名の音楽に  
幕を引いた。

砕け散った身体から浮かび上がったライフエネルギーは、雲一つない  
空に溶けていく。

舞い上がっていくライフエナジーをやるせない気持ちで見送り、そ  
のまま所在なさに佇んでいたキバEFの肩を、誰かが叩く。  
振り向けばそこにはデイケイドとシャナ。  
更にその後ろには、自分を支えてくれた仲間達。

「終わったな」

「お疲れ様、奏夜」

「……おう」

二人の労いを素直に受け取り、己の信念を巡る長い戦いは、遂に終焉を迎えた。

「行くんだな」

「ああ。この世界で、俺達がやるべきことは果たした」

数日後。レティシアの弔いを済ませた一同は、光写真館の前に集まっていた。

見送りの席に現れたのは奏夜、シャナ、悠二の三人で、デイケイド一行の面子は土、ユウスケの二人だけである。

「土、夏海や海東は？」

二人を探すシャナだったが、彼は姿を見せてはいない。



「あいつなら、写真館の中でふてくされてる。魔皇竜を手放した拳げ句、この世界じゃ何の宝も手には入らなかつたからな。夏みかんは彩香と爺さんと一緒に、そのお守りだ」

いい気味だ、と言わんばかりに意地悪く顔を歪める土。

ユウスケは「あはは……」と苦笑いを浮かべるしかなかった。

一方の奏夜はと言うと、

「それならちようど良かった。門矢、こいつを海東に渡してくれ」

言つて、奏夜が土に押し付けられ形で手渡したのは、粗末な造りの湯のみ。

「なんだこりゃ、湯のみか？」

「ああ。かのわび茶を大成したとされる偉人、千利休が障害使つたという幻の湯のみだ」

「……先生、湯のみの底に文字を修正した跡があるんですけど。これ寿司屋の湯のみの改造品じゃ……」

「何を言うか悠二。別にタツロツトを返して貰っても俺のムカムカは消えないのでせうかくだからちよつと仕返しをしようとかは全然

思っていないぞ」

早口でまくし立てる奏夜。

どうやら悠二の考えは正しかったようだ。

「てなわけで、忘れずに渡してくれよな」

「……フツ。任せとけ。必ず渡してやる」

完全に利害が一致し、いたずらっ子のような笑みまでシンクロする  
士と奏夜。

その他三名の心境も「本当にいい性格してるよ」で統一されていた  
のは余談である。

「けど、何から何まで世話になっちまったな。今回の一件、お前ら  
がいてくれて本当に助かった」

「気にすんなって。それが俺達の使命なんだからさ」

ドンと胸を張るユウスケ 此度、自分が立ち上がるキツカケをく  
れた青年に、奏夜は徐に手を差し出す。

「なら、また連れて行ってくれるか？ 俺の本当に行きたい所ま  
で」

「 ああ、勿論さ！」

例え異なる世界を生きる人間同士でも、それが友となることの妨げにはならない。

奏夜とユウスケの間で交わされた固い握手が、その証拠だった。

「じゃあ、シヤナちゃんも悠二くんも元気だね」

「はい！ 色々、ありがとうございました！」

「土も、油断して怪我しないようにね」

「ふん、俺様の心配するなんざ百年早えよ。お前の方こそ、せいぜいフレームヘイズの使命とやらを全うしろよ」

ぴんつ、とシヤナのおでこを弾き、土はもう一度奏夜に歩み寄る。額を押さえるシヤナの抗議を無視しながら、土は怪訝そうにする奏夜の耳元で、小さく呟く。

「負けるなよ、奏夜。“お前の運命”に」

「……ああ」

その言葉の真意を読み取った奏夜が短く答え、士は近付けていた顔を離れた。

一連の動作に気付いたシャナが首を傾げ、

「奏夜、どうかした？」

「いや、なーんも」

「嘘。何か隠してる」

「隠してねえって。俺が正直者なのは、お前が悠二を好きってことと同じくらいに周知の事実」

言い終わるか言い終わらない内に、顔を紅潮させたシャナの上段回し蹴りが、奏夜の首筋にヒットした。

「がっ！！ お前、俺一応ケガ人だぞ！？」

「うるさいうるさいうるさーい！！」

痛みに悶えるよりも早く、額に怒りマークを刻む奏夜が反撃を繰り出し、二人の間で子供の喧嘩が始まる。

「ちよっ、先生もシヤナも落ち着いて！ 端から見ると凄くみっともないから！」

止めに入る悠二を含んだ三人のやり取りに、ユウスケは困ったように頬を掻いて、

「喧嘩するほど仲が良いって言うけど……」

「あいつらほど、それが似合う連中はいないな」

言いながらも、土はどこか楽しそうしながら、首に下げたカメラのフレームを三人に向け、シャッターを下ろした。

「」  
「」

光写真館。

テーブルにつきながら、鼻歌混じりに湯飲みを眺めている海東大樹。どうやら結局、土づてに奏夜の嘘情報を信じ込まされたようだ。

(……すっげー嬉しそう)

(カブトの世界の時も思いましたけど、海東さんって、案外ピュアですよ……)

(アホだね)

ユウスケ、夏海、彩香が複雑そうに海東を見る中、土だけは手元にある写真を見つめていた。

そこには、じゃれあうように喧嘩する奏夜とシャナ、焦りながらも二人を止めようとする悠二の姿が映っている。

「おお、土くんも随分腕を上げたねえ。この写真、喧嘩しているように見えて、彼らの仲の良さが伝わってくるよ」

「だろ？」

栄次郎の賞賛を受けながら、士はその写真をアルバムに収め、今までのライダー世界と同じく、その姿を自分の旅路として記録する。

「奏夜達、きつとこれからも大丈夫だよな」

ユウスケがアルバムを覗き込みながら問う。

「ああ、あいつらなら、どんな運命も乗り越えられる。

さて、そろそろ俺達も行くとするか！」

立ち上がった士は、そのまま撮影室奥の鎖を引っ張った。

ガララララッ！

背景ロールが回転し、新たな世界の絵が降りてくる。

「この絵は……」

描かれた絵には、赤、青、黄、紫に塗り分けられた四つの絵本。それぞれの題名は、桃太郎、浦島太郎、金太郎、龍の子太郎。

果たして、この世界は ？

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD!

「諸君、期末テストが近い！」

「勉強会？」

「脳が疲れた時にはこのイクササイズだ！」

「名護と恵は、どんな風にお互いを好きになったの？」

「いけ好かねえ女だな」

「“ミスレス”破壊による『零時迷子』の無作為転移であります」

【第二十六話・グラーヴェ/枯木寒巖の給仕】



WAKE・UP！  
紅蓮の鎖を解き放て！

## 断章・それぞれの思惑

「……………」

紅邸。

物憂げな表情で自身の手を見つめる紅奏夜。  
傍らの机には、キバットバット三世とタツロットが止まっているが、  
こちらもあり顔色は優れていない。

「……………奏夜」

「ああ、分かっているよ。あのコンディションでエンペラーフォーム  
になれば、こうなるってことは分かった」

「すみません奏夜さん、ワタシが戻ってきてしまったから……………」

うなだれるタツロット。

奏夜は彼を安心させるように、普段と変わらぬ柔らかかな表情を見せる。

「何言っただよタツロット。お前が戻ってきてくれて、俺は本当

に嬉しかったぜ。

エンペラーフォームになるって言ったのは俺なんだし、タツロットが気にすることじゃねえよ」

「けどよ、奏夜。タツちゃんのことはいいとしても、エンペラーフォームの多用を控えた方がいいのは確かだぜ。

このままエンペラーフォームへの変身が続けたら、お前は……」

「いや、エンペラーフォームはこれからの戦いに必要な力だ。ファングイア相手にしろ“徒”にしろ、四年前と同格……もしくはそれ以上の力を持つ連中がうようよ出てきてる。

そんな中で、我が身可愛さに変身を躊躇うつもりはない」

「けどよお……」

「それに、まだ“そう”なると決まった訳じゃない。母さんの話じゃ、兆候が見え始めたとしても、確率は五分らしいしな」

「だからこそ」と奏夜はキバットとタツロットを真っ正面から見つめる。

「キバットにタツロット。お前らは俺の“時間”を知る数少ない存在だ。

俺が変身すると言った時には、必ず変身させる。お前らはその傍ら

で、俺を支え続けてくれ」

『……………』

奏夜の言葉と瞳には、何があっても曲がらない芯が打ち立てられているように思えた。

レテイシアとの戦いが、彼の中の信念を更に強くしたのだろうか……。

果たしてそれは、本当に良いことだったのだろうか？

疑念と不安を入り混ぜながらも、主の力強い姿に平伏したのか、キバットとタツロットは恭しく頭を下げる。

『仰せのままに。我らが王よ』

満足げに二人の答えを聞き、奏夜は木漏れ日の差し込む窓を見やる。

「急がないとな……。俺”が俺を殺す前に」

呟く奏夜の右手は、ひび割れたステンドグラスに覆われ、窓から差し込む光を鈍く跳ね返していた。

「スリーカード」

「わん、ぺあ」

「フルハウス。また僕の勝ち」

したり顔をするラモンに、次狼は悔しさから舌打ちし、力は「のお〜」と頭を抱えている。  
キャッスルドランの中で、ポーカーに興じるアームズモンスター達。つい数時間前まで、レティシアとの戦いを繰り返していたとは思えない朗らかっぷりだった。

しかし、嵐は唐突に現れるものである。

「貴方達は相変わらず楽しそうね」

「!?!」

不意を突く声に、臨戦態勢を取る三人。

しかし、声の主を見た途端、敵意は驚愕にすり替わる。

『クイーン……!』

自分達のゲーム場であるホールの中央には、誰であろう、奏夜の母にしてファンガイアの元クイーン、真夜が悠然と立っていた。

「お久しぶりね。四年前の結婚式で会って以来かしら？」

「……ああ、久しぶりだな、クイーン。今日は一体どうした？」

「そうそう。キャッスルドランに顔を見せるなんて珍しいじゃん」

「とりあえず、おちゃとおかし」

気を落ち着かせる為か、椅子に腰掛けた真夜に、紅茶とケーキを差し出す力。

「ありがとう」と微笑み、紅茶を一口啜る真夜だったが、三人はその優美な姿よりも、彼女がここに来た理由が一番気になっていた。

クイーンの力を剥奪され、山奥に移り住んでから、彼女は表舞台に出ることを極端に避けるようになっていた。

危険、ということもあるが、それは彼女自身の戒めにも近い。故に、彼女が洞窟から外に出るのは、余程の事なのだ。

「今日来たのは、貴方達に頼み事ができたからよ」

「頼み事だと？」

「ええ、“これ”をキャツスルドランに封印しておいて貰いたいの」

真夜はフード袖から包みを取り出し、巻かれていた紐を解く。その中身は、三人の予想の斜め上に行く代物だった。

「これは……！！」

「あのカロソって“徒”が持ってた手甲じゃないか！」

「ししゃの、しょ」

レティシアが最後の最後まで無くしたと考えていた宝具『死者の書』。  
それが今、三人の目の前で鈍い輝きを放っていた。

「奏夜達とレティシア・リネロが戦った森の近くで見付けたわ。この宝具をその時が来るまで、誰にも言わずに封印しておいて」

「『その時』だと？」

反芻する次狼に、真夜が頷く。

「そう。過去と現在の扉が、再び開かれるその時まで」



「どうだ。世界の破壊者の様子は」

「問題ありません、無事に『BLAZING・BLOODの世界』を通過したようです」

周囲を摩天楼に囲まれた小さな噴水広場。

壮観な景色から切り取られたかのようなその姿は、どことなく寂しさを感じさせる。

本来は星が支配している筈の夜空には、高層ビルが鏡合わせの如く立ち並ぶという非現実的な世界で、二人の青年が言葉を交わしていた。

「『BLAZING・BLOODの世界』への影響も殆どありません。我々が出向くこともないでしょう」

「それは僥倖だ。『黄金の不死鳥の世界』の連中が来た時のようになっっては適わんからな」

鋭い風貌に、サングラスと黒ずくめのスーツを身につけた青年が、僅かにその表情を緩める。

「ただでさえ今は、『オーズの世界』が誕生したばかりで、世界の理が不安定な時期だ。ディケイドが鳴滝を追っている以上、余計な問題は少ない方がいい」

「ええ。しかし、危惧すべき問題が消えたわけではありません。…何より今回の一件で、紅奏夜がエンペラーフォームを取り戻してしまいました」

白いセーターにマフラーを巻いた青年が物憂げに目を伏せ、黒スーツの青年もまた、再び顔を曇らせる。

「……紅奏夜。お前に最も近いキバであり、お前の『オリジナルの『残像』か」

「このまま行けば、僕があの世界に出行く日もそう遠くはないでしょう。なるべく、そうならなければ良いのですがね。あなたはどう思いますか、剣崎さん」

「……俺も最悪の事態は避けたいが、難しいところだろうな」

黒スーツの青年、剣崎一真は、先ほどまで高層ビルが立ち並んでいた夜空を見上げる。

いつの間にか空には、無数の惑星が瞬いていた。

「あのキバが いや、『BLAZING・BLOODの世界』が、オリジナルの世界の残像である限りな」

ヨーロッパのとある国で交わされた会話。

「うーん、さすがに7月ともなると、欧州も暑くなるなあ……。ま、こっちはカラッとした暑さやし、向こうのむわっとした暑さよりはマシやけど」

「俺様にとつちゃあ、どつちの暑さも地獄だぜえ……。季節はクールな冬にかあぎる」

「ああ。お前にとつちゃそうやろな……。あーあ、せめて秋くらいまでには日本に帰りたいでえ」

「だがもうじき、仕事は片付くんだろあ？」

「うーん、もうじきっちゅうても八割方ってトコやけどな。ファンガイアに加えて最近は、名護さんから聞いた『トモガラ』っちゅうワケの分からんヤツらもおるし」

「徒か……。聞くところによっちゃあ、ヤツらはファンガイアの一派と手を組んでるらしいが、一体何を企んでいるんだろおな？」

「まだそっちは噂話の領域やしな、俺にも推測は立たん。せやけどな、噂話にかまけとつてもあかんぞ。」

俺達は、日本で踏ん張つとる奏夜達の分まで、俺達にしかでけんことをするんや」

「……フツ、そおれもそうだな」

「分かればよし。さ、休憩は終わりや。また頼むで、相棒」

「ああ、任せとけ。では行こうか！ 華麗に激しく!!」

それぞれの思惑は絡み合い、世界の歴史に新たな1ページを刻

む。

## 断章・それぞれの思惑（後書き）

またしても長くなってしまいました。ダイケイドAMF編、これにて終了です！

・原作未使用のバツシャーフィーバー。モデル的にはNARUTOのデイダラが使ったC4カルラです。

バツシャーアクアトルネードはホーミングの能力がある分、多人数には不向きなのに対し、こちらは単体にも複数にも使える万能技。しかし、一発一発が小さい為、巨大な遮蔽物があると敵には届かないという弱点があります。

・オーーーーーズ！！（鴻上さん風）  
すいません、どうしても彼は出したかったのです；

・リンクライドは『仮面ライダーディケイド After the Movie War』のオリジナルカード。エンペラーキバボウガンはこちらのオリジナルです。ちなみに初期デザインは、飛翔型のボウガンだったり。

・レティシアの最後はキバEFとの一騎打ちと決めていました。強い信念のぶつかり合いは、書いていてスッキリしました。

・断章には今後の伏線をかなりつき込んであります。奏夜の時間、真夜の行動、剣崎の語る『オリジナルの残像』、そして最後に登場した二人 誰だか分かったでしょうか？

これにてディケイドAMF編は終わりですが、彼らの旅は『仮面ライダーディケイド After the Movie War』本編で続いて行きます!!

此度のコラボ企画を承諾して戴いた神崎先生、本当にありがとうございます!!

先生のように士達を上手く動かせず、彼らの登場頻度に差が出来てしまったことをお詫びしておきます(特に夏海と彩香)。

これからも、先生の描く生き生きとした士達の活躍を楽しみにしています(^o^)

今回はかなりのロングパスになりましたが、ドラゴンナイト編のラストです。

長らく放置していてすみません。26話登場のあの人の前日譚という扱いだったので、このタイミングでラストを持って来たかったです……(´ー`)

では、また次回!!

外伝・ミラージュノ異界の龍騎士と舞踏姫・下

【SWORD・VENT】

【SWORD・VENT】

ドラグバイザーとウイングバイザーに、カードをベントイン。

ドラゴンナイトとウイングナイトはそれぞれ、ドラグセイバーとウイングランサーを呼び出し、アビスに斬りかかる。

「ハッ、時代が違うんだよ時代が!!」

【SWORD・VENT】

同じくアビスは、アビスバイザーにカードを入れ、アビスセイバーを呼び出し、二人の剣と槍を受け止める。

「うわっ!?!」

「ちっ!?!」



二人の攻撃は、アビスの刃で完全に押し返された。

間髪入れず、アビスは新たなアドベントカードを装填する。

【ATTACK・VENT】

と、二人の背後に二体のサメ型モンスター、アビスハンマーとアビスラッシャーが現れる。

「なっ、二体の契約モンスターだって!？」

「キット、気を抜くな!！」

アビスハンマーを押さえるウィングナイトが叫んだ。

驚愕に身を強張らせたキットに、アビスラッシャーが襲いかかる。

「キット!！」

「うわっ!?!」

ヴィルヘルミナがキットの首目掛けて、リボンを伸ばす。

「ぐえっ!?!」

蛙を踏み潰したような声を漏らし、ドラゴンナイトはアビスラッシュの刃から逃れた。

「敵に隙を見せてはならないのであります」

「油断大敵」

「ガ、ガルメルさん……まず首のリボンをほどいでください……」

地面をタップするドラゴンナイトからリボンを外し、涼しい顔のまま、ヴィルヘルミナはアビスを睨む。

「仮面ライダーの力、予想以上でありますな」

「ああ、だがアビスはかなり特別な部類だ。アドベント・マスターが、持てる技術全てを注ぎ込んで作られたライダーだからな」

「そのとおり、ベントラのライダーで、俺に勝てるヤツはいないってハナシだ！」

力を誇示するが如く、両手を広げるアビス。

「ならば、フレイムヘイズたる私が終わらせるのであります。……神器“ペルソナ”を」

「承知」

ティアマトーの声と共に、ヘッドドレスが無数の糸となって解け、ライダーのものとは違う、狐を模した仮面に変わる。

更に仮面の縁から桜色の火の粉を弾けさせながら、白く輝くりボンが噴き出された。

「不備なし」

「完了」

戦支度を済ませ、ヴィルヘルミナは、仮面から伸びる鬘のようなり

ボンで浮かび上がる。

アビスが僅かに、余裕の雰囲気消した。

いかにアビスの力があるとはいえ、相手は“戦技無双の舞踏姫”だ。

「へっ、そちらさんも本気ってわけかい」

「あなたとの追いかけてこにも、いい加減嫌気が差しているのではありません」

「つれないねえ。ま、いい。飽きてきたのはこっちも同じだしなあ」

アビスに付き添うように、アビスラッシャーとアビスハンマーが並び立つ。

「キット、レン。“霞の迷彩”は私が」

「えっ？ けど……」

「あいつは一人でどうこうなる相手じゃない。全員でかかるべきじゃないのか」

「危慎無用」

「あなた達はあの二体の相手を頼むのであります」

ドラゴンナイトとウイングナイトはやや承諾を渋ったが、

「……わかった、けど無理しないでくれよ」

「ライダーの力はあんなものじゃない。手こずるなら、すぐに力を貸すぞ」

「わかったのであります」

言いつつも、ヴィルヘルミナは助けを呼ぶことはないと思っていた。

(あくまでもこれは、“紅世”の問題であります)

キットやレンを、死の危険に巻き込まずに済むのなら、それに越したことはないのだ。

「さあ、始めるとしようか！ アドベント空間に送ってやるぜ！」

「ふん、お前なんかに負けるか！」

アビスの煽りに、ドラゴンナイトが吠える。

それぞれの思惑を胸に、戦いは再び始まった。

「だあっ！」

ドラゴンナイトの剣閃が、アビスハンマーを薙いだ。  
火花が散り、アビスハンマーが後退するが、ドラゴンナイトが追撃を掛けようとする。すぐさまアビスラッシャーが躍り出る。

「わあっ！？」

「気を抜くな！」

ウイングナイトが割り込み、ウイングランサーでアビスラッシャーの剣を受け止める。

「う、ごめんレン」

「契約モンスターだからといって侮るな。こいつらだけでも十分強力だ。」

「フンッ！」

ウイングナイトはアビスラッシャーを蹴飛ばす。

立ち上がったドラゴンナイトは、すぐ先で戦うヴィルヘルミナを見る。

この戦いが始まった矢先、アビスハンマーとアビスラッシャーが二人の行く手を塞ぎ、ヴィルヘルミナとドラゴンナイト達を分断した。

ヴィルヘルミナはああいったが、やはりキットの危機感は拭えない。

相手は自分と同じ仮面ライダーだ。

今まで戦ったインサイザー、キャモ、トラスト、ストライク。

彼らとの戦いで、キットは十二分にその恐ろしさを知っていた。

「大丈夫かな、カルメルさん」

「そう思うなら、早くにこいつらを片付けるぞ」

「……………だね」

再びそれぞれの武器を振り下ろすドラゴンナイトとウィングナイト。

アビスハンマーとアビスラッシャーもまた、難なくそれを受け止め、一進一退の攻防だ。

「向こうも激しく盛り上がってんなあ！ こっちもテンション上げてこっぜえ！」

「あなたの感情に合わせる気はないのであります」



ヴィルヘルミナは、アビスの刃を回避し、電柱にリボンを巻きつけ、その上に飛び乗った。

ちらりと、ドラゴンナイト達の戦いを目の端に収める。

「キット達も自分達の戦いで手一杯のようでありますな」

「接戦」

応援はしばらく期待出来ない……が、それはそれで都合がいい。

接戦とはいえ、ドラゴンナイトとウィングナイトの実力なら、時間をかければあのモンスター程度、必ず勝てる。

そうなれば、こちらが助ける必要もないし、こちらの戦いに二人を巻き込むこともないのだから。

「余所見たあ余裕だな！」

【STRIKE・VENT】

ヴィルヘルミナが少し目を離れた隙に、アビスは新たなカードをベントイン。

サメを模した小手型の砲門『アビスクロー』が、アビスの右手に装着される。

「注視！！」

「！！」

ティアマトーの警告に間一髪で反応し、ヴィルヘルミナはリボンを伸ばし、電柱を離れる。

アビスクローから放たれた水流が、先ほどまで彼女が乗っていた柱を粉々に打ち砕いた。

「注意散漫」

「すまないのであります」

飛び移った屋根から、未だ自分を狙うアビスを睨む。

（今召還した武器は、攻撃範囲の広い遠距離型の砲門……。しかし、避けられないほどではないのであります）

（接近）

(で、ありますな)

近距離で戦えば、砲門もさほど怖くはない。

接近できるかということも、彼女にとっては愚問だ。

ヴィルヘルミナのリボンは汎用性に優れた武器。

アビスクローの水流は大した威力だが、まだ直線的な方だ。

先のように、随所にリボンをアンカーの如く巻き付け、攻撃を回避するのも容易い。

「ふっ！」

息を吐き出し、地盤たる屋根を強く蹴った。

リボンを蠶のように靡かせ、ヴィルヘルミナは急速にアビスとの距離を詰めていく。

「接近戦狙いか、いい読みだ。……と書いてえところだが！」

しかし、アビスの自信は揺らがない。

「想定内の範囲内だぜ！！」

【FINAL・VENT】

アビスが最終奥義発動のカードを装填すると、アビスラッシャーとアビスハンマーが反応。

彼らは今まで戦っていたドラゴンナイト達を無視し、鏡の中に消え去っていく。

「あ、あれ？ 逃げた？」

「！ 待て、鏡から離れるキット！！」

ウィングナイトがドラゴンナイトを張り倒し、強引に回避行動を取らせる。

「痛って！！」と顔面から倒れこんだドラゴンナイトの頭上の鏡から、アビスの最終奥義『アビスダイブ』によって生まれた巨大なノコギリザメ型モンスター『アビソドン』が現れた。

「ま、また新しい契約モンスターか！？」

「いや違う、あの二体から生まれた合体モンスターだ！」

アビソドンは優雅に滑空しながら、主であるアビスの後ろに回る。

「こいつがためえに避けられるかぁ!？」

アビスクローを引く動作に合わせ、アビソドンの口が開き、並んだ鋭い牙の奥が、青白い光を帯びる。

「ハアツ!！」

ガアアアツ!!

アビソドンが吠え、先とは比べ物にならない量の水流『アビススマツシュ』が吐き出された。

「っ!？」

洪水の如きプレッシャーのそれは、ヴィルヘルミナを飲み込もうと迫ってくる。

甘かった。

ヴィルヘルミナは自分の判断を後悔する。

アビスとの距離を詰めるべく、スピードを出し過ぎていたのが仇になった。

ここまでの広範囲攻撃、リボンを伸ばしても間に合わない。

「ククツ、消えるのはテメエだったなあ！」

アビスの耳障りな高笑いが聞こえる。

舌打ちしつつ、ヴィルヘルミナはリボンを幾重にも重ね、せめても  
の防御に回す。

だが目分量でも分かる。これではアビススマッシュのパワーには及  
ばない。

「カルメルさん！」

【ATTACK・VENT】

アビソドンが離れたことでマークの外れたドラゴンナイトがカード  
を装填。

ガアアアアア！

カードに呼び寄せられ、鏡から飛び出した無双竜・ドラグレッダー  
が、アビソドンに側面から特攻をかけた。

全く警戒していなかった衝撃に、アビソドンの身体は大きく揺れる。口から放つ技であるアビススマッシュもまた、標的であるヴィルヘルミナを大きく外れ、近くのビルに風穴を空けるだけに終わった。

「んだとおっ!?!」

ドラグレッダーに気を取られたアビスの隙を逃さず、ウィングナイトもまたデッキからカードを引き抜き、

「カルメル、耳を塞げ!」

「!?!」

アビスと同じく動揺していたヴィルヘルミナは、その声で現実を引き戻される。

そのままウィングナイトの指示通り、両手で耳を覆った。

【NASTY・VENT】

クオオオオ!!

空から現れたのは、ウィングナイトの契約する蝙蝠型モンスター、

ブラックウイング。

彼の声に載せて飛ばされる超音波は、相手の感覚を容易に狂わせる。

「う、ぐううう!?!」

鼓膜を震わす不快な音に悶えるアビス。

ウイングナイトはヴィルヘルミナが無事なのを確かめ、険しい声で叫ぶ。

「これ以上、仲間を失わせはしない!!」

「ぐっ!! 凶に乗るな!」

ウイングランサーを手に、ウイングナイトがアビスと交戦する。

アビスもアビスセイバーで応戦するが、ナステイベントの影響が残っているのか、動きはやや鈍い。

「カルメルさん、大丈夫ですか!?!」

「キツト……」

ウイングナイトにアビスの相手を任せ、ヴィルヘルミナに駆け寄る



ドラゴンナイト。

「……助かったのであります」

「気にしないで下さいよ。仲間じゃないですか！」

失敗を恥じるヴィルヘルミナ。しかしドラゴンナイトはどこ吹く風で、彼女に手を差し出す。

「カルメルさん、戦いましょう。今度は僕とレンと一緒に！」

「……！」

つまらないミスから、彼らの手を煩わせたヴィルヘルミナを咎めるでもなく、ドラゴンナイトは手を差し伸べてくる。

心のどこかで、自分はまだキットとレンを蚊帳の外に置いていたのかも知れない。

ティアマトーと共に行く旅路に不安は無かった。むしろこれが正常であり、フレイムヘイズのあるべき姿だと思っている。

（けれど今は）

……『約束の二人』の悲劇は、そう昔の話ではない。  
無二の親友を失った時も、『あの男』が突然消えてしまった時も、  
昨日のことのように思い出せる。

ああ、認めよう。

自分は、もう一度同じことが起きるのを恐れていた。  
目の前から仲間が、友達が消えていくことを。

しかし、キットもレンも、自分を見捨てはしなかった。  
会って間もない自分を『仲間』と呼び、信じてくれた。

なら、こっちも信じなければならぬ。

二人は、決して死にはしないと。

「……………」

ヴィルヘルミナは仮面の下で、僅かに表情を和らげると、徐にドラ  
ゴンナイトの手を取り、立ち上がった。

「キット」

「？ はい」

「死なないで」

ドラゴンナイトは呆けたように立ち尽くしていたが、ややあって、彼も仮面の下で小さく笑う。

「カルメルさんこそ」

生き残れ。

互いに望むことは、それだけだった。

ドラゴンナイトとヴィルヘルミナは顔き合い、アビスと戦うウィングナイトに加勢する。

「レン！！」

「キット、カルメル！ 一気に叩くぞ！」

「了解であります！」

「ちいつー！！ ちよろちよろ群れやがってー！」

ドラグセイバーとウィングランサーの連撃。

動きを奪おうと狙ってくるヴィルヘルミナのリボン。

いかにスペック的に優れたアビスと言えど、数には適わない。

（仕方ねえ……）

アビスが再び指を鳴らすと、アビソドンが再び二体に分離。

呼び出されたアビスラッシャーとアビスハンマーで、ドラゴンナイト達を迎え撃たせる。

アビスの算段は、この状況ではやむを得ないものだったが、

「予想の範囲内であります」

アビスを狙っていたはずのリボンが軌道を変え、アビスラッシャーとアビスハンマーに巻き付いていく。

「なっ！？」

「へへっ、お前がそのサメを分離させるのを待ってたんだよ！」

「あの融合形態では、私でも捕縛には骨が折れるでありますからな」

数で押せば、狡猾なアビスのこと。

アビソドンの融合を解除するのは自明の理。

しかし、小柄な二体のモンスターの動きを封じるなど、ヴィルヘルミナにとって造作もない。

アビスは逆に、三人のチャンスを作ってしまったのだ。

「ギーッ！」

アビスの契約モンスター達は、ヴィルヘルミナのリボンに抗おうとするが、絡み付く力は緩まない。

「ふっ！」

ペルソナの先から伸びるリボンがしなり、繋がったアビスラッシュヤーとアビスハンマーを、地面に叩き付ける。

蜘蛛の巣状に入ったヒビからも、その打撃の重さが伺えた。

「ギ、ギ……！！！」

「捕縛」

「完了」

先端を剣山のように尖らせたリボンが突き刺さり、もがく二体を地面に縫い付けるようにして固定する。  
これで、アビスを助けるものは何もない。

「キット、レン！」

「オツケイ！」

「任せろ！」

ヴィルヘルミナが開いた突破口を無駄にはしない。  
二人はタイミングを合わせ、地面を強く蹴る。

『せいっ！！』

「がつ、は……！」

ドラゴンナイトとウィングナイト。  
息のあった二人のWキックが炸裂。アビスはふらふらと仰け反り、  
その腕からはアビスクローがずり落ちた。

「こんな、こんなことが……！」

「残念だつたな！」

「例えお前一人の力がどれほどのものでも、俺“達”は負けない！」

ドラゴンナイトとウィングナイトは、ライダーの紋章が描かれたカ  
ードを引き抜く。

【FINAL・VENT】  
【FINAL・VENT】

ガアアアアア！  
ギイイイ！

二体の雄叫びは、最終奥義発動の証。

螺旋を描きながら天を登るドラグレッダーと共に、飛び上がったド  
ラゴンナイトは右足を突き出す。

ウィングランサーを構え、アビスの頭上にジャンプしたウィングナイトの背中に、ブラックウィングが漆黒のマントとなって取り付く。

『ハアアア

ッ! !』

ドラグレッダーの炎を纏いながら放つ、ドラゴンナイトの『ドラゴンライダーキック』。  
マントを削岩機の如く回転させながら急降下する、ウィングナイトの『飛翔斬』。  
勝負を決める二人の最終奥義が、アビスへと放たれた。

「ぐ、あああああああ! ! !」

自身の装甲さえもブチ抜く衝撃に、凄まじい勢いで吹っ飛ばされるアビス。  
地面を何度かバウンドし、ようやくその動きが止まった時、彼はもはや指先一つ動かさなかった。

「がつ! あ、ありえない……!      こんな……、嘘だ、“徒”と、



仮面ライダーの力を持つ……この、俺が……!!」

壊れた蓄音機のように、現状を否定するアビス。

彼の身体に変化が起こり出したのは、それから直ぐだった。

「!!」

ヴィルヘルミナが目を剥いた。

アビスの容姿の輪郭がぼやけ、まるで砂が風で運ばれていくかのようになり粒子化を始めたのである。

「もしや、あれが……」

「……ああ、『アドベント空間』行きの扉が開いた。もうじき、あいつはベントされる」

ウィングナイトが苦々しく呟く。

本来ベントは、仮面ライダーが一定ダメージを受けた際、死に至る危険を回避する為の最終安全装置。

しかし、アドベント空間に向かう力を持つアドベントマスター・ユードロンが消えた今、ベントは『死』への片道切符に等しい。

「……………つくく、満足かよ……………フレイムヘイズに仮面ライダー！」

アビスは、憤怒と怨嗟に満ちた声で吠える。

「仮面ライダーも……………、フレイムヘイズも、形は違えどいずれは戦いで死ぬ！ 先に行つて、どんなもんか見てきてやるよお！ ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

耳を貫く狂笑を挙げながら、仮面ライダーアビス “霞の迷彩”  
レムオルは、この世界から消滅していった。

『……………』

三人は何とも言えぬ心境のまま、主を失い、地面に転がるアビスのカードデッキを見つめ、無言で手を打ち合わせる。

パシッ。

乾いた音が、誰もいない世界に響き渡った。

「本当に、もう行くんだな」

「もう少しゆっくりしていけばいいのに……」

レムオルとの激戦の翌日。

グレース堂書店の前には、出発準備を済ませたヴィルヘルミナと、その見送りに来たキットとレンの姿があった。

ヴィルヘルミナは二人に頭を下げ、

「心遣いは嬉しいのですが、こればかりはどうしようもないのであります」

「早期出立」

ティアマトーの淡々とした声が付け加えられる。

全ては昨日、レムオルとの戦いを終えた直後に、外界宿経由で入ってきた、ある知り合いからの連絡。

『あのチビジャリ、あんたが育てたんだった？　そろそろ深みにハマるわよ』

そこから更に聞かされた情報は、負傷した身体を押してでも動くには、十分過ぎるものだった。

自分が育てたフレイムヘイズの少女、零時迷子を、仮装舞踏会。そして

「私の友を絶望させない為に、行かなければならないのであります」

強く言い放つヴィルヘルミナに、二人もただならぬものを感じ取った。

「そっか、分かった。ちょっと残念だけど、カルメルさんが決めたんなら、僕達には止められないね」

「申し訳ないのであります。本来なら、貴方達と共に、ゼイビアックスとやらの動向を探るべきなのであります……」

「気にするな。俺達には俺達の、カルメルにはカルメルの領分がある。ゼイビアックスは、俺達が止めなければならぬ敵だ」

言って、レンはヴィルヘルミナに手を差し出す。

「俺達は俺達のやり方で世界を守る。お前もお前のやり方で、大切なものを守れ」

「……ええ。言われるまでもないのであります」

手を握り返しながら、レンとヴィルヘルミナは小さく笑みを交わした。

「またいつか、必ず会おう」

「私も、いつか必ず」

「カルメルさん、色々ありがとうございました！      ティアマトー  
さんも元気です！」

「ええ。キット、貴方もあまり無茶はしないようにするのであります」

「要努力」

深々とお辞儀をするキットと握手したのを最後にし、ヴィルヘルミナは二人の騎士に別れを告げた。

手に残る温かさから伝わるのは、仲間の絆。感じた想いを心に刻み、ヴィルヘルミナは進む。

自分の フレームヘイズの道を。

## 外伝・ミラージュノ異界の龍騎士と舞踏姫・下（後書き）

三週間……本当にお待たせ致しました； 思った以上に筆が乗らず、最後がグダグダになってしまったことを、スライディング土下座でお詫び致しますm（|ー|）m

・ヴィルヘルミナは、マティルダや約束の二人のことがあってから、ちよつと仲間思いになり過ぎてる面があるんじゃないかなと思ひ、冒頭ではキット達を戦いから遠ざけさせました。そのせいでかなり書きづらくなりましたけど（笑）

・ヴィルヘルミナは今回、ちよつとだけ0108のことに触れてます。探してみてください。

・レムオルが最終的にかなり小悪党なキャラに……レティシアとの落差がありました。

次回からようやく本編に戻ります。次はさすがに三週間はない……はず；

ヴィルヘルミナと奏夜の邂逅をお楽しみに！

・ちよつとしたアンケート

今新連載を考えてるんですが……もしこの二つならどっちを見てみたいですか？

もしよければ、感想欄に「こっちがいい！」と書いて下さるとありがたいです。

1 仮面ライダーブレイドBB (仮面ライダー剣×バンブーブレード)

2 仮面ライダーオース・世界を喰らう欲望 (仮面ライダーオース×

GOD・EATER)



第零話・プレリユードノキング・オブ・ヴァンパイア・Aパート（前書き）

「誕生とは文字通り、人や物事が新たに生まれることを指す。

日本ではその昔、数え年が適応されており、皆一斉に正月で一つ歳をとるというシステムだった為、毎年毎年人の誕生日を祝うという習慣は、現在の満年齢に移行するまで存在していなかった。……実際に嘆かわしいッ！

しかしそんな時代でも、1歳になった子供に餅を背負わせ、その子供の幸せを願うという習慣は存在していた。

つまりッ！ 何かの誕生を祝福することの素晴らしさは、その多寡こそあれ、不変の原理だったというわけなのだよ！

……そして、今から語られる物語は、一人の仮面ライダーの始まり、言わば誕生秘話だ。

素晴らしい、じ・つ・に素晴らしいッ！！

さあキミ達も共に祝おうじゃないか、新しい仮面ライダーの誕生だッ！

ハッピーバースデー！！」

鴻上ファウンデーション社長

社長の部下（コードネーム5103）が届けて下さったケーキは、後で作者が美味しくいただきました。

第零話・プレリユードノキング・オブ・ヴァンパイア・Aパート

この世界は汚れている。

空、海、大地、動物、人間。

どれもこれも鬱陶しくて堪らない。

同じ空気を吸いながら生活するなんて虫酸が走る。

こればかりは、生まれついた性格だったのだから仕方がない。

俺がそもそも“そういう存在”だったというだけの話だ。

まあ、それを差し引いても、色々と歪んでいたのは間違いないだろう。

ガキの頃に抱いていた思想が『ヒーローなんか殺されて解されて並べられて揃えられて晒されればいい』というひねくれ具合からも、それは想像に難くない（ひねくれる、という言葉では済まないかもしれないが）。

何を好き好んで、ヒーローは他の人間なんか守っているのだろうか。しかも、傷つくのは自分で、さしたる見返りもない。ハイリスクローリターンにも程がある。

どちらかといえば、怪人の方に共感していただろう。

彼らが見せる見事なまでの散り様は、ある意味、ストーリーの中で

憎まれ役を買って出た結果だ。

ヒーローの引き立てとしての仕事を全うし、ただ物語の舞台を降りていく。

悪役であるという、それだけの理由で。

自分と同じく、何の文句も言えないまま、ヒーローに淘汰されていく怪人を、俺は幼心ながらに可哀想と思ったものだった。

あの頃の俺は、常人からすればあまりに逸脱した価値観を包括しながら、数少ない友人と共に、打算的な生き方を貫いていた。

変わることはない。

その必要もない。

そう、思っていた。

だから多分 何かが変わったとするなら、あの日が全ての発端だったんだろう。

御崎市某所の公園。

午後と言えど平日であるため、人の数はまばらだ。

「オイ、何黙ってんだよ！」

と、その和やかな風景に、一際似付かわしくない罵声。  
柄の悪い三人組の男に、一人の青年が絡まれていた。

「なあ、ぶつかつといて詫びも無しかア!？」

「あ！ こいつ知ってるぜ、近所でお化け太郎とか言われてるヤツだ！」

「格好もおかしけりや、態度もおかしいみたいだなあ！」

三人組の言う通り、青年の姿はやや異質だった。

右手には薔薇の花びらが詰め込まれたビニール袋。  
目深に被った毛糸の帽子に、目元全てを覆うゴーグル。  
極めつけに風邪予防のマスクを付け、表情は完全に隠れている。  
体軀から男性だというのはわかるが、不審者と捉えられても文句は  
言えない格好だった。

「……………」

青年はゴーグルの奥で目を細め、ポケットから手帳を取り出した。  
片手で器用にページをめくり、三人組に突き出す。

『うざい、五月蠅い、鬱陶しい。さっさと消える雑草が』

それは、沸点の低い三人組を怒らせるには十分なセリフで。

「あぁッ!? テメエ馬鹿にしてんのか!」

振り被られた拳が、青年の顔面を狙う。

青年は面倒臭そうに、拳を突き出してきた男の足を払った。

ノーマークからの攻撃に男はバランスを崩し、ひっくり返る。

青年はそのまま、思いつ切り男の胸を踏みつけた。

「うぶっ！？」

奇声を挙げ、肺から空気が全て吐き出される。

「う、このっ……！」

残る二人も拳を振り上げるが、それよりも早く、青年の放つ拳が、彼らの顔に炸裂した。

バキッ、という気味の悪い音を鳴らし、二人は地に沈み、激痛に悶える。

「……」

青年は踏みつけた男を見下げ、再び足を宙に浮かせる。  
確実なトドメを刺すためだ。

「ひっ……っ……！」

自分の辿るであろう末路に、男は声を漏らす。

が、

「奏夜！」

聞こえてきた甲高い声。

奏夜と呼ばれた青年が足を寸止めし、声のした方に目をやる。

「ちょっとなにやってるの！　喧嘩なんか私が許さないわよ！」

現れた中学の制服に身を包んだ少女　野村静香は、後ろで纏めた髪を振り乱しながら近付いてくる。

「…………チッ」

去り際、男の腹を蹴飛ばしつつ、奏夜は静香を無視して、公園を後にする。

「あつ、いらー！　待ちなさいよー！」

静香は律儀にも男達に「ごめんなさい」と謝罪し、慌てて彼の後ろ姿を追いかける。

「……オイ、着いてくんじゃねえ」

心底鬱陶しそうに、奏夜はゴーグル下の目を細めた。

「奏夜！　喧嘩なんかしちゃダメって、何度言えばわかるのよ！」

「お前は俺の母親か！？　あいつらが勝手に絡んできやがったんだ。正当防衛だろうが！」

「だからってすぐ暴力を使うなんて最低だよ！　言葉があるんだから話し合えば……」

「アレが話し合いでどうこうなるシチュエーションに見えたか！？　いちいち口を挟むな！」

奏夜は激しい剣幕で、静香を怒鳴りつける。



「俺は他人になんか微塵も興味はねえ！ いいからもう俺に関わるな！」

苛々を吐き出し、頭が上がった血が退いていく。

冷静さが戻った時、静香は今にも泣き出しそうに震え、涙目になった顔を俯かせていた。

さすがに罪悪感が生まれるが、それでも奏夜は突き放すような口調を止めない。

「……ヴァイオリンを教わりたいなら余所を当たれ。それこそ部活に入るなりしろよ」

「っ、私は、奏夜に教えて貰いたいの！！」

そこだけは譲れないとばかりに、静香は声を荒げた。

「音楽が大好きで、あんなに凄い演奏が出来るんだから、教えるのだって……」

「買いかぶりだ。例え教えたとしても、二流三流が関の山だって何

度も言っただろうが」

「……私に、音楽を習うだけの才能が無いってこと？」

「俺に、教えられるだけの余裕が無いんだ」

そこだけは、刺々しい口調ではなく、卑下するようなトーンだった。

そう、本当に余裕など無い。

まして、他人に教えられる才能など。

否。俺はそもそも、

(他人になんか、興味は無い)

世界は、自分だけが全てだ。

他人だからこそ得られるものがある？

吐き気がする。

そんなもの、自分が大切に保ってきた世界への侵略に他ならない。

イラナイ。

「他人なんか、いらない」

「これは……確かに酷い臭いだ」

鼻を突く異臭に、呼ばれた警察官は顔をしかめる。

場所は、御崎市某所のある邸宅。

通報は、付近の住人から。

この家から漂ってくる異臭に、ほとんど困り果てているのだと言う。城門の前には、警察官の他、訴えを起こした住人達が詰めかけていた。

「強制立ち退きでも何でもいいから、とにかく何とかして！」

「その前に家宅捜査だろ！」

「遺体でもでりゃ、それこそ大事件だよ！」

「いや……それはさすがに」

飛躍し過ぎた話に、警察官が苦笑していると、邸宅に続く坂道から、二人の男女が歩いてくる。

奏夜と静香だ。

「あ、ほら、お化け太郎よ！」

我が家に向かおうとする奏夜に、住民達は指差した。

「あゝ、君がここの住人だね」

警察官が、「近所の人も迷惑してるから」だの「下手をすれば公害の可能性もある」だの、形式的な質問をする傍ら、奏夜は終始無言だった。

周囲に群がる住民に目もくれず、まるで自分が世界の中心、とでも言いかねない立ち振る舞いだった。

「ちょっと！ マスクとんなさいよ！ おまわりさん聞いてんだから！」

奏夜の態度にじれたのが、小太りした体格の中年女性が、無理やりマスクを剥ぎ取るうとする。

「まったくもう、こんな迷惑かけがって！ 親の顔が見てみたいもんだ！」

住民の誰かが口走った台詞に、奏夜は初めて反応した。

「……………あ？」

ゴーグル下の目は据わり、激怒一歩手前といった声音だった。鋭い眼孔に睨み付けられ、警官を含めた住民達が、恐怖にたじろぐ。張り詰めた空気を、危険信号と捉えた静香が、慌てて奏夜と警官の間に入る。

「あの、すみません！ この人アレルギーなんです！」

「アレルギーって……花粉症には、まだ早いんじゃないか？」

疑わし気な警官の目の前で、静香は無造作に、奏夜のマスクを剥ぎ取った。

「……………！！　　ううっ！？」

さっきまでの剣幕が嘘のように、奏夜は晒された口を、両手で抑えながら、うずくまった。

「『この世アレルギー』」

「…、この世アレルギー？」

どよめく住民に、静香が淡々と告げる。

「病気というより、奏夜の特異体質みたいなものです。なんていうか、この世界の全てに、免疫機能が過剰反応を起こし、下手にマスクを外すと、最悪命にかかります。それでもというのなら、こちらでも医師の立ち合いを求め、家宅捜査をするのであれば、捜査令状の提示を要求します」

凜とした態度の静香と、苦しみながら、彼女からマスクを取り返そうとする奏夜。

異様と言えば異様な光景に、住民と警官は二の句が継げなくなっていた。

一連の様子を、紅邸の窓から眺めている影があった。

羽音を鳴らす翼と、暗闇でも怪しく輝く、赤い複眼。

犬歯を覗かせながら、金色のコウモリは、ニヤリと笑う。

「静香、グレイト」

「はいOK!! 恵ちゃん、お疲れ様！」

「お疲れ様でしたー！」

場所は市内某所の撮影スタジオ。  
アイドル界期待の新星である彼女 麻生恵は、達成感を含んだ挨拶で、今日の仕事を終えた。

「ふう……やっぱり笑顔を作るとなーんか疲れるのよねー」

「ふっ、相変わらず呑気なものだな、キミは」

撮影室から出ようとした矢先、恵は先ほどまでの笑顔が嘘のように表情をひきつらせた。

彼女と同年代位の、猫っ気のある髪をした長身の男　彼女の天敵とも呼べる人物が、入り口の壁に寄りかかっていたからだ。

「今こうしている間にも、世界では数多くの人々が、不幸になっている。キミには戦士としての自覚が足りな過ぎるな」

「……こんなとこにまで来て言うことが嫌味？　自覚がないのはどつちなのかしらね、名護くん」

入り口に立ち、恵に辛辣な言葉を投げかけてきた男。

名前は名護啓介。

恵の“本職”の同僚にして、その中でも卓越した能力を持つエリートだ。

恵の皮肉を意に返さず、名護は笑みさえも浮かべてみせる。



「馬鹿を言うのは止めなさい。まだ私がイクサに選ばれたことを妬んでいるのかな？」

「妬んでないわ。ただ、貴方みたいな人にイクサを渡す『素晴らしき青空の会』の行く末が心配なだけよ」

「手厳しいな。私は選ばれた人間なりの責任を果たすつもりなのがね」

よく言うわこの偽善者が。

喉元まで出掛かった罵倒をどうにか飲み込み、代わりに恵は溜め息をつく。

「もういいわ。他に要件が無いなら、私はこれで失礼させて貰うわよ」

「待ちなさい。嶋さんからの伝言だ。いつだったかキミの取り逃がした蜘蛛のファンガイア 再び動き出しているらしい」

取り逃がした、の部分を強調され、恵は再び青筋を浮かべるが、名護は素知らぬ顔で続ける。

「しかも、今度はキミを狙っているようだ。

どうやらあのファンガイアは昔、君の母親にご執心だったらしくてね。当時からストーカーカー紛いの行動を続けていたらしい。

その娘だと知られた以上、ヤツの目は必ずキミに行く。用心するよ  
うに　とのことだ」

「……ふん、母さんからの因縁なら望むところよ。次に来たら今度こそ返り討ちにしてやるわ」

「出来るのかな？　キミの力で」

「なんですって？」

恵の瞳に剣呑な光が宿る。

名護はやれやれと首を振り、恵に背を向けた。

「まあ、努力は怠らないようにしなさい。何かあれば、私が助けに  
向かおう」

名護の姿が通路の端に消えるまで、恵は怨嗟の視線を向け続け、

「~~~~っ！ ああー！ ム力つくム力つくム力つくム力つ  
くーっ！..!」

腹癒せに近くのゴミ箱を蹴飛ばした。

結局、ゴミ箱を蹴飛ばしても苛々が収まらなかった恵は、スタジオ  
近くの定食屋でヤケ食いに走っていた。

「ったく、あの偽善者がどうしてイクサの資格者なのよ！ 店長、  
ごはん（大）追加！」

「はいよっ..!」

今日の恵ちゃんは荒れてるなあと思いつつも、店長は自分の職務  
を果たし、大盛のご飯をテーブルに置く。  
ちなみに、恵の机には優に20枚の皿が積まれている。

「ふう……ま、八分目ってどこかしら」

そら恐ろしいことを呟きながら、怒声と食事によって苛々が払拭された頭が、冷静な思考を生み出していく。

(……でも、私がイクサに相応しくないとはいっていいのかも確かなのよね。名護くんは性格がずば抜けて駄目だけど、それ以外は完璧超人だし)

恵も、名護の強さだけは認めている。

あの偽善的な態度だけは絶対に認められないが、裏を返せばそこさえ直してくれるなら、名護がイクサを使うことには何の問題もないとさえ思っている。

(だとしたら……やっぱり単純に、名護くんを妬んでる部分もあるのかな、私)

イクサは恵の祖母が立案し、恵の母、ゆりが完成させたもの。言わば麻生家の志だ。

祖母、母の魂が籠もったイクサを、麻生家以外の者に使われたくない。という気持ちは、そうそう拭い去れるものではない。

「……あー、もう！ ヤメヤメ！」

後ろ向きな考えではダメだ。

こんな体たらくでは、それこそ名護に馬鹿にされる。

イクサは今、恵の手元にはない。  
けれど、自分がやらなければならぬことに変わりはないのだ。  
イクサを手にしたという気持ちはあるが、まずは目先のことから  
片付けていかななくては。

「よし！　そうと決まれば『マル・ダムール』に行かなきゃね！  
店長、お勘定を」

席から立ち、飯代を払おうとしたところで、恵は言葉を切る。  
無い。さっきまで白米と共に自分が食べていた魚料理。  
その残りである骨が消えていた。

「あれ？　店長、片付けるなら皿も片付けな、きゃ……？」

恵は視線の端に、奇妙な人影を捉える。  
毛糸の帽子とマフラーをつけ、厚手のコートを着た青年。  
その手元には、ビニールで包まれた魚の骨。

「ちょ、ちよつとキミ！」

恵の声が轟き、青年は面倒そうに振り返る。  
マスクをした口から声は発さず、ゴーグル下の眼が恵を睨む。  
彼はビニールを持っていない方の手で、開いた手帳を彼女に突き付

ける。

『いらないでしょ。別に』

「いや、そりゃそうかも知れないけど、女性が食べたものを勝手に持っていくってというのは倫理的に……ってだから無視して出て行くとしなさい！」

「グッ!?!」

マフラーを引っ張られ、苦しそうに喘ぐ青年。他の客の奇異の視線など、もはや恵の頭の中には無い。

「人の話も聞かず逃げようとするってどういっつ見よ！ キミ、ちよっと着いてきなさい!!」

飯代を置き、『はーなーせー!!』と書かれたページを広げる青年を引きずりながら、恵は料亭を後にする。

二人はまだ知らなかった。

この出会いが、彼らの運命を大きく変えてしまう結果になることを。

なんでこんなことになったんだろう。

「だ〜から、何で魚の骨なんか盗もうとしたのよ？」

向かいの席に座る恵の執拗な追究に、青年　紅奏夜は鬱陶しそうに視線を逸らした。

あの後奏夜は、恵によって馴染みのないコーヒーカーフェ『マル・ダムール』なる店に連行され、魚の骨を盗った理由を、根ほり葉ほり聞かれる羽目になった。

他の客のことなど歯牙にもかけず、恵は奏夜に詰め寄り続ける。

(じじいなあ……)

どうせ魚の骨なんか食わないんだから、ここまでしつこく理由を聞いてこなくてもいいのに。

気だるそうな動作で、奏夜は会話用の手帳をめくっていく。

「……キミ、取り敢えず、そのマスクとゴーグル取りなさい！ 表情が見えないんじゃないじゃ会話し辛いわ！」

「……！」

何を言ってるんだこの女は。  
俺に死ねと言うのか。

「……！」

「……、暴れないの！」

決死の抵抗を見せる奏夜だったが、日頃から鍛えている恵には適わず、マスクとゴーグルを剥ぎ取られてしまう。

恵は初めて、奏夜の素顔を正面から見た。

「あら！ 意外とかわいい顔してるじゃない！」



恵の言う通り、奏夜は鋭い風貌ながらも、どこか子供っぽいあどけなさを残し、大多数の人間がイケメンと評する顔をしていた。

「むぐっ!？」

慌てて口を押さえるが、焼け石に水だ。

空気を遮断するものが無くなり、この世アレルギーが奏夜を蝕む。だが、そんな事情を知る由もない恵は、

「え？ なに、どうしたの？」

「……はは〜ん。私がいかに美人だから緊張してるんだ」

「ち……がっっ!！」

間髪入れず否定する青年に、さすがの恵も顰めっ面を向ける。だが、命に関わる状況で、奏夜に恵のことを気にしている余裕は無かった。

「お、俺は、アレルギーなんだよ……! この世アレルギーって言うって……と、とにかく、早くマスクとゴーグル返せ……!」

奏夜からすれば切実な要求だったのだが、『この世アレルギー』などというふざけた病名を、常識人である恵が信じるはずもなく、

「この世アレルギー？ 何言ってるの、有り得ないから。  
ほら、深呼吸深呼吸」

恵は奏夜の背中に回り、彼の腕を持ち上げて万歳の姿勢を取らせる。

「あ、アンタ、なんで更に空気吸わせようとしてるんだよ！ うっ  
！？ し、死ぬ！ 本当に死ぬ！」

「死ぬわけないでしょ、アニメの見過ぎ。……ほら、吸って吐い  
て吸って吐いて」

腕を上下させながら、奏夜の深呼吸を手助けする恵。  
最初こそ吐き気に身悶えしていた奏夜だったが、呼吸を繰り返す度  
に、その苦悶に満ちた表情も和らいでいく。

数十秒後には、奏夜の息は完全に整い、あの気持ち悪さも消え  
ていた。

「ほら、全然平気じゃない。なーにがこの世アレルギーよ。気のせ  
いよ気のせい」

「……………」

恵の言葉も、驚愕した奏夜の耳には入らない。

自分の身体に起きた事実を受け入れることができないまま、奏夜は魚のように口を開閉させることしか出来なかった。

その様子を、一世代前の望遠鏡で覗く男が一人。

「あれが恵ちゃんかあ……………うん、やっぱり母親と同じで綺麗だねえ」

ややウェーブのかかった髪に、白いタキシードに手袋。音楽家のような出で立ちだが、木の幹に身を潜め、女性の様子を覗き見している姿はただの変質者だ。

「二十二年前は失敗したけど……………今度は逃がさないよ。待あってね恵ちゅわん……………チューリッヒヒヒヒヒ！！」

手にはめたネズミのパペットを不気味に動かし、男 糸矢は意地汚い笑みを浮かべた。

カポーン。

この擬音を考えたのは某有名漫画家らしい。

「おい、奏夜。お前まだ昨日の女のこと考えてんのか？」

紅邸の浴室。

体育座り気味に浴槽へ浸かる奏夜へ語りかける声。

声の主はなんと、赤い複眼に金色の身体を持つコウモリだった。  
ヴァイオリン型の小さな桶に乗り、湯の上を漂いながら、コウモリ  
キバットバット三世は問う。

「そんなにいい女だったのか？ ジャンヌの肖像画みたいないな！」

「誰だよ。それ」

「お前、何度言ったら分かるんだ！ 偉大なる画家、モディリアー

二が描いた肖像画の女だよ！ あの長い首がどろどろにもたまらん！」

「関係ねえよ、ってかどうでもいいよそんなこと。

問題なのは、俺が本当はこの世アレルギーじゃないかもしれないってことだ」

「何だ、そんなことかよ。それならそれでいいじゃねーか！」

「そんな簡単なことかねえ……」

奏夜は蒸気の立ち上る天井を、ぼんやりと見上げた。

「こんな汚れた世界の空気を吸っても生きていけるってことは、俺も汚れた人間なんじゃないか？ ……そう思うと、なんかショックでさ」

「へっ、アホウ」

見当違いな悩みを抱える友人に呆れつつ、キバットはぼつりと呟く。

「やれやれ。まだ『鎧』を渡すには早いかねえ……真夜」



第零話・プレリユードノキング・オブ・ヴァンパイア・Aパート（後書き）

はい、今回はW投稿。奏夜のビギンズナイトです！

現在のところは三話編成の予定。

不意について割り込み投稿していくので、たまにチェックしてみてください。

・厨二病全開の奏夜。渡のこの世アレルギーは発症原因は曖昧ですが、奏夜には一応発症原因らしきものがあります。

・イヤミったらしい名護さんも大好きです（笑）なんやかんやで、この名護さんがあったからこそ、今のネタっぽい名護さんがあるわけですしね。

・満を持して糸矢登場！ 彼は展開的に本編じゃ出せないもので、今回の第零話で出せて良かった。

では、本編と第零話、どちらもお楽しみに！

## 第零話・プレリユードノキング・オブ・ヴァンパイア・Bパート

俺がこの力を自覚したのは、小学生の頃だった。

当時の俺は、いじめから守ってくれる兄さん（この頃はまだ、兄さんだとは知らなかったけれど）がいなくなって、再びいじめの渦中に立たされていた。

所詮は悪戯の域を出ないものであり、学校の教師も手を出さず、俺自身も我慢できていたと思う。

だが、あの一度だけは違っていた。

いじめっ子の一人が、からかい目的で俺のバイオリンに落書きをしたのだ。

そのバイオリンは、音楽を習い始めた俺に、母さんがプレゼントしてくれた大切な宝物であり、顔も知らない内に死んでしまった父さんと自分を繋ぐ、唯一の架け橋だった。

そして事は起こった。吹き上がった怒りをトリガーに、俺の中で眠っていた魔力が覚醒したのである。

幸いにも、そのいじめっ子は軽傷で済んだが、俺と母さんはその地を後にすることを余儀無くされた。

俺を「化け物」と恐れる人々の視線を、背中に受けながら。



「奏夜、あなたは悪くないわ。悪いのは、私……」

自分がしたことを知り、泣きじゃくる俺を、母さんはただただ抱き締めてくれた。

今してみれば、母さんは俺以上に、自責の念を抱いていただろう。

母さん自身が宿す血を　人としての生き方を許さない異形の血を、俺に受け継がせてしまったことに。

だが勿論、子供だった俺は、そんな母さんの想いに気付かず、一つの結論を出した。

俺が絶対に誰かを傷付けるなら、俺はずっと一人でいればいい。誰も近寄らないように、俺がみんなから怖がられるやつになればいい。

そう。まるでTVに出てくるような、ただヒーローに淘汰されるような、『化け物』になればいい、と。

ばち。

目を開くと、見慣れた天井。右側には昨日まで睡眠の友としていた筈のベッド。

どうやら寝返りを打って落下してしまったらしい。

「……………起きます」

固まった身体をほぐし、今日の新聞を取りに行こうと、テーブルの上にあったマスクとゴーグルに手をかける。

ほら、全然平気じゃない。なーにがこの世アレルギーよ。気のせいよ気のせい。

「……………」

脳裏によぎるのは、あの不愉快な女の言葉。  
伸ばした手が、不自然な形で止まる。

いや、関係ないだろう。あんなどこの馬の骨とも知れないような女の言うことなど気にする必要はない。今まで培ってきた『紅奏

夜』という人間の在り方を、たった一日のイレギュラーを原因にひっくり返すつもりか。

「~~~~!!」

凄まじい葛藤の中、奏夜はこの世アレルギー対策グッズに腕を近づけたり、引っ込めたりを繰り返す。

端から見ると、その光景は拙いパントマイムようで、甚だ異様な光景である。

「何やってんだ奏夜のヤツ……」

親友の奇行を目撃したキバットは、軽く奏夜との付き合い方を考え直したくなったという。

結局、マスクとゴーグルは着けて出掛けることにした。この世アレルギーを克服した いや、してしまったことを認めたくないが為の、見苦しい抵抗である。

（不幸だ……）

某幻想殺しの常套句を心中で呟きながら、奏夜は休日でも多い通

りを歩く。

春も近いこの季節、ゴーグルはともかくマスクをしてる人は多いので、奏夜としては気兼ねなく外出できる。しかし、胸に残るモヤモヤは依然として晴れない。

(俺がこの世アレルギーじゃない、か……)

キバットに言った通り、奏夜は少なからずショックだった。

そもそも『この世アレルギー』はある意味、奏夜自身が望んで生み出したとも言える体質だ。

誰も傷付けたくない、だから誰とも関わりたくない、世界と繋がらなければ、誰も傷付かない。

恐れから来る拒絶こそが、この世アレルギーの発生要因だからである。

だが奏夜は『この世アレルギー』を社会的なハンディだと思ったことは一度もない。

むしろ、己の本質とも言える『化物』を封じ込める、鉄壁の監獄だと解釈していた。

この体質を知った時は嬉しかったな。

歪んだ感性だと分かっていつつも、奏夜はつい思ってしまっ

だつて、これさえあれば、誰も傷付けずに済む。内に秘めた獣を飼いい慣らし、この汚れた世界を生き抜いていけると。

まあそれも、あの奇妙な女に、完璧に閉じたはずの扉をこじ開

けられるまでの話だったが。

目の前の信号が青に変わった。

ばらばらに歩き出す通行人に混じって、奏夜も足を進める。

(公園で、材料集めでもするか)

物憂げな思考を止める方法は、やはりヴァイオリンしかなさそうだ。本日のスケジュールを決め、奏夜は公園方面に進路を取る。

と、反対側の歩道に渡ったところで、子供とすれ違った。小学校高学年くらいの男子で、サッカーボールを片手に、休日を満喫しようとしている。

(子供は呑気なもんだな)

こっちの悩みがどうでもよくなる　否、むしろ子供の無知さが馬鹿馬鹿しくなる、と言うべきか。

マスクとゴーグルの下の表情を僅かに歪め、奏夜は子供から目を離す　はずだった。

「……………」

音楽家の鋭敏な聴覚が、不愉快なノイズを捉える。  
奏夜は、横断歩道に交差する車道の先へ顔を向けた。

連なつて止まる自動車。その間を縫うようにして、一台のバイクが  
突っ込んで来たのだ。

乗り手はガラの悪そうな若い男。青信号にじれでもしたのだろう。  
アクセルを緩めずにマシンを進めている。

魔のホイールが進む先には、先程の小さな男の子。      あの様子で  
は、バイクに気付いていない！！

「っ！！」

余計な理屈を考えるより早く、奏夜は駆け出していた。  
地を強く蹴り、一瞬で子供とバイクの間に割って入る。  
ようやく互いの存在に気が付いた子供と若者をよそに、奏夜はバイ  
クに向かって手を突き出した

「……………っぞ」

事の一部始終を、恵は反対側の歩道から見ている。

恵もまた、バイクと子供の存在を認知し、事故を止めるべく飛び出しかけていた。

しかしそれよりも更に早く、反対側にいた奏夜　恵にとっては、昨日出会った奇妙な少年という認識だが　が横断歩道に飛び出し、あのままなら確実に、子供をひき殺していたであろうバイクの前に立ちはだかったのだ。

そして今。

少年はバイクを“片手”で止め、あるうことが、バイクの前輪を力任せに“捻り切った”。

(回転してるホイールを掴んで止めて、しかもフレームごと捻り切るって……!!)

常識的に考えて有り得ない光景に、恵のみならず、集まってきた野次馬達も啞然とする。

当の奏夜はというと、バイクのホイールを無造作に投げ捨て、最早粗大ゴミと化したバイクのグリップを握り続ける若者を睨み付けた。

「……俺も人のこと言えるほど立派な人間じゃねえが」

地獄の底から聞こえてくるような重低音に、若者は「ヒッ!」と息を呑む。

「交通ルールくらいは守れよ。ゴッ野郎」

「は、はいいい!」

壊れた玩具のように首を縦に振り続ける若者を余所に、奏夜は後ろの子供を見た。  
自分に迫っていた脅威を知り、横断歩道にへたり込みながら震えている。

「……………大丈夫か」

奏夜は「自分のキャラじゃない」と思いつつ、躊躇いがちに男の子に声をかける。

男の子は小さく、こくりと頷いた。瞳の奥には、人外の技を見せた奏夜への、明らかな『恐れ』があった。

「……………ちっ」

別に慣れた反応ではあるが、いい気はしない。

舌打ち混じりに、奏夜は転がっていたサッカーボールを拾い上げる。



球体の表面には、手書きでこの子供のものと思しき名前が書かれていた。

ふーん、『さかいゆうじ』か。

「ほらよ」

サッカーボールを持ち主に放り投げ、奏夜は興味を無くしたと言わんばかりに、踵を返す。  
人も増えてきている。今の規格外な所行を考えると、警察に掴まるのは面倒だ。

「あ、あのー！」

呼び声に振り向いた奏夜に、ゆうじはおずおずと、しかしはつきりした声で、

「あ、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる少年。奏夜はまさか礼を言われるとは考えていなかったらしく、紅潮した顔を隠し、逃げるように横断歩道を渡っていく。

そのせいか、恵とすれ違ったことにも、気付いていないらしい。

「あ、キミ!」

恵自身もようやく放心状態から脱し、走り去っていく奏夜を追いかけていった。

朝の喧騒に邪魔され、一旦は奏夜を見失った恵だったが、ややあつて、公園のベンチに座る影を見つけた。

奏夜は何故か、ノラネコを抱き上げ、肉球の感触を楽しんでいる。

(……いや、確かにネコの肉球は癒されるけど)

何故今やる？

あれか、さっきの事故のショックから抜け出す為か。

だが、この前のやり取りからは、なかなか凶太い印象を受けたのだけれど。

「ねえ、キミ」

「……………」

ゴーグル下の目が不快そうに歪み、恵を捉えた。また貴女ですか。と言外に訴えている。

「隣、いいかしら」

「……………」

ポケットを探る奏夜。しかしそれより早く、恵がその手を掴む。

「こら、ポケット台詞帳で会話しない。返事は口でしなさい。この際マスク着けててもいいから」

「……………」

「今、かなり激しい葛藤があったわね……」

隣に腰掛ける恵に意識を向けまいよう、奏夜はなお必死にノラネコを愛でる。

「キミ、名前は？」

「……………」

どうやらこの人は、自分を逃がしてはくれないらしい。

「奏夜。紅奏夜」

「ふーん。奏夜くんか……いい響きの名前ね。私は恵、麻生恵よ。一応モデルもやってるんだけど、知らないかしら？」

「……………世俗に疎いので」

鬱陶しい。この人の腹は読めている。

どうせこれらの質問は切り出し口で、本当に聞きたいのはさっきの信号の騒ぎについてだろう。

あれだけのギャラリーだ。見られていても不思議じゃない。

案の定、恵はやや歯切れ悪そうに、

「ねえ、間違ってたら悪いけど　キミ、ファンガイアでしょ？」

奏夜は少なからず驚いた。

人間じゃないのがバレることは予想していたが、ごくごく普通な女性の口から『ファンガイア』の単語が出るとは。

「……知ってんのか。ファンガイアのこと」

「そりゃね。私、ファンガイアハンターだから。素晴らしき青空の会って組織、知らない？」

「知らない」

「あら意外」

「世俗に疎いって言ったろが」

だが、ファンガイアハンターの名前から、大体予想はつく。  
人間を襲うファンガイアから世界を守る秘密組織　そんなところ  
だろう。

「ハンター、ハンターね。はっ、そりゃあいい。つまり、偶然見つけた俺のことも狩りに来たってわけだ」

「む。見くびらないで欲しいわね。私は人喰いしてるかどうかも不確かかなファンガイアを狩るほど、盲目的なことはしないわよ」

「アンタの見てないところで喰ってるかも知れないぜ？　勝手な価値観で俺を見逃しでもしたら、アンタの面目丸つぶれだぞ」

「だから、見くびらないでってば」

凜猛そうに顔を歪める奏夜だが、恵は何一つ動じた様子はなかった。

「子供を助けるためになり振り構わず飛び出して、幼い命を奪いかけたバカ野郎に怒って、ついでに公園でネコと戯れてるような“人間臭いファンガイア”、狩る方がどうかしてるわ」

ぴくりと奏夜の手が反応する。  
奇妙な指の動きに不快感を覚えたのか、野良ネコは奏夜の手から飛び出し、草むらへと走り去っていく。

「まあ端的に言つと、キミともう少し話して見たくなったのよ。私が今まで会ったファンガイアって、それこそ人間らしさの欠片も無かつ」

「……俺は化け物だ」

奏夜が恵の言葉を遮る。地獄の底から聞こえるような低い声だった。

「俺は人間じゃない。……いや、ファンガイアからも弾き出された、ただの化け物だ」

「ファンガイアからもって……」

説明すべきか否か迷ったが、結局奏夜は何かを諦めたように口を開く。

……そう言えば、キバット以外に自分の心境を吐露する、というのも、久しぶりだった。

「俺は、半分ファンガイアで半分人間なんだよ」

「半分人間？ えっと、つまりハーフファンガイアってこと？」

奏夜は小さく頷く。

恵もハーフファンガイアの存在は嶋から聞いたことがあったが、出会ったことは無かった。

「でも、化け物ってどういうこと？ ハーフだから、ただのファンガイアよりか人間に近いんじゃないの？」

「……そんな単純な比率の問題なら、誰も苦労しねえよ。」

俺は完全な人間でも、完全なファンガイアでもない。ただそこに存在するだけの亡霊だ」

奏夜の声がどんどん影を帯びていく。

恵は黙って奏夜の話聞いていた。

「アンタ、世界から拒絶されたことあるか？」

「え？」



いきなりの規模が飛んだ。世界から拒絶？ 意味が分からない。

「……世界全てを敵に回すっていう意味なら、無いけど」

「俺はある」

奏夜はぼんやりと空を見上げた。

さながら、世界に恨み言を吐くかのように。

「人間からはファンガイアの力を忌み嫌われて、ファンガイアには人間の血を汚らわしい目で見られる。どっちの世界も俺を拒絶して世界の全てが俺の害悪になった。

歩み寄ってきてくれるヤツもいたよ。でも、俺の正体を知ったらみんな離れてった。俺のそばにいるヤツなんて、今じゃ俺と同じはみ出し者が一匹だけだ」

いつもヴァイオリンを習いに来る少女も、自分の正体を知れば逃げ出すに決まってる。

さっき助けた子供も、物事が考えられる年頃になったら、バイクを片手で止めた自分をどう思うことが。

……どうせ傷付くなら、一人の方がずっといい。幼い頃、苛めっ子

を殺しかけた時に決めていたことだ。

「可哀相自慢をするつもりはねえ。ただ、アンタも不幸になりたくないなら、俺に関わらないことだ。関われば、ファンガイアどころか人間も敵に回すぜ」

俺は、化け物だ。

繰り返しそう告げ、奏夜はベンチから立ち上がる。

「まあ、アンタの目につくような行動はしないよ。俺、ライフエナジー吸う必要ないみたいだしさ。

……それじゃ。二度会わないことを願ってるぜ」

去り際に、せめてもの別れの挨拶。

だが、奏夜の話の聞いていないのか、恵は口元に手を当て、ブツブツ呟いている。

「……ふむふむ、成る程そうついごと」

「？ どうしたんだよ」

「これならこの子の社会復帰にもなるか……けど問題は嶋さんが許すかどうかね……」

「おい、聞いてんのか」

「特に名護くんは要注意ね……取り敢えず身分は秘密にしていればいいか。うん、そうしよう」

「……っ、おいアンタいい加減に」

「キミッ！」

いきなりガシッと両手を掴まれる。

美人の部類に入る恵の行動に、奏夜は驚きと羞恥に顔を染め上げる。

「な、なんだよいきなり！」

「気に入ったわ！ キミ、『素晴らしき青空の会』に入りなさい！」

「……………」

恵の言葉を脳内で幾度も反芻する。

素晴らしき青空の会。さつきも聞いたファンガイアハンターの組織。そしてファンガイアハンターは、ファンガイアを狩ることを生業とする人間、たち、で…………。

「……………はあッ!?!」

「いやー、ちょうど良かった！ 嶋さんからメンバーが不足してるから、誰か優秀そうな人をスカウトしてくれって頼まれてたけど、まさかこんなところで、キミみたいな人間らしいファンガイアに会えるなんて思わなかったわ〜！」

「な、おい、ちょっと待」

「さっきの横断歩道の様子を見てる限り、体力とか筋力も申し分なさそうだし、キミ、即戦力になるかも知れないわよ」

「いや、だから人の話を聞」

「あ。ハーフファンガイアだとかは気にしないでいいからね。黙つときゃ誰も気付かないだろうし、ファンガイアさえ倒しちゃえば誰も文句は言えないから。」

ちなみに仕事にはカフェの手伝いとかもあるから、キミの社会復帰にも役立つし……」

「だからちょっと待てと言ってるだろアンタの耳には相手の反論遮断するフィルターでも着いてんのかあ　　！！」

トントン拍子に決まってく話を、奏夜の大声が強制中断させた。

ちなみに、これが奏夜の生まれて初めてのツッコミである。

「アンタ頭おかしいんじゃないか!?　俺にファンガイアハンターになれ!?　今までの流れからどうしてそんな話なんだよ!」

「うん?　ごくごく自然な流れだと思うけど。言ったでしょ、私は優秀な人材を探してるの。」

一番必要な身体能力は超有力株。しかもすくすくごく優しい。私的に採用基準はオールクリアよ。何の問題があるっていつの?」

「俺の意思が何一つ反映されてねえのが問題だろが!! だいた  
い何だ! すくすくごく優しいって! さっきまでの話聞い  
てて、何で俺にそんな印象を持つんだよ!」

「何でもなにも、私はさっきの話を聞いて、キミがすくすくごく  
優しいって思ったんだけど」

「……何?」

激昂が立ち消え、奏夜の顔に無表情が戻ってくる。  
若干引きつってはいたが。

「どっという意味だよ」

「そのままの意味よ。 実を言つとさ、キミに初めて会った時か  
ら、なーんか違和感があったのよね。ちぐはぐっていうか、言動と  
中身が一致してないっていうか。けど、もう一度しっかり話してみ  
て分かったわ」

「だから何が」

「キミ、自分の力が怖いから、自分の力で他人を傷付けたくないから、そんな態度取るんでしょ？」

「っ！」

顔が急に強張るのを感じた。

自分の内側に、土足で踏み入れられたかのような感覚。

「な、何を訳の分からないことを……」

「訳は分かっているはずよ。他でもないキミ自身がね。」

まあそれでも詳しい話をするなら、そうね。アナタの態度はパツと見ただけだと、協調性の無さから来るものに見える。

けど、全体を見るとただの暴言じゃない。それは全て相手を『拒絶』する言葉だった。

これにさっきの話を加えると、アナタの人間性が見えてくる。

化け物である自分が、他人を傷付けるのが怖いから『拒絶』する。

すくすくごく優しいからこそ、キミは他人を傷付けることに耐えられない」

「か、勝手な推測は止める！」

俺はただ他人と関わりたくないだけだ！ 他人なんかどうでもいい、まして優しさなんか持つちゃ

いない！」

「じゃあ何で、さっきの子を助けたの？ 形振り構わず、バイクの前に飛び出してまで」

恵が強く言い放つ。

奏夜は言葉に詰まり、なにも言い返せなかった。

「キミは優しい。だから他人を傷付けたくないっていうのも分かるわ。」

でも、一生その生き方を貫けるの？

ツライわよ、ずっと一人きりって」

胸がズキリと痛む。

知っている。嫌というほど。

「他人を拒絶することは、優しいキミにとって楽なものじゃないでしょう？」

傷をずっと抱えたままいたら、いつか潰れちゃうわよ。

だからさ、ほんの少しだけでもいいから、誰かを信じてみなさい」

「……けど、俺はちっぴり」



「難しい？　じゃあまず、私から信じてみなさい。

さっきはああ言ったけど、『素晴らしき青空の会』に入るかどうかはキミの自由。

でも、キミと私はこうして知り合った。だから『素晴らしき青空の会』に入らなくても、キミが望むならこうしてお喋りだってできるのよ？

私はファンガイアのことも知ってるし、ついでに神経も図太いからドーンとぶつかってらっしゃいな」

最後は冗談めかしく、恵は締めくくる。

片や奏夜は震えていた。自分の根底が揺らいだことに対する恐怖心か。心の中を次々と見透かされたことに対する怒りからか。

いや、違う。

混乱こそしているが、その理由は降って湧いた清々しさからくるものだ。

今までのしかかって重圧が取り払われたかのような感覚。

こんな　簡単なことなのか？

こうも軽々と、価値観はひっくり返るものなのか？

孤独を貫いてきた奏夜に、人間を知らない奏夜に、答えは出ない。人を拒絶してきたことが　今だけは恨めしかった。

「ま、いろいろ講釈並べちゃったけどさ。手っ取り早く纏めると」

すっと奏夜に向けて手を差し出す恵。

「私と、友達にならない？」

奏夜が恵の手を取ることにはなかった。

真昼の公園に似つかわしくない轟音。

視界を覆う赤い電光が、二人の周囲で弾けたからである。

「っ！」

「きゃっ！」

光に目を覆いながら地面を転がり、どうにか受け身を取る二人。  
一体なんだ？

その疑問に答えが出るまで、そう時間はかからなかった。

「やあ〜。また会えたね恵ちゅわ〜ん！」

いやに間延びした声と共に、雑木林の影から奇妙な生き物が現れる。ステンドグラスに覆われた外皮に、クモを彷彿とさせる八本足と上顎を持つ異形の姿。糸矢ことスパイダーファンガイアだ。

「……ファンガイア」

「あーもう、またアナタなの？」

恵がうんざりしたように髪を掻く。

何を隠そうこの糸矢は、以前名護が言っていた、恵を執拗に付け狙うストーリーカーのようなファンガイアなのだ。

「お〜いおい、そんな冷たいこと言うなよお。こうしてまた会えたんだ。もっと再会を喜び合おうじゃないかあ！」

「お断りよ。ぶっちゃけるとアナタ、全ツ然タイプじゃないの。不快さで言ったら名護くんという勝負だわ」

「ぐわーん！！　　な、なんというつれなさ……だが、それでこ

そ、あのゆりの娘だ！！ 絶えっ対に手に入れるぞ、お前を！」

「うわウツザ。私に目をつけるとこまでは良かったけど、しつこいのはNGね」

俄然やる気を出したらしいスパイダーファンガイア。

片や心底面倒くさそうにしながら、恵は懐から、小型のボウガンのような銃器『ファンガイアバスター』を取り出し、構える。

「神は過ちを犯した。アナタのような存在を許した過ち 私<sup>が</sup>正すわ」

鋭い眼差しで、恵はトリガーを引く。

銃口から放たれるシルバーアローが、容赦なくスパイダーファンガイアへと突き刺さる。

「ぐおっ！ くっ、恵を手に入れる為、これしきの痛みなど何のこともないっ！」

「チツ、やっぱり一筋縄じゃいかないか……キミ、ちょっと離れてなさい」

「……」

奏夜は迷っていた。

いいのか？                   ただ見てるだけで、俺は戦わなくていいのか？

「ちよつとキミ、聞ってるの!？」

ファンガイアバスターからワイヤーを伸ばし、スパイダーファンガイアを薙ぎ払いながら、奏夜に呼び掛ける恵。  
だが、奏夜は棒立ちになつたままだ。

(……たた、かう)

それは、力を自覚した時から、ずっと禁忌にしてきた行為。  
敵も味方も、何もかもを無差別に滅ぼす忌まわしい力。  
この力のせいで、自分の中に眠る怪物への恐怖心のせいで、奏夜は他人との繋がりを拒絶した。

(身体中が熱い)

だが今は違う。

煮えたぎるような闘争心が、内から湧き上がってくる。

最初は不快感しかなかった。心に土足で踏み入るこの女性が、鬱陶しくてたまらなかった。

だが、何故だろう。

ずっと閉ざしていた心を開けた女性が、今日の前で戦っている。そして自分は、何もせずに佇むだけ。

力に怯えて何もしない、無能な自分。

それは、凄く

(嫌、だな)

ほんの数分前まで考えもしなかったこと。

(逃げたくない)

目に見える不安を数えて、立ち止まりたくない。

(動き出したい)

閉ざされた窓の奥に隠れていて、何が始まるんだ？  
窓を蹴破って、絡みつく鎖を引き千切れ。

「……たい」

心の底から噴出してくる高揚を感じながら、奏夜は呟く。

「……戦い、たい」

~~~~~

「……」

突如、奏夜の頭の中に響く音色。
単調ながら、尚も優雅さを失わないリズムを奏でるそれは

(ブラッディ、ローズ……!?)

父である紅音也の残した最高傑作。彼と奏夜、親子を繋ぐ唯一の絆
が作り出す音色が今、奏夜の頭の中に響いていた。

(戦え)

リズムの中に紛れる声。

「な、につ……!?!」

(戦え)

頭蓋を襲う激痛。

それに伴い、脳裏に鮮明なイメージが流れこんでくる。

それは三日月をバックに、蝙蝠の仮面と、真紅の甲冑を纏う戦士。

(戦え　　に流れ　　を　　る為に!!)

「う、あああああああ!!」

「奏夜くん!?!」

一際大きな痛み の波に、奏夜は膝から地面に崩れ落ちる。
スパイダーファンガイアに応戦していた恵は驚き、一瞬意識を奏夜
に向けてしまう。
スパイダーファンガイアにとって、それは大きな隙だった。

「ふっ!!」

スパイダーファンガイアの口から吐き出された糸が、恵のファンガイアバスターを絡め取る。

そのままスパイダーファンガイアが支点である頭ごと振り上げると、糸に付着したままだったファンガイアバスターが恵の手を離れ、宙を舞う。

「！！　しまっ……」

「ふんっ！」

間髪入れず、スパイダーファンガイアは体内の魔皇力を集め、紫色のエネルギー弾を射出する。

「きゃあああああ！」

生まれた衝撃が恵と奏夜を吹き飛ばす。
手加減していたのか、それが生み出す結果は、二人の意識を奪うに止まった。

「チュ〜リツヒヒヒ！　やった、ついにやったぞ！！　さあ、俺と一緒にいこう！　恵ちゅわ〜ん！」

スパイダーファンガイアの勝利の高笑い、雑木林に轟いた。

~~~~~

「むむっ!?!　この音色は!?!」

紅邸。

ヴァイオリン型の巢箱から飛び出したキバット。

その瞳が捉えたのは、ショーウィンドウに飾られたブラッディローズ。  
ズ。

演奏者がいないにも関わらず、立てかけられたブラッディローズの弦は震え、何かの警告の如きリズムを奏でていた。

「遂にこの時が来たんだな……よっしゃ、待ってるよ奏夜!!  
今こそお前に『鎧』を渡してやるからな!!」

キバットて行くぜ!!!!  
意気込みもハイテンションに、キバットは紅邸から飛び出して行った。

第零話・プレリユードノキング・オブ・ヴァンパイア・Bパート（後書き）

テスト期間なんか爆発しろ！

……すみません。2月までには通常更新に戻す予定です。

・少しだけ踏み出す勇気を得た奏夜。恵も人を見る目はあると思うんですよね。やや強引ではありますが；

・さりげに登場ちび悠二。シャナが見たら可愛さに卒倒する可能性が（笑）

・こうして書いてみると、本当に糸矢のキャラはぶっ飛んでますね

……さすがはディケイドにまで出た愛されキャラだ。

次でビギンズナイト編はラスト。

そして次回、変身です。お楽しみに！

第零話・プレリユードノキング・オブ・ヴァンパイア・Cパート

気絶状態から覚醒した奏夜は、休む間もなく街を駆け回っていた。

「はあ、はあっ……くそっ!!」

苛立ち紛れに舌打ちし、辺りに目を走らせていくが、恵の姿はない。あんな目立つ化け物と一緒にいるのだから、誰か目撃者がいてもおかしくはない。しかし相手はファンガイア。証拠を残さない完全犯罪はお手のものだ。

「おい!!」

「は、はいっ!　　なんででしょうか?」

近くにあった弁当屋の店員に声をかける。  
人嫌いだなんだと言っている場合じゃない。

「このあたりで怪しいヤツ見かけなかったか!？」

「あ、怪しい人ですか?　　さ、さあ……私は今日、朝からずっと

「ここにいましたけど」

「おいバイトくん、ちょっとこっち手伝ってくれー！」

「あ、はい！ あの、お役に立てなくてすみません」

ぺこりと頭を下げ、店員は弁当屋の中に消えていく。時計を見ると、気絶時間込みで一時間は過ぎている。

「マズいな……早くしないと」

奏夜はまた駆け出す。

商店街から離れ、どんどん人影が消えていくが、肝心の恵だけは何処にも見あたらない。

「畜生、どうしろってんだよ……」

焦りと苛立ちをミックスさせながら、奏夜は御崎市外れの雑木林に差し掛かる。

今は使われていない幽霊物件が乱立し、恵を連れ去ったのなら、隠し場所にはもってこいなのだが……。

「うーい、奏夜あ　！」

パタパタと小刻みに聞こえてきた羽音。

飛来した金色の影は、奏夜のよく見知った相棒の姿。

「キバツト!!！」

「ふいー、ようやく見つけたぜえ。こんな町外れで一体何やってんだ？」

「一切合切全部後だ！　お前、ここに来る途中までにファンガイア見かけなかったか！？　早くしないとあの人が！」

「あの人？　誰のことだよ」

「あーもう！　前に風呂場で話したろう！　お前が言ってたモ、モデ……」

「モディリアーニ？」

「多分それだ！　お前がモディリアーニがどうとか話してた時！」

「……ああ！ お前のマスク取ったって女のことか！」

キバットは羽の先で器用にポンと手を打つ。

そして切羽詰まった奏夜の様子。そしてブラッディローズの覚醒から、キバットは大体の事情を察した。

(にやるほどねえ……)

僅かな時間で変わるもんだ。

本当に成長する兆しはどこにでも転がっている。  
だがキバットは、敢えて聞いた。

「探す分には構わねえけど……いいのかよ？」  
「は？」

奏夜は本気でわからないという顔をした。

ほんの数時間前まで、浮かべなかつただらう感情である。

「お前、そのモディリアーニの姉ちゃん助けようとしてるみてーだ



けど、もし助けたら、今までのお前には戻れねえぞ?」

奏夜はあからさまに表情を曇らせ、口を閉ざした。

「誰にも関わらない。自分だけが世界の全て。モディリアーニの姉ちゃんを助けるってことは、今までのお前を全て否定するってことだぞ。」

それだけじゃない。お前は今まであまりに排他的だった。今更他人を受け入れるなら、そのツケを支払わなくちゃならない。それ、とんでもなくツライことだと思っぜ」

それでも。

「助けるのか?      その姉ちゃんを」

「……………」

奏夜はぎゅっと拳を握り締める。

改めて、自分が今までどういう人間だったのかを自覚させられた。  
紅奏夜を理解しようとしてくれた人達を全て拒絶し、容赦なく傷付  
けてきた。

わかっている。

今頃になって誰かを助けても、これまでの罪状は消えない。ただ、  
苦しいだけだ。

けど。それでも。

「……………助けるよ」

小さく、しかしハッキリとした口調で答える。

「正直、まだ人間は苦手だ。ファンガイアと敵対するのだって凄く  
怖いし、そもそも助けられるかどうかだって怪しい」

どう見てもリスクしかない行動。

まさに奏夜の嫌いな正義のヒーローの如き行いだ。

「けど、動かなきゃいけない気がするんだ」

「ほーっ?」

「俺、さっき初めて、心の底から人を助けたいって思ったんだ。それしたら、ブラッディローズの音色が聞こえた。『戦え、戦え』って」

あの音色が聞こえてきた時から、胸の鼓動が止まらない。奏夜の心は、名前のつけられない衝動で満たされていた。

「正義のヒーローになるつもりはない。でも、俺の心が言ってるんだ。ここで動き始めなきゃ俺、絶対に後悔する!」

制御不能な感情が、戸惑いを焼き払い、昨日までの自分を忘失させていく。

生まれ変わっていく自分を止められないまま、奏夜の『心の音楽』は、一際大きな波動を生み出した。

世界中に響き渡るかのように。

新しい自分の目覚めを伝えるかのように。

「俺がどれだけ変わったって構わない！  
ただ俺は、あの人を助けなきゃいけない！  
いや、助けたいんだ  
！」

魂の咆哮と共に吹き上がった魔皇力。  
奏夜が忌み嫌い、抑えつけてきた力が今、再び覚醒した。

（文句なしの合格だな、真夜）

ニヤリと笑うキバット。しかし不敵な仕草とは裏腹に、その表情はどこか嬉しそうでもあった。

「よし、お前がそこまで言うんなら、このオレ様が力を貸してやるよ」

「……力？」

「ああ。真夜から預かってた、ファンガイアにも負けない特別な力だ」

「母さんから、預かってた力？　おいキバット、どういう……」

奏夜が尋ねるよりも早く、キバットは奏夜の左腕あたりにまで降下した。

その口からは、鋭い犬歯が覗く。

「ファンガイアに受け継がれし至高の魔装具『黄金のキバの鎧』。これより継承の試練を執り行う！！」

ガブツ！！

膨大な魔皇力　アクティブフォー스가キバットの牙を介し、奏夜の中に流れ込んでいく。力の注入に伴い、奏夜の頬にはファンガイアと同じ、ステンドグラスの紋様が浮かび上がった。

「う、あああああああああ！？」

焼け付くような痛みを感じながら、奏夜の意識は遠のいていった

そこは、漆黒の闇が支配する世界。  
美しい三日月が、下界の人間を嘲笑うかのように浮かんでいる。  
そして、月が放つ孤高の光をバックに立つのは、禍々しい容姿を持つ異形。

「誰、だ」

異形は答えない。  
蝙蝠を模した仮面越しに此方を見続けるだけだった。  
やがて、銀色の甲冑を揺らしながら、異形はゆっくりと近付いてくる。

淀みない動作で、血に染まったように赤い手が差し出された。

「……」

一瞬、躊躇いに手が震えた。  
弱い感情と戦いながら、恐る恐る手を伸ばし、相手の手をしっかりと握る。

異形は頷くと、仮面の下からくぐもった声が聞こえてきた。

「継承の儀は終わった。闘おう、共に」

うん 頼りない主だけど、よろしく。

御崎市郊外にある寂れた礼拝堂。

若い男女が永遠を誓う祭壇の傍らには、気を失い、黒い気品溢れるドレスを纏った恵が、花の詰まった棺の中で眠っていた。やはりダメージが大きかったのか、気絶から目覚める様子はない。

「おお ! 美しいいいいい……! まあさに天使だあ……」

その側には、歓喜に身体をくねらせるスパイダーファンガイア。ドレスを着た恵の美しさには誰もが同意するだろうが、スパイダーファンガイアの喜び方は、完全に変態のそれだ。

「さて、衣装も整ったし……遂に、遂に念願の結婚式をおおおお  
おおお！」

一際オーバーな動きをしつつ、スパイダーファンガイアは顔と思わ  
しき部分を、眠り続ける恵に近付けていく。

「めえぐみい……これでお前は俺のものだ」

ステンドグラスから零れ落ちる月光が照らす礼拝堂。  
歪んだ誓いが、神の下で交わされる

ガッシャーーン！！

「ヒッ！」

突然の轟音。

礼拝堂上部にあるステンドグラスの窓が次々と割れ、彩りの破片が  
ぱらぱらと落ちていく。

まるで虹の雨だ。



「な、何が……!!」

スパイダーファンガイアに思考の余裕は与えられなかった。割れた窓から、無数の黒い影が、礼拝堂になだれ込んで来たからである。

「ヒッ、な、なんだこりゃあ!？」

影の正体は、無数の蝙蝠だった。

夜の獣達はスパイダーファンガイアの視界を奪い、再び漆黒の闇に消えていく。

「くっ、一体何がどうなって……っ!？」

言いかけて言葉を失う。

いない。さっきまで棺で眠っていたはずの花嫁  
恵がどこにもいない。

「恵!!」

慌てて外に飛び出したスパイダーファンガイア。

眼前にある荒れ果てた広場には霧が漂い、より不気味さが募っていた。

「!!! 誰だ!!!」

ファンガイアの鋭敏な聴覚が、物音を捉えた。霧は段々と彼方に消え、仇なす敵を映し出す。

「貴様は……!!」

愛しの恵を両手に抱き抱える男 紅奏夜を、スパイダーファンガイアは憎しみを込めた目で睨む。

「何故ここが分かった!?!」

「聞いたただけだ。この人の 恵さんの『心の音楽』をな」

そつと、恵を近くの柵に寄りかかせながら、奏夜は抑揚のない声で告げた。

「一応忠告しておく……。死にたくなければ、さっさと消える」

「ふざけるな！　　恵は俺のものだ、人間風情が出しゃばるな！」

「そうか。なら……」

手加減できなくても恨むなよ。  
奏夜はゆっくりと、その左手を掲げた。

「キバット……！」

「おう……！」

飛んできたのは金色の蝙蝠、キバットバット三世。

「よっしゃあ！　キバツて、行くぜ……！」

キバットを右手でキャッチし、そのまま左手を強く噛ませる。

「ガブツー！」

牙から注入されるアクティブフォース。  
鎖と共に巻かれる真紅の止まり木『キバットベルト』。  
そして、頬に浮かび上がるステンドグラスの紋様は『破壊の魔帝』  
覚醒の証。

突如、スパイダーファンガイアの顔が恐怖に歪んだ。  
先刻まで狩る側の目だったそれは、更なる強者に狩られる獲物ではない。

「き、貴様……それは、その、力は……！！！」

奏夜は研ぎ澄まされた眼差しで、スパイダーファンガイアを睨んでいた。

自らの力となった『鎧』を保有するキバットを手前に突き出し、奏夜は叫ぶ。

「変身!!」

キバットベルトに逆さまに止まったキバットの瞳が点滅し、円環状のウェーブが巻き起こる。

変化はそれだけではなかった。

光で構成された鎖が、奏夜の身体に巻き付いていく。

じやらり、と鎖が軋み、まるで、生まれた力に耐え切れなくなったかのように、光は弾け飛んだ

(……………)

暗い夜の冷たさが身を貫く。

背中に堅い感触。

少なくとも家にいるわけではないのは分かった。

首を僅かにもたげると、ぼんやりと古めかしい教会が見える。

(なんで、こんなところに……………)

寝起きで動作不良を起こす頭を全力で回しながら、恵は今までのことを思い出していく。

(……………そうだ。私、あのファンガイアに負けて、気を失って……………)

身体を起こそうとするが上手くいかない。ダメージは大きいようだ。

(……………っそうだ。あの口は……………)

さっきまで一緒にいた青年。

自分が無事だからといって、彼が無事である保障はない。段々と意識が覚醒し、それに伴い、霞んでいた目の視力が戻っていく。

庭園の中心部。対峙する2つの影。

一人はスパイダーファンガイア。

そしてもう一人は

「……………っ!!」

恵は言葉を失った。

その瞳に飛び込んで来たのは、血の如き真紅の外皮。

重厚感溢れる目映い銀色の甲冑。

夜の闇の中にあっても、狩り人の鋭い光を失わない、蝙蝠を模した仮面。

(あれ、は……………まさか!!！)

間違いない。

その名をファンガイアに轟かせ、リーダーである嶋からも、幾度となくその危険性を聞かされてきた『ファンガイア以上の脅威』。

「キバ……!!」

全てを無に帰す破壊の魔帝。

その存在が今、恵の目の前にいた。

「ハッ！」



両腕を大きく広げた独特の構え。  
重量感漂う鎧からは想像もつかないスピードで、キバはスパイダーファンガイアに真つ正面から突っ込んでいく。

「グツ……、うおおお！」

思わぬ敵の出現に怯みこそしたが、スパイダーファンガイアも負けるわけにはいかない。  
花嫁を取り返すべく、こちらも小細工抜きでキバを迎え打つ。

- ガンッ！

生物同士が奏でるとは思えない重厚な音が激突する。  
拳がぶつかり合ったことを認識した瞬間、両者はすぐさま次の攻撃に転じる。

「はっ！」

「しゃあっ！！！」

拳と脚の壮絶なラッシュ。間合いをとったかと思えば、次の瞬間には距離が詰まっている。人外としての強大な力が、夜の暗闇の中でしをぎを削っていた。

激しさを増す戦いは、雑木林に場所を移していく。

「ふっ！」

未だに続く攻防戦の最中、キバは突如スパイダーファンガイアに背を向け、彼の拳を回避しつつ、鮮やかな宙返りを決めた。

しかし、それは防御を優先させての行動ではない。

キバは空中にある脚を、近くに立つ木の枝に引っ掛け、そのモチーフに恥じぬコウモリのように、逆さまの状態でぶらさがったのだ。

「はあああっ！」

「くっ、はっ！」

宙吊りから、スパイダーファンガイアへの猛烈なパンチの嵐。

雑木林に移動したことをすぐさま駆け引きの中に取り入れる手腕が、キバの戦闘センスを物語っている。

「クッ……出でよ！」

肉弾戦では不利と判断したのか、スパイダーファンガイアは左腕に魔力の流れを集める。すると、左腕のステンドグラスの外皮が輝き、ぱらぱらと細やかな破片を落としていく。

落ちたガラスはひとつの形として集束し、一本の長剣を生成した。

「はっ、せいっ！」

鈍く輝く剣が振り抜かれる。伸びたリーチにキバは一旦距離を取るが、攻守が逆転してしまったのは痛い。キバも徐々に追い詰められ、逃げ場を失っていく。

ふいに、背中に何かが当たる感覚。

木が邪魔で後退できない、追い詰められた。

「ハアツ！」

「ぐっ!？」

生まれたチャンスに、キバへと浴びせられる無数の斬撃。

斬られた部位の鎧からは紅い火花が散り、装着者へのダメージも着実に蓄積されていく。

「トドメだあ！」

勝利を確信し、スパイダーファンガイアは最後の一撃を放つ。

ドスッ!!

申し分ないスピードで突き出された鋭き刃が、キバの胴体を貫いた。

「あつ！！」

キバを追いかけてきた恵が、息を呑む。

スパイダーファンガイアに勝利の余韻が、恵に「まさか」と思う気持しが、それぞれ錯綜する。

しかし、

「へっへっへ〜〜！」

「何イ！？」

必殺の一撃にも関わらず、キバには傷一つ無かった。

ベルトに止まっていたキバットが、刃を口に啜えることで防いでいたからだ。

「じゃんにえん（残念）でした！」

「はあつ！！」

「ごぶつ！？」

驚愕に注意力を削がれたスパイダーファンガイアは、キバの強力なストレートをモロに食らう。

木々を薙ぎ倒しながらもその勢いは止まらず、木々の切り開かれた広い伐採所まで、スパイダーファンガイア吹き飛ばされてしまった。

「ぐ、おのれえ……！！」

悔しさに齒を軋ませるが、ダメージは大きい。

動けぬスパイダーファンガイアの前に、甲冑が擦れるような音を響かせながら、キバが近づいてくる。

月明かりを浴び、敵を冷たく見下すその姿は、まるで処刑人だ。

キバは静かに、ベルトのサイドケースから、水晶のように輝く笛『ウエイクアップフェッスル』を取りだし、ベルト中央部のキバットにそれを啜えさせる。

「よし、行くぜえ！！ 『WAKE・UP!』」

ベルトから外れたキバットはキバの周囲を飛び回りながら、高らかにフェッスルを吹き鳴らす。まるで夜の静寂を切り裂くように。

「ハア~~~~ツ!!!」

キバが両手をクロスさせた途端、何処からともなく立ち込めた紅い霧が、夜空に立ち上っていく。

すると、半円だったはずの月が突如、キバフォームの力を最大限にまで発揮できる三日月へと変貌する。

世界の摂理以上に優先される力。その恐ろしさとは裏腹に、夜の漆黒に浮かぶ三日月は妖艶な美しさを放っていた。

「ハッ！」

キバが右足を振り上げると、周囲を飛び回っていたキバツトが、右足に装着されている甲冑『ヘルズゲート』の鎖 否、強大な力を抑える封印を解き放つ。

地獄の門が開かれ、顕現するは悪魔を思わせる赤い翼。

残った左足に力を込め、天高く飛び上がるキバ。真紅の両翼は彼を夜空へと誘っていく。

三日月をバツクにキバは空中反転。スパイダーファンガイアへと狙いを定め

「ハアアアアアア

ッー！」

勢いをつけての急降下攻撃。

天より闇を裂く必殺キツク『ダークネスムーンプレイク』が、スパイダーファンガイアに叩き込まれた。

「ぐっ、おおおおおおお！？」

スパイダーファンガイアは正面からそれを受け止めるが、凄まじい

勢いには勝てず、土埃を上げながら後退していく。  
まずい。このままでは　　！！

「うっ、ああああ　　！」

『逃げ』へと転じる判断はすぐに下された。

渾身の力でスパイダーファンガイアは身体をよろけさせ、ダークネ  
スムーンプレイクのプレッシャーから逃れる。腕が深く挟られはし  
たが、命には代えられない。

「！！！」

キバが驚愕するも、発動した技は方向転換できない。

空振りに終わったキックの力は大地へと叩き込まれ、コウモリを模  
したキバの紋章を、クレーターとして遺すだけに終わった。

一応周囲を見渡すも、既にスパイダーファンガイアは逃げ延びた後  
だった。

「……逃した」

「じゅーぶんじゅーぶん。犠牲者もいねーし、初めてでこれだけや  
れりゃあ上出来だ」

ふうっ、と一息入れるキバ。しかし、難はまだ去っていないかった。

「キバ」

振り向くと、そこには恵が立っていた。こちらに突きつけられているのは、銀色の銃器・ファンガイアバスター。彼女の瞳には驚愕と恐怖の二つが宿っている。

「動かないで」

「……」

キバは動かない。

なめられているのか。自分など、簡単に消せるという意味表示か。恵は内心冷や汗をかきながら、キバと対峙する。

「……ふうっ」

突如、キバの身体がふらりと揺れ、地面に倒れた。

魔皇力強化による負担が身体に襲いかかり、キバの鎧も強制解除を余儀なくされる。

「……えっ？」



これにはさすがの恵もきよとんとする。  
恐る恐るといった風に、キバがいたはずの場所に倒れている人影へと近づいていく。  
やがて月光が、キバの正体を映し出す。

「！ キミ……！」

そこにいたのは、ついさっきまで自分と一緒にいた青年　紅奏夜  
が倒れていた。

傍らには、奇妙な金色のコウモリ、キバットが「お、おい。大丈夫か奏夜〜！」と声をかけ続けている。

「そんな、キミが……キバ？」

「う……」

次から次へと襲い来るサプライズの連続に混乱する恵だったが、すぐに我に返る。  
キバだなんだというよりもまず、倒れた奏夜へのケアが最優先ではないか。

「ちょ、ちょっとキミ！　大丈夫！？」

「う……、は、は……」

「は？」

何が情報になるか分からない。恵は必死に奏夜の声を聞き取ることにする。

「腹、減った……」

「……」

……何のことはない。ただのベタ過ぎる欲求だった。

出会いの夜は明ける。

覚醒の時を、告げるかのように。

後日。市内某所のトレーニングジムにて。

「キバが現れたとは、確かなのか？」

「はい。私もこの目でキバを見るのは初めてなのですが……」

恵が話しているのは『素晴らしき青空の会』リーダー、嶋護。彼女の上司にあたる男だ。

「そうか……わかっているとは思いますが、名護君には言っただけ、真っ先にキバを倒そうとするだろうからな」

「はい。……あの、嶋さん」

「なんだ」

「嶋さんは以前、キバをファンガイア以上の脅威と言っていましたよね？」

「……ああ」

嶋は重量感のあるバーベルを持ち上げながら答える。

「だが私も、キバに関して詳しいわけではない。相手のカードがわからない以上、こちらからカードを切るのは危険だ。」

キミの情報を疑うわけではないが、キバに関しては、しばらく様子を見た方がいいだろうな」

「……はい。了解しました」

「? どうした。何か言いたいことがあるのか?」

「いえ、何でもありません。……失礼します」

ぺこりと頭を下げ、恵は嶋に背を向けた。

嶋が首を傾げたのがわかったが、努めて平静を装い、トレーニングジムの扉を開けて外に出た。  
歩きながら、恵は考える。

(……どうしよう)

嶋には言えなかったこと。

知ってしまったキバの正体 紅奏夜。

素晴らしき青空の会の一員としては、嶋に報告するべきだっただろう。人類の脅威を野放しにはできない。

だが、奏夜がキバであると知れば、最悪彼は処分される。彼の普段の姿を知っている手前、それは嫌だ。

「はあ……ホントどうしよう」

慣れないダブルバインドに重くなる頭で、恵はなんとか『マル・ダ  
ムール』に辿り着く。

コーヒーでも飲んでスッキリしよう。  
そう考えての行動だったが

『……あ』

店の扉を開けた瞬間に後悔した。

カウンター席に誰であろう、さっきまで自分の脳内の大部分を占め  
ていた青年、紅奏夜が座っていたからだ。

「あ、恵ちゃん恵ちゃん。ちよーど良かった」

奏夜と話していたらしいマスターが、恵に笑いかける。

「あの、マスター。その子は……」

「うん。なんか恵ちゃんに用があるんだってさ。      ほらキミ、恵ちゃん来たよ」

マスターに促され、奏夜は立ち上がって恵を凝視する。  
どこか居心地が悪そうな、オドオドした顔つきだった。

「……あの、えつと……」

「……なによ。言いたいことがあるなら、はっきり言いなさい」

もしかして、キバについてだろうかと勘ぐりながら、恵は言つ。奏夜は尚も唸り続けていたが、ややあって、恵を真っ直ぐに見据え深々と頭を下げた。

「その……ごめんなさい……」

「えつ!？」

いきなり謝られた。

しかもあまりにキツチリとした前屈姿勢付きで。

(な、なに!?!? なんでいきなり謝られてるの私!?!)

むしろ助けてもらった手前、自分は礼を言うべき立場だ。  
戸惑う恵に、奏夜は傍らにあった包み紙に入った箱を差し出す。

「あの、これ……ひ、ひどいものですが」

「あ、うん。ありがとう……」

ちなみにこの場合、「つまらないものですが」というのが正解である。

「でも、どうしたのキミ。いきなりこんなお詫びの品まで持って…  
…私、何も謝られるようなことされてないわよ?」

「いえ……あなたがそう思ってなくても、その、俺自身のけじめって言うか……」

「もしかして、今までのつつけんどんな態度のお詫びってこと?」

奏夜は押し黙る。

凶星だったらしい。

「俺、あれからいろいろ考えたんです……。変わるには、どうしたらいいのかって。そしたら、生まれた時からの親友が『まずは歩み寄ることから始める』って言うてくれて……。だからまずは、今まで迷惑をかけた人に謝ろうって、ここに来たんです……。」

あの不遜な態度が欠片も見られないほど、奏夜は緊張しているように見えた。

恵はようやく気が付く。恵が会話の中で見抜いた奏夜の本質。奏夜は今、本当の自分と向き合えるように、始まりの一步を踏み出すとしていたのだ。

「だ、だからその……ひ、ひどいこと言っ、ごめんなさい。凶々しいお願いだって、分かってます。でも、もしまだ許してくれるなら」

掌が、恵に向けて差し出された。



「俺の、友達になってください……!!」

目を伏せて、掌を震わせて、奏夜は恵の返事を待つ。

「……ふふっ」

恵はついつい笑ってしまう。

なんだこれは。さっきまで悩んでいた自分がバカみたいじゃないか。

何がキバだ。何が人類の脅威だ。

(こないいいコが、人を滅ぼすわけないじゃない)

今目の前にいるのは、臆病で、不器用で、けれど変わるために精一杯の勇気を示している、ただの男の子。

そして多分、これから長い付き合いになるであろう 友達だ。

何の迷いもなく、恵は奏夜の手を握り返す。

顔を上げた奏夜を真正面に見つめ、恵は笑顔と共に言う。

「これからよろしく。奏夜くん!!」

奏夜の表情はみるみるうちに喜びに彩られていく。

それが、奏夜が恵に見せた最初の笑顔だった。

「はいっ！ よろしくお願いします、恵さん!!」

全てはここから始まった。

これはやがて、紅蓮の炎を引き寄せることになる運命の牙。  
その誕生の記録である。

第零話・プレリユード/キング・オブ・ヴァンパイア・Cパート(後書き)

ビギンズナイト完結！

・さりげに登場している奏夜の想い人。ちなみにちび悠二と同じく、二人はこの時に出会っているのを忘れていきます。

・キバの継承シーンはオリジナルです。ちょっと神秘的なイメージにしてみました。

・ダークネスムーンブレイクは残念ながら失敗。このあとの展開上、糸矢を消すわけにはいきませんから(笑)

今後も、成長を続ける奏夜を見守っていただければ幸いです。では、また本編にて(＾O＾)

第二十六話・グラীবエノ枯木寒蔵の給仕・Aパート（前書き）

「メイドとは、清掃、洗濯、炊事などの家事労働を行う、女性使用人を指す。

英国のヴィクトリア朝時代には、レディースメイド、キッチンメイド、ハウスキーパーと、仕事内容や階級によってかなり種類があったらしい。いいねえメイド……男のロマンだ」

キバツトバツト三世

## 第二十六話・グラーヴェノ枯木寒巖の給仕・Aパート

「諸君、期末テストが近い！」

異世界の旅人、デイケイドこと門矢士の訪問。『けいおん！仮面のヴァイオリン弾き』の世界で戦うキバ、桜井クロノとの邂逅。非常識且つ非現実的な事件から数週間。戦いの傷痕もようやく癒え、非日常は再び日常に埋没しようとしていた。

そして、紅奏夜もまた、自分のあるべき姿である教師に戻り、御崎高校一年二組の教壇に立っていた。

黒板に走り書きされたのは『期末テスト週間』の文字。学業で避けては通れない関門を前に、クラス中（シヤナ除く）が妙な雰囲気にも包まれている。

「夏休み前で浮かれがちになるのは分かるが、こいつを乗り越えんことには、幸せな休暇は有り得ない。各々、赤点を取るような真似だけはしないように。……何よりも、誰かが補習を受けることになるものなら、俺の休みが減るからな！」

最後に残念な本音を付け足すのは、流石紅奏夜といったところ。クラスが白い目線を向ける中、奏夜の話は進む。

「あと、このクラスは大丈夫だろうが、不正行為とかはするなよ。具体的には第三の目で上から解答を見たり、写輪眼で相手の動きをトレースしたり、試験官の中に傀儡人形を紛れ込ませたりすることだ」

「先生、心配しなくてもこのクラスの中に忍者は一人もいません」

超人的力を持つ人は何人かいるけれど。

悠二は隣に座る少女をちらりと見る。

「当日に不正行為が発覚した場合、イスの下に仕掛けられた推進用エンジンが火を吹き、不正者は天井へ激突するからそのつもりで」

どこのAngel・Beatsだよ。

誰かが呟いたが、奏夜は無視してホームルームを終了した。と、そこで止めればいいのにも関わらず、佐藤が口を開く。

「あの、先生」

「ん?」

「今の話……どのあたりまで本気ですか？」

扉に手をかけていた奏夜はしばらく口を閉ざした後、彼の答えを待つクラスメートに向けて、

「……………ふふふふふふふふふふ」

(怖えええええええ！！)

奏夜が出ていった後、教室内にはイスの下を調べる生徒の姿があったとかなかったとか。

2918

「勉強会？」

授業後の『カフェ・マル・ダムール』。

バウンティハンターとしての仕事を終え、一服していた名護啓介に舞い込んで来たのは、自分のよく知る少年少女達からの、意外な頼みだった。

「はい。今度の期末テストに向けて、三日くらい佐藤の家で勉強会

をする予定なんです」

頷く悠二と同じテーブルには、シヤナ、吉田、池の姿もある。

「勉強会か……懐かしいねえ。ボクらも学生の頃はよくやったもんだ」

全員にコーヒーを振る舞いながら、マスターが遠い目で語る。

「あ。わざわざすみません……」

「なんのなんの。あ、シヤナちゃんには砂糖もあるからね」

「ん」

吉田が申し訳なさそうに頭を下げる傍ら、シヤナは出された砂糖を丸々五本、コーヒーに注ぎ込む。  
甘党は相変わらずである。

「そ、それですね」



シヤナの砂糖の量に引きながら、池が言葉を継ぐ。

「勉強会をやるのは構わないんですけど、問題は田中と佐藤と緒方さんの三人でして」

問題。学業において、意味が分からない名護ではなかった。

「……参考までに、速人君が今挙げた三人の成績は？」

「はつきり言って、三日漬けでも危ういですね」

しれつと言い放つ池。頼み事をする手前、事実をぼかすようなフオーはできない。

「だから、僕や吉田さんで教え切れるか不安で、もし名護さんがよければ、勉強を教えて貰いたいって思ったんですけど」

ちらりと、名前が省かれた二人を見る名護。

悠二は苦笑しながら「僕は誰かに教えられるような学力じゃありませんから」と言い、シヤナは黙々と甘味たっぷりのコーヒーを飲んでいった。

確かに、没個性を絵に描いたような彼のこと。本人の言うように、学力は可もなく不可もなくといったレベルなのだろう。名護以上の頭脳を持っているかも知れないシヤナにしる、性格的な面からして、教鞭を取れるような性格とは思えない。

(まあ、私も人のことは言えないが)

いや、学業などの誰でも教えられることなら教えられる。だが、誰にでも教えられないこと 例えば、誰かに道を示したりはできない。

教える資格がない、とも言えるだろう。その事實は、彼らの教師や、ミュージシャンの青年との関わりの中で、重々承知している。しかし、だからこそ、

(教えられる限りのことは、教えなければな)

大人として格好がつかない。

「わかった、何でも聞きなさい。及ばすながら力になろう」

「ありがとうございます！」

池や悠二としても、名護の協力はありがたい。普段から忙しい身のようだから、スケジュール的に不安だったのだが、取り越し苦労だったようだ。

池が三日間の予定を簡単に説明している間、吉田一美はマル・ダムールをぐるりと見渡し、ふと尋ねた。

「あの、名護さん」

「ん？ 何かな、一美君」

「太牙さんって、今はどうされてるんですか？ 最近はどこでもなかなか会えなくて……」

そう言えば。と悠二もマル・ダムールの客に視線を移していく。吉田の言う通り、レティシアの一件から、太牙とのエンカウント率が大幅に下がっていることに気が付いたからだ。だがいくら探しても、太牙の姿は見当たらない。

「まさか、ご病気が何かなんじゃ……」

「ああ、それなら心配しなくていい」

不安気に訊く吉田だったが、名護は顔色を変えず、コーヒーを口に運んでいる。

「太牙は今、用事で海外に飛んでいるんだ。数週間かそこらで戻ると言っていたよ」

「用事って……太牙さんの会社の？」

世界を束ねる大企業、D & Pの社長となれば、何か大きな取引か何かだろうか。

「いやいや、そんな大層なものではないさ。ちょっと、ロックコミュニケーションを迎えにね」

名護の返答に、全員の頭の上に疑問符が浮かぶ。

ロックコミュニケーション？ 会社のイベントにでも呼ぶアーティストか何かだろうか？全員の反応を楽しむように、名護は表情を崩す。

「君達はまだ、気にしなくてもいいことさ。それよりも、今はテストに集中しなさい」

(……なんか、はぐらかされたような気がする)

心中で悠二はぼやくものの、テストの重要性から、その思考を隅へと追いやった。

「取り敢えず、私の方でも計画を練っておこう。期待しておきなさい」

「勿論期待してますよ!!」

……点数次第じゃ奏夜先生、カンニングしなくても推進用エンジンで天井激突させそうですし」

「推進用エンジン!？」

「激突!？」

およそテストとは結びつかない単語に、奏夜の授業方針が理解できなくなる名護だった。

いや、元より誰にも理解できないかも知れないが。

(……面白くない)

むしゃくしゃしながら、シヤナはコーヒを一気に飲み干す(砂糖

の恩恵があつても苦みは消えず、軽く涙目だったが。

最近、気が付けば悠二と吉田一美に注意を払っている。いや、正確に言えば、ミサゴ祭りのあつたあの日からだ。

『私も、坂井君が好きなの』

吉田から放たれた一言は、シャナにとってどんな“徒”よりも恐ろしかった。自分や悠二の立つ世界を知って尚、その先に進んだ吉田は、もう気弱な少女ではない。

悠二は私と同じ世界の存在、という逃げ道は、完全に絶たれてしまった。もうシャナは逃げられない。吉田と立ち向かう為には、もはや認めるしかなかった。

(私は、悠二が好き)

そう。心の中でなら、いくらでも認められる。

(でも)

選択肢のない一本道が目の前に広がっていても、シャナは進めずにした。

認めることはできても、それを行動に移すことができなかつたのだ。

(好きが……怖い)

愛情 『どうしゃうもない気持ち』の力を、シャナは知っている。悠二と一緒にいてくれる。そんな単純なことだけで、いくらでも戦う力を得ることができた。しかし同時に、その無限にも近い力が、諸刃の刃であることも感じていた。

(私が、変わってしまう)

無尽蔵な力の出所は、これまでの 『フレームヘイズとしての自分』には無かったもの。悠二を好きだと認めることは、今まで積み重ねてきたものを、全て破壊してしまう。

アラストールが。

シロが。

ヴィルヘルミナが。自分をフレームヘイズとして育ててくれた人達の想いまでも、全て。

(なのに)

踏み出したいと考える自分も、確かに存在していた。  
無慈悲なダブルバインドは、シャナの心を常に掻き乱す。

(どつしたら、いいんだろう)

悠二と吉田から強引に目を逸らし(自分を除いて話す悠二など、見ていたくなかった)、バックの中に入れていたメロンパンを取り出すとする。

大量のメロンパンの中から引っ張り出した銘柄は

「あ……」

出てきたのはこの辺りでは決して売っていない銘柄。  
いや、『この世界』ではというべきか。

(桜井黒乃から、貰った銘柄だ)

門矢士　　デイケイドの一件から間もなく、シャナ達が迷い込んだ  
『けいおん！仮面のヴァイオリン弾きの世界』に存在した仮面ライダー、桜井黒乃。

これは彼との別れ際、渡されたメロンパンだ。



「はむっ」

紙製の袋を開けて一口。彼女のメロンパンに対する持論、カリモフの食感を味わうことも忘れない。

(美味しい)

口に広がる幸せは、僅かな安らぎを与えると共に、あの世界での出来事を思い起こさせる。

(そう言えば、中野梓にだけ相談したんだっけ……私の気持ち)

あの世界で出会い、桜井黒乃の彼女である中野梓。

ついこの間まで、自分と同じ立場であった彼女に、シヤナはふとした拍子に、自分の『何にもならない気持ち』について吐露していた。

梓は「私も同じだよ」と言った。自分の気持ちに臆病だったと、黒乃から告白してくれなかったら、告白できていたかわからなかったと。

『でも大丈夫だよ！ 吉田一美さんの事は知らないけど、シヤナちゃんと坂井君、仲良さそうに見えたもん！』

シヤナの稚拙で我が儘な悩みを受け止めた上で、梓が掛けてくれた言葉は本当に嬉しかった。

だからこそ、力になろうとしてくれた彼女に、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

立ち止まって、怖がって、自分は何をしているのだろうか。

( どうすれば、いいの? )

誰にともなく、シヤナは心の中で問いかける。

誰に問いかけようが、自分でどうにかするしかないと知りながら。

『 本当に大丈夫? 遠慮しなくてもいいんだよ 』

「 大丈夫だって。傷も全快したし、メシくらい自分で作れるよ 」

夕方の商店街。奏夜は携帯を片手に、自販機の前で飲み物のラインナップを見ていた。電話向こうの相手は、気の置けない友人であるところの野村静香。

その内容は、レティシア戦で病み上がりの奏夜を心配し、家事の手伝いを買って出たいという旨だった。

『でも、タツロットくんが戻ってきたなら、ご飯の量も増えるでしょ？ やっぱり私も手伝いに行っただ方が……』

「普段の分量に一人加わったくらいで、そう変わるもんでもないさ。キバットもキバーラもタツロットも、そんなに食うわけじゃないしな」

自販機のボタンを押すと『タカ、カン！』の音声と共に、缶が取り出し口に落ちる。

最近の自販機は独創的だな。と感心しつつ、奏夜は缶を取り出して歩き出す。

「だいたい、そう何度もお前の手を借りてちゃあ、格好つかねーしな」

『手を借りるって……私、そんなの全然気にしないよ？』

「お前が気にしなくても俺が気にする」

そうでなくても、静香には今まで散々世話をかけてきたのだ。自分の都合で彼女の時間を削るようなことは、もうしたくない。

「それに」

奏夜は静香への気遣いを持って言葉を継ぐ。

「四年前とは違うんだし、お前も俺ばかりに構わなくてもいいんだぞ？」

『……………』

突然、電話向こうにいる静香の空気が変わった。しまった、と直感的に奏夜は判断する。知らず知らず、何かしらの地雷を踏んでしまったのだろうか。

「し、静香さん？」

『駄目かな』

「えっ？」

『構っちゃ、駄目かな』

トーン的には、いつもと同じに聞こえる静香の声。  
しかし、そこから読み取れる感情が、やや影を帯びていることは、  
奏夜にも分かった。

『奏夜は私といるの、楽しくない？』

「え、あ、いや……」

『もし奏夜にとって私が迷惑なら、そう言ってくれれば……』

「待て待て待て待て！ 自分を追い詰め過ぎだろ静香！」

何故夕飯の話から、ここまでのシリアスマードに発展しているのだ  
らう。

いつも思うことだが、女性はやっぱり分からない。

奏夜が頭を掻きながら「悪かったよ」と告げると、静香も落ち着い  
たらしく、慌てた様子で、

『う、ううん、こっちこそゴメン！ 訳分かんないこと言っちゃっ

て  
『

「気にしてないよ。」

とにかく俺は、静香を邪魔に思ったことは無いし、これからもそんなことは有り得ない。分かったか？」

『……………うん』

「よし」

仲直り。静香の声にも明るさが戻っていた。ネガティブになった理由は分からないが、普段の静香に戻ってくれたならそれでオーロK。

次のヴァイオリンレッスンの日取りを伝え、静香との通話を終える  
奏夜。

「……………ふう」

静香に言ったことは、半分本当で半分嘘だ。

彼女が傍にいてくれることは嬉しいし、出来ることなら、ずっと付き合っていきたい友人だと思っている。

だが同時に、静香は自分以外の誰かを見ていて欲しい　　という気

持ちもあった。

「自分勝手だな、俺も」

長い間、自分を支えてくれていた静香に向かって、なんと都合のいい理屈を押し付けているのだろうか。

けれど、そう思うことは止められない。

今はまだいいが、もしこれ以上、静香と深く繋がりを持ってしまつたら。

万が一にも、『あの感情』を抱いてしまつたら。

奏夜が最も恐怖するモノ。その資格がないと知りながら、未練がましく手を伸ばしてしまうモノ。

「……………くっだらない」

止めよう。

こんな思考、所詮は一過性の風邪みたいなものだ。

レティシアのことがあったから、つつい考え過ぎているだけの話

に決まっている。

沈んだ気分を誤魔化すかのように、奏夜は先ほど買った缶の蓋（タカカン茶とロゴが彫ってあった）に指をかけた。

「おい、そのアンタ」

呼び止める声が出た方に顔を向けると、そこには露店を開く一人の男の姿があった。粗末な机の上に置かれた物品を見ると、どうやら占い師らしい。

男は指先で三枚のコインを弾き、コインの出た面と奏夜の顔を見比べ、言った。

「アンタ、随分と捻くれた運命を持っているようだな」

「……出会い頭にその言い草は無いんじゃないの？　　占い師さん」

「いや、事実を言ったまでのことだ」

そのまま無視してもよかつただろう。

だが奏夜は戯れのもりか、男の目の前に座った。



「今日、お前にとって重要な出会いがあるだろう。その出会いは幸福を呼ぶか、不幸を呼ぶかはまだ分からないが、とにかく重要な出会いだ」

「重要な出会い、ね」

勘弁して欲しい。

ただでさえ変人奇人のオンパレードなのに、これ以上濃いキヤラクターを増やして何になるというのだ。  
所詮は戯れに過ぎないか。溜め息混じりに、奏夜は席から立ち去る。

『~~~~』  
『』

頭の中に響き渡るのは、ファンガイア来訪を告げるブラッディローズの音色。

奏夜は舌打ちと共に虚空を睨む。

「……………アンタの言う出会いなのかどうかは知らないが、少なくとも不幸な出会いはあるようだぜ」

占いの駄賃に、結局蓋すら開けなかったタカカン茶を占い師に放り、奏夜は商店街を縫うように駆け出した。

「忘れるなよ。俺の占いは当たる」

去り際、奏夜の背中に向けて、占い師がぽつりと言葉を贈った。

ブラッディローズの旋律が導いたのは、商店街からそう遠くない場所に位置する公園だった。息を切らしながら公園の土を踏み、ブラッディローズが感知したファンガイアを探す。だが散々探した挙げ句、見つかったものは

「……………つ畜生！」

ベンチの前に倒れているのは、ライフエナジーを吸われ、色素が透明化した老人。犠牲者が増えてしまった事実を痛切に悔やみながら、奏夜は遺体の傍に膝を下ろす。

「さすがにそう時間は経ってないな。誰でもよかったのか、それと

もこの人に何か怨みがあったのか……」

大抵は前者だが、偶に後者の場合もある。近くに掟破りのファンガイアが潜伏している以上、どんな情報も見落とせない。それによって、被害者の数が段違いに減るからだ。

更に調べていくうちに、奏夜はふと、奇妙な点に気が付く。

「この傷……」

この傷とは、ファンガイアがライフエナジーを吸う際、人間に突き立てる『吸命牙』の傷痕のことである。

しかし、被害者の首筋にあるこの傷痕はファンガイアと一致しなかった。

何度もこうした事態を目の当たりにしてきた奏夜が思うのだから、間違いない。

（他の13魔族か……いや、ならブラッディローズは何故反応したんだ？）

ファンガイアではない。しかし、ファンガイアと限りなく近い何か

というところだろうか。

「……まあ、あとは兄さんとこの会社に調べて貰うか」

ケータイを取り出し、D & Pの上役のアドレスを探す。太牙が不在の間、有事の時にと教えられた番号だ。

連絡先を見つけ、相手が出るのを待ちながら、奏夜は何となしに周囲を見渡す。

(そーいや、4月の今ぐらいだったなあ。ここでシャナと会ったのって)

紅世の存在を知って、もう半年近く。

あの時　まだシャナと呼ばれてすらいなかった少女をキツカケに、全てが始まったのだ。

「最初の出会い方は酷かったなあ」と、奏夜は半年前を思い起こす。

「確かあの時は掟破りのファンガイアを倒して」

季節外れな桜色の陽炎が、公園の景色を包み込んだ。

「……そうそう、こーんな感じに封絶が貼られたんだっただ」

引きつった笑みを浮かべ、奏夜はケータイを静かに閉じた。これから先、話す余裕があるかは分からないからだ。

「誰だか知らんが、あまり物騒な空気を出さないでくれるか？俺は平穏を愛する男なんでね」

「くだらない講釈を聞く気はないのであります」

よく通る女性の声に、奏夜はゆっくりと後ろを振り返る。

そこにはいつの間にか、一人のメイドが立っていた。

(……うわ)

つい思考がフリーズしてしまった。

限りある人生の中で、振り向いた先にメイドがいるという事態に陥るなど、一体どれだけの低確率なのだろう。

しかも、オタクが信仰するような萌えを醸し出すようなものではなく、どこぞの名家にでも仕えていそうな完璧なる着こなしを見せるメイドだ。

白いヘッドドレスと薄紫の髪の下にある顔立ちは整い、感情の読めない凜とした表情は、深窓の令嬢といった雰囲気を纏っている。

トドメに、背中には「これから山登りでもするのか」と言いたくなるような、巨大なりユックサック。

(もつどこからツッコミを入れればよいのやら)

今まで出会ってきた中でも五指に入る奇人の登場に、奏夜はリアクションらしいリアクションを取れないでいた。

「あー、あんだ。フレームヘイズか？」

メイドは小さく頷き、

「あなたはどうかやら、ファンガイアのようにでありますな」

「ああ、一応な」

半分だけだが。

奏夜の答えに「ふむ」とメイドは短く言う。

「ファンガイアの事情に手を出す気はないのでありますが……このような状況に出くわした以上、知らぬ振りもできないでありますな」

2942

メイドがリュックを下ろすと、彼女から放たれる空気が変わった。  
凄まじい気迫に何事かと奏夜は身構えるが、ふと思いつく。

目の前に死体。もし途中から来た者がこの状況を見たら、どう思う  
だろうか？

(完ッ全に俺悪役じゃん……)

早めに逃げ出しておくべきだったか、と後悔するがもう遅い。多分、  
弁明しても信じて貰えないだろう。

なぜか、このフレイムヘイズはそういう奴だと、確信することができた。

「正当防衛だから、多少ボロボロになっても恨むなよ」

「自由」

召還したザンバットソードを担ぎ上げた奏夜の眼光に怯むことなく、メイドも奏夜を睨み返す。

取り敢えず言えることは一つ　どうやらこの出会いは、不幸なものになりそうだということだ。



## 第二十六話・グラウヴェ/枯木寒蔵の給仕・Aパート（後書き）

・ヴィルさん参上。いきなりバトルなところは、あの弟子<sup>シヤナ</sup>ありてこの師匠ありということ。今後、奏夜との絡みが増えていきそうな予定です。

・動き出すファンガイア以外の種族。ヴィルさんも出たので、以前の予告通りに『あの話』をそろそろスタートさせるかも知れませんが。

・今回は闇丸・EXE先生の『けいおん！仮面のヴァイオリン弾き』とリンクしております。この場を借りまして、闇丸・EXE先生、コラボ企画本当にありがとうございましたm(´`´´´)m

ここらで一つお知らせを。

今回の話から、一話のストーリーをAパート、BパートわCパートの三分割に変えます。最近プライベートが忙しくなってきたので、更新速度を上げるための処置です。

次回はVSヴィルヘルミナと、みんなのテスト風景がメインです。またお楽しみに！

では( ^o^ )

## 第二十六話・グラブエノ枯木寒蔵の給仕・Bパート

『で？　コイツは一体どういう状況だ？』

「俺が説明して欲しいくらいだ、よッ！」

ザンバットから聞こえる次狼の声を聞きつつ、奏夜はメイドとの距離を一気に詰める。

最初にああは言ったものの、相手はフレイムヘイズ　立場的には味方。さすがに手加減の文字が頭から離れなかったのか、奏夜は刀身の腹で（ザンバットソードは両刃の為、峰打ちができない）メイドの胸を狙う。

「遊戯のつもりでありますか？」

「いつ!？」

しかしその一撃は、軌道上に現れた白い布切れに阻まれた。

（布切れ……いや、リボンか。しかも桜色の炎がチラついてやがる）

そのリボンは、メイドの纏うエプロンの背面、結び目から数本に渡って伸び、幾重にも重なったことで生まれた防御力が、ザンバットソードを受け止めている。

(このリボンが、このメイドが持つフレイムヘイズとしてのスキルと見て間違いない)

剣を退いて距離を取る間に、奏夜の分析は済んでいた。

メイドの能力の本質が掴めたわけではないが、リボンの持つリーチからして、攻撃は中距離を主とする筈。

あのリボンの壁もなかなかの防御力だが、貫けないレベルとも思えない。

(接近戦狙って、魔皇力で強化したザンバットソードを叩き込む)

(おい、生身で大丈夫なのか?)

(キバットが来ないんだよ。俺の身体は普通の人間よか頑丈だし、仕方ないさ)

この公園は、紅邸からやや離れている。キバットが来るには、まだ時間がかかるだろう。

（だから次狼、ラモン、カ。お前らはザンバットの中から指示を頼む）

（了解）

（任せといて！）

（わかつ、た）

柄を握り締め、奏夜は接近戦に持ち込むべく、地を強く蹴る。達人の域に達する速さに対し、メイドは顔色一つ変えず、数本のリボンを伸ばしていく。その先端は刃のように尖り、桜色の炎を纏っている。

「ふっ！」

息をつき、奏夜は全神経を張り詰める。

『右後方上段！』

『返す刃で正面左！』

『最後に、真上』

ザンバットからの指示を、機械のような精密動作で実行。膨大な魔皇力が込められた刃は、奏夜を捉えようとするリボンを即座に両断していく。

パラパラと落ちていく切れ端に、メイドは僅かに驚きを滲ませた。

(少々、嘗めていたようではありませんな)

あそこまでの確に防御されるとは予想していなかったのか、彼女は奏夜への評価を改める。

「さてさて、遊戯をしてるのはどっちだろうな？」

「どうやら、一介のファンガイアではないようでありますな。……何者でありますか」

「おやおや。この世にまだ、俺という稀代の天才を知らずにいる人間がいたとは驚きだ。アンタ、時流に乗り遅れてるぜ」

奏夜は不敵に口角を吊り上げ、漲る自信を言葉に乗せる。奏夜としては普段通り、音也譲りのオレ様発言。

そのつもりだった。

「俺の名は紅奏夜。えらくいい人だ！　いずれ、全国の教科書に俺の名が載ることになるだろう！！」

普段なら、相手の対応は怒られるか呆れるかの二択。  
しかしメイドの反応はそのどちらでもなかった。

（あれ、なんかスベったか？）

呑気も甚だしい心配をする奏夜を余所に、メイドは呆けたように口を開き、身を貫く驚愕に身を震わせていた。

（まさか、そんな）

そんなことは有り得ないと、自分の思考は判断を下している。  
しかし、見開かれた水晶のような瞳に映された奏夜の姿は、否応無しに『あの男』と重なる。

知らず知らずのうちに、その名は口をついて出てきていた。

「音也？」

「……はあっ!?!」

今度は奏夜が驚愕する番だった。  
当然だろう。

紡がれた名前の主は、偉大なる彼の父親。初対面のこのメイドが知っている筈のない名前だ。

奇妙な沈黙が、二人の間を支配する。  
互いに剣とリボンを携えてはいるが、それを相手に向けることなく、会話を交わすこともできなかつた。

ギヤオオオツ!!

『！』

静寂を切り裂く雄叫びに、二人は一瞬で我を取り戻す。  
膠着状態を破った声の出所は、今まさに飛来せんとする巨大な影。

「ドラン！？」

粉塵を巻き上げて着地したキャツスルドランは、奏夜を一瞥したか  
と思うと、口からオレンジ色の光球を吐き出した。

「なっ！？」

突然の行動に判断が遅れた奏夜は、あっという間にオレンジ色の光  
球、ドランポッドに包まれてしまっていた。

「おいコラ、ちょっと待てキャツスルドラン！！      俺はあのメイ  
ドに聞きたいことが……！！」

主たる奏夜の命令さえも聞かず、キャツスルドランはそのまま奏夜



入りのドラムポッドを飲み込み、彼をドラムプリズンに転移させる。飛び立つ間際、のそりとメイドの方に首をもたげた。

「っ!!」

来るか？

メイドは警戒心を強めるが、それは杞憂に終わった。

キャットスルドランが襲いかかるどころか、彼女に向かって恭しく頭を下げたからだ。

さながら、自分に敬意を払っているかのように。

もしや、と思い、メイドは尋ねる。

「クイーンの、キャットスルドランでありますか？」

その質問には何も反応を見せないまま、キャットスルドランは翼を羽ばたかせ、大空へと舞い上がっていった。

「あっ」

思わず手を伸ばすが、それで大空を飛翔するキャットスルドランが制止するわけもなく、巨大な竜の姿は瞬く間に見えなくなってしまうた。

「……」

「意識覚醒」

ヘッドドレスから聞こえる相棒の素っ気ない声に、メイドは「すまないのがあります」気を張り直す。

「ティアマター。さっきの男は」

「事実無根」

自身の契約者の推論を即座に察しつつ、しかし“夢幻の冠帯”ティアマターはそれを否定する。

「時代錯誤」

「……で、ありますな」

メイドは自分の愚かな推論を恥じる。

何を馬鹿馬鹿しいことを考えているのだろう。

『あの男』はとうの昔に、文字通り消えてしまった。さっきの男は似ているだけで只の別人。その程度の偶然は、自分の立つ世界では十分に起こり得ること。ましてや、人食いのファンガイアとあの男を同列に考えること自体間違っている。

(あいつは馬鹿でありましたが、人間に害を為すような愚か者でもないのです)

そう結論づけてしまえば、後に残るのは一つの感情だけ。

そう、あの奏夜と名乗る男と顔を合わせた時から感じていた、拭うことのできない不愉快さだけだった。

「気に食わないのであります、さっきの男」

何故か、気に食わない。

らしくもない心持ちのまま、『万条の仕手』ヴィルヘルミナ・カルメルは、さっきの男が消えた大空を見上げていた。

「ぎゃふん!!」

いささか古い文句を漏らし、奏夜はドランプリズンの床に顔面から落下した。

「痛てて……鼻打った」

「あつ、奏夜!! いいところ!!」

「おお、キバットにタツロット。こりゃ一体どうしたわけだ?」

「どうしたもこうしたもありませんよ。ワタシとキバットさんが奏夜さんのところに向かおうとしたら、フェッスルも使っていないのにドランが飛び出して、ワタシ達の指示も聞かなくなっちゃったんですぅ〜!!」

「ああ、俺の命令も聞かなかったよ。ったく、ドランも反抗期か?」

ドランは人間に換算すると、それなりに歳をとっている筈なのだが、周囲を飛び回るキバットとタツロットの話を耳に入れながら、奏夜

はザンバットから次狼、ラモン、力を解放する。

「どうだ次狼。お前から見てドランの様子は」

「ふむ……。さっきはともかく、今は際立っておかしな様子は無いな」

「うん。もう元のビルに向かっているみたいだよ」

「元気な、男の子、です」

「力、言葉の使い所間違っているぞ。……そうか、異常なしね」

ことドランについては、次狼達アームズモンスターの言葉は信用できる（なにせドランプリズン在住期間は26年だ）。

だが、いくら信用度が高くとも、この状況では謎が増えるだけだ。

「三世やタツロットはともかく、奏夜の命令も聞かなかったというのは気になるな」

次狼は取り敢えず、気になったことを挙げてみることにした。

「基本的にドランは、キング代行者である奏夜に逆らわないハズだ」

「そこなんだよなあ。俺以上に優先される命令者っていうと、兄さんと先代キングくらいだろ」

「じゃあクイーンはどうだ？」

「母さんはファンガイアの力を失ってるだろ。失う前に、何か命令を出しておいたなら話は別だけどな」

「ですけど、それにしてもおかしいですよねえ。まさか『メイドと奏夜さんが戦ったら止めに入れ』って命令でも出しておいたんでしようか？」

「俺にメイド萌えの属性はねえぞタツロット……父さんじゃあるまいし」

「父さんか……そう言えばあのフレイムヘイズ、音也のこと知ってたみたいだね」

そう、ラモンが指摘した点も、謎を深める要因の一つである。

何故見ず知らずの、それも“紅世”の存在が、音也の名を知っているのか。

ドランのことも含め、理解不能な事態のオンパレードだ。

「お前ら、今回のことはシヤナ達に黙っとけ。事態の全容も見えないのに、余計な心配事を増やしてもつまらないからな」

『了解』

五人（正確には五匹）に口止めを済ませ、普段は次狼達のゲーム用テーブルに腰を下ろす。

卓上には、彼らの使用した痕跡を残すチェス盤が置かれていた。

（それにしても……）

チェスの駒を指先で遊ばせながら、奏夜は先刻のメイドを思い出す。戦いを挑んできたことはいい。誤解を持たれることには慣れている。だがそれとは別に、奏夜はあのメイドに不快感を覚えていた。

「あのメイド、いけ好かねえ」

何故だか分からないが、気に入らない。  
奏夜が動かした駒が、乾いた音を立てた。

佐藤家邸宅。

そこは、テスト週間という地獄を生き抜く学生達が、ひたすら鉛筆を走らせる修羅場と化していた。

「……おい。田中、佐藤、緒方さん、生きてるー？」

『……………』

返事がない、ただの屍のようだ。

メガネマン、池の声にも反応せず、沈黙したまま机に突っ伏す佐藤、田中、緒方の三人。もはやダイニングメッセージでも書きかねない状態である。

「こら三人共、だらしがないぞ。さあ、鉛筆を進めなさい」

同じ机に座るのは、青地の753Tシャツと必勝八チマキを巻いた



名護啓介。

参考書と指差し棒を持つ姿から発せられるオーラは、スパルタ教師の風格を漂わせている。

事実、名護が作っておくと言った勉強計画は、勤勉な池をもつてしても「これは効率的だけどエグい」といわしめるレベルのハードメニューだった。

シヤナに池。普段からこまめな勉強を心掛けている悠二はまだついていけるが、あまり成績の芳しくない三人にとっては、思考能力のキヤパを超えてしまうのも無理からぬことである。

「そんなことではこの不況を乗り切る学力は身に付かないぞ。もっと学ぶ姿勢を身に付けるんだ。速人くんやシヤナくんを見習いなさい」

「名護さん、今の田中達にシヤナを目指させるのは酷です」

「悠二。甘やかすためにならない」

さすがに哀れに思った悠二のフォローにも、シヤナの厳しい一言が入る。悠二本人にも飛び火しかねない為、ここは素直に退いた。代わりに池が、苦笑混じりに言う。

「逆に言うなら、ちゃんとやればためになるぞ。名護さんの教え方、凄く的確だし」

「いや、速人くんもなかなかだぞ。問題の理解の仕方を見抜き、どう正確に理解すべきかを教えていくのは非常に合理的だ。逆にシヤナくんは、有能故に相手が何を理解出来ないのか分からないから、教え方が下手になってしまっようだね」

「だってさ」

「うるさいうるさいうるさい、始まる前にやり方は知らないって言った!」

名護の分析と悠二に笑われたことに顔を赤らめるシヤナ。疲弊した空間に、僅かながら和やかさが戻っていた。

「みんな、お茶が入りました」

「やあやあみんな、勉強は進んでるかしら?」

ちょうど気が緩んだ場に、台所から恵と吉田がトレイを持って現れる。

ちなみになぜ恵がここにいるのかというと、名護が勉強の手伝いをするの聞き「楽しそうだから混ぜて!」の一言で、彼に引っ付いてきていたのだ。

彼女と吉田の間には、菓子運ぶ愛娘、由利の姿もある。

「うわー、こりゃ予想以上にぐったりねえ」

「美おねえちゃん。ゆりが、みんなにおかしくぼるね」

「うん、お願いね。由利ちゃん」

健気にトレイを持っていく由利に、吉田は微笑む。弟がいる彼女だが、女の子にお姉ちゃんと呼ばれるのは、また別の嬉しさがあった。

「はい。栄太おにいちゃん、啓作おにいちゃん、真竹おねえちゃん。おべんきょうがんばって！」

（できた子だ……）

田中と佐藤は由利の激励に感謝しながらクッキーを受け取り、集中力を回復させる。

「はい、シヤナおねえちゃんも！」

「……あ、ありがとう」

由利の一点の曇りもない純粹な笑みに、いよいよ雰囲気が勉強会のそれではなくなってきた（シヤナでさえも）。もう『ほわん』という擬音さえも聞こえてくる。

「ううう、可愛い過ぎるわよ由利ちゃんは〜！」

「わ、わっ！？ 真竹おねえちゃん、くすぐったいよう」

緒方に至っては勢い余って、由利をぎゅっと抱き寄せ頬摺りまでする始末。まだ会って二回目とはとても思えないフレンドリーさである。

（さすがは私の娘だ）

うんうんと頷きながら、名護は何やら荷物のバックをあさり始めた。

「？ 名護さん、何してるんです？」

「悠二君は知っているかな？ 勉強の際の休み時間には、軽く身体を動かすと、いい気分転換になるんだ」

「というわけで」とバツクから顔を覗かせたのは、黒光りするラジカセと『イクササイズ』と書かれた謎のカセットテープ。

「疲れた時にはこのイクササイズだ！ みんな、一緒に身体を動かすぞ！」

返事を聞かないまま、名護は田中と佐藤の首を掴み、奥の空き部屋へと連れて行くこととする。

「ちょ、名護さん！ ようやく復活した俺達をまた疲弊させる気ですか！」

「馬鹿を言うのはやめなさい！ 一番疲れている君達にとっては、むしろこれが休息となる！」

「それが地獄への片道切符に見えるのは俺と佐藤だけでしょうかっ！  
そ、それに一番疲れてるっていうならオガちゃんだって……」

「あ、私まだお菓子とお茶を載いてないから、先に行つて」

『裏切りものお〜！』

連行されていく佐藤と田中をサムズアップで見送り、緒方は由利を愛でる作業に戻る。恐らく、彼女がイクササイズをすることは無いだろう。

「……僕達も行くか。坂井」

「そうだな。アレじゃさすがに田中と佐藤が可哀想だ」

同情を含んだ苦笑いを浮かべながら、池と悠二も名護達の後を追い、勉強部屋を後にする。図らずもこの部屋には、シャナ、吉田、緒方、恵、由利といった女性陣だけが残される形となった。

「……相変わらず旦那さんは凄いですねー。色んな意味で」

「あはは、そうね」

緒方の言い草に言い返せず、恵はばつが悪そうに頬を掻く。

「こう言っちゃ失礼ですけど、疲れたりしませんか？  
名護さん  
って、結構周りを振り回すタイプに見えますけど」

「んー。確かに真竹ちゃんの言う通り、疲れることが無いって言う  
と嘘になるわね。でも、男はそれくらい我が儘な方が面白いのよ。」

それに何より、私は名護くんのこと大好きだから」

あれくらいは何でもないわよ。

なんの躊躇もなく、そう言い切れてしまう恵の姿は、恋する乙女と  
しては憧れの対象である。

吉田と緒方、シヤナでさえも羨望の眼差しを向けた。

「凄いなあ……。恵さんと名護さんって、本当に心が通じ合ってる  
んですね」

吉田の言葉からは、私もそうなれたらいいな、という想いが滲み出  
ていた。

「ふふふ、まあねー。けど私、名護くんと出会ったばかりの頃は、  
自分が名護くんを好きになるなんて、考えもしなかったのよ？」

「えっ？　最初っから仲良しって訳じゃなかったんですか？」

緒方が意外そうに聞く。恵は当時の自分達を思い出しながら「いやー、全然よ全然！」と否定する。

「今でこそ名護くん、真面目を通り越してネタみたいな性格だけど、昔は本ツ当に最悪な性根だったのよ。」

自分が正しいと思ったことしか認めないわ、ちょっと気に入らないことがあるとすぐ自分の考えを押し付けるわ……そのくせ何でも出来るもんだから、誰も文句が言えないっていう、始末に負えないよ  
うなヤツだったの」

「あの名護さんが？」

信じられないという風な吉田。他の二人にしろ、それは同じだった。少し暴走しがちな面はあるものの、彼女達の知る名護啓介は、決して酷い人ではない。むしろ奏夜と同じく、他人を思いやれる人格者だ。

しかし妻である恵が言うからには、今語られた過去が嘘であるとも思えない。

「……じゃあ、どうして恵は名護を好きになったの？」

シヤナは思わず尋ねていた。

相手への好意から生まれる『好き』しか知らない彼女からすれば、恵と名護の関係は理解し難いものだったからだ。



「名護が、嫌いだったのに」

もしかしたら、この『どうしようもない気持ち』を処理するキツカケになるかもしれない。

真剣味を帯びたシャナの瞳に心を動かされ、恵も真摯な気持ちで、恋する少女に応える。

「そうね。でもシャナちゃん、勘違いしちゃ駄目よ。『嫌い』ってことは必ずしも『好きじゃない』ってこととイコールじゃないの」

「どういふこと？」

「好きであれ嫌いであれ、それは『相手を意識してる』ってことでしょ？　好きになる理由があるなら、当然嫌いになるにも理由があるわ」

同時に、人間の良い点を見つけるにしろ、悪い点を見つけるにしろ、相手をよく観察するという手順を踏む。

必然的に、相手と頻繁に接することにも繋がっていく。

「私や名護くんもそう。心の何処かで、私達はお互いが気になった。良いところにも気付いていたけど、それを認めたくなかったのよ」

「なら、今はお互いを認めてるの？」

「由利が証拠にならないかしら？」

シヤナは緒方とじゃれる由利を見た。

確かに、二人の仲が険悪なら、あの子はこんな天真爛漫な性格にはならないだろう。

「好きか嫌いかなんてそんなもん。ちょっとしたことコロッと変わっちゃうようなものだから、難しく考える必要は無いのよ。

シヤナちゃん、ちょっと『好き』について大上段に構え過ぎとか言われない？」

「……言われた」

前、似たような相談をした際、千草に。

「とにかく、私から言えるのは、恋に臆病にならないようにしなさい。これは一美ちゃんや真竹ちゃんにも言えることよ」

シヤナ、吉田、緒方は一様に、恵の声以外が耳に入っていないようだった。経験者である恵の話は、まだ多感な彼女達には影響力が強かったらしい。

ちよつと感情込めすぎたかな、と思い、恵は付け加えるように言う。

「……ま。三人とも、悠二くんや田中くんにアピールはしてるみた  
いだから、問題はないと思うけどね」

『！！』

思考が無になったところに想い人の名を出され、緊張の糸が切れた  
三人は、一斉に頬を赤らめた。

由利の「へんなのー、みんなかおまっかー！」という子供ながらの  
指摘も、一層動揺に拍車をかける。

(そう、恋は決して、臆病になるものじゃない)

わたわたと慌てふためく少女達を見ながら、恵は『自分と名護が変  
わる始まりとなった青年』のことを考える。

ひ、ひびくと言って、ごめんなさい。図々しいお願いだって、

分かってます。でも、もしまだ許してくれるなら、俺の、友達になつて下さい……！

彼と友達になつた日、私が差し出した手を、震える手で握り返していた青年は、本当に立派に成長した。あの時、彼が踏み出した一歩が間違いだつたとは、決して思わない。

だが彼は失ってしまった。変わる代償として、彼の一番大切だったものを。

恵はあの時ほど、世の理不尽さを思い知つたことはない。

一番幸せにならなきゃいけない彼が、いつも不幸にならなければいけないのだろう。

あれ以来、彼は臆病になつた。『その感情』を誰かに抱くことを怖れ、心に鍵をかけた。

ひよつとしたら本人でさえも、気付いていないかも知れないくらい小さく、しかし頑丈な鍵を。

(いつか、現れてくれるのかしらね……)

きっとこれは、かつての彼を知る全ての人々が願うこと。  
彼の幸せを願う全ての人々が望むこと。

(奏夜くんの鍵を開けてくれる、誰かが)

## 第二十六話・グラーヴェノ枯木寒蔵の給仕・Bパート（後書き）

・vsヴィルさん。第一印象はシンバシーを感じるレベルで最悪ですが、第一印象のみならず、奏夜と彼女は当面の間はソリが合わないと思います（え  
だって性格上、気が合うような要素が何一つないんですもん……境遇が似ている分ヨケーに。

・名護さんが最近マトモだったので、今回は暴走させました（笑）イクササイズだとやり過ぎな気はしますが、実際勉強の合間に軽いストレッチをしたりすると、集中力を持続させやすいらしいですよ。

・キバでまともなカップルって名護と恵くらいですよ……（あとは結ばれても悲劇的な結末を迎えたり）。前作の電王と対照的に、死者数が半端じゃありませんし、キバはほとんど大人向けなライダーだと再認識しました。

・ちょっと語られた奏夜のビギンズナイト。多分近々公開します。

では、また次回！

## 第二十六話・グラーヴェノ枯木寒蔵の給仕・Cパート

奏夜たちが紅邸に戻る頃には、日も大きく傾き始めていた。メイドとの激戦の余韻も残ったままに、憩いの時間はやってくる。

「じゃあみんな。悪いけど、今日の夕食は頼むな」

「おう！ 腕によりをかけてやるから楽しみにしてるい！」

「むむ、今日は私たちの当番じゃないのに」

「まあまあキバ ラさん。そもそも私達は戦ってないんですし、奏夜さんをちゃんと休ませてあげましょう」

帰宅一番に料理作業に駆り出され、ふてくされるキバ嬢と、彼女をなだめるタツロットも、キバ嬢の手伝いに台所へと入っていく。「今日はシチユーでいくか」という声も聞こえてくる。今夜のメニューは期待できそうだ。

(さてと)

二階の作業場上がりながら、奏夜は先刻のメイドのことを考える。

（あのフレイムヘイズ、一体何者だ？ どうして父さんの名前を知っていたんだろう）

それにドランも、あのメイドと俺が戦い出した途端におかしくなった。

分からないことづくめの状況下で、その謎の中心に立つフレイムヘイズ。

間違いなく、新たな嵐の前触れだろう。

「面倒くさくなつてきやがったな……」

いつもの口癖を漏らしながら、ケースに収められていたブラッディローズを手取る奏夜。今日はもともと、このブラッディローズを手入れをしようと考えていた。

疲労がピークに達する前に、やるべきことを終わらせてしまおう。

パキッ。



「パキッ？」

際限なく嫌な音に、奏夜は恐る恐る足元に目を移す。

いつもブラッディローズの脇に立てかけてあり、奏夜の腕に当たって落下した写真立ての無残な姿が、そこにはあった。

「わ　　っ！！　壊れたあ　　！！」

慌てて写真立てを拾い上げ、中に入っていた写真を確認する。縁は壊れてしまっているが、破片で写真自体がダメージを負っている様子は無かった。写真の中の父、音也の笑顔にも変わりはない。

「良かったあ……」

取り敢えず安心はしたものの、壊れた写真立てが目に入れば、再び苦い気持ちが進み上げてくる。

「うーむ、年代物だから壊れ易くもなってたんだらうけど……」

だが、それは言い訳にはならない。

この写真立ては奏夜が小さな頃、真夜が飾った代物。きっと思い出の品か何かなのだらうと、奏夜自身も大切にしてきただけに、シヨ

ツクも大きかった。

「やばいなー、母さんに何て謝ればいいん……………だ？」

写真立ての残骸から写真を引き抜こうとした奏夜は、その裏側に写真とは別の何か挟まっていることに気が付いた。  
破らないよう、写真と共に丁寧に引っ張り出して見る。

「楽譜？」

何重にも折り畳まれた紙には、五線譜のラインでさえも手書きで作られた、一つの曲が書き記されていた。

「……………この字、多分父さんだよな。でも何だっってこんな場所に」

楽譜そのものには、特に変わったところはなく、器楽曲なのか、はたまたインストールなのかさえも分からない。

「えつと題名は……………」私は他の誰も愛さないver・BLAZIN  
G・SESSHON『?』

こりゃまた父さんらしいタイトルだ。ver・BLAZING・S  
ESSHONとあるからには、どうやらアレンジ曲のようだ。

（SESSHONっつーからには、誰かと組んでの演奏だよな。で  
も父さんが誰かと一緒に演奏するなんて考えられないし……）

ひよっとしたら母さんと作った曲なのだろうか、と推測する奏夜だ  
ったが、楽器の下に記された走り書きを見て、その推論は吹き飛ぶ。

この遥かなる歌を、我が友、マテイルダ・サントメールに捧ぐ。  
彼女が未来へと繋ぐ紅蓮の炎が、やがてこの世の愛を照らす道標と  
ならんことを。

紅音也

「マテイルダ・サントメール？」

名前の響きからして外国人、それも女性だろう。

(聞いたことない名前だな)

音也はあの唯我独尊な性格からか、意外に友人と呼べる人間が少ない(迷惑をかけた人間なら星の数ほどいるが)。故にここまでの親愛を込めた文章は、女性相手でも珍しく、余程慣れ親しんだ相手にしか書かないのだ。

「ここまで交友の深そうな相手なら、俺が知っても良さそうなものだが……」

訝しく思い、奏夜は謎の楽譜に書かれたメッセージを読み返していく。その中で、奏夜は文章内のある部分に目を止めた。

彼女が未来へと繋ぐ『紅蓮の炎』が、やがてこの世の愛を照らす道標となることを。

「……………」

紅蓮の炎。

炎髪灼眼の少女。

「……………まさかね」

有り得ない。

時系列無視も甚だしい。

今さらつと過去の自分の所業を否定した気もするが、そこは敢えて無視。荒唐無稽な推測を止め、楽譜を壊れた写真立てと一緒にテーブルの上へ置く。

「おい奏夜、メシ出来たぞー！」

タイミングを見計らったように、下からキバットの声が呼ぶ。「ああ、今行く」と返し、奏夜は仕事場から降りていく。

過去と現在を繋ぐ鍵に、気付かぬまま。

それから数週間後。遂に教育機関からの裁定が下された。

「よし、テスト返却してくぞー」

休み前最大の関門、期末テストの結果が、奏夜を始めとした教師達の手によって返されていく。  
御崎高校は期末テスト結果返却、通信簿配布、卒業式が同じ日に行われる為、ある者は喜びに、ある者は絶望に包まれながら、夏休みへと向かっていくことになる。

そして、勉強会を切り抜けたお馴染みのメンバーはというと、

「まあ、上出来じゃないか？」

皆の通信簿を見せ合いながら、悠二が総評のように言う。  
ちなみに結果としては、シャナと池が上の上。吉田は上の中。悠二は上の下。田中、佐藤、緒方が中の中といった結果だった。

「まあ、3日漬けにしちゃいい方だろうけど……。もうちょい頑張れた気もするな」

「私も教える方に回ってれば良かったかも……。最後の方は、名護さんも恵さんも来られなかったし」

池や吉田がやや残念そうに語るが、普段はせいぜい下の中ランクである田中、佐藤、緒方としては「追試が無い上、かなり成績が上がる

った」と、かなり満足しているらしかった。

「おーす、皆の衆」

と、そこへ書類を小脇に抱えた奏夜が現れる。

「全員、夏休みは勉強に苛まれなくて済みそうだな。感心感心」

「楽勝つすよ。本当に勉強会様々です」

「おっ、言うね。なら次の中間で成績下がったヤツは、みんなの前で『綺羅星』のポーズでもやるか？」

「推進用ロケットによる物理的ダメージの次は、羞恥心による精神的ダメージですか!？」

あのポーズを人前でやるのはイタ過ぎる。やや調子に乗ったことを後悔する佐藤に苦笑いを向けつつ、悠二が言う。

「先生、今日って予定空いてますか？」

「？ 何だよ急に」

奏夜は小首を傾げる。

「せっかく夏休みに入ったし、勉強会の打ち上げも兼ねて、御崎神社で花火でもと思って。ほら、ミサゴ祭りの時は……」

悠二が言葉を切り、メンバーの殆どが気まずそうに視線をあちこちに移す。

その気持ちは、奏夜にも分かった。

ミサゴ祭りメインの打ち上げ花火は、マッド博士の来襲によって有耶無耶になり、その後に行った小さな花火大会でさえ、戦いの傷痕が濃かったあの状況では、きちんと楽しめたとはいえない。

それより何より、池と緒方を誘えなかった。

ちゃんと全員で、辛い戦いを考えずに、楽しい思い出を作りたいということなのだろう。

奏夜としても、その『みんな』の中に自分が含まれているのは実にありがたい話なのだが……。



「悪いな。俺は今回パスさせてもらっわ。先約が入っちまってるんでな」

「先約？」

今度は悠二が小首を傾げる番だった。

娯楽には真っ先に飛び付き、即座に予定をすっぽかす奏夜のこと、余程大切な用事なのか。

気になった緒方が、適当なアタリをつけながら問う。

「学校の方で、何か仕事残ってるんですか？」

「俺様が休暇も近いこの時期に、わざわざ学校に残って仕事すると思っつか？」

こういう台詞を何の気なしに言えるのが、紅奏夜という男である。

「じゃあ、ヴァイオリン関連の予定か何かっすか」

「違う違う」

緒方に続いた田中の推測も否定し、奏夜は普段と変わらないトーンで、

「デート」

爆弾を投下した。

ピシッ、という音がどこからか聞こえたような気がした。見れば、悠二、吉田、池、田中、佐藤、緒方の六人は身じろぎ一つせず、目を見開いたままフリーズしている。

無事なのは「でーと？」と、単語の意味が分からずにいるシヤナだけだ。

『ええええええええええええええええええ！？』

一年二組の教室から発せられた六人分の驚愕が、校舎中に轟いたのは、もはや語るに及ばずである。

「『主』の復活が不可能だあ？」

カラフルなライトに照らされ、そこかしこに用途不明の発明品

『教授』曰わく、汗と涙の結晶が散乱した部屋。

傍目からはガラクタ置き場の研究室で、ゼブはうんざりしたように、教授の結論を繰り返す。

その傍らに立つドラグは何も返さず、騒がしい仲間を鬱陶しそうに横目で睨む。

「やかま、しいぞ。ゼブ。我々、でさえ、最初は、似たような、状態だったのだ。『主』の身体が、こうなっていることも、予想の、範疇だろう」

「けどよお！ 苦勞してキバの目をかいくぐって、よーやく俺達の『主』を取り戻したんだぜえ！？」

なあ教授さんよ、何とか出来ねえのか？」

「なあーんども言いーわせないで下さい」

教授は面倒くさそうに、彼らの『主』が眠るといふ棺を一瞥する。部屋の中央に安置されたそれは現在、無数の配線に繋がれていた。

「この『主』とやらは、ああーなた方とはレベルが違いーがうのですよ。」

“暴君”のよあーうな仮の身体では、こあーの『主』のたあーましいは受け入れられませんし、チエックメイトフォークラスのフアーンガイアを器につうーかつてもそれは同じです。

そあーれほどまでに、ああーなた方の『主』の力は常あーう軌を逸しているのですよ。」

「ふむ。では、『深淵のキバ』は、どうなって、いる？」

教授はよくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、メガネの奥の瞳を輝かせた。

「『深淵のキイーバの鎧』につうーいてなら、しゅーう繕はすこぶる順調ですよ！ いやはやまったく、あーれほど骨のある研究対象はひいーさしぶりでしたねえ！ ドオーミノオー!!!」

「はいはい教授、ただいま参ります！」

ぱんぱんと手を叩き、自分特製の燐子兼助手を呼ぶ。  
ドラグとゼブもなんとなしに、ドミノの声が聞こえる奥の部屋を凝視した。  
しかし、

ガタツ、ガツシャーン！！

何かに躓いた音と金属が割れる音、ドミノの悲鳴が三重奏となって、研究室に轟く。

『……………』

どう反応すべきか諮詢しているドラグ達の脇を、教授は目にも止まらぬスピードですり抜け、不出来な助手への折檻へと動いていた。

「ドオー　　ミノオー　　！！」

「ひいー　　！　　すみませんすみませんすみません！！」

さっきの比ではない豪快な音が、研究室の奥から響いてくる。  
果たしてあの部屋から教授が出てきた時、ドミノはドミノの原型を  
保っているのだろうか。

「……で、どうするよ」

ドミノに少し同情しながら、ゼブは話を切り替える。

「新たな『器』を、探すしか、あるまいな。『主』を、受け入れる  
に足るだけの、強い器を」

「やっぱそれっきゃねえか……。けど、そう簡単に行くのか？  
そんな強靱な肉体を持つヤツなんて、野良猫みたいにそうそう転が  
ってるもんじゃないぜ。仮にいたとしても、あんまり強過ぎると俺  
達じゃ捕らえられないかも知れねえしよ

「そう、だな。それが問題だ」

正直、ドラグも頭を抱えざるを得なかった。

自分達を始末できるレベルでなければ、『器』は務まらない。だが  
それは同時に、自分達の力を超える『器』を、生かしたまま手に入  
れなければならぬという矛盾を孕んでいる。

限りなく不可能に近い話だ。

「いや、案外可能だったりするかもよ」

涼やかで甲高い声に、ドラグとゼブが振り返る。  
声の主は、いつの間にか研究室の壁際にもたれ、くすくすと小さく  
笑いながら、二人を見ていた。

「ディネ、か」

「やほやほ。二人とも久しぶりん」

フランクに片手を上げるディネ。

小柄とも長身とも呼べぬ背丈、服はゴシック風の黒コートとロング  
スカートを着合わせている。

服装と高い声質で、彼女が女性であることは確認できるが、顔形だ  
けは伺えない。

彼女が包帯のような紐で、両目以外の特徴を覆い隠しているからだ。

「よつディネ、帰って来てたのか。相変わらず自由人だなお前は」

「へへー　ボクはキミらと違ってアウトドア派だからねー。ひっそり水面下で活動するのは苦手なのさ」

壁から背中を離し、ディネは軽やかな足取りで二人の前に立つ。

「キミらも偶には外でゆつくりしたら？　個人的な癒やしスポットなら、千葉にあるネズミの国なんかオススメだね」

「それ、で、どうする、つもりだ。本当に、器が、見つかるのか」

「いえーい、いつになってもドラグには冗談が通じないぜー！　ぜブ、今度遊びに行く時は、ドラグハブっちゃう方針で行こう！」

「賛成だ。ドラグ、今更謝っても、お前の分の金は出さないぜー！」

「お前も、ディネに、乗るな」

ディネと同じくサボリ癖のあるゼブは、こついった話に悪ノリしがちだ。

ドラグは疲労からか、眉間を軽く指で揉む。



「なにか、策でも、あるのか」

「んー、まあ策って言えば策かな。少なくとも『深淵のキバ』復活までには間に合うハズだよ」

「ほう、それは、頼もしいな。それで？ その、策とは、どんなもの、なのだ？」

「それについては後々。ボクは今からちょっと出掛けなきゃ行けないからさ」

「出掛ける？」

ドラグが怪訝そうに言つと、ディネは包帯の下で妖艶に笑う。

「うん。『器候補』クンの様子を見にいかなきゃいけないんだよ」

無論というか、お察しの通りというか、先約とは別にデートのことではない。

先日、謎の楽譜発見の代償として、無残に壊れた写真立ての買い出しを、彼の“友人”であるところの野村静香と一緒に行く。ただそれだけの話であり、『デート』とはあくまでも言葉のあやというヤツだ。

言葉のあやというヤツだ。

(大事なことなので二回言いました)

しかし、大事なことなので二回言った奏夜に対し、彼が受け持つ一年二組の面々は、まるで納得しようとしなかった。

その時の会話をレッツ回想。

『なにがデートじゃないですか!』

『え、え? 先生と静香さんってそんな関係だったんですか!?!』

「僕も緒方さんも静香さんって人には会ったことありませんけど、親しい女性には間違いないんでしょ!？」

「それを言うに事欠いてデートじゃないって……どっだけ現実直視してないのよ先生は!」

「完全にデートじゃないですかそれ!! 否定材料が無いくらいに!」

「澄ました顔して実はリア充だったのかアンタは!」

ハイパークロックオーバー。もとい回想終了。  
ちなみに上から悠二、吉田、池、緒方、田中、佐藤の順である。

「まったくあいつらは……何を馬鹿げたことを」

「ん? 奏夜、今何か言った?」

口から漏れた独り言に、静香がクレープを頬張りながら、流し目で奏夜を見る。

奏夜は「いや何も」と返し、静香もそれ以上追求はしなかった。

「それより静香、今日は付き合ってくれてありがとな。写真立てみたいな小物には、あんま詳しくなくてさ」

「いーよいーよ。私も奏夜と出歩けて楽しかったし。それに奏夜の奢りでもとは取らせて貰ったしね」

「ははは、あんまり食うと太るぞ。恵さんの体形目指すなら、もっと気を配った方がいいな」

「なっ！　なんで奏夜がそのこと知ってるの!？」

「いや、キバーラから聞いた」

「あの娘の仕業か　!!」

握り締められたクレープから、クリームが溢れかけていた。奏夜としては、キバーラとの雑談の一つに過ぎなかったのだが、静香本人としては秘密のつもりだったらしい。

「それに、奏夜もデリカシーが無いよ！　女の子に体形とかその  
テのことを聞くのはNG！」

「冗談だよ冗談。それに、静香は別に太ってないだろ。そこまで気  
にしなくてもいいじゃん」

「……奏夜。私がこのスタイルを維持する為に、どれだけ苦労して  
るか教えてあげようか？」

「ゴメンナサイ」

静香の口調は怖かった。

本能的に危機を感じ取り、奏夜は即座に頭を下げる。

「分かればいいのよ分かれば。……まったく、こっちは必死で振り  
向かす努力してるっていうのに」

「は？」

「な、なんでもないよ！　もう、奏夜の唐変木！」

頬を真っ赤に染め、先に行ってしまう静香に首を傾げつつ、奏夜も彼女の後を追いかけていく。

傍目からは“そういう関係”にしか見えないのだが、当人達がそれに気付く様子はない。

寄り道をする内に日もすっかり暮れ、真夏日に夜の帷が降りる。

人の姿も段々とまばらになり、奏夜と静香は二人で並びながら、何処へともなく足を進めていく。

(……デートはともかく、居心地がいいってのは確かなんだろうな)

ふと奏夜は、隣の少女を横目で見る。静香は、知り合いの中でキバツトの次に付き合いが長い。

幾度となく世話になってるし、今回写真立てを買う際、真っ先に浮かんだのも静香だった。

「一番近しい異性は誰か」と聞かれれば静香の名を出すだろうし、それは多分これからも変わらない。

(ムシのいい話だよな)

これだけ依存しておいて、奏夜は何も静香に返せない。

つかず離れずを繰り返し、彼女を不安がらせるだけ。普通ならとっくに見切りを付けられている。

いつかきつと、静香は俺から離れていくだろう。

俺ではない誰かの手を取って。そうなった時、俺は一体どうするの  
だろうか

「あ。奏夜」

服の袖を引つ張られ、奏夜は我に返る。どうやら知らない内に高架橋下を歩いていたようだ。

視線を上げると、歩道代わりの橋梁が掛かり、上に行く為の広い階段もある。

「懐かしいなあここ。ねえねえ、疲れたしちょっと座ろうよ」

言いながら静香は、橋に続く階段の一段に座る。断る理由も無いので、奏夜も静香のすぐ隣に腰掛けた。

二人が座った階段は横幅が広い為、邪魔にはならないだろう。

「この階段あたりだったよね。奏夜が四年前、私をファンガイアから守ってくれたのって」

「……さあな、忘れちゃったよそんな話」

「またまた、とぼけちゃって」

四年前、チェックメイトフォーが一人、ビシヨップが放った再生態のファンガイア。

静香はここで、その一体に襲われた。

平穏を食い潰す異形の姿と、自身に向けられる殺意。あの時静香は、本気で死を覚悟していた。

そしてその窮地を救ってくれたのが、紅奏夜だった。

眼光一つでファンガイアを退かせ、柔らかに笑いかけた彼の姿は、例えようもなく凜々しかったのを覚えている。

そしてそのまま、奏夜におんぶされて……。

「静香、また顔が赤くなつたぞ。大丈夫か？」

「っ、だ、大丈夫。お気になさらず」

余計なことまで思い出してしまった。

内心恥ずかしくてたまらない静香だが、そこで更に衝撃的な事実が気が付く。

（ 夜、他に人影無し、奏夜と二人きり ）

頭の中でキーワードが浮かんでは消え、静香は今にも逃げ出したい気分だった。

しかし、今頃になって急に立ち去るのも不振に思われるだろう。



話すキツカケが掴めず、静香は高鳴る心臓の動悸を抑えることしかできなかった。

(な、なんかすつごく気まずい……)

静香の心境など露知らず、奏夜は突然の沈黙に戸惑っていた。

この気まずさは、確か以前にも味わったことがある。

そうだ。ミサゴ祭りで、浴衣姿の静香について可愛いと言ってしまった時と

「……………」

おかしい。

自分まで顔に熱がこもっていく。遂に夏の暑さにやられたのか。

どこまでも鈍い感性な奏夜は静香から目を逸らし、何もない虚空を凝視する。

気まずさともどかしさが入り混じる空間で、二人の男女は長い間口を開けなかった。

このままではマズいと、奏夜は何か適当な話を切り出そうとするが、

「奏夜」

こちらが口火を切るより早く、静香は奏夜を正面から見据えた。彼女の瞳には、混乱する自分自身の姿が映り込んでいる。

「奏夜は、さ。私のことどう思ってる？」

静香の声は震え、しかし何処か意を決したような、はっきりした口調だった。

「……どうって、言われてもな」

大切な友達。それ以外の何ものでもない。何を言い渡むことがある。

理性はそう告げているが、本能はそれを否定し、言霊に乗せることを許さない。

「今更、どう思うとか聞くような仲じゃないだろ」

曖昧に答えを濁す。別に濁すような質問でもないのにだ。

静香は何も返さず、ただじっと、奏夜から視線を逸らさない。

いつもはただ綺麗だと思っただけの瞳が、何故か今日はとても恐ろしかった。

「じゃあ」

静香は渦巻く感情を吐き出すように、目の前の青年に問う。

「奏夜は私のこと、好き？」

驚愕という名の凶器が、容赦なく脳髓に振り下ろされる。  
与えられた衝撃は、奏夜の中から冷静な判断力を根刮ぎ奪い去って  
いった。

「急に、なに言ってるんだよ」

掠れるような声で、奏夜は精一杯の虚勢を張る。

「おかしいぞお前。やっぱり熱でもあるんじゃないのか？ あま

り無理すると身体に悪い」

「私はおかしくもないし、熱も無いよ。奏夜、話を逸らさないで」

だが、今の静香にそんな脆弱な防波堤は通用しない。

彼女の言葉に装填された想いは、軽々と心の壁を貫いていく。

「どうなの？ 嫌い？ それとも好き？」

「……っ」

はっきり答えなければ、逃がしてくれそうになかった。

「……好き、だよ」

「……そう」

その『好き』が自分の望んだものでないことを感じながらも、静香は微笑む。

「私も奏夜が好きだよ」

何の躊躇もなく、静香は言い切る。  
普通なら嬉しく思う言葉、しかし奏夜の心に暖かさは生まれず、代わりに抉られるような痛みが走った。

(なんだ、これ)

怖い。

理由の分からない痛みが、ではない。

この痛みのある感情を知ることが、怖くて仕方がない。

「今の唯我独尊な奏夜も、最初に出会った頃のツンケンした奏夜も、ここで助けてくれた時みたいな格好いい奏夜も。ゼーんぶ合わせて大好き。」

それに」

“今でも深央さんを好きでいる奏夜”もね。

ぐらりと、眼前に広がる世界が揺れた。呼吸が一瞬止まり、冷や汗が頬をつたう。静香を見る瞳は限界まで見開かれているだろう。

「し、ずか」

もしかしたら、奏夜は怒っていたのかも知れない。

仲間内では、最早暗黙のタブーとなっていた“その名前”を、軽々と口にした静香に対し、罵声を浴びせても何ら不自然ではなかった。

欠片ながらに残った理性で、どうにか憤怒は抑え込めたが、混乱の渦は止まることを知らず、勢いを増していく。

「本当はね。ずっとこの距離のままでもいいとも思ってたんだ。でも、やっぱりダメ。奏夜を苦しめるって分かっているはずなのに、どうしても我慢出来なかった。

言わずに、後悔したくなかったから」

奏夜はやつと理解した。

静香という時の居心地の良さは、無条件の信頼から生まれたものだったのだ。

静香は“そういう風”に俺を見ない。

ずっと“友達”でいたのだから、これからも変わらないと。

なんて身勝手に、都合のいいことを考えていたんだろう。  
『どうしようもない気持ち』がどんなものか、思い知っていたはずなのに。

シヤナ達にも、散々言い続けてきたことなのに。

「だから、言っね」

きつと、これは罰なのだろう。

心を鈍らせ、静香を蔑ろにし続けてきた自分への、罰。

もう、逃げ場はどこにも無かった。

「私は奏夜が好き。友達じゃなく、異性として、愛してる」

だから、もう一度聞くな。

「奏夜は私を好き？」

友達じゃなく、異性として。

「あつ、いたいた。おゝい、奏夜！」

いつまでも帰ってこない奏夜をキバツトが見つけた時、彼は高架下の階段に腰掛け、夜の静寂の中たそがれていた。

「いやいや探したぜえ。お前のケータイにも静香のケータイにもかけたんだがよ。お前ら二人とも電源切ってたから、かなり時間掛かっちゃったよ」



「……………」

「……………？　おい、奏夜？」

返事がない。ただの屍ではないだろうが、そう評しても遜色がなかった。目の焦点の合っておらず、生気らしい生気が感じられない。キバットでも、ここまでブルーな奏夜は滅多に見たことがなかった。

「……………静香と何かあったのか？」

分かりやすく、奏夜の肩が跳ね上がった。

「別に何も」

「何かあったんだな」

「……………別にな」

「何かあったんだな」

「……ありました」

やっぱり、とキバットは溜め息混じりに、彼の肩に止まった。

「んで？　今度は何をやらかしたんだ？」

「……久しぶりに、自分のバカさ加減を自覚させられたってトコかな」

「ふーん」と余計な詮索をしないキバットの気遣いがあった。今の自分に、明瞭な説明ができるとは思えない。

紅奏夜を構成するシステムが全て誤作動を起こし、かろうじて残った機能も、ミキサーでかき混ぜられてしまったような感覚。

(どう答えればいい)

混沌とした脳内は、解決不可能な問題を必死に処理しようとするが、未だに演算結果は出ない。

苛立ち混じりに、髪をがりがりとして引つ掻いてみるが、結果は同じだった。思考が袋小路に入り込んでしまう。

(俺は、静香をどう思ってるんだ?)

友達以上の存在では、あると思う。

付き合っても長く、名護や恵達には見せない、紅奏夜の側面を、静香にだけ見せたこともあった。

とびきり可愛いことも認めよう。

しかし、その理由が果たして恋慕だったのかどうかは、判断がつかない。

肯定もできず、否定もできない。

逃げ出せたらどんなに楽だろう。

だが、もうそれは選択肢の内にはない。

“深央”の名前を出された時点で 奏夜の中にいる彼女と戦うことを、静香が決めた時点で 逃げ道は焼き落とされた。

(……ひでえよ、静香)

何故俺なんかを選ぶ。

お前を幸せにしてくれるヤツは、他にも沢山いるのに。

お前は幸せにならなきゃいけないのに。

よりによってこんな

(もう時間が無い俺なんかを 何で選ぶんだよ)

自問自答を繰り返す奏夜だったが、突然聞こえた足音に遮られる。  
コツ、コツと甲高いブーツの音。

まだ深夜には早い為、通行人が通ること自体に不思議はないが……。  
やがて高架下の影に月明かりが差込み、近付いてくる何者かの姿を  
映し出した。

『……』

動いたのは、互いにほぼ同時だった。  
相手は桜色の炎の灯ったリボンを伸ばし、奏夜は肩のキバットを引  
っ掴み、左手を噛ませようとする。

「奏夜!!」

「止まれ、ヴィルヘルミナ・カルメル!」

少女と遠雷のように低い声が、奏夜とメイド　ヴィルヘルミナを  
制止させた。

全く違う意味で驚いた二人の間に、フレイムヘイズの少女が割って  
入ってくる。

「奏夜、ヴィルヘルミナは敵じゃない」

「……シヤナ」

必死な様子のシヤナを見て、奏夜は取り敢えずキバツトを放す。

火花に行っていた筈の彼女が何故ここにいて、このメイドと一緒に  
いるのか　という疑問については、この際保留とする。

「お前も武器を降ろせ、ヴィルヘルミナ・カルメル。紅奏夜は敵対  
する存在ではない」

「……しかし、この男は人喰いを」

シヤナが驚きの視線を向けるが、奏夜は首を横に振る。

「誤解だよ。ただファンガイアの人喰いの現場に居合わせたただだ」

「そのような空言、信じるとでも……」

「ヴィルヘルミナ・カルメル」

アラストールが僅かに語気を強めた。

「武器を降ろせ」

「……………」

警戒心を解かぬまま、ヴィルヘルミナもひとまずはリボンを引っ込めた。

( 気にいらねえ )

さっきまでの混乱が、今度は怒りに取って代わられていた。奏夜も不機嫌な雰囲気崩さないまま、ヴィルヘルミナを睨み返し、すぐシャナに視線を移す。

「知り合いだったのか。このメイドと」

「うん。奏夜も、ヴィルヘルミナを知ってたの？」

「……まあ、な」

まさか殺されかけたとは言えず、返答は曖昧なままに留める。

「アラストール、ちょっと説明頼む。状況がイマイチ把握できない」

「うむ、よからう。ちょうどお前にも話しておこうと思っていた。

ヴィルヘルミナ・カルメル、構わぬな？」

「……貴方が、そうすべきと言うのなら」

ヴィルヘルミナはまるで納得していないらしかった。

悪化する彼女の態度に、比例して奏夜も眉間の皺を濃くしていく。

その後は、アラストールが説明してくれた。

メイドの名はヴィルヘルミナ・カルメル。

“夢幻の冠帯”ティアマトーの契約者、フレイムヘイズ『万条の仕手』にして、アラストールと同じく、シヤナにフレイムヘイズとしての矜持と知識を授けた、言わば育ての親らしい。

『教授』が与えた影響　つまりシヤナ達が消しきれなかった“紅

世”の痕跡の処理を行うべく、マージョリーに呼び寄せられ、この御崎市にやってきた。

花火帰りのシャナとアラストールに話があったらしく、その最中に奏夜の気配を感じ取り（恐らくはトドメを刺すべく）ここに現れた。

黙ってアラストールの話に聞き入る奏夜に、シャナはふと違和感を覚えた。

「奏夜」

「？ なんだよ」

「ちょっと、元気ない？」

「……………」

さすがに鋭い。それでも隠しているつもりだったのだが。

「気のせいだろ。んで？ その時代錯誤な服装のフレームヘイズ  
サマが、ここに何の用だ？ 証拠隠滅だけが用事なら、アラスト  
ールがここまで改まって話すわけがねえしな」

「ふむ。話の流れを潤滑にする程度には、頭が回るようであります



な。ファンガイアにしては、でありますか」

奏夜とヴィルヘルミナの口調には、明け透けな悪意が籠もっていた。

尊敬する戦友と、育ての親との間にある険悪なムード。

居心地の悪さを感じるシャナに代わり、アラストールが話を進める。

「ヴィルヘルミナ・カルメルの報告から、少々事態が動いた。坂井悠二の中に眠る『零時迷子』についてだ」

「何？」

「『零時迷子』本来の持ち主……『約束の二人』の片割れが、百余年振りに現れたのだ」

「……そりゃまた」

世の中というヤツは随分と、運命を早く進めたいらしい。

「その片割れと『仮装舞踏会』との関係は？」

「まだ分からん。だが少なくとも、双方が『零時迷子』を欲してい

るのは間違いない」

「なるほど。」

オーケイ、そこまで聞けりゃあ十分だ。つまるところ、アンタの目的は“一番手っ取り早く、約束の二人と仮装舞踏会の企図を挫く”ってことか」

隣でシヤナが、唇を引き結ぶのが見えた。

当然だろう。久し振りに再会できた育ての親が、彼女にとってあまりにも大切なものを、破壊しようとしているのだから。

「そう。あの“ミステス”を保護するのみの一つの選択肢……しかし私は、もう一つの方法を提示するのであります」

次の瞬間、奏夜のヴィルヘルミナに対する嫌悪感は、確固たるものになった。

「“ミステス”破壊による『零時迷子』の無作為転移であります」

わかったことは一つ。  
どうもこの世は、当人が悩む悩まないに関わらず、厄介事を 持ち  
込みたがるものらしい。

「くすくす、本当にキミは、話題に事欠かないなあ。何だかボクま  
で楽しくなっちゃうよ」

高架橋の両端にある街灯。本来なら人が乗れるような場所ではない  
そこに、ディネは悠然と腰を降ろしていた。

眼下には、複雑に入り混じる思惑に支配された三人。

「ま、今のうちに人生を楽しみたいなら、それでもいいさ。キミに  
そこまで時間は残されちゃいないんだからね……くすくす。せいぜ  
い不様に踊って、ボクを笑わせてよね。『器候補』クン」

包帯の下で口を歪めるディネ。夜の闇にあって、月明かりだけが彼  
女を怪しく照らしていた。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD!

「墮落であります」

「んなもんシヤナの自由だろが」

「静香ちゃんが可哀想だわ」

「坂井貫太郎です」

「ヴィルヘルミナなんか、大嫌い!!」

【第二十七話・ノクターン／彷徨う心】

WAKE・UP! 紅蓮の鎖を解き放て!

## 第二十六話・グラーヴェノ枯木寒巖の給仕・Cパート（後書き）

3パートに分けた意味がまるで無くなるくらいに長くなってしまいました……。すみません、何分最初で慣れていないもので、次回からは一話一話の区切りを均等にしよう努力します。

・遂に静香がやらかしました。急な展開で驚いた方もいるでしょうが、くつつくようできつつかない二人の関係を、ここではつきりさせておきたくて、ああしました。

今までにしる、静香のアピールに奏夜が気付かなかっただけで、キツカケさえあればいつ告白してもおかしくなかつたんですけどね。果たして奏夜の返答やいかに。

・新キャラディネ。多分、初期に出たドラグやゼブを差し置き、一番出番が多くなりそうです（え）

ファンガイア態も、9巻の話の中で登場予定。ちなみに僕っ子なのは作者の趣味です（笑）

次回から9巻編。

悩む奏夜、返事待ちの静香、反抗期のシヤナ、ピンチの悠二、過保護なヴィルヘルミナと、内容盛り沢山でお送りします。

では（＾Ｏ＾）

どうでもいい近況  
Wのスピノフに大爆笑中。 シュクラウド、井坂先生、霧彦さんが楽しそうに何よりです（笑）

## 断章・BLIZZARD・CLAW

奏夜達のいる日本から遙か離れた、ヨーロッパの港町。

涼やかな夜を、軋むような波音だけが支配し、波止場に繫留された大型客船が、暗い海を飾っていた。

しかし、静謐な情景は、住宅街の一角から挙がる戦火に塗り潰されていく。

火の手は古ぼけたレンガ造りの建物　フレイムヘイズ達の情報交換・支援組織『外界宿』。

各地を転々とし、同朋との結託を良しとしないフレイムヘイズ達にとって、生命線とも呼べる施設。

それも、今襲われているのは、『外界宿』の中でとりわけ大規模かつ、広範囲を統制する財団組織、『ドレル・パーティー』の本部だ。

火の粉を上げ、何もかもを焼き尽くさんとする陽炎に映る二つの影。

片や、皺を深く刻み、フロックコートに身を包む小柄な老人。片や、牙を覗かせ、今にも老人を食いちぎらんと巨体を揺らす異形。

「くく、一人身では逃げることも難しいようだな、若きご老体。クレッキーやボードは、あの燃え滓の中か？」

身の丈は、道に並ぶ建物と大差はない。伸びる雄々しい角と靡く鬣、片手には巨体に見合う槍『神鉄如意』。

悪魔を連想させる異形の正体 「仮装舞踏会」三柱臣が一柱、將軍“千変”シュドナイの数多ある姿の一つだ。

「キーツ、なんですって!? ドレル・パーティーを侮辱すると許さないわよ!」

ステッキ型の神器“ブンシエルルーテ”に、“虚の色森”ハルファスの怒りを表す炎が灯る。  
彼女を携えるは、『愁夢の吹き手』ドレル・クーベリック。『ドレル・パーティー』を組織し、多くのフレイムヘイズを裏側から支え続けてきた、影の功労者とも言うべき契約者だ。

(これは……逃げられそうにないな)

“千変”と周囲を包囲しているであろう徒達と、自身の非力な戦闘力を天秤にかけ、ドレルは早々に、これが負け戦であることを察していた。

しかし、フレイムヘイズの誇りと矜持だけは失わない。  
戦う意志を示しながら、ドレルは口を開く。

「容易に見つかるはずのない我々を発見するほどに本格的な索敵網を展開し、しかも名にし負う“千変”シュドナイ自らが潰しに来た「仮装舞踏会」が大規模に動く予備行動、フレイムヘイズたちの出足を挫く作戦の一環かな?」



「……ふっ、さすがは戦闘以外で初めて名を馳せたフレイムヘイズだ……が、冥土の土産を渡すほど、俺は気前が良くない」

我らがババアにゴマするために死んでくれ、としか言えんな。  
悪魔は口元を歪め、槍の矛先を向ける。

「ドレール！」

「……私が死んでも、この世に顕現しようなどと決して思っていないよ、ハルフアス」

フレイムヘイズと契約する王は、契約者の死に様に、僅かな間ながら、真の姿を顕現させることができる。

だがリスクとして、顕現した王は紅世に戻る道を絶たれ、時間が経てば現世で枯れ果ててしまう。

フリアグネ戦で、死ぬことなくアラストールを顕現させたシャナは、あくまで例外中の例外なのだ。

「私だけならともかく、君まで死ぬのは、とても悲しい」

「イヤーー！！ ドレル、逃げるのよ！」

フレームヘイズとして、死地に赴こうとする友を、懸命に止めるハルファス。

だが、そんな彼女に、ドレルは首を振って、遺言のような呟きを漏らす。

「……私は存分に、私の仕返しをした。私一人の仇を討つてからは、他の者のそれを手助けできた。組織としての在り方を広め、愛する者と両界を脅かす敵との戦いを、より楽にしてやれた。

みんな君のおかげだ。ありがとう」

さようならだ。

恩人との記憶に想いを馳せ、ドレルは杖を握り締める。

「ドレル ……！」

迫り来る“千変”の剛槍、圧倒的なまでの破壊力に、老人は自分を迎える死を受け入れ

「ブルアアッ！！」

ドレルの命を刈り取る筈だった槍は、飛来した白い影に弾かれた。

「なっ!？」

驚きはシュドナイとドレル、どちらのものだったのか。  
戦いを忘れ、二人は影の正体を突き止めようとす。

「蝙蝠……!？」

ドレルの呟きの通り、白い影は蝙蝠。

普通と違うのは、明らかに自然物ではないことを裏付ける鉄仮面。  
よく聞けば、羽音にもメカニカルな駆動音が混じっている。

「オッサン、あんま命を粗末にするモンやないで」

白い蝙蝠が向かう先、それは、ヨーロッパには似つかわしくない関西弁と共に、封絶の陽炎から現れた乱入者だった。

二十代前半と思わしき屈強な体躯に、黒い皮ジャケット。

無造作に伸ばした前髪の一部を金色に染め、背中に背負うのは巨大なギターケース。往年のロックミュージシャンのような出で立ちの男である。

未だに驚愕から抜け出せない二人に構わず、青年はフランクに唇を動かしていく。

「やー、しかし、初めて見たけど、スゴいもんやなあ。封絶つちゅーのは。ホンマに周りの人達が火事に気付いたらへんかったわ。昨夜から事前に、このゼロノスカードを送つて貰わなかったら、オレもスルーしとつたんやろなあ」

ケラケラ笑いながら、青年は炎の中を何食わぬ顔で進み、後ろに例の蝙蝠が続く。ちょうど、ドレルとシュドナイの間に割って入る形だ。

「オッサン、フレームヘイズやる？　この徒倒すつちゅーなら、オレも手え貸すぞ」

「き、君は……」

青年が話し掛けて始めて、ドレルはようやく、当座の疑問を口にすることができた。

「いつたい何者だ？　それに私を助けるとは、何故……」

「何故って……人助けに理由なんかいらんやろ」

当たり前のことだと言わんばかりに、青年は即答する。

「それに、オレの友達がフレイムヘイズとちょっとした縁があるらしゅうてな。アイツの話によると、徒にも色んなヤツがおるらしいけど……」

横目で青年は、シユドナイに睨みを利かせる。

「年寄りいたぶつとるようなヤツが、良いヤツなわけないしな。化けモンは加害者、オッサンは被害者。助ける理由を付けるとしても、これで十分や」

下がるとき。

青年の力強く、自信に満ち溢れた言葉に、ドレルは半歩後ろに下がる（無論、杖からの火は消えていなかったが）。

「ちゅーわけや化けモン。悪いけど、アンタの邪魔させてもらうぞ」

「……ほう、ただの人間が、随分と大きく出たものだ」

シウドナイの瞳に驚きの色は既に無かった。この乱入者の素性はど  
うでもいい。敵か味方が、それさえ分かれば十分だ。

「何者かは知らんが、俺の邪魔立てをしようというのなら、相應の  
覚悟はしてもらうぞ」

「ん〜？ ひよっとしてあんさん、俺が人間やからって、戦う前  
から勝つ算段しとらんか？」

上からの物言いが気に入らなかつたのか、青年の口調は刺々しいも  
のになる。

くだらない固定観念に過ぎない。

ただの人間が、異形の存在に勝てないと誰が決めた？

「教えといたるわ。人間つちゅーのはな、思った以上に頑丈で、諦  
めが悪いんや。そう簡単にやられんで」

かの“千変”を前にしての啖呵。

シウドナイの戦意を肌で感じ取って尚、そこに立てる精神。

その異常性の先には、確かな自信が見え隠れする。

「いくでえ、レイキバット!!」

「行こうか、華麗に激しく!!」

蝙蝠が奏でる待機音と共に、青年の腰に現れる純白のベルト。青年は静かに、戦う力を得る魔法の言葉を唱えた。

「変身」

「変身ッ!!」

キバット族をモデルに生み出された人造モンスター『レイキバット』が、逆さまにベルトへと止まり、巨大な氷の結晶を模した紋章が、青年の身体を通過。

レイキバットが持つ真の力が、彼の身体に宿っていく。

両腕に過剰なまでに巻かれた封印の鎖『カテナ』は、強過ぎる力を封じる抑制装置。

イクサの装甲に勝るとも劣らない硬度を持ち、対戦車砲にも耐えうる超合金『スノーホワイトメタル』を使用した鎧『ブリザードアーマー』。

その表面を覆う白いは体毛『センサーヘアリング』と呼ばれ、ナノレベルのマイクロファイバーにより、周囲の環境を瞬時に計測し、資格者のコンディションを常時ベストに保ってくれる。

白熊の意匠を凝らし、額に人造魔王石を備えた『レイ・ペルソナ』は、内部に毛細血管の様な接続端子を無数に配置、装着者の頭脳と接続させることで、その機能を意のままに引き出す役割を担う仮面。

蒼い複眼が輝き、彼が放つ冷気によって、生み出された季節外れの粉雪は、炎にも負けず、戦場に降り注ぐ。

仮面ライダーレイ。

ファンガイア対策組織『3WA』が開発した、冷気のを宿す至高の強化戦闘スーツだ。

「貴様……その姿」



肌を撫でる冷たさにシュドナイの身は締めつけられる。

彼が日本で戦った『白騎士』の姿に酷似した戦士は、鎖の巻き付いた腕をジャラリと上げる。

『ウェイクアップ!!』

レイキバットが吹き鳴らしたフェッスルにより、両腕の鎖が弾け飛ぶ。

中から現れたのは、レイの持つ蒼き剛爪『ギガンティック・クロー』

「ほな、行こか」

刹那。

重量感のありそうな容姿からは考えられない瞬発力で、レイは冷たい風を切り、シュドナイの懐に入り込む。

「ぬっ!?!」

知覚のアドバンテージを感じさせない動作で、シュドナイは神鉄如意を振るう。

リーチの長さは遺憾なく発揮され、射程圏にあったレイを薙ぎ払う。

「うおっとお！」

爪を地面に突き刺し、急ブレーキをかけるレイ。  
ギガンティック・クローからは火花が散り、レンガ造りの道からは  
砕けた敷石が舞う。

（接近すんのは難しいか）

槍に加えてあの巨体。攻撃範囲もパワーもかなりのレベルだろう。  
ならば、

「レイキバット！」

「凍えるぜえ、CCCCCCCCOOO!!！」

資格者の指示を受け、ベルトに止まるレイキバットの口から、白い  
霧のようなものが吐き出された。

風の勢いも手伝ってか、霧は瞬時に街の景色を包み込む。

「クツ、目眩ましのつも　　!？」

言いかけて、シュドナイはその誤りに気が付く。

自身の身体に、透き通る水晶の如き氷塊が、纏わりつき初めていた。シュドナイだけではない、街灯も、道路も、車も、怒涛の寒波によつて次々と氷のオブジェクトに変えられていく。

「霧ではなく、ブリザード雪嵐か!！」

動きを縛る氷を神鉄如意で碎き、シュドナイは氷霧を見渡す。

ブリザードを生み出したレイの姿は、猛吹雪に消えていた。

「何処に　　」

今度の言葉は続かなかった。

シュドナイの異形の腕が、爪の軌跡を描く光に引き裂かれたからだ。

「ぐ、おおおおッ!？」

いつぞやのように腕を持っていかれこそしなかったが、傷からは紫色の炎が漏れ出している。

レイの姿を視認しようとしても、シュドナイが辛うじて見ることが

できたのは、氷霧に消えていく蒼い複眼のみ。

（氷霧による攪乱、氷結による行動制限、そして恐らくだが、凍り付いた地面を滑走し、自身の加速力まで高めている）

よく見れば、足元の氷面にうつすらと摩擦によるラインが出来ていた。

（この一瞬で俺に三手先んじるとは……成る程、確かに人間とは思えん手練れだな）

腕から吹き出す炎を止め、シウドナイは巨体をのそりと立ち上がる。

油断は既に廃し、寒さのせいか頭も冴えてきた。  
次で仕留めてやる。

揺らめく氷霧。

だが、人間は存在の力での探知がしづらい分、我々のような完璧な気配絶ちはできない。どうあっても無駄な動きは出る。紅世の存在が持つ鋭敏な感覚を集中させれば

「そこだー!!」

シウドナイが振り返った先には、爪を携え飛びかかるレイの姿。神

鉄如意の鋭く、巨大化した先端が、刃向かう者を一撃のもとに破砕する。  
だが、

「!？」

シユドナイの眼が見開かれる。

神鉄如意に貫かれたレイの姿が揺れ、霞のように消え果て、がら空きになった背後から、ギガンティック・クローの爪が突き出された。

「せいあああつ!！」

「くつ!？」

ガードは間に合ったものの、無理な体制を強いたシユドナイの身体は、レイのパワーに負け、住宅街の一角に叩き付けられる。  
家に空いた風穴から、レイは自分の背後に首をもたげた。

「助かったでオッサン」

「なに。助けて貰った手前、このくらいは安いものだ」

炎を吹き出す杖を構えたドレルが、皺だらけの表情を歪めて笑う。彼、『愁夢の吹き手』の能力は幻術。

シュドナイが貫いたレイは、彼の見せる本物を模した虚像だったのだ。

本来、シュドナイのように圧倒的パワーを持つ相手には効果の薄い力だが、今のようにな、その真価は味方との連携によって現れる。

「だがあれでは、“千変”は仕留められん」

「せやな。もう不意打ちは効かんやろうし」

レイは慢心せず、相手との力関係を冷静に分析する。

「そろそろ逃げた方がええかも知れんわな」

「ふつ、俺が逃がすと思うか？」

瓦礫を払いながら、悪魔が這い出る。

だが、シュドナイの獰猛な笑みを受けながらも、レイの様子に焦り

は見られなかった。

「運良く俺の手を逃れたとしても、周域には俺の部下を配置してある。お前達には、死出の船に乗る道しか残されてはいない」

「かつかつか、ありがたい話やけど、もう迎えが来とるんでな。そんな辛気臭い船よか、“蛇”の方が何倍もマシや」

「何？」

レイが仮面の下で口角を歪めた時だった。

シャガアアアツ！！

「ぬっ！？ これは」

突如として、地中から戦場に現れた巨大な影。  
岩盤の欠片と土塊を巻き上げながら、神の蛇ヨルムンガンドは、ぎらついた眼をぎよろりとシュドナイに向ける。  
その頭部には、鎧を纏う王の姿。

「遅いで太牙」

「酷いな。これでも飛ばして来たんだが」

サガはシニカルに言い返し、指をパチンと一鳴らしする。

ヨルムンガンドの長い体軀が、まるで鞭のようになり、シュドナイへ襲い掛かる。

「ちっ！」

攻撃自体は読みやすいもの。しかし、予測できても、シュドナイとヨルムンガンドとの体軀の差はいかんともしがたい。

踏ん張りを利かせにも関わらず吹き飛ばされ、シュドナイが僅かながら注意を逸らした隙に、レイ達はヨルムンガンドの掘り進めた穴から、逃亡を完了していた。

「……………」

地面にぽっかりと空いた穴を眼下に収めながら、シュドナイは普段の姿に戻る。

目的は概ね完遂した。頭のドレルを取り逃がしたとはいえ、『ドレル・パーティー』はもはや組織としての体を成さず壊滅状態。



だが、この言い知れぬ不快感は拭えない。仕留められた獲物を取り逃がしたというのは、シュドナイに少なくない屈辱感を与えてくる。

「……人間は諦めが悪い、か」

それは以前、あの白騎士にも言われたこと。煙草の紫煙を吐き出しながら、シュドナイは不快感と共に湧き上がる高揚感に、口元を歪ませた。

「面白い」

ドレル・パーティー殲滅における予定外の戦い。

それはかの“千変”シュドナイに、人間の力を認めさせる契機となる戦いだっただけだ。

「では、キミ達はファンガイアに縁のある者達ということか」

「はい。僕はファンガイアを束ねるチェックメイトフォーが一人、キング」

「んで、俺はファンガイアと協力関係にある『素晴らしき青空の会』のメンバーや」

「そうだったのか……いや、礼を言わせて貰おう。キミ達がいなければ、私は滅ぼされていた」

「私からもありがとう。ドレルを助けてくれて、本当に感謝してるわ」

深々と感謝の意を示すドレルとハルフアス。一方で、サガとレイは、何でもなささそうに、

「気にしないでくれ。ただ僕達は、助かる命を放っておきたくないだけだ」

「せやせや。困った時はお互い様やって」

命を救うのはごく普通のこと。  
感謝される謂われはない。

「それで、あなた達はこれからどうするんです？」

「ふむ……取り敢えずは、信頼できるフレームヘイズに、このことを知らせようと思う。“千変”が いや、「仮装舞踏会」が動いたとあれば、早々に我々も準備を整えなくては」

「なら、僕達もそこまで付き合いますよ」

サガの提案に、ドレルは目を瞬く。

「一旦難を逃れたとはいえ、まだ「仮装舞踏会」が狙ってくるつもりません。僕達がいた方が、より安全に情報を運べると思います  
が、如何でしょう？」

「……そうしてくれるのなら是非もないが、キミ達はいいのか？」

サガは頷きながら、さりげなくレイを流し目で見た。  
何を問うているのかを察し、レイはひらひらと手を振る。

「オレもかまへんで。どーせ日本にはいつでも帰れるし、このまま  
オッサンがやられてもしたら目覚めが悪いしな」

「よし、決まりですね」

「　　すまない。では、よろしく頼む」

お互いに頷き合い、ドレルが二人に手を差し出す。

「改めて名乗ろう。私は『愁夢の吹き手』ドレル・クーベリックだ」

「“虚の色森”ハルファスよ。よろしくね！」

サガとレイもまた礼儀として、変身を解除し、交互にドレルの手を取る。

「僕は登太牙。こっちは相棒のサガークだ」

『　　』  
『　　』

「で、オレは襟立健吾。まあ、仲良くしたってやー！」

「俺様はレイキバットだぁ。道中、よろしく頼むぜえ！」

断章・BLIZZARD・CLAW（後書き）

まず一言。

レイキバットに「ブルアアア！」を言わせることができなくて満足です  
（笑）

・この話は前回の更新の際、W投稿しようと思っていたんですが、  
予想外にスケジュールが詰まり、かなりズレ込んでしまいました；  
本編では最近戦闘がないので、こっちではバトルメインです。

・本編に先駆け、レイキバットを引っさげて健吾見参！  
太牙が不在だったのは、彼を迎えに行っていたからでした。  
レイを手に入れた経緯は、彼の本編登場時にでも（そんなに深い経緯でもありませんが）。

本編も鋭意執筆中です。想像以上に奏夜がへたれるんで覚悟し  
て下さい（笑）  
では（^o^）

## 第二十七話・ノクターン／彷徨う心・Aパート（前書き）

「愛と恋の違いはよく問われるけど、基本的には恋より愛の方が深く、強く、崇高であると考えるものが多いわ。」

宗教でも愛は重要視されがちで、キリスト教では「愛は神である」なんて言葉もあるの。

また、愛情を引き金に喜怒哀楽の感情が生まれるって説もあるくらいだから、愛情っていうのは、人間の根源に据えられているのね。ふふふ、奏夜と静香ちゃん愛はどんな結末を迎えるのかしらね」

キバーラ

お知らせ

割り込み投稿で、奏夜のビギンズナイトをUPしました。  
そちらもよければどうぞ。

## 第二十七話・ノクターン／彷徨う心・Aパート

話をしよう。

え？ 語り口が ルシヤダイみたい？ 文章の視点がいつもと違う？ 紅奏夜は何故超天才なんですか？

あー、うるさい。

偶にはこういう始まりもいいだろ。

あと、全てのこと理由を求めろな。

『順応性を高めなさい。あるがままを受け入れるのよ』って死んだ世界戦線のリーダーも言ってたろ。

まあ、最後の質問にだけは答えてやろう。俺が紅奏夜だからだ（作者注・答えになってません）。

話が逸れたな。閑話休題。

アイツ 野村静香と会ったのは、もう六年も前のこと。

あの頃の俺と言えば『この世アレルギー』の影響も色濃かった時期つまり、最も他人を拒絶していた時期だ。

……おい、今『ただの厨二病だろ』とか言ったヤツ前に出ろ。

仕方ねーだろ。一応俺が『この世アレルギー』を発症したのにも、のっぴきならない事情があったんだから。

その辺りは、今作者が執筆中で近々UP予定の過去編を見て確認してくれ。



俺的には黒歴史以外の何物でもないから、なるべく見ないで欲しいんだが。

また話が逸れた。

とにかく、静香と出会ったのは六年前。静香は以前からヴァイオリンを嗜んでいたらしく、上がりたての中学校では、その方面の部活に所属しようと考えていた。

そんな折、幸か不幸か、静香は町外れの屋敷に住み着く天才ヴァイオリニスト　つまりは俺の噂を聞きつけ（当時の俺からすれば迷惑な評判だったが）、興味本位でその屋敷を訪問し、屋敷から微かに聞こえる俺の演奏を耳にした。

瞬間、静香は鎖で閉ざされた門をアクティブに乗り越え、不法侵入者に驚く俺に向かってこうのたまったのだ。

『私に、ヴァイオリンを教えてください！』

もはやそれは、直感やシンパシーの類と言わざるを得ない。

後で聞いた話だが、静香はあの時、演奏の技術云々よりも、俺の音楽に対しての情熱に感動していたようだ。

この人に、ヴァイオリンへの愛に満ちているこの人に、ヴァイオリンを教わってみたいと。

溢れんばかりの期待を胸に、弟子入りを志願した静香。  
当の俺の答えは、

『断る。さっさと俺ん家から出てけ』

最悪だった。

そこから二年。

多少軟化はしたものの、“俺が恵さんと出会い、初めてキバになるまでの間”、紅奏夜と野村静香の関係は決して、良いものではなかっただろう。

……けれど、閉ざされていた俺の心を、最初に開こうとしてくれたのは、間違いなく静香だった。

彼女がいなければ、何も始まらなかった。

今となつては、言葉では言い表せないくらい、感謝している。……  
要するに、何が言いたいのかというのと、

俺は果たして、野村静香に恋愛感情を持っているのか、ということだ。

「おうおう、やっとるかねお二人さん」

「奏夜」

「あつ、先生。おはようございます」

その日。坂井家に奏夜が現れたのは早朝。  
中庭で『鍛錬』に励んでいた悠二とシャナは、手を止めて客人を迎えた。

「悠二。反応速度と判断力は十分付いてきてる。あとは身体の方についていかせられるよう頑張れ」

「うーん、シャナ相手にそれが出来ても、焼け石に水な気もするんですけどね。デフォルトの能力が違いますし」

「言い訳しない。この前の“教授”の一件で、今まで取り込まれた“千変”の腕が完全に吸収されたんだから、身体の反応速度も上がってるはずよ」

情けない本音をはねつけるシャナだったが、奏夜にはそれが、余裕の無さの現れのように思えた。

原因は恐らく、彼女の教育係らしいあのメイド。

「それで、今日は奏夜はどうしたの？」

「ああ、お前に用があって来たんだよ。シャナ」

「私に？」

「お前の教育係っていう鉄面皮メイド、あいつ何処にいるんだ？」

「……………」

シヤナは露骨に躊躇いを見せていた。

昨日の『零時迷子』のことを思い出したというのもある。だが、躊躇する一番の要因としては、奏夜とヴィルヘルミナを会わせたくない、という気持ちが強い。

(なんで昨日、二人はあんなにいがみ合ってたんだろう)

奏夜とヴィルヘルミナの間にあつた剣呑な空気。

どちらも尊敬の対象であり、大好きな人物であるだけに、シヤナの心中は複雑だった。

「……………今、家の中にいる」

結局、シヤナは胸に去来した気持ちを『自分勝手な都合』と処理したらしい。

俯き加減に、坂井邸を指差す。

「千草に話があつたみたいで、アラストールも一緒にいるわ」

「そうか。……………やっぱり“そういう性格”なわけか」

妙に納得した風な奏夜に、シヤナの不安は更に掻き立てられる。

「奏夜、ヴィルヘルミナに何か用があるの？」

「用ってほどのことじゃねえよ。確かに、あのメイドには聞きたいことが無くも無いが……」

主に零時迷子のこととか。

あと、父さんのこととか、父さんのこととか、その他父さんのこととか。

「今日は取り敢えず、釘を刺しに来ただけだよ。まあ案外、千草さんが先に刺してるかも知れないけどさ」

釘。その意味するところをシヤナは正確に理解する。

彼女の目的、それは奏夜が決して認めはしないだろう行い。

悠二を消そうとするなら、容赦はしない。

奏夜はヴィルヘルミナにそう忠告する気だった。

シヤナも勿論、そんなことはさせないつもりだ。だが、シヤナがヴィルヘルミナを“説得すべき相手”とするに対し、奏夜は彼女をあ

くまでも“叩き潰す相手”として見ている。  
期せずして、板挟みの形となったシヤナは、やや控えめな口調で訴えた。

「奏夜……ヴィルヘルミナと、喧嘩しないでね」

「それはアイツの態度次第だ」

にべもなく言い放ち、手をひらひらと振りながら、奏夜は坂井家の中に入り込んでいく。  
まるで我が家のように。

「……最近、先生のふてぶてしさが、ぬらりひょんレベルになってきたなあ」

他人の家、という気遣いを微塵も感じさせない所作。

別に住人である悠二も、恐らくは干草も気にしないだろうから、構いはしないのだが。

「ところでシヤナ。さっきの……カルメルさんだっけ？　先生と何かあったの？　先生があんなに嫌悪感剥き出しって、凄く珍しいよね」

「私にもわからない。昨日の夜、ヴィルヘルミナと会った時から、ずっとあんな感じ」

「ふーん……けど」

悠二はふと、奏夜から感じた違和感を口にする。

「カルメルさんへの嫌悪感だけが、苛々の原因ってわけじゃなさそうだよな」

「悠二もそう思う?」

その違和感には、シャナも昨日の夜から気付いていた。最初は気のせいかと思ったが、悠二も感じいたとなれば、単なる錯覚ではない。

「悠二には分かる? 奏夜がなんで苛々してるのか」

「うーん。僕も具体的には言えないけど……多分、レティシアの時に近いんじゃないかな」

「レティシアの?」



「そう。思慮深くないっていうか、先生特有の余裕が無いっていうかさ」

あの時の奏夜は、理想の脆弱さを突き付けられ、普段の余裕を失っていた。

あくまでヴィルヘルミナのことは苛々を助長させるだけ。

何か“奏夜の根幹を揺るがすようなこと”があり、苛々はその副産物ということだろうか。

（大丈夫かな……奏夜もヴィルヘルミナも）

シャナにとってはどちらも大事な人。だから、仲良くして欲しいのに。

悠二の破壊、友人の不仲、混乱の中でシャナが願うのは、このまま何も起こらないこと。

だが無論、そんな話を通るほど、世の中は甘くはなかった。

「あら、奏夜先生！」

「どいつも千草さん」

堂々と居間に現れた奏夜に、テーブルに座る二人　坂井千草とヴィルヘルミナ・カルメルの視線が注がれた。

「すみません。勝手にお邪魔してしまっています。一応息子さんには声をかけたのですが」

「いえいえ、構いませんわ。ただ、今は少し……」

ただ、千草の対応が友好的な、しかしちょっと困ったようなものであるのに対し、

「……………」

ヴィルヘルミナの眼光には、睨んだだけで人を殺せそうな殺意が込められていた。

千草に気付かれぬよう、表情だけは笑顔のまま、奏夜はヴィルヘルミナを睨み返す。

以下、眼と視線だけで語られた会話。

何故、貴方がここにいるのでありますか。  
俺が何処にいようが勝手だろう。  
端的に言って邪魔であります。お引き取りを。  
うっさい黙れ俺に指図するな。

互いに譲る気などさらさら無い奏夜とヴィルヘルミナ。  
千草がいなければ、即座に殴り合いの修羅場突入していただろう。

「すまぬ奥方」

二人の冷戦を止める助け舟は、卓上に置かれた携帯電話から出された。  
間違っことなきアラストールの声。  
恐らくはコキユートスを携帯電話の中に入れ、電話越しの声にみせかけているのだろう。

(アラストール……そこまでして、シャナに関わる話し合いの場に出たいのか……)

親バカもこれ極まりな“紅世の王”に、呆れを通り越して感動を覚える奏夜だった。

「紅奏夜……いや、紅奏夜殿は、我があらかじめ呼んでおったのだ」

「!？」

ヴィルヘルミナが驚いた様子で携帯電話を見るが、アラストールは気付かないフリをした。

「あら、奏夜先生は“アラストール”さんをご存知だったんですか？」

奏夜はアラストールのパス（芝居）を受け、即席の設定を作り上げた。

「はい。前々からシヤナについて、連絡は取らせて戴いております。なにせ、女の子の一人暮らしですしね。アラストールさんも心配な面が多いようでした」

「うむ。此度、ヴィルヘルミナ・カルメルがここに赴いたのは、シヤナの様子を見るため。

ならば、学び舎のあの子をよく知る彼にも、同席して貰った方が、シヤナの近況を知る意味でも都合が良かったのだ。

事前の連絡が遅れ、申し訳ない」

「まあまあそうでしたか」と人を疑うことを知らない笑みで、千草は奏夜を迎え入れてくれた。良心がズキリと痛むが、やむを得ないだろう。

（貴様もどうにかして、ヴィルヘルミナ・カルメルを説き伏せよ）

アラストールの無言の圧力が辛い。分かってるよ。

妙な芝居まで打った手前、このまま何もせずにいる気はない。

ただ、

「あら、美味しい」

この最強奥様に任せておけば、万事丸く収まるのではなからうか。

今も呑気に、土産物と思わしきあんころ餅食べてるし。

「カルメルさんがアラストールさんの元にお戻りになられる際には、私からも何か日持ちするものをお贈りします」

「い、いや奥方、そのようなお気遣いは、どうぞご無用に願いたい」

「それくらいは、どうかさせてくださいな。　ああ、でもそれだと、お客様にお使いをさせてしまう形になってしまいますね」

「いえ、その際は問題なく務めさせていただくのであります、奥方」

二人ともかなり話しづらそうだった。

アラストールに至っては、お前はそれでも魔神かというくらいに狼狽している。

「あ。奏夜先生にもお茶をお出ししないといけませんね」

「や。お構いなく。押し掛けてきたようなモンですし、千草さんにとっても手間でしょう」

「大丈夫ですよ。すぐ用意できますから。ちょっと待っていてください  
い」

奏夜さえも、千草ペースに巻き込まれていた。

(……キバとフレームヘイズと魔神を丸めるとていうのも、恐ろしいよな)

邪気も何も無く、それでいて聡明。故に坂井千草は無敵なのだ。千草さんマジ無敵。

だが、例え千草が敵に回すべきではない相手でも、ヴィルヘルミナとしては退くわけにはいかないだろう。

(てめえの腹は読めてんだよ)

シャナのヴィルヘルミナに対する、懐き具合からも分かる。

彼女は決して、奏夜に見せる敵意が全てではない。共に暮らし、自分が育て上げたシャナを心の底から心配しているのだ。

しかし、シャナは変わった。様々な出会い、経験を通し、ただの討滅の道具などでは無くなった。

もし、出会った頃の“何も持っていなかったシャナ”が、ヴィルヘルミナの知るシャナであり、その上で今のシャナを見れば、彼女は果たしてどう思うだろうか？

変わってしまったと思うだろう。  
フレームヘイズとしての姿を忘れ、日常に毒されてしまったと思う  
だろう。

こうして千草を訪ねてきたのも、シャナが世話になったことへの礼  
を言うためなどではない。

シャナを変えた原因を探り、傾向と対策を練る為の調査。

(ヴァカめ！)

奏夜は内心ほくそ笑んでいた。

調査？ 傾向と対策？ そんな小賢しい策で、千草さんを打倒出来  
るものか。

身の程を知ることがいい！

「ところで、奥様」

「はい？」

奏夜の心境など露知らず、遂にヴィルヘルミナは話を切り出した。

「私ども……いえ、私、久方ぶりに“あの方”に再会し、いささか  
ならず失望させられているのであります」



アラストールが遂に来たかと言わんばかりに「むづ」と唸る。

「まあ  
「まあ」

「おやおや？ シャナは失望されるようなことは何一つしていない  
と思いますけれど」

（何を白々しい演技を）

完璧な営業スマイルをたくわえた奏夜を無視し、ヴィルヘルミナは  
話を続ける。

「あの方が私どものもとを発たれた時のお姿は、それはそれは凜々  
しいものであります。  
自らの在り様を正しく認識して立ち、的確に対処して切り拓く……  
育てた私どもが、まさに理想とした姿だったのであります」

誇張も過大評価していない。

自分達が与えたもの全てに、彼女は応えてくれた。  
もう自分達がいなくても、彼女は歩いていける。

次に会う時は、より強い輝きを見せてくれる。

そう信じていた。

「それが今や “余事” に心を乱し、正答への蹈躡を見苦しく踏んでるのであります」

(……余事に正答ね)

余事と正答　つまりは、シャナが悠二に抱く想いと、零時迷子の無作為転移。

「仮装舞踏会」、『約束の二人』の標的を野晒しにせず、ミステスごと破壊して無作為転移させ、その意図を挫く、もしくは遅延に追い込む。

さらに悠二が消えれば、シャナの目も覚める　と、ヴィルヘルミナは思っている。

(実に合理的だ。腑が煮えくり返るくらいに)

ムカムカする胃にお茶を流し込む奏夜の隣で、シャナのフレイムヘイズとしての姿を知らない千草は、あくまで一般的な見解から、ヴィルヘルミナの話の要旨を推察する。

「つまり、養育係のカルメルさんから見て、シャナちゃん　平井

ゆかりさんが勉強を怠けている、と？ 確かに、我が家でくつろぐ時間は多いと思いますけれど」

「墮落であります」

マジで殴ってやろうかこの女。  
ふつつつと湧く危険な思考を、奏夜は押さえ込めなくなってきていた。

「確固とした使命の剣、我々が育てた偉大なる器を、このような場所です」

「……くっだらねえ」

とうとう奏夜は沈黙を破った。  
演技のタガが外れ、冷やかな侮蔑が飛び出す。

「黙って聞いてりやつまらないことをぐちぐちと。アンタにシャナの生き筋を決める権利はねえよ」

「なにを」

気に入らない人間から、直球の侮辱。

ヴィルヘルミナの声は怒りに震えていた。

「部外者がなにを言って」

「何が悪い」

しかし、奏夜は怯まない。溜め込んでいた苛々が、言葉に変化されていく。

「シヤナが変わって何が悪い。数多の出会いと経験の中で、あいつが“どうしようもない想い”を抱いて何が悪い。

万象に触れる旅路の中で己を見つめ、変えていく。それが生きるってことだ。

まさか、アンタの思い描くシヤナが、シヤナの究極形だとも思ってたのか？ 自惚れるな」

ヴィルヘルミナの言い分は、奏夜の理念に反するものだ。

人はあくまで、自分の力で自分の道を決め、成長していく。

だから奏夜は、他人の成長に極力干渉しない。あくまで導くだけ。

だがヴィルヘルミナは、

「シャナがそうしたいと願ったのなら、別に構わない。けどアンタはまだシャナがどうしたいのか聞いてないだろ。」

もし嫌がるシャナに、アンタが自由の理想を押し付けたいってんなら、絶対に許さねえ。

シャナの生き方はシャナにしか決められないし、その権利もシャナ以外に持っていない。

それを余事に心を乱すだの、正答への蹈躑を踏むだの」

んなもんシャナの自由だろうが。

「……っ」

無表情の仮面が、崩れかける。

何も知らない人間の戯言。

普段のヴィルヘルミナならそう返すことができただろう。だが、今は何も言葉が浮かばない。

否、“この男”の前ではとつぶべきか。

お前の自由にすりゃあいい。恋に焦がれる愛しさも、恋が報われない苦しさも、お前が選んだことだ。

(……何故、重なるのでありますか)

ふざけていたかと思えば、物事の真実を的確に見抜く一面を覗かせ、張り詰めた弦のような鋭さを見せる男。  
もう何百年も前、急に現れて、霞のように消えていった友人。

ある種の感傷と、奏夜への不快感の狭間にあつて、どうしても一度植え付けられた印象は拭えない。

ややあつて奏夜は、自分の剣幕が、周囲の空気が凍らせていることに気付いた。

「……失礼。少々、熱くなり過ぎました」

「いいえ」

奏夜は千草の口調に驚いた。アラストールとヴィルヘルミナも同じである。

普段の柔らかな物腰は息を潜め、千草は至って真剣に、奏夜の未熟さ故に生まれた怒りを静聴していた。

「先生は真面目な方ですから。何も間違ったことは言っていないですし、お気になさらないでください。ただ　確かにちょっと刺々しい言い方でしたけれど」

「うぐっ」

なんだこの母親に悪戯がバレた時のようなばつの悪さは。

人の目を気にする質ではないが、千草の前では何故か良い人ぶりたい自分がいた。

千草は渋い顔をする奏夜から、ヴィルヘルミナに視線を移す。

吸い込まれそうなまでに深い瞳に、ヴィルヘルミナは奏夜の時以上にたじろいだ。

「カルメルさん。平井ゆかりさんは、誇り高く強い心を持った子です。私のように僅かな付き合いしか持たない者でも、そのことがよく感じられるのですから……カルメルさんは当然、それが本質だと分かっていられるのでしょうか」

「……」

否定も肯定もせず、ヴィルヘルミナは沈黙を貫く。

「先程、先生の言い分は間違っていないと言いましたが、カルメルさんの言い分も、正しいものだと思います。」

「家族も同然なシャナちゃんが心配になるのは当然ですし、今までの凛々しく毅然とした姿が変質してしまう、してしまったのではないか、という恐れを抱くのもまた、無理からぬことです。」

でもだからこそ。

「カルメルさんが仰った『心を乱す余計なこと』というのは、家の悠二とのこと、と拝察します。でも、私はあの子から悠二を、その問題を取り上げるのには反対です。」

「……なぜ、でありますか。」

「あの子が、あまりに幼いからです。」

間髪入れず、千草は断言で答える。



「もし今、無理やりに取り上げ、相手から引き剥がしても、長い人生……いつかは同じものにぶつかるとでしょう。」

“あれ”は、陥ることを避けられないものですから」

「っ」

知らず、奏夜は唇を噛んでいた。

胸に締め付けるような痛み。

乗り越えた筈の古傷と、今ある魂を焦がす衝動が、一緒くたになつて溢れ出してくる。

私が好きなのは、奏夜さんなんです。

私は奏夜が好き。友達じゃなく、異性として、愛してる。

「……その時に」

咳くように奏夜は言う。とにかく、重い思考を振り払いたかった。

「その時になってからでは、遅いですからね」

今の自分がいい例だ。

「そうですね。逃げることならできますが……その時、誇り高いあの子は、自分を許せなくなるでしょう。そうならないよう、多少乱暴であっても、実地に教えられるものを教えておかなければならない、と私は思うのです」

「……それが、あの方の、ため」

「日ごとに悩むことが多くなっています。悩んで、悩んで……でも、あの子はそれを乗り越えて、もっと強くなるでしょう。その程度には、私もあの子のことを分かっているつもりです」

ヴィルヘルミナの戦意が根刮ぎ霧散していくのが見て取れた。こういうところが、千草の恐ろしい面なのだ。

「ただ、他人の私が助言を与えても、果たして効果があるものか、不用意に踏み込んでよいものか、計りかねているところでもあったんです。カルメルさんがしばらくこちらにご滞在なら……あの子のためにこれほど有り難いことはない、と思っています」

しかも、対峙していた（千草に自覚はないだろうが）相手をも巻き込む大らかさ。奏夜やアラストールには無いものだ。ヴィルヘルミナは絞り出すように答える。

「……悩みに付き合う程度には、滞在期間は取るつもりであります」

「良かった！」

邪気0%の笑顔が、詰み（チェックメイト）の合図だった。ヴィルヘルミナは悪あがきのように、

「私はあくまで、ご令息との交際には断固反対であります」

「ええ、構いませんとも。不甲斐ないと思えば、遠慮なくぶっ飛ばしてやってくださいね」

「……了、解であります」

納得はしていないだろう。ただ、言い分は全て正しい。正論をねじ伏せるほど、ヴィルヘルミナは横暴ではかった。

(敵わねーな)

(敵わぬな)

置いてけぼりな男二人は、千草の変わらない無敵っぷりに脱帽する。  
ただ、奏夜の胸中には、小骨が引つかかったようなわだかまりが残っていた。

(……いつかは、向き合わなきゃいけない)

向き合わなかったから、こうして思考の袋小路に入ってしまったている。

本当 シャナや悠二のことは言えない。

あいつらと違うのは、結論を先延ばしに出来るかどうかということだけ。

好きか、否か。

自分の気持ちに素直になればいいのに。

( 本当に夕チが悪いな )

“どっしりよつもない気持ち”ってヤツは。



## 第二十七話・ノクターン／彷徨つ心・Aパート（後書き）

新年あけましておめでとうございます！

初っ端の更新がこんなグダグダですみません！

奏夜のビギンズナイトも合わせて投稿してるので、どうかご勘弁を；

・奏夜が最近頼りなくなってきたような気がします（おい作者）  
どーにか気持ちのケリはつけさせるつもりですが。

・うーん、いつになったら奏夜とヴィルさんをちゃんと会話させられるのか；

・千草さんは本当に無敵です。正直、頭が上がる相手が真夜くらいしか思い付きませんわ（笑）

今回は新キャラ登場。千草さんと違ってちょっと頼りない人ですが……果たして？

では（＾Ｏ＾）

どうでもいい近況

・Angel Beats 未放映話試聴。ハイテンション状態でどんどん暴走するみんなに終始笑わされっぱなしでしたが、最後は椎名の「キュー……ト！」に全てを持っていかれた（笑）

第二十七話・ノクターン／彷徨うつ心・Bパート

【4年前】

その日、奏夜の様子はいつもと違っていた。

私は普段通り授業を終えて、夕方に奏夜の家にお邪魔した。どうせまた冷たい態度を取られるだろうけど、いちいち気にしていても埒が開かない。最初に比べれば、奏夜の癩癩にも大分慣れてきたしね。……今でも、偶に泣いちゃったりするけど。

「おじゃましまーす」

木造のアンティーク風な廊下から居間を抜け、二階の仕事場へ上がる。

職人らしい散らかった部屋。

中央のテーブルには、ノミを片手に真剣な面持ちでバイオリン製作に向かう奏夜の姿。

「こんにちはは奏夜、今日も頑張ってるね」

「……おっ」

おや、反応が返ってくるとは珍しい。  
まあこのくらいは前にもあったし、今日は機嫌が良い日なのかな。  
ところが、私の目算は外れていた。いや、程度を読み間違えたと言  
うべきか。  
なにしろ、手近にあった椅子を引き寄せ、そこに座ろうとした私に  
対し、

「…………菓子」

「え？」

奏夜が声を掛けてきたのだ。

いつもなら私がここにいても無視一辺倒で、自発的に私に話し掛け  
たりなんか絶対にしない奏夜が、である。

「下に茶菓子があある。食いたきゃ食べ」

「…………あ、う、うん。ありがとう」

衝撃から脱し切れないまま、私は一階に降り、机の皿に盛られた茶  
菓子を発見する。

…………これはひよっとして。



(用意しておいて、くれたのかな?)

自惚れだと勘ぐってしまう自分を、今日ほど嫌だと思った日はない。猜疑心へのせめてもの抵抗として、菓子入れと二人分のお茶を加えて二階へ戻る。

「奏夜。その、お茶入れてきた」

「……ん」

返事なのかなんなのかよく分からない受け答えをしつつ、奏夜は器材を置き、その場にあった椅子を2つ、向かい合わせにセットし、間に小さなテーブルを挟む。

(……なっ、何なの今日の奏夜は!?)

何か不自然に優しいよ! 私が奏夜に望んだゴール地点な筈なのに、あまりにも劇的な変化で逆に怖いよ!  
もちろん、いつもなら奏夜はこんなことしない。茶菓子を薦める時点で有り得ず、一も二もなく私を追い出そうとする。

「……座らないのか？」

「ふえっ！？」 うん、うん。座る座る」

茶菓子をテーブルに置きつつ、奏夜と私は淹れたばかりの紅茶を口に運ぶ。

傍目からすればまったりムードなんだろうけど、私にとっては気が  
気じゃない。

(うっ、なんで何も言わず静かに紅茶飲んでのよっ！！)

しかもその様子が妙に絵になるから、意識せざるを得ないじゃない！  
情緒不安定な性格に隠れて忘れがちだけど、奏夜はかなりのイケメンだ。

顔は整ってるし、すらりと伸びた体格はモデルでも通用する。ぶっちゃけ、足組んで読書でもしてればキマる男なのだ。

そんなヤツと部屋に二人きりとなれば、いくら見知った私でも緊張してくるわけで……。

「静香？」

「は、はいっ!？」

「……何で敬語なんだ」

思考に割り込まれてびっくりしたからに決まってるでしょ!!  
とは言えない私。

本来、年上の奏夜に対する口調としては、これが正解なのだろうけど。

「……変か? やっぱり」

「えっ?」

ちょっと悲しそくに奏夜は言う。  
これも私が見たことのない表情だ。

「変って、何が?」

「いや、だからその……この口調ってどうか、態度ってどうか」

やっぱり、意識してやっていたらしい。  
変ってことはないけど……。

「うーん……変っていうより、びっくりしたって感じかな。本当にどうしたの奏夜？　そりゃ、奏夜が自分から私に話し掛けてくれたのは嬉しいけど」

「……………そうか」

一瞬の安堵。

けど次の瞬間には、奏夜は思い詰めたような顔に戻ってしまう。

「ちょっと……………昨日色々あったぞ」

「色々？」

「ああ。まあ、あまりに荒唐無稽な話でな。ありのままを話すと子供助けて変な女の人に絡まれてパペット使う蜘蛛に襲われて鎧着て　と、そんな感じ」

日本語でOK。

一ミリも理解できなかったけど、話の腰を折るのもアレなので、私は聞き手に徹する。

「んで、まあ……………今更ながら自分を見つめ直して、自分の駄目さ加

滅に気付いたりして、少し、前に進んでみようとか思ったり思わなかったりして……えっと、だから、なんていうか………」

歯切れ悪く一方的な言葉を並べ、奏夜は意を決したように立ち上がった。

何事か、と身構える私を余所に、奏夜はすつつと息を吸い込む。

「じゅんっ……」

直立から角度90°での前屈。近年稀にみる謝罪の証だった。そして私にとっては、今年度の衝撃シーンベスト1。

「えっ!?!? ちょ、ちょっとどうしたの奏夜!?!」

だが、私がいくら喚いても、奏夜は頭を上げようとはしなかった。

「いつも酷いこと言って、ごめん！　ずっと前から、静香が俺のことを心配してくれてたのは分かった！　でも、俺は臆病だったから、誰にも迷惑をかけないって決めてた自分が、変わっていくのが怖くて……それでまた、傷付けるんじゃないかと思って……けどそのせいで、お前を何回も何回も泣かせてた……謝って済むレベルじゃないのは、分かってる。許してくれとも言わない……でも、本当にごめん……！」

いつもの空虚な暴言ではない、行動と誠意が伴った、奏夜の全身全霊が詰まった言葉。

私がいよとしてしていると、奏夜はそれをどう取ったのか、やけに慌てた様子で、

「わ、悪い……やっぱ、ムシが良いよな。嫌われても可笑しくないこと、何回も何回もしてきて今更……で、でも、もし何か、俺に償えることがあるなら言ってくれ！」

……もう純粹を通り越して愚直に近かった。

そりゃ私も、奏夜の態度にムカついたことくらいある。

でも奏夜を本気で嫌いなら、こうして一緒にいたりしない。

私は奏夜の全てを納得した上で、ここに足を運んでいるのだから。

そう　私に奏夜を咎める気はない。それよりもこの場で重要なことは、

(奏夜……前に進もうとしてるんだね)

あのマイルドな対応も、カ一杯の謝罪も、全ては奏夜の決意だったんだ。  
世界を拒絶する閉ざされた窓を、己の足で壊すために。  
自分を、変えていくために。

「奏夜。顔、上げて」

私を見つめる瞳は、不安で彩られていた。  
彼を落ち着かせる目的で、奏夜の手をそっと手に取る。が、その簡単な動作にさえ、奏夜は小犬のように身体を震わせた。  
……ええ、不覚にも萌えてしまいましたよ。

「じゃあ一つ。お願いしてもいい？」

「お、おう、何だ？」

どきどき。ベタな擬音が聞こえてきそうなくらい、奏夜は緊張している。  
悪戯っぽく笑って、私は、後ろのショーウィンドウに飾られたブラッディローズを指差す。

「ヴァイオリン、教えて？」

奏夜と、一緒にいられるように。

奏夜と　もっと仲良くなれるように。

「静香に……告られました」

「ぶほっ！」

口に含んだコーヒーを盛大に吹き出す恵。正面にいた奏夜の顔面に黒い液体が飛び散るが、恵にとっては今の発言の方が重要だ。

「ケホツ、ケホツ！　な、なによ！　告白！？　静香ちゃんが

奏夜くんに！？」

「はい」

悠二の家からおいとまし、今はマル・ダムールでの昼下がり。



顔にかかったコーヒーをハンカチで拭きながら奏夜が答える。

「うわあ、遂にこの日が来たかあ　！　いいわねいいわね、赤飯炊いてお祝いしなきゃ！」

「恵さん、一応ここ公共の場なんでテンション下げてください」

気付けば『マル・ダムール』の客がこちらをガン見していた。

「なによつ、こんな衝撃イベントってかめでたいイベントを前にして、他人の目なんか気にしてられるかってのよ！」

「気にしてください。あと拳を天高く突き上げないでください。更に言えば口周りのコーヒーを拭き取ってください」

「むー、奏夜くんのツツコミが普段より冷たい」

渋々机に置かれたナプキンを取る恵。

「けど本当にビックリしたわ。いきなり『相談があります』なんて言い出すもんだから何かと思えば……一応、私のことは頼りにしてくれてるのかしらん？」

「いえ、頼りっっていうか、他に相談できそうな人がいなくて」

シヤナ達は論外。名護はズレたアドバイスしかないだろうし、母である真夜は父のことがあるから聞きづらい。千草に聞ければベストだろうが、やはり生徒の父母に相談というのは、奏夜の（僅かに残る）教師としてのプライドが許せなかったのだ。

「ふーん……まあいいけどね。それで？　結局奏夜くんは何て返したの？」

「……………」

奏夜は気まずそうに目を逸らす。

ああ、外はいい天気だな。

「……………保留にしてるのね、返事」

「アハハハハハハハハハハ、笑えよ、思う存分に笑って下さいよ」  
のヘタレ野郎とー！！」

高笑いの割に、言っているセリフは凄まじく格好悪かった。頭を抱えて机に突っ伏す奏夜に、恵は白い目線を向ける。

「キミって普段自信満々のクセに、肝心な時になるとヘタレよねえ……キャラがブレてるわよ」

「わかってますよ！ 自覚してましたよ！ 俺の性格はオレ様氣質という設定に無理が生じてきていたのは！ 具体的に言つと第十四話のあたりから！」

「設定言うな。……けど、実際のとこどうしたいの？ ハッキリ言わせて貰うけど、こればかりは奏夜くんが自分で答えを出すしかないわよ。あなたも分かってるでしょうに」

俯いたまま、奏夜は短く頷く。

「じゃあなんで私に相談なんかしたのよ」

「……なんででしょうね。誰かに弱音を聞いて欲しかったのかも知れませんが」

奏夜はくしゃりと髪を掻き上げ、告げる。

「静香の告白は、正直めちやくちや嬉しいです。あいつが全部承知の上で、俺に想いを告げてるのが分かりましたから」

『深央』の名前を 奏夜の中のタブーに触れたことも、その証拠だ。

「そうでなくても、あいつは俺にとって、凄く魅力的な女の子なんです。嬉しく思わない方がおかしいですよ」

「ふうん、静香ちゃんを恋愛対象に見れるくらいには、あなたも成長したわけね」

当たり前だ。

恐らく紅奏夜の心は、知らず知らずのうちに、彼女のことを意識していたのだろう。

ただ、その気持ちを抑圧し、気付かないフリをしてきただけで。

「じゃあなんで、素直に好きって言わないのよ。恋愛対象として見てる、且つ告白もされた。何の問題もないじゃない」

「そうですね……迷う理由を挙げるなら、この嬉しいっていう感情が、本当に『好き』なのかどうなのかわからないから　　ってことでしょうか」

自分で言いながら、滑稽さに苦笑いが込み上げてくる。

シヤナ達にも、散々「ただ好きでいればいい」なんて説教してたくせに。

「トラウマ背負った男を気取るつもりはないんです。……ただ、不安なんですよ。この曖昧な気持ちを『好き』って感情だと決め付けて、その結果あいつを傷付ける日が来るんじゃないかって」

どうしても、傷と理性が邪魔をする。

『お前は静香を大切に出来るのか』と。

結局また、同じことを繰り返すんじゃないかと。

「ずるいですよね、こんなの。俺……やっぱり何一つ変われてない」

恵は、しばらく奏夜をジーツと見つめていたが、やがて深い深い溜め息をついて、

「お馬鹿ねえ。奏夜くんは」

「…………？」

「静香ちゃんが可哀想だわ」

本気で同情するように肩を落とし、恵はコーヒーを一気に煽る。

「キミの鈍感さって筋金入りよね。相手が静香ちゃんだからいいよ  
うなもの、そんな優柔不断だとnice・boatみたいな展開  
になりかねないわよ」

「あんなダークなEDになりたくないのには同意しますけど。……  
ってか、なんですか鈍感って。俺まだ何か気付いてないんですか？」

「気付けてないわ。あのね、奏夜くん。静香ちゃんは可愛いだけじ  
ゃないのよ。好きって気持ちに責任を持てる、強い女の子なの」

恵の口調は、不出来な弟を叱る姉のようだった。

「奏夜くんさ、静香ちゃんがこうなることを予想してないと思う？」

奏夜くんの『傷』を知ってる静香ちゃんが　ずっとキミを見  
てきた静香ちゃんが、自分の告白のせいで、奏夜くんがどれだけ思  
い悩むか、考えないと思う？」

「……それは」

「静香ちゃん言ってたわ。『キミを幸せにするためなら、どんな茨道でも歩いていく』って。その茨道には、自分の告白でキミを傷付けるってことも含まれてたんじゃないかしら」

恵はコーヒーをそっと脇に置く。

「キミが気付けてないっていうのはそういうことよ。静香ちゃんがどれだけの覚悟を持ってキミに告白したか分かってない。

あのコは、奏夜くんがどんな答えを返したとしても、その答えのせいで傷付けられても、奏夜くんを恨んだりしないわよ。

結果を全部受け止めるってことが、本当の覚悟なんだから」

奏夜はすっかり口を閉ざしてしまっていた。

きっと彼の脳内では、様々な思考が渦巻いているのだろう。恐らくは、考えなくてもいい思考を。

( やれやれ……、このあたりは、出会ったばかりの奏夜くんの方がまだしっかりしてたわねえ )

奏夜と友達になった日。  
震えながらも差し出された手には、彼の精一杯の勇気が込められていた。

奏夜は成長した。しかし、そのせいで失ってしまったものも多い。でも、失ったことはいい訳にはならない。

「奏夜くんに足りないのはその覚悟よ。  
いい加減、結果を受け止めることを覚えなさい。ここで静香ちゃんから逃げて、問題を先延ばしにするだけなんだから」

ここばかりは静香のためでなく、奏夜のために恵は告げた。  
いい加減、彼は進むべきだ。  
四年間閉ざし続けた扉を開けるべきだ。  
でなければ

(深央ちゃんが、報われない)

恵はスツと立ち上がり、固まったままの奏夜にコーヒー代と最後通告を押し付ける。

「お姉さんの人生相談はここまで。あとは自分でなんとかしなさい。



あ、それと今日中に静香ちゃんには連絡しときなさいよ。後になればなるほど、返事するのがツラくからね。そんじゃ」

シュツ。

どこかでみたような敬礼っぽいポーズを最後に、恵はマル・ダムールから出て行った。後には、俯いたままの奏夜だけが残される。

「……………温い」

冷めたコーヒーを口に運んでも、気は晴れなかった。

「覚悟、か。いつの間に俺はこんなに臆病になったんだかな」

こう見えて、今の自分には自信があっただけれど。少なくとも、心の声に耳を澄ませられる程度には。

「どっすりゃいいんだかな」

いつもの自問自答。

しかし今回は、出口らしい出口が見つからない。

『好き』か『嫌い』か、それだけなのに。

いつまでそうしていただろう。  
外の空が茜色に染まった頃、マル・ダムールの来客用の鈴がからんと鳴る。

「マスター、お久しぶりです」

「あらららら、貫ちゃんじゃないの!」

マスターが意気揚々と迎え入れたその客は、三十代前半と思しき男性。

渋い声ながら、その顔立ちは若々しく、しかし軟弱さを感じさせない、どこかアンバランスな容姿だった。

……おや?

(あの人、誰かに似てるな……誰だっけ?)

少し気になったのか奏夜は、既知の間柄らしいマスターと男性の会話を耳をそばだてる。

「久しぶりだねえ」。いつ戻ってきたのさ

「つい昨日です。ホラ、この前のミサゴ祭りの事件! 赴任先でその話聞いてもう心配で心配で」

「相変わらず家族思いだねえ。あ、そうそう。最近は息子さんもここに來てるんだけど、知ってる？」

「本当ですか？ あいつ、コーヒーに興味が湧く年頃になったのか……」

「いやいや、必ずしもコーヒー目当てってワケじゃないんだけどね  
あ、ちょうどいいや。奏夜くん！ ちょっとこっち來てくれる？」

「？ はい」

マスターに呼ばれ、テーブル席からカウンター席に移動し、男性の隣に座る。

「貫ちゃん。こちら、貫ちゃんの息子さんの担任やってる紅奏夜くん」

「えっ！ じゃあ、あなたが噂の！」

噂って何の噂だ。

戸惑いながら奏夜は尋ねる。

「あの、失礼ですが、どこかでお会いしましたか？」

「ああ失礼。まさかこんな所で会えるとは思えなくて」

男性は頬を掻きながら笑う。

「坂井貫太郎です。はじめまして、紅奏夜さん」

「……」

男性の名前を反芻し、奏夜は目を剥いた。

「悠二の、お父さん？」

「ふう……ちょっと遅くなっちゃったかな」

沈みかけた夕日を見ながら、静香は母から頼まれた買い物を終え、ビニール袋を片手に足を進める。高架にさしかかったところで、ふと静香は高架下の階段を見下ろす。

そこはつい前日、愛する人に想いを伝えた場所。

(……奏夜)

期待と不安が入り混じる。  
待つのは仕方ないことだけど、やっぱり落ち着かない。  
想いが実るか、散るか。そのどちらかだ。

(でも、いいよね)

ちゃんと“言えた”のだから。  
これで後戻りはできない。  
でも同時に、後悔もしない。  
ツラくはあるかも知れないけど、そこに漕いだ気持ちは生まれ  
ないだろう。

(どうなっても、受け止めなきゃ)

笑顔と共に覚悟を再確認し、静香は再び歩き出す。

「くすくす。乙女な仕草だなあ」

突然、だった。

さっきまで誰もいなかった高架に、自分の目の前に知らない人が立っていた。

ゴシックの黒コートとロングスカート。顔には瞳以外を覆い隠す包帯。

「あんなピュアな反応見せられたら、男の子だったらイチコロなんだろうね。くすくす、羨ましいよ。ボクはお世辞にもピュアとは言い難い性格だからさ」

「あ」

軽い調子の声が、かえって不気味だった。

声が掠れる。身体が固まり、背筋が凍りついた。

静香は本能的に理解する。

ヤバイ。目の前に立つこの女性は、自分が出会ってきたどの人も

違う。

「ん？　なんか怖がられちゃってる？　うわ、傷付くなあ。キミみたいな可愛い女の子に嫌われちゃうなんて」

女性が、一歩前に踏み出す。

「ひっ………！」

反射的に後退する脚。しかし、そんな防衛意識も、眼前の脅威には無意味。

「ゴメンね。キミに恨みはないんだけど」

静香が瞬きする間に、女性は数メートルはあった距離を一瞬で詰め、

「ちょっとボクのゲームに付き合ってよ」

傍目からすれば、静香の額に指先でとんつ、と触れただけ。しかし、ただそれだけの動作で、静香の身体は足元から崩れ落ちる。

「はい、お姫様ゲート」

気絶した静香を抱き留め、女性　　ディネは包帯の下で笑みを作る。

「さてさて、王子様にはあとで連絡するとして……残るは舞台セツティングかな。やっぱシチュエーションはベタなのがいいよね。恋愛にしる何にせよ、エンターテイメントで読者ウケするのは常に王道展開だし。ん？　なんかボクプロデューサーみたいじゃないかな？　さしずめディネPってどこ？　くすくす、いいねいいね！

最高に盛り上がってくる肩書きだ！」

一人テンションを上げていくディネ。

ただハシャいでいるだけに見えて、彼女の中では悪趣味なゲームが組み上がっていく。

「さあ、ここまでお膳立てしてあげたんだ。ちゃんとゲームに乗っ  
てくれよ？」 『器候補』クン」



その言葉を最後に、ディネの姿は静香と共に霞んで行き、夕暮れの景色に消えていった。

## 第二十七話・ノクターン／彷徨う心・Bパート（後書き）

遅くなりましたあ！

いや本当にすみません……秋期テストで死んでました。

これからは元のペースに戻せる……ハズ。

・お悩みな奏夜。ヘタレな彼はイラつくかも知れませんが、やっぱり彼のトラウマはそうそう拭い去れないと思うので、もう少し悩んで貰います。

・坂井パパ登場。この人はどうも頼りになるのかならないのか分かりづらいキャラです。奏夜同様、掴み所がない感じ？

・ディネがどんどん狂い気味なキャラになっていく……いや、今んとこ書いてて一番動かしやすいんですけどね（笑）  
キャラモチーフは、オースのカザリや、『デュラララ！』の折原臨也です。

さて、浚われてしまった静香。二人の恋の行方はどうなる？……  
と言いながら、次の話は貫太郎さんとの会話&ヴィルさん戦リベンジなんですけど（え  
では、また次回！

・どうでもいい近況

最近ニコニコで、子供の頃に見ていたウルトラマンゼアスのMADを見ました。映画二本だけの作品ですが、やはりいい作品ですね。弱点の汚れも構わずに戦う姿、仮面ライダーWにもあった声援によるパワーアップ、豪華なキャスティング（とんねるずや故アンディ・フグ氏など）と、子供の頃にはまだ理解できなかった格好良さを楽しめました。

3 やってくれないかな……。

## 第二十七話・ノクターン／彷徨う心・Cパート

「けどまさか、こんな形でお会いすることになるとは思いませんでした」

「ははは、確かにそうですね。私もなかなか縁に恵まれているようだ」

偶然から出会った紅奏夜と坂井貫太郎。

二人はマル・ダムールを出た後、取り敢えず帰宅は一緒に、ということ、ふらふらと住宅街を歩きながら、それぞれの我が家に足を進めていた。

(悠二のお父さんか……)

奏夜は彼のことをよくは知らない。

マル・ダムールでコーヒー片手に会話して得た印象と、前に千草から聞いた『優しく可愛い人』という情報しかない。

ただ……前者に乗っ取って判断するなら、『読めない人』というのがしっくりくるイメージだった。

息子と同じく頼りないイメージを持ち合わせつつ、悠二には無いどこか達観したような、悟ったような風格を醸し出している。

底が知れない、という意味で言うなら、一番印象が近い人物は、奏

夜の父である音也だろう。

(性格はまるで違うけど)

息子の自分が言うのもアレだが、あんな性格の人間は100年に一人いれば十分だ。

「海外で仕事をされているのは聞いていたのですが……失礼ですけど、どんなお仕事を？」

「あー、『困っている人の相談に乗る仕事』というところですよ。基本的に海外での活動が主なんですがね」

「困ってる人の相談に乗る仕事ですか。カッコいいですね」

お世辞でなく、奏夜は率直な感想を述べる。

「いやいや、そんな大層なものありませんよ。お蔭で家族との時間もなかなか作れないような情けない亭主でして。

父親がいない手前、先生や学校側にも色々とご迷惑を掛けてしまったわけではありませんか？」

「いえいえ、そんなことはありませんよ。千草さんには俺の方もお世話になりましたし、悠二もここぞつて時には頼りになりますし」

主に“徒”関連で。と、奏夜は心の中で付け加える。

「悠二ですか……そう言えばあいつ、学校ではどうしてます？あれでなかなか社交性のあるヤツだとは思ってますが」

やはり長い間、自分の目の届かないところにいる分、色々と心配になるようだ。

やはりいい親父さんだ。と奏夜は思う。

「友達も沢山いますし、楽しくやっていますよ。ただ……その、女子生徒との間で少々面倒な問題を抱えていますけどね」

「女子生徒　　シヤナさんと吉田さんのことですか？」

「？　　知ってらしたんですか」

「ええまあ、これまた偶然、二人と話す機会がありましたね。なるほど、あいつはあいつで大変なようだ」

息子の色恋沙汰をちょっと楽しんでるようだった。

「先生としては、あの三人をどう見ています？　悠二にもそれとなく、どっちが本命なのかと聞いてみたんですが、はぐらかされてしまっただけ」

さりげに酷なことを聞いていたらしい。

あの優柔不断な悠二が、そんな質問に答えられるわけがないのに。

(……まあ、俺も似たようなもんだけど)

現在進行形で抱えている悩みが脳裏をよぎり、奏夜は少し自虐っぽく笑いながら答えた。

「どうでしょうね。シャナはまだ恋愛に対しては幼いですし、吉田も大分物怖じはしなくなりましたが、あと一歩が踏み出せないみたいですし、トドメと言わんばかりに悠二の鈍感な性格ですからね。

まだしばらくは平行線を辿るでしょう」

それだけ、あの三人の性格が生み出すコンボは実に厄介なのだ。別の仮面ライダーみたいに聞こえるのは気にするな。

「俺も偶に相談はされますが、なるべく指針を示すだけに留めてるんですよ。恋愛っていうのは、外部の人間がどうしたところで、結局は当人達の決めることですから」

まさに今の俺のように。

「まあいずれにせよ、そう遠くない未来に決着はつくでしょう。さつきはああ言いましたが、三人ともしっかり成長してます。

悠二が、シャナか吉田のどちらか一人を選んだとしても、選ばれなかった一人が不幸になるってことはありませんよ。悠二が結論を出せるくらい強くなる頃には、シャナも吉田も、その結論を受け止められるくらい強くなってるでしょうから」

「ふむ……確かに。結果がどうあっても“あれ”はいつかは通る道ですからね」

「そういうことです。だから俺からあいつらに言えるのは、『悔いを残さないように頑張れ』ってことくらいですよ」

俺のように、いつまでもくすぶっているようなヤツにならないように。

貫太郎は、遅しさと翳りを感じさせる奏夜の顔を見て何を思ったのか、



「噂通りの方ですね。奏夜先生は」

「はい？」

若々しい顔を歪めて笑う貫太郎。リアクションに困った奏夜は、きよとんと呆けるばかりだった。

「いや、千草さんからいくらか先生の話は聞いていたんですが、こうして実際に対面して見ると、確かに凄さが伝わってきますよ。その聡明さも、鋭い洞察力も、一朝一夕で身に付くようなものじゃない。いや、ウチの悠二もいい先生に巡り合ったものだ。ただ」

「……………ただ？」

「少し、思い描いていたイメージとは違いましたがね」

さりげなく付け加えられた言葉。

なんだかんだで、ほとんどの人間に高評価を得る奏夜にしては珍しいことだった。

「先生は誰かを思いやることができる。それは素晴らしいことです。」

ですが、思いやる余り、自分のことを疎かにしているのではありませんか？」

「……」

正直驚いた。

初対面の相手に、ここまで突っ込んだことを言われるのは初めてだったからだ。

「どつしてそう思うんです？」

「悠二とシヤナさんと吉田さんについてお聞きした時、僅かに表情が変わっていました。私の見立てですが、あれは三人のことを気遣いながら、同時に羨ましさを感じているような表情に思えました」

「参りましたね。そんなわかりやすい顔をしてたんですか」

貫太郎自身の洞察力もあるだろうが、奏夜が気を抜いていた点も否めないだろう。特に……今の奏夜の心境では。

「羨望は時に、諦めにも通じます。『羨ましいけど、自分には絶対に手に入れないもの。だからせめて、他の誰かがそれを手に入られるようにしよう』と考えても、なんら不思議ではありません」

「……流石は千草さんの旦那さんですね」

痛いところをガンガンに突いてくる。

奏夜が苦笑すると、貫太郎は急にばつが悪そうに頬を掻いた。

「……や。失礼。職業柄、つい人を観察する癖がありましたね。気を悪くされたのなら」

「いえ、いいんですよ。……そうですね。多分俺は、あの三人が羨ましくて堪らないでしょう。あいつらが今、がむしゃらに恋愛を謳歌していることを嬉しく思いながら、それと同時に、あいつらの恋路を、高嶺の花のように見ている」

失ってしまったから、もう手に入らないから、眺めているだけ。

「詳しい説明は省きますけど、俺、昔恋愛で大失敗しちゃったんですよ。」

それ以来ですかね。頭の中で、何回も何回も同じ質問がリピートされてるんです」

俺は誰かを傷つけないだろうか、と。

俺は本当に幸せになっていいのか、と。

「気持ちの整理はつけたつもりだったんですけどね。やっぱりダメみたいですよ。どうしても一歩が踏み出せなくて、足が竦んでしまう」

自分のことを疎かにする、とは実には的確だと思う。

紅奏夜がこの世で一番嫌いなのは、紅奏夜自身だからだ。

一度は本当に、自分を消そうとまで思った。いくら立ち直ったところで、そこまで思い詰めていた事実は変わらない。

嫌いな自分を捨てて、好きな他人に重点を置くのは当然だ。

二人の間を、重い空気が支配する。ややあつて貫太郎は、短く息をついて、

「どうやら先生は、自分を泣かせるタイプのようですね」

「？ 自分を、泣かせる？」

「そうです。ちょっと昔、外国で知り合った方から聞いた言葉でしょね。いつも牛乳タンクを担いでる変な人だったんですが、今の先生はまさに、自分を泣かせていますよ」

劣るような、諭すような口調で、貫太郎は続ける。

「私と千草さんが学生結婚だったのはご存知でしたか？」

「はい。千草さんから、当時は大変だったという話を幾度か」

「ええ。まあ、学生同士の結婚なんてのは、今も昔も歓迎されることじゃありません。親族ともはつきり縁を切られてね。未熟さに見合った苦勞が容赦なく襲ってきましたよ」

貫太郎が語るには、マスターとはその頃知り合っただけらしい。右も左も分からない夫婦に、よく世話を焼いていたそうだ。

「ただね。私達はあの時間を辛いとは思っても、不幸だったとは決して思っていない。何故なら私も千草さんも『お互いが結ばれたあと後悔する』よりも『お互いが結ばれなくて後悔する』ほうが何倍も恐ろしかったからです」

やって後悔するか、やらずに後悔するか。二人が選んだのは前者だった。

俺はどちらでもないな。と奏夜は思う。今の自分は、どちらも選べずにいる臆病者だ。

「人間、時には自分を泣かせることも必要でしょう。しかし、泣かせ続けるのはよくない。」

覚悟を持って臨みさえすれば、どんな道を選んだとしても後悔は残りませんよ。何を怖がる必要があるんですか？」

奏夜は、自分の悩みを話してはいない。

にも関わらず、貫太郎は奏夜の胸の内を的確に見抜き、言葉を投げかけていく。

「奏夜先生、貴方はもっと明るくいるべきです。出会って間もない私でも、そっちの方が貴方らしいことは分かります。」

多分、うちの悠二が先生を尊敬した理由も、明るさだと思えますよ」

「……明るく」

「幸せになるべき、と言い換えた方がいいかもしれませんね」

幸せになる。それが奏夜にとって簡単でないことは、貫太郎も察していた。

だからこそ、貫太郎は人生の先輩として、奏夜に道を指し示す。

この青年が、息子にそうしてくれたように。

「人は皆、幸せになるべく生まれてきます。幸せになっただけならいい人間など、この世のどこにもありません」

雷に打たれたような気分だった。  
ざわりと身体中が沸き立ち、同時に、心の中に引つかかっていた何かが、すっと薄くなっていく。  
まだ、全てが消えたわけではない。しかし、さっきまでとは何かが違っていた。

(……俺は)

望んでいいのだろうか。あの女の子との幸せを。

……いや違う。問題は、自分自身がどう思うのかだ。

(そうか。俺は、ずっと誤魔化してたのか)

許されないだのなんだのと面倒な理屈に逃げて、本心から動こうとしない。

動くか、動かないか。それを決めるのも決められるのも、自分しかないのに。

(俺は、幸せになりたいのか？ 静香と一緒に)

少しだけ、迷った。

少しだけだった。

「……貫太郎さん」

「はい？」

「ありがとうございます」

奏夜の表情は何か吹っ切れたような清々しさに満ちていた。  
驕りがあった今までと違う自然体の笑顔を見た貫太郎は、

「ああ、やっとイメージが合致しました。そういう笑顔を浮かべて  
た方が、奏夜先生の印象に合ってます」

「あはは、確かに今は凄く気分が良いかもしれません。すみません



でした。教師が情けないところを」

「いえいえ。これも私の職業柄の行動に過ぎません。それに、教師とかは関係ありませんよ。私も先生も、一人の人間なんですから」

この瞬間、坂井貫太郎は奏夜にとって『尊敬に値する人』にカテゴライズされた。

千草とはまた違う底知れなさ。悠二といい、やはり坂井家は只者ではないとさえ考えてしまう。

その後、二人は他愛ない会話を交わしながら、途中の別れ道で各々の帰路に着いた。

「どうでしょう奏夜先生、今度また、一緒にコーヒーでも」

「ええ、喜んで。今度話す時は、もっと明るい話題をご用意させて貰います」

去り際に約束を取り付けて、奏夜は紅邸へと足を早める。

その足取りはやはり、幾分か軽くなっていた。

「……おかしいな」

時間は真夜中。

留守電サービスに繋がる携帯電話を片手にぼやく。

手持ち無沙汰に工房の椅子を揺らす奏夜の前に、小さな影が飛んでくる。キバットバット三世、タツロット、キバーラだ。

「どっしたよ奏夜」

「さっきからずっと携帯電話眺めてますよねえ」

「いや、さっきから静香がケータイ出ないんだよ……さっきから何度もかけてんだけど」

「あ！ 静香ちゃんに電話かけるってことは……もしかして！」

キヤーキヤーはしゃぐキバーラ。少し気恥ずかしそうに、奏夜は頷く。

「ああ。 決めた」

『おお〜!』

キヤーキヤー具合が他二匹にも伝播する。女三人寄れば姦しいとはよく言ったものだ。……いや、キバットとタツロットは男だが。

「だから連絡しようと思ってんだけど……携帯落つことでもしたかな、あいつ」

静香の家にダイレクトで電話するのもアリだが、静香の親が出る可能性もある。何とかそれは……気まずい。娘さんに告白の返事をしようとしている手前、決意が挫けるような要素を入れるのは避けたい。

「取り敢えずメール送っとけばよくな？」

「そつだな……そつするか」

メール画面を呼び出し、素早く、しかし言葉を慎重に選びながら、キーを打っていく。しかし、

「!?!」

ファンガイアとしての鋭敏な感覚が、戦火の気配を捉える。  
真夜中に似つかわしくない、燃え上がるような戦意。

「奏夜さん!!　これは……」

「ああ、封絶だな。それにこの気配……あのメイドのだ」

「おいマズいぜ!!　この封絶、悠二ん家に貼られてやがる!」

「え!?!　じ、じゃあまさか悠二君を消すつもりなんじゃないの!?!」

奏夜は短く舌打ちする。あのメイドめ。まさか千草さんの言葉を聞いても思いとどまらないとは。

「キバットとタツロットは俺と来い!　キバーラ、キャツスルドランに行って次狼達を叩き起こしてくれ!　多分戦いになる!」

『了解!』

キバーラが飛び去り、奏夜はというと、手早くメール送信を済ませ、無用になった携帯電話を机に放り投げる。

キバットとタツロットを引き連れ、紅邸から飛び出していく奏夜。

持ち主のいない携帯電話だけ、ぽつんと取り残されていた。

マシンキバーをしばらく走らせれば、今朝訪問したばかりの坂井家が見えてくる。今朝と違うのは、家屋を半円状の陽炎が覆っていること。

バイクを降りた奏夜は、桜色の封絶の中　ちょうど屋根の上に、悠二とヴィルヘルミナの姿を捉えた。

本来なら鍛錬の時間なのだろうが、恐怖に歪んだ悠二の表情と、氷のように冷たい無表情の仮面を被ったヴィルヘルミナ。

そして、悠二に向けられる先端の尖った剣山の如きリボン。そこに込められた力は、いくら悠二が普通の人間でなくとも、決して耐えられるレベルではない。

ギリツと奥歯を噛む奏夜。その感情は勿論、怒り。

「俺の生徒に……っ!!」

足に集中する力。アスファルトの地面が僅かに軋む。

「なにしてんだコラアアアアア

!!」

地面に蜘蛛の巣状のヒビが入ったと同時に、奏夜の身体は屋根の上目掛けて特攻をかけていた。空中で反転し、キックの体制を取る。

「!!」

突然の乱入にもヴィルヘルミナの反応速度は揺るがない。標的である悠二から一旦離れ、攻撃を回避。そのまま二人の間に割って入る形で、奏夜はレンガ屋根の上に着地する。

「せ、先生……」

「よう悠二。こないいい夜更けに災難だったな。怪我はないか？」

「はい。なんとか……」

「そうか。ま、モテ男は総じて恋愛以外じゃ不幸になるもんだ。あまり気にするな」

「そんな理屈で怪我するのだけはイヤです」

ツッコミで少し場が和んだところで、奏夜とヴィルヘルミナは互いに睨みを利かせ合う。

「いくらアンタがうちの生徒の育て親つつつても限度があるよなあ？ シャナの邪魔が入る前に闇討ちって、テメエはどこのモンスターペアレントだ？」

「……警告するのであります。そこを退くのであります」

「だが断る」

「退くのであります。ファンガイアには何の関わりもないことでありましょう」

「アーアー聞こえない聞こえない」

わざとらしく耳を塞ぐ奏夜。  
ヴィルヘルミナの苛々上昇。

「……これが最後。退くのであります。さもなくば」

「即時排除」

ヘッドドレスからのティアマトーの声が重なり、ヴィルヘルミナのエプロンから延びるリボンに、再び存在の炎が灯る。しかし、それで退く奏夜ではない。

「はっ、俺を退かそうってのか？ 身の程知らずだな。どうしても俺を退かしたきゃ、Angel・BeatsのDVDセット四枚組持って出直しな」

「意外に安いですね僕の命!！」

ちなみに大体3400円くらいである（作者調べ）。

余裕を感じさせるショートコントを終え、奏夜は悠二を下がらせつつ、ヴィルヘルミナと対峙する。瞳には、先刻までの弱弱しさは消え、戦いへの闘志が燃えていた。

「さあ、こいつに出し惜しみはできねえ。ゴーカイに、派手に行くぜ！ キバット、タッロット!！」



「おうよ、キバツてGO！」

「行きますよう！ テンションフォルティッシモオ〜！！！」

キバツトをキャッチする奏夜。流れるような動きで、キバツトに己の左手を強く噛ませる。

「ガブツ！！！」

流れ込むアクティブフォース。奏夜の頬にステンドクラスの紋章が浮かび、腰にはキバツトベルトが巻かれていく。

「キバツト族、そしてこの力……やはり、貴方は」

予想していなかったわけではない。この男がキバツト族を連れていたときから、いや、音也の面影を見せた時から、この力と敵対しなくてはならないことは分かっていた。

ヴィルヘルミナの表情に、僅かな脅えの影がちらついた。かつて『その恐ろしさを目の当たりにした者』として、油断はできない。

「変身！！！」

キバットがベルトに止まり、光の鎖が巻きついていく。タツロットもまた、奏夜の左腕部分に取り付き、鎖の裂け目から黄金の輝きが覗く。鎖が弾け飛び、翻された赤いマントの奥より、破壊の魔帝、その本来の姿が顕現する。

「断罪の牙の下、転生の輪廻に沈め!!」

仮面ライダーキバ・エンペラーフォームは両手を広げる独特の構えから、重厚な一撃をヴィルヘルミナに繰り出す。

「浅慮でありますな」

「単調」

一撃で千社を粉碎するだけの威力を持つパワー。しかしその一撃も、リボンのバリケードによって阻まれる。防御に使われたリボンはキバEFの腕を絡め取り、その自由を奪う。

(このまま)

投げ飛ばす。

力の流れを受け流す投げ技が、ヴィルヘルミナの得意なバトルスタイルだからだ。

「浅慮ねえ……！ 言ってくれるじゃねえの！」

「なっ！」

だが、キバEFは宙に浮かばない。  
どころか、キバEFの力にリボンの耐久力が叶わず、引き千切れた。

「なんと……出鱈目な」

「こんなボロきれ、熟考して対策を取るまでもねえよ。力技で十分だ」

キバEFはボロキレと評するが、そんな簡単なものではない。  
ヴィルヘルミナのリボンは彼女の力の本質。膨大な存在の力が込められた至高の自在法だ。それを単なる地力だけで引き千切るなど、並大抵のことではないのだ。

（キバの力、やはり侮れない）

(早期決着)

(で、ありますな)

ヴィルヘルミナの意思に呼応し、宙に漂うリボンの先端が幾重にも分割されていく。一瞬のうちにキバEFの四方八方には、数百本もの刃のように尖ったりリボンが配置されていた。

「ホウ……これは確かに、素手じゃ骨が折れるな」

仮面の下で笑みを作るキバEF。その手にはいつの間にか、魔獣剣『ガルルセイバー』が召喚されていた。ガルルセイバーからは、眠たげな次狼の声が聞こえてくる。

『奏夜……残業手当は出るんだろうな』

「こんどジャーキーでも差し入れてやるよ。      タツロット、頼むぜー！」

「了解！      お任せあれ〜〜！」

キバEFがタツロットの角『ホーントリガー』を引く。

タツロットの背中に装備された『インペリアルスロット』が回り、示された図柄は蒼い長剣。

『ガルル・ファイバー』！』

左腕から離れたタツロットは、そのままガルルセイバーの柄にある接続口『アームズコネクター』にジョイント。

「カチャツ！！」

注入された魔皇力により、ガルルセイバーはその能力を最大限に高めたファイバーモードに移行。

ガルルセイバーの刀身を、巨大な火柱 刀の形を象った焰が覆う。そして、柄に取り付いたタツロットの口からも同系の炎が吐きだされ、剣を一对に繋いだような武器に変わる。

「ハッ！」

炎の剣を構えたキバEF。

同時に、凄まじい勢いで降り注ぐ刃の雨を『エンペラーハウリングスラッシュ』の剣撃が容赦なく薙ぎ払っていく。

「うおりゃあああああ！！」

キバEFを軸に巻き起こる炎の旋風は、強化された自在法のリボンでさえも寄せ付けない。  
細かな破片と化したリボンが、ヴィルヘルミナ自身の炎の色と相成つて、本当の桜のように舞い落ちていく。

「どつした腐れメイド。肩慣らしにもならねえぞ」

「……くっ」

二度までも自分の手抜きなしの攻撃を防がれた。  
ヴィルヘルミナもキバEFも、互いの更なる追撃に身構えるが

「っなにしてるのっ!!」

奏夜以上の怒号が、紅蓮の炎と共に招来する。

『炎髪灼眼の討ち手』 シャナが、凄まじい剣幕で戦場に現れた。戦いの手を一時止める二人。シャナもまた、悠二の無事を確認こそしたが、その後は黙りきりだ。

ややあって、ヴィルヘルミナとティアマトーが素知らぬ顔で言う。

「何を、なさるのでありますか」

「不審」

シヤナの炎が更に勢いを増した。振り下ろされ、屋根にめり込んだ大太刀を引き抜きながら、シヤナは低く言う。

「もう一度、聞く……なにしてたの」

と、ここでキバEFはひょいと手を挙げる。

「はいシヤナさん。この人は今まさに悠二を串刺しにしようとしてました」。とつてもいけないことだと思いまーす」

「……本当？」

ヴィルヘルミナへの疑念はもはや、シヤナの中で確信に変わっている。

だがそれでも、シヤナは最後まで脆弱な希望を信じようとしていた。だが、育ての親からの答えは、

「この者に、体術における“存在の力”の繰りを教示していただけ  
であります」

「実地演習」

「……あーあ」

キバEFは思わずぼやく。

この教育係は分かっていない。今、シャナがどれだけ怒っているの  
か。

今の言葉が、どれだけシャナの逆鱗に触れる行為なのか。

シャナの表情が、悲しみと怒りで滲む。

なんで？ どうして？

大好きな二人なのに。嫌いになんかなりたくないのに。

「ヴィルヘルミナなんか……」

息を吸い込み、シャナはありったけの怒りを二人にぶつけた。



「ヴィルヘルミンナなんか、大嫌い!!」

「な  
」

「え  
」

二人にとってあまりに衝撃的な一言。

呆けた姿のまま硬直した二人をよそに、シヤナは悠二を担ぎあげる。その様子が完全に逆お姫様だっこな点については　ここではコメントを控えよう。

「痛ッ　　痛いよ、シヤナ」

「我慢して。奏夜。悪いけどここは……」

「分かってるよ。ここは任されてやるから、お前らはとっとと二人だけ（アラストール除く）の夜を過ごして来い」

「なっ、そ、そんなつもりない!」

頬を赤らめながら、シャナは紅蓮の双翼を羽ばたかせ、夜の闇に飛び立っていく。

一応気は張っていたが、ヴィルヘルミナはその間微動だにしなかった。

そして、シャナ達と入れ替わりになる形で、

「んー？ なにコレ？ どういう状況？」

「おお、マジヨリー。お前も来たのか」

「あら、奏夜まで。こんな夜遅くにみんなしてドンパチなんて御苦労さまね」

「それはお前らもだろ」

「ヒューヒュー、ちげーねえな。んで？ あっちで固まってる御兩人はどうしちまったんだあ？」

キバEFがマジヨリー&マルコシアスと話す間にもノーリアクシヨンなヴィルヘルミナ。

これは相当重症のようだ。

「……あー、話すと長いから次回に回すわ」

変身を解除した奏夜の深い溜め息と共に、夜は深みを増していく。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD!

「私は……そんな、つもりじゃ……」

「アンタ、誰かを好きになったことねーのか？」

「静香ちゃんがいなくなっちゃったのよ!」

「だって、クイーンはキミのせいで死んじゃったんだもんねえ!」

『ブロン・フィーバ〜〜!』

「また、助けてくれたね」

「静香。俺は、お前が」

【第二十八話・GOD・SPEED・LOVE／繋がる想い】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！

## 第二十七話・ノクターンノ彷徨うつ心・cパート（後書き）

・貫太郎さんが千草さん並みに書きづらい……なんなんだこの完璧夫婦は！　そして何故この夫婦から悠二が生まれる！（酷

・ヴィルヘルミナ二戦目。エンペラーはガルルフィーバーで応戦。今回、ガルルフィーバーのシーンを動画で見直したんですが……これ、今見てみると完全にメタルブランディング；

次の28話にて、静香との関係にはケリがつきます。ディネのファンガイア態、オリジナル技なんぞもありますのでお楽しみに！

### 追記

太牙初変身時に出現したファンガイアを、イグレットファンガイアから別のファンガイアに修正しました。ファンガイアに鳥モデルの怪人はいないという法則をすっかり忘れていたので；

第二十八話・GOD・SPEED・LOVE/繋がる想い・Aパート(前書き)

「愛は麻薬だ。一度抱けばもう逃れられず、底無しの快樂に溺れていくしかない。快樂は人を縛り付け、逃れようとする者を許さない。例え逃れられたとしても、ふとした瞬間にその恋慕はフラッシュバックする。それがいつかって？　そうだなあ……新しい愛を見つけた時、かな？」

紅奏夜

第二十八話・GOD・SPEED・LOVE/繋がる想い・Aパート

「……」

「……」

「さてさて、つまみは余ってたかしらねーっ」と

年期の入ったカウンターテーブル。

座るはグラス片手に俯くヴィルヘルミナと、行儀悪く足を組む顰めつ面の奏夜、そして我が物顔で冷蔵庫を漁るマージョリー。

「……なあマージョリー。やっぱり俺、帰らせてくれませんかのこと？」

「アンタだけ逃げようたってそうはいかないわよ」

「ヒツヒツヒ、諦めなキバの兄ちゃん。お前さんにも俺様にも逃げ場はねえよ。なあ、我が非情なる相棒、マージョリー・ドーよ」

「お黙り」

カウンターのの上に放置されたマルコシアスを叩き、マージョリーが酒とつまみの数々をカウンターに並べる。完全に晩酌のノリだ。

「ほい、アンタの」

「だから、俺は酒無理だって前に言っただろ」

「だらしないわねえ。隣を見習っただら？」

「……例え飲めたとしても、そのメイドみたいく自棄酒に走る気はねーよ」

ちらりとヴィルヘルミナを横目で見るものの、相変わらず微動だにしない。

その後、シャナの大嫌い発言にフリーズしたヴィルヘルミナを引き連れ、奏夜はマージョリーのねぐらである、佐藤家備え付けのバーに来ていた。

奏夜としてはさっさと帰りたい気分だったのだが「さすがにあそこまで落ち込むと、私一人じゃ慰めんの無理」と結局マージョリーに連行され、今に至る。

(何が悲しくて、俺がこのメイド慰めにやらん……)

舌打ちしたい気持ちで一杯だったが(事実百回はした)、今更嘆いても仕方がない為、奏夜はこうしてマージョリーに従っているのだった。

酒を片手にマージョリーは艶やかな髪をガシガシと掻き、奏夜とは、ヴィルヘルミナを挟んで逆側の席に座る。



「話しなさいよ」

「……」

「さすがの私も、子持ちの気持ちは分かんないわよ。自分から言ってくれないと。愚痴、言いに来たんでしょ？ 嫌いっばいこいつと相席してでもさ」

奏夜を指差すマージョリー。

……だから、何故ヴィルヘルミナと相性が悪いとわかっていて、自分を連れてくるのか。

「……た、で……す」

ようやく聞こえたヴィルヘルミナの声は震えていた。

平常心を保とうとするが、零れ落ちる感情を制御仕切れていない、そんな印象だった。

「……醜い、私は、すごく……勝手に……」

ぼつぼつと要領を得ない単語だけが、バーの静寂に響いていく。堪え損なった悲しみは、小刻みに揺れるワイングラスの湖面が肩代わりしていた。

「分かつ、てる……だからこそ、なのに……分かって、欲しいのに……」

「身勝手だつて自覚があるなら、尚更自分の行動に責任を持つべきだとは思つがな」

元来ヴィルヘルミナが嫌いな奏夜は、普段のスーパー説教タイムとは若干声を低くして告げる。

「少なくとも、シャナがブチ切れることくらいは予測しておくべきだ」

シャナの名前が出た瞬間、ヴィルヘルミナの肩がビクリと跳ねた。当事者しか知らない話についていけないのが、マルコシアスが問う。

「よお、兄ちゃん。なんのことが説明してくれねえか？」

「下らなすぎて説明する気も起きんよ」

「前は『次で説明する』とか言ってたか？」

「予告を全て信用するなマルコシアス。世の中、最終回で流れた完

結編の予告内容が、フタを開ければ実際の内容と全然違う特撮作品もあるんだぜ？」

なんのこつちや。

「そんなに聞きたいなら……おい、メイドの頭上に乗っかってる王様、説明してやれよ」

メイドの頭上に乗っかってる王様こと、“夢幻の冠帯”ティアマトーは、若干苛立ち気味に、自らの写し身であるヘッドドレスを揺らした。

「反抗面罵」

「炎髪灼眼の嬢ちゃんに、ひでえこと言われたってか？」

「一大衝撃」

「ふうん、あのチビジャリが、ね」

マージョリーの印象として、シャナはそこまで感情を表に出すタイプではなかった。ある少年が絡んだ場合を除いて。

「まったく、ソウヤが説明する気が失せるってのもわかるわね」

「だろ？」

マージョリーは呆れながら、奏夜に同意した。これは確かに、ヴィルヘルミナに問題がある。

「あれほどデリケートな問題はないってのに、もう手を付けて……  
というより」

「手え出したな？　　ははあ、そーりゃ嬢ちゃんもカナムリになるわけだぜ」

「！」

マージョリーとマルコシアスの息のあった溜め息。と同時に、ピシリとワイングラスにヒビが入った。  
やれやれとマージョリーは、傍らにあった布巾をヴィルヘルミナに渡してやる。

「あんたたち、やっぱり育ての親だわ。単刀直入すぎるトコなんかそつくり」

「……そつくり」

確かに奏夜も、このメイドとシヤナが似ているのは認めるところだ。…… 出会い頭にいきなり戦いを仕掛けるとことか、出会い頭にいきなり戦いを仕掛けるとことかっ！ (大事なことなので二回言いまして)

「…………でも、大嫌い…………大嫌い、と…………どうしよう…………」

あの時のシヨックがフラツシユバックしたのか、ヴィルヘルミナは掌で顔を隠し、震え始める。

(めんどくせえ…………)

このメイドへのフォローなどまっぴらだが、仕方がない。

ここはあくまで『シヤナを悲しませないため』という理由で妥協しよう。

気持ちの整理をつけ、奏夜は投げやりに言い放つ。

「あいつは嫌ってねーよ。お前のこと」

「…………？」

隣のヴィルヘルミナが、こちらに意識を向けたのがわかった。

「シャナのやつ、わざわざ俺に言ってたぜ。お前と喧嘩しないでくれって。それに、お前と一緒にいる時のシャナ、すげー嬉しそうだったし。それこそ、本当の家族みたいにな」

「わ、私達は、そんなものでは……」

「けど、シャナはそう思ってるよ。お前には恥ずかしくて言えねーみたいだけど」

「……」

予想外の人物からのフォローに対し、ヴィルヘルミナは呆けた顔で奏夜を見た。

「お前が悠二を消そうとしたのには、何か事情があるんだろう。俺はぶっちゃけお前が大嫌いだが、シャナが好きなヤツなら信用できる。だから、シャナを納得させたいなら、あいつにちゃんと事情を話せ。」

何も話さないまま勝手に動いて、勝手に被害者ぶってんじゃねえよ」

まあいずれにしても、悠二を消させてやる気は毛頭無いが。

厳しいシメではあったものの、一応は気遣いの感じられる言葉だった。証拠に、ヴィルヘルミナは大分落ち着きを取り戻している。

……ただ、何故かマーシヨリーが妙にニヤついていたのが癪だった

が。

「なんだよマージョリー。その顔」

「いえ別に。……ま、私はソウヤみたいは大層な説教はできないけどさ。とりあえずはアンタ、その鉄面皮外して泣いてみたら？」

「……え……」

「いいもんよ。たまにはこうでなければって仮面外してみるってのも。色々悩みとか、苦しさとかも溜まってくでしょ。私らみたいな生き方だとさ」

けらけら笑いながら、マージョリーはグラスに入ったウイスキーを一気に煽る。

「とにかく、ソーゆーのをたまには吐き出さなきゃやってらんない、ってこと。スツキリしたらいい考えも浮かぶでしょ。アンタ、チビジャリと“外面だけは”そっくりだしね。……まだワインはいる？」

「いえ……」

「そう。ソウヤはいらないの？」

「だからいらんって。煎茶でも寄越せ」

「バーで煎茶頼むヤツなんて聞いたこと無いわよ」

さすがにお茶の葉は置いていなかった為、炭酸飲料の入ったグラスを渡すマージヨリー。そうしていると、手に零れたワインを拭いていたヴィルヘルミナが、

「う……う」

許容量を超えた苦しさの奔流が、小さな雫となって目から零れ落ちていく。

慌ててマージヨリーは顔を手で覆うが、堪え切れなかった嗚咽は隠しきれない。

「う……ふっ、うっ……」

「……」

子供のように泣きじゃくるヴィルヘルミナを見て、奏夜は居心地が悪そうに頬を掻く。

なんだ……こいつ、普通に泣けるのか。

「ほいじゃま、こっちも乾杯。他人事に」

「美女と少女の怒りに、だろ」

「何でもいいよ、飲み物が上手けりゃ」



マージョリーと奏夜がグラスを傾ける傍ら、ヴィルヘルミナの泣き声は、バーの暗闇に響き続けていた。

薄暗い部屋に、一点だけ強い光が灯る。  
光源は携帯電話のディスプレイだった。  
暗闇の中で影が動き、携帯電話を拾い上げる。表示されたメールの文面はこうだ。

『例の話。ちゃんと会って伝えたい。見たら返信してくれ。場所はその時に伝える』

「……ずいぶんとロマンチストな文面だなあ、成人男性」

面白がっているのか、呆れているのかわからない声で、ディネが呟く。

傍らには、未だ静かに眠り続ける少女　静香の姿もある。

「ま、そろそろ頃合いかな。パーティー会場も決まったし、いい加減、この娘攫ったのもバレるだろうし」

携帯電話を閉じ、ディネはそつと静香の頬を撫でた。

「まったく、誰も彼もいい気なもんだ」

何も知らず、ただ眠り続けているだけの恋する少女。しかし目を覚ました時　いや“醒ました”時、静香の前に立ちふさがる現実は、決して生易しいものではない。

「やれやれ、苦しむのはいつつも器候補くんだけだね。彼も一体どんな星の下に生まれれば、こうも次々と不幸を呼び込めるんだか」

本気で不憫に思っているらしく、ディネは肩を竦めながら言う。

「同情してあげるよ“深央”。キミが恋した相手は、どうしようもなく救われない男だ」

「……やべ。ケータイ忘れてきた」

時刻はもう午前1時に近い。

晩酌も終わりを迎え、飲むと泣き上戸になるらしいヴィルヘルミナは眠りにつき、それに付き合っていたマージョリーも段々とタガが外れ、酔いという敵の前で自滅していった。

「……メール、返ってきてるかな」

しかし、そんな中で奏夜は眠りにつかず、ぼんやりと天井を眺めていた。

自分の覚悟を込めた文章に対する返事を、渴望しながら。

「……女性、でありますか」

「っ……!」

突然の声に心臓が跳ねる。

隣では胡乱げな眼をしたヴィルヘルミナが、机に突っ伏した状態で、僅かに首をもたげつつこちらを見ていた。

「驚かすんじゃないよ。ファイナルウェーブでぶった斬るぞ。関さ

んボイスつきで」

「女性の便りを……待って、いるのでありますか……？」

「聞いちゃいねえしツッコミもこねえ。

まだ半分酔っているらしい。

酔っ払いの絡みに付き合う気は無かったが、別に隠すことでもないので、奏夜は普通に答える。

「……ああ、そうだよ。ちょっと大事な用があるんだ。けどお前、よくわかったな。相手が女性だって」

「……別に。ただあなたが、音也に、似ているから……そうなのではと、思った…………だけであります……」

「えっ？」

「本当に……なんなのでありますか、あなたは……女性との付き合いが、多いところまで……音也と、そっくりで……」

アルコールのせいかわい、ヴィルヘルミナの台詞はたどたどしく、もはや独白に近い。しかし、奏夜としては聞き逃さない内容ばかりだった。

そうだ。聞くタイミングを逃し続けてきたが、このメイドには問いたださなければならぬことがある。

「なあ、ちょっと聞きたいことがあるんだが？」

「……口説き？」

「安心しろ。頼まれたってしないから」

「……それはそれで、納得が……いかないのでありますが……」

ならば俺にどうしろと？

頭を抱えたくなるが、酔いの恩恵か、ヴィルヘルミナの態度が少し丸くなっているのは幸いだった。

遠慮せずに、奏夜は口を開く。

「お前、一体どこで父さんと」

コン、コン。

狙いすましたかのような時に、バーの扉がノックされた。

「……」

はあ、と溜め息をつき、奏夜は小首を傾げるヴィルヘルミナに「ちよっと待ってる」と告げ、カウンターから立ち上がる。

「どうした佐藤、子供はもう寝る時間だぞ」

「いや、俺もさっきまで寝てたんですけどね」

扉の前には、この邸宅の家主である少年、佐藤啓作が立っていた。寝間着を羽織り、眠そうに目を擦りながら、電話の子機を奏夜へ手渡す。

「先生に電話ですよ。恵さんから」

「恵さん？ てか、なんで俺がここにいるってわかったんだ？  
しかもこんな真夜中に」

「さあ？ 俺もいきなり電話がかかってきて何が何やら……」

佐藤もイマイチ現状が飲み込めていないようだった。

「ただ、何かすげー切羽詰まってきましたよ。この時間に電話してきて何かと思えば『そっちに奏夜くんいる！？』ですもん」

「ふーん……なんだろ？」

佐藤に礼を言いながら、奏夜は子機を受け取り、耳を当てる。

「はい。奏夜ですけど」

「なんでキミはケータイに出ないのよおおおおお  
！！！」

フルボリュームの怒号が、電話越しに奏夜の鼓膜を貫いた。

反射的に子機から耳を離れたが、聴覚へのダメージはいかんともしがたい。

「め、恵さん……一応夜なんで大声は……」

「大声出したくもなるわよ！！ 奏夜くんつては何度ケータイや家の電話にかけても出ないし！ 仕方ないから目星のつく場所に片っ端から電話かける羽目になったのよ！？ ちなみに今回で27回目！！」

「……えっと、取り敢えずスンマセン」

確かに、悠二を助けに行く勢いでケータイは家に置き忘れてきたし、キバット達は今日、キャットスルドランで寝泊まりすると言っていたので、現在紅邸はもぬけの空だ。

「で、何か御用ですか？ かなりの大事みたいですけどね」

「大事も大事よ！」

よく聞きなさいよ！ と前置きし、恵は殊更に声を張り上げる。

「静香ちゃんがいなくなっちゃったのよ！」

それから間もなく、奏夜は佐藤宅を飛び出していった。



第二十八話・GOD・SPEED・LOVE/繋がる想い・Aパート(後書き)

今回は執筆期間長かった割に短くてすみません……ビギンズナイト最終話も投稿しておりますので、そちらも是非(＾O＾)

・やっとヴィルさんと奏夜がマトモに喋りました(笑)自分で書いて何ですが、この二人は本当に相性悪いです。

・暗躍するディネ。この娘は結構強くする予定。

次回以降からバトルパートに入るかと思われます。久々に名護さんも出陣するので楽しみに！

・どうでもいい近況 GA文庫の『這いよれ！ニャル子さん』が面白い。ギャグとラブコメの比率もいいし、なによりライダーネタが多くて好きだ(笑)

ニャル子さん本編に出たライダーネタの数々

「コンボはヤバいですか……」

「いいポエムだ。感動的だな。でも無意味だけどな」

「わたし、知り合いにスーパー弁護士いるよ。右斜め四十五度の角度がかっこいい人だよ。不治の病持ちだけど」

「あいすることが……つみだと……ゆーとぴあ……」

第二十八話・GOD・SPEED・LOVE/繋がる想い・Bパート

「はぁ、はぁッ……くそッ！」

八つ当たり気味に街灯を叩く奏夜。加減したつもりではあったが、街灯の柱はやや傾く。道行く何人かが奇異の眼差しを向けるが、そんなことに構っていない。

……深夜に電話を貰い、既に空には太陽が上がっている。

つまりその間奏夜はぶっ通しで、静香の行きそうな場所を風漬しに探していたのだ。

ハーフファンガイアである以上、体力的には何の問題もないが、やはり焦燥感だけは拭い去れない。

（静香……どこにいるんだ……！）

既にキバット、タツロット、キバーラ、次狼、ラモン、カ、キャツスルドランといった面々にも協力は要請した。さらには名護や恵、嶋やマスターまでもが参加した大捜査線を敷いているにも関わらず、静香の足取りは掴めないまま。

（ここまでやって見つからないとなれば、やっぱりファンガイアか“徒”絡みなのか……？）

もう『静香が無事ではない』という最悪のケースを振り払いながら、奏夜は搜索を再開した。

状況を整理すると、静香は今朝、大学に行っただけ家に帰ってきていない。

大学に問い合わせると、授業にはちゃんと参加していたらしいが、帰宅途中からその消息が掴めなくなった。

夜遅くになっても帰らない娘を心配し、静香の両親が知り合いである恵達に連絡をした。というのが事の流れである（最初は奏夜に連絡したらしいが、恵とのやり取りを見てわかるように、彼は電話に出られなかった）。

（確かに普段、静香は年齢以上にしっかりしたヤツだ。親御さんに連絡も超越さず夜明かすするわけが無い）

それは奏夜も皆もよく知っていた。

だからこそこうして、静香搜索に動いているのだから。

（静香）

静香の笑顔が浮かぶ。

同時に、息切れを起こしていたはずの身体が、即座に正常な機能を取り戻した。

(静香)

他のことを考えている余裕などない。  
シヤナ達のことですえ、頭の中から抜け落ちていた。  
それは、いつもの奏夜なら有り得ないこと。

(静香)

そのくらいに奏夜は 静香のことしか考えられなかった。 静香  
の無事しか、考えていなかった。

(静香!!!)

『  
』

ポケットで鳴り出した着信音、余裕の無さからか、かけてきた相手も確認せず電話に出る。

「はいもしもし!？」

『ああ、やっと繋がった。ハロー』

知らない女の声。

血が登っていた頭が急激に冷え、代わりに疑念が脳内を占める。

「……………誰だ? お前」

『おやおや、随分と余裕がなさそうな声だねえ。まあ、聞かれたからには答えましょうか。』

初めまして、キング代行。僕の名前はディネ。ドラグとゼブのお友達って言えば分かるかな?』

ドラグにゼブ。

奏夜の脳裏に、以前戦った二人のファンガイアの姿が浮かんた。

「……………成る程、あの連中の仲間か。それで? そのファンガイアが何の用だ。生憎と俺は今、いまだかつてないほどに忙しいんだがな」

『くすくす、変な探り合いは止めようよ。キミだって本当は察しがついてるんじゃないのかい?』

キミが置かれてる状況と、脈絡のない敵勢力からの連絡。

さあ、この二つから導き出される答えはなんでしょーか?』

「……………」

耳元に当てた携帯電話が、ミシリと嫌な音を立てた。

「…………… 静香をどうした？」

『安心しなよ。殺すなんてダサイ真似しないから。ただ、このままキミが僕の申し出を蹴ったりすれば、どうなるかは保障しかねるけどね』

「何が狙いだ。王の座か？」

『それもいいね。けど今は、君ともう少し話してみたい気分だなあ』

話してみたい？

一体何のつもりだ。

奏夜は思考を巡らせるが、軽い調子の声からは、何も考えが読めない。

『まあ取りあえず、場所を移そうか。ケータイは便利だけど、顔が見れないのは戴けないね。』

キミ、『大戸ファンシーパーク』って知ってるかい？』

「ああ」

御崎市に隣接する大戸市で、数年前に開業したテーマパークだ。

『今僕はその遊園地の……えっと、『シンボルタワー』かな。その正面広場のいる。もちろんお姫様と一緒にね』

雑音の向こうで、ディネが場所確認をしたのがわかった。

「彼女の無事は保障してあげるから、なるべく早く来てよ。

あ、それともう一つ。仲間を連れてくるのはいいけど、僕と話す時は二人きりになるように頼むね』

「……………わかった。遺書用意して待っとけ」

『きゃー、こわーい』

腹立たしいまでに明るい言葉を最後に、ディネの通話は切れた。

ガンッ！

電話が切れたと同時に、大通りに豪快な音が響き渡る。通行人が一齐に、音のした方へと視線を向ける。

そこには、車道へはみ出す形で湾曲したガードレールの無残な姿があった。

奏夜の人間離れたキック力が成せる技だ。

「……………上等だよ」

原動力は怒り。

奏夜の口元には、仲間の誰にも見せたことが無い、獰猛な笑みが刻まれていた。

大戸ファンシーパークはそう遠い距離にはない。

ただ、そこはそれ。静香の身を案じる奏夜としては、一秒でも早く到着したかった。

制限速度をオーバーするかしないかのスピードを保ちながら、込み合う道路を縫うようにしてマシンキバーは駆ける。

やがて、車道外に広がる風景に、観覧車や巨大ドームが顔を見せ始めた。

『奏夜くん!!』

グリップを握りしめる奏夜の隣に、白いバイクが近づく。

イクサリオンだ。名護と恵が二人乗りしている。



ヘルメット越しに頷き合って、二つのバイクは先を急ぐ。

「ここに静香君がいるのか？」

「電話で話した通りです。そっちの方は何か情報ありましたか？」

「いや、嶋さんに頼んでできる限りの人員を使ったのだが、静香君の足取りは掴めなかった」

「とにかく、今は敵からの連絡を頼るしかないわね」

ファンシーパークの駐車場にバイクを止め、チケットを購入し園内へ。

こういうデートスポットにおいて、年齢の近い若者三人組は特に目立たず、奏夜達にとっては好都合だった。

「名護さん達、ここに来たことは？」

「前に一度だけね。電話で言ってたシンボルタワーっていうのは、園内の中心にある塔のことよ」

恵が指さす先には、お世辞にも見事とは言えない建造物があった。水晶を頂く不格好な塔で、恵によると、レストランや土産屋を詰め合わせた複合施設だそうだ。

「人が多いな。巻き込む可能性があるかも知れん」

「そうね。奏夜くんの話聞く限り、話が通用しないタイプじゃないさそうだし、うまく場所を移して……」

「別にそう“気にすることでもない”でしょう」

空気が凍りついた。

奏夜は普段と変わらない表情で、人混みに視線を走らせている。

問題は、今の奏夜の言葉に、限界まで目を見開く名護と恵だ。

「なっ……」

「俺かヤツかが変身すれば、すぐにでも何処かに避難してくれますよ。なんだかんだで防衛本能に忠実な生き物ですからね。人間ってのは」

「ちょっと奏夜くん！ それ本気で言ってるの!？」

恵が声を荒げる。

いくら逃げ出してくれるといっても、それは同時に周囲がパニックに陥ることに繋がる。

大混乱の中で逃げ遅れる人も出てくるだろう。

ましてやキバと、キバに匹敵する可能性もあるファンガイアとのバトル。人間が巻き込まれれば命に関わる話だ。

「大丈夫ですよ。周囲の人達が逃げるまで待ちますから」

「例えキミが待っても、向こうが待ってくれる保障は無いでしょ!」

「ああ。それもそうですね……ま、そうなたらその時ってことで」

「そ、そうなたらって……!」

「あと恵さん、もう少し静かにしてくれませんか？ ファンガイア探しに集中できないでしょう」

冷やかに言い放つ奏夜。

恵は自分の手が震えるのを感じた。

誰だ。今、私達の目の前にいるこの青年は誰だ？

奏夜はなかなか敵が見つからず、舌打ち混じりに呟いた。

「ああもう、面倒くさいなあ……。いつそ、この場で変身して、あのファンガイアをおびき寄せれば……」

「いい加減にしろッ!!」

我慢ならなくなったのか、名護が奏夜の胸倉を掴み上げる。客の何人かが何事かと見守る中で、名護の激が飛んだ。

「何を考えているんだキミは！　周りの人間を戦いに巻き込むだど!?　昔の私のやり方を否定しておいて、何故そんなことを口にできる!?!」

「……………」

奏夜は無表情で名護を見つめ返した。

「とにかく頭を冷やさない。冷静さを欠いて静香を助け出せるとしても……………」

「……………つるさいなあ」

名護の手を払い、奏夜は低く唸る。  
地獄の底から響いてくるような声音に、再び三人の空気が張り詰めた。

「俺は冷静ですよ。冷静に、敵を効率的に排除する方法を探している。

なんの文句があるっていうんです?」

本当にわからない。要は“静香をさらった相手を始末”すればいいだけのこと。

なのに、どうして名護さん達は、そんな驚いた顔をするんだろう?

「名護さん達だって許せないでしょう。

静香を危険にさらそうとしているファンガイアですよ?

そんなヤツ、すぐに消してしまわないと」

そうだ、早く戦いたい。

奏夜は心の中で呟く。

戦って、静香を連れ去ったヤツを八つ裂きにしたい。

「止まないんですよ、さつきから」

独白のように奏夜が呟く。

「嫌な耳鳴りが、止まないんです。暴りたい、暴りたいって、ウザ  
ったいくらいに嘔ってくる」

畜生、本当にうるさい。うるさいうるさいうるさい。うるさいうる  
さいうるさい……！

「俺には“時間が無い”ってのに、世界ってのはどこまでも俺を追  
い詰めてくるんだ。どいつもこいつも、俺の幸福を根こそぎ削ぎ落  
そうとしてきやがる……ッ！」

名護も恵も口がきけなかった。

支離滅裂な戯言と切り捨てることもできただろう。

だがそれ以上に、常軌を逸した奏夜の様子が、二人の混乱に拍車を  
かけていた。

「俺のことを何も知らないくせに」

奏夜の目が、急速に深みを増していく。  
暗く、深い。夜の深淵を思わせる瞳。

溜まりに溜まったイライラをすべて吐き出すように、奏夜は激昂した。

「俺の邪魔をするなッ！！」

奏夜の咆哮と、遊園地の彼方に、紅蓮の陽炎が形成されたのがほぼ同時だった。

「！！」

奏夜、そしてゼロノスカードを持つ名護だけが、遊園地後方に位置するパビリオンを覆う『封絶』を知覚した。

「どうしたの？ 二人とも」

奏夜に尋ねるには気がひけたのか、恵は名護の服の袖を引っ張った。

「……………封絶が貼られた」

「封絶、って……………フレイムヘイズとか“徒”だとかが使っアレ？」

「ああ。しかもあの色、シヤナ君のものだ。一体なぜ……………」

「……………」

険しい表情のまま、奏夜は封絶を睨んだ。

感じる。紅蓮の封絶の中から、三人分の気配を。

（シヤナに悠二。それにあのメイドの気配だな）

なんで三人がここに集合したのかはわからないが、どういつ状況になっっているのかは予想がつく。

（あの腐れメイドがア……………！）



あれだけ忠告してもまだ懲りないか。  
幾分か落ち着きを取り戻した声で、奏夜は名護に告げた。

「名護さん。ちょっと状況が変わりました。向こうの封絶の方に行ってください。悠二がピンチです」

「悠二君が？ どういうことだ？」

「悪いですが説明してる暇はありません。向こうに着いたら、シヤナ達がメイドと戦ってると思いますので、シヤナ達に加勢してやってください」

「メ、メイド？」

名護の混乱は遂に最高潮に達した。

さっきの様子もそうだが、今日の奏夜は本当に理解できなかった。

「ほら、早く行ってください。こっちは俺一人で十分ですから」

「いや、しかし……」

大丈夫なのだろうか。

静香のことも、悠二のこともそうだが、今の奏夜を置いていくには不安が残る。

付き合いの長い名護からしても、さっきの奏夜は『異常』だった。

今も、落ち着いているようにには見えるが、目がまるで笑っていない。いつもの人を食ったような余裕も、息を潜めている。

躊躇う名護だったが、

「大丈夫よ名護君。私が残るから」

「恵……」

「もう一枚のゼロノスカードは健吾くんに送っちゃったから、どの道私じゃ封絶の中に入れないし。それならこっちにいた方がいいでしょ」

恵がちらりと「文句はないわよね」とでも言わんばかりに、奏夜をジト目で睨む。

奏夜は肩を竦め「お好きにどうぞ」と言った。

「ありがとう。……安心して。ちゃんと奏夜くん見張ってるから」

「……わかった。頼んだぞ恵。なるべく早く戻る」

一抹の不安を残しながらも、名護は足早に封絶に向かって走り去っていった。

「さ、早く例のファンガイアを探しましょうか。くれぐれも穩便に  
ね」

「……自分で連絡しておいて難んですが、恵さんだけ帰るって選  
択肢もありますけど」

「バカ言わないで。私だって静香ちゃんの友達よ」

恵は頑として聞き入れなかった。

やれやれと奏夜は頭を振って、広場の人混みの中に入り込んでいく。

その背中を追いながら、恵は嫌な予感に苛まれていた。

（奏夜くん、いったいどうしちゃったのよ……）

いつぶりだろう。

彼があんな激しい表情をしたのは。

その希少性が、余計に恵の危機感を煽る。

「恵さんストップ」

「えっ？」

奏夜はいつの間にか立ち止まっていた。

まだシンボルタワー内に入ってすらいはいはすなのに……。

「あ、あれ？」

恵は目を丸くする。

あれだけいたはずの人が根こそぎいなくなっていた。

建物や休憩用の椅子はそのままに、まるで最初から誰もいなかったような鮮やかさだ。

「な、なんで？ あれだけたくさん人がいたのに！」

「多分、広場からシンボルタワーに行くまでが境目だったんでしょ  
うね」

「？ どゆこと？」

「ファンガイアの結界ですよ。シンボルタワー全域に結界を張って、  
術者以外は近寄ってこないように細工してたんでしょ。」

俺が結界破りの魔術を使っていますから、恵さんは知覚できるでしょ  
うけどね」

「じゃあ、さっきまで広場からシンボルタワーに出入りしてた人達  
は、幻か何かだったってこと？」

「うん。そのとーりだよん」

奏夜のものではない軽い口調。  
2人の視線が、シンボルタワー階下、休憩用に用意された円卓テーブルに向かっていく。

「やあ、キング代行」

「……………」

椅子に腰かけている女　　ディネ。

ゴシック風のコートにロングスカート。

艶やかな黒髪の下にある表情は包帯で隠されていたものの、唯一見える細められた両目だけが、笑っていることを伝えてくる。

片手には待ち時間にも読んでいたのだろう週刊誌。

そして　円卓を囲う椅子のひとつに、静香が寝かされていた。

「静香は無事なんだろうな」

「くすくす、やっぱり電話越しの会話はダメだよな。素晴らし

いよキング代行。声だけじゃ伝わらない、実にいい“怒り”だ」

「質問に答える。何がお前の最後の言葉になるかわからないんだからな」

「そう警戒しないでよ。無事は保障するって言ったじゃないか。とりあえず、こっちに来てくれないかな？ あ、そっちのお姉さんはそこにいるよーに」

「……恵さん、ここにいてくださいね」

「そんな！ 何があるかわからないのよ？ 私も」

「恵さん」

奏夜は目を合わせなかった。だが恵は、あまりに低い奏夜の声に肩を跳ね上げる。

「相手の狙いは俺です。邪魔をしないでください」

突き放すような宣告に恵は二の句が継げなくなり、奏夜は無言でデインの傍にまで歩み寄る。

「キミはレディに随分不躰な態度を取るんだね。あのお姉さん、怖がってたみたいだよ？」

「目的を言え。何故静香をさらった」

「……やれやれ、その怒り顔は本当に素敵なんだけどなあ。会話が成立しないのは辛いものがあるね。ちよつと力を抜きたまえよ。ほら、読み終わったジャンプを貸してあげよう」

「黙れ」

「ついでに聞くけど、キミはめだかボックスの中で誰が好き？ 僕は断然球磨川君だな。彼は括弧つけてる時でも、括弧つけてない時も素敵だよな。まあ、同じ包帯キャラとしては名瀬ちゃんも応援したいところなんだけどさ」

「黙れと言っている」

「教えてくれなきゃ話進めてあげない」

奏夜は唇を噛み締めた。完全に相手のペースだ。ディネはこちらの神経を逆撫でし、平静を乱そうとしてくる。堪える。ただでさえ今にも怒りを暴発させそうなのだ……。ぎりぎりのところで踏みとどまらなければ。

「……………善吉だな」

「ああ、キミってああいう頑張り屋さん好きそうだなもんね。キミの生徒さん　シャナちゃんに悠二くんだけ？　あの子たちを気に入ってるのも、目標に向かって頑張ってるからかい？」

「質問には答えたぞ。次はお前が答える」

「……ちえっ、張り合いないなあ。そんなんじゃキミ、いつかドラグみたいな型物キャラになるよ？」

ぶつぶつ不満を洩らしながら、ディネは週刊誌を机の上に放った。

「目的ってほど大したことじゃないさ。ただ、キミが果たして僕らの『計画』の歯車足りえる存在か否か。見極めたかったところかな」

「はっ、何の話が知らんが、俺が掟破りのファンガイアの手助けをするだけでも？」

「だろうね。けど、キミの意思は正直関係ないんだよ。その資格さえあれば、いずれどうとでもなる」

ディネが包帯の下で冷笑したのがわかった。

声も今までの軽い調子から、絶対零度の冷たい声音に変わる。

「……お前達は、一体」

「『ゲームマスター  
支配者』」



何処か誇るように、ディネは名乗る。

「キミ達の未来を、現在を、過去を創造せし者」

元々水を打ったように静かだった結界が、より強い静寂に包まれていた。

「俺達の未来と現在と過去……？ どういう意味だ」

「言葉通りの意味だよ。まあ、今は知らなくてもいいことさ」

まったくすくすと感に障る笑い声を挙げ、隣で眠る静香の髪を一房掬う。

「あとは、この娘をさらった理由だったっけ？　けど、こっちは大した理由じゃないよ。見ず知らずの僕が会いたいつて言っても、キミは警戒して会ってくれなさそうだったからってだけさ」

「…………… 静香をエサに使ったってわけか」

驚愕に塗り潰されていた奏夜の瞳に、再び怒りの焰が灯った。しかし、ディネは臆することなく、むしろ狂喜せんばかりに口角を吊り上げる。

「くすくす、また顔に皺が寄ってるね。何？　この娘のコト、そんなに大切なワケ？　うんうん、わかるよ！。この娘すっごくかわいいもんね」

「……………うるさい」

「あ。それとも大切なのは自分の罪を自覚したくないからかな？　この娘を大切にすることで、自分は前に進んでる。だから自分は昔の罪を乗り越えた。もう気に病む必要はないんだ…………… なーんて都合のいい理屈でキミはキミ自身を慰めてるんじゃないのかい？」

「黙れ……………！」

「僕の経験から言わせてもらおうと、愛に代替はきかないぜ？」



大気が爆発した。

そう表現するのになんの不足があるだろうか。

枷の外れた感情は、奏夜のリミッターを破壊し、溢れる魔皇力が生み出した暴風が、建物のガラスを叩き割っていく。

「っひ……!!」

恵が息を呑んだ。

いけないことだとわかっていながら、恵は思ってしまった。

怖い。

足は情けなく地面にへたりこみ、身体は今にも崩れ落ちてしまいうまくらいに震えている。

怖い、怖い怖い怖い!

「おっとお!!」

力の奔流に、ディネはひよいとテーブルからバネのように飛び上が



キバEFはもはや、怒り以外全ての感情を捨てていた。  
激情の赴くままに、眼前の敵を破壊する。それが、今の自分の存在理由であるかの如く。

「　　いい。実にいい！！」

ディネはもはや、口が裂けたと錯覚するほどに、口元を歪めていた。  
狂気と狂喜。二つの感情は魔王力となって衝突する。

「素晴らしい、素晴らしいよ紅奏夜！！　　キミは文句無しの“合格”だ！！　　慈愛という仮面の下に隠した、醜悪で哀れな、しかし美しき“憤怒”！！　　まさに我らが主の器に相応しい！！」

ディネの目元にステンドグラスの文様が浮かび上がり、その真の姿を顕現させる。

深い水色の髪が靡き、包帯の下にあった表情はどこか造り物めいていて、中世の女神像の頭をそのままくつつけたように、妖艶で不気味な美しさを醸し出す。

女性らしい豊満な身体は、髪と同じ色に染まり、流動体特有の透明

感を感じさせる。

まるで水そのものである体躯には、服の代わりのつもりなのか、純白の羽衣がゆらゆらと巻き付いていた。

彼女　ウンディーネファンガイアの手から水が溢れる。

魔皇力の籠もった水は、蛇の如く静香の身体に這い、近くの柱に縛り付けた。

「さあて、キミの怒りに敬意を表し、少し遊んであげよう！！

来なよ、紅奏夜！！」

「　　輪廻転生による救済は与えない」

真紅の魔皇力は未だ、キバEFの周囲を渦巻いている。

普段のエンペラーフォームと比較しても、まず有り得ないほどのエネルギー！。

「断罪の牙の下　　」

愚者に裁きの鉄槌を下す為、キバEFは叫ぶ。その身に宿る闇を全て、叩き付けるように。

「煉獄の業火に堕ちろ!!」

慈愛の魔帝は、封印せし悪魔を解き放つ。  
それはきっと 全てを飲み込む破壊の闇。



## 第二十八話・GOD・SPEED・LOVE/繋がる想い・Bパート（後書き）

今回は構成にかなり手こずりました……てかシャナキャラクターもいねーし（苦笑）

まあ向こうは、名護さんがなんとか足止めしてくれるでしょう。

・マジ切れ奏夜。

今回彼がやったキバットとタツロットの強制召還は、深央退場回でのvsサガ戦。渡が嶋さんを殺されたと思い、変身プロセスを無視してエンペラーフォームになった時と同じものです。

・「ウンディーネファンガイアはマーメイド族じゃね？」という質問はしないでください（笑）ちゃんとしたアクアクラスのファンガイアでございます。

真名は『静謐なる女神の禁欲』

・作者は安心院さんが好きです（聞いてない）。めだかボックスアニメ化希望。

次回、新ファイバー技登場&静香への想い決着です。お楽しみに

・宣伝

新連載『仮面ライダー龍騎 マギカ・願う未来を呼ぶ魔法』が連載中です。  
そちらも是非。

・どうでもいい近況

ゴージャー半端ない……長らく戦隊から離れていた作者をあそこまで引き込むとは！

それぞれの戦隊のOPをBGMで流すとか反則すぎだ……ってことは、カクレンジャーはあのポップなOPは流れるのか！？ てかさスケは出てくれるのか！！ 映画に黒騎士が出るらしいがそつちも期待していいんだよな製作者！

第二十八話・GOD・SPEED・LOVE/繋がる想い・Cパート

キバEFの身体が跳ねた。

片手には、キバット達と同じく強制召還したドツガハンマーが握られている。

超重量の魔鉄槌がまるで、棒切れのようにスイングされた。

「ほっ、と！」

ウンディーネファンガイアは軽やかなステップで、舞うようにドツガハンマーを回避する。

ハズれたドツガハンマーがアスファルトの地面を砕き、細かな破片と粉塵が上がった。

「逃つがすかああ！！！」

足腰を軸に、ハンマーの重さを利用してスイング。

ウンディーネファンガイアを再び捉える。

「まったく、危ないなあ！」

タクトを振るようにウンディーネファンガイアが指先を動かすと、彼女とキバEFの間に巨大な水球が現れた。

攻撃軌道上に出現した水球が、ウンディーネファンガイアの代わりにドツガハンマーの衝撃を請け負う。

魔皇力の詰まった水球は、まるでクッションのようにドツガハンマーを弾き返してしまった。

「何っ!？」

「水は便利だよー。包む器によって自在に姿を変え、時には無敵の盾に、そして時には……」

ウンディーネファンガイアは指先にグツと力を込め、力強く弾いた。

「パンツ!！」

「ぐっ!？」

水球が爆ぜ、生まれた衝撃がキバEFを吹き飛ばした。

全身が引き千切れるような痛みに苛まれながらも、キバEFはどうか体勢を立て直す。

「こうして敵を討つ矛にもなる。くすくす、そう言えば遊戯王

でも似たようなこと言ってたね」

オシリスが出てきた戦いだっただけ？ と、ウンディーネファン  
ガイアは余裕の立ち位置を崩さない。

「中に魔皇力を詰め込んだ特製爆弾さ。いくらエンペラーフォーム  
でも、あれだけの至近距離じゃ防げないよ」

「……っ、舐めんなよガキが!!」

自尊心を傷つけられたことで、更にキバEFの激情は加速する。流  
れるような動作でタツロットの角、ホーントリガーを引く。  
インペリアルスロットが指すのは、紫の魔鉄槌。

『ドツガ・フィーバ〜〜!!』

キバEFの支配から逃れられないタツロットは、主の意志のままに  
ドツガハンマーの柄にある接続口、アームズコネクターへとジョイ  
ントする。

「カチャッ!!」

ファイバーモードに移行したドツガハンマー内で生成された重力エネルギーが、タツロツトの口から放出される。  
鮮やかなパープルに染まった球体が宙に浮くと、キバEFはちょうど野球のフォームの如く片足を上げ、ドツガハンマーを振り被った。

「こいつで……潰れやがれえッ!!」

ゴンッ!!

ドツガハンマーのスイングによって射出されたエネルギー球『エンペラーサンダースラップ』が、ターゲット　ウンディーネファン  
ガイア目掛けて吸い込まれていく。

トウルーアイの拘束に重力エネルギーを加算し、より強力な敵を捕縛することができる技。

触れればウンディーネファンガイアとて無事ではないだろうが

「甘いね」

ウンディーネファンガイアが再び指を鳴らすと、煉瓦敷きの地面の裂け目から、巨大な水柱が立ち上る。

間欠泉よろしく噴き上がったそれは、キバEFの攻撃を阻む壁となつて立ちはだかった。

「また魔皇力を伝導させた水か……!!」

「<sup>1</sup>明察」

ウンディーネファンガイアが楽しそうに言う。

しかも水柱は一本ではない。一度エネルギー球が水柱を突き破っても、また新たな水柱が立ち上り、着実に光球の勢いを削ぎ落とす。

「重力球と言っても結局は魔皇力だ。同じ魔皇力なら阻むことは可能なのさ。加えて水柱が持つ圧力。勢いは無くなってくるし弾道もブレる」

ウンディーネファンガイアの言うように、重力球は水柱を通過するたびに力が衰えていく。全ての防御を突き破る頃には、大きさは野球ボール程度にまで縮み、ウンディーネファンガイアに届く前に掻き消えてしまった。

「くすくす、小学生でももっとマシなノックをすると思うけど?」

「っ!! ザンバット!!」

ドッグハンマーをドラムへ送還すると、代わりにキバEFはザンバ

ツトソードを呼び出す。

最もパワーのあるドッグハンマーが通用しない。

ならば、同じ物理攻撃のエンペラームーンブレイクも通用するかどうかは怪しい。

同じ水を扱うバッシュァーマグナムは論外。

残りは斬撃だが、ガルルセイバーのフィーバー技は炎の両刃刀。水に効果は薄いだらう。

故に、ザンバットソード。

手持ちのカードを吟味した上でのベストチョイス。

同時にそれは、キバEFが甘さや慈悲を捨て去り、全ての思考を戦意と憎悪で塗り潰している証拠だった。

「へえ、魔皇剣か。懐かしいね」

ウンディーネファンガイアの手から水が滴り落ちる。一筋の流水は姿を留めていき、一本の長剣の形に固体化した。

キインツ!!

ザンバットソードと水の剣の間に散る火花。獣の如きキバEFの剣閃を、ディネは軽々と受け流し、隙を突いて徐々に反撃を加えていく。



「おいコラ奏夜、反撃喰らってんぞ!!」 さっさと間合い取れ  
「!!」

「奏夜さん冷静になってください! このままじゃがむしやらに  
攻めてもやられるだけですよ!!」

キバットとタツロットの警告。  
だが、キバEFの手は緩まない。

(潰せ)

目の前にあるのは破壊すべき敵。敵は潰す。それが全て。余計なこ  
とを気にする意味はない。

(敵を、潰せ!!)

一方

(ダメだ、全然近づけない……！)

恵は戦場に混じりながら、水の蔓で柱に貼り付けられた静香を救う機会を窺っていた。

だが、ウンディーネファンガイアと本気でキレた奏夜との戦いは熾烈を極めており、ただの人間である恵が介入するのはほぼ不可能。柱に近付くことさえ難しい。

かといって、諦めるわけにはいかない。

どうにか隙を見つけなければ。

それに、気にかけるべきは静香だけではない。

(奏夜くん……ッ！)

今の奏夜は憤怒の塊だ。四年前からずっと、必死に抑え続けてきた感情を全て爆発させてしまった。

そこから生まれる闇の深さは計り知れない。

自分のことも目に入らなくなるほどに。

何年も一緒にいた仲間である恵に、恐怖心を抱かせるほどに。

（なんでよ！　　なんで動いてくんないのよ、私の身体！）

戦いが激化すればするほど、身体の震えが強くなるのを恵は感じていた。

あれは奏夜くんだ。どんなに怒っていようが、彼はずっと一緒に戦ってきた友達だ。

なのに　　どうして彼を恐れなければならない。

だが何度言い聞かせても、恵の恐怖心は消えてくれなかった。

（最悪だ。私……）

奏夜くんを恐怖の対象と見てしまうなんて。

こんなの、彼を拒絶してるのと同じじゃないか……。

キバットのウエイクアップコール。  
ザンバットソードに真紅の魔皇力が充填され、必殺技『ファイナル  
ザンバット斬』が発動する。

「ッハア!!」

半月状の衝撃波が飛ぶ。威力を落とすことなく水柱を切り裂き、射程圏にあるウンディーネファンガイアを捉えた。

「っと、これはさすがに防御できないか」

水の剣に魔皇力を込め、真正面から衝撃波を受け止めるウンディーネファンガイア。

だが、さすがに相殺はできなかったのか、弾道を変えるに止まる。

弾かれた衝撃波は大きく逸れ、静香の縛りつけられた柱まで走った。

「あっ!?!」

恵が息を呑むが、幸運にも衝撃波は柱の脇を通り抜け、静香には当たらなかった。

「ふい〜、危ない危ない」

衝撃に痛んだ腕を慣らしながら、ウンディーネファンガイアは言う。

「いい攻撃だけど、まだ足りないね」

「なら、テメエをブツた斬るまで喰らわせてやるまでだ!!」

ザンバットで刀身を研ぎ直し、キバEFはウンディーネファンガイアに切りかかっていく。

ここからは完全な接近戦に持って行くつもりのようなようだ。

「……………」

片や、恵は再び固まっていた。今度は恐怖心からではない。何か信じられないようなものを見るように、キバEFを瞳に映している。

今のファイナルザンバット斬。

当たりこそしなかったが、一步間違えればアレは静香を真っ二つにしていた。

そもそもファイナルザンバット斬には、刀身に集中させた魔皇力を衝撃波にして放つ遠距離verと、魔皇力で刀身そのものを強化し、直接敵を斬りつける近距離verが存在する。

故に、あのよう誰かを巻き込む可能性がある場合、近距離verを選択するべきなのだ。だが、キバEFは遠距離verの衝撃波を使った。

おそらく、静香を巻き込むことさえ、頭に入らずに。

「……………」

恵は無言で立ち上がった。足はもう震えていない。もはや恐怖する

暇さえ惜しくなっていた。

取り出したファンガイアバスターを握る手は、あまりの力の入れ具合に血が滲み、目はそれだけで人を射殺せるかと思うほどに鋭い。

「いい加減に……!!」

ファンガイアバスターの鞭がしなり、二人が戦う広場へと猛烈な勢いで突進していく。

銀色に輝くチェーンが狙った先は

「目を覚ませこのド阿呆があ

ッ!!」

キバEFの後頭部だった。

「ッ!! 痛ッツてえ

ッ!!」

スコーンと清々しい音が鳴り響き、キバEFは前のめりに倒れた。

「……えっ？ な、なに今の素晴らしい鞭のスイング」

ウンディーネファンガイアも突然のことに言葉を失い、攻撃の手を止めていた。しかし、状況についていけないのはキバEFも同じだ。

「な、何す」

「やかましいわッ!!」

「がッ!!」

二撃目。

キバEFの鎧のお蔭でダメージは0のはずなのだが、ダメージがあるように錯覚するほど、気合いの入った一撃だった。

「何やってんのよ!!」

声を荒げ、恵が吼える。



「キミはさつきから何やってんのよ！　勝手に怒って突っ走って、私も名護くんも無視して、拳げ句の果てに静香ちゃんまで巻き込みかけるってどういうこと！？」

恵の、奏夜を思うが故の怒り。その真摯な言葉に、キバEFはようやく耳を傾ける。

「今のキミは誰かのために戦ってるんじゃない！　許容できなくなった怒りを、そのファンガイアにぶつけてるだけ！　癩癩起こした子供の八つ当たりと同じよ！」

何も見えなくなるほどの憤怒。悲哀。

ふざけるな。そんな理由で　奏夜くんを戦わせるものか。

「深央ちゃんのことを無下にされて、怒りを抑えられなくなるのはわかる！　けど、もう一度よく考えなさい！　キミはここに何をしにきたの！？　そのファンガイアを倒す為じゃないでしょ！？　静香ちゃんを助ける為に”ここに来たんでしょ！？”」

「！！」

身体が凍り付いた。

迷いを見せるキバEFに、恵はトドメの一言をぶつけた。

「ちゃんと自分の大切なものは見極めなさい！　過去ばかりに囚われて、今のキミの光を見失なわないで！　目先の怒りなんかで全部を壊そうとするなんて論外よ！」

答えなさい紅奏夜！

「あなたが今、本当にやるべきことは何！？」

キバEFは自分の手を見る。ついさっきまで、ザンバットソードを握っていた手だ。

（俺は……何をしていた？）

自問自答。蘇ってくるのはさっきまでの戦いの情景。いや、あれは戦いではなかった。何も気にせず、恵達の言葉にも耳を貸さず、ただ怒りを吐き出すように暴れるだけ。

(そうだ。俺は……また繰り返しかけていた……)

自分という存在のおぞましさに、手が震え出す。心の底から湧き上がった怒りを制御できず、また大切な人を失うところだった。

(…………… 静香)

顔を挙げ、柱に縛りつけられたままの静香を見る。

静香の姿を目に収める、それだけで手の震えは止まった。煮え立った脳内は冷え、正常な思考力が戻ってくる。

(…………… ああ、なにやってんだよ。俺は)

ガッツと自分の頭を全力で殴る。バカな自分への罰は、取り敢えずこのくらいにしておこう。後悔はあとでいくらでもできる。今は、静香を助けることに全力を注げばいい。

もう二度と、失わないために。

「恵さん！」

キバEFはありったけの感謝を込めて、恵の名前を呼ぶ。

「何!?!」

「すみませんでした!?!」

「うむ、許す!?! だからさっさと静香ちゃん助けてこい!?!  
更に言うならさっさと告れ!?!」

「はい!?!」

短いやり取り。しかしそれで全ては伝わった。  
恵の満面の笑みが、それを証明している。

「お喋りは済んだかい?」

ウンディーネファンガイアに呼びかけられ、キバEFは戦いへの集中力を取り戻す。

今までのように特攻をかけることはなく、冷静に彼女との距離を空けた。

「ふーん、頭は冷えたってわけか。つまんないなあ、さっきのキミの方が何倍も魅力的だったのに」

「期待に沿えなくて悪いな。

代わりとこっちゃなんだが、いい

もん見せてやるよ」

相手の力は水。それならば。

さっきまで血が登っていた思考は正常に起動し、適切な対策を弾き出していた。

「キバット、タツロット。アレでいく。魔皇力制御、頼むぜ」

「おう、任せとけ!!」

「ここからが本番ですよ!!」

キバットもタツロットも、キバEFを責めることなく合意してくれた。

今さら謝罪の言葉はいらない。

いや、奏夜は二人に命令ではなく「頼む」と言った。これが彼にとつての謝罪であると、キバットもタツロットも理解していた。

キバEFがタツロットのホーントリガーに手をかけると、インペリアルスロットが回転。

示された絵柄は、金色の魔彫像。

『ブロン・ファイバ〜!!』

轟ッ！！

突如巻き起こる爆風。

タツロットのコールに呼応するように、広場の上空に現れたのは、金色に輝く人造ゴーレム『ブロン』。

タツロットはキバEFの腕を離れると、開いたブロンの口から中へと入り込み、奥に内蔵されていたアームズコネクターと融合する。

「カチャッ！」

ファイバーモードに移行したブロンが黄金の炎に包まれ、タツロットの頭部を模した彫像へと姿を変えた。

だが、変化はまだ終わらない。

強化されたブロンは空中で六つのパーツに分割された。

それらは意思を持つかのように浮遊し、キバEFの胴体、両腕、両足、頭部へと融合していく。

通常のキバEFよりも更に重量感の漂う武骨な装甲。

頭部の仮面も変化し、中世の剣闘士が使用していたような、幅の広い兜が装着されている。

これぞ、ファイバーモードで強化されたブロンのか『エンペラーアームドブースター』。  
本来は無機物を強化させるブロン内部の魔皇石を有機物に適合させ、資格者であるキバEFのパワーアップパーツへと化したのだ。

「行くぜ」

キバEF+が腰を落とすと、腕と足の装甲部分が開く。中から覗くのは、通常のブロンにも内蔵されているジェットブースターの小型版。

ブオンツ！！

バイクの駆動音にも似た爆音と共に、キバEF+の身体はブースターの勢いに乗り、目にも止まらぬスピードで加速した。  
その加速力は、踏ん張りに使った地面が蜘蛛の巣状にヒビ割れるほどの馬力。

「っ！！」

ウンディーネファンガイアは息を呑み、慌てて水を呼び込む。  
ブースターの加速を加算したキバEF+のパンチは、弾力のある水

球に阻まれてしまう。

「……ふう、油断してたよ。まさかまだこんな隠し種があったなんてね」

「そつちこそ、よく見切れたな。まさかこの形態のスピードについてくるとは」

「いやいや悲観するなよ。僕でもこのスピードはかなりギリギリだ。ただ、得物が悪かったね。いくら速くても、メインが徒手空拳じゃ僕の敵じゃないよ」

最もパワーを持つドッグハンマーを防いだ水。今さらパンチなど効くわけもない。

しかし、キバE F + は仮面の下で不敵に笑う。

「それはどうかな？」

「……なっ!？」

ウンディーネファンガイアは“水球を貫いたパンチ”をすんでのとこで回避した。



後方へ着地し、いまの事実を分析する。

（何故だ？　いくら加速を上乗せしていても、打撃なら僕の水で防げないことはないはずだ……）

ウンディーネファンガイアの口から、初めて余裕の笑みが消えた。優位に立つキバEF+は、拳を握りながら言う。

「敵じゃないんじゃないのか？」

「そうだね。少々僕も傲っていたようだ。なら、これはどうかな？」

地面に手をつき、地中に存在する水分へと魔皇力を送るウンディーネファンガイア。  
アスファルトの地面から這い出るように、水で作られたウンディーネファンガイアの分身体が幾人も現れた。

「さっきの水球と同じ、衝撃を吸収するタイプの分身か」

なら話は早い。

キバEF+は再びブースターを展開する。

何人いようが、“水”が相手ならこの形態の敵じゃない。

「はっ!!」

ブオンッ!!

キバEF+が跳ね、放たれた拳が一瞬で分身の一体を消滅させた。

ブレーキに使った足から、摩擦熱により火花が上がるが、キバEF

+はほぼ間隔を空けずにUターン。

背後にいた分身をもう一人討つ。

常人には黄金の軌跡しか視認できないスピードでキバEFは駆け、次にその姿が現れた時には、分身体は全て消え去っていた。

「……そういうことか」

だが、ウンディーネファンガイアにとってそれは問題ではない。今の分身は全て、キバEF+の能力を確かめる為の当て馬だったからだ。

「ブースターが稼働する際に発生する熱エネルギーを利用してるんだね」

「」名答だ」

キバEF+は特に隠し立てもしなかった。

「今の戦いだけでよく見抜けるもんだな」

「まあね、キミの装甲から上がる煙でピンと来たよ。成る程、僕の水はキミの拳の熱量により蒸発してしまったというわけか」

機械に搭載されるエンジンというものは、稼働するだけで膨大な熱エネルギーを生み出す。ブロンブースターを強化パーツにしたキバEF+の加速時もそれは変わらない。

しかしキバEF+の場合、その熱量はそのまま武器にもなる。攻撃時に敵を焦がすことも、圧倒的な熱量で水を一瞬で蒸発させることも可能なのだ。

「僕にとつちや天敵だねそれは。くすくす、最初から使ってれば良かったのに」

「さつきは判断力が鈍ってたからな。こんな有効打を忘れるとは、我ながら恥ずかしい限りだよ。

……さあ、終わらせるぜ」

キバEF+が右腕を引くと、蓄積されていた熱量が放出される。右腕のブースターが展開され、熱エネルギーがミックスされた魔皇力が集約された。

「ハアッ!!」

突き出された拳。

ブロンファイバー時の必殺技『エンペラーアームドファントム』が発動し、熱と魔皇力で生み出されたキバEF+の分身が、ウンディ―ネファンガイアに特攻する。

「がっ……!!」

今度は回避する暇さえ与えず、分身の拳が生み出す衝撃は、容赦なくウンディ―ネファンガイアを吹き飛ばした。

しばらくキバEF+は様子を窺っていたが、遠目に見えるウンディ―ネファンガイアの姿が、人間態に戻ったのを確認し、ようやく息を吐いた。

「やった……」

「くすくす、勝手に殺さないで欲しい…ね」

「!?!」

ふらふらと立ち上がったディネに、キバEF+は拳を構え直すが…。

「安心しなよ。今のを食らえば、さすがの僕も戦闘継続は不可能だよ」

呟きながらディネは、変身時にほどけた包帯を顔に巻き直していた。もう殆ど顔は見れなかったが、まだ隠し切れていない頭部からは、僅かに艶やかな黒いロングヘアが覗いている。

「……?」

ふと、キバEF+は違和感を覚えた。

「……お前、前にどこかで会ったか?」

「さあね。知りたきゃキャッスルドランでも使ってみれば?」

とりつくしまもなく、ディネは包帯を巻き終えた。

「いや、最後はちょっと微妙な幕引きだったが、概ね楽しめたよ紅奏夜。取り敢えず、キミのお姫様は返却しよう」

パチンとディネが指を鳴らすと、静香を縛り付けていた水の蔓が消え、彼女の身体はアスファルトに倒れる。

「恵さん、静香をお願いします」

「うん、わかってる！」

恵が静香に駆け寄り、キバEF+はディネに視線を戻した。

「お前は、いや、お前達は一体何なんだ？ 『支配者』とはどういう意味だ？」

「焦るなよ。ネタバレは連載の最後まで取っておこうぜ」

くすくす、とディネが笑う。勘に障る笑みだった。

「いずれ全ては明らかになるさ。もっとも、その時にキミがキミで  
いられる保障はないけどね……紅奏夜」

キミの身体、どこまで“近づいてる”？

「……お前、どこまで知って……！！！」

仮面の下で顔色を変えるキバEF+。その反応を見て、ディネは心  
底愉快そうに、

「くすくす。やっぱりキミはからかい甲斐があるねえ……僕もまだ  
まだ楽しめそうだ」

ディネが再び指を一鳴らしすると、その姿は霞のように薄れていく。  
転移の魔術だ。

「また会おう紅奏夜。残り少ない時間をせいぜい楽しみたまえ」

不愉快な余韻を残し、ディネの姿は完全に消えた。キバの鎧を解除し、ふらつく身体で紅奏夜は拳を握り締める。

「奏夜くん」

はっと振り返ると、静香をおぶった恵が心配そうに奏夜を見ていた。

「大丈夫？」

「……はい、大丈夫です」

「そう。なら」

恵は後ろで眠る静香を、近くのベンチに横たわらせた。

「気持ち、ちゃんと伝えなさい」

「……」

「もうキミは、過去に囚われたりしないでしょっつ、」

「……はい」



なんとなく、予感があった。

意識が失われる直前にも、恐怖心と同時に奇妙な安心感が心に広まっていたのを覚えている。  
大丈夫。絶対に来てくれると。

根拠なんて何も無い。彼を信じていた。ただそれだけ。

だから

「おはよう」

「……うん、おはよう」

目が覚めた時、すぐ近くに奏夜の姿があっても、静香は驚かなかつた。  
心に湧き上がるのは、単純な嬉しさだけ。

「また、助けてくれたね」

「このくらい任せとけよ、お姫様」

悪戯っぽく笑う奏夜。

起きるまで静香は彼に寄りかかっていたらしく、触れ合う肩から奏夜の体温が直に伝わってくる。とくん、と心臓が小さく跳ねた。

「なあ静香」

「……なに？」

「返事、するよ」

身体が震えた。

目が覚めて奏夜の瞳を見た時、静香は悟った。もう彼は答えを決めたのだと。

とつくにしたハズの決意が揺らぐ。

大丈夫、どんな結果がでも受け止める。

しかし、それはあくまで心構え。

もし彼の答えが、私の望むものでなかったら

「……うん。聞かせて」

感情を必死に抑える。

不安からか、ぎゅっと服の裾を掴みながら、静香は伏し目がちに奏夜と視線を合わせた。

可愛いな。

まるで小動物のような姿に、つい不謹慎な感想を抱いてしまう。

「静香」

過去を全て振り切ったわけではない。

しかし、纏わりつく冷たい過去の鎖を、暖かな愛しさが上回った時、その言葉は自然と口から出ていた。

「俺は、お前のことが好きだ」

一点の淀みもなく告げられた想い。

静香の顔は一瞬凍り付いて、すぐ日溜まりのような笑顔に変わる。

「うん、うんっ……わたしも……!!」

瞳から溢れ出す歓喜の涙を添えながら、静香は奏夜の身体を抱き締めた。

奏夜もそれが当たり前であるように、静香を抱き締め返す。

「好き……っ、奏夜が、大好き……!!」

「ああ、俺も大好きだよ。静香」

愛しさ確かめ合うように、二人はただお互いを抱き締め続ける。

短く、当事者にとっては長い時間が過ぎ、二人の身体はようやく離れた。

そしてお互いの顔を見つめ合うと、その距離は近づいて行き

二人の影は、唇で繋がった。

「甘いわね」

「甘いな」

「甘いですね」

空気を読んだ恵、キバット、タツロットの三人が、物陰でニヤニヤ笑いを浮かべていたのは、まあ、お約束。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD!

「勝手なこと、ばっかり！」

「その名は、不愉快であります」

「いい加減子離れしろや！」

【FULL・CHARGE】

「君が変身しろ！」

「……許さ、ない……！」

【第二十九話・ピアノフォルテノそれぞれのこれから】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！

甘い……今回ここまで糖度を上げる気なかったのに……どうしてこうなった(お前のせいだ)

・ブロンファイバー解禁。しかしこれだけは言わせてください。作者はアクセルブースターの戦闘スタイルを知りませんでしたのでパクリとか言わないでください；

いや、アクセルブースターそのものの存在は知ってましたよ。でも単純にパワーが上がるだけかと思いきや、まさかここまで被るとは……あたし聞いてない！

一応ブースターとの違いは、馬力が若干弱い分、熱エネルギーの付加効果があることだと思っておいてください。

ちなみに必殺技のモチーフは、NARUTOのガイ先生の昼虎。もしくはシャンゼリオンのシャイニングアタック。

・恵さんがすげー男前に……。なにかとスポットが当たりづらかった彼女ですが、今回はかなり重要ポジになりました。

・一応は恋仲になった二人です……が、まだ最終的な結末は分かりません。この小説は恋愛にとことん厳しいシャナとキバのコラボですからね(笑)

次回はようやくシャナサイドに戻ります。

予告に一つ、この小説に存在するはずの無いセリフがありますが……

……お楽しみに。

それでは。

第二十九話・ピアノフォルテノそれぞれのこれから・Aパート（前書き）

「ゼロとは、6世紀ごろにインドで誕生し、日本に入ってきたのは17世紀頃、来日したオランダ人によって伝えられたとされている。ちなみにイギリスの建物では、日本人が『一階』と呼ぶ階層は『0階』と呼称され、数学的に正しいカウントを取っているんだ。さあ、キミの家の階層数を数えろ！」

キバットバット三世



## 第二十九話・ピアノフォルテノそれぞれのこれから・Aパート

大戸ファンシーパーク、博覧会用ドーム。

『封絶』によって因果から切り離された空間では、壮絶な戦いが繰り広げられていた。

「っわ!?!」

幾重もの白いリボンが舞い、悠二を串刺しにせんと迫る。

「悠二、我慢!!!」

「どあつ!?!」

未だリボンの射程圏にある悠二を、シャナが蹴っ飛ばす。

無論、自分の身体を夜傘で守ることも忘れない。

ザザザツ!!

リボンは圧倒的貫通力をもって、夜傘に突き刺さる。ギリギリダメージはないが、炎髪灼眼の討ち手が誇る防具が、あと少しで貫かれるところだった。

(本気だ)

本気でヴィルヘルミナは、悠二を消すつもりだ。

硝煙の向こう、仮面型の神器『ペルソナ』から、鬘のようなリボン  
を靡かせるヴィルヘルミナが立っている。  
唇を噛み締め、シャナは自らを奮い立たせるように宣言する。

「ヴィルヘルミナ！ 私、悠二を守るから！」

「我を通されるのでありますか、あくまで」

「どっちが！？ ヴィルヘルミナはズルいよ、自分は何も言わない  
で！ どうして私に話してくれないの!?!」

『……………』

契約者と王、二人分の沈黙が返ってくる。

「話してくれないなら、私だって納得できない！ 絶対、悠二を消  
させない！」

「よく言った、シャナ君」

ふいに、誰のものでもない声がかげられた。  
荒れ放題のホールに足音を響かせながら、その人物は戦場へとやっ  
てくる。

「名護……」

「名護さん……」

堂々した足取りで、名護は戦場へと参入する。シヤナの隣に立ち、  
恐らくは彼の敵であるつメイドを目視した。

「名護、どうしてここに？」

「奏夜君に頼まれてな。状況は？」

「あの人、ヴィルヘルミナが悠二を消そうとしている」

「ふっ、成る程。わかりやすい。      フレイムヘイズのようだが、  
知り合いか？」

「うん」

「そうか。シヤナ君の知り合いならば、あまり痛めつけないように  
しなくてはな」

「……どうやら、キバの同朋のようでありますな」

最初こそ、突如乱入してきた人間に驚いてはいたが、ヴィルヘルミナはすぐに淡々とした口調を取り戻していた。

「警告は一度のみ。今すぐにこの場を立ち去るのであります」

「そうもいかないな。悠二君ともそろそろ長い付き合いなのでね。それに」

こちらに来る直前に、奏夜が見せた激情が脳裏をよぎった。

「もっと手間のかかる友人を待たせている。悪いが、手早く片付けさせてもらおう」

淀みない動作で、名護はイクサベルトを腰に巻き、イクサナツクルを左手に押し付ける。

『レ・ディ・ー』

「変身！ー！」

右手に構えたイクサナツクルを、ベルトにジョイント。

『ファイ・ス・ト・オ・ン』

圧縮されたアーマーが地面より現れ、名護の身体に重なる。  
仮面を覆うクロスシールドが展開され、仮面ライダーイクサ・バーストモードへ。

『ライ・イ・ジ・ン・グ』

そのまま胸部のイクサエンジンが完全開放され、白いアーマーが弾け飛ぶ。

ボディが蒼き装甲『ガーディアンコバルト』に覆われ、クロスシールドがイクサメット上で組み変わる。フェッスルをイクサライザーにセットし、ライジングイクサへの直下変身が完了した。

「！ その鎧は……！！！」

「その命、神に返しなさい！！！」

クロスシールド展開時に発生する熱波が、ヴィルヘルミナの髪を撫でた。ペルソナの下表情は見えないが、彼女の声は驚愕に彩られていた。

あの鎧  自分の知るものとは少々デザインが違うが、間違いない。  
数多の徒を討ち滅ぼした、かつての戦友が使っていた力。

（音也の鎧が、なんらかの形で現代まで伝わっていた  ということ  
とでありましょうか……しかし、まさかイクサを再び見る日がこよ  
うとは……）

（驚天動地）

知らず知らず、ヴィルヘルミナは溜め息をついた。  
本当に可笑しな街だ。キバ、音也、そしてイクサ  こつも昔の記  
憶を刺激されるとは想像していなかった。

「現代のイクサの資格者、というわけでありますか」

「……？  イクサを知っているのか？」

「それはこの勝負に関わりのないことでありましょう」

「些事無用」

鬣の一部であるリボンがしゅるりと伸びた。

ライジングイクサも即座にイクサライザーを向ける。イクサを知っ  
ていたことについて気になりはしたが、確かに余事に現を抜かして  
いる場合ではない。

「名護。接近するのは極力控えた方がいい」

ヴィルヘルミナの強さを知るシャナ、そしてアラストールが警告する。

「ヴィルヘルミナの強さは巧みな戦技にある。直線的な攻撃は全部あのリボンで無効化されるわ」

「そうか。ならば戦法は一つだな」

今の情報から、戦法の組み立てを一瞬で行う。やっぱり頼りになる。シャナは心の中でライジングイクサを賞賛した。

「悠二、邪魔にならないよう下がって！」

「わ、わかった！」

少年が退避したのを確認しつつ、シャナは『誓殿遮那』の柄を握り締めた。

煌めく紅蓮の炎が、刀身を軸に集束して行く。

ライジングイクサもまた、イクサライザーのグリップからライザーフェッスルを取り外し、ベルトに装填する。

「  
」

法螺貝に似た音色が鳴り響き、コロナコアに蓄積されていたエネルギーがイクサライザーに充填された。先のヴィルヘルミナの攻撃で地面に空いた穴に踵を引っ掛け、銃撃の反動に備えつつ、照準を定める。

（最大火力による一撃必殺）

二人が弾き出した戦術は単純なものだが、極めて正しい判断だ。受け流されるならば、受け流せないレベルの攻撃を放つのみ。

ただでさえ相手は手の抜けない相手。全力を出してようやく戦闘不能に追い込めるレベルだろう。

「  
っだ!!」



「はあっ！！」

刀が空を切り、トリガーが乾いた音を立てる。

数多の敵を消し炭に変えてきた火炎流と、光子力エネルギーの最大放射『ファイナルライジングブラスト』が、ヴィルヘルミナに牙を剥いた。

これなら　と、二人が己の必殺技の帰結を追う。

しかし、

『！！』

気付く。

棒立ちだったヴィルヘルミナ　その背後にあるリボンが規則的な動きを見せていた。リボンはちょうど、シヤナ達の攻撃の中間で束ねられ、まるで毛糸玉のような半球を象っている。

その表面に刻まれているのは、膨大な量の自在式。

「ッ！！ 名護、離れて！！ “反射”される！！」

「何！？」

慌てて両者は火炎流と銃撃の発動をキャンセルするが、もう遅い。焦点が式によってねじ曲げられ、ある一点を超えた熱塊と光子力エネルギーが、そのベクトルを変える。

つまりは、シャナとライジングイクサに向けて。

「まずいッ！！」

防御手段に乏しいライジングイクサは、攻撃の震源地から出来るだけ離れ、シャナは夜傘を幾重にも張って余波に備える。

ほぼ一瞬にして、ヴィルヘルミナに所有権を奪われたシャナ達の攻撃が、パビリオンの半分を消し飛ばした。

四方八方に反射された火炎と光子力エネルギーが、建物内の展示物、窓、屋根までもを派手に消し飛ばしていく。

「く、あつ!?!」

爆風はまだ夜傘で防げる威力。

しかも、攻撃を受けているのは自分だけではないのだ。

(悠二、名護……っ!!)

ライジングイクサはまだ大丈夫だろうが、それでも悠二まで無事かどうかはわからない。そもそもこの炎の嵐の中では、悠二に気を払う余裕さえもない。

ややあつて、ようやく騒音と熱波が止み、代わりに粉塵と瓦礫が館内を支配する。

唯一無傷のヴィルヘルミナは、仮面の下の無機質な瞳で、周囲を観察する。

( “零時迷子” は )

( 捕捉 )

視界の端に動く少年の影。消失は免れたらしい。

ヴィルヘルミナは手早く、悠二へと白いリボンを伸ばした。

「やはりそう来たな！」

「!！」

ヴィルヘルミナが奇襲に身構える。

舞い散る粉塵の奥から、ライジングイクサがリボンの射程に割り込んできたのだ。

結果、リボンは悠二を捉えられず、ライジングイクサの持つイクサカリバーに絡まった。

「こちらの体勢が崩れた今、真っ先に悠二君を狙うと思っていた」

「ふむ。あれほどの熱波を耐え抜くとはなかなか……」

「理論上、イクサは2000度の熱まで耐えられるのでね」

そもそもイクサはエンジン稼働のパワードスーツ。熱の放出にはかなり重点を置かれた作りになっている。

加えて、小柄なシヤナと違い、ライジングイクサは重量がある為、爆風の勢いにも負けない。

瓦礫やガラスへの防御を捨てれば、瞬時に反撃へ転じられるのだ。

「瞬間的な判断力に加えて、イクサを使いこなす器量　成る程、  
貴方も多くの死闘を潜り抜けた戦士のようでありますな」

「屈強」

リボンとイクサカリバーの引き合い。どちらも力を緩める様子はなく、釣り合い的にはほぼ互角。

「しかし」

「なっ!？」

鬘から伸びる別のリボンが、ライジングイクサの脚に巻きついた。

「甘いッ!」

リボンが鞭のようになり、イクサの身体が脚ごと投げ飛ばされた。決してリボンで引き上げられる重量ではない。しかし現に、ライジングイクサは空中で平衡感覚を奪われ、冷たい床へと勢いよく叩きつけられた。

「ぐっ!?!」

肺の酸素が全て吐き出され、激痛が身体全体を襲う。

「なんて奴だ……!」

と、倒れ伏すライジングイクサの視界に、紅蓮の火の粉が舞った。爆風のダメージから復帰したシャナである。

接近戦はマズイと言ったのは彼女自身。だが、一撃必殺が効かないとなれば、たとえカウンター覚悟でも、こちらの得意な接近戦に持ち込まなければならぬ。

(まったく無茶をする……!)

教師に似てきたシャナを見つつ、名護はベルトに新たなフェッスルを入れる。

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー、ラ・イ・ズ・アツ・プ』

山吹色に輝くイクサカリバーを携え、ライジングイクサはシャナの

頭上へと跳躍する。  
上下段からの同時攻撃。ヴィルヘルミナの注意力を少しでも削ぐ為の攻撃軌道。

「だああ　　ッ!!」

「イクサ、爆現!!」

紅蓮の刀身と、ライジングイクサの『イクサ・ジャツジメント』が異なる方向からヴィルヘルミナに叩き込まれる。

「誉められない戦術でありますな」

「無謀」

仮面の下表情を僅かも緩めることなく、ヴィルヘルミナはリボンを操る。

まず両者の刃を絡め取り、攻撃の軌道を逸らす。二人の攻撃は外れ、何もない床を砕くだけに終わった。

不発を感じさせる間もなく、ヴィルヘルミナは力の流れを変え、二人を恐ろしい勢いで回転させながら投げ飛ばしてしまう。

ガンツ、という鈍い音と共に、シャナとライジングイクサはコンクリートを砕きながら、再び地面に叩き落とされた。

「私に攪乱は無意味であります」

「無駄」

「まだ……まだ……！」

ヴィルヘルミナとティアマトーの声が重なる。その無機質な態度が、余計にシャナの戦意を煽った。激痛を歯を食い縛って耐え、シャナは育ての親へと斬りかかっていく。

「ダメだ、シャナ君……！」

直線的な攻撃で打ち倒すには、パワーが足らな過ぎる。

二人がかりの攻撃を完全に反射された今、単調な戦法は体力を削られるだけだ。

瓦礫の破片を落としながら、イクサカリバーを杖にライジングイクサは立ち上がる。

（どうする？ ファイナルライジングブラストが返された以上、ナ



ツクルフェッスルもレッグフェッスルも焼け石に水だ……)

パワードイクサーならあるいは……いや、反射はされないかも知れないが、投げ技は有効になる可能性がある。やはり手持ちのカードで突破は難しい。

「うあッ！」

そうこうしているうちに、シヤナがまた地面に落下した。押し切られるのも時間の問題だろう。

「ええい、迷っている暇があるか……！」

判断を遅らせた自分を叱咤する。

シヤナや悠二が危険な今、何を迷う。手持ちの武器しか使えない以上、それで二人を助けるしかないだろう！

ライジングイクサがパワードイクサーのフェッスルに手を伸ばした。

時だった。

『コ・………フォ・ー・ム』

【CHARGE・AND・UP】

ノイズ混じりのくぐもった電子音が、イクサベルトから流れた。ライジングイクサが故障を疑うより早く、ベルトから謎の光が溢れ出す。

「い、一体何だ………!？」

イクサ資格者の名護さえも知らない現象。見守るライジングイクサの前で、ベルトと彼の右腕が、電車のレールのようなラインで繋がれる。レールを伝い、ベルトから溢れた光がイクサカリバーを包み込んだ。

「これは………!？」

光が収まった時、イクサの右腕に握られていたのは、見たことのない形状の武器だった。

細身だった刀身は、大剣と呼べるまでに肥大化し、縁の一部にはカードスロット。  
鏢にはイクサカリバーと同じ翼の装飾があるが、あちらは片翼でこちらは両翼。柄は銃器のグリップに近く、引き金もついている。

「なんだこの剣は……イクサカリバーにこんな機能は無かったはず……!?」

突然の現象に驚くライジングイクサ。そこへ畳み掛けるように、彼の前に一枚のカードが浮かび上がっていた。

「ゼロノスカード？」

浮遊していたカードが、まるで意志を持つかの如く、独りでに剣のスロットに収まった。

### 【FULL・CHARGE】

電子音が鳴り響き、刀身を光子力ではない、黄色いエネルギーが覆う。  
そこから伝わるプレッシャーは、通常のイクサ・ジャッジメントとは桁違いだった。

「何が起ったのかわからないが、これなら」

普段とは違う、重量感のある大剣を構えるライジングイクサ。地面を強く蹴り、シャナと戦うヴィルヘルミナへと突っ込んでいく。

「無駄だと……」

例の如く、リボンで刀身を捉えようとするヴィルヘルミナ。だが、

ザンツ!!

「っ!？」

刀身に触れたりリボンが、瞬く間に切断された。よって、ライジングイクサの突撃は止まらず、遂に近距離からの攻撃を許してしまう。

「ハア　ツ!!」

リボンの壁を防御に回すが、振り抜かれた大剣はその防御壁をX字に切り裂き、ヴィルヘルミナへも斬撃の余波によるダメージを与え

た。

「ぐっ!？」

腕からは鮮血が飛び、優勢だったヴィルヘルミナが初めて膝をついた。

「よしっ!！」

確かな手応えを感じ、ライジングイクサは降って湧いたチャンスに感謝する。

この力が何なのかわからないが、これで突破口が開けたことは事実。

ここから一気に

キーン。

突如、イクサナツクルのランプが点滅した。またしてもライジング

イクサは何もしていない。

「うっ!?!」

ズキリと身体に激痛が走る。

点滅の感覚は段々が早くなるにつれ、比例して名護が感じる痛みも大きくなっていく。

「まさ、か……反動が……ッ!?!」

「っ!?!」

戦闘の最中に苦しみだしたライジングイクサ。その隙を見逃すヴェルヘルミナではない。  
鬣の如きリボンが剣山のように鋭く尖り、一斉にライジングイクサを強襲した。

「うあああーッ!?!」

「!?! 名護!?!」

「名護さん!?!」

吹き飛ばされ、瓦礫の山を転がるライジングイクサ。

ぐったりと倒れ伏す姿から、戦闘不能に追い込まれたのは明らかだ。

「流石はイクサの資格者でありますな。穏便に済ませたかったのでありますが」

「っ、ヴィルヘルミナ!!」

瞳に激情を灯し、シャナが再びヴィルヘルミナとの戦いに躍り出る。

「悠二、名護を!!」

「わかってる!!」

シャナが相手をしている間に、ライジングイクサへと駆け寄る悠二。

「名護さん、大丈夫ですか!？」

「あ、ああ。大丈夫だ……うっ!!」

プシューッ!

身を擦らせたかと思うと、ライジングイクサの鎧の隙間から、白い煙が排出された。

悠二が目を丸くする傍ら、変身が強制解除され、ライジングイクサは名護の姿へと戻ってしまう。

「な、名護さん、一体何がどうなってるんですか？」

「はあっ、いや……私にもサツパリだ……まさかいきなり強制解除されるとは……」

「強制、解除？」

「ああ……イクサは、資格者への負担が限界を超えた場合……変身が強制解除されるんだ……」

もつとも、強制解除のシステムは、資格者への負担が大きかったプロトイクサの為のものだ。

技術革新によって資格者への反動が0に等しくなった現代のイクサには、ほぼ無縁の安全装置だったのだが……。

（考えられるのは、やはりゼロノスカードの影響か……いや、今はどうでもいいことだな……）

無意味な推論ばかりしていても仕方がない。

自分はこのザマ。戦えるのはシャナー人、限りなくこちらに分が悪



い状況だ。

この条件下で、今自分が取るべき最善の道は

「……悠二君」

名護は緩慢な動作で、悠二にイクサナツクルを差し出した。

「君が、変身しろ」

「えっ？」

いきなりの事態に、悠二は呆然と差し出されたイクサナツクルを見つめた。

「今の私がイクサを持っていても、何の意味もない……。それに、今はシャナくんが抑えているが、あの給仕は隙あらばキミを狙ってくるだろう……。どうせ危険なら、キミも戦いに参加した方が危険も下がるはずだ」

「で、でも名護さんを放つてはおけないですよ！」

「大、丈夫だ。戦ってわかったが……。あの給仕は、無用な殺戮を望む輩ではない。私が戦闘不能である以上、手は出してこないさ……」

名護は半ば強引に、イクサナツクルを悠二の手に握らせた。

「悠二君……キミにならイクサを扱える。前も、使いこなせたんだらう？　なら、今後も大丈夫だ」

自分を信じなさい。

名護から手渡されたイクサナツクルは、ずしりと悠二の手にのしかかった。

(重い)

以前のようには、勝手に使った時とはわけが違う。

イクサを託す　それは名護が、この場を切り抜ける為の戦力として、悠二を認めていることに他ならない。

同時に、それは悠二が戦場に立つことを意味している。

シャナと共に、肩を並べて戦うことを意味している。

「……すみません名護さん。お借りします」

腹を決め、悠二は名護を瓦礫に横たわらせて立ち上がる。

イクサベルトを腰に巻き、イクサナツクルを手に押し当てた。

『レ・デイ・ー』

待機音が流れ出したことに気が付いたのか、シャナとヴィルヘルミナがこちらに視線を向けた。

「悠二……!!」

驚愕の混じる瞳に笑いかけ、悠二はナツクルを持つ手を左から右へスライドさせる。

(いめん。シャナ)

けど、見てるだけは 守られるだけは いい加減ウンザリなんだ。

深呼吸し、悠二は声を張り上げる。

「変身!!」

『ファイ・ス・ト・オ・ン』

下から圧縮されたアーマーの映像が現れ、悠二と重なる。名護と同じ、仮面ライダーイクサへの変身。だがやはり前回と同じく、クロスシールドの展開しないセーブモードでの変身だ。

ヴィルヘルミナから距離を取ったシャナが、そのすぐ近くに着地する。

張り詰めた沈黙。

吊りあがった瞳をイクサに向け、

「悠二」

シヤナはただ一言だけを問う。

「「いいのね」？」

「ああ」

何が。と聞くことはせず、イクサは即答する。

「戦おう。一緒に」

「うん」

固い表情の奥に確かな歓喜を滲ませ、シヤナは頷く。  
刀の切っ先を向け、片や拳を構え、二人はヴィルヘルミナと対峙する。

「準備はいい？ 悠二」

「いつでもいいよ。シヤナ」

「……その名は、不愉快であります」

自分の知らぬ名で少女を呼ぶイクサに、ヴィルヘルミナははっきり

と嫌悪感を露わにした。

それぞれの想いは交錯し、再び激突する。

## 第二十九話・ピアノフォルテノそれぞれのこれから・Aパート（後書き）

なんとか三週間以内には間に合いました。ペースキープは難しいなあ……。

・おそらくは忘れかけられている設定、名護の持つゼロノスカード。今回進化したイクサカリバーは、形的にはパーフェクトゼクターに近い形状をしています。  
ちなみに、まだゼロノスカードの力は不完全であり、そのせいで名護さんは変身を強制解除されてしまいました。いつか使いこなしてくれるはず。

・悠二、二度目のイクサ。イクサの醍醐味はやはり、ファイズと同じく資格者の変動ですね。

今回は今回八ブられた主人公（笑）を含めての大乱闘です。

では、また次回！

## 第二十九話・ピアノフォルテノそれぞれのこれから・Bパート

戦火の上がるパピリオンから少々離れた休憩用のベンチ。

吉田一美はそこにいた。

「坂井くん、大丈夫かな……？」

元々悠二がここに来たのは、吉田が彼を誘ったからだ。

デートと言って差し支えないそれに、シヤナがヴェイルヘルミナからの護衛（そこに吉田の監視が含まれていたのは言うまでもない）という形でさりげなく着いてきたのである。

待つ身はつらい。

吉田はこういう時に、悠二との越えられない壁を　シヤナにしか越えられない壁を感じる。

もちろん、このことを話した悠二の表情から、やむを得ない事情があるのはわかっているのだけれど……それはそれ。

だから彼の去り際、吉田は言った。



『これから、こんなことがあっても、仲間はずれにしないでください』

『えっ………？』

『気遣わないでください、利用してくれてもいいです。でも、知らずにいなくなるのは……それだけは、絶対に……嫌です………』

『 分かった。ありがとう』

『………』

『これからも、なんにも言わないことだけは絶対にない、全部きちんと言話す、そう誓つよ』

『………はい』

どんな気持ちであんなことを言ったのかはわからない。  
ただ、目蓋の奥が熱くなっていたことは覚えている。

悠二がいるのは“そういう世界”。自分はあくまで、常識で形成される日常にいる。

どれだけ精神武装したところで、それだけは変わらないのだ。

(だから)

これは耐えなければならぬ痛みだ。  
よかれと思って選び、進んだ道。

もっと強くなりたい。

あの人のそばにいられるように、遠くに行ってしまうないように

「……あつ」

吉田は遊園地の客の中に、見知った姿を見つけた。  
客の波を掻き分けながら、極力スピードを落とさないようにして、  
こちらに走ってくる。

「先生！」

「ん？　　おお、吉田じゃないか」

ベンチの前で立ち止まる奏夜だったが、急いでいるのか、その場で  
足踏みをしている。

「何やってんだこんなところで。一人の遊園地ほど悲しいもんはねぞ」

「さすがに私も、ここに一人で来る勇氣はないですよ……」

吉田は苦笑して、

「坂井くんと一緒に来たんですけど、さっき用事があるって言って、そのパビリオンに……」

「ああ、なるほどね」

合点がいった、と手を打つ奏夜。

「悠二を待つてる気か？」

「はい。坂井くん、無事に帰ってくるって言ってましたから。待ってないと」

「……そっか。けど、万が一のことがあったら、シンボルタワーの方に行け。静香と恵さんがいるはずだから」

「わかりました。」

あ、先生！」

吉田は、再び駆け出した奏夜を呼び止める。  
さっきから彼の纏っている雰囲気。  
あまりに顕著なそれを、吉田は感じ取っていた。

「何か、いいことありました？」

「……」

奏夜はニカッと笑って、

「わかる？」

奏夜が向かうパビリオンで、また火柱が上がった。

「はっ！」

地を強く蹴ったシャナが、紅蓮の双翼を顕現。

ヴィルヘルミナの頭上から、降下の加速力を上乘せした斬撃を繰り出す。

「なかなか」

「及第」

だが『万条の仕手』は揺らがない。  
絡めたりボンで力のベクトルを変え、床に叩き落とされる。

「っあ!？」

滴る血。

戦闘技術に天地の差があることを、シャナは否応無しに自覚させられた。

「シャナ!!!」

「!!!」

立ち上がったシャナの脇をすり抜け、イクサがヴィルヘルミナへと特攻をかけた。

手には レッグフエッスル。

「僕に”炎を撃つてくれ!!”」

「!!! 分かった!!」

イクサの考えを読むのは一瞬で済んだ。

疲れを感じさせない淀み無さで、シャナは大太刀に炎を灯す。イクサもまた、レッグフェッスルをベルトに装填。

『イ・ク・サ・レッグ・ラ・イズ・アツ・プ』

電子音を起動の合図に、コロナコアが展開。イクサの足に光子力エネルギーが集中していく。

「だあああッ!!」

ダッシュのスピードからの跳び蹴り。山吹色に輝く右足から放つ『イクササンライズパニツシャー』がヴィルヘルミナへ突き出される。

(芸のない一点突破……)

(愚作)

元よりこの少年が変身したイクサに危機感を抱いてはいなかったが、ここまで無策とは滑稽極まりない。

シヤナと同じように、ヴィルヘルミナはイクサの足へとリボンを伸ばす。

「シヤナ、今だー!!」

「なっ!?!」

紅蓮の奔流が、シヤナの大太刀から放たれた。しかし、火力がやや弱い。

破壊力をもたないそれは、キックの体勢をとるイクサを、後方から押し出した。

(炎を推進力に　!!)

シヤナの炎と勢いを利用した、強化版イクササンライズパニツシヤ!

悠二の発想力と、その意図を一瞬で看破できるシヤナの判断力あつての技だ。

「防御!!」

「くっ!!」

急加速したキックにヴィルヘルミナは、リボンを巻き付けるタイミングをずらされた。

捕縛は不可。ならば、とヴィルヘルミナは正面にリボンで防御壁を作り上げる。

轟音。

サンライズパニッシャーがリボンの壁にぶつかり、エネルギーの鏢迫り合いを巻き起こす。

目映い光が止むと、イクサの足がリボンにめり込んでいた。

ヴィルヘルミナに　ダメージはない。

（止められた!!）

イクサの対応は素早かったが、僅かに遅い。

捕縛用のリボンがイクサに巻き付き、全身の骨を軋ませる圧力をかけた。



「ぐ、あつー!!」

「だめ、ヴィルヘルミナ!!」

焦って特攻をかけるシャナだったが、先ほどと結果は同じ。リボンであしらわれ、地を這うだけ。

( シャナ ……!! )

まともな声すら出せない締め付けの中で、イクサは心の中で必死にシャナの名を呼ぶ。

ぼろぼろになった夜傘が痛々しい。肌も所々焼けただれている。常人なら瀕死の重傷である身体で、しかしシャナは立ち上がる。

瞳を紅蓮で満たしながら。

「ゆ……さない」

「……」

シヤナは育ての親へ、絞り出すように吼える。

「ゆるさ、ない」

「結構……」

ヴィルヘルミナが静かに呟く。

「……『やめて』だの『許して』だの、哀れみを請う言葉を吐いていたら、答える前に、まずコレを破壊していたのであります」

「ッー!!」

バチバチッ!!

イクサのアーマから火花が上がった。

「鈍ったといっても、日常のことでありましょうか……なれば、なればこそ。」

守らねばならないのであります。完全なるフレームヘイズを」

「 勝手なこと、はっきり……!」

シヤナの激昂に声色一つ変えず、ヴィルヘルミナは剣山のように尖らせたリボンを、シヤナの四肢に突き刺した。呻き声を挙げたシヤナを罪人のように吊り上げ、勧告する。

「さあ、破壊への同意を。ただ、認めてくれれば、良いのであります」

「……っ！」

イクサは一瞬、沸騰するような怒りを感じた。わかったのだ。自分が何故、捕らわれてすぐに破壊されなかったのか。

シヤナを変えたのは、御崎市に来てからの日常。それさえ折れば、シヤナは元通りになる。元の完全無欠な、何者にも縛られない、一個のフレイムヘイズとして。

(……許さ、ない……ッ！！)

温厚な悠二には珍しい本気の怒り。

シヤナを力で従わせようとするにも。

その為に自分を利用しようとしているにも。

全部、許せない。

(自分をどうしたいかなんて、そんなの、シャナの自由だろう……  
!!)

あの教師と同じ言葉。

悠二の心と呼応したかのように、シャナが口を開く。

「絶対に……嫌」

「!」

「私は従わない」

驚愕するヴィルヘルミナに、シャナははっきりと宣言する。  
イクサは仮面の下で笑った。

『ぞまあ、みる』

聞こえる声は“2つ”。

『これが、シャナだ』

上空　戦いで吹っ飛んだ屋根の上から現れたキバが、シャナを捕縛するリボンをキックで引き千切った。

「なっ!?!」

まるで予想していなかったキバの登場に、ヴィルヘルミナの判断力は著しく低下する。

それが、更なるミスを呼び込んだ。

「至近距離!!」

ティアマトーの警告に、ようやくヴィルヘルミナは反応するが、遅い。

「この距離なら、防御も軌道変更もできないよな!」

『イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ライ・ズ・アツ・プ』

一瞬の隙を突いて、イクサはナツクルフェッスルをベルトに装填し、至近距離からの『ブロウクンファング』を発動させていた。直撃まで数秒もない。それを避けるためには

「くっ!」

やむを得ず、ヴィルヘルミナはせっかく捕らえたイクサを空中に放り投げた。

ブロウクンファングは不発に終わったが、イクサは捕縛から逃れ、キバ、シャナの近くに着地する。

「遅いわよ、奏夜」

「悪かったな。こつちもこつちで野暮用を片付けてたんだよ。  
悠二、名護さんは？」

「安全な場所で休んでます。ってか先生、相変わらず予想外の登場  
しますよね……」

あんな高いパビリオンの屋根からって。

「奇襲にいいと思ってな。別に前回出番が無かったので、カッコ良  
く登場したかったからってワケじゃないぞ」

「つまり、カッコ良く登場したかったですね？ そのために余分  
な時間使って」

「まあいいじゃないか。こうしてお前が逃げられる隙を作ってやっ  
たわけだし」

相変わらず読めない人だ。

イクサが溜め息をつく傍ら、キバはヴィルヘルミナを見て、呆れた  
ように首を振った。

「まったく、お前も頑固だよなあ……怒りを通り越して尊敬のレベルだぜ。腐れメイド」

「邪魔を……！」

「邪魔？ シャナを無理やり従わせるのに邪魔ってか？ だとしたらいくらでも邪魔するぜ。俺は」

キバが敵意を露わにする中で、シャナが畳み掛けるように言う。

「ヴィルヘルミナの方が、間違ってる。私が そんなこと認めるわけがないって、分かってるはず」

凜とした口調で、思う通りのことを告げる。

「私は、言ったよね、アラストール」

「……『皆がどれだけ自分を愛しても、自分がどれだけ皆を愛しても、嫌なら、絶対にやらない』」

アラストールが唱えるのは、かつて契約の時にシャナが読み上げた宣誓。

「」



「」

二人分の絶句を挟み、シヤナは問いかける。

「いったい……なにがあったの？」

「……う」

ヴィルヘルミナの強固な心の仮面が揺らいだ。

(不器用だな)

キバは心の中で思う。

胸の内に秘めることは確かに大事だが、いずれはその重みに潰される。

そうなる前に、その荷物を降ろさなければならないというのに。

「ヴィルヘルミナが、そんなこと、言うはずがない」

「う、う」

「なのに、なぜ……そんなこと言うの。私に、なにを隠してるの？」

「うっ、う」

「私、そんなヴィルヘルミナには、絶対に従わない」

言葉を切り、シヤナは自分を支えてくれる二人を見る。

「奏夜、少し力を貸して」

「ああ、任せとけ」

「ありがとう。悠二」

仮面の奥 悠二の瞳がシヤナを映す。  
その表情は、笑っていた。

「一緒に、できるよね」

「ああ、勿論!!」

弾かれたように、二人は駆け出す。  
その背後で、キバは考える。

(さて、強がってはみたものの……)

正直なところ、キバはシャナ達と似たり寄つたりのダメージを負っていた。

ディネによる攻撃に加え、エンペラー、ブロンファイバーの反動。

エンペラーはおろか、ドガバキにすらなれない満身創痍。

故にキバは、使う力を選ぶ必要があった。残りの体力でシャナ達をサポートし、勝利を導くための力を。

( よし、こいつだ!! )

ケースに伸びる手。

キバが選ぶ勝利への布石は

『バツシャーマグナム!!』

キバットがフェッスルを吹き鳴らし、一瞬の内にバツシャーフォームへのチェンジが完了する。

「いい加減子離れしろや!!」

キバBFが手を地に沿える。  
固いコンクリートの壁をぶち破り、数多の水柱がヴィルヘルミナを  
取り囲んだ。

吹き上がる飛沫は凄まじく、ヴィルヘルミナの視界を僅かに奪う。

（っ、目眩まし!!）

（前方!!）

水柱を死角に、『炎髪灼眼の討ち手』渾身の刺突、そしてイクサが  
見慣れぬ大剣、シャナが夜傘から出したのであろう。を持って  
迫っていた。

「っ、」

狙いを見誤りはしない。  
ギリギリで冷静な対処力を取り戻し、ヴィルヘルミナは今までのよ  
うに、刀ごとシャナを投げ飛ばしていた。

勝ちを確信するヴィルヘルミナ。  
リボンの剣山が、残るイクサを捉える

「危険！！」

突然、背後から“もう一人”のイクサが現れた。

「なっ！？」

数瞬遅れ、ヴィルヘルミナは気付く。  
リボンの剣山が“水柱に映っていたイクサ”を突き刺していたことに。

「うおおおおおッ！！」

吼えるイクサの右手にある大剣。  
かつて御崎市を襲った“徒”である“愛染自”ソラトが所持していた剣『フルトサオガ吸血鬼』。

そして 左手にもう一本。

デイケイドこと門矢士が去り、数日経ったある日の坂井家。  
鍛錬に勤しむ悠二を、奏夜が訪ねてきた。

「悠二、今日はお前にプレゼントをやるう」

「プレゼントお？」

呪いの人形か何かじゃないだろうな、と悠二は奏夜が手渡してきた  
長い包みを、慎重に開ける。

「!!! これって……!!!」

「ああ、『あいつ』の使ってたもんだよ」

包みに入っていた『それ』を見て、悠二は少なからず驚いていた。

「でもプレゼントって……僕が使っていていいんですか？」

「ああ、俺にはザンバットがあるしな。使われないままにいるより  
も、お前みたいなヤツに使って貰った方が、『あいつ』も幸せだろ  
うぜ」

奏夜は『それ』の柄を持つと、何言か悠二には理解できない言葉を呟いた。

すると、『それ』は光の粒子に変わり、悠二の左手に溶けていく。

「わっ！！　　僕の腕に入った!？」

「『それ』を魔皇力に変換して、お前の腕と同化させたんだ。これで『それ』はお前の意志で自在に出せる」

キバがザンバットソードを魔皇力に変え、タツロットの中に収納しているのと同じ原理だ。

「魔皇力と同じように存在の力を流し込めば、『あいつ』と同じ使い方もできるし、お前のへっぴり腰でも片手でラクラク振り回せる。

“千変”の腕を取り込んだ今のお前なら、使いこなせると思って持ってきたんだよ」

「成る程……じゃあ僕の技量次第では『吸血鬼』との二刀流、なんてこともできたりするんですか？」

「ああ、そっか。お前ソラトの『吸血鬼』使うことにしたんだっとな……うん、できると思うぞ。訓練は必要だろうがな」

悠二が左手を翳すと、光の粒子が再び『それ』の姿をかたどった。握ってみると、ズシリとした頼もしい重みが伝わってくる。悠二が『それ』を気に入るのに、そう時間はかからなかった。

「……あ、先生。これに名前とかついてるんですか？」

「んー。ついてないんじゃないかな？ 『あいつ』も特に名前とか呼んでなかったと思うし。何だ、名前欲しいのか？」

「はい。これから使っていくものですし」

「ふむ。よし、この俺がエレガント且つエクセレントな名前をつけてやるっ」

嫌な予感しかしねえ。

悠二がそう思ったのは言うに及ばずだ。

「ウォーバルソード」

「じゃあ吸血鬼はフランヴェルジェに改名ですか？」

「蝶の短剣・エルマ」

「禁止カードになるような剣の名前つけないでください」



「首領パッチソード」

「それじゃただのネギでしょうが」

「テン・コマンドメンツ」

「これに10種類も形態はありません」

「アービトレイター」

「わかる人何人いるんでしょうね」

「ハンドソニック」

「天使？」

「獣奏剣」

「ドラゴンシーザーは呼べませんよ」

「全刀・鎧」

「西尾維新ファンしかわからない名前はやめてください」

「デルフリンガー」

「中の人ネタはもっとやめてください！」

「ギー太」

「もはや剣の名前ですらない！」

粗方ツツコミを終え、悠二は息を切らす。そんな様子に満足したのか、奏夜はニンマリ笑って、

「じゃあ今度は　安心しろ。次は真面目意見だ」

『それ』の名前は

「行くぞ！　『海神刃』<sup>ネレウス</sup>！！」

イクサの呼び声と共に、『それ』は水の波動を纏って振り下ろされた。

人と怪物の狭間で苦しみながらも、最後まで己の道を貫き通した強きファンガイア　レティシア・リネロ。

彼女の使っていた大剣<sup>クレイモア</sup>『海神刃』が、ヴィルヘルミナへ牙を剥く。

「くっ!!」

完全に意表を突かれた。

しかし、取れる。

ヴィルヘルミナは投げではなくリボンの防御壁を選択し、『海神刃』の斬撃を阻む。

「まだまだあ！」

反撃の間を与えず、イクサは空中でぐるんと反転し、右手にある『吸血鬼』を振るう。

(甘い!!)

一打目を防ぎ、余裕を取り戻したのか、ヴィルヘルミナは眉数センチというところで、刀身を受け止める。

しかしそれは、イクサの読み通り。

詰み(チェックメイト)の合図。

「はあああああああっ!!」

雄叫びを挙げ、イクサは『吸血鬼』に膨大な量の存在の力を注ぎ込む。

『吸血鬼』 その特性は、存在の力を込めることで、敵を切り刻む。

「あ つ」

見えざる刃が、ヴィルヘルミナを斬り、鮮血が宙を舞った。

ティアマトーが何か叫んでいたが、それも聞こえない。

痛みが、ヴィルヘルミナの意識を奪い去っていった。

目を開くと、そこにはヴィルヘルミナのよく知る姿があった。大切に、可愛い、可愛い、とても可愛い少女。

溢れんばかりの激情を灯していた瞳は、今や安堵と歓喜に彩られていた。

「ヴェルヘルミナ！！ 良かった！！ 良かった！！」

形振り構わず、彼女は自分に縋りついてくる。  
アラストールとキバが呆れたように、

「だから大丈夫と言っただであろっが」

「フレイムヘイズの頑丈さはお前が一番よく知ってるだろ」

「だって、だって悠二があんなムチャクチャバカみたいな量の力注ぎ込むから！！」

「わ、悪かったって言うてるれひよ。初めてだから加減がわからなかったんひゃひよ」

イクサの変身を解いていた悠二の頬は腫れ上がっていた。  
犯人は言うまでもないだろう。

「……………容態報告」

無愛想なパートナーが訊いてきたので、短く答える。

「大事ない……でありますよう」

「本当に？」

シヤナが心配そうに念を押す。まるで『普通の少女』のように。また、つきりと胸が痛んだ。

「どっしって」

口が、勝手に開いていた。

「どうしてそんなに、感情を動かすのでありますか」

「……いい加減気付いてやれよ教育係」

キバが出来の悪い子供を見るような視線を浮かべていた。彼の言葉に次ぐ形で、シヤナは答える。

「好きだから」

嘘だ。

大嫌いだと思っている。

「勝手すぎるよ、ヴィルヘルミナは……大嫌い」

（それも嘘だ）

キバは思う。

大嫌いなら、ここまでヴィルヘルミナを心配するものか。

「私が変わったって、思ったの……？」

穏やかな口調で、自分の素直な気持ちを告げる。

「フレイムヘイズになったのも私、フレイムヘイズに“なるう”としてた”のも私」

フレイムヘイズになる前も後も、どちらも同じシャナ。

「私はね、ヴィルヘルミナがこんなことになったら、いつでも泣くんだよ？」

「……」

どれだけ新しい何かがシャナの中に降り積もるうとも。

「強くて誇り高いフレームヘイズになろうって思ってたけど、いっぱい泣いたよね？」

「……」

覚えている。

一緒に過ごすしてきた日々の中で、目の前にいる少女は何度も泣いていた。

「……シャナの、フレームヘイズとしての本質を作ったのはアンタだ」

キバがぼつりと言う。こんなことわざわざ話させるな、とでも言いたげな口調で。

「けど、それはシャナの究極形じゃない。むしろただの土台に過ぎない。

そこからどんな材料を使うのか、それはシャナの自由だ」



土台だけで作品はできない。完成には材料が必要だ。

その材料は、例えば仲間との出会い。例えば新たに芽生えた感情。

「アンタの意志で、シャナの成長は曲げられない。けど、アンタの知るシャナは、ちゃんとシャナの中に残ってる」

ヴィルヘルミナの知るシャナもまた　シャナの本質の一部なのだから。

シャナは笑って、ヴィルヘルミナを抱き締めた。

「変わってないよ。私、なにも変わってない」

「……はい」

いつの間にか、また涙が溢れていた。

心の中にあつた不安の影が消えていく。

心地よい暖かさを感じながら、ヴィルヘルミナはシャナを静かに抱き締め返した。

## 第二十九話・ピアノフォルテノそれぞれのこれから・Bパート（後書き）

今回は久しぶりに約一週間で更新できたぜやっほい！

・悠二イクサ無双。元々原作でも悠二が活躍する場面だったので、「ならとことんやろう」と開き直った結果こうなりました（笑）

・悠二の新たな力、海神刃<sup>ネレウス</sup>。レティシアはかなり気に入ってたので、何かしらの形で彼女の姿を残したかったのです。ちなみにネレウスは、どこかの国の海神の名前で、穏やかな海を象徴する神だそうです。

次回で9巻はオシマイ。長かったなあ……。

では、また次回（＾Ｏ＾）

## 第二十九話・ピアノフォルテノそれぞれのこれから・Cパート

「何でお前と隣合わなきゃならんかね」

「それはこっちのセリフであります」

一難去つた大戸ファンシーパーク。

互いにもう体力の限界なのか、奏夜とヴィルヘルミナは、広いベンチに深々と腰掛けていた。

辛辣な言葉の応酬にも、あまり元気がなく、ただダレているだけのようにも見える二人の眼前には、

「んがつ!? 痛たたた! シャナ、強い強い!？」

「吉田一美も握ってるのに、なんで私だけに注意するのよ!」

「私はそんな握り潰すようにはしてないもの!」

悠二の腕を引つ張り合うシャナと吉田の姿があった。

世間一般に『両手に花』と呼ばれるシチュエーション。

同時に、人によってはかなりベタ過ぎて殺意も湧きかねない状態だ。

「いつも」

「あん？」

「いつも“ああ”なのでありますか？」

「……あー、だいたいな。仲が悪い訳じゃねーんだが」

いい加減シャナも吉田も、折り合いをつけて貰いたいのだが。

「やっぱり娘の恋愛沙汰は心配か？」

「……」

凄い目で見られた。

「怖い怖い」と奏夜はおどけるように言う。

「……けど今後、あんな風にじゃれてられるかはわからないけどな。アンタの話を聞く限りは」

奏夜は、ヴィルヘルミナから聞いた事実を思い起こす。

「全て私の、身勝手だったのであります」

「猛省」

あの戦いの後、半壊したパビリオンの中で、奏夜達はヴェルヘルミナを問いただしていた。  
なぜ、こんなことをしたのかを。

「私は……ファイレスと戦いたくなかったのであります」

「それは……？」

「“彩瓢”ファイレスと、『永遠の恋人』ヨーハン……『約束の二人』の、名であります」

シヤナと悠二が怪訝そうな顔を浮かべた。

「戦いたく、ない？」

「どついつ意味だ？」

フレームヘイズが“徒”と戦わない。  
ラミーのような存在もいるにはいるが、基本的に有り得ないことだ。

「話を整理しよう。“壊刃”とやらが、『約束の二人』の片割れを仕留めた。これは確かなんだよな？」

奏夜の問いに、ヴィルヘルミナは頷く。

「そう。恐らく“壊刃”が受けた指令は、『零時迷子』の奪取。そして坂井悠二、貴方に未だ強力な『戒禁』がかかっている理由でも、ある」

「えっ」

『戒禁』。

悠二の『零時迷子』に掛けられた自在法。その力は強力であり、“千変”シュドナイの腕をも取り込んだ代物だ。

「“壊刃”サブラクによる痛撃を受け、ヨーハンを破壊されそうになったファイルスは、『零時迷子』の中にヨーハンを封じ、転移させたのであります」

「……………封じ……………なん、だって……………？」

悠二のみならず、シャナと奏夜もそれが意味するところを悟り、青ざめる。

「転移とは、この世と“紅世”の『狭間の物体』たる宝具が、この世に開いた“紅世”の穴、即ちトーチを自動的に塞ぐ現象であります」

「でもって宿主のトーチが消えれば、宝具も別のトーチにランダム転移する……か。なるほど、それを利用して、死にかけのヨーハンとやらを逃がしたわけだ」

「ま、待ってくれ！　じゃあ、じゃあ、“僕の中”には!？」

「そう。……あるのは、『零時迷子』ではない……己が復活の扉をフィレスが叩く時を待つ……『永遠の恋人』ヨーハン“そのもの”であります」

悠二の力が抜け、瓦礫だらけの床にへたり込んだ。

当然だろう、自分の中に“誰か”がいるなど、受け入れられるわけがない。

奏夜とシャナが悠二を気遣うように肩を置いて、会話を続ける。

「『約束の二人』がどういう状況なのかはわかった。けどそれだけ



じゃ、お前が悠二を狙った理由に説明がつかないな」

「そうよ。ヴィルヘルミナがその“紅世の王”と友達なら、悠二を消す意味なんてない。だって悠二を消したら、また『零時迷子』の所在がわからなくなる」

そう、真に友達を想うなら、悠二を捕らえるなりして、フィレスにつき出してしまうがいい。

悠二を消せば『零時迷子』は無作為転移してしまう。ヨーハン復活は遠のくばかりだ。

「それこそが、呪い」

「悪夢」

「……嫌な前振りだなオイ」

「できるだけ、事実を正確に頼む」

より真剣味の増したアラストールの声が、先を促す。

「瀕死のフィレスがヨーハンの存在を封じ、転移させるまでの、ほんの僅かな間に……」

ヴィルヘルミナは唇を震わせて、その真実を言い放った。

「……私たちだけが、見ていたのであります。“壊刃”が、見たことのない型の自在式を『零時迷子』の循環部、『永遠の恋人』ヨーハンを構成する部位に打ち込み、劇的に変異させたところを。蝕むように、貪るように、狂いと変化が起こり……そして」

「転移」

空気が完全に凍りついていた。  
シヤナも悠二も、奏夜も二の句が次げずにいる。

劇的に変異　つまりそれは、ヨーハンそのものが掻き消されている可能性もあるということ。

ヴィルヘルミナしか知らないこの事実をフィレスが知れば、彼女は絶望の淵に立たされるだろう。  
だから、『零時迷子』は渡せない。渡したくない。

「なるほど。戦いたくない、というのはそういうことか。かの“王

”とそこまでの友誼を結んだ、と……フレイムヘイズの使命に名を借りて、己の対峙すべきものから逃げようとしていた、と言うのだな”

アラストールが責めるように唸り、シヤナもまた僅かに怒りを滲ませる。

「なんで、自分はそうなのに、私から悠二は取り上げようとしたの……?」

「……知られなくなかったのであります」

シヤナの規範であるべき自分が、『完全なるフレイムヘイズ』に最も近い場所にいる自分が、情のために動いていることを。

知られることで、シヤナが変わってしまうと思った。

他ならぬ自分のせいで、自分の誇りとも言うべきフレイムヘイズが変わってしまうなど、耐えられなかった。

「取り除きたかったのです。あなたが変わってしまう全ての要因、元凶、状況、生活、その全てを……傲慢にも、恣意と、暴力で」

「……本当にメチャクチャだなお前」

溜め息をついて、奏夜は頭を掻く。  
本当……この師匠ありてこの弟子ありだ。  
我が儘なところまで似ている。

「で、シヤナさんや。どう致しますか？」

「決まってるでしょ」

「え、っわ！？」

悠二を引っ張り起こし向き合うシヤナ。紅蓮の瞳が、彼の恐怖を払うように煌めいていた。

「悠二、『零時迷子』がどんな危険を孕んでいるか分からない以上、それを不用意な転移で野放しにはしない。だから、悠二も覚悟を決めて」

眼前に広がる一点の曇りもない表情。

そうだ、もう怖がっている場合じゃない。

平穩を守るために、自分は『零時迷子』に纏わる全てに立ち向かわなければならないのだ。

「分かった」

「よろしい」

クスリと笑って、シヤナは奏夜を見た。

「奏夜は……」

「それ、聞く意味あるか？」

何を今更という風に、奏夜は笑みを返した。

「協力するさ。『仮装舞踏会』にしる『約束の二人』にしる、取り  
敢えず悠二が騒動の中心ってことだろ？」

「うむ。当面は坂井悠二を餌に、敵の狙いを明瞭にすべきであろう  
な」

「餌か……相変わらず酷い扱いだな」

「状況的な事実ってやつよ。頑張れば、別の呼び名が付くかもね」

「そうだな。頑張ってルアー昇格を目指せ」

「どつちにしる酷い！」

笑いの心を忘れない奏夜に悠二がツツコむ。ようやく、いつもの雰  
囲気が戻ってきた。

「とにかく、これからも現状維持って感じですね」

「そういうことだな。　　今までと変わらず、来るもんに立ち向か  
えばいいのね」

奏夜がそう締めくくり、此度の騒動はようやく終結を迎えた。

「しかしまあ、アンタもほとんど不器用だよな」

あちこちボロボロのメイドに、同じくボロボロな奏夜は言う。

「もつと早く説明してくれりゃ、こんな面倒なことにならなかった  
かも、知れねえのにさ」

「余計なお世話であります」

ヴィルヘルミナは拗ねたように口を尖らせ、

「……巻き込みたくなかったのであります」

「？」

ぼつりと付け加えられた言葉に、奏夜は首を傾げた。

「此度の『零時迷子』を巡る騒動は 恐らく大きな戦渦に繋がっているのでありましょう。

起こってしまったのならともかく……何が危険に繋がるかわからない状況で、あの子を巻き込みたくない。

……これも、ただの独りよがりではありますが」

「……」

奏夜は何故か黙った。

本当に こいつは。

「貴方こそ、なぜ全力で私と戦わなかったのですか？

さつきは体力の低下が原因でありましょうが、昨日の夜の戦いは明らかに手を抜いていた。

私を倒せば、少なくとも『零時迷子』を守ることはできたでありましょうに」

「……それだとシヤナが泣くだろ」

お返しと言わんばかりにされた質問を、面倒くさそうに答える奏夜。

「昨日も言ったろ。俺はアンタが嫌いだが、シヤナはアンタが好きだ。だからあいつは、俺がアンタを傷つけたら絶対に泣く。

……要は、あんまりあいつの泣き顔みたくねーんだよ。教師としても、友達としてもさ」

「……」

ヴィルヘルミナまでもが黙り込んだ。

示し合わせたかのように、奏夜も口を閉ざす。

ややあつて、

「……何故、私が貴方を好きになれないのか、分かったのであります」

「奇遇だな。俺も何でお前が嫌いなのか分かったよ」

どちらも

他人の為に生きているからだ。



勝手な都合や信念で他人を助け、自分がどれだけ傷付こうとも、大切な誰かを最優先に考える。

自分が傷付き、そのせいで誰かが悲しんでもお構いなし。

独善的で、エゴイスティックな生き方。

同属嫌悪。

なんのことはない。自分で自分を見るような気分の悪さが、奏夜とヴィルヘルミナ、二人が相容れない理由だったのだ。

3312

「この分じゃ、当面は仲良くできそうにねーわな」

「で、ありましような」

そもそも出会い方からして最悪だったのだ。相手が嫌いだとこつもハッキリ認識してしまっただけでは、軌道修正もできない。

「まあアレだ。これからも顔を突き合わせなきゃならんわけだし、戦う時くらいは協力してやるよ。“ヴィル”」

「……………ヴィル？」

何気なく添えられたその呼び方に、ヴィルヘルミナは首をギギギとこっちに向けた。

ロボットみてーな動きだな。と奏夜はどうでもいい感想を抱く。

「なんでありますか、その呼び名は」

「だって呼びづらいだろ。ヴィルヘルミナって。長い上に濁音混じってるし。嫌なら止めるが？」

ヴィルヘルミナはしばらく怒ったような、戸惑っているような、微妙な表情を浮かべていたが、

「……………好きに呼べばいいのであります」

「そうか。じゃあ今後とも、末“短く”よろしく」

疲れが多少取れたのか、奏夜はベンチから腰を上げる。

「どいへん？」

「ちょっと用事。あんまり待たせっぱなしだと、お姫様が怒っちゃまうからな」

言って、奏夜はヴィルヘルミナに背を向ける。彼の進む先には、シンボルタワーが悠然と聳え立っていた。

「おう、待たせたな」

「ん、おかえり。終わったの？」

「ああ、大体はな。恵さんは？」

「名護さん病院に連れて行くって。『あとで連絡ヨロ！』とか言ってた」

「そうか。……」

「……」

テーブル席に座りながらも、奏夜と静香はまるで向かい合えていなかった。気恥ずかしさが先行し、会話さえも続かない。

( (き、気まずい……) )

だが、相手の顔を見ようとするとする度に、さっきのキスを思い出してしまつ。

恋愛に免疫のない二人にとって、無理からぬことだった。

その様子を、近くの物陰から伺つ影が五つ。

「あ、の、ふ、た、り、は……！ 何なのあの煮え切らない雰囲気！ 中学生か！」

「あれで本当にキスマでしたのか？」

「まあ、若干あの場のムードに流された感はあるからなあ……」

「奏夜さんと静香さんらしいと言えば、らしいんですけどねえ……」

「あゝあ。私も見たかったなあ。二人のキスシーン……」

病院に行ったはずの恵と名護（腕を痛めたのか、片腕をギブスで止めている）。

キバット、タツロット。そしていつの間にかいたキバーラである。野次馬根性も甚だしいが、あの二人の決着がついたとあれば、気になるのは仕方がない。

「……あー、静香」

沈黙に耐えかねたのか、ようやく奏夜が会話のボールを投げた。

「な、何？」

ギクシヤクという擬音まで聞こえてきそうな声で、静香も何とか答えを返す。

「俺は、さ。静香が好きだ。勿論、特別な意味でな」

「う、うん」

「……けど俺は、他のみんなも凄く好きなんだよ」

四年来の仲間達も、一年二組の連中も、自分を支えてくれる全ての人が。

その人達の為になら、身を投げ打ってもいいと思っているし、そうする覚悟もある。

「だから……俺の愛情を全てお前に捧げることは、多分、できない」

「……うん。そうだね」

静香は穏やかに言う。

「奏夜は、そういう人だもんね」

「……怒らないのか？」

「そりゃあね。ちょっと悔しくはあるよ。私だけを見て欲しいっていう気持ちも、やっぱり捨てきれないと思う」

でも、それは仕方ないのだ。

「私は、“そういう奏夜”を好きになっただから」

困っている誰かを放っておけない。

苦しんでいる人のためにどこまでも頑張れる、優しい人。

(本当、惚れた弱みだよ)

心の中で静香は苦笑する。

「だから奏夜、そんなこと気にしなくていいんだよ。奏夜は奏夜らしくしてるのが一番なんだから」

「……そうか」

安堵したように、奏夜は相好を緩めた。

「ごめんな」

「別にいいよ。あ、でも余裕のある時は、私に付き合う時間も作ってよね。それと、面倒事を片付けたら、ちゃんと私に無事な姿を見せること」

「ああ、わかった。約束する」

「……む。奏夜、ムードがわかってない」

なぜか怒られた。

自分なりに、誠意を込めた約束のつもりだったのだが。

と、静香が急に身を乗り出してきた。  
目を閉じ、こちらのアクションを待っている。

(……おい)

これはあれか。誓いのキスをしろと言ってるのか。  
読めるわけねーだろ。こんな漫画みたいなムード。

呆れ半分の奏夜だったが、その分心のゆとりができた。

そのせいか奏夜は、普段の自分なら絶対にしない提案を口にす  
る。

「舌、入れていい？」

殴られた。

まだ、暗闇の中にいる自覚はある。  
罪の意識も、消えていない。



けど　ほんの少しだけ、自分を好きになれた気がした。

だからこれは、きっと幸せな話なのだろう。

## 断章・進化の扉

「すまない名護君。待たせてしまったね」

「いえ。こちらこそ、お忙しい中ありがとうございます」

カフェ・マル・ダムール。

右腕を包帯で吊る名護と向かい合う形で、嶋はテーブルにつく。

「それで、どうでしたか？　イクサの調子は」

「うむ。結論から言わせて貰えば、目立った損傷やバグは発見できなかった。変身システムもこれまで通り使用できる」

イクサナツクルをテーブルの上に置く嶋。

「ただ」

「ただ？」

「ライジングイクサ　つまり、フォームチェンジシステムの中に、我々が組み込んだ覚えのないシステムが確認されている」

「覚えのないシステム、ですか……それは一体どんな？」

「わからん。目下解析中だが、望みは薄いだろうな。そのシステムは、我々の科学では見たことも聞いたこともない設計なのだよ」

「そうですか……」

名護はおもむろに、ポケットからゼロノスカードを取り出した。科学で説明できない力。心あたりは一つしかない。

先の戦闘で強化されたイクサカリバー。

その強化の際、イクサ本体にも何か異変が起こったのだ。

嶋はしばらく唖ったあと「これは仮説だが」と前置きして、

「イクサは進化しようとしているのではないか？」

「進化？」

「ああ、キミから聞いた強化版イクサカリバー。確かに強力だが、その後イクサは変身解除に追い込まれた。つまり、既存のイクサでそのカードの力は使いこなせないということになる」

「……だから、カードの力に耐えられるよう、イクサもまた進化を始めていると？」

嶋は頷く。

（イクサの、進化……）

一抹の不安が脳裏を過ぎった。

新しいフォームチェンジシステム。そして、ゼロノスカード。これらが重なった時に生み出される力は、イクサカリバーだけでも恐ろしいレベルのものだった。

これがイクサ本体にまで及んだ時

果たしてそれは、自分の手に負えるものなのだろうか。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD！

「ウサギの怪物？」

「私の目的は『実験』に過ぎぬ」

「そんな……レジェンドルガ!？」

「あんなキバ見たことないわね」

「けっこー久し振りだな、クロノ」

「ああ。久し振り、奏夜」

【第三十話・スパイラルフェイト／薄明のキバ】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！

## 断章・進化の扉（後書き）

9巻終了……もう何度目になるかわかりませんが、マジ疲れました；

・やっとマトモな関係性に落ち着いた奏夜とヴィルさん。まだソリが合わないのは確かですが、これから段々と二人の関係も変化していきますよー。

・同時に静香と奏夜もあるべき場所に落ち着きました。まあ、しばらくはほの甘な二人を書いていくつもりです。……前にも言ったように、まだどうなるかはわかりませんが、ね（ニヤリ）

さて、次回からは久し振りにある作者様とのコラボ企画がスタートします。

以前にもコラボさせて戴いたのですが、今回はそのアンサー企画という形で許可を戴くことができました。

その作者様の描く作品の主人公は、僕の中でトップクラスの魅力を持つキャラなので、その魅力を伝えられるように全力を尽くします。次回も是非見てください！

ストーリーもじっくり動くのでお楽しみに（＾Ｏ＾）

では！

どうでもいい近況

『僕は友達が少ない』のドラマCDを視聴しました。ええ、アニメ

化がかなり楽しみになりましたとも！声優さんの力もあってか、隣人部メンバーの残念さが完璧に再現されてました（特に星奈）。個人的には小鷹役の木村さんがお気に入りで。この人知ったのはすばらしきこのせかいのヨシユア役なんです、その時との落差が面白い意味で酷いwwまさかこのCDで「俺が結婚してやんよ！」を再び聞くことになるとは……。

## キャラボイス（前書き）

以前から感想欄で「イメージＣＶを教えてください！」というコメントがかなり来ていたので、既に答えたものも含めてこちらに纏めておきます。

ただし、『ゲームマスター支配者』達のは事情があって決めてませんのであしからず。



## キャラボイス

・紅奏夜 神谷浩史

奏夜「義理の妹なんざ 萌えるだけだろうがあ！」

・名護由利 花澤香菜

由利「オーバードライブはパッシブだから」

・レティシア 豊口めぐみ

レティシア「つながり、だよ！」

・カロン 大塚周夫

カロン「闇を押さえこむのではなく、力で制するのだ」

・スコープオンファンガイア 鳥海浩輔

・ヘルホーネットファンガイア 藤原啓治

・プラティプスファンガイア 羽多野 渉

・スパイキーラットファンガイア 置鮎龍太郎

おまけ

シヤナ「悠二、私の為にありがとう 悠二は、やっぱり私の  
王子様だね」

悠二「言ったはずだ。弱い奴に、用はないって」

アラストール「ブラボー！ いい質問だ！ だがそれは秘密。何故なら、その方がカッコいいから！」

マージョリー「わたしを殺した責任、ちゃんととってもらうんだから」

マルコシアス「飛ぶですっ！ 英語的に言つと、フライー！！」

吉田一美「さあ叫べ！ 狂え愚民共！ 皆で、アヴィスへ行つてくる小羊を祝福しようじゃないか！」

佐藤「行くぜ、Zi ユニゾン！！ ライガーゼロ・フェニックス！！」

田中「ちよつと事情聴取させる。逃げたら轢いてやる」

池「チャージ！ デジソウル……バーストオ！！」

緒方「主役は私！ 黒 星ビッグウェーブ！！」

カムシン「まだまだだね」

ベヘモット「キシシシシ、早く俺様を海賊王にならせるー！」

ヴィルヘルミナ「うるっせえんだよ、ド素人がー！」

ティアマトー「しゅー、しゅー、しゅー、しゅーていんぐすたー」

キバット「フハハハ！！ ブラッド・バレットの華麗なフィニッシュでえーす！」

タツロツト「何が綺羅星だバカバカしい！」

キバラー「そうか。わかった。そこまで聞けばもう十分だ。つまり私は脱げばいいんだな？」

誰が誰のセリフを言っているかは次のページにて。

奏夜 化物語・阿良々木暦

シャナ テイルズオブシンフォニア・ラタトスクの騎士・マルタルアルディ

悠二 銀魂・神威

アラストール 武装錬金・キャプテンブラボー

マージョリー 真月譚月姫・アルクエイド・ブリュンスタッド

マルコシアス ビーストウォーズ・シルバールボルト

吉田 Pandora Hearts・アリス

佐藤 ソイドフューザーズ・RD

田中 緋弾のアリア・武藤剛気

池 デジモンセイバーズ・トーマ・H・ノルシュタイン

緒方 ソウルイーター・ブラック スター

カムシン テニスの王子様・越前リョーマ

ベヘモット ONE PIECE・ゲッコウ・モリア

ヴィルヘルミナ とある魔術の禁書目録・神裂火織

ティアマトー テイルズオブリバス・マオ

キバット 仮面ライダードラゴンナイト・JTC

タツロツト STAR・DRIVER 輝きのタクト・ミヤビ・レ  
イジ

キバーラ 化物語・神原駿河

名護由利 Angel Beats!・立華奏

レティシア キングダムハーツ バースバイスリープ・アクア

カロン キングダムハーツ バースバイスリープ・マスターゼアノ  
ート

## キャラボイス（後書き）

余談

ふざけてる時の奏夜は『デュラララ!』の臨也っぽいイメージ。  
普段や真面目な時の奏夜は『Angel Beats!』の音無っぽいイメージ。

第三十話・スパイラルフェイト/薄明のキバ・Aパート（前書き）

「十字路には、昔から悪魔との契約を結ぶ場所だという言い伝えがある。往年のミュージシャンの中には、この十字路で魂と担保に悪魔と取引を交わし、成功を勝ち取った人間もいたらしい。

……おい、こんな感じでいいのか？」

桜井黒乃

「ああ、上出来だ」

紅奏夜

今回は闇丸・EXE先生の作品『けいおん！仮面のヴァイオリン弾き』とのコラボです。

### 第三十話・スパイラルフェイト/薄明のキバ・Aパート

【とある世界】

「ウサギの怪物？」

小柄な体躯に、ツンツンした黒髪が特徴的な青年　仮面ライダー  
キバ・レプリカフォームの資格者『桜井黒乃』は、そのファンシー  
なのか恐ろしいのかわからない単語を復唱する。  
その淡々とした口調は、高校二年という歳にしてはかなりの大人っ  
ぽかった。

「なんだ、また平沢さんか律あたりの噂話か？」

「はい。でも今回は、先輩達以外にも広まってるかなり有名な話み  
たいなんです」

その傍らに立って歩くのは、艶やかな黒髪をツインテールにした女  
の子『中野梓』。高一の彼女はクロノよりも更に小柄で、小動物の  
ような可愛らしさを醸し出している。

ちなみに両者ともバンドに所属しており、クロノは『TETRA -  
FANG』というバンドのヴァイオリン担当。

梓は高校生バンド『放課後ティータイム』のリズムギター担当だ。

音楽をキツカケに知り合った二人は、所謂彼氏彼女の関係であり、また、この世界では都市伝説として扱われる『仮面ライダー』や怪人に、深く関わる者でもあった。

「そのウサギの化け物が怪人だとしたら気になるな、どんな話なんだ？」

「話のネタとしてはありふれた噂です。人気のないところで、若い女性だけを狙って襲うウサギの化け物。命に関わるようなことはしないらしいんですけど、神出鬼没で居場所が掴めず、あとに残るのは女性の肌に残った噛み傷だけ」と、大体こんな感じですね」

「噛み傷か……」

となるとやはり、最初に思いつくのはファンガイアだ。クロノの相棒、キバールが元いた『キバの世界』に巣くう怪人で、人間を獲物にする闇の住人。

「どう思いますクロノさん。やっぱり、怪人か何かだと思いませんか？」

深く考え込むクロノの顔を覗きこむ梓。

見栄を張っても仕方ないので、クロノは思ったままのことを告げる。



「……正直なところ、その話だけじゃ判断はしきれない。噛み傷は愉快犯の仕業って線もあるだろうし、ウサギの化け物なんてのは、話に尾ひれがたっただけって考える方が妥当だろ」

「ですよね……やっぱり」

「ただ 怪人にしろ人間にしろ、放っておけないのは間違いないけどな」

どんな形にせよ、人に害を及ぼしているのは事実。

怪人が関わっている可能性が数パーセントでもある以上、見過ごすことはできない。

「それにこのまま行くと、平沢さんと律が余計な首突っ込みかねないし」

「……あー、確かにそうかも知れませぬね」

以前も『仮面ライダー』の存在を知った矢先に、調査に乗り出すミ  
ーハーな二人のこと。

いざとなつては自分も含め、二人と同じ軽音部の先輩である秋山澪  
や琴吹紬では、セーフティーをかけられないだろう。

「あと、梓も気をつけろよ。人間だろうが怪人だろうが、女性を狙

ってるってことに変わりはないんだからな」

「あ、はい。勿論です」

梓は頷く。

ここ最近、別世界のライダー……逆鬼の到来があったものの、基本的に平和な日々が続いていた。だからといって、世間から物騒な話が消えたわけではない。普段から用心するのは大切だ。

「……まあそうは言っても、俺と一緒にいるうちくらいは安心しとけよ。絶対守ってやるから」

「！」

何気ないクロノの言葉に、梓はバツと顔を逸らした。

「？ 梓、どうした？」

「……不意打ちは卑怯です」

「えっ？」

「な、なんでもありません！」

しゃーっ、という猫のような擬音まで聞こえそうな研磨で、梓は声を張り上げた。

さりげなく頬が赤くなっているのは、決して怒りによる興奮ではないだろう。

(なんか怒らせるようなことしたか……?)

一応、梓と付き合っているクロノとしては、当たり前なことを言うたに過ぎないのだが。

疑問符を浮かべつつ、クロノはやや早足になった梓に追いつこうと足を動かす。

と

「くう~~~~るお~~~~のお~~~~!!」

「わっ!?!」

「きゃっ!?!」

急に二人の視界に現れた白い影。  
クロノは動悸を抑えながら言う。

「な、何だよキバーラ。驚かすなよ」

「むっ、なによ。相棒の登場にケチつける気？　クロノもぶてぶてしくなつたもんね」

「……その相棒に、謂われのない非難をぶつけるお前の方が、よっぽどぶてぶてしいと思うけどな」

そこはしっかり指摘するクロノだった。

この蝙蝠は、キバツト族のキバーラ。以前、行き倒れていたところをクロノに拾われ、桜井家にこっそり居候中。

次元を超えて現れる怪人と戦うため、クロノに『仮面ライダーキバ・レプリカフォーム』の力を与える存在でもある。

「キバーラさん、そんなに急いでどうかしたんですか？」

「どうもどうも……って」

問いかける梓を見て、キバーラが「しまった」と顔を曇らせる。

「あっちゃあ。梓ちゃんも一緒だったのね……」

「なんだよ、梓がいちゃマズいのか？」

「マズいっていつかなんというか……ああ、面倒くさいわね！」

ちよつと慌てた様子でキバーラは言う。

「クロノ、次元の歪みよ、しかも今回はかなりデカいやつ！」

「何？ わかった、案内してくれ。場所は近いのか？」

「近いも何も」

三人の間を、一迅の風が吹き抜ける。

「場所は今ここよ！」

突如空間が歪み、銀色のオーロラがクロノ達の眼前に現れる。

次元の歪み　それは、本来怪人のいないはずだったこの世界と、別の世界を繋ぐ架け橋。

クロノにとっては、倒すべき敵の顕現を告げる合図。

「梓、下がってる」

「は、はい」

クロノは警戒心を露わにしながら、梓を庇うように前に立つ。  
やがてオーロラの向こうから現れた影は

「……ホウ、これはこれは。予期せぬ邂逅だな」

身体の意匠などは、植物に近い。  
しかし頭には、その生々しいデザインとはあまりに不釣り合いな長い耳。胸部には？から？？までの数字と針という、時計のような紋様が刻まれていた。

キバーラが赤い目を丸くする。

「そんな……『レジエンドルガ』!？」

「レジェンドルガ？ ファンガイアじゃないのか？」

「……ファンガイアと同じキバの世界の怪人よ。伝説の獣をモチーフにしている、過去にファンガイアの覇権争いに敗れて封印されたはずなんだけど……」

「流石。博識だな、キバット族は」

異形 クロックラビットレジェンドルガは、不気味な表情を歪めて笑う。

「この世界に『キバを名乗る者』がいることは耳にしていたが……成る程、キバット族の差し金だったわけだ」

「いろいろと事情通みたいだな……おい、お前なのか？ 最近女性を襲ってるのは」

「ふむ。キバとの接触は極力避けたかったのだが……まあ、隠し立てしたところで無意味か」

左様。とクロックラビットレジェンドルガは肯定する。

「もつとも、人間を襲うのはあくまで、帰還用のエネルギーを得るのためのだがな。そうそう長居はせん。生じる次元の歪みも微々たるものだ」

「そうか……次元の歪みが小さすぎたせいで、私も今まで感知仕切れなかったってわけね」

「その通り。私の目的は『実験』に過ぎぬ」

「実験？ なんの話だ？」

「さて、な」

クロノの問いには答えず、クロックラビットレジェンドルガは不気味な笑みを浮かべたままだ。

「いずれにせよ、キバと戦うのは私の望むところではない。今回は帰還用のエネルギーは元の世界で集めておいたからな。ここで失礼させて貰おう」

「逃がすと思うか？」

クロノは眼光鋭くクロックラビットレジェンドルガを睨む。実験だかなんだか知らないが、クロノにとっては何の罪もない人を傷つける敵。

ここで逃がす謂われはない。

しかし、



「残念だが」

クロックラビットレジェンドルガは胸部にある針の刻印に触れた。すると、刻印は独りでに動き出し、凄まじい勢いで回転を始める。

「私は倒されるわけにはいかんのだよ」

世界を繋ぐオーロラが、再びクロックラビットレジェンドルガの背後に現れる。

それに飲み込まれる形で、クロックラビットレジェンドルガの姿も消えていこうとしていた。

「なっ、おい待て！」

「クロノさん!?!」

「ちょっとクロノ！梓ちゃん！巻き込まれちゃうわよ！」

駆け出すクロノと、それを追い掛ける梓にキバーラ。

三人を呑み込んだオーロラは、霞のごとくこの世界から消え果てた

【BLAZING・BLOODの世界】

ある日の午後。カフェ『マル・ダムール』。  
真夏日ながら、しかしクーラーの効いた店内は、絶好の避暑地となっていた。

「平和だな」

「平和だよ」

「平和ですね」

「……」

奏夜、静香、悠二、シヤナ。

もはやお馴染みとなったメンバー四人は、クーラーの効いた店内でゆったりとコーヒーを啜っていた（シヤナのみ砂糖大盛）。

非日常に片足を突っ込んだ四人だが、このだらけきつた状態にも一応正当性はある。

ダンダリオン、レティシア、ヴィルヘルミナ・カルメル、ディネの来襲。ここ数日のあまりにハードなスケジュールの数々。

まだ一般人のくくりにいる静香はともかく、他五人は休息を取る暇すらなかったのだ。

名護に至っては、前回の戦いで片腕を痛めており、未だにギブスが取れない生活を送っている。

近頃の連戦は、使命に生きるシャナやアラストールでさえ、休息の必要性を感じるレベルにまで達していた。

「そう言えば名護さんですけど、腕の具合はどうだったんですか？」

なんとなしに悠二が聞く。

奏夜はコーヒーを啜りながら、

「医者によれば大したことないってさ。今は恵さんと由利ちゃんを連れて、家族旅行の真っ最中」

「羨ましいよね」。家族旅行。私も奏夜とどこか旅行に行きたいな  
「

「ああ、そうだな。いつか時間作って、二人で一緒に行こう」

ラブラブムード満開の二人に、悠二はやれやれと首を振り、シャナは不機嫌そうに顔をしかめた。

紅奏夜に恋人ができた。

その電撃ニユースは彼を知る各方面へと行き届いていた。

その相手の名は野村静香。

シヤナや悠二にとっては、花火大会で知り合った奏夜の友人　と  
いう認識しかなかったが、とにかくそういうことらしい。

(しかし、あの先生に好きな人ができるなんてなあ……)

悠二はまだちょっと信じられずにいた。

今までの付き合いから、奏夜はどうも恋愛事から距離を置いている  
ようなイメージがあった。本人は「色々あって付き合いだした」な  
んてあっさり流しているけれど、悠二としてはやや納得がいかない。

ただ、昔からの知り合いだと言うし、その延長から付き合い出した  
という可能性もある。

なにせよ、悠二としては素直に「おめでとつございます」の一言  
を送るだけだ。

「ただですね、先生に静香さん」

『？』

二人が同時に首を傾げる。

「第三者がいる時くらい、そのベタベタくつつくの止めて貰えませんか？」

悠二は向かいの机を見ながら溜め息をつく。

そこには恋人の腕になんの羞恥もなく抱き付く静香と、同じく無抵抗にそれを受け入れる奏夜の姿があった。

ぷくつと静香が頬を膨らませる。

「なによつ悠二くん。こんなの恋人同士のスキンシップとしては当たり前じゃない」

「そうそう。大丈夫だ、問題ない」

「大丈夫じゃありません問題です。見てるところがちが恥ずかしくなるんですよ。先生と静香さんのラブラブムード」

シヤナまでもがこくこくと頷いていた。

そう、本当に恥ずかしい。  
奏夜は静香と付き合い出したことで色々と吹っ切れたらしく、たい  
ていこのことで赤面はしなくなった。

それをいいことに、最近では人目もはばからずにイチャつくことも  
多い。

シヤナや悠二にとっては目の毒だったのである。

「おやおや、この程度で恥ずかしがるようではギャルゲはプレイで  
きんぞ悠二くん」

「その辺のジャンルは専門外なので」

「うーん。そんなに気になるなら、悠二ちゃんとシヤナちゃんもくっ  
つき合っちゃったら?」

『ぶほっ!』

シヤナと悠二が同時にむせかえった。

「そ、そっちと一緒にしないでくださいよ! 僕とシヤナはそんな

……」

「んー。でもそっちがそうしてくれればWデートに見えなくもないし、私達と同じ立場に立てば、そんなに気にならなくなると思うけど」

「わ、私はそんなことしない！ 絶え っ対にしない！」

「またまたあ。シヤナちゃんもそんなに硬くならなくてもいいじゃない。そわそわしてるの隠し切れてないよ？」

「！」

静香の言う通り、さっきからシヤナの視線は、悠二の方にチラチラと動いていた。

「ふふふ、耳まで赤くしちゃって。シヤナちゃん可愛いっ！」

「うっ……、うるさいうるさいうるさい！」

ついにシヤナが爆発した。

シヤナの羞恥ポイントを的確に突く静香。恐ろしい子。

「あー、静香。そのへんにしといてやってくれ。シヤナは俺以上に耐性無いから」

さすがに気の毒に思ったのか、ようやく奏夜が止めに入る。話の流れをぶった斬ってくれた奏夜にこっそり感謝しつつ、息を整えながらシヤナは思う。

（奏夜、楽しそう）

奏夜はいつも勝手気ままに生きているように見えて、時々すくなく息苦しそうに見えることがある。

シヤナ達では及びもつかない苦しみを抱え込んでいるような、そんな印象。

（お祭りの時も、そうだった）

ミサゴ祭の日、泣いていたシヤナに語ったあの『ひどい昔話』。あれが奏夜の実体験であることは、想像に難くない。

だとすれば こうして彼が静香と共にあることは、きっと良いことなのだと思う。

静香と一緒にいる奏夜が、心の底から幸せな笑顔を浮かべているから。



「まあ、これくらいでそわそわしない精神力を持った方がいいって  
のには同意するけどな。シヤナ、取り敢えず手繋ぎくらいはやって  
みたらどうだ？」

「……」

恋愛事に抵抗がなくなった分、こういう発言が増えたのは地味に嫌  
だが。

けれど。

(……羨ましいな)

二人を見て、つい思ってしまふ。今度は気付かれないように、そっ  
と悠二を見た。

戦いの中でなら、勢いに任せられるが、普段となるとなかなか触れ  
られない。

でも、いつかは

そんなシヤナが、自分の手に目を落とした時だった。

〜

「!!!」

表情を鋭いものに変え、席から立ち上がる奏夜。

「先生？」

「奏夜？」

驚く悠二と静香に対し、シャナだけは奏夜と同じく、緊張感溢れる風貌を見せる。

「奏夜、ファンガイア？」

「ああ。けど……」

「？ けど、何ですか先生？」

悠二が問うものの、奏夜にも明確な答えは出せなかった。確かにブラッディローズの警告音は、頭の中で鳴り続けている。しかし、実際に感じる気配は、明らかに何か“違う”。具体的な

ことは言えないが、今まで感じてきたファンガイアとはまた異質の空気。

そして もう一つ。

(この感じは……まさか)

覚えのある力の波動。いやしかし、それこそ有り得ないことだ。何故なら今感じているもう一つの気配は“この世界”に存在するはずのない気配なのだから。

「……いずれにしても、行かなきゃいけないか」

考えるよりも行動を優先させた奏夜は、シャナ達がついて来ているかも確認せぬまま、マル・ダムールを飛び出していった。

奏夜がブラッディローズの音色を聞いたのとほぼ同時刻。

御崎市、真南川土手沿いの道。

「んー？」

「？ あの、マージョリーさん、どうかしました？」

怪訝そうに虚空を睨むマージョリーに、それをきよんとした表情で見る吉田　　というなんとも珍しい組み合わせが、そこにはあった。

吉田は普通に家のおつかいで、片手にレジ袋を下げている。  
マージョリーは「最近ヒマだから外でもぶらついてくるわ」とのこと。

その言葉通り、気の向くままに街を徘徊している内にバッテリー吉田と出会い、なんとなく一緒に歩いていたわけだ。

「あー、カズミ。あんたの家ってこの先よね」

「えっ？」

突飛な質問に、吉田は更に混乱した。

「あ、はい。基本的にこの道は必ず通らなきゃいけませんけど……」

「そう。なら、なるべくここでじっとしてた方がいいわね」

マージョリーは吊りあがった目つきのまま、土手を見下ろした。

「久し振りのお客さんだわ」

ガキインツ！

「ひゃっ!？」

突然響く甲高い金属音。肩を跳ね上げながら、吉田はマージョリーの視線の先を追った。

「あれって……!」

雑草の生い茂る広い河原。そこには、三人分の人影。自分と同じくらいの年頃で、黒髪をツインテールにした小柄な女の子。

時計を模した刻印を刻む、ウサギの怪物。

そして 蝙蝠の仮面と灰色の甲冑を身に付け、ウサギの怪物と戦う戦士。

「先、生？」

「違うわよ」

しれっと否定するマージョリー。だが、吉田がそう言うのも尤もだった。

鎧が灰色、その両手に携えた武器は剣とギターという違いこそあったが、それ以外の特徴は、あまりに奏夜のキバと酷似していたからだ。

「けど、私もあんなキバ見たことないわね。形態変えたわけでもなさそうだし」

「ってかそもそも力の質からして違うぜ。魔皇力の出力も兄ちゃんのキバに比べてだいぶ少ねえみてーだし」

肩から下げた本『グリモア』から火が吹き出し、マルコシアスがその意志を表出させる。

突然現れた謎のキバ。その出現に吉田ほどではないが、マージョリーとマルコシアスのコンビも驚いているらしかった。

「それに、あのウサギみたいなのもちよいと変わり種だぜ？  
ファンガイアとは魔王力の波長が微妙に違うしな、ヒツヒ」

「ふん、まあいいわ。どつちにしろ、退屈しのぎが向こうからやってきてくれたんだしね。カズミ、死にたくなかったらここから動かないようにしなさい。“封絶”展開してないから怪我しても治せないわよ」

「は、はい！」

吉田が頷いたのを確認して、マージョリーはグリモアから付箋紙を引き抜いた。

「さーて、派手に行きましょうか！」

「ヒューッヒュー、暴れるぜえ！」

物語が、重なる。

### 第三十話・スパイラルフェイト/薄明のキバ・Aパート（後書き）

いよいよやってきました。『けいおん！仮面のヴァイオリン弾き』とのコラボレーションストーリーです！

この場を借りまして闇丸・EXE先生、コラボを受諾して戴き本当にありがとうございますm（＿）＿m

・コラボ元の主人公にして、仮面ライダーキバ・レプリカフォームである桜井黒乃くん。努力と機転によって己の限界をブチ破る、一条が知る限り、トップクラスに魅力的なキャラクターです。

加えてとってもよい子。そして彼のよい子さつぱりを見る度に思うわけです……奏夜、お前もクロノを見習えと（笑）

・レジエンドルがついに登場。モチーフは勿論、アリスの時計ウサギです。

それと感想欄にて質問がありました。『魔界城』編もちゃんとやりますのでご心配なく。

・リア充爆発しろと呟きたくなる奏夜と静香（笑）まあ、これまでを考えたら仕方ないんですが。

未だ出会わない二人の主人公。次回は早くもWキバが並び立ちます。コラボ企画、次なる展開をお楽しみに！

プロフィール

サクライククロノ  
桜井黒乃



『TETRA - FANG』ヴァイオリンパート担当

身長154cm

体重47kg

色黒 黒髪ツンツン頭

高校二年生

外見イメージ・ヴァニタス（キングダムハーツ・バースバイスリープ）

つい最近まで普通の高校生だったが、居候中の謎のコウモリ、キバ  
ーラから『薄明のキバ』こと『仮面ライダーキバ・レプリカフォー  
ム』の鎧を託され、目下、次元の歪みから現れる怪人と戦っている。

7人＋1匹家族。幼いころより体格が標準以下で、喧嘩も弱く、そ  
れが原因で常に弱い立場に居た。

小学校高学年の頃、とある人物との出会いがキツカケで体を鍛え始  
め、中学校中頃にはある程度喧嘩も強くなり、性格もより逞しいも  
のに成長していた。

あくまで人間の範疇を出ない戦闘能力ではあるものの、機転や応用  
力はそれを補って余りあるものがある。以前奏夜のキバと戦った際  
には、フェッスルの音色を記憶し、それを奏でることでバツシャー  
マグナムを奪い取るという離れ技も披露した。

父親の熱意が仇となり、警官が嫌い。

今でも体を鍛え、牛乳も飲んでいのに、なぜか体格が貧相で悩ん  
でいる。

ヴァイオリンは、クセやアクが強いものの好評。早弾きと、クラシ  
ック、アニソンの即興アレンジが得意。

余談だが女装が似合う。



第三十話・スパイラルフェイト／薄明のキバ・Bパート

「がっ！」

「いたっ！」

「きゃぷっ！」

次元移動に巻き込まれた末に、灰色のオーロラから放り出されたクロノ、梓、キバーラ。

顔を挙げたクロノが辺りを見渡すと、どうやらどこかの河原らしい。

（見覚えねー街並みだな……今度はどんな世界に来ちまったんだ？）

だが判断材料が少ない以上、答えはでない。

クロノは即座に頭を切り替える。今やるべきは

「なかなかしつこいな。異世界のキバよ」

クロツクラビットレジェンドルガは、呆れ半分感心半分といった様子で、河川敷に立っていた。

「いくら異世界の住人だろうが、お前が人を獲物にしてる以上、放つてなんかおけるかよ」

「ふん。どの世界でも人間というのは理解し難い生き物だな。

まあいい、ここまで着いてこられた以上、今後私の周りをつろつかれるのも面倒だ。

ここで始末させて貰おう」

時計の紋様が不気味に輝き、解放された魔皇力が波動となって吹き出した。

クロノは緊張を強め、後ろで威圧感に震える梓を下がらせる。

「梓、離れてろよ。結構派手な戦いになりそうだ」

「は、はい……」

大人しく頷く梓。

この状況で自分が足手まといになることは、わかりきっていた。

「……クロノさん、キバーラさん、気をつけて下さいね。怪我したら嫌ですよ」

「善処する」

「ええ、任せときなさい！」

梓の激励を受けつつ、クロノは徐に手を翳した。

「キバーラ、頼む！」

「オツケイ　　カプツ！」

キバーラが小さな口でその手に噛みつき、アクティブフォースを注入。クロノの頬にステンドグラスの紋章が浮かび上がり、腰に巻かれた鎖は灰色のベルトに変わった。

『変身！』

二人が同時に叫ぶと、キバーラがベルトに逆様の状態で止まる。発生したウェーブと共に光がクロノを包み込み、その身に魔の甲冑を装着させる。

鎧の基本色が灰色。キバ・ペルソナの色もコバルトブルーという違いこそあれど、それは紛れもなくキバの鎧。

クロノの変身する『仮面ライダーキバ・レプリカフォーム』だ。

「行くぜ！」

低純度魔皇石から削り出された長剣『トワイライト』と、響鬼の世界から渡り来たギター状の武器『音撃弦』を両手に携え、キバRFは戦いへと赴く。

「得物は刀剣と弦楽器か……面白い」

クロックラビットレジエンドルガが正面に両手を翳すと、細身の双剣が二本召還された。

こちらも得物は二本のようだ。

「ふっ……！」

軸足が緊張し、バネでも仕込んでいるようなスピードで、クロックラビットレジエンドルガは間合いを詰める。

キバRFとの距離は、1メートルあるかないかの至近距離。

しかし、振るわれた双剣はしっかりと、トワイライトと音撃弦が阻んでいた。

「ホウ、今を防ぐとはなかなか……。大抵の敵はこの初手で地に付しているのだがな」

「はっ、生憎と、速い動きには慣れてるんだよ」

「ふむ。ならばこれならどうだ!」

火花散る双剣を退かせ、クロックラビッドレジェンドルガは再び距離を取る。そのスピードさえも素早い。

「やっぱり師匠や矢車さん達と似たタイプだな……」

「クロノ、いつも以上に気を締めなきゃダメよ。あの脚の筋力から生み出される跳躍力、馬鹿にできないわ」

「ああ、わかってる」

神経を張り詰めるキバRF。

その前で、クロックラビッドレジェンドルガの腹に刻まれた時計の紋章。その針が右回りに回り始める。

「UPP!」

突如、クロックラビッドレジェンドルガの姿が消える。

瞬間移動の類ではない。そんなものがあれば初手で勝負がついてい

とすれば。

「やっぱり高速移動か！」

残像すらもロクに捉えられない俊敏な動き。しかし、キバRFは焦っていないかった。

神速を誇る真紅の戦士、仮面ライダーカブト 天道総司を師匠に持ち、同じく驚異的な加速力を持つ仮面ライダーキックホッパー、パンチホッパー 地獄兄弟との戦闘経験を経たキバRFにとって、これは十分に対処可能な状況だ。

「キバーラ、アレでいくぞ。超音波頼む！」

「ええ！ まっかせなさい」

キバは右腰に装着しておいたコアパーツ・音撃震を音撃弦の中央部にジョイント。

音撃弦の後部が展開し、剣撃モードから清めの音を発生用の音撃モードへと変形する。

『音撃斬・灰刃演舞！』

二人の声が重なり、キバRFの指先が張られた弦を掻き鳴らし始める。



ギヤギヤギヤギヤイイイイインツ！！

河原に響き渡る甲高い音色。

傍から見れば、何の意味もないソロ演奏だろう。

しかし侮るなかれ。これはれっきとした、キバRFの持つ高速移動破りである。

(なんだ？ いきなり楽器を弾き鳴らし始めて、何を狙っている？)

高速の世界の中で考えを巡らせるクロックラビットレジェンドルガだが、いかんせんキバRFに関しては情報が少ない。考えたところでどうなるものでもなかった。

(ふっ、面白い。誘いに乗ってやろう！)

クロックラビットレジェンドルガは狙いを定め、高速の弾丸となつてキバRFへと双剣を突き立てんとする。誘いに乗るつもりとは言つたが、彼の動作に手抜きはない。一撃で首を取る気迫で、キバRFへと迫る。

普通なら感知不可なスピード。

しかし、

「！！　そこだッ！」

キバRFは手を止め、音撃弦のネックを握り締めると、迫り来るク  
ロックラビットレジエンドルガ目掛け、カー杯スイングした。

「ぬっ！？」

慌てて双剣をクロスさせて受け止めるが、全力で振り抜かれた音撃  
弦に、強度で劣る細身の双剣が耐えられるはずもなく、二本の刀身  
には細かなヒビが入った。

「捕まえたぜ……！！」

「驚いたな……何故私のスピードについてこられる？」

「ついていったわけじゃないさ。ただ、ついていけなくても、攻撃  
位置が分かってりゃ対応できるんだよ」

「私とクロノのタッグ、舐めないでよね！」

　コウモリの特徴を持つキバーラは、超音波で周囲を感知し、敵  
の位置を把握することができる。

しかし、その出力は低く、長時間は保たない。

そこで登場するのが『音撃斬・灰刃演舞』だ。  
音撃で超音波の力を増幅させ、より広範囲且つ明瞭な探知が可能となる。

クロックラビットレジエンドルガの超高速は不規則に見えがちだが、  
どれだけ早く動こうが『キバRFに攻撃するために、必ず近付いてくる』ことだけは変わらない。

予め攻撃ポイントさえ把握しておけば タイミングを合わせたの  
カウンターや防御は十分に狙えるのだ。

「キバーラ、キメるぞー！」

「了解っ！ ウェイクアップー！」

片手で音撃弦で双剣を阻んだまま、もう一方の手で、再びトワイ  
イトを抜くキバRF。

キバーラがベルトから外れ、トワイライトに噛みつくど、剣の魔皇  
力が活性化し、刀身が真紅に染め上げられていく。

『トワイライト……スラッシュー！』

一閃。

横一文字を描く真紅の斬撃『トワイライトスラッシュ』。  
その一撃は遮蔽物である双剣を砕き、クロックラビットレジェンド  
ルガを切り裂く。

「ぐ、おおおお!？」

武器を折られ、身体にも決して浅くない傷を負ったクロックラビット  
レジェンドルガ。  
トワイライトスラッシュのプレッシャーに負け、ずるずると後退し  
ていく。

「やったか？」

「いえ、まだよ！」

キバーラの言う通り、まだ終わりではなかった。

レジェンドルガが傷を押さえつつ、ダメージを感じさせない様子で  
立ち上がったからだ。

「ふっ……能力的に劣っていようと、やはりキバはキバだな。この  
私が無覚を取るとは……」

「お褒めに預かり光栄だが、まだやるつもりか？ その傷じゃ、こ  
自慢のスピードも鈍るぜ」

「笑止。確かに今の一撃は効いたが、この程度の傷では決定打にはならん。それに」

クロックラビットレジェンドルガの時計の刻印が、再び輝いた。

「私が速くなる必要はない。お前が遅くなればよいのだからな」

「？」

怪訝そうにするキバRFをよそに、クロックラビットレジェンドルガの刻印が回り始める。

しかし今度は左回りではない。逆回転だ。

「DOWN!」

宣告と共に、刻印が輝きを放った。

「!!! なっ!?!」

突如、キバRFの身体に莫大な負荷がかかる。先程の見事なカウンターをキメた時のキレはまるでなく、全ての動作が緩慢な動きに変わってしまった。

「こ……れ……は……!!」

身体と同じく鈍重になってしまった口を開きながらも、キバRFの判断力だけは、正常に働いていた。

(ヤバい……!!)

どんなトリックを使っているのか知らないが、今の状況でさっきの超加速を使われたら

キバRFを嘲笑うかのように、クロックラビットレジェンドルガの刻印が右回転に変わる。

「UP!!」

再び超加速。

だがこの状況では、『灰刃演舞』は使えない。どころか、人並みな回避行動さえもとれない。

圧倒的なスピードで放たれる拳撃の嵐が、容赦なくキバRFへと叩き込まれた。

「うああああっ!!」

「クロノさん!!」

梓が悲鳴を挙げたと同時に、キバRFは地に膝をつく。身体の負荷は戻ったものの、ダメージはかなり深い。

誇るように、クロックラビットレジェンドルガは拳を打ち合わせた。

「こつみえて、徒手空拳も得意だね」

「クロノ、大丈夫!？」

「っ……ああ、なんとかな……」

キバーラに向けた声にも覇気がない。トワイライトと音撃斬を構え直す、それもぎこちなく見える。

「ふん、まだ立ち上がるか。ならば徹底的にやらせてもらおうぞ……」  
DOWN!」

がくり、と再びキバRFを襲う負荷。

（くそっ、やっぱりだ。あいつの声がかかると、俺の動きが遅くなる……!）

加速能力と、減速能力 否、時間操作。恐らくはそれがクロック  
ラビットレジエンドルガのスキル。

UPP!」

しかしわかったところで、この状況では打つ手が無い。

ダメージで鈍った身体は灰刃演舞を使う余裕さえなく、クロックラ  
ビットレジエンドルガのラッシュが、キバRFに浴びせられていく。

「ぐっ……っ、のっ!」

「むっ!」



がむしゃらにトワイライトを振るうが、クロックラビットレジエンドルガはすぐさま距離を取り、速度を失った斬撃を回避してしまう。

「はあっ、はあっ……キバーラ、一旦退くぞ……！」

「……ええ、そうね。灰刃演舞も、こっちの動作が遅くなったら使えないし」

灰刃演舞は、反撃あつてこそその技。探知できただけでは意味がない。

「このままじゃ勝ち目は薄い。今は逃げて、何か手を考える！」

敵前逃亡。

しかしキバRFはそれを恥じてはいない。

むしろ、この不利な状況下で戦いを挑み、むざむざ命を捨てることこそ恥。

……なにより、今は梓もいる。

自分が死んだら、一体誰が梓を守るといふのだ。

個人的な感情に流されず、勝つために、守るために、逃げの一手を打つことができる冷静な判断力。

クロノの強みはそこだ。

「音撃斬……灰刃演舞!!」

音撃弦を再び音撃モードにチェンジし、張られた弦をかき鳴らすキバRF。

しかし、今度は探知のためではない。

「はあっ!!」

下に突き立てられたギター先端部から、清めの音が大地を伝い、派手な爆発を引き起こした。爆発は粉塵を巻き上げ、クロックラビットレジェンドルガの視界を奪う。

「ぬっ、目眩ましか!」

「クロノ、今!」

「ああ!」

キバーラの超音波による感知（音撃が無い為長くは保たないが、それで十分だった）で粉塵の中を進み、

「梓！ ちょっと我慢しろよ！」

「ふえ？ にやつ！？」

全力で走りながらキバRFは、手早く梓の背中と足のふともも付近を抱き上げる。

所謂お姫様だっこの体勢。

「なっ！？ い、いいいきなりにするんですかぁ！？ 降ろしてください！」

「おいこら暴れるな！ 後で文句は聞くから今はおとなしくしてろ！」

ぱたぱたと手足を動かす梓を宥める。

キバRFとしては、一番手っ取り早い運び方のつもりだったのだが、やはり梓としては軽く羞恥プレイらしい。だがこれで

「甘いな」

「！……」

クロックラビットレジェンドルガの声が響き、粉塵の中から四枚のカードが投擲された。

それは四種類のトランプのA。カードはキバRFの行く手を阻むかのように浮かび上がり、輝きを放つ。

やがて光は収束し、4つの影を象った。

クロックラビットレジェンドルガと同じく、ウサギをモチーフとした怪物。

違うのは一回り小柄で、それぞれの額にスペード、ダイヤ、ハート、クラブのエンプレムが刻まれていること。

「これは……！」

「分身体ね……」

「……明察だ」

ようやく土埃が晴れ、クロックラビットレジェンドルガが再び姿を現す。

「お前のような若者にありがちな蛮勇に走らず、冷静に一時撤退を選択したのは評価に値する……が」

惜しかったな。とクロックラビットレジエンドルガは口角を吊り上げた。

キバRFは無言で、梓を降ろす。

「梓、俺から絶対に離れるなよ」

「で、でもクロノさん。これじゃあ……」

「いいから」

片手で梓を抱き寄せ、もう一方の手でトワイライトを構える。

トランプラビット達は二人を囲むように立ち、その後ろにはクロックラビットレジエンドルガ。

(……キバーラ、フューザー呼べるか?)

(やってみるわ。けど、それでもやっぱり多勢に無勢ね……)

仮面の下で冷や汗が伝う。

戦況は限りなく絶望的だ。しかしこうなってしまった以上、せめて梓だけでも逃がさなければ

張り詰めたの沈黙。

誰もが口を開かない中で、クロックラビットレジェンドルガは静かに指示を下す。

「やれ」

トランプラビット達が雄叫びを挙げ、二人へと襲いかかる。  
キバRFは持てる全てを振り絞り、トワイライトを振るう

『荒ぶる嵐。 軋む雨戸に風穴二つ』

『聞こえる音色は?』

『蛙の歌に、風切り音!』

戦場に似つかわしくない陽気な歌 屠殺の即興詩。

発動した自在式は四振りの炎剣に代わり、トランプラビット達へと飛来する。

『ギイツー!!』

群青色の爆炎に吹き飛ばされるトランプラビット達。

「青い、炎……?」

「な、なにがどうなっただんですか……?」

突然のことに唾然とするキバRF。梓、キバーラも同様だ。

結果的に命を救われたキバRFと梓の前に、『弔詞の詠み手』マー  
ジヨリー・ドーが舞い降りる。

「ん〜。火力、もうちょっと強くて良かったかしらね……まあい  
つか。余計なお世話だったかしら?」

「……い、いや」

動揺しながらも、キバRFは言う。

「ありがとう、助かった」

『ヒツヒツヒ! 同じキバでも、こっちの兄ちゃんはずいぶんと素  
直なもんだなあ!』

「わっ！　本が喋った！？」

グリモアから漏れるマルコシアスの声に　梓は飛び上がる。  
しかし、キバRFは別の感想を抱いていた。

(……炎を武器に戦って、しかも喋る道具？)

脳裏に引つかかる事象の数々。  
だが、その違和感を確かめるよりも早く、河川敷の彼方から、静寂を切り裂く轟音が近づいてくる。

「噂をすればなんとやら、ね」

真紅の禍々しいデザインのバイクに跨る二人の戦士、そして、その傍らを併走する紅蓮の光。

「あれは……！」

見覚えがあった。  
いや、ない筈がない。梓とキバラーもまた、覚えのある姿に声を挙げ、そして悟る。



「ここが何の世界なのか。」

「颯爽登場っ！！！」

「燃えろおっ！！！」

「食らえっ！！！」

バイクから飛び上がったキバ・ガルルフォームのガルルセイバー。

『炎髪灼眼の討ち手』シャナの、紅蓮の炎を纏う大太刀『贄殿遮那』。

イクサ・セーブモードの携えた二刀剣、『吸血鬼』と『海神刃』。

三位一体の斬撃が、クロックラビットレジェンドルガに牙を剥いた。

「っ、UP！！！」

すんでのところで加速能力を発動され、斬撃は空振りに終わる。しかしその間に、三人はキバRFと梓を庇うように、クロックラビットレンジンドルガ、そしてトランプラビット達と対峙した。

タイミングの良さに、マージョリーが鼻を鳴らす。

「アンタ達にしちゃ早かつわね。ってかユージ。アンタまで何やってんの？ それケイスケのじゃない」

イクサは仮面の下で苦笑いし、

「名護さんが休暇取る前に借りてたんですよ。『私の怪我が治るまでキミに預けとく』って」

『ヒヤハハハ！ ずいぶん違和感あんなあオイ！』

「ちよっとそこ。五月蠅い」

シヤナは不機嫌そうにしながらも、敵から瞳を逸らさない。

「奏夜、あいつ何？ ファンガイアに似てるけど、少し違う」

「ああ。ありゃレンジンドルガだ。13魔族の一つで、とっくの昔に絶滅した筈なんだが……」

「……ふん、成り上がり者のファンガイア風情が。知ったような口を」

クロツクラビットレジエンドルガは不快感を露わにする。

無言で両者はにらみ合うが、ややあって、クロツクラビットレジエンドルガは静かにトランプラビット達を札に戻した。

「はっ、なんの真似だよ。これからだつてのに逃げるつもりか？」

「安い挑発はやめろ、キバ。この戦力差で戦いを挑むほど、私は愚か者ではない」

さっきまでキバRFと激闘を繰り広げていたとは思えない、実にあっさりした口調だった。

「それに、私はまだ、転生の輪廻に沈むわけにはいかないのではな」

短く「UP」と呟き、クロツクラビットレジエンドルガは悠々と戦線離脱していった。

「あっ、逃げた！」

「アラストール、追うべき？」

『やめておけシャナ。敵の能力は未知数、深追いは避けるべきだ』

「そうそう、ほっとけほっとけ。」

それに、奴を追うよりもまず、怪我人の手当てが先だろ？」

ベルトからキバットが外れ、キバGFの変身が解除される。  
セミロングの茶髪に、だらしなく着こなしたスーツ姿が、キバRFの目に飛び込んでくる。

「懐かしい音楽が聞こえてきたから、もしかしてとは思ってたが…  
…やっぱりお前だったか。」

今日はどうした、ピクニックか？」

「……ウサギにボコられるピクニックってどんなピクニックだよ」

につ、と皮肉っぽい笑いかける姿に気が抜け、クロノもキバRFの変身を解く。

「けっこー久しぶりだな。元気にしてたか、クロノ？」

「ああ、久しぶり。見ての通り、この有り様だよ。奏夜」

かつて、自分達の世界に迷い込んだキバ　　紅奏夜に笑い返しながら、クロノは差し出された手を取った。

## ライダーデータ

『けいおん！仮面のヴァイオリン弾き』より抜粋。

仮面ライダーキバ・レプリカフォーム/桜井黒乃

身長・200cm

体重・98kg

パンチ力・3t

キック力・5t

ジャンプ力・40m

走力・100mを6秒

ファンガイアの王室技巧匠・ナイト&ポーンによって造られたキバの鎧のレプリカ。

通称『薄明のキバ』

オリジナルのキバとは異なり、人間でもある程度の身体能力があればノーリスクで装着が可能。

しかしその分基礎スペックは低く、『黄金のキバ』キバフォームのほぼ半分強程度。

基本カラーは灰色、複眼の色はコバルトブルーのキバフォームだが、両肩、右足のカテナはただの飾りで、フェッスルも無い。

キバーラの強化超音波を使って感覚を強化することで、素早い攻撃や、死角からの攻撃にも対抗できる。

フェッスルが無いためアームズモンスターは呼べないが、武器を奪うことができればフォームチェンジは可能。

その際、鎧の形状はオリジナルのキバのフォームチェンジ時と同様に变化するが、複眼とボディの色は元通りのコバルトブルーと灰色のまま。

トワイライト

低純度の魔皇石を削り出して造られた、全長130cm・刀身100cmの片刃の剣。

音撃弦

どこかの『響鬼の世界』からバケガニに突き刺さったままやってきた、仮面ライダー裁鬼の武器。剣撃モードの時はそのまま武器として使用する。本来は『閻魔』という名前があるが、クロノ達はそれを知らないため、『音撃弦』と呼んでいる。

### 第三十話・スパイラルフェイト/薄明のキバ・Bパート（後書き）

コラボ編第二話！

・薄明のキバ登場。……なのですが、本編でのクロノを知る方々にとってはやや不満が残る勝敗となってしまったと思われます；（フオローを入れておくと、クロツクラビットレジェンドルガはキバやシヤナでも普通に手こずります）  
特に闇丸先生、申し訳ありません。再戦時にはクロノも必ずや活躍させますので（<|>）

・加速能力、減速能力、分身体作り。結構なチート能力持ちのクロツクラビットレジェンドルガ。  
厳密に言つと、加速能力は自身の時間を速め、減速能力は相手の時間を遅くすることで発動する力です。

再び出会った二人のキバ。今回は混合チームに吉田、静香、ヴィルさんを加えての話し合いです。

では、コラボ編三話、お楽しみに！

どうでもいい近況

二話を書き上げた後、遊戯王TF6が9月に出ると知り、TF5を

久々にプレイ。

使用デッキはダークガイアを使ったワンキルデッキ。

一ターン目、相手はモンスターセットと伏せカード一枚で、次のターン。

ドロ―した時点での一条の手札。

マグネットバルキリオン

ラビエル

ダークコーリング

成金ゴブリン

巨大化

サイクロン

ククツ、オイオイ……これじゃあMeの勝ちじゃないか！ わかる人にはわかるネタ



### 第三十話・スパイラルフェイトノ薄明のキバ・Cパート

場所は移って【カフェ・マル・ダムール】。  
マスターに口を効かせて店内を貸し切り、現在では八人＋二匹がテーブルについている。

奏夜、シヤナ、悠二、吉田、マジヨリー、クロノ、梓、キバツト、キバーラ、そしてクロノの手当て要員として呼ばれたヴィルヘルミナである。

「痛っ………!!」

「我慢するのであります。……ふむ、幸い打撲だけで済んだようではありませんな。中野殿、包帯を」

「はい。クロノさん、右手出してください」

梓の指示に大人しく従い、クロノの腕にぐるぐると、拙いながら丁寧な手付きで包帯が巻かれていく。

「さて、手当てはこんなものでありましょう。あとは無理をしないように」

「わかった。ありがとな、だいぶ楽になったよ」

「私からもありがとうございます。カルメルさん」

クロノと梓が感謝する傍ら、ヴィルヘルミナはいつもの無表情だったが、意外にまんざらでもなさそうだった。

しかし、そこで余計なことを言うのが紅奏夜である。

「さすがはヴィルだな。伊達に子持ちじゃなつぎゃっ!!」

「……」

無言で奏夜の足を踏みつけるヴィルヘルミナ。動作に一切の容赦はなかった。

「おまつ、いきなりなにす……っておいやめろさりげなくグリグリするな!」

「当然の報いでありませう」

「んだよー。別に間違っていないだろー。シャナとお前の関係なんて母と娘で固定され……ってわかった。もう言わない。だからそのリボンを仕舞おうか」

空気が変わったのを見て、奏夜は降参の意を示した。

ヴィルヘルミナはジト目で奏夜を見ていたが、ふん、と鼻を鳴らし

て席につく。

クロノは苦笑い気味に、

「奏夜も相変わらずだな」

「どつという意味だよ」

そのままの意味だ。  
相変わらず自由過ぎる。

「奏夜、あんまり他の人の関係をからかっちゃダメだよ」

と、静香が奥から人数分のコーヒーを運んでくる。

「人によっては本当に頭に来ることだってあるんだからね。それくらいのこと、奏夜ならわかるでしょ？」

「……………」

さすがに恋人の言い分は響くものがあるのか、奏夜は身じろぐ。

(…………… 奏夜(先生)のあしらい方、あとで教えて貰おう)

その時確かに、シャナ、悠二、吉田、マーシヨリー、ヴィルヘルミナの思考がシンクロした。

「はい。クロノくん、梓ちゃん、コーヒー」

「あ、ありがとうございます。えっと……………」

「静香。野村静香よ」

にこつと笑う静香に感謝しながら、二人はコーヒーを啜る。  
クロノ達の世界にも『マル・ダムール』はある……………が、やはり世界は違えど、この味だけは変わりはない

「あ。あとちなみに、奏夜の彼女もやってます。三人ともよろしく」

『ぶほっ！』

さらりと告げられた爆弾発言に、仲良くコーヒを吹き出すクロノと梓。

キバーラも吹き出しこそしなかったが驚いていた。

「か、彼女お？」

「えっ、えっ？ 紅さんの!？」

「なになに!？ 私達の世界から戻ったあと何があったの!？」

取り乱す三人。

奏夜は深々と溜め息をついて、

「静香……俺を困らせて楽しいか？」

「あら、彼氏として、このくらいはスルーできて欲しいんだけどな」

ウインクして、店の奥に戻っていく静香。

しかし、三人の混乱は冷めない。

「ほ、本当なのシヤナちゃん!？」

「……本当よ」

信じられないだろうけど。というような口調でシヤナは頷く。悠二も似たようなトーンで、

「やっぱり、クロノ達も信じられないよね。先生に彼女って」

「いや、信じられないわけじゃねえけど……とにかく驚いたよ。正直、ここまで驚いたの久しぶりってくらいだ」

「え？ そんなに衝撃的なの？ 俺に彼女がいるって事実は」

奏夜は軽くシヨックを受けた様子だったが、クロノ達の動揺ももつともだろう。

僅かな付き合いである三人からも『変な人』とカテゴライズされる奏夜のこと。

そんな人間が、こつもガッツリ恋愛沙汰に手を出すとは思えなかったからだ。

「……まあ、そのあたりの与太話は後にするとして」

気を取り直すように、奏夜は咳払いをする。

「とりあえず、クロノ達に関しては、さっき説明した通りだ」

「えっと、クロノくんは、違う世界から来たキバ……ってことですよね？」

「やれやれ、最近本当に何でもアリね……ま、前例がないわけじゃないけどさ」

吉田とマージヨリーは、割とすんなりと受け入れていた。  
デイケイド　門矢土のことがあったのも大きいだろう。

「異世界……まあ、信じられない話ではないでありますな」

「？　意外にすんなり信じるな。ヴィル」

今回、一番説得が難しいそうだったのが、ヴィルヘルミナだったのだが。

「紅世も異世界には違いがないのだから、そう有り得ない話でもないのであります」

「あー、そりゃそーか」

奏夜は適当に納得したが、ヴィルヘルミナとしては、紅世のことを差し引いても、それほど現実味のない話ではなかった。

(キットやレンの戦う『ベントラ』も、異世界でありましたからな)

御崎市に来る前、アメリカで出会った二人の顔を思い出しながら、  
ヴィルヘルミナは向かいに座るクロノと梓を見る。

「ちゃんとした自己紹介が、まだでありましたな。私は『万条の仕手』ヴィルヘルミナ・カルメル。そしてこっちは“夢幻の冠帯”ティアマトーであります」

「初見」

ティアマトーの意思を表出するヘッドドレスが僅かに揺れた。  
流れるように、クロノ達と初対面だったメンバーが挨拶をしていく。

「マージョリー・ドーよ。んで、こっちがマルコシアス」

「ヒッヒッヒ！　よろしくなあ！」

ハイテンションな声と共に、群青色の炎がグリモアから漏れた。

(やっぱり、この二人もフレイムヘイズなのか)

(シヤナちゃんとは、だいぶ違う雰囲気だなあ……)



(こうして見ると、やっぱりシャナちゃんはちびっこいわね。フレ  
イムヘイズとしては珍しいのかしら?)

同じテーブルに座るシャナと比較して、クロノ達はそう思った(さ  
りげなくキバーラが失礼な判断を下していたが)。

まあ、人間が十人十色であるように、フレイムヘイズもまた千差万  
別であることは、当たり前と言えば当たり前なのだろうけれど。

そして最後に、悠二の右隣にいる少女が、軽く会釈した。

「あ、私は、吉田一美。その、よろしく」

「ああ、よろしく……。……。?」

クロノが黙り、梓はふと首を傾げる。

吉田一美。はて、どこかで聞いたような……。

『……………あっ』

同時に思い出した。

そうだ。クロノは奏夜から、梓はシャナから名前だけ聞いていた。

(そっか。この子が……………)

(シャナちゃんと同じで……悠二くんを好きな子)

見た目からも大人しいのがわかる雰囲気。  
活動的なシャナとは正反対の印象を受ける。

「……？ あ、あの、私がおか……」

「！ ああ、いや……」

「な、何でもないです！」

吉田を凝視していたことに気づき、クロノと梓は慌てて自身の自己紹介を済ませる。

「俺はクロノ。桜井黒乃だ。今後ともよろしく」

「中野梓です。はじめまして！」

「キバーラよ。まあ、この世界にはこの世界の私がいるだろうから、知ってるとは思うけど」

本当に簡単な挨拶ではあったものの、特に問題もなく話は進んだ。

「さて、と。面識ない連中との自己紹介も済んだところだし、ここからは本題だな」

奏夜の纏う空気が真剣味を帯びた。

それに伴い、テーブルにつく全員にも、その雰囲気は伝播していく。

「まずは情報を整理しようか。

今回の敵はレジエンドルガ、クロノとの戦いを見る限り、時間を操る能力。そして次元を渡る力を持っている。

その目的は人間のライフエナジー摂取。そして『実験』。こっちはまだ詳細不明だ」

「『実験』……私達の世界からクロノの世界に渡る実験、ってこと？」

とりあえず、シャナが思いついたままを答える。

「私達の目の届かない場所でライフエナジーを集める為に、クロノの世界へ渡ったとか……」

「いや、多分それはないと思うぜ。シャナ」

クロノが首を振った。

「あいつ、『人間を襲うのはあくまで、帰還用のエネルギーを得る

為』って言うってたんだよ。確証はないけど、そこまでライフエナジーを重視してるようには見えなかった」

「……あいつにとって、ライフエナジーを集めるのは“仕方なく”ってこと？」

「ああ。どっちかって言えば“世界を渡ることそのもの”に意味があるって感じだったな」

「世界を渡ることそのものが目的、か……言い得て妙だな」

奏夜が顎に手を当てる。

「レジエンドルガがなんで復活したのかも、そのあたりに関係があるのかな……？」

「奏夜は何か知らないのか？ あのレジエンドルガってヤツについて」

「うんにゃ。ご期待に沿えないようで悪いが、俺もそこまで詳しくはないよ。今持ってる知識だって、キバットからの受け売りだ」

奏夜の肩に止まるキバットがうんうんと頷く。

「いくら博識な俺様でも、さすがに何百年と昔の絶滅種族について

まではな……悪いクロノ。役に立てなくてよ」

「ああ、いや、キバットを責めてるわけじゃないって」

とは言うものの、これだけの情報では何とも言えない。

しかし、今回の事件は、二つの世界を巻き込むレベルにまで達している。

これは確かなこと。

(何かよくないことを考えているのだけは、間違いないだろうな)

と、そんなクロノの思考を読み取ったかのように、「って言うかさ」とマージョリーが言う。

3404

「向こうの目的なんて、今は知る必要ないでしょーよ。あのファンガイアもどきだかがキナ臭い動きしてんのは事実なんだし、とつと潰しちやええば済む話じゃない」

「ヒツヒツ、そーそー。そんなに目的が気になんなら、潰した後でゆっくり締め上げりゃいいわけだしなあ！」

「同感でありますな。今は被害を防ぐことを第一に考えるべきであります」

「駆除優先」

「またお前らは……」

この合理性最優先チーム共め。

心の中でばやく奏夜、だが、四人の意見にも一理ある。被害を少なくするのに越したことはない。

当面はレジエンドルガの目的云々よりも、事件の早期決着を目指すべきだろう。

「クロノ、中野、キバーラ、多分三人にも手伝って貰うことが出てくと思う。悪いが手を貸してくれ」

「ああ、もちろん」

一も二もなく、クロノは同意した。梓とキバーラにも、同じ表情が見て取れる。

「ほとんど俺達が巻き込んだようなもんだしな。奏夜達と一緒に戦えるなら、願ってもない話だ」

「よっしや」

奏夜が手を伸ばし、クロノもその手を握り返す。

「じゃあ、改めてよろしくな。クロノ」

「こっちこそ、よろしく奏夜」

「あ。先生」

「なんだ悠二。このまま綺麗に纏めて次話に行けそうだったのに」

「変なクリエイター精神を見せないでくださいよ」

ツッコむべき部分にはしっかりツッコんで、悠二は頭に降って湧いた問題を口にする。

「クロノと中野さんとキバーラ、どこで寝泊まりするんですか？」

「あ」

そうなのだ。

デイケイドのような特例を除き、偶発的に生まれたオーロラを渡ってきた者が、元の世界に帰還可能になる時間は、大体1日前後。

レジエンドルガに関しては、最悪クロノ達が帰還することになって  
も、奏夜達でなんとか出来るかも知れない。

だがいずれにせよ、最低1日は、クロノ達の衣食住を確保しなければならぬのだ。

「うーん、じゃあ三人とも俺ん家来るか？ そのくらいのスペースはあると思うし」

前回、奏夜と悠二とシヤナが、クロノの世界に渡った時は、クロノの家に厄介になっていたこともある。

奏夜としては、その恩義を返すつもりだったのだが

「待つのであります」

「あん？ なんだヴィル。このナイスアイデアに何か問題でもあるのかね？」

「問題大ありであります。桜井クロノとキバーラに関しては……まあ問題ないでありますよ。しかし、中野殿についてはどうするつもりでありますか」

「どうするって……あ」

奏夜が気付く。

周囲の面々もだ。

不真面目を絵に書いたような男と、頼れる彼氏がいるとはいえ、ごく普通の女子高生である梓が、一つ屋根の下に居るといふシチュエーション……。



『危険過ぎる』

「おいちよつと待てこらそのビックリ人間共」

シヤナ、悠二、アラストール、マージョリー、マルコシアス、ヴェルヘルミナの声が揃う。

「梓、取り敢えず私の家に泊まろう」

「おいシヤナ！　なんでそんな連載初期の頃を彷彿とさせるような冷たい視線を！？」

「まあ、チビジャリン家なら安心か」

「魔物の巣よりかよっぼどな」

「マルコシアス、魔物の巣って何処のことだ！！　俺ん家か？  
俺ん家のこと言ってるのか！？」

「中野殿、ご安心を。私が側にいる限り、何人たりとも貴女に危害は加えさせないのであります」

「絶対防衛」

「てめえこらヴィル！！ お前の場合はもはや俺への悪意しか感じないぞ！！」

全員参加型の悪乗りだった。

と、突然クロノが、妙に深みのある表情で、完全アウェーな奏夜の肩に手を置いた。

「奏夜も大変なんだな、色々……」

「ああっ！ その気遣いが逆にツライぞクロノ！」

珍しく押され気味だったが、しかしここで折れないのが奏夜という男である。

「はあ……ま、中野はそっちが預かるとして……吉田、お前もシヤン家行つてやってくれないか？」

「えっ？」

突然話を振られ、吉田は目を見開く。

「わ、私ですか？」

「ああ、無理か？」

「いえ、別にいいですけど……どうしてです？」

吉田のみならず、一同も同意見だった。

ここで何故、吉田を派遣しようとするのか。

「どうしてって……マトモな料理できねーだろ。ヴィルもシヤナも」

一刀両断だった。

シヤナとヴィルヘルミナの表情が固まり、逆に奏夜にはニヤついた笑みが戻ってくる。

「シヤナはだいぶマシになってきたとはいえ、まだ下手っぴの領域を出ないし、あとヴィルの得意料理はなんだっけ？ サラダ？」

「ま、待つのであります！ 何故それを知っているのですか！」

ヴィルヘルミナは家事全般は基本的に何でもできる。しかし、栄養摂取を必要としないフレイムヘイズの弊害か、料理だけはできない。シヤナの修行時代の頃も、テーブルに並ぶ食品は大体がレトルトや

らインスタントだったりする。

欠点を言い当てられ、焦るヴィルヘルミナだったが、

「あ、マジで作れねーんだ。メイドなら料理の一つくらい作れるようにしとけよな」

「！」

カマをかけられた。

実際は以前に、千草から聞いた『最近カルメルさんにレシピをお譲りしたんですよ』という情報から、適当にアタリをつけただけなのだが。

「てなわけで吉田。年頃の女の子にそんなもん食わせるわけにもいかねーから、お前が代わりに料理作ってやってくれねえか？ 何かしらお礼はするからさ」

「あ、あの紅さん、私もそれなりに料理は出来ますから、そこまで手を回して貰わなくても……」

「……わかりました。そういうことでしたら」

遠慮しようとした梓だったが、吉田は特に迷うこともなく、その提案を受け入れていた。

「一美ちゃん!？」

「中野さん。今日は任せてね、うんと美味しいの作るから」

「……でも、いいの?　一美ちゃんに迷惑がかかるんじゃない?」

「ううん、気にしないで。私の役に立てる時って、こういう時くらいしかないから」

屈託のない笑顔。

梓はなんとなく、この子とは仲良くなれそうな気がした。

「えっと……じゃあ、お言葉甘えさせていただきます」

打ち解けた様子の梓と吉田を満足げに見届けて、奏夜は傍らに立つクロノと悠二の肩に手を回した。

「よし。そんじゃこっちも男同士、盛大に騒ぐとするか!」

「騒ぐ必要はねーと思うんだが……」

「え、ちょ、先生!　なんで僕も泊まる方向で話が纏まってるんですか!」

「お泊まり会は人数多い方が楽しいだろう!　どうせ夏休みなん

だから、お前も一緒に来い！」

「ちょっと！ 男同士って、私を仲間外れにしないでよ〜！」

「やれやれだぜ……」

ガハハハとキャラに合わない豪快な笑い声を挙げながら、奏夜は二人を引つ張つり、キバーラとキバットがその後を追いかけていった。

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD！

「俺も昔はバンド組んでたんだよ」

「やっぱり、どうにもならないことはあんのかな」

「ちょっとは変わるかも知れないし」

「日常の中で笑ってる……私？」

「支えあげられないのは、ツライよね」

「いつかきつと来る。どんな誰にも、戦うべき時が」

【第三十一話・幕間劇／想いのベクトル】

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！

### 第三十話・スパイラルフェイト／薄明のキバ・Cパート（後書き）

闇丸先生並びに読者の皆様、またしても遅くなってすみませんでした；

テストなんて滅びればいい……。

・珍しく奏夜アウエーな展開。クロノ参戦によって、悠二に一任していたツツコミに更なるバリエーションが加わっており、今回の掛け合いは書いていて楽しかったです（笑）

最近は悠二もボケに回るようになりましたから、ツツコミにもボケにも染まらないのが吉田くらいしかいないなっているという……；

・次回の三十一話は4パートに分割予定。

前編2パートは男性陣。後編2パートは女の子勢の様子を描きたいと思っております。

最近気付きましたが、いつの間にか評価点数が10000を越えてました。本当に応援ありがとうございますm(´▽` )m  
まさかこの小説がここまでになるとは……正直かなり予想外でした；

では、また次回！

どうでもいい近況

テイルズオブエクシリアが楽しみ過ぎて困る……さりげなくキバツトとキバーラがメインキャラの声やってるし、ダウンロード称号のスタドラコスがマジで欲しい。内容も重厚なストーリーで好きな部



類。そしてなにより、P.V.のミラが可愛い過ぎてっくらん(ニル)重宝

第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・Aパート（前書き）

「ヴァイオリンが名器になるかどうかの決め手は、そのヴァイオリンに塗るニスにかかっています。ニスは見た目を綺麗にするだけじゃなくて、音の波動を伝えやすくする役割も果たしているんですよ……って、あれ？ キバットさん、このトリビアって確かキバの第十話で……」

中野梓

「キコエナイキコエナイ」

キバットバット三世

### 第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・Aパート

紅邸。

流れで連れられてきた悠二が「着替えとか取ってきます」と一度家に戻っている為、今はこの屋敷にいる“人間”は二人のみ。

しかし、それでも賑やかさが増したことに変わりはない。

「うわぁ……凄いとこに住んでるな。奏夜も」

「あはは、父さんからの相続品なのがカッコつきませんけどネ」

木造の見事な屋敷。

こうしたアンティーク風な建物に馴染みのないクロノとしては、感嘆の声を挙げざるを得ない。

一方で、奏夜としては別に自分が建てたわけではないので照れくさそうにしている。

「ま、せっかく来たんだし、二階の工房も見てみるか？ ちょうど新しいヴァイオリンも作つてるところなんだが」

「えっ、けど、邪魔にならないか？」

「今更遠慮すんなって。お前みたいに音楽のわかるヤツなら、むしろ大歓迎だよ」

「……じゃあ、お言葉に甘えて！」

いつものクールな印象は成りを潜め、少年らしいキラキラした好奇心を放つクロノ。  
「こころへんはまだ子供だなあ、と笑みを浮かべながら、奏夜は彼を二階に導く。」

ちなみに一階の居間では。

「またしても現れたわね、もう一人の私！」

「むっ、またしてもとは失礼な。私にも止むに止まれぬ事情があるの！」

「あー、こころ。キバーラもクロノとこのキバーラも喧嘩すんな」

奏夜の世界のキバーラと、クロノの世界のキバーラを仲裁するキバット。

兄貴としては、違う世界のキバーラだろうが、自分の妹と差はないのである。

そして、そんな兄妹達の様子を眺める竜が“二匹”。

「やれやれ、キバーラさんは仕方ありませんね……」

「キバーラさんらしいと言えばキバーラさんらしいですよ」

「……まあそうなのですが」

タツロットの隣に飛ぶ、もう一匹の灰色の竜。

しかし、ボディが灰色、インペリアルスロットが無いことを除けば、タツロットと瓜二つだった。

「あ、失礼。ご挨拶が遅れました。ワタクシはフューザードラン。  
タツロット様、以後お見知り置きを」

「おや、これはご丁寧にも……！」

執事口調で話す彼の名は魔皇竜・フューザードラン。  
クロノと共に戦うもう一人の仲間で、小型のドラン族『ゴルディ・  
ワイバーン』をベースにした改造モンスターである。  
普段は次元の狭間にいるのだが、先ほどクロノが「せっかく自由に  
出回れるんだから」ということで呼び出しておいたのだ。

「よもやこんなところで『黄金のキバ』のカギを持つドラン族の方  
とお会いできるとは、光栄の至りです」

「そんなあ、畏まらないで下さいよう。同じドラム族同士、仲良くしましょう」

テンション的に温度差のある会話が続くが、希少種であるゴールド・ワイバーン同士。なかなか話が弾むようだった。

そんな和気藹々とした蝙蝠と竜達の会話は、もちろん二階にまで届く。

「なんか下が騒がしいな」

「マスコット達がはしゃいでるんだろ」

特に気にすることもなく、奏夜はクロノを工房に招き入れた。

「我が工房にようこそ」

「おお……！」

家の外観を見た時以上の感動が湧き上がる。そもそもからして、異質な雰囲気を持つ奏夜の家だが、その中でもここは特に雰囲気違っていた。

器材やヴァイオリンの型に囲まれた職人の庭。

ここで作業をする奏夜は、さぞ絵になっっているのだろう。

「ほら、これが今作ってるヴァイオリンだ」

テーブル中央、散らばった製作道具と共に置かれていたヴァイオリンを、クロノに手渡す。

型は既に出来上がっており、あとは色だけという状態。

「最近の作品じゃかなり良く出来た方なんだが、いやいや、まだ理想にはほど遠いよ」

「これで理想形じゃないのか？」

信じられないという風に、手元のヴァイオリンを見やるクロノ。  
ヴァイオリン製造の知識は無いクロノだが、それでも十分ヴァイオリンとして完成しているように見えた。

しかし、奏夜は首を振る。

「全然だよ。俺の出したい型の線が出来てないし、仮に本体が完成したとしても、色の問題が残ってる」

「……そっか。ヴァイオリンはニス塗りも大事だもんな」

流石にそのくらいは知っている。

楽器を覆う艶やかな色。ヴァイオリンの価値は型だけではないのだ。

「高い理想掲げてるんだな、奏夜は」

「そりゃそうさ。アレを越えなきゃならねーんだからな」

奏夜の視線の先には、シヨーケースに収められたヴァイオリンがあった。

（あのヴァイオリン……確か、ブラッディローズだっけ）

前に奏夜が言っていた、彼の父親が作ったという至高のヴァイオリン。

以前弾かせてもらって、クロノもあの楽の異質とも言うべき魅力は知っていた。

あれを超えらなれば、確かに生半可な努力では足りないのだろう。

「まあその反面、お前の方は進歩があったみたいで安心したよ、クロノ」



「え？」

首を傾げるクロノに、奏夜は嬉しそうに笑った。

「随分と心の音楽に磨きがかかったじゃねーか。身体つきも良くなってるし、しっかり鍛錬を積んでるみたいだな」

初めて会った時から、クロノの心の音楽は強い輝きを持っていた。自分達をすぐに受け入れる順応性と協調性、スペック的に劣る鎧ながらも様々な機転により、奏夜のキバをエンペラー使用にまで追い詰めた頭の回転力。

今度の成長を期待するには、十分過ぎるだろう。

「いやいや、若さは力だね。もう一度闘ってみたら、今度こそ俺が負けちまうかもなー」

「……そつでもねーよ」

しかしクロノは謙虚に　　と言つよりも、自虐的に言った。

「俺だって、まだ全然目指してる強さには及ばない。さっきのレジ

エンドルガの時だって、また負けそうになっちまったし」

「あれは相手が悪かったただけだろ。お前の話を聞く限り、俺にしたってあのウサギには手を焼くと思うぜ？」

「そんなの言い訳にならないだろ。どんな相手だろうが、負けて殺されたらそれまでだ」

自分だけならまだいい（もちろんクロノだって死にたいわけではないが）。戦いの結果を請け負うのは、戦った者として当然のこと。

（けど……）

あの時は、後ろに梓がいた。

大切な人までもが、自分の力の至らなさのせいで死ぬ。それだけは、絶対に嫌だった。

キバ・レプリカフォームとして戦っているのも、それが理由。自分が死ぬ恐怖以上に、自分が戦わなかったせいで誰かが死ぬ方が、ずっと怖かったから。

だが、いくら覚悟したところで、勝てなければ、守れなければ、

意味はない。

「なあ、奏夜」

「ん？」

「俺もキバになって、鍛えて、いろんな人から学んで、ずっと努力してきたけど」

「どれだけ強くなっても、どれだけ守りたいと願っても。」

「どうにもならないことは、やっぱり出てきちまうのかな」

「そりゃ出てくるだろ」

「あっさりと奏夜は言って、」

「けどそれはお前に限った話じゃねえよ。誰だってそうだ。俺も、シヤナも、悠二も、みんな不可能なことはある。」

「クロノ、お前時速160kmのボール、生身で投げられるか？」

「は？」

いきなりな質問に戸惑うクロノ。

時速160km……確か、プロ野球での最高クラスのスピードだったか。

「いや、無理だけど……」

「そうか。ちなみに俺はやるうと思えばできる」

ハーフファンガイア　だしな、と奏夜。

「けど多分、200km台になると難しい。

これが俺の“どうにもならない”こと　俺の限界であり、この限界はいつまでも付きまってくる」

クロノよりも遥かに長く戦ってきた奏夜でも、歴然とした出来ないことは存在する。

「強さもまた然りだ。お前の理想とする強さがどんなもんかは知らん。

けど戦い続ける以上、一人の力じゃ絶対に適わない敵は、いくらでも現れるだろうな」

「……誰でもいつか、大切な人を守れなくなるってことか？」

「“一人”の力だったら、と俺は言った筈だぜ」

不安の色を濃くしたクロノに、奏夜は笑いかけた。

「クロノ、自分の力を鍛え上げるのも大切だが、自分を助けてくれる人達のことも忘れんな。」

「ありきたりだが、みんなの力を合わせるって行為はバカにできないぞ?」

そうして奏夜も、戦ってきた。助け、助けられ、それは今も変わらない。

「一人だろ?が複数だろ?が、それで大切な人を守るんなら万々歳だろ?」

「お前が自分の力で、みんなを守れるようになりたいってのは大いに結構だ。けど、自分にできないことまで、一人で無理にする必要はない。そういう時には迷わず仲間を頼れ」

共に戦う仲間も、その人間の力の一つなのだから。

「そうやって頼り頼られていく内に、人間は自然と強くなっていくもんさ。出来ることも、どんどん増えてくしな」

「……そんなもんなのか?」

「そんなもんだよ。事実お前は、お前が思ってる以上に、心の音楽を強くしてるんだぜ?」

おもむろに奏夜は、ショーケースの鍵を開けた。  
中から取り出されたブラッディローズが、奏夜の手からクロノの手  
へと渡される。

「ほら、弾いてみるよ」

「えっ、でもこのヴァイオリンは……」

「いいからいいから。ブラッディローズも、またお前に弾かれたが  
つてるしな」

奏夜 いや、この場合はブラッディローズなのか に促され、  
クロノは訝しみながらも弓を構える。  
曲は、以前このヴァイオリンを弾いた時と同じ『G線上のアリア』。

『  
』

演奏が始まった。

静かな調子の曲が、奏夜の家の中を徐々に満たしていく。

(……あれ?)

音色が流れ出して数秒、クロノは違和感に気付く。

(なんだ? 前弾いた時よりもずっと使いやすいし、思った通りの音が出る……!)

弓を持つ手と、弦を操る指が淀みなく動き、ブラッディローズもまた、弾き手であるクロノの命に従い、素晴らしい音色を生み出していく。

以前は出せなかった音、ブラッディローズの持つ力に酔うように、クロノは曲を紡いでいく。

奏夜は椅子に腰掛けながら、ただクロノの演奏に耳を傾けていた。

最後の旋律を奏で終え、達成感に満ちた表情でクロノはヴァイオリンを操る手を止めた。

そんな彼に、奏夜は惜しめない拍手を贈る。

「いい演奏だったぜクロノ。荒削りな面も減ってるし、つい聞き入っちゃまった」

「ああ、ありがとう。ちょっと、釈然としないところはあるんだけどな」

「急に弾けるようになった気がした、か？」

クロノが頷くと、奏夜は「簡単な話だ」と口を開く。

「名器と呼ばれるヴァイオリンは弾き手の心を感じ、それに等しい結果を与える。お前の心が、以前よりも更に精練されていたからこそ、ブラッディローズもそれに応えたのさ」

つまり、クロノはしつかりと強くなっている。

心の音楽の強さは、精神の強さに直結する、戦いにも大いに影響することだ。

「自信を持っていいぞクロノ。お前の年代で、そこまでの強さを持つてるヤツはそういない。特に気持ちの在り方なんか、ヘタレの悠二よかよっぽどマシだ」

「本人がいない時にサラリとエグいこと言うな……」

もし悠二がいたら確実に泣くだろう。

「お前なら、大切な人達を　中野を取りこぼしたりはしないさ。俺が保証する。それに今回はこの俺様がついてるんだ。何も心配することはない」



不遜な態度で付け加えられた言葉には、妙な説得力があった。そうだ。久しぶりなのでクロノは忘れていた。

紅奏夜とは、こういう男だと言うことを。

クロノは可笑しそうに、だがどこか悪戯っ子のような口調で言った。

「俺の師匠のお婆ちゃんが言ってたらしいけど、自分の力に溺れる者は闇に落ちるらしいぜ」

「ほう、闇の中での暮らしか。節電対策にはもってこいだな」

「この言葉をそんなポジティブに受け止めるヤツは初めてだろうよ……」

「ふっ、知らなかったか？ 地獄の沙汰も俺の気分次第だ」

軽口の応酬に、奏夜とクロノはどちらからともなく笑った。

「ありがとな奏夜。ちょっと元気出た」

「気にすんな。こういうのが俺の仕事だ」

奏夜としても、クロノには期待していた。

正直な話、次の戦いでクロックラビットレジェンドルガを確実に下せるとさえ思っている。

それにはまず、元気になって貰わなくては。

「さあさ、暗い話はオシマイだ。せつかくの機会だし、もっとお前のヴァイオリンを聞かせてくれないか？ 出来るなら、俺の聞いたことのないヤツがいい」

「ああ、それならいくらでも。ただし、俺のだけじゃなくて、奏夜のも聞かせて貰うからな！」

「勿論だ。特別に俺の十億ドルの演奏を、何度でもタダ聞きさせてやるっ！」

挑戦的な表情を受かべる両者。

同年代のようにも見える空気が漂う。

クロノは頭の中で選曲を終え、ヴァイオリンを奏で始めた。

『  
』

「……あれ？」

イントロさえも終わらない場所で、奏夜は首を傾げた。

「? どうした奏夜、どこか演奏変だったか?」

「いや、そっじゃなくて、お前のその曲……」

「ああ、これが。ウチのバンドの曲でさ。曲名は『Destiny's play』。前に俺がキバをイメージして作曲した曲だよ」

「……ふむふむ。バンドの曲、ね」

奏夜はそのまま「なるほど。違う世界だから……」とぶつぶつ呟きながら立ち上がり、近くにあった試作品のヴァイオリンを手に取り、弓を構えた。

『~~~~』

「……」

驚いたのはクロノだ。

『Destiny's play』を奏夜に聞かせるのはこれが初めて。

にも関わらず、奏夜はそれを完璧に奏でていたのだ。しかも、イントロ以降に差し掛かっても、完璧な演奏を保っている。

「……………」

だがクロノは、その事実を糾弾することはない。

どころか、そのまま奏夜の演奏と自分の演奏を静かに重ねた。

即興のセッションにも関わらず、二人の演奏は一点のズレもない。ピツタリと合わさった呼吸が、新たな音楽を生み出していった。

演奏を終え、ふうつと息を吐いたクロノに、奏夜が言う。

「実はさ、俺も昔はバンド組んでたんだよ」

「えっ、マジか?」

「ああ。『Destiny's play』は、こっちの世界だと

俺のいたバンドが作ったことになってるんだよ」

「なるほど。だからすぐに演奏できたんだな」

世界が違えば、そこにある存在の情報も違ってくる。

異なる世界に同じライダーでありながら、資格者がまるで違うことがあるように、曲の作曲者が世界ごとに異なっているても不思議ではない。

「ちなみにそのバンド名をイケメンズと言う」

「……」

「……」

「そのバンド名はないな」

「うん。俺もそう思う」

真顔で頷く奏夜。バンドメンバーでさえ認めているらしい。

（ やっぱ、『TETRA-FANG』ってセンスのある名前だよな  
……）

自分達のバンド『TETRA-FANG』のリーダー、翔子の命名センスを、変なところで再認識するクロノだった。

ちなみにその頃、ヨーロッパ某所にいるイケメンズバンドリーダーがくしゃみをしたとかしなかったとか。

「けど、だったらバンドの他の曲も演奏できそうだな……奏夜、せっかくだし、他の曲も合わせてみようぜ！」

「いいですとも！」

結局、悠二が戻ってくるまでの間、二人の音楽好きの演奏会は続いたそうなの。

### 第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・Aパート（後書き）

テストやら歌詞騒動やらでゴタゴタしましたが、ようやく投稿できました……闇丸先生並びに読者の皆様、本当にお待たせ致しました（<―>）

・クロノと奏夜は本当に絡ませやすく、シリアスな会話も上手く書くことができました。悠二やシャナあたりだとどうしてもボケに走りがちになりますからね……（笑）。

・二人のキバのセッション、今回のコラボで絶対にやりたかったことの一つです。やっぱりキバは音楽がテーマですからね。

今回がクロノと奏夜なのに対し、今回は悠二と奏夜の会話です。発売途上な二人がどんなやり取りをするのか。ではまた次回（^o^）

### 第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・Bパート

夜。

時刻は深夜一時頃。

月が照らす紅邸の庭に、寝間着姿の悠二は二人分の影を見つけた。

「クロノ、キバーラ」

「ん？ ああ、悠二か」

「あらら、こんばんわ。悠二くん」

近付いてくる彼に片手を挙げるクロノも寝間着姿、奏夜が昔着ていたもののおさがりだが、サイズはあっている。  
キバーラはいつも通りだが。

「どうしたんだよ、こんな夜に」

「それはクロノやキバーラにも当てはまると思っただけね。……ただ眠れなかったただだよ。枕が代わると寝つきが悪くなるんだ」

「修学旅行で苦勞するタイプだな」

「かもね。今から結構心配だよ」

悠二は苦笑して、



「二人は？ 戦った後なんだし、寝れる時には寝た方がいいんじゃない？」

「私は夜型だからねー。どっちかっていうと、この時間の方が目が冴えるのよ」

ああ、そんなことをキバツトも言っていた気がする。  
やっぱり蝙蝠だからだろうか。

「俺は……どうだろ。案外、お前と同じ理由かも知れねー」

「修学旅行で苦労するタイプだね」

どことなく、コントに近い会話だった。

しかし、元々口が回る方のクロノと、奏夜の影響で軽口の叩き合いに慣れている悠二なのだから、こうなるのは必然と言えば必然ではある。

そんなやり取りが可笑しくなったのか、二人はどちらからともなく笑った。

「くくつ……なんか悠二、奏夜に似てきてないか？ 人を食ったよ  
うな台詞が増えてる気がするぞ」

「あはは……どうだろ。あの人とは四六時中顔を合わせてるからね。  
移っても不思議じゃないよ」

ちなみに現在、奏夜は爆睡中。夕飯と風呂を済ませた後、一階の床  
に敷いた布団の上だ。

別に奏夜はベッドを使っても良かったのだが「お前らが布団で寝て、  
俺だけがベッドってのも不公平だろ」と言っつて、クロノ達と同様、  
布団で寝ているのである。

「ただ、口先はともかく、先生と一緒にいて鍛えられた実感はある  
よ」

「その上、シヤナにも鍛えてもらってるんだろ？ 俺と違って最  
高の環境じゃないか」

クロノの師匠、天道総司は既にカブトの世界に帰還している。  
基本的なトレーニングはともかく、彼の使う技や戦闘技術のほとん  
どは、クロノが自力で編み出したものなのだ。

それが悪いわけではないが、我流と特訓での差は後々になって響く。

クロノとしては、悠二の立場は憧れるものがあるのだろう。

「けど、クロノはほとんど我流でそこまでの強さになったんだろう？  
僕からしたら、そっちの方が凄いと思うけどな」

いくら鍛えられたといっても、悠二は未だ自在法も練れない半人前だ。

自身の弱さと、進歩の遅さを自覚している分、自力で戦いのステーションへと這い上がったクロノの才能は、やはり尊敬できる。

「ふーん　まあどっちにしろ、まだまだ未熟ってことだな。お互いに」

「だね。……はあ、本当に未熟って嫌だな。早く誰かに頼らないくらいになりたいんだけど」

「焦っても仕方ないって。地道にやっついていくしかないだろ。俺も、お前もさ」

焦って失敗したらそれまで。

昼間、奏夜に言われた言葉が、クロノの焦燥と不安を塗り潰していた。

「一人でダメなら誰かを頼る。そうやって頼り頼られていく内に、人間は自然と強くなっていく　って、奏夜は言ってたぜ」

「……本当、あの人はどうして毎度毎度、的確な言葉を用意できるのかなあ」

それはクロノも同意したかった。

あいつはもう占い師になるべきではないだろうか。

未来の技術を逆輸入して、歴史をひっくり返すような刀とか作っちゃうべきではないだろうか。

「あ、そうだクロノ、キバーラ。せっかくだし、一緒に鍛錬しない？」

「鍛錬？」

クロノが首を傾げた。

「いや、普段はシャナと一緒にんだけど、今日はさすがに出来ないし。もちろん、クロノ達が良かったらでいいんだけど」

「……ああ、いいぜ。願ってもない話だ」

「クロノがやりたいなら、私は止めないわよ」

クロノは先にも説明した理由から、鍛錬は基本的に一人。

複数で行うことは珍しく、だからこそ、悠二の申し出を断る理由はない。

むしろ新鮮な経験に心が躍っていた。

というわけで　パジャマ姿というのがイマイチ締まらないものの、急遽、クロノVS悠二の模擬戦がセッティングされた。

両者は向かい合い、クロノの傍らには既にキバーラが、悠二の手にはイクサナツクルが握られている。  
ふと気になって、クロノは聞いた。

「なあ、悠二の使ってるのって、ひょっとしてイクサか？」

「あれ？　なんで知ってるの？」

「いや、前に違う世界で見たことがあってな」

かつて訪れた、紅進也という仮面ライダーキバが戦う世界　そこにいた仮面ライダーイクサ、名護雪と面識があった為、クロノはイクサナツクルの名も当然知っている。

「ふーん、やっぱりクロノは色んな経験してるんだね……。

うん、その通り。これはイクサナツクルだよ。もつとも、僕のじゃなくて、ある人からの借り物だけだ」

「そっか。よし、変身できるなら、多少の怪我はお互い覚悟してお

「うぜ」

「うん。でも一応、魔皇力とか存在の力とかは使用禁止しておこう  
よ」

「ああ、勝利条件はどっちかが参ったって言ったらってことで」

「OK。じゃあそろそろ」

悠二が緊張気味ながら、高揚感を滲ませた笑みを浮かべ、

「そうだな、始めるか！」

クロノの顔にもまた、楽しげな笑顔が刻まれた。

「キバーラ！」

「りょうか〜い。カプツ」

キバーラがクロノの手を噛み、アクティブフォースを注入。頬にステンドグラスの紋様が、腰に灰色のベルトが現れる。

『レ・ディ・ー』

イクサナツクルを押し当て、そのまま腕を左から右へスライドさせる悠二。

次の瞬間、両者の声は重なった。

『変身!』

『ファイ・ス・ト・オ・ン』

キバーラがベルトに止まり、クロノの全身を覆った光が弾け、仮面ライダーキバ・レプリカフォームに。足元から現れた山吹色のアーマーの映像が悠二と重なり、仮面ライダーイクサ・セーブモードへと変わった。

『行くぞ!』

トワイライト、海神刃のぶつかる甲高い音色が、夜の静謐な空気を震わせた

「いやいや、血気盛んで大いに結構」

窓の下で繰り広げられている模擬戦を見ながら、奏夜はからからと笑った。

傍らに浮遊するキバットが問う。

「止めなくていいのか？」

「喧嘩ってわけじゃないし、魔皇力も存在の力も使っていないから、怪我はしないだろうよ。なら、止める理由はない」

見たところクロノに分があるようだが　まあこの場合、勝ち負けは関係あるまい。

お互いがお互いの長所を吸収しあえれば、十分儲けものだろう。

「お前がいいならいいけどよ……っと、それより、調子はどうだ？」

「ああ、上々だよ。ディネとの戦いでだいぶ消耗したが……今は身体も安定してるし、“時間”もそこまで減っちゃいない」

「……一応言つとくが、無闇にエンペラーは使うなよ。いつ限界が来てもおかしくねえんだぞ」

「俺もそうしたいとこだが……。今、下で頑張ってくれてる奴ら



次第ってどこかね」

自分としては、頼りにしているつもりだ。

しかし、端から見てそれは、信頼と呼ぶのだろうか。はたまた利用と呼ぶのだろうか。

(……考えても仕方ない、か)

奏夜としては、ただ誰も傷つかず、できればエンペラーを使う事態にならないことを祈るだけだ。

剣の打ち合う音が響く。

トワイライトと海神刃が、両者の狭間で火花を散らしているのだ。

『っ……っ！』

互いに、もう100回は打ち合ったのだろうか。

間合いを取ったキバRFとイクサは、息を切らしながらも、互いから視線を逸らすことはない。

キバRFはトワイライトを握り直す。

(チツ、手がちよつと震えてきたな。さすがにあの大剣と打ち合つてりゃこうなるか……)

(クロノ、持久戦に持ち込まれると厄介よ)

(ああ、わかつてる)

イクサの操る海神刃は重量級の剣。トワイライトも細身というわけではないが、一撃の破壊力においては向こうに分がある。

片や、キバRFと対峙するイクサも、未だに攻めきれずにいた。

(さすが、クロノは戦い慣れてるなあ……。海神刃をしつかり防御しながら、僕の間を突こうとしてくる)

トワイライトは海神刃と比べて重量で劣る分、手数が多い。しかも、戦闘経験豊富なキバRFは、シャナと同じく条件反射で攻撃を防御してくる。決定打は与えられない。

かといって、ガードブレイクに近い能力を持つ『吸血鬼』は、シャナが預かりっぱなし いや、どのみち存在の力が使えないこの戦いでは『吸血鬼』の能力は発動できないのだけれど。

(けど、俺も悠二もそろそろ疲れが出始めてる)

(クロノも、次の一撃で勝負をかけてくるはずだ)

一撃の勝負に出るべく、突撃姿勢を取る両者。  
軸足に力が籠もり、空気が緊張する。

刹那、視線が交錯し、二人は一気に距離を詰める。

「だあっ!!」

先手はイクサ。  
海神刃を振り被ることで、重量を利用したパワーとスピードのある  
斬撃を振り下ろす。

この勢いだと、トワイライトでは受けきれない。  
しかしキバRFは、その一撃を真っ向から防御するつもりはさらさ  
らなかった。

「っ!!」

トワイライトと海神刃が衝突。  
ズシリとした重量感が腕を襲うが、それも一瞬のこと。

「はっ!!」

キバRFはそのまま、自分のやや前方で構えられているトワイライトを、海神刃ごと下から蹴り上げたのだ。

「えっ!?!」

予想外の行動に、イクサの判断は一瞬の遅れを取る。  
しかし、そのタイムラグが命取りになった。

空中に浮かんだ海神刃を取るより早く、キバRFはトワイライトを再びキャッチし、イクサの首元に当てていた。

「……………」

イクサは硬直したまま、自分の側でズサッと、海神刃が地面に落下した音を聞いた。

「……参った」

「おっ」

勝者はキバRF。

キバRFがトワイライトをしまい、イクサが海神刃を回収。  
変身を解除し、最後に二人は深々と一礼、

『ありがとうございます』

した途端にクロノと悠二は倒れた。  
緊張の糸が切れたのか、疲れたような、しかし充足感のある様子だった。

「はは、あははっ、凄いな悠二！ まさかここまで戦えるようになってるとは思わなかった！」

「いやいや、クロノも凄いよ！ あんな局面で武器蹴り上げるなんて、全然予想できなかったよ！」

クロノも悠二も、疲れより笑いの方が先に飛び出してくる。  
戦いをお遊びだと考えるつもりは毛頭ない が、それでも心の中

にある高揚は否定できなかった。

共に全力を出し切った。それが清々しくて仕方がない。

ひとしきり笑いまくって、それから二人は倒れたまま空を見つめる。夏の夜空に瞬く星が、二人の瞳に映し出されていた。

と、なんとなしに、クロノは悠二に問う。

「なあ悠二」

「んー？」

「お前が強くなりたいのって、シャナのためか？　それとも、あの吉田って子のためか？」

「……」

クロノには以前、悠二、シャナ、吉田の抱える恋愛模様を（奏夜から）聞いたことがあった。

だからこれは、暗にシャナが好きか吉田が好きかを聞かれているのだろう。

悠二は考えて、自分の思うままを告げる。

「……わからないっていうのが、一番僕の気持ちに近いかな」

「相変わらず優柔不断だな。そういう態度はマイナスにしかならな  
いぞ」

「自覚してるよ。……けどやっぱり、こういうことは、生半可な気  
持ちで応えちゃダメだと思うから」

相手の好意にも応えられないちっぽけな自分。  
それを変えたいからこそ、自分は強くなりたいのかも知れない。

「先生なんかは、また『ヘタレ』とか言うんだろうけどね。僕はや  
っぱり、軽々とは決められないよ。シヤナも吉田さんも、僕からす  
れば同じくらい大切な人なんだから」

「……そっか」

まあ、好意そのものに気付かないよりはマシなんだろう。

優柔不断だとは思いますが、悠二なりに悩んでいるのはクロノにも伝わ  
ってきた。

「そういうクロノはどうなんだ？ やっぱり、中野さんの為？」

「どうだろうな……梓だけの為に強くなる、って言うと嘘になるか

も知れない」

梓は大切な人だ。

例えば世界中の人間を敵に回しても、絶対に守り抜くと誓える。

だが、クロノの根っこの部分にある行動原理は、やや異なっているように思うのだ。

「ただ、目の前で誰かが傷付くのは嫌だから……俺が動かないせいで、誰かが死ぬのが怖いから……そんな人達を守れるように、俺は強くなりたいんだと思う」

絶対無敵の力が欲しいわけじゃない。

ただ、自分の周りにいる人達を守る力が欲しい。それだけのことだ。

クロノの言葉を聞き、悠二はぼつりと言った。

「欲しい強さまで、お互い先は長そうだね」

「本当にな。いつまでかかることやら」

けれど、決して届かない距離じゃない。



頑張ろう、という意思表示のつもりか、二人は寝たまま、拳をガツと打ち付けあった。

(きゃぷぷ。良いわね、頑張る男の子は)

クロノの傍らで、キバーラがくすくすと笑った。

「奏夜〜！」

明朝。

朝食の片付けをしていた三人(+小動物多数)の元に、静香が尋ねてきた。  
何やら紙袋を腕に吊っている。

「例のもの、何とか用意できたよ！」

「おっ、さすが静香！」

奏夜が片付けを一旦止め、静香の荷物を受け取った。

「悪かったな、無理言って」

「もう、気にしないでよ。私はこういう裏方でしか役に立てないんだし、必要な時はガンガンに頼っていいの！」

苦勞を感じさせない様子で、静香は快活に言う。

「けど、よく1日でここまで用意できたな」

「こういうファッションとかに詳しい友達がいるの。泉さんっていうんだけど」

やいのやいのとカップル二人が話を進める中、置いてけぼりのクロノと悠二は、

「なんだろ。あの紙袋」

「さあな。嫌な予感だけはガンガンにするけど……」

「おいお前ら、ちょっとこっち来い！」

身構える二人を手招きする奏夜。

渋々ながら、クロノと悠二はそれに従う。

「諸君。今日は静香の用意したコレを使って、あのレジエンドルガを誘き出す」

「誘き出す？」

確かに、あのレジエンドルガは奏夜達を警戒していた。今日もノコノコ姿を現すとは、クロノも考えていなかったが……。

「クロノ達からの話によれば、あのレジエンドルガは女性のライフエナジーを好んで吸っている。これはヤツの嗜好なんだろうが……今回はそれを利用するんだ」

「利用……って、女性の誰かを囷にするとか、そういう作戦ですか？」

「いや、シヤナやマージョリーは顔が割れてるし、面識がないウイルスだって名のあるフレームヘイズだ。顔を知られてる可能性は捨てきれない。かといって、吉田や中野に協力して貰うのはあまりにも危険。」

「そこでこいつの出番ってわけだ」

奏夜は勿体付けた手先で、紙袋の中身を二人に見せた。

瞬間、悠二は首を傾げ、クロノは露骨に顔をひきつらせた。

「オイ、奏夜……まさか」

「そのまさかよ」

一際邪悪に笑いながら、奏夜は口を開く。

次に紡がれた言葉は、クロノと悠二を容赦なく地獄に叩き落とした。

「俺ら全員女装すんぞ」

### 第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・Bパート（後書き）

・クロノvs悠二。

努力中の二人によるバトルとなりましたが、今回はクロノに軍配。ちなみに二人はこの後もいくつかトレーニングをしました。それがクロツクラビット攻略の糸口になる……かも？

・奏夜のトラウマになりかねない作戦。

q(○○)さあ、地獄を楽しみな

奏夜、クロノ、悠二の『変身』した姿は、女性陣の話が終わったあとになります。

次回は時間を戻して女性パート。

お楽しみに(＾o＾)

### 第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・Cパート

「本当に申し訳ないのであります。私が至らぬばかりに……しかし、本当に吉田殿の料理の腕はさすがでありますな」

「要参考」

「ふふつ、そんなことないですよ。それにカルメルさんは飲み込みが早いですし、私なんてすぐ追い抜かれちゃいそうです」

「美ちゃん、こっちは終わったよー」

「あ、じゃあ中野さんはこっちで鍋の方をかき混ぜてて」

平井ゆかり　シヤナが存在を割り込ませ、現在は彼女の仮住まいとして機能している家。

調理場では三人の女性が、パタパタとせわしなく動き回っている。

夜ご飯の準備に勤しむのは、奏夜より派遣された吉田。

「お部屋を借りてるのに何もしないわけにはいきません!」と自主的に申し出た梓。

「是非とも料理の技をご教授願いたいのであります」と吉田に懇願してきたヴィルヘルミナだ。

そして、この部屋の主であるところのシヤナはというと　何故かベットの所で絶賛体育座り中だった。

仕草から予想できる通り、目を不満そうに吊り上がらせ、拗ねていると言外にアピールしている。

……若干、ネガティブな思念が入り混じっているが。

「……………」

『……………手伝いに行きたいのなら行けばいいのではないか？』

「いい。……………今の私の実力は弁えてる」

アラストールの言葉も突っぱねるのだからよっぽどだ。

(うつうつ……………シヤナちゃんから物凄い負のオーラを感じるよ……………)

(あの、カルメルさん……………シヤナちゃん放っておいていいんですか？)

シヤナとは何かと対立しがちな吉田だが、それはこと恋愛においての話。

さすがにあの状態のシヤナを放っておくのは気が引ける。

しかし、長年彼女を世話してきた教育係二人は冷静だった。

(昔からああなると、当分機嫌は治らないでありますからな……………)

(鬱屈)

同じように料理が出来ない身でも、シャナとヴィルヘルミナには決定的な差がある。

ヴィルヘルミナはもともと何でもそつなくこなす万能型で、料理については学ぶ機会がなかっただけ。

知識が無くとも、その都度教えてもらえればサポートくらいはできる。

しかしシャナは、教えて貰ってもサポートすらできないことの方が多い。

基本的に彼女は、戦い以外のことは不器用なのだ。

千草との特訓でマシになってきたとはいえ、未だにその料理テクは、黒こげの暗黒物質製造マシタークマターンの域を出ない。

いかにシャナも(悔しいが)認める絶品の吉田プロデューズ料理でも、自分が何か一つでも失敗すればケミカル・マジカルクッキングに早変わりだろう。

そして、シャナの出した結論は、

『……邪魔になるから待ってる』



みんなの　特に客人である梓に、不味い料理を出すわけにもいかない　と頭の中では結論づいているシヤナだが、そこはそれ。三人の調理風景に加われない疎外感、なかなかに応えるのである。

「……あの、こちらはお任せしてもよいでしょうか？　あの方はあのままだと、食事の時まで引き摺りそうで……」

「あ、はい。大丈夫ですよ。シヤナちゃんの方をよろしく願います」

むしろそつちの方が急務だと思わなくもない吉田である。

「中野殿も申し訳ないのであります。お招きしている立場でありながら、このような体たらくをお見せしてしまい……」

「い、いえそんな！　私が自主的にやってることですし、カルメルさんは気にしないでください！」

目上で容姿端麗な女性に頭を下げられ、梓もつい畏まってしまふ。居間の方へと消えていくヴィルヘルミナを見ながら、梓は思ったことを口にしていた。

「カルメルさんって、不思議な人だね」

「え？」

最初会った時はちょっと、いや、かなり近寄り辛かった。あのメイド服という壮絶な出オチと、一ミリも変化しない氷のような表情。

その後、クロノの治療を手伝う時に見せた気遣いや、奏夜とのやり取りがあったりして、すぐいい人なのはわかったが、なんとというか、外と中身がちぐはぐな人だなあ、と、梓は思っていた。

そう話すと、吉田は「うん」と頷いた。

「私もね。最初はちょっと近寄り辛かったんだ。けどカルメルさん、話してみると凄く楽しい人なんだよ？」

「へえ……えっと、確かシヤナちゃんの育て親、なんだよね」

確か、紅さんはそう言っていた。

「やっぱり、シヤナちゃんと仲良いんだ」

「うん。二人ともあんまり表に出さないけどね」

まだ付き合いの短い吉田でもわかる。

シヤナもヴィルヘルミナも、お互いがお互いにダダ甘だ。

「あ、そっか。じゃあ料理を習いたっていうのも、シヤナちゃん  
の為だったんだね」

「……えっと」

「あれ？ 違うの？」

「……う、ううん。合ってると思うよ」

急に吉田の歯切れが悪くなる。

梓の読みは間違っではない しかし、たぶん大本の理由として  
は違うことを、吉田は知っていたのだ。

（たぶん七割くらいは、先生への対抗心、なんだよね……）

あの二人の不仲は、もはや仲間内では有名な話になっている。

そんな相手に「お前マジで料理できないんだね（笑）」的なことを  
言われた手前、ヴィルヘルミナの性格上、大人しく引き下がること  
は有り得ない。

（前もかなりくだらない理由で、マル・ダムールを半壊させるくら  
いの大喧嘩に発展したこともあったしなあ……）

以下、当時の喧嘩風景。

「貴方など何処ぞの洞窟で年がら年中ぶら下がっていればいいのであります！」

「んだとコラア！ 秋葉原にクール便で送り返してやるつかこのエセメイド！」

ちなみにこの後二人揃って、キレたマスターに土下座させられていた。

この一件によって、吉田はヴィルヘルミナのイメージを『ちょっと怖い人』から『実はかなり感情的で面白い人』に修正することになる。

「まあ取り敢えず、私達で早く準備を終わらせちゃおっか」

「うん。これでご飯も遅くなっちゃったら、シヤナちゃん更にふてくされちゃいそつだもんね」

朗らかな笑顔と共に、吉田と梓の間にはほわほわした空気が漂う。

（（なんだか話しやすいなあ））

梓はともかく、吉田が会ったばかりの相手にこう思うのは珍しかった。

性格のタイプが似ているのかも知れない。料理の仕上げを進めながら、二人の会話は途切れずに続いていく。

そんな中で 梓はふと吉田に聞いてみた。

「ねえ、一美ちゃん」

「なに？」

「一美ちゃんは、悠二くんのこと好きなんだよね？」

ゴソツッ！

質問から一秒にも満たないタイムラグを挟んで、吉田は壁に頭を打ち付けた。

「ちよっ、一美ちゃん大丈夫!？」

まるで原因のわからない奇行に慌てる梓を余所に、いきなりの不意打ちをくらった吉田は、顔を一気に赤く染め上げていた。

「な、ななな、なんで、そんな、ことっ……?」

「う、ううん、大したことじゃないんだけど」

赤面した吉田を見て「このあたりはシャナちゃんそっくりだなあ」と梓は思う。

あるのは素直なのか、素直じゃないかの違い　いや、それだけではないのだろうけど。

吉田をなんとか落ち着かせ、梓は話を続ける。

「えっと、事情はシャナちゃんにちょっと聞いたただけなんだけど、悠二くんは、何か特別な力を持つてるんだよね？」

「……うん」

あまり直視したくない現実が、吉田の中で掘り起こされた。

トーチ。宝具“零時迷子”を宿したミステス。

今ある彼は、本当の坂井悠二の残滓。

「だから、シャナちゃんが一緒にいるのはわかるんだ。シャナちゃんも特別だから」

梓はクロノが「生身でレプリカキバ並み」と称した彼女の身体能力を思い出す。

「けど、一美ちゃんは普通の女の子だし、それでも悠二くんを好きでいて、その、つらくなったりしないの？」

「……」

さっきまでの動揺はどこへやら、吉田は梓の横顔をじっと見つめた。直感で、梓が何を聞きたいのかを悟る。

「例えば、自分に力が無いせいで、大好きな人の足手まといになっちゃったりとか……」

「中野さん、それって桜井くんのこと？」

先生と同じ、キバとして戦う少年。

彼の名前を出すと、梓は僅かに目を伏せた。

やっぱり、と吉田はより梓に親近感を覚えた。  
この子は私と同じ、大好きな人の戦う場所　　日常の向こう側に行けない苦しみを知っているのだ。

「……クロノさんは、凄く優しい人なの」

だから、梓がぼつぼつと話し出しても、吉田は一言も聞き逃すまいと集中していた。

「優しい人だから、無理して、つらくて泣き出しそうになるのを必死に我慢して、みんなを助けようとしちゃうんだ」

いつか、地獄兄弟との戦いで完全敗北を味わった時　自分の無力さを痛感した時、彼は泣いていた。

悔しくて　自分の力の至らなさのせいで、誰かが死ぬのをこの上なく恐れていた。

「……桜井くんを止めたりは、しなかったの？」

「何度かはね。でも、クロノさんは止まってくれないよ」

梓は苦笑した。

自分も頑固だという自覚はあるが、クロノもあれで意固地になりやすいところがある。

「それにやっぱり、何でもない毎日の中にいるクロノさんも、キバになったクロノさんも、全部私の大好きなクロノさんだったから」

今でも梓は、クロノに無茶をして欲しくない。けど、みんなのために頑張っているクロノを否定しようとは思っていなかった。

「だから……なのかな。戦ってるクロノさんも好きだから　私がクロノさんの足を引っ張るのは、一番嫌なんだ」



きゆうと梓の胸が詰まった。どろりとした重い感情が吐き出されていく。

その感情が生まれたのは、先のクロックラビットレジェンドルガ戦。クロノが逃げの一手を打った時、もしあの場に梓がいなければ少なくともクロノは、一人で逃げられたのではないか、と考えてしまったのだ。

結果的に奏夜達が来てくれたから良かったものの、少しでも到着が遅れていたら、この場に梓はいない。……もちろんクロノも。

守ってくれるのは嬉しい。

しかし、自分の存在がクロノの支えではなく、危険を呼び込む結果になってしまっただけは、絶対に嫌だった。

「……そっか」

梓の気持ちはよくわかる。

吉田も同じだったからだ。無力な自分と、遙か別世界の存在になっ  
てしまった想い人。

境界線は明確で、そのあまりにも決定的な差に絶望したことは、記憶に新しい。

寄り添える。けれど、同じステージに立つことは決してできない。そのもどかしさは、彼と一緒にいられるシヤナへの羨望は、今も続いている。

「一緒にいる筈なのに、支えてあげられないのはツライよね」

「……………うん」

鍋が煮え切ったのか、梓が静かに火を止めた。表情がいつの間にか暗くなっている。

「一美ちゃんは平気なの？　悠二くんに助けられたことだってあるでしょ？」

「……………そうだね」

直線的に助けられたことは無いけれど、それでもずっと、彼がシヤナと一緒に頑張っていたことは知っている。無茶をしないで欲しいという気持ちもあるし、悠二の立つ場所があまりに違い過ぎるのもわかっている。

けれど

「私、そういうのはもう気にしないことにしてるんだ」

はっきりと、吉田は自分の在り方を口にした。

「えっ……？」

「ちょっと前に、散々悩んじゃったからね」

ミサゴ祭りの時、吉田は向こう側の世界を知った。  
泣いた、苦しんだ、立ち止まった。

けど最後は、ちゃんと進めたと思っている。 二人の恩人、フレ  
イムヘイズの少年と、蛇を纏う心優しき王のおかげで。

「坂井くんと同じ場所にいられないのは……つらいよ。でも、そ  
れだけのこと”で全部諦めちゃったら、きつと後悔すると思う」

悔いは残さない。最後まで私は、坂井くんを好きでいる。

「だから中野さんも、そんなに気にしなくていいと思うな。 結  
果的に桜井くんの足を引つ張ったとしても、それが中野さんの『良  
かれ』と思っただことなら、ね」

彼もそのせいで、梓を恨んだりはいしないだろう。  
吉田から見て、そんな相手を蔑ろにする性格には思えなかった。

「……………」

呆けた表情で、梓は吉田を見ていた。

彼女のことは、シャナから聞いていた分しか知らなかった。

シャナと同じ、悠二を好きな女の子。シャナが最も強敵だと考  
える相手。

だから以前、梓がシャナに相談された時は、吉田がシャナにとって  
どれだけ大きな壁なのかは、わからなかったけれど

(これは……………相談したくもなるなあ)

これは 本当に強い。

シャナの『一緒に戦える』というアドバンテージが、小さく見える  
ほどに、吉田は心に強い芯を持っていた。

「 凄いね。一美ちゃんは」

自然と、梓はそう呟いていた。吉田は首を傾げる。

「普通は、そんな風に割り切れないもん。本当に　凄いと思う」

「……だとしたら、私を助けてくれた人達のお陰だよ。一人だったから、私なんかとつくに倒れてたから」

いや、例えそうだとしても、そこに至るまでの覚悟は吉田本人のものだ。

誰に助言をされようが関係ない。

「それにしても、桜井くんは本当に幸せだね」

「えっ？」

今度は梓が首を捻る番だった。その仕草が妙に可愛らしく、吉田は笑みを浮かべた。

「だって、中野さんが桜井くんに迷惑をかけたくないって思うのは、それだけ桜井くんが大切だってことでしょう？」

吉田がクロノの立場なら、彼氏として冥利に尽きるだろう。

「まだ桜井くんのごことはよく知らないけど、中野さんみたいな良い子が好きになるってことは、本当にかっこいい人なんだね」

彼氏を誉められたからか、良い子だと言われたからか、梓は頬を染めた。

照れ隠しのつもり、あるいは彼女としての流儀なのか、少し頬を膨らませながら、梓は言う。

「……あげないよ？」

「とらないってば」

そんな小さな意地もご愛嬌。

また一人、異世界での友人を増やす梓であった。

### 第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・cパート（後書き）

女の子のほのぼのパート。

・またしても仲の悪さが露呈した奏夜とヴィルさん。ちなみにマル・ダムールを半壊させた二人にキレたマスターは、奏夜とヴィルさんのトラウマになりました。

・梓と吉田の会話は書いてて楽しかったです。……吉田のメンタル強度が原作の三割増し中になりましたけど（笑）

さて次回は会話パートシヤナ編。そして男性陣全員にLUNAのメモリがささ（ry

とにかく、次回は可愛い子だらけよ！楽しみにしていて頂戴、以上！（京水さん風）

### 第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・Dパート

問1

以下のボケに対する的確なツツコミを答えなさい（10点満点）

「（手入れを忘れたギターを見て）ギター大事にしないとだめじゃないですかー」

「大事にしてるもん！一緒に寝たりとか、服着せてあげたりとか」

解答者・中野梓

「大事にするベクトルがちがーう！」

……とまあ、今は同じ部活に所属する唯先輩との間で、実際にあった会話なのだけれど。

これを見る限りでも、梓は自分をツツコミ属性だと思っただけだ。

悲しいことに、あの軽音部は常識人に対して、否応無しにツツコミの役割を与えてくる（唯とムギは天然ボケ。律は両刀使いだ）。そんな経緯もあってか、梓、そして同じく常識人であるところの漣は、無駄にツツコミの技術に自信があった

だが、しかし。



(……私にもツツコミ能力の限界というものがありません)

自分の寝るベッドと同じくらいの高さ　ハンモックに身を預け、メイド服のまま熟睡するヴィルヘルミナを見ながら、梓は思う。

甘かった。

唯先輩で鍛えられたつもりだったのに、世の中には天然でとんでもないボケをかましてくる人達がまだまだ沢山いる……！

どうしてこうなったと聞かれれば、やはり部屋の睡眠スペースの問題だろう。

食事を終え、吉田が帰宅した後の話。風呂にも入り終え(寝間着はシヤナから借用)、いざ就寝となったところで、問題が発生した。

基本的にここにはシヤナしか住んでおらず、ヴィルヘルミナが同居し始めたのも最近。

前に住んでいた平井家のものは粗方処分してしまい　端的に言うと、就寝スペースがベッド一つなのである。

二人までならギリギリ行けるが、三人となるとキツイ。

さてどうしたものか、と唸る中、ヴィルヘルミナが「私なら心配い

無用でありますので、中野殿がベッドを使ってくれて構わないのであります」とのたまった。

で、あのハンモックである。

なんでもここに来るまで使っていた『旅の友』だとかで

(せめてカルメルさん、メイド服は脱いだから寝て下さい……)

一応『清めの炎』があるため汚れや匂いの心配はないが、それにしただ。だ。

ちなみに梓は知るよしもないが、シャナでさえヴィルヘルミナの寝間着姿を見たことはなかったりする。

『あのメイド服脱いたら、俺はヴィルを判別する自信がないなー』

(……いけない。考え過ぎて紅さんの幻聴聞こえてきた)

梓はふるふると首をふった。

もうこれについて考えるのはよそう。

(……なんか眠れないや)

今日は色々あったせいか、目が冴えている。ベッドを譲って貰いは

したものの、一向に眠気が訪れない。

(シャナちゃんは )

夏　　ということで、布団のないベッドの隣には、シャナが静かに寝息を立てていた。  
梓以上に小さな身体は寝返り一つ打たないまま、その芸術品のよう  
な美貌を晒している。

(見た目は本当に、普通の女の子なんだなあ)

しかし実際は、シャナはクロノと同等レベルにまで戦える存在『フレイムヘイズ』。そんな異能の力を持つ少女と、自分と枕を並べて寝るといいうのも、なんだかおかしな話だった。

(……うわ、シャナちゃん肌綺麗)

一緒に風呂に入った時にも思ったことだが、近くで見るとその美しさ  
がわかった。

女性としての興味からか、梓はそっつとシャナの頬に指を近付け

「寝れないの？　梓」

「にゃっ!？」

ぱちつとシヤナの瞳が一瞬で開いた。小さな悲鳴をあげてしまったが、ギリギリで大声になることは避ける(その為かヴィルヘルミナは起きなかった)。

「シヤ、シヤナちゃん……なな、なんで……!」

「ん。なんだか心配がしたから。梓のだってすぐわかったから、何もしなかったけど」

「け、心配って……」

やはりシヤナは只者ではなかった。

動悸を落ち着けながら、梓は小声で言う。

「えっと、ごめんね。起こしちゃって」

「ううん、別にいい。それより、梓はどうなの? 眠れないの?」

「あ……うん、ちょっとね」

「そう」

シヤナは寝転んだまま梓の方を向き、ポフポフと柔らかかなベッドを

叩く。

「シヤナちゃん？」

「寝れない時は、お話すると眠くなるって、千草が　えっと、悠二のお母さんが言ってた」

……いや、確かに昔は、夜にお母さんの話を聴いて寝ていたりもしたけど……。

シヤナはだいぶそれを曲解して受け取っているようだった。

しかし梓も、大真面目にこちらを見てくるシヤナを邪険に扱うことも出来ず、

「……では、失礼して」

どうせ寝れないのも事実なのだし、と梓が状況に身を任すのに時間はかからなかった。……普段から、唯や律のペースに流されまくっていたせいかもしれない。

その後は小声ながらに、色々な話題が飛び交う。

単純な近況だったり、人間関係の変化、変化球ではシヤナがメロンパンの素晴らしさ、梓が軽音楽の何たるかについて、かなりの熱を持ったトークを披露したりもした。

と、意外にもヒートアップした会話の中で、シャナがふとこんなことを尋ねてきた。

「ねえ。梓は“こっち側”に来たいの？」

「えっ？」

つい素っ頓狂な声を挙げてしまう。

「こっち側って……」

「私や奏夜、クロノのいる場所 戦う力を持つ人達のいる場所のこと。さっき、一美と話してたでしょ」

「えっ、シャナちゃん聞いてたの？」

「……うん、少し」

ぱつが悪そうに眉を下げるシャナ。

「ごめん。聞くつもりはなかったけど……気になって」

「あ、ううん。そんなのはいいんだけど」

シヤナの場合、人間離れた聴覚の影響もあるし、きっと偶然聞いてしまったのだろう。

「それで、どうなの？ 梓」

「どっつて……」

そんなのわからない。

吉田はああ言っていたが、やはり梓は、彼女のように割り切れないのだ。『良かれ』と思った行動が想い人を傷付けたとして、その結果を受け止める自信などない。

無力な自分を嘆く時はある。

力が欲しいと思ったことも

ないと言えば嘘になる。

（そうじゃなきゃあの時 キバーラには変身しなかった）

以前に言った過去の世界で、子供時代のクロノを助けるべく、梓は仮面ライダーキバーラに変身した。

あの時はただがむしゃらに、まだ戦う力を持っていなかったクロノを守りたかった。その気持ちに嘘はない。

(でも)

日常の中にいたいという気持ちも 怪人のことなんか忘れて、普通に生きていたいという気持ちもまた、嘘じゃない。

どうしたところで、梓はただの女子高生。

シヤナのように最初から『向こう側』にいたわけでも、クロノのように強い意志があるわけでもないのだ。

(まだ『向こう側』踏み込み切れない私が、クロノさんに何をしてあげられるんだろう……)

沈黙した梓の内情を察したのか、シヤナは言う。

「何をしたいのかわからないなら、梓はこっちに来るべきじゃないと思う」

右も左もわからない者を野放しにするほど、シヤナのいる世界は甘くない。

「でも、一美ちゃんは……」



「……一美は、こっち側の恐ろしさを何もわかってない。だけど、何をしたいかだけはハッキリしてる。だから　　こっちに来れた」

シヤナは顔に翳りが差す。

しかし、彼女もそれだけは認めなければならなかった。

恐怖の世界を『悠二と共にいたい』という道標だけを頼りに進む強い意志。

シヤナが　　好きという気持ちを表出できないシヤナが、持ちえない強さだ。

「けど梓、誤解しないで。梓が日常にいることは何も悪いことじゃないの。  
梓がクロノの足を引っ張ったって、クロノは絶対に梓を恨んだりしない」

それは　　吉田にも言われたことだった。

「きっとクロノは、こっち側に梓を引き込みたくない。日常の中で笑ってる梓を、守りたいんだと思う」

「……日常の中にいる、私？」

シヤナは頷く。

初めて会った時から、彼女はクロノの中に、自分の想い人を少しだけ重ねていた。

(クロノの戦う理由は 悠二にすごく近い)

いきなり非日常に放り出されて、どうすればいいのかわからなくて。

(でも、だからこそ)

非日常の脅威を知ったからこそ 二人は日常の尊さを知っている。

だから日常で暮らす誰かを、非日常に巻き込ませたくない。

人を 人が生きる日常を守りたいから、クロノも悠二も戦おうとしている。

「だから、梓が日常にいるから足手まとい、なんていうのは間違ってる。クロノは梓に、日常の中で生きていて欲しいんだから」

「……そう、かな」

「そうよ」「とシヤナは断言した。

「……それに、自分から来なくても、梓がそういう運命の中にいるなら、いずれは『こつち側』に来ることになる」

悲しいが、それもまた真実だ。

クロノがどれほど頑張っても、梓がこちらに引き込まれない保証はない。

「遅かれ早かれ、いつかきつと来る。どんな誰にも戦うべき時が。

だから梓は、心構えだけしておけばいい。その時になって、立ち向かえるように」

「……立ち、向かう」

できるのだろうか、自分にも。

不安に震える梓の手。それをシャナの小さな手が包んだ。

「大丈夫」

シャナにしては珍しい柔らかな笑み。

その温かさは、梓の心に染み渡る。

「どんなことになっても、梓とクロノなら、きつと大丈夫」

恋する二人には敵も不可能もねえからな！

(きつと奏夜は、こんな風に言うんだろうな)

自分も奏夜に毒されていると思うと、また笑みがこみ上げてきた。

ややあつて、梓は、

「……………」

梓は頷き、朗らかに笑いかける。

全力で、自分を励ましてくれた女の子へと。

「ありがとう、シヤナちゃん」

「……………」

今更になって恥ずかしくなったのか、シヤナはちょっと照れながら、また就寝モードに入ってしまう。

(ふぶつ、可愛いなあ、シヤナちゃんは)

悠二をちょっと羨ましく思いながら、梓は再び目を閉じる。

（ 頑張ろう ）

立ち止まっても結論はでない。

だからせめて、悩んで、迷って、考え続けよう。

いつか来る時に覚悟を決められるように。

その時になって、怖がったりしないように。

思考がクリアになったからか、シャナとの『お話』のお蔭か、やがて梓は緩やかに眠りの世界に落ちていった。

翌朝。『カフェ・マル・ダムール』。

奏夜に呼び出された女性陣を待っていたのは、かつてない衝撃の光景だった。

「いや、あの、これは作戦の一種だね……」

『…………』

「あのレジエンドルガは女性ばかり襲ってるらしいけど、こっちの女の人ほとんど顔が割れてるし…………」

『…………』

「僕らが『こっという格好』をすれば、囿にも変装にもなるから一石二鳥…………って、先生が提案してきたから…………」

『…………』

「だから、その…………あーもう笑いたければ笑えばいいでしょー!!」

軽く泣きそうな悠二の叫びを皮切りに、まずマージョリーとマルコシアスが破顔した。

「あはははははー!!　　ユ、ユージにクロノ、な、なにその格好!

あ、ヤバ、は、腹痛い、あははははー!!」

「ヒヤハハハハハハー!!　　お、おいおい、学芸会にはまだ早えーんじゃねーのか!?　　ヒーツヒヒヒー!!」

表情筋をフルに使った大爆笑だった。その隣　　ヴィルヘルミナは相変わらずの無表情だったが、

「坂井悠二……そのような、趣味が」

「失笑」

口元がピクピク痙攣している。ティアマトの方もよく見ると、ヘツドドレスが小刻みに振動していた。堪えてる　絶対笑い堪えてるよこの人達……！！

抗議しようとした時、肩に手が置かれた。

「悠二」

振り向くと、シャナが今まで見たこともないような笑みを浮かべていた。

そこに込められた感情の名は　同情と憐憫。

「大丈夫。そんな格好をしたからって、私の中の悠二の評価を下げたりはしないから」

「シャナ！？　冷静な慰めが逆にツライんだけど！？」

「うむ。あくまで作戦の一環ならば、貴様の価値を下げる理由にはならん」

「アラストールも同情するって僕は今どれだけ哀れなんだよおおお  
おおー!!」

とうとう机に縋りついて泣き出す悠二。

その『女物の服』に身を包んだ格好もあってか、妙に絵になった。

「あ、あの……その、クロノさんも悠二くんも似合ってますよ！」

「フォローになってないフォローをありがとう。梓」

悠二と同じく、クロノも女装コスを身に纏っていた。

以前、元の世界で女装した経験のあるクロノなので、悠二よりも若干ダメージは薄かったが。

ちなみに現在、クロノは黒髪ロングのカツラを被り、上は黒のシャツに薄手のカーディガン、下はプリーツスカート。

片や悠二は、ふわっふわのフリルがついた薄手の白いシャツとロングスカート。

被ったカツラは何を思ったのかツーサイドアップにされている。

両者共に静香の完璧な化粧（本人曰わく、野村流アルティメットメイクアップ）が施され、女装としては合格点。



二人ともそれほど筋肉質ではないし、遠目から見れば十分女子に見えるだろう。

「コードネームは悠子と黒菜で決定ね。地の文でもそれでいくわよ」

「僕の名前ひねり無いですね!」

「落ちて着け悠二。この流れ、多分何を言っても無駄だ」

悠二………もとい、悠子を諷める黒菜。

(このマジョリーって女、翔子やシエリルと似た雰囲気だしな…)

つまりは唯我独尊。

こつこつ手合いは、適当に付き合っ流すに限る。

達観した雰囲気醸し出す黒菜に、ふと梓が聞いた。

「あれ、そう言えば紅さんはどうしたんですか？」

「ああ、まだ時間がかかるらしくて、俺と悠二が先に来たんだよ。もうそろそろ来ると思うが……」

黒菜がそう呟いた時だった。

「あら、やってるやってる」

パンツ、とマル・ダムールの扉が開け放たれ、全員がそちらに注目する。

木造の床を、厚手のブーツが鳴らした。

「私もそろそろ、行こうかしら」

長い茶髪を掻き上げて入店してきたのは、二十歳前後に見える女性。赤いネクタイを巻いたシャツの上に、トレンチコートを袖を通さずに羽織り、下に穿いたミリタリーパンツは、すらっと伸びた彼女の長身をより引き立たせる。

イメージとしてはマジョリーに近いが、どこことなく柔らかさを感じさせる顔立ちは、攻撃的な外観とのギャップにより、一層魅力的に見えた。

『…………』

「あら、どうしたのよ？　鳩が鞭で縛られたみたいな顔して」

全員がポカーンとする中、かなり際どい表現する女性。いや、そんなことよりも、

「あの、どちら様ですか？」

全員を代表して、悠子が聞く。

「あら誰？　この可愛い子、誰この可愛い子！？」

「……………初対面の人にツッコミ入れるのも失礼だとは思っていますが、今そう言われるのは傷付くのでやめてください」

「……………？」

なんとなく、黒菜は悠子と女性のやり取りに既視感を覚えた。かなり半信半疑に、黒菜は言った。

「もしかして……奏夜、か？」

『…………え？』

全員がフリーズして、再び女性を見る。

と、そこで女性がニヤリと笑った。人を食ったような笑顔。

それが、あのトンデモ教師のものと重なった。

『……………はあああああ！？』

ほぼ全員が叫び声をあげた。

ヴィルヘルミナ、ティアマトー、アラストールの叫びはなかったものの、その沈黙からか、驚愕していることは十分に受け取れた。

「え、え？ く、紅さん！？」

「ちょ、ちよつと、お前本当に奏夜なの！？」

「奏夜？ あらあら、みんな誰のことを言ってるのかしら？」

その言葉に、ほんの少し希望が灯ったが、

「私は奏夜に非ず！ どうしても呼びたいのならば奏ちゃんとお呼びなさい！」

希望は一瞬で潰えた。

認めざるを得ない。こんなバカな言動を乱発するのは奏夜くらいのものだ。

未だに驚愕冷めやらぬまま、黒菜は引き気味に言う。

「奏夜 お前男としてのプライドとかねーのか？ もはや作戦の為ってレベルを超えてるぞ……」

うんうん、と何人かが同意する。

そう。別に女装に問題はない。ただ、似合いすぎるのだ。

明らかに本気を入れてきたことが分かる服装に、仕草の一つ一つまで女性のを再現している。

ここまで完成度が高いと、逆に引くのは道理だった。

しかし奏夜 もとい、奏は、

「まあ、男ですって！？ 言ったわね！？ あんたレディに対して最大の侮辱を！ ムツキィ ！！」

「なんで口調だけ再現レベルを落とすんですか……」

それは女言葉じゃなくてオネイ口調だ。

悠子が指摘すると、奏は不機嫌そうに頭を掻いて、

「もう、なによ。みんなノリが悪いわね。あのレジエンドルガを誘うべく、この私がせっかく一肌脱ごうとしてるのに！ むしろ私の作戦に対する積極性を誉めてもらいたいくらいだわ！」

「じゃあせめて口調の再現も積極的にやってください。かなり不自然ですよそれ」

「むづ……注文が多いわねえ」

奏はやれやれと首を振ると、数回咳払いをし、再び口を開いた。

「さ、そろそろ行きましようか。こうしてる間にも彼は動いているのだし、じつとなんかしてられないわ」

『……！』

穏やかな瞳に柔らかなトーンで放たれた言葉が、全員の心に雷を落とす。

「……いや、あの、悪い。やっぱり口調戻してくれないか？」

「あら、そう？　ならお言葉に甘えちゃっわねん」

言って、奏はオネエ口調に戻る。

「……なんだ今の仏みたいな涼やかトーン」

「不覚にも女の私がときめいちゃいましたよ……」

「女装って知らなかったら確実に落ちる……」

「あれは奏夜じゃない奏夜じゃない奏夜じゃない……」

「……なんなのであります。あれほどまでに存在を認めたくない美しさは初めてであります」

「……気が合うわね。私も同じ意見よ」

黒菜、梓、悠子、シヤナ、ヴィルヘルミナ、マージョリーの感想は、真剣味を帯びていた。

しかし当の奏はまるで気にせず、むしろ意気揚々と、作戦名を告げる。

「さああなた達。準備はいいかしら？」

作戦名【OPERATION・GIRLS・HEART】……スタ  
ートよー！」

次回、仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD！

「さあ、イケメン狩りの時間よ！」

「小童共が。身の程を知るがいい！」

「シャナ、悠二、行くぞ！」

「ええ！」

「これが、僕達のカだ！」

第三十二話・アンプ/重なる魂は永遠に

WAKE・UP！ 紅蓮の鎖を解き放て！



### 第三十一話・幕間劇／想いのベクトル・Dパート（後書き）

・吉田と同じく、シャナの成長が引き立った今回。果たして梓が戦う時とは。

・紅奏、見参！

口調にあのお方が混じってますが、見た目は超美人です。黒菜ちゃん、悠子ちゃん共々遊ばせて貰いました。

次回の三十二話にて、コラボ編は終了です。最後までお楽しみに！

どうでもいい近況

テイルズオブエクシリアパねえ……ミラ可愛すぎ、アルヴィンイケメンすぎ（ジュードは？

しかしアルヴィン……テイルズで傭兵やら流れ者は裏切りフラグで  
すぜ（笑）

例・クラトス、リカルド、レイヴン。

### 第三十二話・アンプノ重なる魂は永遠に・Aパート（前書き）

キバール、「一本足打法っていうのは、野球においてボールを手元まで引き付けたり、タイミングの取りやすさに重きを置いた打法よ。体にタメができるから、会得者にはホームランバッターが多いんだけど、下半身への負担や要求されるバランス感覚から、打法の中で一番会得が難しいともされてるのよ。

……これ、今回と関係あるの？」

奏夜「そこは本編をチエケラッ」

第三十二話・アンプ/重なる魂は永遠に・Aパート

(……視線が痛い)

黒菜と悠子は思う。

現在歩いているのは、夏休みで賑わう街の通り。

今のところクロックラビットレジエンドルガの姿は見えないが、油断はできない。

だが、何かあれば、こっそり後をつけているシャナ、マージヨリー、ヴィルヘルミナが対応してくれるから問題はない。

……そう、問題があるとすれば、

「……………(奏、髪の毛ふぁさー)」

『っ！…！(周囲の民衆ドキッ！)』

この絶賛女装エンジョイ中の奏である。

この男 無駄に素材がいいもんだから、女装のクオリティも半端ではない。

事情を知る黒菜と悠子は気にしないが、道行く人からすれば『モデ

ル並の超絶美人」が歩いているように見えるだろう。

奏本人もそんな反応を面白がっているようで、

「ふう、偶にはこんな格好もいいもんねえ……今までの自分じゃ見えない風景が見えてくるわ」

「その風景がいろいろマズいもんだと思うのは俺だけか？」

サラッと女性状態の自分を認めつつある奏に、黒菜が釘を刺した。いい加減にしないと、奏のイメージダウンでは済まない事態になる。

悠子もそれを感じたのか、

「先生、あんまりふざけ過ぎないで下さいよ。あいつを誘き出すために、多少目立たないといけないのは確かですけど、逆に目立ち過ぎるのも……」

「んもう!! なによ、悠子も黒菜も文句ばかりじゃない！ 全っ然期待出来ないわ!」

「期待出来ないのは先生の作戦に臨む姿勢の方です!」

やや熱の入ってきたツツコミに、奏はやれやれと首を振った。

「言われなくてもわかってるわ。いくら私でも、作戦を棒に振るよ  
うなおふぎけはしないわよ。」

それに「

ニヤリと、奏の顔に凶暴な笑みが刻まれた。

「向こうのイケメンは、もうビーンッビーンッにやる気満々みたいだけ  
ど」

『……』

黒菜と悠子は、必死に驚愕と緊張を抑えつけた。

奏が小声で「大通りから離れるわよ。なるべく自然なままでいなさ  
い」と指示してくれなかったら、ぎこちない素振りを見せてしまっ  
ていたかもしれない。

凜とした態度で、奏ではゆっくりと、しかし着実に人通りの少ない  
道へと動いていく。

通行人の気配が消えていくにつれ、黒菜も悠子も、背筋に妙な威圧  
感を感じるようになっていた。

間違いない。これは

最終的に移動した先は地下駐車場。

時間が時間だからか、ひとまず人影はない。

「さ、ここなら誰もいないわよ。用があるなら早く言ってくれないかしら」

無人なのを確認し、奏達は後ろを振り返った。  
奏の誘いに、大型車の影から足音が響いてくる。

「ふっ、人間の割に勘が良いようだな。益々食欲をそそられる」

長い耳と時計の刻印。

暗闇の中でもその不気味さを視認できる異形 クロックラビット  
レジェンドルガだ。

「きゃっ!?! なんなのこの化け物!」

一般人らしく悲鳴を挙げる奏。黒菜と悠子が「ちゃんと演技する気あったのか……」と感心したのは言うまでもない。

「では早速……恐怖に染まったライフエナジーに乾杯……ッ!?!」

吸命牙を浮かべるクロックラビットレジェンドルガの動きは緩慢だった。

変装した三人を、ただの無力なエサとしか見ていなかったからだ。

「なんて、ね」

もちろん、その隙を見逃す奏ではない。

長髪を靡かせながら、クロックラビットレジェンドルガまでの距離を一気に詰める。

力の乗った重い蹴りが、クロックラビットレジェンドルガの腹に決まった。

「ぐおっ!？」

時間操作を使う暇もなかったのか、クロックラビットレジェンドルガは数歩後退しながら、奏を睨んだ。

「くっ……貴様は……!」

「あら意外、手加減ナシだったのにもう立ち上がるなんて……イケメンで強いよね! 嫌いじゃないわ!」

言いながら、奏は快活に笑った。その笑みに含まれた皮肉っぽさから、ようやくクロックラビットレジェンドルガは気付いたらしく、

「成る程……まんまと誘き出されたというわけか」

「そーゆーこと。ふふふ、警戒心が足りないわね」

「ああ、不覚にも一本取られたとしか言えんよ。キング代行ともあろう者が、まさかこんな恥も外聞も捨てた策を打つとは思わなかったのだな」

「褒め言葉として受け取っておくわ。 さあみんな、イケメン狩りの時間よ！」

奏がパチンと指を鳴らせば、紅い陽炎が駐車場を包み込む。貼られた『封絶』の奥から、ずつと三人を尾けていたシャナ、マジヨリー、ヴィルヘルミナが現れた。

「今度は逃がさない」

夜傘から贅殿遮那を取り出し、シャナが髪を紅蓮に染めた。

「クロノ、僕達も」

「ああ。 キバーラ、行くぞ」

「ええ、任せなさい」

黒菜と悠子 もとい、クロノと悠二がキバーラとイクサナツクルを携える。マジヨリー、ヴィルヘルミナもペルソナとトーガを纏



い、準備は万端だ。

「ふむ。この人数を相手取るのは、流石に無理だな」

「ハッ、今更1対1じゃないなんて言い訳はしないわよね？」

「ふっ、まさか」

マージョリーの嘲笑に応えるクロックラビットレジェンドルガの声に、焦りは見受けられなかった。

「私は用心深さが売りでね。変装は想定外だったが」

クロックラビットレジェンドルガが取り出したのは、クロノとの戦いで配下を召還した四枚のAのトランプ。  
しかし　そこに絵柄はない。

「多人数を相手にすることは、予想していたよ」

『！！』

さっきのクロックラビットレジェンドルガと同じく、完全に反応が遅れた。

既に召還され、近くに潜ませていたのか、四体のトランプラビット

達が六人に奇襲をかけてきた。

だが、攻撃を加えるような真似はせず、トランプラビット達は四体がかかりで、奏、マージョリー、ヴィルヘルミナの三人を羽交い締めにする。

「まっ、私を縛るっていつの!?!」

「なによいつら、鬱陶しいわね!」

「くっ、こんなものっ!?!」

三人が拘束を振りほどくよりも早く、トランプラビット達の足元に陣が浮かび上がる。

強烈な閃光が周囲を包み、次にクロノ達が目を開けた時、三人とトランプラビット達の姿は影も形もなかった。

「奏夜!」

「マージョリーさん!」

「ヴィルヘルミナ!」

「すまないが、彼らには退場して貰ったよ」

クロックラビットレジェンドルガが不敵に顔を歪める。

「私の力の都合上、転移魔術で飛ばせるのは彼らが限界だったが……まあ、戦力の分散にはちょうどよからう。それに、三人相手程度ならばどうとでもできる」

クロックラビットレジェンドルガの言い分は、少なからずクロノ達三人の癪に障った。

確かに、総合的な实力を見れば、あの奏夜達を強制移動させるのはいい選択だ。

しかしそれでも、複数を相手取るという状況で、自分達がそこまで劣ると思えない。

当然、侮辱された三人の怒りは募る。

「ずいぶんと自信満々ね。驕りは負けを呼ぶわよ」

「こつちだって、アンタに負けなだけの強さはあるー！」

「いくらお前が強くて、前の戦いで手の内は知れてる。もう対策は……」

「確かに不利ではある」

だが、とクロックラビットレジェンドルガは余裕の態度を崩さない。

「不利なのはそちらも同じだろう？　特に異世界のキバよ　今のお前では、本来の実力を発揮できまい？」

言われてすぐには気付かなかった。  
しかし、それは一瞬のこと。

「……………あっ！！」

思わずクロノは声をあげる。さっきまで側にいた筈の、自分に力を与える相棒の姿が、どこにも見えなかった。

「お前！　さっきの魔術でキバーラも飛ばしてたのか！」

「飛ばしたのが三人、とは誰も言っていなかった筈だな。　これで貴様は戦えまい」

相手の余裕の原因がわかってても、クロノは歯噛みするしかない。クロックラビットレジェンドルガの言う通り、多少鍛えているとはいつても、クロノは普通の人間。

レプリカキバに変身不可ともなれば、それは戦う力を失ったに等しいのだ。

「さて、時間もそうはない。連中が戻ってくる前にケリをつけさせて貰うぞ。『実験』の完成まで、もう少しなのでな」

時計の刻印の輝きが、クロックラビットレジェンドルガの戦闘準備が整ったことを告げる。

「っ！」

戦えないクロノを庇うように、シャナが正面に立つ。

「クロノ、下がって」

「シャナ、でも……」

「今の状況でワガママが言えないことくらい、クロノならわかるでしょ」

言葉に詰まるクロノだが、反論はない。

今の自分は完全に足手まとい。十分に戦えるシャナ達の邪魔をするくらいなら

「クロノ、これ」

「えっ？」

ぐい、と悠二がクロノの胸に何かを押しつけてきた。受け取ってみると、それは金と黒でカラーリングされたメカニカルな手甲。

「イクサナツクル……？」

「変身できないんだろ。クロノが使ってくれ」

キバ ラとはまた別の、仮面ライダーに変身する力。それを託した悠二は何の躊躇もなく、クロノにイクサナツクルの使用を促してくる。

「……けど悠二、お前はとうするんだよ」

「僕は大丈夫だよ。普通の人間とは、少し創りが違うから」

見た目こそ人間だが、今の坂井悠二は『零時迷子』を宿したミステス。

しかも以前の戦闘で“千変”シュドナイの腕を吸収し、並みの徒を凌ぐ程度の力を持ち合せている。

生身の強度がクロノより勝っている分、ここでイクサナツクルを渡

すのは妥当と言えた。

「これなら三人とも戦えるし、戦略の幅も狭まらない。問題ないよね、シヤナ、アラストール」

「うむ。確かに最善の処置ではあるが……」

「悠二、その格好で戦う気？」

二人が指摘したのは、ロングスカートというこの上なく動きづらそうな悠二の女装姿。

シヤナとアラストールの声色からは「そんな格好の奴と肩を並べたくない」という本心がありありと感じられた。

「……先生じゃないんだから、こんな格好で戦えるほど僕は器用じゃないよ」

二人の視線に若干へこみながら、悠二はスカートを外す。

その下には、スカートの裾から見えない程度に折り返されたスポンが覗いていた。

これなら戦いに支障はないだろう。

「とにかく、それはクロノが使ってくれよ。クロノならイクサも絶対使いこなせるからさ」

頼りにしている、そんな悠二の期待が伝わってきた。  
もう一度悠二とイクサナツクルに目を移しながら、クロノはにっ  
と笑う。

「悪いな、借りるぜ！」

クロノはイクサベルトを腰に巻き、ナツクルを手に押し当てる。

『レ・デイ・ー』

「変身！」

『ファイ・ス・ト・オ・ン』

電子音が鳴り、右手を左側から半円を描くように移動させ、ナツクルをベルトに装填。

アーマーの映像がクロノの身体に重なり、仮面ライダーイクサ・セーブモードへの変身を完了させる。

普段使うトワイライトの代わりにイクサカリバーを構えるイクサ。それに伴ってシャナが贔殿遮那、悠二が海神刃と吸血鬼の切っ先を、クロックラビットレジェンドルガに向ける。



「ほづ、やる気だな小童共が……よかろづ、身の程を知るがいい！」

クロツクラビットレジェンドルガの雄叫びと共に、戦いの火蓋は切  
って落とされた。

第三十二話・アンブノ重なる魂は永遠に・Aパート（後書き）

コラボ編最終バトルスタート。

・揺るぎない奏の言動。京水節が楽しくて仕方ないww

・クロノイクサ登場。……カタカナにすると滅茶苦茶カッコいい名前ですね。クロノイクサ（知るか

音也と悠二が一号、名護さんが二号の変身ポーズを踏襲してるので、クロノの変身はV3を意識してみました。

次回は大人チームvsトランプラビット。

お楽しみに！

第三十二話・アンプ/重なる魂は永遠に・Bパート（前書き）

作者からのお知らせ

作者はまだシャナ最終巻読んでないので、感想覧にネタバレは書か  
んでください。……ちよつと前に、何の前触れもなくネタバレを  
感想覧に書いてきた人がいたので。

### 第三十二話・アンプ/重なる魂は永遠に・Bパート

「はぁ……」

現在、戦闘面では力になれない梓は、実質貸し切りのマル・ダムールの席に座り、窓の外を見つめていた。  
店内を掃除していたマスターがその側を通って、

「梓ちゃん、コーヒー冷めちゃってるよ」

「へっ？ あっ！」

はっと我に返って、梓は淹れて貰ったコーヒーの湖面から、白い湯気が立ち上らなくなっているのに気が付いた。  
慌ててそれを飲み干す姿に、マスターは苦笑いを浮かべて、

「おかわりはいるかな？」

「えっと……じゃあ、よろしくお願いします」

なんとなく気持ち落ち着かず、梓は流れるように答えていた。  
なんとなく彼女の心情を察したのか、マスターは安心させるように言う。

「心配事はクロノくんかな？」

「！」

「大丈夫大丈夫。奏夜くんもシャナちゃんもいるし、すぐ帰ってくるさ」

「……はい」

少し平静さを取り戻した梓に「うんうん、若いっていいねえ」と呟きながら、マスターは店の奥に消えていく。

……普段通りと言えば普段通り。自分にできるのはクロノを信じて待つことだけ。

奏夜やシャナもいるのだし、今回はあまり心配はしていない。

しかし、梓から不安は消えなかった。

もう慣れたと思っていた事実が、昨日のシャナや吉田とのやり取りで、再び梓の脳裏に浮上してきていたのだ。

(私は……このままでいいのかな)

もつとクロノさんの為に、できることがあるんじゃないだろうか。とりとめのない考えを羅列しながら、机に頬をつけた時だった。

ドガンッ！！

「にゃっ!?!」

大気を震わせる派手な音は、店の外から聞こえてきたようだった。何事かと、梓はマル・ダムールのドアを開け放つ。

「ちよ、中野危なっ!!!」

「きゃあっ!!!」

息を呑む梓の目の前に、無数の火炎弾が迫っていた。慌てながらも、仮面ライダーキバ・ガルルフォームは無駄のない動きで、火炎弾を斬り払う。

「く、紅さん？」

「あちちち……おう中野。怪我はなかったか？」

「は、はい。あの、これって一体……」

「んー。話せば長いことながら　　つとー!」

店前の広い空間は戦場と化していた。

梓の質問に答えながらも、キバGFはクロックラビットレジェンドルガの分身体であるクローバールビットとスピードラビットの攻撃  
錫杖と長剣を阻む。

その向こう側では、ペルソナを装着したヴィルヘルミナと、トーガに身を包むマージョリーが、残る二体の相手をしていた。

「ちよつとへマやらかしちまってな。クロノ達と分断された。今あいつらは、あのウサギ野郎と戦ってる」

「えっ!?!」

「しかも、キバーラまでこっちに着いて来ちまってな。実質、クロノは変身不可状態だ」

「そ、それって……!」

つい先日の記憶がフラッシュバックする。

やられる一歩手前まで追い詰められたクロノの姿、しかも今の彼はレプリカキバにすらなれていない。梓にとっては最悪のヴィジョンだ。

「しかし中野、いいところに来てくれたな。お前に少し頼みたいことがあるんだが」

「えっ？」

頼み事？ 紅さんが、私に？

困惑する梓をよそに、キバGFは彼女の手白い何かを渡す。

「きゃぷ〜……羽痛い〜！」

「あつ、キバーラさん!？」

見知ったコウモリの姿がそこにはあった。しかし、その小さな羽には無数の傷がついている。

「キバーラさん、大丈夫!? 酷い傷……」

「うう〜……い、痛いけど我慢できないほどじゃないわ……けど、飛ぶのはちよつと無理……」

「そう。キバーラは自力でクロノのそこには行けない。だが見ての通り、俺達は手が離せねえ。だから って俺が話してんだから邪魔すんな!！」

『ギツ!?!』



襲いかかってきたクローバービットを蹴飛ばし、梓に向き直るキバGF。

「お前がキバーラをクロノに届けてくれ、中野」

まっすぐに告げられた言葉。  
しかしそれが、言うほど簡単でないことは、梓にもすぐ伝わっていた。

「届ける場所は、キバーラがクロノの中に残留する魔皇力を逆探知してくれるから問題ないが 渡すまでの安全は、正直保障できない」

「……戦いに巻き込まれるかも知れない、ってことですよね」

「そうだ。俺達のもとより、向こうの連中も自分のことで手一杯だろうから、お前を守る余裕のあるやつはいない」

お前は一人だ。

語られた事実は予想以上の重みとなって、梓にのしかかった。  
守られる側にはいない 覚悟があるが無かるうが、一人の少女が立つには不釣り合いな場所。

「梓ちゃん……」

キバ　ラが目で訴えてくる。怖いなら行かなくてもいいと。

ここで梓が断れば、この白いコウモリは張ってでも相棒のもとに向かうだろう。

それは、今までの付き合いから十分にわかっていた。

しかし、

「強制はしない。俺達もなるべく早く片付けるから」

「行きます」

短く、梓は言い切った。

「私に、クロノさんの所へ行かせてください」

淡々としたその態度。だがそれは、梓の決意がより強固なものであることを示していた。

恐怖心が消えたわけじゃない。

だがそれ以上に、ここで走りださないことの方が梓にとっては怖かった。

(クロノさんが危ないかもしれない)

動き出す理由に、危険を冒すのに、他の理由があるだろうか。  
クロノが梓を危険な目に合わせたくないという構図は、何も一方通行ではない。

(私だって　　クロノさんが傷つくのは嫌だ)

クロノさんが好きだから。

誰がどう言おうが、この気持ちだけは否定させない。  
だから私は、クロノさんを助けに行くんだ。

瞳に映る梓の心境を読み取ったように、キバGFは仮面の下でニカ  
リと笑う。

「よく言った」

徐にキバGFは胸に手をやると、彼の手に紅い光が灯る。その光は  
点滅しながらふわふわと移動し、なんとキバラーの中に入り込んで  
いった。

これにはキバラーも目を丸くし、

「きゃぷっ！？　な、なに今の光！」

「俺からのプレゼントだ。できればその力、使うような状況にならなきゃいいんだがな……じゃ、頼んだぜ。中野」

「　はいっ！」

言って、梓はキバーラをポケットに隠し、全力で駆け出す。

『ギッ！』

無論、分身態達は、戦場に割り込んだ者を逃がすような気性でもない。

スピードの刃が、梓へと走った。

「おっと！」

しかし即座にキバGFが行く手を阻み、ガルルセイバーの刃との間に火花が散った。

「恋人の為に頑張る女の子の邪魔すんのは、無粋ってもんじゃねーのか？」

ガルルセイバーが振り抜かれ、スペードを押し返す。

「おいヴィル！！ もういいぞ！！」

「むっ」

分身の一匹を相手にしていたヴィルヘルミナが、指を天に掲げた。陽炎が周囲を包み込み『封絶』が形成される。

仕切り直しのつもりか、分身態達は唸りながら、一度ひとところに集まった。スペードとクローバーの他には、盗賊刀と弓が一体になったような武器を持つハートラビット、拳銃を携えたダイヤラビットがいる。

「やれやれ、ちょこまか動いて鬱陶しいわね。こいつら」

「あくまでも足止めが目的なのであります。防御と回避主体の戦術であります」

キバGFの両隣に降り立つマジヨリーとヴィルヘルミナ。疲労の影はなく、どちらかといえば面倒くさそうな口調である。

「なんだお前ら、もう弱音吐いてんのかよ？」

「バカ言ってるんじゃないわ。そもそも、アンタが『まだ封絶貼るな』なんて言うから、思うように大技使えなかったんでしょ？」

「ありゃ、そうだったけ？」

とぼけるキバGFに、二人は揃って溜め息をついた。

「ソウヤ、タイミングがどうだとか言ってたけど、アンタ確実に狙ってたでしょ。アズサにキバーラ届けさせること。『封絶』貼ったアズサがこっちに干渉出来ないものね」

「……桜井クロノを支援する為に仕方がなかったとはいえ、中野殿を危険に晒すつもりでありますか？」

「おいおい、らしくないなヴィル。こういう合理的っぽい考え方はお前の得意技だろうに」

言いながら、キバGFは声の調子を真剣なものにして、

「誰にだって頑張り時はある。中野が本気でクロノの役に立ちたいってんなら、絶対に成功するさ」

「……相変わらず、立ち止まった人間を走らせるのが上手いこと」

「そんなに誉めるな。照れるぜ」

皮肉も通じない感性だけなら誉めてもいいんだけど。  
マジヨリーは内心でそう呟きながら、倒すべき分身態達を見据える。

「んじゃま、こつちもさつさとブチ殺しちゃいましょうか」

「で、ありますな。彼らを信頼していないわけではないであります  
が、私達が早く合流すべきなのは変わらないこと」

「よし、じゃあ出し惜しみはしてらんねえな」

すぐにケリをつける。そう決め、キバGFが取り出したのは、黄金  
のフエッスル。

『タッロットー！』

「びゅんびゅーん！ ドラマチックに行きますよー！」

キバットの奏でる法螺貝のような深みのある音色と共に、呼び出された  
魔皇竜タッロットが、カテナの拘束を解き放つ。

「変・身！！」

封印の鍵が開き、黄金の光がキバを包み込む。  
翻る真紅のマントを合図に、仮面ライダーキバ・エンペラーフォー  
ムが降臨した。

「さあ、行くぜ！！」

召還したドツガハンマーを軽々と担ぎ上げ、キバEFはまずクロ  
バーとハートを相手にする。

錫杖と盗賊刀をハンマーの柄で防ぎながら、

「せいっ！！」

『ガギツ！！』

ドツガハンマー特有の強烈な打撃を叩き込んでいく。

「こいつらは引き受けた！ 残ったヤツ頼むわ！！」

「言われなくてもっ！！」

片やマジョリーは、ダイヤを標的にしていた。



ダイヤの持つ銃からは、絶えず魔皇力で強化された弾丸が放たれているが、マジヨリーの纏うトーガの前ではほぼ無力。

『ヒーヒツヒ！ んな豆鉄砲じゃ欠片も響かねえぞお！！』

振り被られた豪腕が、ダイヤの頭部を揺らす。

『グガツ！』

手加減なし、しかも脳髓を揺らすポイントへの一撃に、ダイヤの動きが止まった。それは決定的な隙。

『火加減は？』

『塵も残さず！』

屠殺の即興詩と共に吐き出された火炎流が、ダイヤを一瞬で飲み込む。

断末魔の悲鳴を挙げることさえ許さず、ダイヤラビットは戦場から消え去った。

「絶好調！」

「ヒツヒ、ちっと物足りなかつたなァ！」

高揚した雄叫びの裏で、ヴィルヘルミナもまた残るスペードラビツトと向かい合っていた。

しかし、スペード側は疲労の色が濃く、剣を構える姿も崩れかけている。

「所詮は分身でありますか」

『単調』

ヴィルヘルミナは仮面の下の表情を一切崩さず、リボンをまるで挑発するように揺らした。

『ギガアアアッ！』

それに乗ったかどうかは定かではないが、スペードは剣に魔皇力を集中させ、ヴィルヘルミナに特攻をかける。

まあ、冷静であつてもなくても、ヴィルヘルミナにとっては同じことだったのだが。

「捕縛」

『承知』

その短いやり取りの内に、ヴィルヘルミナのリボンは剣ごとスピードを絡め取り、宙高く釣り上げていた。

リボンを使い攻撃を受け流す、剛よりも柔の技を得意とするヴィルヘルミナにとって、剣による白兵戦を挑むスピードは相手にならない。

最初のように乱戦状態にならなければ、確実に仕留められる。

彼女は静かにスピードを一瞥すると、指鳴らしを合図に リボンへ存在の力を注ぎ込んだ。

『ギイイイツ!!』

リボンからかけられる圧力がスピードを即座に押しつぶした。隙間からは、亡骸であるガラスの破片がパラパラと落ちてくる。

「身の程を弁えていなかったようですな」

『失笑』

ヴィルヘルミナとティアマトーはただ冷たく、消えたスピードラビットに言葉を送った。

残るは二体。キバEFが戦うハートとクローバーの個体だけ。

「チツ、本当に面倒だなこいつら」

キバEFが舌打ちするのももつともで、最初の一撃を叩き込んで以降、ハンマーが当たらなくなったのだ。ちょこまかと動き回り、少しずつ攻撃を加えていくヒット&アウェイ。鬱陶しいことこの上ない。

(俺はヴィルみてーな拘束技持ってないしな……ん？　ヴィル？)

キバEFの頭に電球が光った。仮面の下で悪戯を思いついた子供のように笑い、タツロットのホーントリガーに手を添えた。

「キバツト、タツロツト。フィーバー技だ」

「うえ？　けどバッシャーフィーバーの方が良くないか？」

「そうですねよ。あのすばしっこさ、ドッグフィーバーじゃまず当たりませんよ？」

「いいからいいから」

最終的に押し切る形で、キバEFはホーントリガーを引き、タツロ

ツットのインペリアルスロットを回転させる。  
揃った絵柄は、紫色の魔鉄槌。

『ドツガ・ファイバ〜〜!』

止まり木から外れたタツロット、ドツガハンマーの柄にあるアームズコネクターにジョイントする。

『カチャッ!』

魔皇力が充填され、タツロットの口からは、触れたものを捕縛する紫色のエネルギー球が生み出された。

「そら、よッ!」

キバEFは一本足でバッティングフォームを作ると、ドツガハンマーでエネルギー球を思い切りかつ飛ばした。

スピードは申し分ない。しかし直線的過ぎる弾道を描くエネルギー球は、二匹を捕らえるには力不足だ。

『ギッ!〜!』

余裕綽々といった様子で、二匹はエンペラーサンダースラップを回避する。

キバツト達の予想通りの結果だった。大振りなモーションで隙が生じたキバEFに、錫杖と盗賊刀が迫り

「まったく、無茶な振りをされたものでありますな」

二匹が紡がれた言葉に反応する隙はなかった。

回避した筈のエンペラーサンダースラップが、何故か背後から再び二匹を襲い、そのうちのハートラビットに直撃したからである。

『ギ……ギ……！！』

ステンドグラスの紋様と共に捕縛されるハートラビットに、クローバーラビットも啞然とし、攻撃の手が止まってしまっていた。

「はっ、余所見たあ余裕だな！！」

『！！！！』

キバEFの声に反応するクローバーラビットだがもう遅い。  
二撃目のエンペラーサンダースラップはすでに射出され、その身に命中。ハートラビットと同じく、もはや碎かれるのを待つのみとなった。

「ふっ、この程度のノックを受けられんようでは、甲子園には程遠いな。ふんっ!!」

エンペラーサンダースラップに捕縛された二匹を、キバEFのドツガハンマーが粉々に碎き切った。  
舞い散るステンドグラスをバツクに、キバEFはヴィルヘルミナへと顔を向けた。

彼女は既にペルソナを外していたが、いつもの無表情はやや不機嫌そうに歪んでいる。

そう、さっきの背後からのエンペラーサンダースラップは、ヴィルヘルミナのリボンによるもの。  
攻撃をリボンで受け止め、その技を自前の存在の力で制御化に起き、跳ね返す。

以前、シャナとの戦いでも見せた自在法だ。

悪びれもせず、変身を解いた奏夜が言った。

「いやいや、誠にご苦労さんでした」

「まったくであります。あんな何の前振りもなく攻撃を反射させて……私に当たっていたらどうする気だったのでありますか」

「あらら、歴然のフレイムヘイズ様が、あの程度の攻撃にも反応できないのですか？ 情けないにゃー」

「……まさか。もし対応できない時があるとするれば、安易に私の力を利用しようとする輩に呆れていた時でありましょうな」

「……」

「……」

次の瞬間には、奏夜の蹴りをヴィルヘルミナがリボンで防ぐという構図が出来上がっていた。

トムとジェリー並みに共同戦線が維持できない二人である。

（まったく、こいつら仲が良いのか悪いのか……）

傍らで見ていたマージョリーは溜め息をついて、



「ほらほら、じゃねあいはお終い。こいつら片付けたんだから、さつさとクロノ達のとこ戻るわよ」

『…………』

睨みを利かせあっていた二人だが、マジヨリーの正論には従うしかなかったらしく、

「……………続きは後程」

「ああ、完膚なきまでに泣かせてやる」

つんと顔を逸らした二人と、呆れ顔のマジヨリーは屋根の上に飛び上がり、もう一つの戦場へと向かっていった。

### 第三十二話・アンプ/重なる魂は永遠に・Bパート（後書き）

闇丸先生並びに読者の皆様、遅くなって本当に申し訳ないです……  
( < | > )

・あずにゃん始動。果たして間に合うのか。そして奏夜がキバーラに渡した力とは？  
そんな梓&キバーラの奮闘は次回にて。

・トランプラビット達。彼らの武器はそれぞれ、トランプのライダー達の武器と対応させてみました。

次回でようやくコラボ編終了です。  
子供チームは果たしてクロックラビットレジェンドルガを如何にして攻略するのか、最後までお楽しみに！！  
では（^o^）

・どうでもいい近況  
シヤナが遂に最終巻。いやー、ずっと読み続けてきただけに感慨深いですね……早く読みたいなあ。  
シヤナアニメもファイナルシーズン。個人的にはキアラの登場が楽しみです。  
それにしても祭礼バージョンの悠二……アニメの良作画で見るとマジで『誰だお前』ですね（笑）

### 第三十二話・アンプ/重なる魂は永遠に・Cパート

「UP!!」

弾丸のような速度で迫るクロックラビットレジェンドルガに、直線上にいたクロノイクサと悠二が弾き飛ばされる。

「ぐっ!!」

「うわぁっ!!」

硬質な床を転がる両者。

「消え失せる!!」

「させない!!」

追い討ちをかけようとするクロックラビットレジェンドルガだが、そこにシャナが立ちふさがる。

双剣と贔殿遮那を挟み、二人は睨みを利かせていた。

「『炎髪灼眼の討ち手』……その武勇は“貴様の代”でも顕在のよ  
うだな」

「……私の、代？」

ひっかかる物言いに怪訝そうな顔をするシャナ。

「良い契約者を見つけたようではないか。“天壤の劫火”アラストール」

『……貴様、“やはりそうなのか”』

「アラストール？」

遠雷の如きアラストールの声音が、更に低まったのをシャナは感じ取る。

クロックラビットレジェンドルガはそれを見て、何も知らない彼女を嘲笑った。

「なんだ、契約者に話していなかったのか。私がレジェンドルガが動いた時点で、お前は気付いていたのだろう？ 私の目的が一体何なのか」

『あの“時代のこと”はもはや過去の遺物に過ぎない。現代いまを守るべきこの子には余計な重みにしかならぬ』

「ふん、律儀なことだ……まあいい。私は私の役割を果たすだけなのだからな」

『また繰り返すつもりか。貴様の“主”が望む支配が、下らぬ自己満足だと何故わからぬ』

「善悪に興味はない。主が望むことを、私は為す」

UP、DOWN。

言葉が紡がれ、双剣が消えた。  
身体がずしりと重くなるのを感じながら、シャナが慌てて刀に炎を纏わせる。

「はあっ!!」

紅蓮は形を変え、生まれた火炎流がシャナ達を囲うように、ドーム状に燃え広がった。

「むっ!!」

クロックラビットレジェンドルガは攻撃の手を止めた。

（成る程……攻撃に反応できないのなら、予め全方位に防御を貼れ

ばいいというわけか)

悪くはない。

だが使えるのはあくまで防御のみ。

しかもこの炎の量。そう何度も使える技ではないだろう。

(攻撃に関しての決定打がないのなら、私の勝利は揺るがない)

そう考えつつも、クロックラビットレジェンドルガは警戒を怠らない。

ただじつと、炎のドームの奥にある、三人分の気配に意識を集中させる。

その一方で、中にいる三人はというと、

「くそっ、やっぱ速えーな。全然攻撃が当たらない」

「これじゃ押し切られるのも時間の問題だよ。僕らの考えた『戦術』は、レプリカキバの力がないと使えないし……」

対応策があっても実行できない。クロノイクサと悠二はもどかしさに齒噛みする思いだった。

こうなればキバークが早めに戻ってきてくれるのを期待するしかないが、正直その時間さえも惜しい。

「とにかく、キバーラが帰ってくる時間を稼ぐしかないね」

「現状じゃそれしかないか。おいシャナ、お前は……シャナ？」

返事は帰ってこない。

当のシャナは険しい表情で、胸元で光るペンダントに目を落としていた。

「アラストール……何か知ってたの？ あいつの目的について」

『……確証は無かったがな。混乱を避ける為、言わずにおくべきだと判断していた』

「本当に？」

シャナの念押しにアラストールは、

『ああ、本当だ』

「そう」

それ以上シャナは何も聞かなかった。

アラストールは嘘はついてない。けど、何か隠してる。それが察せられない程、シャナは鈍感ではない。

だが、話してくれないことに不満はなかった。

何か言えない理由があるのは明らかだし、今更隠し事の二つや二つ、気にするような仲でもない。

伊達にフレ임ヘイズになる前からの付き合いではないのだ。

(今は、戦いに集中しよう)

雑念を頭の隅に押し込み、シャナはクロノイクサを見る。

「ごめんクロノ。ちょっと考え事してた」

「いや、別に気にしないでいいけど……」

咳払いをしてクロノイクサは続ける。

「取り敢えずキバーラが戻るまでの間、俺とお前メインで、あいつの足止めをする」



「キバーラが戻るまで？　何か狙いがあるの？」

「ああ、昨日俺と悠二で組んだ作戦がある。けどそれは、悠二とキバーラがいなきゃ使えねーんだ」

『ふむ。その策、あやつを確実に仕留められるものなのか？』

「确实……とまではいかないけど、成功すれば反撃の突破口くらいは開けると思う」

悠二の見積もりは気弱なものだったが、シヤナ達からすれば十分な話だった。

どの道このままでは防戦一方。どんな奇抜な策であれ、やる価値はある。

「わかった。じゃあ取り敢えず、悠二は後退してなさい。作戦にお前が必要なら、負傷させられるわけにはいかないわ」

「うん、わかった。……二人とも、気をつけてくれ」

「ああ、ありがとな悠二。さて、じゃあそろそろ行くか！」

徐々に炎のドームがかき消えていく。

それが完全に消え去るか消え去らないうちに、二人は炎の外へと飛び出していた。

「来るか！」

紅蓮の光を浴びながら、特攻をかけるシヤナとクロノイクサ。クロックラビットレジェンドルガも既に臨戦態勢を取っている。

（もう正面からの攻撃に対応する必要はないな）

だいたいの行動パターンは見せて貰った。これなら鈍足化能力を使うまでもないだろう。

「UP」

双剣で受けるようなことはせず、クロックラビットレジェンドルガが消える。

二人の剣は空を切るだけに終わった。

（使ったのは加速能力だけ！）

そう、クロックラビットレジェンドルガは目算を誤っていた。鈍足化能力を使っていないなら　まだ追える。

「逃がすかよ！」

クロノイクサはイクサカリバをガンモードに。  
クロスシールドのディスプレイに映る映像に意識を集中させた。

これぞ、イクサのサーチシステム。

積み重ねられた過去の戦闘データから敵の動きを予測し、先回りの攻撃を加えるプログラムである。クロノがイクサを使うのは初めてだが、ディスプレイに表情されるマニュアルのお蔭で、この機能にも気が付いていた。

(やっぱりイクサもすげえな……)

レプリカキバにはない、メカ系統のライダーならではの能力だ。

やがて、太陽のシンボルが視線の先で蠢き、高速で移動するク  
ロククラビットレジエンドルガを捕捉する。

「そこだ！」

「ぐおっ!?!」

引き金を引くクロノイクサ。銃器に慣れていないからか、弾丸は数  
発かするだけ。しかし、狙いはダメージではない。

「シヤナ、今だ!!」

「わかってる!」

贄殿遮那の刃が、クロノイクサによって動きの止まったクロックラビットレジェンドルガを袈裟に斬りつける。

向こうも咄嗟に反応してきたので、ダメージは右腕の傷のみだが、それでもこの戦いにおいて、攻撃らしい攻撃がヒットした。

傷を見ながら、クロックラビットレジェンドルガは凄惨に笑う。

「やるな。慣れ親しんだキバの鎧を使わず、私に手傷を負わせるとは」

「……どーも」

余裕そうな言葉とは裏腹に、クロノイクサの焦燥は消えない。それはシヤナも同じだった。

「しかし、対応できるのは加速能力のみ。そんなものは減速化を加えれば何の意味も持たん!」

UP・DOWN!!

二人の時間が支配され、クロツクラビットレジェンドルガは逆に加速する。

高速攻撃＋反応速度低下のコンボが、クロノイクサとシャナに襲いかかった。

「ぐ、があッ!!」

「う、ぐ……!!」

一気にダメージ量が逆転した。

イクサのアーマーからは火花が上がり、シャナの肌はあちこちが裂け、その髪の色よりも濃い赤が流れている。

「シャナ! クロノ!」

「悠二、お前は出てくるな!」

「で、でも……」

「お前が出てきても状況は何も変わらない……黙って待ってる」

悠二を制すクロノイクサだが、その言葉にはかなりのやせ我慢が混じっていた。

「シャナ……まだ行けるか?」

「余裕、よ……」

シヤナもクロノイクサほどの痛みは無さそうだが、決して楽ではなさそうだった。

「まだやるか。ご苦労なことだ」

「言ってる。今にその腹の時計ぶっ壊してやる」

張り詰めるような空気が再び漂い、戦いが再開しようとするま  
さにその時だった。

「クロノさん！」

「！」

聞き知った声に振り返ると、そこには髪をツインテールにした小柄な少女。

「梓!？」

どうして、という疑問が浮かぶより早く、彼女のポケットから覗く白い影が視界に映る。その相棒、キバーラが声を張り上げた。

「クロノ! 早くこっちに来なさい! 梓ちゃんは『封絶』の中に入れないし、知覚さえもできないんだから!」

「無茶言うな! 手が離せないのわかるだろ! ってかお前一人で来ればいいだろうが!」

「羽根怪我してて飛べないのよ! いいから早く!」

キバーラの呼び掛けに、クロノイクサがようやく動いた。全力で、封絶が生んだ陽炎へと走り出す。しかし

「させん!」

クロックラビットレジェンドルガの刻印が光り、封絶と現実のちよつと中間に、魔術による壁が貼られた。

「何っ!？」

イクサカリバーで壁を斬りつけるが、ビクともしない。かなりの防御力を誇る魔術のようだ。

「……用心深いじゃねーか」

「あのキバの鎧を持ったところで、私に適うとは思えんがな……念には念をだ」

皮肉を込めながらも、悔しさに歯を噛み締めるクロノイクサ。

（ようやく光明が見え始めたと思ったのに……！）

今の力で現状の打開は不可能。唯一の希望も結界の外。全員の勝利へのイメージは、いよいよ持って翳りを帯び始めていた。

「キバーラさん、中はどうなってるんですか!？」

「マズいわね。結界貼られたからクロノがこっちに来られなくなつたわ。私だけなら、次元のオーロラで通れると思うけど……」

自分の羽根を恨めしげに見るキバーラ。

こんな状態で封絶に入っても、即座に撃ち落とされてしまっただろう。



だが

「梓ちゃんはここにいて。これから先は私一人で行くから」

「で、でもキバーラさん、その羽根じゃ……」

「関係ないわよ。目の前で私の相棒が痛めつけられてるんだから、じつとなんかしてられないわ」

「……っ、けど、私は……」

握り拳を作る梓。

無理もないだろう。ここまでクロノの為に必死に走って、辿り着いた先が結局『蚊帳の外』という、梓にとっては最も望まない結末だったのだから。

（私は、クロノさんを助けたくてここに来たのに……）

また、邪魔されるのか。

日常と非日常の境という、どうにもならない差に。

（……嫌、だ）

はつきりと、梓はそう思っていた。

クロノさんが守りたいのは、日常にいる私？ ふざけるな。

クロノさんが傷付いてるのを黙って見過ごすくらいなら、日常などいるものか！

『遅かれ早かれ、いつかきつと来る。どんな誰にも戦うべき時が。』

だから梓は、心構えだけしておけばいい。その時になって、立ち向かえるように『

シヤナの言葉が蘇る。そう　きつと、今がその時。

「…………キバーラさん。魔皇力があれば、封絶の中に入れるんですよ  
ね」

「？　ええ、できるけどそれが何か…………」

言いかけて、キバーラは口を閉ざす。

わかったからだ。梓が何をしようとしているのか。

「梓ちゃん、まさか！」

「そのまさかです。あれならキバーラさん一人が封絶に入るよりずっと安全ですし、結界だって破れるかも知れません」

「けど、代わりに梓ちゃんの危険が増えるじゃない！ それに『アレ』への変身能力はまだ完璧には」

「キバーラさん」

諭すように、梓は言葉を紡いでいく。

「私がやりたかって思ったことなんです。だから お願いします」

真っ直ぐな視線がキバーラを射抜く。

揺らぎのない力。瞳に宿る意志に、迷いは欠片も見られなかった。キバーラは沈黙していたが、やがて根負けしたように、

「あーもうっ！！ あなた達二人って本当にお似合いのカップルだわ！ 無茶なことかそっくり！」

呆れ果てつつも、キバーラは梓の頼みを承諾してくれた。

「二分よ！ それ以上は危険だし、それに私だって、梓ちゃんに怪我して貰いたくないんだからね！」

「はい、ありがとうございます！」

己を鼓舞するように、梓はキバーラを右手に持ち、そのまま正面に掲げ

「変身」

壁が砕けたのは、本当に突然だった。

『！』

全員が驚愕に顔を染めながら、結界を破った戦士の姿を見つめる。白と紫を基調とした鎧に、細身の女性らしいラインを映すシルエツト。蝙蝠を模した仮面に、ベルトにはキバーラが一体化して止まっている。

「あれは……」

クロノイクサはその姿を知っていた。かつて、まだ弱く幼かった自分を必死に守ってくれた、想い人の覚悟の結晶。

「貴様……何者だ！」

「仮面ライダー……キバーラ！」

変身した梓は、誇るようにその名を叫んだ。キバーラサーベルを携える姿は優雅で、美しくさえある。

「ふん……一人増えたところで、私の勝利に変わりはないわ！」

UP・DOWN!

再びの高速、減速のコンボ。全員の身体が鉛を入れられたように重

くなる。  
一気にケリをつける。その腹積もりで、クロックラビットレジェンドルガはキバーラへと迫った。

「あ　　ず　　さ！」

重い口でクロノイクサは悲鳴に近い叫びを上げるが、どうにもならない。  
走る双剣はキバーラを捉え、その胸元を刺し貫く

ガキインッ！

「なっ！？」

聞こえたのはキバーラサーベルが双剣をへし折った音。  
クロックラビットレジェンドルガの動揺は凄まじかった。  
何故ならこのスピードに支配された空間の中で、キバーラは通常のスピードを保っていたのだから。

『ウエイクアップ』

キバーラのコールと共に、仮面ライダーキバーラの背中から目映い翼が生まれる。

「はあああああっ!!！」

飛翔による加速を付与した斬撃『ソニックスタップ』がクロックラビットレジェンドルガに牙を剥いた。

「がああああああ!?!」

クロックラビットレジェンドルガを吹き飛ばし、キバーラはゆつくりと着地し、自分の姿を見た。

「あ、あれ？ 前に変身した時、こんな格好でしたっけ？」

「これは奏夜の渡してくれた力ね。……まったく準備がいいといひかなんというか」

無敵の時間操作を破ったキバーラの姿に、今後は悠二のシャナが声を挙げた。

「悠二、あれって……」

「うん。先生が、前に使ってた……」

そう、キバーラが奏夜から貰っていたのは、彼の力の一部。  
これにより、今の鎧は奏夜がキバーラを使った際の姿　赤を基調  
とし、クロックラビットレジェンドルガと同じ加速能力を持つ『仮  
面ライダーRキバーラ』へとフォームチェンジしていたのだ。

先程、キバーラがクロックラビットレジェンドルガに反応できたの  
もこの為だ。

加速能力を使って、速度の差を0にしたのである。

「うっ……」

突如、くらりとRキバーラの身体が揺れた。

「あ、あれ？　おかしいな、まだ二分、経ってないのに……」

「ヤバ、Rキバーラの使用で制限時間が削れたんだわ！　クロノ

！」

「！」



キバーラの呼びかけに、クロノイクサはすぐさま変身の解けかけた梓の元に走り、シヤナと悠二もそれに続いた。

「シヤナ、封絶解除しといてくれ！　このままだと梓が止まる！」

「わかった！」

シヤナが指先を掲げ、紅蓮の炎が掻き消えていく。

地面に倒れかけていた梓は、クロノイクサがしっかりと抱きとめていた。

「お、おい梓、大丈夫か！」

「魔皇力の悪影響ね……。変身した時間が短かったから、見たところ普通の疲労と変わらないわよ……」

梓のお腹の上でバテたキバーラの見立てにひとまずは安心するものの、クロノイクサとしては気が気でない。  
やがてゆっくりと、梓が目を開けた。

「あ、クロノさん……。大丈夫、でしたか……？」

「馬鹿！　俺より自分の心配しろ！　あんな無茶しやがって……」

「あ、はは……いつものクロノさんほどじゃ、ないですよ」

梓は力無く、しかし満ち足りた表情だった。

(ちょっとは、力になれたかな……?)

結局は私の我が儘だったのかも知れない。守られっぱなしの自分を  
変える為の、虚しい自己満足。

けど 少なくとも梓に後悔はなかった。

クロノに笑いかけて、キバーラを受け渡す。

「クロノさん……怪我しちゃ、嫌ですからね」

「……」

「私だって、クロノさんが傷つくの……怖いんですから」

それは 梓の真摯な気持ちだった。

クロノイクサは無言のまま立ち上がり、

「シャナ、梓のこと頼むよ。あとは、俺と悠二で何とかできる」

「……任せて、いいのね」

「ああ。　それと梓」

イクサの変身を解除したクロノは、振り返ってその言葉を告げた。自分の為、ここまで頑張ってくれた恋人に。

「ありがとな」

「……！」

梓にとって、充分過ぎる賛辞。

頑張りは無駄じゃなかった。それだけで梓の顔は綻ぶ。

「ただし、あとで膝枕の刑だから、それは覚悟しとけ」

「えっ、ちょ、クロノさん！？　この流れで許してくれないんですか！？」

「前にも言ったよな？　無茶は無謀の始まり、身を滅ぼすって」

「うっ……」

確かに言われた。

前、電王と共に戦った際、似たような状況でイメージに身体を貸した時だ。

「ま、今回はしょうがないことだったが……」

「じゃ、じゃあ……」

「けど、なんか釈然としないものがあるからペナルティー決行だ」

「理不尽だ　っ!?!」

怒ってる。

マジ切れってほどじゃ絶対じゃないけど、確実にクロノさんは怒ってる。

「や、せめてしっぺとかにしてくれませんか!?　あの罰すっ」

く恥ずかしいんですよ!」

「……」

「無視されたっ!?!」

羞恥心増量確定の罰に沈む梓をシャナに任せ、クロノは悠二にイクサを返す。

「イクサ、ありがとな。悠二」

「気にしないでよ。さ、ここからが本番だ」

「お喋りは済んだようだな。小童ども」

正面を睨む二人。

ソニックスタップによって吹っ飛ばされたクロックラビットレジエ  
ンドルガ　その瞳にもう余裕はなかった。

しかし、クロノと悠二の目にもまた、恐れは存在していない。

「クロノ、行くよ!」

「ああ!　キバーラ!」

「うふふ、か〜〜ぷっ  
」

クロノの頬にステンドグラスの紋様が浮かび、腰には灰色のベルト  
が巻き付く。  
片や悠二はイクサベルトを装着し、イクサナックルを手に押し当て  
た。

『レ・ディ・ー』

『変身!〜!』

クロノに巻き付く光の鎖が弾け、悠二にアーマーの映像が重なる。真打ち。

キバ・レプリカフォームとイクサ・セーブモードだ。

「出し惜しみはナシだ。一気に決めるぞ!!」

気合い十分にキバRFが取り出したのは、灰色のフェッスル。

『フューザードラン!!』

キバーラがそれを吹き鳴らすと、次元の裂け目から灰色のドラゴン  
フューザードランが召還された。

「フューザー。モード・断刀!」

「ハッ、お任せを!!」

フューザードランが、キバRFの持つ剣、トワイライトへと沈み込むように同化。

充填された力はトワイライトは紅い光で包み、その形状を変化させる。

大きく反った刀身に、峰には鋭く研ぎ澄まされた六本の牙。

鏢のない刀のようなフォルムの武器。それが二本出現していた。

フューザーによるトワイライト強化形態 断刀・鋏ハサミである。

「ほう、ドラン族による融合強化か。大層な武器を持っているが、それでも」

「お前には及ばない、か？」

切り札とも言つべき武器を否定される。しかし、キバRFは焦ることなく、左手の刀を右腰に当て、右手の刀を肩に担ぐといういつもの構えを取った。

「確かに、これだけじゃお前には届かねえ。けどな」

「僕もいるってこと、忘れないで欲しいね」

並び立つイクサが、海神刃を召還。注ぎ込まれた存在の力が、蒼い波濤となって刀身を輝かせた。

「僕だって、いつまでも足踏みしてるわけじゃないんだ、よッ！」

海神刃を地面に突き立てるイクサ。

すると、コンクリートが裂け、魔皇力によって地下から引き寄せられた水が、勢い良く吹き出してきた。

かつて、海神刃の元の持ち主であったレティシアも使った技。海神刃に内蔵される水の魔皇石を使った、水流の操作だ。

「むっ！」

クロックラビットレジェンドルガは吹き出す水流から逃れようとする間、キバRFは二本の断刀を中央の接合部でジョイント。その銘に恥じない、巨大な鋏の姿が完成した。

「キバーラ！」

「オツケイ！ ウエイクアップ！」

召還されたフエッスルを奏でれば、断刀・鋏に魔皇力がチャージされ、刃状のオーラが刀身より吹き上がる。

「ふん、何をする気かは知らんが、切り札の発動を待つほど、私はお人好しではないぞ！」

UP・DOWN！



水流のスピード、必殺技の動作を取るキバRFのスピード、全てが遅くなり、逆にクロックラビットレジェンドルガの速力が上昇する。

今度こそ、息の根を止める。

視界を埋め尽くさんばかりに噴き上がる水の壁をぶち抜きながら、クロックラビットレジェンドルガはキバRFに特攻をかける。

だが、クロックラビットレジェンドルガは聞いた。

減速化の影響で切れ切れながら、はつきり聞こえるキバRFの声を。

「お も い ど お り だ!!」

「なっ!?!」

水柱の壁を超えた先に、断刀・鋏を構えたキバRF。  
そこまではいい。  
問題は

(私のスピードに 着いてきている!?)

何故、という疑問を浮かべる暇はない。

眼前に迫る断刀・鋏の刃　速度を落としたクロックラビットレジ  
エンドルガウ身体に、必殺の一撃がスローモーションで炸裂した。

そして、加速と減速の効果時間が切れる。

「トワイライト……カッティングッ!!」

「う、おおおおおおお　ッ!?!」

攻撃は断刀・鋏がヒットしただけでは終わらない。

キバRFは柄に力を込め、断刀ごとクロックラビットレジエンドル  
ガを押しやっていく。完全に虚を突かれ、クロックラビットレジエ  
ンドルガは瓦礫を巻き上げながら、壁に叩きつけられた。

「ぐっ、貴様ら……!!」

「これならもう、身動きできねーだろ」

キバRFの言う通り、壁に刺さった断刀・鋏が拘束具となり、クロ  
ックラビットレジエンドルガの動きを封じていた。

身動きできなければ、加速能力も減速能力も関係ない。

「何故だ……何故私のスピードに反応できた!？」

貴様らの速度

は格段に落ちていたハズ……」

「ああ、だからお前の方に遅くなって貰ったんだよ。悠二が出してくれた水柱でな」

キバRFは一息つき、断刀・鋏から手を離す。

水流は既に止み、イクサも海神刃を引き抜いていた。

「いくら時間が止まってたって、水には“抵抗力”があるんだよ。流れるスピードが遅いなら尚更だ」

そう、途中に障害物があれば、必然的にスピードが落ちる。投げたボールが風による抵抗で減速するのと同じ理屈だ。

クロツクラビットレジェンドルガは加速していたが、考えなしに大量の水柱へと飛び込んだ為、徐々に失速。

結果、減速状態のキバRFと同じスピードになってしまったのだ。

勝負にさえならないのなら、相手に同じフィールドまで降りてきて貰えばいい。何のことはない、単純な発想が、キバRFとイクサの考え出した策だった。

「キバの鎧を待っていたのは……この技を使って私を拘束する為か……ッ!」

「ああ、正直こんな策、使えて一回限りだ。俺も悠二もシャナも、間合いの取りにくいカウンターでお前を倒せるとは思えないしな」

「だったらまず、クロノの断刀・鋏でお前を動けなくして、二人の必殺技を当てた方が確実だろ？」

綱渡りな策だったが、上手くいった。

あとはトドメの一撃だけ。

「二人でキメようか。クロノ」

「あー、けど俺、トワイライトは向こうに刺さりっ放しだし……」

と、呟くキバRFの手元に、何かが放られてきた。反射的にキヤツチすると、それは真紅のウェイクアップフェッスル。

「これ……」

振り向けば、そこには自分とよく似た姿を持つ戦士が立っていた。後ろには、マージョリーとヴィルヘルミナの姿もある。

「遅いぞ、奏夜」

「いや、悪い悪い。少し手間取っちゃってな。そいつ貸してやるから許してくれよ」

相変わらずのキバに揃って苦笑しながら、キバRFとイクサは互いにフエッスルを使用した。

「行くわよ」 ウェイク、アーツ

『イ・ク・サ・レツ・グ・ライ・イズ・アツ・プ』

キバーラのウェイクアップコール。

しかしレプリカであるヘルズゲートは展開せず、代わりに真紅のエネルギーで出来た翼が、キバRFの右足に出現。片やイクサ。

コロナコアが展開し、解放された光子力エネルギーが、左足に収束した。

『はあああ……ッ!』

深く息を吐き、二人は同時に駆け出す。

空中に一回転しながら飛び上がると、突き出された二本の足が、拘束され身動きの取れないクロックラビットレジェンドルガを捉えた。

『Wライダー、キック!!』

魔皇力と光子エネルギーが双方から叩き込まれ、動きを縛られたクロックラビットレジェンドルガに直撃する。

「ぐあああああああ　　ッ!!」

クロックラビットレジェンドルガの身体が砕け散り、派手な爆発と共に消失した。

赤い炎を背に立つのは、逆境を覆した二人の仮面ライダー。

「クロノ」

「ああ、お疲れ」

達成感に満ちたハイタッチが、戦いの終わりを告げた。

「むー、今回俺の出番少なくてねえか？　　いくら作者が悠二とクロ

「ノのタツグを書きたかったとはいえ」

「シリアスパートが終わった途端にそれですか」

世界観を超越した奏夜の愚痴に、悠二は溜め息を零す。

その後、マル・ダムールに戻ってきた全員は、各々戦いの疲れを癒やしていた。

シヤナはメロンパンを頬張っているし、ヴィルヘルミナとマージョリーはコーヒートを啜っている。

そしてクロノ、梓、キバーラはというと、

「クロノさ〜ん、そろそろ離して下さい〜」

「ダメだ。グダグダ言っていると頬引っ張りの刑も加えるぞ」

「諦めなさい梓ちゃん。こうなったクロノは頑固よ」

「そんなあ……」不機嫌そうなクロノの膝元で、膝枕の刑執行中の梓が肩を落とした。

キバーラも羽根の怪我が煩わしいのか、梓のポケットの中でゆったりしている。

「けど……取り敢えずこれで、あの兎の怪人に関しては大丈夫ですね」

「ああ。結構手間がかかったけど、なんとかなった。それに奏夜達にもまた会えたし、悪いことばっかじゃなかったな」

「お。嬉しいこと言ってくれるねえ」

別席に座っていた奏夜がシニカルに笑った。

「けど、そろそろお別れみてーだな」

全員が疑問符を浮かべたと同時に、店の一角に灰色のオーロラが現れた。

次元を渡る扉　クロノ達の世界に繋がる道だ。

「……本当にタイミングいいな」

「なんだ。知らなかったのか？　世の中なんて総じてそんなもんだぜ」

クロノは奏夜と顔を見合わせ、手を差し出した。何も迷うことなく奏夜もそれを握り返す。

「楽しかったぜクロノ。機会があったら、またヴァイオリン聞かせてくれ」



「ああ、こつちこそ世話になった。今度は絶対、ブラッディローズ  
引きこなしでやるよ」

「ははっ、その意気だ」

あっさりした別れの文句。だがある意味、これが一番奏夜とのお別  
れに相應しいような気もした。

「悠二もじゃあな。次会う時はシャナと吉田さん、どっちか選んで  
るように」

「む、余計なお世話だよ。そつちこそ、中野さんとイチヤつき過ぎ  
ないようにね」

「それこそ余計なお世話だ」

「……」

「……」

お互いが吹き出すのに時間はかからなかった。  
本当、違う世界に住んでいるのが残念でならないくらいに、クロノ  
と悠二の絆は深まっていたのだから。

もつとも それは二人に限った話ではないが。

「梓、これ」

「？ 紙袋？」

「私が選んだメロンパン。あ、クロノにも一つあげて。前にあいつからもメロンパン貰ったから」

「ああ、そっか……わかった。ありがとうシヤナちゃん」

「ん」

お土産を渡し、シヤナと梓もまた握手を交わした。

これでひとまずお別れ。なら、これだけは言っておきたいと思う。とが、梓にはあった。

「ねえシヤナちゃん」

「なに？」

「私 これからも頑張る」

クロノさんの側にいられるように。

「だからシヤナちゃんも頑張って。シヤナちゃんも、絶対に一歩踏み出せるはずだから」

「……うん」

それが何を言っているのかは、さすがにわかっていた。  
横目で悠二を見て、シヤナは頷く。

「私も頑張る。今度会った時は、梓をびっくりさせるから」

「うん、楽しみにしてる」

「キバーラも元気だね。クロノを助けてあげて」

「シヤナちゃんもね。悠二くん捕まえておくのよ」

ポケットに入ったままなキバーラが、ひらひらと翼を横に振った。

「カルメルさんとマージョリーさんも元気で。一美ちゃんにもありがとって伝えておいて下さい」

「承ったのであります。中野殿もどうか息災で」

「ま。世界が違くちやまた会えるかはわかんないけど、会えたらまた会いましょ。アズサ」

挨拶を終えて、クロノ、梓、キバーラは次元のオーロラへと入っていく。

扉が閉じる寸前、全員が同じ別れの言葉を告げていた。

『いつか、また』

薄明の旋律。

異世界より渡り来たその音色は、確かな波紋を紅の世界に齎した。

それはきつと 世界を隔てても変わらない、魂の絆。

### 第三十二話・アンブノ重なる魂は永遠に・Cパート（後書き）

コラボ編完結！！

・クロノがイクサをガンガンに使いこなしてるのは、マニュアルが表示されてるから……というのは無論オリジナルです（苦笑）けどおとやんもプロトイクサをすぐ使いこなしてましたし、そういう機能もあるんじゃないですかね。

ちなみにイクサのサーチモードは、デイケイドで召還されたイクサが、カブトに使ったあれです。

・Rキバーラ再び。

しかし奏夜でさえ手を焼いていたRキバーラですので、梓ではあれが限界。

彼女の頑張りに目を向けていただければ幸いです。

・かなり荒技なスピード能力破り。すみません。あれが俺の考えられた最善策だったんです；

やっぱりクロックラビットは強くさせすぎたかな……。

さて、これにてコラボ編は終了！

コラボしてくださった閻丸・EXE先生、本当にありがとうございました！あと、完結まで長らくお待たせしてしまい、申し訳ありません（<―>）

お土産はメロンパンと、Rキバーラへのフォームチェンジ権。ただ……後者はそのまま無かったことにして戴いて構いません。若干パワーバランス崩しかねない力なので；

次回は……遂にあのストーリーに突入。  
更新遅れがちですが、またよろしくお願ひします。  
では、また次回！

断章・そして舞台は……

「やられたか……まあ所詮は『分身体』。あんなものだろうな」

言って、『本物』のクロックラビットレジェンドルガは、時計の刻印を回し、時間の扉を作り出す。

分身体は何も犬死にはない。

本体である自分が危険を侵すことを防ぎつつ、『実験』を続けてくれたのだから。

「お蔭でコツは十分に掴ませて貰った。これでようやく、私の目的を実行に移せるというもの」

時間移動は時として、世界移動と混同される場合がある。

Aの世界の過去に行ったつもりが、Bの世界の過去にジャンプしてしまっているのではないか　そうした理論は確かに存在している。

つまり、世界移動と時間移動にそれほど差はないとも言えらるのだ。

二つの技術の理屈が同じならば　世界移動を完璧に習得した際、時間移動もより完璧なものになるのではないだろうか。

例えばそう　キヤッスルドランが行えるような、何百年も　前の世界に飛べるような。

「思えば長くかかったものだ……」

クロックラビットレジェンドルガには本来、世界を渡る力はない。あくまでも本質は時間を操る術であり、操れるのもUPやDOWNのような数秒の間のみ。

だが彼は鍛錬の末、世界移動を完璧なものにし、同じ理屈を持つ時間移動の強化にまで至った。クロノ達に語った『実験』とは、世界を自在に渡る為のトレーニングに過ぎなかったのである。

そして今　彼は遂に辿り着いた。

「おお……っ！！」

眼前に広がる世界に感嘆の声を漏らす。あの時と同じ　数多の戦意と覚悟が入り混じった『闘争の渦』が、クロックラビットレジェンドルガを出迎えた。

「今、お迎えに参ります　我が『ロード』！！」



時は、十六世紀初頭。  
その時、歴史には決して語られぬ戦が、ヨーロッパで繰り広げられていた。

名を『大戦』<sup>おおいけん</sup>。

フレイムヘイズと、“徒”の一大組織「とむらいの鐘」<sup>トーデン・グロッケ</sup>との全面戦争。フレイムヘイズが大量に生み出される契機となった、“紅世”の転換期ともなった戦いである。

## 予告編

「かつて俺を封印したキバの力……待ち望んでいた……!!」

その王が目覚める時、世界は滅亡する

「ヤツらは、杉村をロードと呼んでいた」

「相当ヤバい連中うちゅーワケやな」

「人類滅亡へのカウントダウンが始まったことに……なる」

消えゆく偉大なる炎。

「シヤナが、消える……!?!」

「この子を救う方法はたった一つ。歪められた過去を正すしかない」

開かれる“大戦”への扉。

「私の、決して忘れてはならない時間があります」

「今だけでいい。俺を信じろ。ヴィル」

今奏でられる、もう一つのBLAZING・BLOOD。

「私はマティルダ・サントメール」

「紅音也。えらくいい人だ！」

「お前の心の音楽に、俺の音楽をもって応えよう　我が、かけがえのない戦友よ」

時空を越え、二つの魂が出会う時、人類存亡をかけた、最終決戦に向かう！

「どうして、父さんが……？」

「私の、前の……？」

「その命、母なる宇宙へ返しなさい！！」

「さあ喜べ、絶滅タイムだ！！」

「倒す……この手で、貴様を……！！」

今、紅蓮の鎖に導かれ、戦士達が結集する！

「行くぞみんな……こっからが本番だ!!」

仮面ライダーキバ、BLAZING・BLOOD。  
次回より、『魔界城の王』編スタート!!

序章・プロローグ【2012年】（前書き）

【2012年】

## 序章・プロローグ【2012年】

一面の暗闇。

虚無と静寂が支配するこの空間にあって、認識できるのは己の存在のみ。

「ここは……」

呟き、ふと傍らに誰かの気配を感じる。

振り向けばそこには、重厚な鎧を纏う戦士。自分が保有する『黄金のキバ』に酷似していたが、そのカラーは漆黒と真紅。王の威光を示す意匠も、より禍々しいものになっていた。

「お前は……」

「……」

戦士は黙して語らず、ただ暗闇の一点を指差した。

視線を移せば、そこには光が溢れ、まるでスクリーンの如く、暗闇に一つのシーンを映し出している。

自在式の起動を示す文字列、中心に鎮座する棺、瓦礫の山。  
それらを囲うは目も醒めるような青の炎と

燃えたぎる紅蓮の炎。

「シヤナ？」

自信なく、切り取られた景色の中に立つ人物に呼び掛ける。

その困惑ももつともで、紅蓮に染まる炎髪を靡かせる女性　それは自分が知る『炎髪灼眼の討ち手』の姿とは異なっていた。

歳の頃は自分と同じくらい。たぶんシヤナが成長していればこうなっていただろうと思わせるような、現実離れた美貌を持っている。傷だらけの身に纏うのは半壊した甲冑。遠目からでも満身創痍なのがわかる状態だ。しかし、

（なんて　）

なんて力強い瞳なんだろう。折れることを知らない鋼の意志。生半可な覚悟では決して手に入らない輝きが、彼女の灼熱の瞳に宿っていた。

そして　その傍らにはもう一人。  
先程まで自分の側にいた漆黒の戦士が、彼女と肩を並べていた。

「あなたは……私を笑う、かしら？」

女性が、炎に包まれていく。彼女の全て　『存在』が紅蓮の炎に溶けていく。

しかし、彼女の笑みは消えない。

「こんな、身勝手に、我が儘な　どうしようもない女をさ」

「……笑うかよ。笑うもんか」

漆黒の戦士の声は、計り知れない感動に満ちていた。

「お前ら凄えよ。こんなに輝いてる演奏、聞いたことねえ」

「そっか。……一応、あなたの期待には、応えられたみたいね」

「いや、期待以上だよ。こんな状況じゃなかったら、もっとゆっくりに聞きたかったもんだ」

「なら、お生憎様……。こんな時だからこそ、生まれた演奏だもの」

「……ああ、そうだったな」



それなら、と、漆黒の戦士は何処か切なさの混じる口調で、拳を握り締める。

「思う存分に歌えよ。お前らの音楽を邪魔する連中は、俺様が全部叩き潰してやる」

「ええ……じゃ、それが鑑賞代、ってことで」

「ははっ。なんだ、タダ聞きはできないのか？」

「ふふっ……最後の演奏だし、ね。きっちり、お代は貰うわよ」

全てが消えていく。

己が存在を犠牲に燃える炎に吞まれながら、彼女は最後の言葉を紡いだ。

「さよなら。過去と未来を繋ぐ戦士。あなたに、天下無敵の幸運を」

「ああ、さよならだ。お前が未来へと繋ぐ炎が、やがてこの世の愛を照らす道標とならんことを」

眩き紅蓮の炎が、闇を切り裂いた。

びびび。

「……」

奏夜は無言で、枕元にセットしてあった携帯のアラームを切った。最近、キバットや静香に言われて習慣づけしていることだが、今のところ起床時間への変化は見られない。

普段なら二度寝するところ。だが今日に限って、奏夜の眠気は完全に吹き飛んでいた。

「……夢、にしてはリアルだったな」

夢は脳の記憶整理やら、イメージの産物と聞いたことがある、が、今回のそれはどれにも当てはまらなないと、奏夜の直感が告げていた。

漆黒の戦士と、自分の生徒を想起させる女性。

普段から摩訶不思議な事象に直面しまくっている奏夜としては、これが何かを予見していると深読みしてしまう。

「……いつ時って、絶対何かの前振りだったりするからなあ……」

苦笑しながらベッドを離れ、階段を上がって二階のカーテンを開ける。

清々しい青空と暖かな日光を浴びながら、奏夜は溜め息をついた。

「やれやれ、面倒くさくなってきそつだ」

そして彼の読み通り　此度の歴史を揺るがす大事件は、この日か

ら始まったのである。

仮面ライダーキバ・BLAZING・BLOOD

『魔界城の王』

序章・プロローグ【1986年】（前書き）

【1986年】

## 序章・プロローグ【1986年】

「……そうか。そういうことだったのね」

一人の女性が、古ぼけた分厚い本を畳む。

黒いローブに身を包み、絹のように滑らかな髪は、何処かこの世のものとは思えない美しさがあつた。

「つまり、この時代から“繋がる”ということだな」

机に鎮座する奇妙な生物が言う。

赤と黒の身体に、つり上がった黄色い目。

誇り高きキバツト族の末裔　キバツトバツト二世だ。

「だが真夜、もしこの歴史が真実だとすると、ヤツはまた戦わなくてはならない……ということか？」

「そう、なるわね」

真夜と呼ばれた女性が、憂いを帯びた溜め息をつく。

「クイーンの力を失ったこの身が、歯痒くて仕方がないわ」

「仕方があるまい。お前は覚悟の上で、あの選択を　あの男と共にあることを選んだんだろう？」

「ええ、そうよ。後悔はしていないの。……ただ、あの人の力になれないのは、つらいわ」

「……安心しろ。歴史通りなら、俺にも役割がある。力が及ぶ限り、ヤツを守ることを約束しよう」

「いつも悪いわね。大変な役割ばかり」

「気にするな、俺とお前の仲だ」

キャツスルドランを呼び寄せておく。

二世は羽音を鳴らして、窓から飛び立っていく。  
それを見送って、真夜はもう一度、本に目を通す。

「……『大戦』、フレイムヘイズと“徒”の戦争、か」

【26年前】

バブル絶頂の1980年代。

都心からやや外れた場所に位置する御崎市。

その住宅区の外れ。白い外壁に、やや古めの仰々しい門が、取っ付きづらさを醸し出す屋敷。

手入れの行き届く庭園で、美しい音色が響いていた。

音楽に疎い者でも、迷わず絶賛するであろう演奏。

それを奏でるのは、二十代前半の男だった。

一心不乱にバイオリンを弾き鳴らすその姿は、何処か優美さを漂わせている。

紅音也。

それが、彼の名前。

『 ポロン 』



弦を一本弾き、演奏を終える。

「うっ……」

がくりと膝を折り、地面に手をつく音也。  
苦悶の表情に、汗が一筋流れた。

「……まだ、大丈夫だ」

まだオレは 生きている。

紅音也。

過去の思いを、未来に繋げた男。

これは、歴史から消された物語。

そして過去と現在を繋ぐ、もう一つの“キバ”と『炎髪灼眼の討ち手』の物語。

「待たせたな、真夜」

「いいえ。こっちこそ、急に呼び出したりしてごめんなさい」

「全くだ。こんな森に呼び出さなくても、オレ達の愛は場所を選ばん」

「ふふっ、そうね」

音也の冗談めかした文句に、くすりと笑う真夜。

聞きよつによつては、やや鬱陶しく聞こえる音也の言葉だが、その裏にある真摯な想いを知る真夜からすれば、もう慣れっこだ。

紅音也。

22歳。

バイオリン職人。

人間の命を糧とする異形、ファンガイアと戦う『素晴らしき青空の会』のメンバーにして、素晴らしき青空の会が保有するライダーシステム『イクサ』の資格者。

人格は周りのことを気にしない天上天下唯我独尊。所謂俺様キャラ。更には軟派属性付きという、突っ込み所満載のポジション。

しかし、思考のベクトルが一つの対象に向けば、それに対して自分の意思是曲げない。

また、音楽を侮蔑する者には激しい怒りを見せる。

纏めれば、自由奔放。

これが、紅音也という人間のたまかなプロフィールである。彼は現在、ファンガイアの戦いから身を退き、愛する女性、真夜と共に静かな暮らしを営んでいる。

そんなある日、彼は真夜にとある森へ呼び出されていた。

「しかし、本当にどうしたんだ真夜。数日前急に出掛けたかと思ったら、今度は“ここ”に呼び出すとは……」

やや眉をひそめて、周囲を漂う霧を払う音也。

無理もない。

ここはかつて、ファンガイアの統制者『キング』が隠れ住んでいた森だ。

物事を楽観的に見がちな音也でさえ、キングとの戦いはあまりいい思い出ではない。

まあ、おかげで未来からやってきた息子に会えたりもしたため、複雑な話なのだが。

「わざわざここに呼び出すという事は……またファンガイア絡みの話か？」

「……音也」

それには答えず、真夜は音也の手を取り、

「私は今から、あなたに酷いことをさせようとしている。とてもとても酷いこと」

「……？」

「あなたの命を、更に削ることになるかもしれない」

音也の表情は変わらない。

ただ怪訝そうに、真夜を見るだけだ。

「命を削る？ また闇のキバを使わなきゃならないほどの事なのか」

「それは ごめんなさい。言えないの」

「言えない……？」

「言ったでしょう。とても酷いことだって」

焦燥感に満ちる早回しな口調。

易々と口外出来ないまでの大事なのか。

「『闇のキバ』の力に蝕まれているあなたを、私は私の都合で振り回そうとしている。　これだけでも、相当身勝手だわ」

「……………」

紅音也の命は、もう長くない。

かつてのキングとの戦いで、音也は本来、ファンガイアの王しかなることを許されない『闇のキバ』へと変身した。

『闇のキバ』は音也の生命力たるライフエナジーを吸い上げ、彼の寿命を削った。

しかも、音也が使用した回数は合計で三回。

普通の人間なら、その場で死んでもおかしくない力を、音也は不屈の精神で耐え抜き、未来からやってきた息子と共に、キングを倒した。

だが、削られた寿命は戻らない。

当然真夜はそれを知っているし、音也も重々わかっていた。

だからこそ、数少ない時間を、恋人である真夜と一緒に過ごすように決めていたのだ。

そんな中での、真夜の頼み事。

「真夜……」

音也は、真夜の手が震えていることに気が付いた。

真夜は元来、感情の起伏が読みづらい。

表情に出ていないだけで、真夜の心情は決して平静ではないだろう。

「でもこれは、あなたにしか出来ないことなの。だから、お願い」

何も言わず、私に着いてきて。

「……なんだ、そんなことか」

あまりに軽い反応の音也に、今度は真夜が驚く。

「ああ、わかった。行こう」

思考時間も何もなく、音也は即決した。

「……………」

「？ どうした真夜。行かないのか」

「……………いえ」

「あっ、ひょっとしてオレ様が着いて来てくれないかも、なーんて思ってたな？」

ニヤリと意地悪っぽく笑い、真夜の手の甲に、軽く口づける。

「お前の頼みを、オレが断るわけないだろう」

自分の寿命がかかっていることがなんだ。  
音也はあっさりと言つてのける。

「おっと、勘違いするなよ。何もオレの命がどうでもいいなんて言つてない。お前と過ごすための時間を、みすみす捨てるつもりはないさ。オレが言いたいのは、寿命なんて削らなくとも、お前のお願いを直ぐ叶えてやるということだ。真夜、オレ様を誰だと思ってるんだ？」

稀代の天才、紅音也だぞ。



驕りではない自信が、その言葉に満ちていた。  
呆けたように立ち尽くしていた真夜だったが、

「…………ふふっ」

沈んでいた表情が嘘のように、柔らかい笑みを浮かべる。

（私は何を忘れていたのかしらね）

こんなことを平気で言って、本当にやってのけてしまう人。  
いつも真っ直ぐで、自分を偽らない人。

それこそが紅音也。

自分の愛した人なのだ。

真夜に連れられるがまま歩いていくと、開けた場所に出た。木々が不自然に切り取られたこの場所に、かつてキングの居城であったドラゴン、キャツスルドランがいびきをかいて眠っている。

音也と真夜は中に入ると、その中に生々しい体内器官は一切なく、ただ西洋風な居城空間があるだけだった。

「やれやれ。何度来ても、この空間には慣れないな。真夜、お前がつれてきたかった場所って、ここのことか？」

「当たらずとも遠からずね」

コツ、コツ、と靴の反響音を響かせて、二人は回廊を進む。

「最近、キャツスルドランが暴れ出しているという話はしたかしら？」

「ああ。ご主人様がいなくなったせいで、力の抑えが効かなくなっただんだよな」

この分じゃ、大分落ち着いたみたいだが。と続ける音也に、真夜は首を横に振る。

「いいえ。キバットの力でこれは一時的に押さえ付けているだけなの。彼がいなくなったら、またすぐに暴れ出すわ」

「キバット……。ああ、あのコウモリもどきか」

自分に力を貸した奇妙なコウモリの姿が頭に浮かぶ。

「けれどね。キャットスルドランが暴れている理由は、主を失ったからというだけではないの。時間の歪みを、感じ取っているのよ」

「は？」

何だそりゃ、と音也が質問しかけたのと同時に、真夜は廊下の角を曲がって立ち止まる。

見ると回廊の奥には、古めかしい大きな扉があった。

「なんだありゃ？」

「『時の扉』だ」

自分のものでも、真夜のものでもない声でした。

いつの間にか、音也の肩に赤と黒を基調としたコウモリ、キバット

バット二世が留まっていた。

「久しぶりだな、紅音也。中々しぶといヤツだ」

「よう、コウモリもどき。オレ達二人の時間を見事に邪魔してくれ  
たな」

挨拶代わりに毒づく。

二人は共闘こそしたが、音也は人格的にキバットを好いていないし、キバット本人も「オレは誰の味方でもない」と公言している。常に自由という面は二人とも似ているのだが、あまり仲がいいとも言えなかった。

「で、何なんだその『時の扉』ってのは」

「そのままの意味だ。過去、現在、未来を繋ぐ架け橋となる扉。それこそが『時の扉』」

「要するにタイムトラベルってやつか？　コウモリもどき、あまり人をからかうもんじゃない……」

言いかけて、音也は気が付く。

「その通り。お前の息子はこの扉を使って過去に来たのだ。そして、お前は今からこの扉を使ってある時代に行ってもらおう」

「……それに何の意味がある？　オレの息子がやるうとしたように、歴史を変えろってことか」

「違う。変えるのではなく、正すの」

真夜がキバットの言葉を継ぐ。

「本来そうあるべきはずの歴史。それが歪み始めているの。音也、あなたはもう一度戦わなくてはならない。過去を、あるべき形にするために」

「随分抽象的だな。具体的には何を正せばいいんだ。それに、どうしてオレでなければならぬ？」

「これ以上はまだ言えん」

キバットが真夜の代わりに答える。

「過去を変えるのは本来、かなり危険なことだ。今回も、お前の息子が過去に来たのも、特別な事情があったからに過ぎない。余計な情報を与え、変えなくていい過去まで変える可能性もあるからな」

要するに、余計な詮索は止める。ということらしい。

キバットに言いくるめられるのは癪だったが、やがて諦めたように音也は言う。

「ふむ……ま、大まかな事情はわかったしいいか。しかし　はっはっは、とうとう過去にまでオレの栄光を知らしめる時が来たというわけだな！」

かなり方向性のズレたハイテンションだな、とキバットは思ったが、やる気のある分には構わないので何も言わない。

「じゃあさっさと行くでしょう。レッツ、タイムトラベル！」

「あ、待って音也。これを持って行って」

真夜が慌てて、手甲のような機械を手渡す。

「ん？　これは……」

忘れもしない。

素晴らしき青空の会が誇るライダーシステム『イクサ』に変身するためのツール、イクサナツクルだ。

「なんでこれが？ キングとの戦いでブツ壊れたままのはずだろ  
う」

真夜は悪戯っぽく笑って答える。

「私がどれだけ姉さん女房なのか忘れてた？ これくらいの修理なら訳ないわ。それからこれも」

気が付けば真夜の手には、バイオリンのケースが握られていた。

「ブラッディローズ……」

「この身では足手まといになる以上、私は一緒に行けない。それにキバットの代わりに、キャッスルドランを抑えなければならないの」

「だが真夜、お前はファンガイアの力を……」

「大丈夫。ちょっと知り合いの力を借りるから。キャッスルドランを抑えることなら問題ないわ」

真夜はバイオリンケースを差し出しながら言う。

「けれど私達の心の音楽は、いつも共にある」

「ああ」

真夜から渡されたブラッディローズを、音也はしっかりと受け取る。

「真夜の代わりに、オレが案内役を務めてやろう。ありがたく思え」

「……なんで真夜が来れなくてお前がついてくるんだよ。真夜と代われ、今すぐ、即刻」

「それについては、オレにもお前と同じく役割がある、とだけ言うておこつ」

……また回りくどい言い方をしやがってこのコウモリもどきは。

音也の心情はざっとこんなものだったが、真夜の出前、黙って『時の扉』の取手を掴む。

「あなたは16世期初頭に飛ばされる。音也。気を付けて」

「安心しろ真夜。すぐ戻ってきてやる。ちゃんと留守番しててくれ

」



そう言い残し、音也とキバットは扉を開く。  
中から溢れ出してきた光に吞まれ、二人の姿は見えなくなり、

バタン。

扉が重々しい音を立てて閉じられた。

「……紅音也、キバット。あなたたちに、天下無敵の幸運を」

## 序章・プロローグ【1986年】（後書き）

魔界城の王編、ようやくスタート。

・過去編の時系列は奏夜が未来に帰り、音也が死に至るまでの間に起きたことです。一応、奏夜帰還後いつ亡くなった、とは描写されてなかったですから（かなりこじつけ臭いのは自覚しております；）なので、まだ次狼さん達はキャツスルドランの中にいません。

・今回のお話は、原作と同じく様々な時代を行き来する形になる予定です。

奏夜と音也、二人の視点で語られる物語をお楽しみに。

・イクサ修繕。「おいおい、これじゃキバ最終回で渡の手を掴んだイクサの腕はどうなる」というような疑問については、過去編の方でフォロワー入れます。

次回はひとまず現代編（予定）  
では、また次回（＾o＾）

第劇話・魔界城の王／開演のスクールパニック・Aパート【2012年】

「いい加減にしなさいよ名護くん！」

ダンツ、と乾いた音がテーブルから生み出され、マル・ダムールの店内に響き渡る。

ぎよつとした一年二組の面子が視線を向けると、烈火の如き怒りを放つ恵と、腕を組んで無反応を貫く名護の姿があった。

「いつまでそうやって逃げてるつもりなのよ！ 情けないと思わないの!？」

「……ああ、思うよ」

「だったら!？」

「思うからこそ、ダメなんだ」

名護が顔を逸らす。

彼にしては珍しい腑抜け切った態度に、恵は怒りは再点火した。

いたたまれないのは、居合わせてしまった悠二、吉田、田中、佐藤、池、緒方の七人である（シヤナは普通に砂糖入りコーヒーを啜っていたが）。

「な、何この雰囲気……」

背後の席で繰り広げられる激情の嵐に、緒方が渋い表情を浮かべる。

「久しぶりにマル・ダムールに来てみれば、何であの二人が言い争ってるのよ……」

「な、名護さんと恵さん、あれって夫婦ケンカ……なのかな？」

「うーん。どっちかっていうと、恵さんの方が一方的に怒ってるって感じに見えるけど……」

吉田の呟きに答えながら、池は同じく気まずそうにコーヒークップを握る友人三人に問う。

「おい。坂井、佐藤、田中。名護さんと恵さんの間に何があったんだ？　最近はお前らの方がよく会ってただろ」

ぶんぶんとう首を振る悠二、佐藤、田中。

特に悠二は最も長く名護と会っていたのが、知らぬ存ぜぬだ。

「けど、あの二人がケンカってかなり珍しくないか？」

佐藤の言葉に、緒方と田中が頷き、

「うん、恵さんがあんなに声荒げるのも見たことないし」

「名護さんがあんなにしょげてるのも見たことないよな……」

まったくもってその通り。

普段から名護家のパワーバランスは恵⇨由利>名護なフシがあつたが、それでも名護が反撃を放棄し、黙って恵の叱責を聞き入れるというのもなかなかない光景だ。

「……」

「？ シャナ、どうかした？」

ずっと事態を静観していたシャナが、意味深に首を傾けたのを見て、悠二は問う。

「……なんか恵、怒ってるように見えない」

「えっ？」

「むしろ、悲しそう」

何でかはわからないけど、と付け足すシャナだったが、彼女の直感がバカにできないのは周知の事実。

（名護さんに怒ってるんじゃない……何か不満があるって感じかな？）

思考を巡らせる悠二だが、いかんせん情報が少ない。答えを導き出すのは無理そうだった。

永遠に続くかに見えた争いを止めたのは、名護のケータイから鳴る着信音だった。

恵に構わず、むしろ好都合と言わんばかりに、名護はすぐさま通話に応じる。

「はい、名護啓介です。嶋さん？　はい、はい。わかりました。二十分後にいつものトレーニングジムですね。はい。すぐに向かいます」

「あ！　ちょっと名護くん、まだ話は……」

「すまない。嶋さんから青空の会の任務だ。話はまたにしてくれ」

通話を終えた後の名護の行動は迅速だった。

恵の脇をすり抜け、マル・ダムールから姿を消す。

「……………あゝ、もっつー!!」

苛立ち紛れに椅子へと座り直す恵の様子に、一年二組勢は完全に萎縮していた。  
マル・ダムールの飼い犬、ブルマンなど、先程から店の隅に退却している。

「マスター、コーヒー一杯!!」

「荒れてるねえ、恵ちゃん」

マスターが半ば呆れながらコーヒーを渡すと、恵はそれを一気に飲みする。

自棄酒ならぬ自棄コーヒーだ。

「……………ぶはっ!!　　荒れもするわよ!　　名護くんときたら、これに関しちゃいつまで経ってもチキン野郎で……………」

「仮にも夫をチキン野郎ってのはどうなんですか?」

からんころんと来客のベルが鳴る。

入り口にはご存知紅奏夜、野村静香、そして二人の間で手を繋ぐ名護由利の姿があった。

「おかーさん、ただいまーっ!!」

特攻まがいの抱擁をする由利。恵も我が娘の愛らしい姿に、少しだけ緊張を解いた。

「おかえりなさい、由利。奏夜お兄ちゃんと静香お姉ちゃんには遊んで貰えた?」

「うん! たのしかった!!」

そっか。と満足げに言って、恵は奏夜と静香を見やる。

「悪いわね。毎回毎回由利を遠ざけて貰って」

「いえ、気にしないでください恵さん。私達も、由利ちゃんと楽しませて貰いましたから」

「名護家を円満な家庭にするためなら、協力は惜しみませんよ」

もはや『あの喧嘩』は毎年恒例行事。夫婦喧嘩を見せたくないから、由利を遠ざけて欲しい。という頼み事の真剣さはよくわかる。



「あ、先生。こんにちは」

「どうもです」

「よう、悠二に池。そして我がクラスの諸君。お前らもすっかりこの常連だな」

全員に片手を挙げる奏夜により、ようやくマル・ダールの空気が和んだ。

「あ、静香さん、お久しぶりです!!」

「こ、こんにちは」

「む」

女性陣の挨拶に静香も相好を崩し（ちなみに最後のはケーキを食べながら片手で挨拶したシャナだ）、

「うん、三人ともこんにちは。真竹ちゃんとは、ミサゴ祭り以来かな？」

「じゃあ1ヶ月くらいは経ってますかねえ。その間、静香さんと先生はいつの間にかカップル成立させてるし……もっとはやく私達に教えてくださいよう」

『緒方（オガちゃん）に同意』

唇を尖らせる緒方。

佐藤、田中、池もじとーつと二人を見る。

奏夜と静香のカップル成立については、その近くに居合わせた吉田や悠二づてに広まった話なので、それ以外のメンバーはやや蚊帳の外という気分を味わっていたらしい。

「あ、あはは……」とばつが悪そうにする静香。

カップルという響きに慣れてないのか、照れが混じっている。

「それについては怒涛の展開だったからさ。報告する余裕がなかったといえますか……大目に見て欲しいかも」

「……まあいいですけど。それで、先生とはどこまでいったんですか？」

「ぶほっ！！」

一転、ニヤついた笑みを浮かべる緒方。  
静香の紅潮度、更に増量。

「あ、あつ、あつあつ」

「聞くところによると、二人って結構長い付き合いだったみたいじゃないですかー 恋人になって、そこらへんどう変わったんです？」

「あ、ああ、あのね真竹ちゃん。そこらへん興味がわくのはわかるんだけど、わ、私達にもこうプライベートというものが……」

と、言いかけて静香は気付く。その場にいた全員が、自分達に妙な期待の詰まった視線を送っていることに。  
ずっとだんまりを決め込んでいたシャナでさえも、だ。

「な、何この空気！？ 何でこんなところで一致団結できるのよキミ達は！」

「えっと、なんていうか、先生と静香さんの恋愛話は、やっぱり気になるかなって……」

吉田の言葉に全員が頷いた。

私生活が基本的に謎だらけの奏夜のこと、どういつ恋愛事情を持つのかもそうだし、それに付き合う静香の話も是非聞いてみたい。

「うつ……、奏夜あゝ」

羞恥のあまり、軽く涙目になってしまふ静香。  
片や彼氏である奏夜はどこ吹く風で、

「別に隠し立てすることでもない気がすっけどな。付き合ってるのがバレてる時点で」

「うっ……」

「俺もさすがに人前でイチャつくのはアレだが、そんな話をするくらいなら……」

「は、恥ずかしいものは恥ずかしいの！」

赤面＋涙目＋上目遣いの静香。素晴らしく可愛いですb y奏夜。

「やれやれ仕方ない。静香、選手交代だ。その質問には俺がお答えしよう」

さて、どうするか。質問に答えない限り、一年二組勢の好奇心は消えないだろう……ここは無難な返答で流すのが得策べきか。  
奏夜がそう決めると、ノリノリな緒方が再度質問を飛ばしてくる。

「じゃあ先生、静香さんとの仲、どこまで進んでいるのか、答えをどうぞー！」

「（自主規制）まで」

刹那、シヤナ以外の一年二組の面子が机に頭を打ち付け、奏夜の答えの意味を知らないシヤナと由利が首を傾げ、静香と恵が、奏夜に見事なクロスボンバーをキメた。

「ぎゅっぷい！」と奇声を挙げながら、奏夜はダウン。

「そそそ奏夜！ ななな、みんなの前で何をとんでもない嘘言つてんの！？」

「し、静香さん、まさかそこまで……」

「凄いです……」

「いやいやいやいや！ 真竹ちゃんも一美ちゃんも待つて！  
100%事実無根だから！ ほら、奏夜も早く否定しなさい！  
だいたい今の流れで何でそんな嘘言つのよー！」

「い、いや、あいつらの興味を削ぐなら、いつそインパクトのある話でドン引きさせた方が早いかと……」

ダウンから復活しかけた奏夜だが、即座にその顔をブーツで踏みつけられる。

見れば、恵がにこやかに笑いながら奏夜を見下ろしていた。……目はまるで笑っていないけれど。

「そ・う・や・く・ん？　まだ10にも満たない私の娘の前で、この作品の対象年齢を詐称しかねない発言は控えて貰えるかしら……？」

「この度は誠に失礼致しました」

もはや顔に真っ赤でない場所がなくなった静香と、霸王色ばりの怒気を放つ恵が相手では、さすがの奏夜も土下座するほかなかった。

生徒の面々も「な、なんだ嘘か」と言わんばかりに、わざとらしく溜め息をついている。

「もう、ホントに奏夜は……彼女として、まだそういう話題は控えて貰いたいな」

「ほう、『まだ』ということは、相応の段階を踏めば、そういう話題もアリだと？」

復活した奏夜が意地悪っぽい笑みを浮かべる。無論、静香には効果覿面で、

「どうして奏夜は最近、そういう方向性に話を持っていくのかなあ！？」  
「そ、それに百歩譲って段階踏むにしても、ずっとずーっと先の話だから！  
少なくともべるちゅーくらいじゃまだ全然……。……あっ！」

つい興奮して、結局恋愛の進行状況を口走っていた。

フリーズする静香を中心に、いたたまれない空気が流れる。

「……あの、静香さん。なんか、すいませんでした」

「……いえ、お気になさらず」

挙げ句、言い出しつぺの緒方が頭を下げる始末。だが、ここで謝られる方が、静香にとっては精神的ダメージがデカかったりする。

一方、奏夜は声を押し殺しながら、肩を震わせていた。

「くっくっく……静香は隠し事ができないなあ」

「……キミ、最近ホントに恋愛事に対して自重しなくなったわね」

「静香の反応が可愛いのがいけないんですよ」

成る程、そう言い切ってしまうあたり、奏夜の中では何かが吹っ切れているようだ。

まあ、以前の彼を考えると、いい傾向なのだろうけど。

やれやれ、と恵は由利を抱えて椅子に座り直す。

「おかあさん。奏夜おにいちちゃんは、なにをいってたのー？」

「あなたはまだ知らなくていいことよ由利。知識だけなら悠二くん達くらい、行為にまで及ぶなら18までは我慢なさい」

有無を言わさぬ口調で由利に釘を刺しておく。

このテの教育に関して、教えるタイミングは大切だ。

話が一段落し、奏夜と静香もまた恵の向かい席に座る。

マスターにコーヒーを頼みながら、静香は『結果』を聞いた。

「そつだ。恵さん、聞きそびれてましたけど、名護さんは……」

「……今年も無理ね。行きたくないって」

「そつですか……」



静香が溜め息を突き、奏夜も心なしか残念そうに目を伏せる。  
とても悠二達が入っていけるような雰囲気ではないが

「ねえ恵。さっきは名護と何を話してたの？」

如何なる空気にもまるで左右されないフレームヘイズの少女が一人。

(……………こういう時、シャナの性格は助かるよな)

悠二達の一般常識からすれば「空気読め」と言われても仕方がないが、シャナにそんな理屈は通用しない。

恵も隠すつもりはないのか、普通に事情を語っていた。

「お墓参りよ」

「お墓参り？」

「うん。名護のお父さん　由利にとってはおじいちゃんのお墓参りね」

意外な行事が話題に挙がったせいか、他の面子も話に耳を傾ける。

「名護さんのお父さん……亡くなってたんですか？」

「うん、そろそろ命日なのよ。けど名護くん、毎年行きたがらなくって」

「行きたがらないって……」

「……まあ色々あるのよ。名護くんにもね」

答えを濁す恵に、悠二は立ち入れないものを感じた。言外に「聞かないで欲しい」という意思が伝わり、誰も何も聞けなくなる。

「ああ、そつだ。お前ら、明後日暇か？」

なので、奏夜が空気を変えようとしてくれたことには、全員素直に感謝した。

「俺からのプレゼントだ。ありがたく受け取るがいい」

「なんすかこのチケット？」

佐藤の言う通り、奏夜のポケットから取り出されたのは、シンプルな装丁のチケットだった。

「あ。これ、今度近くの高校でやるコンサートのチケットですよね」

「正解だメガネマンよ。なつき先生のお誘いでな、俺も演奏の場を持つことになった」

「先生って、こんな公式っぽいコンサートとかにも参加してんですか」

田中の疑問ももつともで、奏夜は基本的に専門はヴァイオリン制作。演奏も同じくらいに好きそうだが、こつも大々的な発表の場を持つタイプではない筈だ。

すると、奏夜は苦笑しながら、

「俺も出るつもりなかったんだけどさ、なつき先生にはちょっと借りがあってな……断り切れなかったんだよ」

借り、というのは、ミサゴ祭り当日。静香とのデートの為に、祭りの巡回を代わってもらったことだ。向こうも「久しぶりに奏夜くんの演奏聞きたい！」と言ってきていたので、別に悪い気はしなかったのだが。

「まあ、俺の演奏をタダ聞きするまたとないチャンスだ。お前らも暇なら来るがいい」

「ふーん……じゃあせつかくだし、みんなで行かない？」

緒方の提案、反対するものは特になく、満場一致でコンサート鑑賞が決まった。

しかし、

「……………？ シヤナちゃん？」

吉田が隣で無反応だったシヤナに声をかけた。  
シヤナは元々口数が多い方ではない。しかし最近では、最低限の受け答えはしてくるようになっていたのだが

「……………何？」

シヤナは頭を手で押さえながら、どこか気だるそうに口を開いた。

「あ、うん。みんなでこのチケットのコンサートに行こうって……………」

「……ん。わかった。行く」

「シヤナちゃん、どうかしたの？　なんか顔色悪そうだけど……風邪？」

緒方が心配そうにするが、シヤナは「大丈夫」と返すだけ。しかし、奏夜と悠二は別の違和感を覚えていた。

(……フレームヘイズが、体調不良？)

その危惧が形となるのは、事態が最悪の段階まで進行した後だった。

「顔が暗いな、名護君」

場所は移って御崎市某所のトレーニングジム。フリークライミングに興じる嶋の声が、名護の頭上に降り注ぐ。

「恵君と喧嘩でもしたのか？」

「……別に。毎年のことですから」

「毎年　ああ、キミの父上の墓参りか」

嶋の声には一抹の呆れが混じっていた。

「いい加減気持ちの踏ん切りをつけたらどうだ。確か、結婚の報告もしていないんだらう？」

「今更」

嶋の言葉を強引に遮る名護。

「今更私に、父を悼む資格などありません」

「……」

名護は変わった。

主観的な正義に振り回されることもなく、良い働きを見せてくれている。

イクサの資格者として、周囲も認める人格者であることは、嶋からすれば喜ばしいことだ。

だが、それは必ずしも、プラスポイントになるものではないのだ。  
名護本人が受け止めるべきことなのはわかっているが、端から見ると分には不憫でならない。

（奏夜君といい恵君といい……家族関係に苦勞する者ばかりだな。私の周りにいる若者は）

やれやれと首を振って、嶋はとっかかりに手をかけ、更に上へと登っていく。

「まあいい、仕事の話に移ろう。名護君、杉村隆という男を覚えてるか？」

「杉村隆……ええ、覚えています。以前私が捕まえた囚人ですね」

思い出せば懐かしい。悠二、吉田と知り合ったのも、あの事件がきっかけだった。

「それが何か？」

「ああ、その男がつい三日前、また東京拘置所から脱走したらしいんだが、その資料を見てくれ」

指事に従い、近くの小机に置かれていた資料を手取る。  
囚人に関するデータのような。

そこに挟まっている写真は　成る程、確かに自分が捉えた男。

「一枚目の資料にある写真が26年前、杉村の逮捕当時のもの。二枚目が現在の杉村だ」

紙をめくって二枚目の写真を見ると、そこで名護は顔をしかめた。

「……全く歳をとっていない」

そう　同じ時期に撮ったのではないかと思うほど、二枚の写真に写る杉村からは、月日の経過を感じ取ることができなかった。

「嶋さん、これは……」

「ああ、人間でない可能性が高いな」

言いながら、嶋が上から降りてくる。



「しかもこの男は、既に死刑が執行されているはずだが　何故か  
生きている。人外でないことはほぼ確定的だ」

「ファンガイアだと？」

「そこだよ名護君」

だが、嶋は名護の結論をすぐに肯定はしなかった。

「杉村がファンガイアの可能性があるかわかり、私もすぐ太牙の会  
社に確認を取った　が、杉村なるファンガイアのデータは、向こ  
うで保管されていないらしい」

「……では、ファンガイアではない？」

「無論、管理から外れたならず者のファンガイアという線もあるが、  
いずれにしても、何人も人間を殺した危険な男だ。どうにかして  
捕まえて貰いたい。正体を調べるのはそれからだ」

「わかりました」

資料に再度目を落とす。

悪意に満ちた表情が、名護を睨み付けていた。

第劇話・魔界城の王／開演のスクールパニック・Aパート【2012年】（後書

魔界城編現代パート第一話。

・一年二組のみんな久しぶり（苦笑）。いや、ホントごめんなさい。あんまり人数多いと個々のキャラが回らないので、最近はお出番カットしてましたので……；

・結構忘れられがちな、名護さんが父親に対して犯した罪。今回の魔界城編は、その罪の清算も見所になる予定。

・明かされる事実、奏夜と静香はべろちゅーまでだった。最近の奏夜も恋愛に前向きになってきたので、これくらいはしてるでしょう。

次回はいよいよあのロックミュージシャンが本編登場……かな？  
お楽しみに。

おまけ【カットシーン】

「そう言えば由利、奏夜お兄ちゃんとは何して遊んでもらったの？」  
「んとな。すいぞくかんにもいったし、おかいものにもいったし、いっしょにプリキュアごっこもしたよ！」

玩具の変身アイテムを見せる由利。

彼女は前作の方が気に入っているようで、未だに今期のプリキュアの玩具を持っていない。

「プリキュアか……静香ちゃんとはもかく、奏夜くんついていけたの？」

「何を仰いますか。由利ちゃんの為なら、女の子向け作品だって見ますよ俺は」

「ふーん……じゃあ変身とかにも付き合っただけなの？」

「勿論」

奏夜はバツクから何かを取り出し、手元に掲げる。

それは、去年活躍した天使の使う、金色のごてごてしい変身アイテム。

「待てい」

「？　　なんですか恵さん、何か問題でも？」

「いや、もうツッコミどころがありすぎて『ガツチャ！』ってだから何事も無かったかのようにカードをセットしない！」

ココロパフォームとテンソウダーって似てるよねという話（あの下に開くギミックとか）。

第劇話・魔界城の王ノ開演のスクールパニック・Bパート【2012年】

御崎市某所の博物館。

今日はそこに奇妙な品が届けられていた。

見た目は歪な石の塊。しかしよく観察してみれば、ミイラのように細まったドクロのマスクが貼り付けられているのがわかるだろう。

外国で見つかり、まだまだ謎の多いこのオブジェクトは、考古学的には大変興味深いものらしく、研究の為に日本へと輸送されてきたのだ。

薄気味悪い石像だなあ。

中身の設置を担当する業者の誰もがそう思っていた。所詮は石像。さっさと運んでしまおうと、テキパキと作業は進んでいく。

そう　見ないようにしていたからこそ、誰も気が付かなかった。

石像のマスクの一つが、一瞬禍々しい光を放ったことに。

『我が、ロード……!』

低い唸り声と共に、石像は内側から碎け散る。

人々の口から、悲鳴という名の音楽が流れ出したのは、それから間もなくのことだった。

「うひゃー、案外人数来てるのねー」

コンサート当日。

会場にごった返す人ばかりを見て、緒方が感嘆の声を挙げる。後ろには池、吉田の姿もあった。

「当日券だったら、確実にバラバラの席だったね……」

「うん。これに関しちゃ先生様々だ」

「ふっふっふ、そうだろうそうだろう。もっと俺に感謝したまえ」

池の言葉に被せる形で、聞き慣れた不遜な口調が背後から響く。

「あ、先生」

「よう」

片手を上げる奏夜の姿は、いつものような着崩した背広ではなく、演奏者らしい燕尾服。皺など一点もなく、かなりのマッチ具合だった。

思わず三人も「おお……」と声を漏らす。

「先生、めっちゃイケメンじゃないですか！ 普段の残念さが完璧に消えていますよ！」

「凄く似合ってます」

「常時そういう着こなしすればいいのに……なんでいつもは着崩したりなんかしてるんですか？」

「うーん。純粹な賞賛が吉田以外来なかった気がしないでもないが、取り敢えずは全て褒め言葉として受け取ろう」

普段自分がからかう立場である分、こういう場面でのスル スキル

は高い奏夜である。

「ところで、集まったのはお前らだけか？」

「はい。現地集合なんですけど、まだ来てないんですよ」

「そっか……まいったな。開演までもうそんなに時間ねえぞ」

本当ですよねえ、と池が無然とし、吉田と緒方も不安そうに眉根を下げる。

この二人の場合、不安の理由は悠二と田中が来ないことだろうが。

「まあ、お前らだけでもちゃんと聞いてっつてくれよ。知り合いがいるっただけでも、結構モチベーション上がるからさ」

「なら、僕も聞いていっても構わないかな？」

唐突な第三者の声。全員がそちらを向くと、馴染みのある姿。

一番早く驚きが歓喜に変わったのは、彼には並々ならぬ信頼を置いている吉田だった。

「太牙さん！」

「やあー美ちゃん。久しぶり。元気だったかい？」

「はい！ 太牙さんもお元気でしたか？」

「ああ、まだ少し時差ぼけが残っているけどね。池くんに真竹ちゃんも、元気そうで何よりだ」

「お久しぶりです、太牙さん」

「どーもです。先生のお兄さん！」

奏夜の兄、登太牙は、手袋をした方の手を挙げ、朗らかな笑みを浮かべた。

太牙は夏休み後半から、外国に出向いているとかで、三人が会うのは本当に久方ぶりである。

再会を喜ぶ生徒勢に続き、奏夜が口を開く。

「おかえり兄さん。いつ戻ったの？」

「今朝だ。お前に会おうと思ったんだが、嶋さんの方からコンサートの話を聞いてな」

「そっか。 ってあれ？ 健吾さん連れてくるんじゃないかった？」

健吾さん？



初めて聞く名前に疑問符を浮かべる三人を余所に、太牙は「それがなあ」と顔をしかめる。

「御崎市に帰るところまでは一緒だったんだが『久し振りの御崎市や！俺のロックを思い出させたるで〜！』とかなんとか言っつて、目下行方不明だ」

「うーん、相つ変わらずだなあ……健吾さんも」

苦笑いする奏夜だったが、そこに呆れなどはない。

むしろ、あの友人が変わっていないことを嬉しく思っていた。

「まあ、健吾は放っておいてもすぐ戻ってくるだろうからいいんだが、それよりも報告するべきことがあってな」

「……」

太牙は意味ありげに声を落とす。

池や緒方がいるせいもあるのだろうが、それ以上に、その報告事項が深刻であることが、彼の表情から読み取れた。

「わかった。みんなは集めた方がいいかな？」

「ああ、できれば全員に聞いて貰いたい」

「了解。じゃあこの後、マル・ダムールで」

生徒三人に怪しまれないよう、早口で伝達を済ませる。  
血の繋がりが伺える以心伝心ぶりだった。

「あ、いたいた！」

と、人混みを掻き分けながら、静香がこっちに駆け寄ってきた。

「もう奏夜！ 準備ほっぽりだして何を……ってあれ？ 太牙さん？」

「やあ静香ちゃん、元気そうだね」

小さく会釈する両者。丁寧口調が二人らしいと言えはらしい。

「帰ってくるなら言ってくれば良かったのに……」

「いやいや、構わないでくれ。ただか数週間の海外だったしね。

あ、そう言えば」

挨拶はそのまま終わりかと思いきや、太牙は微笑む。

……彼にしては珍しい、からかうような雰囲気。

「静香ちゃん、嶋さんから聞いたよ。こいつの兄としては、取り敢えずおめでとうかな？」

その祝福が言わんとすることがわからない静香ではない。少し照れながら顔を伏せる。

さすがに兄相手に言われるのは勝手が違うのか、奏夜も僅かに居心地が悪そうだ。

「……なんか俺と静香の仲って、純粋な祝福をほとんどされない気がしますな」

「うん……だいたいの確率で冷やかされる……」

「気のせいだ気のせい。祝福してるからこそその態度さ。ところで式はウチの会社でセッティングすればいいのか？」

『やっぱり冷やかされた！』

（不憫だなあ、二人とも……）

妙なショックを受ける二人を見ながら池、緒方、吉田の思考がシンクロする。

奏夜と静香の恋路は応援したい。しかし物凄くからかいたくもないのだ。

主な原因は、彼氏側が今まで悪目立ちしていたからなのだが。

一組のカップルの受難を感じさせながら、コンサート開始時間が迫る。

「……シャバよりムシヨの方が飯が美味いってのは皮肉なモンだな」

まあ、レストラン近くで漁った残飯だ。贅沢は言えない。  
男は舌打ちして、パンをかじる。

御崎市のとある高架下。ゴミ捨て場にアグラをかく男。  
手入れが行き届いていないのが一目でわかるボサボサの髪。  
シンプルなワイシャツとズボン、眼鏡の奥にある瞳は澱んでいる。  
世捨て人という単語が相応しい風体。

「さあて、と。何処行くかな……」

「お前の行き先は拘置所以外にはないぞ。杉村隆」

突如かかる声。

死刑囚の男　杉村隆が振り向くと、そこには一人の男が鋭い視線を向けていた。

その顔には見覚えがある。

「テメエ……あん時俺を捕まえた……！」

「私を覚えているようだな。　　今度は容赦しないぞ」

「……チイツ！」

すぐさま逃げの姿勢を見せる杉村。

一度捕まった相手に真つ向勝負する気はないらしい。  
だが、そんなことは名護もお見通しだ。

「逃がすか！」

杉村の背中をひつつかみ、こちらへと引きつける。

悪人には油断も容赦もしない。気絶を狙った名護の拳が、杉村の鳩尾に突き刺さった。

しかし、

「……っ、痛えなッ！」

杉村はまるでダメージを受けた様子もなく、逆に名護を殴り倒し、

そのままゴミ捨て場にあつた傘で、彼を殴打した。

「がっ！」

「ケツ！　　そう何度も捕まつてたまるかつてんだよオ！」

捨て台詞を残し、杉村は逃げ去つて行く。

「くっ………待て！」

杉村の後を追いながら、名護は考えていた。  
自惚れでなく、名護は自分が鍛えている方だと自負している。

だが、さっきの一撃。人体の急所である鳩尾への攻撃にも怯まず、あまつさえ反撃を加えてきた。

（杉村隆、嶋さんの読み通り、ただの人間ではないな）

野放しにはできない。焦燥感が名護の足を速めた。

場所は変わって、奏夜のもとに太牙が現れる半刻ほど前。

「集合まであとどのくらい？」

「んーと、あと30分くらいか」

悠二の問いに、佐藤が時計を見ながら答える。シャナは悠二の隣。田中は歩きながら、奏夜から貰った演奏会のパンフレットを眺めていた。

「結構楽しみだよなー。公の場で先生がどんな風に振る舞うのか、とかさ」

「意外とフツーなんじゃね？ キメる時はキメる人だしさ」

「キメない時はとことんキメないわよ。奏夜は」

『……………あー』

佐藤のフォローが、シャナの指摘によって完全に論破された。男子三人の声が揃ったのがいい証拠である。

「ま、早く行こうぜ。オガちゃん達待たせちゃ悪いしよ」

「うん、そうだね。……………？」

悠二の足が突然止まった。怪訝そうな顔で、進行方向とは別の方を見据えている。

「悠二？　　どうかした？」

「ん……いや、あれ」

悠二が指差す先は、公園に隣接する博物館。

博物館の前は広場になっており、公園を訪れる人々の憩いの場として解放されている。

そこに何やら、二十人ばかりの人ばかりが出来ていた。

中心には弦楽器を携えた男、響いてくるのは、重厚ながらリズムによって軽快さを感じさせる音色。

「ああ、ストリートライブか」

「ロックミュージックっぽいな。何だよ坂井、お前ああいう音楽にも興味あるのか？」

「いや、そついうわけじゃないんだけど……」

田中への返答もそこに、悠二はその音色に耳を傾けていた。



(この曲って……)

考えるより早く、悠二は人混みの方へと駆け出していた。

「悠二？」

シヤナ達は首を傾げながらも、悠二のあとを追って人だかりに溶け込む。

ギターをかき鳴らし、一つの芸術を生み出すのは、二十代の男だった。

髪の一部を金髪に染め、逞しいガタイの身体にダメージ風のジャケツトを纏う姿は、にわかミュージシャンではなく、相当な場数を踏んでいるのが素人目からでもわかった。

ジャンツ！

閉めに力強く弦を弾き、演奏は終わる。

ギヤラリーからの惜しみない拍手は、彼の実力を物語っていた。

「や、どーもどーも。みんな、最後まで聞いてくれておおきにな！」

親しみやすさを醸し出す関西弁と共に、青年は周囲の賞賛に応える。悠二達も同じく、拍手を送った（シャナは周囲に流された感があったが）。

ライブはひと段落し、ファンとの交流を終えた青年は機材を片付けにかかる。

「ふーむ。手はだいぶ思う通り動くようになったなあ……けど、本調子やない。まだリハビリ頑張らんと……」

「あの」

ギャラリーがいなくなるのを待っていたのか、悠二がようやく声をかけた。

青年は「んー？」と悠二含む四人に顔を向ける。

「おお、さっき演奏聞いてくれた兄ちゃん達と嬢ちゃんやんか。どーやった、俺の演奏？」

「あ、えつと……あんまり詳しい感想は言えないですけど、なんか聞いていると響くものがあったってどうか……」

そう、先生の演奏のように。

具体性のない感想だったが、青年はそれこそ最高の褒め言葉と言わんばかりに「おお〜！」と相好を崩す。

「兄ちゃんわかつとるやないか〜！　せや、俺のロックは聞かせとるみんなをジンジンさせたる為のもんや！　嬉しいな〜、そこわかつてくれるヤツがいるっちゅーのは！」

「？　じんじん？」

自分のボキャブラリーにない単語に、シヤナが疑問符を浮かべる。

「何、それ？」

「んー、平たく言えば、相手の心を震わせることやな。理由も理屈もない、聞いとるヤツの心を痺れさせたり、感動させたりしたるのが俺の音楽や！」

誇らしげに、青年は自分の音楽を語る。

なんか似てるなあ。先生と。

ちよつとした親近感を覚えながら、悠二は青年に問う。

「あの、一つ聞きたいんですけど……」

「おう。何でも聞いてくれ。嬉しい感想聞かせてもらたお礼や」

悠二が気になったこと　それはさっき、彼が弾いていた曲だった。

前に異世界のキバ、クロノが訪ねてきた時のこと。

悠二も泊まった紅邸にて、奏夜が彼と一緒に演奏していた曲。本人曰わく「昔バンド仲間と作った曲」。

その音色は、青年が演奏した曲と酷似していた。

「貴方、もしかして先生の　」

ドオオオンッ！

しかし、悠二の声は突然の暴音に遮られることになる。

伴って聞こえる人々の悲鳴。

その場にいた全員が目を向けると、そこにはステンドグラスの外皮を持つ怪物。

「ファンガイア！」

敵を視認し、シャナがいち早く駆け出す。封絶を貼る暇もないと感じたのか、既に髪が炎髪に染まっていた。

「佐藤、田中！ その人安全なところに！」

「わ、わかった！」

「坂井、気いつけるよ！」

加勢に向かう悠二の背中を見送って、佐藤と田中は青年を誘導する。しかし、

「ほら、早くこっちに！」

「……」

「ちょっと、何ぼーっとしてるんすか！ あの怪物見えてるでしょうが！」

二人の呼び掛けにも答えず、青年はギターケースを担いだまま、その場に立ち尽くしていた。

目線の先は、駆け出したシヤナと悠二。

「なるほどのお……」

意味ありげに笑って、青年は指を鳴らす。それを合図に、すぐ近くの木陰から“蝙蝠のような影”が飛び出した。

カアンツ！

逃げ遅れた女性を刺し貫きかけていた吸命牙を、贄殿遮那が弾く。夜傘を翻し、シヤナの臨戦態勢は整っていた。

「早く逃げてください！」

駆け寄った悠二に助け起こされ、女性は脱兎のごとく逃げ去っていく。

だが、傍には何着か、持ち主を失った衣服が残されている。

ライフエナジーを吸われ、消え果てた犠牲者だ。

「その姿……成る程、貴様らか。この街に潜り込んだというフレイ

ムヘイズの一派というのは」

片手には長い柄のハンマー。

筋骨隆々とした体躯に、頭部の後ろには、魚類らしい背びれが髪のように伸びる。蒼いステンドグラスに人間態の姿を映り込ませせながら、ホエールファンガイアは唸る。

「我々掟破りにとって、貴様らは食事の邪魔者　始末させて貰う」

「こっちの台詞よ。　悠二、手を出すなら、無理はしないで」

「わかってるよ」

海神刃と吸血鬼を携え、悠二も戦準備を整える。

会話の余韻もそこそこに、ホエールファンガイアは二人に襲いかかった。

「ハッ！」

掌にある亀裂から、水流が放たれた。

シヤナと悠二はすぐさま横っ飛びで回避するが、凄まじい勢いのそれは、タイル敷きの地面でさえも、容易に破壊する。

無論、攻撃の手は緩まない。

「ぬうん！」

「うっ！？」

水流を目眩ましに、接近したホエールファンガイアのハンマーが、悠二目掛けて振り下ろされる。

両刀をクロスさせて受け止める悠二だが、力は向こうが上。頭上からのプレッシャーに足が笑い出す。

「思った通り、貴様の方はまだ未熟のようだな」

「……っ、大きなお世話だ！」

こめかみに青筋を立て、悠二は存在の力を吸血鬼に注ぎ込む。吸血鬼の持つ能力　存在の力を注ぎ込むことで、切り結んだ相手を切り刻む。

「むっ！？」

両腕から血の雫が飛び散ったことで、ホエールファンガイアは反射



的にハンマーを退かせる。  
しかし、それは致命的な隙。

「シャナ！」

「わかってる！！！」

悠二が呼び掛けた時、既にシャナはホエールファンガイアの背後へと迫っていた。勢い良く吹き上がる炎の剣が、敵の身体を捉える。

「ぬう、小癩な！！！」

ハンマーを後ろ目掛けて振り被るが、ややタイミングが遅い。  
多少のダメージは食らう、悠二のみならず、ホエールファンガイア本人でさえそう覚悟していた。

「……………っ！？」

だから シャナの表情が苦悶に歪み、贄殿遮那から炎が消えたのは、両者にとって予想外だっただろう。

「シャナ!？」

思考が巡る。

なんだ、何が起きた？

このファンガイアが何かしたのか。いや、コイツも確実に驚いている。

なら、シャナのミス？ いや、使ったのは紅蓮の炎を武器に纏わせる、シャナの最も得意とする技。いまさら失敗は有り得ない。

『シャナ、体勢を立て直せ!！』

アラストールの警鐘が轟くが、シャナの間を見逃さなかったホエルファンガイアのハンマーは、至近距離にまで迫っていた。

悠二の目から見ても、シャナは無防備。振り被られるハンマーは十分な威力、ただでは済まない。

「シャ  
」

悠二が間に入ろうとするが、間に合わない。悪魔の鉄槌が、シャナ

へと牙を剥く。

「うおりゃッ！」

「ぶるああッ！」

しかし、ここでまた予期せぬ乱入者。

さっきのロックミュージシャンの青年のキックと、小さな影のタックルが、ホエールファンガイアを強襲した。

「むおっ!？」

完全な不意打ちに吹っ飛ばされたホエールファンガイア。青年は短く息を吐いて、シヤナへにいと笑いかける。

「嬢ちゃん、大丈夫だったか？」

「お前　なんで……」

体勢を崩し、そのまま地面に落下したらしいシヤナは、乱入してき

た青年を見上げた。

「あ、説明はまたあとでやな。待つとき、さっさとあのファンガイア倒したるさかい」

準備体操のつもりか、軽く腕を回す青年。  
ファンガイアのことを知っている？

「おい兄ちゃん、嬢ちゃんの側におったれや。ちよーっとこれから  
“冷え込む”からな」

「？ あ、はい……」

この夏場に“冷え込む”という意味はわからなかったが、シャナが心配なのは確か。

悠二は彼女の近くまで移動する。

「 奏夜のヤツ、どこがまだヒヨッコやねん。十分ガッツのある  
教え子やないか」

「えっ……!!?」

と、悠二はすれ違い様、青年のその眩きを確かに聞いた。

しかし、その疑問を口にする間もなく、青年はホエールファンガイ

アへと歩みを進めていく。

「まったく……久しぶりに帰ってきたっちゅーのに、まだおるんかいな。掟破りのファンガイアは」

「ぐっ……さつきから貴様、何者だ！」

立ち上がったホエールファンガイアが、憤怒の形相で青年を睨む。青年は淡々と、どこか余裕のある表情を見せた。

「襟立健吾。職業はしがないロックミュージシャン。ほんでもって

」

青年 健吾は指を再び鳴らし、先程ホエールファンガイアを攻撃した小さな影を呼ぶ。

「仮面ライダーや」

「その通り!!」

健吾の前に現れた小さな影

それはメカニカルな外観をした蝙蝠。

「キバット？」

悠二が言う通り、その生き物は奏夜の相棒、キバットバット三世に酷似していた。違うのは、より機械めいた意匠が強調されている点か。

「レイキバットー!!」

「行こうか、華麗に激しく!!」

深みのある声色で、人造モンスター『レイキバット』待機音を奏でる。健吾の腰にはいつの間にか、純白のベルトが出現していた。

3677

「変身!!」

「変身ッ!!」

レイキバットが逆さまにベルトへと止まり、巨大な氷の結晶を模した紋章が、健吾の身体を通過。

冷気のが彼の身体に宿り、魔を滅する純白の鎧となる。

さながら白熊の如き重厚な姿は、遅しさと強者のオーラを遺憾なく醸し出していた。

周囲がその変身に息を呑む中、健吾は待ちきれないと言わんばかりに拳を打ち合わせる。

「さあて、仮面ライダーレイ。本格始動といかせて貰うでえ!!」

彼の意気揚々とした咆哮が、凍てつく氷の戦士　仮面ライダーレイの参戦を告げた。

第劇話・魔界城の王ノ開演のスクールパニック・Bパート【2012年】（後書

・襟立健吾ノ仮面ライダーレイ本格参戦。ちなみに健吾さん、努力のかいあつてか指はだいぶ動くようになってます。

しかしまだ本調子ではありませんので、戦闘では爪とキックがメインの攻撃手段になります。

・今回出てきたホエールファンガイアは、感想欄でガガギコさんに戴いたアイデアです。展開上、あまり活躍はさせられないですが、とにかくアイデアありがとうございましたm（）（）m

では、また次回。



第劇話・魔界城の王／開演のスクールパニック・Cパート【2012年】

「坂井くん達、結局来なかったね……」

照明が消され、演奏者の立つステージのみをライトアップしたコンサートホール。学校内の施設ということもあってか、吉田達以外にも学生らしき人も何人が見える。

既に演奏項目のいくらかは終わり、いよいよ次は奏夜の番ということで、吉田が言う。

「本当だよな……キャンセルするならするで、ちゃんと連絡してほしいよ」

「案外、何か面倒事に巻き込まれてたりしてね。で、そのまま妙な新キャラに会ってたりしてんじゃない？」

緒方が図らずも大正解を叩き出したところで、ホール内にアナウンスが入る。

観客の拍手を浴びながら、紅奏夜がステージ上に現れた。

「お、いよいよか」

池の声は弾んでいた。吉田も緒方も口にこそ出さないが、感動の質は変わらない。いつものふざけた態度はナリを潜め、燕尾服に身を包む奏夜からは、何処か気品や優美さが漂っていた。

恭しく一礼し、奏夜がヴァイオリンの弦に弓を添える

ガタンッ！！

荒々しく扉が開け放たれたのは、ちょうどその時だった。ホール内全員の視線が向かう先には、みすばらしい風体の男。

ざわつくホール。

その間にも男は血走った目で観客席脇の道を走っていく。

「待て、杉村！！」

それに続く形で、もう一人ホールに入る男性。

「な、名護さん？」

池、緒方、吉田が驚く中、杉村は舌打ち混じりに名護を振り返る。

「おら、来い！！」

「きゃあっ！！」

杉村は近くに座っていた客の手を引き、その首筋に持っていた傘の先端を当てる。

いくら傘とはいえ、躊躇なく突き立てられれば、ただでは済まない。

「誰も俺に近付くなあッ！！」

杉村の名護に対する警告によって、観客全員が状況を理解した。一転して大混乱になるホール。パニックに陥った観客が入り乱れ、蜘蛛の子を散らすように出口へと向かう。

池、緒方、吉田にしてもそうしたのは同じなのだが

「ねえこれ、私達も 逃げた方がよくない？」

「いや、しばらくここにしよう。あの暴漢と距離も離れてるし、このパニックの中じゃ外に出ようにも……」

「あっ！」

吉田が叫び声を挙げる。

「？ 一美、どうかし……」

「あれ……捕まってるの静香さんじゃ!？」

吉田の指摘にぎょっとしつつ、池と緒方も杉村の方を見る。  
人質を盾に、じりじりと後退する杉村。  
彼が傘を突き付ける人の顔は

「……静香さんだ」

「た、大変じゃん!!」

「それに、あの男の人も知ってます……」

吉田が名護と初めて会った時、彼が追いかけて、捕まえた脱獄囚。  
吉田本日も、人質にされたことがあったのだから、記憶にも残って

いる。

「脱獄囚って　ガチでヤバイよ……いくら名護さんが凄くたって……」

緒方の声に不安が混じる。

何とかしたいが、下手に手出しすれば、人質が増える可能性もあるかと言つて、知り合いが捕まりながら逃げ出すこともできない。

つまるところ、三人はこの状況に対し、ただ見守るしかできなかった。

「ちょっと、離して!!　　離してよ!!」

「うるせえ!　　黙ってついてこい!!」

静香を引つ張りながら、杉村はステージに登った。そこには、静香が捕まったのを見ていた奏夜がいる。

「奏夜君!!」

「名護さん……こりゃ一体どういふことですか」

「……巻き込んだのは後で詫びる。だが今は……」

「オイ、何をペラペラくつちゃべってやがる!!」

肩を並べた奏夜と名護だったが、状況はまったく好転していない。杉村は更に傘を静香へ近付けた。

「そ、奏夜あ……」

「じつとしてる静香。絶対助けてやるから、な？」

落ち着いた奏夜の声に、怯えた静香の表情が少し和らぐ。しかし、内心で奏夜はかなり焦っていた。

今の杉村には死角がない。

少しでも妙な動きを見せれば、容赦なく静香に傘を突き立てるだろう。

名護もそれはわかっている、だからお互い、杉村を捕らえられずにいるのだ。

「杉村。こんなことをしても、いずれ貴様は捕まるぞ。これ以上罪を重ねるな」

「ハッ！ 死刑囚に今更罪もクソもあるかよ！ それより車を留意しろ！ この女が傷物にされなくなかったらな！」

傘の先はほとんど肌についていた。静香がひっと息を呑む。

「デメエ……!!」

「落ち着け、奏夜君。……わかった、要求を呑む。だから静香君に危害を加えるなよ」

キレかけた奏夜を制しながら、名護は携帯電話を取り出し、耳に当てた。

ブルルル……と、待機音がいやに大きく感じる。

観客がいなくなり、静まり返ったホールの中であって、その場にいる全員が名護へ目を向けていた。

ギイツ。

「!!」

僅かに聞こえた木の軋む音。

杉村はそれを聞き逃さなかった。

「つく!!」





キーンッ！！

「がああああっ！？」

「！！！」

誰もが一瞬、状況を理解できなかった。

いち早く我に返った奏夜達でさえ、謎の金属音が鳴り響いたと同時に、杉村が腕を押さえながらうずくまった。という単純な判断しか下せない。

だが、今はそれで十分。

「奏夜！」

「！！！」

太牙の声に我に返った奏夜が、一瞬にして距離を詰める。

静香を強引に奪い返し、杉村を睨む奏夜の眼には、鬼神の如き怒りが宿っていた。

「こいつで勘弁してやる　とつとムシヨに帰りやがれッ!!」

ゴッ!

静香を危険に曝した男の顔へ、奏夜の手加減なしの上段キックが炸裂した。

「が、はっ……!!」

これにはさすがに耐えられなかったのか、杉村はステージの床に派手な音を立てて沈む。

名護と太牙が即座に取り押さえるのが見えたが、それよりもまず、

「静香!」

「そ、奏夜……」

珍しく取り乱した様子で、奏夜は静香の肩を抱いた。

緊張の糸が切れた静香は震え出し、目には抑えきれなかった涙が滲む。

精一杯の強がりのつもりか、奏夜へ更に密着し、泣き顔を隠す。

「う、ごめんね……ちょっと、落ち着かせて……」

「おう、怖かったもんな。思う存分泣いとけ」

抱きしめた背中を軽く叩いてやると、やや抑え気味な嗚咽が聞こえてくる。

その様子にようやく安心した奏夜も、ほっと一息つくことができた。恐怖していたのは、人質を取られた側である奏夜も例外ではないのである。

(そう言えば……)

静香を抱きしめたまま、奏夜は周囲を見渡す。

と、いつの間にかステージ上に、見知らぬ人影があった。

(女の子?)

歳の頃は悠二達と同じくらいか。

ショートに切りそろえた髪、顔立ちは端正で、ぼーとした表情が目立つダウン 系の印象。

服装はフード付きのジャケットにダメージジーンズで、下に履いたサンダルは歩く度にペタペタと足音を鳴らす。

三白眼のお手本のような瞳が、床に落ちている何か 恐らく、杉村の手首を狙い、傘を落とさせたものに向けられていた。

「おいミコトー！」

「…………なに？」

もう一人、ステージに躍り出た少年が、ミコトと呼ばれた少女の襟首を掴んだ。

こちらはチェックのベストに赤いTシャツ、少女に対し、金に染めた髪は攻撃的な印象だ。

「どづいつ神経してるんだ！　なんでわざわざそれを投げる！？」

「…………手元にそれしかなかったから」

「そういう問題じゃない！！　それが僕にとってどれだけ重要か知ってるだろ！」

「…………いいじゃん。あの女の人、助かったし。これだって、ちゃんと無くしてないし」

言って、少女は少年に拾った何かを渡す。ここからはよく見えないが、赤い円形上の物なのはわかった。

「…………ほら、もう行こ？　これじゃ演奏会も中止だろうし」

「……フンッ！」

少年はまだ何か言いたそうだったが、舌打ち混じりに出口へと向かう。

「あ、キミ……！」

「……？ なに？」

少年と同じくホールから出ようとしていた少女が、奏夜に呼び止められて振り返る。

「さつき静香を助けてくれたの、キミだよな？      ありがとう、助かったよ」

「……別にいい。人を助けるの、当たり前だから」

無表情を貫きながら、少女は興味が湧いたように、奏夜の瞳を見据えた。

「……お兄さん、名前は？」

「え？      紅奏夜だけど」

「……そう。私、氷禁<sup>ツツミ</sup>。氷禁ミコト。よろしく」

「あ、ああ。こちらこそ……。」

奇妙な少女　ミコトはそう名乗り、最後に「……またね」と小さく手を振り、ホールから出て行った。

場所は変わって博物館前。

健吾　仮面ライダーレイと、ホエールファンガイアの戦闘は続いている。

「ほっ！　せいやっ！」

「ぐっ！」

レイの鮮やかな飛び蹴り、そこから連続パンチで怯ませ、フィニッシュに回転蹴り。

重量感ある体躯に似合わぬ軽快な動き　しかしそれは、スピードとパワーを兼ね備えた有能性を示している。

「っ、このッ！」

ホエールファンガイアのハンマーも、無意味に空を切るだけ。それどころか、レイはハンマーの柄を背中と両腕の関節で挟むように受け止め、

「鈍いなあ」

「うおっ!?!」

そのまま持ち手であるホエールファンガイアを空中に放りあげた。敵の巨体は無様に地面へ転がり、レイは不要となったハンマーを放り捨て、

「俺を相手にすんなら、もうちょい柔軟してきたらどうや?」

「っ、貴様、私を愚弄するか!!」

怒りを露わにし、徒手空拳で襲いかかってくるホエールファンガイアだが、力の差は歴然。優雅に敵を翻弄し、冷気の残滓を散らすレイの姿は、戦いと言うよりも円舞のようだった。

「凄え……ファンガイアがまるで赤子だ」

佐藤は完全にレイの戦いに目を奪われていた。それは田中も同じなように、

「なあ坂井、あのギター兄さん……」

「うん。多分、先生の知り合いか何かだと思う。僕とシャナのこと知ってるみたいだったし」

答えながら悠二は、不調のシャナに肩を貸していた。

自身の身体にかかる力がいつになく頼りないことに、悠二の危機感が募る。

「シャナ、いったいどうしたんだ？」

「別に……お前に、気にされるほどのことじゃ、ない……」

「そんなわけないだろ！ フレイムヘイズが体調不良で、拳げ句炎剣を出すのまで失敗してるんだよ？ 明らかに異常じゃないか！」

それでも尚、使命に忠実なフレイムヘイズの少女は強がる。珍しくイラついた悠二は、彼女の契約者である王に問う。

「アラストールは、何かわからないのか？」

『……しむ』



アラストールの遠雷の如き声にも、陰りがあった。

『この子の体調が優れないのは、ここ最近の様子から判断していたが、何も思い当たる節はない。自在式や魔術にかけられるような戦いも、ここ最近は無かったからな』

一番最後に戦ったのはクロックラビットレジエンドルガ。しかし、ヤツは体調を鈍らせるような魔術は使わなかったし、何より倒した。

悠二が見る限り、今戦ったホエルファンガイアにも、そんな仕草はない。

明らかな異常事態にも、対処方法はわからないまま。

（ いや、わからないからこそその異常事態か ）

悠二の中でスイッチが切り替わる。

“紅世の徒”やファンガイアと戦う際、土壇場で解決策を考える為に使う部分　なんて、気の利いた機関はないけれど。

とにかく、思考の歯車は急速に回転し始めた。

( どういうことだ。新しい敵が、僕らの知らない内に何かしたのか )

ない。

間接的にならともかく、シヤナに直接影響を与えている。誰にも気付かれず、そんな真似が出来るとは思えない。

( なら、今まで戦った敵が、時間差で何かを仕掛けていたか )

確か、一番最近戦ったのはクロノが来た時。だが、あの戦いには後腐れはなかった。敵も倒し、被害も防いだ筈。

( いや待て、本当にそうか？ )

元々時空を越える力のあったイレギュラーな敵。

以前の黄金の不死鳥の世界や、仮面ライダーディケイドの件に関しても言えることだが、世界を越えた戦いには異常が付きまとう。自分達が知らない内に、何かが起こきようとしていても不思議では

「さて、と。そろそろトドメ、行かしてもらおうで」

悠二の連なっていた思考は、レイによって途切れた。  
気付けば戦いは終盤らしく、ホエルファンガイアは地を這い、レイはほぼノーダメージという状況だった。

「レイキバット」

「ああ、任せろお」

間延びした口調のレイキバットに、レイがベルトのホルダーから取り出したフェッスルをくわえさせる。が、

「！！ 健吾さん、避けてください！！」

「何やて？ うおっ！？」

レイは間一髪、フェッスルの発動を中断し“突如伸びてきたヒモ”を回避した。

伴って、悠二、シャナ、田中、佐藤も後退し、更なる攻撃に備える。

「な、なんやなんや？ トイレットペーパーみたいなもんが飛んできたで？」

「トオイレットペーパーは面白い表現だが……そおんな可愛いもんじゃないよっだぜえ、健吾」

レイキバットが見据える先　広場に隣接する博物館。  
その入り口付近には新たな怪物が立っていた。  
骨ばった体格。

身体全身に巻き付いた包帯はレイを攻撃したのと同じもので、何本かが奇妙にうねりながら、攻撃の時を待つ。

包帯の隙間には、ミイラのように干からびた顔が何枚も貼られ、不気味さをより助長していた。

怪物は表情を動かさずに言った。

「その姿　貴様、キバに組する者だな」

「……あっちゃー」

いかにも「やべーわこれ」と表現するように、レイは額に手を当てた。

「マズツたわ。奏夜や名護さんと会うまで、レジェンドルガと会うつもり無かったっちゅーのに」

「レジェンドルガ？」

悠二が反応する。

つい最近クロノと共に戦った、ファンガイアと同じくライフエナジ  
ーを糧に生きる少数種族　あのミイラみたいなのも、その仲間と  
いうことか？

二人分の注目（佐藤と田中はレジエンドルガを知らないし、シャナ  
はそれどころではない）を浴びながら、怪物　マミーレジエンド  
ルガは、倒れ伏したホエールファンガイアを一瞥する。

「　情けない。数百年の歴史で、ファンガイアはこうも落ちぶれ  
ていたか」

「な、何だとツ！！　貴様、何様のつもりで……」

「少なくとも貴様よりは上のつもりだ。……しかしまあ、13魔族  
という資源を無駄遣いするのも忍びないか」

マミーレジエンドルガの身体にあるミイラの仮面が、怪しく輝いた。  
本能的に危険と思ったのか、ホエールファンガイアの顔が凍りつく。

「お、おい、私に何を……！？」

「愚かなるファンガイアよ、我が眷属となるがいい！」

浮き上がり、剥がれた仮面がホエールファンガイアに張り付いた。  
ホエールファンガイアはしばらく悶えていたが、やがて臃気な様子

で立ち上がり、

「グウウウ……!!」

「さあ、もう一度戦え」

不気味な仮面を被ったまま、ホエールファンガイアは再び落ちていたハンマーを握った。

身体を覆う紫のオーラとマミージェンドルガへの忠誠、それらが彼が正気を失っていることを理解させる。

「　　噂通りやな。他種族を自分の眷属に引き込んで仲間を増やす。こらうWAがわざわざ警戒するわけや」

「しかもお、仲間はまだまだいるようだなあ……」

レイキバットの言葉を合図に、博物館の中からたくさん人間が出てきた。

職員か、客かはわからないが、重要なのは全員が全員、あの仮面をつけられていることだ。

「うげ……な、なんだありや?」

「まるでズンビだぜ……」

奇声を挙げる仮面の人間達を見て、佐藤と田中は露骨に顔をしかめた。

確かにあの姿は、二人でなくとも畏怖に値するものだろう。

「どおする健吾。ヤツの眷属とはいえ、あれは人間だぞお？」

「……んなもん決まっとるやろ」

レイの返事はあっさりしたものだった。

その手には、さっきのものとは別のフェッスル。

「逃げるで」

『え！？』

悠二、佐藤、田中が声を揃えて驚く。

あまりに軽々しい敵前逃亡。

さっきの勇ましさと真逆の行動だった。

三人の反応を鮮やかにスルーしながら、レイはフェッスルをレイキバットに吹き鳴らさせる。

『ポォラァァァ！ ギガンティックゥー！！』

熱の籠もったコールと共に、景色の彼方から巨大な影が、冷気を纏いながら飛び出してきた。

見た目としては白熊に近い。しかし、白い毛並みの隙間から覗くメタリックな外皮　レイの鎧に使われているものと同じスノーホワイトメタル製の装甲は、その生き物が人工物であることを告げる。太い四本脚には巨大なホイールが付与され、先端には黄金の爪。背中には搭乗用のスペースが確保されていた。

ガァァァァッ！

白熊型人工モンスター『ポォラーギガンティック』は、その咆哮で敵を威嚇しながら、主たるレイの前に到着した。レイが「よつと」の上に飛び乗り、機体が啞える手綱　アナログな外見と裏腹に、マシンのコントロールを一手に担う高性能ハンドルを握る。

「ほら、兄ちゃんらも早よ乗りや！」

「えっ、けど……」

「そのお譲ちゃん休ませなあかんやろ！　早くせんとあのゾンビ連中が来るで！」



振り返れば、すぐそこに操られた人間達。彼らをなんとかしないままなのは、悠二としても釈然としないものがあつたが

『退け。いずれにしても、今の我々では何もできん』

「……………わかつたよ」

アラストールの言葉に折れる形で、悠二はシャナを抱えて、ポールーギガンティックの背中に乗り、佐藤と田中がそれに続く。

「よっしゃ、捕まつとれよおー!!」

レイが手綱を動かすと、ポールーギガンティックは全速力で戦場から逃亡する。

ホエールファンガイアも、まして操られた人間も追いつけるようなスピードではなかつた。

「……………逃げたか。まあいい」

マミーレジェンドルガに落胆はない。

どの道、キバの仲間を倒すことは、最優先課題ではないのだから。目的を果たすためにも、深追いは禁物。

「私が蘇ったということは“ロード”のお目覚めも近いハズ……」  
もうクロックラビットあたりは動いているだろう。ヤツの力の性質上、何をするつもりなのか想像もつく。

「ヤツの策が上手くいこうがいくまいが、この時代で復活なされた“ロード”はお迎えせねばな……まずは、他の連中と合流するか」

「ふう、どうにか撒いたみたいやな」

『……………』

「？ なんや兄ちゃんら。急に無口になっけしもつたな」

「あの、健吾さん？」

代表して佐藤が問う。

「ここ、思いっきり公道なんですけど！？」

後ろに流れていく見飽きた車道の景色。

だが現在、自分達が乗っているのは、親やら親戚の車ではなく謎のメカ白熊だ。

素性を隠して戦うのが当たり前になりつつあった三人にとって、あまりにあっぴろげなレイの逃亡劇は、リアクションに困るものだったようだ。

「大丈夫なんですかこれ！ 車とか普通に走ってますけど！！」

「ああ、大丈夫や大丈夫や。ポラーはお利口さんやさかい、ちゃんと車は避けて走っとる」

「いやいやいや！！ それも心配でしたけど、俺達がメインで心配してるのは、人目につくってことで……」

「ああ、それも心配あらへんよ」

田中のややパニック気味な質問にも動じず、手綱を操り続けるレイ。

「ポラーはギガント族つちゅー種族をモデルにしとつてな。そいつらの特徴は巨体でありながら、物凄く隠れるのが上手いんや。ビックフットとかイエティとか、聞いたことあるやろ？」

ビックフット、イエティ。どちらも未確認生物であり、人目から逃れるのを得意とする という話がある。

「ビックフットとかはゼーんぶギガント族の仲間や。んで、このポ  
ーラーにも当然その能力はある」

「……えっと、つまり僕達の姿は、周りから見えてないってことで  
すか？」

悠二の目には、さつきからポーラーの周りを渦巻く粉雪が映ってい  
た。

「物分かりがええな」とレイは頷く。

「ま、そんなに長い時間保つもんでもないんやけど、そのお嬢ちゃ  
んを休ませれる場所までの距離なら楽勝や。マル・ダムールは知っ  
とるよな？」

三人が肯定すると、レイは「よっしゃ」とポーラーを急がせた。  
会話が途切れてしまったので、悠二は座席に身を預けるシャナを見  
る。

「シャナ、具合はどう？」

「だからなんともないわよ……ただ、力が抜けてるだけ」

「……シャナ、人間は今みたいな言い方を、強がりって言うんだよ  
？」

「しるさいしるさいしるさい。悠二の癖に生意気よ」

拗ねた表情も、どこか鋭さが抜けていた。虚勢を張るのでさえ、しんどさがあるのだろうか。

（ なんだっていうんだ。一体 ）

再び思考の海に入った悠二。

（……空気重いな）

（そりゃそうだろ。シヤナちゃんの体調不良やら、あのミイラ怪人やら、俺だつて先行き不安だぜ？）

すっかり蚊帳の外 というか、居心地の悪さを感じた佐藤と田中は、なんとなくレイに話し掛けてみた。

「あー、健吾さん」

「んー？」

ポーターを動かしながらも、しつかり話には乗ってくれる。  
フランクな性格らしい。

「さっきは、なんで逃げ出したんですか？　正直、健吾さんなら  
あのミイラ怪人にも勝てそうな気がしたんですけど」

「アツハツハ、そら買い被りやで。俺は戦いの才能にや恵まれとら  
んからな」

「え？　けど……」

佐藤は首を傾げ、田中も訝しげな表情になる。

才能がないと言うが、ではあのホエールファンガイアとの戦いは

「ありや向こうが弱かっただけや。俺はそこまで強うない。奏夜や  
名護さん、太牙と比べたら、ライダーとしてはまだペーペーや」

恥らいも何もなく、レイは自分の実力不足を吐露した。

「思い上がったバカは自滅する　色々あつて学んだ俺の信条や。  
これ守つとけば、ド素人もなんとか生き残れる。……もちろん、色  
々例外もあるんやけどな」

『……………』

不思議と、レイの言葉は佐藤と田中の興味を惹いた。思いつがったバカは自滅する。その理屈に、マジョリーを追う自分達を重ねたから、かも知れない。

「あ、せや。兄ちゃん二人。名前なんて言うん？」

唐突に、レイは質問を挟み込んできた。

「いや、その兄ちゃんとお嬢ちゃんは、お互い名前呼んどったかわかるんやけど……お二人さんの名前まだ聞いとらんかったわ」

「さ、佐藤啓作ですけど」

「た、田中栄太ッス」

「はぁん……政治家みたいな名前やな。まあええわ。今後ともよろしゅうな！」

素朴な感想と共に、レイはそう言った。

仮面越しにも、笑っているのがわかる声だった。

・謎の少女、氷埜ミコト。何者なのかは　まあ、最近ライダー映画で定番となりつつあるアレ、とだけ。

・健吾さん、やや微妙な強さ。レイ無双にしても良かったんですが、彼は突っ走った結果、色々失敗してるんで「もうちょっと慎重な性格になってるよな」と思い、ああいう戦闘スタイルにしてみました。

・オリジナルマシン。ポラーギガンティック。ネーミングは気にするな！

今回は戦闘不参加でしたが、また出番あるんでお楽しみに。

・健吾が気になる佐藤&田中。

今まではあまり出番無かったですが、今回は二人にも見せ場をあげようかと思っています。

ごめんよ二人とも。正直キミ達、文章になるとまったく差別化がでないから書きづら（ry

では、また次回。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8840h/>

---

仮面ライダーキバ/BLAZING.BLOOD

2012年1月6日04時51分発行